

【改稿中】 銀髪幼女にTSしたニートな僕が過ごした1年間

あずももも

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【20万PVありがとうございます!】僕はある朝に銀髪幼女になった。TSして女の子になった。困ったけども身寄りもないし「独身男性の家に銀髪幼女がいる」って知られたら通報される。怖い。だから僕はこれまで通りに自堕落なニートを満喫するって決めた。時間だけはあから女の子になった体を観察してみたり恥ずかしがってみたり、普段は男の格好を試してみたりときどき無理やり女の子の格好をさせられたり。肉体的には年上になったJCたちや「魔法さん」から追われてなんとか逃げ切りたかった。でも結局男には戻れなさそうだし、なにより世界は変わったらしい。——だから僕は幼女になってようやく、ひとりこもつてのニートを止めるって決めただ。

◆響ちゃんは同じことをぐるぐる考えるめんどくさい子です。癖が強い子です。適度に読み飛ばしてください。本編は2話〜50話（の1／2まで）、全部で111万文字あります。長いです。それ以外はお好みで雰囲気をお楽しみください。

◆3部作のうちの1部目。幼女な女の子になったTS初期の嬉し恥ずかしと年下（肉体的には年上）のヒロインたちを落とすまでと、ニートから脱ニート（働くとは言っていない）までの1年間を描きます。1部のお家を出るまでの物語としては完結。2部では響ちゃんの知らなかった色々を別の視点から追い直し、3部でTSの原因その他色々を終えて……幼女のままハーレムを築いてのTS百合なハッピーエンドを迎えます。特に生えたり大きくなったりしません。徹

頭徹尾幼女です。

◆小説として書いた作品を2019年にやる夫スレでAA付きで投稿&同年に小説として「幼女にTSしたけどニートだし……どうしよう」のタイトルで投稿して完結↓22年12月〜23年8月にかけてなるべく元の形を維持しつつ大幅に改稿↓23年7月から漫画化。他小説サイト様へも投稿しています。

◆各話のブックマや★評価が励みです。ご感想はツイッターにくださると気が付きます。

◆セルフコミカライズ中。ツイッター&ニコニコで1Pずつ週2更新です。

表紙絵：

目次

1話	「あの日」と「	1 / 2
1話	「あの日」と「	2 / 2
2話	姿が変わっても、頼れるものは、何もなし	1 / 2
2話	姿が変わっても、頼れるものは、何もなし	2 / 2
3話	現状把握と今後の模索	1 / 2
3話	現状把握と今後の模索	2 / 2
4話	敵情視察と偽装工作	1 / 2
4話	敵情視察と偽装工作	2 / 2
5話	出会い未満の出会い	その1 1 / 2
5話	出会い未満の出会い	その1 2 / 2
6話	出会い未満の出会い	その2 1 / 2
6話	出会い未満の出会い	その2 2 / 2
7話	ハサミ事件	1 / 2
7話	ハサミ事件	2 / 2
8話	動揺に次ぐ動揺	1 / 2
8話	動揺に次ぐ動揺	2 / 2
9話	小さい者同士↓同志	1 / 2
9話	小さい者同士↓同志	2 / 2
10話	危機感と必要性	1 / 2
10話	危機感と必要性	2 / 2
11話	虎穴(車)	1 / 3
11話	虎穴(車)	2 / 3
11話	虎穴(車)	3 / 3
12話	苦手は、やはり、苦手	1 / 3

12話	苦手は、やはり、苦手	2/3		271
12話	苦手は、やはり、苦手	3/3		284
13話	取り戻した(非/否) 日常	1/3		296
13話	取り戻した(非/否) 日常	2/3		308
13話	取り戻した(非/否) 日常	3/3		320
14話	春↓夏	1/3		330
14話	春↓夏	2/3		343
14話	春↓夏	3/3		355
15話	困惑:「勘」	1/2		370
15話	困惑:「勘」	2/2		382
16話	学生たちの、夏休み(1)	1/3		395
16話	学生たちの、夏休み(1)	2/3		406
16話	学生たちの、夏休み(1)	3/3		416
17話	学生たちの、夏休み(2)	1/3		430
17話	学生たちの、夏休み(2)	2/3		444
17話	学生たちの、夏休み(2)	3/3		458
18話	学生たちの、夏休み(3)	1/3		474
18話	学生たちの、夏休み(3)	2/3		486
18話	学生たちの、夏休み(3)	3/3		499
19話	学生たちの、夏休み(4)	1/2		512
19話	学生たちの、夏休み(4)	2/2		525
20話	下条かがり(1)	1/6		539
20話	下条かがり(1)	2/6		551
20話	下条かがり(1)	3/6		566
20話	下条かがり(1)	4/6		579

26話	検証	3/3		837
26話	検証	2/3		829
26話	検証	1/3		820
25話	発覚と発覚	4/4		810
25話	発覚と発覚	3/4		801
25話	発覚と発覚	2/4		793
25話	発覚と発覚	1/4		784
24話	疑念と助言と発覚	3/3		774
24話	疑念と助言と発覚	2/3		763
24話	疑念と助言と発覚	1/3		754
23話	山/山	4/4		743
23話	山/山	3/4		733
23話	山/山	2/4		724
23話	山/山	1/4		713
22話	夏休みの、最後の日(まだ8月)	4/4		701
22話	夏休みの、最後の日(まだ8月)	3/4		691
22話	夏休みの、最後の日(まだ8月)	2/4		679
22話	夏休みの、最後の日(まだ8月)	1/4		667
21話	関澤ゆりか(1)	5/5		657
21話	関澤ゆりか(1)	4/5		649
21話	関澤ゆりか(1)	3/5		639
21話	関澤ゆりか(1)	2/5		627
21話	関澤ゆりか(1)	1/5		615
20話	下条かがり(1)	6/6		602
20話	下条かがり(1)	5/6		590

3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	3 / 4		10511
3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	2 / 4		10451
3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	1 / 4		10391
3 3 話	猫と17歳	4 / 4		10301
3 3 話	猫と17歳	3 / 4		10231
3 3 話	猫と17歳	2 / 4		10141
3 3 話	猫と17歳	1 / 4		10061
3 2 話	クリスマスと騒動と	3 / 3		993
3 2 話	クリスマスと騒動と	2 / 3		984
3 2 話	クリスマスと騒動と	1 / 3		975
3 1 話	秋は何処に	2 / 2		967
3 1 話	秋は何処に	1 / 2		959
3 0 話	跳躍、あるいは冬眠	2 / 2		950
3 0 話	跳躍、あるいは冬眠	1 / 2		942
2 9 話	「お姉ちゃん／姉さん」	3 / 3		933
2 9 話	「お姉ちゃん／姉さん」	2 / 3		924
2 9 話	「お姉ちゃん／姉さん」	1 / 3		916
2 8 話	「」	4 / 4		907
2 8 話	「」	3 / 4		899
2 8 話	「」	2 / 4		890
2 8 話	「」	1 / 4		881
2 7 話	回想・又は過去・	4 / 4		872
2 7 話	回想・又は過去・	3 / 4		862
2 7 話	回想・又は過去・	2 / 4		855
2 7 話	回想・又は過去・	1 / 4		846

3 9 話	去る年と、 来る年	4 / 6		1250124212341227122012131204119611881179117111621154114611371130112411161107109910901082107710681058
3 9 話	去る年と、 来る年	3 / 6		
3 9 話	去る年と、 来る年	2 / 6		
3 9 話	去る年と、 来る年	1 / 6		
3 8 話	「魔法」	5 / 5		
3 8 話	「魔法」	4 / 5		
3 8 話	「魔法」	3 / 5		
3 8 話	「魔法」	2 / 5		
3 8 話	「魔法」	1 / 5		
3 7 話	別れはもう少しあとで	2 / 2		
3 7 話	別れはもう少しあとで	1 / 2		
3 6 話	準備	6 / 6		
3 6 話	準備	5 / 6		
3 6 話	準備	4 / 6		
3 6 話	準備	3 / 6		
3 6 話	準備	2 / 6		
3 6 話	準備	1 / 6		
3 5 話	「ねこみみ病」	7 / 7		
3 5 話	「ねこみみ病」	6 / 7		
3 5 話	「ねこみみ病」	5 / 7		
3 5 話	「ねこみみ病」	4 / 7		
3 5 話	「ねこみみ病」	3 / 7		
3 5 話	「ねこみみ病」	2 / 7		
3 5 話	「ねこみみ病」	1 / 7		
3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	4 / 4		

39話	去る年と、来る年	5/6	1358
39話	去る年と、来る年	6/6	1268
40話	「男の子」／「女の子」	1/7	1277
40話	「男の子」／「女の子」	2/7	1286
40話	「男の子」／「女の子」	3/7	1295
40話	「男の子」／「女の子」	4/7	1303
40話	「男の子」／「女の子」	5/7	1311
40話	「男の子」／「女の子」	6/7	1319
40話	「男の子」／「女の子」	7/7	1327
41話	「男の子」／「女の子」	7/7	1334
41話	「男の子」／「女の子」	1/5	1341
41話	「男の子」／「女の子」	2/5	1340
41話	「男の子」／「女の子」	3/5	1346
41話	「男の子」／「女の子」	4/5	1352
41話	「男の子」／「女の子」	5/5	1357
42話	「男の子」／「女の子」	1/6	1365
42話	「男の子」／「女の子」	2/6	1372
42話	「男の子」／「女の子」	3/6	1378
42話	「男の子」／「女の子」	4/6	1384
42話	「男の子」／「女の子」	5/6	1390
43話	「魔法」と「変異」と、そして	1/6	1399

4 8 話	彼の、準備	2	2	7	
4 8 話	彼の、準備	2	1	7	
4 7 話	0 1 / 0 1 ↓ 0 6 ↓	6	6	6	
4 7 話	0 1 / 0 1 ↓ 0 6 ↓	5	6	6	
4 7 話	0 1 / 0 1 ↓ 0 6 ↓	3	6	6	
4 7 話	0 1 / 0 1 ↓ 0 6 ↓	2	6	6	
4 7 話	0 1 / 0 1 ↓ 0 6 ↓	1	6	6	
4 6 話	彼の、準備	1	6	6	
4 6 話	彼の、準備	1	4	6	
4 6 話	彼の、準備	1	3	6	
4 6 話	彼の、準備	1	2	6	
4 6 話	彼の、準備	1	1	6	
4 5 話	彼女からの、告白	2	7	7	
4 5 話	彼女からの、告白	2	4	7	
4 5 話	彼女からの、告白	2	3	7	
4 5 話	彼女からの、告白	2	2	7	
4 5 話	彼女からの、告白	2	1	7	
4 4 話	彼女からの、告白	1	4	4	
4 4 話	彼女からの、告白	1	3	4	
4 4 話	彼女からの、告白	1	2	4	
4 4 話	彼女からの、告白	1	1	4	
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして	5	6	6	
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして	4	6	6	
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして	3	6	6	
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして	2	6	6	

1571156415591551154215351529152015131507150114941488148014751468146214571450144414371430141914121406

50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう 1.9 |

2 / 2

46. x話

46. X2話 警戒心

46. X3話 偽乳と牛乳 1 / 2

46. X3話 偽乳と牛乳 2 / 2

46. X4話 女装? その1

46. X4話 女装? その2

46. X5話 女装…… その1

46. X5話 女装…… その2

46. X5話 女装…… その3

46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その1

46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その2

46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その3

46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その1

46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その2

46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その3

46. X8話 響||ロリorシヨタ?? その1

46. X8話 響||ロリorシヨタ?? その2

46. X8話 響||ロリorシヨタ?? その3

46. X8話 響||ロリorシヨタ?? その4

46. X9話 怒りと女性 / 女子 その1

46. X9話 怒りと女性 / 女子 その2

46. X9話 怒りと女性 / 女子 その3

46. X10話 さよと本と感傷と その1 | 1

4 6.	X 1 3 話	(終)	苦手と好きと	—	1862
4 6.	X 1 2 話	さよと本と感傷と	その3	—	1856
4 6.	X 1 1 話	さよと本と感傷と	その2—2	—	1851
4 6.	X 1 1 話	さよと本と感傷と	その2—1	—	1846
4 6.	X 1 0 話	さよと本と感傷と	その1—2	—	1839

僕は、長いあいだ……物心ついた頃からこの歳までに歩き慣れた町を。

今となつては僕自身のものだとしか感じない、この小さい体の低すぎる視界から見上げて歩きながら。

いつものように、けれど今日ばかりは少しだけ感傷的に考える。

だって、今日はここから――。

◇◇

――学ばず、働かず、ただ生きているだけを生きる。

「ニート」って呼ばれる生き方は、言われているほど悪いものじゃないって僕は思う。

ゴミとかひどいことを言う人もたくさんいるけど、そんなのは気にしなくていいんだ。

だって、僕たちは毎日毎日をただ生きたいように生きているだけなんだからさ。

イメージと評判は底辺に近いけど、その生活は年を取っていれば「充実した老後」とか「晴耕雨読」とか、時代が違えば「隠居」だったり、あるいはもう少し贅沢に過ごすなら「貴族の暮らし」って言うても過言ではないものはずだし。

最近は一リーリータイアとか言つて目指す人も出てきたくらい。

時代が追いついて来たんだ。

「高等遊民」……そんな言葉で呼ばれることもあったらしいし。

他人に振り回されない生活っていうのはそんな感じにいいもので、あこがれで、理想。

世間体さえなくて「働きたい人だけ働けばいいよ」っていう世界なら、きつと多くの人が選ぶはずの素敵な生活。

僕はそう思う。

誰かにひどい迷惑をかけない限りにはしても良いんじゃないか

なつて。

何かから逃げるんじゃないやなくて、本当にその人がそうしたいんだつたらつて。

ちよつとの迷惑は……勘弁してもらおうとしてさ。

◇◇◇

……今日のはあの日みたいに陽の光がぽかぽかと体を温めて、緑の香りがして、気持ちいい風が吹いて、とても気持ちいい——春の穏やかな日。

小さくなったからなのか体質なのか前に比べると冷えやすくなつた体も、この天気とあの子にもらつたマフラーとでちよつどいい感じに温められている。

ふだんは青白い印象の今の僕の顔も、きつとほのかに色づいているはず。

ぼんやりと、元の体での今までのことと、今の体での今までのこと……そしてこれから先のことを考えて思い出しているうちに、いつの間にか家の前まで来ていた。

……早いな。

本当に、時間が過ぎるのは、早い。

いざとなると本当に時間が過ぎるのが、早い。

十数分の距離があつという間に感じてしまう。

きつといつも通り、半分以上はまた思考に沈んでいたんだろうけど。

……そんなのはニートをしていたこの数年でしっかりと味わってきたことだ。

◇◇◇

「ニート」の毎日の朝は早い。

目覚ましを使わないから多少前後はするけど、目が覚めて起きるのは、世間が起きるのと同じくらいの時間。

身支度を調べたらジョギングで体に少しだけの負荷をかけ、帰ってきたらシャワーを浴びてテレビを見ながら朝食を取って、ふつうの人と同じような朝を過ごす。

生活リズムを安定させて世捨て人になりすぎるのを避けて、ふつうの人の精神状態を偽装するために。

◇◇◇

前とは違って息を吸って、腕を高く上げないと開け閉めすらできないドアを開けて、ずっと住み続けた僕の家へ——最後に足を踏み入れてみる。

外の明るさから一転して真っ暗。

暗い玄関からの廊下に目が慣れてくると、ほとんど物が何もなくなつた……心なしか寂しい光景が見えてくる。

少し前からどこかよそよそしさを感じさせるようになった、僕が生まれてからずっと住んできた家。

いなくなつた父さんと母さんとの記憶がこびりついている家。

今となつてはどこか他人の家のような感じさえ受けてしまう。

◇◇◇

家事を済ませたら、昼までは読書をする人が多い。

それも趣味の読書ではなく、新書だったり、外国語だったり学術的な本だったり、硬い本を選ぶようにしている。

なるべく。

いくらノートをしているといっても、なにも新しいものを頭に入れない生活を続けていると、だんだんと知識が追いつかなくなってくる。

頭が凝り固まるっていうか、気がつくとも知識が数年前からアップ

デートされていなかったりして、ふとしたときにびっくりする。

そういう意味ではSNSは、見る専だったけど便利なツールだな。

特に友だちって言うのが皆無だからこそ気軽に見ることができ
るんだ。

……それに、頭に負荷を全くかけない生活を長期間続けていると、
頭の回転が自覚できるくらいに落ちる……っていうのを経験したこ
ともあるな。

アルコールや不規則な生活と合わせると、自覚するのにも時間がか
かるくらいには酷い有様になる。

お酒は止められないし止めたくないから、それ以外のところでなん
とかしないと。

学生時代には、人より少しだけ頭の回転が速いという自負を持って
いた僕にとって、信じられなかったくらいにひどくなつてからが
ばったんだ。

肉体とは違って脳みそはただ維持するだけではだめらしい。

いや、しばらく引きこもったりしたあとの体力の衰えとか声が出な
いとかと同じなのかもしれないな。

だって、この幼い体でもそうなるんだから。



……通知、こんなにたくさん。

歩いているあいだわざと見ないようにしていたスマホ。

今の僕のちっちゃな手には大きいその通知欄に何人もの会話が
最初の行だけ映っている。

別れてきた「友人」からのそれらは、きつと長いんだろう。

まあ後でいいんだけど、かんたんなものなら返しておこう。

またいつできなくなるか分からないんだから。

この1年で……10年近いブランクを経て、たったの1年で増えた
人たちから来るメッセージへ、返事を返していく。

いつも通りに簡潔に、でも、ていねいに。

◇◇◇

午前に知的好奇心を満たしつつ本を読んだあとは、お昼。

お昼は外に出る日もあるけどたいい家は家で食べる。

インスタントで済ませることは少なく、そのときの気分で簡単だったり凝ったりしたものを作ることにしている。

もちろん節約もあるけど、ゆつくりとだけど料理のレパートリーを増やして少しでも昨日より進む感覚を得たいのと、薄目の味付けが好きなきなこともある。

——ちなみにあの日は、たしか——だったはずだ。

……たぶん。

僕の記憶はあてにならないけど、たぶん、きっと。

◇◇◇

午後は趣味の時間。

流行りの本を読んだり映画やドラマを見たり、ゲームをしたり、アニメやマンガを見たり……何をするかは全く決めないでそのときに熱中していることをする。

一時期は現実逃避の手段としてこうした娯楽にのめり込んでいたけど、今ではあくまで好きなことをすることを意識している。

「好きだからする」のは大事。

「好き」が分からないほど悲しい時間はないもんな。

特に悠久の時間を孤独に過ごすニートには必要なことだって思う。

——今思えば、このおかげで健康を維持できたけど、このせいで安定してしまったのかもしれないから諸刃の剣なんだろう。

けど、趣味が高じてって言うのは何度となく体験してきたから無駄じゃないはずだ。

◇◇◇

夕方になってきたら1、2時間の散歩だ。

この散歩が、僕が長年ニートをしていてもまずまず健康でいられた一番の理由だっと思ってる。

適度に頭を空っぽにして適度に疲れるというのが心身にとつていちばん良い……っていうのを何かの本で読んで試してみたら、もつと前に引きこもっていたときによくあった、もやもやした感情とか動悸とか不眠などとは無縁になったから。

やっぱり人も動物、動かなきゃダメなんだろうな。

たとえ幼い子供になっちゃったとしても、それはきつと同じはず。

◇◇◇

片づけ切って物の少ない居間や台所を見ながら、とんとんと軽い足音で廊下を歩いて洗面所へたどり着いた僕は、すっかり慣れた手つきでパーツは多いけど脱ぐのは楽な、女の子……女兒向けか、の服をしゆるしゆると解いていく。

男のときは決まり切った組み合わせだけだったけど、今はもう、そうじゃない。

下着を解いて初めてわかる、かすかだけど男じゃないって分かる胸のあたり……いや、この時期の子なら体脂肪で誤差なんだし胸らしくなっていないのは当然なんだろうけど……と、なくなってからずいぶんと経った、さびしい股のあいだ。

ふだんは服装でいくらかはごまかせても、こうして裸になると……どう見ても、元成人男性な僕からすると「幼女」にしか見えない。

今だって口を開かなければ、初対面の人からはそういう扱いだし。この体になってからは中性的だって言われるし、髪の毛さえもう少し短くしてタオルで隠したら、男湯女湯どちらでも気づかれずに入れるだろうし。

隠さないで男湯に行っても父親か誰かと来ているだけだと思われ程度だろうな。

……まあ、目立つことはまちがいないから行かないけど。

それにしても……この体型、いくら食べても結局は何も変わらなかったのが少し悲しい。

どうせ女の子になるんだったらちよつとでも胸の膨らみがほしかった気がする。

けど、やっぱり僕なんだ。

無くて良かったんだろう。

意気地のない僕にはちよつと良い体なんだ。

鏡の前の裸の幼女は、そんな目をしていた。



——歩き疲れたくらいに帰って来て溜めておいたお湯に浸かって汗を流す。

いろいろな理由で、シャワーよりもお風呂の方がいいらしいし気持ちいい。

肌の汚れや体臭が取れるとか芯から温まるとかで、運動と同じように心拍が適度にあがってぼーっとできるのも良いらしいし。

かといって朝晩と入るのはやりすぎで、湯船に浸かるのは1回だけにした方がいいらしいとか。

とにかく、そういうものらしい。

シャワーだけって言うのは物足りないし、朝晩入るのはよっぽど寒いとか温泉にいるときくらいだし、入らないなんてのは気持ち悪いし。

そういうものなんだ。

体が小さすぎるせいで大きすぎる、この湯船も見納め。

サイズの気を抜くとすぐに浮いちやうのが玉にキズ。

だって子供だもんなあ。

前は小さいって感じたけど今は大きすぎるし。

同じように広いお風呂場。

天井がとつても高く感じる。

初めのころは他人の体だからって感じてお風呂場では違和感も申し訳なさも気恥ずかしさもあつたっけ。

もう慣れ切っちゃったけど。

でも……欠けてテープで補強しただけのタイルの跡がそのままなのが悲しい気がする。

まあ直すにしても人を入れれないといけないしな。

この見た目じゃ誰も家に呼べないし。

なによりただ面倒なだけだったし。

うん。

あとは、誰かに任せちゃおう。
ぜんぶ任せるんだ、これくらいはいいよね。

◇◇◇

「……………」

声って出さないのでも誰かって意外と分かる。

そんなわけで、ただのため息もなんとなく子供っぽいように感じる。

口も喉も物理的にちっこいんだからしょうがない。

そうして温かくなって汗を流してさっぱりして。

ちよつと早いけど今から出るからしようがない。

これでたとえ今夜からお風呂に入れなくてもなんとかなりそうだ。

汗はほとんどかかないけど……………それでもこの腰まで伸びている長い髪の毛を洗わないで寝るというのには抵抗あるし。

習慣って言うのは恐ろしいな。

お風呂だけは……………引きこもりの時期のごく一時期しかサボらなかつたくらいだ。

子供になろうと女の子になろうとお風呂だけは欠かせない。

夏でも平気でお湯に浸かるんだ。

……………さて。

これからは忙しくなるだろうし緊張もするだろう。

というわけで、これまた最後になるだろうお気に入りのコーヒーも飲み納め。

少なくとも好きな豆の種類で好きな量で好きな時間に、って言うのは。

それくらい自由は欲しいけど……………どうなることやら、だ。

コーヒー飲む自由すら奪われる可能性も、無くは無い。

そこは怖いところだけど今考えても落ち込むだけだしな。

さすがにこの後が控えているからだめだけど、どうせなら昨日のうちに残っていたお酒も高い方から順に飲んでおけばよかったかも。

ああ、もったいない。

……いや、もう飲めないとは限らない訳だし帰ってきたあとの楽しみに取っておこう。

希望という未来は大切だ。

もう帰って来られないわけじゃない……かもしれないんだから。

◇◇◇

夜は軽く野菜を中心に食べる。

運動量が少ないからそこまで多く食べなくてもいいし、自然と量も減ってくるもの。

大人になっても成長期のような食事をしていたら体重と体型がまづいことになった苦しい経験から生まれた習慣。

代謝が落ちるというのは本当に恐ろしいことだってあのとときに初めて知ったなあ……本当に恐ろしい。

何が恐ろしいって、何も考えないで普通の量を食べるだけなのに気がつけばっていうのが下手なホラーを越えている。

さらに恐ろしかったのは元の体重に戻るまでに、なった時の倍以上の時間と労力が必要だったことか。

食欲を落として、夜はあんまり食べないって言うこのスタイルに落ちつくすまでにどれだけ苦労したことか……。

あれは改めて成長期の終わりを感じた、つらい事件だった。

まあ大学生辺りで薄々感じてたんだけど。

でも学生ときは通学って言う重労働してたんだ、学生じゃなくなればこうなるのは当たり前なのかも。

会社に通ってるわけでもなしだからな。

あと……徹夜が辛くなったりそもそも眠くてできなくなったり、無茶が効かなくなったのを感じたのとはほぼ同時期だったことも、なおさらに悲しかった。

「お兄さん」から「おじさん」になっていくのは、恐ろしいことなんだった。恐怖を味わった。

……30になるまでは「お兄さん」でいたいこの気持ち。
きつと30を超えてもそう思っているんだろう。

ある歳を境に諦めがつくんだろうか？

……………。

もつとも。

今となつては「おじさん」って呼ばれるどころか「お嬢ちゃん」な
幼女なんだけど。

これもまた、悲しいんだ。

せめて「お坊ちゃん」で……いや、それは嫌だな、なんか。

でも、年を取るって言う実感を得たあの絶望感も今となつては懐か
しい気がする。

あと15年したら、もしかしたら「また」体験することになるんじや
ないかな。

そうだといいけど。

……だけど、欲を言うんだったら。

できることなら、それを今度は友人たちと同じ時期に同じように感
じたい。

年を取るってそういうことみたいだし。

◇◇◇

夕食のあとは眠くなるまでお酒を飲みながらテレビや映画を見て、
少しだけ良い気分になつて眠くなつてきたら寝る。

酒は悪いものなんだけど適量なら問題ないって信じてるし、突き詰
めれば酔いを自覚して適量にコントロールできることが鍵だから。

一時期は溺れていたせいでもいい体がやられたけど、翌日に響かな
い程度を維持できるようになつてるから問題は無いよね。

呑まないって言うのは無理な以上うまく付き合うしかないんだ。

大丈夫、アル中にはまだまだ遠い。

まだ大丈夫。

……大丈夫だよ？

そんな生活をこの体でやってるのは相当まずいかもだけど、止められないんだからしょうがない。

止めようって考えるだけでストレスなんだから止めない方が良くに決まっているんだ。

で、翌日に響かないとは二日酔いしないということじゃなくて、眠りが浅くなりすぎなくて翌朝の体が重くなっていないことで、内臓がちよつとでも違和感を発しない程度のこと、わりとその時の体調とか夕飯の内容とか呑むお酒とか酔う時間の過ごし方で変わる。

結局は「酒は飲んでも飲まれるな」というような、小さいころから知っているような簡単なことわざとか言い回しにたどり着くのは不思議な気がする。

どうせみんな……ずっと昔からみんな同じ目にあって同じことを自覚して伝えて、なのに自分の体で体験するまではその言葉の意味を正しくは理解できないんだろう。

僕のように。

人間なんてそういうものだ。

言葉ができたときからなんにも変わってないんだ。

——そういうものをひつくるめたすべてが、ずっと続いてきた「僕」の毎日だ／った。



そういえば、朝は忙しかったからカーテンも閉まりっぱなしだし、空気も籠もっているな。

だからなんとなく落ち着かなかったのか。

習慣ってすっぽかすと気持ち悪いものだもんな。

僕はリビングを突っ切って窓の下に置いた踏み台に載って、今の僕にとっては重いカーテンを開けて、踏み台の上でかかとを浮かせて背伸びして高いハンドルをよいしょと回して、窓を開けた。

さっきまで歩くときに嗅いでいた、春の気持ちいい風が家の中に入ってくる。

このあとはどうせ、たくさんの人が入ってくることになるだろうし、閉めることは……考えなくてもいいか。

家じゆうに新鮮な空気が流れ込んでいく感覚ですっきりした僕は、未だにめり込んだままの床を避けて、毎段脚を大きく上げないと上れない階段を大股で上って僕の部屋へ。

いちいち消すのもめんどくさくて付けっぱなしのパソコンの画面が気になった。

……よく考えたら、どうせパソコンから何までみんな持ち出されるだろうし、閉じておくか。

今の僕にとっては大きすぎて重すぎるしもう移動させられないサイズになった、今までずっと使ってきたパソコンを閉じて……ついでに机の上の日記帳にも今日のことを簡単に書き留めておく。

◇◇

健康を維持して多少は前に進むという錯覚を得ながら、ただ生きていくだけの毎日。

僕と僕を守る家の中だけでほとんど完結して僕自身以外の誰も必要としないで、同時に誰からも必要とされない毎日。

僕という人間を維持するだけならそれでもよかったのかもしれないけど、時間は過ぎるもので、有限だった。

本来は経験するだろう人生にとって重要な時期を何のイベントも経験せずに、ただ年齢だけを重ね、やがては老いていき、そして……。

——毎日の健康のためという名目の儀式を設け、その事実からあえて目をそらし、考えないようにして過ごしていたその毎日は。

貴重で楽しかったけど、そろそろ終わりにしないといけないもの。僕の夏休みは、終わったんだから。

◇◇

時計。

あの朝、この体になって最初に見た時計は、あのときと同じように

ぴったり3時を指している。

偶然だろうけども僕はこの体になってからその偶然に助けられもしたし、苦勞もした。

人や物事との「縁」というやつは、大切にしないと。

そういうのもまた、この体になってからの1年で知ったこと。

やり直しているようなものなんだから、今度こそはきちんとしてほしいものな。

◇◇◇

あの日の前の夜はいつもどおりに寝て、あの日の朝に目が覚めることで強制的に「日常」っていうのが終わらされた。

言いかえればあの日の前の夜に「僕」は一度死んで。

あの日の朝に「僕」が生き返った／生まれ変わった。

今となってはそう感じる、あの朝。

男から女へ、黒髪から銀髪へ、20代から10……歳、未満へ変わった朝。

——……だから僕は最後のメッセージを、彼女たちに送った。

お別れの儀式。

そうして深呼吸しても緊張でじっとりした指で操作した画面には、ある番号が表示されるプツツという音がして、ワンテンポ置いて。

『はい、——です』

』

『お電話は、——ですか?』

電話の反対側で女の人と言う。

……僕はもう、止まったままじゃない。

「……はい、そうです」

電話のこっち側で、僕は言う。

「僕は——」

「です」

」を、お願いします」

「……ああ、急いでいないので、ゆっくりで大丈夫です」

僕が、女の子になっちゃったんだって。

大丈夫。

僕は、元の体での10年以上という長い時間を、この体でのたった1年ぼっちの時間で——もう、乗り越えたんだから。

2話 姿が変わっても、頼れるものは、何もなし 1

／2

「……………なるほどね、だいたい分かったよ」

僕は言う。

「それで、僕はどうしたらいいんだ？ どうしたら——できる？」

僕は問う。

「……たったそれだけなんだ。 ならいいよ、すぐにやってくれても」

僕は答える。

「……？ ——なんだろう？ 遠慮はいらないよ、さあ」

僕は任せる。

「それに、僕の話はどうだっけいいんだ。 だけど、むしろ——

」

僕は応える。

「だからもう、何度も言わなくてもいいんだって……………そう、

じゃあ始めてよ」

僕は催促する。

「——あ、終わったらでいいんだけど、できたら、僕の体が——

……………」

僕は、付け加えた。

◆◆◆

目が覚める瞬間ってというのは、いきなり意識が戻って……………外の情報と今までの思考とこれからの意識とがいつぺんに頭の中に流れ込んでくるから、いつも混乱する。

さらに目が覚める前に夢を見ていたとしたなら、なおさらだ。

というわけで、なにやら壮大な夢を見ていたらしい僕の無意識のせいで、僕は目が覚めたらしいのを知ってからしばらくは身じろぎもしない、ぼーっとしていた。

ぼーっとしながら意識だけで体の感覚を確かめてみる。

んー……まだ眠いけど二度寝するほどではないかも……？

何度か寝返りをうってだらだらとしていると髪の毛がやたらと顔にかかってきてもものすごくうっとうしい。

そろそろまた切りに行かないとか。

面倒くさい……けど、こればかりはなあ。

ぼさぼさの髪の毛はめんどくさいからなあ。

………つていうか。

耳を澄ませなくても分かる騒がしさ。

外がうるさい。

あと部屋が暑くてまぶしい。

………。

……あれ、ほんとうに今朝はずいぶんと外の音、聞こえるような？
寝過ごした？

これじゃまるで昼間みたいな……。

よく見てみると部屋に入って来ている光の方向が朝じゃない。

お昼から夕方のそれだ。

なにより……よく寝た爽快感がすごい。

やっぱり寝過ぎたんだな。

なんだかだるかったから僕は上半身だけを起こして、すぐ上の窓のカーテンを半分だけ開けて鍵を開けてガラスを開いて空気を入れ換える。

……強い日差しが南から来ているらしいのと生暖かい風が流れ込んできたので、だいぶ時間が遅いらしいのが確定した。

外を行き交う人や車も、どう見ても通勤時間のそれとはだいぶ違うし。

えっと、それで……今の時間は。

大切な朝の時間をすっぽかした悲しさに打ちひしがれながら、のろのろと視線を室内に。

………。

けど。

………んん？

……見たものが信じられなくて目をこすったところで、今まで眼鏡をしていなかったのに気がついた。

眼鏡をかけていないのに、手元だけじゃなくて50センチより先も見えている。

手のひらのシワがひとつひとつ不気味なくらいはつきりと見える。よく考えたら窓を開けるのはともかく、窓の外の光景なんて普段なら眼鏡無しじゃぼんやりとしか見えないはずなのに普通に见えていて……おかしいって思えなかった。

とりあえずもういちど、寝過ぎすのを避けるためにベッドから数歩の机に置いてある目覚まし時計に目を向けてみると……やつぱり秒針まではつきりと見えるし、机の周りのものもくつきり見えている。

そして時刻は3時を指している。

3時。

15時。

……午後の、だよな、もちろん。

外の雰囲気的に。

くらくらする頭で考える。

……見間違えじゃなかったみたいだ。

いったい何時間寝ていたんだろうか。

確か寝たのはいつもの時間からそう外れていないはずだから、だいたい……17時間とか寝ちやっつたのか。

病気をしているときとか徹夜した翌日とか以外じゃ、犬とか猫とか幼い子どもとかじゃないと到底寝ていられないくらいの長時間、僕は寝ていたらしい。

……おかしいな。

特に体調も悪くなかったし最近寝不足とかもしてないし。

昨日だって大してアルコールも入っていなかったと思うんだけど……うーん。

二度寝どころか三度寝四度寝した疑惑。

覚えていないという時点で結構おかしい。

それに、体の感じというか感覚もなんだか変だ。

頭が重くて重いのに軽いつていうか、妙な感じ。

お酒が残っているときあのイヤな感覚もないから……もしかして実は風邪を引いていて長めに寝ちゃったとか？

あるいは最近夜更かし……って訳じやなさそうだな、そんな不規則なのは最近してないし体もむしろ元気だし。

けど……それじゃ17時間の説明がつかない。

考えが行ったり来たりしてくるくる回るだけ。

んん……？

肌の感覚も、体の感覚さえも何となく違うつていうか違和感があるつていうか。

違和感つて言えばなんとなく物が大きく感じる気がする。

……部屋ごと大きく見えるつてことは自覚がないだけで熱があるのかも……？

なんだか致命的な何かはずれちゃってる感覚を頭で反芻してもどうにもならない。

……ひとまずお水でも飲んできてさっぱりしてからにしよう。

頭痛もないし吐き気とか目眩とかの症状もないからそこまでひどくはないと思うんだけど……ずっと寝ていたし、喉が渴いているし。

まずはお水だな、お水。

そのあとご飯食べてコーヒー飲みながらゆっくり考えよう。

よつと……、あれ。

そう決めた僕は……また別の違和感。

ベッドから脚を下ろして立ち上がるとまた変な感じ。

何かが下に数十センチずれたような、割と大きい違和感。

……この感覚……もしや昔はよくなった、手が異常に大きく感じる的なあれ？

あれすつごく怖くて大っ嫌いだったんだけど……何となく似てる気がする。

でもあれは感じなくなつてからもうずいぶんになるし、大人になつた今さらになんて。

何秒かフリーズした僕は再起動して、どうせ寝起きだしつて割り切

る。

とにかく、このぶんだと寝汗もかいていそうだしシャワーと着替えもして。

……おつとと。

ぶわつと汗が体じゅうの毛穴を広げる感覚。

バランスを崩しそうになったってそれから気がつく。

同時にばさって音がして足先が温かくなって……脚がすーすーする感覚が。

脚に何かが絡まっている……パジャマのズボン？

ズボンがお風呂のときみたいに真下にすとんって落ちていてふとももが映る。

なんでずり落ちて……あ、ゴムでも切れたのな。

……って、あれ？

ズボンを腰にあげようってしたけど手を離すともう1回落ちるズボン。

まるで、サイズが全然合っていないような雑さ。

それに違和感を覚えて……今度はやたらと長く感じるシャツの裾を持ち上げてみる。

なんで僕の太ももがこんなに細くて白くて……毛がなくてすべすべなんだ？

確かに邪魔だから気になったときに剃ってるけど……つるつるですべすべ？

しかも膝やスネに残ってるはずの昔からある自転車とかで転んだ傷とかもないような……。

……………。

ばさり。

ズボンの上にちつちやな布きれがもう1枚。

あれ？

……え？

今度はパンツまで。

これはさすがにおかしい。

一体何が起きて――。

とつきの反応で顔を上げて……開いたままの部屋のドアの先の、廊下の先に起きつぱなしにしちやつてた、遠くの鏡が視界に入る。

捨てるまでは行かないけど置く場所に困つてた、前からある全身鏡。

ぴったり僕の部屋から僕の全身を捉えるようになってるのは、昨日足を引っかけて場所がずれたからだっけ……なんて思考が自動的に流れてるけど、それどころじゃなくなつて。

眼鏡もなしで、はつきりと。

見間違えることもないくらいに、鮮やかに。

暗がりでも昼間だからか廊下にもそこそこの光が入っていて、見えつしまう。

：パジャマのシャツを太ももの半分くらいまでだぶつと着ていて、隠れてはいるけど下になんにも履いていなくなつて、薄い色の髪の毛がシャツの裾くらいまでたくさん垂れていて……そして。

見たこともない顔をした女の子……いや、下手をすると女兒、巷でいう幼女つて言つてもおかしくない顔をした子どもが僕を、その薄い色の瞳で見つめていた。

この子は誰かとか、どうして僕の家にいるのかとかいう疑問は、一瞬で消えた。

これは、……僕なのか？

そう考える僕と、その子が立っている位置的に僕しかいないじやんつて考える僕がいて……僕はしばらくぼけーつと立ち尽くしていた。

◆◆◆

「……で、本日新たに発表されたのは……」

「……発見後すぐに……したおかげで……」

「警視庁は先ほどの記者会見で、次の……」

つけっぱなしのテレビからはなんにも情報が入つてこない。

僕の耳を素通りしていく。

あのあと、履くもの……いや、履けるものがないから冷たい風に当たる下半身を意識しながらいろいろ見て回って、他にはなんにも変わってないって分かって少しだけ落ちついてきた僕。

もうちよつと現実感を得ようといつもみたいに適当にテレビをつけて……足の裏がつかないほど高くなっているイスに腰掛けて……乗っかっている。

そのイスに座るにも両腕を使わないといけなかったから文字通りの意味で乗っかって。

あれだ、バスの運転者さんのすぐ隣の高いところ。

あんな感じによいしょって、わりと全身を使う運動になっていた。もつとも、今の僕だったら間違いないと登り切れずに諦めるだろうけど。

——家にあるものはみんな昨日の夜から変わっていないように見える。

それでもまだ現実感はないけど、僕はさつき鏡で見たままな子どもになっているらしい。

着ていた服もベッドも昨日寝たときと変わっていないと思うし……パソコンやスマホで開いていたページとかアプリも昨日のままっぽい。

ざっと見てみたけど、ニュースなんかを見ても特別な情報……たとえば何か変なものが現れたとか人の姿が変わったとか……そういうものは特にないらしい。

けど、昨日の夜とか今朝に起きたばかりの事件なんかは初耳だから、今僕が座ってるこの状態は夢じゃなさそう。

っていうかここまでリアルだと明晰夢でも無理だろうし。

そもそも僕は明晰夢なんて見たこともないしな。

僕の体が変わっていること以外は昨日までと何も変わっていない。

世界は何にも変わっていない。

変わったのは……僕の体だけ。

ただ……半日以上ワープしちゃって、体が変わっちゃっただけだ。

「……………」
……にしても、指紋まで変わっているとは。

いや、幼いころの僕になったならまだしも見知らぬ北国出身なDN Aの入っていきそうな子なんだ、当たり前か。

骨格から色素から何から何までみんな変わっているんだからな。変わってないのは僕の意識だけ。

僕の記憶だけ。

「……………」
ふう

めんどくさい。

けど、いちいちつてのもまためんどくさいから指紋認証……やり直しておこう。

……ああ、めんどくさい。

◇◇

……………。

ふむ。

なるほど。

洗面所の大きい鏡の前には、シャツ1枚になった童女……幼女？

が、しげしげと自分の全身を観察している。

真ん前から腰に手を当てて、横向きになってだぶだぶのシャツを眺めて、体をひねって転びそうになって。

心持ちバランスの悪い感じがする幼い体を……まあ僕自身なんだけど。

シャツ1枚とはいってもぶかぶかすぎるし、そもそも出るところも出てすらもないからやましいところは何もない。

下になんにも履いてないっていうので罪悪感がありそうだったけど、そういうの以前の幼さだからか特に思うところもないからかな。

しかしほんとうになんにもないな。

お股からも何も出てないし。

見た目はものすごくすつきりしているけどお股のあいだがとても

寂しい気がする。

ふだんは感じなかったけど、それだけ温かくて存在感のあるものだったのか？

……よく考えたらそれなりの大きさだもんな。

邪魔なだけだったけど無くしてから分かる寂しさ。

まあお股のことは今は置いておいて問題は体の方だ。

正直それがなくなったところでどうでもいい。

いや、どうでもよくはないけど今はそれどころじゃない。

ちよつと心配になるくらい痩せすぎているから、そっちの方が気になる。

子どもってもっと丸っこいイメージだったんだけど違うのか……分からない。

手首は骨がくつきり分かって脇とかも形がぱきはき？している気がする。

脚だつてよくよく見たら骨張ってるし……女の子っていうのイメージからは、かなり遠い。

やっぱり所詮は幼女か。

けど、脂が乗って来そうなのを毎日の食事と運動でどうにか抑えていた程度の青年を過ぎた成年だったから違和感があるだけで、あばらが浮くっていうのは僕が小さいころも……確か中学生くらいまでは続いていた気がするし、こんなものだったのかもしれない。

もう相当前のことだからよく思い出せないけど……あとは人種的な体格差もあるかもしれないしな、考えてもしょうがないのかも。

……けど。

ぱつと見て「かわいい」って感じるんだ。

それも暗い廊下の先でぬぼーって座敷童的に立っているように見えても、怖いよりもそれが先に来た。

顔が整っていて、けどほっぺが丸っこくて……髪の毛が長くて体はちっちゃくて。

僕のストライクゾーンの下限があと10歳下だったらあるいは、だけど僕はそうじゃないからただただ子猫の写真とかを見たときの反

応しかない。

でも……成長していかないからこそこうやって冷静にしていられるけど、もうちよつと……あと数年も成長した状態だったらきつと動揺していただろうな。

免疫もない僕だ、きつとそうなっていただろう。

たぶん。

そんな今の僕はまさしく……少女未満の童女とか女兒とか幼女とかいう表現がぴつたり。

それ以外の存在じゃない気がする。

……………。

どうせ女の子になるんだったら同い年くらいの人になったら……いや。

女性に耐性のない僕だから下手に高校生くらいだったり大人だったりしたら……それこそ寝起きのトイレすら困ることになっていただろうから、これはまだマシな方なのかもな。

自宅でのトイレすらいちいち恥ずかしくなったらおちおちニートもできやしないもんな。

◇◇◇

変化した体を観察するのもそこそこに、履けるものはないからまだ温かいパジャマのシャツだけを上に着直す。

こういうの……僕自身ののだとしても人の体って感覚だし、あまり見ない方がいいんだろう。

なんとなく見ること自体に抵抗があるし。

確かめてみた結果として、今の僕の体はどう見ても昨日までに使い慣れて見慣れていた僕の体じゃないことが確実に分かった。

分かってはいたけど確定したわけだ。

まあ……飛び出していたはずのものがなくなるどころか根こそぎ欠片もなければ……ねえ？

人生って言うのは摩訶不思議。

で、今の僕は紛れもなく子どもだ。

子どもだと言つても……これって、いくつくらいになるんだろうか？

とりあえず高校生はないとして発育次第で中学生……小学生くらい？

学生時代の全校集会とかでは幼く見える子とかいたし、がんばれば高校生でも行けるかもしれない……いや無理か。

風格つて言うか顔つきからして無理だな。

逆に言うと、がんばらないと服装次第では大人びた年長さんって見られても文句は言えない感じだ。

その辺はがんばろう。

何をがんばるのかはさっぱりだけど。

……身長とか、何センチなんだろう？

けど、幼く見えるのはシャツ1枚というヤバイ格好のせいもあるんだけど……っていうかこれのせいもかなりあるかも。

で、今の僕は子どももって言つても僕の幼いころのそれじゃなくて、髪の毛からまつげまでびっくりするくらいに色が薄くて線も細いし瞳の色だって違う。

顔つきもどこかの映画で見たような「北国のいいところのお嬢様」って感じの趣だし。

どこかで見たことがあるような、知らないはずなのに知っているような気がしなくもないっていう感覚があるのはなんだか変な感じだけど。

体はつていうと明らかに幼い子どもだけど、辛うじて胸と腰が……記憶にある子どもころの記憶よりは大きい……？

いや、錯覚か。

出るとこなんてなさそうだしな、明らかに。

けど子供つてのは個人差が大きいもんだし、2、3年分程度なら発育が遅いだけって言い張ることはできるかもしれない。

男女の骨格の差つてやつも、まだそこまで感じなかったし。

……でも、毛すら生えていなかったのはまだ第二次性徴を迎えてい

ないからなんだろうけど違和感がすごい。

なんていうか、つるつるだ。

うぶ毛がほとんど見えないのも不思議。

生えない体質なのか、毛の色が薄いからかは分からないけど。

肌を見た目がすつきりしすぎているから、毛があるのがふつうだった僕にとっては「ない」っていうだけでなんだか目を背けたくなるっていうか目が吸い寄せられるというか……なんとも言いがたい感覚に襲われるもの。

これが背徳感っていうものか。

あれだ、出かけた先で薄着の女の子とか女の人が目に入ったときの
気まずさって感じ。

……けど。

「……………はあ……………」

たった、これだけ。

ただ僕自身の体のはずのものを見ただけなのにとても悪いことをしたような感じがするのは……僕の理性とか良識とかそういうもののせいなのかもしれない。

僕は打たれ弱いんだ。

この程度で3日はふさぎ込む自信がある。

でも、ため息ばかりついてるわけにもいかないよなあ。

……………さて、これからどうしたもんか。

2話 姿が変わっても、頼れるものは、何もなし 2 ／2

「けほっ。…………うえ…………」

あ…………古くさい臭いがする。

2年以上着ていなかった服を出したときのあの独特の臭い。

物置にして長い、昔のものをしまつてある部屋に来てわざわざ探し出したのはタンスの奥にギチギチに詰められていた、かつて…………最低でも10年くらい以上前から着ていない、僕が子どものころに着ていた服。

これより小さい、というより古い服がなかったからしょうがないんだけど…………たぶん小学校高学年のときくらいに着ていた服は、今の僕にとつてもまだ大きい。

やっぱりこの体は10歳未満…………？

いや、でも、なんとか10歳は超えていたっていう謎の気持ちがあるを否定するんだ。

ぶかぶかでだぼつとしていているけどとりあえず着ているぶんには邪魔にならない程度で、家の中で歩くくらいなら脱げる心配もなさそう。

最悪ズボンとパンツさえ落ちなければ上はなんとかなるもんな。

もっともパンツまでは残してなかったからズボンで押し上げてる感覚だけだ。

たまにずれるから気持ち悪い。

今は居ない母さんが「お気に入り綺麗なものだけは記念にいくつか残しておきたい」って言って聞かなくてうっとうしいと思っていたけど…………今になってはありがたい。

これがなければ僕は家の中をシャツ1枚で過ごすことになっていたからな。

女の子になっていきなりそれはないだろう。

誰もいないとは言っても僕自身の抵抗はある。

いくら家の中だからとはいえ下半身すっぽんぽんで過ごすのは……いくらひとり暮らしでニートしているからって言っても、いくらなんでもアウトだろう。

そう、僕の中の常識が言うんだ。

だって下半身丸出しだぞ？

やばいじゃん。

ほこりを被っていた鏡にぼんやりと映る「兄のお下がりを着ているす」的な女の子になっている僕がぼんやりとした表情で立っているのを見る。

……顔も雰囲気も、これは昨日までと変わらずにぼーっとしているけど頭の中はいちおうまともに働いている、ように感じる。

たぶん。

少なくともお酒が入っていないことがはつきりと分かるくらいには細かく考えられるし、五感もしっかりとしている……と思う。

たぶん。

……………。

さて。

目が覚めてから1時間ほど、うろろうとしながら考えていたことと調べたことをまとめてみると。

——この姿が変わって幼い女の子になっちゃったっていう状況は熱や昨夜のアルコールのせいではないらしくって、現実みたいで。

でも、家の中の様子も外の状況も昨日からは特に変わっているようではなくって。

変わっているのは僕の体だけ。

たった、それだけ。

それ以外にはなんにも、ない。

ただの現状確認に過ぎないけど家の中に変なものがあったりしないから、今すぐどうこうって話にならないのは助かる。

家の中はセーフゾーンだ。

引きこもりにとってはここがクリアされていないと抛り所がないんだ。

そんなことを引きこもっていた時期に実感した。

……けどこの状況、僕の頭が狂っているって考える方がまだマシかもしれない。

だって現実で、空想の世界でない僕がいる現実で僕自身があとかたもなく……全く違うものになってしまいうんて。

とりあえずですることがなくなっちゃって、手持ち無沙汰になった途端に力が抜けていく。

……どうしよう。

いや、どうしようもないんだけど……。

埃を被ってる鏡に小学生のときのシャツとズボンを着て座り込んで、ぽけーってしてる僕が映る。

パンツルック……って言うんだっけ、そんな格好をしている薄い色の女の子な僕が。

これが夢とかだったらいいんだけど、夢だったらこんな考えられるはずもないしな。

とつても、非常にとつてもこの上なくめんどくさいけど……考えない訳にはいかないよなあ、これ。

現実を見ないと行けない。

お酒に逃げたいけど無理。

……。

さつきからお腹も鳴っているし、とりあえず朝……じゃなくてももうおやつ時間も過ぎていくけど、何かをお腹に入れよう……。

体のサイズにしてはやけに大きな音がもういちど、ぐうつと鳴った。

◇

夕方を過ぎて夜に。

世界はなんにも変わっていないかった。

あ……疲れた……。

もうだるだるだ。

もうやだ。

何もをするにしてもいちいち体を大きく動かさないといけなかったから、とにかく疲れた。

お湯に浸かったら一気に疲れも襲ってきたし今日は早く寝よう……。

下手すると今日起きてる時間が6時間にもならないけどしようがない。

僕は疲れたんだ。

シャワーの音と立ちこめる湯気に満ちているお風呂場で体を洗う。シャワーヘッドが重すぎる。

お風呂のイスが高すぎる。

……結局調べて考えてを繰り返しているうちに、すっかり夜になっていた。

起きたのがとても遅かったというのもあるけど。

だって3時ってことは普段より6時間以上遅いつてことで、起きる時間の半分くらい無くなったわけで。

はじめこそこの体に戸惑いもしたけど……いちど受け入れてしまえばただ体が小さくなっただけなんだし、そこまで違和感もなかったからじつとしてしていると忘れるくらいだったしな。

おかげで、こんな目にあっているのにわりとふつうに過ごせちゃった。

むしろそつちの方が非現実的まである。

……慣れって怖いものだなあ……。

ま、誰かと一緒にいたり外に出なきゃいけないなかったりすれば話は別なんだろうけど僕はひとり暮らしのニートだしな、僕自身が何かに集中して気にならなければ問題が存在しないんだから。

……にしても毛がないと、本当に洗いやすい。

どこを洗ってもまるで抵抗がないからきちんと洗えているか心配になるくらいだ。

その分が髪の毛に集まっている気がする。

……この量、どんだけシャンプー使うんだろ。

1日じやたいして汚れないだろうし、そもそも外に出ないんだから夏じゃなければ大して気にしなくてもいいんだらうけど、なんとなく習慣で洗いたくなる。

お風呂に入らないなんて……そんなことはできない。

肌が薄すぎて静脈が見えるくらいだからこするのもなんだか怖くって、軽く手のひらで洗う。

くすぐったくて困るけどしようがないよね。

……あの後調べてわかったことといえば、テレビもネットもどこを見ても僕みたい体に体が変わったとか、そういった騒ぎはひとつも起きていないってことだけ。

小さくなつて顔が変わつただけならともかく性別まで変わつて不安だった体の方も、着替えと今とで裸を見てトイレに何回か行ってしまえばすぐに慣れる。

他人の体ならともかく僕自身の体だしな。

女の子らしい女の子ならともかく、幼児だし。

仮にこれくらいの年の女の子の親戚とかの面倒を見ることになつてお風呂に入れてあげるとしたって、悪いことはしていないのに悪いことをしている感じはするだらうけど……それ以上の感情が湧かないのと同じだろうか？

そんな親戚はいないけれども、もしそうだったら、だ。

庇護欲しか浮かばないだらう、僕なら。

ま、何をしても気にならないというのはいいこと。

まだ家の中の鏡やガラスが視界に入るたびに知らない子がいるって思つて、びくつてはなるけど。

強いて言えば、この長すぎる髪の毛がうつとうしいことくらいか。

む、なかなかシャンプー落としきれない……。

振り向いたり横になつたりするたびに邪魔だしシャンプーもふだんの何倍も使つたし、洗つたら毛がキシキシする感じがするけどリンスとか持つてないからどうしようもないし。

髪の毛が長いほどに魅力は増すけど、同じくらい維持するだけでの

苦労があるんだなあ……女性って。

僕が想像もしていなかった種類の苦労だ。

あと、髪の毛って結構重いんだな。

重力をものすごく感じる気がする。

このままだと首が太くなりそう。

細すぎて折れそうだからもうちょっと頑丈になってほしいところ。

◇

ちよつと高くなったお風呂のイスから立ち上がって腕を上げてシャワーを止め、とても重くなったフタを必死な思いをして湯船にかぶせてタオルを何枚も使って髪の毛を乾かして、ようやくお風呂から出ることができた。

お風呂に入るだけで重労働。

疲れを取ろうと思って入っても出てくる頃にはまた疲れるという。

……あ、よく考えたらもう、わざわざフタとか閉めなくてもよかつたんじゃ。

どうせ毎日入れるんだし入るのは僕ひとりだしでいちいちフタする意味がない気がする。

今日までなんとなくやってた……けど、この体にとってはお風呂のフタは重すぎるしでかすぎる。

……明日からはそうしよう。

仮にこのままだったらけど。

戻ってほしいけど。

火照った体を包むちようどいい冷たさの空気を感じつつ全然乾く気配のない髪の毛にドライヤーの風を当てながら、さっきの続きを考えてみる。

ドライヤーがすつごく重いのもどうにかしたいところだけど。

……目が覚めてからずっと、見た目以外にこの体の感覚で違和感を覚えなかったりバランスを崩したりしない。

僕の意識はこの体を僕自身のものとして認識しているということ

……なのかな。

だって、すべてのサイズが違うんだから転ぶくらいはしそうだし。自分のじゃない自転車を借りるときみたいなの？

……それだと、少し乗ったら慣れるか。

まちがっているように合ってる気がする例え。

転びそうになったのだって両足がズボンで絡まっていたあの1回だけだし、利き手とか箸の使い方とか普段は何も考えないでしている家電の操作も……踏み台を使わないと届かなかつたりしたにしても特に考えなくてもできたし。

いちいち体を伸ばさないと何もできないのは不便だけど、不便なだけだしなあ。

本気で不便じゃないってのもまた困る。

絶妙な加減の不便さだ。

……ここまでの結論として、考えられる事態としてはとりあえずみつ。

まずは、僕の脳が頭か……今朝からおかしくなって狂っていて、僕がこの姿のこの子になってると思いついてる。

こうしてドライヤーを重いつて感じてるのも髪の毛がなかなか乾かないのも、イスの上に立たないと鏡が見えないちっこい体になってるのも、ゼーんぶ僕の錯覚的な感じで、だ。

それとも実は元から僕はこの姿で昨日までの僕は男だったと思いついてるのか。

無いとは思いつけどいきなり女の子になるよりは現実的だ。

記憶なんて言うのは形もないものだし、最初の考えが「今」狂ってるってことだったら「昨日まで」狂ってた感じ。

こうしていちいち疑問に思ってるあたり、少なくとも今狂ってるとは考えたくないなあ。

……。

……最後は、このどちらでもなくって。

現実に、本当に、リアルで、冷静に僕だけが、僕の体だけが変わってしまったということ。

僕の意識のエラーじゃなくてこの世界のエラーか何かで僕が小さい女の子になっちゃった。

エラー。

呪い。

魔法。

あとは何か。

上のふたつは僕自身を疑うことになるからこっちのほうが精神的にはだいぶマシなんだけど、逆にいちばん面倒くさいことになるという。

だって、姿が変わるなんて。

なんでこの姿になっているのかも、元の体との体積の差はどうなったのかとかいろいろとだ。

そもそも体が変わるなんてひどく非現実的なことなんだけど……なっているもんな、現実に。

今僕の五感が感じていることと思考は正常だって思いたい。

思うと、僕にはどうしようもないって言う現実が襲ってくるんだ。

……………。

……にしても。

もうドライヤーをかけて3、4分は経っているのに髪の毛がまだほとんど乾かない。

いくらぶわーってしてもちよつとずつしか乾く気配がない。

もっとタオルで絞っておけばよかったかもな。

そういえば女の子って温泉とかで頭にタオル巻いてるし、ああするもんなのか……？

◇

あのあと10分ほどかけて髪の毛を乾かし切って、……嘘は良くないな、乾いたって言える程度になって重くなった腕を抱えながら戻ってきた僕は……クッションをおいてようやく使えるようになったイスに正座して乗っていて、机の上で動かしていたペンを置いた。

柔らかすぎて時々落ちそうになるし、今の背丈に合ったイス、用意した方がいいかも。

いや、それを言ったら床に座った方が早い気がするな。

不釣り合いに大きくなったペンを持つていた手をひらくと、ぷんぷんとして印象の指がじんじんしている。

最後の日付が数ヶ月前の、いつも気まぐれで書き始めて何日かでもた忘れる日記帳の見開きをまるまる文字で埋めてばたんと閉じる。

長文を書くのが久しぶりすぎた。

長文って言うほどじゃないけど。

書くこと自体にはそれほど変な感覚もしなかったし、書き方がわからないっていうこともなかったからよかったけど、とにかく疲れた。

書くだけで……なんて言ったらさすがにまずい気がしてきた。

けど、これでいいだろう。

とりあえず記録は取れたんだ。

起きてから今までのことを思い出せる限り細かく書いておいたし、明日どうなっても思い出せるか分かってもらえるかと思う。

これ以上のことなんて起きないとは思いたいけど……起きたとしても、明日の僕か他の誰かが読んだら今日僕に何が起きたのかだけは分かるはず。

理想は、今日1日……いや半日か、まるまる寝ぼけていたとかこれが夢だったという方が楽なんだけど。

理想は理想だ。

だけど、念のためとはいってもさすがにデジタルとアナログの両方で残すのには疲れた。

心配しすぎじゃないかと書きながら思ったけど、頭がおかしくなっただんだとしたらって考えたら残さずにいるのは不安になったしなあ。

あと漢字を思い出せなさすぎたからってのもある。

読めるし頭にぼやって浮かぶけど書けないもどかしさだった。

明日になって読んでみて、訳がわからないことを書いたなって笑えればいいんだけど。

明日読んでみて「昨日は1日中酔っ払ってたのか」って思えた方が

嬉しい。

……しつかし、まさかこれだけを書くので1時間をずっと過ぎるのには驚いた。

どれだけのろのろ字を書いていて……普段書く習慣がなかったかっていう。

学生が終わったらこうなるんだな。

そう考えると学生って偉いもんだ。

キーボードが大きくて打ちにくかったけどタイプした方は10分そこらだったし、やっぱりパソコンは偉大だ。

今となつてはスマホの方が早いかも知れないけど……。

日記くらい、手書きでつけた方がいいかもな。

せめて、これからは。

将来、仮にだけどこかで働くときとかには必要に……、いや、ないな、きつと。

やっぱり必要ないな、うん。

まあいいや。

細かいことを考えるのは。

「……くあ」

さつきからペンを持っていたところは痛いし、あくびは止まらないし。

寝よう。

ベッドに身を投げ出すようにして飛び乗ると思ったよりも弾んで落ちそうになってひやつてなる。

……あー、体重も見た目に比例して軽いのか。

こんなことで床に落ちこちてケガでもしたらどうしようもない、気をつけないとな。

……それにしても眠い。

体が変わるなんていう一大事でただでさえ普段使わない神経を使ったのに、さらにずっと考え続けたせいで頭が疲れ切っている感じ。

面倒なことなんてずっと考えないようにしてきたのに……まさか

……あ——……。。

そう思ってたついた僕のため息は、声なんか出していないのに……どう聞いても小さな子どもの口から漏れてきたものだった。

3話 現状把握と今後の模索 1 / 2

両手で胸を揉んでみる。

.....。

これが胸っていうもの？

否、ただの脂肪だ。

それも男とおんなじ。

だって幼女だしな……けども、人種的な差異と個人差とで決めつけも行けない。

ひよつとしたらこの見た目で実は中学生くらいかも知れないんだし。

10歳を過ぎているんだったら、可能性はある。

だから揉んでみた。

もちろん肌越しに。

つまりは直接にだ。

今の僕はこの体に入っている意識なんだから事案とかじゃない。

だけど残念なのか安心なのか……弾力は確かにあるけど元の体のそれと違うのかどうか分からない。

昨日まで男だったんだから昨日までの僕の男の胸なんて当然に揉んだことがない。

だから分からない。

言うまでもないけど僕以外のは男女問わずに触ったことすらないからもちろん分からない。

.....。

胸。

あると言えばあるって言えなくもない感じ。

逆もまた然り。

見た目相応に服を着てしまえば傍目にはわからないくらい的小ささだけど、脱いで触ってみれば男だったときは違う感触が手のひらに伝わってくる……気がする。

辛うじてあると言い張ればあるけど無いと言われれば無い……気がする。

ぜんぶがぜんぶ経験値が足りなさすぎて判定不可能……そんな感じだ。

まあそもそもこの体に第二次性徴が来ているのかどうか微妙だけどな。

見た目的に……だけど特に女の子の成長は個人差があるって言うから。

いやいや。

でもやっぱり。

そうして堂々巡りだ。

どうせなら手のひらに吸い付く……とまではいなくても手のひらに収まって揉み応えのあるサイズは欲しかった気がするな。

どうせ女の子になったのなら実感してみたい。

その願いは贅沢なのかどうか。

失った分の体積を胸部に欲しかった。

そんなことを思いながら僕は風呂場ですっぱだかになりながら自身の胸を揉んでいた。

目の前の鏡には……全裸で胸を揉もうと努力している、銀色に近い長髪と眠そうな目を向けている幼女が映っていた。



さて。

体が変わってしまっってから一夜明けて逃げ道がなくなっちゃった。昨日と違って早く起きたけども昨日と状況は変わっていない様子。

ぺたぺたともちもちになったほっぺたを揉んだり撫でたりしながら考えてみる。

……戻ってない。

とりあえず夢じゃなかったのは分かった。

目の前のものみんな大きいままだしな。

もう慣れたけど。
慣れつつすごい。

昨日からさらに状況が悪化……たとえば角とか尻尾とかが生えていたりして人間の枠を超えたり、誰か知らない人や生物が目の前にいたり、そういつた空想の世界でしかありえないことが起きていないのかさらに幼くなったたりしていないのは喜ぶべきなんだと思うけど。体が変わったことに変わりはないさそうだし、少なくとも今日はこのままだろうことを嘆くべきだろうか。

にしても顔の油が浮いてない。

寝起きなのにな。

不思議な気分だ。

ほっぺをつまんでみてもむにーつとしてるだけだし、おでこに至っては……さらさらだと……!?

そういえば子供のころは顔もすべすべだったなって思い出す。

中学までは顔を洗わないでいたって風呂の1回だけで済んでいた気もする。

若さ……この場合は幼さか、っていうのはすごいな。

おとといまでの僕の幼いころがそういう体質だったのかどうかは分からないけど、今の体は洗わなくていいらしいのが分かった。

楽なのは良いな。

楽なのは良いことだ。

と、いつまでも顔を触っていたって仕方がないから体を起こしてもういちどだけ全身が戻っていないかチェックして、見間違えてたとかいう都合のいいことが起きていないっていうのを再確認。

ふうつとひと息で気持ちの切り替えだ。

さてきて。

変身してから2日目にして改めてこう……心にずっしりとくると
うか結構こたえるものがある気がする。

なにしろ昨日のは夢じゃなくなつて完全に現実のことだと分かちやつて。

僕は使い慣れた体を失って代わりに見知らぬ少女の体を与えられ

て……元に戻っていないくて。

ベッドでごろ寝しながら見た限り、スマホ越しのネットでもやつぱり世間では何も起きていない。

当たり前か。

……………。

今さら科学的とか考えてもしようがないからとりあえずで浮かんだ考えに任せる。

僕だけか、あるいはごく少数……何人かの人間だけがこんな目に遭っているかも分からない。

それとも何だろうか、曰くありげな人形とか山とか神社とかそういった伝奇物でありそうな厄ネタが……創作ではなく実際に起きるものが僕に憑いたりしているのか。

そういうのつてだいたいは無自覚なのがまた恐怖を誘う。

……怖いのは嫌だなあ。

ホラー耐性はないからせめて洋風に魔法とかいった雰囲気のものの方がいいんだけど。

なんでポルターガイストって聞くとそこまで怖くないのに幽霊って字を見るだけで怖いんだろうな。

こういうことを考えているとどんどんと気持ちが悪くなって親戚のおじさんに「仕事はまだ決まらないのか」って聞かれるときくらいの重い感じが体の内で広がっていく。

知り合いに聞かれても知らない人に聞かれても嫌な「お仕事は？」だ。

あ、想像しただけで胃がきゅってなる。

ニートは精神力がないと務まらない。

耐えよう。

耐えた。

昨日考えたときは驚いていたというのものもあるけど……起きていたって言ってもたったの数時間だったし。

やっぱり寝るまでは頭の隅っつていうより意識のほとんどでこれは現実じゃないって考えていたんだろう。

「寝て起きたら元の体に戻っているかも」とか「そもそも全部がよくできた夢とか明晰夢」とかそういう風に……さながら映画を見ているときのような気持ちで思っていたんだろう。

現実感がなかったとも言える。

すぐに適応できる便利な精神構造はしてないもんな。

僕の心は限りなくめんどくさい自負がある。

こんな、あの有名な「変身」みたいな超常現象……いや、アレと比べると天国過ぎるけど……に遭遇したとは言っても、いくら急がないといけなかった理由がなかったとは言っても……ちよつと樂觀的すぎたかもなあ。

仕方ないんだけど、これはいわゆる正常性バイアスというもの？

自分だけは大丈夫、何とかなるって根拠もなしに無意識に思い込んじゃう、あれ。

まあ、虫とかにならなかつただけマシか。

虫と少女とじゃ周りの目も僕自身の気持ちも果てしなく変わるもんな。

物理的にも生物的にも存在的にも。

肉体、見た目も……おとしまでのどこにでもいそうな平均的な男からは考えられないほどに良いものになっているんだし。

僕自身は美醜にさほどこだわらないとは言っても悪いのと良いのと選べるなら。

そういうことだ。

……ちつこくて不便だけだな。

「はあ……」

せめて幼くなっていただけならだいたいぶマシだったんだけどなあ。

男で昔の僕の顔、つまりは父さんと母さんが程よくブレンドされた顔つきだったら弟とでも親戚とでも言い張ってもおかしくはない。

けど、今の僕は……。

……。

どーしたもんかなあ本当に。

突然のピンチに襲われたときに冷静に対処できる人とパニックに

なる人と現実逃避する人って感じていろんなタイプの人がいるとは知っていたけど、僕はもうやら冷静に現実逃避するタイプだったらしい。

「変身」とかいう差し迫った危機とかじゃないものだったけど、ともかくそういうのに遭遇して一晩寝てから改めて考えてみるとそうなんだと思う。

知らなかった。

知るわけないか。

まあ命の危険とかもこの社会じゃめつたにないし、強いて言えばあ
のときも……いや、それはどうでもいいか。

あれはもう相当前のことだし、こういつた想定外なことってずっと
なかったからすっかり忘れてた。

じゃあ、僕がこれから取るべき行動は……。

……………ん。

尿意。

そうか、確か女性は男よりもトイレが近いんだっけ？

ましてや子どもだし。

昨日はそれどころじゃなかったから気にしなかったけどそういえ
ば昨日もそうだった気がするし。

……ついてないから、短いもんなあ……。

昨日トイレで何度となく目にした、消失しちゃって目にできなく
なったあそこを思い浮かべる。

つるつるのあそこを。

……嫌だけど、やらかさないうちに起きてさっさと済ませておく
か。

違和感がないとはいってもまだ少ししか使っていやいやいやいや
語弊と誤解がある。

まだ半日しか過ごしていない体だからどんな間違いが起きてしま
うのか未知数だし。

すつきりしたら今日からはまじめに今後の対策を考えないとだ
なあ……。

「はあ……………」

凄く。

とても非常に、めんどくさい。

◇

よし。

必要はなさそうだったけどいつもの調子で顔も洗ってご飯も食べて洗濯も軽い掃除もして、普段通りの朝が来た。

体の動きっぷりは激しかったけどやったことは変わらない。

習慣ってそういうもんだ。

さて、僕はこれからこの姿で動く必要があるみたいだ。

少なくとも、なったときと同じように突然に戻ったりするまでは。

変わった原因はまだって言うか分からないままかもしれないけど、

まずは長期戦になるって想定で動いた方がいいだろうな。

今日明日あさつてに戻れる保証もないし。

最悪を想定しておくに越したことはないもんな。

いつも通りに、ほっとひと息つくためのコーヒーを煎れる。

冷凍で常備してある豆をゴリゴリと引いて専用のヤカンでお湯を

回しながら蒸しつつ煎れるやり方が好きだ。

……足元に引きずってきたイスがないとこれすらもできないけど。

軽くて倒れない踏み台に使えるようなもの家にないかな……？

別の体になったからちよつと不安だったけどいい匂いって感じる

コーヒーの香りにほっこり。

……けど、意識だけがそのまま体だけが変わるっていう非現実的な現象の変身。

この元凶が魔法か超能力か……隠された何かが目覚めたとかそういうものかはわからないけど、仮にそういうものだった場合には僕にはどうしようもないし対策なんてできないから保留。

今できるのはあくまで僕が思いつける、現実的な受け身な行動しかない。

それに、映画やマンガとかの受け売りでこう考えてみるけど、もしそういうものだったとしたらそういうもの……ややこしいな。

うん、とりあえずで「魔法」でいいか……魔法に縁のある何かしらからアプローチとかがあると思う。

だって僕の身に起きているのは性別が変わるのと美形化……そして、若返り。

若返りだ、若返り。

それも十数年の。

もし他にも何か魔法の力的なものに目覚めているんだとしたら、なおさら放つてはおかれないだろう。

それがいいことか悪いことかは分からないけど、それは僕にはどうしようもないこと。

気にするだけムダなことだ。

ともかくそういうのが一般人のただの男に起きたんだ、きっと発見され次第に我先にと押し寄せてくるだろう。

昨日の夜はぐっすり眠れて本当に良かった次第。

ま、こういう特別な力って力を使ったときに感知されるって相場だし現実的に考えてみても実際にそうだろうから、僕が使えるようになるまでに多少時間がかかるかもしれない。

……けど、どちらにしても僕はそれまで待てばいい。

っていうよりは待つしかないからただこうして家の中で待っている方がいい……って思う。

僕はただ適当に、いきなりびっくりさせられるのだけを我慢すれば良いんだ。

……………。

……映画とかだとシリアスさを出すために連れて行かれてひどいめにあったりする可能性も充分にあるんだけど……今考えてもしようがないし怖いだけだし、なにより避けようがない。

なんかじくじくする。

あー、やだやだ。

嫌なことを思いついちやった。

だから暴力描写のある小説とか映画は苦手なんだ。
そこだけカットしておいてほしいっていつも思う。

砂糖とミルクをいつもよりも少なめにして少し苦くしたコーヒーをすすりながらしばらく、ぼんやりとテレビを流し見る。

……テレビの向こうはいつも楽しそうでいいな。

もちろん僕には想像もできないような過酷な世界ではあるんだろうけど。

人気商売の弱肉強食とか僕からはいちばんに遠い世界だからな。

ちかちかとする光と音で、だんだんと落ちついてくる。

するとさつき考えていたことが映画や小説とかの空想上のもので、そんなものが一切ないっていう可能性のほうがずっと高いっていう

……ある意味でもっと恐ろしい可能性にたどり着いてしまう。

つまり。

こうなっているのはこの世界で僕、ひとり。

同じ目に遭っている人が誰ひとりとしていないんだから誰にも理解されないし、たとえ理解されたとしてもどうしようもないということ。

そうなるって僕がこのまま一生戻れない。

そんな可能性もかなり大きい。

現実には小説より……って言うんだし。

こんなに幼くても、幼いからこそ逆に数年待てば成長して大人にはなれるだろう。

大人の女性っていうことにはなるけどこのまま小さいままってことは……さすがにないよな。

さすがに。

ないよね？

……。

……不老不死系統の話ってものすごく嫌な感じしか……これ以上は止めておこう。

もっと現実的で、今考えておかないといけないことについて考えよう。

そう思っても僕の思考はすぐに映画とか漫画とかの展開の方向に引っ張られがちだった。

そう思わないと、そういうご都合がなんにもないっていう悲惨な未来しか浮かばなかったから。

3話 現状把握と今後の模索 2 / 2

個人情報、マイナンバー、戸籍、権利関係、銀行口座……そのほかいろいろなもの。

今後僕がこの姿のままだと仮定した上で障害となり得る「僕という人間のデータ上の要素」。

昨日までの僕にはきちんとしたそれらがあつて、一応だけど大学卒業とそのあとの時々のバイトの経歴くらいはあつて。

血縁金融関係も履歴もなんの変哲もない……普通の、今の時代によくいる成人男性としてのものが揃っていたんだ。

まあこの経歴だと「きちんとしたもの」って言えないかもしれないけど。

ニートだし。

いや、ときどきバイトするからフリーターかな……聞こえはそっちの方が良いし。

夢を追ってますって感じがするし。

夢なんて寝てるときしか見ないけど。

「働くのがだるかったので」とか言えば特に不審には思われなくて理解だけはしてもらえる、そういう情報。

このご時世だしひとり暮らしの男ならその辺にいくらでもいるだろう情報。

その辺にいる目立たない男だったからそれで良かったんだ。

いざというときの切り札「両親が亡くなったショックで鬱になっていたので……」っていう嘘だとは言えない言い訳があるしな。

実際そうとしか見えない経歴だし、これ言うと空気が重くなるけど誰でも1発で黙る僕のとっておきだ。

死んじやった人たちをダシにするのもどうかって思うけど、これくらいはいいよね。

悪いことを言っているわけじゃないんだから、……だよな？

ともかく父さんたちのおかげでそれなりの貯金とか引き継いだ土

地という資産もある。

ニートには過ぎた遺産だ。

鍛えてはいないどころかモヤシもいいところだけど引きこもりではないレベルには健康で、病気も何もない健康に近い成人男性としての体も持っていた。

これだけあったから、たとえ急に何かがあってもつぶしはいくらでもきいた。

僕だってバカじゃないし、いちおうその程度は考えた末にニートになっただから。

この世界はお金がなければ生きて行けない。

無かったらニートしてないでどっかの会社員してただろう。

あったからこそ、こうして立派にニートやってた訳だけど。

……だけどそれから一夜にして一転して困ったことになった。

この幼女の姿の僕は……この顔的にも親類縁者はなしだし、もちろん戸籍も学校に通った経歴や通院記録、その他もろもろ一切合切なし。

名前も考えたけどめんどくさいから止めた。

呼ばれてとっさに反応できなかつたら疑われるだろうし。

……そういえば、いくつか虫歯を埋めたあとのある歯はどうなっているんだろうか？

あとで確認しておこうかな。

いやいや、それはあとでだ。

それは今はどうでもいいんだ。

とにかく、どこの記録にも書類上でもデータ上でも町の監視カメラ上にも、すべての記録の上で存在していなくて存在するはずのない人間ということになってしまう。

ましてやこの見た目、確実に目立つしいちど見られたらまず忘れられないだろうし。

このまま警察や病院に行くか電話してすべて正直に話しても、子どももいたずらか嘘つきな子どもか、それとも家出少女……幼女の戯れ言としか思ってもらえない。

この歳じゃ家出つてならなくて「早く帰りなさい」だろうけど。どれだけ僕の言うことを信じてくれたとしたって、間違つても以前の僕と同じ人物だとは認めてくれるはずもない。

普通に考えるならそうなる。

常識的に人は別人にならないもの。

マンガとかじゃないんだしな。

悪い方向に転がると……そのまま身元不明つてことで保護されちやつて帰れなくなつて。

あちこちをたらい回しにされて、親がいなくて……孤児院的な施設とか精神病院に預けられるだけ。

正直そこまで悪い扱いじゃないだろうけど、まず間違いなくここには戻つて来られない。

だって僕がいたつていう証拠がどこにもないんだし、僕が嘘をついていなくて嘘をつかされていないなんていう証拠は、僕以外に誰にも持てないんだから。

これが情報化社会か。

いや、昔でも身寄りを保証してくれる人がいなければこんなものだろう。

と、いうことは。

よほどのことがない限り公的機関からの支援は受けられないだろうし、そもそも見つかったらアウト。

だって家出か捨て子扱いだもんな。

子供には親がいるのが当たり前。

その親が物理的にいないんだからどうしようもない。

せめて数年は年上の外見ならつて何度も思う。

本当に、切実に。

せめて普通のどこにでもいる女の子って感じならごまかしようもあるつて言うのにな。

欲を言えばおとしまでの僕と同じ成人女性なら「性転換手術しました」も通せそうだし。

……………。

………一応、念のため、万が一に考えておく。
今ぼつと思いつける最悪のシナリオは、こうだ。

どうにかして警察に見つかって保護されて、拉致監禁の被害者とか
不法入国の捨て子だとかネグレクトって決めつけられて。

しかも住んでたって主張するのはここだから………これまで住んで
いたこの家から突然に姿を消した元の成人男性の僕が、犯罪がバレて
逃げたって決めつけられて。

今の僕はこれまでのすべてを手放すことになって、おとといまでの
元の僕の風評的には最悪の「幼女拉致監禁事件の犯人」としてすべて
を取り上げられて………僕と母さんたちとか親戚や卒業はしたはずの
学校にまで汚名だけを広げて残して消える、ということ。

絶対卒業アルバムとか誰かから入手するんだ。

それでそんな風に見えなかったって言われるんだ。

普段はあまり話さなくて友だちがいなかったって。

お昼の時間帯にテレビをつけっぱなしにする僕は詳しいんだ。

………。

………これは考えすぎだって思うけど、もしそうなたとしたら今の
僕は不便になるし元の僕は不都合になるし………なにより僕を育てて
くれて残してくれた父さん母さんに申し訳が立たない。

あと親戚のおじさんとかにもすつごく迷惑かけちゃうよなあ。

だって、まず連絡が行っちゃうのがそこだし………ああ。

「はあ——………」

こんな状況なのに、なんでため息は無駄にかわいく感じてしまうん
だろう。

僕の口から漏れてきた声に少しだけ癒やされたけど、でもどうせ考
えておくなら今のうちって………思いつく限りの最悪のケースを想定
してみたせいで思いつきり落ち込む。

凹む。

めり込む。

季節のイベントのたびに「これはテレビとネットの外だけの話で僕
にはまったく関係がない」って実感するときくらいに凹む。

同世代が出世したとか結婚したとか子どもが何歳になったとか、そういうことを耳にしたときくらいにやけ酒を飲みたくなる。

「あ——……」

……ため息しか出ないな、ほんと。

……。

……数年。

何年か。

数年だ。

10年には届かないけども長い時間。

いくら今の肉体年齢が幼いからといっても、これだけの時間が経てばさすがにどれだけ幼い顔つきだって成人しているとみられるくらいの年齢になるはず。

最低でも成人……いや、大学生くらいで充分だよね、そんな姿になるまでの時間が必要だ。

それまでのあいだ、どうにかして人目につかないようにして生きていく必要がある。

もし元の体だったらあと10年くらいは余裕だし、もともとニートのままのつもりだった。

今まで通りにほとんど家にいて、気が向いたら外出をする生活をすればいいだけだったから。

読みたい本とかマンガ、見たい映画やしたいゲームなんか探せばいくらでもあるし、現に消化できないものが山積みだし。

最低限のものがあれば手にあるものだけでも余裕だった。それで満足できるからこそこういう生活してきたんだし。

大学卒業後の引きこもりを除けば何年間のニート生活よりも、ほんの少し長い時間だけ。

だけど、この体だと行動がかなり制限されることになる。

今の僕はどう見ても小学生の外見だから、服装や口調でがんばってもせいぜいが中学生。

近所づきあいほとんどないけど会ったらあいさつくらいはする顔見知りは何人もいる。

お隣さんなんかは僕の昔のこととかまで知っているし。

長年一人暮らしだと分かっている男の家に……高く見積もっても女子中学生が出入りするようになるのが目に入って、ちよつとでも不審に思われるようなことがあった時点で、たぶん、終わり。

最初にお隣さんからのお巡りさんで申し訳ないだ。

最近は特にそういうのに敏感な世の中だしこればかりは考えすぎということもないだろう。

もしかしたら「親戚です」であつさり通るかもしれないけど、これは希望的すぎる。

そんなにあつさり解決できたら苦労はしないんだ。

……今僕にできるのは、とにかく慎重に行動してなるべく興味を持たれないように過ごすこと。

あとのことは、そのうちに思いつくだろう……たぶん。
……

「……………ふう」

真剣に長時間考え続けるなんて慣れないことをすると、とつても疲れる。

しかも思いつきりネガティブなことだし。

ここ最近は何単位で同じようなことしかしてこなくて同じようなことしか考えてこなかったから、脳にもものすごく負荷がかかっている感じがするし。

……そういえば、脳みそはどうなっているんだろう？

サイズ的にどう考えても縮んでいるはずだけど……すでに記憶とか知識とかが欠けていたりなんてするはずないよな、まさか。

そのせいで何かに気がついていなかったり、忘れていることにさえ気がつけなくなっていたり……？

……………

席を立……下りてもう一度きつきと同じ動作をして2杯目のコーヒーを煎れて落ちつこうとした。

だめだった。

僕は僕自身をだませなかった。

煎れる両手は冷たく震えているし、コーヒ―は苦いだけで口の中に渋い感じが広がるだけでどうしようもない。

血の気が引くつてのはこんな感じだったか。
つらい。

テレビの、CMのあいだの1、2秒の黒い画面にぱつと映る僕がしている顔も心底嫌そうな表情だ。

幼くてちよつと眠そうな顔がうげーって顔をしてる。

……子どもは顔に比べてブーツが大きいから表情がはつきりと出るんだな。

気をつけておこう。

本気で嫌そうなのが誰にでも分かるくらいだし。

……………。

さて。

このまま考え続けていたら頭も心も……引きこもっていたときの終盤みたいにおかしくなつちやいそうだ。

もうおかしくなつている可能性も多分にあるんだけど、それを確かめるすべは。

……………。

それを、僕がおかしいかどうかを確かめるために、まず始めにしないといけないさそうなのは……。

思いついた「最初の確認」と、それができたらご近所に見られたとしても女の子ではなくせて男の子供だつて見せかけるための服装。

理想は髪の毛も隠して黒髪黒目の少年つて錯覚させたい。

そのためには外に出なきゃならない。
なんてことだ。

メジャーとかないから身長も分からないし、子どもの服のサイズなんて分からないし。

服だつて普段から適当な店で店員の人に勧められるままに買っているから見当もつかないし。

理想は通販なんだけど……返品交換を繰り返すのは出かけるだけよりも面倒だし。

あと時間もかかるし。

いや、時間は無限に近くあるからいいんだけど今は急ぎだし。

そもそも受け取りはともかく返品が積んでいる。

この世界は対人恐怖症にはつらい仕組みなんだ。

昔の服でとりあえず形にはなってるけど違和感がすごいし。

だから外に出なきゃならないんだけど。

「……………むー」

この状態。

お下がりを着た小学生つて感じの姿で外に出なきゃならないのかあ。

あー。

はあ……だるい。

このまま何も考えないで二度寝したい。

でも、出たくないけど出ないと手詰まりなんだよなあ……。

それが分からないわけじゃないし無視して平気でいられるほど凶

太い神経をしていない。

だってニートだもん。

……生きるって、めんどくさいこと。

この上ないんだな。

4話 敵情視察と偽装工作 1 / 2

僕は踏ん張る。

絶妙な開閉のバランスを意識するのがポイントだ。

まだ開かないらしい。

もうちよつと。

……結構緩めたつもりなんだけど……そろそろかな？

……あつ。

緊張がほぐれて温かくなる快感とともに、しゃあああつと……勢いのある水の音がお股の下から響いてくる。

男のときとは明らかにちがう放尿の感覚だ。

……慣れないなあ、この感じ。

なんでトイレのたびにこんな緊張感があるんだろ。

何かと戦うような壮大な緊張感。

我慢するのは今まで通りの感覚なんだけど……いざ出そうとするときと出しているあいだの感覚。

あと終わりの感覚も違う気がする。

なんていうか体の内側から出すような、後ろと同じよう……でもない不思議な感覚だ。

我慢しているときの締める感覚は同じなのに、開くつていうか緩める感じが違うからかな？

前は特に意識してたわけじゃないつてもあるけどいまいちこの感覚が掴みきれないんだ。

あと……音がやばい。

なにがやばいってものすごく響く。

かといって水圧を落とそうとしても落としか方が分からない。

オンかオフしかできないとかダメじゃんか。

男のときは途中で止めたり弱くしたりできたのになあ。

だから男だったときには想像も出来ない激しい音がトイレ中に響き渡る。

水面にトイレットトペーパーをけっこ敷いてもこれだ。

勢いのすごさがすごい。

敷かなかつたらもつとひどかった。

わざとしているのかと思うくらい。

女性用トイレには音姫なるものがあるらしいけど……その存在理由を実感するハメになるとは。

神経質すぎるだろうって思っていたのが懐かしいくらいだ。

小学生じゃないんだし何もトイレでそこまで……って思ってたけどそうじゃない。

この音がつつぬけて考えたら誰もトイレしたくなくなるよなあ。そんなどうでもいいことが何度も頭の中を行き交う。

女体の神秘をこんなところで感じるなんてっていう気持ちと一緒に。

「……………」
勢いが収まって、しんとするトイレ。

終わったらしい。

……分かりやすすぎる。

からからと少なめにちぎって、そつと当てる。

「……………」
あと……拭く感覚だけは他のほとんどで違和感がない中で音の次に、どうしても慣れない。

ちりつてするからびくつてなっちゃう。

敏感すぎない？

女の子のお股って。

「……………」
トイレから、足の着かない地面に上手に飛び降りてパンツを穿く。びったりしっくりこないけどしようがない。

そうして僕にとって大きすぎる便器を眺めながら思う。

……飛び出していたのって、よくできたしくみだったんだなあ……。

もう失った貴重な存在へ、すーすーする感覚と一緒に想いを馳せた。



今着ている子どもものの服をしまっていた周りは、とつくに空気が入り込んで引っぱり出すしかなくなっている、ただのビニール袋と化した圧縮袋たちに囲まれている。

奥に引つかかったりして出すのがものすごく大変だったから、こんなことになるならはじめからふつうにしまっておけばよかったと思っただけ……押し込んだ当時はこうなるって予想できなかったからしょうがない。

全身を使って全身の装備を調べたら後片付けも大変になっていた。

なんていうことだ。

けど、この惨状。

大掃除……もう何年もしていないし、今年はしたほうがいいかもしれないな。

………あ。

でも、この体で？

このリーチも低いし力もない体で？

………。

両手はホコリと汗で黒くなっているし、周りにふあきつと広がっている髪の毛は服の繊維やらほこりやらにまみれてるし結構きれいに光っていた銀髪って感じだったのがすすけたねずみ色になっているし。

ちよつと動きたびに息が上がるから座り込んだし。

脚立とかイスとかをたくさん使うとしてもかなり大変そうだし

………なによりもめんどくさいし。

やっぱいいや。

必要になったときにしよう。

僕はそのりと起き上がると目当てのそれを漁る。

……こうしてもう1回、めつたに入らないから古い臭いしかししないこの部屋に1時間ほど籠もっていたのには理由がある。

さつき思いついちゃった、公権力に身バレしてからの保護というシナリオを回避するには、できるだけ家から一步も出ないでカーテンも開けずに引きこもるっていうのが確実。

だから不要な外出はなるべく避けるべきではあるんだけど、確認しておかないといけないことがある。

……ん、体が小さいって便利かも。

タンスの奥だっかがめば入り込めるしやたらと暗くてもよく見える……というかメガネすらいらないだった……だし、かなり細いすき間にでも腕が入るから小さいことをするのはこの上なく便利だ。

もつとも、何をするにしても髪の毛が引つかかったりして邪魔だし、こういうこと以外ではやっぱり元の背と腕と脚のサイズが理想的なものには変わらないけど。

あと、とにかく力が足りない。

ちよつと動くとすぐ頭痛がする。

やっぱり不便だ。

「けほ」

む、埃。

……それはいいとして。

僕が本当に見た目通りになっているのか……つまりは本当は体が変わってなんかいなくて体が変わったんだって僕の頭が勝手に思い込んでいるのかっていう僕の認識の問題。

ややこしいことこの上ないけど、僕が今この目で見ているものと耳で聞いているものが正しいもので信用できるのか……その最後の確認が必要なんだ。

こればかりは僕ひとりで、この家にひとりでいるだけじゃ確かめようがない。

だって、ひよつとしたら僕の体は元のままで、僕の目と感覚が子どもになっているんだっていう思い込みっていうか認識のずれってい

うか、そういうものがおきているだけなのかもしれないから。

そうなると今の僕は昔の服を着ようとしてたぶん着られなくなつて、成人男性のシャツ1枚とかになつている可能性まで出てきちゃうんだけど……さすがにそこまで疑うと身動きが取れなくなるから、まあ、諦めよう。

想像しただけでひどい姿になるしな。

もさい成人男性のそんな姿は誰にも求められていない。

だからこそ外に出れば一発で分かるんだ。

……仮にそうだとしたら外に出てちよつと歩いていたら通報されて警察行き……？

……………。

ま、まあ、幼女誘拐監禁つていうのに比べたら露出なんてささいな問題だろう。

お説教されて頭の心配されるだけで済むんだから……きつと。

普段の素行は悪くはなかったはずだし、お隣さんもきつと「お仕事を探して疲れちゃったんだ」つて言つてくれるはずだし。

たぶん。

そんなわけで、僕の頭がまちがっているのか体がまちがっているのか……どちらにしても救いはないんだけど、だからといって家の中にいるだけだとずっと僕の認識を疑い続けることになつて堂々巡りになるから、これは半分賭けだ。

念のために成人男性でも羽織れるサイズの服を着て、ズボンの下にも運動のときに履くスパッツと短パンを揃えておけば逮捕まではされる格好にはならないだろう、きつと。

……しっかり腰で縛らないと、この姿が本当だった場合には歩いていたらずり落ちて丸出しになつちやいそう。

気をつけないとな。

ご近所さんにひそひそされるのは悲しいから。

引越してできる余裕なんてニートにはない。

噂されるようになってもなんとか根性で居座る必要があるんだから。

と、そんなことより確かこの辺にあるはずなんだけど………つて、あつたあつた。

ボロボロのランドセルなんかと一緒に出てきたのはかつて着ていた、なんの変哲もないシャツとズボン。

「……………」

それにしてもこのランドセル。

黒だし古いけどぼろぼろでもないから今の僕にぴったり……いやいやそれは犯罪だからダメだ。

ランドセルをぺってして本命に。

昔気に入っていた服はぼろぼろで捨てちゃったからあんまり着た覚えのないものが多いけど、今着るのには……ちよつとだぼつとしているけど都心の繁華街の映像とか写真とかで見たことのある、いわゆるストリート系……いや、小学生なのに髪を染めてチャラそうな感じの少年みたいな格好になれるかもしれない。

さすがにシャツ一枚じゃ外に出られないもんな。

だからつて思つたけど……ああいう格好は好みじゃないけど、考えてみたらあまり人から話しかけられたりしなさそうだしいいのかもしれない。

いずれにしても外見が成人男性なのか子どもなのかを判断するだけだから「見たものと聞いたものがすべて都合よく変換されて意識に届く」なんてもうどうしようもない状態になってさえないければ、すぐに分かるはず。

そこまでいっていたら、それこそ正気を失っている訳だから何があつても僕には分かるものじゃないし、どうしようもないし。

胡蝶の夢、だっけ？

そんな感じ。

違うかな？

あまり考えすぎると普段の読み物の傾向的に哲学とか量子学みたいな領域に踏み込んだりやうからほどほどのところで、とりあえずの結論を出さないとな。

仮定と検証は大事。

ともかく外に出て周りの人の反応を見て探るなんてことが、はたして中学以来ろくに……していないわけではないけどしてこなかった僕に出来るのかどうかは分からないし、自信もないけどやるしかない。

ニートだつていざというときには働けるんだ。

ただ意志を持って働いてないだけなんだ。

だから今日僕はこうやって動こうとして。

「……………よしっ」

出てきた服たちを抱えて居間に戻り、換気扇の下で軽くはたいて着られる状態にする。

すんすんと直接嗅いでみたらホコリで咳き込むハメになったけど臭いは大丈夫そう。

口が小さいから「けへけへ」って感じの声になっていたけど。

鼻をつけて嗅げばタンスの消臭剤の臭いと古い臭いが感じられるけど、そこまで近くで人と話すことは想定していない。

部屋に戻ってシャツ以外全部脱いで、ずっとすーすーしていたお股をタイツと短パンとその上のズボンで覆って温まって、上にはもう一枚大きめのシャツと元の体だどびちびちにはなっても着られるだろうサイズのパーカー。

前を閉じれば……うん。

うん、いい。

股の安心感と温かさが全然違う。

もっと早く気がつけばよかった。

なにが悲しくてノーパンで過ごさなきゃならないんだ、20にもなつて。

おかげでふとももの感覚がこそばゆくてクセになりかけたけど、それよりも寒かったんだから。

パーカーの下に被る帽子はふつうの野球帽だけど、サイズが大きめだから特に大人からは直接顔を見られないだろうし、髪の毛はパーカーの下に隠した上でフードを帽子の上にかぶせればどこからどう見ても。

.....

どう見ても.....。

鏡に映ったのは目深の帽子で目元まで隠れて、ぶかぶかで態度の悪そうな子供。

ちよつと腕を組んでみる。

.....不良少年にしか見えないな、これ。

補導だけには気をつけよう。

けど、まあいつか。

この格好は予定通りなら片道だけだし。
と。

ここまで勢いのまま、考えるのが嫌だから手と体を動かしてきたけど.....すでに疲れをかなり感じている。

この2日間でいったい何日分脳と体の労力を使ったんだろう。

ニートは1日1ターンで1回行動だって言うのに働き過ぎた。

どのくらいがんばったか、それすらも考えたくもないくらいに疲れ
ているんだけど.....でも、行くしかないよなあ、状況的に。

今日を逃したら確実に面倒くさくなって月単位で後回しにするの
が目に見えているし。

どうせなら僕のこのめんどくさがりな性格まで変わっていたらよ
かったのに。

いや、そこまでいったらもはや僕は僕ではないのでは.....？

アイデンティティの崩壊。

自己矛盾。

見た目の通りに他人に。

「.....」

いいや、さっさと行こう。

ふだんは1日1ターンでワンタスクって決めているから昨日から
もう余裕でオーバーしているんだけど、今日がんばっておかないと手
遅れになるかもしれない。

帰ってくるまでがんばって帰ってきたら.....1か月ぐらいのんび
りしよう。

春休みだし良いよね。

料理なんかおみんな当分はできあいのものでもいいや。

なんならお腹が空いていないとき無理に食べなくなって良いくらい食欲かもだし……………。

4話 敵情視察と偽装工作 2 / 2

すぐに出られる準備をしておいて3階の窓からずつとスキをうかがい続けて10分くらい。

日の光がまぶしいし暑かったけどカーテンのすき間からぐるつと見渡せるのがここしかないから仕方ないんだ。

人通りって、途切れて欲しいときには途切れないものらしい。

小さくなった手の甲にヒゲが生えてなくなつてすべすべのあごを当てて外を見ている僕。

朝起きてヒゲを剃らなくて良いのは地味に便利だった。

あんな無駄な毛は早くなくなればいいのに。

まだかなまだかなって、明らかに近所の人じゃない人をカウントしなくてもどこかしらからタイミングよく……いや悪くか、次の人が歩いてくるっていうものの繰り返しをじりじりと待っていた。

「……………っ！」

けど、ようやく。

ようやく家の前の通りの左右どちらからも人が近づいてこないタイミングが訪れた。

急いで階段を駆け下り、……ものすごく大股で、さらにはカニのように横を向いて手すりを掴まっつてのったりとした全身運動をしてサングラスを履いて外に出る。

ドアノブの高さとか鍵を回すのとかもいちいち腕を上げなきゃだったけど急いでたから気にならない。

……どれだけ急いでも脚の長さに対して階段が高すぎるから元の体基準だと急いでも急いだことにはならないんだけど、今の僕的にはだいぶ急いだ最速で。

まちがって踏み外してケガでもしたらそれこそどうしようもないし。

病院に行つて虐待とかで通報されなかったとしても実費は痛い。

……っていかどう考えても親がいないと怪しまれるしな、大きな

ケガはできない。

サンダルは当然ながらに大きすぎるけど不良ならファッショント
て言い張れる気がする。

無理かな？

ゴミ出し用の安いやつだけど、さすがに昔の靴までは取っておか
なかったから仕方がない。

歩けないことはないみたいだし。

……かかとを引きずりながらさらに不良っぽい感じになるけど、
しようがない。

ちよつとガラの悪い地域に行けばこういう小中学生はよく見かけ
るんだろうけど、そんなところへいったらこの見た目で絡まれそう
だ。

なんてことを思いながら僕は道の隅っこを急いだ。

階段を今の僕基準で急いで下りただけで息切れしたのには驚いた
けどそんなことで止まる訳にもいなくなつて、息を押し殺しながら早
歩きをすること2、3分。

そこで疲れたからだるんつてしてとぼとぼ歩いた。

哀愁漂う少年のような姿に見える気がする。

ふだん歩き慣れているはずの道が広いし遠い。

いつもなら10分な感じが体感で30分くらい。

ご近所さんに見つかったらまずいエリアを過ぎて大通りに出て
……駅やビルを往復するスーツ姿の人たちがちらほらと見えるよう
になってきてからようやく気が休まつてきた。

ここまで来れば大丈夫だよね。

人が多ければ小学生でも目立たないはず。

子供が1人で歩いていても気にされないはず……たぶん。

けど……あ——……。

無い胸を押さえる。

いや、男のときもおんなじだったけど。

どきどきしてる。

人目を忍んで駆け抜けるっていうスニーキングって映画とかで

ちよつと演技が大げさじゃないのかつて思つてたけど、実際にしてみるとどきどきが半端じゃない。

僕はそんなに強くないんだ。

精神的にも肉体的にも。

普段から人目を意識しないで知り合いとすれ違つても気がつかないくらいにはぼーつとして歩いているから余計に堪える気がする。

外出するときは用事と考えごとだけで頭が埋まっちゃうから体がオートで動くんだもん。

便利と言えば便利だけどうっかり買い物忘れちやつたりするから考えものだ。

けど今はちがう。

顔をじっくり見られちゃいけないってのと話しかけられないようにしなきゃいけないって意識しているのに加えて、慣れない体で慣れない服装だから普段以上に疲れる。

ものすごくどきどきしてる。

.....心臓が悪い。

家の前の道から一本抜けて人が増えてくる広めの道、そして駅前
の繁華街とビル群に近づくにつれて人はますます増えてくるわけだ
けど.....それにしても人、多くない？

.....あ、今日つて確か。

.....

土曜日？

それとも日曜日？

.....どつちかだ。

たぶん。

まあ学生はみんな春休みなんだ、その程度は誤差だからいいよね。
だからか学生っぽい子たちの姿も目立つし紛れられてほつとする。
ま、僕は彼らよりももっと幼く見えるはずなんだけども。

◇

突然だけど不審者っていうのは見れば分かる。

なぜなら彼らは視線と首が落ちつかなくって何かに怯えているか何かを意識しすぎているのがひと目でわかるから。

だから僕は、いや、ほとんどの人はそういう不審者を見たら見なかつたフリをしてさっさと離れようとするわけだ。

……何が言いたかったっていうと。

心を落ち着けて堂々と……視線は遠くを見て目的地を見るかスマホの画面と交互にチラチラと見るかしておいて歩く速度はふつうからゆつくりで脱力して、なにより他人からの視線を気にしないように演技するとわりと目立つ格好をしていても注目されない。

だてに何年も仕事をしないで昼間から適当なところをうろろしたりしてはいない。

今ここを歩いているのはあなたたちとおんなじで目的地のある普通の人ですよって顔をするのには慣れてるんだ。

徘徊というわけではない。

「要は自分はここにいるのが当たり前だ、文句ある？」っていうふてぶてしさが大切なんだ。

普通の人ならそれが普通にできるんだけど、1回でも普通から外れると普通を意識しないと普通の人になれないっていうのが難しい。

これを知ったのは引きこもったあとのことで、一時期の人間不信っていうか視線恐怖症的なのに見舞われていた時期には相当に不審者に近い感じだったんだらうけど……過去のことは振り返らない。

そんな状況じゃないしな。

春休みの真つ昼間っていう繁華街、この辺ではあまり見ないような変なファッションをしている僕と目が合う人たちも多少珍しいものを見たという程度みたいだしひと安心。

目が合う率と感じる視線の数は元の体のときよりもいくらかは多いんだけど……倍程度で済んでいる印象だし問題ないだろう。

僕だつてなんとなくて目立つ人を視線に入れながら歩いてるはずだしな。

声をかけられたりしないんだから安心しても良いはず。

……ただ、そうなんだけどなんていうか……こう。

視点が低いから仕方がないんだけど、こう、かなりというかもものすごく見下されている感がすごい。

背が低いってこういうこと？

急に身長が伸びる中学の頃まではいつもこんな感じだったんだらうか。

まったく覚えていないけどちよつと不快だ。

でも物理的な現象はしようがないから諦めよう。

気にしても無駄なんだから気にするだけ無駄なんだ。

けど、元の……平均とはいっても今よりははるかに大きい体は本当に都合がよかつたんだなあ。

何をするにしてもなんにも感じなかった前の体と何をするにしても何もかもを感じるこの体。

世の中は平均を基準に作られているんだから、しようがない。

◇

ビルのガラスとかでも時々確認するけど、やっぱりそれほどの注目はされていないみたい。

観察の結果はこうだった。

とりあえずは成功……かな？

この、ぱつと見て小学生男子だと思われるだろうと思って用意した服装。

中学生は……まあムリだよなあ身長的に。

ズボンだし顔も髪も隠れているしダサイと思っていたけど、ぜんぶセットで着てみると案外そういうファッションで自然に見えなくもない……かも？

帽子の上から被っているだぶだぶのパーカーとスパッツに膝までの短パンだったもの、それにサンダル。

それが今の僕だ。

ファッションとは縁がなかったからさっぱりだけど、そう思い込ん

でなければ気が楽になるからこれが似合ってるって思い込んでおこう。
唯一の欠点は足。

歩きたびに擦れるし、つま先はずっと力を入れっぱなしじゃないとすっぽ抜けるし……すっごく疲れる。

指先に力を入れなくても別に外れないみたいだけど、ずるずる引きずるのは気持ち悪いから結局結構力を入れるハメになる。

僕自身がそういうのダメだからなあ。

前からルーズな服装でさえなんとなくて嫌だったんだから合わないんだらう。

ともかくこの歩き方は神経を使うからとつても疲れる。

それにただでさえ小さいのにこのせいで歩幅がずっと短くなるし、1歩1歩がゆっくりになるから演技しなくてもぶらぶらのろのろ歩いているようにしか見えないだらう。

しかも背の高い……といっても幼女の身としては中校生くらい子の背丈でもそうなるんだけど……僕よりも頭ひとつふたつ背が高い人の先がまったく見えないせいで視界が極めて悪い。

そうしてほとんどの人は僕よりも背が高いことになっている。

こういう視界に慣れていないっていうのもあるんだらうけど、それにしても見えない。

まさしく人垣だ。

なんにも見えやしない。

男でも女性でもある程度の慎重だと……ちやうど股やおしりのあたりが視界にアップで入ってきてすごく嫌な気持ちとちよつと嬉しい気持ちとが交互に来て、これもまた心臓によくない。

意識しなければって思ったけど真ん前に来るんだからどうしようもない。

目の前にぼんぼんって来られたら誰だって意識するもんだ。

あと、背の高い人の持つカバンが凶器なものもこうして出歩くまでは気がつかなかった。

カバンの下がちやうど僕の顔くらいの高さだからなあ。

僕の方から気をつけないと痛い目に遭いそう。

いろいろと気をつけないとな。
特に今日は初めてなわけだし。

………まーこういうのはこの体で過ごすうちに慣れるんだ
とは思うけどさ。

慣れないうちに戻りたいけどなった理由が分からないんだから
しようがない。

………。

それにしても昔……子どものころは、ずいぶん。

………上を。

見上げていたんだな。

こうして頭を上げて。

信号を待つために立ち止まったりするたびに顔を上げて、ビルの上
のほうの看板を見たりその先にある春の暖かい空を眺めながら、そ
う、ぼんやりと考えた。

◇◇

「ふう」

疲れた……。

繁華街を歩いているあいだの春の日差しと着ている厚着と、演技は
していてもやっぱり不安で仕方ないのが続いたせいで……駅ビルの
軽い冷房がかかっている空間に入ると汗が首筋ににじんでいたのに
気がついた。

エスカレーター前のスペースに空いているイスを見つけて座ろう
として半ばよじ登るようにしないと座れないのにも気がついて、そこ
はかとなないダメージを受けてしばし。

……まさか元の体基準で急いで10分くらいの駅前に来るまでで
倍以上の時間がかかって、肉体的にはもちろん精神的にもここまで疲
れ切るなんて思ってもみなかった。

体感はまだがっていなかったらしい。

けどなんかもう足の皮と一緒に緊張と気苦労とで心までがすり

減った感じがする。

この感じ………引きこもりから脱出するためにがんばっていたあの頃の感じか？

っていうかよくこんな状態でがんばれたな、数年前の僕。

それだけ必死だったんだろう。

まあ、あのときはあのままだとまずいっていう強い危機感があったのもあるし今のは靴が合っていないせいもあるんだけど、この体で初めての外出ではあるんだけど……それにしたって、なあ……。

「はあ……」

ため息が止まらない。

乾いてきた汗とともにようやくに整ってきた息を感じながら改めて人の多い光景を観察してみる。

大人と学生と子どもの割合が大体同じという休日特有の家族連れの多い光景。

騒がしいことこの上ないしどこかの子どもが泣き始めたら結構響く響く。

あと素の声大きい人たちの声も。

……イヤホン持ってくればよかったな。

いつもならこういう人混みや電車に乗るときは必ず持ってくるのに。

機械音とかもそうだけど地味にアナウンスの声とかがキツイからな。

それどころじゃなかったからしようがないんだけど。

………あ。

そういえば耳の穴のサイズだって相当違うだろうからこのままだと使えないかも。

覚えておかないとな。

替えのパーツあったかな。

子供用ってのもあるはず……たぶん。

なければ素直に子供用のを買っておこう。

いずれにしても人混みはうるさいしぶつかるしぶつかってくるし

ストレスが溜まるから嫌いだ。

もう少しだけここで休んで体力を回復したら早いところ用事を済ませて、さっさと帰ろう。

こういう活気に溢れているっていうか、たくさんの人が思い思いに楽しんでいるような場所っていうのは僕にはもともと合わないんだ。

外でこうしてわいわいして楽しめる人たちは僕たち部屋でじつとして静かにしていて楽しめるタイプの人間と……種類っていうか種族が違うんだし。

きつと、男と女以上に深い溝があるんだろう。

こういうの、もつと早いうちから分かっていれば学生のとときみたいにムリして知り合いたちと出かけたりしなかったのにな。

おつと、またネガティブが。

いけないいけない。

今は気を抜けないんだ。

あと少しだけ休んだら、いつもシーズン毎に来ている服の店の女性服売り場。

ものすごく嫌なんだけど確認のためもあるし……なにより早くサイズに合って着られる服を揃えないとだから。

5話 出会い未満の出会い その1 1/2

2日目の朝。

ちっこい女の子になったって確定した以上遠慮がなくなった気がする朝。

僕は何なんとなくですっぱだかになった。

小学生女子のすっぱだか。

なんか言葉だけで逮捕されそうな雰囲気。

だけど今は僕自身がそれなんだから大丈夫。

それでお風呂の鏡の前でいろいろなポーズを取ってみる。

「……………」

……………ふむ。

鏡の前にはすっぱだかの幼女っぽい何か。

前の僕がいる状態でこの子がこんな姿をしているのを見られたら1発で社会的制裁だな。

そんなことばかりが頭に浮かぶ。

現代の男って言うのは何かにつけて犯罪者になるんだからしょうがない。

そうは思うけどこの体は僕のものになってるし、それを見たからと言って僕が欲情とかするわけないから割と抵抗はない。

たぶん変なテンションになってるんだろうな。

ぼーっとしてる普段の精神状態の下はきつとあたふたしてるんだ。

だけど目の前の女の子は眠そうな目をしながら凹凸のない体を露わにしている。

目の保養にもならないただの子供だ。

シャツでシルエツトが隠れていたら分からなかったけど、裸になって髪の毛を適当に除けてそれっぽいポーズを取ってみるとこれだけ幼い見た目でも多少は色気……のようなものが出てくる、気がする。

少なくとも男じゃこうはならない感じの。

……髪の毛が体に適当にかかっているほうがそれっぽく見えるか……？

「……………」

……髪の毛がくすぐつたいな、やっぱり止めよう。

肌にちくちく当たるところがこそばゆすぎて笑っちゃいそうだから止めた。

それにしても色気か。

こんなに幼いのにな。

ないはずなのにそんな感じの何かを感じる。

って言うことはやっぱり発育不良の小学校高学年くらいの肉体年齢なんだろうか。

顔つきも体つきもどう見てもずっと幼いんだけど。

でも小学校低学年くらいで……いや、女の子は成長が早いって言うし、もしかしたらやっぱり体から何かが出るのかもしれない。

僕はそういうのに興味がなかったからさっぱりだけど。

ともあれ……なるほど。

起伏のほとんどない体だって、ひねりを加えて横から見れば。

見たことのあるそれっぽいポーズでわき腹がつりそうになったりしながらがんばってみる。

なかでも腰のひねり具合がカギみたいだ。

ふむ。

意外となかなかどうして……。



それから数時間後。

僕は地獄のフタを開けちゃったみたいだって気づいてる。

気がついてから後悔している時間を過ごしてる。

……知っていたじゃないか。

女の人の買い物はやらといういろいろ大変らしいんだって。

だから僕は孤立無援で女性服売り場……と子供服売り場のあいだの試着室。

そこで精いっぱい戦っているんだ。

「お客さまー、こちらの服もとってもお似合いですよっー！」

「よかった、じゃあこれを」

「では次はこちらです！ これまでとは違って少し大人っぽい服装もきつとお似合いだと思うんですよ私！ さあ！」

「でも」

「さあ！」

「いえ」

「!!」

「……わかりました、じゃあ着てみます」

「はいっ！ 今サイズ用意しますねっ」

きんきんとした声が鼓膜を破ろうってしてる。

◇

仕切りを隔てただけのところから声が止まらない。

「お手伝いは本当にいりませんか？」

「いらないます」

「本当に？」

「ほんとうに」

お着替えのたびに何度も聞かれる。

しつこい。

◇

何回か着直したあと。

正直疲れてきたし汗もかいてきたしもうどうだって良くなってきた。

「サイズとか、きちんと測ったほうが」

「合っているので大丈夫です」

「おひとりでも」

「着替えくらいできるので結構です」

「でも」

「結構です」

入って来ようとして手がわきわきしてるのが分かる店員さんから
デイフェンス中。

◇

「……………」

僕はいかにも小学生の女の子が着ていそうな服装を何着も次々と
手渡されて「着ろ」と言われたから仕方なく着た。

いや、実際にはもつと優しい感じ……じゃなくてきやぴきやぴした
女の子らしい言い方で「これもいい」「あれもいい」って言葉で包んだ
脅迫だった。

僕は弱いんだ。

ニートは保護されるべきなんだ。

幼女になったニートはさらに大切にされるべきなんだ。

最初に渡されたままに来て見せて「どれでも合ってる」って言われ
たから、もうめんどくさいし疲れたし、「着ているのでいいや、これに
します」「あとめんどくさいので着て帰ります」って言おうとした。

けど当たり前なんだけど僕は話すのが得意じゃない。

ひとりじつと本でも読んで数日経つことも珍しくない存在。

だから「あ」とか「え」とかをやっと言ったところで次の服を持つ
てこられるのループに陥っている。

ひどいハメ技だ。

けども必死に「結構です」を連発して妨害中。

どさりとカゴが置かれてカーテンの下から滑り込んでくる。

「こちら、置きますねっ」

「……………」

こんもりとした服を見るに、なんでも今度はかわいい系からオシャ
レ系らしい。

女兒向けの服ばかりだったのに文句を言ったからかちゃんと女
の人の……レディースが混じってきたのはいいんだけど。

やっぱり服屋は疲れるな。

めんどくさい。

あとうるさい。

いちいち服を脱いで苦勞してどうにか着て、見せて……なぜかひとしきりいろんな店員に見られて感想を聞かされてから次を催促される。

どうだつていいのに「どうだつていい」つて言う前に「もちろん次のを試すよね？」つて女性特有の圧力で押し潰されそうになつて言うことを聞くがままだ。

僕は弱い。

幼女だし。

男だつたら……この勢いじゃ絶対ムリだな。

僕だから分かるんだ。

とにかくその繰り返し。

時計を見るともう30分は経っている。

なんていうことだ。

お酒を呑むよりも無駄な時間を過ごしている。

こんなことならお酒を呑んでいたかった。

何回大げさに「はあ——……」つてため息をついて「もううんざりしているアピール」をして、もういいですつて分かつてもらいたくても一向に気がつく心配のない店員の人にまたどつきりと服を手渡されて……半分諦めながら僕は何回目かに試着室のなるべく奥に引っ込んだ。

僕は5センチでも良いから他人とは距離を取りたいんだ。

うげ、つて……鏡の向こうの僕はほんとうに嫌そうな顔をしている。

顔が整つてる幼女がすると、それはそれはすごいことになるんだな。

嫌そうな顔をしている女の子が好き、つていう性癖の人をちよつと理解できた気がする。

あ、けど僕がするのは勘弁だ。

「お客さまー、さっきのがガーリーでとてもお似合いでしたので……」
止まらない店員さんの声。

カゴのおかわりが来てしまった。
せめて着替えているあいだだけは口を閉じておいてほしい。

僕は女の子じゃないし、女の子だって寡黙な人はいるだろう。

ああいや、こういうところで働きたい人はきつと話すのが生きがいなんだ。

話していないと死んじゃうだろうな、この人たち。

しゆるしゆる。

僕はこの煉獄から解放されたい一心で着させられた服を脱いで、畳
んである服を開いた。

◇

さて。

時間は遡ること、この地獄から30分くらい前。

駅ビルの1階の広いところで涼んでいた僕。

体力が回復するまですることもないからなんとなく脚をぶらぶら
させている途中で気がついた。

……子供みたいなことしてる。

手持ちぶさたなのを脚でぶらぶらしているだなんて。

確かに肉体は子供になってるけど心は一応は大人の僕は勝手に傷
ついて鬱々として……そのうちに元気になると大きすぎるエスカ
レーターに恐々として乗って、ようやくで何年もお世話になっている
服の店に来ていた。

お世話になっているといっても僕が勝手に服を買ってお店にお金
が行くだけの関係。

ものすごくドライで割り切った関係だ。

わざわざ雑誌を買ってまで服を考えるのもいちいち調べるのも面
倒だから、服が欲しくなったときにそこそこに安くてサイズが合いや
すくて何より安い有名チェーン店のこの店に来て、マネキンをコピー

したり店員さんに流行りを聞いて適当にセットで買うだけ。

でも意外とこれだけでそれっぽく見える格好になったからお気に入りで。

そのときの体に合ってるサイズと流行りの色さえ用意すれば半年くらい戦える。

もう高校生くらいから続けてるし、これまでの人生でそこそのお金は落としているはずだ。

まあお得意さんなんだけどチェーン店だし思い入れはない。

ほとんど会話もしないしすぐに店員さんも変わるから気が楽つていうのはとっても大きい。

相手もどこにでもいる普通の男なんていちいち覚えたりしないしな。

話しかけられるのは服屋の宿命だから諦めているけど、事務的なそれは助かるんだ。

できたら毎回初対面がベストだ。

世間話も初対面のセットを使い回せてとっても楽。

もし店員さんが絶対に話しかけてこなくて目も合わせてこない服屋が登場すればすぐに乗り換えるけど……まあないだろうな。

それじゃ服屋のアイデンティティに関わるだろうし。

それに軽く勧められるのを期待してる節もあつたりする。

押し切られるようにして買うことってわりとあるし。

断れないとも言う。

さて、だいたいどの辺を見ればいいのかまで分かっているなじみの服屋だけど今日は違う。

なにしろ男物……メンズだな、そこへ一直線だったのが女物……レディースとかキッズの中間くらいの服しか着られなくなってるから。

よって、まったくこれっぽっちも分からない。

このお店はもう僕の行きつけじゃなくなった顔をしている。

僕はもうダメだ。

そうしよげるくらいに……来る前は適当に合いそうな服をばばつて選んでばつて帰ろうって思っていたのに、その合いそうな服の見当

がまるでつかなくなった。

どうせ子どもの服だからって甘く見ていたのかもしれない。

よく考えたら当たり前だった。

だって売り場の面積どころかフロアの数まで違うんだから、よくよく考えていたら分かったはずなのに。

僕は途方に暮れるって思いを、旅行先のバスで2時間くらいの僻地に行つて帰りのバスを乗り過ごしてあと2時間くらいなんにもないところでぼーっとしなきゃならないって気がついたときくらいに絶望した。

今までなら売り場に行けばすぐにマネキンとかで流行りがセツトでそろえてあつて、その中から適当に好きなものを選んだりあるいは勧められたりしたのを試着したりして「これ買います」で済んでいたのに……マネキンの数自体がそもそも違うし着せてある服の種類も何もかも。

僕の中から見ても何がどう違うのかぜんぜんよくまったくこれっぽっちも分からない。

なんで女の人の服ってこう似てるようでぜんぜん違うんだ。

かといって棚を直接見てみても男の服のに比べて何倍もあるし。

服の呼び方もなんだかよく分からないカタカナ用語で満ちあふれているし。

ここ、僕が知ってる文化圏だよな……？

そう思つて見回してみる。

値段とかを見ても安くはあるけど知ってるような単語が書いてあつて、でもその見当が皆目つかない。

これはあれだ、単語が分かっても文章になると分からないって言うあの感覚に近いんだ。

二トの傍ら余りある時間で意味もないのに無駄に時間だけは費やしたから語学力はそこそこあるつもりなんだけど、どう見ても単語は知っているけど意味が類推できないカタカナばかり。

おかげで手に取つて広げてみるまでそれがどういうものなのか分からない。

広げてみてもそれがどんなパーツなのか分からない。

……………これとこれは名前も形もちよつとだけしか違わないけど、何がどう違うものなんだ……………？

謎だ。

謎しかない。

この世界にこんなエリアが存在したなんて。

僕は女の子になって初めてぼつかりだな。

こんなことなら来る前にネットで軽く調べたらよかつたのかも。

けど出かける前は外に出るためのこの服を探したりするの精いっぱいだと思うしもしかたからなあ。

家を出るための服を探すのを諦めて素直に通販を選んだ方が絶対に楽だったって気がついたけど、来ちゃったからには買わずには帰れまい。

「…………………………」

じとつとした汗がこめかみから垂れる。

女の子でもこういう汗かくんだな。

当たり前か、人間なんだから。

それにしても居心地が悪い。

完全にアウエーだ。

ここは僕のような人間とは真逆の空間なんだ。

服を探してうろうろしているだけで何人もの店員さんたちから見られているのをひしひしと感じる。

ガン見してくる人までいるし。

男のときは眼鏡のフレームで上手に遮れたけど今は裸眼だ。

そんな逃げ場はない。

なんてことだ。

もう帰りた。

僕の口元はちよつとだけへの字になる。

でもなんでこんなに見られるんだろう。

外じゃそんなんじゃないかなかつたはずなのに。

ダサいからか？

やっぱり服屋で働く人的にはアウトなのか？

オーラの的な何かで分かるんだらうか？

女の人の第六感とかなんとかで。

この格好はNGだったのか。

……まあよつてたかつて話しかけてこないだけマシだけど。

出てけとか言われたら3ヶ月くらい引きこもる自信が出てきたぞ。

マイナスな自信が出て来たから気がついたけど……服のお店なんだからあたりまえなんだけどなんだかふだん来るときとは違う雰囲気。

なんだろう、この空気。

話しかけてくるわけでもなく買わせようと迫ってくるわけでもなく、ただ遠巻きに見てくるだけのな。

「むー？」

そこまで変な格好じゃないはずなんだけどな。

チャライ感じだしダサいけど。

でもぶかぶかだったりぴちぴちすぎる服を着てる人とかに比べたらのはず。

いや、確かにぶかぶかだけどおかしいほどじゃないようにがんばってきたし。

うーん。

分からない。

うっとうしくなってきたからツバを下げた帽子で視線を弾くけど、それにしても不快だ。

僕は人に見られたくないのになあ。

なんなんだろうかこの状況。

ひそひそと居心地がとて悪い。

ひよつとして買いに来ていると思われていないんだらうか？

あるいは………って。

「あ」

あ………。

僕は気がついた。

僕が自分でやったことなのにすっかり忘れていた。

やっぱり僕の頭は家の中でもアレなのに外に出たらさらにダメだ。

「ご近所対策で変装、男装していたんだから一緒に来ている母親を探しているとかあるいは間違っって入ってきてしまった少年とでも思われていたんじゃないだろうか。」

なにしろここは女の人と子連れの間なんだ、そこに男……子供でも、がいたらそりゃあ反応に困る。

迷子と決めつけられなかっただけありがとうってものだ。

男として見られていたのなら、ひとまずこの格好なら家からすぐのところでも通報はされにくいってことで成功。

ひとり暮らしの男の家から少年が出てくるか少女が出てくるかで想像される内容が著しく変わるんだから。

それが人つてもものだしな。

フードに帽子を入れたまま外して髪の毛を肩あたりまで出してしゆるしゆるって口元を隠していたストールも解いていく。

フード付きパーカー+帽子+マフラーじゃなくてストールっていう完璧な擬装で来たのをすっかり忘れてたんだ。

どおりで暑かったわけだな。

春になつたばっかり特有の1回夏みたいな暑さに感じる時期なんだ、そりゃあ暑いだろう。

「……………ふうっ」

息が涼しい。

うん。

さわやかだし圧迫感がなくなった。

近場にある鏡を見てみれば、さつきまでのチャライ格好をした怪しい少年からどう見ても女の子な印象になった。

手にはストールがこんもりでパーカーとズボンとサンダルは変わらずにぶかぶかだけだ。

……髪の毛、肩くらいまでしか出さないと男でも通用するような

……？

前よりも眉間から鼻筋がはつきりしているせいだろうか。

うーん？

そんなわけでもないような……。

ちよつとじつくり顔を眺めるけどすぐに飽きた。

まあいいか。

男か女かなんてのはどうでもいい。

この状態なら大丈夫だろうしさっさと適当な人に話しかけて見繕ってもらおう。

◇

「お客さまー？」

……そう思つて適当な店員さんに話しかけてしまったのが僕の運の尽き。

僕はもう終わったんだ。

女の子になつて2日目にして終わりを迎えている。

こうして、まだ地獄でなかつたころを思い出して浸っているくらいしか心の安寧を保てそうにないんだ。

外からはすぐそばで待ち構えている気配が漂ってくるし。

早く着替えて見せろつて言うすさまじい重圧が。

……もう、お家に帰りた。

だれか助けて。

家の中で虫が出たときくらいの絶望感のせいで心なしか、女の子な僕が余計にちっちゃくなつて見えた。

5話 出会い未満の出会い その1 2/2

時間が巻き戻れば良いのに。

そう思いながら現在進行形で着せ替え人形な僕は、後悔し始めるほんの少しだけ前に意識を飛ばす。

僕は現実逃避だけは得意なんだ。

変装を解いてどうからどう見ても女の子、女児じゃなくて女子って言う存在に格上げしたように見えるようになっただろう僕。

もんもんとどうしようかかって思ってたけどさっさと終わらせようってことで、遠巻きにしていた店員さんの中でもわりとまじめにもくもくと作業をしている人に目をつけた。

接客をしているわけでもないし特別に忙しそうでもなく……ときどきこつちを見ている程度の控えめさが気に入った。

あと、ガワの年齢がいちばん近そうな人っていうのも大きなポイントだ。

今ちようど目のあったその人……子は高校生のバイトって印象。

大学生にしては化粧つ気がないし研修中の札もつけているし。

慣れていなくてもいいんだ、遠慮があるってだけで会話が減るから安心なんだ。

身長もわりと高めで、ウエーブのかかった……かけたのかな、そんな毛先だから髪の毛は縦に長いし、あと体つきも結構凄いいけど静かに越したことはない。

他人の見た目なんてちよつと前までだったらこんな意識することもなかったけど、なまじ視点が高いから近づくにつれて頭上にせり出してくる球体がどうしても意識せざるを得ないものになっている。

普通の男なら喜ぶんだろうな、こーいうの。

醒めた目で頭上の双丘を眺める。

普段の僕なら別になんとも思わなくって視線を素通りしているはずなんだけど、目線に近いんだからしょうがない。

JKって年頃、属性は男なら誰でも好きらしいけど僕はそういうの興味ないしな。

年上にしか興味がないんじゃないやなかったら危なかったかも。もちろん今の僕だから精神年齢的な意味で、だけでも。

……この体だと大半の人が年上になるのか。さらに見下されるな。

そんな悲しい現実を察知した僕は悲しくなったから、それを忘れようとしてその人にさっさと近づいて適当に声をかける。

「えっと、すみません。服を探しているんですけど」

「ひゃいっ!？」

びくってなる。

汗がぶわってなる。

……………僕の方が。

想像していたよりもずっと若い……幼い感じの声、あと、びくってなる程度に大きい声が上から降ってきた。

出会い頭にお互いでびっくり。

なんにも考えないで歩いているとよくそういうのに出会う。

そのたびに僕もびくってなる。

ちなみに今の僕は上を向いて話さなきゃならない。

よって胸と顔が一緒に視界に入ってしまうのは仕方がないこと。

しようがないことなんだ。

わざと見ているわけじゃないんだ、本当に。

やましいところはないんだ。

……………。

おんなじ人間なのに、どうして女性の胸ってこうなるんだろう。原理は理解していてもやっぱり不思議だ。

「あ、あれ……? 女の子……? さっきまでは……」

ぽつりとその子が首をかしげながら僕を見る。

「……ち、ちよっと、接客よ接客!」

ささっと別の店員さん。

「すみません……あれ、えっと、え、私ですか……?」

「できるわよね? 早くしてあげて!」

「ひっ、分かりました!」

あわあわしてるJK店員さんにごそごそしているようでいてけっこう大きな声で入れ知恵してる20代の店員さん。

けどJKさんのあわあわは止まらない。

すでに顔が真っ赤だ。

対人恐怖症的な親近感を覚える。

「……………」

……けど、どうしてそこまであわあわしてるんだろう。

たかが子供に話しかけられたただけだろうに。

いくら僕でも小中学生相手なら平気だぞ？

20代さんがひそひそを抑えない。

こういう風に接客するの、っていうアドバイスがぜんぶ丸聞こえだ。

けど僕は大人だからじつと待つ。

スーパーのレジの新人さんとかを優しく見守るのは得意なんだ。

他人に期待しないからっていうのもあるんだろうけども。

「……………あ、はい、ど……………どのようなものを、おしやがし……………ですか……………」

あうう……………」

噛んだ。

かみかみだ。

服屋の店員としてはちよつとメンタル弱いんじゃないかこの子？

驚きすぎだろう。

見た感じでいちばん接しやすいからと思つて声をかけたんだけど。

人選まちがえたかな。

さつきまで変装していた僕もまあ悪いんだけど、服屋でお客に声か

けられてそこまで驚くものなのかな、普通。

顔、真っ赤にしてぶるぶると震えているし。

子どもから話しかけられてここまで緊張しているのを見ていたら

なんだかちよつと親近感が湧いてきた。

どうやらこの子は僕サイドの子らしい。

……………親近感はいいんだけど大丈夫かなこの子で。

子供相手にここまでつてのは大変な気がする。

まあこんな驚いているってことはさっさきの変装で完全に今の僕だとは思えないってことだから、男装自体は成功してるのが分かって嬉しいんだけど。

まあいいか、さっさと済ませてしまおう。

汗だくになってきているのを見ているだけっていうのも忍びないし。

同じサイドのよしみだ、気がつかない振りをしておこう。

僕は大人だからその程度の気遣いはできる。

ガワはギリツギリ少女な中身幼児だけど。

で、さっさと注文を言っておこう。

こういう人相手には具体的が良いから……。

「あの、とりあえずで今着ているような男っぽい感じのもの……サイズ感は普通で良いです……と、僕に合いそうな流行りの、ちよつとだけ女の子っぽい服を2、3着選んでほしいと思って。あと来たついでなので下着とか靴とか帽子なんかもみんなまとめて揃えたいんですけど。せつかく来たのでついでです」

こくこくこくともものすごい勢いで首を……頭を振っているのを見ながら考えていたセリフを吐き出す。

ふだんはひと月で、長くても合計で10分未満しか人と話さない僕でもきちんと用意しておけば言いよどむことはない。

少なくとも、この子よりは。

みんなはどうしてあんなにぺらぺらと何十分でも考えないで話せるんだろうな。

この子とか僕にはその技能が欠けているのかもしれない。

「は、はいっ……分かりました。……あの、好きなデザインや、あと、その、サイズ、などは……」

ちらつとでかすぎるサンダルを見て「下着まで？」って顔をしながら聞かれるけど、ここは勢いで押し切る。

そのための人選だし。

ちよつと怪しいけどな。

ともあれ堂々しよう。

おどおどしてない体面だけは得意なんだ。

「ふだんは家にあるものか兄のお下がりしか着ないのでよくわかりませんし、最近背も伸びてきたので春のものをまとめて揃えたいんです。必要だったらサイズも測ってもらえますか？」

まくしたてる。

それっぽいいいわけとそれっぽい感じの話しかたで、ついでに分からなかったサイズとかもまとめて知ることができて楽ができる。

もちろん想定通りだ。

「……分かりました！ お持ちするのに少々時間がかきや、かかりますので、こちらの更衣室で、少し、お待ちください！ ……急いで探してき、ます……」

噛み噛みでそう言い切つてどこかへと走って行く店員さん。

ついでにいつの間にかさらに3人ほど寄ってきていた他の店員の人も聞くなりさささと離れていく。

走って行くことはないのに……。

特におかしいことは口にしなかったから大丈夫だと思っただけ。

あ、他の店員さんに聞いているっていうか話しかけられているな。

やっぱり新人さんだったのか。

たぶん働き始めて数日ってレベルの。

それにしても一気に何人かの店員さんが動き出している。

ここの人たちそんなにやる気あったっけ。

ないからこそわざわざここへ来ていたっていうのもあるんだけど……。

ぽつんと取り残される幸せに浸る僕。

こういうのは人に任せてこそしあわせ。

「あ」

そもそもいつも、ここでもイヤホンとかして必要なときだけ僕から話しかけていたんだった。

それで普段と違うように感じるのか。

あとは僕がちっこいからつてもあるんだろう。

女の人は子供に弱いから。

そうしてしばし。

「……………」

すぐに来るかと思っただけならぜんぜん戻ってこなくて待ちぼうけを食っている感じになってきたから適当なカーテンの前に腰を下ろしてぼんやりする。

ちらりと後ろを振り返るとそびえるような高さの全身を映す鏡には……今のところは僕が「入っている」らしい、とにかく色素の薄い外見の幼い女の子。

首を傾げるだけでフードに隠していた髪の毛が少しずつぱらぱらと外に流れ出てくる。

それをしまう。

……さらさらしてるな。

それにしても、やっぱり顔と髪の毛だけ隠して下をズボンにしてさらにパーカーで上半身の細さを隠したら背丈以外の情報は隠し通せるんだな。

思いつきでも案外うまくいくもんだ。

……逆に言うとな今のように顔と髪の毛をばっちりで見られたらさすがに少年だとは思ってもらえなさそうなんだけども。

まあそれは気をつけていればいいし。

フードを被つていれば良いんだからむしろ気が楽まであるしな。

……これからの季節はちよつとだけ大変そうだけど、まあなんとかなるだろう。

理想はサングラスとかマスクまでして完璧に隠れることだけどさすがに怪しすぎるな。

秋とか冬ならまだしも、さらには大人ならまだしも子供だし。

今なら花粉症だということで行けるか……？

いや、さっきので隠し通せていたんだからいいか。

めんどくさいし、マスクは暑くて息苦しいから苦手だし、めんどくさいし。

ともかくこれが年の近い女性から見てもそうだと分かっただけで収穫だし、同時に隠さなければ僕の目に映るとおりの女の子だと……

他人からでも認識されるらしいことも実証できた。

女性服エリアで女の子の服を頼んで「えっ？」ってならなかったんだから大丈夫なんだろう。

たぶん。

ようやく、この体になってからようやくと目で見たとおりの外見になっていることが確定したわけで、残念なようなほつとしたようなものによもによするような複雑な感情が渦巻く。

「男性用の売り場はこちらですよ」ってさりげないフォローで移動させられるのをどこかで期待していたんだけどな。

そう考えると女の子だと確定してしまっただけという表現のほうが正しいのか。

うーん。

嬉しいような悲しいような。

「……………お待たせしました！」

お、ようやく来たか。

考えに沈んでいた意識を戻すと鏡を見たままで固まっていた僕の髪の毛は結構……………というかほとんど落ちて手の甲にまでかかっていた。

くすぐりたい。

……………声と一緒に、また走っている音がする。

別に急いでいるとはひと言も言っていないなかったんだけどな。

仕事熱心なのか生真面目なのかその両方か。

まあ新人さんのバイトなら大半がそうなるのかな？

さてさて、それじゃあ他人から見て僕に合いそうな服はどんなもの。

「………………………………………?」

「とりあえずは、こちらですっ！」

首を戻した僕の目の前にどっさりと置かれたのは、服を持っていたらどうぞといつも渡される布でできた大きい袋の中にみっちりの服。

みっちみち。

それが、みつつ。

……とりあえず？

これが？

えっと、僕、そんなに頼んでない。

「他の者と手分けしてお客さまに似合いそうな服を集めてきました！
サイズも大きかった場合と小さかった場合と両方揃えましたし色
のパターンも揃えました！ さあ、まずはどれにしましょうかっ
！」

頼んでない。

近い近い。

頼んでない。

目の前いっぱい広がる店員さんの顔と胸で強烈な圧を感じての
け反ると、さらに詰め寄せられた。

この子……さつきとぜんぜん違う？

別人じゃないのか？

「着慣れていらっしやると見受けられる男の子っぽいファッションに
しましょうか？ あるいは中性的で、それとも大人びた服装ですか？
それともまずはかわいらしい服を試してみますか？ さあ、いかが
なさいますか!？」

「……………」

離れて。

だから近いって。

ぐいっとアップになるその子の顔は、なにかとても素敵なものを見
つけたみたいな表情になっていて、走っていたからか少し紅くなつて
いる。

けど、違う。

そうじゃないんだ。

そこまで気合入れて欲しいって言ってない。

適当なものをセレクトして欲しいのに全部持ってこられても困る。
いきなり過ぎる展開で僕の口も頭も追いつかなくてフリーズして
いる。

いくら準備すれば人と問題なく会話できる僕だって準備していな

ければムリなんだって。

あと、やっぱり近すぎるから離れて欲しい。

近づかれすぎると考えるどころじゃないんだって。

パーソナルエリア的なそれに入って来ないで。

僕は弱いんだ。

……でもこの感じ。

どこかであつたような？

……。

……ああ。

この強引な感じは昔、母さんが服を着せてきたときと同じパターンなんだ。

……だつたら、きつと。

一切の抵抗は無駄なんだ。

だから。

「予算に収まるなら何でもいいです。ぜんぶお任せします

……。」

「お任せください！」

………迫ってくるのから逃れたい一心でどうにか返事をした。

してしまった。

けどしようがない。

もう駄目なんだ。

暑苦しい。

こういうタイプの人は苦手だ。

なんでさつきまで擬態してたんだ、隠さないで欲しかった。

ずるずると更衣室へ。

「……。」

やっぱり親を待つとか言えば……いやいや、それだと帰りもこの格好だしせっかく来た意味がなくなつてただ疲れただけになって損した気になるし。

諦めよう。

真横に張り付いている……正確には斜め上だけど、その子が何かを

言うたびに会話がムダに膨らんでいくから下手に口出ししたりしないで、黙ってハイハイいっておくのがいちばん楽で正解なやつだって分かった。

だから僕はbottになるんだ。

相槌さえまちがわなければ言いはずなんだ。
きつと。

店員さんがごそごそと出していく服の感じは、どう見てもちよつとませた小学校の女の子がよく来ているようなドのつくピンクとかラメでキラツキラしているやつが多い。

……今着ているこういう服や「ちよつとだけ」女の子らしい服装が見当たらないんだけど？

ちよつと？

これで？

……女性の価値観は分からない。

それにこの子、さつきと違ってものすごくはきはき生き生きしているっていか待ってそもそもさつきまでのどもりっぷりと緊張っぷりはいったいどこへ？

やはり擬態か。

同情して損した。

僕はしよげた。

だるんってなった。

嫌な予感しかしないけど……とりあえずこれだけはわかる。

人選、絶対まちがった。

素直に慣れてそんな人を選んでおけば良かったんだ。

後の祭り。

後悔とはなんとやら。

もう、さつさと選んでもらって帰りたいてしか考えられない。

そうして回想が着せ替え人形bottになっている僕の中で追いついちやって、僕はもう1回思考を今朝まで飛ばした。

早く終わりますようにって祈りながら。

6話 出会い未満の出会い その2 1/2

僕は脱いでトイレに座って……登って落ちないように坐って、ふと下に視線を向けて思う。

膝をつけて太ももにぐっと力を入れて、どれだけ内側に締めてもやっぱりすき間ができる。

男のときにはなかった……あるいは邪魔されて見えなくなっていたすき間。

こういうひとつひとつが違うんだよね、男と女って。

ないからってだけじゃなくて確か骨盤からして違うんだっけ、男と女。

痩せているからっていうわけだけじゃなさそうだし。

数秒で疲れたから力を抜くと、しつかりとしたすき間が広がる。

三角形に。

……お股のあいだのデルタゾーン。

適当に呼んでみたけど不思議。

男のときにはそもそも上が塞がれていたから、あつたとしても物理的に見えなかった空間。

それが今は僕のお股のあいだにある。

いや、なくなっているからこそ出現したとも言える？

なんだか不思議な言い回しだけど実際にそうなんだ。

けどこういうの……そういう特別な誇張とかじゃなくて本物だったか。

……やっぱり男と女は子どもころから元の造りが違うんだな。

「ふむ……」

女の子の体のことをこの歳になってこんな形で知るなんてな。興味深い。



「はあ……………」

バランスを取って立っているためだけに開いている目をこすりつつ、でつかいたため息をひとつ。

いったい何着を着させられたんだろう。

5着から先はもう覚えていない。

でも確実に10は超えているはず。

だってこんなにもずつと店員さんたちのおもちゃなんだもん。

人によつてはJKからJD、良い感じの歳のお姉さんたちに囲まれるつて言うのはご褒美なんだろうけど残念ながら僕にその適性は無い。

手取り足取り従つてたけど断固として拒否した。

僕は世話を焼かれないんじゃないかとむしろなんだ。

だから僕はこうして嫌そうな顔をするしかないんだ。

次から次へと渡されて断るヒマも断ろうと口を開けるヒマもなく、心配だから着替えすら手伝つてあげるつて雰囲気から逃れるだけで精いっぱいだった。

いろいろな服を着せられすぎたおかげで途中で諦めがついて、ぼーつと着替えては見るのを繰り返しているうちにゲームとかでアバターを着せ替える感覚になつてきたのは収穫だったけど。

やけにリアルすぎるけどそこは数年後か十数年後の体感型VRとでも思えばいいしな。

けどもあのときに鏡に映つていた僕の目は綺麗だったけど死んでいた気がする。

……ちよつとだけあつた気がする遠慮が綺麗さっぱりになつたのはありがたいつて思つておこつ。

そのための犠牲は僕のおもちやにされたメンタルだ。

けどもとにかく体力を消耗した。

来るときのものとはまた別の種類の疲労を感じる。

つまりは精神的な疲労だ。

疲れたぶんだけまともな服は手に入ったわけだけど……たぶん通販のほうがずつと楽だった。

僕はまた間違えたんだ。

この先1歩も家から出ないってわけにはいかないから近所で女と
いうことを隠すための服と、出先でも人に紛れるための女物の服。

着せ替えされるのは大変だったし途中までは気恥ずかしかったけ
ど、この体に合いそうなものを選んでもらえたのはよかった。

新しい扉を死んだ目で開けたんだ。

いや、こじ開けられた？

ほぼ総当たりって感じだったけど、まあその組み合わせを自分で選
んで自分で取りに行つてを繰り返すよりは早かつたんだろう、たぶ
ん。

……そんな必要はなくって、ただちよつとだけ合うのが欲しかった
んだけどなあ。

女の子になつて早々に女の子は別の生きものなんだって思い知ら
されたんだ。

僕がひとりで選んでいたら男物はともかくこの先の夏という暑い
季節、髪を出して人混みに紛れられそうな女の子の服を選ぶなんてで
きない。

スカート系なんかはどれほど勇気を出したつてこうして目の前に
置かれないと履く気がしないし、いい機会だったんだって思い込んで
おこう。

ネットでも用語が分からなくて変えなかつたかもしれない、結
局こうなる運命は変わらなかつたかもだし。

あと、いくら子どもものとはいえ女の子の下着を手にとって選
ぶつていうのはちよつとだし。

悪いことをしているわけではないんだけどやっぱり悪いことをし
ているとしか感じられないし。

……しかしこれだけ買つてもまさか予定の半分以下のお金で収ま
るなんてな。

僕は目の前を歩く店員さんのおつきなおしりの横で揺れている、服
が詰まったふたつのビニール袋を見つめながら価格差に改めて驚愕
していた。

女性服が安いっていうのは本当だったみたいだ。

子供服が混じっているせいだとは思うけど……適当な靴とかまで何着かを一式揃えてこのお値段。

もともとのこの系列が安いというのものもあるしセール品とか結構混ぜてくれていたみたいだし。

それと今がセール期間中というのもあってさらにトータルで割引がかかるから安い。

春休みだしな。

そう考えるとこの見た目はなにかと物を買うことについては都合がいいのかもしれない。

……そもそもこの体にならなければこの出費自体もなかったという事実は置いておくとして。

ただ、こうして現実逃避してる問題がここでひとつ。

おしりが……おっと、店員さんが立ち止まって振り返ると心配そうな顔でのぞき込んでくる。

上から胸と一緒に。

たゆんと圧が。

「お買い上げいただき、ありがとうございます……えっと、その」「重さはなるべく同じくらいになるようにしましたけど……」

がさりと手渡される、ずっしりとした感覚。

「……本当に大丈夫ですか？」

さつきまではみんな店員の人たちが持っていてくれたから分らなかったけど、どうやら筋力も年相応に落ちている様子。

なんという計算ミス。

体力がないのは分かってただろうにな。

……これだけ重い物なんて軽く家事をするくらいでは持たないもんな。

洗濯物だってまとめないで毎日洗うし。

お風呂場で疲れたようなのはあのとときだけじゃなくて、これからは続くのか。

ちよつとは体力をつけないとまずいかも。

とにかく、ここに来る前は元の体基準で「たぶんちよつと重いくらいだろうし大丈夫だろう」って思っていたけど今だと両手が、いや、両腕が指先どころか肩まで痛い。

持っただけなのに。

「うぐ」

地面に貼り付けられる感覚。

僕はもうダメだ。

やっぱりまとめて買ったのは失敗だったか……。

でもでもできるだけ外出も人と接するのも最小限にしたいし、なにより必要だったんだ。

店の出口まで持つてきてもらったただけでありがたいんだ。

あとはがんばろう。

男は根性。

今は女だけだ。

「はい、大丈夫で……す」

なんとか返事をするも頭の中には重いと痛い以外に浮かばない。

なんなら体ごとぶるぶるしている。

さっきの擬態したこの子みたいだ。

かといって今さらやっぱりムリとか言い出せないし……。

ほら、そういうのって恥ずかしいし。

「かわいい……コホン、ほ、本当に大丈夫ですか？ 重かったら私がお父

さんかお母さん……とか、その、お付きの人……？ とががいるとこ

ろまで、一緒に持つていきましようか？」

また顔が紅潮してくるJKさん。

接客が終わりそうになったからまた人見知りが復活したのだろうか？

あとなんだお付きって。

……ああ、一緒に来た大人ってことか。

変わった言い回し。

今時の流行りなんだろうか。

けど……そうだな、こんな格好できたんだしこれだけ買ったしカード払いだったし。

ひとりで買いに来たんだとは思わない、か。

ちよつと背伸びをして初めてのお使いとかお買い物的な目で見られていたんだろうか。

中身はガワの倍の年齢なのに。

悲しい。

僕はしよげる。

けども着替えている途中でも雑談的な感じで止まらなかつたトクの内容的にやっぱり今の僕は見た目は小学生止まりだということが分かった。

そのへんはなんとかごまかしたけど。

聞かれたことを全部「そんな感じ」とかで乗り切ったのは日頃の成果だ。

だけどカード、使えてよかった。

ほんとうに。

これが使えなければ少し面倒だったからなあ、ATMの機械の高さと僕の身長的に。

あと警備員の人とかに止められないかという不安的に。

カードって子供が持つても良いものなんだっけって思ったけど良いらしい。

ついでに使っても不審がられなかったから助かったけど。

「あの……」

おつといけない、踏ん張るのに夢中でつい意識が飛んでた。

「いえ、大丈夫です……、少し、重いけど……」

「……そうですか、分かりました。あ、どうしても重かったら、1階の出口のところまで送ったりもできますからね！ ……それではまたのご来店をお待ちしています、お客さま！」

「はい、どうも……」

もう行かない。

来てやるもんか。

そう思うけど僕が唯一に通ってるんだ、きつとまた夏とかに来ることになるんだろう。

「……………」

振り返ると手を振っている女子高生さん。

……年下、それも女の子に心配された。

見た目的に仕方ないことなんだけど、でもやっぱり中身男としてはなあ。

こう、面倒を見られるって言うのはこう。

なんか来るものがあるんだ。

◇◇

僕は絶賛寄り道中。

普段なら絶対しない無駄な時間を過ごしてる。

家の中に居た時点でこの体は不便だって分かった。

家から出て普段10分のところをのたのた歩いてこの疲労だつて分かった。

けど、どうしても思う。

何でもかんでもでかすぎ。

ちよつとはちつこい人のことを考えてほしいって。

……そんなわけで目の前にあるテーブルが高い。

イスも高いし、なのにテーブルに対しては低い。

そしてプレートの上の食べものすべてがでかい。

相対的に。

まあ体重からして大人の半分だししようがない。

買ってきた服を何枚か敷いてもやっぱり変わらないしな。

荷物と体と食べものを載せるような感じにした僕はようやく落ちついて見回す。

ずいぶんと久しぶりに……そういえば年単位で来ていないなあ

……来たバーガー的なファストフードの店内。

服屋っていう地獄から生還した僕はそのまま家へ寄り道せずに帰

る予定だったんだけど、服のかたまりを持つ手が限界になりそうになつてきて体力もつきそうになつてきたから、完全にバテる前にジャンクな店に入ってしまった。

雑な感じにうるさくってイヤホンしてたら快適だっただろうし、カウンターで子供用のメニューを屈みながら見せられたときは心臓が痛くなつたけど、なんとか切り抜けたんだ。

そうして低い視点で人にぶつかられないようにって気をつけながらトレイを運んできてここに落ち着く。

初っぱなからまた無駄金を使っちゃつた感じがするけど、道ばたで力尽きて動けなくなつてありがた迷惑にも親切な人の興味を引いてしまうのもいただけなかつたし必要経費だと割り切ろう。

まちがつてお巡りさんと遭遇したらおしまいだしな。

かと言つてタクシーまで使うようじゃ末期だしなあ……。

それに外食つて言つたつてたいした額じゃないし、たかが数百円だし。

ガチャ2回分だつて思えば安い安い。

……………。

金銭感覚がいけない気がする。

だけどいくら重い荷物を持っているからとはいつてもここまで疲れれるとは思わなかつた。

動けなくなるほど重いものを持つたりして疲労しきつたりしたのはいつ以来だろうか？

結構重めな風邪を引いたときみたいに立つてるだけで体が重くなつて目の前が暗くなる感覚。

思い出してみても……少なくとも高校に入ったころにはこうして全力を出し切る感覚つていうのは経験しなくなつていたようにも思えてくる。

とすると10年くらいか。

もはや昔だな。

さっきのJKさんが今の僕の肉体年齢くらいなんだ、そりゃあ昔だろう。

小さな体に大きな荷物を抱えて駅前の人混みを苦勞して抜けたのとぶつからないようにって気を張りながら歩いてきたせいもあるんだろうけど、ここまで体力と筋力がないのは……少し、いや、だいぶまずい気がする。

重いとはいっても冬物でもない服を持ってここまで疲勞したんだからな。

幼女とはかくも弱い存在か。
鍛えないと。

疲れているのにテーブルに肘を置いたりする楽な姿勢ができない。だって買った服をおしりに敷いて20、30センチかさ上げしてようやくなんだもん。

だからずっと背中を伸ばして身を乗り出すようにして食べないとこぼしちゃうだろうし、なんなら落ちちやうだろう。

背が低いつてことは胴も短いつてことだもんな。

これの対策はいちど考える必要がありそうだ。

足も宙に浮いてるし、とにかく不安定この上ない。

とはいえ家を出てすでに2時間ほどが経ったし、半ばではあるけど往復の長い道のりとあの地獄を経験した僕のお腹は結構空いている。

ちやうどお昼時でもあるしな。

途中でバテてきたのも空腹だったというのもあるのかもしれない。確か血中の糖分が少なくなると力が出なくなってくるんだつたつ

け。
お腹が空いて力が入らないつてだけかもしれないけどな。

これだけ小さい体だしガリツガリだし、きつと溜めておけるエネルギーが少ないんだろう。

ちよつとは肥えさせないと。

色気とか以前の問題だ。

もつともこの年齢で色気を発したらいろいろまずい気がするけど。

……前の、男の体基準で物事を考えるクセもいずれば治さないといけなくなるかもしれないなあ。

中身まで女にはなりたくないけど。

ならないよね？

「……………」

まあいい、とにかくエネルギー補給だ。

両手で包み紙をなんとか持ちつつ紙の中でぐちよつとはみ出してくるくらいに上下をぐーっと押しつぶすようにした上で口を大きく開けてバーガーを頬張る。

盛大にほっぺたにぐにゅってはみ出る感覚。

口の大きさがバーガーに負けたらしい。

……でかいんだ。

ナイフとかフォーク使えば行けるかな？

ほっぺたと両手についちちゃったソースを拭きながらそろそろと見

回すけどそれらしきものはないらしい。

……高めの店じゃないとないか、さすがに。

いや、言えばあるかも？

……………。

……めんどくさいからいいや。

めんどくさいのは全てに優る。

そうしてがんばって外から食べていくも一向に小麦粉の味しかない。

まだ中身に届かない。

あふれたソースでバンズを食べている感覚。

これだけでお腹がいっぱいになりそう。

それにこうして食べていると唇が千切れそう。

冬場はいつつも痛いからなあ。

……次からはバーガーは止めよう。

体にも良くはないんだし。

「……………もむもむ」

いや、でも。

この独特の匂いと味はたまに食べるとクセに……。

◇

もさもさと口を動かす。

はじめの数口はただの味のないパンの味しかしなかったけど、にじみ出てきたケチャップとか中身まで届き始めてようやく懐かしいジャンキーな味が口に広がってきた。

こういう学生時代に食べ飽きたジャンクは1回食べたらしばらくいいやつて感じになるんだけど、何ヶ月かするとふと食べたくなるんだよなあ。

カップ麺とかもそうだけどなんでだろう？

ニート生活を1日でも長続きさせるためにとって節約を意識して普段はほとんど自炊しているけど、時たま外に出たりするところした味が無性に食べたくなるんだ。

ポテトとかスナック菓子とかそういういったものとおんなじ部類？

中毒性とか依存性とかありそう。

あるんだっけ？

そういう記事とか本とかを読んだ覚えが。

ジャンキーでおおざっぱで中身を食べて出して数口でもうすでに飽き始めてきた味を咀嚼しながら、見るともなしに周りを眺めつつこの体について考える。

……このひ弱な体について。

重い思いをしているうちに思いついたのは、この体力のなさは元の僕の体の体力とかが反映されているのかもしれないっていうこと。

だって仮に小学生だとしたって、荷物が重い日の学校への往復とかで歩けなくなるほどにバテるっていうのはあまりにも貧弱だから。

荷物が重いといってもたかが服、それも春服だし……あつて2、3キロだろう。

小学生だって少ない体力でも学校への行き帰りくらいはできるんだ。

今の僕はそれ未満。

園児だって言われてもぐうとも言えない。

こうして力尽きようとしているのが証拠。

子どものころは学校まで片道20分くらい歩いてた覚えがあるけど、いくら歩きにくかったりしたって……たとえば体育があつて走り回ったりしたとしても、帰り道でここまで疲れ切るなんてことはなかったと思うし。

しかも確か小学生くらいまでつて、女の子のほうが全体的に体も大きくて体力も力もあつた気がするし。

つていうことは。

この体が見た目以上にひ弱なのはこの体が弱いからだけじゃなくつて、変わる前の僕の筋力とかが影響しているかもしれないという仮説が立てられる。

立ててみただけでも。

だつて暇だしな。

そもそも男が女になつて若返つちやつてさらに別人になるだなんて摩訶不思議なことに理由なんてあるはずがないもん。

けど何かにつけて理由を見出したいのは人の本能。

だから良いんだ、適当に考えておけば。

そういうわけでどれだけひ弱なのかを考察中。

最後にまともな運動したのは思い出せないくらい前。

普段もたいした運動なんかしちやあいないし。

帰り道はこれでも随分軽くなつたのにこれなんだ。

帰り道の前にビルのトイレで着替えて、そのときにもうて古いのは捨ててきて、多少軽くなつたはずの荷物でこれだからな。

ようやくまともな下着で……タイツのおかげで余計にすーすーするという未知の感覚が止まらなかつたお股を保護できてひと安心だ。

女子高生さんからキャラクターものを断り続けてつかんだワゴンの無地の白パンツ3枚で500円の安心感。

視線をバーガーより小さい両手から足元に移すと驚くくらいに小さな新品のスニーカー。

まだ硬いけど、それでも足に合つて歩きやすい靴でもそれほど変わらないつてことはやっぱり素の体力が足りないんだと思う。

まあこの体歴2日目だしな。

まだまだよく分かっていないからあれこれ考えるのが楽しかったりする。

こういう考察系って好き。

……わりと大切っぽいし。

元の体で体力的なことが気にならなかったのはきつと、単純に成人男性という恵まれた体格のおかげ。

そのまま幼くなればこうなるよな。

いろいろともどかしいけどしょうがないものはしょうがない。

男ってだけで身体的に有利だったのは知識としては知ってたけど、こうして実感するとすごかったんだって分かる。

失って分かるってのは定番。

失ったものが多すぎるけど。

とにかくインドアとは言ってもやっぱり成人の男と子どもの体力の差は大きいっていう当たり前のことを肌で実感したわけだ。

「もむもむ」

このぶんだとスーパーでの買い物とかのささいな外出まで苦労しそう。

トレーニング……したほうがいいかも。

たぶん物置部屋には買って何度かしか使わなかったダンベルとか腹筋ローラーとかあったはずだし。

ああいうの捨てるのも大変そうだからって取っておいてあるけど使ってみようかな。

「……………」

……この貧弱さだとまずは自重トレーニングしかないか。

下手をすると筋肉痛で動けなくなりそうだし。

幼女は辛いよ。

6話 出会い未満の出会い その2 2/2

ちよつとだけ意識を思考から現実に戻すと、とたんにぎざざわとしか表現できないようなたくさんの人たちが食べたり話したり動いたりしている音と声。

やっぱりイヤホンでシャツトアウトしたかった。

けど諦めたら案外に慣れるもの。

しつかしとにかくに混んでいるなあ。

長いこと休日とか夕方とかの混みそうな時間帯の外出を控えていたから忘れていたけど、こういう店つてここまで混むものだったか。

春休みとはいつてもやっぱり土日は無謀だった？

せめて平日まで待てばもつと楽だったかもな。

だけどそれだと今度は今日ほどには人混みに紛れられないな。

補導とか怖いし。

家に連絡が取れない子供とかどう考えてもお巡りさんの保護対象だ。

それよりなによりこの体になった危機感がある内じやないとだんだん外に出るのがめんどくさくなつて、気がついたら秋になっていたとかまであり得るしな、僕の性格的に。

僕のこととは僕がいちばんに分かっている。

自堕落な自信があるからこそそのプロのニートだ。

なんのプロかは分からないけど。

でも……うーむ。

「……………」

レジからお店の外までの列が並んでいて席は全部埋まっているように見える。

トレー持った人がうろうろして食べるタイミングを逃してるのも見える。

……それにしても多くない？

来たときだって空いているテーブルを探すのに苦勞するほどだつ

たし。

タイミングよく空いたおかげですぐに座れたけど、そうじゃなかったら重い体と荷物を引きずったまま帰るハメになったかも。

ぐるって回って座れるところがなかったら「やっぱテイクアウトで」って包み直してもらって……その辺のベンチで1人悲しくもそもそしていたに違いない。

外から見ても混んでいるって分かっていたし本当はもつと空いている店を選びたかったんだけど、駅前少し離れたこの辺りで知っている店は他にないからしょうがない。

なんだかんだこういう気楽さが良いんだよね。

せめてどっかで荷物を下ろして探せたらよかったんだけど……めんどくさかったし、なにより1回下ろしちゃったら持ち上げるのが嫌になりそうだったし。

1回休んじやうと立ち直る元気がなくなっちゃうっていうの、けっこうあるしな。

だからこそ旅行とかしていても休みなしで歩き続けたりしちゃう。

……この体じゃ絶対に無理だな。

下手をしたらばたんきゅーしちやいそうだし、この体の体力を見極めない。

まあとにかく座れはしたんだから、食べながらゆっくりしているうちに体力も回復して無事に家までたどり着けるだろう。

ここからだたった10分の道のりでも慣れていない体だとしても悲壮感を感じるくらいに遠いイメージになる。

「けへっ」

思わずむせて涙が。

……炭酸がきつい。

のどがいがいがする。

しゅわしゅわが辛い。

ここまで軟弱になったのか僕は。

いや、単純に炭酸が苦手な体質になっているだけなのかも？

◇

「ん」

バーガーを4分の1ほど、他は少しだけを口にしたらくらいから店員の人があちこちに声をかけて回っている。

……なにかと思えば食べ終わっている人を追い出すのと、あとは相席。

こんな光景学生のころのこういう店でしか見ない気がする。

積極的に人混みを避けてきた結果だ。

だけど今日に限ってはうまくは行かない。

テーブルはみんな埋まっているからそれでも空いているイスがあれば声をかけられているし……たまたま前の人たちが抜けたところに滑り込んだ、4人掛けを占領している僕のところにも来そうだ。

こういうのはタイミングだね。

大荷物と怪しげな格好のおかげで大目に見られていたんだろうけどもうダメっぽい。

僕はもう終わりらしい。

できればこうなる前に食べ切っちゃかったけど絶対にムリだろうし。

というかたぶん食べきれない。

すでにお腹はいっぱいになり始めているしな。

たったこれだけしか食べていないのに。

……意地を張らずにお子様セットとかにしたほうが、ムダに捨てることになるよりはずっとよかったかも。

けど、いくらなんでもこの年で頼むのは……。

いや、見かけ上は子どもなんだけどさ一応。

男としての、というか大人としてのプライドをどうするかという問題について考えているうちに……とうとう僕のところにも。

「ごめんなさい、混んできたので空いているイスのあるテーブルのみなさんにはご相席をお願いしているんですけど、いいですか？」

ほらきた。

どうせNOって言えないって分かってるんだからもつと強気で
言って良いのにね、こういうの。

「……はい、いいですよ」

「ありがとうございます。……1名様こちらです、どうぞ」

嫌だったけどしょうがない。

席を移動してまで笑顔でにっこり答えている人がいる中で僕だけ
が「嫌です」なんて言えるはずもないしな。

って言うか断れる人って居るんだろうか、こういうの。

……結構居そう。

でも僕はそういう人間じゃ無いから無理だな。

人には適性があるんだ。

次からはやっぱり、どれだけ疲れていたとしたってさっさと帰るこ
とにしよう。

なんならコンビニで適当に買って休んでもいいんだし。

そもそも疲れ切る前に帰る量の荷物と行動範囲を知っておきたい
ところ。

それは今後の課題。

今後があるかわからないけど。

外に出るかどうかって言う意味で。

そんなことを思いながらプレートをずずとこちら側に寄せる。

それにしてもフードを被った帽子というこの格好は最強だな。

視界を遮るってというのがこんなに楽だとは知らなかったし思いつ
かなかった。

前からしておけば良かったなあ。

特に男ならそういうのは気にされにくいんだから……サングラス
とかしたら人と視線も合わないだろうし。

それもこれも無難に見られようってしてきた結果だ。

良くも悪くも溶け込んでいたんだ、いってことにしよう。

おかげで元の体ではたいして目立たなかったし視線を気にするつ
ていうことがなかったからこういう格好はしたことがなかったけど、
これからはお世話になりそう。

少なくとも真夏以外はこうしてしよう。

真夏でもできるだけツバの広い帽子とかで、あるいは……？
買わされた荷物の中の帽子の周りをぐるっとツバがある帽子をちらり。

……リボンとかついてるけど色を気にしてる状況じゃないな。

僕が僕だって知られないことの方が大切だ。

多少の恥ずかしさは乗り越えよう。

スカートとかワンピースとかもそういう系統だし。

……キャラクターものとキラキラしているものは辛うじて回避したからどうとでもなる。

辛うじて。

きやぴきやぴしている女の子の感性は良く分からない。

多分僕には一生涯理解できることはないだろう。

がががと席を引く音。

僕は気持ち下を向く角度を鋭くした。

「相席助かりましたー。 やーあのままだと持ち帰りとか大人の人と一緒に食べることになっちゃいそうだったからありがたかったですー」

「いえ」

どうやらきやぴきやぴさんと同じ気配の人種。

僕は警戒を厳にする。

でもムシするなんてのは僕にはできないから斜め前に座る気配と音と声へ適当に返しておく。

なんでも無難が大事だ。

「普通」なら「普通」な範囲でしか絡まれないんだから。

目の前に人が座ってもプロのぼっち生活をしている僕だ、顔を上げなければ気にならないんだし軽く会釈だけしておいてあとは手元だけ見ているように。

フードと帽子効果で顔は見えないだろうけども僕がちっこい子供だっというのはひと目でわかるだろうし。

……ちっこい。

自分で自分を表現してみても自分の表現に落ち込んだ。

ま、まあ、今は大人でもスマホとしか目を合わさない人もいるんだし珍しくもないだろう。

うん。

よっほどの話し好きじゃない限りこんなお店で初対面の人と話したがる人はいない。

……いないんだけど女の子っていう性別な生物は話し好きっていうのがさっきのJKさんで理解できた、油断はしないでいたい。

「……………」

ずっと飲んでいたジュースのストローから唇を離す。

どうでもいいけどストローって唇が張り付くよね。

最近は紙製でもあるって聞くけど、間違いなく張り付く。

しつこく張り付かれるだろう。

どうでもいいことを考えて意識をそらせようとしたけど満腹感は消えてくれない。

今まではショックでまともに食べるどころじゃなかったからストレスとかでお腹が空かないのかって思ってたけど、時間がだいぶ経って体を動かして疲れてもこれらしい。

胃も見ただ目以上に小さくなっているらしいな。

まあ胃の容積って握りこぶしくらいだって言うし、今のちっこい手を見たらどれだけ入るのかって分かるもの。

「……………」

ちっこい手。

バーガーにすら負けている。

あとは炭酸も失敗だったな。

なんかこうダメなんだ。

喉の粘膜が刺激に負けるんだ。

喉にしゅわしゅわする感覚が来るだけで辛いつていうのに近い感覚までしてくるし。

我慢して飲んだら咳き込むし涙までにじんできくるし。

子供は大人に比べて味覚が鋭いつていうけどそのせい？

……いや僕が小さいころはお菓子と炭酸なんて定番だったし違うか。

女性……というか女の子が炭酸苦手っていうのもそこまで聞いたことはないし。

コーヒーとかで特に感じなかったけど、やっぱりこういうところも少しだけ変わっているんだらうか。

うーん。

体が変わるとここまでいろいろ変わるんだな。

当然だつて言えば当然だけど、やっぱりフシギな感じ。

「……………」

……ところで、ついさつきからたった数十センチという近距離からときどき漂ってくるのは……誤解を招きそうな表現だけど若い女の子の匂い。

シャンプーとかその辺のやつ。

さっきの……髪の毛がくるんくるんしていたJKさんともまた違う匂い。

前は気にならなかったっていうかそもそも人に近づかないようにしていたから忘れていたけど、そういえば男女とも子供のころと学生のころ、社会人になったばかりと中年に入ったくらいの年ですいぶんとにおいが変わるんだよな。

香水とか整髪料とはまた違う体臭っていうのか？

表現は嫌がられそうだけどそういうもの。

僕は微妙に匂いに敏感だからそういうのが気になってたんだよな。

だから今の僕のハチミツとミルク系統の甘い体からの匂いも気になるんだ。

あと髪の毛に残っているシャンプーの匂いも。

……変態チツクだから止めておこう。

でも相手がおひとりさんな女の子……珍しい気がするな、学生さんの女の子がひとりです……で助かった。

いくら混んでいるからっていつてもその辺は配慮してくれていたんだな。

……僕的には別に男でもいいっていうかそのほうが楽なんだけど
2人3人で来られたりしたらうるさくてうんざりしていたところだ
しお互いに気まずかっただろうから、よかった。

「……………」

「もむもむ」

とりあえずがんばって食べよう。

あとちよつとだけ。

お肉だけでも食べて体力を……うぷ。

あ、限界に近いかも。

「……………あの——……………」

「んく……なんでしようか？」

……食べている途中で話しかけないでほしかった。

思わず変な声が出てこれじゃ子供みたいじゃないか。

もちろん子供なんだけど、せめて態度だけでも大人で居たい。

ささやかな僕の抵抗だ。

「わあ……………」

「うわっ……………」みたいなニュアンスじゃないからよかったけど、なんか
顔を上げたら反応された。

言われたことはないけど「うわあ……」みたいなのを年頃の女の子
に言われたら、いくら僕でも1週間くらいはダメージを後から後から
受け続ける自信がある。

せめて平均でありたい。

そう思う今日このごろだ。

「あ、いえ……………っ、せ、席つ。 ……聞こ

えてない、と思った、から……………」

「いえ、お互いさまですから」

「……………」

なんだ、ただ礼儀正しい子だっただけか。

変に疑ってごめんね。

友達すらいなくて機微が分からない僕を許して？

そう心の中だけで謝っておく。

今初めて目が合ったっていうより合わせたんだけど……斜め前に座った子は今の僕よりも3つ4つ上くらいの……中学生くらい。

つまりはJCさん。

若いつていうか幼いな。

今の僕の方が幼い体なんだけど、おとといまでの価値観は20代の男なんだからしょうがない。

その子は髪の毛は肩くらいまでで特に何もしていない普通の女子中学生って感じ。

けばけばしくない時点で僕的には安心できる感じ。

さっきのJKさんと対称的なJCさんだ。

顔は幼い感じだけど細かいところはきれいにしているし小学生じゃない気がする。

なんていうか感覚だけど、小学生と中学生のあいだにははっきりと分かる雰囲気の違いがあるし。

ときどきやってるバイトでの経験が活きる。

子供の相手はそこそこに得意なんだ。

大人相手はまるで駄目だけでも。

「……………」

「……………」

目が合って10秒を超えている。

それにしても見つめられている。

すごく。

長く。

なんで？

「…………あの、なにか？」

「あつ、…………いい、いえなんでもっ」

「……………」

何を言いたいんだろうか。

さっきの店でもここまでは見つめられなかった……いやどうだろうかあのくるりんさん……けど、知り合いか何かにも似ているんだろうか。

この体にはなつたばかりだから誰かと会ったこともないしな、そうじゃなければあれだ、珍しい色の目だからつてのがあるのかも。

……口を開きかけてなにかを言いたさそうにしているんだけど話そうとしては閉じるその子。

「……………」

「……………」

妙な緊張感を僕から解すように視線を落とす。

まあいいよな、見られるだけなら。

着替え終わったときみたいの間近で見られているわけではないしお人形さんにされるでもないし。

あれは地獄だったからここは天国。

目と髪の色が珍しいだけかもしれないしそのうちに興味もなくなるだろうし。

それよりも両手で持っている、まだ相当残っているバーガーとプレートの上に残っている外側から冷えて固まり始めているポテトを……どう考えても食べ切れなさそうなのが問題。

ジュースはまあいいとしても食べものを食べないでそのまま捨てるのは情的に嫌だけど、かといって持ち帰って食べるほどではないしな。

しなびてまぶしくなっているだろうし、なによりもゴミ捨ての日まで台所からそこはかとなないこの臭いが漂うようになるのは困る。

こういうのの臭いつて結構しつこいからなあ。

けど捨てるのももつたいたないからがんばって食べるか？

いやいや満腹すぎて帰り道でダウンしたら意味がない。

どうしたもんか。

「……………」

じーっと前から届く視線。

やめて。

僕は視線に弱いんだ。

きつと第六感的なのが発達してて他人の視線がダイレクトに脳に届くんだ。

だから止めてほしい。
やめて？

そう思うけど帽子越しにでも届く視線。
なんだ？

何がそんなにこの子の興味を引いているんだ？

……やっぱりの髪と目と肌の色の組み合わせは珍しいんだろうか。

でもこの辺だって今は見た目が明らかに外の人っていっぱいいるしな。

なんならハーフとかクォーターとかの人も……僕の時代で学年に何人かいるくらいだったし。

うーん。

「……………」

視線が嫌だな。

わずらわしい。

いや、ヤな感じのじゃないって分かるんだけど……好奇心のもそれはそれで嫌だ。

観光地で寂れた博物館とかに行つて案内の人に絡まれるときくらいに。

「じ……………」

口に出しているような幻聴が聞こえるほどの視線。
……………こうなったら仕返しだ。

「あの」

「うつひやああああ——!? ごめんなさい！ じろじろ見て！
もう見ません！」

声の主はがたんつて席ごと飛び跳ねるようにしてのけぞつて叫んで慌てて下を向く。

一瞬周りが静かになる。

「あ。ごめんなさい、ごめんなさい……………」

ぺこぺこ頭を下げているらしいびっくりJCさん。

もう、僕までびっくりしたじゃないか。

ほら、手にじわって汗がにじんでるし。
だからびつくりは苦手なんだ。
ついでに周りの人たちが「なんだなんだ」って見てきてるのが分かるのもまた嫌だ。

一瞬だったけどその一瞬が僕には永遠。

僕はその辺の石ころになりたい。

考えるだけで良い存在になって、そのうち考えるのを止めたいんだ。

なんてネガティブになったりもしたけど立ち直る。

それにしてもうるさい声。

こういう声って頭に響く。

だから苦手。

嫌いよりは苦手なんだ。

だからさっさと試ってみよう。

言うだけならタダなんだ。

「残ったんですけど食べますか？　これ」

「……………うん？」

変な声。

ちよつとおかしくってヤな気持ちになったのがどっかに行った。

「もう食べきれないので残すところだったんです。　これなら指も口もついていないので、よければ」

「食べます!!」

耳がキーンってする。

うるさい。

っていうか元気だなこの子、なんとなく察してたけど。

テンションが高いっていうか素のエネルギーが高いって感じ。

僕が苦手なタイプだ。

JKさんに続いてそういうタイプとしか遭遇しないのか。

……今日だけでやたらと構ってくるのと元気すぎるのと。

僕との相性が悪い順に遭遇している気がする。

厄日だな。

いやそれをいうんだったらこの姿になったあの朝が大元の原因な
んだけども。

「でも、ほ、ほんとに……？」

その子の目は僕の食べ残し……さすがにバーガーじゃないだろう
けど……にくぎ付け。

自分のほかほかの目の前にあるのにな。

そんなにお腹が空いていたのか？

いやしんぼなのか？

まあこの年ごろはいくらでも食べられるんだ、不思議じゃない。

ダメ元だったし初対面だし要らないって言われるって思っていた
んだけどすつごく欲しそう。

僕だったら初対面の人からなんて絶対にNOだけどこの辺は学生
特有の距離感だろうか。

まあ今の僕は子供だしな、抵抗感がないのかも。

こういう子って男女も歳も関係なくクラスとかにいたしな。

そう思うとちよつと懐かしいくらい。

いずれにしろ僕にはさっぱり分からない感覚だ。

「ではどうぞ」

それあげるから静かにしてね。

つていうか僕はおかげで食べ残しもしないで食べ過ぎもしないで
出られるから助かる。

目と口を中途半端に開けているその子にポテトをほぼ手つかずの
まま手渡してさつさと荷物をまとめる。

……ぐ、重い。

イスから降りてさっきの重さがまた肩と腕と手のひらにかかる。

けどもうちよつとがんばろう。

くいしんぼに餌やりして気を引いているところでそそくさと。

これ以上会話しないで済むのがあるがたいところ。

……バーガーはもったいないけどごみ箱へ。

食べきれなくてごめんなさいって。

ごみ箱に落とした音で罪悪感。

ずしんとした心と荷物を引きずりながらのたのたと出口に向かう。
……にしてもやっぱり重い、重すぎる。

この調子だと買い物のおときはリュックとかじやないと厳しいかも
な……。

店の出口に近づくに従ってますます増えてくる人たちにぶつから
ないようにしつつ日向へ。

他の人たちはそこまで僕のことを見て来ない。

身長差が効いているらしい。

……うん。

少し休んで食べたからいくぶんは楽になっているみたい。

これなら家までの残りもなんとかなりそう。

ふと思つてパーカーの袖を掴むようにして袋を持つと地味に手の
痛みがなくなることには驚きつつ、ジャンキーな臭いのする建物を後に
して一路家へ。

それにしても驚くほどの少食ぶり。

これからの食費、だいぶ浮くかもしれないな。

帰ったらこの先の生活費のこと計算し直してみよう。

食べる量がこれだけ減るんだったらムリして激安食材と節約料理
に頼る生活でなくてもけっこう持つかもしれないし。

……あと、このぶんだと呑めるお酒の量も減つていそうだし。

つていうか呑めるんだろうか、そもそも。

僕は生命線のお酒のことを思う。

うん、大丈夫。

僕の喉がごくりつて鳴ったから体は受け付けるらしい。

もちろん確実に法律的には大問題だけど僕ひとりしか知らないん
だしなにより中身は成人しているしセーフセーフ。

いやまあアウトなんだけど家によつてはこっそり子供にも……つ
てあるみたいだし。

悪いことだけど人に迷惑かけるわけじゃないから良いよね？

そんな言い訳を頭でしながらかさかさ音を立てるビニール袋とど
ぼとぼと。

☆☆☆☆

「彼」が先ほどまで居た店内。

先ほどの少女は席を立ち「彼」の座っていた場所へ移動していた。

目の前に居た小さな「彼」の座っていた席に腰を落ち着けた少女はしばらくのあいだ……よろよろと出て行ったフード姿の消えて行った店の出口を眺めていた。

「うーん？」

手渡された冷えているポテトを口にしながらなにかを考えているのか、うなったり口元を緩ませたりきつくさせたりしながらちらちらとスマホの画面を見ながら考え込む。

そうして数分かけてもらった分と自身の分とを胃に収めきってひと息。

周りの席が空いた一瞬を狙い通話画面に切り替える。

「あ、もしかして？ あのさあー実はね、たった今のことなんだけどね？」

そんな話をしだした。

7話 ハサミ事件 1 / 2

僕は膝をつけたまま座っている。
なのに足がおしりより外に出ている。
おしりと足の甲と膝で体重を分散している形。
つまりこれは……。

「……………できた」

ベッドの上でごろごろしていたときに、ふと思いついて試してみた
らできちゃった。

正座を外に崩したようなマンガやアニメでよく見るこの座り方
……通称女の子座り。

なんか女の子が当たり前にしているのがたまたま目に入ったから
マネしてみた。

そうしたらなんかできた。

実際にこの目で見たことはないけど検索したらこうしてる女性の
写真とかあったし、する人はするんだろうな。

膝がすごい方向に曲がってる気がするのに痛くない。
頭がバグってる感覚がする。

なんて言うか曲がっちゃいけない方向に関節が曲がってる感じ。
女の子座りは膝を外側にねじれるように回すし正座よりもずつと

痛そうだっていう感想しか持てなかったけど、実際にこうしてやって
みると別に痛くはないし膝とふとももとで思いのほかバランスがい
い気がする。

新感覚だ。

もちろんあぐらのほうが慣れていることもあって楽なんだけど、ス
カートを履いている状態で地べたに座るなら脚を広げるのは確かに
抵抗あるしなあ。

誰かに見られるとかじゃなくて寒いから。
だって布1枚だもんな、スカートの下って。

そう考えると正座よりも楽でだけど「はしたない」っていうのじゃ
なくなるっていう、わりと合理的な座り方なのかもしれない。

おまけにスカートだったり下に穿いていない状態でこうするとふともも全体がべつたりと下に触れる。

ベッドや絨毯の上ですると結構柔らかくて気持ちいい。

「……………」

ぼーっとする。

クセになりそう、この感覚。

あとふとももの上に直に手を置いたり股のあいだに挟んだりすると……なんていうかこう、とつても落ちつく。

……………女の子としての本能なんだろうか。

頭の中以外は女の子になつてゐるわけだし、そういうことかも。



顔に朝日の当たる感覚で目が覚めると外はもう明るくなってきている。

最近は何の出てくるのが早くなってきたから日の光で起こされるのも早い。

だけどカーテンを少し開けておいて日の出の光が顔にかかるってというのがいちばん目が覚めやすいし、まぶしくて寝ていられないから二度寝を防ぎやすいし都合が良いしな。

寝ぼけてカーテンを閉めちゃったら……まあ、無意味なんだけど。でもこれのおかげで冬以外は目覚ましいらすだ。

けどもともかく眠い。

昨日は寝るのちよつとだけ遅かったからか。

「くあ」

遅いって言っても9時台だったし以前と比べれば睡眠時間はかなり延びているんだけどなあ。

たくさん寝ないとダメらしい。

SNSの盛り上がりはこれからだつていう時間なのに僕の体は盛り下がる。

やっぱり成長期だからなんだろうか。

まあこの体で生きる以上にはちよつとは成長してもらわないと困るわけだけでも。

目だけを閉じないようにしてぼーっと考えているうちに体が温かくなってきた、目が覚めてくる。

指先がじんわりしてくるこの感覚が好き。

体を起こして朝日から顔だけ逃れてベッドの上でまたしばらく、ぼーっとする。

……この体になってから寝起きがどうもだるい。

前はそんなことなかったのに。

意識ははつきりしているんだけどそれに体が追いつかないっていうか、なんというか。

……こういうところは見た目相応なんだろう。

成人と幼児を比べるのが間違いなんだもんな。

「……で」

今朝はどうだろう。

何か変わったりしたかな。

僕はのろのろずりずりとベッドの隅まで這いずって行って枕元に置くようになった鏡をのぞき込む。

廊下にあった鏡は布をかけた。

なんて言うか、こうして不思議なことが起きている以上見えちゃ行けないものが見えるとかゼロじゃなくなっただって考えちゃうと怖くなったから。

僕はホラーに弱いんだ。

で、枕元の鏡の中には……もう僕自身の顔だっただけ感じられるようになってから久しい……寝起きでまぶたとほっぺたが腫れて普段の何割か増しで幼さの感じられる、静脈が透けて見えるくらいの薄い肌を持つていて眼球の奥までがくつきりと見える、大きな目。

寝起きで眠気が残っていて厚ぼったくて髪があっちへこつちへとぼさぼさの状態、しかもパジャマはあのときに買わされたガラこそなものの明らかに子ども用のもので。

袖とかのふりふりした余計なものが邪魔なやつ。

鏡に映っている今の僕に関しては幼女だつて呼ばれても文句が言えない。

いつものように服装を整えてどうにか数年はサバを読まないとな。さすがに幼女扱いは勘弁だ。

あのときの地獄が再現されるのもな。

「……………はあ……………」

けど、戻っていなさそうなのは分かった。

そもそも視力が違うんだし分かってたけど、それでもこの目で見ない限りには、だ。

……………もう諦めてきているんだけどな、起きたら元に戻ってるっていう素敵な展開を。

僕は鏡を置くと、暑くなつてきたから横着をし始めたせいで上だけしか着ていないパジャマ姿のままベッドからずりずりと下りてのろのろと机に向かつて、適当な雑誌を詰めた即席の踏み台を使ってクッションで高くしたイスに座つてペンを挟んだノートを広げる。

「……………ふう」

おしりが冷たくて気持ちがいい。

じゃなくて……………今日の日付。

天気は……………たぶん晴れだろう。

朝から暑い。

ちっこい手で大きくて重くなったみたいを感じるペンを動かしてゆっくりと字を書いてみる。

——僕がこの体へと「変身」してから今日でちょうどひと月。

外見、感覚……………変わらず。

これ以上変わるといふ変化も、異常も、なし。

僕はまだ、いまだに。

この少女の体から——逃れられないでいる。

そんな現状確認を、ここ最近の定型句となりつつあるそれをちよつとだけ書いた。



「……いよいよ大型連休初日です！ 観光地はどこも人であふれかえっていて……」

「ふーん」

テレビはどこも朝からこんな感じ。

もう飽きるくらいに見た光景だな。

そんなテレビを見ながら朝食後の洗濯物待ちの手持ち無沙汰な時間を経過す。

……結局なんにも。

本当に何もなかったんだ。

この体になるってこと以上の何かが起きることも……戻ることも。

なんにもまったくこれっぽっちも、その心配さえもない。

初めのうちは次はどうなるんだろうって不安で仕方なかったし、逆に次に目が覚めたときには戻っているんじゃないかって毎晩寝るときに躁鬱を繰り返しながら寝付いていたものだけど、そのどちらも起きることはないらしい。

だってもう春休みは終わって新年度が始まってからの初夏の大型連休なんだから。

ニートにとっては毎日が変わらないからこそ季節感は大事にしたところ。

つまり僕は3月に少女になってから4月も終わりだって言うのにまだ少女してるんだ。

「この連休中はお天気が続くということ、どこも……」

まさしく人混みってしか表せない光景が画面の向こうから流れてくる。

人のいない時期に来ればそんなに並んだりしなくても済むものになあ。

まあ働いていたりしたら到底ムリなんだろうけど。

家族とか友人とか恋人なんかと一緒にならなおさらだ。

でもそれが良いって言う人もそれしか無いって人も多いだろう。

僕ならこういときは家で過ごして別の時期に行くけどな。

ひとりぐらしでぼっちのニートだからこそできる発想だ。

「……………」

このひと月、念のために引きこもってみた。

おかげでこの体に馴染んじやったんだ。

慣れっというのは恐ろしい。

もはや写真を見ないと「僕だった顔」を細かくは思い浮かべられないくらい。

その写真でさえ……確か免許だったかの更新で撮った数年前という体たらく。

ちよつとホラーにも思えるけど人の記憶力なんてこんなもんかって納得もしたなあ。

代わりに今の顔にも馴染んだから案外人って言うのはちよろいもん。

写真を撮るのは好きだし旅行のときにはたくさん撮るけど自撮りはしないで風景とか建物とか物とかだけ。

そのおかげで今や前の僕の、男の僕の最新画像は身分証でしかない免許証だ。

そういえばこの体になったばかりのころに買った服とかを元に調べてみたら、今の僕の体は身長体重ともに小学生の中ほどから……が
んばって高学年の範囲でしかなかった。

がんばっても。

さばを読んでとも言おう。

あくまで平均、それも数あるサイトの中から恣意的に選んだ数字で
小学3、4年生。

……うん、分かってはいる。

でもまだ認めたくないんだ。

時間が経ったら認められるんだろうけど、あと1、2歳は低いのか
もしれない。

本当はもつと年は上のはずってという根拠のない直感があるのが気
になるけど、たぶんただの願望。

ともあれ個人差の範囲でがんばって2年くらいはサバを読んでお

きたいところ。

数字のマジックで小学校高学年つてことにして、内面の充実でさらに2年で中学生つて言い張っておく。

いくらなんでも小学生扱いは嫌だし。

大の男が子供扱いは嫌なんだ。

……せめて身長さえあればなあ。

「ご覧くださいい！この美しい景色！これは遠くまでよく晴れていないと見ることのできない……」

「おお……」

すごい景色が画面に映る。

なんて言うか綺麗な風景つて「きれい」とか「すごい」っていうひと言で片付いちやうよね。

こうなる前には年に2、3回くらい行つていた旅行先を選びたいくらい、どこかの山の上から町と海を一望にするパノラマ。

ロープウェイがあるほどじゃないけど女性でも楽に登れるらしい。乗り継いで2時間程度の日帰り圏内だしな。

意外と近いところには行かないもんだ。

旅行中だと2時間なら往復でも移動できるのに家からだ嫌になつちやう。

どうしてなんだろうな。

……もつとも、当分は行けそうにないけども。

物理的に行くことはできるけどこの見た目でひとりで行動していたら絶対に見とがめられそうなのと、あと体力的な面で無理なんだ。

体力といえは体のサイズが根本的な原因だとも思う。

小さい体のせいで家の中でさえ生活すること自体に苦労したしな。

小さいころはよく感じるがあった手や部屋がやたらと大きく感じる現象……アリス症候群だっけ……が最初の数日はよく起きて戸惑ったのを覚えている。

この体のせいで起きたのか、それともこの体が変わったことで起きたのかは不明だけど、とにかく空間の認識がおかしなことになっているあいだは強烈な不安感に駆られていた。

家具や手すりなんかが高いのは数日で慣れたけど、僕の部屋とか台所とか毎日使うけどどうしても背と足の長さが足りないところ。

そういう場所には小さいころ使っていたような踏み台を置いてようやく前に近い感覚で暮らせるようになったんだ。

今では家じゅうの至る所が10個くらいの踏み台に守られている。

踏み台さんたちがいなければ僕は何にもできない。

幼女ってこんなにもか弱い存在なんだ。

こんな状態で観光地なんて行ったらダンジョンってしか感じないだろう。

足のうらが下に着かないから落ち着かないせいでイスから足をプラプラさせていたのや、背伸びをしても高いところに手が届かなかつたのを今さらながら思い出す。

っていかこの体になってから無意識にしよつちゆうしているのに気がつくし、直らないし。

とつくに忘れていたと思ってたのに記憶にはきちんと残っているっていうのに感動したけど、できれば二度と経験したくなかったなあ。

あんまりにも子供っぽいって、ふとした瞬間に自覚してめげるから。

◇

女物の服。

僕には一生涯縁がないって思ってたそれら。

スカートやワンピースっていうものにも……家に籠もっているあいだ2日に1回くらいの頻度で着てみたらさすがに慣れてきた感じ。

ふともも周りに空気が来て涼しく感じるのも股ぐらがすーすーするもの、慣れてみたら清涼感と解放感があって過ごしやすいものだ。

とりあえず気温が高い季節はありがたい。

冬は寒くなるのかもしれないけど、そんならズボンにすれば良いしな。

そう考えると女性は使い分けできて良いよな、便利で。
なってみてから思う。

本物の女性からは怒られるかもしれないけど僕も一応肉体的には女だ、文句は言わないでほしい。

でも心は男って言う都合のいいところ取り。

視線を少し落とせばスカートとふとももが見えて何となく嬉しくなる。

こういう視覚的な要素で気分がよくなるっていうことは、少なくとも体は見た目通りでも精神、心のほうはまだまだ元の「男」のままで見られてる様子。

中身まで幼女化……女の子になって幼くなるなんて勘弁だし。

そうなたらもはや僕は僕じゃなくなる。

僕って思い込んでる幼女って言う最初に思い浮かんでいたやつだ。

アイデンティティの喪失。

できたら回避したいところ。

……どうせなら僕好みに女の子らしい特徴がある体型だったらもうちよつとだけよかったかもしれないけど贅沢だな。

うん、贅沢だ。

こうして女の子の格好をしていても楽しめるのはあの地獄で着せ替え人形になっていたときに感じたゲームのアバターを着せ替える感覚、あれのおかげもあるかもしれない。

つまり僕は元の体のままで一時的にこの子の体に幽霊みたいに憑依しているんだって、あるいは体感型VRゲームをしているんだって思える実感があればよかったんだ。

僕は幽体離脱なんて信じていないし最新型のVR機器でもここまですリアルなものはないけど、どうせ不思議なことなんだから不思議で返そう。

僕はあくまで僕のままであって、この体は借り物っていうか使っているだけっていうか、そういう感じで過ごすことで心の安寧を図っているともいえる。

そういうのを自覚はしているけど、まだ精神的には安定している感じ。

……スカートだとちょっと油断したら太ももまでまくれたりパンツが覗いたりするけど、まあ家の中だし僕しか見ないんだし少女未満だし、あまり気にならない。

それどころか気にならなすぎるのとエアコンをなるべく使わないうようにしているのにカーテンごと開けられないっていう制約のせいで、外の暑さがダイレクトに入ってくるようになったから、しようがなく……しようがなくパンツの上を履かないことが多くなってきた。

つまり上はシャツ、下はパンツだけという格好だ。

シンプルイズベスト。

この体になった朝にブカブカシャツ1枚だったときのインパクトが根強い。

幼い女の子の下着姿とかは僕の趣味じゃないけどとにかく楽しだし、そんな格好でも前の男の体のように視界に入る毛で嫌気が差したりしないからしようがないよね？

どうせ楽にするなら履かないのが一番だしなにより目の保養だし。

ふともも属性はなかったはずだけど、この体にはそれしかないのでこの体もあるかも。

胸も尻もない寸胴だし、女らしいところといえばそれくらいしかないからなあ、今の僕は。

それが良いのか悪いのかは……今の僕にはよく分からない。

けどとりあえず、このラフすぎる格好で夏を乗り切ろう。

……これは、僕の中身が男のままだって言う確認にもなるんだ。

もし、まぶしいふとももを見てもなんとも思わなくなったら……そのときは正真正銘の幼女になったってこと、かもしれない。

7話 ハサミ事件 2/2

「よし」

せっかく女の子になったのに色気の欠片もないっていう悲しい事実は置いておいて現実の話をしないと。

僕が女の子——幼女じゃないって信じたい——1ヶ月が経ったことになる。

正確には40日くらいだけど毎日が日曜日な僕にとっては誤差の範囲だ。

外は春休みから春を通り越してもう初夏へと季節まで変わってきている。

貴重な4月っていう春まつさかりを引きこもって過ごしてしまったことになる。

普段だったら食材の買い物と散歩とで季節感くらいはあるもんだけど……今は完全な引きこもりだから実感がすごく薄い。

月単位の引きこもりはもう何度かやらかしたしこれとってたいしたダメージはないんだけど、気分のいい春を逃すっていうのは僕にしても珍しいこと。

寒すぎる冬と暑すぎる夏とじめじめし過ぎる梅雨くらいな良くあるんだけどな。

けど良い季節なんだし、そろそろいい加減に外に出ないとおかしくなりそうし。

窓際でひなたぼっこをしたり筋トレとかで体を動かしたりしてしのいできたけど、さすがに体も心も悲鳴を上げているのがわかるようになってきているもん。

僕の家には幼女な僕が居るって知られたらおしまいだからカーテンも窓も開けられないのに家から出ないんだもんな、そりゃあそうだ。

洗濯物を干すときだけ道に面していなくて狭いベランダでささっとだけど、そんなのは全然足りない。

日照時間が少ない地域の人って鬱々しやすいらしいし、しょうがなかったとしても体にも心にも良くない気がする。

……とんでもなく弱い負荷の運動しかできないうえにすぐバテるから筋肉痛すら起きないして当然のように筋肉もつかない体らしい。なんてことだ。

もやしよりも下のランク……鶏ガラかなにかか今の僕は。

体が上げる悲鳴っていうのは体がにぶるとかなまるとかそう言ったのとはまた別の感覚、引きこもっていたとき良く感じてた感覚。

……前によく数ヶ月単位で引きこもれたなあ。

克服しちゃった今となつては絶対にムリだし絶対やりたくもない。完全に引きこもるっていうのは若いからできたことで、大人になつた今じゃムリな耐久レースなんだ。

心にとつて大切だからこそできたこと、今の僕には必要ないもんな。

引きこもる才能を失った代わりに社会に適応できたとも言おう。

どっちが良いのかは分からないけども。

さてきて。

いい加減に外に出たいけど……最近はずよくちよく真夏日も出てきたし、今日も多分暑くなる。

あのとときみたいにフードの中に髪の毛をぎっしり詰め込んで出歩くのにはかなり難しそうだし。

汗だくになって気持ち悪くなりそうだし。

あのとときだって帰ってきたときには結構背中までじっとりとしていたし。

かといつていくら男の格好をしたとしても、さすがに腰まで伸びている髪を出しちゃうとご近所の目がなあ……。

万が一にでも見られちゃったらお散歩中のご老人とかママさんネットワークを通じて数日後にはみんな知っているということにもなりかねない。

お隣にまで届いてしまったら……僕を母さんたちごと知っているあの人だ、絶対に突撃してくる。

それほどまでに口コミとは恐ろしいもの。

用心しすぎてもしすぎることは決してない。
ご近所への聞き込みは捜査の定番だって探偵ものでもやってるし
な。



「ん——…：…う？」
首をひねる。

そんなクセはないんだけど、してみたら髪の毛が首筋をさらさらつ
てくすぐったくて気持ちいいって知ってからはクセになったらしい。
それならどうしたものか。

コーヒーをすすりながら考えるも都合のいい方法が思いつかない。
番組はつまらないしCMも興味がなからなんとなく手元に視線
を落とす。

僕がテレビをつけっぱなしなのは単純にBGM兼時報が欲しいか
ら。
ネットだとおもしろくて1日が終わっちゃうから考えごとには向
かない。

…：…コーヒーの香りは変わらずに良い。
味覚と嗅覚はそこまで変わってない証拠。

ただ炭酸だけが苦手になったんだ。
そのコーヒーはなんとなくでブラック。

黒い液体の上に浮いている僕の薄い色の瞳と目が合う。
下を向くとぱらぱらと前へと流れてくる髪の毛。

きれいではあるし僕は長い髪の毛のほうが好きだけど…：…それにして
も長すぎるよな。

そんなことを毎日のように思っていたんだけど、今日の僕はひと味
ちがったらしい。

「あ」

そっか。

なんで今まで思いつかなかったんだろう。

思いつきつて不思議で、その瞬間までは分からなくて当たり前なのにその瞬間からはなんで思いつけなかったのかが不思議になる、あれ。

その思いつきつてのは散髪だ。

もちろんセルフで。

毎朝毎晩の手入れに外出のときにどうするかって、そもそもが邪魔な存在なんだ。

それならいつそのこと思い切ってばつさり切っちゃえばいいじゃないかって。

ようやく慣れてきたって言っても毎朝寝ぐせと一緒にほつれを梳かさなきゃだし、お風呂じゃ今までの倍以上の量のシャンプーを倍以上の時間をかけてしなきゃいけないってリンスとかまで使わないといけないって。

ドライヤーに10分くらいかかるし、その後にもまた梳かさないといけないって。

調べたら本当はもつとめんどくさいらしいんだけど、めんどくさいことは長続きしないからって適当なところで妥協した結果だ。

特にベッドでごろごろしているときは意識しておかないと髪の毛を手や体で引つ張ってしまつて痛い思いまでするし、そんな髪の毛は短くしちゃえば良いんだ。

ほんと、どうしてこんなにも簡単なことを僕は……。

男のときの短さにするのはさすがにやりすぎだけど、肩くらいの長さ……ミディアム何とかとかいうんだっけ、くらいならいけるだろう。

それなら男でも女でも通用するしな、むしろちょうど良い。

自力で伸ばしたわけでもないし、そこまで未練もないんだし。

むしろ邪魔すぎて持て余してたんだ。

ちよつと合いそうな髪型をネットで調べてみて……と。

「……………よし」

そうと決まれば早速だ。

残りのコーヒーをがつと飲んでむせそうになって、両手でテーブル

とイスを掴みながら踏み台というワンクッションを置いてすたつと着地。

すっかり慣れた一連の動作は華麗だ。

はじめのころはバランスを崩してよく転んでいたけど今は平気。

油断さえしなければ大丈夫だ。

油断さえしなければ。

引きこもりすぎて対人恐怖症を患っていたときに自分で髪を切るために使っていたハサミとかの道具を軽い足取りで探しに行くことにする僕。

捨てた覚えはないし、どこかに一式でまとめてあったはず。

後ろを見る用の折りたたみの鏡とか梳きばさみとか髪を留めるやつとか便利グッズをぜんぶまとめどっかに。

洗面所の下のほうかな。

思い出しながら歩く。

切ったあとの涼しさと軽さを想像して心なしか体も軽い。

ささつとさつぱりしてさつと外に出てさつと歩いてこよう。

残念ながらまたしても特別な休日な連休だからきつとこの前よりも混んでいるだろうけど、外で食べるのもいいかもな。

さすがに今回はあんなことにはならないだろうし。

この、長いあいだずっと日の光の下を歩かないでくさくさしている

この感じも疲れるまで歩けばなくなっているだろう。

日の光に当たって運動をすれば大抵のやなこととはなくなるんだ。

……………ひと月ぶりの外。

買い物もしたいしぶらつきたい。

ビジュアルは思い浮かぶけど名前は思い出せない小物とかオンラインでは探しにくいものなんかを買いたいし、あとは……………。

◇ そうやって僕はご機嫌だった。

◇

◇◇◇ ≡ ≡ ≡ ↑

そんな僕を悲劇が襲う。

襲われた僕は情けない悲鳴を上げて縮こまる。

「びいっ!」

どっから出たのか分からないようなもはや電子音にも近いような叫び声。

それが僕の口から出たものだって気がつくまでに時間がかかったほど。

長期間声を出さないと声が出なくなるあの現象を避けるために適当にひとり言をぶつぶつしていたときで聞き慣れているような……高めだけど落ちついている柔らかい印象の、この体の喉からの声。

それとは違う金切り声に近い声。

それを僕のだって認識してから「こんな声出るんだ」って思った。

そうしてちよつとして落ち着いてくると頭も動くようになる。

「……………」

現実逃避は止めにして目の前の現実を見る。

現実だつて信じたくない現実を。

いつだつて僕は引きこもり体質なんだ。

うるさいくらいに頭の中でまだばくんばくんと響いている心拍の音を聞きながら目をそろそろと開けてこわごわきよろきよろしてみ

る。
肌から感じる感覚的に……無意識でお風呂場の隅に縮こまるように張り付いていたらしい僕の反対側の壁に刺さる、さっきまで持っていたハサミ。

僕の指から抜け出て水平飛行してタイルに衝突してそれを割つて奥の壁にまで刺さつたそのハサミは、まだびいいんって音を発しながら動いている。

動いたんだ。

飛んだんだ。

刺さつたんだ。

ハサミが。

無機物が。

刃物が。

落つことしたとかそう言うわけじゃなくてよく分からない力で、びっくりした。

どれだけかかっていうとここ10年ほどでいちばんの衝撃つてくらいに。

……今のはなんだったんだろう。

そろそろと床に着いたひざがお風呂場のタイルで冷たいけどそんなのはどうでもいい。

さつき僕は、外の気分を想像して浮かれたままでお風呂場に着くと同時に服を。

シャツとパンツだけだったそれを取ってすっぱだかになって、鏡をセツトして髪の毛を思いつきりすつきりさせようつていい感じのところ差し込んだんだ。

つい30秒くらい前のことなんだ。

切ろうとして指に力を込めて、でもなんでか切れなくて、なんでだろつてさびていないことを確認して……きつと今の僕は指の力までが衰えているんだつて思つて力をかなり込めて切ろうとしたんだ。

そうしたらハサミが生き物のようにならうねと動き出してもがき出して指から抜けたかと思つたら、見えなかつたけどたぶん……飛んで刺さつた。

壁に。

タイルに。

しかも薄いとはいつてもタイルつていう石を粉々にして深々と。

あんな力、どれだけびびつても今の僕からは絶対に出ない。

「……………」

頭の中は疑問だらけ、体はそうそうない驚きと恐怖に縮こまつていて考えがまつたくまとまらない。

頭ががんがんしてくるし指先まで震えている。

そうしているうちにハサミが発しているなにかはゆっくりになつて行つて、がしやんつて嫌な金属音を立てながら床に落ちた。

「……………」

単純に驚いたし今になって「刃物が勝手に動いた」っていう事実には恐怖がこみ上げてくる。

心臓が悪い。

まだばくばくしてる。

あれがもし僕の腕とかに当たったりしたら……とか考えちゃったとたんにはわわっと毛穴から冷たいものが吹き出る感覚。

「……ふうっ」

髪の毛が落ちるだろうからとすっぱだかになっていたけど、刺さったあとに跳ね返ってきたり衝撃でタイルの破片とかが飛んできたりしなくてケガをしなかったのが幸いな。

この薄すぎる肌だからちよつと当たっただけでもただじゃ済まないだろう。

いや、刃物の前には男の肌だって簡単に切れちゃうだろう。

「……………」

少しだけ震えが収まってきて手足に力が入るようになる。

僕は意を決してもうしばらく耳をそばだてて警戒して……そつと、そつとドアを開けてお風呂場を覗く。

そこにはさっきの状態のまま転がるハサミとタイルの破片たち。壁はハサミの先端の形にえぐれて中の土……漆喰が覗いている。

「……………」

もう動きはない……みたい。

ただどこにきて予想外の出来事が起きたことで、今さらながら分かったことが最低でもひとつ。

——僕の姿が変わったこと。

これは紛れもなく超常現象の類い。

ただどどつちかかっていうとこれは呪術とか魔法に近いもの。でもそれは僕をこの姿にしただけで終わったわけではなかったらしい。

その効力はまだ僕にかかり続けているらしい。

そんな嫌な事実を知った。

理解せざるを得なかった。

「……………さむ」

体はすっかり冷え切っている。

かいた汗で冷え冷えだ。

もそもそと服を身につけて……パンツがすーすーして寒くって、今でもまだなんとなく怖い感じのする風呂場から離れる。

別にそこまで暗くはないからって電気をつけていない廊下。

さつきまでは何も感じなかったのに、今こうして歩いていると後ろからあのハサミが狙っているんじゃないかって不安で仕方がない。

なんども振り返る。

けど、さすがに映画みたいにホームキングしてきたりはしないらしい。

……ホラー映画を見たあとと同じでそう感じているだけだって知ってはいても、怖いものは怖いんだ。

………なんで今さら。

なんで、今さらなんだ。

なんで今さら新しいことが起きるんだ。

勘弁してよ。

僕が何か悪いことしたのか。

「……………ぐす」

くしくしって腕で目じりを拭う。

……泣いてなんかない。

泣いてなんかないんだ、びっくりして出ただけなんだ。

20にもなった男が怖くて泣くはずなんかないんだから。

僕はとぼとぼと廊下を歩く。

……僕はただ誰にも迷惑をかけないでひとりで静かに生きていただけなのに。

どうしてこんなことになるんだ。

女の子になったこともハサミが飛んだりすることも。

……生きるのって本当にとっても面倒。

ただ生きるだけなのにな。

8話 動揺に次ぐ動揺 1 / 2

ハサミが襲ってくるなんていう、姿が変わること以上に恐ろしい現象。

無機物に襲われるっていうポルターガイストどころじゃないハプニングだ、ホラーもスリルものも大の苦手な僕はたまらずにばばと身支度を済ませてさっさと家を出た。

普段みたいに気をつけるなんてムリだからとにかく急いで逃げた。だってあのままだとなんか怖いし。

ああ言うのって追い打ちがあるって……創作上の世界では相場が決まっているから、無いって分かっている不安でしようがなかったんだ。

僕以外のなにかが勝手に動くなんて状態の家の中に留まっていたられる神経は存在しない。

家の中に何かがいるって時点でムリなんだ。

「……………」

荒い息を抑えながら不自然じゃないようにって周りをきよろきよろ。

とっさだったから家を出るときよく見ていなかったんだけど……運がよかったみたいで周りには誰もいなかった。

……今のはしようがないんだけど気をつけないと危なかったな、今の。

こういうのではれたりするもんだから気をつけよう。

反省はあとでするって決めて目立たないようにすみっこを歩きながら、できるだけ家を離れることにした。

考えごとがあると周りが見えなくなるのは僕の悪いクセ。

普段以上に気をつけながら歩く。

全裸っていう完全に無防備な状態の僕に刃物が……自分の意思かになにかで牙を剥いたっていう異常事態からほんの少し。

世界はあいかわらずに静かで変わりがなみたい。

むしつとして真っ青な空を眺めながら、僕っていう物理的にちっ

ぼけな存在が実感される。

……いちおう僕としてはがんばったんだ。

僕はある後すぐに逃げ出したりはしないで「どうせタイルもハサミもダメになったから」っていうのと「あれは1回限りのものなのか」って確認するために、とつても怖かったけどもう1回……今度は梳きばさみで試してみようってしたんだ。

怖かったからももちろん服を着たり首元にタオルって最低限過ぎる防備くらいはして。

けど、やつぱりおんなじだった。

梳きばさみも……偶然なのか指を痛めないようにって配慮があったのかは分からないけど明らかに普通じゃない力がかかって、まるで生き物みたいなうねうねって動きをしながら器用に指をすり抜けて僕から離れるように飛んで行って、後はおんなじ。

別のタイルを破壊して壁に刺さって落ちてはさみ自体も壊れていった。

そりやそうだよな、お風呂場のタイルなんて相当硬いはずだし。

……ハサミを入れたところとかいろいろ変えたのに刺さった場所はほとんどおんなじだった。

どうせ刺さるなら同じところだったらよかったとかいうどうしようもない感想。

刺さっているのを間近で見たらなんでわざわざこれが僕に刺さる可能性があるのにやったのかとかいうわりと真剣な反省。

せめてちゃんと厚着をしてからにすればよかったのにとか。

こういうときって案外に冷静で意識はちゃんと別のことを考えるんだよなとか、そういうことを数秒で考えてからやつぱりするんじゃないかったってダメージを受けつつ、この現象が髪の毛を切ろうとするだけで起きることを再確認したんだ。

……これはどういうことなんだろう。

まず、こんな危ないのはこの体になってから初めてってことと、その前にももちろんなかったってこと。

前、つまりは元の体で刃物が飛ぶなんていうこの不思議な力を体験

したらすぐに神社でもお寺でも教会でもどこでも良いから駆け込んで良さそうな人にお祓いを頼むはずで、そうすれば気が楽になったはずなんだ。

だから逆にこんなことが起きたのは……封筒を開けるときのハサミとかカッターとかじゃなかったってことで、つまりは髪の毛を自分で切る、それも今の体をもって言うのが推測できる。

ただの状況からの推測だけどなんにもしないでただ怯えるよりは良いだろう。

人はよく分からないものでも理由があればわりと平気になる生きものらしいし。

で、日常生活で行う範囲の飲食だったり入浴だったり髪を纏めるとかそういういたものはトリガーにはなりえない。

じゃないととつくにこんな目に遭っているはずだから。だってもう1ヶ月なんだし。

でも髪の毛を切るってことが日常の範囲から外れるかどうかっていうと疑問がある。

いくら僕がだめなニートだって人間である以上新陳代謝はする。事実今までだってトイレにも行ったし涙や鼻水も出たし爪も伸び

た。
その爪を切ったり紙で指を切ったりしてケガをしたりしたからただ体を傷つける行為とか傷つける刃物が原因だとは考えにくい……はず。

料理だってして包丁も使ったしな。

……料理で反応されたらそれはそれでこんなもんじゃなかっただろうな。

空飛ぶ包丁とか怖すぎるもん。

「……………」

それなら髪を短くするっていう、この見た目を大きく変えるってことに反応したのかな。

そんなんでハサミをすつ飛ばすなんてバカじゃないのって思うけど、それ以外の深い理由が無ければこの思いつきくらいの原因しかない

い。

だってそもそも僕を女の子にして小さくしてそっくり変えちゃったって言う「変身」っていう最初にかかった力は、他ならぬ「僕の見目を変える」ものなんだ。

不思議な力が2回ってあつたらまずは関連性を疑う。

そうすると僕の見た目のことしか思い浮かばないんだ。

なんでこうなるのかとかそもそもどうしてこの幼女になつてのとかという理由にはまったく見当がつかないけど、この力は僕の見た目をこの少女にすることが目的で、爪とおんなじように要らないはずなんだけど見た目をはっきり変える役割がある髪の毛を……短くするのに反応したとしたら。

ぐるぐるって回ってた僕の意識がぴったり止まる。

——時間が経つてもこの見た目を変えないようにするんだつたら。

こんな子供の姿から成長するっていう当たり前のことも……？

「……………」

通りを走る車の音とか遠くのサイレンの音とかが聞こえる。

汗がぶわつとにじんでくる。

今日だけで2度目の感覚。

気がついたら立ち止まっていたからそろそろと歩き始める。

なんだかすぐ後ろから追いかけられてる気がしてちよつとだけ早歩きで。

……とつてもイヤなことを思いついちゃった。

なんで僕はこう悪い方向へだけは思いつきがいいっていうか勘が働くんだろう。

生来がネガティブだからか。

あるいは推理小説を推理しながら読む派だから、なんだろうか。

……この幼い姿。

身長体重は小学校低学年の全国平均で薄い色の髪の毛は腰まであつて、おんなじ色の目は夏が近づいて来た日光で痛くなって、肌が

とつても薄くて白くって……知らない顔の「少女」って呼ばれる存在の姿。

手のひらはスマホの操作もキーボードもちよつと困る程度にはちつちやくて丸っこくて。

成長して大人になるという前提で考えて動いているわけだけど、もしこれがまちがっていて「そもそもこの姿から変わらない」んだとしたら。

そこまで思い至る。

思い至つてお腹と胸が痛くなる。

ストレスに弱いのは相変わらず。

それが救いになる程度に「前の僕」と「今の僕」はかけ離れていて。

「……………」

保留しておこう。

今すぐに結論を出しても意味がないしまちがってるかもしれない。

また何かが起きるかもしれない。

さつきのことでもまだ動揺しているんだ。

こんな状態で考えても悪い方ばかりに考えが向くだろうし、現に今もイヤな考えを振り払うのだけで精いっぱい。

真後ろから怖い何かがひたひた着いてくるって言うホラー映画みたいな感覚が離れてくれないんだ。

適当に人の多くて忙しいところをぶらぶらして気を紛らわせよう。

心細いときは目も合わせなくて良いから人が多いところが良いんだ。

僕はむりやりに頭の中に湧いてくる考えを押しとどめながら、まだお昼になっていないのに真夏日な炎天下を……この前揃えた春の服装にパーカーという服装で日光にじりじりと焼かれながら繁華街へと向かった。



ぱんつ。

僕が怖い目に遭うなんて想像もしてなかったあるときの僕の手には真つ白いぱんつがある。

ぱんつでもパンツでもいいけどニュアンスが違いそうな1枚の布きれ。

男の僕が現物を現実で目にしたことがないそれは、よりにもよって僕が男じゃなくなってから初めて目の前に広がっている。

お風呂上がりで全身の肌が火照っていてしっとりしていてうっすらと水分が光っていて、タオルで拭いただけの重い髪の毛が体に巻きついている状態。

すっかり慣れた女性用というよりは女の子用の……キャラクターがプリントされてる女児用じゃないやつだ……パンツを手にとって、ふと思うところがあつて掲げてみるている。

母さんが生きていたところは洗濯なんて畳むのすら手伝ったことなんてなかったし、母さんたちが居なくなるその前にも後にも女の人と交際したことも……この布きれを見て触るって言う機会も、当然ながらなかった。

だから先月苦勞して手に入れたささやかなりボンが前についているだけの真つ白で小さいこれが、僕が初めて見て手にする女性用の下着。

悲しいけど実物を目の前にするだけでちよつと嬉しくなるのが悲しい。

男なんて所詮はそんな生きものだ。

プログラムされた本能には抗えないんだ。

つまり僕の脳みそ、意識は男……少なくとも女の子を気にする作りのままってことでちよつと安心できる。

これで嬉しいって思ってる内は。

女の人でも女の子が好きなのは居るし男でも女の人が好きじゃない人も居るけど、僕はごくごく一般的な感性しか持ってないからこれでいいんだ。

パンツ。

ぱんつ。

男物のブリーフともトランクスとも違ってボクサーなんかともまた違うすつきりとした三角形の布。

下着属性はもともとなかったしそもそも子供は対象外だったんだけど、それにしてもあいかわらず視覚的なインパクトはすごい。

ただの布なのにな。

いかにあふれかえってる娯楽コンテンツで刷り込まれてきたかっていうものだ。

見たこともないのに好きでたまらないっていうよく考えたらなんか恐ろしい現象。

その純白を手にとってよく観察してから脚を通していく。

まだ新しいから洗えば綺麗になるけど、きつとそのうち男物とおんなじでだんだん汚くなるだろうから買い替え続けるもの。

人間だから当たり前のこと。

それは穿く前に内側か外側を確かめてからじゃないと前と後ろを間違えやすいもの。

左右が分かれてる靴下とかシャツの表裏とかと似た感じに。

物理的に飛び出しているのをしまうための膨らみとか穿いたまま出すっていうすつごく便利な機能のための切れ込みがないんだから、とにかく間違えやすい。

男がぶらぶらさせずに隠すためだけに穿くただのパンツと女性が穿くぱんつとの1番の違いだろう。

イメージ的にも機能的にも。

まあきちんと見れば広げなくても前後は分かるしタグみたいに目印がついているんだけど、ぼーっとしていると今でもときどき間違える。

これなら手に取っただけではつきり見えるリボンとか刺繍がついているものを選べばよかったか。

いやいや、あのままだとどう考えてもピンク系かキャラクター系になっただけからこれでよかったんだろう。

さすがにそういうのは勘弁だ。

僕の成人男性としての自尊心が穿くたびにごりつと削れていくだ

ろう。

ぱんつの前と後ろを間違えるとお股がゴワゴワしておしりが柔らくなるし、なにより穿いたときの感覚が違うから1発で分かる。

違和感はそのほどないんだけどそれでもなんか違うっていう感じになるんだ。

こんなものでもちゃんと細かく考えて作ってあるんだなって感激だ。

あとパンツってすぐくびつちりしている。

それはもうぴつちりとお股全体を包むようにフィットしているんだ。

感覚的には水泳教室に通っていたときの水着くらい？

昔過ぎてよく覚えてないけど多分そんな感じ。

なんていうかお股全体を締め付けられるっていうか守られているっていうか、なんていうか……慣れるまではきつくてイヤだったけど慣れると温かみがあるっていうか安心するっていうか？

不思議な感覚。

念のために調べてみたし店員さんが合っていないって言わなかった通りにサイズは合っているみたいだけど、まだこの感覚に違和感がある。

特にいちばん大切なぶんど太もものつけ根が。

幼児とは言っても構造上は立派に女の子らしい。



「はあ……………」

そんなどうでもいいことを思い出しながら僕はわざとらしくため息をつく。

クーラーが効いて涼しい屋内、人がたくさんいる場所で——顔も髪の毛も出して。

何十回めかの拒絶をこれ以上わかりやすい形はないくらいに。

僕の全力を尽くして。

言葉にできないこの気持ちを届かせたくって。

「ただ僕の大切なこの気持ちは伝わらないっていうよりは無視されている。」

なんてことだ。

やっぱり世界は幼女に厳しい。

「ですから是非一度スタジオの方まで来てみてください！　きっと気が変わりますからっ！　響さんと同じくらいの年の子もいますしお友だちにも自慢できますし！　今でもテレビや雑誌って言うのは全国の女の子たちの憧れなんですよ！　もちろんネットでもっ」

僕は女の子じゃないし憧れなんかしない。

そうは思うけど口が動かないんだからじっとするしかない。

高い声の女の子が今みたいなのセリフを微妙に変えるだけでリピートしながらまくし立てる。

「ですから今井さん、落ちついてください……断られましたけど名刺は受け取っていただけただじやないですか。今はそれで満足しましょう。ご興味があまりないようですし、しつこいと悪い印象しか持ってもらえません。いつも言っているでしょう、強引な勧誘は逆効果だって」

もうひとりの男の人は僕の味方をしてくれる。

いや、この人がそもそもその発端なんだけどな。

さらに言えば僕は知っている。

こういう飴と鞭って言うペアの組み合わせはうさんくさい人たちの常套手段なんだ。

「……………」

だから僕はシャツを両手で掴んだままじっとこらえる。

「いいえ萩村さん！　私の勘がささやいているんです！　ここで最低でもスタジオ見学のおKをもらわないとこの子が……響さんが私たちの元に来ることはもう無いんだと！　そう！　そうなんですよ！

萩村さんほどじゃありませんが私にだってわかるんですよ！　直感なんですっ！　この前スタジオに来たあの子ときだってそうだったじゃないですか！　今、このタイミングが命なんです！　袖触

る縁ですよ！」

僕の右側でそう断罪する女の人。

「まあそれは分かりますけど……響さんは今のところご興味がないようですし、今井さんの説得を受けてもその気にはなっていませんし。

……私としてはあくまでご本人がご自身からという意思を尊重したいんです。 学業や部活、親御さんの意向もあるでしょうし……」

僕の左側でそう弁護してくれる男の人。

ヒートアップしていく今井さんというらしい女の人とそれをなだめる萩村っていうらしい男の人。

あとはその真つ正面で耐えている僕。

まるで裁判所にいるみたいな感覚だ。

この組み合わせも会話も人の注目を引くには充分だったみたいで、とにかくまあ見られる見られる。

やめて見ないで。

僕は目立ちたくないんだ。

……人の多いデパートの1階、それも大型連休中のとあつてごみごみしているところに居る僕と来ちゃったふたり。

しかも座って休める中央のスペースで騒いでいるんだからそりゃあ誰だつて見るだろう。

僕だつて他人事だつたら立ち止まつてのぞき込むくらいはするかもしれないんだし。

警備員さんはどこだ。

困ってる幼女がいるつていうのに頼れる人たちが来る気配がない。

「……………」

しかもスマホを向けられて——明らかに撮られている気がしてさらに嫌な気持ちになる。

立ち止まつて見なくてもいいだろうし見るのならもつと離れるかしてほしいし、なにより無断撮影も録画も止めてほしい。

肖像権とかどうなってるんだ。

かつてないほどに大量の人から注目されて……まあ注目されているのは主にこのふたりだけなんだけど。

だって僕はだんまりだし、そもそも背が低いから人垣の最前列の人からしか物理的に見えないし。

けど僕が見える10人くらいの人からは僕が見えるわけで見られるわけで。

すつごく勘弁してほしいけど逃げるに逃げられない状況でふたりの口論は続く。

ついでに、つい教えちゃって後悔してるけど僕の名前を大声で連呼しないでほしい。

やめて。

「そうなんですけど、そうなんですけど……——っ！　今じゃないとダメなんですよ。　萩村さんそこをなんとか！　なんとか抑えて一緒に説得を!!　なんなら他の子たちを応援に」

「今井さん声、声！　声を抑えてください」

「今はそんなことを言っている場合じゃないんですっ」

そんなこと言ってる場合だよ。

頭の中だけで反論。

そういうのだけが得意。

こっそり男の人……萩村っていう名前を応援するも今井っていう人はへこたれない。

「……………」

たぶん大人に叱られた子供みたいに見えるだろう僕はうつむくしかない。

こういうところで大声で堂々と発言する元気があればニートはしていない。

ニートをなめないでほしい。

なめられた結果がこれなんだけども。

——その騒ぎは収まるどころかますますせわしなくなっていく。

いつになったら終わるんだろうな、この茶番。

そう思いながら僕は帽子のつばをギリギリまで下げながら諦めずに逃げる方法を模索していた。

……いざとなって全力で走ってもあつさり捕まえられる前に転び

そんな程度には自身の無い体力を思い出して僕はしよげた。

◇

うんざりする目に遭うって知らなかった……ハサミに襲われたつて言うのをすっかり忘れるくらいの悲劇に見舞われたのは偶然。

こんな偶然があつてたまるかつて思うけど実際に偶然なんだ。

そんな僕は日陰を選んで歩いていたらいつの間にか駅前に来てしまっていた。

せめてもつとマイルドなワンクッションがほしかったとか未知の力に対して意味のない要望を頭でぐるぐるさせながらハサミのことばかり考えていた僕。

そのせいで完全に油断していたんだ。

というか少女になるって言う……半ば魔法みたいな力がかかつているなんてすっかり忘れるくらいには慣れていたのもあって、あんなのは予想もしていなかったしそもそもできないものだったからしようがない面もあるんだけども。

「ふう」

暑かった。

暑かったんだ。

それもあつたから絶対に僕の髪の毛と顔を見られないようにっていう意識がちよつとだけなら……って気が抜けてたんだ。

家の目の前じゃないしっていう油断もあつたかもしれない。

急いで服を着て飛び出して来ちゃったから結局この前来たときと同じような格好で同じ場所に来ることになった僕。

春用の服装だったから歩いてくるだけで日差しと熱気で首筋が蒸れていた。

頭の後ろから肩がむしむししていた。

新鮮な不快感。

知りたくはなかったその感覚。

あまりに多い人で嫌気が差しつつも暑さにはあらがえなくって、人

の波に乗って手近なデパートへしぶしぶと入っていくと入り口を通り抜けた瞬間から一気に清涼感で……僕の警戒心はゼロになった。

ああ……涼しい。

僕はもうなんにも考えてなかった。

涼しくなったことで今度は汗が気持ち悪いつて気づいてちよつとだけフード取っちゃってもいいよなつて思っちゃって。

ハサミがちらついで落ち着かなかった緊張が解れたのと久しぶりに外に出て満足しているのと涼しさでぼーつとしていた僕は、なんにも考えずにフードと帽子を外して涼をとる愚策をおかした。

「……………ふああ」

変な声が漏れるけどしようがない。

天国だつて思った。

実際には地獄の入り口だった。

首より下の髪の毛は服の下のままだけどそれでもぜんぜん違う感覚が嬉しくて。

これからはもうエアコンなしでは厳しいな。

梅雨まではずつとこんな感じみたいだし家でもクーラーかけよう。

これまでは室外機の音とかを気にしてたけど熱中症とか怖いしとかどうでもいいことを考えながら素顔をさらし続けて。

でも髪の毛が長いと耳周りや首が暑苦しいな、特に夏は。

髪を切れないなら後ろで纏めるしかないか。

この見た目ならどんな纏め方でも行けそうだけどもつと幼く見えたらアレだしな。

「うーん」

そんな、ほんつとうにどうしようもないことをしながら僕は歩いていた。

とりあえずはこのままロビーの空いているソファとかに座って体が充分に冷えてから考えよう。

そうしていつものクセで、ただ人の波に乗ってぶつからないように目的地にオートで行く機能を有効にしていたのがとどめだった。

「……………あの、すみません。 ……すみませんそちらの方。 あの、美し

い髪の毛の……そう、あなたです。　少しだけおはなしの方よろしい
でしょうか？」

そうして僕は目の前の猛獣に気がつかずに頂かれにのこのこ歩いて
行っていた。

ここで「よろしくないです」って言って素通りできたら最悪は防げ
たのに、僕はそれに気がつけなかったんだ。

だから僕は今でも左右からの弁論をじっと耐えているんだ。

8話 動揺に次ぐ動揺 2 / 2

僕は普段ぼーっとしていているように見えるらしい。外に居ようと頭の中は家の中だからだろうな。

興味のあること以外に関心を一切に向けていないって言うのが分かる。

それが僕って言う生物の生態だからしょうがない。

だからと言って話しかけやすい雰囲気を出したりはしていないらしくって、お店とかでも基本的に話しかけられたりはしない。

間違っても、お店とかじゃない普通の道で……場所とかを尋ねられることす二十数年の人生でも数える程度だ。

だから声をかけられた相手が僕なんだって最初は気づけなかった。

だって僕に声をかけてくる人なんて居ないって思ってたらしうなるよね。

実際学校だって電車でそこそここのところだったしで地元知り合いいも居ないし。

あと、単純に声がものすごく遠く……高いところからだってたつてもあるかな。

身長差は劇的だ。

「そこの方」とか「あの……」とか「お忙しいところを」とか一生懸命誰かに声をかけようとしている人がいるんだなーって思ってたらしうかの僕だっただなんて思うはずもないんだし。

見知らぬ人から声をかけられたって、それが僕だったらしうって気がつくまでかかっちゃったのはしょうがないこと。

だからやつのことで顔を上げてその人と目が合って僕らしうって分かったけど、だから何だっと思う。

僕？

雰囲気的に僕だよな。

けど何で僕？

最初に浮かんだのはそういうハテナだけ。

邪魔にならない良い感じのところ立っている僕の目の前にその

人は居るんだし、声をかける相手を間違えたとかいうわけじゃないさそう。

目は合い続けてるし。

けど……なんで？

いや、ほんと。

ていうか誰。

今の僕は子供だから知り合いなんて……それにしてもでかいなあこの人。

目が合う、つまりは僕が伏せていたらしい目を上げてから首を上に向けて行って照明とかがちかちかするって感じるくらいになってようやくの角度。

この体になってから慣れた上を向くっていう動作のまま固まる。

……そこまで近くないのにしつかりと上を向かないと目が合わない。深い身長差だ。

普通のイスにも座るんじゃないなくてクッション敷いた上で正座とか女の子座りで乗るって感じなんだもんな。

うん、知ってた。

けどもその人を見て思う。

……黒いスーツって暑そう。

こんなに暑くなってきたのに……制服とかとおんなじで夏服とかあるんだろうか。

大変だなあ社会人は。

そんなことをスーツに袖を通したこともないニートな現幼女が思う。

学校が制服だったからスーツ要らなかつたもんなあ。

「改めてお忙しいところを……いきなりで済みません。私は萩村と言って……こういう者です。芸能活動。……ご興味は、おありでしょうか」

とつとつと話す人って僕は好き。

だって僕自身も台詞を考えないと発音できないタイプだからその

気持ち分かるし、嘘をついてなさそうって思うから。

あとなによりもそういう人って話すのがゆっくりだから楽って言うのもある。

聞き取るのだって集中力が要る僕みたいな人にとって、おしやべりな女の人……お隣さんみたいな人は天敵なんだ。

で、僕が一方的に好印象を持ったその人。

元の僕よりもずっと背が高く、体格がよくって、元の僕くらいの年齢と見る。

普通の人は社会人って言うものだからもしかしたら僕より若いのかもな。

ほら、苦勞が少ないと若く見えるっていうし。

その、萩村と名乗る彼はかがむようにして……それもわざわざひびきを下ろして僕と無理なく視線を合わせられる高さまで下がってきて名刺らしきものを渡してくる。

ふむ、真摯で紳士な人だな。

確かに上からのぞき込まれる感覚は好きじゃないから嬉しい。

背が縮んでから分かった気持ち。

……けど、芸能活動。

これっぽっちもご興味ないけど？

反射でそう思ったけどもちろん口にできるわけはなくて……とつさに頭の中だけで反応しているうちに名刺を受け取っちゃったけど、これって勧誘っていうものなんだよな？

そう言ってるし。

いわゆるスカウトってやつ。

怪しい系のしか思い浮かばないけど……さすがに子供にそんなことを白昼堂々としてくるわけはないから純粋なそれだと思う。

けど本当に町中でするんだな。

今時はネットで応募って印象だったけど。

「……………」

「その他大勢」っていう素通りされるはずのグループに属してきた僕。こんな風に知らない人からアプローチを受けたのなんて初めてだ

から、どう対処すればいいのかわからない。

「……………」
……………どうしよう。

こういう場合にどう反応すれば良いのか、さらっと断るシチュエーションはいろいろあるんだけど、肝心のその知識が全て人からの借りものだから実戦なんてできない。

ぽけーつと名刺を受け取ったままで口も開けたまま、ただその人の顔を見るしかない僕は年相応に見えたんじゃないかな。

◇

でも僕はNOって言えた。

偉い。

相手が男の人で、それも歳が近いからだろうけども。

不幸中の幸いっていうやつだな。

「ご興味は」

「ないです」

「歌とダンスとトーク……………どれかだけでも」

「だからありません」

「ええと、こちらに載っているような、あなたのような若い世代にも人気の」

「まったく知りませんし興味もありません」

「しかし」

「僕に構っても時間の無駄ですよ？」

こういう営業や勧誘に慣れている手合いには感情的にならずとことんセメントでばっさりの応対が鉄則。

知識としては知っていたけど実践するのは初めて。

インターホンとか電話越しで経験をちよつとだけ積んだ記憶で無理やりに口を動かす。

けど初めてにはなかなか良い感じなんじゃないかな？

みじんも希望を持たせない口調できっぱり断ってるしな。

「どうか1度だけ」

「残念ですが」

「……………」

勧誘には申し訳ないって思わない気持ちが必要。

あっちもお仕事だから見込みゼロならかえってありがたいはずなんだ。

利害が一致しないんだったらお互いに無駄な時間は使いたくないもんな。

そう思つてのインターホン越しとおんなじ感じできつくりお断り。

子供にここまでではつきり言われるのは初めてなのか固まる彼。

ふむ、良い感じの空白ができた。

後はさつさとさよならするだけだ。

——そう思つたのは判断が甘かつたんだろう。

ちよつと前の僕と入れ替わりたいつて思う。

時間なんて戻るはずがないのにな。

夜寝る前の妄想もほどほどに、だ。

……初めに勧誘してきたこの萩村さんっていう人は常識的でまともで言葉が通じたから、こんな感じでつつがなくお断りができそうだった。

諦めた雰囲気だったからお付き合いしただけの話によると、この人たちはどこその事務所で、いわゆるアイドルとか呼ばれる人たちを育成しているらしい。

名刺通りでわりと有名どころだったたりするみたいだし、だからこそがつついてなくてお別れできるってほつとしちやつてたから適当に聞いてたのが命取り。

今日用事があつて駅ビルなんかに通りがかつたところでもたまたま僕を見かけたつてことらしくて、たまたま移籍つてというのがあつたから新しく人を探していたところにタイミング悪く顔を出した僕がいたつて形だとか。

これは声をかけなくちゃつて思つた次第なんだつて。

……僕にとってはタイミング悪すぎる偶然だな。

悪いことには悪いことが重なるんだ。

あと1分でも僕がこの人がズレていれば見つからなかったはずなのに……まさかこんなことになるなんて。

やっぱり、気、緩んでたのかな。

そうとしか思えない状況なんだ。

朝のことがあったからどうしようもなかったかもしれないんだけど、気をつければ良かっただけのことだもんな。

このときはまだ彼、萩村さんからの軽い自己紹介とアイドル活動の説明を簡単にされて、最近お世話してるっていう子たちの写真や動画を見せられたりしただけ。

「じゃあそろそろ」って言ったらすさっさと身を引こうとしてくれたし、悪い人じゃない。

声をかけられた当初こそ「やだなあ……」って思ってたけど、こういうのに慣れているのか説明が簡潔で分かりやすいし勧誘特有のねちっこさがなかった。

だから終わるころには好印象でばいばいしようとした。

……これを狙ってやったんだとしたらとんでもないやり手か、さもなければ僕がちよろいだけだな。

どっちなんだろうな。

人と接する機会が極端に少ないからちよつと良くされただけで好感を抱くんだ。

内気な人間特有のあるあるらしい。

「分かりました、非常に残念です。間違いなく少ない準備期間でのデビューを確信しているのですが……今回はこれでお暇します。

……その名刺だけ受け取っていただけのしょうか」

「いいですよ、受け取るだけなら」

すぐ捨てるチラシとおんなじ扱いで良いんだったら。

「ありがとうございます……親御さんにも、ぜひ。時間が経っても構いません、私たちはお待ちしていますのでご興味が湧きましたら……」

「そうですね」

湧かないって断言できるけどな、親もいないし判断するのは僕だけだし。

成人しているからこそその強気だ。

肉体的にはともかく法律的に。

けどとりあえず突っ返したりはしないで素直に受け取っておく僕。

会話を円満に終わらせるためについていうのとなにかに使えるかもしれないって打算だ。

現状手元にある連絡先が権利とお金と血縁関係しかないからな。

どれも僕って人間相手じゃなくって死んじやった親のつて始末なんだ。

……………改めて自覚して寂しくなった。

ネガりはじめてきたところでさっさと離れておこう……。

——そうやって適当に相槌を打ちながら別れようって瞬間。

「では」

「わあっ！ 萩村さんすごいじゃないですか！」

「!?」

変な声出さなかった僕は偉いって思う。

「こんなにオーラある子を見つけたなんて！ それに今はいないタイプの子ですし……しかもこんなに幼くてぴったりじゃないですか！」

次期のユニットの件いけますよ！」

そうまくし立てながら無理やりに割り込んできたのが今井っていう悪魔さん。

萩村さんと知り合いみたいだし、この人がたまたま来たのかそれとも見計らっていたのかは分からない。

だって服装は萩村さんの目立つびっしてしたスーツ姿とは違ってふつうの私服だしな。

私服って言っても……どう表現したら良いのか分からないけど、買い物とか食事だけが目的でぶらつくような女の人の格好じゃなくて、社員証をぶら下げていてもおかしくない感じに派手なところが無いオフィスビルから出てきそうって印象の私服を着た女の人。

ものすごく曖昧だけど元引きこもりなんだからしようがない。
社会に出てないニートの精いっぱいの観察力と理解力だ。

この人の歳も、たぶん元の僕と同じくらい……だと思っただけで化粧つてすごいから確かじゃない。

まあ話し方はまだ大学生が抜けていないって感じで僕より子供っぽいつて感じるあたりきつと若いんだろう。

見た目だけならまともな人……だけどいきなり大声で割ってきたから僕の印象は最悪だ。

思いつ切りマイナスに振り切っている。

ものすごくまともな事務所だっけって印象を持った萩村っていう人のいろいろをぶち壊しな今井って人。

……うるさい女の人は嫌いなんだ。

「アイドルしましょう！」

「しません」

「同級生の女の子にも……男の人たちからも、みんなからモテモテですよー」

「興味ないです」

「みんなの憧れになりますよ！ あなたならきつと輝けますっ！」

「僕は憧れていませんし輝きたくもないです」

「僕っ子なんですっね!! 良いです！ 属性いっぱいすね！ 話し方も雰囲気もクール系ですし将来有望ですっ！ ……ああその目つき、表情！ いいです!! そういう子は満遍ない人気が……！」

「……………」
相手をすればするほどに切り口を見つけてきて同じような会話を何度も何度も。

食い下がるっていうか、僕がYESって言うまでは絶対に諦めないというのが見えている。

今どきこんなに強引で問題は起きないんだろうか、いろいろと。

まあ見た目は確かに子供だし、大学生どころか社会人になってもこういう断る経験を何度かしていないと押しに負けて「話だけでも……」って押し負けるのを狙っているんだろう。

狡猾だな。

僕から今井って人への好感度はダダ下がりだ。

芸能界なんてブラックオブブラック、しかも仕事自体が「人に見られて覚えられる」っていう僕にとっては相性が最悪のもの。

絶対にやらないっていう意思と事情がなければ「めんどくさいから見学だけでも」ってずるずる行きそうだし実際に有効そうな方法だな。

しないけど。

……しそうにはなっているけど、しないんだから。

けどもそうはいつでも悪魔な今井さんは引き下がらないから、同じように勧誘されて同じように断るっていう無限ループに入る。

反射でああ言えばこう言うを繰り返す中思う。

……それにしても今の僕はそんなに目立つんだろうか。

確かに長くてさらさらで色素の薄いこの髪の毛は、黒髪が大半の社会では何もしていなくても目に留まる。

目鼻立ちも地味だった前の僕に比べればダントツではあるんだろう。

それは分かったた。

けども……その髪の毛は短くできないってのがつい先ほどに証明済み。

つまりは被って誤魔化すしかなかったんだけどそれを忘れて涼んでいたって言う……。

つまりはポカミスだな。

ああ、学生のころ試験でどの科目でもささいなミスをしてもったいなかった記憶が。

今井って人とは絶対に目を合わせないように背けながら思う。

……でも、ここまで熱心に勧誘するほどじゃないって思うんだけどなあ。

ただの青田買いか人手不足なのか。

それとも単純にこの人の押しが強いだだけか。

……絶対にこの人の性格だな。

同僚っぽい萩村さんは引いたら引くいい人だったんだから。だんだん人目についてきたからもうフードは被り直してるけど……こんなことになるなら取らなければよかった。

つくづくついさっきの油断が命取りだったと身にしみる。

後悔は必ずあとからやってくるもの。

僕はいつもこうだな。

けど、ほんとどうしよう。

「というわけで響さん！ 私、自分でもわかるくらい強引で本当に申し訳ないんですけど」

分かっているならご遠慮して？

「でも一回！ たった一回で良いから来てください！ 来て、現場を見てください！ どうしてもイヤなら近くでやっているロケとかコッサートをお客として見るのでも構いません！ ぜひ、ぜひぜひ、どうか、なにとぞ……」

どうしてって思うくらいの食いつきな今井さん。

強引すぎるとかえって引かれるって分からないだろうか。

「今井さんいい加減にしましょう………ほら、行きますよ」「でも」

「でも、ではありません。響さんにご迷惑になっています」

そうして途中からは僕はほとんど置いてきぼりになって会話は別のループへ。

………もう僕、逃げてもいいよね？

最低限の義理は果たしたよね？

意識は今にたどり着いちやってそう結論づける。

ぎゃあぎゃあ甲高い声が降ってくる中、僕は決心する。

悪いと思って付き合ったけど途中から僕そっちのけだしテーマは僕についてだけ別に頼んでいないし。

むしろ文句を言っても良いくらいだな。

めんどくさいし丸め込まれそうだから言わないけど。

ただ僕から会話に割り込んだり無理やり切るのは苦手だからどうやって離れるべきか悩む。

勧誘の電話とかまくしたてられるとなかなか切ることすらできないいな。

本当は「失礼します」で切っちゃえばいいんだけど……それができないのが難しいところ。

ちよつと僕が我慢すればって思っちゃうのが駄目なんだろうか。

でもだつて逆恨みとか怖いしな。

まして今は対人ですぐそばだし。

……うーん。

つていうか自分がものすごく強引だつて自覚あつたんだ、悪魔さん……おつと、今井さん。

勧誘なんて向いてないから止めた方が良いつて思うよ？

「それなら響さん、それならせめて今ここでこの前のライブの映像を見ていただくだけでも！　ちよつと待っててくださいね、今すぐにご用意を」

萩村さんが片方の腕を……やっぱり女の人に触れるのつて抵抗あるよね、おずおずと掴むも明らかに抑えられていない今井さんはおもむろにスマホを取り出す。

……さて、強引に来る以上はこつちも強引にしても怒りはしないだろうし適当な理由を言つて逃げないと僕の時間が吸われ続ける。

……そうか、名前を連呼されるから断りにくいのか。

こうなるつて分かつていたら最初に教えなければ良かったなあ。

でも、まさか一人目でさえ抑えられない伏兵が奇襲を仕掛けて来るだなんて想像もできないからしょうがない。

けどやっぱり個人情報教えちゃつたのは致命的だ。

さてさてそれならどうするか。

——じり、と脚に力を入れて全力逃走を思いつく。

大丈夫、転びさえしなければむしろこの姿は味方だ。

背が低いからこそ人垣の中を通り抜けられる……かもしれない。

一応はまともなお仕事みたいだし、さすがにこんな子供を追いかけ回したりはしないだろうつて言う希望的観測からの思いつき。

「……あ、あー、おまたせ、ひびき！　遅くなつちやつてごめんねー」

それを試していた僕はいきなり声をかけられてびくってなる。

「え、あの」

そんな馴れ馴れしい声が横から聞こえてきても僕は反応できないけど、今井さんもフリーズしてる。

「でもなんで連絡出てくれないのさー遅れるって伝えたかったのにー。メッセージも既読つかないしさって、よく見たら何ごとっ!?

どういう状況なのこれひびき!？」

なんか僕の名前を連呼される。

けど名乗った覚えがなくて困る。

「……………え」

突然何かをされるって言うのは人の行動をキャンセルするらしい。

そんなのをどこかで読んだ覚えがある。

そんなことを思い浮かべるしかない僕の目の前に……………今の僕よりちよつとだけ年上、中学生くらいの女の子の背中と髪の毛が割り込んできた。

……………何故かは分からないけどいきなり人が増えた。

なんで？

理解が追いつかない。

僕に友だちは……………この姿はもちろんだしその前からいないし名前を教えた相手だって数えるほど。

ましてやこんな子供な女の子には覚えが全くない。

話も合わないし話しかけると事案だからそんなこと……………あ、今の僕も被事案な見た目になってるか。

何が何やらって分からなくてぼんやりする。

あとこの子の声が大きいせいでさらに人目が……………。

「あ。あ——……………この感じ。もしかしてまたお誘いなのか？ほんつといつ見てもモテてるけどどこ行っても大変そうだねえ」

「あ、あなたは響さんのお友だちの方でしょうか？それに、またつて」

「そーですよ？しよつちゆう声かけられたり写真撮られたりしてて大変そうでー。あ、でもあなたたちはちゃんとしていますし、まとも

そうでよかったですけど。でもひびきはそういうの興味ないどころか」

僕は背中に隠されて安全圏。

蚊帳の外って言っても良い。

この子が前に出てくれたおかげで視線が気にならなくなって落ちつく僕。

ふう……ひと安心。

……。

……いやいや年齢が半分くらいの子供に守られて何ほっとしてるんだ僕は。

男としてのプライド……：そっか女になってたんだっけ。

身長も負けてるしなにひとつ勝つところがなくなってるし、僕はやっぱりダメだ。

「だいつきらいなんですよ」

じわって汗がにじむ。

……女の子も女の人も唐突に声が低くなるから怖い。

「もつたいないことに周りにどんだけ勧められても乗り気にならないくって。ま、私も性格に合っていないとは思いますがね」

「でしたら、あなたからもぜひ」

「でも」

……怖いって感じてるのはきつとあれだ、今の僕が幼い体だからだ。

間違っても中学生……いや小学生かもしれない女の子の声でびびったりなんかしないもん。

さすがに僕だってそこまでやばくはない。

「あんまりしつこいとケーサツ。呼びますよ？ ひびきのお母さんに頼まれてよく追い払っているんでそのへん慣れてるんです、私。

いいんですか？ このボタン押して。困るんじゃないんですか？」

やっぱり怖かった。

子供だって分かっているのに凄みがあるんだ。

どうして女の人も女の子もこんな風にいきなり声が変わるんだろ

うか。

そういう生物なんだろうか。

けど、そんな未恐ろしい小学生な彼女の顔を……僕からは見えないけどそれを見ているらしい萩村さんと今井さんの顔色が変わる。

良い大人が本気で困ってる感じ。

僕からは見えないけどスマホでも見せてるのかな。

僕からは見えないけどな。

向きと、あと身長的にも。

……このちつこい肉体が悲しい。

「……ほら今井さん、もう諦めましょう。無理強いはよくありませんって。ご友人にもご迷惑をかけてしまっていますし」

「う——……でも、ここでお願いできなければ………あ——……」

目の前の肩までのまつすぐな黒髪をぼんやりと見上げていたら、斜め前から見える今井さんと、その奥でそびえる萩村さんの顔。

頭を抱えて「あー」と「うー」で唸っている。

たいそう残念なことになっている。

僕はちよつとだけ嬉しくなった。

今日のごことは許してあげよう。

「……わかりましたあ……響さん、しつこくしてほんとうに申し訳ありませんでした」

年下の子供に負けた憐れな今井さんは頭を下げる。

「その手逸材を見つけた興奮と衝動でいっになく舞い上がってしまったまして……。響さん、それにお友達の方、ご迷惑をおかけしました。

……もし少しでも気になっていただけたらご連絡ください……ぐすん」

涙ぐむほどじゃないだろうって思うけど、とにかく諦めてくれた様子。

「あい、わかりましたーじゃあ私たちはこれで……ひびき、行く？」

「………ん？」

その子に急に振り向かれて近距離で目が合って反応も出来ないう

ちに手を握られて引っ張られて、どこかへと連れて行かれる僕。

……………ん？

「ジャマが入っちゃって遅くなったけどとりあえず上の階に行こっかー。まだお腹は空かないしカフェにでも入ってお茶しよお茶ー」

「……………ん??」

ずりずりと引きずられるイメージ。

僕はドナドナされている。

実際にはたぶん年上の、姉かなにかに先導される妹的な存在に見えるだろう感じでぐいぐい連れて行かれる。

いや、顔と髪の毛はもうフードで隠しているしズボンだし、弟って見られるか？

……………じゃなくて、中学生くらいの女の子に手を繋がれている年下の子供っていう姿には変わらない。

「……………???」

わけがわからないままにエスカレーター。

……………え、ちよつと。

そう言いたいけどさっきの声を思い出して声をかけられないダメな僕。

君のこと、僕、ぜんっぜん知らないんだけど？

え、これ、どういうこと？

……………もしかしてこれ、連れて行かれる先が変わっただけなんじゃ……………。

NOって言えたはずの僕は何にも言えずに連行されて行った。

9話 小さい者同士↓同志 1 / 2

男のときの僕は髪の毛を短くしていた。

上とか後ろは別にどうだっていいから適当だったけど、前髪だけは絶対に。

……だからそうじゃなくなった僕は苦勞するんだ。

「……………」
すつと、下を向いているとするすると下がってくる髪の毛をかき上げる。

さらさらとした感覚が指をくすぐる。

くすぐったいって感覚は随分と久しぶりだ。

ぼーっとテレビや映画を見ているときの手持ち無沙汰になるシーンとか。

髪の毛がもさつとしていいるうなじの後ろに両手を指を広げて差し込んで指の股で梳くように撫でるのを何回も何回も、腕が疲れてくるまで繰り返す。

柔らかくてくすぐったい感覚が指とそのあいだから伝わってきて、そのあいだにヒマなシーンは終わっている。

便利な暇つぶしだ。

ベッドでごろごろしているときとかイスに座っているとき。

片方でも手が空いていると、気がついたら手が勝手に動いていて絡まったりしやすい横とか肩の上に乗っかっている髪の毛をていねいに梳かしている。

絡まっている毛や折れている毛を見つげるときささやかに嬉しい。

その部分を触っているとなんとなく癒やされる気がする。

ただ……それだけ。

ただそれだけのこと。

それ以上のことはない。

「……………」
それなのになんだか最近いつも髪の毛を触っているような気がする。

変なクセがついたもんだな。
なんでだろう。

髪の毛の量そのものも多いし、なにより長いから自然と触れることが多いのもあるけど……触ると純粹に気持ちいいっていうか心地いいっていうか、なんだか不思議な感覚が浮かんでくるからかな。

あと地味に髪の毛を軽く梳くときに指が地肌に触れるのや軽く引っ張るときの毛根の感覚もまたいいんだ。

だからしょうがないよね。

別に悪いことじゃないし。

ペットとか飼ったことないけどモフるっていうのはこういうことなんだろうか。

グルーミングとかいったつけ。

そんなことを適当に見ている動画の前で考える。

もちろん両手は髪の毛をいじいじしている。

自己モフリ……あるいはセルフグルーミング？

うーん、いまいちしつくりこない。

けど女の人が髪の毛を頻繁に触っている理由は分かったわけだ。

単純に邪魔になるって言うのと言いたい表せない心地良さで安心するからで。

そう思えば……いやいや、せめて前だけでも短くしたい。

ハサミさんに怒られるから無理だけどな。



「さっきはありがとう……ごさいます。 助かりました、ああいうのは本当に苦手で」

強気すぎる勧誘をしてきた人たち——特に女の人。

けどほっとしたついでで名前はもう忘れたし別にどうでもいいか。

もう2度と会わないんだしな。

その人たちから救い出してもらってエスカレーターで数フロア上

がった先の奥まったところにある喫茶店で口を開く。

そのの、奥の方の落ちつく席を選ぶという気の利きようをもつ小学生から中学生くらいの女の子を対面にして再度きちんとお礼。

お礼は大事だ。

特に僕としては絶賛大ピンチだったんだから。

あの場面で警備員さんが来てくれたら助かっただろうけど、保護者……親がいないことを聞かれたら困る。

……ただの駅前なんだし休日だしで別にひとりでも来ても不思議じゃないだろうけど、親にも謝りたいってあの事務所の人が言ってきたら断れないもんな。

本当に幼女ボディは困ったもの。

だから僕を助けてくれたこの子には感謝も感謝だ。

何の変哲もない肩まで気ストレートな髪型……なにかをつけているわけでもないし、なんていうかこう……地味な子って印象なのが良い。

ささくれだった心が癒やされる気がする。

いやいや恩人をそんな風に言っちゃダメか。

保守的……いや、清楚って言ったほうが聞き心地が良い？

いいか、ケバくない無難な感じってことで悪い意味じゃないんだから。

ともかく、ああいった強引で理詰めでなんとかならないタイプと数年ぶりに対面で接したから対処の仕方が分からなかったし、すつごく助かった。

女の子や女性は繁華街でよく声かけやつきまといがあるとは聞いていたけど、それを自分で体験してみるとそのやっかいさが身に染みて分かる。

背が低いだけで抵抗しづらいつて感じるもんな、なんとなくでも。その何となくが僕の場合は致命的なんだけど、とにかく困ったんだ。

……帰ったら対処方法とかをひととおりで学んでおく必要があるしそうだな。

次もこの子みたいに颯爽と助けてくれる人が現れる保証は無いらしい。やっぱりブザーが楽で効果的かな。

小学生のラストアイテムらしいしな。

「いやいやあー、たいしたこととはしてないよー？ 人の多いところに行くのとたまーにあーいうことがあるから慣れてるしつ。……しかもこのお店って飲み物だけでも結構するじゃん！ 具体的には私がふんばつするときのお昼代くらい！！ 入ったことないグレードだし！ ……おごってもらっちゃって本当によかった？ 私の分払うよ？」

「お世話になりましたし手持ちはありますから」

「おー、お大尽じゃのー」

朝のハサミがあつた上にたくさんの人に見られて正直参つてきていたから、あのままだと「じゃあ30分だけ……」とか言つてもう少しで流されちゃいそうだったしな。

頭の中ではそろそろ脱兎しようとしてたけど、じゃあ体が思った通りに動くかなんてのはちっこい僕に期待ができないもん。

でも、今回のこれまでは遭遇したことがなかった「引く気がない相手」っていうののいなし方のコツが少しだけ分かった気がする。

こちらもある程度強引でないといけないとかいろいろと。

強引にしたところで移動の遅いこの体だから回り込まれたらどうしようもないんだけどなあ……そうならない立ち回りかな。

やはり目立たないことこそがカギだ。

………ブザーは帰りに買おう。

そういうアプリも探せばありそうだし。

「あーいうのは適当な理由をつけて抜け出すのがいちばんのセオリーだからさ？ 真面目に相手しちゃダメなんだよ。……私の友だちにもそういうタイプがいるからわかるけどさー、おかげで私が声がけされてもらくーに撒けるんだけどね。滅多に無いけど。

………んー、しっかしこの前もそう思ったけどやっぱりすごいビジュアルだねえ。でも断り慣れてないってことは、もしかしてあんまりひとりで外とか出ない感じ？」

「ええ……まあ、はい、そうですね……………」

会話のテンポが速いっていうよりは口がものすごい勢いで動くし、息継ぎが短い。

追いつくって言うか返事をひねり出そうって努力するだけで精いっぱいだ。

よくこんなスピードで話せるな。

僕なら絶対に噛むし、それ以前にそんなに話す内容がないけども。

……………あと、この前って何だろう。

「あ、敬語いらなくてータメでいいよ、同じ学校の先輩後輩じゃないんだし。 ……なによりもう1回だけだけど一緒に食べた仲だしー？ これはもう「友だち」ってことでもいいんじゃないかやー？ なんちやってー……………えへへえ……………」

「？」

僕は首をひねる。

へ？

一緒って何のこと？

覚えが全くないんだけど？

僕は元の体でも今の体でもこのくらいの年の子に会ったこともないし。

とはいえ真ん前を見て歩いていても、あいさつを相手からされるまで気がつかないことがほとんどなのが僕だ。

それは多分子供のころから変わってない悪いクセ。

だからひよつとしたらどこかで会った……………いや、落としたものを拾ったりしたりっていうオートで済ませてた動きのどこかで接したのかも？

でも食事って言ってるしなあ……………。

うーん。

いいや、こういうときはちゃんと言った方がお互いのため。

知ったかぶりすると後から困るってのは少ない経験上知ってるし。

「あの。もしかしてどこかで会ったことありますか？」

「あ……………」

露骨にテンションが落ちるって言うかショック受けてる。

なんていうか声も体も下へ下へ沈んでいく感じで。

「やっぱ覚えられてなかったかー、なーんか反応がおとなしすぎると思ったら……がっくりだよ」

突っ伏すくらいにしての落ち込む演技をする恩人の子。

いや、わざとらしいくらいに上半身と顔を使ったジエスチャーしてるしな。

なるほど、分かってももらうために演技をするならこれくらいしないとダメなのか。

「ひと月くらい前にさ。この近くのお店でなーんか余ってたポテトくれたじゃん？ 私が君の顔見てたらいきなりさ。そういうつもりじゃなかったんだけどもらっちゃったから食べたけどね。その時の相手、私なんだー。……私視点ではいろいろと強烈な出会いだったんだけどなー……そっかー、いつもあんな感じなのね……どおりで」

「……………?」

ポテト？

なんのこと？

というか、そんなこと会ったっけ？

「……………??」

僕を見ながらそう言うってことはこの体になってからだろうだし

……うーん、ひと月前？

1ヶ月前……1月前。

僕がこの体になったころ。

「……………」

「……………」

記憶を掘り起こしてみる。

「……………」

「……………」

ダメだ。

朝のインパクトが大きすぎて記憶が閉じてる。

今日より前を振り返ろうとしても、最近見た映画とかやったゲームとか読んだ本だとか、下着の種類について調べたりだとかオンラインでこのサイズのコスプレ衣装があるってことにびっくりした記憶しか出てこない。

いやいや、なんでそんなこと……今はそうじゃなくって外に出た記憶を……って。

「……………あ」

思い出した。

「ああ、あのときのくい……」

おっと。

思わず「食いしんぼさん」っていう本音が漏れかけた、危ない危ない。

何年かぶりのテイクアウトとかデリバリーじゃないバーガーを外で食べて、でもほとんど食べきれなくて。

手元しか見てなかったから顔は覚えてなかったけど、なんかタイミングがよかったし、なにかに腹が立って適当に言ってみたら本当に食いついた、あの子か。

……まああの店から近いわけだしご近所さんだったら会うこともあるか。

「ひどくない!? まー、ほんの数分だったし目もほとんど合わなかったから、もしかしたらそうかもしれないとは思っていたけどさあ……………」

「えっと」

「そこまで思い出してもらうのに時間かかるなんてさ、ぐっさりときたよもう……………」

「……………すみません……僕、人の顔を覚えるのが苦手で……………」

とりあえず謝る。

明らかに悪いのは僕……いやいや相席した程度の関係の相手を覚えてる方がすごいのか。

それにしてもまたしても演技過剰。

これが今どきな女の子の基準なのか？

っていうか突っ伏したときにカップに髪の毛入りそうになったけど大丈夫？

髪の毛からいい匂いしない？

あのとときは疲れていてそれどころじゃなかったのもあるし、そもそも僕は他人の顔と名前なんて覚えようとしてもすぐには覚えられないし、なんら不思議なことはないんだけど当然ながらこの子は知らない。

小説とか映画とかでさえ最後までよく分からない登場人物がいることがあるくらいなんだ、甘く見ないで欲しい。

メインパーティーとかの一員だったりするのになんとなくで主人公サイドってことしか分からないまま非業の死を遂げるとか良くあることだし。

「あー、いーのいーの気にしてないからーそんなに真剣になんなくても。 大きさにしてみただけー」

「……はあ」

けろりとしている。

切り替えも早いな。

将来的に他人に混じって女子中学生や高校生、大学生を経て大人になるには、こういう女子特有のテンションとか会話にも慣れなきやいけないんだろうか。

仮にこのまんまだったとしてだけでも。

……

うん、厳しいな。

ていうかムリ。

どうにかして人と話さなくても大丈夫なポジションを確立したいところ。

「ところでさー君歳いくつ？ 最初は2年生とか3年生くらいかと思ってたんだけど話してるともうちょい上そうだしー。 ……新6年生とかと見た！」

自信たっぷりに断言する演技派JCさん……いや、小学校の歳で表

すつてことはJSさんかもしれない。

けど大切な情報が手に入ったな。

ふむ、同世代からでもそのくらいに見えるぞ。

ふむ。

なるほど。

けどさすがに小学生はいろいろとやりづらい気がする。

だって小学生はなあ……ぼくの自尊心的にも、こう……。

「それは、えっと……、あ。ところで、えっと」

「あ、名前は関澤ゆりかです！ ゆりかでもゆりでもユーリカでもゆかりんでもなんでもいいよ？ そういえばさつき聞いちゃったけど君は響っていうんだよね？ 私も呼んでいい？ 響ってさ！ イヤじゃなかったら！」

「はあ、いいですけど……、じゃあ、関澤さん、は、いま何年生ですか？」

ため口苦手だし肉体的には年上なんだ、敬語というか丁寧語でも問題あるまい。

その辺は大人相手は楽だな。

「おお……ガード堅いですな……先は長い。んで私は今年で2年だよ、もち中学の。……いい？ 中学のだからね？ 確かに私背え低いけど」

「……………」

「ホントよ？」

「あ、はい」

「んでここからだ電車で20分で改札の、いちお有名大学の一貫校。いやー去年までは勉強漬けだったなーおかげで今は遊んでばかりだけ。んでんで響くんはいつたいおいくつ？ 学校この近く？」

情報量が多かったから数秒かけて咀嚼して理解して考えてみる。

……よくよく考えたら学生ってことは通っている学校があるわけで、当然同級生も先輩も卒業生もいるわけだ。

ニートって言うのはものすごく特殊で高尚で特別な立場なんだ、普通はそうじゃない。

だからって言って僕の出身の学校とか、あるいは適当に知らないだろうと思っただけでなく知っている学校の名前とかを出しちゃおうと……思わぬ繋がりで知り合いとかがいるかもしれない。

このコミユカだもんな、初対面……いや2回目でこれだけなんだから可能性は高い。

そうすると自然クラスや学年まで細かく聞かれることになるわけで嘘はすぐにバレること間違いなし。

バレるとそれまでに言ったことがぜんぶ疑わしくなっちゃって何が嘘で何が本当かを言うハメにもなるし信用も失うし……なによりすごく気まずい。

それは避けたい。

気まずいのって嫌いだし。

一応は恩人なんだ、今相手してるあいだからいはい。

「……ど、どしたの？ 急に考え込んだりして……私、なんかまずいこと言っちゃったり？」

おっと、どうやらこの子に気まずい思いをさせてしまったみたいだ。

いけないいけない、仮にも恩人にそんな思いをさせては。

しかし、それならどうしよう。

「……………」

……よし、できるかぎり情報は出さないで突っ込まれたら適当な理由を作ろう。

その方がよっぽどマシだな。

「いえ、ちよつと。……それで僕も、たぶん、同い年です。 中2になります」

「……………うえ？」

せっかくだしこの子の設定……じゃない、個人情報……でもない、ただの情報を借りよう。

そう決めた。



「…………ふふ——つ!？」

しぶきで目をつぶってちよつと。

……汚い。

恩人だった子が勢いよく吹き出したのを見て「漫画みたいだな」って思う。

同い年だって言ったタイミングが悪かったのかな。

僕が考え込んでいるあいだにお茶、口に含んでいたしな。

半分は僕のせいかも。

だけど汚い。

9割以上はただのお茶だって分かってはいるけど、でも顔にちよつとかかったじやないか。

というか漫画的表現じゃなくて現実に吹くっていうのは、始めて見た気がする。

実在したのか。

僕は一緒に食べて帰る友人とかいかなかったからな、経験の無さが大人になっても響いている気がする。

顔をおしぼりで……おじさんのように脂をじゃなくってこの子の口から飛びだしたものを拭くためにとんとんと拭う。

「……………え、マジ？ マジで同い年？」

「マジです」

「ホント？」

「本当です」

マジで本当にデタラメだけどな。

でも今の僕が通うとしたらそのくらいっていう意味では嘘じゃない。

僕の心の中ではせめて中学生なんだ。

それも新しい人ばかりじゃない2年生あたり。

一応サバを読むギリギリの線を攻めてみているところだけどいかがだろうか。

「えへっ、えへっ。 ……ちよ、ちよい待ち……」

げほげほとむせているのを見るとちよつと罪悪感がある。

だけど僕の顔にかけたのは絶対に忘れない。

「けほつ……え……ちよ、ま、えと、ほんとに!? うっそお!? 私もときどき小学生に間違われるくらいだけどそれってほとんど大人の人からだし、それに響はそれどころじゃなくない!? え、その見た目で同学年!?”

やっぱりサバ読み過ぎた?

無難に小5とか言っておけば良かった?

いや、でも小学生扱いはなんかむかつくし。

都合のいい平均で小4を中2と言ひ張るのって無謀だった?

……そういや思いつ切りひいき目で見て10歳くらいを14歳くらいだつて言っているわけか、そりゃあ無謀だな。

とはいえ今さら気がついてもう遅い。

でもあんまり幼……小さいと思われても面倒だし、せめて中学生という設定にはしておきたいところなんだけどなあ。

でもでも初手で嘘だとばれるとそれもまた面倒か。

……やっぱり小6くらいにしておけばよかったかも。

「……えつとごめんね? ヘんな風になって。私、つい最近口りっぽいってコンプレックス刺激されたばかりだからつい思わずで言っちゃったんだけど、よく考えたら響は私以上……以下だもんね。ふだんからコンプ刺さりまくりだよ。……つまりは小さいもの同志というわけか……!?”

「……同志?!”

「同志よ! おんなじ志の!!!”

「はあ」

なぜか、わざわざスマホで「同志」って字を見せてくる。

本当に何故だ。

毎年よく分からない言葉が女子学生の中で流行るみたいだし、それのひとつかな。

流行り言葉……調べておいた方がよさそうだな。

僕はそういうのにとことん疎いからな。

これを機にちよつとだけ社会復帰を狙いたいところ。
モチベーションが続いている限りには。
……何日持つか分からないけども。

今どきの女の子……JSとかJCとかJKとか言う存在たちの流行り言葉っていうやつ最新版は何だったか。

正直クラスの子とかが使ってるのなんてそこまで聞いた覚えはないけど、流行ったんだったら使うっていう程度のものなんだろうし知っておいた方が良いかもな。

男の僕は良く分からないけど使うものらしいし。

僕の中では相当古い「チヨベリバ」とかも平気で浮かぶし数年分は遡って目には入れておいたほうがいいかもしれない。

……っていかもものすごく古いのとかかなり新しいのだけはヘンな時間に見る番組でやってたりするんだよなあ……どうでもいいから見て「ふーん」って思ってたけど。

どんなのがあるのかって適当に考えてみたけどよくわからないで終わる。

そんなわけで目の前の現役な女の子に対して披露しようとして断念。

ついでに僕の年齢詐欺について疑惑が核心になりそうな雰囲気だ。

しょうがないから今浮かんだいいわけを並べておこう。

「僕の場合は小さいころから最近までずっと病気で入院していて、ろくに体を動かさなかったことでの発育不良ということもあるので気にしないでもいいです。慣れていきますし、子ども扱い」

「お、おおう」

すらすらとそういうことばかりは口から出てくる。

どうでもいいことばかり出てきて肝心なことは思いつかないのが僕。

だから初対面の人と適当に雑談をするのだけはこうして得意なんだ。

新しい設定が出てきたけど、こういうことにしたら聞かれない学校の話題とか避けられそうだな。

それでも聞かれたら「籍だけ置いてあるからほとんど通ってない」

とか「学校……行きたかったです……」とでも低いトーンで言えばいいだろうし。

さすがに嘘泣きはできないけどな、したことないし。

演技の上手な女の人じゃあるまいし。

肉体は女でも脳が男だからそういうのは無理だ。

よっぽど悲しいことを考えなければ……そもそも涙すら出なさそうだからいいや。

「……………」

あ、昨日お風呂上がり小指ぶつけたときのことを思い出せばいいそう。

しないけど。

それにこの言い訳、引きこもりと二一ト歴的にありがち完全な嘘というわけでもない。

僕の薄暗い学生生活のことを思い出せばむしろ本当だし。

2、3割の真実と残りの嘘。

やっぱり嘘になる？

でもそれくらいしか学校の話題を回避できそうなのはないしなあ

……ごめんね、嘘ついて。

この場限りの関係だから許して。

「お……おおう、これはまたさらつと重いこと言うねえ。 響、茶化してごめんね?」

「初めて会うと必ずと言っていいほど言われますし本当に気にしていませんから」

真っ赤に嘘だしな。

……どうしてこういうときはほんと、すらすら出てくるんだろう。

この調子で話ができたなら僕も自分から人の輪に……めんどくさいからって入らなさそう。

「天は二物を与えず美人薄命か……。 せっかくの美形なのにそれを使えないとはもったいないね? その気ならどんな子が相手でもちぎっては投げてとつかえひつかえ好き放題できるのにさ。 私ならそうする! 青春だし!!」

わりと疑っている感じはない様子だしひとまずは成功かな。

それにしても顔の話題はちよつとこう、もやつてする。

この1ヶ月ですっかり馴染んだし隅から隅まで知り尽くしたとはいっても、そもそも僕のものじゃないし褒められても一切何も感じない。

年の離れた人から「イケメンだね」って言われるときくらいのか？

他に褒めるところがないからとりあえず褒めておこう的な定型句の。

……あ、涙腺の感覚。

こんなどうでもいいことで。

「えーつと……ところで響さんや、それって響としては実質的に初めて会った私に対して話していい話題なの？ 慣れてるっていつてもそういうのって、こう……キツイものじゃ？ ……なーんか、いきなりさあ……ううん、何でもない……」

「？ はい、退院してからそこそこ経っているので別に平気ですし、それが僕ですから。知り合った人に同じようなことを聞かれて同じように返すのも慣れていきますし。今は体とは別に日常生活に馴染むためのリハビリをしているので、むしろ経験値を増やしたい感じですよ」

最後の方が聞き取れなかったけど言葉が出て来たからたまたまかける形になっちゃったけど、そういうことにはしておこう。

うむ、合理的な嘘ならすらすらと出るな。

なんらかの病気で今までずっと入院していて最近に退院したという設定。

嘘は嘘だけどこのほかに余計な嘘が入ってくる余地はないし、僕が動きやすくなるだけで他人を傷つけるたぐいのものじゃないし、ただの思いつきにはいいものだったかも。

ところでこの子……えつと……そうだ、関澤なんとかさんだっけ、この子はときどきボソツとつぶやくクセがあるみたい。

返事を考える数秒のあいだに何回かぼそぼそ口にしてたけど……

まあただのひとり言だろうしたいしたことじゃないだろう、きつと。女の人は……っていかサンプルが昔の母さんとかお隣さんだけなんだけど、結構考えていることがそのまま口から出てくるからな。別に聞かせるつもりじゃないらしいから聞かなかったことにしてあげるのが男としてのマナーだって思う。これでも男なんだ、そういう気配りを忘れたくはない。忘れたら僕は僕じゃなくなって、ただの女の子だもん。なにしろ男たる証明はこの世界から消え去ったんだから。

◇

「病院でずーつとねえ——……深窓のナントカとか憧れるけど実際には大変そうだなあ。 退屈すぎてダメになりそう。 ……けど、あー。それでこの前もやけにしんどそうだったのね？ 何か買い物した帰りつぽかったけど。 今は平気なの？」

朝はハサミが襲ってくるし、ここでは悪魔の手先とその仲間に襲われたし、ほぼひと月ぶりの会話だし。

疲れたのにはまちがいないし。

なによりこういう早口な会話はもともと苦手だし。

あの強引な勧誘にも結構疲れたし。

本当はもつと適当にぶらつく予定だったんだけどもう肉体的にも精神的にも疲れたし……だし。

まだ下の階でうろついているかもしれないと思うと今日はもう、周りをよく見ながらさっさと帰ったほうがいいのかもしいもんなあ。

この子への義理だけ通したらさっさと帰ろう。

この前みたいにだるーんってなりながら帰るのは疲れるもん。

けど、さっきのお礼の対価がいまいち分からない。

たったの数百円で良いのかって思うけどこの子は小……中学生だ

からあんまり高いのだと困りそうだし引かれそうだし。

大人な僕的には数千円なら良いんじゃないかなーって思うけどどうなんだろう。

金銭感覚が独身貴族のそれってのもあるから分からない。

「そうだったの!?! ダメじゃん、元……かもしれないけど病人がそんなことじゃ! そういうことは早く言わなきゃダメ! 病氣って病み上がりがいちばん肝心だって言うしさ! お礼とか言って一緒にお茶しておごってもらっちゃったけど、それで悪くなっちゃったら私が困るよ……大丈夫? ひとりで帰れそ? 送ったりタクシー呼んだりする!?!」

がたんとカツプが揺れて倒れるんじゃないかって不安になる。

本当に動作がいちいち大きい子だな。

けどもセリフが長い。

どうやったらそこまで考え……なくても自然に出てくるんだろうなあ女の子だし。

けどもうちよつとゆっくり細切れで言ってくれないと理解できないんだって、僕は男だから。

分かりやすくするには最大で40字が鉄則なんだぞ。

本の受け売りだけ。

……とりあえず純粋に心配してくれていることだけは分かるからちよつと罪悪感があるけどしょうがない。

このくらいじゃないとこの調子でいつまでもまくし立てられそうだし、こういう牽制用の話題があつたほうがいいのかもな。

ともあれ一気に会話が終わりそうな雰囲気だなによりだ。

「いえ、帰るだけなら平気です。 いざとなったら……家の者を呼びますし。今日は助けていただいてありがとうございます」

ちよつど良いからって頭を下げておいて帰るモード。

女子中学生っていう気分も考えもころころと変わりやすい生きものであるこの子……えーつと……ああ、関澤さんだっけ。

やっぱり頭の中でもいいから名前を連呼すると覚えていやすいな。といつてもどうせすぐに忘れちゃうんだろうけどな、人の名前なん

て。

けど病弱設定は良さそうだな、その場をしのぐだけなら使えるし。とにかくこの子の気分が変わらないうちにさっさと離れたほうがいいだろう。

「やっぱり心配だから」って着いてこられても困るし、なるべく変なルートで帰ろう。

「……あ、うん。またね、気をつけてね」

「いえ、それでは」

……お店の外まで着いてくるかって思ったけどそうでもないらしくぼーっと座ったまんまだ。

なぜか急におとなしくなった気がする。

席を立つ気配もないし。

まあいいか、僕にとつては都合がいいんだし。

……さつきは学校のこと設定しないほうがって思ったけど、やっぱり作っておいたほうがいいのかも。

だって、よく考えたら学生同士の会話だったら絶対に出てくるものだし。

あの子は……ここから電車で20分だって行つてたから近場の学校だろう。

それならいつそのこと1時間以上かかるところとか、いつそのこと今は療養先だから二元は通えないくらいに離れたところに通つていたつてことにすればどうだろう。

遠くの県のさらに山奥とかそういう感じの。

そうすれば名前を出してもばれる心配は………いやいや、嘘はいけないし。

うーん。

迷うな。

リアリティと嘘バレとの差かあ。

……とりあえず調べるだけは調べておこう。

それならいつそのこと偽名も仕立てたほうがもつと都合がよかつた気がしないでもないけどもう名乗ってしまったからには遅いし、こ

れは諦めよう。

まずはお会計を済ませて……つと。

……む。

さりげなく持って来た伝票を差し出そうとするも固まる。

……お会計の台に背伸びして腕だけ上げるしかないだと……!?

僕は愕然としている。

「あのさ、響ー！」

「………何？」

ようやくとの思いでかたんって伝票を置けた音がしたら後ろから
あの子の声。

まだ何か用が？

……着いてきたいとかだったらどうしよう。

あとやっぱり声がうるさい。

そんな感想が巡る。

「あのさ……んと、響が。もし響がよかつたらなんだけどさ。番号とか交換しない？ 名前もお互いに知らなかったのにこうして2回も偶然会えたんだしき、私的には響はもう友達だしき、ときどきでいいからまた会えたらなー、なーんて思っ。ほら、もう私たち友達同志じゃん？」

早口ではあつたけど僕も身構えていたし……なんかつつかえつつかえだったから今度はちゃんと聞き取れた。

連絡先が聞きたいってことだよな。

なんでそんなに回りにくどく話すんだ。

文字数を節約した方が良いつて思う。

ほら、早口すぎて酸欠になって顔真っ赤になってるじゃん。

けど……同い年で同性になる子の連絡先。

ただの設定だし全部合っていないんだけど状況的には全部同じことになっている子の。

中身に比べて見た目が幼いという特徴まで同じだしな、スケールは全く違うけど。

とにかくあつて損はない、か。

要らなければフェードアウトするだろうし適当な時期に消しちやえばいいんだし。

どうせ最初の何回かやりとりしたらだんだん減っていくパターン。僕はそういうのに慣れてるからもはやダメージは通用しないんだ。

「いいですよ、少し待ってください」

「やたっ」

もそもそとポケット……に入れていたら重かったスマホを出す。

アプリのインストールから始めて、と。

名前は「響」でいいか、もう知られているんだし。

「……………」

「……………」

そこでぱちくりした感じのその子と一瞬の間。

「……………」

……さて、準備はできたんだけど。

「……すみません、スマホを持ったのもアドレスを交換するのも初めてなので、どうやって交換をしたらいいのかわかりません」

スマホは持ってたけど連絡先を交換するのは数年ぶりだから嘘じゃない。

「マジですか!? んじゃちよつと貸して貰ってもいいかい?」

「どうぞ」

最後に誰かこんなやりとりしたのなんてもうはるか昔だからさっぱりだ。

いや、こういうソフト……今はアプリだけ、その存在も知っていたし前のスマホには入れていたんだけど実践するのは初めてなのは本当。

ほぼメールだけだったしな。

赤外線通信とか思い出すだけでもはや懐かしい過去だ。

「よし、おっけー。登録したよ」

「ん、……ありがとうございます」

「んじゃヒマなときテキストに送るね? ムリに返事する必要ないよ、いっつもムダに送るなって友だちから言われるし! なんなら既

読無視続いてもいいから！ だから見てね!! それで満足するから
！」

「……家ではこういうのをあまり触らないので返事は遅くなるかもしれ
ませんが」

なんかこの子、話しているうちにヒートアップしていくクセがある
な。

そして近い。

じりじりと詰め寄ってくる。

もうちよつと距離を……。

「りようかーいっ。 あ、お家まで送ったりしなくて本当に平気なの
？ 辛いならムリして」

「いえ、平気です。 それではまた。 お茶、まだ残っていますし、
ゆっくりしていつてください」

スマホを返すどさくさにかちりと握られていた手をほどいて顔
を上げるとなんだか優しい顔をした店員さん。

よく分かんないけど良いことあったんだろうか。

けど待たせたのに怒られなさそうだからお金を出してさっさとお
会計を済ませて逃げる僕。

「……………」

ちらつと振り返ったけど、釘を刺したおかげかその子が席に戻って
行っているのが確認できた。

よかった、ようやく静かになって。

「まったねー響——、じゃーね——」

……………と思ったらまたでかい声。

あの子は……周りの人に迷惑でしょ。

たまらず早足で距離を取る。

「……………」

着いてこないだけでほつとするしさっさと帰ろう。

段差がキツすぎて家の中でもたまーに転ぶ今の僕の体だと万が一
が怖いから、足元と頭上に気をつけながら。

エスカレーターを歩いて下りるのが厳しいことに気がついてまた

またダメージを受けつつ乗っていき、しっかりとフードを深めに被り直しつつ視界を確保しながら慎重にビルの外へ。

「……………ふー、ようやく本当に落ち着ける。代わりにじりじりむしつと来たけど。」

これで夏じゃないって言うんだからなあ。

「……………とにかく元気な子だったな。」

あれが若さか。

精神的な若さが僕には欠けている気がする。

とぼとぼと歩きながらさっきの会話の反省。

ガワ的には僕のほうがもっと幼な……………若いんだから若さじゃなくて性格の問題だな、もともとの。

うん。

ていうかあんな調子だから余計に子供っぽくなって、それでさらに小学生っぽさが出るんじゃない？

どう見ても中学生には見えなかったし……………まあ僕には関係ないか。もうすぐ忘れられる存在なんだから。

だけど今日は口を使いすぎたし帰ったらごろごろして……………。

「あ」

ハサミ。

あと壁。

……………今夜のお風呂、どうしよう。

「………………………………………」

……………もう飛んでこないことを祈るのかなさそうだ。

☆☆☆☆☆☆

店の入り口をずっと見ていた少女は、小さい声でもう一度だけ名前を呼んでから席に戻ると残った紅茶と水をぐいっと飲み切り、ふと「彼」のいた席に……………少しだけ残っているコーヒーらしき液体を目にする。

「………………………………………」

それを見つめて伸びそうになった手を途中で止めて、そうしたのに気づいて頬を染めながら慌ててスマホの画面に目を落とす。

——そこには新しく登録したばかりの名前。

まだトークの履歴はゼロで真っ白なもの、さっとさりげなく字まで合っているかと確認した「響」という名前。

念のためにアプリを落としてから立ち上げてもしつかりと残っているその名前は、先ほどの小さな銀髪が確かにそこにいて話をしたという証拠だった。

それを実感した少女はだんだんと口角が上がっていき、人前だからと両手で抑えようとして……やがて抑えられないと諦めるとにままとしたままに別のアドレスに電話をかける。

そんな少女へは温かい視線が集まっていたが当の彼女は知る由もなく。

店の中のためか、先ほどまでとは違ってとても静かで落ちついた声音に切り替わり。

「……送ったの見た？ ……うん本当。 ……この前の——

——

ぼそぼそと、ささやくように話しかける。

「リアルじゃありえないような、まるで——みたいな——

——でしょ？ ……うんうん、もちろんだよ。 ……連絡先も名前

も。 ……自然な感じにゲットしたからさ、今度さ——

「店員に見とがめられない程度の時間、彼女は小さな声で会話をしていた。」

10話 危機感と必要性 1/2

のんびりとお湯に浸かっている状態で、あることをふと思いついた。

お風呂つてとりとめもないことを考えているからヘンなことを思いつくな。

見るともなしに見上げていた水が滴っている天井から水面へと、そしてその下の僕の体へと視線を落としてみる。

体が軽くてすぐに浮いちやうし気を抜くとつるんとして頭がお湯に沈んじやうしで、かなり低く張っているお湯。

その下にはつるつるな今の僕の幼児体型が光の屈折でさらにちつこくなつて見える。

足が反対側に届かないってだけで怖いんだよなあ……1回くるんつて頭から沈んだときはパニックになっちゃったし。

そのトラウマでお湯の量は今の僕の肩くらいまでだ。

元の体基準だと……腰辺り？

いや、さすがにもうちよつとは上かな。

そんな今の僕の幼女な体。

一部の特殊な人たちを除いて普通の人的には思うところのない普通の幼児な体。

元の体での子どもの時の記憶に近い感じにいろんな意味で凹凸が少なく、無いなりに少しはついていた筋肉やわさわざと生えていた黒々としていた毛とか、便利だったけど今となっては邪魔でしかなかったお股でぶらぶらと浮いていたモノたちがどっかに消えちゃつてて。

これくらいしか感想が持てないくらい、裸だと胸があるはずの女の子の体だつてというのが確認もできないし意識もできない始末だ。

じゃなければわざわざここまで言わない。

がっかりした分くらい文句は言つて良いだろう。

けど、ないわけじゃない……と思わなくもない。

曖昧なのは僕が実物を見たことがないから。

男にも胸はあるわけで……乗っかっているのが比較すると厚い筋肉なのか脂肪なのかって違いだけ。

だから多少は膨らんでた記憶もある……だから今の微妙な膨らみが微妙なんだ。

でもこれくらいならよく通っていた温泉とかで一緒に浸かる太っていない大人たちや子供ですらあるくらいの脂肪しかないから、これをはたして「おっぱい」と言えるのかどうかはなはだ疑問なところ。

そんなこと言ったら太ってる男はみんな巨乳ってことに……そういう表現もあつたな、そーいや。

ともかくそう言うことになってうげーってなるし。

全体的に肉付きが悪すぎて浮き出たあばらの方が気になるし、腰骨とか手首とか足首とかじつくり見ていると怖いくらいだしで色気っていうものの発生する前の体だ。

もっと肥えさせなければ。

女の子以前の問題だ。

胸がぺたんとしていっているというよりはみぞおちがえぐれている感じだし僕の理想からはほど遠いんだ。

いっぱい食べさせてあげたいって思う気持ちの方が強く芽生えるんだ。

だけど本当の幼児体型よりはかろうじて女の子らしい体つきに見えないこともないから、こんな見た目でも第二性徴は迎え始めている可能性もゼロじゃない。

女の子は個人差が大きいからな。

僕には縁がなさ過ぎてさっぱりな話だけど。

肝心の実年齢が全くの不明だからどうしようもない。

よく手に集中して揉もうと努力をしてみれば……たぶんだけど男のものとは違う感触を感じられるようなそーでないような感じも得られる。

そう思っているからあるように感じるのかもかもしれない。

思い込みって大きいからなあ。

あと……元の体で試したこともなかったから男のでもなるのかは

確かじゃないけど……揉むと胸の形が変化するのは新鮮な感覚。

両腕全体を使って前に肉を集めるようにすると胸が盛り上がる。すると寄せて上げた状態になって、ちょっとだけ盛り上がっていた脂肪が小さいお椀状になって柔らかさが出るんだ。

逆に背中を反らして肩甲骨を近づけるようにすると……さらに薄べったくはなるけど代わりに胸が強調されて、すごく薄いながらも骨の上に乗っているわずかな脂肪が浮き出たような形になるみたい。

そんなことを下をのぞき込んだり鏡を見たりしてやってみた。だっってお風呂ですることないし。

というわけで上半身ががんばって使うことで普段は真下を見てもよくわからない「おっぱい」というものが確認できるみたい。

できるみたいなのでそうとは言っていない。

できてなくて思い込みかもしれない。

妄想だったら悲しいけどこれは現実で、それもまた悲しい。

とりあえずいろいろ駆使すると女の子っぽくなるだけだけど……それでも「ある」と「ない」、1と0、有と無は違うんだからやっぱりなんていうか精神的な満足度が違う。

この感じは……そう、しばらく筋トレをがんばっているうちに腕が太くなったような気がして嬉しくなったり、僕が今失っているもののが大きさを測って平均値と照らし合わせるときに感じるような自己満足的なもの。

それが例え使う前に消失してしまったとしても。

まあ無いなら無いで割とすぐに慣れるもの。

体験済みだ。

人って意外と柔軟にできてるんだな。

けども、上に育つはずのものが「ある」って信じれば「ある」って思える程度のものだとしたら失ったものとの対価として釣り合っているんだらうか？

「……………」

のぼせてきた。

おでこから汗が垂れてくるし、思ったより入ってたらしい。

そう思ってお風呂の温度表示のパネルを見てみたらそれなりにお湯に浸かっていたらしい。

ふやけそうだ。

……こんな子供の体をじろじろ見ながら何をやっているんだか、僕は。

つまらないことに時間を使っちゃってふと我に返ってだるんってなった僕は……それでも気になって立ち上がって、曇り始めた鏡に向かってお湯を時々かけながらあちこち観察して格闘してみる。

それにも飽きた僕は体がすっかり冷えているのに気がついて、ちやぽんとアゴまでお湯に浸かり直して温め直す。

温泉に行くときによくやるやつだ。

寒い冬に露天風呂でやると1時間でも2時間でも退屈しなければやれる自信がある。

……ちなみに今お湯に浸かっているけど長い髪の毛はお湯につけないで洗面器に乗せて浮かせてみている。

ヒマなときはそれが微妙に移動しながら浮くのを眺めたりするのが最近のマイブーム。

だってお湯から上がるときに体じゅうに張り付いて取るのが大変だし。

本当は結ったりするのが正解なんだろうけど毎回するのは面倒だし。

やっぱり今のように適当にぐるんと丸めて浮かせておくのが楽だから。

めんどくさいから切りたいんだけどそれができないのは経験した通りで。

「……………」

それにしても改めて思う。

お風呂に入り直すたびに、この凹凸のない体を見るたびに。

どうせ女の子になるんだったら、もう少し全体的に成長していてお湯に浮くなんて大層な、富豪なぜいたくは言わないから……せめて、せめて。

最低でも腕で抱きしめられるくらいの「おっぱい」は欲しいところだった。

かなり切実な悲しみ。

だって、あんまりにも子供過ぎてなあ。

どうせならって思っちゃうじゃん。

悲しい現実をかみしめるしかない。

胸のない女性は守備範囲外だから……とつてもとつても、悲しいんだ。

◇

天井からシャワーの先からぴちゃんぴちゃんと水が落ちる。

お湯を張ってからそこそこ時間が経ってきて湯気でいっぱいになってきた浴室がぼんやりしてきた。

女性的魅力について深く考えていた僕はもう1回ばかりかしくなってきた、応急処置的にマスキングテープで塞いだだけの……ダメになった壁を眺めながら考えるべきことへと舵を切り直す。

無いものは何をどうあがいたってどう言い訳したって無いんだからな。

考えるだけ空しいんだ。

……さてさてとにかく、朝は精神的に、そのあとは精神的にも肉体的にも疲れた1日が終わる。

やっぱり人の会話は週1くらいで充分すぎるな。

10日に1回くらいでちょうどいいくらいだ。

半月くらい話していないとちよつともやつとしてくる感じ。

精神的に……なんていうか魂が疲れる気がしてくる。

ほどほどが良いんだろう、きつと。

ハサミのことを忘れていられたし帰ってきたら朝のような恐怖感はもうなくなっていたから、破壊されたお風呂場もハサミの残骸もちゃんと片づけられたしで良かったけど。

とどめにじっくり体を観察するっていう究極に無駄な時間を過ご

したおかげで僕は立ち直ってる気がする。

どうでもいいことほど癒やされることはないもんな。

けど……壁。

ひびが入ったりちよっとかけたりしたのを含めるとそれなりの数のタイルとその奥の壁の土台が被害を受けていたし、補修しないとカビちやいそう。

ホームセンターとかで適当に買ってきたもので間を埋めるだけでいいんだろうか。

こういうことはやったことないから分からないな。

普通はないだろうけども。

あとで調べよう。

忘れないうちに。

僕はどうでも良くないことほどすぐに忘れちゃうからな。

……外に出て疲れた代わりに気も紛れたし本腰を入れて考えよう。

いろいろと大変だったぶんの収穫もあったし。

本当にのぼせる前に上がろう。

………さてさて改めて僕に働いている力……とりあえず怖くない表現で「魔法」ってことにしているそれについてだ。

ひとくちに魔法と言ってもいろいろな種類があるけど、ここは無難にオーソドックスで想像しやすい西洋風のものでいいだろう。

魔方阵を書いたりそれが空中に浮かんだりするやつ。

つまりは漫画とかで目にするあれ。

和風のはどうしても怖いイメージがあつてなんか好きじゃないし、僕はバトルものとかあまり見ないし詳しいことはさっぱりだしな。

僕にはどうもネーミングのセンスとかバトルもののロマンとかも欠けているらしいしな。

その魔法だけど、今確認できているのは……この体になったこと以外では髪の毛を短くしようとしたときだけ。

帰りに買ってきた小さなハサミで折れたり絡まってどうしようもない毛を切ったり、くせつ毛過ぎて困っていたひと房をちよつと短くする程度の散髪に挑戦してみたところなんにも起きなかったのは確

認済みだ。

今度はちゃんと厚着をして試したから怖かったっていうよりはまたハサミが飛んでまたタイルがおしやかになっただろうしようって気持ちのほうが大きかったんだけど、いざ試してみたら何も起きなくて肩透かし。

まあ調子に乗ってぎくぎく切るうちにいきなり飛び出したら怖いしびつくりするから、本当に毛先を整えるのに留めたけど。

……ホラーの何が怖いって、幽霊とかゾンビ以前にそもそも脅かしてくる演出のほうだし。

この魔法がオートでかかっているのかそれとも誰かに見られているのか……おっとやめよう。

僕は怖いのが苦手なんだから。

髪の毛を洗っているときにぞくぞくしちゃうじゃないか。

で、ということはやっぱり僕にかかっている魔法は今の……属性で表すなら青寄りの銀色で長いストレートな髪の毛と同じ色の体毛……目の上しか生えてないけど……に幼女と少女の中間くらいの体毛を持っているこの姿。

長つたらしいからもう銀髪幼女でいいか……の今の姿を大きく変えようとする力に対して反応するものだと推測できるかもしれない。できないかもしれない。

状況から勝手に思っただけだけど他に判断材料がなんにもないから、こうしてなにかが起こってから推測するしかないからしようがない。

「……………」

石を砕いて金属の留め具を壊して、刃自体も曲がるほどの力。

いったいどのくらいのエネルギーが込められているのかは定かではない。

魔法だし質量保存の法則とかは無視しているんだろうか。

魔法だしな。

魔法って言えば大抵のことは納得できる気がする。

ある意味科学的根拠があるとかそういうのと似てるかも。

◇

考えているうちに温まりすぎてきてもう一回汗がぼたぼたとお湯に跳ね始めてくる。

煮詰まってきた感があつたから髪の毛と体を洗ってさっぱりした。髪の毛を洗ってすすぐのには何倍もの時間がかかるようになったわりに、体のほうは細かいところまで泡で洗ってさっと流すだけという手軽さ。

表面積が狭くなっているし体が柔らかいからすつごく楽。髪の毛の手間を考えたらやっぱり男の方が楽だったけど。

肌が弱すぎてスポンジを使っただけで全身ひりひりと真つ赤になった思い出から前みたいにごしごしできなくて洗った感がないけどしょうがない。

貧弱にもほどがあるけど幼女だからしょうがない。で。

この魔法がいつ解けるのか——そもそも解けるものなのか。そんなことは非常識的で超常的な何かな被害者の僕が分かるはずないし、原因が「誰が」なのか「何が」なのかなんて僕自身には今のところ推測のしようがないから、ひとまずおいておくとして。

今問題になるのは魔法が発動する条件……かつこよく言ってみれば「容姿の大きい変更」がどの範囲を指すのかということだ。

帰りに買ってきたばかりの髪ゴムで後ろのほうを縛ってみたりしてもなんともなかったから髪型を変える程度はセーフ。

っていうかそれでアウトなら寝返り打っただけでハサミが乱舞するもんな。

夜中に飛び回って破壊の限りを尽くすハサミとか物理的なホラーだ。

それじゃあ服屋っていうなじみの空間から地獄へと大幅にランクダウンした、あのJK店員さんががしていたような毛先だけのパーマ……ウエーブとかはどうなんだろう。

世の中の的に今は男でも美容院に通う時代。

テレビでも雑誌でもネットの記事でもそう言っているからそんなだろう。

僕だって誰に会う予定も無いのに律儀に静かな美容師の人を捜し当てる通ってたんだ、女なんだから床屋は難しいだろうしやっぱり美容院だな。

いずれ通うことになるだろうそこで髪の毛を切らないそういうのを試してみるのもちよつとだけ考えてみたけど……店内で魔法が発動して機械や人に被害が出たりする危険があるからNG。

たとえば名前は知らないけど「頭の上にかぶせるようなあの機械」が派手に壊れたとしてもまさか僕のせいだとは思われもしないだろうし賠償とかいう話にもならないだろうけど、高そうだし悪いし確実に迷惑になるから行けないんだ。

誰かがケガをしたりでもしたら後味悪いしな。

謝ってもしようがないし謝りようもないんだし。

だからパーマとかはできない以上分からないから状況証拠で推測するしかないわけで。

ハサミさんが荒ぶったおかげで服装とか髪型とかじゃなくて素の姿を変えることだと推測できる気がしていた……んだけど今朝思いついちゃったように、その範囲に「自然な成長」が含まれてしまうと話が根底から覆されるわけで。

無いとは思うし考えすぎだとは思うけど、今朝みたいに知らないで地雷を踏むような真似は少なくとも外では避けたいところ。

騒ぎになつたり人様に迷惑をかけたリするとそれだけ公権力から目をつけられやすくなるし、だからトリガーになり得る行動は考えても考えすぎることはないはずだ。

だからハサミのことだけを考えたなら良いんだけど……1回思いついちゃったら思いつく前には戻れないわけで、その考えが頭の中をぐるぐる回ってしている。

「……………」

一般的な、女性らしい体つきをした女の子の姿を……この見た目を

そのまま成長させる感じで想像してみる。

胸はおっぱいというだけあって日常生活でちよつとジヤマになる程度の大きさで、触るとむにゅんとしておしりがもつと大きくなって太ももも太くなって、きちんとした女性らしいくびれができている感じ。

……うん、このまま順調に成長したとしたらどこからどう見ても女の子だと思える見た目になるだろうな。

外人は発育が良いって言うし、この体も早いはずだ。

現状だと服装次第で完璧に男の姿に見える程度。

子供だからな、髪型と服装でどうとでもなる。

僕にとつてはとつても便利だけど実はとつても悲しい事実なのは置いておく。

この体は高く見積もると小学生の……体つきが変わりはじめくらしいものだし、この体のまま引きこもって食っちゃ寝のニート生活をしていれば2、3年後にはだいぶ成長すると見込んでいた。

しつかりと肥えさせて。

もちろん肥えてきたら引き締めるけど。

僕の好み的には是が非でも成長してほしいんだけど、実用的なところを考えるに胸や腰はできるだけ大きくならない方がいい。

男なアイデンティティがどうにかなつちやいそうだしなあ。

ムダに大きくなりすぎてもそれはそれで注意を引くようになるし不便そうだし。

男からの視線とか今考えるだけでも鳥肌が立ちそうっていうか立ったし。

うげーって。

僕自身の体として扱うならスレンダー体型のほうが望ましいことになる。

いくらなんでもこの低身長は生きるのにとっても不便だし、戻れなかったとしてもせめて成人女性の平均値くらいまでは伸びて欲しい。

家の中では踏み台の乗り降りとかでストレスを感じるくらいで済むけど、これが外に出たうえに人混みだと周りが見えなくて苦労する

し。

毎度の子ども扱いが嫌だしいちいち上を見上げないとならないし。……目と首がすごく疲れるし。

この幼い体は普段通りになるべく落ちついた話し方をして、そう言い張ってギリギリ中学生で通らない……こともないっていう感じだったのは確認済み。

ものすごく驚かれはしたからサンプルがまだまだ足りないけど、ギリギリ個人差には入る程度？

学年の中で飛び抜けて小さいとかそのくらいで納得してもらえそうな感じ……だったっけ？

それを補うようなとっさの病弱設定は僕にしてはいいアイデアだった。

恩人だったサンプル……あ、名前忘れた……なJCさん自身が幼い外見だったから他の人相手でも中学生と言いつ張れるかどうかはまだ分からない。

あの子も話し方と態度のせいもあってひいき目に見ても中学生にはほど遠い感じだったし、裏を返せば彼女みたいに幼く見られる子というのも確かにいることはいるんだ、言い張れば通るだろう。

希少種だろうけど……レアだろうがなんだろうが実在するんだからいいだろう。

合法ロリとかマンガ的な存在だろうって思ってたけど実際にいるみたいだし、すごく珍しいけど言い張れば……どうにか身分証を作っちゃえば何とかかなりそうな気もする。

……できたら育ってくれたら良いんだけど、ただでさえ幼女になつてハサミが襲ってくる身になっちゃったんだ。

どうなるかなんてまるで想像もできないな。

10話 危機感と必要性 2/2

僕はお風呂が好き。

どのくらいかって言うとなに2、3回まとめてどこかの温泉に籠もる程度には好き。

家のお風呂も夏は2回入るときもあるくらい。

理由は分からない。

ちっちゃいころはそうでもなかったはずだけど気がついたらそうだった。

そんなわけでせっかくのお風呂だしもうちよつとだけ考えておく。

どうせ上がったらご飯を食べたり映画を観たりしているうちにすっかり忘れちゃうだろうし、なんだか真面目な気持ちになっている今のうちだ。

さて。

姿を変えたりハサミを飛ばしたりする魔法がはたして現実の物理現象の範囲に入っているのかはひとまずおいておき。

僕の見えた目がここまで変わっちゃっているのもとりあえずはおいておいて。

仮にこの魔法が、時間が経てば自然に来るはずの「自然な成長」にまで干渉する……成長できないとかいうものになると何年経ったとしても大人の姿になれない可能性が出てくる。

可能性なんだけどそんなわけないって考えないでおくなんてできないもんな。

今の僕は子供って言う不都合極まりない存在。

どこへ出かけて何をしても人の印象に残りやすいし1人でいると心配される存在。

加えて肉体的な制限でろくに遠出もできないし何かあったときに振り切って走るなんてできない。

つまりは親切な大人だけじゃなくて年上の全ての人に興味を持たれたらおしまいなんだ。

だから大人になるまで何年か引きこもるっていう選択肢を思いつ

いて実際に1ヶ月くらいやってみただけで辛かった。

けど、辛いだけならがんばれる。

生きていくために大人……最低でも高校生くらいになるまでがんばってじつとしていようって思ってた。

——でも、もしそうならなかったら。

そもそも身分を証明するものがないんだから普通の仕事には就けない。

だけど世の中には軽い仕事……バイト程度っていう身元がはつきりしていなくてもはつきりしてるって言い張ればできるお仕事もあるんだ。

ここで大人になれないとなると……そういう身分がなくても働けるような仕事でさえムリになる。

もちろん働きたくはない。

プロのニートやってるくらいだからその意志は固い。

でもお金があるっていつても、どれだけ節約し続けたとしても普通の人が定年になるくらいには貯金が尽きる程度しかない。

現代の社会で生きるにはお金がとにかくかかるんだ。

あと10年くらいしてもどうしても働きたくない決意が変わらなければ物価の安い国にとっても考えていたくらいには絶妙な足りなさなんだ。

そういうわけだから20代のうちにいやいやしぶしぶに働くつもりだった。

それがこうなっちゃって、ついでに肉体年齢的に寿命がプラスで10年くらいで生活費も10年くらいプラスな今の状況なわけで。

「……………」

どうしようもないからこそ浮かんでくる世界最古の職業っていう選択肢。

もちろんしたくはない。

だって僕、男だし。

少なくとも心は。

けど将来路頭に迷うくらいならしようがない。

飢え死になんてこの社会じゃ限られているけど、それはきつととても辛いこと。

肝心の社会保障にもお世話になれない身だ、そうなる可能性もあるんだからせすにはいられない。

水商売っていう……程度の差はあっても「この体を使う」っていうのは本当に本場で最後で最後のどうしようもなくなつたときの手段だけど、選択肢としてはないわけじゃないし、どうしようもなければしなきゃいけないんだ。

だって身分がないんだから。

この見た目だから僕の名前と戸籍は通用しないしな。

身分がないっていうのはそれだけ現代においては特大の厄ネタなんだ。

バレたら終わりっていう厄いやつ。

元・男としてのプライドと尊厳っていうものと、全部正直に訴えて相手任せにするっていうのと。

いろんなリスクを考えると……悩む。

ついでに持つてるお金も大半が定期になつてる。

つまりは銀行に行つて手続きしないと数年後ですら危うい。

定期預金以外の普通に引き出せる貯金が尽きると実質的にゲームオーバー。

これはとてもまずい状況だ。

それが今朝ではつきりした。

これまではいつか大きくなれることを前提に待つていればいいつて考えていた。

だからこそなるべく節約しながら隠れ続けて少しでも長くこの家に留まることだけを考えてきたわけだけど、もしそうじゃないのならなんとかしてお金を手にできる手段を……貯金が尽きるまでに確保しないと詰みだ。

……定期預金、去年に更新したばかりだったんだよなあ。

更新したっていうよりは手紙を放置したからそうされたっていうことなんだけど。

少しばかりの利息と手続きの面倒さのために解約しなかったのが
実に惜しい限り。

惜しすぎる。

タイミングが悪すぎるんだ。

いやまあこんなことは想定できるはずもなかったんだから。

それでも何年かは耐えられるから無いよりはマシだろうけど。

……でも、なあ。

この「くちおいしい」っていう表現がぴったりな感じ、年を取ると古
い表現のほうがしつくりとくるのは何故だろう。

そんな歳ってほどでもないけど。

とまあ相当にとことんこれでもかって悪い方へばっかり思考を傾
けてみはしたけど、この考えが証明されてしまうとしたら……3年後
くらい？

このくらいの年の子は成長にばらつきがかなりあるから、それくら
いかもうちよつとくらいの猶予はあるはず。

だけどそれまでにまったく背が伸びなかったとしたなら、もう成長
は見込めないって考えて良いだろう。

女性的な魅力以前の問題だ。

さつきは本当にどうでもいいこと考えてたんだな。

いや、ある意味繋がっているか。

考えたくないから裸とか真面目に観察してたんだろう。

「……………ふう」

何年か後に状況が分かってから改めてでも遅くはない……………か
な。

人の脳みそって1回考えたことは結構勝手に考え続けてくれるつ
て聞くし、今こうして分かる範囲で考えておくってだけで何かの役に
は立つはず。

それに、どうにかして定期を解約する手段を見つけたら余裕で持つ
んだしな。

詳しくは親戚の叔父さんに丸投げだから分からないんだけど、もし
かしたら2、3年後にもう1回自然に解約できるチャンスが来るかも

しれないんだし。

今のは考えすぎで普通に成長するかもしれないし。

あるいはある日起きたら戻ってるかもしれないって希望もあるんだし。

「……………あ——」

頭の中がごちゃごちゃしたからって何となく出した声がお風呂に広がる。

小さい子だって分かる声。

正直男か女か分からないくらいに幼さが勝っている感じ。

声変わりする前の男だってこれくらいの子もいるしな。

くらくらする。

のぼせてきたらしい。

あがるか。

幼くなったことで浮力をつかみにくいせいで何回かすつ転んだ苦い経験から、湯船の底に敷いているマットをしっかりと踏みしめて湯船の内と外に置いてある踏み台を使つて、慎重に慎重につてそろそろとお湯から這い上がる。

……僕が中学生に入つて背が伸び始めたからつて言つてリフォームのときについでつてムダに大きくなつちやつた湯船。

前の体のときは脚を伸ばせていいなつてしか感じなかつたけど今となつては憎いことこの上ない。

ムダに大きいこれがそれはもう毎日憎々しい気持ち。

あのときの父さんを止めたかつた。

……こうなるだなんて誰も分からないんだからしようがないか。もわつとした湯気と一緒に洗面所へ出て髪の毛を、そして体を拭いているときにお股のところさしかかる。

何となく悪い気がするから汚れがたまらない程度に拭うようにして洗つて拭くその場所をじつと見てみて、ふと思う。

……成長。

したほうが僕の好みのにも今後の生活的にもそりゃあいいんだけど……女の子、いや、女性になるんだつたら生理つていうものとか。

……来るんだろうか？
……来るよなあ……。

普通の女の子の体なら早ければこれくらいの年から……小学校高学年から遅くても高校生までには来るはずだし。

……人によつてはとつても辛いつていうよな。

それこそその期間だけものすごく機嫌が悪くなるくらいに。

「……………」

まあたイヤなことを思いついたな。

僕はホラーもスプラッタも苦手なのに。

憂鬱だ。

うつうつする。

単純で便利で都合がよくって使い慣れていた男の体のほうがずっとよかつたのにな。

本当、つくづく男って単純だから楽だったんだって思う。

そう思って僕はまた凹んだ。

弾力性には定評があるからそのうち元気になるだろう。

◇◇◇◇◇

落ち込んだまま数日を籠もって過ごしてみただけどとうとうに連続ドラマとかで気を紛らわせられなくなってきたから、今度はちゃんと人の少ない平日に家を出た。

またしても晴天。

しかも今日は雲ひとつない青空。

おかげで以前にも増してじりじりする。

暑い。

暑すぎる。

太陽光で死ぬっていういにしえの吸血鬼のような気分を味わいながらとぼとぼと炎天下を歩き続ける。

ちっこくても暑いんだな。

そりやそうだ、人間だもんな。

……そういえば結局この体になったばかりのときに買った女物の服。

外で1回も着る機会と勇気がないまま夏が近づいてきたんだな。

一応はこのあとの梅雨っていうクツションまで耐えたならあと2ヶ月くらいは余裕があるんだけど……そのあとはさすがに夏服じゃないと着ぶくれてたら吸血鬼じゃなくても死んじゃう。

あの服は買ったっていうよりも半ば買わされた感がすごかったんだけど。

レシートを見てみたらセールじゃないのまで割引になっていたから嬉しかった。

だけどなんでだろう。

間違いじゃないといいんだけどな。

理由が無いのにおつりが多かったりすると言わずにはいられない僕の性格だ。

得をするのにも理由が無いと本気で困るあたりめんどくさいなって僕でも思う。

あのときの服。

家の中でならスカートとかワンピースとか短パンとか下がパンツのことも多いけど……それでも慣れるためなのと目が楽しいのから結構な割合で着ているけど……しよせんは春物。

生地は厚いし汗は吸わないしで空調の効かない真夏日にはキツそうだ。

まあ先は長いんだし女物を外で着るのはその気になってからでいいか。

女物を着なきやいけない理由がないもんな。

少年って見てももらえるって分かったんだしな、いいことだ。

なんなら女の子らしい体つきになるまでは……なれるとして……どうせだしなれるといいな……なってからスカートデビューしてもいいんだし。

スカートっていうのはハードルが高いんだ。

だって破廉恥な格好だもん。

下からまる見えなんだぞ？

強い風に煽られたら見えるんだぞ？

なんでこんなのが普通の格好として成立してるんだ。

スカートとかを着ることを想像するだけで恥ずかしくて顔が火照ってきたり着ているとむずむずして脱ぎたくなってくる。

そんな状態は……家の中じやとつくになくなっていくけど、きつと外だったらそうはいかない。

慣れてきた家の中でさえ女装してる感がすさまじいから嫌なものは嫌だ。

そこまで嫌じゃないけどなんていうか僕の常識がおかしいっていちいち言うんだ。

肉体的には正常なんだけど精神的には完全な女装。

女装。

創作で楽しむのと実際に体験するのでは全然違う。

空想と現実とは別物なんだ。

「……………」

暑い。

さっそく汗がじわつとにじんできてる。

それにしても暑いし熱い。

まだ真夏でもないのにどうしていつもこの時期はこうなんだろう。

今と同じような男装をするにしたって、そろそろ夏物をそろえないと出かけるたびに汗だくになりそう。

通い慣れて楽だったいつもの店が魔界になっちゃったから別のところを探さないといけないのがまためんどくさい。

あのビルのフロアに同じような店もあるけどあのときの店員の人うちの誰かがいたら見つかりそうだって気づいて止めた。

近くにも2、3軒ああいいう安い店があるからそこを狙って……いやダメだ。

つい最近タイミングに見放されたばかりじゃないか。

油断しちゃいけない。

僕は運が悪いのは分かってるんだ。

こんな体になつてゐる時点で幸運じゃない。

だからあのフロアに行つてあのとときの誰かがたまたま通りがかつてアウトになるんだ、きつと。

少し離れた駅の同じようなところを調べよう。

いくらなんでも数駅離れば大丈夫だろう。

そこまで運が悪い覚えはない。

運の悪さにも限界はあるはずだ。

◇

「ん」

もうちよつとで駅に着きそうになつてきたからスマホでよさそうな店を探しながら日陰をぬいぬいしつと歩いていたところ、前のほうの大きなビルの前に見るからに高級車な黒塗りが2台すらりと止まつた。

なんか熱い日差しの中で真つ黒つて言う非現実的な光景。

その片方からはこんな暑いのにスーツをがっちりと着た人たちが一斉に降りてきて止まつたままの方の車のドアを開ける。

興味深いけどこのまま歩いてるとニアミスしそうだし、ちよつと歩幅と速度を落としてしつと様子見。

だつてなんかああいうのつてこう、危ない人たちつていう気がするし。

現実にもそういうのを見たことはないからアクション映画の見過ぎか？

なんてどうでもいいことを考えながらのたのたと歩く。

目立っちゃいけないことには変わらないから用心するに越したことはないんだし。

ドアの中からは女性……学生くらいの女の子がふたり。

パツと見てきれいだつて印象で動き方もなんだかふつうじゃない感じ。

ひとりは学生服でもうひとりは私服。

学生服のメガネな子と私服な……ポニーテールみたいな子は車の中の運転手かなにかと会話をしたあと、ドアの前で待っていた男の人たちに囲まれつつビルの中へ入っていく。

ふたりとも高校生か大学生くらいだと思うけどなにかの送迎？

顔は全然違うし家族というわけでもない……仕事かなにかだろうか。

学生なのに仕事………家業とか？

あ、ファッション関係というのもありうるか。

見当がつかないけどなんとなく守られている感がある気がする。

ボディーガードとかSPとかそんな感じ。

これまで生きてきてこういうのを見たことがないもんだからなんかじろじろ見ちゃっていろいろ考えちゃう。

僕にも野次馬根性があったらしい。

なんらかの重要人物なんだろうけどああいうのを見るのは現実では初めて。

ちよつと嬉しい。

口がちよつとにまにまにましているのが分かってなんとか真顔に戻す。

まるでドラマみたいなできごとが目の前で起きているような感覚。

因果関係は逆なんだろうけど、そうだって分かっているもちよつとだけワクワクしてしまうのはしょうがないよな。

いくら僕でも人並みの好奇心くらいはある。

にしてもでかいな、このビル。

見上げるとあごの下と首筋がぐつと伸びる感覚。

この体の目は近視とは縁がないらしくって眼鏡のフレームを気にせずにはつきりと細かく見えるのが嬉しい。

上目づかいができるっていうこれもまた今までにない感覚。

……………なんとかプロダクション？

そのビルがまるまるその会社らしい。

カタカナ英語をつぎはぎしたような会社名ばかり出ているからいまいちピンとこないけどどういったところなんだか。

日陰を追い求めていたせいで普段は選ばない大通りを歩いていた

から、家から徒歩圏内なのに初めて目にした気がする。

こんなことがなければいつものように素通りしていただろうしな。ま、ちよつとおもしろいものを見ることができて満足したしもう黒塗りも動くみたいだし、ふつうに歩いてもいいだろう。

たった1、2分のろのろしただけでもう脚が重くなっているのを感じつつ駅へ向かうのを再開。

お祭りが終わったみたいなの寂しい感覚だ。

暗くなっていたスマホを付け直して見ていると良い感じの情報が手に入る。

……ふむ、ここなら同じようなランクのチェーン店だしここから電車で15……20分くらいだし、ほどほどに離れていていいかもしれない。

「ん」

電車で20分？

最近聞いたような？

「……………」

気のせいか。

ならここにしよう。

そう思いながらスマホをポケットにしまおうとして、落としたら困るからちよつとだけ立ち止まって丁寧にしまっていると近くで車の止まる音。

顔を上げてみるとさっきのつやつとした車が前のほうで止まっていて、すぐにそのままバックでそろそろと戻ってくる。

なんだろう？

なんか怖い。

少し不安になったから車道側から離れようとするあいだにその車は僕の近くまで下がって来ちゃう。

今の僕は鈍足だもんな。

車には大の男も負けるけど。

ななめに避けようとしたところで運転席のドアが開く気配。

……じつと見ていたからなにかを言われたりするんだろうか？

危ない人たち？

カツアゲ？

子供に？

いやいや見た目幼……子供な僕に向かってそんなことがあるはずが。

ぐるぐるする頭を抱えていると、出てきたのは背が高くてガタイが良いスーツ姿の男の人。

だけど……あれ？

この顔、どっかで見た覚えが。

「……………？」

ちよつと見ているとちよつと前のことが思い浮かんでくる。

ああ、誰かと思つたら。

警戒する必要がないって分かつてほつとしているとその人は会釈しながら近づいて来る。

「あなたは先日……響さん、でしたか？ 名前間違いはないでしょうか。……よかつた、失礼にならなくて。こんには、ご無沙汰しております」

相変わらずに全体的にでかいこの人には見覚えがある。

悪い人じゃない人だ。

今日はこの前に比べてちよつと離れたところで立っていてくれるから前ほどの圧迫感というか重圧も感じない。

それにしても名前を思い出せない。

あれだけ連呼していたんだけどやっぱり忘れるか。

僕は人の顔と名前と特徴を忘れるのが得意だからな。

もらった名刺もあのかのパーカーの中だろうしな。

けど困つた、挨拶するにしても返事ができない。

僕は名前を呼ばれて僕からは呼ばないとか……いやいや、普通だから良いか。

けど、みんなどうしてすぐに人の名前とか覚えられるんだろう。

「えつと、どうも……、お久しぶり、です。……あの女の人は」とつきに話すときつてなんか変な返事をしちやつて寝る前に悶え

る。

ご無沙汰ですってこの人も言ってたのにな。

そんなことよりも警戒すべきはあの人。

あの子のせいで僕は1週間くらいぐてってしてたんだから。

女の人……今井さんだっけ。

悪い方の名前を先に思い出してあわてて周囲を見回してみる。

後ろから来られたらアウトだもんな。

髪の毛がばさばさってする感覚。

「……………」

いない。

車の中じゃないよな？

いきなり出てきて引きずり込まれたりしないよな？

僕は警戒を解かないで……どうせ逃げられないって分かっているも腰を落としていつでも動けるようにする。

あの人だったら僕を見たらあの子みたい飛び出してくるだろう。

そう思っで。

……けど、居ないみたいだ。

そう認識したら気が抜ける。

……この人だけならあの子のようなことにはならないだろうし
二言三言話したらおしまいだろうし、心配は要らないよな。

あの子のことはどうやらトラウマになったらしくって、僕はすっかり怯えきってほっとして気が抜けた。

「……………」
ちらちらとでっかい肩を見上げたりしながら車の窓を覗き……込めなかった。

あの恐ろしい悪魔さんもとい女の人がないのかどうか黒塗りのガラス越しに確かめようとしたけど、どうやらスモークの様子でまたしても真っ黒。

今から飛び出てきて脅かすのとか止めてよ……？

僕は怖いのが苦手なんだから。

そう思うけど思わないフリをしてみる。

にしても悪魔さんがいないのはよかったんだけど、いまだにこの人の名前が出てこない。

他人の顔と名前を記憶する能力って使わないとレベル1になっちゃやうもんだししようがないか。

ああいうのは才能だって思うけどな。

どうせ持たざる者の気持ちは持つ者には分からないんだ。

「ああ、今井ですか。今日は一緒ではありません、今は私だけです。

頼まれてうちの所属の者を送っただけですからご心配なく。

……あと、先日は本当に失礼しました」

ぺこりとしたらしいけど僕からしたら上空からでかい何か降ってくる感じ。

1メートルくらい離れてくれてるから……あ、つむじ。

あの人のこと……今井って人のこと察されたけどいないらしくってほっとする。

ほんとによかった。

本当に。

あの強引さはもう勘弁だしできれば2度と会いたくないし。

僕の人生で遭遇してこなかったタイプの人は対処法が分からないんだよなあ。

遭遇してきても大抵はエンカウトしないようになってきたか

ら経験値なんてゼロだけどな。

ニートだし。

「私は今井とは違って響さんからご連絡をいただくまで勧誘は一切しません。今日もただお見かけしたからごあいさつをしたままで」

ふーん。

やっぱりこの人はいい人だな。

押しが強くないって言うだけで僕の好感度はまた上がる。

上がってもこの人の名前が思い出せないけど。

「こういうのはご本人の興味や意欲が一番大切だと思つていますから。ですがこれもまたなにかの縁……と言うとうさんくさいですか。ええと、運転していたらお知り合い……になつた響さんと久しぶりに会いましたから駅までお送りしようかと思つただけです。」

ここから……響さんの足ですと少しありますし、よろしければと」
ふむ。

男のときの僕も旅行先で駅とかまで送ってもらつたりしたことあつたしな。

話しかけにくいようにしている僕だつてバス停で座つてたり暗い中歩いて帰ろうとしたら、時間が余つてる親切なおじさんとかおじいさんが乗せてくれるんだ。

田舎つて良いよね。

虫が苦手だから住めないけど。

けどまあ、この人なら大丈夫だろう。

今井さんのような何が何でもつて感じはないし、なによりあのあとに名刺に乗つてたのは調べたし。

でたらめしか書いていないんじゃないやれば信用はできる人たちだろう。

僕はそう判断した。

人と話すと疲れるから本当はすぐにさよならしたいし、この前までの僕なら断固として拒否していたけど……今は事情が変わつてい

るって言うのもある。
魔法つていう未知の力でちょっと困つているところだし、ここは少

し情報が欲しい。

引きこもっているだけじゃなんにも分からないのは幼女歴1ヶ月半くらいで外出3回目な今が保証しているんだしな。

……準備もできているし、ちよつとだけ探ってみよう。

リスクを取らないと何も手に入らない。

RPGの基本だ。

「ではお願いしてもいいでしょうか。今日は暑くて」

「もちろんです。ではこちらへ」

そう言つて大きい背中を屈めて黒塗りの後ろのドアを開けてくれるこの人。

元の僕と同じ年くらいの彼。

……………。

どうがんばっても名前が出てこなくてごめんね、多分同じ年ぐらいの君。

けど、つるりとした黒塗りだしスーツだしがっしりしてるし。

端から見たら僕のお迎えに見えなくもないかもしれない……かれしれないな。

怖いけど、少しだけ……少しだけ勇気を出してみないと。

なに、フライングシザーズに襲われるよりはずっとマシだ。

今井さんに襲われるよりはもっとマシだもんな。



この体の肌は……薄いつていうこともあるんだけど、それにしたつてすべつとしている。

陶磁器みたいなつて表現のこと、どんだけ病的なんだつて思つてたけど実際に目に見してみるとぴつたりだなつて思う。

いつもお風呂じや長湯する僕。

はじめはいろいろなことを考えたりして時間をつぶすけど、次第に頭がぼーつとしてきて汗でいっぱいになる。

こういうときはどうでもいいことをああでもないこうでもない

て考える思考っていう暇つぶしができなくなるんだ。

髪の毛が濡れていなければ考える代わりに髪の毛とかを触っても楽しいんだけど、濡れているときにしてもたいしておもしろくもない。

だからその代わりのに代わりにつるつとしてる肌を撫でるんだ。

このもち肌を。

特に脚に顕著なんだけど、この体になってから外でいちども肌をさ
らしていないから日焼けはもちろんのこと……ケガをしたあととか
キズとか虫さされのあとの芯みたいなものさえない。

ていうかなくなっている。

完全にきれいさっぱり。

さらに言えば薄い産毛さえ、よく目を近づけないと……体がもの
すごく柔らかくて余裕で膝の裏までのぞき込めるのがすごいんだ
……見えないくらいにほとんど生えていなくてすべすべだし、細胞ひ
とつひとつ……肌のキメもものすごく細かい気がする。

中学生くらいまではなんとなくて手のひらの細胞とかを見た記憶
があつたっていうのを今さらながらに思い出す程度には懐かしい、四
角形っぽいランダムな細胞のテクスチャ。

細胞分裂的な、テロメア的な感覚。

けど、本当に肌がきれい。

僕の小さいころもこうだったんだろうか。

あたりまえ過ぎると意識しないもんなあ。

気がついたらすね毛とかも生えてきていたし、そもそも普段はズボ
ンと靴下とで隠れているところだからな、運動をしていなければ気が
つかないものだろうし。

僕みたいに外で遊ぶ楽しみを理解できなかった男には余計に。

女性なら身だしなみに気を遣うからまた違うんだろうけどなあ。

いやしかし、とにかく毛がない。

つるつるのつるつるなんだ。

せつかくだからぐつと目を近づけて、しげしげと観察してみる。

……ふむ、毛というよりは毛穴自体がないのか。

毛穴ケアという言葉もあるくらいだしやっぱり毛以前の問題だったか。

おかげでつるつるの肌に包まれている感じ。

脱ぐたびにきれいだって感じて性的じゃなくても見惚れるくらいだし。

僕の体なのにな。

さらに言えば、幼……子どもなのに。

いや、僕の体になっているからこそこうして悪いとか恥ずかしいとかそこまで感じずに、じつくりと観察できるんだけど。

ただきれいだからぼーっと見るのって女の人が綺麗な女の人を眺める感じなのかな？

男の僕でも筋肉がついている男の人とかには見惚れるしな。

まあこの体は痩せすぎていて骨張っているから、そんなのにはまだまだ。

もうちよつと肉付きがよくないと女性というものを感じない。

ただのもやしな子供だ。

いや、幼児なただけ。

あと地味に変わったこととしては肌が敏感なこと。

皮膚感覚だ。

1ヶ月前までの男な僕の体と違って体毛に邪魔されないからつてつま先から太ももまですると撫でることができただけ……上から下はそこまででもないけど下から上へ撫で上げると、こう、背筋までぞくぞくする感じがして「ふうふううう」ってなる。

映画とかで感情移入してとても感動したときのあのジーンとくる感じに近いのが撫で上げたところから首筋までぞわぞわするみたいなレアな感覚。

前はそもそもこんな風に体を撫で回すなんていうのは思いつきもしなかったから試していないし確かじゃないけど、多分この肌はそうとうにセンシティブな様子。

超の着く敏感肌らしい。

体毛っていう摩擦軽減の機能がゼロになって肌の細胞が細かくて

その上に皮膚そのものが薄いつてというのがセットになっているからか？

特に太ももの裏がわとかわきをつうつと撫で上げるのが毎日のささやかな楽しみ。

この体になつてもあんまり感覚の違いとかは意識しないけど、これだけは完全に未知の領域で新感覚だ。

これが女の子になつたからなのか、それともこういう体質の男の体でも起きるのかは検証できないけど。

もし男に戻れたら試してみよう。

ともあれ撫ですぎるとなぜか息が上がってくるからほどほどにして、湯船の中で丸まるようにしていた体勢から一気に脱力。

なんか走つた後みたいになるんだよな。

のぼせてるんだろうか。

体の力を抜くと体がおしりを起点に浮き上がろうとしてくるから両手でしっかりと湯船のふちをつかむ。

もう鼻に水が入る痛みもパニックも経験したくないもん。

「……………ふう……………」

触覚に集中していた意識を現実に戻すと、どうしてもマスキングテープで雑に塞いだ穴が目に入る。

結構雑にやつちやつた跡が目を引く。

……………そういえば、元の体じゃあこのくらいの歳から近視な乱視になつてきていたから、こうしてお風呂場ではつきりとクリアな視界は長いことお目にかかつていないんだ。

コンタクトして入ると目に張り付くからなあ……………温泉とかだと足元が見えないと痛い目見るからしようがなくだけど普段はぼんやりな裸眼だし。

毎日の長湯で見慣れていたはずの下半身の具合つていうか状態をよく覚えていないのつて、このせいもあるんだろうな。

だからこうして腰を浮かせておへそから股から太ももからをじっくりと見る機会はなかつたわけで。

「……………」

両手でバランスを取るのが意外と難しい。

それにしても。

僕は遅めだったけど、それでも中学の後半から……もう10年くらいはずつと黒い毛で彩られていたから下半身のイメージが完全に固定されていたけど、今は完全に無毛で白なネイキッド。

成長するとしたらそのうちに生えてくるんだろうか？

確か体毛は男性ホルモンの量でかなり変わるはずだからまだ分からない。

毛が薄い感じの体質だったら生えたとしてもほんの少しかもしれないし。

女の人の毛がほんとうはどのくらい生えるかなんて普通の男が知るはずはないもんな。

姉か妹がいればあるいは……ってところか。

けど、生えたとしたって……髪の毛と同じで限りなく薄い色になるはずだから、生えてもビジュアルはたいして変わらないかもしれない。



こんな感じに最後に車に乗ったのは相当に前のこと。

電車とかバスとかロープウェイとかなら結構乗るけど、こう小さい車内は久しぶり。

シートを続けるためのけちっぷりが魂にまで染みついているからタクシーですらよっぽどのがない限りは乗らないし、利便性のために免許だけは取ったけどペーパーだしな。

車なんていう税金やらなんやらでそこそこのお金を食べるものは家にはない。

父さんのこだわりだったらしい外車も相続のときにお金にしちやったしな。

叔父さんについて言ったけどさすがに悪いってなって、結局はお金に

して預けておこうってことで。

売り払ったお金はこれまでの生活で僕の血と肉に……なったけど
どっか行っちゃったから虚空へ？

まあこの体に少しは受け継がれてるって信じよう。

せめて最低でも脳みそだけは維持したい。

いや、したいって言うてももうなってるけど。

頭の大きさにどう考えたって小さくなっているみたいだけど本
当どうなっているんだろうな、今の僕の体って。

シナプスだけ良い感じにコピーされてるんだろうか。

魔法だしな。

仮称だけど。

「……………なので、最近は何に出ることが多くて」

「そうですか」

おっと。

無意識のスイッチを切り替える。

会話をオートでしていたら気がついたら何やらの話が終わったら
しい。

とりあえず無難に返しておこう。

なんだったのかはさっぱりだけど。

……この癖、いつかは来るはずの社会復帰までには治しておかない
とな。

僕と話をした相手にとってはちゃんと相づちとかの返事をしてそ
れなりの返事をしていてと思ってるのに、実はひとつも頭には
入っていないとかいうやつばいやつ。

あれだ、多分人にいちばん信用されないタイプのだよね、これって。

うんうん分かる分かるーって言った次の日になにひとつ覚えてな
いんだもん。

僕だったら静かに距離を置く。

間違いない。

……………。

必死に記憶を掘り出したら……確かダンスのレッスンがどうだと

か？

事務所にいる人たち……子たちの話題で。

歌って踊って話して笑って。

アイドルって肉体労働も甚だしいお仕事って話題だったはず。

たぶんそんな感じ。

僕の周りは革張りのシートで、斜め前には運転席の……えっと、あ、

思い出した、萩村さん。

彼とバックミラーごしに会話をしているところだった。

それにしても乗り心地がいいなこの車。

サイズがあれだけど。

……シートベルトが首に掛かっているのはどうしてくれよう。

「彼女たちはうちで……もう3年ほどがんばっています。来月あたりから忙しくなりそうなので、その前に時間のかかるトレーニングな

どはまとめて今のうちにと。人手が足りないのもあって私も送り迎えをするために良くこうして運転していますね」

「そうだったんですか」

ここにも人手不足の波か。

世知辛いな。

「でも送り迎えとか本当にするんですね。　こういうのは初めて見ました」

体験もしてるな。

こんな黒塗りってのも。

幼女になったから人生初めてばっかりだ。

そういえば乗ったときから気になっていたけど、至る所に小さなマスコットのなぬいぐるみが置いてあったり充電ケーブルとかペットボトルとかとにかく高級車に見合わないものが散見している。

荘厳な雰囲気台なしだけど安心する。

おまけに僕の使っているのは違う匂いのシャンプーとか香水とか……つまりは女の子の香りが充満している気もする。

考えて変態っぽく思ったけど、なんだか匂いがやけに鼻に残るんだからしょうがないよね。

今の僕は男じゃないからセーフだろう。

……シャンプー。

男のときから適当に買ってあるいつものじゃなくて、同じくらいの値段でもいいから女性用のにしたらこんな匂いになるんだろうか。

今度試してみよう。

香水の方は個人的に好きじゃないからしないけど。

そもそも必要がないんだし。

汗をかいてもまったく臭いがしないのもそれはそれでまた気になるものだけど。

それにしても冷房が涼しい。

顔にかかるとしばしぼするからちよつとだけずれよう。

……ずれてもだめだった。

どうやら風の設定が子供向けじゃないらしい。

当たり前か。

と、また頭の中にいるうちに信号で止まったのかなにやらを差し出される。

「それで、これがこの先のスケジュールです。 ご覧のとおりいろいろと重なってぎっしりと入ってしまつて、こうして手分けをしないと間に合わないものまであるんです」

「……僕がそれ、 見てもいいんでしょうか」

「大丈夫です。 略称だらけですし見ただけでは詳しくは分かりませんから」

「そうですか」

この人も随分脇が甘いなって思いながらそれを受け取る。

今どきはちよつとしたことですよーぐ燃えるつてのにな。

………うわあ。

ノートくらいの大きさのホワイトボードみたいなものには、いろんな筆跡と色で埋め尽くされた来週の日付の下の空欄だった空間が。

ここなんて分単位に小さい字でびっしり書かれているし……大変そうだなあこういう業界で働くつて、としか思えない。

改めて実感するけど、あのまま押されて見学したりしなくてほんつ

とうによかった。

あの剣幕と押しでずるずるといつて「そのままお試しで」とかいつて入らされたりでもしていたら、おっそろしいことになっていた。

ニート失格になってたな。

世間一般的には社会復帰だけど僕からしたらデスマーチ突入だ。

ちよつと離して眺めると、なにかのすかし文字があるとと言われても納得できそうな密度。

ホワイトなのにブラックになっている板を見ながらそんな未来を見そうになった。

まあそうなたらなったで忙しくなって僕がイヤな思いをする代わりに、僕のこの魔法についてぜんぶぶちまけて丸投げにするだろうけど。

ある意味楽かも知れない。

誘ってきたのは向こうだし、貴重な僕のニート生活を邪魔するんだからそれくらいは押しつけないと気が済まないだろうし。

ついでに戸籍とか権利とかなにからなにまでお世話になると。

「……………」

そんな都合の良い妄想が広がりかけたのを消す。

やっぱ無理だしな。

こんなの、身内でもなければ信じちやくれなйдらう。

とつくに成人したはずの男がこんな格好になっているなんて僕だつて信じないもんな。

寝る前のご都合主義なら良いけど、ここは現実。

もしかしたら……なんて調子の良いこと考えると痛い目を見る。

僕はそれを知っているから誰も頼ってこなかったんだから。

11話 虎穴（車） 2 / 3

高校生くらいまではそうでもなかったんだけど、大人になってからなんだか興味のない文章を読むと理解できなくなる。

これは退化なんだろうか。

僕は試験の問題文とかもわりと飽きずに読めたタイプなんだけだな。

それともやっぱりお酒のせいなんだろうか。

こうなってきたのってちょうどそのくらいからだしな。

お酒は脳みそをちっちゃくするって言うし呑まない方が良いんだろう。

知っていても呑むけど。

なんならこの体でも……おっと、内緒だ内緒。

とりあえずで略語だらけで記号にしか見えないホワイトボードから目を背ける。

今でもおんなじように読むのがやだってなるんだから多分気持ちの問題なんだろうって結論づける。

お酒のせいじゃないって援護しながら両手で微妙に重く感じるそれを前に出す。

なんだかこういうスケジュールを見ていると僕まで働いているような気がしてきてイヤだしさっさと返しちやおう。

そう思ったけど優しい感じのブレーキで車が止まる。

「ところで響さん、私から誘っておいて今さらですが少しよろしいでしょうか」

「あ、はい」

赤信号だったらしく振り向いてきた彼にホワイトボードを差し出す形になっていて「気がつかずに済みません」って言いながら受け取ってくれて腕が楽になった。

微妙に重くつてぶるぶるしてきてたもんな。

この体は貧弱なんだから重いものを持たせちゃいけない。

そういうのにも慣れてるのはかは分からないけどすぐに返せたのはありがたいな。

えっと……………萩村さんに。

振り向いてきた彼を見た印象は……………やっぱり肩幅があるなあって感じ。

どれだけ鍛えようってしても僕は筋肉がつかなければ太りもしない感じの体質だったらしくって、ジムとかでがんばってみてもなんにも変わらなかったから萩村さんみたいな体質は羨ましい限り。

この体だとうなんだろうか。

見た感じはどう見ても筋肉質とはほど遠い幼女なんだけど。

……………もっと成長してこないときすがに分からないか。

幼児だもんな。

マツチヨな幼児なんて見たことないもんな。

「以前お会いしてはいますし、こちらの身分を明かしている顔見知り……………と言うことにはなりません。ですが深くは知らない人間……………しかも私のような男性の車に少しのためらいもなく乗るというのは避けたほうがよろしいかと。後ろに他の人間が乗っていないとも限りませんし。もっとも送ると言ったのは私の方ですし、本当にご説明した通りに私のついでで駅前にお連れするだけなのですが」

「あ、はい。言いたいことはなんとなく」

なんだかばつの悪そうな声の調子になったから分かっていますよアピール。

ドのつく正論だしな。

実際この体じゃ成人男性に連れ込まれたらどうしようもない。

ああ、だから女性は普段から歩くだけでも気をつけなきゃって話になるんだな。

実際誘拐とかの事件は女の方が巻き込まれやすいんだし。

僕とは全く縁がなかったからこれっぽっちも意識しなかったけど……………たしかにやばいよな。

なにがやばいって、いざとなつて全力で振り切って走って声出せば何とかなるっていう自信が完全にないってことが。

……そう思うと本当にやばいな。

女で子供つてすつごくやばいんだ。

「あと、おかげで響さんに気づくことができましたが……不審者に突然に連れ込まれたりしないよう車道からは少し離れて歩くのをおすすめます。あの道は大通りではありませんが、普段は車しか走っていません。この辺りで犯罪があつたとは聞きませんが万が一です。

……親御さんや学校などでこういうことについて注意はされてい
てご存じでしょうし、差し出がましい……ええと、聞き飽きているだ
ろう話だとは思うのですが、ふと心配に感じてしまいました」

長い信号待ちで、ちらちら前を見ながらゆつくりと語りかけてくる
ように言ってくれている。

……いい人なんだな。

2回しか会ってない僕みたいな子供に対してわざわざ送つたりし
ようって思ったり、この状況でこんな話したらまるで萩村さん自身が
危ない人って思われてもしようがないのに言ってくれている。

子供を心配する良い大人だな。

……問題は僕が大人だって言うことだ。

同世代に本気で心配される、元男って。

お説教……ちよつと前まではする側だったのに今ではされる側か。

僕はなんだか少し悲しくなった。

車の中での同世代からのお説教は続いているらしい。

微妙に凹んでいる僕を置いてきぼりにして。

「信用されているとしたら私としてはうれしいのですが、それでもも
う少し警戒心をお持ちになったほうがと思ひまして。事務所に所
属しています中高生の方にも言うたびにうるさいと言われてしま
うのですが、どうしても心配になってしまひまして……性分なんです。
すみません。あの場所ではありませんでしたが、以前私の知り合
いも危ない目に遭いそうになったと思ひ出してしまひまして」

あ、やっぱり言われるんだ、うざいって。

しょうがないだろうけどそうだろうなって思う。

だって、学校の先生たちが長期休みの前とかに話していたようなは

るか昔のことを思い出させる程度には熱の入ったお説教だもんな。

子供は注意されると反抗したくなる存在。

けど僕は大人だから素直に聞いておこう。

実際この体で生きるんじゃない犯罪に巻き込まれたら助けてもらえないもんな。

誘拐されても親がいないんだから心配されようがないんだし。

そんな彼のお説教は車が動き出してからでも続く続く。

話しぶりからしてもこういう注意をするのには慣れている様子。

頭ごなしではなく諭すような感じの口調。

この人教師とかにも向いていそうだな。

こういうガタイがいいのに優しい雰囲気の先生って子供から好かれそうだし。

なんて言うか……守ってくれそうな感じがする。

僕が小さくなってるから余計にそう感じるのかもな。

「考えなしに乗ったわけじゃないので平気です。心配していただいてありがとうございます」

まだまだ続いているお小言の文言とまだまだ続きそうな気配を、良い感じにお礼を言うことで断ち切ってみる。

こういうのは息継ぎのタイミングを見計らうと上手くいく。

対セールスで身につけた特技だ。

……いや、普通なら社会ですぐに身につけるものか。

口うるさい上司の愚痴とかはネットであふれているもんな。

まあ経験値が極端に少ない中でなんとか獲得した最低限の知恵には変わらない。

存分に使わないと。

でも……そもそも子供ってそんなに警戒心がないんだろうか。

親や教師の言うことをなんとなくでも聞いていれば赤の他人の車に乗ったりなんてするはずもないし、今どきお菓子をあげるからおいでとかそんな手に引つかかるものか？

………いや、ありうるのか。

子供の中には人を疑うって発想をまだ持っていない子っているだ

ろうし。

大きくなつてくれば疑われないなりに「おかしい」って思いつくだけの情報があるから「避けよう」って思えるかもしれないけど、人と話をするのが大好きだったり気が弱かったりしてなんとなくでついていくっていうのもありそう。

僕がそう見えてもしょうがないんだろう。

悲しいかな幼い見た目だしな。

この人には素顔を見られているんだから女の子だって知られてもいるんだし。

ちよつとしたことで簡単に事案になつちやうこのご時世だ、いかに萩村さんが良い人かつて。

「しかし、これから少しばかり物騒になりそうですから」

「萩村さん」

なんだかまだ言いたいらしいけど僕的にはもう充分だからって、ちよつと強引に止めてすつと息を吸ってひと息に言う。

「先日いただいた名刺を検索して……ホームページやSNSで写真付きで萩村さんたちや会社が本物だったかどうかの確認もしましたし、電話とストリートビューでも確かめました。載っていた担当の芸能……ええとアイドルの方たちも実在していて、とりあえずは黒い噂とか見かけませんでしたから信用したんです」

噛まずに言えたけどたまたまかける。

「それにあの悪……えつと、女の人……」

「……………今井ですか？」

うっかり悪魔さんって言いそうになつたのもまたしょうがない。

「彼女が一緒でないにしても、萩村さんは力尽くでという感じではありませんでしたし……さつき実際に女性たちを他の護衛の方たちと送迎していたのを見ていたので、僕みたいなただの子供をさらってどうこうするような人ではないと考えました。いくらなんでも僕ひとり連れ去るために、来るかどうかも分かっていたのに今日あの時間のあの場所であれだけのエキストラを用意するとも考えにくいですし。無意味です」

実際そうだしな。

この1ヶ月外に出ていなかったんだから僕があそこを歩くなんてのは想像もできないはずだし。

引きこもっていたからこそ断言できる。

悲しいけど。

もし仮にそうだったとしてもそこまでする悪い人ならもはや何をしたっていつかは捕まってドナドナされるんだろうし、考えても無駄だしな。

……ちよつと酸欠気味だ。

ついでに脳みそがオーバーヒートしそう。

すでに普段の1ヶ月分以上の会話をしている気がする。

だけど、もうちよつと言っておこう。

なんだか言わないと気が済まなくなったから。

「それに万が一のことを考えてスマホを押すだけで通報できるようにしておきましたし、目くらましも持っています」

と、ここでポケットの中で握ったまま忘れていたスマホと催涙スプレーをちらり。

……反応を見ようとしたら運転中だったから無意味な演出だったらしい。

そりやそうだ、今は車だもんな。

話すのに夢中でって言うよりかは話す内容を頭の中で文章にするので必死だったから、あとはちゃんと発音するのに夢中だったから全然気がつかなかった。

無念だ。

縁がなかったもんだからなんだかわくわくしちゃう防犯グッズって言うアイテムをいそいそとしまう。

にしてもネットって本当にすごい。

なんでもそろろうな……って。

あ。

ブザーの方を買うの忘れてた。

あとスタンガンもあったらいいなって思ってたのに忘れてた。

届いたあとで考えてみたら催涙スプレーなんかこういう狭い場所で使ったら僕自身も動けなくなるって分かったからとりあえずでポケットに突っ込んでおいたんだった。

一気に話しすぎて酸欠になったのか目の前が砂嵐になってちかちかする現象をこらえて少し。

後ろからクラクションが聞こえてびくびくしてなる。

「……あの」

「あ、いえ」

どうやら信号が青なのにぼんやりしてたらしい。

いや、僕の方を向いてたからなにか話しかけてたんだらうか。

酸欠だったからさっぱりだ。

「失礼しました……先ほども今も。その、そこまで考えていらっしやるとは思っていませんでしたので……その。よく知り合いをこうして送ったりしてつい先ほどのようなことを言ってしまうのですが、今のように真正面から返されたのは初めてでして」

「そうなんですか」

「はい。自分は平気だとかそんなことはしないだとか、またお説教かだとか……それとも話題をそらされるか……響さんにとっては余計なお節介でしたね。響さんご自身もご両親もご立派です」

「いえ、むしろ想像通り誠実な人というのが分かったので安心しました」

安心しきりはしないけど悪いことをする人じゃないって分かっただけで充分だ。

親切は受け取っておこう。

ありがた迷惑なことも多いけど。



せっかくだからってさっき調べた店のある駅ビルに行きたいって伝えたら、この後その方向に用事があったとかで、さっきまで向かっていた地元の駅から十数分乗せてもらうことに。

まあさすがにあの後はお説教もされなかつたしどうせ乗せてもらったんだからつてわがままで。

確かにネットに載せている事務所のひとつがそっちにあるしG P Sはちゃんとはぼ最短距離を進んでいるようだし、疑う必要もないもんな。

疑うのつて1回疑いだしたらなんでもかんでも疑わしくなるものだしキリがない。

疑念が疑念を呼ぶ。

人間関係メインのドラマで修羅場が起きる元凶だ。

みんな、ちよつとは人を信用したほうがいい気がする。

まあ、誰も信用していない僕が言うのもアレだけでも。

それにしてもシートの絶妙な柔らかさとかクーラーの冷氣と匂いが気持ちいい。

もう帰つてこのままごろごろしてたい気持ちになった。

「そういえば先日もうそう感じたのですが、響さんは……その、悪い意味ではなく見た目よりも大人びて見えますね。 響さんくらいの歳の方……失礼、あくまで見た目の話ですが……と接するときはもう少し語彙……話し方を変えているんです。 響さんにも最初はそうしようとしていたのですけど、そうしたら失礼だと感じる程度に大人びていらつしやるので。 女性に尋ねるのは失礼ですが、歳はおいくつでしょうか?」

子供扱い。

女の子扱い。

……どつちも間違つてるのにどつちも正解なのが悲しい。

「まだ幼いのに受け答えがはつきりしていて、とても低学年……違つたら済みません、の方には見えせず将来有望だ……と、今井もあれ以後何度も言っていたのですが。 それもあつて余計に断られたのが残念だったと」

低学年とか連呼しないでほしい。

こう、心にぐつときてしまうじゃないか。

僕を幼女扱いして失礼極まりないのはさておいて……あのときの

JCさん、中学生ならなんとかだませてもさすがに大人に対しては無理かな？

余りに幼すぎて初対面の印象で10歳を超えているとは思わせられないらしい。

うーん。

僕とはぜんぜん関係ないと思っていた小さいとか幼いつていうのに対するコンプレックスを僕自身が発症してしまうなんてな。

人生とは複雑怪奇だ。

幼く見える原因はもちろん1に低身長で2に顔つきだろうけども。

でも前の年齢からしたら数歳なんて誤差の範囲だしやっぱりどうでもいいか。

でもなあ。

.....

.....そうだ。

せつかくだしここでも反応を見てみよう。

意見が多いほうがいいし、この前の子はちよつと.....例外だろうしなあ。

同じような境遇っていうフィルターがかかっていたみたいだし。

言ってみてあまりにも疑われたりするんだつたら.....とても、とっても不本意だけど次からはギリギリ小学生ということにするしかない。

けど、とりあえずこの前とおんなじ感じで言ってみる。

「.....あの、ひとつだけ。いいでしょうか」

「はい」

一応据えかねたって感じで拗ねた感じで言ってみる。

「僕は低学年でも小学生でもありません。今年で中学2年、歳は.....13です。子供じゃありません」

大人扱いは望まないまでもせめて子供扱いは勘弁って意味を込めて。

中2だったなら13歳くらいだったはず。

身長体重の表で目にしたから覚えている。

.....。

あ。

14歳の方が良かったかも。

けど、今は春だから多分大丈夫なはず。

……大丈夫だよね？

11話 虎穴（車） 3 / 3

13歳。

僕が今から10年くらい前の年齢。
そんなはるか昔の年齢を言ってみて「やっぱりないなあ」って思った。

気持ち的にはそれよりずっと上なんだけど肉体年齢はそれよりずっと下って言う難しい状況。

ちょうど良い感じの妥協点が見つからないんだ。

さばを読むって案外と難しい。

これで13だって言い張るんだたらよっほど強い精神がないとやってられなさそう。

だってもう無理あるよなあって思うし。

……それにしても。

とつさに口にしてから考えなきや行けなくなっただけで背筋が冷たくなっただけ、学生の年齢ってとつさに出ないもんだな。

がんばって年を数え直してなんとか間に合わせたけど。

中学卒業で15くらいだから、13、4……で間違っただけはないはず。

間違った嘘を言うどぶわってこう、お腹から血の気が引くあのイヤな感覚がするけど数秒前の僕もそれに襲われてて気持ち悪かった。

やっぱり嘘って苦手。

しようがないんだけど苦手は苦手だ。

見栄って張るとろくでもないんだな。

そんなことを思ってる苦労しているんだけど、お返事がない。

ついでに軽いブレーキがかかったかかって思うとまた加速して元の速度に戻ってってなる。

また僕の指先に汗がにじむ。

……この人……萩村さん、運転は苦手なのか。

いや、今のはドライバーを驚かせた僕がいけないのか。

慣れているとも言っていたし普通の運転なら平気なんだろう。

止まっているときに言えばよかったかもな。

もちろん驚かせるつもりはなかったんだけど結果としてびつくりさせたことには変わらなくて悪い気がする。

僕はこんなどうでもいいことまで頭の中でぐるぐるしちゃうんだ。

「済みませんでした……大丈夫でしたか？」

「はい、平気です」

平気じゃなかったけど僕のせいだから我慢する。

そうして後ろにぐっと押しつけられる感覚。

車は今度こそ流れに乗った様子でほっとする僕。

「……改めて失礼しました。 職業柄、見かけよりも歳が上だったり下だったりする方をたくさん見てきました。それほど……外見と年齢が離れている方を見るのは久しぶりだったので。 いえ、今までに何名かそのような方を存じていますので疑うとか言うわけではないのですが……まさかそれほど若いとは思ってもいませんでした。 ……そうですね、中学生の方に小学生に見えるとお伝えしたら気分を害されるのは当然ですね」

「え、いや別に良いです」

なんかすっごく申し訳なさそうな声になったから良いですって言うておいてあげる。

ほんとどうでもいいことだしな。

けど……ふむ。

変な運転しちゃうほどにはびつくりする感じ？

だったら……この萩村さんの場合も驚きはするんだけど、僕の話し方とかこの前のJCさんみたいな年齢詐欺な人と会ったことがあるからこそ信じるっていう感じなのかな。

今回もまたサンプルとしては微妙なところだったか。

なかなかサンプルにふさわしい人が見つからない。

いや、単純に僕が人見知りできっかけがないから誰にも聞けないだけだけ。

そういう意味じゃ今日この人に会えて良かったんだろう。

うそっぱちを信じてくれる大人がゼロじゃないっていうところは

結構な収穫。

「中2です」って言い張れば「学生証見せて」とか言われない程度にはあり得るって感じ……で良いんだろうか？

でもやっぱり無理のある設定だったみたいだなあ……この見た目
で中学2年っての。

今だってシートに座るっていうよりは乗っているっていう感じの
大きさだしな。

脚が短すぎて、座るところを膝に合わせれば腰が浮くし腰に合わせ
ればふくらはぎの微妙なところがこの原理になって気持ち悪いって
言う始末だし。

どう見ても一般的な人間のサイズ未満だ。

10歳くらいまでは何かと不自由な世の中らしい。

……子供のとき父さんの運転する車じゃ僕、どうやって乗っていた
んだろう。

まったく記憶に残っていない。

あまりにも昔過ぎるもんなあ。

「……………」

しんと静まる車内。

なんだか気ままずくなって外を見ようってしても窓の外がよく見え
ない。

視点が低すぎてビルの上の方とか空しか見えない。

……乗り物に乗っていて真横がよく見えないのってちよつとイヤ
だな。

何かにつけて不便でしかない幼女ボディがにくらしい。

◇

静かで快適だなってご機嫌になってる僕だけど視線を感じて
ちよつと残念。

運転に集中しているように見えるけど、ちらちらって僕をミラー越
しに見てくるのが分かるんだもん。

人の視線ってなんで分かるんだろうな。

……けど。

やっぱり無難に小5とか小6くらいにしてもよかったかもしれない。

意味のない意地を張るんじゃない。

無駄に疑われるくらいなら……って何回目かの後悔をしても遅いんだ。

1回言っちゃったことって撤回できないもんな。

沈黙は雄弁よりつてのは良く言ったもの。

今から思えば何歳くらいに見えるのかって上限を見極めてからでも良かったかも。

でももう遅いからこのまま乗り切ろう。

間違えたつてのは言えないんだもん。

大人ならともかく子供……学生が、たかだか10回くらいしか誕生日を経験していないのに自分の年と学年を間違えることつて滅多にないはずだからな。

それも1歳ならともかく何歳もだなんて、自分から嘘言ってますつて言ってるようなもん。

自分の歳とか、誕生日が20回を超えてくるとだんだんどうでも良くなつてくるんだけど、それまでは僕自身が何歳かって言うのが何かにつけて大切だもんな。

とは言えなんだか気まずいままなのもやだからもつかい言っておこう。

萩村さんも大人だから流してくれるだろう、きつと。

案外繊細な人だったりするかもだし、全然気にしてないよつて教えてあげないと。

「自己紹介で必ずそのように驚かれるので慣れていきますから気にしなくても結構です。下に見られるのは……今のように虫の居所が悪くなければ普段はスルーするので。歳を分かってもらえたので機嫌も直ったので大丈夫です」

「そ、そうですか……」

「はい」

年齢については帰ってから要再検討の様子。

「……………」

「……………」

信号いくつか分の静寂が心地よい。

そういえば僕は車とか電車とか乗っていると振動と音でだんだんと眠くなってくる体質だった。

今はどうなっているんだろう？

車はともかくバスとか電車とかで今でも眠くなるんだろうか。

この見た目で眠りこけたら心配されちゃうから気をつけないとな。

あ、でも、バスとか電車とか……………この見た目だと子供料金で行ける……………？

そんな素晴らしい考えがよぎる。

本当はいけないことだけど肉体年齢的には何一つまちがってないわけだし、なにより半額ってという言葉には何か重大な意味がこもってる気がするし。

「……………ええと、それでしたらついでにもうひとつだけよろしいでしょうか」

「はい」

「…………身長や…………その、失礼ですが…………体重など。…………その、…………以

前から変わってはいないのでしょうか…………」

こんどは何言いだしてるんだろうこの人。

頭の中が???ってなっちゃったじゃないか。

この人にしては珍しくつかみにくいふわつとした質問だし。

でも…………え？

どういうこと？

…………ああ、きつと萩村さん、最近背が伸びたかとかの世間話にすり替えようとしてみたけど僕の顔を見て、僕が女の子に見えるもんだから困ったんだ。

最近ハラスメントの判定がものすごく厳しいから異性に身長とか体重とか言いにくいんだな。

うんうん分かる。

今ってなんかものすごくめんどくさい世の中だもんね。

芸能事務所って言う立場の男だから気軽に聞けないんだろう。

大変だね。

「はい、小学校の途中から伸びなくて。体重も……あまり食べられ
ませんし」

仮に本当に中2で小学校低学年な身長ならこんな感じだろうって
言っておいてあげる。

「……そうですか。いえ、何でも……失礼なことを聞いてしまいま
した」

「別に構いませんけど。こうして送ってもらっていますし」

車内の雑談にしてはなんだかお互いに緊張感あふれるものになっ
ちやったけど、おかげでヒマじゃなかったからな。

なにより楽しってるんだ、実は話し好きかも知れない萩村さんの相手
くらいはしないとな。

女の人じゃないから飛び飛びすぎなくって楽し。

……いや、単純に他人と沈黙な時間を過ごすのが苦手って可能性も
あるのか。

うーむ。



「途中の運転や話題で失礼しました」

「いえ。僕のせいもありますから」

そうしているうちにまた雑談チックな話を振ってくるようになって
たらしくってぼんやりしているあいだに着いた様子。

身を下り出……せないからシートベルトを引つ張りながら外を見
てみると、そこそこに大きい駅ビルにぎゅつと詰まった広告の看板。
乗り換えするおつきい駅。

送迎のロータリーやら僕でも知っているいろいろな店やら平日の
昼間だっというのにたくさん行き交ういろんな格好の人たちやらで

せわしい空間。

この辺久しぶりに来たなあ。

普段は用事がなくて来ないから……多分前に来たのは数年前とかいうレベル。

本当にひとり暮らしたと行動範囲が限られるよなあ。

インドアだから余計に。

インドアで根暗で引きこもり経験者なニートを継続している子供の肉体だからこそ、電車代と人混みの苦労と疲労を回避できたのがとてもありがたい限り。

いや、電車代なんてどうでもいいんだけど……ほんと体力のない身としては楽こそが命だって実感する。

「済みません、こちらでよろしいでしょうか。これ以上近くには止められないようなので」

「はい、ありがとうございます。歩かずに済んで助かりました。」

おはなしも聞けましたし」

普通に電車で来ても同じくらいで着いたんだろうけど……まあ、駅まで歩く分もショートカットできたし、ロータリーからの数十メートルなんて誤差だしな。

「ちようど行きがけでしたし時間にも余裕がありましたから。それに移動中に私たちの活動を紹介できましたし響さんのことも教えていただきましたし。……これであのときに勧誘を止めたこと、今井にしつこく言われないようになると思いますので……私もすごく、ありがたいんです」

すぐくっついていう単語に力がこもっている。

一瞬だけ顔が曇るかわいそうな萩村さん。

あれだけ激しい人が同僚だと大変そうだな。

ぐいぐい来る女の人は怖いよね。

うんうん、分かる分かる。

つくづく社会は厳しいらしい。

やっぱりニートでよかった。

そんな誇らしさでどやってしそうになる。

「すぐにとは言いませんので」

「……？」

「この前の通りに何年後でも構いませんので、ご興味が湧くのをお待ちしています。 私たちと一緒にたくさんの人を元気にするお仕事……少し気になる程度でも結構ですので、もし何かありましたらお気軽にご連絡ください」

「そうですね」

ここで「分かりました」とか「はい」とか「はあ」とかのニュアンス次第で肯定にも取られかねない返事は厳禁だ。

萩村さんははじめでも悪……今井さんとか、その上の人とかに「そう言ったよね？」って言われると困るもん。

さすがは慣れているだけあって最後までご苦労様だな。

聞き流しても頭に残る程度にはいろいろと聞かされたし……やりおる。

ビジネスライクに分かりやすく簡潔にどんな仕事があつてどんな生活になつてとか、お仕事のメリットとかデメリットとか、どれだけの人気でだいたいどれくらいのお金が入るのかとかも頭に入っちゃつてるもん。

まあ軽く聞いただけでも「まずは数曲歌つて踊れるようになって」とか「演技指導」って言葉が出てきた時点でハードすぎるから僕には絶対ムリだつて悟ることになって興味はこれっぽっちも湧かなかつたけど。

むしろマイナスだ。

ニートを選ぶような人間に労働の美しさを説かれても効果はいまひとつなんだから。

僕だつて楽だつたら考えたかもしれない。

座つたまま用意された原稿を読むだけだつたりするならまあなんとか……つて気はしなくもないけど……いやいや、やつぱりイヤだな。

注目されたくないんだから何したつてヤなんだ。

いちど高いハードルを掲げられてから下げられると「それならいい

かな……」って思っちゃう心理そのままじゃないか。

いけないいけない。

危ない危ない。

話術が危険だ。

適当にお礼を言いつつ車を降り……ようとして、さつきは閉めてもらったドアが予想よりずっと重くて、あと地面までの段差が大きくてよろけたりしつつ苦勞して降りて慎重にドアを閉める。

「……………」

へえこつて感じの気の抜けた音。

半ドアだ。

「……………」

ばたんって顔に吹き付ける風。

「では失礼します、響さん。また機会がありましたらいつでもご連絡ください。メールでもメッセージでもお電話でもその週にはお返事できますので」

「はい、送っていただいて本当にありがとうございます」
連絡する気はないけどありがとね。

運転席から窓を下ろして僕に挨拶もそこそこに、後ろから来た車からの無言の圧力で高級車は走り去っていった。

「……………」ふう」

話し疲れたって気がついて脱力。

車の振動の感じが体に残っていたから、なんとなくぼんやりと萩村さんが見えなくなるまで突っ立っていたけど気がつくとも日差しが真上に来ていて熱気が戻ってきた。

やっぱり外は暑い。

タクシーをいつも使う人とかマイカー通勤の人の気持ちがよく分かる。

僕ももつとお金があればそういう生活をしたい。

贅沢すぎる気がするけど思うだけなら良いよね。

楽できた上に情報も手に入ったし、一般人……の範囲だろう常識的な大人。

今の僕に対して多少の興味と好意を持っているみたいで、いざというときに使えるかもしれないツテができたっていうのは大きい。

年齢で思いつ切り嘘ついちゃったけど、何かあれば叔父さんとかお隣さん以外に頼れる人が出来たのは大きいよな。

まだ誰にも幼女になったって言っていないから唯一の連絡先とも言える気がするし。

今井さんだって悪魔的に強引だけど……裏を返すと強引だからこそ一緒に働く見返りになにかを要求すれば飲まざるを得ない状態に持っていけそうだし、ほんとうにいざって言うときの当てができたのは安心する。

契約書とかのうち本人がしないといけないものにゼーンぶサインして期待させておいて「じゃあ親御さんにもお話を……」っていうタイミングでまとめて暴露ってすれば断れまい。

騙して悪いけどお互いに利用する関係なら僕も遠慮なく丸投げできるとだ。

もらった名刺にも連絡先があったし、忘れられない程度に連絡を取っておいたほうがいいかもしれないな。

うまく乗せられて気がついたらステージとかは絶対に避けないといけないけど。

絶対に。

けど、いざって言うとき……そう、ずっと考えているように成長できないとか、成長できてもやっぱり仕事とかめんどいつてなったときには……。

じりじり焼かれるのは勘弁だから日の光を避けるために帽子とフードを深く被り直して、目の前のモールへと急ぐ。

さつさと薄着を調達したい暑さで熱さ。

サイズとかはこの前のもう分かっているし、どの辺に行けばどの服があるのか……は分からないか、あのときは全部持って来てもらっちゃったしな。

まあサイズは分かっているしなんとかなるだろう。

いざとなれば今のような格好だけでもいいしな。

はじめてつて言うのは不安でしょうがないものだけど、なんとか1回でも経験しちやえば次からは楽だ。

とりあえずは服を3セットくらい買う。

それだけでたぶん疲れるから適当なところで涼んでから帰ることにしよう。

あんな思いはしたくないから重そうだったら送ってもらおう。

変な顔されるかもだけど……そこもなんとか適当に言って。

「……♪」

1ヶ月ぶりの外出。

連休とは言っても平日だしお昼は微妙に外れているしそこまで混まないだろうし、外に出た記念になにかを食べて帰ってもいいかも。

どうしても残しちやうのはご愛敬だな。

物理的に胃がちっこいんだもん。

この前みたいに残飯処理を任せられるJCさんがいるわけじゃない、しょうがないって思っておこう。

……そんなことを考えつつ急いでいたせいか周囲の索敵がおろそかになっていたらしくって、気がつくときすぐ目の前……上に誰かがぬっと出てきて危うくぶつかりそうになる。

今の僕、視点が低すぎて正面を見ているだけだと見える範囲が狭いからなあ……。

ひやつとしてむつとするけどぶつからなくてよかった。

体重的にも体積的にもぶつかったら僕がただじゃすまないもん。

ほとんどの人は僕よりも背が高いはずなんだからちやんと前を見て歩いて、できれば僕に気を遣って避けて歩いてほしいところだ。

僕と違って遠くから見えているはずだしな。

でも歩きスマホとか多いし、相手が変な人だったりしたらそれはムリな相談か。

やっぱりどれだけ首が疲れようともちよつとは上を向いて歩くクセをつけないとな。

とまあ頭の中でひととおりの文句を言いながらその人を迂回。ぶつかりそうになったからってこんな子供に怒ってくる人はいな

いって思うけど気まずいしな。

「あの、えっと。すみません」

女の子だったか。

怒って無さそうで良かった。

「あの……その。えーつと……」

「……はい？」

あとからもたもたって感じで声をかけてきているらしい。

僕の方を向いて話しかけようとしているらしいからつとつさに返してたけど……あ、これ、めんどくさいアンケートとか地域の子どもの見回り隊とかだったらやばいんじゃないかと気づく。

思わず足を止めちゃって背筋がひやつとしたけど一応はその人の顔を確認だ。

なんとか隊の人だったら全力で逃げよう。

そう、思ったけど……その人の顔、いや、その子の顔を……僕は知ってしまっていた。

「……わあっ、やっぱりっ！ 先日私が服を選ぶのをお手伝いさせてもらいましたあのときのきれいなお客さまですよねっ!? こんなところでまた会えるなんて！ まあ!! お久しぶりですっ！ あっ、あのとときの服！ 着てくれてるんですねっ！」

きーんと耳がして頭がぐわんぐわんする。

言葉の暴力で足がすくむ。

……近くで見上げるとでっかい胸と顔が同じくらいの大きさに見える、髪の毛の先がくるくる回っていて体に見合わない童顔で、でも子供相手でも上がりやすくって噛み噛みだったあのときの……服の店の店員さん。

今日は噛んでいないし制服だし、話すスピードもまあまあで留まってはいるけどあの恐怖は忘れない。

蘇る恐怖。

「……………」

黙るしかない僕に向かって再会の喜びをこれでもかかってまくしたててくる。

……なんでこの子がこんなところにいるんだ。

僕は他にもない君を避けるためにあえてこんなところまで来たつていうのに。

……こんなことなら何も考えないであの店でまた人形になっておけばよかった。

それなら……少なくともいちばんの強引なこの子には会わなかっただろうにな。

ああ、終わった。

僕の貴重な外出が。

ぼんやりとその子のJKさんらしい格好を眺めるしかない僕だった。

◆◆
やばい。

「……………」

やばい。

やっちゃった感がやばい。

心臓がどつどつどつどつてなってる。

やばい。

けどやっちゃったものはしょうがない。

手を出しちゃ行けないものにノリで手を出しちゃったんだ。

後悔はなんとやら。

「……………」

体が熱い。

気持ちひとつでこうもなるなんて知らなかった。

だってお風呂場の鏡に映っているのは……あろうことか女兒もとい女子用のスクール水着を着て突っ立っている僕なんだから。

銀の長髪と眠そうな目、凹凸がなくて幼い体が紺色のナイロンな手触りと新品のゴムの臭いにうっすらと囲まれて似合すぎている僕だもん。

胸とお股のところの気持ちいい肌触りの柔らかいパッドなのか裏地なのかが入っているせいでほんのり強調されているのも、こう……やばい。

やばいがやばいんだ。

語彙力がなくなるくらいにはやばいんだ。

なにせびつちりすぎる。

これはさすがにまずい。

いくらなんでもまずい。

罪を犯した気分って言うのはこういうのなんだろうな。

凹凸がないからこそやばいって感じる。

「……………」
せめて女装してスク水を着ているって思い込もうとしたけど、それはそれでやばいことに気がつく。

そんな通称スク水を買ったのはほんの少しの好奇心と冗談と……いつものうっかりのせいだった。

ネットで着られる服を探して物色したら「おすすめ商品がありません」とかなんとかで表示されたこの水着。

たぶんこれは下着とかを探しているいろいろなワードで検索していたせいで……小学校低学年くらいの子の服を買いたいんだなって思われたんだ。

それとも僕の購入履歴とごっちゃになってだったのかな。

それはもう分からない。

……………まさか買っただけで目、つけられたりしていないよね？

「……………」

ぱたぱたって顔を仰ぎながら熱くなった顔を冷まそうってする。

ネットって言うのは基本的にゼーンぶ見られているらしい。

って言っても人がいちいち見るんじゃないかって……今だとAIみたいなのが特定のワードとか画像とかを通信から見つけて、怪しい人がそういう機関とかに行く……らしい。

映画とかの受け売りだけど嘘でも大げさってわけでもないらしいのはネットの書き込みとか買い物とかで逮捕される人がいるので分かるし。

ということは、この家からアクセスしているのは男だつてのが分かって、最近やたらと女の子……それも小さな子を頻繁に調べて買っているって言うのが分かっちゃやうわけで。

女兒用水着とか言う犯罪臭しかないワードなんてやばいだろう。

やばい。

そうは思うけど、これを買っていたのは結構前だ。

それから時間が経っても何もないし大丈夫だろう……たぶん。

気にしないことにしよう。

お家にお巡りさんが来ちやったらそのときはそのときだ。

いくらなんでもスク水で監禁の疑いからの……って言うのは悲しすぎる結末だから勘弁だけど。

カートに入れたのは興味本位だった。

犯罪者の供述みたいだけど本当だからしょうがない。

けど想像していたよりはずっと安かったのとサイズが分かりやすかったのどで選びやすかったし、こんなの買ったらやばいよな……って思ったからやっぱりやばい。

「やばいって思ってた手を出したんだな？」って聞かれたら全面降伏だ。

やばいからやっぱり後で止めようって思ってた忘れちゃって……忘れたまま他のものとまとめて買っちゃって、開けてみたらあまりにも強烈な印象で僕自身がやらかしたことなのにドン引きして「あ、これムリだ」って思ってた忘れようとしてしまい込んで忘れていたスク水。

……しまい込んでいたんだけど暑さのあまり頭がおかしくなっていたのか、それともこんな見た目なのに呑めるんだって気がついたお酒がまだ頭に残っていたのかは分からないけど、その場の勢いという僕にしては珍しい動機で着ちやっただ。

スク水を。

アルコールで汗ばんでたからすっごく着にくかったけど着ちやっただ。

やっぱりアルコールは危険なんだな。

「……………」

女物には慣れたと思っていただけこれはずがにとつてもすっごく恥ずかしい。

ここには僕しかいないのに何秒置きかに周りをきよろきよろしちやうくらいだ。

鏡の向こうの僕も普段とは違ってゆだった顔をしているし全身の肌も汗でうつつすらとにじんできて、それがさらにまずいことになっている。

非常になんというかわいかわいというか……恥じらいが色気とは言ったものだよなあって思う程度には。

……汗、滅多にかかない体だと思っていたんだけど、ここまで恥ずかしかったりするとは出てくるんだな。

暑いとき以外でこんなにも止まらないんだもんな。

「……………」

鼻の中がすんってなる。

体がぶるってする。

着てから数分くらいは悶えていたけど峠を越したらそこまででもなくなってきた。

慣れたとも言う。

慣れてっすごいな。

びたって止まるんだもん。

というか予想以上に寒い。

体が震えている。

気化熱とかいうののせいかそれとも……いや、単純に冷えただけか。

そりやそうだ、家の中とは言え水着で汗かいたんだもんな。

そうして僕は恥ずかしくてたまらない湯だった状態から一瞬で冷静で冴えきっている。

感情をすぐに抑えられるのは僕の特技だ。

イラツとしてもすぐに収められるしな。

その代わりにささいなことですぐにびっくりするけど。さして。

恥ずかしさを失ってから観察してみると、まずは感覚がまるで違う。

お股だけじゃなくて体じゅうを強く締めつけられていて着ているのもわりと苦しい感じだ。

着た感じサイズはそこまで小さくはないようだけど特にお腹の締めつけが辛い。

あと太もものつけ根。

いや、わきの下とかお腹とかお尻とかお股とか脚のつけ根とか言うすべすべに包まれている範囲全部だな。

やっぱり小さかったんだなうか。

いや、けど身長と体重はぴったりだしなあ。

うーん。

でもどうして水着はこうも体のラインを際立たせるように作られているんだらう。

上半身丸出しの男のに比べれば何倍もましなだらうけど下着と変わらないじゃないか。

何が違うんだらう。

水に濡れていいって言うの以外で。

鏡の前でくるくる回りながら銀髪スク水幼女っていう劇物と化した僕を観察する。

この姿で通りがかりのサラリーマンさんに抱きついた瞬間にその人が逮捕されるレベルのやばいやつ。

くるって回って浮いた髪の毛がぱさって落ちるときに水着にすれて「しゅる」って音がするのがなんだか新鮮。

これで髪をツインテールとかにしたら……いやいや犯罪臭が加速する。

着ていると窮屈だけどさすがに運動用な子供用として作られているだけあって体にフィットする感じで動きやすいらしい。

しかもアニメとかで子ども体型のキャラクターがよく着ているのを見れば分かるとおりというか実感しているとおり、視覚的なインパクトは下手をすれば裸以上。

なんでアニメとかマンガが浮かぶんだらうって思ったら、僕の学校じゃ中学になる前には男女別々だったって気がついてなるほどって思う。

学園もとい学校生活とか灰色だった僕にとってはああいう創作上の世界の方が馴染み深いまであるもんな。

たかがアニメだマンガだって言うけど侮れない。

仮想とはいえわずかながらに人生経験がたまっていてくれると嬉しいけどどうなんだらうな。

しかしやばいなあ……どうしよ。

いや、ほんとに。

裸は視覚的にきつすぎるからこそその裸一步前の水着でもある。

裸に限りなく近いけど見ちゃっても大丈夫っていう布に包まれるからこそ安心感もある。

不思議な感覚。

鶏ガラなはずの今の僕のこの体なのに、あちこちが締め付けられていることで裸のときよりも体の形というか肉感がくつきりと凹凸で映っていて……その手の人たちにとってはたまらなそうな状態になっている。

あばらとかごつごつしたところがすべすべしているからやばいのかも知れない。

僕的にはあと10年は成長してほしいところだけどたまらない人はいるんだろうな。

僕的には成長して欲しいところだけど。

……でもなるほど。

締めつけることであえて強弱をつけて幼い体に欠けている女性らしいフォルムを演出しているのか。

そんなことを思ったりして、ふと手元のタブレットで水着の写真を眺めながらポーズを取ってみる。

「……………ふうむ」

これはこれで裸とはまた違った良さがある。

どうせ幼女の身なんだ、遠慮無しに観察しておこう。

これもまた人生だ。

いや、違うだろうけど。



「やっぱり、ここのケーキは絶品ですねー。 お家からも学校からも離れているし定期券でも来られないからなかなか機会がないんだけど……久しぶりに食べたらやっぱりおいしいわーっ」

「そうですか」

「いつもは並ぶのに今日はすぐに座ることもできたし品切れもなかったし。 タイミングがよかったから嬉しいです!」

「そうですか」

「ん——! おいしい……このためにおこづかいを貯めてきてほんとうによかったわっ!」

「そうですか」

僕のいい加減な相槌に満足しているらしい目の前の大きい子は、それはもうおいしそうな顔をしてケーキとお菓子のセットをむさぼる。

子供が一生懸命食べている姿は見ていてほほえましいけど僕が巻き込まれるからはほほえましくない。

なんでかスク水を着たときのことを思い出しちゃってトリップしてた程度にはほほえましくないんだ。

僕は目の前の、その子のものよりずっとちっちゃくていちばん安いやつを眺める。

お店に入っちゃった以上には頼まないと悪いし……で頼んだやつだ。

僕が普段お店の前を通るときに目にするこうしたお菓子……スイーツって言うんだっけ、と比べると元のサイズがだいぶ小さいみたい。

だから思っていたよりはまし……だけど飲み物とセットで、これで千円かあってげんなりした。

悲しい。

こんなものを食べるくらいならコンビニのお菓子を選んだほうが何倍もマシな気がする。

あれで充分だろうって思うけど連れ込まれちゃったんだからしょうがない。

スイーツの園っていう魔境に。

そもそも僕は甘いもの好きじゃないからいちばんに縁遠い場所だ。なんて思いつつ「早く目の前のおつきな子が食べ終わらないかな」って願いながらちみちみとフォークと口を動かしている僕。

……ここは駅ビルの最上階にあったカフェ。

萩村さんに送ってもらって片道とはいえ人混みと暑さをしのげて楽ができたって喜んでいたのはつかの間の奇跡だったらしくって、その奇跡が終わった瞬間にこの子に連れ去られ「再会した記念に！」とか「あのときの服の感想を聞きたい！」とか……僕が良いよだなんてひと言も言っていないのに勝手に解釈して連れて来られたのがここだ。あれよあれよという表現がぴったりで、手を引くこの子の性別が違っていたなら事案となってもおかしくはないものだったに違いない。

「えつと」とか「あの」とかしか反抗できなかった僕も悪いかも知れないけど。

端から見るとどうしても姉と弟な感じになるんだろうからむしろ生ぬるい視線と笑顔が注がれていた気がするけど……あれは気のせいだったということにしよう。

逆ならまだしも僕がこの子の弟とか……ないない。

「……………」

けど……見渡す限りに女の人しかない。

いや、一応はいるのか。

一応に男もいるけどそのうちのひとはただの幼女でもうひとりはそのウエイターさんで、あとはみんな女子で女性だ。

こんな異質な世界、これまで生きてきたのに存在すら知らなかった。

いや知ってはいたけど本当に実在するとは思っていなかったという意味で。

テレビとかのスイーツ特集って本物だったんだって今日初めて知った次第だ。

長生きもするもんだな。

たかが二十数年だし今は数歳だけでも。

しかもひとつひとつの値段がやたらと高いのも驚きだ。

ケーキと飲み物の基本のセットだけでそのへんのランチセットを軽く上回るお値段。

つまりここにいる女性たちは少なくとも男の倍の値段を使って腹

と舌を満たしているというわけになる。

お金持ちだな。

女性に対して甘味の影響力は計り知れないらしい。

そんなわけで……ほぼ満席近いお店の真ん中あたりの席に案内されてしまった僕たちは、全方位から飛んでくる甲高くてうるさいキンキン声に包まれることとなる。

それだけでも頭が痛くてこれっぽっちのケーキでさえ味わうこともできない。

まことにストレスフルな環境だ。

まさに地獄。

早くお家に帰りたい。

帰らせて。

帰して……。

◇

「……ふう、ああ……おいしいわかぐわしいわ……。それにしてもあるとき私たちが選んだ服を着てくれていて嬉しいわあ。……ああ、私たち今はもうお客さまと店員という関係ではないのだし普通に話してもいいのかしら？」

「どうぞ」

さつきから微妙に丁寧だったり砕けたりしてたし今さらだもんな。変だなーって思ってたけど子供ががんばってる好感はあつたから気づかなかつたことにしてあげてたけど流石に気づいたらしい。

砕けた感じになっていいるけど考えてみたら相手は高校生でこちらは……詐称でも中学生。

上下関係は明らかだ。

もちろん僕が下になる。

悲しいけどそれが現実。

子供にとっての1年は大きいって言うからな、精神的にも肉体的にも。

それに年下に向かってきつきみたいな話し方こそおかしいんだし、僕は別にため口とかされるぶんには一切気にしないからどうでもいいしなあ。

僕から年上には絶対にいねいに話さないと気が済まないけど僕がそうされる分にはどうでもいい。

萩村さんとか今井さんは、きつと僕みたいな子ども相手でも対等なビジネスパートナーとして考えていたからこそその話し方だったんだろうし。

いわゆる大人の関係……む、ちよつとちがう気がするけど大体そんな感じだ。

敬語って距離感とか細かいニュアンスとかを丸投げできるから実はとつても便利なんだけどな……距離感とか無視できるし。

僕的には楽だけど高校生的にはめんどくさそうだもんな。

「それにしてもそれにしてもっ、あのとときに最初男の子だってみんなが思っていたくらい本当にボーイッシュな服装も似合うのねっ。

男の子の服も女の子の服も楽しめるなんてうらやましいわー」

「そうですか」

まあその胸とおしりじゃあな。

絶対に口にしないけど頭の中じゃ好き放題。

でもその発言、同級生の同性にしてしまったらタダじゃ済まない気がするけど大丈夫なんだろうか？

同級生相手でもおつきいだろうし……肩こりそう。

あとこの服は別に好きだから着ているわけじゃないんだけどなあ。

単にこれ以外の選択肢がないからというだけでしょうがなくだし。

結局サイズは分かって自力で選ばなかったからやっぱりどこか服の表記がわかりにくかったし、なにより一応は服が揃ってしまっただけであれから1着も買ってないせいでヘビーローテーションだもんな。

日常の95%以上は家の中にいるし、汁物を食べるときは古い服かシャツ1枚にしているし……この体だいたいして汗かかないから2日くらい着たきりでもぜんぜん臭わないし。

なんとなく気持ち悪いから毎日洗いはするけどそれでも不便なことはないしなあ。

着るものにはもともとこだわらないし、そもそも洗濯したものを着回すっていうのは前からずっとやってきていることだし。

服のローテーションの中には古い服がまだ混じったままだつていうのも僕のこだわらなさを的確に表している気がする。

ぶかぶかになるけどシャツとかなら男のときのも着て平気だしな。外はともかく中はただの男だしぜんぜん平気だ。

汗をほとんどかかないし臭くならないし年中家の中でごろごろしていて滅多に服なんて汚さない。

だから着回しで事足りたせいで今日になるまでちよつと厚手の春物で済ませられたんだ。

あとはパンツとシャツだけの格好も割と良くする。だつて楽だし。

男のひとり暮らしなんてそんなものだ。

とにかく、どうにかしてやつとの思いで外に出て新しいものを調達しようとした矢先にこれだ。

幸先が悪すぎる。

なんで、よりにもよつていちばんイヤな相手を避けようとして会うことになってるんだらう。

運が悪いにもほどがある。

やはりこれは呪いなのか。

僕、なんか悪いことしたんだらうか……。

そんなことをぼんやりと考えながら見ていたらいつの間にか会話が途切れていたらしく、不思議そうな顔つきをしてのぞき込んでくるJKさん。

圧がすごい。

身長……座高も低いもんだから上空から迫ってくる感じ。

どうやら体は大きくても顔と中身は年相応と見えて、僕みたいな相づちしか打たないタイプに対する経験値はまだない様子。

まあこの子が友達に選りびそうな女子はおんなじような子ばかり

だろうしなあ。

これで会話を諦めてくれたらいいんだけどなあ……諦めてくれなさそうだなあ。

憂鬱だ。

「……あー。そういうえば、これだけおはなししたのに自己紹介がまだだったわね！ もうずっと知っている気がしていたから忘れていたのだけどよく考えたらまだ名前も！ あ、すみません、私このケーキを」

さらっとおかわりを頼んでいるしまだまだ続いてしまいそうだ。

今の僕の目はどんな感じになってるんだらう。

「私は下条かがりっっていうの。改めてよろしくね？ ……えっと、あなたは？」

「……………」
響です」

言いたくなかったから一瞬偽名にしようかって思ったけど反応できないから止めておいた。

嘘って言うのは頭が良くなきやつ続けられないもの。

僕には無理だもんな。

「響ちゃんねー。 やっとお名前を聞けて嬉しいわっ」

僕の名前を知ったことがそんなに嬉しかったのか、ぱんつと合わせた手のひらに合わせて肩と一緒に髪の毛の先もぴよんと跳ねる。

そうとうに嬉しいらしい。

名前を聞いただけでここまで喜べるなんて……JKってお得な生き物だな。

男ならふーんでおしまいなのに。

せいぜいが呼ぶのに便利程度の価値しかないものだしなあ。

「でも、またこうして会うことができるなんて！ 先輩たちに自慢できそうじゃあっ」

「……………」お知り合いのことですか？」

唐突に知らない人を挙げるのは止めてほしい。

こうやって話が膨らんじやうじやないか。

聞かないのも変だし聞かざるを得ないし。

「あー先輩っていうのはね、あのときに響ちゃんのコーディネートをした人のうちのひとりのことだね？ 私の部活の先輩たちなのよー。先輩たちはもう高校生だしうちの学校はバイトOKだから去年から働いているんだけどね、人手がどうしても足りないっていうから私までこっそり働いていたのよ。本当は私はダメだったんだけど言わなければバレないって先輩たちが言うものだから」
速い速い。

頭の回転をあげる前だったからぜんぜん追いつけない。

最近はやけに話し好きな人に絡まれるからちよつとだけなら慣れしてきたけど僕にとってペラペラしゃべる人の相手はまだ難しい。意識しないと早々に聞くのを諦めるクセ……ほんと、どうにかしたいとなあ……。

「……………そうだったんですか」

とりあえずの返事をしつつ時間を稼いでようやく追いついてきた。処理オチしながらゲームをしているときのよ様な感覚だ。

ラグを逆手に取るあの感じ。

だけどこの言い方、どうやらあのとき感じたように接客自体に慣れていかなかったみたいだな。

そりゃあ友達と好きなようにしゃべると接客とじゃ全然違うもんな。

ああいう仕事って外から見ると楽そうなんだけどいざ働いてみたら絶対に大変だろうしなあ。

話すのが好きで仕方ない人ならともかく。

そういう意味ではこの子にとっては天職なんじゃないかな？

もう慣れてるだろうから転職になってるんだろう。

僕とは真逆の存在だもんな、JKさん……じゃなくて下条さん。

……だけど気になる。

あのときはあんなに親近感わく噛み噛みさんだったのにどうしてこう残念になっちゃってるのかって。

「……………えっと、それにしても。あのときと比べると、その………雰囲気

気、だいぶ違うように感じるんですけど。何かあったんですか」「
どうせ食べ終わるまで話してくれないだろうってそう聞いてみ
た。

12話 苦手は、やはり、苦手 2 / 3

「……へ？ 私の雰囲気か……？」

「なんだか同一人物とは思えなくて」

あのとときJKさんもとい下条さんの態度とかがいきなりまるっと変わったのが気になった。

ずっと話してたからどうしてかなーって思ってたただけだけど、この子の顔と胸を交互に見ていたらなんとなくそのままするつと。

だって気になるもん。

いくらめんどくさがりの僕だって……最初に会ったときだっていきなりがらつと人格が変わったような豹変するよ。

気になるでしょ。

僕みたいに人とのコミュニケーションに難を抱えてる仲間って気持ちが裏切られたんだもん。

ひどい裏切りもあったもんだ。

あ、僕は別に好きで人と話さないんじゃないんだ。

ただ会話をするとか何日も尾を引くくらいに疲れるから話さないだけなんだ。

そんな自己擁護はいいとしても、最初はそういう感じの僕と同類かと思っただけ安心していたのに別の生き物みたいになっていたのが気になると言えば気になる。

や、別にムリに離してもらおうとは思わないけど。

あと話が長くなりそうなら別に良いけど。

「あ……あれはね……。響ちゃん覚えていたのね、恥ずかしいわあ……」

おや予想外の反応だ。

下条という名前の子は髪の毛のくるくるしているところに指を巻きつけながら、あのとときほどじゃないけど少しだけ顔を赤くしていた。

あ、その仕草って結構落ちつくよね。

分かる分かる。

僕もこんな体になって髪の毛触るようになったから。

……なるほど。

これが女性同士の「わかるー！」なのか……！

またひとつ知らなかったことを知ることになった。

まあどうでもいいことだけど。

「……………」

「……………」

とまあ聞いてみたけどしばしの沈黙。

そのうちにやっぱり本気でどうでもよくなってきたて帰りたかったことを思い出した。

けどこの雰囲気で「じゃ、帰るので」っていうのはさすがにないってのは僕でも分かる。

けど帰りたくって気を抜くとそわそわして来ちゃう。

この小さくて軽い体を押さえるので精いっぱいだ。

初対面じゃない人との会話はつらい。

強引な人との会話はつらい。

明確な目的のないこういう会話もつらい。

苦行でしかない。

質問をしたのは僕なんだけどもう興味が薄れてきたし、なんにも言わないであいづちだけ打っておいて終わるのを待つべきだったかも。

……「もう帰ります」って言えば、適当な理由つけければ帰ることができるだろうっていうのもつらい。

ずっと年下相手なのに「でもいきなりは悪いし……」って思っちゃう情けない僕の心もまたつらい。

優柔不断すぎる僕自身がつらい。

「……………」

……………なんで年下の子と話をしてるだけでこうなるんだろう。

10くらいは歳、離れているはずなのに僕の方が子供じゃないか。

僕の人生経験が標準的なJKさんたちに満たない疑惑。

……いや、男って会話の頻度は低いものだから……低いよね？

「何十年も毎日人の服を選ぶ仕事をしているとその人がどんなところで働いているのかふだんどういう服を着ているかが分かるんですけど！　すごいわよね！　私は離れたところから聞いただけなのだけれどあのときにもっと聞いておけばよかつたって……ええと何の話だったかしら？　あ、そうそうそれでねそれでね？　中でも私みたいに臨時でたまたま応援に来ていた……あ、あのときに人手が足りなかったのは何故かは分からないのだけど働いていた人たちの半分近くが一気に熱を出して休んでしまったんですって、変よねえ？　あら、えつと……あ、そうだわ、その不思議な人……って言っても、もうおばあさんに近いくらいのお年なのにハキハキしていてもそのうは見えないくらいに若く見えたのだけれどね？」

「……………」

よくそれだけ口が回るなーってほへーって見てたら急に動きが止まって、何だろうって思ったら座り直して圧迫感が引いていく。

一気にまくし立てて疲れたしい。
そりやそうだ。

イスにすどんって座った下条さんは紅茶を少しだけ飲んで「ほへえ」ってため息をついている。

……話がぶつ切りっていうか横に逸れたりして気になるけどうるさくなるよりは静かなほうがいいし、このまま適当な話題に戻ってほしいな。

本当に何となくで聞いただけだしな。

さつきと食べてさつきと解散って流れにどうにかして持っていきたいところ。

そう思った矢先にウェーブの子はとんととカップを置くと、さつきみたいに腰を浮かせては来ないけど上半身だけでぐぐぐと近づいてくる。

僕も合わせて引こうとしたけど背もたれに邪魔されて無理だった。

……ここのイス、肩までもないはずなのになあ……つくづくの小ささよ。

またまたの圧迫感で「あ、逃げるのも逸らすのもムリそう」って悟る僕。

「それでね、その人はオーラっていうのが見えるらしいの！ テレビでたまに見る超能力みたいなものかしらね！ よく分からないんだけどその人がね、響ちゃん聞いてる？」

「……はあ」

目を逸らした一瞬を目ざとく指摘されて視線すら避けられない様子。

「良かったわ、でね？ その人がね？ 響ちゃんが入って来ようってしているときからひと目で！ たったのひと目でよ？ 『あの子は普段からずつと相当の人の視線を集めている子だ』って言い出したの。

それも、お店の外でフードを被っていたときからよ!? すごいわよね!?! それだったから途中までは半信半疑だったみんなも、響ちゃんの顔と髪が見えた瞬間から他の人もはしやぎだしちゃってもう大変な騒ぎだったのよ！ ……あ、もちろんお客さんたちに気がつかれないように静かに騒いでいたのよ?。」

聞かないと終わらなさそうだから話を斜め聞きするのは得意だ。

……ええと？

つまり？

どういうこと？

………。

そのとんでもなくとんちんかんなことを抜かしおった人があのフロアを地獄に変えた元凶と。

よし、それだけ分かれば充分だ。

それだけのためにこんなにも熱心なんだな。

どれだけ話し好きなんだろう。

けどその元凶さんがいる可能性があるんだし、今日あっちに行ったとしたら地獄を見たかもしれない。

だとするとたったひとりを相手にしている今のほうがマシなのかも？

……いや、甘味地獄だからどっちも変わらないか。

空間全体が甘さで包まれてるもんな。

男な僕にとつては完全にアウエーだ。

「そんな中で響ちゃんから私に声をかけてくれたじゃない？ 私てつきりそのオーラの人とか社員の人が相手をするものだと思っていたからぜんっぜん意識していなくて！」

「オーラの人」

「あ、ちゃんんと響ちゃんの男の子でも女の子でもどちらでもきれいなお顔と手入れの届いた立派な髪の毛は見ていたわよ？」

「そうですか」

「とにかくだから響ちゃんの相手をしているあいだずっとずっとみんなから嫉妬されちゃっていて！ あの視線はそれはもう怖かったわー」

「そうですか」

「部活の試合で、あ、部活って小学校でいうクラブ活動のことよ？」

「知っています」

「あら知ってた？」

「はい」

「そう。 でね？ それの大きな試合で私がポカしちゃったときとそ
のときの仲間たちの視線よりもずっと怖くって。 ……ああ、今思い
出してもあの体の芯から冷えるような感じが蘇ってくるくらいよ！」

「そうですか」

「ええー」

「そうですか」

僕はたたみかけてくる言葉にくらくらしながらbot役を務めた。
話の速度も話数も1対100くらいだろうしな。

加えて理解度もケタ違いだ。

だって速いし速いし早いし早いもん。

「……………」

「……………」

っていか話はそのでおしまいなのかあ……。

聞いていたっていか半ば放心していた僕はこれだけのダメージ

を受けているのに、当の話していた彼女は「言い切った……！」って
いう顔をしながらキーキを頬張っている。

つまりはどやっているんだ。

そのほっぺを両側からギュツと押しやりたい気持ちをこらえる。
でも僕は子どもじゃないんだし寛容になろう。

……それにしてもあれだけまあよく口が回るもんだ。

男女で口げんかをしてはならないとか言う感じの言葉の意味を魂
から理解した。

これは僕でなくても勝てない。

彼女いたことないけど絶対そうだ。

間違いない。

もつとも彼女ができるなんて機会は少なくとも当面は失われてい
るしどうでもいいか。

もともと欠片もその気がなかったのもどうでもいいし。

「彼女が絶対にできない」と「万が一にもできるかもしれない……けど
しない」というのには天地の差がある。

将来的に元の体に戻ったとしても……万が一にもその気になった
としたら相手はきつと婚活ってやつで選ぶしかないだろうし選ばれ
ないだろうし、そうなると彼女って感じでもなくなるのか。

相手が好きじゃなくていろいろ考えた上でのそういう関係。

両方が納得済みなら良いはずだ。

「……………」

……いや。

僕は両親もない職歴もないとてつもない地雷案件だから、どうに
かしてお節介な人を探してのお見合いしかないのか……？

自分をアピールするのなんて苦手だし相手の話題について行くと
か無理だし。

甘酸っぱい恋愛っていうのに興味は無いでもなかったけど……そ
もそも初恋すらまだだしなあこの歳で。

そんなものは僕の人生において来ないのかもしれない。

いくら恋愛マンガや心理学の本を読み漁ってもその気持ちがいま

いちよく分らないしな。

静かになったからかそんなどうでもいいことがぼんぼん浮かんでくるかと思ったら、JK下条さんはまたメニューを眺めはじめ、ひとつひとつを指しながら味について語る。

そんな口元を見ながら僕はぼんやりと思う。

たいしたことは言っていないみたいだし語尾が上がってから思考を戻しても間に合いそうだな。

口と頭が直結しているのだろうか、女性っていうものは。

もしかして僕もそうならないといけない……？

今のだけで普段の僕の会話量の1ヶ月ぶんにはなるんじゃないだろうか。

すると同じようなおしゃべりの人と丸一日話していれば、すぐに1年ぶん。

「……………」

早く男に戻りたい決意が固くなっただけだった。

◇

飛び飛びでしか理解できなかったけど、要するにそのぼ……おばあさんがとち狂ったことを言い出したせいで、僕があの場合限定でものすごく目立っていたらしいのは分かった。

そのおばあさんのせいで。

……絶対にヒマつぶしで適当なノリで適当なこと言ったに違いない。

そのせいで同じくヒマだった店員の人たちの悪ノリが過ぎたんだろう。

で、バイトの初日だったこの子がそれに乗せられてしまったと。

なんだか天然っぽい雰囲気だもんな、この子。

からかいたくなるのはよくわかる。

胸でかいしな。

けどその場の雰囲気ってバカにできない影響力があるからしょう

がないかも。

だからお店に並んだりするサクラっていう古典的な手がいまだに通用するんだし。

静かなこの瞬間を少しでも長引かせるため、僕も残っているケーキとすつかり冷えているコーヒートをちみちみと胃に収める。

甘ったるさと苦さが交互に来る。

飲まなきゃやっていられない。

しかし苦みは甘みに負けてきている。

まずい。

この先が厳しそうだ。

あ、今度コーヒールキキュール飲もうっと。

……しかし女性はオーラとか運命とかそういう非科学的なもの本当に好きだな。

さつきちらつと目にしたただけだけど、こんな賃料の高そうなところにも大きな古い屋みだいなのがあったくらいだし。

あそこにだけは連れ込まれないように気をつけよう。

でも、オーラとか占いとか……普段静かすぎるのが嫌いだからテレビをつけっぱなしにしていることが多いけど、朝とお昼と夕方のあいだの時間はそういう系の番組とかCMとかが多いもんな。

ターゲットが完全に分かるつてものだ。

だけど僕は普通の感性的な普通の男。

そういうのが完全に外れているって知ってる。

そんなの僕だって適当に言えるもん。

なーにが人目を引くだ、フード被ってて分からなかったくせに。とりあえずで元凶のその人に向けて邪念をありったけ飛ばしておこう。

こちとら少なくとも丸2年ほぼ完全に引きこもってからの半引きこもりなニートをやっているんだぞ？

偉くないんだぞ？

僕に負ける人間なんてそうそう居ないんだぞ？

今の容姿ならともかく普段からずつつていうのは完全なデマで

しかないんだぞ？

そもそもほとんど見られてなんていないんだからな。

そのためのカーテン締め切りひきこもり生活で苦労したんだ。

まったく、すがすがしいほどに真逆のことを言う人だな。

けどニートって言うのはいささか評判が悪い。

ニートじゃなくなつてその人が言うみたいにとこそのお嬢さまとか芸能人とか……いや、見方を変えたなら………ダメだな、あまりにも、あまりにもしよぼすぎる。

僕はしよげた。

僕の価値の余りの低さを考えると男に戻つたあとの人生が悲惨でしかないって分かるから。

「それで？ あのとときは店員という立場があつて聞けなかつたけれど響ちゃんの正体は何かしら？ 私は多数派のお嬢さま派だつたんだけど」

「多数派」

多数派とは？

「そうよ！ だつて自分からお店に服を選びに来るような子が、どう見てもサイズが合っていない変な服を着ていて！」

「うぐ」

「なのに妙にそれが似合つていて」

「……？」

「しかも普通の女の子の服を自分で着るっていうのに慣れていなかったもの」

「む」

「試着のときもシャツがはみ出していたり髪の毛を挟み込んでしまつていたりリボンがほどけていても気にしていなかったし」

「ほう」

「おまけに……下着だつて！ あんなに安いのが買つちやダメよ！」

「おおう」

「あらごめんなさい、こんなところでつい大声を」

大丈夫だ、他の女の人たち全く聞こえてないから。

耳がぴりぴりするくらいにうるさいからな、こっこ。
けどよく観察されていたらしい。

こうしてまた会うって思ってたら絶対あんなことしなかった。
女物初挑戦だったんだからしようがないんだけど……もやっつてす
る。

ちなみにあのときの激安ぱんつは全然よれてこないからまだまだ
現役だ。

パンツなんて何年かに1回まとめて買い替えるものだし。

あの激安ぱんつ、僕的にはトランク스에比べて柔らかくて守られて
いる感がお気に入りに入り。

なかなかの掘り出し物だった。

やはりワゴンはチエックすべきだな。

この子には不評みたいだけでも。

それにしてもそこまでよく覚えているな？

僕なんか今言われても「そうだったっけ？」ってなるのがあるのに。
まあ僕の記憶力は対人でなく対物特化だからってのもあるんだけ
ど。

「そんな感じで着たって言って出てきて……そのまま私たちに整えら
れるのを待っていたのも証拠のひとつよ！ 両手を広げてじつと
待っていたもの！」

え？

服屋ってそういうものじゃ？

「……………」

……違ったな、そういえば。

最近観たなにかの映画に影響されていたか……？

「おまけにカジジュアルなものよりも綺麗系の服がぱつと見てとつても
似合っていたし？ なんとというかしつくりくるというかそんな感じ
だったわっ！ だから響ちゃんか帰ったあとで『あれはマネージャー
の人とかメイドさんとかに毎日着せ替えさせてもらってる』って言い
合っていたの。 あれは盛り上がったわー」

お、おう。

妄想たくましい。

「……そうよ！ さつきも響ちゃん、車で送ってもらっていたじゃない？ あれ、お付きの運転手の方だったりして！ そうよ、もしそうなら響ちゃんをひとりで歩かせるわけにはいかないから今でもすぐそばでS Pの人とかが響ちゃんを守っていたりして………！」

その話の流れからだと思事な推理になっている気がするな。

こじつけもここまで華麗だとそれはそれでお見事。

「っ！ やっぱりそうなのね!？」

どういうこと？

「どの人なのかしら護衛の方たち……」

いや、居ないって。

妄想は飛躍したらしくあたりをキョロキョロしだすおっぱいさんもとい下条さん。

いやだつてさつきまで視界の半分くらいに広がっていたし。

子供だから見ちゃ悪いんだけど占有率の高かったもんだからしょうがない。

おお、左右に体を動かすと本当に立体的。

目線のちょうど正面で動く以上自然に焦点が合っちゃうのはしょうがないこと。

うん、しょうがない。

見ちやうけど下心はこれっぽっちもないから安心して。

でも確かに状況的には……結果的に推理を重ねて状況だけを見るとそう思ってもおかしくはない……のかも？

……探偵ものでも読んだんだろうか。

たまたまな偶然な状況をどうにかこじつける辺りは才能がありそう。

中高生ってそういうのに一時的にはまるよね。

そう思うと生暖かい目になる僕。

かつて僕が通った道だつて思えば優しくなれるんだ。

でもやっぱりこの子の発想は飛躍しすぎている気がする。

よくもまあたった1回だけ……いや、今日で2回か、不運なことに……しか会っていない人間にそこまでよく熱心になれるなあ。さすがにほへへって感心する。

今日の僕はほへへってしてばっかだな。

この他人への興味の強さが将来的にママ友とやらや井戸端会議で発揮されることになるのだろうか。

そういえば学生するときも噂とかつてまず女子に広がりきって、そのあとに僕たちにも流れてきていたような気がするしな。

男と女、ここまで違うか。

けどこう思うってことは、少なくとも今のところ僕の脳みそだけはまだ立派に男のままの様子。

甘いもの苦手なものも変わらないしな。

そうしてまた、ちみつとビターな味と香りを楽しみながら時間が過ぎるのを待つ僕だった。

12話 苦手は、やはり、苦手 3 / 3

「お嬢様……憧れるわあ——……」

「……」
僕が「そうだよ」とも「違うよ」とも言っていないし「勘違いもはなはだしいよ」とか「妄想癖あるの?」とか言おうとしそうになるくらいに勝手に結論づけてトリップしたらしい下条さん。

なんかこの子……いや、うん。

悪い子じゃないのは分かる。

無害そうなのも分かる。

なんにも考えていなさそうだもんな。

アパレルショップとかいう場所に生息していたんだから当然か。

勝手に決めつけられてちよつとだけささくれだった僕は心の中で軽く罵ってみてから考えてみる。

この子に捕捉されてからって言うものほとんどずっと話しっぱなしで疲れたんだ、静かに見守ろう。

さて、この子の中で僕は「お嬢さま」らしい。

そんな存在今どきいるんだろうか。

いたとしてもどうせ僕たちみたいな人間は一生見ることもないだろうけども。

それにしても「お嬢さま」かあ。

単純にお金持ちで古い家系とかだったたりしたらそう呼べる人たちもいるのかもな。

いるって思えないけどいらないとも言い切れないからいるって言うことにしてみよう。

「……」

ちよつと地価の高い場所を散歩するとやたらと広い敷地に植物をこれでもかかって植えてあって、車も2、3台あって家も横に広がったりする「いわゆるお屋敷」っていうものは結構見かける気がする。

古い造りのもあるし、今風の上手く言葉にできないスタイリッシュさを表すような家もある。

近づくとすぐに感熱式らしいライトがついて監視カメラがいくつもあつて目の前の道路が明らかにきれいな、ああいうの。

お金持ちは近所もお金持ちなのが安心するのかその近くにはたいてい同じような家が並んでいるし。

そういうところはなんとなく綺麗な感じだからなんとなくでぶらつくのが好きだったりする。

「ふむ」

……そういうお屋敷を持つお金持ちの家つて大抵お家の事情とやらを抱えているよな？

もちろん創作とか、現実であるとしても僕たちとは縁のない階級の人たちの世界の話限定だろうけど、そういう家に生まれた女の子なら「お嬢さま」でもおかしくないかもしれない。

せつかくそう思い込んでくれているんだし多少細かいことに突っ込まれて答えられなくても「そういう家だから言えない事情がある」って言えばなんとかなりそうなの「お嬢さま」。

そういうのは「じいやから言っちゃダメって言われてるの………」みたいな？

うーん、想像力が足りない。

そういえば「じいや」って本当に言うんだらうか？

外国ならなぜかセバスチャンって決まりがあるらしいけど。

それでもない？

「響ちゃんはお嬢様……深淵のご令嬢……」

……この子が頼んだケーキに入っていたアルコールで酔っ払ってるのか？

そう思うほどのだらしない顔つきだ。

まあ相手しなくてよくって楽だしどうでもいいか。

体が変わっているっていうやんごとない事情があるっていうのは事実だし簡単には人に言えないっていうのも本当で、お金が……今は使えないけど、どうにかすれば使えるお金が普通の人よりはあるのもウソじゃない。

おこづかいって言えばおこづかいなんだからな。

そう思えばあながち嘘でもない気がしてきた。

僕が中学のときに両親がうつかり死んじゃったんだけど、そのときにワケのわからない額の見舞金が誰か分からないけど合法的らしいところから振り込まれたりしたとかいういわく付きのお金だしな。

その原因の事故が一切報道されなくて、そのことを言ったりしないって紙に書いてただけで金額が倍になっていたりとかしたしな。

あとついででいろいろめんどうくさくなって引きこもっていたこととかも含めたら「人に言えない事情」ってことになるのかも。

家の事情＋僕自身の事情。

グレーではあるけどウソじゃない。

嘘じゃないならそこまで気に病むこともない。

じゃあ使っておこうかな。

……この子、答え聞くまで解放してくれなさそうだしなあ……。

へんなうめき声が聞こえなくなったから顔を上げると合う視線。

「……………」

僕が答えを口にするのを待ち望んでいる様子のじーつと見てくる探偵下条さんを見返す。

「えつと『そんな感じ』です。　普段は制服と、……限られた服しか着られないので」

男のときのだぼだぼシャツかあのとき買った服をヘビーローテーションしてただけ。

「でもお仕着せの服は嫌いなので自分で選びたいと言って無理やり出てきたところ……だったのよ」

お、なんかそれっぽいのがするって出てきた。

煮え切らない感じになったけどどうまくごまかせたはず。

きちんと名詞を使わないでふわっとした感じでごまかすのは得意だ。

よく行く旅行先とかでどのくらい滞在するか答えたり年齢を答えたりとで「ところでお仕事は？」って聞かれたときの返事をさっと返すために鍛えた話術。

それを元に適当な話しについていくのも含めて虚飾が得意になつたつて言う悲しい僕だ。

「やっぱりそうなのっ！……でも、あら？　この前はお兄さんの服を着ているつて言っていたわよね……？」

「む」

おっと、早くもほころびが。

あるときそんなこと……言つたっけ？

覚えていないけどこの子が言うのなら言つたんだろう。

まずいな。

というかなんでそこまで詳しく覚えているんだ。

どうしよう？

………。

「あれは……。普段は汚せない服だけしか。しかも決まり切つたものしか着られないので、好きにしているときはああいった楽な格好にしているんです。だから『綺麗』とは真逆の兄が昔着ていた古い格好を……あの……」

あつという間にしどろもどろになつてなにがなんだか分からなくなつてきた。

困つたな。

綿密な設定がないからこうしてあいまいこの上ない答えしか出てこない。

僕がお嬢さまだとしたらその兄はお坊ちやまなわけで、そうなるとそのお坊ちやまなお兄ちやまもまた相応の服をふだんから着ているはずで。

……ちよつと時間があつたならそれなりの設定を練っておけたんだけどなあ。

やっぱり僕に嘘は似合わないらしい。

けど言わなきや行けなきさそうだったんだからしょうがないよね。

「……よく分からないのだけどお嬢さまも大変なのね？　いいことばかりじゃないのかしら」

どんな反応が返ってきて突っ込まれるのかびくびくしながら前を

向くと……ケーキを熱心に頬張る髪の毛くるんさんが。

「……………」
もむもむと口元だけが動いている。

「……………」
……………今の僕の苦労は一体。

お兄ちやま設定を考える手間が省けたから助かったけど、できたら興味を抱かないで欲しかった次第だ。

どう聞いても苦しい答えだったはずなのに途中からケーキに興味に戻っていた様子。

さつき話しているときもケーキ、ちらちら見ていたしなあ……好奇心も強いけどそれ以上に食欲が強いらしい。

いや、いいんだけどさ。

さつき以上の興味なくなっているみたいだし。

もくもくもくと食べ続けるくるんJKさん。

せっかく静かになったんだし、今のうちにさつきと食べ切って帰りたいアピールをはじめよう。

通じるかは分からないけどな。

◇

「おいしかったわね——……………はふ」

「……………」
「久しぶりだったけど味がぜんぜん変わっていなくて嬉しかったわ。

おこづかいが足りるのなら毎日でも来たいくらいよ」

カロリーと食費が大変そうになるんだけど大丈夫なんだろうか？

「でもさすがお嬢さまなのね！ ブラックカードなんて私初めて見たわ!!」

お腹をなでさする、心なしかもつと全体的に大きくなった子が心配事のなさそうな声を発する。

太りそうとか言ったら絶対に怒るだろうけど、でもこうして視線が低いとどうしても他人のお腹と胸あたりがいちばん目に入りやすい

もんだから……その、わりとぴっちり目に着ている服のお腹周りかどうしても気になるんだ。

でもさすがの僕もそれを言わない程度には常識を持っている。

ニートだからとは言っても成人男性なんだからな。

肉体は幼女になっていくけども。

今の身長差は頭2個ぶん迫る勢いで胸や腰は小数点以下の比較だからかなりのもの。

脱がなくてもすごいってやつだ。

学校で男から人気だろうな。

顔も整ってるから同性からの嫉妬はすごそうだけど……脳天気だから平気そう。

体重も倍近いだろう。

何かあつたら押し潰されそうだ。

まあ僕が小さすぎるんだし、別に太っているわけでもなくって単純に身長に釣り合ってる感じ。

僕としても女の子はこの子くらいはしつかりした体じゃないと興味すら湧かないもんな。

興味が湧くには10年くらいは幼すぎるけども。

理想を言えば僕より年上で頭がよくて回転が良い人が好みだ。

ちようどこの子とは頭の中身が逆方向のタイプってこと。

つまりこの子は完全な対象外ってことで安心する。

それにしてもさつきからブラックカードを連呼して幸せそうだ。

これ、ただの黒いデザインなだけの無職でも作れるようなカードなんだけど……幸せのままにしてあげよう。

ほぼ無地に金の印字とか言うカードを滅多に目にすることがない学生にとってはマンガとかでよく出てくるブラックカードといっても差し支えないかもだしな。

まあ僕はなにひとつ言っていないんだし勝手に勘違いするぶんには心にも来ないからいいや。

カードとか学生にとっては大学に入るまでは縁のないものだし。

「でも響ちゃんの残っていたケーキ、けっこう分けてもらってごめん

なさいね？ とつてもおいしかったけど……無理に誘ってしまったかしら？」

「いえ、僕は少食なので」

お昼を食べるつもりでいたのに期待していたのとは違う方向の食べものが来てしまったせいか、どうやら僕の小さくてもつと繊細になった胃はケーキとかいう砂糖のかたまりを受け付けなかったみたい。

それを見つめていた彼女に「いる？」って聞いたら「いる！」って言うから餌付けしておいたんだ。

なんだかデジャヴだけど最近の学生はこういうノリなのかなって納得しておいた。

……けど甘かった。

まだ口の中でときどき残っていた砂糖成分が出てきて「じやり」つてする感じがする。

口そのものが甘くて困るって言うわりとレアな感覚でわりと困ってるんだけど？

ほっぺの内側に妙な感覚が残りに残っているんだけど？

どうしてくれるんだろう？

僕とスイーツとやらは壊滅的に相性が悪いらしい。

……あとで無糖の缶コーヒー、自販機でも買って適当に飲んでから帰ろう。

いっそのことエスプレッソをぐつとやってリフレッシュしたいまである。

ちらりとワガママポディって感じの発育が脳の発達を追い越してる系の幸せそうな彼女を見上げる。

ほぼ初対面な話が終わって食べ終わって満足して気が緩んでいるのを確認。

甘味で顔がとろけたままだしちよつとアレな子にも見える。

けども人ってのは見た目で決めちゃうクセがあるもんだから、雑誌の表紙に出てもおかしくなさそうな体にくっついて顔がとろけていても通報されるには至らなさそう。

世の中って不平等だな。

そんなのは男だった僕がよく知っている。

「……………」

理不尽に拘束されていた不条理でちよつとだけささくれだつてい
る気がする。

ここまでこき下ろさなくてもって思うし、幸せな子って思っておく
だけにしよう。

でもこのまま話が続くとさらに疲れそうだし、そろそろ逃げよう。
店から出たばかりっていう良いタイミングだしな。

この機を逃したら……例えばまた服屋で着せ替え人形にされたり
しかねないもん。

「それでは。これから行くところがあるので僕はこれで失礼しま

「あら、これから何か用事？」

「はい、これから夏物を見るに。……………」

あ

何かがきらりって光ったって思ったたら目の前に胸が迫ってきてぽ
よんと押しつけられてぽよんと離れて、次にはかがんで来たらしくつ
て僕の目からほんの20センチほどのところに胸さんもとい下条さ
んの、顔だけ見れば中学生にも見える童顔がどアップに。

シャンプーの匂いがする。

あと両肩もしっかりとつかまれている。

もはや逃れられないらしい。

きつと今の僕の目は曇っているだろう。

「……じゃあ今日も、いえ、今日は私が！ 服を……響ちゃんにお似合
いのお洋服を選んであげるわ！ 今年の流行はかわいいデザインが
多いのよ！」

「……………」

「この前は先輩たちのオススメを優先して試着してもらったせいで私
がいいなーって思ったデザインのもののはあんまり試してもらえな
かったのよ！ なによりあのときはたったの1軒でしか試せなかつ
たでしょう？」

「……………??」

「1軒でしか？」

「普通服は1軒のお店で買うものでしょ……………？
違うの……………？」

「あのときはあのお店で買ったんだから仕方がないのだけど……でも別のお店のブランドだったらもっと似合いそうなデザインが合ったのにーって、ずっと気になっていたのよ!!」

「いや別に僕は」

「だから今日は私がプロデュースして綺麗過ぎなくてお洒落で可愛い服を探してあげるわ!」

話を聞いて。

「そう思う僕にNOを突きつけるようにして至近距離にある口からケーキと紅茶の匂いがまとめて飛んでくる。

あとぴっぴってつばも。

きちやない……………。

でも、まずい。

つばのことじゃなくって、この状況が。

この流れはまずい。

とても非常に極めてよろしくない。

口を滑らせたシヨックから復帰した僕でさえ分かる。

なんとかしたい。

なんとかしないと……………!

僕は鈍い頭を懸命に回転させる。

「……………い、いえ。時間もかかるでしょうし、あのときもご迷惑をおかけしましたし、これ以上は」

「迷惑だなんて! むしろかわいい子の着せ替えができていろいろな洋服を着ている姿を眺められて選ぶことができるんだから私にとってはお褒美なのよ!」

「どうやって息継ぎしているんだろう。」

「そうよ! さっきもケーキ、結局半分近く分けてもらっちゃったしそのお礼にもなるし! あのときは私も楽しかったのだしそもそ

も店員としてのお仕事だったのだから、なにも気にしなくてもいいのよ!？」

「いえ、でも」

「私、今日は学校の……えつと何だったかしら……とにかくなにかの記念日でお休みだったから、通学路を歩いていても空いているなっと思ったら校門が閉まっていてがっかりしたし、せつかくお外に出たのになにもすることがなくなってしまっただらぶらしようって思ってたところだし、けどおはなしする相手もないからつまらないしこのあとは帰るしかなくてーって思ってたから予定がないの!」

どうやって呼吸してるんだらうこの子。
生命の神秘だ。

それに重い。

肩に加わる力と体重が僕を抑えに掛かっている。

なんとかかして逃げる口実を考えようとするけどまくし立てられるとその処理で頭が追いつかなくなっただけなんにも思いつかない。ラグってる。

おかげで今の僕はちよこんって固まっていることしかできない。

「服を選ぶのってとっても楽しいもの! 私はその、体型的に似合わないものが多いし、これいいなって思ったものがあったても諦めることが多いの。だけど響ちゃんならちよつと子どもっぽいなものが多い。なるのは仕方ないけどそれでもいろいろなデザインが合いそうだし! 今から楽しみなね!!」

「あ……ちよつと待つ」

いつの間にか肩から腕へとつかまれている場所が変わっていて連れて行かれはじめている。

なんとかかしてほど……けない。

痛くはないけど絶対に離れなさそうそんなそんなホールドをさされている。

なんか武術でもやってるんだらうか?

絶妙な力加減を……じゃなくなっただけ。

「……………はなしして……………」

なんとか勇気を振り絞って伝えようとしてみてそつと目線を合わせようってした。

……けどそのあいだにもひとり言が続いている着せ替え魔さんの耳には届かないようで、すでに目の前にはエスカレーターが迫っていて引き返せなくなっていた。

って言うか僕の声……小さすぎてアナウンスとかの環境音にかき消されているな、これ。

だって焦ると声が出なくなるのは昔からだもん。

「早速行きましょう？　まずはフロアをぐるっと回って響ちゃんに合いそうなデザインのお店を確かめてそれからひととおり試着よね？」

そのあとに……」

あ、ダメだよつだこれ。

またしてもデジャヴな感覚。

どうあがいても何を言っても、もうムリな段階に入っているやつ。

……なるほど。

これがダメな「オーラ」ってやつか。

僕はひとつかしこくなった。

対価は僕の尊厳だ。

エスカレーターで下に運ばれ始め、振り返って話しかけてきている下条さんの目線の方が高くって……つまりはエスカレーターの段ひとつぶんよりも身長的に負けているのを知って、確信する。

体格差は圧倒的だ。

もう逃れられない。

「……………」

やっぱり外は恐ろしいところだ。

引きこもるのは僕の本能だったんだ。

だって、この体で外出するとほぼ100%、こうしてひどい目に遭うんだから。

「次のフロアよー　楽しみね響ちゃん!!」

「はっ……………」

僕はずるずるとどなどなされていく。

もはや抵抗する気はなくなった。

もうどうにでもな―れ。

そうして限りなく抵抗を失った僕はされるがままの人形だ。

「……………」

今日もまたお人形さんをするだけで僕に合う服を選んでくれるんだ。

悪いことじゃない。

頼んでもいないし迷惑だけだな。

かといって、このまま振り切って逃げるほどの気力も残っていないし……たぶん体力的にもムリだろうし。

……………断れないっていうの、本当に早く治さなきゃなあ。

高校生相手にNOってはつきり言えないとか恥ずかしすぎるものな。

13話 取り戻した（非／否） 日常 1 / 3

「……………んむ」

一瞬で目が覚めた系の目覚めを感じる。

昨日の夜からワープしてきた僕は嫌でも子供な肉体に吸い込まれた。

……そんなことを考える程度には楽しい夢を見ていたらしい。

けど夢つてのは儂いものだから内容はぜんっぜんかけらも覚えてはいない。

でも目が覚めたのに気がついたときには鼻からびすびす言っていたし、きつと楽しかったんだろう。

なんで夢つて覚えていられないんだろうな。

「びす？」

……………。

カゼかかって思ったけど鼻づまりじゃないらしい。

ただ鼻息が荒いだけだった。

良かった。

良かったんだけど良かったないようだったみたいなのにその内容が散逸したのが悔やまれるところ。

眠気を払うために体をもぞもぞとさせると腕や太ももからシーツや毛布とすれる感覚が伝わってくる。

……気持ちいいなあ。

適当に体を伸ばしながら「うー」とか「あー」とか本能のままに出るままにうなっているうちに目が覚めてきた。

こんなの男だった頃には間違ってもしなかったけど今じゃ抵抗感ゼロでやってのけている。

だって幼女だもん。

精神は肉体に引っ張られるんだからしょうがないんだもん。

そんな言い訳。

もぞもぞしているだけで気持ちがいいのは触覚が鋭いこの体ならではものだろう。

暗いけど周りにははつきりと見えるっていう近視になってない視力の特権をかみしめながらベッドの横の時計のスイッチを切って、今日も目覚ましに勝ったっていうちよつとした嬉しさを感じながらベッドでごろごろする。

「あ……………」

こういうのって幸せ。

◇

髪の毛を自分で切ろうとしたすっぱだかの僕に向かって……いや僕にじやなくて壁に向けてハサミがすっ飛んでみじんになった、あのときのあの怖いの。

そのときに読んでいた本のどこかに似た言葉があったから僕は勝手に「ハサミ事件」とかものすごく適当なネーミングで呼んでいるけど、あの魔法の力を再確認することになったあの時期は大変だった。家に引きこもれば刃物が襲うわ外に出たら強引な人たちに付きまといられるわ。

ニートに無茶な難題だったって思う。

でも、そんないろいろがあつてすっかり疲れていたけど季節はもう梅雨。

じとじとと静かな空気でこれだけじとつと休んでいけば十分にエネルギーも戻ってくるというもの。

雨って良いよね。

きのこが生えそうなくらいの湿度で静かな雨の音を聞いて雨の匂いを嗅ぐのが好き。

そんなわけで僕は元気になった。

だつていろいろ吸われてたんだもん。

口と体が動く人と一緒にいると……なんというか生命エネルギー的な何かが吸われる感じしない？

エネルギーっていうか気力とかMPとかそんな感じのもの。

目には見えないけど確かにある感じのそんなもの。

ああ言う人たちに言っても意味分かんないだろうけど僕の仲間には分かるんだろう。

僕は今までけっこうな科学信仰で不思議な力とか幽霊とかはまともに取り合ったこともなかったんだけど、実際にこんな目に遭っているわけだ。

僕の目で見ても肌で感じている以上には信じないわけには行かない。

昔の偉い哲学者の人もそう言っていたもんな。

でも、そういう吸ったり吸われたりするエネルギー。

魔法を使える人たち……いるのか分からないけど、そういう人たちはなはつきり分かるんじゃないかな。

魔力とかSPとか行動力とかそういう概念で表現される何か。

ゲーム脳に支配されている気がしなくもないけど存在するのは間違いないって思う。

完全なフィクションだったらゲームだってあんなに熱中できないわけだしな。

そう思うと僕的な人間はきつとターン制ゲームで生きていて、JCさんとかJKさんとか勧誘悪魔さんとかはリアルタイム制ゲーム。

つまりは人種が違うんだ。

ゲームシステムが違うんだっけじゃない。

うん。

そんなどうでもいいことは置いておくとして、とにかく「人に会う」っていう僕にとっては極めて辛い目に遭って苦労したのは外に出たせいだ。

夏服をいっぱい買わされてへとへとになって帰ってきて歯も磨かずに泥になって眠ったんだから僕にとっては大変なことだったんだ。

きつとあの人たちには分かるまいこの苦労。

魔法でこの体が変わってからの9割以上の時間は今まで通りに平和なんだけど、家から出ると必ずと言って良いくらいに何かしらに巻き込まれるのが分かる。

僕にとって他人に構われるって言うのはこの上ないストレスなのに。

実際にあれからちよこちよこ外に出てみたけどみんな無視してくれないしな。

やっぱり子供の見た目っていうのは興味を引きやすいらしい。当然か。

その辺を歩いているだけでもしよつちゆう誰かに声をかけられるもんな。

男だったときは勝手がぜんぜん違うんだ。

なるべく子供がうろついても不審じゃないタイミングと場所を狙ってちよこつと出歩いていても……特に女性からは頻繁に話しかけられる気がするし。

女性といっても子供が居そうな母親とかおばさんとかおばあさんだけだ。

意外でもなく当然だけど男は目が合っても話しかけてこないことが多い。

くるのはたいてい通学路での見守りの人とか同じく子どもがいるらしい人とか、そのくらいだ。

あと公園のおじさんとかおじいさんはフレンドリー。

なぜかは分からないけどジュースとかお菓子をくれようとすることもある。

赤の他人から何かをもらった経験なんてそうそうないし「親からダメって言われてる」って断るけども。

犯罪の臭いはしないけど……なにしろこの体だ、悪いことしようつてしてる人に近づかれても困るしな。

ずーっと家にいると神経がおかしくなるから、そうならない程度に散歩とか買い物程度に……こそこそ出る感じに人目を忍ぶ生活を続けたおかげで季節は過ぎて梅雨。

「……………」

……やっぱりノートしていても幼児になっても時間が過ぎるのは速いよなあ。

まあ本が読み切れないほどにあつて映画が観きれないほどにあつてゲームもネットもあるんだ、よっぽどのがなきや退屈で死にそ

うとかないよな。

でも梅雨はいい。

低い雲と暗い空と雨のための傘やカッパとかで自然な形で姿をぼんやりさせられるから。

おかげでわりと軽装でも女だってばれないからいちいち気にせずに出られる。

そんなわけで最近の僕の生活は結局は普段通りだ。

幼児になろうがハサミが乱舞しようが僕って人間が変わらないんだからな。

おかげで今日も快適だ。

「……………ん——……………」

……………そうして現実逃避してたけどそろそろ現実を見なきゃいけない。

そう決心した僕はごろごろしながら見ていたスマホの通信アプリを起動する。

ぴこぴこぴこって音が鳴る。

僕はびくってなる。

「…………………………」

見たくないから普段は落としているそのアプリの画面には20ばかりの新作。

……………やだなあ。

見たくないなあ。

けど見るって言っちゃったからなあ。

やだなあ。

めんどくさいなあ。

とことん現代社会の情報交換密度に不適應な僕はしぶしぶでチャットなアプリを開く。

教えてしまったアドレスからどばつと来るメッセージたち。

まるでスパムだ。

けど現実で知り合いになっちゃった相手からだから無下にもできない。

僕には知り合いを無視する度胸なんてないんだ。

スパムな方がマシなまである。

「一晩でこれだけ増えるのはいつものことだけど「本当にヒマなんだな」って思いながら目を通していく。」

「まあ学生っていう会話をしたくてしようがない生き物相手だからな……しかもJCっていう存在。」

「どうでもいいことばかりだけどとにかく送ってくる送ってくる。」

「しかも自分から「メッセージが多すぎるから流し見で！」とか言うだけあってとにかく雑多でどうでもいい感じに会話にもなっていないひとことだらけだ。」

「たまに長文もあるのが困ったところ。」

「どう返事すればいいか分からないから2、3日に1回、それもものすつごく適当な返事しかないけど、それでも量が減ってきたりしない。」

「知り合いみんなに同じような事をしているのかもしれないな。」

「SNSとかで間違つて学生らしき子のアカウントからフォローされたときみたいなライブ実況的などりとめもないことしか言っていない。」

「昔のメールだと1通送るたびにわずかながらもお金がかかっていただけで今や何でも無料な世界だ、そのへんのハードルは下がりに下がっているんだろう。」

「すつすつと読んで行つてすいすいってしておしまい。」

「終わつちやえば何てことはなくても終わる前の始めるのが大変つて言うあれ。」

「ふう」

「スマホの音をオフにする必要ができたけど、それ以外には特に変わらない……平和な素晴らしい僕の家の中だけで完結する生活。」

「生活リズムもすつかりと元通り。」

「素晴らしい毎日。」

「……………くあ」

「ああ、この。」

外はじめじめでじとじとで蒸し暑い中、こうして家の中でエアコンを強めにして除湿でからからにして暖かい毛布を被ってごろごろする。

最高の生活だな。

できればこのまま平和な感じで成長するまでの数年を過ごしたいものだ。

お金の心配さえなければ老後までお願いしたいところ。

やっぱりニートになるには素質が必要なんだ。

幸運にも僕にはその素質があつたからこうしている。

何も不安のない素敵な時間。

あとはただ、男に戻れたらってだけだ。

◇

最近になってようやく取り戻した最高の1日はいつもこんな感じ。朝はできるだけ日の出の少し前に起きるようにして夜早く寝付けるようにする超健康的なやつだ。

かつての引きこもりな時代みたいに昼夜逆転な生活で自律神経と頭と体がおかしくなるのは勘弁だし、普通の人とかけ離れちゃった結果に世間っていうものを理解できなくなるのを防ぐためのルーチン。

興味ないからってニュースとかまったく見ないで映画とかドラマとか本ばかり読んだりゲームばかりしていると、ふと僕だけが世界から取り残されたような感覚になるもんな。

さすがの僕もあれには困る。

知らないあいだに大きな事件が起きていたり知らない造語が流行っていたときの衝撃といったら……それはもう計り知れない。

もう何年かで「お兄さん」って呼ばれるのから「おじさん」って呼ばれるようになる僕でも、1回でもそう呼ばれるまでは「お兄さん」で居たいんだ。

……今は「お嬢ちゃん」って言うのは……うん、しょうがない。

で、規則正しい生活っていうの、学生時代は強制的にあつて当たり前のものであったから気にも留めなかつたけど、いざ好き勝手できるようになって好き勝手するとそれはもう恐ろしいことになる。

普通の人なら長くたつて4年の大学生活でおしまいなそれは……僕にとつてはこれから死ぬまで永遠に続く時間。

ニートをするには自制した生活が不可欠なんだ。

その辺を普通の人は理解できないんだもんな。

ある意味こっちの方が大変だつてのになあ。

ニートをちよつとでいいから尊敬して欲しい次第。

あと戸建てなもんだから朝早くのゴミ出しも地味に大切。

回ってくる回覧板も町内会費も僕は文句も言わずに受け入れている優等生。

言うこと「はいはい」つて聞いてれば注目されにくいもんな。

前からニートつて言う負い目があつたから続けてたそれも、今となつては立派な隠れ蓑。

どれだけめんどくさくて意味のないものだったとしても守つておかないと目をつけられる。

いちどでも疑惑の目が向くとたちまちにして注目的になるのが悲しい事実。

ご近所は怖いもの。

町内会はもつと怖いもの。

「ねえお兄さんちよつとジャンプしてみてよ」みたいな感じのカツアゲみたいって思うけど、たかだか年に数千円だ、きちんと払うに限るもんな。

「……………」

……次の集金はどうしよう。

ああ言う人たちつて日曜日の早朝とかに予告無しで来るからなあ。

「町内会のです」とか封筒に書いておいてお金置いとくしかないよなあ……………」

今の僕が出るわけには行かないしなあ。

こんなにかんばつて隠れてるのに素直に家から出て「お巡りさんと

「こ行こつか？」って言われるとか悲しすぎるもん。

だからゴミ出しもがんばってるんだしな。

前日に出してもダメ夜中もダメなもんだからがんばって早起してるんだから。

まあ早起きって習慣だし慣れたらどうってことないからいいけど。

で、早くに起きて……ぜんぜん汚れはしないけどなんとなく気が済まないから顔をじゃぶつと洗って、長くなってしまった髪の毛を時間をかけて梳いたりして整えて、服選び。

そういえば地味に乾燥しやすくなっているらしいもんだから、こんなにじめつとしていても化粧水というものとリップクリームがないと肌がひりひりしてくる。

さぼると途端にひりひりするわばりばりしてくるわけではつきりと分かるから手が抜けないめんどくささ。

これが男女の肌の差なんだろうか。

それとも個人差の範囲で収まるものなんだろうか。

よくわからない。

「こういうめんどくささと毎朝のひげそりとどっち？」って聞かれたら断然ひげそりを選ぶところだ。

もともとそんなに生えなかつたし2日に1回くらいで済んでいたしな。

まあ鏡を見たときのきれいさで言えばもちろんこっちだけど。

やっぱり僕は男だから幼女と言えども女の子の方が良いに決まってる。

◇

さて今日の服はどれにしよう。

中身がごっそりと入れ替わったクローゼットの前で僕は考え込む。

予報だと重い梅雨にしては今日は珍しく晴れて気温は高め。

それなら白系統の……せっかくだしワンピースにしておくか？

男だった頃には迷うことのなかつた服選び。

それに少しばかりうんうん悩む手間が加わった今日このごろ。

ほとんど外に出ることはないから別に気にしなくてもいいんだけど……最近服を選ぶのがなんとなく楽しくなって来たしな。

名前は忘れたJKさんに連れ回されながら教わった服のコーディネートという概念を習得した僕は無敵だ。

完全な未知を既知にしてくれたからあの子には感謝……やっぱりそれ以上にひどい目に遭ったから無し無し。

要らない感謝をすることであった。

基本的な組み合わせっていうものを知っておいて飽きてきたらそれを自己流アレンジって方法がいちばんの基礎で、慣れてきたら流行りを取り入れるといいらしい。

服を脱いで着てを繰り返すだけで2時間ほど付き合わされたおかげで「定番の着こなし」的なものを教え込まれてしまった以上、凝り性の僕にとって毎日2、3着をただ洗って乾いたら着るっていう楽だった生活には戻れなくなったとも言える。

世の中には知らなくてもいいものがいっぱいあるというのに。

ほら、知らぬがなんとやらとか言うし。

そのせいであるときに買ったものの他に通販で買い始めたせいで、春になってから買った女物の服がかつての男物の量をとっくに越えている現象が起きている。

つまりは結構散財したんだ。

ひとつひとつは安くてもちりつも。

服って自分で選んで買うのがこんなに楽しかったのかって知れたのは大きいかもだけど……ちよつと買いすぎた気がする。

でもあのとき疲れ切ってたからってしてたけどどうにかカウンターから買ったのを送る機転を働かせられた僕はえらい。

ものすごくえらい。

「私が持っていてあげるから」「お家にご招待して」「ダメでもせめてお家を外からでも眺めたいの」なんていうのだけはどうかして抑えたからな。

あんな子が家に来たら一発でアウトだ。

ご近所的に。

ひとり暮らしの男の家に幼女とJKが入るとどうなるかなんてその辺の子供だって分かるもんな。

しかもなんかすごそうな事情に見合わないただの一軒家だっていうのがバレルし。

いくらなんでも即日でついた嘘がバレルのは悲惨すぎる。

失望のまなざしとそのフォローこそ耐えがたいものはないんだ。

……む、今日はこれでいいか。

鏡の下半分に映っているのは、ケアをしているおかげでつやつと伸びる銀の長髪と前髪をそろそろ切ろうとして忘れていたのを思い出した眠そうな顔に、白のワンピースに黒のタイツ。

「うむ」

今日の僕は「お嬢さま」に見えなくもない。

タイツって暑そうだと思っていたけど、いざ履いてみると風がいい具合に抜けるから1枚多く着ているのに涼しく感じるんだよなあ……不思議だ。

ぱんつを履いているはずの股とお尻まですーすーと実に気持ちがいい。

すべすべするから動いても気持ちいいし手で触っても気持ちいい。とりあえずで春から秋までは快適な気がする。

材質が合わないものを履くとかゆくてかゆい地獄だけど合ったものを履くと快適なタイツ。

こういうところは女の方が良いなあって思う。

男だところというのは無理だもんな。

ポーズを取っているときに理解した「しな」を作る感じにしてみる。まるで僕じゃないかわいらしい子供がいるような錯覚を覚える。

……似合っているなあ。

JKさんが着せ替え好きなの、ちよつと分かった気がする。

この格好で外に出られないことがもったいないくらいにはかわいもんな。

幼いのもこれはこれで悪くないって思うし。

僕もなかなかにかわ

「……………」

僕はおもむろに頭を振りかぶって「ごんっ」と鏡に……ちよつとだけ痛い程度に打ち付ける。

……やばい。

ごんっごんっ。

最近思考が……今みたいになるもんだから、ちよつとまずい気がする。

頭をぶんぶんと振るのに合わせて髪の毛が傘のようにぶわつと広がってぱさりと落ちるのを感じて目を開くと、細くなった脚とちよちよくなつた足の甲が黒いタイツに包まれている手前にワンピースの裾がひらひらしているのが見える。

ごんっごんっ。

……こんな格好で外に出て誰かに褒めてもらいたいなんてバカげたことをちよつとだけでも思うだなんて。

ごんっごんっ。

……こうして服を選ぶことでこれからカムフラージュしなきゃいけない女の子とか女の人な生活をちよつとだけでも理解できるようになつてきたのは良いことなんだとは思ふ。

でも、それはそれ。

僕は男なんだ。

男だからスカートとかタイツに惹かれるのはしょうがないんだけど、それを自分で着ている姿を見せたいって思うのはやばいんだ。

しばらくのあいだ、僕の頭からはごんっごんっと音が響いていた。

13話 取り戻した（非／否） 日常 2 / 3

もぐもぐもぐもぐとちっこい口を懸命に動かす。

だって口がちっこいんだからしょうがない。

「ひとくちサイズ」ですら見た目どおりなんだもん。

そうして僕はいつも通りに見るともなしのBGM代わりなテレビをお供にご飯中。

動画だと見るのに夢中になっちゃうから適当なのがちょうど良いんだよなあ。

『先日からネット上で噂になっていた……………が』

『……………実だと、公式に発表されました』

『……………これは、ほとんど……………ないために』

『……………付かないことも多い、ということもありますので』

『実際には、……………だけで、もっと……………』

悲しいことに今の僕は幼女で、だから腰から上も腰から下も短い。イスに座ってご飯を食べるにはクッションでかさ増ししなきゃいけないって、だから座高は補える代償として足の裏は完全に宙ぶらりんだ。

子供用の高いイスは僕自身の男たるプライドで退けた。

だから脚を重力に引っ張られた感覚のままご飯を食べるのにもとつくに慣れている。

気がつけば脚を交互に振ってしまっただけはどうかしたいクセだけど、まあそこまでのことじゃない。

貧乏揺すりとかイスを後ろに傾けてバランスを取りながらぼーっとするのなささいなものだもん。

他に誰が見てるわけじゃなしで僕は気にしないことにした。

「いちごっちゃん」

そんな感じで適当にテレビの画面を見ながら朝食を済ませる。

子供のころはこうして食べる前と後とかにお行儀良く教わったとおりをやった気がして、ひとり暮らしになったらめんどくさくなくて止めていて……………もういつかい子供になったらまたし出した。

だって前とは違って本気で誰とも話さない生活だし。そう思うと毎日の散歩とか食材の買い物とかで随分気が紛れていったんだな。

そんなことに気がついたのは全てを失ってからの話。人間ってそういうもんらしいね。

「さてと」

食べ終わってちよつとすると血糖値が上がってぼんやりしてくる。何もかもがめんどくさがりでほつとくと何日もじつとり座り込む性質があるもんだから、さつさと家事を済ませちゃう。

家事って言っても生きるために必要最小限の身の回りのことだけだけだな。

凝ったことなんかしないし興味もないしなにより手が届かないし体力が尽きるし。

で、幼女だって人間だ。

だから……まあ、その。

男のときほどじゃないけどでもやっぱりきちやないものとかが服に着いちやう。

洗ってない犬の臭いとかがして来ないように毎日洗濯しておくことにしてる。

けど今までみたいに洗濯物をベランダに干しでもしたら近所の家からは干して取り込む姿が見えるんだし、それを運良く見られなかったとしても干している服は見られることになる。

……見た目はいつもの変装でまだどうにかならない気がしないでもないけど、風に吹かれる小児用ぱんつはアウトだろう。

特にお隣やお向かいからはよく見えちゃうんだし、しっかりと見ればぱんつが子供用のものだっていうのにも他の服もみーんなそれ用のものだってすぐに分かっちゃうに決まってる。

だって僕の方からお隣の奥さんとかお父さんとか娘さんの下着まで見えちゃうんだから。

いや、もちろんちゃんと思えないようにしてるけど。

いやいや見ようとしているんじゃない。

見ようとしているんじゃないやなくて、ほら、戸建てのベランダなんてみんなおなじ高さなもんだから……それも5メートルは離れていないんだからどうしても視界に入るんだからしょうがない。

文句があるなら一軒家同士なのにベランダを向かい合うように建てた施工業者に言つてほしい。

もつとも、こつちのほうが1メートル……50センチくらいかな……くらい高いから、かがんで干せばどうにかなりそうではあるんだけどな……油断は禁物だ。

そもそも年頃の娘さんがいるんだから……お隣の奥さんにはせめて見えないように隠していほしいところなんだけど、それを僕から伝えたら「あなたたちの下着、いつも見えていますよ……」ってやばいこと言うようなものだから言うに言えなくて早10年以上。

つまりはもう慣れっこだ。

僕も思春期は終わって余生を過ごす段階だもんな、目に入ってもどきどきすらしない。

でも、いくら家の前の通りからは直接見えなからつてさあ……普通男、しかもひとり暮らしって言う属性付きの何するか分かんない僕に気を遣つて見せないようにするでしょ……？

娘さんも娘さんで、中学か高校つていう敏感なお年ごろなんだから見られたら嫌とか言つてよ……？

天然っぽいお母さんだから君が気をつけなきゃいけないんだよ……？

……信用されているのか、そもそも男として捉えられていないのか。

きつと後者だろうな。

まあ僕もぎらぎらしたところとか無いって自覚してるし、そもそもとして僕自身がちっちゃい頃からの知り合いって関係だからガードが緩いんだろう。

いつも見ているわけじゃないし大丈夫大丈夫。

干すときごくたまに視界に入っちゃううことがあるだけだ。

大丈夫。

最近は特に……いや、ほら、僕の真っ白なお子さまぱんつと比べちやったりするしさ。

たまにうっかり派手なのを見ちゃうと罪悪感で死にそうになるから、そういうときにはお父さんの下着を見て中和することでなんとかしている日常。

まー梅雨じゃそもそも外干しなんてできないから部屋干しだけだね。

乾きが悪いと服がみんなじめつと臭くなるのが困る。

下手をすると洗わないほうがマシなときすらあるし……うーん。

◇

「〜♪」

家事とかをしたらお昼までは読書とか勉強。

午前中はなんだかやる気に満ちているから意外とがんばれる気がする。

そんな中にぴろんって鳴ったスマホ。

「……………」

しょうがなく画面を開く。

もう10回以上ぴろぴろぴろ来てるからな、既読にしとかないとしつついいんだ。

『ごっちは中間試験が終わったばかりで、もう期末だよ——……ほんどめんどいよね?』

『学生はなぜ勉強をしなければならぬのか』

『社会の授業やるよりかストラテジーゲー配るほうがよほどためになると思う。ね?』

『あ。私平均越えした! ほめてほめて!』

JCさんからの学生らしいチャットに癒やされる。

しつついいけど。

「これ分かんないんだけど。響はごっこ分かったりするん?」

「……………」

……こういうのが困るんだよなあ。

『うーん。僕は退院したばかりで中学の勉強がまだ追いついていないから、ちよつと』

『そっかー』

『じゃーしかたないね』

『あ、これそもそもチャレンジ問題だからできなくていいやつだ。』

難関校のだって』

『ごめんごめん』

メッセージの割合はいつもだいたい1対10くらい。

もちろんあの子から10を投げつけられて僕が1を返すって言う感じ。

モチベーションにはなるからこうして勉強に関することだけは返しているけど基本的には既読だけだ。

それでいいって言ってたもんな。

……にしてもここまで忘れていたとはなー。

ぱらぱらと問題集をめくってたため息が出る。

いちど復習すれば思い出せはするんだけど……にしたって中2の内容だぞ……？

いくらなんでも受験も経験したしちよつと前までは学習塾とかでバイトをしていたのに中2の内容をここまで忘れてるのはまずい気がする。

成績も当時はよかったはずなのになあ……体育以外。

概要や大筋は分かっているけど細かい名前とかがさっぱり出てこないというあれが悩ましい。

問題の形式は分かっているのに答え方も分かっているのに、その途中式というか公式とかがすぐには浮かばないというあれ。

あとは細かい暗記系が壊滅だ。

って言うかさらつと僕が習っていない内容にすり替えられたりしてるもんだから余計ややこしい。

知能指数の低下が著しい気がして危機感を覚える次第。

「……………」

脚をばたばたして気を紛らわせた。

僕はいつも午前をこうして過ごすんだ。

今までは、そのときにしたいいことをするだけで時間とかで特にすることを決めていなかったんだけど……だって毎日が日曜日の生活が年単位だもんなあ……こういったJCさんの授業中に送られてくるメッセージを毎日眺めていたら「で簡単なものでもいいからなにか勉強しないといけないんじゃないかな？」って思ったから、最近はこうして懐かしい内容を見直してみている。

まあ社会人ってみんなすっごく資格取らされたりして毎日遅くまで勉強してるって言うってたもんな、僕もニートだから一応がんばってみようってことで一念発起。

……思い至るのが遠回りすぎだし、そもそも勉強するにしたって中学生のときの復習からっていうのもどうかとも思うけど……他にぱつとやりたいことが浮かばないんだからしょうがない。

やるだけマシだ。

うん。

子供になつて指の筋力まで落ちていいるのと、そもそも手が小さくて感覚が馴染まないのとかから最近ゲームとかもあんまりしなくなってきたしな。

まあそのうち飽きるだろうけど、なんだか妙に物覚えが良いみたいだしちよつとがんばる。

子供の脳みそってすごいよね。

◇

「ふう」

ひと仕事終えた僕は熱くなっていたコンロの近くから離れる。

お昼は2、3日に1回くらい料理して残りは作り置きのレストラン。

だから今日は作っていた。

もちろん3カ所に置いた踏み台を駆使しての昇降運動をしながら

の料理だ。

これで体力がついてくれたら御の字。

はじめのころは料理の途中からふくらはぎが泣いていた。

多分泣きべそもかいてた。

今は平気。

冷蔵庫と洗い場とコンロの前に常備している踏み台が心強い。

本当はあと2個くらい置きたいんだけど、さすがに足の踏み場がなくなるっていうかその前に料理中につまずいてひどい目にあいそうな気がするから、ほどほどにしておこう。

ちなみに作ったのはぱらぱらなチャーハン。

こういう単純かつ飽きにくくて栄養もそこそこな料理はいい。

意外とバリエーションあるしな。

冷蔵庫で余っている食材をベースにぶち込んでもたいていはいはおいしくいただけるというのも強みだ。

いわゆる男料理なんだから大抵そんな感じ。

僕は基本的になんでも美味しく感じるしな。

でも、それにしたって不便すぎる。

踏み台使うにしても腕を肩から上に上げることが多くって筋肉ついちやいそうだもん。

もう慣れたし諦めてはいるけど、それでもやっぱりこの背丈の低さだけは何とかしてほしかった。

せめて元の体に戻れることは諦める代わりに身長だけは……なんて魔法さんのものに願ってみたりもしたけど変わらさずちっこいまままだ。

まあ祈るくらいで戻れるんなら1ヶ月くらい拝み倒すし。

「うーん」

でもなあ。

ほら、僕は男だから思っちゃうんだ。

「せっかく魔法があることは分かっているんだからせめて少しくらい自分で使えるようにならないの？」って。

手を上げないで物を運べたら楽なのになあ。

寝そべったまま家事掃除洗濯料理ができたらいいなあ。

「ふんっ」

.....

まあお腹に力込めたくらいで無理だったのは小中学生で漫画を読むたびに実践して失敗した経験から知ってた。

しようがないから床のタイルに足をつけたままキッチンをじとつと恨めしく見上げる。

リフォームのときに母さんの希望で海外メーカーのシステムキッチンな台所。

だから今の僕としてはとてもいただけない高さになっている。

なにかに乗らないと背伸びをしても水もひねることができないなんてな。

成人男性の平均身長をちよつと上回る感じの背丈だとちようど良かったんだけどな。

ほんつとうとにかく小さすぎるのだけは本当にほんつとうになんとかしてほしかった。

切実だ。

いや、慣れればそういうものだって思ってた諦めもついたけどさ。

幼女になっちゃったもんだから日常生活においての利点がひとつもないのは悲しい。

でも、意外と何とかなるもの。

踏み台さえ使うなら、調理器具を小さいものにまとめて変えたなら……どうにかして前とそこまで変わらない感じで料理までできているから人間ってすごい。

まあ食材だけはどうにもならないんだけど。

筋力がマイナスに振り切れそうなくらいに弱いのと1度に運べる量が少ないのともそもも買物のためにはいちいち外に出るとそれだけ幼女拉致監禁な冤罪リスクが上がるっていうのもあって、今まではあたりまえだったスーパーでの買物も控えるしかないもんな。

だからほとんどは週1回玄関先の発泡スチロール箱に配達してもらうのとネット頼み。

前みたいになんともなく思いついた料理をぱつと買ってきてぱつと作るなんていう贅沢だとも思わなかった贅沢もできなくなったし、家にある材料をうまくやりくりしながら過ごすという感じ。

昔とは違ってネットで頼んでも即日で届けてくれるし、今は配達の人と顔を合わせなくても受け取れるから意外となんとなかなるものだ。あと重たいものを運んでくれるサービスというものにこれほどの価値があるんだっていうの、しみじみと感じる。

置き配は二トの心強い味方だな。

結構割高な気はする……けど食べる量が少ないのとで相殺されているから思ったほどじゃない……?」

健康な普通の男だったころには知ってはいても想像できなかったけど、筋力がないとヘタをすれば普通のサイズのペットボトルですら重くてしょうがなくなつて、持っているだけで体力を消耗するし手首とかが後で痛くなるんだよなあ。

貧弱すぎる。

今なら同世代よりもお年寄りとのほうが話が合うのかも。

野菜とかお肉は手に取って選びたいとかな。

「……………」

……とりあえず、男に戻れたら子供やお年寄りがなんか困つてたらすぐに助けようつて思う。

◇

食べたらずらふらするくらいに眠くなつてくるから、お昼のあとはたいてい昼寝。

病気じゃないよ?」

普通の眠気。

で、ちよつと寝てすつきりしたらメッセージの合間に聞き出した今日の中学生とやらが読んでいる雑誌とか流行っているゲームとかテレビ番組の録画を何かのついでに観たりしてる。

適当に言ったら案外受け入れられた中学生を演じようと思ひ立つ

たのはいいけど、話をしようとしてみると共通事項がほとんどゼロ。JCさんの会話も初めのころは……いったい何について語っているのかを探ることから始めないといけなかったくらい。

まさに外国語だ。

今ではわりと分かるようになってきたからちよっぴりアップデートできた感じ。

「……………」

だけど疲れていたからとは言っても。

さよならしたい気持ちでいっぱいだったとは言っても。

……おっきいほうの子にもアドレスを教えてしまったのはまずかった気がする。

ちっこいほうほどじゃないけどやっぱりよこしてくるメッセージの量が多いし、話している内容がさらに難解だ。

というか流行りのエンタメについて話すならまだしも友だちとか知り合いとかやらについて熱く語られても「僕がなんて返せば良いの……？」って気がつかないのかな。

気がつかないんだろなあ……。

あの脳天気さなJKさんだもんなあ……。

典型的な中身の無い……って言ってもちよつと怒るだけって気がするあの子だもんなあ……。

深く考えないで適当な相づちをするだけで満足してくれるから楽ではあるけど。

「……………」

僕って意外と努力家だったらしい。

中学生をやるうってする努力が実りつつあることもあって、いまどきの中学生としての感覚を少しは習得できたし……それなりに、あくまでも気を遣ってくれるとき限定だけど彼女たちと話を合わせることはできるようになっていくような気がする。

海外で外人相手が慣れてる人となら会話が成立するのを思い出す。

さすがに10年も違うと文化そのものが違うって感じで隔世の感

があるものだ。

今はほんとハイテクだよなあ……やってみることは大して変わらな
いけど。

アナログな感覚の混じった初期の白黒でギザギザなデジタルの感
覚が懐かしい。

◇

「……………」

夕方になってきたから散歩。

散歩といっても少しでも体力をつけるためのものだから走ったり
して汗をかいていやな気持ちになったりしたくないし、本当にただた
だ歩くだけのもの。

もっと体力がついて体が大きくなってきて気が乗ったらジョギン
グくらいはしてもいいかもしれないけどな。

夕方といっても日が陰ってくる時間帯になると学生とか犬の散歩
とか買い物とかで通りが賑やかになって来すぎるか、それよりもう
ちよつと前に帰らなきゃいけない。

出かける前と帰ってくる前には必ず家の前の人通りがゼロになる
瞬間を探らないといけないから、この時間は結構ずれることもある。

まあさすがに毎日1時間以上外に出ている体力も気力もないから
さぼることも多いのはしかたない。

続けるモチベーションを維持し続けることのほうが大事。

完璧主義はイコールで三日坊主だ。

なにもしないのに比べれば相当な運動になっていると思うし。

あくまで引きこもり基準だけど。

今の僕は幼女だしそこまでムリする必要はないしな。

最悪は家の中の筋トレとかだけでも運動自体は足りるはず。

足りるよね……？

◇

帰ったら作り置きのご飯を食べてお風呂浴つて決めてるから脱ぐ。

女の子になったばかりのころの羞恥心とか抵抗感なんてものとはつくにどこかへ消えていて、こうして服を脱いでいっても特に何も感じないし。

「あいかわらずにきれいな肌だなー」とか「でもやっぱりないと物足りないなー」とか「ちよつとは育っていないかなー」とか「やっぱりお股がさっぱりしすぎてるなー」とか、そんなことをぼんやり考えるくらいだ。

まあこの年齢の女の子で嬉しくなったら嬉しくなつたでロリコンを通り越したペドフィリアって存在になつちやうらしいから安心するけどな。

せいぜいが見下ろしたり触ったり鏡を見たりしたらちよつと嬉しくなるくらいのもの。

「……………お？」

……………ちよつと、ちよつとだけ胸大きくなつてきたんじゃ？

そう錯覚して思わず両手を吸い寄せてみる。

揉んでみ……………揉めなかつた。

「……………」

気のせいか。

知つてた。

そもそもこの体だとそういうところが大きくなる前にまず身長だしな。

僕も、銀髪で肩から胸からおへそあたりまでを毛先でくすぐるように覆われている、少女にもなれていない鏡の向こうの僕も……………非常に残念そうな顔をしていた。

13話 取り戻した（非／否） 日常 3 / 3

お風呂場の壁。

「……………」
ふと気が向いてマスキングテープを何種類か貼ったらなんかいい感じになって……もはや新しい装飾となった壁を見ながらシャワーを浴びる。

僕は昔から髪の毛洗つてるときも目を開けている派だ。

なんでかは分からない。

でも目にシャンプー入るわけじゃないし目を閉じるのはなんか怖いしでこの体になっても続けている。

眼鏡いらずの視界にあるのは雑な模様になった壁。

現代アートって言い張ればそれっぽくなりそう。

初めのうちはカビとかいろいろいと心配したけどめんどくさくなってきたて放置しているうちにどうでもよくなってきたて今に至る感じの壁だ。

なんかやる気出ないんだよなあって放置するのって良くあるよね。

それよりも中学生っぽいことをしているだけで忙しいんだ、しようがないしょうがない。

僕は壁のオブジェをちらちら見ながら髪の毛を洗って流してリンスをつけてっていう作業を無心でこなして、髪の毛に染みこむまでの時間を体を素手で洗うことで稼ぐ。

本当にリンスとかコンディショナーっていうの効果あるのかなって思ってたけど確かにつけないと髪の毛がきしきしするし、ざつとつけただけでもなんとなくきしつとするから本当だったらしい。

男だった頃には知る必要も無かった知識だな。

短かったんだから当然か。

ただ、髪の毛をしている………しているっていうのも変だけどこの表現がしっくりくる気がする………だけでこんな夏場なのに体が冷えてくるんだから冬になったらどうしようなんて今から考えちゃう。

冬なんてお湯に浸かってあつたまってるうちにさきさきって洗って

さつと出てたのにこれだからなあ。

それもこれもこの長すぎる髪の毛が悪いんだ。

だけど切らせてもらえないし体に張り付くしで迷惑すぎるこの上ない。

まだ夏になってないからお風呂場はすっぱだかだと寒い。

1回暑くなった後に秋とか冬になってきたらお湯で汗をかくくらいにあつたまつてから体と髪の毛を洗うっていう風にしないといけなさそう。

しかもこの体は体温が低いらしくって朝は低血圧で眠いし汗も滅多にかかない、手足の先は冷えるし寝ようと思えばすぐに寝付ける、そして皮下脂肪が悲しいくらいに少ないって感じでとにかく筋肉以前の状態。

どれだけ肥えようと思ってもがんばって半人前しか胃が受け付けない食欲。

もつとがんばって食べようとしたら食べているうちにうつらうつらしてきちゃうっていう本物の幼女らしき状態になる始末だ。

腹八分目どころか五分目じゃないといけないらしい。

手っ取り早く太るためには甘いものだけど僕が苦手だからなあ、甘いもの……。

「……んしょ」

そんな、ちっちゃいけど僕のものだっていう認識が定着している女の子の体をぼーっと眺めながら、ちよつとだけぬるくなったお湯にちやぶんと浸かり直す。

もちろん両手で湯船をつかんで踏み心地のいい踏み台とマットを踏みしめながらゆつくりと。

髪の毛をたらいに乗せて浮かせて温まってきたところで最近はじめたバストアップ体操……要は乳揉みを試してみる。

当然だけどやらしいのじゃない。

幼女のだしな。

まあ年齢不詳だから実際のところ何歳かは分からない。

調べたら大人になってもすつごく背の低い人って結構居るみたい

だしなー、特に女の人。

そもそも乳って系統の言葉で呼べるものが存在しているのかして
いないのか分からない以上この名称が正しいもののかは疑問だけ
ど、まあしないよりはましだろうということではじめたもみもみ。

まだ完全に子供だったら意味なさそうだけど発育がものすごく遅
い中学生くらいだったとしたら効果は見込める気がする。

もともとはメッセージのやりとりのなかでふと出てきた名前の雑
誌を買ってみたところからだったんだけど、ちよくちよく過激なこと
が書いてあって中高生がターゲットなのにつてびつくりした記憶が
ある。

もつとも「そういうの」に目覚めるのが遅かった僕だからこそ分か
るんだけど、いくらそういうことがたくさん書いてあろうが目立つて
いようがまったく興味がなければスルーするからあれを読んだ子が
みんな真に受けるというのはないんだろうけども。

……でも。

その、なあ。

つい最近知り合った子どもたちがそういう大人に片足突っ込んだ
ような内容を読んでいるかと思うと……なんかこう、もやもやするも
のがある。

……これはまさか、娘がそういう雑誌を持っていた父親のそれに近
い感覚……？

「うーん」

だってなあ。

同窓会の手紙とかに紛れて結婚したとかいうのってごくたまーに
来るしな。

行ったこと1度もないけど……学生を終えてしばらくするとそう
いうのが気になってくるんだ。

◇

ノスタルジックになっていたら胸まわりの肌がじんじんしてきた

からおしまい。

ひりひりする。

たかが数分揉んでいただけ、それもほとんど力を入れていないしそもそも揉めているかも怪しいくらいでむしろぐにぐにって押すだけなんだけど、とにかくそれだけの刺激で両方の胸が円形に真っ赤になっっている。

なんでこんなにも肌が柔いんだろうか。

これだと病弱設定もまんざらウソではなくなってくるかもしれない。

女の子はみんな肌が弱いんだったら普通なのかな？

女の子とそこまで親しい仲になったことがない僕にはきっぱりだ。

先っぽまでじんじんしひりひりてきたから収まるまで天井の水滴を眺める。

……こんなことをしても効果があるのかは極めて疑問っていうかたぶんほとんどないんだろうけど、せっかく胸が育つ女性の体になりはした以上育てる義務がある気がする。

だって、成長しても胸がないだなんて……そんなのは悲しすぎるじゃないか。

いやその前に元の男に戻るのが先決だけど僕にはどうしようもないから育てておくに越したことはないんだ。

せめて。

せめてもの慰めに自前のおっぱいというものがないと泣くに泣けない。

僕はふにふにと胸を触ってみる。

ひりひりするだけ。

それにしても元の、男だったときのようにな。

……やっぱり、そうならないよなあ。

幼すぎるといいうのも十二分にあるとは思うんだけどなあ。

みんなが知っていて僕だけが知らないって言うのは、ちよつと寂し

い。



かちんつてボールペンの先を戻して日記帳に挟んだまま閉じ込める。

「ふ——……」

ずーつとカリカリと書いていて凝ってきた肩をほぐしつつ背もたれに体重を乗せてほつとひと息。

今日はなんだかやる気がこれっぽちも出なかったから今日もがんばったかのように書いた夕方の散歩も実はサボってなんとなく部屋でだらーつとしていたら、つけようと決心してからずつと忘れていた日記を書いてみた。

日記を書く習慣って昔はあったんだけどなあ。

確か大学くらいまでは毎日書いていたけど、いぎニートになってみたらたいして代わり映えのしない毎日になってきて、書く内容もせいぜいが料理のこととか読んだ本のこととかくらいしかなくなって「書く必要ないな」ってことになってからずいぶんが経つ。

この体になってからは「次に目が覚めたらどうなるか分かったもんじゃない」ってことで初めの数日こそまじめに書いていたけどだんだん慣れと諦めとが出てきたせいとか、目の前に置いているのに視界に入らないという始末だ。

人間、メモしておこうが何しようがする気のないものはしないもの。

……それにしても最近の生活を書き出してみると、どうもこの体や新しい知り合いに汚染されているような気がする。

汚染っていうか……話題を理解したり追いつこうとしたり服を楽しいものだと感じるようになったり、胸のことばかり気にするようになっていたり。

ちなみに僕はおしりにはこだわりがないからどうでもいいけど、とにかくそういうことだ。

ばらばらとめくっても少なくとも前回……もう先月の日付だったけど、そのときにはまだここまでの変化はなかったようだし。

特に胸のことには触れていない。

もしやこの体に意識が順応しているんだろうか？

「……………」

……なんか怖くなったから忘れよう、うん。

ともあれ以前と変わってきていること自体は事実だ。

これがいいことなのか悪いことなのかは分からないけど変化は変化。

ついこの冬までにはよくあったようになんとなく気乗りがしないからしたら適当な連続ドラマとかを見ているうちに夜になってきていてお酒を飲んでいるうちに翌朝……なんて不健康な日つていうのがなくなっているのはいいことだろうしな。

体力が無ければ無いなりに無茶はできないんだから。

まずは中学生に勉強で追いつき直そうっていう張り合いがあるぶん充実感があるような気がする。

これもJCさんと知り合ったからかもな。

「なにを中学生相手にムキになってるんだ」って冷静になるとそういう考えが浮かんでは来るけど今の僕はその中学生以下なんだから耐え忍ぶしかない。

そう思っているうちに口が寂しくなってきたり冷蔵庫までとてとて下りて来た僕は瓶たちを眺める。

今日はウイスキーの、……思いつかないからただの水割りでもいいや。

じゃばじゃばとコップの中には完全に無色なアルコールと水とが混ざってちよつとだけでもやつとする。

つんとするアルコール臭。

………濃すぎたかな？

まあいいや。

別にストレートでもいけるんだし。

口の中にそれを含みながらコップ片手に階段をがんばって上って

日記のところにとどり着き、もう一口を飲んで体が少し温まってくるのを感じながら開き直して次のページへ。

もうちよつとだけ書いておこう。

どうせ今日は寝るだけだしな。

そういえば試して気がついたっていうか気がついたら試していたから自覚したのはそんなに前のことじゃないんだけど、今の幼女な僕はお酒が飲める。

飲めちゃう。

それも前の体と変わらないくらいには平気で余裕で。

発育には悪そうだけど、まあ子どもころから飲む習慣のある文化圏もあるし飲み過ぎなければ、うん。

人種的にはオツケーなはず。

倫理的には完全にアウトだけど気にしない。

このへんはひとり暮らしの特権だ。

ほとんど唯一ともいえる楽しみのお酒が完全にムリになるっていう悪夢が数年続くよりかはだいぶマシだし、うん。

ほら、お酒も適度なら精神的ストレスがなんとかって言うし、少なくとも僕にとつてはいいことだ。

きっとそのはず。

とりあえずとしてワイン瓶を半分なら飲めるし困ることはない。

体重は半分なのにな。

肝臓が強いんだろうか？

なまじ飲めてしまうせいでせつかく止めようと思っていたお酒の習慣、断酒がふた月も続かなかつたのはしようがない。

中身は大人だしこの姿は魔法っていう未知のなにか凄い力の影響だし。

うん、しようがない。

「……………けふっ」

僕は今日1日で思ったことを、一応は後日に他人に見られるかもしれないことを想定して堅苦しく書いておいて、もう一度日記帳をぱたんと閉じる。

もちろんお酒のこととか胸のことは書いていない。
だって自分で読み返すのだって恥ずかしいもん。



お酒が入ると眠くなってくる。

ずっとがんばって起きていればそのうちに逆に目がさえてきて眠れなくなってくるんだけど、そのへんのさじ加減が肝心だ。

いちど体調をいろいろな意味で崩しきつた経験からこういう大人な判断は染みつくようになってる。

痛くないと覚えないうつのは本当だな。

「……ぺっ」

まだお酒臭い口の中を磨いてきれいにしてトイレを済ませてぼーっとしている頭と重い体とをがんばって動かしてどうにかベッドにのそのそとたどり着く。

熟睡するためにわざと小難しい本を、酔って理解力の欠けている脳みそでかみ砕こうと格闘しているうちに本格的に寝落ちする寸前まで来た。

この感覚がたまらない。

クセになっちゃマズいって分かっているけどクセになってるんだからしょうがないよね。

「えへへー」

意識が飛びかけのよく分かんないテンション。

あ、さつき書くのを忘れた。

睡眠時間、2時間くらい増えたんだった。

おかげでいつも宵っ張りなんてできなくなってる遅くても9時、ゴミ捨ての前の日は8時には布団に潜り込まないと翌朝に目覚まし時計に負けることになる。

だからお酒はそれより2時間くらい前な夕飯どきからなんだって。たいていの場合それプラスで昼寝がセットでようやくすつきりするんだって。

子供か。

子供だったな。

「くあああ——……」

おつきなあくびを1回してからぐろんって横向きになってうずくまるようにして眠気に落ちる。

……これだけ寝ているんだ。

成長ホルモンが出て早く成長してくれるか、あるいはさっさと元の体にでも戻ってほしいな。

そんなことをごちゃごちゃとしている頭の中で考えているうちに僕の意識はぷつんと切れて翌朝まで吹っ飛んでいた。

☆☆☆☆

水平線の彼方から朝日が昇る。

その太陽は恐ろしくくらいに巨大なもので、海面からゆっくりと出てくるに従い世界を暗いオレンジ色に染め上げていく。

波打ち際にはその光で目が覚めたらしい鳥たちの元気な声と、夜中もずっと響き続けていた波の不規則で規則的なざあざあという音と空を飛び回る鋼鉄の重低音がびりびりと、繰り返して訪れている。

そこで、波がぎりぎりかからない程度の砂の上で、暗かったころ……空と海の境界がまだ分かれていなかったところからただただその方向を見続けていた彼女は、まぶしくなってきた空と海を片手で少し隠しながら、隣に立つ彼女に向かってつぶやくように語る。

『響』、そんな顔しないで。大丈夫、きつと……きつと上手くいくわよっ」

「……………」

その声に向かってぽつりと返される声はひどく小さいもの。

それに向かって元気づけるために、彼女は「彼女」に対して、いつも以上に活気に満ちている声を渡す。

「……………」もちろんっ！ 『響』をいちばんよく知っているこの私が保証するわ！」

「……………ふふ」

「……………な、なによ！　なんでそこで、どうして笑うのよ!?　もうっ！　『お姉ちゃん』に向かって！」

「……………」

少女と「少女」はしばらく笑い合った後。

「……………ふふ、元気出た？　『響』」

彼女は「彼女」の手を引きつつ砂浜をゆつくりと歩き始め——振り返ると今度は「彼女」と「もうひとり」に向かって語りかけた。

「———それじゃ、がんばってね。『響』」

☆☆☆☆



「うーん……」

寒いなあ……。

寒い。

僕はシャツ1枚って言ういつもの格好。

シャツだけを着了た状態で鏡の前に立っているんな角度から光を当ててひたすらに研究し続けること数十分くらい。

僕はめんどくさがりで飽き性なクセに1回気になると気がするまで調べないと気が済まないんだけど、その調べもののあいだは食べたりに寝たりしなくてもわりと平気だ。

そんなわけでぶるつとするくらい冷えてきたけどまだまだ。

ちよつとって言うか大分体が冷えてきたけどあともうちよつとだけ……。

「ふんっ」

力を込めてみる。

……でもやつぱりそれはできなかった。

んー、だめかー。

できそうだって思ったんだけどなあ。

女の子なら自然に浮き出るはずの胸ポチってやつ。

いや、特に理由はなくってただ気になっただけ。

漫画でそうなっているシーンを見て「僕も幼いとは言っても女の子なんだからいけるんじゃないか……？」って思っただけなんだ。

深い意味はない。

もちろん裸になれば見ただけでも触っただけでもポチが分かるんだけど、シャツ越しだとどうにも難しいみたい。

「かすかな膨らみが無いでもないからできるかな」って思ってた試してみはしたけど、やってみるとなかなかハードルが高いものらしい。

乳腺とやらが育っていないんだろうか。

だって第二次性徴つてのが来てないっぽいもんなあ、この体。幼女だし。

でも僕は意地でも10歳は超えていたいんだ。

10歳過ぎてたら個人差で女の子らしくなってくるってネットに書いてあったし、がんばれば見えるかもって思ってもしようがないじゃん。

お風呂でよくやっているように肩甲骨をつりそうなほどにくつつけるようにして胸を反らして、そのうえでシャツを後ろにぐいと引つ張って胸に押しつけたならようやく確認はできるんだけど……それじゃ天然物じゃないしな。

ニセモノでもないけどさ。

一応のベースは女のはずだ。

それにしても、同じようにしてみてもポチが起きるときと起きないときがあるのはなぜだ。

数秒のあいだに浮き出たかと思えば沈み込んでいるし……訳がわからない。

「はあ……」

ため息をつきつつ微妙に伸びてしまったシャツから手を離してペタンとする。

やっぱりもつと成長しないとムリなんだろうか。

脱いでふつうにしていたら、かつての記憶にある子ども時の男だった僕の体の胸とたいして変わらないくらいだしなあ。

むしろ肉がついていないぶん……。

本を読んでいたら女の子は先っぽのほうから成長してくるってあったのを見つけて喜んでここまで来たんだけどなあ。

そのときの興奮は体温とともにとつくに冷え切ってしまった。

悲しい。

空しい。

あちこちに脱ぎ捨ててあるぱんつや他の服を、もう冷たくなっていてそれらをもそもそと身につけ直しながらため息を再び。

……女だったら誰にでも起きるわけじゃないのか。
今の僕は「少」女以前の「幼」女だしなあ。
揉めない。
見えない。
浮き出ない。
………つまんない。



昨日までのしとしと雨からぎあぎあ振りになっていらいらしい雨粒の音を聞きながらカーテンをそつと開けて外を眺める。
誰にも見つからないようにして気をつけながら開けるのにも慣れた。

水気を含んだ布と木と金属の匂い。

暗い空。

雨がいつまで経っても止まない。

今年の梅雨は長い。

もうすぐ終わるらしいけど結構長かった気がする。

ニートが長いって思うくらいなんだから相当のはずだ。

こんな天気なもんだから夕方の散歩がさぼりがちになるのは仕方ないよな、うん。

こんなぐずぐずした天気がもう半月も続いているものだから、ろくに外に出る気がそもそも起きないという悪循環もまた続くんだ。

外に出たとしても、どす黒い風景と肌にとわりつく湿気と帰ったあとに体じゅうがじとつとしてお風呂に入るまでどこかじめじめし続けるんだから、それらないっそのこと出なければいいやってなるんだもん。

こんなのは去年までもずっと同じだったしムリして外に出ていたずらにストレスを溜める必要もないし。

「……………」

初めのころは「雨具で隠れられるからいい」って思ったけどさすが

にどんよりが続けばいい加減にうんざりしてくる。

北国の人もこうしてメンタルがやられるっていうのを耳にした覚えがあるし、やはりお日様は偉大だ。

この体のDNA的にはどうなんだろうな？

『……………なのでこの……被害者というよりは……………と呼ぶべき……』

『前兆がなくなりいきなりというパターンがほとんどであって対処に……………』

『……………が遅くなると……………という事態を招くケースも……』

午後のテレビはつままない。

辛うじて興味の持てるワイドショーなんかを適当につけていることが多いけど、どうも僕の知りたいことを掘り下げてくれる局はないらしい。

まあこの時間帯のターゲットは僕みたいな20代の男じゃないからしょうがないんだけど。

別に僕だって暇を潰したいわけじゃないもんな。

ただ耳が寂しいからつけておくだけなんだ。

あと時報的な機能もあるし。

けどなあ……。

「ふ……………」

ぼんやりと画面の向こうで熱心に話し合っている人たちを見ながら思う。

もうこの体になって4ヶ月か。

長いものだな。

1年中日曜日な僕にとって季節はあつという間に過ぎるものはずなのに、それでも長いって感じるんだからよっぼどだ。

やっぱり子供だから時間感覚が？

うーん。

比べられないから分からない。

世間ではこの天気のことを諦めているらしく、もうすぐに来るらし

い梅雨明けとその先の夏休みを間近に控えてのレジャー特集とかで浮き足立っている印象だ。

話題がなければとりあえず今年のオススメスポットを紹介しておけばいいだろう的な制作者の意図を感じる。

コマーシャルもみーんなそんな感じだしな。

僕としてはそういうもののほうがまだ興味を持てるからいいんだけどさ。

にしても夏休みか。

ここ数年はずつと家にこもっていたな。

暑いし人でいっぱいだしで外に出る意味がないんだもん。

こんなに毎年暑いのにわざわざ余計に暑くなりに行く神経は持ち合わせていない。

ニートを舐めない方が良い。

ニートっていう特殊な生態を考えると、この時期は外出を控えてオフシーズンを狙うのが鉄則なのは明白だしな。

去年まではそうやって人の少ない時期に2週間3週間の旅行とかしていたんだけどなあ……今年はどうあがいてもムリっぽいし。

趣味の温泉巡りすらできないのは悲しい。

ああ言うのってふと思いついて本屋に走ってガイドブック買ってきて、ひととおり読んでから行きたいルートを考えて予約するのが楽しいのにな。

もちろん物理的にはできる。

……できるんだけどそもそも日帰りだつてこの見た目じゃ変に思われるし、男湯に入るのにも女湯に入るのにも勇気が要るしなあ。

幼女がひとりで都会からそこそこ離れた温泉郷に来る時点で怪しまれる可能性しか無い。

それにいざパスしてすつぱだかになるにしても……男湯なら僕の精神的にマシンなんだけど、どうしたつてこの長い銀の髪の毛は女だつて主張するものだし無理っぽい。

いくら体に凹凸が完全に……ほとんどないといったつてさすがに腰まで伸びている髪の毛は隠せないしな。

切るのはNGみたいだからこれだけはほんっとうにどうしようもない。

なら理想郷の女湯はどうなのかって言うと……その、覗きに入っているような気がするからたぶん僕の心が持たない。

まるで変態じゃないか。

いやまあその、女の子の見た目で男湯を選ぶのも充分にやばいんだけど男の精神で女湯に入るとかもまた相当にやばいんだ。

漫画の女湯なシーンとかを見過ぎているからこうやって思うだけで、現実に入ってくる人の多くはおばさんとか年寄りの割合の方がずっと高いだろうと思う。

だからそんな心配はないはずだけど……それでも中学生くらいまでならともかくそれ以上とか元の僕と同じ年くらいの女性なんて見ちゃったら、きつと罪悪感で寝込む。

だって僕現実の女の人の裸なんて直接見たことないもん。

威張ることじゃないけど経験値が0と1以上にはとんでもない差があるんだ。

姉か妹とか小さい頃一緒に入ってた女友達なんて存在は僕にとっては縁の無い灰色の人生だったしな。

だからよっほどのことがない限りはどっちに入るにしてもムリだろう。

温泉は諦めないと行けなさそうだ。

家族風呂とか高そうだし、なによりひとりつきりだしなあ。

「……………」

CMをぼんやり見ていた僕は思いつく。

待てよ。

「持病がある」とか「ケガの跡がひどくって」とか言えば。

……うん、それなら不可能じゃなし不自然にも思われないか？

ただ同伴者って言うか保護者が居ないのだけが問題になるだけだ。

いや、やっぱりそれが駄目だ。

高校生くらいまでの子供は社会的には保護される存在。

怪しまれるしかない。

ちよつといいアイディアが浮かんだけど、そもそもわざわざ山奥の効能抜群のお湯なんかに浸かったらこの体の貧弱極まりないお肌ではどうなるのか分かったもんじゃやない。

薄い肌で濃い温泉なんかに入ったらしみたりして最悪のたうちまわることになる。

やっぱり止めておこう。

……入りたいなあ、温泉。

旅館に泊まって何回もお湯に浸かっては上がって部屋でお酒呑むループが大好きだったんだけどなあ……。

あ、今夜は日本酒にしよう。

◇

梅雨にはいいところもある。

外に出なくていい理由があるから普段通りの生活に戻っても「また引きこもってる……」ってちくちく痛んだりしない。

一応でも僕の良心は引きこもりを良しとしていないもんな。

それにいちいち外に出るかどうかを考えて家の前を確認してってことをする必要もない。

「雨だからしょうがないよ」って言い訳で今日もぐうたらできるんだ。

こうしてシャツとばんつだけっていうだらしない格好でベッドでごろごろ気楽にしていられるのがその証拠。

シャツ1枚だと単純に楽っていうのと洗濯がすつごく楽つて言うのと肌が布に擦れて気持ちいいっていうお得さで、けども下に穿かないとお尻が冷たいし汚くなったら困るから1枚換算300円のばんつでカバーする完璧さだ。

こうしてじつとり静かに過ごすのって好き。

だけど僕も一応は人間だから何日かに1回あるかないかだけ外に出てちよつとだけでいいから会話をしてみたくなる衝動に駆られることもある。

こう、スーパーでお会計の後に「ありがとうございます」だけでも

なんか違うんだ。

僕には将来性皆無で人生で学生時代の次に大切な20代を無駄にするって言う……あ、ちよつとずきって来る……ニートって言うご職業をする適性はあるんだけど引きこもる適性はないらしい。

ニートと引きこもりって似ているようでイコールじゃないんだよなあ。

その辺を大半の人が理解できないんだよなあ。

「やれやれ」

適当につぶやいてぴろりと鳴ったスマホをめんどくさがって取らない。

初めてこの姿で外に出たあの日のせいなのかおかげなのかは分からないけど、幼女な僕にも中学生だって言い張る怪しい存在に対して知人ができた。

年下の中学生っていう存在だ。

小学生でも高校生でもないらしくって中学生。

ある意味幼すぎもせず男の僕からして理解できなくなってくる年頃にもなっていない純粹な女の子っていう存在の知人。

一応は知り合っちゃったし完全に無視するのはなんだか悪いしで気がつけば何回か外でお昼とか食べてるんだ。

なにかと予防線を張りつつ、ほんの軽い雑談だけーとかそんな感じ
で。

まあ僕が深いお付き合いはお好きじゃないってのは態度で分かるらしくって本当に軽い感じだけど。

せっかく連絡先を教えさせられたんだ活用しないともつたいないしってことで今どきの現役の女子中学生なJCさんと……「友だち」として何度か。

子供って顔見知りから友だちになるのが一瞬だよな。

僕なら最低でも3ヶ月は欲しいのにな。

相変わらずやけに距離は近いしうるさいしで疲れるけど、そこは僕の機転。

適当なアラームとかをつけて「もう行かなきゃ」ってごまかしてな

んとかなるし。

人と話したい衝動をちよつとした買い物とか旅行先とかでまとめて発散していたんだけど今はできないし、情報収集は大切出しでずると会ってる。

正直めんどくさいんだけどそこは二トの特権を行使。

そういう気分になった日に「今日なら時間あるよ？」でオツケーだ。

学生が暇そうな時間なら大体二つ返事だしな。

でも、顔見知りとこれだけ頻繁に会うのは何年ぶりだろう。

多分高校生以来じゃないかな。

高校生までなら僕もなんとか周りと合わせていて学校帰りとかお休みの日にご飯食べたりしてたしな。

大学からは……うん。

授業で必ず同じ人たちとって言うのがほとんどなくなったしサークルなんてのはめんどくさくって。

そういうこと。

そんなわけで人寂しさをすつごく年下の女の子で紛らわせるって言うやばいことをしてるわけだ。

僕の肉体年齢はそれよりさらに幼いのは置いておくとして。

子供相手とはいえ結構に会話もしたし、これで少しは……少なくとも設定も何も無かった最初の頃よりかは見た目と設定とのバランスの取れた「らしい」話し方と振る舞いをできるようになってきたんじゃないかって思う。

ついでに寄るお店とかで店員の人に「ん？」って顔をされるあの一瞬もほとんどなくなってきたし。

容姿に見合わぬ貫禄みたいなものが出てきているなら嬉しい。

努力は必ずしも実るものじゃないけどなんらかの見返りはあるものだ。

相応のやり方と時間と頻度が不可欠だけど。

にしても家族同士の知り合いとかじゃない女子中学生と外で度々会うなんて。

成人しちやつた男としてはお金を払う以外に手段がない気がする。

つまり元の体だったら事案になってもおかしくないってこと。
やっぱり結局誰がなんと言おうとも人は見た目がすべて。

だからもつと中学生っぽい雰囲気醸せるようになって……いい
加減赤ちゃん言葉で話しかけられるのは回避できるようになりたい。
本当に。

今でもときどき、たまりにだけどしやがみ込んでまで話しかけてく
る人がいるくらいだもん。

まあ素顔が見られちゃえば小学校低学年だもんな。

他人と話すときは丁寧が染みついている僕だってこんな姿の子が居
たら砕けた話し方しちゃうもんな。

◇

僕は忘れっぽいし興味ないとそもそも認識すらしないでどうしよ
うもない存在だ。

だから会った話の内容とか忘れないうちに整理しておこう。

ちようど今何もする気無いからちようど良いしな。

さすがに日記に書いたらなんだかマズそうだしスマホのメモで適
当にすいすいって。

何もする気が起きなくたってスマホをいじれるんだからやればで
きるはず。

かつては同級生の同じクラスの子の顔と名前できえ学年末になっ
てきてようやく浮かぶようになるっていうのを高校まで続けていた
僕。

こうして何回も何回も思い出さないと記憶に残らないもんな。

とりあえずは面倒なおつきい子のJK下条かがりさん。

年下に対してさん付けもどうかって思うけどそれが僕。

全体的にすべてが大きい子。

なにがとは言わずに全部が。

彼女は高校生だとばかり思い込んでいたんだけど、なんと中学2
年生。

つまりは設定上の僕と同一年だそう。
んな馬鹿な。

初めに聞いたときはてっきり冗談かなにかかって思っていたんだけど疑いすぎたら怒りだして学生証をぐいっと突きつけられたから本当だったらしい。

あの体で本当に中学2年生だった。

あの体で。

あの体で。

あの体で。

いやらしい意味とかじゃなくって背も高いし胸もでかい。

あの大きさだと何カップになるんだろうな？

いくら肉体的には同性だって言っても僕は男だって言ってるし、いくら女の子同士でも初対面に近い間柄で「何カップ？」とか聞かないだろうしで言わなかったけど。

年齢をさんざん疑ったせいでまあふくれること。

どれだけ幼かろうと年齢を気にする女の子っていう生きものだし何歳も上に見られるのがコンプレックスだそうだ。

漫画みたいにほっぺをわざとらしく膨らませて怒るアピールするもんだから大変だった思い出。

余った、もとい食べきれなかったお菓子もといスイーツをあげたらすぐに機嫌直ったけどな。

下条さんの場合、いざとなれば甘味か僕の着せ替えでどうとでもなるらしい。

ちよろい。

でもどこからどう見たってそもそも中学生にも見えなくて高校生どころか大学生って言ったって「そうなんだ」で済みそうな体もとい外見をしているのが悪いって思う。

よく冗談で「グラビアアイドル目指せば？」って友だちに言われるって言ってたしな。

実際脱がなくてもすごいって僕でも思うんだしそうなんだろう。

まあこの辺に深く突っ込むとその反対な僕にも流れ弾が来そうだ

から黙っておいた。

肉体年齢と設定年齢と精神年齢がゼーんぶ違う僕には直撃しそうだし。

きちんと頭の中で分けておかないときどき分からなくなるくらいだし。

えーつと僕は大人の男の心と幼女だけど中2男子って言い張ってる体で、下条さんは幼い心と中学生なのに高校生の色気つてのを出してる体。

ずるい。

交換して欲しい。

無理だろうけど。

くるんプリン下条さんとちよつと話してみれば、確かに顔は中学生くらいの幼さだし精神年齢が年相応だつてのはすぐに分かるんだけどな。

高校生だろうって思ってから話すと案外分らないもの。

おととい会ったときには、定期試験でやらかしてたつた1科目のために補習があることになって夏休みが残念なことになったって嘆いていたかわいそうな子。

話を聞いている限りどうも勉強にあまり向いていないっていうかすぐにぼんわかするっていうか、たぶん学力は同学年の中でちよつと……な様子の子。

かわいそうになあ。

本とかは普通に読んでいるみたいだし地頭は悪くはないと思うんだけど勉強のやりかたと習慣つてのは難しいしな。

「中学生なのにバイトして良いの？」って思ったらあの外見が原因だったそう。

なんでも部活の先輩……高校生のらしい……がバイトとして働いているあのお店で人が足りなくなっていたのはこの前の通りだけ「高校生の制服を借りて履歴書に高校生って書いたら通るんじゃない？」っていう学生らしいノリで出してみたら特に疑われることもなく即日採用だったとか。

「ずさんすぎない？」って思ったりもしたけど、たしかにあの子が制服を着ていて静かにしていたなら高校生だって言われても違和感がなさそうだし実際間違えたしな。

まあ肉体が幼女の身で飲酒している僕からは何も言えないし、そもそも働いていたのもあの連休中だけのことらしいし社会経験ってやつだ。

とにかくあの身長と胸では年齢詐欺にもほどがある。

ちよつとは分けてほしいくらいだ。

どっちもな。

まあ何も言われなかったっていうのには臨時だったっていうのもあるらしいし。

店長か誰かしらが多少勘づいていたとしても本人たちが言い張っているし、書類上は高校生だし「まじめそうならわざわざ言わずとも問題なく働いてくれるんなら良いよね」っていう大人のグレーな判断。

高校生たちのツテを頼るくらいだし切羽詰まっていたんだろうしな。

世の中余計なことを突っつかなければわりとどうとでもなるものだ。

藪からは何が出てくるか分かったもんじゃないしな。

実際僕もそうやって突っ込まれないことが多いんだろうし。

だからこそおとなしくしないないとどうなるか分からない。

ボロだけは出さないように気をつけよう。

出したところでもがっかりされるだけけど……そういう他人の反応が平気だったらこんな生活してないんだから。

……ま、こんな幼女の中身がその辺に転がっていきそうな地味な眼鏡男だなんて誰も信じないだろうけどさ。

自慢じゃないけど僕は人の顔と名前を覚えるのが苦手。

だから小説でも漫画でもドラマでも映画でも主人公くらいしか分からない。

好きなので2回3回って楽しんでようやくって感じ。

だからってわけじゃないけどせっかくだしってことでスマホのメモに知り合った人のことをすいすいと、思いついたことを箇条書きのようにして覚え書きを作っていく僕。

こうして突発的に何かするのってすぐに飽きるけど……まあヒマだし。

だけど……。

「うーん……」

疲れた両手を休めながら僕は何年ものスマホを眺める。

何度か思ったけど、スマホ、ちっちゃいやつが欲しいなあ。

画面は大きすぎて操作がしづらいし重いし片手に収まらないしで良いところがひとつもない。

大人と子供、男と女のかけ算で大局的な生物になっちゃったからしょうがないんだけど。

ずっと持つてるだけで手首が痛くなるしなあ……しかたない、下に置こう。

こんなんでも手首痛めるとか軟弱にもほどがあるし、さすがに困る。

「今ってスマホはネットで買えるんだっけ？」とか思いながら、ことんと置いてするすると思いついた順に文字を並べていく。

「……………」

おっぱいもとい下条さん自身が年齢と体のことを気にしているせいか「私中学生なのよ？」って言うのに合わせて「僕も同い年だけど子供扱い止めてくれる？」って伝えてもちよっとだけ驚いてすぐに納得していたのには僕が驚いたっけ。

なんとなく話し方で見た目よりは上だと分かってくれていたらしい。

僕の言葉づかいもときどき気になっていたらしいし。

最初の頃は僕自身のキャラを作るのもおぼつかなかったからだろうけど「いつもだから」ってことにしておいた。

便利だよな、「いつもだから」って。

どんどん使っていこう。

けど話している最中によく「それってどう言う意味？」って聞き返されるし……僕じゃ分からないけどやっぱり世代間、干支1周分くらいな時の流れっていうのはちよつとした表現にも表れているみたい。

そりゃあそうだ、あの子たちが生まれた頃僕は中学生だもん。

なるべく違和感が出ないように意識しているんだけど難しい。

「ふむ……」

めんどくさくなくなって疎遠になるなら良いんだけど嘘がばれてじくじくしたお別れになるのは嫌だ。

……「じいやとおはなしするの大好きだから……」とかいう設定も作っておくべき？

じいや、じいや。

大きな家にいる執事さんの存在。

じいやって言うからにはおじいさん。

ならそれに合わせたエピソードも必要だ。

だけど将棋とか囲碁とかルールもふんわりとしか分からないし興味あまりないからなあ。

興味は無いわけじゃないけどそこまでストラテジックに何手先まで読むとかできないし、それよりも楽しめる娯楽がありすぎるっていうのも大いにあるし。

このありあまる時間をちよつとは使って、せめて初心者レベルまでは試してみるべき……？

今はアプリでもできる時代だ、ひとりぼっちでもなんとかなる素敵な時代なんだ。

勉強に飽きたらやってみるか。

覚えていたらな。

意欲が残っていたらな。

……ん、何の話だっけ。

ああそうだ、着せ替え人形にしてきたあの子の特徴を書くんだっ
た。

下条さんとの会話は正直苦手。

だつてほとんどが学校とか部活とかテレビとか雑誌とか漫画……
もちろん少女漫画的なものとかのはなしをほとんど一方的にされる
という感じだし。

だいたいいつもファッション雑誌とかネットの記事とかを見せて
くるし。

いちばん楽しそうに話すのが芸能界とか学校の友だちとかの恋愛
話とかいう、僕にとつてはいちばんつまらない話題なあたりいまいち
話が噛み合いづらいんだ。

生きている世界が完全に違う。

例え同世代でも話なんて合わなかったって思う。

脳みそゆるゆるだもんな。

けどそういうのがいわゆる今どきのJK……じゃなかったJCつ
ていう存在らしいからちよつとがんばって付き合ってみてるんだ。

あんな中学生の女の子に我慢して付き合っているんだ、僕は偉い。

つまりニートは偉いんだ。

がんばった甲斐あつて会話のテンポとかもある程度コントロール
できるようになったし、最初のころみたいの下条さんが息継ぎ以外は
ずーっと口が回り続けるのに付き合うつていうのはなくなっている
から僕としてはありがたいところ。

服のボタンがズレているつていうか、そもそもこちらにボタンを通
すための穴を探すところからはじめないといけない感じで大変だつ
ただ。

……いや、ちよつとだけ良くなつてただで根本的には何一つ良く
なつてないんだけども。

ボタンの穴を探したとしても今度はそのサイズが合っているかの
確認が必要な感じ。

違うかな？

それに、会うたびに「誰それがくつついた」とか「離れた」とかい
う報告と、そのついでに僕にまで「好きな人ができたか」とか聞いて
くるからどうにかして話題をそらすまでがあいさつだ。

「二一トだからいいよ？」って言えたら手っ取り早くて楽なものな。
フリーターさんと違って人と接する機会がゼロだから出会いがゼ
ロなんだってさ。

……いや、そうしたらいきなり同級生を引っ張ってきたりしそうで
からやっぱりごまかしておこう。

とにかく彼女いない歴〃年齢っていう最近はずヨリテイになり
つつもさりげなくやばい状況の僕としてはいい加減にしてほしいと
ころ。

でもそれが生きがいなら僕は否定しない。

代わりに僕も適当に相手するだけだ。

そもそも20超えるっていう良い年して好きになるっていうこと
が僕はよく分からないし。

親愛の情ならまだ分からなくもないけど恋とか愛とかなあ。

人間って言う猿よりちよつと話が得意になっただけの生物に備
わっているただの繁殖行動のための機構なのに、それがどうして世の
中の人を……特に女性を惹きつけるのかさっぱりだ。

あ、文学的表現としては好きだしエンタメでも嫌いじゃないけど。
そんなどうでもいい話題がほとんどだからメッセージもよく流し
見するしどんなことを話したのかもよく覚えていない。

会ってへとへtoになったという結果だけが残る。

あと話を合わせたことによる経験値も少しだけ。

……けど。

「れんあい、ねえ——……？」

丸っこい声が僕の口から出る。

微妙に舌つ足らずなのが要改善な幼女な僕の声。

意識しないと自然と本来の見た目らしい声と話し方になるちっ
ちやい口。

そもそも将来女性とくつつけるかどうかすらも怪しくなっている

もんな。

もともとの体だったとしてそういう関係になれたかどうかはまた別の問題だし。

やっぱり予定通りに死ぬまでひとり身のままかもな。

独り身のおじいさんと独り身のおばあさん。

……しわくちやになつちやええば性別なんて関係なくなるだろうな。

◇

続いては関澤ゆりか……さん。

ちつちやいほうのJCさん。

けど1回覚えたJKさんとJSさんのうちのJSさんでも良い。

JSとかJCとかJKとかも普段使わないから使いたいの言葉だしな。

で、彼女は僕と同じ側の人間だ。

僕よりは数段マシではあるけどやっぱり外見が中身よりも数段幼い気がする。

まあ僕には負けるけど。

威張ることじゃないけど。

そう言えばあのとときの「同志」呼びはなにかのゲームで出てきたもので、あのとときにハマっていたからつい出てきたとのこと。

今はとつくに別のものに興味が移っているらしくってあれ以降変な呼び方はあまりされない。

たまにはされる。

別にどうでもいいけど。

同志ちつちやいのは意見が合う。

主にちつちやいのがコンプレックスって面で。

事あるごとに「小さい体あるあるを」メッセージでつぶやいてきて結構同意できるくらいには。

気持ちは分かる。

高いところじゃないものでも取れないとかな。

僕はさらに踏み台必須だしなあ……。

こうしてふつうのサイズのスマホが大きすぎるって感じるくらいだし。

彼女は髪型はぱつっんに近い感じのきれいに整えてある感じで肩に軽く触れるくらいの長さ。

彼女の学校の校則的には長めらしくって、顔も体もどうか中学生という口を閉ざしていれば地味に溶け込む感じだ。

マジメな顔して黙っていれば本当にどこにいるのか分かんないくらい。

言ったら怒るだろうけども、それをはねのける喜怒哀楽とテンポの良さっていうのが個性だから良いじゃない。

制服が新入生のようにぶかぶかだっというのにはなんだか哀愁を誘われる。

そんな感じなもんだから、待ち合わせのときだと同じ制服の子たちに紛れられると身長以外では見つけづらい。

そもそも周りの人遮られるもんなあ……。
低身長宿命だ。

この件で何回うなずき合ったことか。
しかし関澤さんは外見に合わず何でもできるタイプらしい。

勉強もスポーツも人並みよりひとつ抜けてできるらしいけどモチベーションが遊ぶことに向いているからそこまで目立った成績ではないっていう、才能と意欲とがズレているパターンの印象を受ける。

まあその逆で全部人並み以下だけど真面目にこなしてるから先生の評価で平均より少し高めだった僕と比べたら、きっと何十倍も快適な学生生活だろう。

僕は早生まれとかじゃないけど飲み込みがものすつごく遅い方だから、きつと2年くらい遅いくらいでちょうど良かったんだろうな。
そんな思い出も卒業しちやえばなんだか良いものに思えてくるから時間って不思議。

「ねえねえねえ、昨日の5話もう見た？」

「すつごい展開だったよねー」

「夜中なのに私感動しちゃって！」

「あ、私徹夜とかできるタイプなんだけどさあ！ 今度一緒に」

「そっか、響はできないんだー残念ー」

「話はどこかで変わるけどちよつと前に出た」

「つてゲーム知ってる？ あやつぱり！ よかった！」

「あれ友達だから借りたから今度一緒にしたいんだけど！」

「え、ダメ？ 隣で見てるだけでいいからさー」

「……えー、ダメ。 ケチ。 ケチな響。 ケびき」

なんだケびきって。

どうやら独特の言語センスがあるらしいちっちゃいの。

ゲームからアニメから映画からあらゆるものに対する興味は強い。

おもしろそうなものはひととおり経験し終える前の、見たことがないからこそまだ飽きていなくてなんでも楽しめるっていう……ある意味大人になる境界をまだ過ぎていない状態の彼女にとってはこの世界は新鮮で、寝る時間も惜しいくらいに何でも楽しめるらしい。

そんな話をこの前聞かされた。

一方的なメッセージで。

渋い古典から最新のゲームから昨日のアニメまでと話題がとにかく広いから話があつちから合つて、僕的にはとつても楽しい。

その代わりにメッセージの量はときとしてスパムと見間違おうくらい。

その熱意がうらやましい。

「それだけ引き出しがあるんだつたらたくさんいるらしい学校の友だちとでも話せばいいんじゃない？」つて思ったしそう言ってみただけど、ぱつつんさんに言わせるに「奴らは知識が浅いから深い話ができないのだ……」とか言ってた。

特に彼女の大好きだというシミュレーションゲームなんかはもはやレトロゲーの分類らしいしな。

どうやら彼女はかなり早熟らしい。

おっきいのと比べるとそれがよく分かる。

けど中毒で有名なあのゲームとか……あんな時間を食べる遊び、よ

く睡眠時間とそこその成績を確保しながら学生生活の傍らにできるなあって感心する。

よっぽど要領がいいんだろうな。

もともとのスペックも高そうだし。

睡眠不足は肌が荒れるからってきちんとして寝てもいるようだし。

中学2年にしてまさに万能。

うらやましい限りだ。

できたらその要領を少しは大きいのにあげてあげて代わりにあふればかりの胸と交換してもらったら良いのにね。

あ、女の子だったらお尻も大きい方がモテるからもらったら良いのにね。

けどそんなことはできない。

人って産まれながらにして平等じゃないんだ。

けどメロンさんとの会話でうんざりしたあとで会ったときに懐かしい作品の話が振られたせいで、ちよつとだけ嬉しくなって話し込んじゃったせいで……僕がそういうのにもそれなりについて行けると知られてからはとにかくメッセージが来るわ来るわ。

1対10以上なのに気にせずには昼夜問わずスマホが光るのはちよつと怖い。

その作品とかも僕からしてみると「ちよつと古い」程度だけどちつちやいのにとっては「物心つくどころか生まれる前」な作品について話してきたりもするから「確かにこれじゃ話し相手が見つからないだろうなあ……」とも思う。

マニアックというか何と言うかマニアって言うか。

そういうのを語れるのがネット上の、顔も知らない不特定多数な相手。

つまりは本来の僕よりも上の世代がほとんどだとか黄昏れていたあたり相当に飢えていたみたいで、僕がその聞き役になった訳だ。

まあメッセージを送ってくるだけなら許そう。

僕も話していてノスタルジーに浸れるしな。

「メッセージは良いけど電話は嫌いだからかけないで」って言うってお

いたの、守っているうちは友だちごっこに付き合おう。

◇

主観的には事案だけど客観的には正常な僕たちの関係。
彼女たちと会話をするときには気をつけなければならぬことがある。

彼女たち今の中学生は、僕が中学生くらいするとき……つまりは今の彼女たちと同じくらいなときに生まれたっていうとても悲しい事実だ。

干支がひとまわりしているってのはそういうこと。

なんだか急に老けたような感覚にとらわれるけど頭の隅に置き続けないと困ったことになる。

「昔」と「つい最近」がごちゃごちゃになって話がかみ合わなくなるこ
とがあるくらいだし。

まだ「ちよつとズレてる」程度にしか思われていないだろうけど、こ
れがずっと続けば「やつぱり変」って思われるだろう。

つまり距離は近いんだけど接する感覚としては……親戚の子ども
を相手にするようにならずと気を遣い続けておいて、話しているあいだ
はずつと時間の違いを意識していなければならぬ。

そういう親戚がいたならまだちよつとは慣れていたのかもな？

いや、いたとしてもそもそも話さないか？

僕の親戚……居はするけど飛行機の距離だしなあ、みんな。

おかげで滅多に口を出されないでニートできているんだし。

なんとなく働いているってぼかせるおかげだ。

離れてるって便利だよな。

親から仕送りもらって遠いところで生活してる感覚で、年に何回か
それっぽく報告すれば後は好き勝手にできる感じで。

僕に親はもういないけど。

にしてもジエネレーションギャップというものを社会に入らない
うちから僕のほうが経験するだなんて……人生つてば分からないも

の。

洋物の少女にもなったしな。

本当に何があるか分からないもんだ。

僕にとつてはほんの少し前に見たつもりのものが彼女たちにとつては幼いころのものだったりして何度も冷や汗をかいたものだ。

ミステリー小説とかの犯人サイドのキャラクターたちの気持ちがよく分かる。

ひと言ひと言には気をつけていても、ついぽろっと出てきちゃうんだよなあ……。

そしてそれを補うためにどんどんとがんじがらめになっていくつていう。

口走るっていうのは怖い。

今度からああいうのを見るときは犯人サイドに同情しかできない気がする。

あ、あとちっちゃい関澤さんと話しているときにはでっかい下条さんとはまた違って、ときどきよく分からない言い回しでなにかを聞いてくるんだけどいまいちよく分からない。

「分からなければいいよ」なんて予防線も張ってくるし。

まあそこまで頻繁じゃないしメロンさんとは違ってレモンさんは年下の少年とでも話しているような感覚でいられるから気分は楽だ。

外国語と同じで理解できないことを話されても僕が認識できないんだからなあ……。

その辺がたぶん男と女の感性の違いなんだろうし、こればかりはうまくごまかすしかない。

「……………」

こんな感想が出る内は、僕はまだまだ男で居られるようだ。

◇

連絡先をいただいてしまった以上には芸能関係な萩村さんと、萩村さん経由の悪魔もとい今井さんとの連絡も一応は取っている。

「あんまり返せませんよ?」って念を押したおかげか萩村さんのほうとしかやりとりしないおかげで激しい勧誘はされなくて済んでいるから今のところ無害。

とはいっても1、2週間に1回くらいってわりと多いんだけど「ライブとか撮影とか見に来ませんか?」っていうお誘いも来る。

当然ながらお断りしている。

誰が人混みにいくもんか。

僕は元引きこもりのニートだぞ?

行ったら最後、子役の契約書にサインでもしなければ帰してもらえなさそうだし。

だけどいざとなったら親戚以外でこの状況をどうにかできる……可能性のあるところ。

まさに駆け込み寺だな。

対価は僕のアイドル化だけ……今の僕が拉致監禁虐待の末の孤児経由の養子になって前の僕が悪逆非道な行いをした男ってことになるよりははずつとマシだ。

こういうコネクションは大事だから忘れられないようにって返事はしておいているけど最近はやつと面倒になってきた。

だけど毎回おんなじように返していたら完全に興味ないってバレるしなあ……なんともしがたいところ。

たぶん、うっかりでいちどでも返事を忘れてそのままって感じになるんだろうけど。

「む……」

届いたメールにはいつも通りに添付でチケットが添えられている。

関係者席らしい。

バーコードと一緒にそう書いてあるし。

っていうか今つてすごいよね。

スマホを見せるだけで良いんだから。

あ、飛行機とかもおんなじか。

昔とは違って便利だよなあ。

でも添付のチケットはきつと今井さんの仕業。

毎回わざわざそういう席を取っておくことはそうに違いないんだ。

……これって毎回お金かかっているんだよな……？

いや、それも織り込み済みっていうのは知っているけどさ。

ちよつとは悪い気がするし……やっぱり1回くらいは行っておくべき……？

そういうものなの……？

社会経験が無いからなんにも分からない……。

「……………」

ぶんぶんって頭を振ると髪の毛がふわっとひろがって良い匂いが充満する。

シャンプーとコンディショナーと甘い体臭の混ざった匂い。

いやいや……行ったら最後に絶対にそのまま引きずられるって。

人前に出るなんて何があってもごめんなんだ。

僕が頼りにするとか、ほんつとうにどうしようもなくなったときしかありえないもん。

そうでもないと職歴皆無なニートなんて続けていられやしないんだから。

14話 春↓夏 3/3

ようやく。

ようやく……。

「晴れた——……暑い」

ようやくと梅雨が明けて夏になったらしい。

4時台から明るくなってきて朝日にきちんと起こしてもらえらあわせ。

幼女だろうがニートだろうが虫けらだろうが糸くずだろうが嬉しいものは嬉しい。

明るさの代償に外はうだるようになって湿気が相対的にマシになつてセミが朝から晩までうるさくなる。

嬉しさでつい準備もそこそこに家を出て夏な朝を20分くらい歩く。

最近は半強制的な引きこもりモードだったから気持ちいい。

「……………」

でもその辺のお店のガラスに映る僕の顔は不満そう。

だってもう服は下着から順に汗を吸い始めているんだもん。

気持ち悪い。

空気がまとわりつくあの感じ。

梅雨のそれとはまた違うヤな感じ。

そりゃまあ前みたいに「男」って感じに汗臭くはならないけどさ……。

っていうかお風呂に何日か入らなくても平気ってどうなんだろう？

新陳代謝が綺麗にできる子供だから臭くならないのかな？

いや、でも小学生でも汗臭くはなつた気がするけど……うーん。とにかく夏は充分に楽しんだ。

所要時間は30分だ。

お手軽だな。

そんな僕はさっさと引き返ってきて家の中へ。

床に着かないようにって気をつけながら下着以外をすすると替えていく。

服を脱ぐたびにエアコンの冷たい風が肌から熱を吸い取ってひんやり心地。

「あ——……」

ぐくらく。

「……………」

いやいや。

せつかくなんだからもうちよつと外へ出よう。

もうちよつと涼んでからだ。

◇

ときどきごくたまにたまーにだけ女性用の服に慣れるための練習ってことで家を出るときはいつもの男装……野球帽にパーカーにズボンにリュックつていう少年らしい格好をしておいて、繁華街のあらかじめ調べておいたビルの中のきれいなトイレの個室で女の子の服に着替えるときがある。

つまりは女装の練習だ。

けども肉体的にはむしろこつちが正常。

よつぽどに気が向いたときで、かつ他に予定がなくて着替えを持ち歩いて疲れ過ぎなさそうなきだけ。

玄関まで来て「やつぱりいいや……だるいし」ってなって引き返すのも多いから勢いも重要みたい。

もう通算で4回くらいはしたんじゃないかな？

外での女装。

とつくに女な幼女だけど念のためについて「女装 外 ばれない」とかでがんばって調べたんだ。

まだ女性用のトイレに入るのには抵抗感があるし、そもそも入るときには少年の格好だしとこれまた困ったことになるから上の階の人が来ないような共用トイレが狙い目。

どうしても空いていなければ諦める口実になるしな。

そのままの格好で適当にぷらつとして適当なものだけ買って帰る。そんなこともある。

どうしてもだめでもどうせニットなんだ、何年かかけて慣れればいいんだしって気楽に。

何事も気楽なのが大切だって最近の本で読んだし。

最初は「外で女の子の服を着る」って意識しちゃって心臓がばくばくして着替えるだけで汗をどばどばかいて手が震えて「やっぱり今日は調子悪いみたい……」って帰っちゃったりしていたものだけど、今日くらいになるともう平気だ。

目立たない服で出かけて出先のトイレでいちど服を脱いでから女の子らしい服装に替えるっていうのにも慣れてきた感がある。

「ぬぬぬぬ……」

だから僕はこうしてトイレの中で気張っている。

けど駄目だった。

「はあ……」

いそいそと着てきた服をリュックに詰めてがらがらとトイレから出てとぼとぼとその辺の外が見える系のガラス張りの壁に近づく。

背が低すぎて鏡を見て全身をチェックなんてのは物理的に高さが足りなくてできないもんだからこうして見るしかないのが悲しい……。

幼女が主体的に使用することを想定していない設計者の怠慢だ。

いやまあ共用トイレで着替えとかいうのは駄目なだけだね。

必要な人が使っていないんだったら良いよね？

リュックの中は湿度が高めだ。

着て来た服がここに来るまででちよつとだけじとつとしているリュック内の感触を思い出しながら、ガラス越しに町を見下ろしながら細かいところを直す。

夏休みで肉体的な同世代が多い時期だけどあまり目立つのもよくないし……っていうわけで今日は無難に下条さんに選ば「され」た流行りだっというシャツとスカートの組み合わせ。

スカートなんて絶対やだって思ってたけど風が吹くのならばボンよりもずつと涼しいのがいい。

「♪」

冬は絶対に履かない。

電車の風物詩だもんね、寒い中ふとももむき出しでじつと耐えてる女の子って。

で、こういう無難な服を持ってきたのも計算ずくだ。

このくらしい年の女の子は……いや子供はみんなそうか、だいたい母親に選んでもらっているだろうしディスプレイで似たものがあったし、髪の毛と全身のカラーリングさえ無視すればどこにでもいる年相応の……できれば中学生の女の子に見えると思う。

多分。

夏ってことでつばがぐるんと広い帽子もどんな格好にでも合うしな。

未だに慣れない人からの視線を切りつつそれでも見られていることを意識しながらの女の子の格好……女装の練習にはぴったりなんだ。

この帽子、本当に便利。

視界が極端に悪くなることを除けばそのほとんどが気にならなくなるし、滅多なことでは顔も見られないしな。

見上げたときだけ、つまり僕が見せたいときだけっていうのはとてもいい。

快適。

パーカーっていうこんな真夏でも必需品なアイテムが使えないし日の光でよけいにつやつやして目立つだろうこと間違いなしな銀色の長髪を隠せない中で普通の格好をするんだから、こうでもしないとな。

いくら夏休みとはいっても平日の午前でお店もまだ開きはじめてこの時間帯だ。

繁華街を避ければ厄介ごとにも巻き込まれないだろう。

そう思った僕は暢気に歩き出した。

◇

なるべく人通りが少なくて日陰の多い道を選んで歩いて、この体だとそこそこの距離にある広めの運動公園に着く。

もう疲れたけどまだまだ大丈夫。

この体は体力が無いんだけど休んだら案外動けるってのは把握済みだ。

おとといから毎食何口分かずつ多めに食べてきたし汗拭きタオルも替えの下着も手元にある。

どうしても疲れた場合に備えてタクシーの番号も登録済み。

「よしっ」

これなら梅雨でさびついた体をほぐすついでにちよつとは鍛えられそうだ。

せめて基礎的な体力だけでもつけないとこの先が思いやられるしな。

所詮は子供だからたかが知れてるけど、子供だってインドアとアウトドアでははつきりと運動能力に差が出てたはずだし、今からでもまだ間に合うはずだ。

……筋トレしてみようってして腹筋がいちどもできなかつたのはいい思い出。

今でもせいぜいが4、5回止まりだけど0よりはマシ。

ま、適当にゆつくりとトラックをぐるつと歩いて回るだけなんだし、たいしたことじゃない。

どれだけががんばったとしてもせいぜいが数キロだろう。

この体で10キロも歩いたら数日は筋肉痛と疲れとで寝込むだろうしムリは禁物だ。

前の、一歩一歩の歩幅が段違いの体だったらジョギングとかでもつといけたんだけどなあ……つくづく脚の長さが悔やまれる。

先は長い。

気楽にいこう。

「ふ——……」

おっと。

ここに来るまでですでに息が切れ始めているし脚もときどき痛くなるからゆる〜っくりと。

こう、だるだるって歩かないとちよつとやばいかも。

早速に今の僕が幼女だつて認識させられて鬱々する。

「……………」

自然の中って良いよね。

町中も良いけど人と射線的なものが交差するって思っただけでストレス感じるヤワな心してるし、半径1メートル以内に人が居るとなんだかやっぱりストレス感じるしでのんびりできないし。

それに比べてこういう広い運動公園的などころとか旅行先の観光地、それもバスとかロープウェイとかで行く場所とかだと人の気配が少なくなつて素敵。

それにしても人がいないなあ……素敵だ。

いや居はするんだけどみんな町中に比べて距離があるし人の数そのものが少ないし、そもそもあんまりじろじろと見てきたりはしないから快適。

帽子のつば越しでも視線っていうのはなんとなく感じるよね。

不思議なことに。

いるのもほとんどはスポーツウエアなスポーティかお年寄りばかりだしな。

おかげでぼーっと歩いてもぶつかられる心配もないし迷う心配もない。

疲れてきたとき用に座る場所をちらちら探しながら歩くめんどくささもない。

精神的にとつても楽だ。

こんなことならもつと早く来ればよかったかも。

だけどここまで来るだけでも疲れるからなあ……よつぽど気合いが入っていないと難しいものがある。

やっぱり僕の根本はどうしようもない根暗で怠惰で引きこもりら

しい。

人間ってのはそう簡単に変わるものじゃないってのは男から幼女に変貌してよく知っている。

諦めよう。

地味に肩と背中が重くってじつとりとしていた、服を詰めてきたリュックもロッカーに預けて身軽になったしでさっさと歩く。

自転車とか走る用のとは違う歩く用のトラックに入ると両側が高い木で囲まれてきて涼しい木の息が吹いてきて木陰でさらに涼しくなつて蝉の声が降ってくる。

……夏だなあ……。

太ももから腰までが一気に涼しくなつて気持ちがいい。

……うん。

男に戻つても夏は短パンとタイツにしよう。

スポーツウエアにすれば町中でも目立たないだろうし。

あとは寝る前の「起きたら戻つてますように……」っていう祈りが通じるかどうかだな。

◇

「あ——……」

疲れた感じの声が僕のちっちゃい口からあーっと出ている。

だいぶ歩いた。

体が重い。

そもそも脚の感覚がなくなつてきてからだいぶ経つ。

あんまり履かないからおニューのスニーカーもまだまだ硬いしな。

けど、たったの4キロもしないうちにこれかあ。

先は長い。

まあ子供の足ならこんなもんだらう。

男の体でのジョギングなら結構楽でサイクリングならかなり楽な距離なんだけどな。

でもまあ一気にこの道のりだ、この体にしてはそれなりどころかか

なり歩いたっていいだろう。

下着はぱんつの中の布までぐっしよりだしものすごくだるいし。そもそも家からここまででそれなりだしな。

1時間のウォーキング、ここまで大変だとは………：気楽にいう。

と、汗が髪の毛伝いに染みこんでいくのを感じながら自販機のそばへ惹かれていく。

体の疲れか、それとも髪の毛が汗を吸っているせいかわからない。重いし。

こんな暑くて疲れたあとはぐーっとビールとか炭酸割り……はダメだから冷たい炭酸飲料……も泡がダメでただの冷たいだけのものしか選択肢がないのが悲しい。

この体、アルコールもおおいに受けつけはするけどしゅわしゅわだけがダメだからなあ。

開けたまま放っておいて炭酸を薄くするかしないと飲めないのが欠点だ。

なんで炭酸だけがダメなんだろうな？

他のものはみーんな前るときとたいして変わらないのに。

そもそもこの体じゃ買いたくても買えないけどな、アルコール。

悲しいことに。

旅行のときとか以外じゃ昼間っから外で飲んだりなんてもともとしなかったけどさあ……こう、呑めないって思うと呑みたくなならない？

そういうのを楽しむんだったらせいぜいがビアガーデンとかいいかも。

騒々しいし僕には合わない場所だけだな。

「ふんっ。……ん——……っ」

そんなことを思いつつ自販機に向けて精いっぱい足先から指先までを伸ばしてみたけど、それでも上の段の飲み物を選べないっていうのを今さらながら知ってもやっとしつつ、いちばん下の段の適当なジュースをがこんって買う。

この体、貧弱だからなあ。
低血糖にでもなったら困る。

僕は甘味はダメだけど普通のジュース程度なら平気だ。
あとはカクテルもいける。

飲んだら口直して苦いのか辛いのにするけど。

飲み物を選んでいるうちにお腹が空いてきていたのに気がついた。
時計を見てももうお昼からそれなりだ。

……………準備は早かったんだけどなあ。

やっぱり移動でどうしても時間がかかるんだ。

ちまちま休みながら歩いてたしスマホも見てたしこんな時間になつてたのに気がつけなかった。

往復で自転車も使えないしな。

物理的に足が届かないどころかそもそも座れないっていう……。

自転車にも乗らなくなって3ヶ月か。

そろそろタイヤがぺたんこになっているかもしれない。

安いのでもいいからやっぱり子供用の自転車とか買っておくべきだろうか？

と、つま先で立ってぎりぎりボタンを押して買ったジュースを「しゃがむのは楽だな」なんて思いつつ冷たいのを取り出して飲むと思つて気がついた。

「うげ……」

これ、プルタブが硬いやつ。

つまりは僕の敵だった。

指の力すらない僕にとつてプルタブってのは天敵だ。

珍しいのを選ぶようになったのが悪かったか。

今の僕は爪の先まで柔いらしい。

すごく弱いつていうか薄いつていうか……爪を切るときの音がぜんぜん違うしな。

だからいい感じのプルタブならともかくとして普通のプルタブ以上の悪い感じの缶はなにかの道具がないと開けられない有様だ。

僕は自販機の前でぼけーっと立ち尽くす。

「困った」

困った。

僕は困っている。

無理やり開けて万が一のことがあったらいやだし。

大丈夫だとは思うけどこの弱々しい体だしなあ。

そんなことを思っただけを思い出して玉ヒユンの感覚。

玉ないんだけどそれに近い感覚。

あれは男女共通のものだったのか……まあおんなじ人間だしな。

でも、近いって言っても前するときよりもうちよつとうしろの……おしり近くで感じるんだけど、なんて呼べばいいんだろ。

尻ヒユン？

股ヒユン？

「……………」

なすすべなく缶に詰められた冷たい液体を思っただけでぐくりと喉が鳴る。

……小中学生じゃあるまいしバカな考えをわきにおいておくとして、さてどうしたものか。

どこかで適当な硬いカード的なものを手に入れるか通りがかる大人を待つか。

いや、別に学生とかでもいいんだけど。

僕より爪が強そうな人だったら誰でも。

つまりは大半の人間だ。

だから僕は大半の人間以下ってことになって悲しい。

だけどころいうときにはこの見た目が役に立つ。

幼い子供でしかも女だっていうのは人の警戒心をゼロにするらしい。

何か話しかけても、よつぽど忙しそうにしている人以外はたいてい立ち止まって最後まで聞いてくれるしな。

「よし」

誰か適当な人に開けてもらおう。

そう思ったら今度は一向に人が通りかからない。

日陰でのベンチを選んだからかちよつとトラックから逸れている
せいか。

ふだんはあちらから寄ってくるくせにいざ用があるときには姿が
ない。

なんてことだ。

両手はすっかり冷たくてひんやりしていた水滴もただの水になり
つつある。

「……………」

しかたなくのこのことトラックのほうへ歩く。

いくら少ないとは言っても視界には何人かは居たんだ、こうして
ちよつと待っていれば……と、来た来た。

僕の視界の隅……上の隅……には人のシルエット。

よし、ここは新技で行こうか。

なあに、ここで通りすぎるだけの人だから遠慮は要らないしすぐに
忘れてくれるはず。

「んんっ」

喉の奥を調節して、高めかつちよつとだけ甘えた感じの声で営業用
の笑顔を作って。

さらに小首をかしげつつ上目づかいを演出しながら両手を差し出
すようにして。

うむ。

これで見えた目どおりの幼女な演技は完璧だな。

「すみませえん、あの、このフタ、開けられなくって。開けて欲しい
んです」

僕の喉から信じられないくらい甘えた声が出る。

家で散々練習したから耐性は着いている。

けど甘えられたら男の僕なら何でも買ってあげたくなる声だ。

ロリコンとかじゃなくったってたいいの人なら絆されるだろう
声。

僕もがんばればできるじゃないか。

これなら舞台とかに出てもイチコロだろう。

なんてどうでもいいことを考えながら視線を上げてみる。

……その人は事務職の格好をした女性でスニーカーを履いているらしい。

表情筋と喉の筋肉をがんばりつつ顔を上げていった先には——ワイシャツの上の膨らみの上にはどこかで見たような顔があった。

「え？」

え？

……え？

あ。

あの、この人って。

「け、ど……………」

何を言おうって考えてたのか分からなくなって僕はフリーズする。僕からたったの1メートル足らずのところまで立ち止まってくれてしまったのは——思い出したくもない、あの人だったらいいから。

「すみません勘違いで」

「……………あら！　あらあら、かわいらしい格好だと思ったら響さんじゃないですか!!　わー、かわいい——!!!」

その声にびびって後ずさるも遅く、悪魔さんはすつと歩いてきたかと思うとかがんできて僕の両手を缶ごと包み込む。

やめて。

離して。

お家に返して。

「お久しぶりです！　お元気でしたか!?　おひとりで運動ですか？

こんなに暑いのに偉いですねー！　夏休みのトレーニングとかでしようか？　それにしてもこんなところでお目にかかれるなんて思ってもみませんでした！」

うん。

僕もまさかかって思った。

なんで居るの……………?

「あ、このプルタブですね？　硬いですよねえこういうの……………けど私なら大丈夫です！」

僕は大丈夫じゃない。

10秒前の僕の愚かな行動を無かったことにしたいって願う。

どっか行つて？

「あとそのスマイル……とつても素敵です！ その甘え方もとってもキュートで、私……やられてしまいました!! メロメロです!!」

そのまま気を失つてくれたら良かったのにな。

缶を取り上げられた代わりに手を握られて、さらにはがっちりとホールドされた。

このまま走つてでも逃げたいんだけど近距離で話されているからうまく声が出ないし、そもそもびっくりしすぎているのと疲れが一緒に来て体がうまく動かない。

た、助け……。

「……………」

声が出ない。

なんてことだ……。

今井さんは立ち上がる。

僕の腕が上にちよつとだけ引つ張られる感覚。

顔はもちろん見えない。

だつて身長差は圧倒的なんだ。

「今日もこんなに暑いので私もちよつと休みたいところだつたんですっ！一緒に少し休みましょう！ 久しぶりですし！ あ、あちらのベンチがちよつと木陰でよさそうですね！」

「あ」とか「ちよつと」とか言おうとしながらぱくぱくしているうちにずるずるされて座りたくなくなったところにとんと座らされる。

もうダメだ。

「ついでに私も喉が渇きましたしすつきりしながらおはなしましたよー！ 少し待つててくださいね！ どれにしようかなー？」

持っていかれた。

僕のジュース。

返して？

「……………」

悪魔もとい鬼さんはあのおときとなんら変わることはない強引さ。僕に背を向けながら「今日は暑いですねー」とかものすつごく意味のないことを話しかけてきながら選んでいる様子。

この前は気がつかなくなかったけど、髪、意外と長かったんだな。まあずーつと僕の顔を見続けていたしな、あのおときは。

今日は後ろで縛っているらしくって彼女が左を右を見るたびにひと房がぶんぶんしている。

犬みたいだな。

なんとなくだけど。

このスキにともちよつと考えて試そうとしたけど、なんと足がすくんでいる。

つていうか、腰が抜けている……？

「……………」

しゅるって髪の毛がベンチに落ちる。

あ……。

髪の毛まで見られた……しかも今はスカートじゃん……。

「おう……」

この前よりも格段に悪い状況にとうとうメンタルまでがメルトし始める僕。

僕はもうおしまいだ。

……………どうしようもない状況だけど、1個だけ学んだことがある。

帽子って視線を切ることができて注目されにくくて僕自身もすごく楽だけど……こうして知り合いになってしまった人を先に見つけて逃げるってのができないんだっていうとってても大切なこと。

索敵範囲が狭いつて前から分かっていたのに気づかなかった。

「……………」

せめて。

事務所とやらに連れて行かれそうなきに備えて通報画面にはしておこう……。

そうすれば、気がついたら衣装を着て人前にほっぴり出される未来

だけは回避できるだろう。

けど……ああ、防犯グッズはリュックの中。

肝心なときにことごとく駄目な僕は打ちひしがれるしかなかった。



視界がぐるぐる回る。

ぐるぐる。

「はあ——……」

ぐるぐる。

「あ——……」

ぐるぐる。

「ああ——う——……」

ぐるぐる。

おっと、ベッドから落ちるところだった……危ない危ない。

「ふう……」

なんにも考えないでただ体に任せていると、今はもう味わえない冷えた炭酸をぐつと飲んだ感覚とか……熱いお湯にぎぶつと浸かった感覚とか疲れたあとにぐーつと伸びをする感覚みたいな、体の底からの声が高くて柔らかい声に変換されて出てくる。

なんにも考えないで本能に任せた声。

今の僕は真正銘の幼女なんだ。

だからもういつかいごろごろ。

「あ——……」

飛びそう。

予想以上の気持ちよさだ。

枕を全身で抱きしめていつも通りに下着姿で毛布を被ってごろごろするのって最高。

クセになりそう。

もうさつきからずーつと目は閉じたままで手足の力だけで動き続けて口からは際限なく声というよりはもはやただの音とかしたなにかが漏れ続ける。

お腹の奥から口先までただの楽器になった気分。

酔ってもいけないのにここまで気持ちよくて頭も体もぼーつとす
るっていうのはこの上ない快感だ。

することがなくなったりするときにはふと思いついて小さい子どもがよく
やっているみたいに大きくなって柔らかいものを抱きしめてみたらどう
かなって、実際に試してみたけど想像以上だった。

クセになりそう。
とつくになっっている。

重くなったりたまぶたをがんばって広げてみれば……もう30分以上
はこうして何も考えないで何もしないでただただ感覚に浸っていた
みたい。

これ以上時間を無駄にするのも貴重に使うのもなかなか難しいだ
ろう。

頭と体の中がからっぽだ。

ぎゅーっと枕を全身を使って抱きしめてみると肌という肌から純
粋な気持ちよさっていうものが伝わってくる。

「うあ——……」

なんていうか湯あたりしない温泉に浸かっているみたいなきもち？
そう、ちやうど長湯のための寝湯みたいな温めのお湯でぼーつとし
ているときみたいな。

あるいは寝落ちの寸前ですっごくとろとろしてる感じ。

このまま続いているとダメになりそう。

とつくにダメだった気がするけどさらにダメになる。

いやあニートな上に幼女になったからともダメだったかあ。

「う——あ——……」

でまかせで口を動かしてみたりする。

はじめのころは「こんな大人にもなつて……」っていう羞恥心と常
識とで吐息程度だったけどすぐに諦めた。

だって気持ちいいんだもん。

なんていうか安心するっていうか？

なるほど、小さなころはこういう感覚で落ちついていたのか。

とつくに無くなっているけどきつとあつただらう幼い頃の記憶。

とにかく気持ちいいんだからしょうがない。

けど、ただの枕でこれなんだから大きな人形とかクッションとか抱きしめる用のをぎゅーって手と足を使って抱きしめちゃったら僕はどくなっちゃうんだろう？

「うあ——あ——……」

ぶごろごろをひたすらに繰り返す。

髪の毛が顔に着くのも気にしない。

ここまで来るともはや「精神年齢が……」とかいう気持ちはかけらも消え失せている。

酒の席なら多少ハメを外してもみんな大目に見るんだ。

だったらこうしているときくらいはいいだろう。

僕は酔っても少し気持ちが高まる程度だしどうせ誰が見ているわけでもない。

と、ふと思いつく。

これ、ちよつと前に流行っていた人をダメにするなんとかってやつならどうなるんだろう……？

確実に、これ以上のなにかが来たら確実にダメになりそう。

ぶごろん。

「いえ——……」

なんだかテンションがおかしい。

振り切れている気がする。

お酒を呑んだときでもこうはならない。

けどもうなんでもいいや。

今の僕は幼女なんだから幼女らしいことをしたって良いじゃないか。



「……………」

さて。

幸せな記憶に浸っていたけどそろそろ現実に戻ろう。

見たくもない現実に。
いつかはその時が来るんだ。

「……………」
手元には、頷くだけで返事をしているように見せかけるためにつてちびちび飲んでいるうちに半分を切つてぬるくなつたジュース。

木漏れ日しか差さないひんやりした日陰でひんやりしたものを飲んで少しばかり座つていてだんだんと暑さが引いてきた体と、さいわいなことに足の裏までしつかり着くくらい低い木のベンチのおしりに響く硬い感覚。

そして隣からは鬼もとい今井さんの気配と声。

「あい変わらず僕は逃げられない。」

逃げられないからトリップしていた。

でも戻つて来た。

戻つて来たから困つてる。

困っている。

困っているんだ。

どうしよう。

どうしようもない。

世界は残酷だ。

「そのときのその子の顔がまたとても嬉しそうで達成感にあふれていてですねー。あのようすばらしい笑顔を見るとこの仕事をしていて、一緒にがんばってきてよかったなって感じるんですよ！ ふだんは地味な練習を遅くまで繰り返すのを続けてきただけあつて上手くいったときの感動はまたひとしおなんです！」

「そうですか」

さつきから似たようなことを言い続けるのに一向に飽きる気配がない。

「それですね、先日の審査で起きたことなんですけど……」

「……………」

目もほとんど合わさないのに平気そうにしながらずーっとこんな感じだ。

いや、僕がマジメに聞いてなくて返事も「そうですか」オンリーなのに気がついてないだけだこれ。

まあ今日はこの前みたい「そのまま連れて行ってでも！」っていう殺気みたいなのは感じないし無理やりっていう様子でもない。

ちよつと拍子抜けだ。

せつかくポケットに入れっぱなしで邪魔なアクセサリーと化していたブザーが役に立つかもしれないなかつたのに。

無いと思つてたらこんなところにあつたのかつて言うの、良くあるよね。

使つたら確実に騒ぎになるし……つていうかそのためのものなんだけど、とにかくそうならなくていいことではあるんだけどさ。

でも、この変わりよう……もしかしたら萩村さんに言い含められたのかもしれない。

僕が嫌がつているつて自覚したのかも知れない。

そんな奇跡。

……この人がそれを素直に聞くとは思えないんだけどな。

座っているのもベンチの端と端だし、一応はふつうの知り合いレベルの常識的な距離は取ってくれているし飲み物のおかげかときどき静かになってくれるしで害は少なめ。

これくらいのマイルドな勧誘なら話だけは聞いておいてもいいかもしれない。

萩村さんも丁寧ではあるんだけど……なんていうかこう事務的すぎるつていうか、慣れているはずなのにいまい僕へどこまで話すか迷いながらつて感じでもどかしいときもあるしな。

ふつうに接してくれたなら男同士つてことで気楽なんだけど今はガワがなあ……。

あの人もこのご時世でずいぶんと歯がゆい思いをしているに違いない。

だってあの体格の男だもんなあ。

僕に近づいただけで通報されそくだもんなあ。

身長差倍だもんなあ。

かわいいそうに。

今度会うことがあつたらもうちよつと話聞いてあげよう。

そんなことを勝手に思ったりして時間が経つ。

「それでですね、……………」

「……………」

ふむ。

よく聞かないようにしてるけどどうやらアイドル活動とやらの現場の話とかに切り替わってきたらしい。

僕の反応がオートになってるっていい加減に気づかれた？

なら次は。

……………。

あ、あれ……………？

普通に……………本当に普通におもしろいな。

ドキュメンタリーみたいな感じに話してくる。

あのとときのきんきん声とはまた違った落ちついた声を聞いているとまるで憑き物が落ちたような印象を受けるくらい。

さすがの話術。

だけどこれは本当にあのとときの悪魔のような女性なんだろうか？

別人じゃないのか？

そう思うくらいだ。

人の印象ってこれだけで変わるんだな。

いやいや、「なーんて思っていたら……………」ってこともありえるから慎重に警戒しよう。

手法を切り替えてきただけかもしれないし。

人はギャップに弱い。

僕も弱い。

体験済みだし。

初対面でのあれから完全に方向性を変えて今度は興味を引き出そうとしているだけかもしれないし。

危ない危ない。

危うく二ートからアイドルへと墮ちる……………かもしれないところ

だった。

ニートはニートだからこそその存在意義を持っているんだ。アイドルなんかになってみる。

思考まで塗りつぶされちゃって僕は僕じゃなくなるんだ。

「……そういえば響さん。先日は大変失礼しました」
ん？

さつきまでの落ちついた感じがさらに落ちついている。

なんか落ち込むことあった？

僕が目合わさないこととか生返事なの以外で。

そう不思議に感じて顔を見てみれば……なんだか落ち込んでいるような？

静かにさえしていてくれるのなら僕としては理由なんかどうでもいいんだけど。

「あのときはいつになく……私の『勘』が働いてしまって抑えたくても抑えられなかったんです。迷惑でしたよね……自覚はしてるんです。私、ああして『勘』が働くと歯止めがきかなくなつて……あのときも響さんとお別れしたあとでひととおり騒いで疲れ切つてから初めて我に返って思い出して気がついた次第で。萩村からは響さんが不快そうな顔つきをされていたって教えてもらいました。面目ないです」

両手で持っていたペットボトルをことんとベンチに置いて姿勢を正した今井さんは………なんと、軽くとはいえ頭を下げていた。

すぐに上げたけど彼女は成人している。

こんな幼児に対して真正面から頭を下げるなんてそうそうできないこと。

……いきなり何言い出すのこの人。

困るじゃん、僕が。

困るじゃん、そういうのってさ。

対人関係経験が引きこもってリセットされて限りなくゼロに近いんだからそういう気まずいのやめて。

一応表情も声も本気で謝っているように見えるしおちやらけた雰
囲気は皆無。

僕にはウソを見分けることなんて到底できないから演技されてい
たらどうしようもないけど……ここまでの変わりようが気にはなる。

それに、その『勘』ってやつ。

なんか意味深なワードに反応した僕。

なんかこう「魔法さん」に近い印象だし。

彼女が頭を下げてて顔が少しだけ近づいた拍子に気がついた。

どうでもいいんだけどやっぱり社会人だとお化粧するんだなあつ
て。

最後に多くの女性を日常的に見ていたのが大学生のときだったけ
ど、あのときはまだほとんどしていない人も少なからずいた記憶があ
る。

ド派手なものも結構いた気がする。

まあ他人は他人として認識していたからよく覚えてないけど。

でもお化粧がぱつと見て薄い感じなのはいいことだ。

あ、毛先きれいにしてる。

毛先つてすぐにほつれるよね。

僕も最近枝毛チェック忘れていた気がするし帰ったらお風呂のと
きに見ておこう。

じゃなくって。

「いえ、過ぎたことなのでもういいです。 萩村さんに止めてもらい
ましたし。 けど『勘』……ですか？ そのせいで僕を執拗に？ あ
の群衆の中で？」

「あう」

さりげない牽制を放ちつつ聞いてみる。

勘。

女の勘ってことはないだろうしこの前みたくオーラとかそっち系
かな？

女の人だし占いとかで出てくるワードが好きなんだろうけど。

でも、日常でそういうのが出てくるとしたら……同世代だとしても

女の人の会話に溶け込む自身なくなっていくなあ……。

あれでしょ？

「分かるー」って心の底から納得しないと裏でえげつないくらいに叩かれるんではよ？

女社会って怖い。

男で良かった。

男って単純だから楽なんだよね。

僕が単純の代表だからよく分かるんだ。

「そうなんです。 えっと、こういうの、経験したことのない人には分かってもらいづらくってうまく表現できないんですけど……理解しやすい、してもらいやすいかもしれない表現で『勘』って知り合いには言っています。 誤魔化してるとかじゃありません」

なんだか遠い目をしながらぐいっとしたペットボトルから、ぐっと喉を鳴らす今井さん。

汗が喉をつつーと流れている。

ああ、そういうえば女性は喉仏ってこんな感じではほとんどないんだっけ。

下から見上げて初めて見えた気がする。

萩村さんのおつきかったからなあ。

あ、喉仏が。

前の僕のは……まあ標準的だったと思う。

もうあんまり覚えていないし写真を見ても証明写真しかなかったから確認できなかつたけど。

でも特に高くも低くもなくってその辺に居る男って言う感じだったからどうでもいっつか。

今井さんの口からの「ぶはあっ」っていう気持ちよさそうな声を聞いて僕もジュースの残りをちびり。

こくとほんの少しずつしか飲めない、なんとかしたいこの体。

この生ぬるいって言うよりはあったかくなっているジュースが憎い。

「うまく。 うまく言えないんです。 けど別の言い方をするなら第

六感とかインスピレーションとか……知ってます？ あつ、中学生なんですよね、ごめんなさい……そういう感じのものなんです。ほんとうに直感というか。ちょうど視線を感じて顔を上げたら誰かと目が合ったあんな感じのものです。妄想とかじゃないって思いたいんですけど……私だけが感じる感覚なので。あの、済みません、分かりにくくて」

ただたどしくなるのがやけにリアルでとりあえず信じてみるけど、ああ、それなら分かるかも。

僕は霊感とか超能力とか魔法とか信じていな……かつたけど、今でも魔法さん以外は信じてないけど、人の視線なら嫌というほど感じてついさっきにひどい目にあつたんだしな。

今は魔法の存在までしつかりと毎日この身で確認しているからな。直感というものがあつたとしても魔法よりかはずつとよつぽど現実的だし。

交換してくれないかな。

君なら……えつと、今の僕くらいの歳の少年になれそうだよ？

魔法さんの性質的に、多分。

「なんとなくでも結構です、分かってくれますか？」

「なんとなくでしたら」

「よかつた、知り合いには何人か『自分も経験がある』って言ってくれる人もいますけど、たいていは変な顔をされるか笑われるかするだけで……」

だろうね。

女の人同士の話じゃないと「女の人ってそういうの好きだねー」って適当に流すだろうし。

僕ならそうする。

「……私。少し前までは霊感みたいなものとか一切なくって、そういうのを信じていなかったんですけど……働き始めてしばらくしてからもう何回か。人目を引きつけるなにかを持っていてる人を目の前にすると、こう、どこかのアンテナにびびつと来るんです。あの感覚はちようど……どこか知らない別のところから来るような」なに

かの力』。電波……そういった感覚です」

電波。

電波さん。

そういうことか。

……………冗談だ。

今井さんが頭がばーな電波さんだっと思って思っていたんだけど、この変わりようだしな。

今のぐてつとした今井さんを見ているとあそこまでエキセントリックな言動こそが特殊な、その『勘』とやらによつてヤバい人にさせられていたって考えるほうが自然だと思えてくる。

ハサミが飛び回るのに比べたら現実的だしな。

こうしていれば普通に話しやすい人なんだってのも知った。

「…………この感覚、ほんとうに急に知ったのでまだまだよく分からないんです。分かっていていることといえば、すでに人気が出ている子やスカウトされたばかりでも人気が出そうって感じる子の何人かという感じで。だから、まったく関係のなかった響さんを見たときにこれを感じて舞い上がってしまったんです」

「そうなんですか」

くびりとジューズを最後まで飲みきる。

うん、その勘つてやつは錆びついてるよ。

僕に反応する時点で何かエラー起こしてる。

こんなことを話していても静かだし迫ってこないしで、とりあえずは強引に引っ張っていかないだけで今井さんって言う人は嘘をついたり頭がおかしいっていうわけでもなさそうっていうのは分かる。

演技じゃなければな。

疑い続けてもしようがないんだけどあのときのあれが僕のトラウマになっているんだ。

それくらいは勘弁して欲しい。

……………

多分圧倒的大多数なごく普通の感性を持った、さらに女性って言う

性別の今井さんにとっては気まずい沈黙。

圧倒的少数派な僕にとってははとつても安心できる静寂。

蝉の声とスポーツしてる人たちのかけ声と自転車の音が途端にうるさくなった。

15話 困惑：「勘」 2 / 2

やっぱり外でのんびりするのって良いよね。

隣に座ってなんか意味深なこと言ってた今井さんのことを気にしないです少し楽しんでた僕だけど、事務員さんの格好をしている彼女は軽くうつむいてため息をひとつ。

やっぱり女の子って演技過剰だよな。

けどそうしないと伝わらないのも知ってる。

「……私自身、占いとか。そりゃあ他の知り合いの人たちと同じくらいには好きです。好きですけど、それは盛り上がるからなので別にそこまで信じていたわけじゃないんです」

おや意外。

てつきりJKさんみたいに頭の隅っまでお花が咲いてるかって思ってた。

「なのでこのあいだまでは、この感覚はたまたま錯覚しているだけだと思っていたんです。……けど、その。そこへ響さんが現れてしまったんです。とつても強くなって歯止めが利かない響さんが」

え？

僕のせい……？

僕のせいなの？

なに人のせいにしてるのこの人……？

じとつと見ようとしたら今井さんはハンカチを取り出して首を伸ばして「ふうっ」ってまたため息つきながら首すじを拭う。

なんだかよく分からないけどしばらくぼけーって見ちゃって、そう言えば僕も体じゅうから汗が出てるなああって思う。

僕もタオル持ってくればよかった。

リュックごとぜんぶ預けたのはちよつと失敗だったかもな。

きつとベンチにも汗がぐっしよりと染みこんでいるだろう。

夏だもんな。

前に通ってたジムでも夏はタオル使ったりしたし、今度から外に出るときは持って出よう。

女子的にはハンカチが必要らしいからな。

b y、JKさんが教えてくれた雑誌。

「響さんを見たときのそれはそれほど強烈だったんです……響さんが迷惑そうにしているのにも気がつかないほどに。気がつけなかつたんです。普段は事務所に来るみなさんの体調管理とかをお手伝いしている私なのに。まるで……なにかから体を動かされていような、取り憑かれていたかのような……私を私の外から見ている感覚です」

なにそれこわい。

「あれはかなり。思い返してから気づきましたが……かなり怖いものだったんです」

「そうですか」

けど多分魔法さんより怖くないって思ったら平気になった僕。

帰ったらざっとシャワー浴びてすっきりしたいな。

持ってきた着替えも家につく頃には汗だくだろうし。

「この感覚をスカウトに役立てられるって素直に喜ぶことができればいいんですけど……」

大切そうな話じゃなくなって女の人特有の肝心な話の前後に挟む時系列的なテンションになったから適当に聞き流す。

……それにしても女の子も女性もどうして一方的に話をしていても平気なんだろうか。

これまでの経験で「そういう生き物」だって知っているから諦めてはいるけど、不思議なのは不思議だ。

だって普通会話なんて交代でしょ？

なにか話したいことがあってお互いに話すでしょ？

なのに女の人相手になると途端にそのリズムが崩れてどうしようもなくなる。

大抵は押し込められる。

僕だったら返事が少なかつたらまず不安になってくるのにそういうのは平気らしいし。

会話なんて同じくくらいの量を交互に繰り返していたほうが楽し

いって感じるのにな。

意味のない会話を延々とするのも不思議。

僕はそういう非効率なことはできないからなあ。

まあ人の話を聞いているのは楽だからいいけどさ。

こうして適当に聞き流せるし。

「……………」

脚をぶらぶらさせる。

自分語りをしたいって気持ちはあんまりよく分からない。

体は完全に女の子になっていくけどやっぱり脳みそはそのままなんだろう。

あるいは魂とかの問題なんだろうか。

そもそもそんなものがあるのかは分からないけど。

まあ現実世界で男が幼女に変貌するんだしハサミも物理法則に乗っ取って宙を舞うんだ、魂くらいはあるのかもね。

そう思うとちよつと安心するしな。

だって、この体に入ってる僕は男の魂ってことになるんだから。

「私はそこまで外に出てスカウトする機会もありませんし……最近ほとんどネットですし、ね。私、もともとそんなに積極的な性分でも積極的にする理由もありませんし。……あ。そういうはこの『勘』、今日もうつつすらと働いていた気がするんです。だから響さんに会えたのかも」

ほ？

「……………」

なんだか急に運命論的なことをほざきだした今井さんからちよつと距離を取る。

今さんと僕のお尻のあいだが拳1個分くらい遠ざかる。

いや、僕そういうオカルティックな話はもうお腹いっぱいなんで……………。

「ここに来る前に……事務所に断りを入れてまでなんとなく置きっぱなしだった運動靴を履いて。いつもは同僚と食べるお昼をひとり

で食べてそのあとに歩いて……そうですね、3、40分くらいでしようか？ それくらいあるここへどうしてか歩いて来たくらいなんです。その最中も『そうしなきゃいけない』って気がしていて……」やだなあ、背筋がぞくつと……あ、汗のせいだろうきつと。うん。

でもずっと聞き流していたけどちよつと待って。

それ、とっても怖いものじゃない？

良く平気だね？

そんな勘とかいうものが働いちやったら、僕だったら怖くてびびって引きこもるけど？

間違いなく。

「……今はどうなんですか？ 僕と会ったあのときはかなり大変だったみたいですけど」

僕もすつごく大変だったけどって暗に伝えてみる。

「今ですか？ ……んー、そこまで強くないですね。いろいろな人たちに会つてときどき感じるくらいのもんです。なんていうか『今はそのタイミングじゃない』って感じるんです。不思議ですね」

今度は首をかしげる今井さん。

彼女に釣られて不思議だねーって僕の視界もちよつとだけ斜めになる。

……僕の大変さは伝わらなかったみたい。

でもそういうえば、あのときもやけに「このタイミングじゃないとダメなんだー」とかなんとか言っていたっけ？

まるで洗脳されたみたいな感じなんだな。

いや、熱に浮かされた感じ？

「それに、響さんはああした強引な感じはお嫌いなんですものね」

「はい」

うん、だいつきらい。

「……こうして冷静におはなししていれば、それくらいは私にだって分かります。これでもたくさんの子たちを担当してきているんですから。ふだんはこうなんですよっ」

「そうですか」

「ふだんは」で急にずいっと彼女の顔が近づいて来たから反射的に同じくらい体を反らす僕。

びっくりするしやな気持ちになるから止めてほしいな。

人には入られたくないゾーンってのがあんだって知っていて欲しい。

「響さんはきつと、人から指図されてモチベーションが湧くタイプではないですよ？　ご自身の内から興味があれば自然と湧いてくるタイプ……合ってます？」

「……………」

「あ、これはもちろん私が今思いついたわけじゃありません。　萩村と話していてそうだろうってなっただけです」

勝手に近づいて来て勝手に人の内面を探って勝手に近かった顔が離れていく。

……うん、やっぱり元の僕よりも年下だと思う。

お化粧も汗で結構落ちてたからはつきり分かった。

慣れている様子だし、新卒で働き始めて2、3年ってところかな？

そんな推測をしつつも萩村さんっていう安心できる名前が聞こえてきてそういうことかって納得。

会って大して話してもいないのに、こんな短時間でそこまで探られたってことになったらもう二度と、どんな手を使ってでも会わないようにしていたところだ。

だって怖いもん。

サイコメトラーとか怖いじゃん。

ホラーとは別の方向性で……ほら、こうやって考えてることが丸裸なのはヤだし。

「もちろん。　もちろん私たちはいつでも響さんを歓迎していますよ？　先ほどから真剣に聞いてくださっているみたいですし……どうですか？　ちよーつとエアコンの効いたお部屋にでも……」

「結構です」

「ふふ、冗談ですよ。　私ももうすぐ戻らなければなりませんし」

「……………そうですか」

何がおかしかったのかくすくす笑いながらペットボトルを一气飲みする今井さん。

のどがごきゅごきゅ鳴っている。

……目つきとかが冗談には見えなかったんだけど……思い直してくれてほっとする。

一瞬だけ声も視線もガラッと変わっていたし、肝心に捕食者の目だった。

たぶん安全にはなっているんだろうけど油断はできない。

危ない危ない。

この人はやつぱり危険な人だから警戒を解いちゃダメなんだ。

僕はスカートのポケットの中で汗ばんだブザーを握りしめ直した。

◇

「……そうですねー？ ……くす、それにしても今日の響さんはおしゃれ、していますよね。シックな色合いですしきれいな髪の毛とてもよく似合っていますっ。あのときみたいなストリート系でボーイッシュに……あ、それで髪の毛もしまっていたんですね？ そのこだわり、やりますね……なのもかっこよくて好きですけど今のように可憐な感じもまたお似合いです！」

「どうも」

話が長いから聞き流す。

「……どうです？ 読者モデルなんかから」

「お断りします」

「……響さん？ なんだか雑になってきていませんか？」

「気のせいです」

「ほんとうでしょうか……」

「ほんとうです」

ばれてきた。

まあいいけど。

でもボーイッシュなストリート系……そういうファッション用語になるのか。

いつもみたいにぼーっと別のことを考えたり返事に悩んだりしないで即答を続けていたらそういう印象に映ったらしい。

会話というものはいまいち難しいもの。

けど、話していて分かってきたことがある。

女性の言う「かわいい」「かっこいい」とかいう褒め言葉、こういうものは「とりあえず対象の人がマイナス評価じゃないよ」「って伝えるためのだけのもの。

文脈次第では多分ぜんぜんかわいくなくても「かわいい」って言うんだらうって。

中には「自分と比べて」って人もいるらしいけど、ひとまずは最近会った人との会話ではそういう雰囲気は感じない。

で、何が言いたいかっていうと……褒め言葉は真に受けすぎないほうがいいだらうっていう悲しい事実。

とりあえず相手を褒めるとか、ちよつといいところがあるとか……そんなときにでも使うんだらうし恐らくは僕に対してもそういう意味でたびたび言ってくるんだらうし。

この人相手に油断しちやいけないんだ。

スカウトといたって雑誌とか見ていたら僕的には「ふつうじやない……？」って人もよく出ているし見た目がどうかというわけじゃなくって性格とかを含めた総合的になっていうのはもちろん……それこそ「たまたまタイミングがよかったから」「なんとなく」っていうのもあるんだらうし。

今の僕は珍しいっていうのもかなりあるんだらうし。

……考えすぎだって思うけどそう思っちゃうのが僕なんだからしょうがない。

特に今は見た目らしい……いや、ちよつとだけ盛ってるけど今風のJCっていう存在に擬態しなきゃなんだから女の人と女の子の考えが理解できないとまずいんだ。

「……………」

暑いから2本目になつてしまった冷たいものを手に取る。

断るヒマもなく手元に置かれた薄味のスポーツドリンクのペットボトルだ。

ちっちゃいやつ。

この体になつてから普通のサイズのペットボトルが大きいつて感じるのが悲しい。

賄賂な感じがしたから「要りません」って言ったけど置かれたし

……喉、乾いて来ちやつたしな。

……はじめつから缶を避けておいたらよかつたな。

そうしたら今井さんに見つかる心配も……いや、その勘とやらが働いてこつちを見られてしまつていたらたいして変わらなかつたのかもしれない。

未来は変わらないんだ。

なーんてこの前見たSF作品の分岐地点を思い出す。

ペットボトルのフタにも種類があるから硬いやつは開けられなかつたこともあつたし、そういう意味でも未来は変わらなかつたんだろう。

「……………」

……力を入れてもフタは動かない。

ただ僕の手のひらが痛くなるだけ。

……知つてた。

でもムキになつて開けようとする手と手のひらが真っ赤になつてひりひりして手首を痛める。

男のプライドですでに何回か家で試して手首を痛めたから確実だ。握力まで貧弱なんだ。

「ふだんはどちらの格好をされることが多いんですか？」

「？」

「今みたいなガリーと、この前のボーイッシュ。私はどちらでも似合つています」と

「あのときのです。これは知り合いに勧められて仕方なく」

あ、ようやく開いた。

ひりひりする手を涼しい顔して隠しながら思う。

……なんか、やりづらいなあ……。

この前みたいにしつこくぐいぐい来ると思ってた身構えていたのに来なくて、距離も取ってくれてそこまで強く詰め寄ってこない。

常識的な、ふつうの大人に近くなっているからちよつと拍子抜けになっっている。

まあさっきのが常識的かといえはそうでもないんだけど、知り合いに対する程度の強引さと言えはそうなるのかもしれない。

んー。

判断に迷うなー。

近づいて良いのか、いざつてときに頼ってもいい相手なのか……なにしろこの数年って言うもの他人に頼った経験がないからよく分からない。

大半の人間は善意で助けてくれるって知ってるけど……世の中には悪い人もいるからなあ。

「っー」

「あら」

ぴびぴつとアラームが鳴ってびくってなったけど、僕のじゃなくて今井さんのだった。

こーやって驚くと冷や汗がぶわつと出るから嫌いだ。

止めてほしい。

「……すみません。 すっかり長話しちゃいましたね。 そろそろ戻らないといけません……っていうかちよつと遅刻ですね」

てへぺろつてのをするあざといさん。

「今日は響さんとお話しできてすつこく楽しかったので時間、忘れちゃいましたっ」

僕が普通の男だった状態で普通に会って普通の会話をした後だったら多分どきつとしただろうセリフも、幼女な僕には効かない。

時間……僕にとってはとっても長かったけど？

僕は戦々恐々としていたから。

ぜんぜん楽しくなかったから。

でもほっとする。

「ランチのあとの散歩のつもりでなんとなく勘に誘われてきてみたら響さんにお会いできて。あのときの誤解も……ええっと、あれはふだんの私じゃないんだって伝えることができて。響さんを今すぐ何が何でもーつという訳ではないとお伝えできてよかったです」

本当……？

嘘じゃない？

そんな僕の疑念なんて知らない今井さんは立ち上がるとペットボトルを捨てに行く。

肩の左右に揺れる後ろで結っている髪の毛がやっぱり犬の尻尾にしか見えない。

結んだ位置の問題かな？

これからは犬さんと呼んであげようかな。

でもこの雰囲気。

どうやらほんとうに連れて行かれずに済みそう。

「響さんはどうでしたか？ ……お嫌ではありませんでしたか……？」

「……はい。僕も話を聞けたので、まあ……よかったです」

「そうですか！ それはよかったです！」

なんか不安げだったからリップサービスしただけなのになんだか嬉しそう。

ひやひやしていたからストレスは感じていたけど、それでも参考になることはあったからまあ許そう。

話し方も話の持っつき方もうまいからな。

話術というやつだろう。

僕に2番目に欠けている致命的なものだ。

いちばんはもちろん質量だけだ。

働いたら自然とこうなるんだろうか？

いや、口が達者なのはもともとだろうな。

女の人が話し好きなのは本能だし。

僕が働いたとしたって地味になる将来しか見えない。

「では失礼しますね。 また何かありましたら……何もなくてもお話
しするだけでもいいのでご連絡を！」

「はい」

何歩か歩いて振り返る。

「お待ちー！」

「はい」

また何回か尻尾をふりふりしてから振り返ってちよつと大声。

「してぃます!!」

「はい」

最後にうるさく言い切って満足したのか、ようやく離れて行つてく
れた。

……………。

「ふひ——……」

会話つて言うものに疲れた僕はぐてーってベンチに寝そべる。

汗で濡れたスカートが木にくっついてふとももがけっこうぎりぎ
りまで見えちやつてるけど誰も居ないから気にしない。

女ならまだしも僕は男だからな。

あ、でも、視界に入った視覚的な刺激がなかなか……。

今井さんが遠くでもう1回だけ振り返って手を振ってきた以外は
小走りで戻っていくあたり、さっきのはほんとうに演技とかじゃな
かったらしいなっと思う。

……けど、あのスカートじゃたいして急げないだろうに。

働いてる女の人がよく穿いてる脚が広がらないスカート……何て
言うんだらうな？

それで動きづらそうに小走りを続ける彼女を見るともなく見る。

……やっぱ尻尾かぶんぶんしているようにしか見えないな。

「……………」

……急に静かになった気がする。

さつきまで座っていたベンチにはふたりぶんのおしりのあと。

大きさはまるで違うけど。

僕のが小さすぎるだけだ。

「……帰ろ」

ふとももの付け根くらいまで上がっていたスカートの裾がベチャってふとももについて、なんかやな気持ちになったからそそくさとスカートを下ろしながらベンチから腰を上げる。

なんだか休みすぎてやる気がなくなっただし話して精神的に疲れたもん。

幼女の身での運動なんてここまでで充分だろう、うん。

今日がんびりすぎて2度と来たくなくなるよりは、ほどほどにしてまたなんとなく来たくなるのを待ったほうが結果としてはいいはずだし。

あと、暑さに負けて2本分も飲み物をお腹に入れたせいでたぶたぶして苦しいし。

そんな言い訳を僕自身にしなげらとぼとぼと歩き出す。

そーっと歩いていないと飲んだジュースがそのまま口から出てきちゃいそう。

動かしすぎたせいで口も疲れているしガマンできないだろうし。

………一応トイレは意識して歩こう。

町中で悲惨なことになりたくないし。

この歳でお漏らしなんかしたら多分1年くらい引きこもるし。

どうしてか我慢が利かないんだ、この体。

やっぱ物理的に短いからな？

歩き出すと足の裏がじんじんする。

ぱんつとスカートがおしりに張り付くのが気持ち悪い。

腕が重いし肩が痛い。

ずいぶんと悲惨なことになっている様子。

ゆっくり、ゆっくりと帰ろう。

トラツクの流れに逆らって歩いていると、彼女との会話がなんとなく浮かんでは消える。

悪魔から人へ、そしてそこその常識人へ、そして犬っころへ。

……でも、人の印象なんてたったの1回の会話で変わるんだな。

最近よくそういうの実感しているし今のも1回の会話にしては多

いほうではあったんだけど、それにしたって……なあ。

節操なく強引に引きずっていきそうな雰囲気から一転、ちよつとス
ピリチュアルな感じだけど話せなくもないワンところに。

またどこかでばったり会ってたとしても、とりあえずは全力で叫ん
で周りに助けを求めるっていう用意をせずに済みそうでひと安心だ
な。

「……………」

ぴたつと足が止まる。

……え……もしかして僕って相当ちよろかったの……？

たったあれだけの会話でちよつとでも絆されている気がする。

対人経験の少なさがネックなんだ。

え、あれ？

そういえばニートになってからまともに話をしたのって、この体にな
ってからじゃ？

最近はやけに……最近って言うってもこの3ヶ月の内の何日かに集
中してだけど。

いやいや、もつとあるはずだ。

いくら僕だってそこまで話さないだなんてありえないし。

そう、たとえば。

「……………」

たとえば。

「……………」

……ご近所の何人かと1回限りの店員さんと旅行先の何人かから
いしかなかった。

それも自己紹介と近況報告程度。

「……………がんばろ」

これまでがさすがにちよつとまずかったのかもしれない。

そんな収穫片手に……僕は家までの長い道のりを思い出してよろ
けそうになった。

16話 学生たちの、夏休み(1) 1/3

とうとう世間。

っていうか学生たちは夏休みっていうスペシヤルな期間に入ったらしい。

良いよね、夏休みと冬休みと春休み。

なんで秋は無いんだろ。

シルバークはなんか違うしなあ。

まあ僕は毎日が夏休みの最終日だからあんまり関係ないんだけど。

ああいや、ふらつと出かけて何日か泊まってることができた成人の男だったときには関係あったか。

ホテル代とか夜行バス代とかフェリー代が乱高下するもんな。

閑散期こそが狙い目だ。

とにかく夏休みというのを何年か年ぶりにテレビとかよりも前に知ることができたわけだ。

だってメル友……古いかな……な関係の現役JCさんたちにとっては試験が終わるイコール夏休み。

直前の1週間くらいは授業も少なめで実質的に夏休みに近い気分だったからって普段の倍くらいうざったかったし。

そういう会話が飛んできていたから思い出した、とつくに忘れていた感じの僕の懐かしい学生生活。

たいした思い出はないのに歳を取ってくるとただただ昔が懐かしいって思えるのが不思議だ。

歳を取ったって言っても高校を卒業してから換算だからそこまでじゃないけど。

それが今はこんな子供になって幼くなったもんだから余計に老けたように感じる不思議な感覚を味わってた僕。

不思議だよなあ。

まあ縁もゆかりも無い幼女に変身するわハサミが空中遊泳するわな方が不思議かも知れないけども。

それにしてもちっこい関澤さんもでっかい下条さんも楽しそうで

なにより。

僕みたいなプロのニートってのは年中有休な感じをずうつと満喫しているわけで、これまでもこれからも緩急のない緩慢な時間を過ごすだけ。

それに比べて真面目な学生さんってのは年がら年中無理やりに入数の空間に閉じ込められて親や先生たちの言う通りに過ごさなきゃいけないって、したくもない勉強とか試験とか課題とかいう苦行をさせられるから大変そう。

同情はするけど僕もやったからなあ……。

「がんばって？」ってしか思えない。

学校って大変だよな。

「友だち」とかいうものを作らないと休み時間とかがさらなる苦行の時間になるシステムだし。

集団生活って言うのはそういうものだ。

僕みたいに月に何回か誰かと適当にちよつとだけ話せばいい人種にとっては拷問のような空間だけど、多分必要なんだろう。

だって高校以降はその「友だち」ですら自分から合いそうな人を動いて探さなきゃいけないんだもん。

強制的じゃないもんだから隣の席に座った子に話しかけるタイプの人間じゃなければほんつとうに話す人が居なくなる。

そうして気がつけばぼっちっていう存在になる。

積極的ぼっちと消極的ぼっちのどっちが良いんだろうね。

そんなわけで解放された学生さんたちが暑くてしようがないくらいだったときくらい羽目を外したくなる気持ちはよく分かる。

常識的な範囲で外すのなら問題も何もないしな。

それは分かるんだけどとにかく相手するのがめんどくさい。

うるさすぎてとつくに常時マナーモードにはしているんだけどちかちか光るしなあ。

あんまりためすぎると読むのだけで10分くらいかかるしなあ。

子守は大変だ。

◇

若い人は気が短い。

肉体年齢で言えば僕がだんとつに若いんだけど心はわりと元々の
同年代よりも上な感じ。

つまりは精神的な体感時間の密度が違うんだからしょうがない
だ。

「……うーん？」

この体になつてそうとう幼なくもとい若くなつたはずなのに体感
時間はそれほど変わったようには感じない気がする。

もともとだるだるしていた時期を除いてはわりと毎日毎日が濃
かつたようにも感じていたし、その辺はやっぱり個人差なんだろう。

ニートつて続けられない人もいるみたいだしな。

僕にはニートになる素質と資格があつたつていうことだ。

多分お金がなくてもバイトとか派遣しながら似たような生活して
ただろうし人の根元は変わらない。

毎日それなりに知的好奇心を満たしたりしているからなんだろう
か？

本を読んで家事を自分でして散歩とかしてお酒呑めば幸せだも
な。

まあいいや。

そんなわけでメロン下条さんやレモン関澤さんがヒマになつたこ
の夏休みつていう時期。

この1ヶ月くらいの期間、華の中学生相手にたつたの2、3回……
今までみたいな頻度でちよつとだけ話すだけだったら愛想を尽かさ
れかねない。

元々特に近所に住んでるわけでもなければ同じ趣味が……関澤さ
んとはあるけどそこまでもないし精神的にも同性でもないから温
度差も結構ある。

なんでか僕に興味持ってくれてあつちから毎日怒濤のつぶやきを
くれるけど……でも多分充実した夏休みつてのを楽しむだろう彼女

たちをほつとくと愛想を尽かされるんじゃないかなって思う。
それは困る。

ともかくにもこのエセ中学生な設定で面と向かって話ができて、
なにより最初っから自己紹介し直さなくていい関係っていう貴重な
知り合いを失う可能性があるのはいただけない。

相手は多感な時期のおしゃべりで生きているぴちぴちの女子中学
生だ。

アラムを駆使したり「この後は約束が……」とかで長くても30
分会うだけなのは彼女たちの反応を見てもそろそろ限界。

そろそろ学生っぽい距離で学生っぽくだらだら話しながら会う時
間を増やすかお引き取り願うかの境目に来ている気がする。

僕としてはこのペースがいいんだけど……性別も年齢も性格もな
にもかも違うからしようがない。

出かけるたんびにめんどくさい人と知り合うから男で中学生くら
いの子とも知り合えそうって思ってたけどそんなことはなかった。

僕みたいに休みの日は家でじっとするタイプで本とかについて語
れる相手が欲しかったのになあ……。

まあ無理なら別にどうでもいい。
これで何年もやって来てるんだし。

そんなことよりあの子たちを放置したら僕の方がなんとなく会
いにくくなって来てそのままフェードアウトしそう。

気がついたらもう忘れ去られて「あなた誰？」とかいう風なことに
もなりかねない。

そんなこと面と向かって言われたらいくら僕だってしよげる。
1年くらい寝込む。

ぼつちなことを思い出してちよつと落ち込んできたところで、だる
んと起き上がった僕は体の力を抜いてぽふんってクッションに埋も
れる。

「う……………」

さらさらという音。

あー気持ちいい。

お気に入りになったビーズなクッションに顔から突っ伏してダメになりながら1人で勝手に想像して1人で勝手に傷ついて1人で勝手に癒やされよう。

この体の何がいいって、顔のあぶらとか汚れとかぜんっぜんないから気にしなくてもいいこと。

多分中学生になってにきびが……とかになる以前の幸福だ。

おかげでこうして枕とかシーツとかクッションとかに顔をうずめたって一向に汚くも臭くもなりはしないしな。

気をつけるのは寝落ちしたときのよだれくらいだ。

寝落ちには気をつけなければならぬ。

この体はわりと寝落ちするからなあ。

「む……」

脚をぱたぱたしたりしながら癒やされてきたから考える。

そんなわけだからって、こここのところ気合を入れて結構頻繁にお茶したりお昼食べたりしながらあの子たちと会う努力をしている。

でも僕は用事をまとめて片づけるタイプだからおんなじ日に近い場所で時間をずらして会うことにしている。

話が長引いたりして危うくニアミスしそうになったりもするけど、今の僕は現役のDCってやつってことにしてるから多分大丈夫だよ
ね。

おかげでまだ忘れ去られてない代償に僕らの精神はものすごく、ものすごく疲れている。

暑さも地味に効いている気がする。

夏バテかもな。

幼女だし。

なんだかだるいから「次の約束してたのキャンセルして良いかな……？」って言うとかわざわざスケジュールアプリを無言で見せつけられるから女の子って怖い。

年下なのに言葉に表せない恐怖が芽生えるんだ。

女の子って怖い。

それでも「やだ」って言えない。

女子中学生にすらNOと言えない僕の心の弱さ。

というよりも何回か言ってみただけでものすごく反発されてしぶしぶ引き下がったというのがほんとうだけど。

やっぱり僕は押しに弱いみたい。

気をつけないと。

でも上からのぞき込まれて声の上から降ってくるとなあ……体格差で抑え込まれるんだよなあ……。

この低身長が憎い。

「ぬー！」

ばたばたと全霊を込めて憎らしさをクッションに発散。

でも大した力は発揮できない僕だ。

もふもふな感覚に癒やされてなんとかがんばれている現状だけど、これでも前よりはずっと耐性も体力もついてきているのは感じているし……こんな僕でもちよつとは進化できている感じ。

現役JCたちに比べるとまだまだただけだな。

それもこれも実質的幼女なこの体が悪いんだ。

食っちゃ寝しているのに体重も微増したと思ったら減って戻るしな。

「……………え？」

もしかして成長期はまだ来ないの？

いやいやそんなこと無いはず。

ほら、胸だつてちよつとは……なかった。

「……………」

揉めない胸は胸じゃない。

足元に転がっている別のクッションを蹴り飛ばそうとして失敗した僕はずつと床に転がる。

髪の毛が散乱している。

なんなら口にも引つかかっている。

シャツがめくれ上がっておへそが寒い。

スカートって破廉恥な格好だよなあ。

どうしようもない。

めんどくさいなら2人まとめて相手しようって考えみたこともある。

せっかくだし一緒くたにしちゃえばふたりで会話していてくれるだろうしって。

だけど毛先が内に外にとくるくるしているのとストレートにさらさらしているのが学校帰りだったときに知ったんだ。

おんなじ制服着てるって。

だからたぶんおんなじ学校の同学年なんだろうしなおさら良いって思ったんだけど……おんなじ空間に居るうるさいのが倍になったら騒音の相乗効果で僕が瀕死になるのに気がついた。

危ないところだった。

思いつきで動く危険なんだ。

だから別々に会うしかないから週に4回とか6回とか会話する時間があるわけ。

話をするのにどうにかしてくっついていくのに精いっぱい帰ってきたらくたくたになるわけ。

いつも帰ってきたらそのままこうしてシャツとぱんつ以外をさつさと脱いじやって30分くらいは眠らないと動けなくなるしな。

はじめのころは帰ってから翌朝までぐっすりだった。

それを思えば相当に……確実に耐性がついてきているって思う。

けど……なあ。

先は長い。

「む——……………」

もう1回クツションにへばりついて潜って幼女な敏感肌で全身で快感を味わい尽くした僕。

慎重に体重をかけないようにして抜け出ないとビーズのさらさら具合に負けてもうしばらくふかふかして無限ループだからって、そろりそろりと体を離す。

「ふう」

エアコンの冷たい風がひんやりと来て気持ちがいい。

「うむ」

部屋の隅にある姿見、前の僕の背丈な鏡には髪の毛をぼさぼさにした銀髪の幼女。

気がつけば部屋に置くようになっていたけど……あれ、なんでそうするようになったんだっけ？

「……………?」

ちよつとフリーズして考える。

なんでだっけ？

「……………」

何でか分かんなかった。

まあいいや。

そんな鏡を前にちよつとズレた下着姿で乱れた銀色とクツションでもふつたおかげで桜色になっている顔と肌を晒している幼女な僕は実に扇情的……じゃない。

クツションをぎゅつとしているとなんだかすぐに息が上がるこの体。

地味に運動になっているのかもな。

だけど、こんな格好になっても扇情的にはあと5年は足りない。

色気が壊滅的だ。

くびれすらない寸胴だもんな。

いや、僕の子供のころとかと比べると人種的にはほっそりしてるんだけど……最近会ったメロン下条さんとかお犬様の今井さんとかと比べると肩と腰とお尻のラインに差がありすぎる。

悲しい。

悲しいから成長してくれないと困る。

魔法さん、お願いします。

僕は祈った。

でもその後でやっぱり元の体に戻してって頼み直した。

「……………」

ぺたぺた足音を立てながら冷えた体をクーラーが効いてなくなつて良い感じに蒸し暑い廊下であつたため。

ま、9月になるまでだし。

正確には8月の最後の週になるまでかな？

今どきの子たちは9月に入る前に学校だもんな。

それまでの辛抱だ、がんばってみよう。

期限があればなんとか持ちそうだしな。

もうひとふんばり。

将来……できるかどうか怪しくなったけど社会人として隅っこに出る予定なんだからちよつとはがんばって会話に対する耐性をつけよう。

でも、昔は夏休み宿題つていえば8月31日の夜中つて決まっていたものだけど今はそうでもないらしい。

かわいそうにな。

◇

「やあやあひびきんひびきん、おっはよー！」

僕の名前を「ひびきん」つて呼ばれたのは学生時代を通り越して初めてだ。

どういう言語センスをしているんだろ、この子。

「つて、やっぱいつ見てもそのカツコ大変そうだねえ——……肌を出せないつてこの季節はほんとうにつらそう。 見ているだけで私まで響の暑さが移っちゃいそうだよー」

「慣れているからね」

「……私にはムリそう」

「慣れだよ」

「そんなもん？」

「そんなものだ」

そんなどうでもいい会話をしながら、改札の近くで先に待っていた……夏だつていうのに心なしか髪の毛が伸びている関澤さんのところにたどり着いた。

あいかわらずこういうところつてほんとうにざわざわしている。

夏休みなのにこれつて、年齢層がいつもより低めだからか？

僕としては視界が開けるからありがたいところだけでも。平均年齢が低くなってるからなんとなく紛れられるしな。そんなわけで今日は関澤さんと会う。

でも「小さいもの同志」とは言ってもこうして真正面に立ってみると身長差は歴然としている。

真ん前を見るだけだとちやうど彼女の慎ましい胸元になるしな。

見ようとしてるんじゃない。

視線がデフォルトでそこになるんだ。

僕は悪くないし僕に少女趣味は無いから大丈夫。

髪の毛が肩にふわりと乗っている感じになりつつあるレモンさんはとにかく涼しげな格好。

肩から胸元まで結構大胆な、汗を吸うと下着が透けるくらいのシャツと短めのスカート。

良いなあ。

できるなら僕もこんな格好をしたいし……したら涼しいんだろうなあ。

僕なら下着はただのシャツで充分っていうか着なくてもたぶん誰にも気づかれないくらい胸だからそれはとつても悲しいことなんだけど、とにかくそんな感じだし輪をかけて子供体型だしな。

ここまで短いスカートだと風が吹いたら見えちやいそうだから僕ならもうちよつと長めにするけど。

この身長だとちよつとかがめば覗けちやうくらいだ。

興味は無いからしないけど。

それにしても……いくら準子供体型だからとはいってもそのふとももはあんまりよくないんじゃない……？

派手すぎない……？

変な男寄ってこない……？

最近の子ってみんなこうなの……？

僕は心配で不安になる。

僕が男だからなんだろうけど女の子のふとももってのは視線が吸われる物質だって本能で理解している。

それは男の劣情つてのをかき立てる存在……らしい。

僕は大丈夫なんだけど不安になって、彼女の普段の制服姿を見慣れているから余計にそんなことが気になってしょうがない。

ちなみに彼女も胸はレモン未満な同志だからそちらの方は心配が要らない。

今見えてるのも見せブラってやつらしいし。

まあそんなの知らない男にとってはそれだけで嬉しいんだけどな。悲しい性だ。

その性はいつか、どうにかして取り戻したいもの。

でも今はその当てがないんだから素直にこの子を守る心意気で行動こう。

変な輩が寄ってきたら……どう見ても小学校高学年なファツションにもなってる関澤さんをかどわかそうってするロリコンが来たらブザーを鳴らしてやるんだ。

見た目は幼女でも中身はこの子を守る男。

その心意気でいきたいところだ。

「なんか今日は元気だねえひびきん。良いことかあつたん？」

「いや？ 別に」

「そっか」

16話 学生たちの、夏休み(1) 2/3

「じゃあさ響、とりあえずビルン中に入ってまた適当なところでいい？ 私、お店とかスイーツとかあんま詳しくないからいつもおんなじようなところでごめんね？ 女子力低いのよ」

「別に。 僕も同じだしそうしようか」
「うんっ」

そのときの気分次第で僕の呼び方を変えるゆりかが言う。
でもなるほど、女子力。

よく耳にするけどまさか僕自身のことになるとは思ってもみなかったし幼女には関係ないって思ってたから気にしなかったけど……僕に足りないのはそれ？

「……………」
いや、料理とか家事とか全部同世代の並以上にできる自信あるぞ……？

男料理だけど料理は料理だしひとりしかいないとは言え一軒家をそのままに保つ程度にはできるし？

そういう意味じゃ元々僕は男なのに女子力高かった……？

ああでもこの体じゃ肝心の色気は壊滅だもんな。
体型のせいで。

色気って言うには言葉通りに10年早い体つきだもんな。

首の後ろ側に重力が掛かるのを感じながら目の前の少女のあとを着いていく僕。

……あ、めんどくさいこと思い出した。

そういえば関澤さんのことはゆりかって下の名前で呼ぶように言われていたんだ。

せっかく名字が顔とセットになってきたところだったから変えたくはなかったんだけど……いつもの通りに根負けして呼ぶことになったもんだからまた1から覚え直しなんだった。

こんなことなら最初からフルネームで呼ぶ習慣にしておけばよかったな。

……あ、だからたまーにそういう呼び方する人がいるのか。
なるほど、次からはそうしておこう。

最低でも頭の中で毎回呼んどけば今よりは覚えやすくなるはずだし。

「……ね、大丈夫？ またはぐれたりしない？ ……手、繋がなくていい？」

「だからあれは人の波に流されたから。それに僕はそんなに子どもじゃないよ」

「そー？」

「そーだ」

たったの1回、それも団体さんな大勢の人が横から来たせいでちよつとだけ離れたことがあったくらいで大げさだよなあ。

なんだかやけに子供扱いされるのがやだから少し大人っぽく話すけど効果はないらしい。

そしてさりげなく僕の袖をつかもうとする関澤さ……ゆりかさん。

いや、さすがに下の名前にさん付けは変か……同い年設定だし呼び捨てにしておこう。

惨めな思いはしたくないしで僕もまたさりげなく手を引っ込める。
手を繋がれて歩くのはやだもん。

「ケチー」

ケチって。

この年ごろの女の子だからお姉さんぶりたいんだろうか。

多分この子より背が低い同世代なんてほとんどいないだろうしな。
そうして僕よりも背の高い女子中学生のあとを着いていくつていう妙なことをしながらエアコンの効いた屋内へ向かう。

そんな僕の服装はいつもの通りな夏バージョン。

夏バージョンでも長袖長ズボンにパーカーと帽子っていう厚っ苦しいことこの上ない格好だ。

おまけに髪の毛もしまい込んでいるし真夏だというのにもこもことしている。

いや……意外と耐えられるって気がついたし、案外平気だし。

それにこの体の元になったDNA的なのは多分この緯度と気候の日差しが苦手だし。

でも最初のときみたいになさくはなくって一応はちよつと前にかがり……いつの間にか呼ばないと拗ねるようになってきたから下条さんも下の名前呼びだな……に選んでもらったものだし、一応は夏用で一応は薄い素材のものだから風が吹けばいくらかは涼しい。

風が通らないと蒸し焼きになるけど。

何回かは女装して外に出る感覚に慣れてきてはいるけど、それはあくまで人の少ないところでしかも知り合いに会わないような場所限定の話だしな。

まあわんこな今井さんには見られたんだけどあれは事故だしな、防ぎようがなかったんだ。

あれは不運な事故だったんだ、野良犬に噛まれたって思っただけで諦めよう。

そう言えば野良犬って僕海外に行ったときくらいしか見たことない。

「……………」

「まあ考えたこととしてるー」

……今井さん。

あの甘えた演技だけは見られなくなかったなあ……。

忘れてはくれ……ないだろうなあ……………。

やだなあ……。

弱味握られちゃったもんなあ……。

僕が全力でぶりっこってのをしてるのを同じ年くらいの女の人に見られるのと女の子とはいえ子供に見られるの、どちらがマシかといえ……どっちもよくないな、うん。

「ひびきー？ ……あー、いつものだ」

年相応の幼女風に甘える姿なんて見られて喜ぶ趣味なんてないし
今後は控えよう。

なんだか荷物が重くなつた気がする僕。

「ふい…………夏は屋内と電車の中とかに限るねえ…………」

なんか相変わらずに歩きながらぶつぶつ言ってるのを優しい目で知らんぷりしてあげること少し。

冷気に包まれて冷却が始まった僕たちはとぼとぼと、背の高い一般人たちに押されないようにすみっこの方を歩いて行く。

「お肌が弱いんだったよねえ、その格好。 1年の半分くらいは厳しそー……それって目とかは大丈夫なん？ 帽子だけでいいの？ サングラスとか要らないの？」

「まあね」

「ふーん」

エスカレーターで一気に身長差ができた彼女の背中の肩甲骨の上のヒモを見るともなく見ながら返事を返す。

僕もブラジャーっていつかは必要になるのかな。

めんどくさそうだしごわごわしそうだからやだなあ。

そんな感想しか出てこない時点でこの子にもまた色気はない。

悲しいかな、どう見ても小学生なゆりかだからな。

あ、そう言えばお肌うんぬんはこの前の病弱設定の流用だ。

なるべく髪の毛を隠すためにはフードのある上着と帽子が必須で、それを正当化するためにはそういう感じの言い訳が必要で、だから必然的に長袖長ズボンになっちゃう。

暑いけど耐えられないわけじゃないからこのままでいいや。

それにこの真夏にあえての長袖長ズボンとフードと帽子。

目立ちはするけど「肌を出せないんです」で納得してもらえるのが楽。

昔と違って今ってそういうのに対する理解があるもんね。

多分「こういうのが好きなんです」「そっか」で済むくらい。

違うかな？

でも、白い肌に日の光が苦手とか本格的に吸血鬼っぽい感じになってきた。

でも苦手なだけで死にはしないのってデイウォーカーって言うんだっけ？

もちろん創作上の存在だけどそんな属性がついた気がする。

そういうわけで家の前の出入りでは雨が降っているときと真夜中以外はたいていこんな格好だからもはや普段着のこれ……「暑苦しいけどこういうもんだ」って思えばほんとうに何とかなるらしい。

でもやっぱ暑い。

魔法の存在が小憎たらしい。

この体の体温が低いのと汗もかきにくいっていうのがあるおかげでなんとかなるのが唯一の救いだな。

汗だくになってきても日陰でじっとしていればすぐに冷えてくるし。

低血圧なのかも。

「あぁー……涼しい。　生き返る——……」

「涼しいね」

「……喜び方がいつも地味ー」

この子ののんきなラフさ加減がうらやましい。

だけど幼女な都合上こんな格好をしないといけないからなあ……。

姿が変わるにしてもせめて目立たない普通の見た目の男だったらこんなことにはならなかったのになぁ。

そうしたら今ごろはお隣さんとか親戚の叔父さんに助けてもらいながら快適な外に出ない暮らしを堪能できただろうにな。

◇

学生が外で集まるといったらたいはカフェかファミレスと決まっている。

お金ないもんね。

高校生……バイトとか今って相変わらずNGなところが多いんだろうか……にとつての千円は大きいもんね。

「あ、2名で。　空いてたら静かな席が良いです」

リッチな僕は手際よく店員さんをさばくゆりかの後を着いて行く。着いて行くだけってのは実に楽だ。

おこづかいの少ない学生にとってはこうしてエアコンと飲み放題

の冷たい水と話してもいい空間は貴重だよね。

お金を使わないんなら誰かの家とか図書館とかファストフードとか。

少なくとも僕たちのときにはそうだったけど今でもそう変わらな
いんだろう。

これが大学生以上になった瞬間に毎日が酒の席になるのは大人つ
ていう財力のたまもの。

大手を振って好きなだけ稼いで好きなように使えるのはいいもの
だ。

自分の余った時間をお金に変換して好きにできる楽しみってのは
良いもの。

僕は稼いでないけど。

「響は宿題ないんだっけ？」

「うん」

「いいないいなー。 私たちはけっこう、けっこうな量出ててさ。

これがまた頭と目と手が痛くなる代物なのよ。 んで勉強はまだ
いいんだけど日記とか感想文とか自由研究とか。 なーんで中学生
にもなってるんなことしなきゃって感じ。 学校なんてなくなればい
いのに。 てかこういうのない学校するくない？ 不公平じゃん！」

そう言いながらクーポンを使ってさらに安くドリンクバーを満喫
しているゆりか。

炭酸の泡に合わせてぶくぶくしている。

そういうところが幼いんだと思うよ？

ごく自然に出てきてしまう子供っぽさが。

僕が言えたガワじゃないんだけどさ。

「響のときは家庭教師が来てくれてるんだっけ？ 学校行けないのは
大変そうだけど、でも自分のペースでやれていいなあー。 自由研究
とかはた迷惑なモンないし」

「大変そうだね。 まあ楽だけど、その代わり夏休みみたいなもの
はないよ？ 一年中同じペースだ」

「うげー、それもやだー」

そういうことになっている。

今の僕の状況を意識してみるとそういうことになるから嘘じゃない。

休みしかないしペースは完全にフリーで期限も試験もない。

だけど自由過ぎて自分でゼーンぶ管理してスケジュール立ててやらないとまったく進まないって意味では大変なんだ。

大人になって会社に通いながら勉強とか本当にすごいって思う。

だけど僕だって、難易度が低かろうが昔一回やった内容だろうがちゃんとそこそこのペースで勉強できてるんだから良いよね。

最大の敵はちよつと休憩って罫だ。

ちよつとのつもりでいつの間にか夕方になってたりするし。

それもこれも娯楽の多すぎる現代社会が悪い。

定額制配信という沼地。

その気になれば何十年でもいけそうな深いところだ。

「私、勉強のほうの宿題はなんとか超がんばって終わらせたんだ。

けどさ、他のは時間かかるし考えなきゃだしめんどうかいな。自由研究う……何にするかなあ？ もうてきとーにしてもいいかって

思っただけでー、できるだけ楽で時間かからなくて無難なやつないかなー」

気持ち分かる。

僕もずつと前に何回も通った道だ。

けど。

「……勉強、もう終わらせたのか？」

まだ夏休みに入って確かまだ何日……から10日くらいでしょ？

その前の期間で引きずり回されすぎて体感的にもっと長く感じは

するけど……すごいくない？

「けっこうな量があるって言っていたような」

「私、先にイヤなことぜんぶ片づけて後を憂いなく楽しむ派だからね

！」

「すごいね」

ものすごい笑顔の小学生。

ものすごい笑顔の小学生。

ものすごい笑顔の小学生。

間違えた、中学生。

どや顔っていうのをしてる。

ついでにサムズアップ。

元気だな。

僕にはないエネルギーを秘めている。

でも胸を張ってるけど張るための胸がないのには同情する。

「えへへー。だってそうじゃないとFPSとか反射が命のゲームのときちらついちちゃって集中できないことあるしー？ あ、戦略とか考えてるときもそっか」

夏休みを全力で楽しもうという気概を感じる。

「それにドリルとか問題集とかはもつと前から範囲とか言われてたしさ、量がやったらに多いだけでたいして難しいもんでもないし。音楽聴いたり配信流し見したりして手動かすだけだし、こう、サクツと終わらせたのよ」

「えらいな」

「えへへー響に褒められたー」

それが分かっていてもできる子とできない子がいる現実の中、ゆりかは確かに偉い。

要領のいい子はこの辺が違う気がする。

学生時代の僕とは大違いだ。

「それにもともとこういう性格だしねー。あとでわかんないところ出てきたら間に合わなくなるかもだし？ あーあ、勉強ってやだねー、なんでみんなしなきゃなんだろうね？」

勉強で強いる。

学生って大変。

「……君は確か、成績はいいほうだろう？」

「上には上がいっぱいいるのよー。所詮は偏差値そこまでじゃないとこだから進むスピードも速くはないしなんとかなるけど。それに私、勉強自体はそれほど好きってわけじゃないし、そんなことよりゲームの攻略とか見たりアニメとか観たり本とか読んでるほうがよっぽど楽しいかなー」

「みんなそうじゃないか」

「おっと、そりやそうね」

おどける仕草とかすると髪の毛がびよんとするくらい。

でも不自然じゃない程度に大げさな関澤ゆりか。

演技、やっぱりあれくらいいしないとダメだよなあ……。

このムダに多い髪の毛をなんとか生かさないと。

こうしてフードにしまい込んでいたらできないけど。

でも恥ずかしい以前になんとか会話をひねり出すので精いっぱい

だから……まずは会話に着いて行けるところからだな。

「でもさ、響だつて」

「ん？」

「響だつてそういうタイプでしょ？ たぶん。 いやなんとなくだけ

どさ。 しなきやいけないこととか先に片づけちゃってからいちば

んしたいことするって感じの？ そうじゃなきや戦略ゲームたく時

間かかるのとか分厚いシリーズ読破したりとか私よりも多くはでき

ないっしょ。 本とかマンガとか私より詳しいときあるしさ」

「まあ……そんな感じか？」

「合つてた!!」

ただ長く生きてきただけなんだけどな。

具体的には、君の年齢ぶんくらいは。

こんなこといっても信じてもらえやしないだろうし、そもそも説明

すること自体がめんどくさいし……あとぜんぶウソだつてばれるし、

そういうことにしておこう。

いざとなつたらじいやの出番だ。

「最短の攻略法はこちらでございませう」とか言うハイスペックじいや。

そんな人いるんだろうか。

「こういうのって人から言われるまでさ、自分じゃよく分からないも

んだよね。 私の場合は親友からいつつもずばずば言われてるから

よく身にしみてるけど。 響もしっかりしてるしあんま言われた

ことなかったり？ 勉強してるのー、とか、もっとがんばりなさいー

とか」

「そんな感じだね」

「そっかー、仲間仲間っ」

嬉しそうに握手を求めてきたからしぶしぶで出した片手を掴まれてぶんぶん振られる。

「……………」

通り過ぎた店員さんの視線が…………。

やめて…………ほほえましい子供のやり取り見る顔しないで…………。

高校生くらいの子にそうされるのが堪えるんだ…………おねがい…………。

そんな願いは届かない。

けど少し懐かしいな、こういうの。

こうしてなんでもないことをしゃべるっていうの。

多分最後にしたのは高校を卒業する前だし。

…………相手が僕より背が高い子供、中学生っていうのが気になるけど。

小学生寄りの中学生を座高の分さらに上のほうへ見上げるこの変な感じ。

見下されている感覚にまだ慣れない…………。

あと首が疲れる。

相手は小学生寄りの中学2年生なのにな。

16話 学生たちの、夏休み(1) 3/3

「ひびきー？」

ちよつと居なくなっていたゆりかがにやにやとしながら戻って来る。

その手にはコップ。

……ああ。

こういうのって懐かしいな。

こんな僕でも中学くらいまではなんにも考えない子供でいられたからそういういたずらをし合ってたっけ。

「はいよ——……ぬふふ」

「……………」

僕的にはものすごくほほえましい光景を見ている感覚だけど当の本人は楽しくて仕方がない様子。

無邪気って素敵。

そんな僕の目の前にとんとおかれる謎の色のナニカ。

焦げ茶色度においてはよく分からなくて、混ぜたってことだけ分かる感じの液体。

「私特製ジュースどーぞー！ いつもてつきとーなんだけどわりとイケる味にするの得意なんだー。 ゲロマズじゃないはずよ？」

「……………」

……こういうのはお茶とかをたくさん混ぜなきや鳥肌が立つ味とかにおいにならないはず。

大丈夫、大丈夫。

そう僕自身に言い聞かせながらそつと口をつけて飲んでみる。

「くくくくくくくく」

「……………」

「……………」

身構えていたからか普段からの癖からか両手でコップを持って目をつぶっていたらしい僕。

その液体の感覚を知覚した僕は何気に体がこわばっているのに気

がついた。

「……確かにそこそこおいしい」

「私がひどいコトするって思ったんでしょ。響ものすごくぎゅってしてたもん」

しょうがないじゃん……こういうの10年以上ぶりなんだもん。

「……けど、これはただの炭酸のないソーダに近い何かだな」

「まーそうなんだけどさー」

この気持ちをごまかすために努めて冷静に反応したら興味を失った様子ゆりか。

可もなく不可もない安い感じのジュースを買ったときのような……普通に無難でよくある感じの微妙な味が口と喉を流れる。

「けほ」

おっと、一気に飲んだから。

……外で食べるのにはいくつもの課題があるけど、ここにもひとつあったな。

コップが大きすぎて両手じゃないとこぼしそうってこと。

太くて重いものをつかむ握力と手首の力が厳しい。

手の大きさが足りていない。

それを補助する筋力が足りていない。

あと僕だとドリンクバーはボタンが届かない可能性が高い。

押しつけるだけでいいところもあった……けどそれですらっっていう始末だ。

なにかもが足りないんだ。

「これ使う？」って彼女がくれたありがたいストローでちゅーつと吸いながら……会話も無いしでなんとなく遠くを見て、乱視混じりのメガネじゃ見えなかつただろう細かいところまでを見る。

ドリンクバーの機械。

ファミレス自体に来ることも無くなっていたから何気に新鮮な見た目。

多分旅行先で電車とかバスとかを待つ時間に入る以外じゃこういう店には入らないもんな。

こういうところはどちらかっていうと人と話をしたり出掛けにちよつとした時間をつぶすためだったり、家にいると誘惑が多すぎるからやらなきゃならないことをするためだったり……って食べること以外のほうがメインのことが多かった気がする。

自炊にこだわりすぎたせいでムダに舌が肥えたもんだからファミレスみたいな中途半端な味が苦手になったからっていうのもあるんだけどな。

あと、安いって言ってもやっぱりお金はかかるし。

1回のランチ代でも肉以外の料理なら自炊で何食分にも膨れさせられるしな。

それにしても……店の雰囲気も何もかも昔からほとんど変わってないんだな。

だからいくら綺麗でもどこか懐かしさが抜けないような気がするのかも。

タッチパネルとかがあるのは時代を感じるけど、1回触ったらもう飽きて目に馴染むもの。

「ところでさー」

「うん？」

ゆつくりとジュースを飲んでいたら目の前に崩れはじめたぱつぱんとその下の両目があつてびくつとした。

かろうじて押さえ込んだからバレてはいないはず……。

「響って近距離苦手な感じ？　もうちょい離れた方が良くない？　ガマンしないでね？　そういうの」

「……いや。ただ急なことに驚いてしまうだけなんだ」

「そ？　あ、でさ、これもう食べないの？」

「ん？　……ああ、食べきれないからね」

身を乗り出してきているゆりかの指すのは僕の食べ残しのサンドイッチ。

育ち盛りだもんな。

成長が遅いからこそたくさん必要なのかもな。

やっぱり小学生にしか見えない彼女のほっぺとか肩周りを見ると

もなく見ながら結論づける。

ファミレスの食事。

こういうものなら1人前食べられるかもって思ったけど……やっぱりムリだった。

1人前って言っても元の体だとたぶんこれでも半人前くらいの感覚なんだけどなあ……。

悲しいかな僕は半人前。

見た目相応にお子さまランチがちょうど良いんだ。

胃の拡張が急務だ。

食欲ってどうすれば増やせるんだろう。

毎食前に食前酒でも飲む？

体動かすだけだと疲れて寝ちやうだけだしなあ……。

「……いつものことだけど、ほーんとびっくりするくらい少食だね、響って。そんなんじゃないや体力戻るの時間かかるんじゃないの？

もう退院して……何ヶ月なんでしょ？」

「うん、まあね。けど、どうしても胃が受け付けられないから」

「……………」

「ただ体力が無いだけなんだ。気にしないでくれ」

なんか不安そうだったから大丈夫だって言っておいてあげるけど、ほんとうになんでだろうな。

この食欲の無さ。

本当に子供だからってことだけなんだろうか。

最近はそのそこ……繁華街とか駅とか電車に乗っての移動とか公園への往復とかでそのその運動に、こうして外で会話をしているっていう口も頭も体力も気力もものすごく使う重労働をそのそこしているわけだけど……それでも一向に食欲が増える兆しはない。

ちゃんと僕なりに動いているんだ。

むしろ過労に感じるほどなんだ。

そんな状況なのに食べられないもんだから体重も増えるはずがない。

なんなら気を抜いてご飯を抜いたりするとあつという間に1キロ

2キロ減るからおつそろしい。

僕は前からだるかったり熱中したりしてると食べるのを忘れるから気をつけなきゃなんだけど……こんなこと言ったら肉体的な同性のほとんどを敵に回しそうだけどな。

でも太れないっていうのもそれはそれで厳しいものがあるんだ。

この苦しみはこうなってみないと分からないもの。

僕だって前から知識としては知っていたけど「ふーん」でおしまいだったもんな。

一時期はまってたトレーニングのときに買い貯めてあつた牛乳とかと混ぜて飲むあれとか試してみたけど、気持ち悪くなっただけだしな。

買いすぎてもつたいいことをした。

飲み物なら……お酒ならいくらでも飲めるのにな。

「……………」

「？」

僕の目の前で僕の食べかけだったサンドイッチを……僕の口がついたところは切り取ってあるけど、それでも平気そうに頬張っていた少女は首をかしげる。

……そういえば目の前でじつと僕の食べ残しを見つめているこの食いしんぼさんもまたぜい肉が限りなく少なそうな体だよな。

薄着だからはっきりわかるけど肩周りとかふとももとかが子供のそれだ。

もう少し肉をつけたほうがいいぞ、肉を。

女の子はちよつとだらしないくらいがちようど良いんだって思うしな。

まあこの僕が言えた義理じゃないけど。

◇

「あ」

女の子はいつも唐突に声を上げるからいつもびっくりする。

けど今回はびくってならなかったから安心。

「……どうかしたのか？」

「よく考えたら私……ごめん」

「？」

「食べるごととかってお医者さんとかお家の人とかか言われてるよね……体力のことかも。 ちよつと無責任だった……」
しゅんとしている関澤さん。

あ——……確かに本当の病人相手ならそうなるか。

「いや……平気だよ。 僕は気にしていない」

「ほんと？」

罪悪感って言うのはこういうちよつとしたところで突き刺さる。

「今のところ、順調……に回復してきているし。 体力がないのと少食なのは……あとこの背の低さは元からだしな。 君が気にする必要はないよ」

「……そう？ ならよかった」

「……………」

「……………」

しんとなる一瞬。

こういう一瞬は気まずい。

「じ……………」

けど、ぱつと表情を明るくしてわざとらしい声で伝えてきたのは……もういつこ残ってる僕の食べ残し。

半分以上食べちゃったやつ。

……本当に食べるの？

ていうか食べたいの？

そんなにはらぺこななの？

そんなに成長期なの？

いやしんぼなの？

……どれだけ食欲旺盛なんだろう。

僕とたいして変わらないその体のどこに収まるんだか教えて欲しいくらいだな。

「……これも？ いや、違うのなら別に」

「ありがとう——!!」

うるさい。

しようがないからまたナイフとフォークで僕の口が突いた部分を切り分けようとする。

「響つては潔癖？」

「……一応他人の口がついているのは食べないほうがいいんじゃないか？」

「んむ——……」

なんでそこで不満そうなの？

気がついたらお皿を手元に寄せて今にもかぶりつきそうな感じでこつちを見ているゆりか。

まああちらにとって僕は友人の枠らしいし、確かに同学年の同性つて見られてるならそういうの気にしないのかもな。

そうは思うけど僕の両手は止まっている。

困った。

尿意だ。

突然の尿意なんだ。

「？」

ゆりかが見てくるけど気にする余裕が無い。

全身がアラートを発しているんだ。

この体になってから本当にいきなり襲ってくるようになってい気がする危機感。

なんとというか……気を抜いていたらいきなり膀胱にずしんとくるような？

で、あわててぎゅつと締めないと漏れてくるかもってなるの。

前はなんとなくトイレに行きたくなってもそこから1時間とかぜんぜん余裕だったんだけどな。

なんならちよつと経つと忘れるくらいだった気がするのに。

前に不思議に思つて調べたら、なんでも女性の体の排尿を抑える筋肉は男のそれよりもかなり弱いらしい。

くしやみで出ちやう人もいるんだとか。
女つてやばい。

僕はまだそんな経験はないけど、それだつてこうしてちよつとでも
行きたくなつたらすぐに行くからだし万が一はあり得る。

それで漏らしでもしたら1週間は落ち込む自信がある。

それに、外だけは絶対にダメだ。

それにそれに今は知り合いのゆりかもいる。

まちがいに立直れなくなるだろう。

2回目の引きこもりは避けたいところなんだ。

「済まない……少しトイレに。 食べるぶんは自分で切ってくれるか
？」

「あ、うん。 分かった、そーするね」

かちやかちやお皿とかを押しやるとイスから飛び降りるように
して……何でもない風を装いつつ全力でトイレへGO。

「……………」

なんだか変な視線を感じるけどとにかく今はトイレだトイレ。

トイレさえできなくなつたら僕は男どころか人としての尊厳を
失ってしまう。

立って歩き始めた途端にゆるくなつてきた感じがあるしで膀胱を
刺激しないようにしながら、でもすばやく向かう必要がある。

……来たとき、事前に場所を意識しておいてよかった。

じゃないとところどころの仕切りで視界が遮られているせいで矢
印とかぜんぜん見えないしなあ。

あー、だからお店とかでよく子供が迷子になるのか。

そりゃあそうだ、親の後ろに誰かが入っちゃつたら見失うもんな。

それでわたわたしてるうちに角を曲がっちゃつてとかそんな感じ
なんだろう。

大きくなつてから小さくなつたからこそ分かるそんな仕組み。

トイレで夢中の僕の頭の中は変に高速回転している。

帰りがけにご意見書とかに書いておきたい。

看板とかサイン……足元とはいわないからせめてもつと低いとこ

ろに設置して欲しいって。
迷子防止です、って。

◇

「うわ」

僕は絶望した。

トイレは片方だけに行列ができている。

もちろん女性のほうだ。

ドアの外に……えっと、何人かが群れを成している。

その全員がうつむいてスマホを操作している異常風景。

タイミング悪かったみたいだあ……。

立ったままだと危ないから1回戻って時間が経ったらって思ったけど、それだとなんだか危険な気がする。

「……………」

見回しても残念なことに共用トイレはない。

まあただのファミレスだからな。

今どきでも新しいところとか大きいところとかじゃないと飲食店なんかには無いよね。

こういうときはむしろ小さいお店の方がトイレがひとつだけだったりして遠慮は要らないんだけど……しかたない。

僕は覚悟を決めて足を踏み出す。

……男のほうはいつものようにがら空きだし、こっちでいいや。

いちいち髪の毛を出して整えてしまっただけで整えてがめんどくさいから、あと恥ずかしいからこうして屋内で会っているときとかもずっとパーカーとズボンでぜんぶ隠しているのが役に立つん。

肉体は女だけど女未満の幼児だから女な特徴の胸もおしりも無い僕だ。

ちよっとお行儀悪い気もするけど「これはファッションなんだ」って言うってお店の中でもフード被ったままの人だっているくらいだし、別に不審に思われやしない。

子供つてのもあるな。

この時ばかりはこの小ささに……感謝してやらない。
でも女だつてのはバレやしないだろう。

相手はみんな立ったままスマホしているんだしのぞき込まれない
限りは問題ないはず。

バレる要素が顔と髪の手かかないつていうのは悲しいけど、こうい
うときには役に立つな。

……男ならこういう苦労がないのになあ。

女つてだけで大変つて言うのの意味がちよつと分かる。

けど今の僕は便利な仕様だからすいすいだ。

並んでいる女の人たちを尻目に入つていくと……そういえば最近
は毎回共用トイレを選んでいたからひつさしぶりな男のトイレ。

この雰囲気懐かしいまでである。

「あ」

僕の足が止まる。

……………。

……立つてしている人のおしりとアレがちよつと目の高さになる
ことに気がついたんだ。

僕は嫌な気持ちになつた。

とても不快だ。

すさまじく気分が悪い。

僕はなんだつてこんな目に遭うんだ。

世の中は理不尽に満ちあふれている。

久しぶりに誰かに対して文句を言いたくなつた僕。

……トイレに入つたらいきなり視線の先に来ることになるらしい
のを知る。

今はさいわいにして誰も居なかつたから現物を見ずに済んだけど
油断はならない。

ズボンを下ろしてする人も居るから警戒しないと。

この視線の高さだとちよつと……見たくないのに見ちやうことにな
るもん。

嫌に決まってるじゃん。

頭を振って急いで個室に向かう。

……にしてもこの仕切りもない陶器のこれも見るの久しぶりだな。ずいぶん見なかった気がする。

「……………」

最近、こういう上の方は隠す気もなくてこぼさない程度の覆いしかないやつが増えたような気がする。

確か、これだと前に立つから掃除が楽になるんだっけ？

そんな記事を読んだ気がしないでもない。

まあ僕には……少なくとも今のところは縁のなくなってしまうものだからどうでもいいか。

毎回座つてするのも面倒だし早いうちに戻りたいけどなあ……。

せめて性別だけでも戻つて、あわよくば僕の子供のころの外見にはなつて欲しい。

そうすれば……20年後くらいには「歳のわりに若く見られるんです」つて言つて大手を振つて外に出られるかもしれないだし。

理想は起きたら元の体だけ。

そのための下着姿同然の寝間着だ。

かちやり。

「ふう」

個室の鍵を下ろしてひと安心。

すぐにできるからよかったけど、でもやっぱりトイレは男のほうがなにかと。

ほんとうになにかと楽なんだなあ。

……なるほど、トイレのことを考えたらやっぱり女の格好は止めておいた方が良さそうだな。

髪の毛を出していたりスカートだったりするとさつきみみたいな場面で不利なことになるんだ。

そんな格好だったらこっちに入るときに見とがめられるだろう。

やっぱり女装は進んでするものじゃないな。

けど、しなきゃならないときつてあるからなあ……。



「……………」

じゃあああああーつと水の音が響く。

僕のおまたの下から、水面から。

……………すつごく恥ずかしいんだけど、これ？

誰もいないって分かっているけども恥ずかしいんだけど……………？

なんなのこれ……………？

男のときだったとしてもそもそも立ってできたし、座ってするにしても向きを調節できたから消音できていたのに……………ホースが無いもんだから方向も勢いも自然のままだ。

今まで家でも共用トイレでもまったく気にも留めていなかったんだけど、音……………派手に響くなあ。

完全な個室じゃないんし当然といえば当然か。

なるほど、音姫さん機能は必需品だな。

しやあああああ。

「……………」

最初のいちばん勢いのあるのから少しずつ衰えてくるけどまだまだ音は止みそうにない。

反響してる気がする。

天井を伝って外まで。

そんなわけないんだけどそんな気がしてならない。

そわそわする。

いや、さつきまでは誰もいなかったけど来ているかもしれないし……………って思っちゃって。

相手はどうせ僕のことを男だと思っているだろうから「よっぽどガマンしてたんだなー」ってくらいにしか思わないだろうけど、それでもなんだか恥ずかしい。

個室から出たらバレるしな。

ふとももをぎゅっとして音を閉じ込めて量を抑えようとは努力し

ているけど、どうやらあまり効果はないみたい。
無駄な抵抗だ。

……なんでこんなに響くんだろう。
男のときなら根元のほうで水量だけなら本能的に簡単に調節でき
たはず……だったんだけどなあ。

とつても便利だったんだ。
けど、今はどうにも抑えられない。
困った。

しかもさつきまで肩だしレモンさんに合わせてがんばって飲んで
いたから、まだ止まらない。

あああ、止まらない。

ふとももにびしびしと生暖かい感触。

……終わったら拭くのも大変そうだな。
女って不便だ。



「あー……おなかいっぱい。　ごちそーさまー……」
「……………」

結局男子トイレには誰もいなくてよかったって安心して戻ってき
たら、関澤さんが僕のぶんまで平らげてぐてーつとしていた。

ご丁寧に食べ残しのところまで、きれいに。

いや……切りなさいって言ったよね？

聞いてなかったの……？

捨てるのはイヤだったから残飯もとい食べ残しの処理はありがた
いんだけど……このくらいの子たちって口がついているのとか気に
しないんだなあ……。

スイーツとか分け合って食べたりもするんだろうか。
するんだろうなあ……。

食べさせ合ったりするんだろうなあ……。

だって女の子ってそういうもんだって言うし。

「たったの600えんちよい、かつこ税別。　そんだけでこれだけ食べてジュースいっぱい飲んで何時間でもいられてさー……ファミレスは最高だああ……」

そんな僕のじとーつとした目つきにも気がつかない食いしんぼさんはお気楽だ。

薄着の下でおなか膨れているのが僕からでも分かるくらいになっっている。

どれだけのものがこの子のお腹の中に吸収されたんだろう。

「1. 5人前……いや、もうちよつとか。　さすがに苦しくないか？」

「へーきへーき、私、食いだめとか得意……うぷ」

「……………」

「ちよーつと時間経って、動いたらすぐ消化されるって」

「……そうか」

ちよつと心配だけど別に顔色も悪くないし、単純な食べ過ぎの様子。

……これが若さか。

正確には健康的な若さ。

良いなあ。

体と心の両方が若いっていうのもありそうだ。

僕のように半分だけっていうのとはワケが違う。

本物の子供だもんな。

……成長期。

羨ましい限りだ。

17話 学生たちの、夏休み(2) 1/3

同性でも胸って言うのは気になるものらしい。

普通の仲程度でも普段の会話で日常적にお互いのそれについての言及があるとか無いとか。

僕に対して堂々と自分から言ってくる当たりすごいよねこの子。

「そう……」って反応したけど他にどうすりや良かったのかさっぱりだ。

そんなことをいつか言つてのけてきたメロンさんのダブルメロンが跳ねる。

レモンさんのダブルレモンとは比べものにならない存在感だ。

……いやだから僕の身長的に目線のド真ん前にあるもんだからしょうがないって。

このあいだ言われたばかりだし。

「今日もまたいつそう暑いからねえ……。夏休み入ってからずっと真夏日じゃないの、も——……」

「ああ、暑いね。ゆだりそうだな、毎日毎日……」

「本当よねー」

そんな彼女も暑くはなるらしい。

当然か。

動物だって暑かったら木陰に行くもんな。

「なら、もっと涼しくなつてから歩かないか……?」

「それとこれとは別よー!」

「そうか……」

動物の本能も通用しないらしいメロンさん。

そんなここ最近の会話だ。

「夏休みで暑いし家の中でじっとしてたら?」……そんな提案は即座に却下されてこうして出歩くハメになる僕。

その元凶はわざわざ外を歩いて回ろうってしつこく誘ってくるかがり(大)。

女の子っていう身分になつてしまったんだし、いつそのこと日傘で

許してほしい。

「はあ……」

「♪♪」

「はあ——……」

「楽しいわね！」

これ見よがしなため息もまったく通じない。

僕に演技の才能は無いらしい。

今日は下条さんの呼び出しのせいで電車でちよつと行ったところの大きめの繁華街。

テレビで最近よく見る女性に人気のスポットとやらだ。

「人気って作られてるんだよ？」って言っても通じなかったからもうダメだ。

来る前はめんどくさすぎて鬱々してたけど、いざ着いてみたら結構珍しいもの。

ぱつと見て町並みがどこかきれいなのとカラフルな感じなのと、あとひたすらに横文字でショーウィンドウまで来ないと何を売っているんだか分からないような店が多い気がする。

興味がかけらも湧かないけど観光地で写真を撮って回る気分になればなんとか乗り切れそう。

当然ながら歩いているのは女性が圧倒的。

男は少なめで、ただ通りがかっているだけか女性の付き添いできているって感じ。

ちようどデパートとかのベンチでたむろしているような、だるーい表情が目立つ目立つ。

僕もおんなじ気分だしおんなじような顔しているんだろうなあ。

ご苦労様だ。

お互いにねぎらいの視線。

……すぐに逸らされた。

通用しなかったらしい。

悲しい。

一方で元気そうなのはキャラそうなほんの一部の人だけ。

男とはそんなもんだ。

もちろんそんな奴らは今を楽しんでいるわけじゃないだろう。

女の子と一緒にいるのを楽しんでるだけなんだ。

あるいはこの時間を楽しそうにして乗り切ればって思ってるだけ。

男なんてしょせんは単純な生きものなんだ。

でもそんな夢も希望も持ち合わせていない僕はただただだるい。

だるいのはともかくこういうスポットっていうところは僕には生

涯縁のないエリアだと思っていたから不思議な感覚さえしてくる。

興味をそそられるお店がひとつもないのに来るって言う不思議

さで。

なんで僕はここに存在しているんだろう……。

哲学的な問いかけが僕の中に芽生える。

まあ実際に歩いてみればなんのことはない。

きれいなめな繁華街がみんな女性向けのお店で埋まっているだけの

こと。

ただそれだけだ。

道のマイルまで徹底的にきれいになってるあたり本気度がうか

がえるというもの。

こういうのって町の設計段階からぜんぶ仕切ってあるんだろうか

？

「やだっ！」

「……………なに？」

「やだっ！」の「やだ」の発音は悲鳴とかじゃなくて鳴き声だ。

つまりは彼女の感情の揺れ動きが脳みそから口へと直通で出てき

ただけのこと。

そう理解しておかないと疲れる。

「見て見てほら！ 見て見て響ちゃん！」

「……………」

「これもかわいいわよー！」

「……………そうだね」

「やっぱり!? そうよねー、かわいいわよねー！」

「……………はあ……………」

めんどくさい。

投げやりな返事でも満足するからまだましか。

いちいちなにかを見つけては急に立ち止まっていちいち僕に同意を求めてくるかがり。

とにかくいちいちめんどくさいという他ない。

個人の意見というものを聞きたいのか聞きたくないのかどっちなのかって問い詰めたところ。

それすらめんどくさいからしないけどな。

さっさと終わらせたかった。

駅から少し歩いてきたけど、どこもかしこも女性が好きそうな小物とか服とかスィーツとか……ひと言で言うとなんか僕が興味を持たない感じじゃないお店だけしか無いからやっぱりだるんってなる。

好き好んで買いたいものはないし、買い食いとかも旅先でしかしたことないしなあ。

休日にごどこか近場に行って買い物して……っていう過ごし方なんて僕は知らない。

おかげで今すぐにでも引き返してベッドかビーズに潜りたい気持ちでいっぱいな僕。

たいして歩いていないのにすでに疲れがすごいことになっている。

気持ちの問題だ。

帰りたい。

帰れない。

「これも欲しいんだけど、ちよーつとお高いのよねえ……。 厳しいわー」

「……………」

この子に裏は無い。

「買って欲しいなー」って言うのじゃ無くってただ本当に「これも欲しいんだけど、ちよーつとお高いのよねえ……。 厳しいわー」っていう思考が口から出て来ているだけだ。

そんな中くるんさんは元気なことこの上ない。

中学生って元気だな。

ほとんど1軒ずつといった調子にお店から出たら隣のお店に僕を引っ張って突撃。

端から端まで隅から隅まで品物を見て回ってずーっと僕に感想ではなく同意を求めてくる。

こういうときはほんとうに男女の感性の差っていうものを痛感すると同時に僕の脳みそはまだ男で居られてるって言う安心感。

下条さんと会っているあいだはいつもこんな感じ。

関澤さん相手なら……彼女が追っているという番組とかゲームとかいった僕でもそれなりに楽しめるもので一応は会話というものを楽しむこともできるんだけどな。

「今週のマンガもう読んだ？」とか「ゲームどこまで進んだ？」みたいな話す内容がどう考えても小中高生の男子が盛り上がる話題しかないあたり、まるで僕みたいに「実は中身は男でガワだけ女の子なんだ……」とか唐突に告白されたとしても驚かない。

それくらい楽にラフに居られるからレモンさんの相手は楽。

その分の女子力的なものがぎゅっとメロンさんには詰まっているらしい。

男の感性。

常識が通じるというよりメンタルがどっちかって言うとなりに近くて、たぶん小学校のときから男子に混じって遊んでいる感じの女子だろうレモンさん。

あの子なら普通に話を通じるんだけどメロンさんはそうもいかなるのが困る。

いわゆるゆるふわ系女子ってやつだな。

あまりよく知らないけどイメージ的にそんな感じ。

ゆるゆるふわふわさんとなんにも考えないで話そうとすると、選ぶ話題も話している感じもなにもかもが微妙に食い違って結局めんどくさいことになる。

かがりは期待していた返事が来なくて不満になって僕はどうしてそうなるのかが分からないというどうしようもない状態になって、結

局は僕がこうやって面倒を見る感じになってめんどくさいんだ。

試行錯誤したり「初めての彼女を作ろう！」的なものを読んだりしてどうにかこうにかそういうのはだいぶ減ってきてはいるんだけど彼女いない歴な僕なもんだから難しいこと。

まだ大学の理系の科目をやれって言われた方がやる気も上がるつてもんだ。

ゆるふわさんが持ってきた雑誌を一緒に読まされていて「おいしいスイーツとやらを食べに行きましょう！」って言われて「けっこう並ぶみたいから僕が空いている時間に買っておくからどこかで食べよう」って至極真つ当で常識的で効率的な提案をした途端に機嫌が下がっていく感じとかもうよく分かんない。

なんなの？

本当に感情でしか生きてないの？

頭と2個の胸と2個のお尻の中にはわたあめでも詰まってるのこの子??

こんな子を見て親御さんは平気なの???

なるほど、モテる男とそうでない僕らとのあいだにはこうした女性っていう不思議ななにかに対する理解と忍耐と努力がなにもかもが違うんだな。

「そんな努力とかするくらいならそれなら別に一生独り身でいいや……」って思っちゃうあたりが恋愛に興味ない男という僕たちみたいな人種。

今の時代の結構な勢力だ。

まあお互いさまなんだろうけど。

そういうわけでもなく下条さんと会うときは関澤さんのときの……最低でも倍以上は気を遣うことになって、それはもう疲れるもの。

だけど1回、その扱い方っていうのをわかってくると途端に相手するのが楽になってくるからおもしろい。

ふたを開けてみればなんと言うことはないんだ。

要は一緒にいるときに体験していることとか話していることとか

見ていることとか感じていることとか、そのすべてを同じように感じる努力をするだけ。

つまりは「わかるー」というこのひとことに尽きる。

いやほんとうに。

ほんとうは分かっていたいなかったとしても「分かる」って言うっておけば解決しちゃうんだ。

ちよろいのか複雑なのか分からない。

しかも中学生でこれってことは高校生でさらに進化して大学生でどうにかなるんだ。

大学でおとなしくしておいて正解だったな。

だから困ったときにはとりあえずで「わかるー」に似ているニュアンスのなにかを口にしておけば間違いはまずない。

「分かる分かるー」っていう万能の言葉を手に入れたから難易度はがた落ちでどうにか一緒に居られている感じ。

それだけで頭を動かすのを止めておいて、でもときどきは察してかがりが言いたいだろうことを言っておげさえすれば機嫌も維持できるし手を引っ張られて歩くことも減るし……服屋に押し込められることも少しだけは減る。

全部は減らないしときどき適当なのがばれて怒られたり着替えさせようとしてくる。

そんなものだ。

◇

「うん、いいな」

「うん、似合っていると思うよ?」

「かわいいね」

「うんうん、かわいい」

「僕もそう思うよ」

「僕もそれが合うと思ってたよ」

微妙にニュアンスを変えながらの返事。

ふう。

ぼーとしながらオートで会話してこんな返事だけをアレンジして繰り返しているだけで今日もくるんメロンはごきげんだ。

たったのこれだけでもう30分くらいは稼いでいる。

そうでないと着せ替え人形再度だからな。

必死になつて勉強した甲斐があつたというものだ。

これで将来に彼女とかができた場合にも不安にならずに済む。

その前に体をどうにかしないとだけだな。

幼女が女の子と付き合いたいとか……いや、今の時代ならアリなのか……？

女子校とか行けば実現できちゃう……？

「……………」

いやいや、お金とか戸籍とか親とかどうするのって以前に学校はめんどくさい。

「……あ！ あそこの屋台、あのジェラート!! 並んでるわよ!」

「人気がみたいだね。暑いし、冷たいの食べたくなくなってきたな。並

ぼうか」

「そうね！ なら響ちゃん、早く早く!」

うまく視線を誘導してお腹にたまりそうなものからアイスっていう半液体な半固体で気を紛らわせることに成功しつつある。

暑いのは確かだしな。

それもこれもこの炎天下をわざわざ歩くからなだけだ。

「楽しみねー」

「分かる」

さて、なにも入ってなさそうな下条さんはおいしいものに弱くて空腹に弱い。

ほとんど同じ意味なんだけどとにかくそんな感じだ。

だから「食べたい……」ってぽつとでも言ったりぼーつと見ていたりでもしたら、食べないという選択肢はない。

まあお金に困ってるわけでも無いしちよつと食べて残りは押しつけてたらいいもんな。

ここで「そう……」ってスルーするとだんだんと口数が減っていつ

たと思つたらいきなり不機嫌になるんだ。

最初のころはなんでそうなるのかが分からなくってほんつとうに悩んだもの。

女性は言わないで察して欲しいらしいんだけど、それなら女性のほうは男性の察するというのが自分が難しいんだっていうのを理解はしなくてもいいけどせめて知っておいて欲しい。

たったひと言「こうしたいの」とか「こう言つて欲しいの」って言つてくれさえすればなんとでもなるのになあ……。

だから熟年離婚とかになるんだ。

違うか？

まあいいや。

今はなにかおいしいものを見つけさえすればいいって知ってるからちよろいもの。

ちよろんメロンだ。

犬とか猫とかそんなイメージ？

とりあえず満腹にさせておけばいいみたいだな。

つまりは野生動物みたいに空腹だけを避けるべし。

散歩中言うことをきかなくて飼い主をぐいぐい引つ張っている大型犬を見かけることがあるけど、僕の中でのメロンさんのイメージは完全にそれだ。

でかいのも一緒だしな。

飼い主さんもと親御さんはもつと躰して？

こういうのは女性の特徴だとも思つたけどよく考えたら肉体だけは僕も女だし、たぶん精神的なもので脳みそ的なものなんだって結論づける。

僕は甘いもの食べなくてもめんどくさくなくなって適当に2、3食抜いたりしても別にむしやくしやくしてきたりしないしな。

女性ホルモンのせいなのかもな。

この1歩ごとにたゆんつとしていいる胸とおしりを見ていればなあ……。

同性の女性ですら結構な頻度でメロンさんを見てるし。

下条さんの顔に目が行って髪の毛のくるくるんを見て体を見て僕に視線が行ってからもう1回彼女の胸のあたりをガン見するのが今日だけで何十回。

女性視点でも相当に詰まっているらしい。

そういえば男っぽいレモンさんもやはりレモンだし合っているのかも？

僕もさくらんぼだしな。

なるほど。

そんなどうでもいいことを考えながら体と口はオートで対応させている器用な僕。

「もっというんな味乗せなくていいの？」

「ああ、お腹壊しても困るしね」

つまりはいろんな味を食べたいってこと。

でもめんどくさいから今は無視しとこ。

手元にはいつの間にか買ったアイス。

僕のコーンの上にはふたつの丸いのが、そしてメロンさんの手には4つが乗っている。

そういうことになったらしい。

そう言えばそうだった気がする。

周りの女性たちに習って適当なところに腰掛けて、ぎりぎり足がつか高さで口の中に冷たい味としやりしやりとした感触が来る。

しやりしやりしやりしやり。

しやくしやくしやくしやく。

アイスとシャーベットか……なるほど。

食べる前にみんな自分たちの顔とアイスを画面に収めているのがおもしろいくらいに同じだ。

そしてかがりは座ったそばからまずかぶりつく。

……よかった。

この子が「なんとか映え」ってのに興味なくて。

「あ——……。冷たくて甘くて。おいしいわね……」

「夏はやはり冷たいものだね……」

それだけには同感しつつものすごい勢いでしやりしやりしやりしやりしやくしやくしやくしやくと食べ続ける音が耳もとで聞こえる。

ちよつとこそばゆい。

流行りのASMR的な？

とか思っていたらピタリとそれが止んでなにやらのうめき声を発し始める。

……大丈夫？

頭が。

いや、流石に失礼かな？

「……………！……………キーンってするわあ……………。響ちゃんは大丈夫？」

「僕は奥歯で噛まないようにしているし、それほどは」

「そうなの!？」

経験則で口の前のほうだけで食べるようにすれば平気だと知っている。

なんでかは知らない。

僕だけのものかと思っていたけど今の体でもそうだしな。

前歯はかなり冷えるけど頭痛よりはマシだろう。

あと、そんなにながつついて飲むみたいに食べないっていうのもあるとも思うけどなあ。

言っただって治りやしないだろうし、聞いても聞かずにおんなじようにかぶりついてはぎゅーっと目を閉じてるしどうしようもないから静かに食べていよう。

とりあえずは体力を回復しないとだ。

この子の相手はとにかく疲れるからな。

◇

「ふたりともお綺麗ですね！ お洋服もおそろいでお手々もつないで……仲いいんですね！ 親戚の方とか、ひよつとしてご姉妹だったり

しますか？ 最近はそういう方たちをたまに目にするので！」

「え、えーつと……」

お店の中、店員さんがするリップサービスを真面目に捉える憐れな下条さん。

「……………」

つながれた腕の先から振り返ってくる。

ちよつと困ってはいるけどどちらかといえば嬉しそうな感情がにじみ出ている。

どこをどうしたら姉妹なんだか。

けどまあいちいち説明するのも面倒だし……なによりこの場の選択肢はこうすれば良いって理解している。

「そんなところですよ」

「まあ！ いいですね！ 利発そうな妹さん？ ……いとこさん？」

……でうらやましいです！ どおりで雰囲気似てるって……」

買わせるためのお世辞で心の底から喜んでるらしいくるんさん。似ている？

僕とくるんが？

どこが？

……女性の価値観はほんつとうに分からない。

顔も髪も体もなにもかもがぜんぜん違うのに。

あと雰囲気だけはぜったいにない。

ありえないな。

絶対だ。

この僕のどこがネジの緩んでいるゆるふわだ。

髪の毛を隠してズボンなら弟、そうでなければ妹。

関澤さんと出かけるときはそんなこと言われもしないのに、こうして下条さんと出かけるとほとんど毎回、それも何回もおんなじようなことを言われる。

いやまあ手を引かれておとなしくついて行っているっていう光景がそう移るんだろうけどさ。

きつと「姉妹くらい仲が良いんですね」っていう意味なんだろう。

そう翻訳している。

けど、僕がくるんメロンさんと似ているって言われるたびに……なにかこう、心にもやっとするものが広がる。

「……………」

高校生と見間違える背丈とファッションセンス、でつかいおっぱいにおしり。

いいなあ。

身長と体重と胸とおしり、ちよつとでいいから分けてくれないだろうか。

どうせすぐに増えるんだろうし、少しくらい良くない……？

17話 学生たちの、夏休み(2) 2/3

「……………」

「♪」

アイスとかってカロリー高かった気がする。

いちいち何かにつけて「カロリーが」って言うんだから止めといった方が良いんじゃない？

そう思うんだけどこの子みたいな女性とか女の子とかいう存在らしい存在は理由をつけて食べるだけだろうし……別に良いや。

でぶるのは僕じゃ無いし。

僕こそがでぶりたいんだけどなあ。

ああいや、でも標準体重越えは何となく嫌だしやっぱり普通で良いや。

そんなくるん子さんは僕の倍のアイスが乗っていたのに僕よりも早く食べ切って、そして例のごとくやっぱりお腹がいっぱいになってきてどうしようか迷うあのさくさくしたコーンの部分もさくさく平らげでご満足そう。

食べてるのを見てるだけで僕も満足しそう。

満足しちゃった。

やっぱり食欲か。

その栄養がメロンへ繋がるのか。

……アイスならなんとか食べられそうだし、僕もこれで肥えてみようか？

けど食べ過ぎてもお腹を下して栄養がだだもれになっちゃいそうでなあ。

包み紙のところをなんか折り紙みたいにして遊んでたけどやっぱりゴミ箱へぱいっと捨てに行く。

行動のいちいちが新鮮だからって見入っちゃってたけど、彼女が戻ってきたから気がついたことをひとつ聞いてみることにする。

「ところで下条」

「かがりよっ」

「下条」

「むー、かがりだつてば響ちゃんっ」

どうしても下の名前じゃなきや嫌なんだって。

関澤さ……ゆりかもおんなじだけど、どうして女の子ってそういうのにこわだりが強いんだろう？

男ならその辺どうでもいいのにな。

「……………かがり」

「なーに？ 響ちゃん。 あら、アイスおいしかったわね！」

「そんなに買って食べて……お小遣いのほうは大丈夫なのか？ いつも随分と使っているけれど」

「……………あら」

複雑な表情できたんだ……って思うほどにレアな顔をしてぱつと反らした彼女視線の先には服屋と小物屋と香水屋とかで買った紙袋がずらり。

駅を出てたったの30分歩いただけでこれだ。

僕だったらもう重くて動けなくなってる量のお買い上げ品一覽。

どれもそこまでの値段じゃないのは一緒に連れ回されて「いいね！」botをさせられてたから知ってるんだけど、こんな感じで買い食いまでしてこのあとのお昼もあって。

……いつもこんな感じなんだけど、ちよつと羽目外しすぎじゃない……………？

中学2年生のはずでしょ……………？

高校生ならまだしも……いやいや高校生でも毎回こんなに豪遊できるの……………？

おこづかいいくらなの……………？

そう思ったんだ。

僕るときは月に千円くらいしかもらってなかったけど今の子は違うんだろうか。

まあその辺は家によるとしか言えないしな。

僕みたいに小学生で500円からってコースもあれば「お年玉なの？」って金額をもらってる子も居た気がするし。

子供自身としてはそりやあ多い方が良いんだけど……金銭感覚が決定的に狂いそうだよなあ。

少なくとも今の僕みたいなプロニートを続けるための清貧な生活なんてできないだろうし。

それはともかくこの子の金遣いはちよつと、いや大分荒い感じがする。

浪費癖がつくとこの先が地獄だ。

ちよつと年上として……あくまで年上として、釘を刺しておかないといけない。

この子つてば頭がその辺に生えてるお花みたいだから「お金たくさんもらえるよー」つてだまされていかがわしいお仕事平気でしちやいそうだし……心配じゃん……すつごく心配じゃん……。

「今朝親御さんにねだつたと言っていたけど、いったいいくらだ？」

「あの、えつと」

「そこまで買うとそれなりの値段になっているはずだけど？ レシート捨てていなかったのは偉い、見せてくれないか？」

「ひ、響ちゃん？」

「ひとつひとつは安いものだけど僕が見た限りでは7、8千円くらいにはなっているんじゃないか？今日の買い物だけで」

「違うわ、6千と……」

「6千円。大学生が真面目に働いて6時間の金額か。毎回そんなに使って何も言われないのか？」

こういうときはたまたみかけるに限る。

たまたみかけられて学習したんだ。

それに正論つてのは強い。

こうやって押し通せるんだもん。

今の時代はロジハラとかいう謎の論理があるらしいけどそんなのどうでもいい。

これは年上の友人からの真剣な忠告だもん。

どうせいつものように「だって」とか「でも」とか「ところで」とか「思い出したんだけど」みたいなこと言って強引に打ち切ったり話

題を変えようとするだろうからって思っていたから、息継ぎなしでひと息で言っただけの優しい僕。

だまりこくったメロンかがりをじっと見上げる。

彼女の瞳の中にその反対の色の僕の髪色が映る。

でっかいメロン……じゃなくて、僕でもお洒落って分かる服装の私服はいつも新しいパーツになるし、言葉遣いとか話のところどころに出てくる言い回しとか雰囲気とかはちゃんとした家って気がするし、余裕があっただけのお金多めにもらえる家庭ではあるんだろう。

でも中学生からそれはちよつとまずいんじゃない？

いや、他人の家の教育方針にとか言われたらしようがないんだけども。

でもこの子だつて中学生。

中学生ってことはあと10年以内には絶対……ほぼ確定……多分……きつと家を出て働いてるんだ。

この瞬間も全力で働いてない僕のことがあるから強く言えないけどたぶんそう。

んでこの調子で育っちゃって就職したら、お給料の大半を生活を切り詰めての買い物三昧とかなんとかかりボみたいな陰謀でにっちもさっちもいなくなる生活がおぼろげに見える。

それはちよつとかわいそうだ。

メロンしか育ってない未来が見える。

「えつとね、大丈夫なのよ。平気なのよ、これは。ええ、響ちゃん。

念のために貯金もしているし……」

「ほんとうかい？」

「え……えええ」

目が泳いだ。

分かりやすいなーこの子。

しれつと嘘つくような感じじゃないだけ良いのか。

「まだ夏だよ？ 今年はまだまだ残っているよ？ 次のお年玉まではかなりあるんだけど、ほんとうに残っているのか？」

「あう」

「毎回の外出で毎月の小遣いを使っているように見えるけれど？ それほもう、夏休み前からだな」

くるんくるんとした髪の毛の先がしおれて行ってアイデンティティを失うかがりさん。

微妙な表情になって目線は外したままな元くるんさんは指をもぞもぞしたりしている。

……悪いことできそうな子じゃないのは良いんだけどなあ……。

「毎回服を買っていたらいくらお金をもらっても終わらないよ？ 大人ならまだしも、君たちの年頃はまだ背が伸びるだろう？ 来年には今日買ったものも使えないかもしれないよ？」

身長は充分高い……多分160超えてるんじゃないかな、中学生の女の子なのに……どうも食べたものの栄養が胸とおしりに行く体質らしいし、その服もぱつつんぱつつんになりそうだよ？

「……実はね」

「うん」

「けっこう……そのね？」

「うん」

「まずいの……」

だろうね。

しおれた毛先をいじいじしだすしおしおさん。

あ、髪の毛そうやると気が紛れるよね、分かるー。

……じゃなくなつて。

最近思考まで汚染されて来たのに困惑。

「夏休みに使うはずだったお金も……あとお年玉も……秋までのおこづかいも」

「……………」

「もう、ほとんど残っていないの」

ああ……。

「やっぱり」

使い切るどころか前借りにまで手を出していた様子。

それなのに今日みたいにお金をあげちゃう親も親だな。

多分相当に甘いんだろう。

前借りさせるくらいだもんな。

「でもね響ちゃんー！」

「うん」

「でもでも、夏休みじゃないとこんなふうに出かけられないし！ 今使っておかないと当分使う機会もないのだし！」

「貯めておけばいいじゃないか。欲しいものはキリがないんだから」

「でもっ！」

なんか元気になって来たらしい。

しゃべってるだけで元気になれるとかすごい才能だよな。

くるんつと髪の毛が立ち直る。

「響ちゃんとかかけていると、その……小さいのに立派な男の子と一緒に……。……」

「……」

僕と出かけると……。

「……」

……一瞬どきつてしたけど初めのころのかみあわなさとか気まずさを思い出したら当然か。

今だって服装だけはかがりに合わせてやっとの思いで来たスカートだけど話し方とかまでは変えていないしな。

肉体はどう見ても女だけどつて言うか着替えのときに下着まで見られたから女だって知ってるんだけど、でもそれ以外は成人男性がにじみ出しているんだろう。

でもなー。

口調まで変えたら……今はいいかもしれないけど戻ったときが怖いことになるもんなあ。

こういうのって1回染みついたらほろつと出てきちゃうもんだし。いい歳した男がちよつとうわずった声で女の子みたいな話し方し

たらやばいじゃん。

このご時世だから「そういう人なんだ」って指摘されなきさうって言うのもまたやばいじゃん……。

僕はノーマルなんだ……アルファベットで自己のアイデンティティーを表現しなきゃいけない大変な人たちじゃなくって由緒正しい紛れもない真正銘の男なんだ……。

「お金も貯金箱にあったらあったで部活の帰りの買い食いとかでちよつとずつ減って行くのだし……本当にいつの間になくなっちゃっているのよ？ お金って難しいものよね……」

「そうか。大変だな」

「分かってくれるの響ちゃん！」

「ああ、少しね」

とりあえず危機感を持っているようになによりだって分かったから良いや。

あと親御さんもお金渡してるんだから毎回注意くらいしてるだろうしな。

典型的なお金に……いや、勉強とか全般かな……そういうのをみんな自己管理できないっていうよりはまだ中身は子供なんだって分かったけど。

いや、小学生でも我慢したり先を見て貯金できる子はいっぱいいるんだけどな。

この子にそこまでは求められない。

体だけが急成長して中身が追いついていないんだな、きつと。

栄養もさぞかし肉体に吸い取られているに違いない。

このまま順調に成長……いや、体は充分だから精神的に……するといいんだけど。

将来が少し心配なところだ。

「でも、ありがとう」

「ん？」

「私、いつもお金のことになると怒られてばかりなのよ」

「そうだろうね」

「だから響ちゃんみたいに優しく言ってくれる人は……あっ！」

もうびっくりするのも慣れてきた不思議な感覚。

下条さんのたれ目が向いた方向に続く……そこには女性客がわんさかなお店。

ああいう雑貨の店、女性はほんつと好きだよな。

小物が好きなんだよな。

ゲームでクリアに関係ないちっこいものを収集するって考えたら僕でも納得できる。

「響ちゃん！ あのお店行きましょう!!」

「かがり？」

「この前テレビで見たのよ！ 配信の人も言っていたわ！ 有名なんだから！ またいいもの見つかるかもしれないわ！」

「かがり、そろそろ止めたほうが……それに君は今の僕の話を」

そこでぐいっと腕を引っ張られて僕の口が止まる。

僕は僕の腕を見る。

いつの間にか紙袋を片腕に抱えて僕の片手をつかんでいるかがりの手。

いつの間にか掴まれていた。

いつの間にか。

なんでこんなに動きがすばやいだ。

質量保存の法則はどこに行った。

「分かってるわ！ 見るだけ！ ここは見るだけだから！ ね、いいでしょう!?!」

「はあ……」

「分かるー」or「いいね！」以外の選択肢が無いみたいだからのそのそと立ち上がる。

あんな人混みにあえて突っ込んでいく神経が分からないけどそれがこの子だからなあ。

ああいうところに行くって僕、女の人たちのおしりとかで顔を押しされるから好きじゃないんだけど。

男がほとんどいないから、かろうじてなんとかぎりぎり我慢できるけど。

男だと僕の顔にベルトとかの金属がちょうど当たって痛いんだよなあ。

あと見たくもない膨らみが目線だという。

女の人のかばんもよく当たりそうになるけど意外と女の人って僕のことにはすぐ気がついて避けてくれるから楽だし。

これが低身長の悲しみ。

今度ゆりかと「分かるー」しよう。

僕はbotだ。

「ほら早く早くっ」

「待ってくれ……」

せめてもの抵抗でわざとゆっくりと歩く僕。

……彼女や奥さんの買い物に付き合わされるっていうの、こういう気分なのかもな。

うんざりしてきてからが本番だというやつ。

しかもそういう関係だから機嫌悪くさせたくないって言うどん詰まり。

なまじ距離が近いぶんその辺で待っているとかできないの。

「……………」

実際に体験してみても痛感しているけどこれはきつい。

やっぱり僕は独り身で良いや。

結婚とかするにしても……相手に大きな希望を抱かない冷めた関係が理想だな。

◇

それから30分。

くるんはくるんくるんしていた。

「それでね！ その子が言うにはね！」

「そうか」

止まらないかがりの「そういえば」でつながれるお友だちとやらの話。

「それはすごいな」

「でしょ!? でねー」

「なるほど。その子はそれでどうなったんだ?」

「あ! やっぱり気になるの? そうよね、実はねっ」

以下似たループが延々と。

おしやべりには話をさせておくのが効く。

ただこうして適当に話を聞くフリをしておくだけで無駄に歩かされるのを回避できるし。

結局なんにも変わってないかわいそうな子だけど、さすがにちよつとマズいと思ったかお店の中を見るだけで買い物はせず流れるようにして喫茶店へ。

ずいぶんと連れ回されて僕はもう体が芯から重いのにこの子は元気そうでなによりだ。

「疲れたよ……」ってどうにか説得してやつと入った喫茶店。

このチャンスを逃すわけには行かなかったんだ。

僕の体力はもう限界なんだ。

でもお洒落すぎる町なもんだから外でだるんと休める場所なんかないし駅も遠いしで、高くないお値段の喫茶店。

あとはここで話でもしておけば……っていうよりは今みたいに話をさせておけば今日のところは満足してくれるだろう。

これで1週間くらい……持たなそうだよなあ……。

僕にとつてはもう丸1日経った気がするんだけど……現実ではまだお昼前なわけで2時間経ってなくてこの子にとってはまだ10分なんだろうなあ……。

相対性理論を思い出す。

時間の流れが相対的って言うところだけ。

「でねっ」

「うん」

学校外の知り合いってことで話したい話題がまだまだまだまだあ

るみたい。

適当に突つついてやればいくらでも出てきそうだし、このまま疲れさせておこう。

おしゃべりだから話していると楽しくなってくる性質でそこまで疲れないか……。

まあ外ではしごするよりはよっぽどましだからそのくらいは我慢だな。

手元には豆の香りが薄いコーヒー。

ここのお店は僕的には失敗だった。

豆を浅煎りしすぎだし、たぶんそもそも豆が古いしお湯の量が多い。

不満しかないけど……まあ所詮はチエーンだし、安いから入ったんだしで文句は言えない。

いちどグルメになってしまってもう元には戻れない。

生活水準は下げられないんだ。

……帰ったらちゃんと飲み直そう。

ちよつとだけ濃くして、ブラックで。

下条さんの会話を少しだけ聞くフリをして単語だけ拾ってかんたんな情報整理をしつつ話したさそうなところを聞いてあげる……と
いうのをぼんやりとする。

僕はそういうのが得意。

なに話したか頭を素通りするのが欠点。

……でも、ここまで振り回されてかなり歩いたけど、思ったほど疲れてない気がする。

地道な筋トレと近所の散歩のおかげで体力がついたおかげかな？

そうじゃなかったら今ごろは息も絶え絶えだろう。

春ごろだったらまず間違いなくそうなっていたはずだ。

いや、梅雨でもまだ怪しい。

少しだけ進歩かな？

……中学生の女の子の買い物についていくだけだから誇れることじゃないけど……。

えのき一本から数本ぶんになったくらいの進化。

まずはもやしが目標だ。

さて、メロンさんの手持ちはいよいよとなくなったらしい。

いつものようにセットで必ず千円は超えるような甘ったるいお店を名残惜しそうに見ながら「こつちにしましょう……」っていつものように手を引かれながら入って来たもんな。

僕の提案が通るって思ってもなかったから僕がびっくりしたくらい。

まさかスイーツを食べるお金すら心許ないなんてな。

当然お昼も食べられずまさかまさかの昼前解散だ。

……ご飯のお金使い込んだじゃうとかやばくない……？

僕が言わなくてもこの子の友だちとか親御さんにお説教だっただろうな。

でもお金が無いわけじゃないから……コンビニで買ってその辺でとかラーメン屋とかみたいなどころならぜんぜん余裕だろうけど、そういうのは好きじゃないみたいだし。

この子といるときにはものすごく珍しいできごと。

僕にとっては嬉しいことこの上ないな。

お祝いに帰ったらラーメンでも作るか。

味噌か醤油か……暑いから塩でさっぱりだな、うん。

煮卵を作っておかなかったのが痛い。

仕方ないから奮発してスーパーの煮卵を買って帰ろう。

「まだこれくらいはあるんだから！」って財布を取り出して……中のお札がほとんど姿を消していたのに気がついて本人が驚いて多少は反省もとい落ち込んでいた彼女。

カフェまたは喫茶店って言うホームグラウンドに入っておしゃべりっていう本能を出してすつかり元通り。

まあそんなもんだよね。

けど、聞いているとこういうのはよくあることらしくって、ときどきお会計で足りなくなつて友だちに借りることもあるんだとか。

ちゃんと返してる……？

反省するとか言っていて甘いものを食べられないことに対して真剣だったしな。

そうかんとんには治らないんだろう。

将来が思いやられる。

「で、そのとき私、こーんなに困っていたのよ!」

「そうか、それは大変だったね」

「そうなのよ、それでね……?」

どうでもいい話が続いてるらしい。

ふんわり系な彼女の会話はボディランゲージが激しい。

そのたびに揺れるぷるるんはさぞかし目の毒なんだろう。

学校や家であったこととか見聞きしたことをストーリー仕立てで最初から最後まで、強調したいところはそのあとでもういちどって感じで声音も使い分けながらの演出は見事なもの。

楽しそうだなにより。

毎日が幸せそうだ。

熱心に聞くと疲れてきて僕の会話を受信するキャパシティを越えるから会話の10分の1くらいしか聞かないで残りは通り抜けさせているけど……それでも彼女の私生活はだだもれだ。

たぶん個人情報とか気にしてないんだろう。

気にしないんだろうな。

「あれは申し訳なかったってちよつと思ったりしてるの……」

「それはしかたないさ」

しょうもないことは意識にも引つかからない。

でも話を合わせるってほんとうに大変だからときどきちゃんと意志を持って会話するんだ。

まずは中学生になりきって、それも将来的になるかもしれない「なにか女子」みたいな人たちに囲まれた生活に溶け込むための情報収集って目的があるから、こうしていられる。

あとはちよつとした感性とか興味のポイントとか意外と発見があるものだからそこまで退屈はしない。

まあ僕の目的はとりあえずはJC、次はJK、そしてJDそしてO

L……今は言わないか……そんな感じに無難に擬態することにあるんだから細かい名前とかはゼーんぶスルーしてはいるんだけど。

忘れていても何とかなるしな。
どうせ話してくれるんだし。

僕がこの体のままで迎える未来に向けてこの子たちを利用することには罪悪感もあった。

でも今はこうして話を聞いてあげているんだし、僕が疲れたころにおしやべりして満足しているんだからウィンウィンだろう。

服飾の店ではとりあえずでアクセサリーをつけられて服屋ではとりあえずでいろいろ店員さんと一緒になって着させられているしな。抵抗するだけムダだっていうこともある。

なにを言ったって結局は着飾れるんだから。

むしろ僕がもつと対価をもらいたいくらいまであるんじゃない？
だってこれってお守りでしょ？

胸とおしりだけでっかいけど中身は小学生な中学生のお守りでしょ……？

17話 学生たちの、夏休み(2) 3/3

こんな僕だけど、別にかがりみたいなの幸せな子について思うところは特にない。

いや将来どころか来月の金策をどうするのかとか勉強する気あるのかとかは心配だけど、ふわふわと好きなことをしているのを止めたくない。

止めたら流れ弾が僕に直撃だしな。

ニートって言う高等遊民には厳しい。

それに僕は僕と相容れないタイプの女性の人生について深く考える興味はないし、ただ幸せになってほしいって思うだけ。

さて、そんな感じでおはなしすることしか頭がない下条かがりさんに対して僕は考える。

どんな感じで言えば……僕がこうやって連れ出されるのが本気で嫌がついているって理解してくれるんだろうかって。

いやいやちゃんと言ってるよ？

僕は家で静かにしているのが好きなタイプなんだって。

外に出て歩いてお店を見て人と会って楽しくなるタイプじゃないんだって。

頼むから分かって頂戴って何回も言った。

でもこういう大切な話ほどお耳からお耳へと素通りするらしいんだ。

こればかりはどうしようもない。

分かっている反応をして分かってない証拠として、そう強く主張してみても毎回軽い感じで流されるし……どう考えても僕が恥ずかしかつているからだってしか思われていない気がする。

なぜだ。

やっぱりこの見た目か。

やっぱりこの声か。

子供だもんな。

当然か。

精いっぱい大人の男を演出しているのに「クールねー」とか「知的な話し方ね!」とか「守ってあげたくなるわー」とかぬかしおる。どうしてくれようか……。

「……あーあ」

ふとくるんさんの何音か下がった声。

おっと、これは聞かなきやいけなきさそうな声の調子。

僕はよく理解できているんだ。

そうしてくるんさんの目元を見上げる。

歩いているときには身長差のせいですごく見上げる感じになるから体相応の顔に見えなくもないけど、真っ正面から見ているとやっぱり精神年齢相応の顔。

童顔の女性って見えるけど……やっぱりつい最近まで小学生だった子供だよなあ。

ちよつとだけ厚ぼつたい感じの目元と肉付きのいいほつぺた。

うん。

あと数年順調に成長すれば引く手あまただろうな。

いや今でも多分そうなんだろうけど彼女自身が、その……ねえ……。

こういうのが好きな男も多そうって言うか多分大半なんだと思うけど、それにしても知性がねえ……。

ごくたまーに興味が向いたときとかには結構普通に頭良いなって思う刹那もあるんだけどなあ……残念さがとつても悲しいなあ……。

致命的に現実社会に向いてないんだよなあ……。

「今年の夏休みも半分が見えてきたわねえ……。長いって感じしていたのに気がついたらあつという間に終わってしまいそうだわ——……」

それで落ち込んでたらしい。

なんだ、心配して損した。

甘いものを食べられないストレスからかやたらと砂糖とミルクでじやりじやりしていそうな紅茶をすするくるんさん。

……あ、砂糖を噛んで楽しんでいる。

なるほど、お金が無ければいけないでそんな楽しみ方があるのか。みみっちくとも学生だから許される贅沢。

角砂糖をころろ楽しむとか……どれだけ甘味が好きなんだろうか。

そんなことしてるとまた太るぞ。

胸と尻が。

「毎日遊べると思っていたのだけど夏休みつて部活も補習も忙しいし、お友だちともあんまり予定が合わなくて……なかなか思っていたみたいにはならないのよねえ。こういうときは響ちゃんもつともーつとも——つと、お誘いに乗ってくれたら楽しかったって思うのに。お家の事情じゃ仕方ないわよねえ……まだまだ遊び足りないわあ——……」

恨めしげな目で見られるけど強気で返す。

「……響ちゃんつてじーつと見るの好きよね！　かわいいわ!!」

しよせんはくるんか。

でもさあ、僕、がんばつて週2で付き合つてあげてるよ……?

僕の全力を使つてあげてるんだよ……?

こうやつて外で会つて帰ったら2時間くらい寝ちやうんだよ……

?

幼女ボディの貧弱さなめてるの……?

それでもまだ足りないの……?

どれだけ話をした生き物なんだか、このゆるくるんは。

しかもほぼ毎日部活と補習とで学校に通つてこれらしい。

学生だから元気だな。

だつて人生の最高潮だもんな。

その体力を1割でいいから分けて欲しい。

かなり切実に。

もいでもいい?

……にしても「家の事情」とかいうふんわりしてるにもほどがあるのに妙に説得力ある設定を考えておいてほんと良かったって思う。ほんとうに。

いろいろとごまかせる上に誘いを簡単に断れる……3割くらいの確率で……っていうのはとっても助かるんだ。

あんまり断りすぎてもまたむくれるから加減が重要だ。

遊び相手しないとむくれるとかお子様だな。

下手をするとペットの犬とか猫並みだ。

「ん。そう言えばかがり」

「なあに？」

「勉強、というか宿題は……大丈夫なのか？ 毎日どこかしらへ出かけているしずいぶんと忙しいみたいだと今日も聞かされたけれど、きちんと手をつけているのか？ 毎日やれとは言わないけど週の半分以上の午前は手をつけておかないと手遅れになるぞ？」

「やだ響ちゃん先生みたいなこと言ってー」って言われる覚悟で試してみる。

……最近の夏休みの宿題とやらがどれだけ大変かなんていうのはわからない。

けどゆりかから聞いた限りじゃ、彼女みたいに勉強の基礎体力と集中力があつて、しなきゃいけないときには集中できる感じで「普通に気合入れてやって5日くらいかな？」らしい。

これは日記とか自由研究とかいうやり方次第では時間のかかるものを除いた量。

さらに言えば、これは分からないところはさっさと飛ばすっていう要領がいいっていうか勉強のコツを知っている子の場合なんだ。

試験なんてほしい6割から8割できれば通るようにできているって理解できてるゆりかみたいなの場合の話。

学生時代の僕とか目の前のこの子みたいに与えられた分をこなすしかない生徒にとってはもつと大変なはず。

学校やクラスが違ったとしてもこういうのはだいたいみんな横並びだしたいして変わらないはずだけど……。

「.....」

「.....」

間。

「.....あの、ね？」

「.....」

沈黙。

「あのね、響ちゃん、実はね、あのね？」

「.....」

不安で心臓がばくばくしてきた。

他人の分かりきってる答えを聞くのでここまで心配になるなんて初めて。

ある意味すごいなこの子。

「.....その。もし、もしよかったらーなんだけど.....宿題、手伝ってもらえないかしら.....？」

「.....」

明確な回答を逸らして譲歩を引き出す術は身に付けているらしい。そうやって親御さんとか先生のお説教から逃げているんだろうな。

「ひ、ひびきちちゃん.....？」

「.....」

「そ、そうやって無表情でじーっと見つめられると照れちゃうわ——.....？」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....ほら、また今度、次は秋のお洋服も一緒に選んであげるから.....」

「ごまかせないと悟ったか汗をかきながら全然嬉しくない提案をしてくる。」

「学校じゃ怒られるのー」って香水つけてるもんだから、それが汗の水分で漂ってくる。」

空間に充満するくるん成分。

「……………えっと……そのお……………」

……なんだかかわいそうになって来た。
元からかわいそうな子なだけだな。

「……………服は別にどうでも良いし他にお礼とかも要らないよ」
「ほんとう!?!」

両手を勢いよく胸の前で合わせたもんだからぶよんっとなつて
のに気がつかないらしい。

……この子、ほつといたら危ない気がする。
とりあえずで先手は打ったから「着せ替え人形がお礼」とかいう意
味不明な未来は回避。

大体服なんてもうどんな風に選べばいいのかとかどんなサイズ感
なのかとか分かつてるし。

実店舗だろうが通販だろうがおおよその見当はつくようになって
いるんだ。

成長を期待しているから実店舗で買うことになるだろうけど、どう
せ……どうせまた別の理由で僕を着せ替えさせるつもりなんでしょ
?

僕は知ってるよ？

「それで?」

僕のうちがした問いにくるんつと首をかしげるだけの反応。

……くるんさん……。

「……………あとのくらい残っているんだと訊ねているんだよ。君の宿
題が」

最初の質問事項に戻ってあげる優しい僕。

「科目とか何ページ分とか。それくらい言えるんだろう?」

沈黙。

返事がなくて不思議に思うと……目がさまよいはじめている。

「今日は暑いわねえ」とかどう考えても遅すぎる発言をしながらハンカチでしきりに顔を拭っている。

……まさか。

まさか。

え、嘘でしょ？

いやいやさすがに……え？

中学も2年目になって去年の反省も忘れて遊んでしかないとか

……普通にあるけど、でもさ……？

「……ほとんど」

「ほとんど？」

「……………」

「……………」

「……………」手を付けていないの

「ああ……………」

脱力。

ものすごい勢いで僕の体から力が抜ける。

だってこの子……夏休みの宿題って言う結構なボリュームあるのを完璧にほっぼり出して毎日ふらふらしてるんだよ……？

なにやってるの……？

いやまあ中2なんてそんなもんだって言えばそんなもんなんだけどさあ……ちよつと前にゆりかが勉強系は終わらせたって聞いたちゃったから余計になあ……。

あと、うつかりとはいえ補習受けてるって聞いているからなおさら心配なんだけど……？

「そもそも……そもそもね……？」

「うん」

「私だつてこのままではいけないかもしれないって思ったのよ」

「うん、このままではいけないね」

よろしくないね。

「でしよう？ だからなんとか立ち上がってお部屋の中をがんばって探しても……プリントもなにもどこかへ行ってしまっていて」

「ええ……」

「あ、でも、昨日お友だちに！ お友だちにお願いって言って撮ったものを送ってもらってようやく分かったのよ？」

それはいばるところじゃないって思うよ？

「補習のときに先生に頼んで教室も探したけど無かったし……どこへ忘れてきたのかしら……？」

「ああ……」

この子、そういうのが致命的にダメな子だったか……。

知ってたし理解はしてたけど、それをこの耳で聞くのは段階が違う。

違うんだ。

数ヶ月前どころか数年前の会話まで……声音まで身振りまでみんな再現できるほどに記憶力はいいはずなのに。

誰が誰とひつついてどうなってどう離れたかまでゼーンぶ覚えていくくせに。

それをこの前僕の前で再現して見せたくせに……つい半月前に「大事だよ」って渡された、提出しなきゃならないものが載ってる大切な紙すらをどこかへやってしまう子。

いたなあ、こういう子……。

「でもねっ」

なんか言い訳してるけど僕の耳にはもうなんにも入って来ない。

自力でプリントとかを手に入れるだけまだマシな部類とは言えるよ？

一応ヤバいって自覚できて自発的に誰かを頼って情報を入手できたんでしょ？

えらいよ？

これが「明日提出なのに友だちから返事が来ないから分からないの」とか抜かしたりするよりはよーっぽどえらいよ？

でも、これはさすがにまずい。

僕が大変な思いする以上に……僕が言われるままに時間を潰すお供をさせられてる以上に、このままにしておいたらこの子はかわいそ

うな子になっちゃう。

しよせんは中2だしまだ充分になんとかなるけど……ちよつと距離置いた方が良いな。

僕のためにも、栄養が体に吸われたこの子のためにも。

「かがり」

「響ちゃん？」

「君はここで僕と話をしている場合じゃない。すぐに帰ってさつきとできるところから手をつけるんだ」

イスつていうかシートをずりずりしながらテーブルから抜け出て自然な感じで着地して席を立ちながら言う。

断固とした姿勢だ。

僕の決意は固い。

おっと、スカートがめくれてる……。

「……………」

さつきつとホコリを払うフリをしてさりげなくふとももをガード。

ちよつとテーブルで視線が遮られて気づかれなかつただろうからよかつたけど……スカートの下が他人に見られても僕はなんとも思わないけど……タイツだし平気なだけ……そもそも幼女だから誰も気にしないだろうけど……それでもはしたないから気をつけな
いとな。

ここは足がすぐにつかない高さだから嫌いだ。

このチェーンの名前、しっかり覚えておこう。

テーブルも高くて肩が凝ったし。

ここは僕の敵だ。

幼女に敵しい世界。

「響ちゃんっ」

「僕と一緒にいてもこうして話をしてしまうだけだろうっ？」

「え——！・ 響ちゃん、一緒にしてちょうだい！ お勉強会よ！」

「嫌だ」

NOと言える僕に驚いたのか下条さんの体の動きが激しくなる。

頭を振れば髪の毛がくるんくるんして腕を使って話せば揺れる揺

れるでとにかくすごい。

声が少し大きいせいで近くの席の人からは見られているし……っ
ていうかその辺に居る感じの男の視線がたぶんに行っているのが丸
わかりだけど……成人男性が中2に欲情したら犯罪だからね？」

「……………」

ついでで女装している僕にまで視線が来てるし……えっと、僕幼女
だからペドフィリアってのになっちゃうよ？

でも男だからしょうがないか。

そう割り切るしかないから無視しよう。

とにかくわぎわぎそうやって注目を無自覚で集めるのは止めて欲
しい。

けど、いちどヒートアップするとなかなか収まらないんだよなあこ
の子……。

本当なんなんだろうこの子……無敵なの……？

「勉強会とか言って1問ずつ僕に聞くんもりだろう？」

「だって、そうなんだけど！」

え、そうなの？

「けど……ひとりだとどうしても他のことが気になり出してしまって
手がつかなくなるし、宿題の範囲のよく分からないところあるし
……………」

「同級生の友人とすればいいじゃないか。プリントを送ってくれた
子の他にもたくさんいるだろう？ なんなら部活の子でもいいんだ
ろうし」

「……みんなも」

「？」

「……みんなもやっていないのよ……私たちが勉強会は何回かしてみ
たけど、結局すぐにお話しになっちゃってほとんど進まないで終わっ
てしまったの。だから勉強会はダメねって結論に」

「ああ……………」

かつての僕の数倍の交友関係があるとしても、そのお友だちたちも
みんな同類らしい。

まとめて不憫な子たちだ。

「……その点、響ちゃんなら厳しいときは厳しくしてくれてくれるでしょうし。……いつもいつも帰りの時間が来るとどれだけ『もうちょっとおはなししましょう』って言っても『決まり事は守るべきだ』なんて言ってさっさと帰っちゃうくらいだし！ あとお勉強も私よりもできるといいたいし！」

急に真っ赤な顔になってくるくるんさん。

真剣さが伝わってくるな。

「……響ちゃんなら遊んでしまえばいいようになったら止めてくれそうだから……それでもダメ、かしら？ ちゃんと言うことは聞くから……お願いよ……」

髪の毛も顔も胸もしょげた感じになったおかげで静かになる。

躁鬱激しいな。

でも割と真剣に困っているらしい。

とつてもレアなのを見てちよつと嬉しい僕。

……この子はきつと、子供たちの勉強を見ていたときによくいたような感じに典型的な切羽詰まらないとできないタイプの子なんだな。

その切羽詰まり出すタイミングとか手元にあるテキスト次第で切羽詰まってやつと本気を出しても終わられないことも多いっていう悲しい宿命を背負っている系の。

まあ大多数の子は多かれ少なかれそうなんだから別に良い。

ほとんどの科目をクリアできてるんならなんとかなるんだし。

学生って大変だな。

ニートで良かった。

「……つ」

顔を上げてみると、おそろおそろという感じで僕を見つめていたらしい。

……ぼーっとしているのを熟考しているって見られた印象。

「……」

「……」

……まあ、勉強会なら外を連れ回されないだろうし……こうして外に出るたびに補習や勉強のグチを聞かされるのも不快だし、やだつて言っても諦めないだろうし……。

それに、ここまで聞いてほつとくのもなんだか寝覚めが悪い気がする。

……赤点はひとつだけだつてことだし今までは補習とか受けたこともなかったようだし、教えることもあまりないだろう。

単元の最初からいちいち教えたりしなくて良さそうで、適当に本でも読みながら監視するだけでいいならむしろ楽……？

「……いいよ」

「ほんとう響ちゃん!？」

だから声でかいって。

いい加減に人目を引くつて分かったほうがいい。

「ただし僕は解いたりしはしないよ。書き写したりさせるのもしない。宿題を自力でちゃんとやって終わるのをさぼらないように見ているだけだよ?」

「え——、お手伝いは……」

「イヤならこの話は無しだ。がんばってくれ」

「いいえ! き、厳しいけどそうやって見てもらえただけでもありがたいの……ありがとう、助かるわっ」

いつのまにやら紙袋たちをかかえてすぐそばまで来ていたかがり。

……この感じ、もしや今から……?」

いやいや元気すぎでしょ。

僕はもう眠いの。

お昼前なのに体力の限界なの。

帰ったら寝なきやなの。

幼女の体力なめたらダメなの。

……。

……なんかときどき思考が子供っぽくなる時がある気がする。

「それならいいけど。でも今日は僕、そろそろ帰らないと行けないから。君も早く帰ってできそうなところから手をつけてみてほし

い。それで別の日に……」

というところでいつもの尿意。

尿意は突然に。

そんな映画無いかな。

「……と、済まない、少しトイレに行ってくるよ。先に外にでも出ていてくれないか?」

「あ、じゃあ私も行くわ!」

「……………はっ!」

「テーブルのコップとかを片づけてしまえばいいんだし。ちよつと待っていてねっ」

なんか変なことを言い出したかがりがるんな感じでお片付けを始める。

いやいや、さすがに一緒にはないでしょ……。

個室だったとしても隣同士っていうのはちよつと……なあ?」

まだ女性トイレでも抵抗感があるのに知り合いがそばにいると困る。

大変に困る。

……この辺が学生と社会に出ていない社会人との差か。

男女の差とか言うものじゃないだろう。

僕だって大学までは人の中に居たんだから。

「……ならかがり。僕が荷物を見ておくから先にトイレへ」

「あら? 響ちゃんが行きたいんでしよう? それなら一緒に行ってしまう方がいいじゃない」

「いや、だから」

「考えてみたら私たち、まだ一緒に行ったことなかったものね!」

「……………」

女性とは徒党を組む存在。

一匹狼でも平気な男とは違う。

それは用を足す瞬間でもおんなじ。

……あー、どうやっていいわけしよう。

「……………あら、一緒はダメなの? 今は人……いないみたいだし……」

ぱつと見てだけれど。 いなかったらさつさと済ませて早く出られるわよ？ 嫌なの？」

嫌なの。

そんな僕をのぞき込むように屈みながらメロンが迫る。

不思議そうな顔も上に乗っかっているんだけど、この場合はなんて言ったら……。

「……えっと、僕は。 ……そう、事情があつて。 言い辛い事情があつてそういうのが苦手なんだ」

「？ そう？ 残念ね」

どんな返し方したら納得してくれるんだろうって思って考えてたらあつさりと納得したらしい。

……やっぱ僕はこの子のことがよく分かんない。

「じゃあここで待っているわ。 ちょっとお友だちとかお母さんからのメッセージがたまっているからお返事したいところだったし」

「……すぐに戻るよ」

さつさつと僕の分のトレーまでチェーン店の喫茶店特有の返却口に返すとすとんと座り直してスマホをいじり始めるかがりさん。

「……………」

……あつさり過ぎない？

いや助かつたけどさ。

それでもこの子のことだから気は抜けない。

何歩か歩く度にそつと振り返って見るけど手元以外は微動だにしない現代系JK風JCさん。

苦しい言い訳かつて思ったけど……そこはくるん下条さんの実力発揮だ、興味が他に移りさえすればあつさり風味。

僕は年下の女の子が隣の個室に居るって言うシチュエーションを意識しながら用を足すって言うやばいのを回避できたからありがたいがっつておこう。

そうしてお店のすみっこのトイレの前に着いたけどもこの前と違って誰もいないみたい。

こういうのって本当タイミングだよね。

「……」
ぱたんって扉を閉めてオシャレなトイレ空間でタイツを膝の上までするつと下ろしてぱんつを脱ぎながら考える。

……そうか。

人と外に出るときにはいずれそのうちなんだ。

しやあああという音が音姫さんキャンセル。

たった今危なかったみたいに関連シヨンってのもすることになるのか。

聞くところによると女の子のほうがこういうのにこだわるみたいだし……女社会に巻き込まれるなら嫌でも付き合わなければならぬいんだらう。

女性はリーダー格から嫌われたりするとおしまいっていう怖い世界に住むらしいな。

まあ冷静に考えたら男同士だって学校に限らず駅とかでちよつと一緒にとかよくあるんだし、なんなら男は真横に立ったまま出して出すんだから考えようによつちや男の方がやばいし。

うん、冷静に考えてみればごくごく普通のこと。

こつちには音姫さんもついているんだしそこまで必死になることじゃない。

男みたいにお互いのがすぐそばに見えるっていうのも物理的にないんだもん。

「……」

でもなあ……。

「はあ——……」

こういうのに過剰反応してるって理解はしてる。

理解はしてるんだけど……僕の気持ちは動揺するんだ。どきどきするんだ。

相手は子供なのに。

人と接しなすぎた弊害でもある気がする。

年端もいかない女の子たちと……ここは良いけど、そう。

駅とかのトイレで半個室みたいな空間で隣同士でするっていうの

には、僕の元成人の常識的な男としての倫理観が悲鳴を上げるんだ。

僕の思考っていう理性を感情が上回る珍しい場面。

いやだって……どう考えても物音とか聞こえるでしょ……？

僕のが聞こえるのはともかく、聞こえて来るのは困るでしょ……？

うじうじしながら出し切ってほっとしてちよつと落ち着いたけど

……こうして女の子の格好をして外出をするのならいずれは越えな

きやならない試練なんだろうなって考えてまた鬱々した。

ただでさえ社会復帰が遠のいてるのにこの仕打ち。

僕が何したって言うんだ魔法さん。

……なんにもしてなかったのは事実なんだけどさ……。

テレビの向こうはいつだって物騒だ。

『……………で、現場の状況を……………どうなっていますか?』

『はい。……………の衝撃で辺りが一面……………』

『これはやはり初期の対応が……………だったためでしょうか?』

まだ情報が入ってきていないのですが、おそらくは……………』

でも僕には関係ない話。

どれだけ悲惨なことでも僕自身の身に迫らないんだっただらやっぱ
り他人事なんだ。

目を背けちゃ行けないって言う意見も理解もできるし納得もでき
る。

……………でも、こんな僕に何ができるって言うんだ。

「ふう」

集中力が切れたしキリのいいところだったからノートも問題集も
ぱたんと閉じる。

顔を上げるとまだ勉強を始めて1時間といった様子。

ちなみにノートは用意してもほとんど書かない。

だって分かっていたらばそこまでする必要ないしな。

元々1回は頭に入れたものなんだ。

思い出して1回書き出せるのを確認したらそれでおしまい。

そんな感じで進めてきてやっとな気分が乗ってきたのになあ……………予
想以上にできちゃったから手元の勉強が全部終わっちゃったらしい。
……………」

日課になっていたからなんとなく集中するモードになれる時間帯
なのに急な手持ち無沙汰。

ただの休憩じゃなくって、するはずのものがなくなっちゃった虚無
感。

これを片づけないと行けない立場の学生なら喜ぶんだろうけど
……………僕はただ僕のためだけにしているだけだしなあ。

「うーん」

まあしよせんは中学生の範囲だし。

やっているうちにいろいろと思い出してきたから、最近は午後のすることがない時間とか夕飯を食べたあとのお酒が入った状態でもちよくちよくやっていたしな。

なんかこういう作業って気分が乗ってるときはいくらでもできるよね。

でも結構かかったって言うべきなのか遅かったって言うべきなのか分からないなあ……中学生の範囲を終えるのに2ヶ月くらいかかったのって。

終えたっていつても完璧じゃないし主要教科だけだし。

先を知っているから歯抜けを埋めるっていう感じだったわけだし。

このまま学校のテストを受けても割といい成績は取れるだろうけど思い出しただけなんだ、受験とかになるとちよつと厳しいかもしれない程度の学力だろう。

細かいところまでやる気力はなかったし意味もないからどうでもいい。

強いて言えばお酒を呑んで眠りが浅いときに見る悪夢の中で、試験勉強が間に合わなくて悪い点数を取るって言う経験したことのないシチュエーションがいくらかは減るかなって思うくらい？

……いや、結構切実だな。

夢の中って疑問を持ってないもんだから、何故か僕が高校生に戻って試験で困ってるとか大学生に戻って単位落としそうとか言う場面なんだよな。

夢って不思議。

けどまあ復習っていう意味ではこの辺で充分だろう。

これで中学までの範囲なら……特に空っぽかがりに教えてあげられるようになったしな、自信持って良いだろう。

でも歯抜けもあるから結局はテキストを片手じゃないと確實じゃない。

でもでもなにごとく完璧主義はよくないし、こんなもんだろう。

どうせみんなができないところをできるようになったってそのまま

で誇れるものじゃないしな……大人が中学生に「僕の方が勉強できるんだぞ」って威張っても「そうなんだ」でおしまいだし。

時間をかけた分先に行けるのは当たり前。

そこでもいばつてもしょうがないもんね。

それよりも無難に平均点よりひとつぶん上で満足して次へ行くほうがコスパがいいもの。

時間が余るからって地味に通信の資格の勉強とかしてたときもそんな感じでクリアできたしな。

にしても……昔よりもノート、きれいに書けるようになった気がする。

気のせい？

……いやいや、閉じたばかりのノートを開いてみるとまとめの問題の丸つけで終わっている。

そのページに書いてある字は前の僕よりも……学生のとときの僕のよりも綺麗に見える。

っていうか綺麗。

ぱっとみて綺麗って言う感じ。

筆圧が弱くなったからか？

いや、文字のバランスというかページ全体のバランスというか……。

そういえばこういうノートの子いたなあ。

男の一部と女子の結構な割合で。

つまり僕は2回目にしてようやくそういう子たちの……空間把握能力的なものに追いついたわけ……？

ささやかな補正が、このちっこい手のひらに宿っていた……？

体は痩せてるのに手首から先は妙にぶにぶにしている感じの手のひらを見つめる。

……相変わずにちっこいな。

あとすべすべだしなめらか。

……ま、どうでもいいか。

さつき飲んだばっかりだけど気分転換にともういちどってことで、

台所へ豆を挽きに行く。

コーヒーは何杯飲んでもいいんだ。

この体のこともあるからカフェインレスのも混ぜてるけど。

それにしても勉強って基礎がほんとうに大事だな。

公式と基本的な変形とよく出る問題、こういったものをまずは覚えていないと話にならないし。

つい少し前……僕基準で少し前、ほんの2年くらい前まではバイト先で……したり顔でこういうことを教えていたのにもう忘れてるなんてなあ。

学生のときは「1回覚えただし、こんなのは絶対忘れないよね」って思っていたのに、完全に使わない期間があっただけでもう忘れてる。

人って、使わないと本当にゆっくりと忘れるものなんだなあって実感する。

中学とはいえ主要教科3年分っていうのはなかなかのボリュームだったし。

幼女に退行して中学生って言い張ったばかりにこの始末だ。

精神年齢20代がなにを喜んでるんだか。

まったく知らないことを勉強したわけでもあるまいし。

そりゃモチベーションにはなっていたけどさ。

そんな感じで僕はしよげる。

なんか昔っから良いことがあると悪いところをわざと探してダメだって結論つけて気持ちを抑えるクセがある気がする。

「……………」

挽いた豆を蒸らした香りが立ちこめる。

でも、引きこもりとニートとアルコールで減っていた知能もいくらか回復してきただろう。

そう考えるとちよつとは安心。

社会人でも資格とかでずっと勉強するらしいし、これでちよつとは社会復帰の目処が立ってきたのかもしれないって思うとなんだか嬉しい。

でもせつかく働こうかって気になっているのにそもそもが働けないというジレンマ。

惜しい。

すごく惜しい。

このテンションのままお仕事探しか行けちゃいそうなのに幼女だから行けない。

悲しい。

こんなの僕にしてはものすごく珍しいことなのにな。

1年に1回くらいある「どうかかかないといけない……！」って奮起する時期。

まあどうせいつも通り準備しているあいだに疲れてきて飽きるんだけどな、きつと。

でも昔に勉強したはずの内容とちよつと変わっていたところも少なからずあったし、前は丸暗記するだけだったのが今はちゃんと理解できることもあって……今までは読み飛ばしていた記事とかにも興味を持てるようになってちよつとだけ人生が充実した感じがある。

生涯学習。

良い言葉だ。

やっぱり人は知らないことは認識できないしそもそも興味を持ってないもんだから、その存在すら意識を素通りするんだなあって思う。勉強の楽しみというやつを……だいたい遅いとは言っても今の段階で実感できるうになったのはいいことだって思う。

20代前半つてのはJCたちから見たらおじさんだけど社会的には若者なんだから。

……あの子たちにおじさんって言われたら凹みそうだなあ……。つらい。

つらくなつた僕は煎れたコーヒーをずずつと飲みながらつっぱなしのテレビをぼんやりと見つめる。

……手持ち無沙汰だ。

火がついてきたところだったのにゼーんぶ終わっちゃったからなあ……。

せつかくあのふたりから誘われなくて静かな日が続いていたのに。まあ明後日にはまた呼ばれるんだけど。

それもこれも最後のまとめ問題が予想外に少なすぎたのが原因だ。気がついていけば昨日のうちにも買っておいたのに。

お酒が入っていても乗り気になっていけば頭には入るもんな。

中学生の範囲ってだけしか意識していなかったから高校生の範囲の教材は無い。

もちろんかつての僕が使っていたそれらなんかはとつくに捨てちやつているし。

今までだったらこの時間、午前って言うのは……勉強をはじめの前だったらネットとか見たり二度寝したりして適当にダラダラしていたんだけど一回勉強の習慣が付き始めたんだ、そうやすやすと途切れさせたくない気がする。

つまりはもつたいないんだ。

「……………」

着信でちかちか光つてうざつたいから最近ではテレビの前のテーブルに置きっぱなしになっているスマホを両手で操作して調べてみる。

今は見たい気分じゃないからあの子たちからのメッセージは既読にしない。

あいかかわらずに手首が負けるから持てなくってテーブルに置きながらすいすいとな。

……やっぱり小さいの買ったほうがいいな、うん。

じゃないと家はともかく外は不便だし。

それもこれもこのちっこい体が悪いんだ、まったく。

ささくれてきたから髪の毛に両手を突っ込む。

うなじのあたりがいちばんだ。

「……………」

ちよつとほっこり。

指から手のひらから毛根から気持ちいい感触がさらさらぞわぞわと感じられるのがたまらないんだ。

「……………」

髪の毛をしばらく触っているうちにささくれはじめた気分も癒やされてきた。

で、調べてみると今買っても届くのは明日の夕方から明後日らしい。

うーん、どうしようか。

せっかくのやる気、このまま失うのはもったいないしなあ。

「めんどくさい」

けど仕方ない。

この時間だったら人は少ないだろうし今から買ってこよう。

今日は曇っているから涼しいし。

少しだけだけど厚着するんだから大切だ。

……そういえば約束がないのに繁華街まで出るっていうのは久しぶりかもな。

ちよつとだけ嬉しい気がする。

そうと決まればお出かけ用の服に……。



「あ——……んんっ……ん——あ——」

のどの奥の筋肉や舌を動かして、確かめて準備運動。
よし。

……。

「おねえちゃん、私これが食べたいのーっ」

「でも私もうおこづかいがないの……」

「おねえちゃん……ね、ダメ？　ねえーっ……」

「おねがいつ、おねえちゃん！」

甘ったるい声が響き渡る。

部屋中に。

……。

録音アプリを止めてたったの30秒にも満たない声を、再生。

『おねえちゃん、私これが食べたいのーっ』

『でも私、もうおこづかいがないの……』

『おねえちゃん……ね、ダメ？　ねえーっ……』

『おねがいつ、おねえちゃん！』

声に出していたときとはまた違う、小さい女の子の懇願するような甘えた声が聞こえる。

もだえる。

僕はもだえた。

たいした訓練とかはしていないのに甘えようとする其自然とアニメ声に近くなっていて、けどわざとらしさが感じられない。

つまりは本物の幼女が誰かに甘えているかのような、そんな声。

だって天然だもんな、養殖とは違う。

それが音声データとして現実に存在することになった。

「……………」

何度か聞いているうちに意識しないでいようとしてムリに押しとどめていた羞恥心がぶわっと上がってきてあつという間に顔がかつかとしてきてのたうち回る。

「……………!!!」

言葉にならないとはこのこと。

ああもう、ふだんは滅多にかかれないのに汗まで出てくる始末だ。

鏡で銀髪幼女な僕を見ながら再生してみたのがなおさらまずかつたらしい。

鏡の向こうの僕は真っ赤になっている。

ものすつごくはずかしい。

なんだこれ。

なにこれ。

僕は男のくせになにやってるんだ。

……ゆりかと話を合わせるために見ているアニメに似ている声質のキャラクターがいたんだ。

酔った勢いで、最近たまにしている声の練習を試してみようと思いついてしまったんだ。

その結果がこれだ。

どうしよう。

予想以上に合いすぎていているもんだから聞いていて体じゅうの毛が逆立つような感覚が止まらない。

ものすごくどきどきする。

お酒の飲み過ぎじゃない。

うん……………やばいな、これ。

素でこんな声が出るのなら、鍛えたら将来は小悪魔系にでもなつてしまいうような勢いだ。

「……………あう」

恥ずかしいし、こんな声は消して……………いや、もつたいいな。

保存だけ……………保存だけ、しておこう。

ほら、これもこの先なにかの役に立つかもしれないし……………。

「……………」

再生ボタンに指が進む。

『おねえちゃん、私これが食べたいのーっ』

『でも私、もうおこづかいがないの……………』

『おねえちゃん……………ね、ダメ？ ねえーっ……………』

『おねがいつ。 「おねえちゃん」！』



こここのところの外出で体が慣れてきたのか、いつもの格好で出てきてもほとんど疲れないままに駅前へたどり着いた。

うんうん、順調だな。

体重はいささかも増えてはいないけど筋力についてはついてきたようだ。

あとはがんばって食べて寝てを繰り返して立派な大人になるだけ。

なれたらだけど……………こればかりはがんばるしかない。

で、お店とかがつて意外と開くのが遅いよね。

だから開いたばかりなビルの中に入ってちよつと別世界を味わいつつ、空いている中を気楽に歩いて上って参考書コーナーへGO。

やっぱりひとりは気軽で楽だ。

男は孤独じゃないとね。

好きなペースで好きなところに行けて遅れがちな歩幅で振り返られて落ち込むことがないし、かがまれて身長差で落ち込むこともない。「妹さん？」とか言われて落ち込むこともない。

そこはせめて弟でしょ……ってならないんだ。

素晴らしい限りだ。

たったのこれだけで勝手に癒やされて嬉しくなってくるあたり、最近の生活がどれだけ僕にとっての負担になっていたのかがよくわかる。

……早く終わらないかなあ夏休み。

けど、あと半分はあるんだよなあ……。

あの子たちの世話が大変なんだよなあ……。

でも約束しちゃったしなあ……。

「はあ……」

ため息が出てきて一気に嬉しかった気持ちが消え去る。

最近の僕は躁鬱が激しいみたい。

「……………」

ふと思う。

……こここのところ。

僕はあるの子たちのこと、ちよつと甘やかしすぎたかもしれない。

相手はたかが中学生、それも特に深い関係でもなし。

ただ情報収集と時たまに話したい欲を発散するためだけに友だちごっこをしているだけの関係だ。

友だちっていうのなら……僕からだって「今日はだるいから無しで」っていう権利くらいはあるはずだ。

それが普通の対等な友人関係っていうものだろう。

なまじ相手が年下だからってちよつと気を遣いすぎたかもな。

なにも僕がここまで疲弊してまでおつきあいする義理はない。

男と女、外交的な性格と内向的な性格とでは何もかもが違うんだ。

僕たち内向的な性格の男はなにか1個発見があればその日はなにもしないですえななんだ。

うん。

帰ったら「家の事情で忙しくなった」とか何とか適当な理由でもつけて減らそう。

それでなにか言われたらまた適当にじいやにでも頼む。

仮想じいや。

コンピューターおじいちゃん。

それでいこう。

……………と。

ノリノリになっていたところに意気消沈して戦意高揚したところで、気がついたら書店のいちばん奥で隅っこ、けどかなり広い感じの教材が揃っているエリアにたどり着いた。

英会話のテープの音を頼りにしていたらぼんやりしていても迷わずに来れたらしい。

僕に搭載されている楽々機能だ。

でもきんきん響く録音の音が耳障りだし、さっさと目星をつけてさっさと買ってさっさと帰ろう。

で、時間まで勉強してそのあとはお断りの文面を考える時間だ。

「よし」

……………で。

中学生の範囲をやっていて気がついたけど、僕は一応は真面目な生徒だったもんだから1回やっているからには記憶の隅っこに……………ぼろぼろ抜けはあるにしても基礎的な知識は定着している。

だから今の僕に必要なのはテンポよく思い出して数回の練習をして再確認して、昔の勉強であいまいだったところを復習することだけ。

だから練習問題は少なくてもいいからとにかく例題がいっぱいあって、字が大きくて……………あとは手で押さえていると手首がずきずきしてくるから開いていても勝手に閉じにくいサイズのもの。

幼女の肉体に配慮された系のテキストが欲しいんだ。

とはいえさすがに高校の範囲にもなると分厚いものが多いしテキスト自体も小さめ。

困ったことになった。

「……………」

迷うなあ。

参考書とかってなんだか魅惑的だからどれも欲しくなる。

こういうのって好き。

ぱらぱらと見るだけで重いつて分かる参考書を数冊横に置いてよく吟味する。

こういうのはだいたいシリーズならどの科目も似たような作りだから1教科で充分。

む……これはいいけど紙が硬いしこれは色が少ない。

……迷うなあ……。

あ、重さも比べておこう。

これとこれはどっちが重いかな？

……どっちも同じくらいだから、なんとなくデザインが好きなのっちに……。

「……………あれ？ 響？」

しようかな？

って思ったところに声をかけられてフリーズした僕。

顔を上げると……歩いてくるのはなぜか制服を着ているぱつつん

レモンさん。

……………なんで君がここにいるの？

今日は約束とかしてないでしょ……？

やだよ？

休日も子守なんて……ああいや、この子相手なら大丈夫か。

かがり相手ならまだしも……いや、やっぱり話が長いからご勘弁だ。

さて、休日……ニートだけど人と会うって言うのはニートにとっては重労働なんだ……そんな中でばったりゆりかと遭遇。

これ、どうやって乗り切ろうか。

18話 学生たちの、夏休み(3) 2/3

僕の安寧は打ち砕かれた。

せつかくのオフの日に誰かと会いたいだなんて思えないのが僕みたいな人間。

ゆりかも僕たちに近い気はするんだけど……やっぱり女の子だな。

いや、男でも「今ヒマ？」って電話してくる人もいるって言うし単純に性格か。

「やっぱ響だよね！ そのミニマム銀色ぼー！ こんちやー」

……君だってミニマムじゃん。

そう言いたいけどぐつとこらえる。

僕は大人なんだから。

でもせつかくよさげなシリーズを吟味していたのに横やりが入って嫌な気分。

気分が乗つてるときに邪魔されると嫌だよね。

そういうときに限って宅配とか電話とか来るんだもん。

……だけどなんでレモンさんがここに？

本当、なんで？

見間違いかとも思ったけど、あいかわらずの小学生っぽい雰囲気のままな関澤さんが近づいて来ちゃったからどうやら本物らしいって分かつちやう。

遠くで目が合って合わなかったフリをしてお互いに離れるってのは望めなかつたらしい。

あつという間に50センチを切る距離まで迫ってきて、ぐーっと顔を近づけてくるゆりか。

この距離感……ほんとうに小学生と言っても過言ではない。

彼女の悪戯っぽい目元とか口元がはつきりと見える。

警戒感ゼロだ。

……ここでも僕は男って見られてないらしい。

悲しい。

でもなんで制服も着ているんだ？

あ、でも、普段に比べて胸肩周りの露出が少ないから少し安心はする。

だって話しているあいだってふとした拍子にそういうところってどうしても目が行くし。

なんかそういうのって昔から気まずいんだよなあ……。

リアルの間相手じゃなくても、テレビとか漫画で露出が多い人とか出てくると反射的に目を背けちゃうあれ。

一体何なんだろうな。

別に潔癖症とかじゃないんだけど……。

でもこれなら安心だ。

安心して子供扱いができる。

学習塾に来る中学生ならお手の物だ。

「……ゆりかか。 おはよう」

「奇遇だねえ、こんなところで合うなんて。 まさか運命?!」
ないない。

「……なわけないけどさー。 にしても離れたところから見てもほんと小さいねー響は。 迷子かって思っちゃったくらい」

「うるさい」

「えへへえ、お互いさまだし同志だし仕方ないよねー。 ……あ、この前も私、迷子つて間違われて警備員の人に優しく声かけられたトラウマがあー」

いらつときてつい返しちやっただけど、どうやら目の前のぱつつんさんは結構悲しい目に遭ったらしいからそつとしておこう。

でもなあ……気がつかなかったって感じで視線を合わせずにそそくさと離れるつもりだったのに。

いや、そもそもすぐに追いつかれるからムリだったか。

……それに、今はゆりかだけじゃないから気が気じゃない。

つまり彼女は学校帰りかなんかで……同級生か誰かを連れてきているんだ。

「……………」

関澤さんの隣には友人と思しき距離感で立っている女の子。

身長が高い……たぶん平均よりは……だから僕を見下ろす形になつている普通の中学生的な子。

横にいる関澤さんと比べるとその差は明らかだ。
ちっちゃいって悲しいな。

いやそれでも背が高いというか全体的に……こう、大きい。
運動部って感じな子。

ワイシャツから覗くうっすらとした筋肉は多分ちゃんど動いてる人のもの。

健康的な感じだから男子から人気がありそうな印象だな。

髪の毛は長くもなく短くもない感じだけど、最近見た雑誌に乗っていた髪型になつているからおしゃれはしているらしい。

派手なヘアピンもしているし。

……さりげなく相手のヘアスタイルを気にしているのに気がつく。
最近いろいろとあれだし、ちよつと気をつけないと……。

本格的に心まで女になるわけにはいかないんだ。

女社会つてルールから逸脱しちゃうと目立つらしいから、あくまでそういうルールを知るために雑誌とかで勉強してるだけなんだから。

ともかくこここのところ髪の毛だけはさらに伸びてきているレモンさんとは違つて女の子の子している子。

メロンさんも似てる感じだけど、また違う方向。

僕の知り合いにこういう子はいなかったからまだ言語化できないけども。

あ、アニメとかマンガで言うならバレー部とかしてそうって言えば通じそう。

小学生みたいなゆりかとバレー部的な子。

いろいろな意味で凸凹コンビだ。

「……………」

そのうちの凸のほうからずーっとじーっと見られているんだけど……。

なに？

ガンつけられてる……？

いや、まさか。

単純に上から見下ろされているだけだ、気にしても無駄なんだ。

そういう言葉に出来ない思いを込めてゆりかを見てみる。

お願いだから挨拶だけでおしまいにして？

この子を紹介したりしないで？

そんな気持ちを含めて。

「やんっ！ 響いたら、情熱的!？」

「……………」

通じなかつたらしい。

ゆりかだもんな。

本当にボケてるのか素なのがさっぱり。

ゆりかだしな……。

「……あー、こほん。 えつとね？ うちのクラス、今日登校日だった

んよ？ なんにもすることないし、ただ朝早くに集まってイスに座つ

て話聞だけのやつ。 意味ないよねーって言いながら適当に過ご

してはい終わりでもう帰りなのよ。 だからこの時間」

「……そうか」

「で、このでかいのは『りさりん』って言ってね？ うん、名字が『り

さ』で名前が『りん』。 りさりんって名前に見合わずでつかいんだけ

ど、もちふたつの意味でね？ りさりんと私は去年からおんなじ……

あいた!？」

『りさ』ね？ り・さー！ 名字は杉若！ あと余計なことは言わない

!!」

「んー、痛いよりさりーん」

「だからー、り、さー！ ちゃんと名前呼びなさいって！ 初対面の相

手でしようー！」

ぎゃいぎゃい始まる中学生たち。

……ああなるほど……ゆりかはいつも人の名前、変な風に呼んでい
るのか。

いつもみたいにゲームとか流行りのネーミングをもじったりして。

僕のことときどき変な呼び方するしー人でぶつぶつつぶやいて

いたりするしな。

……あれ？

もしかしてこの子、ちよつと変？

……ちよつと考えてみたらくるんメロンはあんなだけどゆるふわで一括りにできるし、それに比べてぱっつんレモンはつて言うところ……。

……………。

僕は常識人な人しか相手したことがないからこういうときに動けない。

そんな僕の前であつという間の決着。

身長差っていうか体格差であつという間に後ろから抱えられるぱっつんだ。

彼女もまた軽そうだもんなあ……。

多分僕と大して変わらない気がする。

「うあ」とか変なうめき声とともに僕に負けず劣らずな脚がぶらぶらとしていてどう見ても子供だ。

うん、間違いなく小学生だな。

で、それを見るときもなくぼーつと見ていたら、ひととおりぶらぶらさせて満足したのかりさりんさんとやらの目がふたたび僕と合う。

「……ごめんね、うるさくって。で、あなたが響さん……だっけ？

最近コイツが噂してたから名前だけ知ってるわ」

「みぞおちは地味に来るんだよりさりん……」

「あ、はい……よろしく。えつと……りさ、さん」

「ん、よろしくね？」

「りさりんだってうう、おえ」

すぐいうめき声が聞こえるんだけど大丈夫だろうか……。

いくら僕でも初対面の相手に嫌がつている呼び方をする趣味はなからちゃんとい挨拶。

語感が良すぎるから気をつけておかないとついぼろつとしちやいそうなりさりんさんに。

りさりんなのに体格いいけど。

……言葉の響きがいいな、りさりん。

確かに合っているかもしれない、りさりん。

「そんなに怒らなくてもさありさりん……。いつも呼んであげて喜んでるじゃないりさりん」

「名前まちがって覚えられるからじゃない！　せめて最初るときくらいはまともに呼びなさいって何度言ったら！　あと喜んでないからね!」

「そんなー、顔赤くして喜んじやつ……。あ、ちよいまち、ギブギブっ」
お腹をさすりながら口を尖らせるのに負けじと詰め寄っている
ぱつつんとでかいりさりん。

身長差が著しいな。

まるでカツアゲだ。

まあケンカ売ったのはちっこい方だけだ。

……。今でもカツアゲってあるんだろうか？

いやそんな経験も見たこともないけど。

単純に僕が治安の良い町に育っただけか？

「ゆりか、あなたがいつつもいつも学校でそう呼んでるからすっかり定着しちゃったじゃない！　しかも私がいなときでもなんでしょ？　顔だけ知ってるような人からいきなり『りさりん……。さん？』とか呼ばれることもあるのよ!？　それもしよつちゆう!!」

「おう、私のりさりんが浸透している……。良いね!」

「あんたのじゃないし良くないわよ！　おかげで呼ばれて恥ずかしい思いをして、それで毎回フルネームを言わなきゃならない私の苦勞が」

「えー、親しみやすくていいじゃんりさりんー」

「よくないわよ……。って、こら!　ちよつと、止めなさいってば!」

「えー、ケチー」

「ケチ言うな!」

ゆりかがりさ……。さんにしがみついてうねうねもぞもぞしている。

「……………」
あんなにくつついて暑くはないんだろうか？

夏服だし冷房効いているし、平気か。

でも女性ってやっぱり距離感近いよなあ……男同士だとここまでひつついたりしないもん。

ましてや公共の場所、ましてや初対面の僕の前で。

と、途中でゆりかが痛そうな顔をして離れてじゃれあいが出たつと止まる。

ほっぺをさすりさすりしている。

……あー、身長差があると胸の下のところ……ちよūd顔のあたりに来るよね。

あれ、ブラジャーとかが当たるとけっこう痛いんだよなあ……僕も何回かあるから分かる。

かがりに良く抱きつかれるから知ってるその痛み。

おかげで抵抗感も薄れたけど。

スポブラみたいに布だけでできているのならまだしもだけど……

普通のは意外と痛いんだよなあ……。

金属がむき出しなわけでもないのに何でか痛いつて感じる。

なんでだろ？

「……………」

……頭を抱えてうずくまりたい気持ちになった。

だって、こんなこと自然と考えてるんだよ……。

こんなことがすつと思ひ浮かぶのが怖いんだ。

だけど嬉しいことに僕から意識が離れている様子。

このスキにうまいことどうにかしてそつと身を引きたい。

けどそれにはじゃれあっている彼女たちの真横を通らないとならない。

だって僕はすみっこのコーナーに閉じ込められる形になっているから。

……どうしよう。

「……………」

することもないからぼんやり立ってるしかない悲しみ。

こうして女子中学生同士のやりとりを見ていると……ふだんのゆ

りかもスイーツと着せ替え以外のおきのかがりもけっこう遠慮してくれていたのがよく分かるな。

あのかがりでさえ結構控えめだってことが分かる程度に距離が近いつて言うか肌同士が密着しすぎている。

制服の硬いはずの生地がふんにやりしてるもん。

きつと柔らかいんだろう。

……暑そうとしか見えないけど。

目の前で繰り広げられているような……取っ組み合いとかじゃないけど体の大部分が触れあいながらの軽い感じのじゃれ合い。

こんなのされたら絶対距離を置くな。

レモンならともかくメロンだったら。

不純でも異性でもないけどなにやらいかがわしい交流だもん。

そういうのつてもっと相手を知ってからじゃなきゃやらない？

レモンとさくらんぼならくっついたってごっこつとしてたいして

気持ちよくもないだろうからゆりか相手は気にしなくても良いけど……なんか悪い感じがするしで僕からはしないけど、あのメロンは要警戒だ。

だけど困った。

どうしよう。

どうしようもない。

「……………」

うん。

普段の2人の関係はよく分かった。

いつまで経っても僕のことを忘れて普段のようにじやれているだけのようだし、ここはさっさとお暇しよう。

うん、それが良い。

「勉強があるんだ」とか適当だけど嘘じゃないこと言っさよならするんだ。

「えっと、ふたりとも。 その……元気だな……」

「僕は元気じゃないからそういうのは余所でやってね」っていう意味を込めたけど口が回らない。

圧縮言語が世界に広まれば良いのよね。

「あつ……………ごめんなさい、つい」

「私たち、ラブラブだからむぎゅっ」

「ゆ・り・かー？」

……………頭を押さえつけられている。

身長的に僕もこうされたら身動きが取れない。

りさりんさんの近くへはあまり寄らないようにしよう……………。

「……………ようやく静かになったわね……………。あ、ごめんなさい。確か

体が弱い……………なんだったわよね？ このアホから聞いているの。大

丈夫？」

「いえ、このくらいなら平気で」

「そう？ よかった」

僕のことを話されていたって分かってちよつとイラッてきたけど、
考えてみればそうだよな。

ゆりかとして一応は女の子だからおしゃべりが好きなのには違いな
い。

きっと僕っていう珍しい生き物に会ったことはとつくに知らせて
はいたんだろう。

問題はどこまで話すかだ。

あんまり細かく……………なにからなにまで話しているようだったら今
後はちよつと会話に気をつけないといけないかも。

だって会ったことがない人にまでみーんな筒抜けっていうのは気
分が悪いし。

かがりからの、彼女の友人やら家族やらの個人情報の漏洩つぷりを
知ってるから余計に。

あと、僕っていう存在があまり知られるのもなんだかまずい気がする
るし。

……………かがりの話しつぷりを聞いているときに気がつくべきだった
かな。

顔も知らない人の下の名前とか性格とかどんなことをしたとか、気
がつけば10人ぶん以上は頭に入っちゃってる恐ろしさ。

見知らぬ子たちのプロフィールが知らぬ間にインプットされている。

噂の力は怖い。

気をつけよう。

もう遅いかもしれないけど。

「……………あ——重かった……………大丈夫よー響。 響の話はほんとそんなくらいしかしてないし。 友だちだって言ってもなんていうか……………ふつーじゃないじゃん？ 私たち。 あ、もち悪い意味じゃなくて！ ホント！」

確かにそうではあるね。

学生の彼女のにも学外の近所で知り合うなんて早々ないだろうし、僕にとつてはこういう関係なんか10年ぶりくらいまであるし。

「えーっと……………事情持ちっていうか？ そういうの、どこまで言ってるのか分かんなかったからさー。 同い年で小さいもの同志でクール系で。 そんならいだよねえりさりん？」

「あ、それでいつもふわとしか言わなかったのね……………つて！ だから名前！」

「りさりんのこと？」

「り・さ・よー！」

「ふーい」

……………ひとまずゆりかは大丈夫と。

線引きできる子だって分かったから少しは安心だ。

じゃあ残るはかがりだけだな。

もう手遅れかもしれない……………けど話されるのはイヤだって伝えておかないと。

どれだけ聞いてくれるのかは分からないけどなあ……………あのおしゃべりくるんは。

……………。

やっぱ無理かも……………。

「……………そうか。 僕、あまり知らないところで噂されるのは苦手だから助かるよ」

「よかったー。いつもお家のこととかになると話そらすしなんとなく思ってたの当たってたね！で、ところでさ響？YOUはなぜここに！」

両手を突き出すようなポーズ。

……ちよつと古いぞ。

いや、テレビを見ていれば昔の流行りとか目にすることもあるし、おかしくはないのか？

「ごーんなイヤーなコーナーに来てるってことは参考書とか単語帳？

マジメさんねー」

「ああ、ちよつとね」

なんかおかしいなってさつきから思ったんだけど……気がついたら二頭筋から先がしびれていた。

ふたりに気を取られて、さつきまで比べていた重いテキストを持っていた様子。

……指の関節と手首と肘……大丈夫だろうか。

とりあえずとして明日に筋肉痛は確定だなあ。

だって貧弱だもん。

幼女だもん。

「さすが響ー、まじめさんだ！……だってよー？りさりーん？

夏休みの熱い中わざわざー人でお勉強のものを買いに来る精神を見習いなー？話も上手で先生ウケもよくって頭もよさそうってイメージしかないのにダメな科目はどことんダメなりさりーん？」

「……こんの、今回の成績で勝ったからって……。私は毎日少しずつやってるって言ってるよね……？」

「今回だけじゃなくて中学入ってから……あ、はい、おとなしくします」

「……………」

痺れたところって原因がなくなると一回強烈に痺れるよね。

しびしび。

僕はしびしびしている。

「でもさーりさりーん、昨日だってゲームで夜更かししてたって言って

なかったー？ イヤな予感がした私からの今朝のコール、なければ遅刻だったじゃーん？ 下手すれば今日がサボりだった可能性すらあるのはご存じで?？」

「あ、あれは……っ！ あれは、たまたま熱中し過ぎちゃってちよつと寝るのが遅くなつて目覚まし時計、無意識で止めちやつただけじゃない！ ふだんはちゃんとしてるんだから！ ……あ」

ぱちつとりさりんさんと目が合う。

「……ちゃんとしてるんだから、ですからね！」

「うん」

「何故に敬語？ りさりん」

……ふむ、こうして見ていると人を煽るのって意外とかんたんそう。

レモンさんが調子に乗っている。

唐揚げにかけているかのよう。

なんだか微笑ましいけど僕のいないところでやって欲しいところ。

あ、でもだんだんとしびしびがしびくらいになつてきた。

「……でもさーりさりーん？ もー1週間くらいずっとそればつかしてない？ ゲームも開いてるって言い張るページも。ほんとに大丈夫……?？」

「……少しは、やってるから大丈夫……よ」

急に真面目な口調になったゆりかに戸惑う、りさりんさん（仮）。

「えーほんとうかにやー？ りさりんさーん？ ウソついてるんじゃないーい？」

「ほ、ほんとうだつて言ってるでしょうが！」

「あ・や・し・い♥」

しびれが取れてきたら今度は軽い痛みが両腕に広がる。

なんだつて僕がこんな目に遭うんだ……理不尽だ……。

ふたりはこんな感じですつと会話しているし、これ、僕がいなくても別にいいよな……?？」

もう帰って良い……?？」

帰らせて……?？」

仲がいいのはいいことだけどさ、僕にはここまで砕けた友人関係とか作れたことなかったしさ。

こういうのはマンガとかの世界だけの話かとも思っていたけど現実にいる普通の子たちでもあるらしいって分かったのは結構びっくりだけどさ。

興味がなかったっていうか中学からできた友人たちはみんなどこか僕みたいな性格ばかりだったし、高校からはいないも同然だったならまだしも僕の両親のことで腫れ物扱いだったしなあ……。

当時はなんとも思わなかったけど、こうして年下の子たちが戯れているのを目にすると……ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ。

寂しい学校生活だったのだった。

灰色の学生生活だったんだって気にもしていなかったのに、どうしてか急に胸が締めつけられるような気持ちになったんだ。

……不思議だよなあ、心って。

当時はなんとも思わなかったのに、こうして大人になってから……こう、きゅんってなるんだから。

18話 学生たちの、夏休み(3) 3/3

女性って自分たちの世界に入るよね。

いや、僕もそういうクセあるから深くは追求できないけどさ……。

「りさりん、もつと計画的にやんなきゃダメよ?」

「言われなくなたって……」

「いや何回も言ってるけどぜんぜんやんなくって赤取りそうだったの誰よ」

「ぐっ……」

「しかもボーダーだったから普段の提出物点っていうお情けで追試も補習も回避してるし」

2人の関係は勉強のことになると逆転するらしい。

学生って体育が得意だったり勉強ができたり友だちが多かったりするって強いもんな。

加えて女子は顔でも決まってくるって言うから恐ろしい。

このふたりは顔も良くて愛嬌もあつておしゃべりもできて、あとりさりんさんはお胸も大きいからきつと上なんだろう。

僕男で良かった。

今は女だけだ。

……………。

あれ?

もしかして僕女社会に出るとしたらカーストとかあつたりするの?

え?

昼ドラ並みの女同士のどろどろに放り込まれるの?

なにそれこわい……。

一応今の僕もこの2人くらいには整ってるけどそんな社会ストレスで死にそう。

やつぱり無難にどこにでもいる男が最強なんだって思う。

「あ、置いてきぼりにしてごめん」

「あつ……ごめんなさい」

「いや」

「楽だったから別に良いんだけど。」

「響ー、怒った？ ごめんねー？ それもこれもこのりさりんが悪いのよー、責めるならこの子だけに」

「あんたのせいじゃない!?!」

急に話しかけられたからYESかNOしか言えなくって不機嫌に聞こえたらしい。

そんなことないのにな。

普段から会話しないから頭の回転と口の動きと発声がうまく行かないだけなんだ。

つまりは全部だめだめなんだ。

「りさりんは煽り耐性がないのが悪い。 いじりやすいのが悪い」

「……覚えてなさいよ」

「ふいふい。 で、響は今日どんなの買いに来たの？ こういうのつてふつー、家庭……おっと。 ……んー、親とかが用意してくれるもんじゃないの?」

「別にそこまで気を遣う必要はないよ。 家庭教師だね。 これくらいは隠すことでもないしな」

「そ? 家庭教師ってふつーの生徒に取っちゃはずかしいもんだもんねえ」

「家庭教師……確かにね? 勉強できなかったらまずは塾よね」

「りさりんに今最も必要なものだったのだ」

「あん?」

「まーたじやれてる……。」

もう欲しいのは見つけたし帰るだけなんだ。

きやんきやんしているあいだ早く終わらないかなって奥の方にあるのを見てみたらいいのがあったし。

なんか偶然で欲しかったもの見つけるのってあるよね。

……あ、そうだ、家庭教師さんはクビってことにしよう。

唐突なりストラ。

もう勉強も追いついたところか設定上の学年のふたつ上まで届い

たことだし必要ないってことで。

うん、それでなるべくその話題を回避しておいてちよつと経てば……どんな人だったのかとか聞かれても「もう来なくなったから忘れた」とかでごまかせるし。

うん、それがいい。

そもそも男か女かも考えていなかったという稚拙さだしなあ……とりあえず女にしておくか。

同性じゃないと嫌がる親御さんとかいるしな、そんな感じでGO。

「もう家庭教師は来ない」

「……ん？ どゆことそれ？」

……「もう家庭教師は存在しなくなっている」的なニュアンスになつちやつた。

また言葉が足りない。

僕はいつもこうだ。

「……これだ」

思うように口が動かないからつてしずしずと差し出してみる参考書。

差し出すって言っても、もう腕がだるだるだから選んだのを指さすだけ。

元はといえばこの子たちに気を取られたからこうなったんだし。

「これ？ 見ていい？ あ、どもども」

「へー、見たことないわねー。どこの出版社の？」

「……りさりんの家つてば参考書だけはあるもんねえ。あれでしよ、目移りして揃えちゃうんでしよ」

「違うわよ。……お母さんとかお父さんが『これが良いんじゃないか？』って買って来ちゃうの」

りさりんさん。

それ、次は「塾に行ってみない？」の前フリだよ？

ちゃんと勉強した方が良いよ？

塾代とか家庭教師代つてその参考書とかを月に10冊買うくらいかかるんだから。

中抜きもとい仲介手数料的な感じで塾とか家庭教師派遣の会社からその半分くらいをもらってた経験があるから知ってるんだ。

「ほーほー。……………」

「……………」

なんかゆりかの手が止まる。

りさりんさんは固まっている。

ページを見てから表紙を見て、2人顔を合わせて、もういつかいページへと忙しい。

仲良いな。

息も表情の変わりようもぴったりだ。

「……………えつとー、響さんやい。これ、高校のじゃない？ お間違え？」

「いや、合っているよ。高1のだからね」

いちいち芝居がかかるのにも慣れたけどほんとうにオーバーリアクションなゆりか。

芸能界とか目指せばいいんじゃないかな？

僕、ちようど良い感じのコネあるよ？

あ、でも今どきはセルフプロデュースな時代か。

でも事務所とかのバックアップあった方が人気出やすいって聞いたことあるし……………」

「あつれー？ たしかこの前退院……………あ、ごめん……………え、これも言っているの？ あ、じゃあ。……………響が退院してからまだ勉強追いついてないって言ってたって思うんだけど……………」

しどろもどろなゆりかはわりとレア。

「あれは家に戻ってきたばかりだったからね。今までは全然勉強していないかったんだ」

嘘は言っていない。

意図的に僕の状況を曲解しただけだ。

意識とも言う。

「退院？ ……響さん入院してたの？ たしかに体が弱いつて言ってたしゆりかよりも小さ……………あ、ごめん。背もかなり低いし……………聞いて

ていいのか分からないけど重い病気とか……？」

「りさりん、もうちよつと待ってて？ それ、初対面で聞いちやいけな
いやつ」

僕は初対面で話したけどね。

「……のはずなんだけど響って結構そういうのオープンだよ。初
めて会ったときもそうだったし。私、結構気いつかってそこまでは
言ったりしてなかったんだけど……」

「ゆりかの友だちだろう？ ならこの先どこかで会うかもしれない
し、それなら知っておいてもらったほうが話が早いしな」

こうして夏休みの午前中って言う遭遇しないはずの時と場所で実
際にばったり会っちゃったからには「会わないだろう」っていう仮定
は通用しない。

元々ゆりかともこの近くで知り合ったんだもんな、そりやあそう
か。

「いちいち……そうだな、誰にどこまで話したのかを忘れるくらいな
らさつさとぜんぶ話しておいたほうが楽だし」

毎回誰にどこまで嘘ついたか、どのくらいの嘘か嘘じゃない範囲
かっていちいち気にするとストレスで背が縮みそうだし。

「あと僕はこの通りだから。この容姿のことと一緒に説明し慣れて
いるからぜんぜん気にしないから平気だよ」

「お、おう……」

「すごいわねえ」

まあぜんぶウソなんだし。

いや完全にウソじゃないけど、状況的に見たらある面では合っては
いるんだけど……やっぱりでまかせであることには変わらないんだ
し。

……ほんとうははじめつから言わなきゃよかったんだけどな。

それこそ「家の事情でほとんど話せない」っていういいわけを最初
に思いついていて貫いていければ今ごろはミステリアスな存在だけで
済んだはず。

……………。

……こうやって、あとからならいくらでもベターな選択ができるの
にな。

後悔というやつはいつつもこうだ。

やっぱり嘘はつかないに限るな。

男に戻ったら何でも素直にしよう。

記憶力も良いって方じゃないんだからその方がずっと楽に過ごせるはずだもんな。

「ずばずば言うあのメンタル。 見習いなよ？ りさりん。 正直は

美徳よん？」

「こんの……」

ごめん、嘘なんだそれ。

「……学校に通ったりするようになったら必ずみんなに聞かれるだろうしな、こういうのは。 なら君たちで慣れておこうって思ってたね」
やっぱり僕の見えた目は子供なんだし中学生って言い張ってるしで
学校は必要。

最近はずっかり忘れていた通う先の学校のことも考えておいたほうがいいのかもしれない。

……けどなあ。

そこまで決めちゃうし完全なウソになっちゃうしどうしたものか。
ひとつのことを決めると数珠つなぎで新しいことも決めなきやならなくなる。

だから盛ったりマシマシにしたり解釈を変えるだけならともかく、
完璧なデタラメは大変だ。

と、ぼんやりしていたら両肩に衝撃と重み。

びくっとして前を見るとほんの数センチのところに関澤さんの
ぱっちりな目……あ、眉毛長いなこの子……があつて、もういちど
びっくりした。

「……………響！ 学校、行けるの!? どこ!? この近く!？」

近い近い近い。

身長差で上から被さられるようになってるから小さいはずなのに
威圧感があるし。

揺れる揺れる。

世界が揺れる。

僕の首がぐくぐくしている。

幼女の細い首がぼきつと折れちやいそう。

わー、蛍光灯がちかちかしているー。

「……いや、自分……先の……ことにはなると……思うし……まだ決まって……もないけど……」

声がぐわんぐわんしている。

なんか新鮮な感覚。

「……なあんだ残念！ でも決まったらすぐに、すぐに！ ……教え
てよ？ ね？」

「……分かった」

荒い鼻息を感じながら絞り出した声に満足したのか、ようやく離れてくれたレモン。

……かがりよりもはるかにマシとは言ってもゆりかもやつぱり年頃で多感な少女。

ときどきこうして暴走気味になるよな。

そこそこ話したけど未だによく分からないそのポイント。

ジエネレーションと性別と性格のギャップはまだまだ深い。

でも、学校ってだけでそこまでなるもの？

詰め寄るほどに気になるものなの？

……僕だったら「ふーん、良かったね」で済ませちやいそうだからいまいち分からない。

だから友だちって言うのが少なくって同窓会とかの連絡も来ないんだらうな。

悲しい。

「りさりんりさりんっ」

「はいはい」

でもなあ。

こんなになら考えなきや行けなくらいならはじめっから恥を捨ててさ、「二ートに準ずる不登校」とか「ひきこもり」とかそういう限りな

くほんとうに近いことを言っていたほうが良かったんじゃないかな……。

そうすれば悪いって思ってくれて深く追求されないんだしき……。

あと、肉体年齢もひとけたから10歳くらいだって正直に。

あ、でもそれだと子供扱いだからやっぱりやだな。

なにが悲しくて小学生にならなきゃいけないんだ。

でも、そうすればこうやってゼロから設定を考える必要もなくてウソもほとんどつく必要もなかったわけで。

今よりもずっとずーっと楽だったんじゃない？

そう思うと僕って墓穴あっちこつちに掘ってる気がする。

はじめっからか？

はじめっからか。

「えと、そういうわけでもりりん。響はこないだまで、ずーっと何年も……10年まではいらないよね？ ……あ、さいですか。1

0年以上……え、そんなときから？ 入院しててろくに勉強もするどころじゃなくなつて。でも退院もできるくらいに元気になつてきてそつから勉強するほどまじめさんでね？」

そう、彼女によって僕の遍歴が構成された。

すうつと息を吸い込むけど膨れないレモンさん。

「……なワケだったんだけど！ そうだったはずなんだけど！ 少なくとも中間くらいまではそうだったんだけど……。だって聞いたとき試験範囲の問題とか分かんないって言ってたし！」

ああ、あの。

あれって私立の受験の問題だったね。

高校受験のやつだって。

逆に解けたら先生にばれるところだったらしいよ？

だって中3の公式何個も使うやつだったし。

今の僕なら解けるけどね。

威張れないけどね。

中身は成人してるから。

「……そうだったのに！ 何？ この1ヶ月で何があつたのひびきい

!?! もう勉強は追いつくどころか追い越しちゃってホームティーチャーもお役御免にするほどで、手元には高校の参考書とか!! なにその超ハイスペック!? マンガのキャラみたい!」

うん、僕もそう思う。

そういうキャラクターっているよな。

聞いただけでウソだって思うし実際にウソだし……。

「……………」

「……………」

ふたりの視線が厳しい。

……やっぱり嘘だって思う……?」

僕もそう思う……なんかごめん……。

「……………いや、その。みんなよりも……時間が、あっただけだよ。時間と、見張られている環境と。それさえあれば、きつと君たちだつて同じこと、できるはずだ……」

でも今さら「嘘です」なんて言えない。

それがドツボつていうヤツなんだ。

「いやいやいやいや絶対ムリだから! 私だつたら隠れてゲームとかしちゃうしさぼるし! ねえりさりん!! りさりんなら分かるでしょ!!」

「え、ええ……ごめんなさい、毎日ヒマなのに宿題さえしていません……」

りさりんさんが僕に向かって何故か謝る。

「ほれ、見習いたまえりさりくん。勉強はやればできるんだよ!」

「……明日から。誘われてたとおりあんたの家でするわ、勉強……流石に響さんのを聞いたらやらなきゃって思ったわ……」

しよげりりんさんになっている。

「おお、りさりんが響のおかげでついにデレた!!」

「勉強よ勉強!!」

「……………」

くつついてるふたりを見てちよつとだけは癒やされるけど、でも罪悪感で胃が痛い。

きりきりきりと痛む感じのこれ。

背中まで痛んでくるあたりもはや懐かしい感じでストレスを感じているようだ。

……10年以上先取りしているんだからできるのは当然なのに。

さつきまではそこまでじゃなかったんだけど、こうしてウソで褒められるのが続くと良心がこなごなになってくる。

やめて。

僕自身がすごいのも何でもなくって、ただ1回やっているだけなんだ。

そこまで言わないで。

僕はそこまでの人間じゃないんだ。

ただのどうしようもないニートなんだ。

僕は元の、まだある程度の力仕事でも嫌でしようがない雑用でも……やろうって決心すればできる健康な体を持った男。

でも、ただそれだけだったんだ。

将来の可能性で言えば君たちの方がずっとすごい存在なんだ。

少なくともニートやってるよりはずっとずっと。

そうやって、いつそのことぜんぶバラしてしまいたくなる気持ちがもたげてきたけど……もつと酷いことになるだろうって思ってた

ぐつと、なんとかこらえることができた。

……帰ったらお酒飲んで寝よう。

もう勉強する気もなくなった。

僕は弱いんだ。

昼間っから呑んだら朝までぐつすりだろう。

1日スキップすれば多分ちよつとだけ楽になるんだ。

僕はそうやって今日までやって来たんだ。

「えつと、すごいですね響さんって」

「……いや」

「あの、……知り合ったばかりであつかましいって分かっていますけど、勉強。響さんがよければ、教えてくれ……もらうことって、できますか……？」 あ、もちろん時間があるときにちよつとだけで良いので

……」

「でた、りさりんのコミュ力！ あとなんか敬語！ 敬語りさりん良
い!!」

ぐったりしていた僕をかがみながら見下ろす感じでありさりんさん
が迫っていた。

その後ろからぴよんぴよんとゆりかが跳ねている。

……うん、全体的に大きい。
いろいろと。

メロンさんとは違って健康的でがっしりとした感じにいろいろと。
それに反比例する憐れなゆりかの髪の毛が跳ねている。

「……おーいりさりん。 私が教えたいってばさー、もちろん優
しく手取り足取り……」

「……ゆりかはイチイチ『こんなことも分かんないの?』とか煽って
くるじゃない。 イヤ」

「なんですと!! あれは愛のムチってやつなのに!!」
「……………」

ぎやあぎやあ言い合ってさつきみたいな感じに戻りつつあるふた
り。

……とりあえずで時間がかかりそうでやり応えのありそうな数学
だけでもって買いに来たの、失敗だったな。

まさかゆりかと、ついでに……りさりん……まずい、名前が定着し
ている……なんとかさんがいるなんて。

語感いいもんな、りさりん。

登校日って概念そのものがすっぽりと抜け落ちていたし、そもそも
偶然に会うなんて思ってもみなかったし。

……いや、そもそも、そもそもこうしてゆりかと話すのもかがりに
追われるのも、みんなその偶然ってやつのせいなんだけどな。

……僕がこの姿になった魔法。
やっぱ呪いか、これ。

罪悪感もようやく引いてきたしでもう少して座り込みでもしそ
うなくらいだった脚にも力が入ってきた。

……病氣設定使って切り抜けようかな。

けど、やっぱり真っ赤なウソはなあ……うーん。

「それにしても2年分以上だよねえ!? それをたったのワンクールどころか1ヶ月ですっ飛ばしちゃうなんて! 響、恐ろしい子……!」
「はあー、ほんとうよね。もちろん努力したからだっていうのはわかっているけど、でもそれでもさすがにそこまでは私たちではムリだわ……」

「……たち?」

「うっさい! あんただってムリでしょ!?!」

「まーね」

「……」

ふたりの隙間から出口のほうを伺う。

これでも話の合間にさりげなくずりずりと移動を重ねて外まで見える位置にたどり着いたんだ。

あとはもう帰るっていうのをどうにかしてうまく言い出せば。すうつと息を吸う。

……よし、言うか。

「……」

息を吸って溜めたところで気がつく。

……ん?

通路の先にまたしても女の子がいる。

分厚い本を抱えるようにして歩いているメガネの子がふらふらと
儂げだ。

あの子もこの子たちと同じ制服らしい。

珍しいものもあるもんだって思ったけど今日は登校日だって言っていたしな、他の子がいたって不思議じゃない。

ゆりかたちの学校、この辺から通っている子が多いんだな。

いやまあたつたの3人だけだよ。

この本屋はこの近くでいちばん大きいんだし、定期券で来られるんだったりしたら来ることもあるか?

「……あら、友池さんじゃない! 珍しいわね、こつちまで来るな

んて！」

耳の上を大声が通過してびっくりした。

いや、そこまでの声じゃないんだけど、ちよつとぼーつとしていたから。

その文学少女的で友池さんのな子も僕と同時にびくつとしてたし「ぴゃっ」みたいな発声も確認できたから一瞬で僕の同族認定だ。

僕たちみたいな存在はそれだけで分かり合えるんだ。

「およ、りさりんが元氣」

「そつか、今日はどこのクラスも同じタイミングで下校だったものね。部活とかなかったら同じ電車に乗るわよねっ」

「……………」

しまった。

びっくりして固まる僕を追い越すようにして……つまりはせつかく総員2名の人垣から抜け出しかけていた僕がりさりんさんに塞がれる形になって、その先にはメガネさんがいて後ろにはゆりかがいる。

僕よりも背の高いJC3人に囲まれたんだ。

……状況が悪化している。

僕はもう駄目だ。

19話 学生たちの、夏休み(4) 1/2

「ふ——……」

お風呂上がり。

僕はほっこりしている。

火照った体にひんやりとした空気としっとりしたタオルが気持ちいい。

あー、これが温泉だつたらなーって思う。

習慣で冬でも鳴るべく毎日散歩くらいはしてたしそこそ運動も……ニート基準でしてたからたぶん日焼けしてたんだろう男だったときの肌が懐かしいくらいの白い肌がまぶしい。

けどまぶしさも桜色になっていて、わきとか太もものつけ根とかそういうところがいっそうに色づいている。

ほっぺたも耳も真っ赤だし目はいつもよりも余計に重そうになっている。

……なんかこういう表現ってやらしいけど実際に目で見てみるとそうなんだからしょうがない。

やらしいことする相手は居ないから安心だな。

「……………」

やらしいことって事象を思い浮かべた僕はタオルを敷いて床に足を広げて座ってみる。

前と比べるとずーっと体が柔らかいし小さいからすぐに思いどおりの体勢になった。

いそいそと……こう、体育座りから両脚を開いていく感じで……まあそういうこと。

前のときは特にストレッチとかにも興味なかったし開脚とかそもそも試してみたことなかったんだけど、やってみたらなんの抵抗もなくてびっくり。

そういえば体柔らかいもんなあ。

これが若さだ。

幼さではない。

そこは毛もなくほくろもなくぜい肉もないつるつるの桜色のすべすべだな空間。

脚を広げればジャマになつてくるはずのものもなくつて、かといって手前で視界を遮るはずのものもまたないもんだからほんとうにすつきりしている。

ふともものあいだ。

おまたの構造がこれ以上なくはつきりくつきりと見える。

「……………」

じーつと見て固まる僕。

そう言えばこうしてじっくり見るのは初めてな気がする。

今まではなんだか悪いって感じていたから遠慮していたけど……

ふとした好奇心にはついに勝てなかつたんだ。

つまりは学術目的だ。

便利だよな、学術目的って言葉って。

それに異性の肉体って言っても幼女だからとつくに羞恥心もなくなつてきているというか、そもそも僕自身の体だとしか感じなくなつてからもうずいぶんだしな。

体だつて何十回も洗つたしトイレなんか何百回も行っている。

今さらだ。

まあ恥ずかしがる肉体年齢でも精神年齢でもないしなあ。

ここでちっちゃい鏡の登場。

それをいい感じに傾けてのぞき込んでも微妙にしか見えなかつた

ところを……見る。

「……………」

……………。

「……………」

「……………」

痩せているからなんだか想像とかとは違つたけど、それでも男とは確実に違うそこがはつきりと確認できた。

「ふむ……………」

資料で見たのとはずいぶんと違う趣。

なんかいろいろな理由でそういうのってモザイク掛かってるしな。

「……………」
ほんとうに穴同士がここまで近くて縦に開いているのか。

「……………ふむ……………」
なるほど。

脚の開閉に合わせて、ここも開閉。

不思議な造りをしている。

男とはまるで違うそこが興味深くってじつと見入っちゃう。

おなじ人間っていう種族でここまで違うなんて……………つて。

胸は男女ともにベースはおなじだし今の僕みたいに「男の胸」って
言っても通用してしまう女性もいるんだから、そこまでの違いはない

んだけど……………ここはさすがにちがった。

幼児の段階でここまで違うなんてな。

不思議だ。

洗うときの感触で、指とここ自体との感覚でなんとなくは分かって
いた。

けど、こうして目で見るのとは実感も衝撃もぜんぜん違うもんな。

なんていうか……………ちよつと、感動……………？

多分ごく一般的な男なら……………最近は僕のお仲間が増えるから分
からないけど、それでも半分くらいの男ならこの歳くらいには1回は
見たことあるだろう異性の体。

その秘したる部分。

興味深くないはずがないか。

「ふう」

なんかため息が出たしくらくらしてきたからやめとこ。

単純に好奇心が満足したっていうか知ることができたっていうか
見ることができたというか……………そういう感覚が入り混じったような
不思議な感じなんだ。

男に生まれたら女の体が、女に生まれたら男の体が気になる。

人間ってそういうものなんだろう。

でも。

……ほんとうに。

ほんとうに——男から女になっていたんだな。ただ無くなっただけじゃなくなって内側にめり込んで。

「……………」

女の子、かあ。

僕は本当に女の子になっちゃってるんだなあ。

……TSって言うものをして実に数ヶ月。

意気地のなかった僕はとうとうにそれを実感したんだ。



儂げな文学少女さんもとい友池さんとやは客観的に見た僕みたいな反応をしながらふらふら歩いてくる。

僕はりさりんさんの後ろに居る形。

ゆりかの前に居る形。

つまりは身動きが取れないんだ。

「友池さんもこっちにも来ることあるのね。偶然ね！」

「……………」

りさりんさんに呼ばれてしまったメガネの子が本を重そうに抱えながらのそのそと歩いてくる。

りさりんさんに対する反応も緩やか。

……ちよつと親近感が湧く。

腕の力がなくて抱えてるものが重いとときとかそうなるよね。

あと、この動きとこの表情……あんまり呼ばれたくなかったと見た。

って言うか多分本を選ぶっていう自分の世界に没頭していたもんだからまだコミュニケーション機能が作動していない。

ほんとはやだけど断れないからしようがなくってときそうなるよね。

わかるー。

「……………その。杉若さん。……………こんにちは」

「ええ、こんにちは。学外では初めてよね！」

ぎこちない感じのあいさつ。

うん、僕の種類だな。

君もかわいそうに。

人が多くなつてしまったからちよつとだけ自然な感じでわきに寄る。

あともうちよつとでうまくフェードアウトできそうな気がする……。

「ほう。りさりんりさりん、この黒髪ロングで儂い系メガネっ娘お知り合いですかい？」

「うん、ときどき話すのよ。あれあんた知らなかったっけ」

「私、りさりん一筋だからー」

「まーたそんな思つてもいないことを……で、ゆりか？ 友池さんは近すぎる距離感苦手だからね？ 今みたく軽口ばつかしてると嫌われるわよ？」

なるほど。

つまりこの子は完璧に僕側の人間、と。

「ふーい。つまりは時間をかけて攻略されるタイプなのね。ぐいぐい行きすぎると嫌われる感じの」

「攻略言うな。響さん相手するときみたいにな、普通に常識的に……あたりまえにしていればいいのよ。ふぎけなければね」

「りよー」

元気だなー。

僕たちはこの子みたいな子たちに陽気を吸われているんだ。

「……………」

「……………」

ふたりがテンポの速いトークをしているから手持ち無沙汰だったのか、ふと儂い系の……メガネさんと目が合う。

「……………」

なんかじつと見られてる。

なんで？

けど。……………でも、近くなんですけど、違うところ、コーナー見てて。その、違うジャンルの本が、好きだから……………あ、です」

がんばった。
えらい。

複雑な文章を高速で理解する脳みそと簡単でも発音する文章を組み立てる場所ってかなり離れてるよね。

「そうなのね。いつもふたりでいるところしか見たことなかったから新鮮だわー」

「い、いえ……………、ふう」

けどりさりんさんこういう子の扱いにも慣れてるんだな。

コミュニケーションに長けているとはこういうことだ。

そうして話し終わって脱力している友池さん。

……僕の学生の頃も、このくらい静かな声でゆっくり話してくれる子と知り合いたかったなあ。

話すたびに一緒に緊張してくれるとちよつと嬉しい感じが良いんだ。

メロンさんもレモンさんもレモンさんにくつついてるりさりんさんも、いかにも姦しいって感じの女の子だし。

もちろん理想は男の知り合いなだけど……………出会い、ないからなあ。

いや、あえて作りたいとは思わないし……………あ、男ならいたな。

えつと、ガタイのいい、……………萩村さん。

よし、名前を思い出せた。

僕もちよつとは成長しているらしい。

「私、友池さんとはたまに話すくらいだったし改めて自己紹介しておくわね？」

「え……………はい」

うわ嫌そう。

嫌そうって言うのはりさりんさん相手が嫌なんじゃなくって、多分会話が続くことに対して。

僕だからこそ分かる。

「来年はおんなじクラスになるかもしれないし、たしか高校からは選抜制のクラスもあるらしいし、お友だちは多い方が良いものね！」
そう？

「私はりさり……じゃなくて」

「おやあ？」

「だまらっしやい」

「むぎゆ」

りさりんさんの二の腕と胸に押しつぶされる関澤さん。

……上から来られると逃げられないし、あの球体が重そうだ。

ほどよく柔らかさと弾力を感じられそうだけど相応の重みがありそう。

「え、えーっと、私が杉若りさ。で、この小学生みたいなのが関澤ゆりか。全校集会とか移動のときとかで見たことある？ 私、今年一緒のクラスになってからいつもつきまとわれてるんだけど」

「……………はい。廊下、とかで何回か」

「つきぎゆむむ」

ゆりかの発言はキャンセルされる。

何言いたかったのかちよつと興味湧いた。

「なら早いわねっ。で、こちらは響……さん。えーっと、同じ学校じゃないし、このゆりかよりも幼……若……小………ええつとお……」

ちらちらと困った顔で見てくるりさりんさん。

いいよ、ちっこいで。

客観的に見れば僕は幼女なんだから。

「……背は低いけど同い年なんだって。私もさつき知り合ったばかりなの」

「りさりん重い——……もしかして、太った？ あ待って待ってちよい待って、もっと重い!! 深刻な重さだよりさりん!!!」

「ちよーっと静かにしててねー、自称中学2年生さーん?」
「自称じゃないやい!」

「……………」

「自称中学2年生さん」って言葉で一瞬ひやつとした。

流れ弾が怖い。

さりげなくまた1歩距離を置いてみる。

……あ、ゆりかがりさりんさんにじやれる形で前に出たから僕の周りにスペースができた。

この子たちが会話に夢中になるかその辺の参考書のどれかを手に取って話をし出したりでもしたら、なにも言わずにすつと気づかれずに逃げられるかも。

でも買いたい参考書……。

いやいやこの状況の方が嫌だしそもそも帰ったらお酒でだらしくする予定だし。

「……………」えつと、響、さん。よろしく、お願いします……………」

「どうも」

もたもたしているあいだに振り向かれてしまったからとつさの返事。

定型句だけは得意なんだ。

再びに文学図書館さんと向き合う形になってじーつと見下される。身長がさっきのふたりの中間くらいだからそこまで首が疲れなくて楽。

あと、ちゃーんといい感じに離れてくれているのも良い感じ。

でも……あれ、でも他の人みたいにそんなに驚いた様子はないみたい？

うーん、僕が中学2年生だという詐称をしても特になんとも思わない人もいるのかな。

学生だと全校集会とかでゆりかみたいなのがいっぱいいるのかな……………？

今のところみんな初対面ではそれなり以上に驚いているんだけど。それともびっくりしてるけど表情に出ないし口で言うのにもまだかかるのかも。

……こういうのって大人の方がびつくりするものなのかもね。
だってぱつと見て相手が何歳かって言っても歳が離れてたら誤差
になっちゃうし。

あるいは僕みたいにあんまり人に興味が持てないとか？

そうしたらこの子は完全に僕の同類だな。

小説とか読んでいても痴情のもつれとかはどうでもいいから展開
見たくてすつ飛ばしちやって、でもそれが大切な場面だったりして分
かんなくなっちゃうこととかよくあるよね。

「で、途中で逸れちゃったけど響さんにも名前言っちゃってもいい？
今さらだけど……そ？　こちらが友池さよさん。　で、合っている
わよね？　良かった、ときどき図書室とかでお話するの」

話の展開が速いりさりんさんは図書室系友池さんが「えつと」とか
言うだけで意見を察知したらしく話したいことを話している。

すごい。

その度胸が欲しい。

「よろしく………お願いします」

「つまりさよちんとか……んむむむ！」

「あだなは親しくなってるから、よ？　しかも相手が良いって言ったの
じゃなきゃ駄目よー？」

「んむむむうむむ！」

「あはは、何言ってるのか分かんない！　おつかしー！」

「んむ——！！」

姦しくて何より。

そんなふたりをぼんやり見ながら友池さんが姿勢を戻していく。

必要以上の丁寧すぎる感じのお辞儀。

髪の毛が箒のように垂れ下がっていたのがカーテンみたいにする
すると。

重そうだなあ………。

分かる、分かるよ。

僕のほどじゃないけどそこそこの髪の毛だから、見てるだけで一気
に髪の毛の重心が移動する感覚が浮かんできた。

それにつやつやつてるし手入れも大変そうだ。

あー、でも綺麗で黒い黒髪つて映えるね。

どっちかって言うとう光の加減で緑っぽくなるけど。

「……………」

どきまぎしている友近さよさんを見ながら思う。

……………どうして人との距離が近いコミュ力が高い人っていうのは、こ
う……………あんまり面識がない人でも平気に気軽に平然と話しかけたり
できるんだろう。

僕に近い感じの友池さよさんはともかく、ゆりかとりさりん、あと
はかがりとわんこさんもとい今井さん。

僕の知り合いはことごとくそういう系だな。

厄年か？

究極の厄年に決まってる。

絡まれてしまった感じの友池さよさんがぼやんと突っ立っている。

多分僕もおんなじ感じなんだろう。

よし。

おんなじ感じなメンタルとしては同情する。

「……………」さん。これ

は……………でしようか。いえ、でも

……………もしかして……………」

と、ほんわかしたところでメガネさんがぶつぶつしていたのに気が
ついてさりげなく一歩離れておいた。

……………この子はこの子でひとり言とか出ちやうタイプなのかな
……………つて思ったから思わずに。

僕はひとり言とかは口から出ないで頭の中で延々とめどなく流
れるから、どうして考えたことが勝手に出てきちやうのかは知らない
けど……………近くでぶつぶつ言われるのはちよつとだけ苦手かも。

だつてぼそぼそ言っているのぜんぶは聞き取れないけどなにかを
つぶやいているっていうのだけが分かるのつて中途半端に気になる
しなあ。

うるさいのとかスキンシップが多いのとか距離感が近いのとかに

比べれば段違いにマシではあるけどな。

最近だいたい鍛えられてきたから耳も痛くならずには済むけど、柔らかいのが当たって居心地悪くなったりもしなくなりつつあるけど、それでも静かなのには比べるべくもないし。

「……………すみません。あの。

……………ちよつと待っていてもらっても、

いいでしょうか。その、一緒に来ている……………を、呼びます、ので」

「あ、別に見かけたからあいさつしたただけだしいつも一緒の子でしょ？ わざわざ呼んだりしなくたって」

「……………いえ、その人が……………ちよつとあるの、で

……………」

「そう？ 私たちは別に良いわよ？」

僕は良くない。

「ほほう。りさりん、新しいヒロイン候補はどんな子？」

「ヒロインって……………あんた、最近磨きがかかってきたんじゃない？

そういうの古いらしいわよ？」

「懐古のなにか悪いのか!! 今のベースなんだぞ!! 歴史から学ぶの

よ!」

「加減つてものをしなさいよ? 誰でも彼でもそういうノリが好き

だってワケじゃないんだから」

「分かってるってばーやさしいなーりさりんちやまは」

「だ、か、ら。止めなさいってのそれ」

「……………」

なんかみんなの興味がこの長い髪の子へ……………いや僕よりはずつと短いんだけど向かっていて気が楽。

あれ、でもこれだけの長さって校則違反とかじゃないんだろうか？

たしか、ぱつっつんとともに崩れて肩に乗ってきているゆりかの髪の毛の長さで「ぎりぎりセーフ!」とか言っていたような。

「……………えつと、……………さん。この前

……………そう、そう。うん、そうなんだけど。

……………そうじゃなくて、今はね。今……………」

あ、そうなんだ？ えつと……聞いて？ うん。 ……今
ね、私、………「なんだけど」

さつきまでよりもさらに小さい声でスマホに向かって話し出す友
池さん。

断片的にぼんやりと聞こえるだけで、むしろ電話相手のやかましい
感じの声のほうが大きいかもしれない。

………あれ、でも。

電話口の声。

やたらとテンション高くて嬉しそうな声。

………なーんだか聞き覚えがあるような。

「……………」

いや、気のせいだろう。

うん、気のせいだ。

気のせいに間違いない。

あの子の相手が大変だからそういう幻聴が聞こえているだけ。

それだけだ。

この子たちと制服が一緒だった気がしないでもないけどきつと偶
然に決まっているだろう、うん。

19話 学生たちの、夏休み(4) 2/2

悪いことってやけに正確に分かるよね。

これこそが第六感ってやつ？

女の子が好きなオーラとかってやつ？

「.....」
僕は僕の頭が解析した声の波形を意図的に無視する。

いやいや。

いやいやいやいや。

ないでしょ。

そりやああの子ともこの近くで、っていうかこの上でバイトしてた子だけどさ。

あの子もおんなじ学校だけどさ。

いや.....いやいやいやいや。

そんな僕の思いを無視しながら儂いメガネさんの電話は続いているらしい。

ずっと続いてて。

「.....」
うん。 うん、ほんとうです。あ。

.....ほ、ほんとう.....なの、よう.....そう、いちばん奥

のところの。 うん、.....急がなくて良いって

.....「あ」

切れた通話から戻って来た儂いさんはぼーっとしながら僕を見ている。

「.....」

「.....」

やっぱりじーっと見られてる。

.....いやいや、無い無い。

無いでしょ？

き、きつと同級生の誰かに違いはない。

僕はありえない偶然っていう妄想を意識して排除しながら逃げようとしてゆりかに抱きつかれて逃げられなくなる。

「……ゆりか。……………ゆりか」

聞いてない。

楽しそうにりさりんさんと話すついでに彼女の両手を、彼女から見てちようど良い感じに背の低い僕の肩に乗っけているらしい。

ああ、女子つてやつとの距離感……。

そんなのはどうでも良くって、とにかくただでさえ想定外の関澤さんにくつついたりさりんもとい杉若さん、杉若さんが呼び寄せた友池さんという3人がいるんだ。

もう振り切ろう。

多少強引でも良いだろう。

じいやに呼ばれてるって言って全速力で走ろう。

うん。

お迎えが来ていることにしよう。

参考書はネットで買えば良いんだし時間の無駄だしなんかやな予感するし。

この子たちの話に巻き込まれたままファミレスとかカフェとかお昼とかに連れて行かれるよりはずっとましだ。

軽く夕方になっちゃう。

お酒を呑むより不毛な時間だ。

せっかく会話をしない期間でリフレッシュしていたところなのにこれじゃまたすぐに元どおりになっちゃうじゃないか。

急げ急げ。

「うーわ。うわー……高校つてこんなんやるの？　なんか記号とかやったら長いイミフな文章とか。　魔術てきー。　魔方陣とかに書かれてそう。　あ、やっぱ、ちよつと興味湧いて来ちゃった」

「ある意味すごいわねえゆりか。……でも本当、何書いてあるのかわからないわね……なんで数学でこんな長い文章書くことになるのよ？　あと何この記号だらけなの……私たちこんななの……？」

「あの……」

「りさりん、頭使ったしおなかすいたー」

「そういえばそうね」

「えっと」

「もともとお腹が空くまで適当に本屋でもって感じだったんだし、まだちよっと早いけどお店はもう開き始めているわよねー」

「僕はそろそろ」

「お昼行っちゃおう？　良いって言うてくれたら響さんも友池さんとお友だちも誘って。　せっかくお友だちになったんだし！」

会って10分で友だち認定はちよっと早すぎるって思うな。

眼鏡さんもそう思うでしょ？

「だから」

「良いねえ！　えっと、全部で……5人？　結構な大所帯になりそー」

「だったらまずお店決めるところからね。　みんなの好みとかあるだろうし……あ、食事制限とか響さんは大丈夫なのかな。　入院してる人とかってそういうのあるって」

「……………」

「響はだいたいのもの平気だっって言ってたし平気っぽい！　あんま食べないけど」

「そうなの」

聞いてくれない。

なんで聞いてくれないのこの子たち？

無視してるわけじゃなくて単純に耳に届いてない雰囲気。

「……………」

「……………」

眼鏡友池さんと視線が合い続けている。

……君なら僕の気持ちをよく分かってるでしょ？

助けて？

「……僕は迎えが」

「あ……あの……………お会計終わって、すぐそばにいるみたいで。　私の、その……………友だち、
が。　もう来るって」

分かってなかった。

「友池さんたちも、ご飯。　よければこのあと一緒に食べてく？」

「……………ええ、よろしければ」

「……………」

僕はしよげたけどがんばってみる。

……中学2年の子供に良いようにされてたまるかって気合を込めてみる。

「あの、済まないのだけど」

「さよちや——ん、お待たせ——っ!!」

僕のか細い声はそのでつかい声に吹き飛ばされた。

……間に合わなかった。

失敗したんだ。

しようがない、またひととおりの自己紹介合戦が終わるまでは辛抱しよう。

それが終わったら今度こそは帰るんだ。

なんとしてでもご飯の前には。

だって今日は煮卵がいい感じの味のしみ具合なんだ。

ラーメンなんて重いものはこの胃はお昼でないと受け付けられないだ。

だから僕は帰るんだ。

「さっきの電話あまり聞き取れなかったのよーごめんさい。でも屋内だし並んでいたから長くなってしまったもって思ったのよ。

アナウンスの声とかって電話するときにはジャマよねえ、普段は聞き逃してしまうくらいなのに。でも、待ち合わせにはけっこう早いけどどうしたの？ 急にこのあいだ話した響ちゃんのことを聞きたがるなんて……あ、響ちゃんについてまた聞きたくなったのかしら!!」

怒濤の文章がひと言に凝縮されて発せられる。

僕はゆっくりと振り向く。

振り向いた。

そして見上げた。

「……………」

「……………」

くるんつとかしげるくるんくるん。

……いや、分かっていたんだ。

第六感でなんとなく分かっちゃってたんだ。

振り向くと……いろんな意味ででかい下条さんがそびえていたんだ。

なんで君がここにいるの？

……呼ばれたからだよね……。

「……………つてあらあら、そこにいるのは響ちゃん？」

人違いです。

その辺を無作為に抽出したら絶対に1人はいる感じの男だったときの僕ならまだしも、長い銀髪で背が低くて……な今の僕は言い逃れできない。

そもそもこの服装もこの子が選んだものだしな。

もう終わりなんだ。

「ほんものよねえ、その格好だし。最近見ていなかったけどその格好をしているとほんとうにまるで……………」

なんかほっぺに両手を当ててトリップし出すかがりさん。

ああ、この子はいつでもマイペース。

「およ？ 響？ 響ちゃんだなんて……そんなかわいい呼び方されてるの？」

ぐいっと僕の肩を引き寄せられて抱き寄せられたけど女の子な部分が多すぎるから平気。

でもやっぱり良い匂いがして困るんだ。

年下でも異性は異性。

……精神的な性別が大切なんだってよく分かるな。

「あらあらっ！」

「うおでけえなにこれりさりんなんか目じゃねえ……」
気持ちは分かる。

中学生どころか一般的な女性にあるまじきでかさ。
ゆりかがこの場のみんなの代弁者だ。

「……………」
ひと呼吸置いて…………なぜかメロンとレモンがすつと対峙する。
僕を挟んで。

目の前にはメロンの気配が…………うなじにはレモンの気配が詰め寄ってくる。

なんで？

っていうかなんか怖くない？

どうしちやつたのふたりとも。

「響ちゃんと仲良さそう…………響ちゃんのお友だち？」

「響？ ちゃん付けって響的にオツケーだったん？」

「そうよね、響ちゃんって人とおはなしするのが面倒くさいだけで見知りではないものねえ」

「ひびき？ 響の性格知ってるけどやなものはやだって良いなよ？」

「なんなら私が言うよ？」

前と後ろから全くの同時に話しかけないで欲しい。

まるでヒマなときに聞いているイヤホンで聴くあれみたいじゃないか。

そうして僕の上で視線が合っているらしいふたり。

僕は蚊帳の外なのに中心だ。

「……………」
メロンが近づく。

レモンが密着したらしいのが分かる。

あー、ブラジャーって形が崩れないようにって意外と硬いんだよね。

そういう説明を受けて選ばれて買わされたから知ってるよ。

でも男に「当てるのよ」は行けないって思う。

たぶん男って見られてないんだらうけど。

だって肉体は幼女だしな。

「……………」
「……………」

何かを言いたげなふたりの無言が突き刺さる。

遠巻きにしているらしいりきりと友池さんは気配すら感じない。

……めんどくさがっていつもどおりにネットで注文して今日は適当に過ごしておけばよかった。

そうしていたらこんな面倒くさいことにはならなかったのに。

どうして今日に限ってやる気なんか出しちゃったんだろう。

どうして今日に限ってめんどくさがらなかつたんだろう。

「響ちゃん？」

「ひびきー？」

どうして女の子っていきなり声が低くなるんだろう。

誰か教えて？

◇

「……………」

誰も教えてくれなかつたし疲れた。

もうすぐにでも寝たい。

せっかく別々に時間を調節してうるさくならないようにって、顔を合わせないようにって気を配っていた下条さんと関澤さんがまちがってエンカウトしてランデヴー。

そうしてちよつとのサイレンスの後、僕は両手を片手ずつつかまれてアブダクト。

その先はいつも彼女たちと会っていたファミレスだ。

『いつもの……………そう』

『へえ。いつもなんだ』

「いつもの」って言ったらもうワントーン声が下がったのが怖かった。漏らしそうだった。

トイレを早めに行く習慣がなかったら多分漏らしてた。

危うく男どころか人としての尊厳を失うところだった。

なんで女の子はぜーんぶ……………1から100までみんな話しておかないことについてここまで怒るの……………？

別に良いでしょ、他人なんだから……駄目なの……？

駄目なんだよね、今日思い知ったよ……。

しかもふたりだけに説明するならまだしも、この場にはりさりんと杉若さんと眼鏡さんこと友池さんも同席している。

なんで「友だちだから！」で新しいふたりの前ではじめっから説明しなきゃならなかったの……？

女子ってそういう種族なの……？

そういう種族だったかも。

「……………」

煮卵は帰ったらすぐに容器を移そう。

それでお酒を呑んで気持ちよくなるんだ。

4人の中学生の前で説明させられた代償は強烈だ。

……別に経緯を話すのは良いんだけど、僕は何でかボックス席の「お誕生日席」っていうところに座らされてずっと4対の視線に晒されていたのが効いている。

そっかあ、人生で初めて座ったけどどここって注目されたくない人間にとつては苦痛でしかないんだ……。

帰ったら奮発したけどもつたいないって思ってたお酒飲もう。

こんなときくらいたくさん飲んでもいいだろうしき。

「んで、いろいろごっちゃになってるからここは考察班な私が話を整理してみると」

そういやゆりかってアニメとかマンガとかゲームの設定を考察する掲示板に出没しているとか言ってたつけ。

そんなどうでもいい情報が頭をぐるぐるする。

「まず響は、さるお金持ちの家の子。しかもそんじよそこの小金持ちじゃなくてガチの」

「……………」

まあ間違っていない。

僕自身が僕自身の判断で僕自身のために使えるお金がたくさんあるのは本当だし。

問題は幼女になっちゃったもんだからそれを引き出せなくなつて

るってことなんだけど。

「響？ まちがってたりこういうのイヤだったら言ってね？」

「……………」

間違っていないから良いです。

そういう意味を込めての沈黙。

それにどうせ「やだ」って言っても謎の尋問は続くんでしょ……？

「大丈夫っぽいねえ……あいかわらずだねえ……。 で、ただけ

かっていうとメイドさんとかいて着替えとかからお手伝いされるレ

ベルで？ でも響はそういうの嫌いな感じ。 んで送迎と護衛を

いっつもされてるくらいの過保護で、あと年の離れたお兄ちゃんっ

子」

「……………」

メイドさんとか執事さんとかはかがりさんの妄想でお兄さんは僕です。

なーんて言ってもどうせかがりが「私見たもの！」とか何歳児かって感じで言い張られるからそれで良いや。

こういうのって何歳のときかに大体の子供がなるんだってね。

「でも響ちゃんはこの春、私たちと会うまではずっと病気で入院していたのよね？ あと、今もまだお家で療養中だって聞いたわ！」

「……………」

何故か威張っているメロンさんがいる。

「こっそり……といってもお付きの人が傍にいつもいるらしいのだけど目立ちたくないっていう理由もあって、お兄さんの服を着てお家を抜け出すくらいにはやんちゃさん。 それで、前からその……ええと」

「私？ ゆりかだよ？」

「ごめんなさい、ゆりかちゃんと『も』『お友だち』なのよね？」

「うん。 私『も』響の『お友だち』だよっ。」

トーン下げのやめてっ…

「……………」

「……………」

「……………この夏は君たちとの。せつかく知り会ったんだからということ……外との友だちを作るという理由で許可を得て外出している。……………ああ、そんな感じだ」

こうでも言わないと納得しなかったからしょうがない。

僕は無言のプレッシャーに負けてかがりが納得してくれそうな論理を引き出した。

ようやく必死のつじつま合わせが上手く行ってこつそりため息。

どうにかこうにか齟齬なく繋げられた……と思う。

少なくとも今、疑問を投げかけられない程度には。

嘘じゃない嘘って大変なんだな。

4人から注視されながら話すのとっても苦しかったんだけどなんとか乗り切れた感じだけど、僕、もう帰りたい。

帰っちゃ駄目？

駄目っぼい。

懐かしい小学生の頃の帰りの会を思い出す。

そうだよね……君たちは2年前まで小学生女子やってたんだもんね……そりやそうだよね……。

「響ったらけっこう大胆ー。いやまあさ、今思えばそこかしこにそのヘンリンはあったんだけどさ。それにしてもそこのマンガとかのキャラよりよっぽどマシマシだよねえ響の属性」
だって盛り盛ってるし。

「事实は小説を越えるってほんとーなんだねー」

「波乱なのね……生まれも違うって感じだし別世界の話すぎて実感がなくらいよ。人並み外れて……背が低いし、美形だし。髪の毛が羨ましいし」

「あ、髪の毛すっごいよね。日の光苦手だからいつも隠してるけど」

「あら、そうだったかしら？」

左側にはレモンさんとりさりんさんが座っている。

「でも……そう、体が。ずっと病院にいるほどだったの……でも退院できてほんとうによかったわね。でも、まさか……………あの、知らなくて連れ回しちゃってごめ

んなさいね?」

「大変だったけど平気だ。 大変だったけど」

その件についてだけは強気で文句を言っておく。

口を尖らせるも気がつかれないのは知ってたけど。

「それにしても、洋館、召使い、メイドさん……………セバスさん

……………一族。 いいかも……………」

かがりさんが謎の詠唱を始めた。

「おや、魂が疼くかい下条さんとやら」

「たましい……………ええ……………、とつても良いわね

……………」

「ぐつときておる。 闇の住人か」

それにゆりかが共鳴している。

ここは本当に現実世界なんだろうか。

ひよつとして魔法さんのせいで幻覚とか見てない?

「……………ほんとうに、そういうご家庭、あるんです

ね……………」

話が途切れてちよつとした静けさに口を開くさよ・友池さん。

話すの苦手にしてはこの子、けっこう話すらしい。

「……………ふつうです、あ、私の家は……………ですけど……………私

も体が弱くて、何度も入院と、それと、手術……………しているので。 気

持ちが、響さんの。 分かる気がします……………。 同じくらい、過

保護にされすぎると、嫌気が差す、というのにも、……………です」

「おおう、こつちもまたディープなのをさらりと」

そして右にはメロンメガネが塞いでいるんだ。

ついでにメガネさよさんは本当のご病人だったらしい。

……………なんかごめんさよ、こんな嘘ついて。

「……………」

僕から言っておいてなんだけどこの設定、どう考えても現実感ないよな。

今までばらばらに言っていたのをまとめただけで僕のこれまでをアレンジしたものだから完全に創作っていうわけではないんだけど

……だからって、いくらなんでもこれはなあ……。

盛りすぎでしょ……なのにこの子たちは4人とも疑っている様子がないのは何でなの？

この子たちにとつては本当のことに聞こえるの？

疑うことを知らないのか、それともマンガや映画といった文化に毒されているのか。

それともいきなり疑うのもアレだしって追及しないでいてくれるのか。

男女以前に世代が違いすぎるからその辺がいまいち分からない。

けど「本当にそう思う？」とか聞いたら絶対めんどくさくなるからこのままでもいいや。

それに僕には人の機微ましてや女性の子供の女子なそれを察するなんて高度なことはできないから、この子たちから問われない限りは分からないし分かりたくない。

まあ、今は表面的にでも納得してくれているってことは突っ込む気はないってことって理解。

「……………」

それにしてもやっぱりはじめから隠さずに魔法さんのこと以外はぜんぶ話していれば、これだけ悩んで胃がしくしくなくなつてどれだけ楽だったことか。

この体になった直後で混乱していたからとはいえ、方針も設定も固まっていないあのときに「どうせ1回しか会わないでしょ」とかいう謎の自信で外に出たのがそもその発端。

まあ実際あの状況でこれが現実なのかどうか把握するにはあれくらいしか思いつかなかつたわけだけど……もう少しやり方無かつた……？

無かつただろうなあ、あれがあのとときの僕が選んだ行動だもんなあ。

後悔しても遅いんだ。

それに、くるんとはつつん。

この2人とここまで付き合いが濃くなるなんてあの時点では想定

……こうなったらなるべくこれ以上の余計な設定を増やさないと
うに最低限で使い回す。

そうして矛盾が起きないようにするのはとなによりに僕自身がそれ
を覚えていられないっていう課題をクリアしないといけない。

それで良い具合にそつと抜け出して帰るんだ。

「……………」

僕にそんな高等なコミュニケーションできるのかな。

無理だろうな。



服には意識が通う。

変な言い回しするほどストレスたまったわけじゃない。

ただ着こなしか仕事とかそんな感じの意識の持ち方って感じで別にスピリチュアルなことでもない。

あの日ぼったりゆりかとかかがりはち合わせしちやったもんだから、連行されたあのあと微妙にちくちくする言葉と視線で大変だったからとかそんなわけじゃない。

違うよ？

もう何日か経ったし大丈夫。

大丈夫じゃなかったのは忘却の彼方だから大丈夫なんだ。

それよりも服がお洒落なのに「どこか合っていない」って感じたり、逆にラフだったりみんなが着ている既製品なのに妙にしっくりきているとかそういうときとかにそう感じるだけ。

そういう意味では僕の着ぶくれた格好も「意識が通う」っていう状態らしいのはあの場の4人からの意見で一致していた。

既製品のおんなじ服を着ているのに上品だったり下品だったり……見ていればなんとなくどういう家柄とか性格なのが察せられるようなそんな感じのがあるみたい。

不思議だよね、ただの布なのに。

でもその布が意外と大切なのは女の子させられてから……む、なんだかやらしい、女の子としてのいろはを手ほどき……これもやらしい気がする。

言い方って難しいよね。

とにかくこの意識、基本的にその形の服を着ている時間とか鏡で見ながら「周りからどう見えているのかなー」とか「こういう動きをすると映えるなー」とか「こうするとぱんつ見えるのかー」とか「ここ

までならぎりぎりセーフだけど逆に危ない気がする……」って研究することで服のほうが人に合ってくる感じがするんだ。

………こういうの、今まではまったく気にしたことなかったんだだけだな。

男の頃は何着ても普通だったからな。

とつても楽であの頃は良かったよ。

でも気にしたことがなかったからこそ今になって……幼女になって、でも中学生だと言い張るからこそ下条さんに襲われて無理やり着させられて口うるさく言われて、ようやく身についたんだ。

これが普通の男なら高校生か大学生のときに女の子にモテようって必死になってファッション雑誌とかで勉強してたんだろうし、普通に母親とか姉妹のいる男でもいちいち指摘されて嫌でも身についたんだろう。

でもほら、僕ぼっちだったし女の子に興味ない……じゃなくて彼女とか欲しいって本気で思わなかったから……。

この年になってようやく僕の意識の中に、寝ぐせとかヒゲのそり残しとかだけじゃない「服装」っていうものが体の一部になりつつあるのかもしれない。

服なんてぱつと見ておかしくなければ後は暑いか寒いかとお値段だけだったもんな。

ああいや、さすがに機能性しか重視してないスニーカーとかとはお別れしてたけどさ。

「……………」

ファッション雑誌だって、この数年で1、2回見たくらいだったのがこの夏だけで10冊以上。

ぜんぶ下条さんから押しつけられたものばかりだ。

「要らない」って言ったけど「去年のだからもう流行遅れなの、もう見ないから気にしないで」だって。

違うよ……僕は君のお財布の心配じゃなくって単純に持って帰るのと捨てるのが大変だから言ったんだよ……雑誌とか女で子供な僕なんかじゃ10冊縛ってなんて捨てられないんだからね……？

幼女を舐めないで欲しい。

あと、かわいい系の服にだけ新しく付箋がべたべた貼られていたのはただの嫌がらせだと見た。

押し付けられたからには読まないとその子の機嫌が悪くなるな—って思ってたし、しぶしぶ読んでたのがいつのまにか興味深く読むようになってる。

僕は活字中毒だから電子書籍も読み放題なもんだからたくさん雑誌も読めるわけなもんだから吸収は早かったんじゃないかな。

というわけで。

「ぶはっ」

鏡の前には、ゼ・清楚っていう感じの白いワンピースを着た僕。

僕もそうだけど男って何で白いワンピースと麦わら帽子な女の子が好きなんだろうね。

多分本能なんだろうなって思いながら服の中に残っていた髪の毛も両手でばさつと出して、さらに中途半端に残ってるのを引っ張り出したり絡まつたりしてるのを手ぐしで軽く整えて身だしなみ。

さらに裾とかを引っ張ってきさいな引っかかりとかズレてるどころかそういうものもおしゃれじゃないから修正。

念のために鏡の前で右を向いて左を向いて振り返ってお尻を見て。

女の子ってこういうのが大切なんだって。

まあ布1枚……いや、下着が上下に1枚ずつだから3枚って言うのかな……っていう薄着な女の子が乱れた服装だったらそれを見た男たちにやらしい妄想させちゃうからしようがないよね。

そういうのがあんまりない僕だっけ見たらどきつとするだろうし。ホットパンツって言う、もはやパンツ並みのズボンを穿いてエグい股下な人を見かけたときくらいにどきつするもんね。

「よっ」

もう何度も着ているからこの服も僕にまた馴染んできたような気がする。

鏡越しで見るとたまーに僕自身じゃない気がする程度には似合ってるらしい。

……僕がこうなるんじゃないやなくてこんな娘が欲しかった。
そんな感想出て来ちゃうのが20代の男だ。

10代のそれとは違う。

すぐく早い人じゃ20で子供いるもんなあ……そうしたらちようど春先までの僕の肉体年齢的には今の肉体年齢な娘がいても不自然じゃない程度だもんなあ……。

晩婚化っていう言い訳があるから気にしてこなかったけど、こうして純粹に生物としての……子猫とか子犬とかハムスター的な可愛さって言うのが感じられる、銀の長髪で幼い顔つきの白いワンピース着た少女もとい女の子を見ていたらそういう感想が浮かんできた。

でもやっぱり肌の露出が多いわけで、そうなるとこの女性的な魅力なんかない体でもどきつとさせられる程度の魅力は出てくるらしい。
銀色の長髪がマントみたい……ケープとかフリースとかの春とか秋とかに女性やおしゃれな男の人が上にふわっと羽織っているようなそんな感じのふわふわな感じを1枚乗せている感じになっている。

なんなら髪の毛のキューティクルってのが光でちかちかしてラメが入ってる感じになってる。

眉毛ももちろん銀色で肌も薄くって、顔に比して大きいけど近くでじつとのぞき込んでも水晶みたいに透き通るこれまた薄い色の目。

その上半分がまぶたで押されていて、眠そうでほっぺたがぷにぷにで口がちっちゃくて。

本当に日の光を求めて北国から来ているどこぞの令嬢って感じ。

吹けばどこまでも飛んで行きそうな儚さの女の子な僕がいつもどおりにぬぼーっと佇んでいる。

人って見た目だ。

前だったら「だらしない若者だ」とか通りすがりのおじいさんとかに理不尽に怒られたりもしたけど、今だったら絶対そんなことは言われない。

人の価値って不平等だよな。

かなりのなで肩で鎖骨の下にはほのかな膨らみがちゃんとあるっ

て信じてて、腰のところからふわふわと膨らんでいてちらって見えるふとももと全部見えているふくらはぎ。

女性的には「かわいい」で男としてはこんなに幼かったとしてもちよつと扇情的。

そういうものだ。

女性だって汗かいて臭そうな男でも格好良ければ男の魅力とか言うし、顔が良ければ文句言わないし……異性ってそういうもの。

うん。

そういうわけでちゃんと成長してくれたら10年後が楽しみな感じ。

僕の希望としては早く戻りたいけどな。

「……………」

そんな女の子みたいな僕を見て、ひととおりいろいろと体を動かしてから着たばかりのワンピースをぺろんと脱ぐ。

ワンピースってどうやって着るんだろうなって思ってたけど想像よりずいぶん大胆な方法。

記憶にないはずの小学校の教室でプールの前とか後に、肩のところですくすく留めてもそもそを着替えるあれを思い出したくらいにアナログな服だ。

服って言うか布。

確かにこの布は今の見た目にこの上なく合っているんだけど……ここまで女の子の子供の子しいのはまだちよつと恥ずかしい。

家の中くらいじゃ平気なんだけど……でもくるんさんと会うとき最低でもスカートトじやないと服屋に連行だからなあ。

なんでだろうなあ。

あの子、僕のことを勝手にじいやからレベルアップしたセバスチャンがいる規模の家の子供って思い込んで服、隙あらば買わせてこようってするしなあ……。

雑誌とか見ていると、ズボン……パンツって言うんだって、発音がちがう感じの「パンツ」……とか短パンとかスパッツとかタイツとか女の子らしい服装っていくらでもあるのに、なんなら今はぶかぶかズ

ボンが流行ってるって自分で言ってたクセに僕に対してはなんでもカート系限定なんだろう。

解せない。

まあくるんさんはちよつとメルヘンっぽい感じがするしただの趣味か。

私服はリボン多めだしな。

あれも客観的に見れば可愛いだろう容姿があつて許されるものだけど趣味ならしょうがない。

人の趣味にいちいちケチつけるのはいけないことなんだ。

「……………」

そうやって無理やり着せてくるのをやめて欲しいのに、最近は「慣れてきたし別にいいか……」つてなつてきているのが困るんだ。

会うときはほぼ強制的に着させられるから僕にとつても女装の練習になるしで割と実践的なのもまた困る。

あの子、無意識に他人を誘導するの得意だったりしない？

やっぱり服屋の店員さんは天職なんだろうか。

人に何かを売りつける才能。

それがありそうだし初対面の人とすぐに打ち解けるし頭の中が幸せだからきつとうまくやっていけるだろう。

けど女装はこれからの僕にとつて必要な技術。

肉体的には紛れもなく女だからこそだ。

女性ホルモンがどぼどぼ出てすごい体つきになったとしたら男っぽい服だけつて訳にはまず行かないだろうし。

可能性はあるんだけど……極小な予感がするのは気のせいなんだろうか。

でもまったく成長しないのは社会生活が困るんだよなあ。

魔法さんがんばつて？

「……………はあ……………」

……………ふつうがいいなあ。

ふつうに胸も……平均つてCカップくらいなのか？

そのくらいのおっぱいとそれに見合った程度のおしりとふともも。

僕はムチムチは好きじゃない。

だから男だった僕からして日常生活に支障が出ない範囲で留まって欲しい。

あと身長はできれば女性の平均より5センチくらい高いととにかく便利だ。

低いのもうごりごりだ。

踏み台がないと何にもできなくなつて人混みで動けなくなるのは勘弁なんだ。

理想は元の姿に戻ることなんだけど……半年近く経っているのに一切の進展もないから希望が持てなくなつてきた。

まあ幼女ボディには慣れてきたしいんだけど……。

将来のどうしようもない不安は丸投げするに限るんだ。

首元のフアスナーを下ろしてすとんと落とした1枚の白い布を、しわにならないように脱いだらさつとハンガーに通してそのへんにぶら下げてきた僕が鏡に再び映る。

不自然に……少なくともAカップくらいには胸が膨らんでいるシャツとその下のぱんつ姿な僕。

なぜ僕にないはずの胸が存在しているのか。

がんばってレモン未満のさくらんぼなはずの僕の胸が揉める程度に膨らんでいるのか。

その答えは単純で、これもまた詐称しているからだ。

シャツも脱ぐと僕の胸からわきの下をぐるりと通って背中まで締めつけている布が露わになる。

ブラジャーだ。

………やっぱり慣れないなあ……ブラジャーをつけているときの感覚。

他の服はともかく、これは完全に未知のものだったからな……もう既知だけだ。

手のひらを吸い付けると柔らかい布の感触だけで温かさとかは伝わってこない。

手のひらにも胸のほうにもなんの楽しみもない。

だってパッドだもんな。

悲しい。

僕に胸があるはずがないもんな。

悲しい限りだけど。

なんでブラジャーをつけているかというのと、これもまたつけていないとダメらしいから。

なんでもスタイリスト下条によると女の子らしい格好をしたいなら必須らしい。

って言うか「女子なら絶対につけなきゃ駄目！」って妙に真剣だったからしょうがない。

「めんどくさい」って言うとなんかすんごい目で見てくるからおとなしくつけざるを得ない。

「別に良いじゃん、シャツ一枚でも乳首とか浮かないんだし」って言いかけたけど我慢した。

一応異性だからね、どう見ても頭脳は子供で体は大人だけど。

そんな僕が外出するときには8割方は、まだ、ズボン。

比率がじりじりと下がってきているのは下条さんのせいなんだけど、だから気楽なだけど……あの子と会うときにはスカートまたはワンピース。

そうしないとむすーって膨れるし声のトーンも一瞬だけど冷えるし、また「服を選びましょう」とか言って連れて行かれるからしょうがない。

僕が楽しくて女装して外に出てるわけじゃないんだ。

絶対に。

ちなみに下条さんはワンピースがお好きらしく毎回1着は試させられるほど。

「……………あれ？」

初めて試着させられたときあまりにも胸がすとんってしていたから見かねて「女性的な魅力が僕にはないから……」的なことをぼろりしちゃったせいで、とうとうブラジャーの導入っていう流れだった気もしてきた。

つまりはまたいつもの僕のうっかりだったりするのか。
いつもだな。

女の子らしくしたいのなら必要はなくてもおしやれとして形だけを矯正するためのブラジャーをつけさせられることに……って流れだったかもしれない。

あんまりにも衝撃的な物体を前に出されたもんだから記憶が曖昧なんだ。

シヨックだったんだ、しょうがない。

見た目がまっピンクだったり派手なのだけは断固として固辞したおかげでただのスポーツ用……スポブラとかナイトブラっていう形だけのものなのが心の支え。

やたらふりふりした飾りが付いてるのとかつけさせられたら落ち込む。

買わされたのが何個かあるのは見なかったことにしてしまい込んでいる。

もちろんパッドもおしやれのためだから必要らしいし、なんと世の中の女性、つまりは人類の半分は胸を盛るそれをつけるって言う大罪を犯しているらしいから僕は悪くない。

別にそこまで気にしていたわけじゃないんだけどやたらと真摯だったのがおかしかった。

ただ単純に鏡を見て「ふつうの女の子がこういう服を着ていたら胸元に視線が行くのになー」って思ったからこそそのぼろりだったのにな。

そのときはなんだかいつもの幼女には見えなかったから。

ただの錯覚だ。

脳みそはまだまだ男なんだからしょうがない。

はじめは胸ポチ対策だと思っていたからされるがままだったんだけど……って言うかその胸ポチもよっぱど薄い生地一枚でぐいって胸を張らないとできないんだし、って言うか試着室で上半身を剥かれていろいろと素手であれこれとつけられたのって友だちの範疇なの……？

「こんな感じで盛れるのよ！」って言って言ってわきの肉とかをぐいぐいと寄せられそうになって「そこまでのお肉無いのね……その、ごめんなさい……」って気まずそうに言われたのが悲しい。

あれからちよつとだけ優しかったりするのでもまた気を遣われてプライドがなくなった。

僕はこれっぽっちも気にしていないのにな。

せめて僕自身の楽しみのために揉める程度欲しだけのことなだけで。

……ま、まあ学生とかなら体育とか水泳とかの着替えで見たり揉んだりするんだろうし、あのくらいはあたりまえだったんだろう、きつと。

普段のあの子から変な視線とかも感じないし女の子同士のやりとりだったんだって納得しておく。

ともかくそういう感じで胸を盛るための詐欺アイテムを数点買わされたからには今日も道中の着替え以降はこれを着けていなければならぬって決まってるんだ。

さすがに女装って感じが抜けないから家では絶対につけないけど。

スカートやワンピースとかぱんつ一丁はセーフ。

僕ルールだ。

おかげで胸がほんとうは平坦なのに、透けていなかったとしてもシャツの上からぱつと見たら「ああ胸なんだ……」ってのはつきりと分かる程度の盛り胸がふたつ、本来の僕の胸から数センチ距離のあるところに存在する。

まるでほんとうに、ほんとうにおっぱいが僕に生えているかのようでなんとなく嬉しい。

この格好なら中学生って言っても胸を見てそうだねって思えそうなのも嬉しい。

でも揉めないから悲しい。

クセになるとまずそうだから買わなかったけどシャツとブラのパッド部分の一体型みたいな服もたくさんおいてあったし、つまりなにが言いたいのかという女性みんな嘘つきだということ。

油断をしてはいけないんだ。

だってこの盛るってやつ真つ赤なウソじゃん。
うそつぱちじゃん。

詐欺じゃん。

お化粧とかハイヒールとかと組み合わせたらすごいじゃん。

もはや別人じゃん、どう考えたって。

「……………むー」

ふつふつと、僕にしてはとっても珍しくこみ上げてくる怒り。

世の中の女性の何割がこんなひどい、僕たち男に対する組織的犯罪
を昔も今も続けているんだろう。

僕はぼんついちよのまま「くちゅん」ってくしゃみが出てくるま
ですつと、そのことについて思いを巡らせていた。



「……………」
「……………」

静かな室内。

かりかりかりと書いては止んで、ちよつとしたらまたかりかりする
音。

ときどきのため息。

頻繁にペらペらと紙をめくる音。

そして時計の針の音だけが響いている。

僕は頭からおしりまでを柔らかいクッションに預けるだらしない
格好をしながら静かに手元の単行本の中のストーリーを読み進めて
いく。

「……………」

なにか言いたげな視線を感じてもぜったいに顔を上げてはならな
い。

でも「だけど」「ねえ」とか「ちよつと」とか言葉を言われたら反応
してあげないと不機嫌になる。

その加減が難しい。

「……………ねえ、響ちゃん」

「……………なんだい？」

「ねえ」が来たからお返事。

さつきから感じていた視線へ答えてあげるといつもの覇気はどこへやら、げっそりとしている下条さんのにごった目が怖い。

「ねえ。そろそろ……………もうたくさんがんばったから休んでもいいかしら……………？」

「まだ始めて15分じゃないか。あと10分はがんばって。それでも学校の授業のたったの半分の時間だよ？」

抗議の内容はどうでもいいことだったから、さっと視線を手元の吹き出しに戻す僕。

「そんなあ……………ほんとうにまだそれだけ？ ひよつとしたらそのタイマー」

「壊れるはずないよね？ いいからさつきとやるんだ。じゃないと帰るよ？」

「うう……………響ちゃんひどいの……………」
「ひどくない」

かがりの勉強会という名の見張り役をしている僕は、ぼんやりと普段読まないジャンルの漫画を読みふけていた。

そこでは小学校高学年になった少女漫画の主人公の子が初めてブラジャーをつけるどきどきのシーンだった。

だから僕の無い胸のことばかり考えてたんだろうな。

20話 下条かがり(1) 2/6

さて。

成人男性っていうのは法律的にも条例的にも世間的にも危険な存在だ。

しかも相手が女の子、さらには中学生とあつては正当な理由無しに近づいちゃいけないってことになっている。

そんな僕が……親戚とか親との知り合いとか家庭教師とかその他の公的な理由無しに、他人でJCな下条さんの家にお邪魔するのは犯罪行為とされる事案に該当するもの。

例え僕が手を出すはずが無くって下条さんの方から来て欲しいってお願いされていても絶対に密室にふたりつきりって言うのはダメ。何も無くたつて「何かあつたでしょ」って言われてお縄に着くことになる。

理不尽だけど男って危険な存在だからしょうがないよね。

僕みたいな何もしないからこそ安全な存在ってレアだもん。

でも今の僕は幼女だから完璧に平気。

このときだけはこの体に感謝だな。

今は危険なことすることさえ物理的にできないんだから問題は一切に無いんだって思うと僕の気が休まる。

なんなら僕の方が危険なまであるんだしって思えばもう気兼ねは無いんだ。

僕はなぜか偽乳っていう組織的詐欺に思いを馳せてからきちんとして身だしなみを整えていつもどおりの手順でリュックに服を詰めて家を出て、すっかり慣れたトイレでの着替えを経てもういちどきちんと身だしなみを整えて……約束させられていた彼女と会うことになっていた。

……そこまでは普段通りだから良かったんだけど、その辺に居るかもしれない女子中学生……小学生……やっぱり中学生らしき格好に変装していた僕は、いつも通りに人混みを苦勞して抜けた先の待ち合わせの場所で衝撃的なことを抜かされた。

年下のくるんさんに対して？

「……………」

「響ちゃん」

……いやだって普段なら人目もあるし腕力ではもちろん敵わないし唐突な低い声も怖いし……。

「……………」

「また考えごとしているのねえ」

……今は僕が彼女の頼みを聞いてるっていう上位にいるからだけども普段からこうだっていうわけじゃない。

元・成人の男のはずなのに僕はどうしてここまでこの子に対しては……？

「……………」

「でもこういうときの響ちゃんって見続けても怒らないから好きよー？」

人は見た目がすべて。

見た目幼女、盛って小学生。

言い張って中学生な僕に逆らえる余地などないんだ。

ましてやこの子はガワだけならもう大人なんだししようがないんだ。

うん、きつとそうだ。

そういうことしておこう。

そういうことしておかないと僕の何かが壊れちゃいそうだし。

それにあれだ、泣く子には勝てないっていう感じだからいつものはしかたがないんだ、うん。

年上として年下にわざと負けてあげてるって感じだし。

そうそう、僕はこの子の面倒を見ているんだ。

「……………」

「あら、良いことあったのかしら？」

にしてもこうして堂々と言い返せると嬉しいもの。

つい口元も緩みそうになる。

……いつもこうなるために、できるだけかがりの「お願い」ってい

うものを聞いてやろう。

その度に少しずつ、少しずつ時間をかけて立場を築いていく。

上下関係を確立するんだ。

そして僕が断ることを恐れるようにして、きちんと武力を用いて交渉というものをできるようにならないといけない。

長期的なプランが必要だな。

帰ったら検討してみよう。

「かがり」

「あら、良いかしら？　じゃあこつちよ！　歩いて15分くらいなの。

途中でお菓子とか買っていきましょ？　おいしいケーキ屋さんがあるのよっ」

「？」

「？」

くるんさんは今日もくるんさんだ。

勉強ってことでエラーを起こしているんだろうか。

「かがり、それだと繁華街から離れてしまうよ？」

普段と逆の方へ歩き出そうとしていたメロンさんを引き留める。

「あら？　そうよ？　だって私の家だもの？」

「ん？　なぜだ？」

「え？　だって勉強でしょう？」

「ん？　だからいつもみたいにするんだろう？」

「え？　だって勉強会っていつも誰かのお家でしているもの。そ

ういうものでしょう？」

「ん？」

「え？」

「……………」

「？」

……………お互いのはてなを投げつけ続けてようやく分かってきた。

「……………かがり。勉強会、いつものファミレスとかでするんじや

……………」

「それは勉強会ではないって思うの」

何言ってるんだこの子。

「……………」

「あら？　もしかして響ちゃん」

いつも通りだと油断していたから確認を怠ったせい。
つまりは僕のせいで開催地は変更らしい。

彼女たち学生の常識とニートな僕の常識は違う。

女子学生と孤独なニート男子の生態は違うんだ。

……最近そういうのがすっぽりと抜けてるなあ……。

気づけば2日に1回は外で誰かと会ってるもんなあ……。

「あ……………僕は他人の家が苦手なだけだ」

「そうなの？　でも勉強道具はぜんぶ置いて来てしまったわ？」

「くるん？」　って擬音で平然と言つてのけるくるんさん。

「……………取りに行つてくれたりは」

「今から？　でも……………取りに帰つても往復で30分くらい掛かるし
もったいないじゃない。それに、せっかくがんばつてお掃除とかし
たのよ？」

「お菓子も買つてあるのよ？」

いや、お掃除とかお菓子とかはどうでもいいんだけど……………？

「……………」

でも困った。

「……………」

「？」

……………この子がそこまで考えて敢えて手ぶらで来たとも思えないも
んなあ……………天然だもんなあこの子……………。

「……………はあ……………」

「それならこっちよー！」

僕のため息イコール了承の合図。

最近はいつもこうだ。

もはや反論するのさえめんどくさいもんだから、勝手に握られた手
を振りほどくのもまためんどくさいもんだから……………僕はなすがまま
にされる。

どうせ力じゃ敵わないんだ。

「響ちゃんを招待できるって思ったら嬉しくって、昨日の夜もなかなか……」

「そうか」

どうせどうでもいいことしか言っていないだろうから僕は思考を放棄しながら手を引かれつつ閑静な住宅街へと招かれることにした。

……まあ万が一にも間違いの起き得ない幼女な肉体だし、少なくとも外見的にはなんら問題はないはずだし？

「気まずい思いもせずに済むんだし、彼女の家で親御さんがいたとしたって不審がられるどころかきつとかわいがられてしまうに違いないし問題ないだろう。」

だつてくるんメロンさんの親御さんだしな。

女の子はお母さんに似るって言うし、この子の母親もつかいこの子に違いない。

……この子でさえ歩くだけでゆっさゆっさ揺れるんだ、何カップ行くんだらうな。

でもよく考えてみれば、バイトで学生に勉強を教えていたときにもこの子くらいの子の家の、それも自室とかで教えていたりしたからそこまで不自然なことじゃないのか？

勉強を教えるって謎の信頼があるよね。

良く知らない大の男を自分たちの娘の部屋に時間単位で滞在させて平気なわけ無いのね、普通なら。

でも現実って案外そういうものだし平気だな、きつと。

「不本意だけど問題は何か一つない様子だった。」



くるんさんの家は少し大きめだけど……まあどこにもあるふうの戸建てだった。

家の内装も彼女の部屋もよくある感じ。

あと親御さんはいなかったからちよつと拍子抜け。

「ぶっしょー」

「……………」
ふだんの調子だからてつきり自室にはファンシーな人形が敷き詰められていたりピンクピンクしている壁紙だったりするんじゃないかって思い込んでいたんだけど、実際に入ってみるとちよつと小物が目立つほかは意外とシンプルな感じだった。
ものすごく意外。

どうやらこの子のメルヘンチックな雰囲気の原因は幸せそうな頭の中から来ているらしい。

「……今日は勉強だろう」

「そのための準備よ？」

着いて早々にいそいそとジュースやお菓子を広げておもてなししようとしてきたから勢いよく断る。

口の中がじりじりするからいつもの通りに僕のぶんのケーキも食べてもらう。

僕はちよつこいからフォークで一切れ。

それで充分なんだ。

「……で、でも、まずはちよつとお話ししましょう？」

「ケーキを2個も食べたんだ、糖分は充分だな。さあ、宿題を出すんだ」

気を抜くとすぐこれだもんな。

どれだけおしゃべりしたい存在なんだろう。

でも「嫌なら帰る」ってのはつきりと強気で勝ち誇って言えるのはすごく……すごく心強い。

至高のひとときだ。

「……で、でも、なにをすればいいのか分からないわ？」

何が「でも」なのか分からない。

そのために僕を呼んだんでしょ？

「それならまずは送ってもらったプリントの写真。あとは要らない紙」

「……響ちゃんが冷たいわ——……」

おしゃべりに持っていくようにしてもそうはいかない。

「……………」

「響ちゃんの字って男の子みたいねえ」

さらさらと宿題を一覧に分かりやすく書き直してやる。

さらにはおおよっぱだけど掛かりそうな目安も難易度も書き出してやる。

こういうのには慣れてるんだ。

「ほあ——……………」

…………口と目を開けっ放しにして思考が止まっているらしいくるんさんがかわいそうだから、せめて監督くらいはしてあげよう…………。

「…………ほら、今日の予定表と時刻表も作ったから」

「へ？」

一時停止していた彼女にぺしぺしお手製のそれを叩いて見せてあげて良い感じのところを立て掛けておく。

「この通りにやってみようか」

こうすれば何か言いだしても黙ってこれを指させばいいって思いついたんだ。

「…………響ちゃんってすごいわねえ」

「君の方がそうだと思うけどね」

そのほわほわ感はきつと誰にも真似できないって思うよ。



そこからは楽な時間だ。

絶対にすぐに飽きてくるだろう確信があるから細かく科目とかを分けてあつて。

持つて来たタイマーで時間を区切ってあげて。

…………部屋の真ん中に机を出して勉強し出そうとした彼女を諫めてあげて、本来の机に向かわせてやって。

そうして僕は部屋の反対側に良い感じのクッションを引きずっていつて座る。

完璧だな。

この子との距離感はこれで適切なんだ。

「これでは寂しいわー!」

不服らしいくるんさん。

「勉強なんだから満ち足りていては駄目だろう……」

「むー!」

イヤイヤ期に入ろうとしていたかがりも僕の断固とした姿勢に屈したのか、少しずつ口数が少なくなっていく。

そうは言ってもくるんさんだ。

ところどころ詰まったりお腹がぐうって鳴ったりして集中力が切れるたびにさつきみたいにだだをこねてきたりする。

でも聞き分けは良いからおおむねきちんとやっている様子だ。

良きかな良きかな。

これで僕も静かに本が読める。

……本棚にいっぱい漫画から引つ張り出した少女漫画でも暇つぶしにはなるしな。

「……響ちゃん、またここも分からないの」

「む。……………これはこのページの……」

中学の範囲の勉強はつい最近終わったばかりだから僕の敵じゃないし、僕がこの子に勝っているのは精神年齢と知識と経験だけだからここぞとばかりに年上ぶってみる。

「響ちゃんの教え方って優しいし分かりやすいわー」

「分からないところがあつたら呼んでくれ。それ以外では呼ばないでくれ」

「響ちゃんって結構冷たいわよねえ……」

そんなことはない。

でも……ふむ。

やっぱりこの子、別に頭は悪くないじゃないか。

むしろ良い方だっと思うし、分からないところだっただけ知らないだけか忘れてるかみたいだから1回言えば分かる。

なのにどうしてこの子は……本当にどうして普段から……。

「はあ——……」

くるんさんのくるんくるん……何でも美容院でパーマとやらをか
けているらしいその髪の毛を見ながら思う。

この子は多分、単純に経験が足りていないだけなんだろうなって。
中学生から急に「自分で期限とか決めてがんばってね？」っていう
教育システムにはまった典型例。

放っておいても、そのうちできるようになるんじゃないかなって思
うけど……せっかく頼まれたんだしな、知り合いの子供の面倒を見る
と思つて付き合つてやろう。

それに思つてたよりも楽だし暇つぶしもあるし。

取りかかる範囲とか順番とかかける時間を分かりやすく書いてあ
げたからか、ぐずることはあるにしてもなんだかんだもくもくと進め
ているかがり。

まあ苦手な科目だと露骨に集中力が切れるわ口を閉じようとしな
いわなのはどうしようもないけども。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

かりかりかちかち。
下条さんが存在する空間にしては異例な沈黙のほうが長いってい
う事態は僕にとつてもものすごく居心地がよくってしあわせ。

いつもこんなだつたらいいのになあ……。

無理だろうなあ、くるんさんだもんなあ……。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

にしてもこの子の本棚の漫画がすごいことになっている。

こういうところだけは几帳面なのか、それとも親御さんがしようが
なくしているのかは分からないけどもタイトルごとにきちんと整頓
されているしどれもほとんど新品。

案外に綺麗な読み方をするらしい。

僕はそういう人が好き。

僕自身が本屋さんで折れたり引つかいた跡がない綺麗な本を買う
のが好きだし、それをほとんどそのままの状態で読み終えてそのまま

の状態でも本棚に並べて行つてたまに読み返すのが好きだから。

それに、漫画つて言うのは……長く続いているのは世代を超える。

だから懐かしいと思つていたタイトルが置いてあるもんだから「懐かしいなー」つて思つて読み始めたりすると、昔読んだときには読み飛ばしたり分らないでいたところまでに気がついたりして意外と楽しいものがあるつて気づいた。

今度漫画がたくさん置いてある温泉とかに行つて1日読みふけて……そうか、僕幼女だから駄目だったか。

早く戻らないかなあ、僕の体。

あ、少女漫画はなんか少女の域を超えてどろどろしてきてたからお帰り願つた。

女性向けの本つてなんであんなにどろっどろしてるんだろうね。

◇

「びびびびび」

「っ」

「！」

毛穴がみんなぶわつとなる。

タイマーの音でびっくりした……よく考えたら僕がセットしたのにすっかり忘れていたから心臓に悪い。

こういうの嫌い。

もう嫌だ。

「おしまいね！」

「ただの休憩だよ」

試験期間が終わつた瞬間みたいな表情だから釘を刺しておこう。

「あ————……疲れたわっ もうこんなにかんばつた……、えっ……まだたつたの2時間……？」

「休憩を除いたら90分だな。 けれど君にしては随分かんばつているね」

ものすごい重労働したような態度だつたくるんさんが固まる。

そこそこ早い朝に待ち合わせして寄り道しないで来てすぐに始めたんだからまだお昼にもなっていないのにな。

でも嫌々する勉強ってそういうものだよな。

君は学生なんだからがんばって？

僕は学生終わったから好きにしてるね。

社会って言うのはそういうものなんだ。

「……………まだそんなに……………？　まだお昼にも……………？　……………もう丸一日勉強したみたいな感じよ……………」

ぼふんつとベッドに飛び込んだ彼女はさつきまでの僕みたいにだるっとしている。

「…………………………………………………………………」

……………その衝撃で上がった風で、彼女の脚が。

スカート裾が。

ふとももが。

太いところまで。

……………白いのまで見えてるし……………平気なの、この子……………？

平気だよな、知ってた。

というか白なのか、ぱんつ。

普段は僕にピンク色とか黒とか勧めてくるクセにさ。

でも知人の年下の無警戒のふとももとそのあいだにある布っついて

う……………目と心の毒が見えた罪悪感が半端じゃない。

僕は良識的過ぎるんだ。

……………僕が背の低い女の子に見えるから同性だっという安心感からか、かがりもゆりかもとにかく無防備になることが多い気がする。

僕に合わせてかがんできたり僕に触ろうとしてきたりすると自然な感じで胸元が見えるし、歩いていて話しかけられて上の方を向くと袖からわきの下が見えちゃうこともある。

座るときにはふわっとした瞬間にふとももの奥が今みたいに見えることもあるし。

なんならスカート慣れしていない僕でさえぱんつは見えないようにって膝をくつつけるようになってるっていうのに……………ふたりと

でもこの子が言うつてことは僕も気が抜けると見えちゃったりしてるんだろう。

そういう自覚もそう言えばあるような気もするし……気を付けよう。

男は悲しい存在だから白い布で理性を破壊されるからな。

それがたとえ幼い少女のものでも。

男つて言うのはそういうものだ。

「あら。その漫画……響ちゃんも好きなの？」

「うん？ ああ、うん。読ませて貰っているよ」

君がひいひい言ってるあいだに満喫してたよ？

「おもしろいわよね！ 私ももう何回も読み直しちゃったわ！ いろんな要素があつていいいわよね！ 技のネーミングだとか主人公とライバルの因縁とかちよつと大変なことになっている恋模様とかっ！」
急にエンジンかかつてきたくるんさんがくるんつと飛び起きて駆け寄ってくる。

動きが素早い。

目が追いつかない。

「響ちゃんは響ちゃんは!？」

「僕はどちらかという話の展開に興味があるからそこまでは」

「そうなの！ 人によつて読み方つて違うわよね！」

さつきまでは僕みたいにくでーつてしていたのに急に元気になつたかつて思つたらよつんばいでにじり寄つて来ているメロンさんがいる。

「……………」

重力の力を借りるとそこまで形が変わるのか……でかいな。

じゃなくつて……近くない？

こつちへ来ないで？

「かがり」

嫌な予感がして懸命に後ずさるけどすぐ後ろは本棚。

「かがり」

逃げられない。

そう思った数秒後には——僕の上にはかがりの肉付きのいい体の重さが乗っかっていた。

「むぐ」

重い。

柔らかい。

……温かい。

「……………」

……………最近慣れてきた、女の子のいい匂い。
嗅ぎ慣れたかがりの匂いが濃くなった。

「……………」

重い。

暗い。

甘い匂い。

目の前の重圧感だ。

僕は下敷き。

背も高くってばいんばいんで大人でも通用する体に乗ってる中学
生らしい顔つきでばいんばいんがせり出している。

それに対するは小学校低学年な肉体の僕。

差は歴然としている。

「……………」

僕はびっくりすると猫みたいに目をまん丸にして固まるらしい。

そういう僕自身が知覚できる程度には止まっていた時間。

天井の光が下条さんの髪の毛だけを照らしていて彼女の顔は……

光っている目以外は暗くなっている。

蛍光灯がまぶしい。

……あー、女の子が「電気は消して……」って言うのの真相が分かつた気がする。

あくまで資料による情報だけでも。

くつろいだ姿勢だったところにすすすつと来られたから猫どころ
かライオンに近づかれてしまっていたネズミのような心地な僕。

重力が働いている地上において上下って言うのは致命的なアドバ
ンテージとデイスアドバンテージ。

それは虫けらから鳥から動物から人間様から変わらない。

つまり僕はもうおしまいってことだ。

「響ちゃんはやっぱり変わってるわね」

そう？

君には負けるよ？

「複雑になっている人間関係がおもしろいってみんな言うのに」

「？」

「……………ああ、さっきの漫画の話？」

相変わらずのマイペースっぷりだね。

この体勢になって言う台詞じゃないでしょって思うくらいに場違いなことを抜かすくるんさん。

「あー！ならこっちの恋愛ものとかはどうかしら？響ちゃんがおもしろいって思うのかどうか前から気になっていたのよ！」

うん、漫画に夢中でこの状況をしでかしたって思っちゃいない。

この子大丈夫…………？

危機感なさすぎじゃない…………？

「むぐ」

「あらごめんなさい」

…………自分の体重を僕に乗っけてるって自覚してるじゃん。

僕の両方の肩に重力が加わって視界が服という布で遮られる。

というか2個のお胸がちょうど両目を包むように乗っかってきているのって、これゼッタイにわざと…………なわけないよなこの子だし。

うん、絶対だ。

そういう積み重ねた信頼がある。

大丈夫、この子が何かを意図的にするって言うのは不可能だ。

そういう意味での安心感が凄まじい。

でもおっぱいがあったかくて重い。

「かがり」

ようやく声が出始めた。

「僕を台代わりにしないでくれ」

「だってちょうどいいところにいるんですもの」

何が「だって」なんだろう…………。

「響ちゃんの肩と頭で支えてもらったらちようどいい場所にあるのよ、取ろうとしてるの」

彼女の思考パターンには何らおかしくもない反論だけど世間一般的にはおかしい反論。

本当に良くも悪くも距離感が無いんだなあこの子…………。

と、まぶたからこめかみに感じていた弾力とぬくもりが離れていく感覚。

目を開けてみるとものすごく近いところに彼女の両目があつてもう1回びっくり。

「……………」

「……………」

くるんヘアがこしよばゆい。

彼女の前髪が僕のおでこをくすぐる程度の距離感。

いやいや近いでしょ……これはさすがに女の子同士の距離感……なのかもしれない。

最近そう思うようになって来たけど……いやいややっぱり近すぎるよね？

「……………」

なんで君が不思議そうな顔してるのかな。

あ、けど、こうして近すぎる距離で見ると、たぶん15センチくらいだと顔の印象はなんだか普段と少し違うように感じる。

なんて言うか、なんだか普段の幸せそうもといふんわかしているのとはちよつと違うような。

目元が厳しいというかなんというか野性みを感じるって言うか。

気のせいだろうか。

気のせいだろうな。

「それによ？ それに響ちゃんって普段スキンシップしようとしてもすーぐに逃げちゃうし。まるで人に懐かない猫さんみたい」

僕は今の意識外からのにじり寄り方とか飛びかかり方の方がよっぽど猫っぽいと思うけど。

猫というよりはネコ科のナニカだけど。

ついでに僕は袋のネズミだ。

「お手々だって、最近は少しだけ前より長く繋いでくれるようになってきたけど、でもやっぱりすぐに離されちゃうし。私さみしいわ！」

なんでこの子ってここまで人と近いんだろうな。

あー、そう言えば母さんも幼い僕が恥ずかしいって思う程度にはくつついて来てた気がする。

……つまり、これが母性？

いや違うな。

この子に限ってそれだけはない。

「僕はそういうの苦手だって」

「けどもうちよつとくらい良いでしょう？　これくらいは友だちとして普通よ？」

そうなの？

サンプルがこの子とゆりかしかいないから分からないけどもしそうなら慣れないといけなくなる。

JCはあと2人知り合いになつちやつたけどあの子たちとは初対面のまんまだし今井さんたちは大人だから関係ないしな。

……僕たちの位置関係に変更は無い。

僕が違和感を覚えさせないように溶け込もうとしている対象、その女の子のひとりのちよつと……いや、かなり……だいぶアレな子なこの子に「女の子としての普通」について口にされてしまうと、ぐうとも言えないんだ。

女の子同士の距離感って本当はどれくらいなんだろうね。

現実世界じゃこの子とゆりかしか知らないから分からない。

「だからさつきは珍しく響ちゃんが無防備な感じになっていて警戒、いつもみたいにしていないみたいだったからつい近づいてしまったのよ」

良く分からない論理で弁論するくるんさん。

「ね？　近づくと引っかいてくる猫さんだって落ちついてるときならおとなしく撫でられてくれるのよ」

つまり君は猫を撫でようとすると逃げられるって自覚してるんだね。

「僕は猫じゃないよ？」

「あら、似合っているわよ？　猫さんな響ちゃん」

「そういうことじゃない」

この微妙どころじゃなく歯車がずれてる感じ。

「いいじゃない！ 似合っているのだし。 眠そうな猫さんってかわいいわー」

うーん、その論理の飛躍が良く分からない。

……まあ髪の毛とか目の色とか珍しいしな。

ペルシャ猫みたいな感じがしなくもないっていうのは初めの頃の姿を見て思わなくもなかったけど……でも。

やわらかかった。

あつたかかった。

………おっぱいというふたつの物質は想像以上。

普段抱きつかれるとその重量を、クーパー靱帯を守って形を維持するための構造上硬度があつて痛いなあつて思つてた案外に頑丈なブラジャーとその下の脂肪のかたまり。

今みたいにゆっくりくっつけられるとその弾力性が布越しに分かる。

……人生初めての嬉しいはずの感覚が……よりもよつて10歳も下の子のものなんてな。

僕の胸に乗ってるのはおっぱいにはまだなれていない骨と皮なあばらだからノーカウントだし、あまり嬉しくない初体験。

それに顔に当てられても嬉しくない。

ぱふぱふで喜ぶのって本当なの……？

男つて馬鹿じゃないの……？

性欲つて悲しいね。

その無い僕は気まずいだけだ。

この子はなんとも思っていないみたいだけど僕としてはとても気まずいだけ。

「……………」

時計の針の音。

エアコンの音。

外で車が走る音。

どこかで子供が叫んでいる声。

静かな空間って意外にうるさいよね。

ふたりしてくっついていてこの変な状況。

よつんばいになっていて、くるんが下がっていてメロンもまた重力に負けていて、しなった腰の先にあるらしいおしりがそびえている。

ネコ科が狩りをするときの姿そのものが後光じゃなくて電灯に照らされている。

あいかわらずに珍しく目線の高さが合っている下条さんの目が近い。

瞳孔が開いている瞳。

虹彩までがはつきりと。

……ここまで近くなったことなかったけど目元は意外とすつきりとしている気がする。

お、この感じ、眉とかちよつと変えた？

「……………」

「？」

……………なんでこんなことに気がついてしまうんだ、僕は…………。

このあいだの雑誌に眉の整え方とかあったからか。

女子力の向上に懸念を覚え始める。

男子力的なものが低下してきてる気がするんだ。

「…………だから言っているだろう」

早くどいて？

重い。

「僕はそういうのが…………近すぎる距離感も肌の触れ合いも苦手なんだよ」

「響ちゃん…………」

猫でも人懐っこくなくなったり苦手な人相手だとふしやーってなるでしょ？

「…………それは病院でずーっとひとりだったから……………でしょ？」

くるん？ってなる。

くるん？じゃないよ…

たまたまなんだろうけど前髪とか横髪のくるんくるんが彼女の意志に沿って動いている気がする。

それだけ近いんだ。

と思っただらもつと、ずずいっとさらに近くなって来てきつき食べていたケーキの甘い匂いがぶわつとくる。

……唇、やけにぷるんとしているな。

僕みたいにめんどくさくてリップ塗らないとかないんだろうし、努力の結果だ。

そんなことを思うくらいに近い。

唇が切れたりしたりかきぶたみたいになったりしたりしたら女の子失格。

いつしか説かれた下条さんの言葉が思い出される。

………柔らかそう。

ぷるぷるしてる。

僕みたいに鶏がらじゃなくってしっかりと女の子らしい女の子な彼女の唇はぷっくりしていてうらやましい限り。

でも、さらなる脅威を感じて後ずさろうとするも背中はずツシヨンにぎゅうぎゅう押されていてこれ以上は下がれない。

というか、のしかからないで？

体重差考えて？

それくらいの思考力は……あるって信じたい。

いろいろと圧がすごい。

いろいろと。

「かがり。……まだ根に持っているのか、それ」

「だって響ちゃん。………ゆりかちゃんには」

どうやらゆりかに説明していたぎりぎり嘘じゃない説明を自分が聞いてなかったのが気に入らない様子で声が低くなる。

いきなりだからこわいって。

どうして女の子ってそうなの？

「……………」

……嫉妬には気をつけよう。

女の子同士の人間関係って暗黙のなかでどろどろしているらしいな。

完全に平等じゃないところなるらしい。

ハーレムって大変そう。

僕はそういうのいいや。

女の子が好きで好きでしようがない人だけが堪能すれば良い世界なんだ。

情報の伝達未遂は社会人でも致命傷らしいし、僕の小さい肝にもしつかりと留めておいて……とか変な方向に思考が飛んだりする程度の時間が経つ。

「あの子」

ほそりと話し出すけど、それはゼロ距離での……まるで恋人同士の会話のようで。

「響ちゃんの。他の。仲の良いお友だち。関澤さん。ゆりか

ちゃん」

こわい。

「私とおなじような時間に、おなじように仲良くしていたゆりかちゃん。『小さいもの同士』って……かわいい子よね？」

「かわいい」に含まれてるニュアンスが普段とはちがう感じがしてなんかこわい。

こわい。

誰か助けて。

「あの子には教えていたのに。響ちゃんの病気のこと。私には……私にはひとことも言わなかったじゃない」

だってその設定あのととき考えたんだもんなんて言える雰囲気じゃない。

「私、ちよつとだけ嫉妬しちゃったわ」

着せ替えのお人形さんを友だちに取られた的なやつ？

「……かがり。そもそも君と知り合ったのだったの数ヶ月前だろう。たいして変わらないよ。言う機会もなかったし」

「言うつもりもなかったけど」っていうのはすんでのところでお口の

中に収納。

だって深く突っ込まれるとぼろがぼろつと出ちやいそうだし。

この子だったら入院についてとか無限に聞いてきそうだし。

入院生活のことなんてドラマとかでしか知らないことだしなあ

……さらなる嘘はご遠慮したいところ。

これ以上設定が積み重なっていくと僕の頭が追いつかないんだ。

とりあえず重い。

あつたかいつて言うか熱い。

甘い感じの匂いで頭とお腹が変になりそう。

なんでお腹なのは良く分からないけど……お腹からふわふわしてくるんだ。

なんでだろうね。

「……………」

でもなんだかこの変な感覚を深く知ったら行けなさそうって思った僕は思い切つて体を横に移動して……くしゃみをされたらごつんしそうなところまで来ていた彼女から距離を取ることに成功する。

けど後ろをちらつと見てみたらあんまりスペースはなくなつて本棚と壁のすき間に入つちやつてるって分かった。

……………退路、自分で完全に断つちやつた……？

ここからさらに逃げようとしたら、なんとか言いくるめる以外にはもう頭突きくらいしかなくなつてしまった僕。

でも頭突きつて痛そうだからやだな。

「響ちゃん。 私はね？」

ローテンションのかかりはウルトラレアだ。

「もう何回も……ううん、もう10回は超えているわよね？ それだけ一緒に出かけをしておはなしして」

「連れ出した」の言い間違いだよな？

「とつくに……お着替えを手伝つてあげたあのときからずーっと、私からは響ちゃんのことお友だちだと思つていたのに。 響ちゃんからはお友だちつて見てくれていなかったのね……？」

不思議な論理で怒っているらしいかがり。

あれは君がしたいからしていたんだよね？
僕は望んじやいなかったよ？

そんな反論をしようと思っていたら僕の口が動く前にさらにじりつと迫られる。

こわい。

猫は猫でもサバンナにいるネコ科なくなるんさんだ。

「む——……………」

……………ほつぺたを膨らませて怒ってるアピールをしているらしい。
そういうところが子供っぽいんだぞ？

「……………君の友だち認定は、僕にはちよつと早すぎる。世の中には僕みたいにじつくりと距離を縮めたいタイプの人間もいるんだよ。僕は君みたいに早く仲良くなりたい子相手だとどうしても引いてしまふんだ。分かってくれ」

「それは、……………分かってはいるのだけど」
分かってるの？

ほんとう……………？

「あと、かがり」

今度は僕のほうからじつと見返してみる。

……………お、こんなことは滅多にないから猫だまし食らったみたいな表情になつてる。

ちよつと気の抜けた顔を見ることができてけっっこう嬉しい。

「……………なにかしら」

「重いぞ。もうちよつと甘いものは控えたほうがいいよ」

「ひどいわ!？」

いや、だって本当に重いし。

肩こりそう。

いい匂いが離れて行く。

僕のようなエセ幼女じゃなくなつて本物の女の子なかがりは女の子らしい匂いを放っている。

なんとというか健康的な匂い。

どう表現すればいいのかは分からないけど、男とは違う匂い。

シャンプーとお菓子と甘味と紅茶と肌の、……………とにかく甘い匂い。

それがようやく離れてくれてくらくらしてた頭がすつきりしてきた。

でもなんか顔真つ赤にして怒ってるっぽいから、なだめないと。

「君が特別に太っているというわけじゃないよ？」

「……………」

「けど体格差を考えてくれ。僕は特別に小さくて君は大き……………成長が早いんだ。体重だつて身長に比例しているんだから太つていとかじゃなくて」

「……………私は太つてもいないし重くもないわ!! きちんと適正体重のぎりぎりをがんばっているんだから!!」

適正体重からぎりぎりはみ出しちゃっているを見た。

けど実際には小太りなくらいがちやうど良いらしいからそこまで気にしなくても良いって思うよ？

中学生だから学校で体も動かしてるだろうし、別におへその横もぶにつとしてないから安心して良いよ。

「ほら響ちゃん! ねえ響ちゃん!! もういつかい乗ってあげるからしっかりと確認してちょうだい!! 私は太っていないから重くはないの!!」

その理屈はおかしくない……………?

「ま、まて……………わぷ」

今度は思いつ切りのしかかられた。

どうやら体重の話は地雷だったらしい。

女性に体重は禁句だったということを忘れていた。

この子も一応は女性だもんなあ……………分類上は。

メロンさんに飛びかかれるようにして押し倒されて上からぎゅーっと抱きしめられることで、僕はそのメロンも体の柔らかさも全身で、息ができなくなるまでずーっと味わわされることになった。目の前が砂嵐になって行く。

酸欠。

……口は災いの元。
そう思った僕は真つ暗になった。

◇

もしやもしやもしやと買ったばかりのお菓子を平らげつつある下条さんはすっかり元通り。

こうして餌を与えておけばおとなしくなるネコ科のちっちゃいやつにしか見えなくなつたかがり。

こうして静かにしていてくれるなら毎日でもやぶさかでは……やっぱりめんどくさいからイヤだな。

「……それでね？ このへんのはクラスの子にでも人気があるらしいの。恋愛要素ばかりじゃないし、これなら響ちゃんも楽しめそうだから1度読んでみたらどうかしら」

すつかりご機嫌で本棚を眺めるくるんさん。

「タイトルは耳にした覚えがあるな」

たしかアニメになつていたから表紙の子たちの特徴的な顔と髪の毛だけには見覚えがある漫画に思いを馳せる。

この子、本当に漫画が好きだな。

でもよつぽどにこれを薦めたいんだって察知した僕は先手を打つ。

それくらいはできるよになつてきた。

そうじゃないとまたのしかかられるもんな。

首絞められた鳥みたいな声出ちやうし。

「食わず嫌いはもつたいたいし、君がそこまで言うのなら読んでみようか。これを終えたらだけど」

でも読みかけを途中で放り投げるのが大嫌いだから後回し。

「いいけれど……でもそれはあと20巻くらいあるのよ。今響ちゃんが読んでいるのはまだまだ中盤よ？」

長寿漫画って長いよね。

暇つぶしに最適だ。

「ここで読むだけだと何日も掛かる量よ？ 帰りに残りの巻、貸して

「もいいのよっ。」

「持って帰ると重い。僕の腕力は知っているだろう？」

「お迎えの人に車で来てもらえば良いじゃない」

「……こんなことでいちいち呼びたくはないよ」

僕にはセバスチャンもじいやもないんだ。

あと、綺麗に読んでから遠慮しちゃう。

持ち歩くとカバーの端っこ折ったりしちゃいそうだし……。

「それにどうせ。また何回かはこうして勉強を言うつもりなんだろう？ 近いうちに読み切れるよ」

だってこの子、絶対ひとりじややらないでしょ。

そう思ったら来ざるを得なくなる。

「よかったわ！ どうやってお願いしようかって思っていたのよ！」

どうせストレートに言うつもりだったんでしょ……それくらいは分かるよ……僕がどれだけ苦労してるって思ってるの……思ってたないよねえ……。

夏休みの宿題って言う中学2年生にとっては嫌なことこの上ないものを片づける機会……って言うよりは単純に彼女にとっての友達な僕と自室で一緒に居られるのが楽しいんだろう。

そんな彼女はとつても嬉しそうだった。

ああ、子守って大変。

僕は独り身で良いや。

さつきネコ科のでっかいやつみたいにして人に乗っかってきたのをもう忘れたくるんさんは元気だ。

無敵なんだ。

「ねえ響ちゃん！」

「かがり、音量を落としてくれ。僕はうるさいのが苦手なんだって

何回か言ったよ」

いちいち声がおつきい。

2人しか居ない空間でどうしてそこまでボリューム出す必要があるの？

「あらごめんさい、つい」

しゅんとなるくるん。

自覚はあるらしい……っていうか何回かクレームつけたもんな。

でもそのたびに繰り返し返すんだ、きつと学校でも先生にたしなめられていること間違いなしだな。

「ところで響ちゃん」

適正音量になっているのは偉い。

でもそろそろデフォルトの音量を覚えてね？

「このところ聞くのを忘れていたのだけど、響ちゃんには今のところ気になっていない人も好きな人もいないのよね？ 初恋もまだだったわよね？ 私とお揃いで」

「そうだな。同じ話題を唐突に振ってくるのもいつものことだけでも回答は変わらないよ。出会いなんか無い生活だから」

まーた始まったって思っているいい加減な返事になる。

ちよつとだけ最近ちよくちよく出てきた「分かるー」な感じに浸っていたら、まったくこれっぽっちも「分からない……」なことが出てきたんだもん。

それに対していつも通りに不服そうなくなるん。

……ほんとうに好きだなあ、この話題。

何回も……いやもう10回以上もおんなじこと聞いてくるんだも

んこの子。

毎回毎回よくもまあ飽きないものだ。

その歳でボケかって思ったけどそうじゃなくって聞かすにはいられない性質のためらしい。

「今まで家と病院の往復しかしていなかったんだし……そもそもがそういう状況じゃなかったんだ。まともな生活じゃない。今だつてそう変わらない。前から言っているだろう?」

ニートは世間一般には理解されない、まともじゃない存在なんだ。孤高の存在なんだ。

「それに……僕の家のこともある。さらに言えば……いいかげんに分かってほしいんだけど、かがり。僕は恋愛には……少なくとも今はまだ興味はないんだよ」

これだけ強調してもどうせ素通りされるに決まっているのが悲しい。

また次に会ったときにおんなじようにして聞いてくるんだろう。

君は親戚のおばちゃんか何かか?

そろそろ納得して欲しいけど無理だろうなあ……。

だから特段感情を込める必要もないし淡々と説明だけしておいた。何十回か伝えていればそのうちにいつかは分かってくれるだろうって願いを込めて。

まあダメかもだけどそこはスイーツとコイバナで生きている女子っていう生き物だと思ってとつくに諦めている。

男と女なんて永遠にわかりあえない生きもの同士だからな。

でなければ物語の定番のテーマになどなりはしない。

僕がこのくるんさんとおんなじ生き方をするなんて絶対にならないもんなあ……。

まあ……僕のほうにも少しは問題はある。

欠陥って言っても良いかもね。

物心ついてからでも20年以上生きてきたはずなのに恋っていうものを感じたことすらないんだもん。

異性にときめいたことがないんだから相当だ。

この歳にして枯れているって言っても良い。

普通は……常人なら小学生、遅くても中学生までにそうなるものらしいけど僕にはなかった初恋。

せめてそれくらいは済ませておけばその感情と感覚くらいならこの子と共感できたはずだけど……元の肉体的にも今の肉体的にも、そういうのを感じられるかすらも疑問なところ。

今後そんなものを実感することがあるのかどうかさえ怪しいもの。だってニートって言う孤独な生活だもん。

人との関わりが……深くてスーパーのレジの人なんだから押しして図るべし。

だいたいこの子が求めるそんなものの大半は「恋をしたい」っていう錯覚と性欲との複合物だろう？

「恋に恋する」って言う言葉があるくらいだからみんなも分かっているんだ。

手近な誰かでその気持ちを味わってみてあわよくば嬉し恥ずかしなひとときを過ごしたいんだ。

思春期だもんね。

そういうものだよな。

僕は良く分からないけども。

僕の人生経験はかがりのような子供とはさほど……いやいくらかは上なはず……たぶん……と変わらない。

もしかしたら、万が一があったら……今後にそういう感情を覚えることが無くはないのかもないけど。

「……………」

「今回も長考ね？ 響ちゃん」

けど今はそもそも女の子の体だし、ましてや幼女だし。

そういうのを体験するとしてもとりあえず魔法さんの気が向いて男に戻れてからってことになる。

女の子が好きな女の子っていうのも今の風潮的にいなくもないとは思うけど、今はそれ以前の幼女だしなあ。

恋なんて10年早い。

物理的な課題だ。

何かとんでもないことが起きて運命がねじ曲がって、僕も好きで相手からも好きって言う関係ができる奇跡が起きたとしても……今のままじゃ精神的にも肉体的にも年齢差がとてつもないことになる。

それはまずいし絶対に長続きしない。

やっぱりそんな奇跡は起きないだろうな。

まあ身分がないんだし端から縁のないことではある。

どうでもいいか。

「……………」

「おでこにシワが寄ってるわ？　可愛いのもつたいないわあ……」

もし、間違ってる。

僕に何かのエラーが発生して……女の子っていう性別の肉体で、本来の僕なら生理的にムリなはずの男相手にそんな感情を覚えたりしたら。

……………それを忘れて本気で引きこもるしかない。

またイヤなことを思いつくどうしようもなくぼんこつな僕の脳みそ。

全ての星が1列に重なったとかでそんなことがあつたら山にでも籠もるしかない。

髪でも切って慎ましく永遠に……あ、切れないんだった。

ここでもたしても魔法さんの出番だ。

「……………はあ……」

「毎日が大変なのね。分かるわあ……」

なにが悲しくて男なんかについて思うため息も出るもの。

絶対にありえないって断言したいところだけど……今の僕は魔法にかかかっていてさらに言えば肉体的な性別は女の子。

色恋は社会的なプレッシャーとか個人的な嗜好もあるけど何よりも肉体の性ホルモンによるものって知識はある。

ひよつとしたら成長とともに出てくるはずの女性ホルモンのせいで僕が男を好きになる……そんなことを考えるとお酒を呑みたくて

手が震えて来る気がする。

いけないループに入りつつある。

切り替えよう。

アイデンティティの危機だ。

男という自己同一性の危機。

僕は真剣なんだ。

「響ちゃんっておもしろいわよねえ」

「……………」

くるんさんがなんか抜かしてる。

いらって来たから言い返してみる。

「そう言うかがりはどうなんだ？」

「？」

「いつも僕にそんなことを聞いてくるけど、君自身にとって誰がかっこいいとか気になっていたりとか好きだとか、そういう話は話してくれたことがないと思うけど？　こういうのは互いに言い合うものだって、そこにあつた少女漫画にもあつただらう？」

「あ、わ、私？　……………えっと、私は。ええっと、その……………」

む？

……………なんか予想外に考え込んだ……………不思議だ。

何か悪いもん食べたのかなこの子。

けど今まで何となく何でかなって何か疑問に思ってたんだ。

恋愛脳なこの子だったら絶対にするだろう、学校とかの身近にいるこの子自身の好みの男子の話題とか耳にした覚えがないって。

最初の頃はクラスや学年のかわつこいい男子について話してくるんじゃないかって身構えていたのにまったくその気配もない。

中高生だったらたとえ付き合ったりしなくても気になる人のひとりやふたりはいるだろうに。

まあのろけ話とか聞かされるのは今以上に無為な時間になるから勘弁願いたいけども。

なにが悲しくて中学生の恋愛事情を聞かされなきゃならないんだ。

でも、不思議でしょうがなかった彼女の恋愛模様。

好きな人が居るのならその相手の話題で時間を稼げるし、なにかしらのアドバイスができたとしたら恩も売れるしで……僕にとっては良いことしかない気がする。

のろけはやだけど適度に建設的なら大歓迎。

ぜひともその相手のことを聞き出したいところだ。

人は好きなことを話していればごきげんだしな。

それに、恋愛ともなれば人ってお馬鹿になるらしいからきつと毎回おなじようなことを言うようになるだろうし、返事が今よりも楽だろうから僕が得意なオートでの会話ができる。

たかが中学生の恋愛模様だ、たいして難しいものじゃないし楽勝楽勝。

そう思っただけでなんかすつごく考え込んでる。

あれー？

「その反応……もしかして居ないのか？ 意外だな、いつもあれほどラブラブと他人や漫画やドラマの恋愛について語っているのに」「うぐ」

僕の言葉に黙り込むくるんさん。

……今日はほんとうに珍しいことが続く。

メロンさんの困っている顔を見られるなんてな。

「……そうなのよ………恥ずかしいんだけど、でも私。いつも響ちゃんにも言っている素敵な恋というもの、とっても甘酸っぱいような感じの恋を試してみたいんだけど、でもまだ気になっている男の子さえいないの。 どうしてなのかしらね」

「実に意外だな」

「……響ちゃんが珍しくみんなと同じ反応をしているわ……」

きつとみんなもそう思ってるんだな。

年下から年上まで毎日のように同じ空間にわんさかと思春期の男女が揃っている学校っていう特別な空間。

恋愛にはこれ以上ない環境だ。

社会に出ると打算が出てくるから純粹に恋に恋できる、最初で最後

の空間。

お互いにそういう感情とか衝動が強い時期でそういう風潮。大人に比べると笑っちゃうくらいにかんたんに恋人っていうものを作るはずの学生なのにな。

責任とか立場とかがしらがらみとか将来とかの憂いがない分思う存分にくつついては離れてができるのにな。

僕はしたことなかったけど、そういうのに積極的ははずで人気もあるはずのこの子が……なんてなあ。

世の中つて案外分らないものだ。

まあ科学じゃ説明が付かない幼女化が起きるんだもん。

もはやなんでもありまである。

でももつたいなあ。

僕みたいにそういうのにかける興味ない男子なんて……それなりには居るって思うけど、それでも大半はぼんやりしている系くるんでメロンなかがりならよりどりみどりだろうに。

せつかくのチャンスを台無しにすると僕みたいになるから気をつけてね？

「君なら告白のひとつやふたつどころかもっとされているものだと思うっていたんだけど、違うのか？」

この子からじゃなくても相手から来てないの？

ほら、その顔と胸っていう肉体とほんわりした性格と雰囲気と人当たりの良さっていう内面……ちよつとトリップしてる性格も男にとつてはきつと理想を体現しているはずだもん。

高嶺になつちやっっているんだろうか。

あるいは本人が気がついていないだけとか？

……ありえる。

くるんだしな。

「好きです」って言われてloveじゃなくてlikeって本気で思っただけでもおかしくはない。

「……なんで分かるの？ この前も告白されただなんて」

「いや、そうは……なんとなくそう思ったよ」

そこまで言っていないけど言ったことにしておこう。

「……たしかに小学校のころからよ。学期の終わりとかお休み前とかに男の子から呼び出されて告白されること、よくあるの」

良かった、少なくとも告白してきた男子を振る以前のことをしていいなくって。

小学校のころから成長、早かったんだなあって思う。

たぶん全体的にまんべんなくすすくと成長していったんだろう。

ちよっとお花が頭の中に咲いている感じだけど、いつも笑ってて楽しそうだしモテないはずがないもんね。

よっぽど女心が分かっている経験豊富な男以外は話が壊滅的に合わないだろうけど……若ささえあればなんとかなるらしいし、学校にいるあいだけなら話題なんていくらでもあるだろうし。

つくづく恋愛に適した環境だな、学校って。

この僕でさえちよっと思わしく思わないでもないくらい。

別に惜しいって感情は湧かないけど懐かしいとは思う。

「……だけどね？」

珍しく真剣な意味合いが含まれている気がする声。

「私……告白されても好きなおはなしでみんながしているみたいに胸がきゅんとしてきたりどきどきしてきたり、嬉しいって感じたり思ったり怒ったり泣いたりしたことないのよ。何かおかしいのかしら、私って」

情緒が育っていないだけじゃない？

とはさすがの僕でも言わない。

思うだけだ。

「相手の子も良く知ってるお友だちだから、そのままおつきあいしてみようと思ったこともあるんだけど……でも私がそんな調子だから失礼だっと思ってしまうの。毎回。だから結局お断りしかしたことがないのよ」

案外にまじめだな。

成熟した大人な僕的には好印象だ。

「だから……彼氏とかの恋人。これまで居たことないの……みんな

からは『今は居ないだけなのね』って言われるのに……」

しゅんとなるくるんさんのくるんくるんもといしゅんしゅん。

「だから恋愛相談とかよくされてしまうの。『分からないわ』って言うのも可愛そうだからって思っただけだ。『恋愛ものだったらこうだけ……』って言うのしか答えてあげられなくて。でも、なぜかみんなそれでうまく行くのよ」

「ふーん」

当てずっぽうもすがすがしければ逆に真実を言い当てる感じ？

漫画のお馬鹿キャラが適当に抜かしたことが鍵になることって良くあるよね。

漫画とか映画の話だけだと思っただけでももしかしたら真実なのかもしれない。

「なんでかしら。響ちゃんは分からない？」

「さあ」

僕に聞かれても……。

くるんさんのますます弱ってきているくるんをなんとなく見ながら思う。

この子、恋愛が好きだけあって理想を追求しているのかもって。

こだわり、理想もここまで来れば良いものだ。

僕のコーヒーとかお酒とか温泉とかのこだわりに通じるものがある気がする。

思春期以前に女子って存在なら「とりあえずで付き合ってみよう」っていうのをするって聞いてたのに意外なもの。

好意を示されたらよっぽどじゃなければ嬉しいものだしちよつとした優越感も感じるだろうにな。

まあ僕にはこれっぽっちも縁のない話ではあるけどね。

そもそも興味が無いからどうでも良かったんだけど。

今も前も僕の芯のところは変わっていない。

そういうものに心を動かされることがないんだ。

好きの反対は無関心なんだって。

興味がゼロなら何があってもなんとも思わないんだ。

「ねえ、響ちゃんには分かるかしら？」

「なにが？」

「何がって、恋って何かってことよ」

「恋か。 難問だね」

まさかこの子からそれを訊ねられる日が来るなんてってびっくり。
人生って何があるか分からないね。

「恋をするのにはあこがれているし恋している子を応援したくもなる
んだけど……恋についてお話ししたり読んだりするのももちろん大好
きなんだけど」

知ってる。

「私、自分ではまだよく分かっていないのよ」

「それを自覚できているだけで立派だと思うよ」

「？」

「……さて、なんだろうね」

社交辞令的な答えを理解してもらえなかった僕は深く深く傷つい
たから避難先のベッドの上でぐだぐだしながら考えてみる。

僕のベッドからは違う甘いようなふわふわした下条さんの匂い
がただよう。

さつき嗅いだ匂いがしたから湧いてきている空間。

……こうして家の外で脱力するっていうのもまた新鮮。

「……………」

「響ちゃんはどうか答えるのかしら？」

そう言えばこの子ってよくひとりごとぶつぶつ言うよね。

ずっと耳に力入れているのも疲れるから聞き取れなかったら無視す
るけど怒らないからどうでもいいのかな。

さて……恋について。

僕が最も興味ないもののひとつについて何か言わなきゃいけない
らしい。

この子が納得する答えを思いつかないと終わりそうにない気がする
から考えてみる。

……子どものころは思っていた。

大きくなるにつれて自然と誰かを好きになって誰かに好かれるんだって。

だって知り合いの大人の人の大半が異性とくっついていたんだもん。

だから僕も学生のうちはもちろん、社会に出て働きながら何回か恋人を作ってくっついたり分かれたりしながら過ごして、幸せだったり怒られたりしながら苦労したりして……30くらいまでには結婚して子供くらいはいるって思っていた。

母さんが僕を産んだのだって元の僕くらいの年齢……大学卒業から数年だったらしいな。

なんなら学生のころからずっと付き合っていたらしいってのを聞いていたから「そうなるんだろう」ってどこかでぼんやり考えていたんだ。

だけど現実と言えば灰色の学生生活。

僕がひねくれてたのも無気力だったのも致命的に変だったのもあつて、とうとうにデートさえないままにこの歳になってこの歳になって女の子にもなっちゃった。

今思えばただの子供が歳を取るだけで勝手にいろんなことを知って経験して大人になるって思い込んでいただけだったんだろう。

でも、なんだか悲しいな。

「……………かがり」

そう思ったら、勝手に口が開いていた。

「恋なんて、……少なくとも、したいと思ってるものじゃないと思うよ。僕だったら、ね」

ベッドでぐんなりしていたらなんだかセンチメンタルな気分になったからかは分からないけど……僕でも考えたことがないような言葉が、ぼろっと出ていた。

僕自身は色恋沙汰なんでもものには縁がなかったから全然まったくもってこれっぽっちも分らない。

だからいろんな本とかで見えてきた受け売りしかない。

で、それらによると……人を好きになる「現象」っていうのは運命とかいう非科学的で存在しないけどロマンチックなものを置いておけば肉体が恋や愛をしている「状態」であって、恋愛っていうのは生物の本能に備わっている生命として種族を残すための「機能」らしい。だから高尚ななんとかじゃなくって単なる本能。

どんなに頭が空っぽでもそういう状態になっただけっていうものらしい。

悲しいくらいにシステムチックなそれは遺伝的に遠い人を無意識に好きになるレベルって説明されていて、科学的に分析すると最終的にはそういう進化の果てのプログラムの本能に近い現象らしいね。多少は物を考えられるけどそれでも僕たちは哺乳類の一種に過ぎないんだから、他の動物って言うやつらと頭の中以外そこまで変わっていないんだ。

それで、本能に従ってつがいになりそうな相手をどうにかして意識すると……動物は簡単に……その、繋がるんだけど人間は一応理屈をつけたがる生きもの。

見た目とか性格とかが好きだっと思って思ったり家同士で決まっているからってことにしたり、そこまで好みじゃなかったとしてもこの異性と子孫を残そうって意識したら、脳みそのどこか忘れたけどどこかでなんかいろんなホルモン物質が出てくる……らしい。

そうなる恋愛のスイッチが入って「自分に合う異性はその相手だけしかない」って思うようになって、その人がいちばんだって心の底から思い込む。

その相手がたとえそれほどの人じゃなかったりどうしようもない人だったとしても一回その状態に入ると、もう自分自身ではどうしよ

うもなくなつて良いところだけしか考えられなくなる……らしい。
「らしい」ばつかりなのはしょうがない。

僕にはそんな経験ないんだから知識で補つたに過ぎないんだ。
で、順調にいけば結婚してつがいつてのになつてから数年くらい。
野生ならちようど子供が何人か生まれるくらいまで続いて、そこからゆつくりと冷えてきて、そこからは次世代をどうにかして育てるのに躍起になるもの。

そういうものらしい。

だから倦怠期とかがあるし子供を産んでお母さんになつたらお父さんになつた人を虫けらみたいに冷たく扱うんだとか。

ひどいよね。

男として同情する。

使い捨てつて感じだし。

でも生き物の中には男が役目を果たした時点で本当の意味で用済みになるのもいるらしいからそれに比べたら人間はずいぶんと優しいつて思うよ。

「うーん」

「響ちゃんががんばつて考えているわ……静かにしないとつ」
だけどなあ……。

目の前のくるんさんと目が合う。

……なんとなくじーつと見てたらなんか逸らされた。
なんで？

普段はうざつたいくらいに見てくるのに自分がされるのは嫌なの？

わがままにも程があるんじゃない？

でもそんなくるんさんであつたとしても、自分自身とか誰かのラブつていうエネルギーで生きていると言つても言いすぎじゃない女の子つていう生き物に……ましてや中学生に対してこんな身も蓋もない真実を伝えるのはかわいそうな気がする。

僕だつてそのくらいは配慮する。

僕がこの子に対していろいろ思うのはいつもいろいろストレスフ

ルに構われすぎるからなんだから。

というよりも子供に対してこんな理屈を叩きつけるのはただの嫌がらせでしかないから止めておくとして、さてどういう答えにしようか。

今考えたみたいなのをこんこんと説き伏せたら泣き出すことまぢがいなしだなあ。

性ホルモンに影響された本能のようなものなんて夢見る乙女には悲しすぎる現実。

たとえそれが事実に近いものだったとしても、理想は理想のままできさせてあげるのが大人のお仕事。

小さいころからおんなじようなことをぼんやり考えていたところにそういうのを知って「へー、そういうもんかー」って納得しちゃったような僕にとってはあたりまえのことだとしても、それをメルヘンチックなこの子に押しつけることはない。

ふーむ。

「……………」

「あ。響ちゃん、枝毛」

なんか髪の毛触ってくるんだけどこの子……。

……考えるのめんどくさくなってきたから無難でいいや。

適当に掘り起こしたどっかの記憶からそれっぽいことを言ってみるかそう。

どうせ君も別にそこまで真剣に聞いたわけじゃないんでしょ？

「……僕もしたことがないから分からないけど、たぶん。たぶんだけど、少なくとももしたいと思ってるものじゃないと思うよ、恋というものは」

「……………」

首をかしげてお口もくるんとしているかがりはかなりレアでおもしろい顔。

いつもこれくらいなら僕も気軽に近づけるのにな。

この子には1日中でも適当な妄想をして過ごしてもらって無害で居て欲しいところ。

「たぶんだけど。……人を好きになるって言うのは、みんなが言っているように出会いを探したり好きな人を見つけたりするものじゃないんだ」

僕の中にある言葉をひとつひとつ丁寧に取り出してみる。

「近くにいる誰かを見ているうちに……あるいは初対面でか途中からは知らないけど、『気がついたら好きになっていった』。『自分がその人のことを好きになっていくって気がついた』。そういうものじゃないのかな、好きって言うのは」

「……………」

ぽかんと口を開けている下条さん。

そのお口から僕の言葉を吸収しているんだろうか。

『好きになろうとして好きになる』とか『良さそうな人と恋をしてみる』とかはよく言うけど……その漫画でもあったけど。でもたぶんそれは『恋に恋している』っていうものなんだ。それは本当の意味での好きとかじゃないって思う」

ちゃんとそのお口から吸収できるように言い含めるように。

「その相手じゃなくて恋っていうもの自体を求めているんだったり、恋をしているときの自分が好きっていうのだったり。それとも恋をして浮かれている気持ちがいい状態が好きなんだったりするのかもしれない。でも僕は、それは恋とか愛とかじゃないって思うんだ。恋とか愛とかはそんなに即物的な物じゃないって思いたいんだよ」

「……………」

恋愛に酔うとか恋は盲目とかってよく聞くしな。

恋愛依存症とかあるくらいなんだからそうなんだろう。

お酒みたいに一晩で抜けてくれたりしなくって何年も持つてしま
うのが余計にたちが悪いもの。

吊り橋とか人質のあれも有名だし、人は単純だからとりあえずどきどきするとそういう酔いを起こしやすいんだだろうな。

つまり人類は総じてみんなちよろいんだ。

そうじゃなければここまで繁殖できていないだろうし。

しかも適齢期の男女だとそれに酔ったせいで人生の方向を大きく変えることにもなる。

慎重に越したことはない。

肉欲っていうものは本能には逆らえない。

でも僕はやっぱり、そういうのに振り回されて大切なことが決まっちゃうのは違うって思うんだ。

この子に残酷な現実を突きつけるのは止そうって思ったけども、でもやっぱり恋したいから適当な男子学生と……って想像するとなんだかもやつてするんだ。

この先ずつと、この子自身じゃなくってこの子の体……顔とお胸とおしりが好きだからって男たちから告白され続けるのがわかりきっていて、なのになちよつと頭が軽い感じのこの子なんだ。

適当にごまかすにしても多少は言い含めておかないとお尻まで軽い都合のいい女ってやつになっちゃいそうで不安。

それでも本人が幸せならいいんだけど……女の子だからそうじゃなくなるのだからあってありえるしなあ。

どうせ女の子に擬態するためのラーニング目的での繋がりだから用が済めばフェードアウトする予定ではあるんだけど、それでも知り合いになっちゃったんだ。

せつかくならまともな同級生を、良い人を見つけて欲しい……というのは年上のおせっかいかもな。

でも僕がそう感じちゃうんだからしようがない。

娘を持った父親の感覚が少し理解できた気がする。

肝心の僕が、その娘な年頃に戻っちゃってるけども。

「……………」

あれ、まだ僕の言ったこと飲み込めない？

結構経ったんだけどな。

そう思って彼女を見てみると……なんでそんなに顔赤くしてるの？

この部屋そんなに暑いかな。

僕の幼女ボディは結構暑いのも寒いのも平気らしくってなんとも

なっていないけど、かがりはなんか真つ赤だし暑いんだろう。

もー、子供だなあ。

ぴっとリモコンを操作してやる。

これも年上の務めだ。

「……………ふえ」

電子音に変な鳴き声を発して反応するのがおもしろい。

口をおにぎりみたいになっているかがりが普段よりも良い感じ。

今伝えたことをどのくらい聞いててどのくらい理解できたのかは分からないけど……ちよつとお花が好きだけどお馬鹿ではないから、ほんのかけらくらいは人生の役に立ってくれるだろうって思っておこう。

じゃないと言つて損したことになるもん。

それはなんか嫌じゃない？

「かがり？」

「ひゅいつ」

僕もよくびつくりして変な声出るから気がつかないフリをしてあげる優しさを発揮する。

僕のはいつもボリウムが低すぎてほとんど聞かれていないらしいけどこの子のはでかいな。

「これも僕が読んだ本や映画や人が言っていたことの受け売りだけだ。 わかりやすく言い換えると」

今度はちゃんと聞いてね？

できるだけ簡単に言つてあげるから。

そう思つて彼女のベッドの上でちよつとだけ膝立ちになった僕は、くるんを少しだけ上から見下ろす感じに……しようとしてバランスを崩しそうになつて両手を着いたらなんか彼女の肩に手が乗つてたらしい。

あ、ごめん。

でもこれ、さつきと逆パターン？

僕、そんなに復讐したかったのかな。

まあたまには圧迫される身にもなつてみたほうがいいって思うよ

?

相変わらずに真っ赤な顔と三角形に開いたままのお口。
見開いたままのお目々。

少し垂れた感じのそのお目々はなんだか潤んでる。

花粉症？

いや、でも今真夏だしなあ。

……もしや……眠気を我慢してこんな感じになってる……？

……もうちよつとがんばってよくるんさん……せめてお勉強の時
以外はがんばってよ……？

「ふとしたときに顔が浮かんでくる人。いつでも見ていたいという
人。その人がどれだけ喜んでいたり悲しんでいたり輝いていたり
黒ずんでいても、それでも見ていたい人」

青春的な衝動だけで告白してくるような輩じゃない人のことだよ

？

ちゃんと分かってね？

お願いだから……本当、心配だから……。

「たとえば他のすべてを捨ててでも。何時間も何日も何週間も考えて
みても、それでもその人だけを見ていたいって思えるような人」
「……………」

じーつと僕の目に合い続けているかがりの瞳。

……ちゃんと理解してくれてるかな。

こう言っておけば「情熱的な告白だったからオツケーしたの！」と
かにならないはずって思いたいんだけども。

「そんな人が見つかれば、その人に対して抱いている感情が『恋』とか
その先の『愛』。　そういうものじゃないかな。　そう言いたかつ
たんだ。　だから今すぐに探すものじゃないよ、きつと。　分かつた
か？」

「ひゅっ」

……これくらいの表現でオーバーヒートしないで欲しいんだけど
……まあくるんさんだししようがないか。

「君の人生はまだ始まったばかりなんだ。　今焦らなくなつてお気に

さすがに白ばかりだと色気もないからと手に入れた大切な逸品とおんなじ。

なんかおんなじだと気分良いよね。

でも風邪も引いちゃいそうだな……とりあえず部屋が冷えるのを待とう。

あんまり治らなそうだったら冷蔵庫へ失礼して氷とか、それでもまずそうなら救急車だ。

僕の頭は高速に回転して熱中症に関する情報を引き出す。

僕の取り柄は無駄に豊富な知識だ。

「かがり」

「へ……平気。ただ少し……と、とにかく平気なの」

受け答えはちゃんとしている様子。

でもしつかり見ておいてあげよう。

でもやっぱり中学2年生とは思えない体つきと中学2年生とは思えない頭の中身なこの子にこういう話は早かったみたい。

精神年齢そのものは決して幼いわけじゃないんだけどなあ……なんていうかとかくふわふわしてるんだよなあ……この子のお父さん、絶対に心配してるよなあ……僕でさえこれだけ心配なんだから。

同時期の知り合いなゆりかと比べても、心と体の発育が正反対。

個人差つて馬鹿にできないな。

「済まない。僕でもよく分からないことを偉そうに」

冷静になってみれば僕もけっこうに恥ずかしいことを言った気がしないでもないから今のうちに言っておく。

こっぴड़ずかしいといつかなんというか……借り物の言葉だからつてちよつとクサかったかも。

恋愛経験すらゼロの僕が言っていることじゃなかった。

やはり聞きかじりでは説得力がないんだろう。

「……………」

でも、顔を真っ赤にして苦しそうって……もしかしたらこんな小さい僕がとっても理屈っぽいこと言っているからツボに入っちゃって笑いをこらえてるのかもって思えてきたな。

……人は見た目。

この、何を言っても説得力のない感じが悲しい。

やっぱり男に戻りたいなあ。

頼むよ魔法さん。

「かがり？」

「ひやいつ、……………うるさくしてごめんなさい」

どうやら自分の声量がそのお胸程度に他人より大きいってことに気づいたららしい。

「かがり」

「ひやひっ!?!」

びくってなってくるんってなるかがりが見ていておもしろい。

「冷房なんだけども」

「はいっ！ 私もたぶん、……………え？

れい、ぼう……?」

む。

この反応……もしかして今どきの子は「エアコン」じゃないと通じない？

「エアコンのことだよ」

「え、エアコン……」

「うん。とにかくもう1、2度は下げたほうが良いと思う。これ

だけ外が暑いんだ、数字で出ているよりも冷えないんだよ」

「……………」

「熱中症は怖いからね。気分は悪くなっていないか？」

「え、……………ええ……たぶん……?」

「そうか、なら良いんだ。あと今気がついたんだけど、たぶん寝ているときに顔に風が当たっているよ。風向きは夜だけでも変えた

ほうが良いと思う」

「……………えっと……………はい……………」

意識ははつきりしているようだし、だんだんと赤みも収まってきているから大丈夫だろう。

良かった良かった。

「それで、どうかな」

「えっ……ど、どうって」

「君が聞きたがっていた恋愛について……普段人に話したりしないから分かりにくかっただろうけど、とにかく言ったよ。今みたいな感じで良かったか？」

「あ………え、ええっ！」

ちよつと元気になってきた下条さん。

ぶんぶん顔も振ってるし、きつと勉強とおやつのとあとで眠気が来ちやつてたんだらう。

ほら、中途半端な眠気で寝ちやうと体が火照ったりするからきつとそれなんだ。

僕も伊達に20を超えていないんだ。

そのくらいは分かる。

「……あのね？ 今の……恋や愛について語っている響ちゃん」

ふうつと息をついてぱつと上げた彼女の顔は、すっかり元通りだ。でもまだちよつとだけほつぺたが赤い。

「……その………そう、映画。映画とかの良い場面で静かに語りかけているワンシーンみたいって思っで。それで………その。私、とつても………どきどきしちやつていたの」

「そうか」

この子つてそういうの好きだもんな。

「………そうなのね。………響ちゃん………、

いつも。………そう。そういうものが、こ。………こつ………」

ぶつぶつ言いだしたつて思つたらふと目があつて、ぱつと後ろを向いちやつてまーたぶつぶつ言つてる。

もう女の子たちのぼそぼそには慣れたよ。

「ぴびぴび」

「さあ、かがり。勉強の続きだよ」

「こい、………え？」

「え？」じゃないよ………僕が何のために来たのか、この子もう………忘れちやつてたんだらうなあ………。

「来たときから言っていたように今日中に2科目。そのうちの今分
かっているところまで、つまりは自力でできる分だけをなんとか
片づけるぞ?」

それくらいのパースでやらせないと自由研究とか読書感想文とか
いう2度と触れたくないトラウマ的な宿題が片付かないだろうしな。
でもかがりはそんな僕の気苦労も知らないで、多分だけどせつかく
のおセンチな気分を害されたことにぶんすかとし始めたらしい。

「……………もうっ、響ちゃんの鬼! あと鈍感!」

「?」

僕、すっごく優しくなかった?

あと室温と体温の変化に敏感だったよ?

「……………とにかくひどいわっ! もうちよつと感傷に浸らせてくれて
もって……………」

「感傷? なにを分らないことを。宿題からは逃げられないよ」

そうやって隙あらば雑談に持ち込もうってするんだから。

「……………もうっ……………」

きっとメルヘンからリアルに引き戻された怒りだろう。

僕はそつと、僕のお皿に載せてあつて一口しか食べてないお菓子を
譲ることで機嫌を直そうとした。

とんとんとん。

机の上に良い感じの音が響く。

「響ちゃんはマジメさんのねえ。 どうせ明日も使うのだからそのままが良いのに……」

今日終わった分の宿題とか使ったものとかを整える僕にケチを付けるかがりさん。

こういう分かりやすい演技とか儀式みたいなのは達成感を感じるためには必要だって聞いたことがあるんだ。

わざとらしいのもいつもじゃなければメリハリとなる。らしい。

僕は普段からこんなことはしないけど……この子が心配だからなんとなくでしてみた。

「おつかれ。 君が今日がんばったおかげでこれだけの……」
……別に多くはないかなあ。

効率が良いとは言えない感じのノートの使い方をぺらぺら見ながら考える。

夏休みって言うか同じ学校の同級生なゆりか情報だと、ここをやっておきなさいっていうのは期末試験が終わったときに言われてたらしいから、実際には2週間程度じゃなくて1ヶ月くらい経ってる宿題。

その1ヶ月のあいだ1行もやってなかったのが今日だけでこの量。そう思うとすごい。

えらい。

それをとづくに終えてるゆりかとか、さらに言えば高校受験のためにがんばってる子とかはもっと偉いんだけど……こういうのは人と比べちゃ駄目って知ってる。

こういうのはその子を基準にしなきゃいけない。

僕だって学生の頃先生から「今日はどうしても学校で人とおはなしできていましたね。 でも他の子はあなたの何倍の時間楽しそうにし

ていたから明日からもつとがんばりましょうね？ お友だちはたくさん作りましようね？」とか言われたら不登校になってただろう。

だから人と比べちゃいけないんだ。

ニートって言う人と比べられない存在な僕だからこそその配慮でもある。

「問題集系の……割近くを片づけられた。初回でこれは大戦果だね。基礎とはいえ、このペースはいい。この調子だよ」

これでもかというくらいに褒めちぎる。

まあ今日はこの子が「これならやってみても……」って言うところだったし簡単などころだったしで他の日はこうは行かないだろうけども。

でもけなすよりは褒める。

よつぽどバカにした褒め方じゃなければ誰だって褒められる方がよいよね。

ああいや、でも世の中にはなじられる方が嬉しいって人もいるのか。

今の僕みたいな子供にバカにされたいって言う人もいるくらいだもんね。

この子も僕から「ばーか」とか言われて喜ぶんだろうか。

……喜びそうだからやめとこ……毎回罵倒を希望されたら僕が困るし……。

「ふう……………」

はいつくばるようにして机に乗っかりながらだるだるしているかがり。

でも完全には体重を乗せきれないらしくって微妙に浮いている上半身。

胸があると大変そうだなあ……ベッドに寝そべってスマホとか漫画とかつらそう。

僕にはこれっぽっちも縁のないことではあるけど。

うつ伏せに寝るときには男のときと全くおんなじだからこの上なく便利だからいいけどさ。

「……………」

「学校とかでお友だちからそういう目されるのよ。　なんでかしらね？」

僕の目線に気がついたらしいかがりは、特段に隠すわけでもなくだるーんとしている。

メロンさん。

胸。

おっばい。

どのくらいが良いかって言われたらやつぱりちよつとは欲しい。

だって僕の心は男だもん。

邪心がなくなつて目の保養つてやつなんだから、かがりほどはいらなけれど欲しいものでしょ？

せめて目で楽しめて手で楽しめるくらいには。

こんな不便な代償が小数点以下は悲しすぎる。

女の子にさせられている以上、せめて下に無い分を補えるくらいには特典が欲しいんだ。

だってなんか寂しいし。

なまじ整いすぎて顔とか幼児な体とか強い光で発光してるように見えちゃう長い髪の毛とかは、誰にも注目されないで静かに生きてい僕には不要なんだもん。

ちよつとくらいの特典くらいいいじゃない？

「でも響ちゃんってほんとうにスパルタね……思っていたより厳しいわあ」

そう？

塾とかで教えてたときの僕はもつと厳しかったよ？

だってお金も責任も絡むんだもん。

今みたいに学生同士って立場だからこそそのいい加減さだ。

まあ僕、学生でも社会人でもないニートだけど。

職業欄には「無職」だ。

「嫌か？　嫌なら」

「もちろんそう頼んでいたのだから文句はないのよ？」

文句があつたらこれつきりにしたかったのにな、残念だ。

「ないのだけど、でももう頭と動かしていた指が動かないの……学校の外での勉強ってこんなに大変だったのね……」

そりゃあ授業とは違ってひたすら問題解いてもらったからね。

集中力をなんとかして続かせて、そのあいだずっと書き続けてもらったから。

でも毎日10分ずつとかだったらすんごく楽だったんだよ……う？

1時間でも30分でもなくって、たったの10分で良かったんだよ……？

「私、受験のときはこんなに大変だったかしら……」

くるん？としているくるんさん。

一応の受験生だったらしい。

そういうのを雑談のあいだに聞いた。

さぼることをあんまり知らない小学生だったからこそがんばれたのもね。

受験の初めてが高校じゃなくて良かったタイプの子だ。

けど、なんだかんだで夕方。

朝からなんだから、そりゃあ誰だって疲れる。

逆に言えばこの子だって、がんばりさえすればこのくらいできるということだ。

普段はがんばらない、がんばれないだけなんだ。

基礎的なスペックはこのくらいあったとしても勉強って体力が無いと難しいよね。

単純に机に向かう体力とやなこと続ける体力と、見られてなくても自分でやる体力。

心の体力。

MP的なものだ。

それが足りないのとどれだけががんばってもいつもの僕みたいになるーとなるのはしょうがない。

筋トレとおんなじで地道にやるしかないんだ。

たったの1日だけだけど、それでもこれだけやれた達成感はあるは

ず。

これが君の今後に効く……と良いね。

なあに、まだ中学2年生だ。

世の中大人になってから本気出す人もいるからなんとでもなるよ。

僕だってまだまだ本気出してないからニートなんだし。

「君の場合はこれっぽっちも手をつけていなかったのが原因。これからはがんばるんだ」

「うう……反省しているって……」

なんか僕の認識外でぶつぶつ言ってたから責任の所在は明確にしておく。

10も年上の生産性なんてないニートには言われたくはないだろうけど、そのニートに教えられてるんだからこれくらいは良いよね。

「響ちゃんは厳しかったけど、おやつをエサに釣られた気がするけれど……ありがとう。おかげでなんとかかなりそうって思えてきたわ！」

「そうか、よかったな」

そうじゃないと困るもん。

この子も僕も。

最後の方なんか机に突っ伏しながらだったくらいのだるだったから、気力をなんとかするために1ページでひとつまみのお菓子をあーんとかしてあげたからね。

この子の方から「してくれないとやだ」って言ってたから事案じゃない。

なんでか知らないけど僕の指まで食べようとしてたのは幼女じゃなければ事案だった。

やっぱり女の子はスキンシップが好きらしい。

僕の指でお菓子をつまんでできるたびに「褒美として直接口に入れて欲しいって……子供か。」

ただ手渡すのとじややる気の上がり具合がまるで違ったし、ある意味安上がり。

でも僕結構に潔癖だから早く指を消毒したくて困ってるんだ。

だけど人の口の中ってけっこう熱くって唇って柔らかいんだなって思った。

この歳になつての初体験。

「……響ちゃん、そのお」

お願いをするときの声の出し方になって、上目遣いになって体を傾けてのぞき込んでくるくるんさん。

……この子のこういうのはあざといとかじゃなくて天然のもの。

オーガニックで有機栽培なんだ。

勉強なんかできなくなつてなんとかなるだろうって気がする。

愛嬌って大事だね。

「できたらまた、明日とかあさつてとか……いえ、響ちゃんに合わせるわ！ でも、その、えつと……ま、また今日みたいに……お願いしたいだけ……」

今日の戦果が相当に嬉しかったらしい。

綺麗に積んであげた宿題の山をちらちら見ながらせがんでくる、これまた珍しくしおらしいくるん未満さん。

「……あたりまえだろう」

でも、この子は甘くし過ぎるとダメなのは分かっている。

僕みたいにほつといたら墮落するタイプなんだ。

第2第3のニートを再生産するわけには行かない。

僕は心を鬼にする。

「響ちゃん！ それ、女の子がしちやいけない顔!!」

「知らないね」

なんか気合を入れたらそれっぽい顔になつたらしい。

でも僕は女の子じゃないから平気。

男だし幼女だし。

……ん？

そういえばこの体になって真剣な顔をしたのは初めてかもしれない。

そういえばそういえばで鏡とか見るのは髪の毛が綺麗かどうかとか服がよれてないかとかだけ。

後は体を観察するときくらい？

今の僕自身の表情とか気にしたことなかった気がする。

……帰ったらいつもの眠そうな顔がどうなっているか確かめてみよう。

だって、いつもならイヤだっていう意思表示をしても「あら響ちゃん、眠いの？」って誤解されるんだし。

「なら目が覚めるようにちよつと離れたところのお店に行きましよう」だとか「なら目が覚めるようにいろいろなフアッションを試してみましよう」だとか屁理屈をこねられることになるんだ。

だからこそこれだけの苦勞をしているわけだ。

だからメモリーに残ってるはずの表情を再現してこのくらいなら眠くなさそうって見てもらえるようになりたい。

「とにかくくだ」

指を立てて集中させるテクニク。

「明日から連続……は疲れて効率が悪くなるだろうから、毎日ではなくても明日を含めて来週までに3日くらい。その3日で集中して片づけないと残りの宿題がすべて白紙になってもおかしくない。

もちろん今日みたいに見てあげるとも」

この子はちよろい。

おだてたらなんでもしてくるのは分かってるんだ。

だから気分が乗ってるだろう近いうちに……学校の先生がため息をつかない程度に「なつやすみのしゆくだい」をさせておいてあげるんだ。

僕なりの優しさだよ？

「……響ちゃん、ちよつとはその……私のこと信用してくれても」

信用……？

いやいや、絶対しないでしょ。

もし自主的にするんだったらこんなに残念なことにはなっていない。

「まずは明日だね。明日も空いているよね？」

「え、ええ……あ、待って頂戴明日は」

「さつき君自身が予定なんて無いと言っていたから大丈夫だ」

さっと目を逸らして早速に明日がめんどくなった様子だからたのみかけよう。

「朝のもっと早くからじゃないと間に合わないかな。　なら朝食のあとすぐに向かおう」

「で、でも、それだと響ちゃんに悪いし」

「それから休憩を挟みながらこのくらいの時間までやろう」

「でも、響ちゃん病み上がりだって」

「大丈夫だよ。　ここまでの道は覚えだし、僕は朝は強いんだ。　僕が遅れることはないはずだから安心してくれ」

でもでもだつてだつてやつぱり。

大人な僕にその手は通用しない。

「でも私が寝坊とかしてしまつたら迷惑を」

「ああ、すっかりアラームで起こしてあげるから心配はないよ。　寝坊したらインターホンで起こしてあげるから安心していい」

遅刻の可能性を事前に言えるのは偉いね。

でもすぐに遊ぼうとするのは……お兄さん、良くないって思うよ？

「ああ、親御さんにはきちんと伝えておいてくれ。　僕が教える格好

になっているんだから菓子折とかは必要ないよね？」

確か友だちの家に行くときには相応の手土産が必要だった気がする。

最後にお邪魔したのは多分中学生も最初の頃くらいだったから全く記憶にないんだけど、きつとそうだ。

礼節ってやつは大切。

丁寧に越したことはないもんな。

でも今回はこの子のためだつてご両親も理解してくれるだろうか
らしいや。

何よりこの後にわざわざ買いに行くのたるいし。

「後は、……このくらいいいか。　でもかがり、今言ったことを忘れてたりしないか……？　あとでメッセージで再確認したほうがいいか

……？　今ここで適当な紙に書き出してあげた方が」

「ひどいっ!?! 私、そこまで忘れっぽくはないのよ!?!」

ひどくない。

あたりまえのことを確認しているに過ぎない。

「それに響ちゃんって、どうしてこういうときだけ饒舌なの!? いつもはさよちゃんとおんなじように可愛らしく静かにお話しするのに?」

さよちゃん?

……文学少女さんか。

なるほど、この子にとってはほつぽつとかたどたどとかで抑揚のない話し方は小動物的に映っているのか。

まあ確かにあの子は庇護欲をかきたてる感じだもんな。

庇護欲を他人に対してすぐに覚えそうなりさりんさんとは大局的な存在だ。

僕もこの見た目で僕から会話しないからきつと似た印象なんだろう。

「これが僕の普通だよ。 厳しくも甘くもない。 君だって普段、服とか恋とか友人のいろいろについて話すのが止まらないだろう? それだけ僕も熱心なんだ」

「でも……」

「それに、次の試験で赤点を取ったりして塾に通わせられたいか?」

「……塾の話は嫌いな。 私、どうにかして……受験当日もたまたま得意な問題がたくさん出て。 だから運が良くってたまたま今の学校に入ったくらいには勉強が」

「そのいいわけは通用しないよ。 運だって最低限の地力がなければ通用しないんだから」

僕は調べた。

この子たちの学校のこと。

中高一貫の私立。

特別に名門というほどじゃないけど、それでもある程度の学力がないと入れないところなんだって。

たまたまだろうとなんだらうと入ったからにはその程度以上の頭はあるはずだって。

「……宿題、きれいに終わらせられたら何かお礼をしないといけないわね！」

……ぱつと顔が明るくなったと思っただら唐突に抜かしてくるんさん。もう先延ばしにするのは諦めたらしく、その次にしたいこと考え出したらしい。

便利な頭してるよなあ。

「なにがいいかしら……響ちゃんが喜びそうなもの……」

「僕は別にいらないよ？」

「そういう訳にはいかないわ？」

だって僕、ほんとうになんにもしてないしな。

ただごろごろ漫画を読んでただけだ。

ただこの子の都合に合わせてこの子の家の子のこの部屋でこの子の目の前で監視される……勉強を監視しているのは僕の方だけど、実際にはこの子が誰かに傍にいて欲しいだけだもん……それだけだもん。

「ふむ……」

そう考えてみると。

普段みたいに連れ回されてからの服屋で店員さんと一緒になって脱がされて着させられてまた脱がされてまた着させられてだったり、お昼とかを食べた後でのカフェとかで女の人だらけな空間でスイーツとかを甘いものをたくさん食べさせられてうんざりするよりも、そのあいだずっとひたすらにとめどなく話をされるよりも……ずーつと幸せなんだって気がつく。

寝転がっていられるし人目にさらされないし天国と言っても過言じゃないかも。

「……………あっ！ そうだわっ!!」

そう唐突なポリウムで叫んだくるんさんの表情がいつもの……僕をかわいく仕立てようとしているときのものに戻ってしまったている。

なぜだ。

一瞬前までは確かに、平穏で安寧で天国みたいな状態になっていた

のに。

僕の中に一気に緊張が走る。

じわっとにじむ手汗。

「いつも思っていたのよ！ 響ちゃんって、せっかくのそのきれいで長い髪の毛……きつとお母さんとかお家の人にお手入れしてもらっているのよね？ ときどき響ちゃん自身がだらしなくしているとき以外は痛みとかもなくって嫉妬する気にもなれない、その美しい銀色の髪の毛！」

口の回転が速まっている。

非常によくない兆候だ。

なんとかしなければならぬことだけが理解できる。

「かがり」

「響ちゃんを響ちゃんたらしめているその輝いている髪の毛！」

「かがり」

「いっつも下ろしたままだし恥ずかしがって隠しちゃうくらいだし……そんなのもつたいなさ過ぎるって思っていたのよ!!」

机をばんつとされてびくつとなった。

こわくないけどこわい。

脅すつもりがないのが分かっているてもこわいものはこわい。

ニートと幼女を舐めないで欲しい。

「だからかがり」

「お家にもきつとかわいいリボンとかいっぱいあるんでしようけど！」

そんなのないよ？

「だって響ちゃん自身がかわいいものね、それに似合うし、だけど今はせっかく私と一緒にいるんだからこういうときくらいたまには結ってみたり髪留めとかつけてみたりしてくれてもいいんじゃないかしら！ お母さんとかメイドさんとかとはきつと違うセンスで可愛らしくしてあげられるって思うしその自信はあるのよ響ちゃん！」

「かがり、落ち着」

「大丈夫よ！ 心配しなくなっただけでお嬢さまっぽい髪型とかにはしない

わ！ 響ちゃんはそう言うのが苦手だつてこの前言っていたものね！ 大丈夫、ちゃんと覚えているわ！ 他の子の髪の毛を上手に整えてあげるの好きなよ私！ まかせて!!」
任せたくない。

「……そうよ！ まずは今日の分のお礼が必要よね！」

「かがり、僕は何も要らな」

「少し待って頂戴！ 今すぐに試してみましよう！ 大丈夫、私があるからいっぱい試せるわ！」

対話を試みるも僕の頭と口の回転がかがりのそれに遠く及んでいない。

……違う、僕はそんな心配なんてしてないんだ。

だからにじり寄ってこないで。

お願い。

僕自身の性格と体格差とで目の前に来られると動けなくなっちゃうの。

「かがり……頼む、僕の話を」

「心配は要らないわ！ 今の響ちゃんが響ちゃんらしく……そうね、わたしが知っている響ちゃんに似合う髪型とかを一緒に探してあげるわ！ 待ってて！ 今すぐだから！」

唐突すぎてぼけつとして動けなくなっている僕を置いてきぼりにして……彼女は僕の両肩に体重を乗せて僕を縛り付けて。

「待っていて頂戴？」ってぼそつと言い含めるとさっきの本棚の雑誌のところをこそそそと漁り始める。

何冊かをぱつと出してぱらぱらと眺めてなにやらとぶつぶつしながら吟味している。

……かがり、それは僕のためとかお礼のためなんかじゃなくって、いつもどおりに君がしたいことじゃないの……？」

なんでお礼とか言いながらもその趣旨を忘れちゃってるの……？

鶏さんに負けてるの……？」

……ただでさえ女物には半分くらいしか慣れていなくて外では恥

ずかしいのに髪の毛まで……かがり基準で「かわいい」感じにされて
覚えさせられて「次からはその髪型で来てちょうだい？」とか言われ
たらどうしよう……？

「響ちゃんはせっかくの長髪を活かさないともったいないわ。 だか
らミディアムまでののは参考にしないで良いから……」

不穏な単語が聞こえてくるし……やっぱり勉強見てやるの止め
よっかな……？

ちよつといいかなくて思ったくらいに僕へのメリットを羞恥心つ
ていうデメリットが飛び越えそうだし……でもなんとなくだけど口
約束でも1回約束したのを「やっぱやめた」っていうのはやだし……。

「響ちゃんっー！」

「……………」

最近覚えた「どや顔」というやつをしている彼女はたいそう満足げ。
そうして雑誌を何冊かと髪留めとやらが入っているらしきでかい
ポーチを両腕と両方のお胸を使って包み、ぺたりと座り込んでいた僕
の頭上から僕にとつての死の宣告をする。

スカートの裾から見えそうなのも気にしない彼女は仁王立ち。

そうして「ふんっ」と意気込んだかがりの胸元から1個のポーチが
ぽとりと落ちてくる。

「……………」

それは僕の、最近のクセで女の子座りをしていたふともものあいだ
の形に凹んでいるスカートの上に綺麗に収まっていて、僕は失敗した
ことを悟った。

……僕、これ以上女の子になっちゃったら戻れなくなるからほどほ
どにお願いな……？

僕はそう願って意識を放棄してされるがままのお人形さんと化し
た。

後のことは無事に家に帰ることができたら考えよう。

お人形さんなあいだは適当なことを考えておこうって。

大丈夫、なんにも見なかったことにするのは得意だから。

21話 関澤ゆりか (1) 1 / 5

「くあ……」

体のサイズに比べて大きなあくびが出た。

全然成長してないのはこの数ヶ月で確認済みなのにこの眠気。

ちっちゃい体だからしょうがないか。

出てきた涙をふきふきした先にはいつも通りにつけっぱなしのテレビ。

どの局にしてもとめどない音と光という情報が流れ出ているにぎやかさ。

別に見ているわけじゃないんだけど、こうして誰かの姿をちょうどいい音と距離で聞いているっていうのはとつても安心するから居間に居るときはほとんど付けているんだ。

あつちから一方的だから興味を引かれたときだけ注意すればいいというのも良いよね。

だからそんなに持たなくてももう何代目かになる何台目。

わりと新しいめのテレビのきれいな画面に映っている人たちを眺めるひととき。

……あんまり良くない習慣って言うのは知ってる。

こういうの、人寂しいからするものらしいしな。

でも人との接点が無いんだからしょうがない。

春まではひとりでひきこもってニートしてたんだから僕のせいでも、春からは幼女になっちゃって誘拐犯になっちゃうから僕のせいじゃないからしょうがないんだ。

でも最近はがんばってるんだよ？

JCさんたちな知り合いが4人になっちゃって予定が重なると毎日お出かけたもんなあ。

ちよつと前だったか何年前だったか、何週間かじとつと引きこもっていたら会話ができなくなってたことがあったけど今はそういうことないし。

言葉って使わないとダメになるって言うのは本当だったらしい。

「あー」とかすらかすれるって言うかどうやって声出すか一瞬考えた
りするレベルにもなったし、なんならちよつとでも早口だと聞き取る
ことすらできなくなるっていうおっそろしい経験もしたし。

あれはほんとうにやばかった。

さすがの僕も危機感を覚えたくらいだもんな。

母国語が聞き取れないって言う危機感はやばかった。

めんどくさくつても人と話さなきゃ行けないんだなーって思った。

「……………」

気がつけばいじいじしている長い髪の毛。

さわさわすると気持ちいいそれを無意識にくるくるすべすべして
いる僕。

だつてちよつどいいところにあるし触り心地いいし安心するし
……せつかくもつきり生えているんだから使わないともったいない
し。

うん。

モフれるうちに存分にモフっておこう。

男に戻ったら多分消えるんだろうし。

ひと晩でもつきり生えたんだから戻るときもひと晩ですつきりす
るに違いない。

「……………」

……これだけ生えた代償とか言つて生えなくなるのとかは止めて
ね……？

この歳ではげたら悲しすぎるんだよ……？

僕も男だから薄毛の悲惨さは僕自身のことのように意識している。

男つて案外に繊細だよね。

意識を僕自身からテレビに向け直してみると、さっきまではまじめ
な話題をしていたはずなのに視聴率の取れそうな芸能ニュースに
なっていた。

だからぼんやり考えていたんだな。

芸能人のだれがどうしてどうなったっていうニュースって言う名
前のバラエティ。

この体になってかがりになり込まれるまでの僕だったら「つまらないしくだらないしどうでもいいしさわがしいし」ってさつきと切り替えていただろう時間。

でも彼女に叩き込まれたおかげで、そこに移っている人が誰なのかってそこそこ分かるようになってる。

だからか気がついたら「ふーん」って思いながらぼーっと見てるときがある。

不思議だよな。

ほんの数ヶ月前まで、こんなのは時間の無駄としか思えなかったのにな。

人ってちよつとしたことでここまで変わるんだな。

まあ男が幼児になるんだから不思議じゃない。

つまり僕はほんのちよびつとだけは普通でまともで常識的な人間に近づいてきたのかもしれないって言っても良いだろう。

容姿と状況は普通にはほど遠いままなのが課題だけでも。

そんなきらきらした世界の人たちは同じ世界の住人のスキャンダルに夢中の様子。

ついこの間まで仲良さそうにしてたのにね。

昨日までの友だちは今日の敵な世界観らしい。

殺伐としてるね。

やっぱりこわい。

有名人って大変だね。

そのぶんのお金とか名誉とかはもらっているとは言ってもさすがにかわいそうって思う。

まったく関係ないことまで「らしい」とか「かもしれない」で好き放題。

僕だったらウソだって分かるようなことも平気でしたり顔で分かったような顔で裏切られるんだ。

こわいこわい。

まちがってもこんな世界なんかに入るもんか。

今井さんにお手々引かれなくて本当によかった。

やっぱりあのときのコネを使うのは控えておこう。

最終手段としては……まあまあアリだっと思うけど。

現状どうしようもなくなったときに電話する相手って言ったら叔父さんかお隣さん、その次に萩村さんたちって順番だもんな。

……どうしようもなくなつたとき。

お巡りさんに連れて行かれたときとか家が火事か泥棒に襲われたとき、あとは急な病気とか怪我。

僕は今まで幸運にもそういうのが……20年以上生きてきても無かつたんだから大丈夫って思うけど、可能性はゼロじゃない。

だからちゃんと少ない連絡先には残しておいてあるんだ。

万が一って言うのは無いからありがたいがるもの。

使わないで捨てる防災グッズ的なものなんだ。

「けふっ」

お昼までに今日のぶんの勉強をみんな終わらせてあつて外出の予定がないもんだから珍しく退屈になつた午後。

こんぶ茶とおまんじゅうを口に運びながらもさもさと過ぐす。

銀髪幼女な外見と黒と白でなんだかお嬢様って服装になつちやつた今日の僕にそぐわないチョイスだけど食べたくなつたんだからしょうがない。

でも、食欲は少ないんだけど甘さ控えめなら意外と量もいけるんだよなあ。

不思議だなあ。

お酒と同じかな？

ああ、お酒を呑む夜が待ち遠しい。

「……………」

静かな室内にテレビからの声だけが小さく映る。

台所を眺めると……そつちにあるガラスの反射で、銀色でもつさりして目がぼんやりしていてほっぺがぷにゅとしていてちっこい僕が退屈そうな顔を向けて来ている。

たまにはこういうのっていいな。

最近はやけに騒がしかったし忙しかったから、こうやってひとりで

ヒマつてのがなかなかなかったんだ。

これじゃニート失格だな。

何かにがんばって忙しいとニートからフリーターに格上げされちゃうんだ。

知り合っちゃってなんだか懐かれちゃった子供たちもとい中学生たちのお世話はあとちよつとだけ続きそうだけど、でも夏休みの終わりが見えて来たから僕はご機嫌だ。

夏休みが終わったらちよつと遠足……じゃなくて遠出をする計画も立てている。

やっぱり僕は普段家で静かに過ごして、たまーにふらつと何日か僕を知らない土地に行くのが好きみたい。

本当は温泉にも入りたいけどなあ……結局男湯か女湯か決められないから行けないしなあ……。

楽しみをひとつ失った悲しみ。

体と心の性別が合っていないと大変なんだってこの歳になって知ったんだ。

そう思うと今流行りの……って言っちゃ悪いけど、ようやく日の目を見るようになって来た人たちに親近感が湧いてくる気がする。

今の僕の現状って性同一性障害ってやつになるもんな。

普通の人に「男だったんだけど魔法さんが少女にしゃがったの」って言っても通じないだろうし。

ちようどテレビでもそういう特集をしているからスマホをすいすいしながらちらちら見る。

……僕って人への興味が薄かったらしい。

だから好きな有名人とか居なくって、だからだからスポーツ選手とかお笑いの人とかアイドルとか……普通の人が当たり前前に好きって言うその対象が居なくって、だからこれまで詰まんないって思ってたんだ。

でも誰の影響でも何でもいいからひとりでも見つける。

見つけたらその人の出ている番組とかニュースが気になるようになる。

そうすると自然とその人と仲のいい別の誰かの情報が入ってきて顔なじみになって、そのさらに顔なじみが増えてくる。

で、そこからお芋みたいになっていくっていうのは、ひとりの友人から知り合いや別の友人を増やしていくっていうのと流れはおんなじだ。

友人。

友だち。

全然居なかったからこうなったんだろうか。

本当に居なかったもんなあ、友だちって。

友達が居ない人の話題になっても「ふーん」って平気だった辺り、本気で人としてやばかったのかもしれない。

高校大学ひきこもりニート時代と僕から話しかけたりしたのって数えるくらいだし。

作れないわけじゃなくって作りたくなかったのかもね。

こう毎日のように誰かと会う生活をしていると「これまでがなんだったのか」って思う。

なんだったんだろうね。

なんで僕ひとり寂しくニートなんかしてるんだろうね。

そう思えるくらいには人として成長したらしい。

だっておしやれっていう概念を獲得したし、立派に女の子として振る舞えるようになってきたし、知り合いもちよっと前の3倍には膨れ上がっているし？

きつと天国に行つたはずの父さんと母さんも喜んでるだろう。

そう言うところがあるのかどうかは知らないけど、あつたとしたら多分。

……その相手が全員年端もいかない女の子だっていうのは……まあ幼女になってるし同学年ってことになってるからいつか……どうせそう遠くないうちにお別れなんだし。

期間限定というのも後腐れがないし悪くない。

旅先での数日だけの関係だと思えば気も楽。

短期間だけでお別れって思えば逆に楽しいものだしな。

幼女から男に戻って社会復帰をするための準備なんだって思っておこう。

「……ずずず………ふは——……」

昆布茶っておいしいよね。

じじ臭……ばば臭い趣味だなあ。

そんなことを思う幼女の見た目の成人男性な僕だ。

◇

◇の思考にノイズが◇◇る。

でも、そのときの僕がそれを自覚することはなかった。

◇

そう言えばなんで僕今日はずっと居間に居るんだっけ？

普段は部屋がメインなのにな。

まあいいや。

僕がテレビの向こうの人たちの顔が分かるようになってきたのって◇かがりのおかげでもあって、かがりのせいでもあるんだっけ。

会う度に何十回も何十分も好きだけ話すあの子だから自然と聞き覚えのある人が増えたんだ。

最初の頃は「はいはい」って流してたけど、どんな人だって10回聞けば覚えちゃうもの。

そんなわけでだんだんと理解できるようになってきて、気がつけばその人は一方的な顔見知り。

そうなるともうその人についての新しい情報を手に入れるのが楽しくなる。

そんなことばっかりしてるからお花畑さんなんだろう。

でもこれってすごいんだ。

まるでぜんぜん分からなかった外国語をひとつずつ覚えていって、あるときに「あ、これ分かる……！」ってなったときみたいな感動ま

であったりするし。

「◆◆◆◆ニュースです」

そんなときに◆◆◆とイヤな感じのテロップとともにスタジオがぶつ切りになって急にマジメな顔のニュースキャスターの人。

「……………いいところだったのに……………」

この瞬間にかがりと言つていそうな言葉が口を突いてくるけど、よく考えたら「別にどうでも良くない？」って思う。

でも良くないんだ。

なんなんだろうね、これ。

しかたない、これが終わってさっきの続きになるのを待とう。

なんなら続きはネットで見てもいいんだしな。

今って便利だよね。

僕はイスの上で立ち上がってテーブルの上でお茶を準備する。

そうしないとクッションを重ねたイスの上からも座高が足りないのがひとつ、熱湯を顔よりも上の位置で操作するのが怖いって言うのがひとつ。

袋からがさがさと粉を出してポットからお湯を注いで今度は梅こ
んぶ茶。

……………あれ？

これ、さつきも飲んでなかったっけ？

「……………」

……………気のせいだろう、気のせい。

でも今度はもうちよつとだけ熱いままで飲もう。

薄いのから◆いの。

◆いのから熱いの。

戦国時代からの常識だつてどこかで聞いた。

「……………」

なーんかさつきから、ざざつと◆……………。

「……………速報です、たった今入ってきた情報です
が……………」

うーん、ちよつと熱すぎたな。

唇が痛い。

僕の猫舌は男のときからだけどこの体は肌も薄いからきつと唇も薄いんだろう。

気をつけないとな。

唇とかべるとかのやけどって何日か地味につらいんだから。

でも不思議だよなあ……この僕が◇◇なんて。

「……………??」

……………なんだろう、これ。

頭が……………ちりちり？

ちみちみする◇◇な？

「……………」

深いことを考えられない。

なんか不思議な感覚。

あ、でも、これってちよつと前に経験した気がする……いつだっけ

？

あ、そうだ。

これって僕がこの体になった◇◇◇◇に。

「……………え？　もう始まって？　……………失礼しました、◇◇長官の会

見の様子を中継します……………」

◇◇◇……………、ざらざらする。

画面はまたまた切り替わって見慣れた政治家さんの顔がどアップで映る。

でもよく分からない。

まるで子供の時に真面目な番組を見るような感じ。

基礎的な知識が全くなって理解できないっていう、知らない言語のラジオを聴いているような感じでもある気がする。

僕は◇◇った。

「……………政府は……………今朝の臨時閣議によって次の……………措置法を……………合同対策本部を設置し、速やかに◇◇◇◇混乱を最小限に抑えるよう……………」
「……………以後は……………した関係各国との連携と……………の救済を目標とし、また同時に国民の皆様にも……………」
「……………また、周知

活動はもちろんのことその第一弾として……………」

「……………」
くらくらする。

……………
◇◇◇◇。

「……………」

僕って誰だっけ。

「……………◇◇以上です。カメラをスタジオに戻します」

「……………」

そうだ、響って言う名前の幼女……………になつてる男だった。

危ない危ない、こればかりはアイデンティティとして大切にしないと。

「……………そこで今回は、周知活動キャンペーンとして、◇◇◇◇……………の方々、を……………」

「……………◇◇、もう準備できているんですか!? ……こほん、失礼しました。それでは中継をつなぎます！フラッシュに……………」

それにしてもこのキャスターの人、新人さんなんだろうけどつかえつつかえだし素の言葉遣いが出ちやつてる。

後で怒られるんだろうなあ……………かわいそうに。

◇◇

◇◇

「……………」

目が覚めるときつて急に物を考えられるからすごいよね。

「？」

なんで僕そんなこと今考えてるんだろう。

まあいいや。

それよりなんだか画面に映っているこの子たちに見覚えがあったんだ。

誰だっけ……………?

そんなに前じゃないような……………?

あのときはメガネだったはずだけど◇な子と、髪の毛を後ろでひと

くくりのポニ◇テールさん。

どこかで見◇覚えがあるような？

なんか印象的だったのは間違いないんだけど、多分僕から一方的に1回くらいしか見てない気がする。

誰だっけ？

確か僕がこの体になって――。

「むー？」

と、記憶を中から掘り出そうとしてやつきになっていると画面のみつこのほうにもっと見慣れた人が居て。

「えー、彼女たちは……として有名な◇◇……として1年ほど前から……」

「今回は彼女たちが……で影響力のある、今人気のアイドルということもあり……」

……あのガタイの良さと高い身長、だけどどこか僕と似た雰囲気を感じないでもない感じの彼。

……◇村さん？

あれ？

……ガタイなわりに優しげな、◇◇………忘れた。

「……………？」

………ああ、萩村さんだ萩村さん。

ついこないだ来ていたDMまがいの◇◇の送り主が画面に映る。

スマホって便利だな。

登◇しておいてよかった。

それにしても最近会っていないからけっこう懐かしい感じまでするな。

連絡はメールでいちおうは取っているけどしよせんデータでしかないし。

ということはこの子たちは……………ああ、思い出した。

僕がハサミに追われていたころ、家から出て駅に向かっていたら萩村さんにばったり会ったんだっけ。

そのときに黒塗りの3台くらいの車から出てきたのがポニーテールの子と学生服で目立つメガネをかけていた子だ。

2人とも高校生くらいの子で……あー、そうだった、結構はつきり思い出せた。

テレビに映ってるのこの子たちだ。

萩村さんも隅っこに映ってるし……お仕事もらえたんだね。

けどなんかアイドルさんたちにしては物々しい雰囲気。

なんなんだろう。

けどそれを目指してたんだろうし、応援してあげよう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

でもこの時の僕の頭は、それより先へは上手に働いてくれなかった。

「なんだか懐かしいなー」「あのときはまだスカートにも慣れてなかったなー」「あとあの日にかがりに再補足されてこうなってるんだよなー」くらいしか考えられなかったんだ。

「……………」

僕は考えられないし認識できない頭でぼんやりしていた。

このときの僕には分からなかったんだろうし……そもそも自分の顔なんて普段は見えないんだから、もうちよっとしっかりできていたとしたって分からなかったんだろう。

でも、このときの僕の目はまっくろになっていた。

真っ白な肌なのに真っ黒な目になっていた僕は考える。

……テレビの前の◇◇◇◇◇のふたり。

この体になって少ししたころ。

たしか暑い日差しから逃げようとぬいぬいしていたころのこと。

◇◇◇が飛んできたころ。

ハサミさん。

それで思い出すんだ。

萩村さんに送迎されていた子たち。

遠くから見た姿と車の中に残っていた良い匂い。

僕のほうから一方的に知っているだけの子たち。

かがりのおかげで今ならあの子たちのが香水で、よく彼女に連れられてデパートの1階とかで試させられることがある匂いの中のどれかに似てるんだって分かる。

「ただいまご紹介にあずかりました◇◇◇◇◇と」「◇◇◇◇◇ですっ！」

◇ 「私たちは◇◇◇◇◇を受けて私が」「私は◇◇◇◇◇したんですにやっ」

へー、そうなんだ。

そう思ってるのに認識できてない不思議。

まるで夢みたいだね、こう言うの。

おかしいのに気がつけない辺りが特に。

でも「にや」とか……こんなまじめな会見でもさすが芸能人、いやアイドルさんだからかキャラを守っているらしい。

それが「けしからん」って言われないう程度にはこの子供たちが必要らしい会見っていうお堅い場。

大変だなあ……◇◇◇◇って。
でも。

「……ん————………?。」

頭がくらくらする。

テレビの画面がなんだか◇◇◇◇している。

「あー……。すみませんですよ、ごめんなさいですよ！ ……え。つ、続けていいんですよ？ あ、はいですよ。 ……マジですかにや、天下の◇◇局なのに……あ、今のはカットお願いしますにや。で、これは◇のせいなので今のはキャラ付けとはふだんの私のキャラクターとはなんの関係も」

あ、なんかこの子供たちのにもダメなんだ。

「まじめな場なのでできるだけ抑えようとはしているんですけどちよつとでも」

「………あああ、写真は!! 写真は………そんなに撮ったらダメですよああ! 今は、今はダメですよにやああん!!! ◇えている今は恥ずかしいですよにやんっ!!!」

なんか悶えてる。

……顔も真っ赤だし声もうわずつてるしで正直こつちの方がやばいんじゃない?

「え、えーつと……相方が騒がしくなってごめんなさい。キャラ付けもあるんですけどそれ以上に急にこんな大舞台は予想外だったのどうか大目に見ていただけると。この子、まだ◇◇ですし。 ……と、見ていただいたとおりに」

「そのとおりです。 ……と同じように、 ……に繋がる◇◇でしたっけ? ……はい、これまで公表が伸ばされていた理由」
そんな大ごとになってたんだ。

でもなんで僕はそれを全然知らなかったんだろう。

◇

「………や、 ……じゃないと、そもそも当の本人ですら気がつか

映画館って独特の雰囲気だよな。

滅多に行かないけど僕は好き。

行くって言っても月に1回程度が上限だろうけど。

だってほら、普段は高いし……。

あ、でも、そっか……レディースデー。

僕は肉体的には女なんだし、来ようって思えば結構お安く……？

ああいやでも子供ってことで安くなることは確かか。

ああいやいやでもでも学生証って言う切り札がないんだ。

「さっすがに封切りしてすぐだから人でいっぱいだねえ。　普段はがらがないのにさ？」

僕の次にちっちゃい子が言う。

「いちばん見やすい席くらいしか埋まらないことのほうが多いのよねー、最近は。　最近はって言っても私が産まれる前からこうだってお父さんが言ってたけど」

「確かに混んでいるな。　ゆりかが取っておいてくれなかったら見づらい席でも取れたかどうかだ」

彼女が言うくらいには混んでるのにびっくりしたもん。

こんなの僕が子供のころくらいが最後じゃない？

ホールのなとところにみんなで立って待つとかすごい人気なのかな。

「でしょっ。　私、期間限定グッズの購入とかで慣れてるからさー、こういうの得意なんだよ！　ほめてほめて響ほめて超褒めて！　私を褒め称えよ!!」

「ああ、ゆりかはすごいな。　助かった」

ぴよんぴよんしてるゆりかがほほえましい。

わず頭をよしよししてあげたくなるけど僕の方が背が低くなっている悲しさが手が引っ込んだ。

「むふーっ！　あ、そだ、響響、私の頭も撫で……ムリか。　背、ひっくいもんねえ」

「それ、君自身にも返ってこないか？」

この子、低身長がコンプレックスだって言ってる割にはその話でよくいじってくる気がする。

僕くらいにしか言えないのかもね……ほら、多分「小学校高学年の子供に負けない」って言えない身長だし……。

「……すっごく返ってきた。うあー。……牛乳、ちゃんと飲んでるのになあ……なんでだろ」

「体格は遺伝と幼少の食事が大きいらしいね。……君は、いや君も、きつと……もう」

中学とか高校でいきなり背が伸びるって言う子も少ない。

けどなあ……平均よりずっと低いこの子にその希望があるかって聞かれたら……。

「言わないでえええ——……」

床は絨毯で色合いは高級感を醸し出している空間。

歩くとぼふぼふとかぽふぽふって感じの足音が返って来る。

そうしてポップコーンの匂いで包まれている独特の空間。

僕はゆりかとその隅っこで、ほんの十数分の時間をつぶすために普段以上に中身の無い会話をしている。

だって今日はミニマム級ふたりだ。

この人混みに飲まれたら息苦しくて仕方ないので意見が一致しているんだ。

「今から観る映画。評判もかなりいいみたいだね」

何日か前に「観ない？」って誘われた映画館での映画。

「観ない」って言うおうとしたけどなんだかんだで来てる僕。

だってほら……かがりの相手に比べたらすっごく楽し……。

「みたいだねー、だからこそなるだけ早くって思ったんだけどね？」

せっかくだし？ この監督の作品も外れは少なくてヒットも多めだしさー、特に最近は。書き込みとかざっと見た感じ今回も期待でき

るみたいだよ？ PVとか観たでしょ？」

「まあね……なかなかおもしろそうだな。僕も普段は来ないけどたまには映画館で観るというのも雰囲気があるからいいね」

「そだねえ。映画館には映画館の魅力があるよねー。まー、本来映画ってそういうものだったはずなんだけどさ？ 私たちが生まれるずーっと前の話らしいけど」

「いつの話になるだ、それ」

「んにゃ、先代のかな？」

ゆりかつてよく適当なことを言う。

それで分からなくなったり飽きたりするとまた適当な返事でごまかす。

でもそれは嘘じゃなくてただの冗談なんだって分かる形になるから不快にならない。

すごいな、そういうのって。

僕にはできないだろうテクニクだ。

とりとめもない会話をしながら壁により掛かって周りの人をぼーっと見る。

この雰囲気、ほんとうに懐かしいな。

最後にこうして誰かと映画館に来たのって、たしか……中学生のとき家族で。

そうだ、寒い夜に父さんの運転する車で……だったっけ。

10年も前のことで今まで忘れていたことも何かの拍子で思い出す。

記憶って不思議だな。

「……………」

「ほよっ」

ふと目を上げると黙った僕を見ていたらしいレモンさんと視線が合う。

だいぶ伸びてるなあ、前髪。

もはやぱつつんと呼べなくなりつつある。

いちど定着したからたぶん呼び続けるだろうけど。

「……………」

「やーん、ねつれっ」

あと、今日は冷房が寒いかもって言ったおかげでいつもより露出が少ないから安心だ。

僕は別にこの子の肩とか二の腕とかおへそとか太ももが見えてたってなんとも思わないけど……でもやっぱり中身が男なもんだか

ない」

この体、味の感じ方とか特には変わってないんだけど、ただただ炭酸が苦手なのが不思議。

なんでだろうね。

「あ——……ポップコーンにはププシだもんねえ。響、炭酸は気が抜けてきたのじゃないとダメだっけ」

「咳き込んでしまうんだ。映画館でそれは悪いだろう」

「そだねえ……炭酸自体は好きだって言うのが残念だね。私もちっ

ちやいころはダメだったなあーそーいえば」

僕、そのちっちゃい頃に戻ってるからね。

「ま、ダメなもんはしょうがないよね」

人のあいだをふたりでぬいぬいしながら売り場へと向かう。

駅とか繁華街とかと違って、人の流れがほとんどないのがこれほど楽だって感激してる僕。

いつもこうして楽に、前みたいにぬえるといいんだけどなあ。

人って無意識で他人を避ける生き物。

でも目線より低いと悪意がなくても、たとえばスマホに意識を吸い取られていなくて視界に入らない。

視界に入らないと避けることもできないわけだからみんなは僕の方へぶつかりに来る形になるんだ。

だから子供が人とぶつかるって言うのがあるんだろう。

子供自身も物理的な視野が狭くって、大人もそんな子供を見る方向な下へなんて視線を向けてないんだからな。

存在を認識していないものに気をつけるなんてできないもんな。

こっちのちっこいほうがぶつかられないように警戒する必要がある。

まっすぐ歩いていたはずなのにいきなり方向を変えたり止まっていたのに歩き出す人とか、思っていたよりもずっと多いしなあ。

悪意がないからこそ予測ができないんだ。

「……………」

「ひびきー、ちゃんと前見てー」

せめて普通の人の視界に入るくらいには背が伸びてほしい。
最低でも普通の中高生くらいの身長。

理想は前とおんなじくらいだけど……どうなんだろう。

「あ、ダメだこりゃ。いつもの響になつとるわい。 すいませーん、
私たち並んでまーす」

この体。

幼女。

成長にはあと数年は待たないといけなくって、場合によってはそれ
すら危ういのが悩みどころ。

でも、たとえば体が戻らなかつたとしてもせめてもうちよつと大きく
なりたいつて魔法さんをお願いしたいところだ。

横を歩いていたはずがいつの間にか前を歩いていた関澤さんの後
ろの髪の毛の先っぽが、歩くのに合わせて肩に乗っかつてはぴよん
ぴよんと跳ねている。

なんかこの子もかがりもそうなんだけど女の子ってせつかちだよ
ね。

この子は小さいのにいちいち動きが大きいから余計に幼く見える。

……それならこの子よりちっこいけどゆつたり動く僕はどうなん
だろうね。

「並んでもちっちゃいねえ私たち」

元ぱつつんさんに誘われて来た映画館は記憶にあるよりも綺麗に
なっていて、ATMみたいな機械とスマホだけですuisいとパスでき
るハイテクさに満ちた空間。

ずっと長いあいだこういうところに来なかつたからちよつとした
ウラシマ効果だな。

元の意味は違うけど僕の頭の中だけだから好きに呼ぶ。

「ひびきー、このセットなんだけどきー、安いからー」

関澤さんが迷わずにスマホを使ってさっさとスマートに手続きを
済ませているのが余計にジェネレーションを感じさせていて、年を
取ったと自覚してダメーτζを受けたのはほんの少し前のこと。

僕ひとりで来たってそもそもとして一緒に観る人は居ないんだか

らひとりで無言で待つてひとりで無言で観てひとりで無言で帰るだけ。

「聞いてない……いい、良いよね？　あの、私たち……」

それだったら値段が何分の1、しかも気に入ったら繰り返し観ることができて途中で休憩しても平気なレンタルに、そしてオンライン。

……ゆりかたちの世代にしてみれば映画館こそが特別な場所。

時間の流れって残酷だ。

ただどころして誰かと話しながら歩いて、隣で座って体温を感じつつ一緒に観る時間を過ごすっていうの。

映画を観るのと同時に体験を共有するというか雰囲気を感じずるって感じで……これもまたいいものって思う。

「はああ——……はずい。　けど本気で聞いてない響、ある意味すげえ」

中学生まではよく来ていたなあ。

母さんか父さんとくればもちろんだけど、その頃の友だちと「一緒に行きたい」って言えばおこづかいとは別に、映画館と飲み食いするお金まで出してくれていたしな。

少なめのおこづかいな代わりにそういうシステムになっていた。

今は家のお金丸ごと預けられた代わりに父さんも母さんも居なくって、僕が全部決めるシステム。

「……………」

「お、戻って来そう」

……ん。

なんだかノスタルジックになっていたら……いつのまにかゆりかが身の丈に合わない大ききのトレイに顔まで隠れる大ききのポップコーンを抱えていた。

なんかサイズ感違くない……？

なんかアリス症候群的な再発しそうでやなんだけど……？

「でかい」

ちっこいのがでつかいのを抱えている。

そりゃあ重くなくてもでかいよね。

「持とうか？」

「嬉しいけど……でも響が持ったらこけたりしない？」

うん、僕もそう思う。

「響、私より腕の力とかないじゃん……いいよ、私のほうが大きいから。少しだけど、でもマシだから。ほら、10センチって言ったらちようどこのポップコーンの上の端っこがはみ出るかどうかっていう超重要なところで!!」

「……………」

「……ごめん」

「ん？」

「今の、さっきの軽い仕返しのつもりだったんだけど……怒った？」

よね？」

「いや？ 別に」

なんか急にしゅんってしてるって思ったら僕たちの背丈って言う真理について揶揄していたらしい。

いやまあ僕も今君がちっちゃいなって思ってたから別に平気だよ？

でもなんか珍しい表情をみていたら、ふと……なるほど、これが嗜虐心っていうやつ。

「どんぐりだなと思っただけだよ」

「どんぐり。……たいして変わらないってこと!? それ怒ってるで

しょ!？」

「いや？」

あー、こういうのゆりかにはちゃんと通じて楽だ。

かがり相手にこうすると「それはどう言う意味なのかしら？」って聞いてくるから解説しなきゃならないっていう泥沼になるし。

「……ひびきー？ 感情はちやーンと顔に出さないと伝わらないよー？」

「だから怒ってないんだ」

「いいのいいの、私も分かるからその気持ち。 体育とか身体測定でみんなから『1番前に並ぶんでしょ?』って目で見られて私が先頭の

基準になる悲しさよ……先生とかも自然私の前に立ってくるしい……よよよ……」

怒ってないってのになんか自爆してる。

小さいのにはもう諦めているし怒るはずがないじゃない。

だって僕の真の姿って言うのは君よりずっと大きいんだから。

この体になって良かったことがある。

背が低いってことは視線が低いから視点が低くって視野が狭い
だ。

もちろん人混みとかじやマイナスにしかないんだけど、僕み
たいに寝てるとき以外はずっとなにかをもやもや考えてる人間にと
つては良いことだっと思う。

あんまり周りを見渡せないもんだから情報が制限されていて……
うまくは言えないんだけど、なんかこう……楽なんだ。

普通は人よりよく見えてる方が良いつて思うんだけど、どうやらそ
うじゃないらしい。

不思議だよな。

僕の頭の出来は普通だから何ともないけど飛び抜けて頭の良い人
とかは病んじやうって言うし、その逆だと将来の不安とか考えずに済
むって言うし……案外そういうものなのかも。

うん。

かがりのあの様子を見ていたら本当にそう思う。

いや、別にお馬鹿さんってわけでもないんだけど。

「……そういえば」

関澤さんが取ってくれていた席を案内図で見ながらつぶやく。

「席は……けっこう前のほうなんだね」

「うん。響はあんまり映画館来たことないんだよね？ だから教え
たげるけど、こんな風に席の大半が埋まっちゃうようなときにはさ？

私たち同志は」

「………?」

同志？

なんだっけそれ？

「………あ、小さい同

士か」

「……ひーびーきー、ほんっと忘れんぼなんだから。そろそろ覚え

て？」

ほっぺを膨らませるちっこいの同士もとい同志。

スマホで入力した漢字を見せられたから訂正する。

……この子って変なところのこだわりがあるよなあ……。

こだわりって言うかはまってる作品のキャラの真似っこだろうけども。

「で、同志はね？ 通路の真後ろっていう1メートルくらいの前方の空間を確保しといて、前の人の頭で視界がジャマされない席が大切なのっ」

……背伸びをするようにつま先で立ってアピールしようとしてポップコーンを2、3個こぼしてわたわたする。

いっつも演技過剰だな、この子。

でもちゃんと拾っているのはえらい。

……さすがに食べないよね？

あ、良かった、ちゃんと足元に置くだけか。

良かった良かった、この子がそこまで食い意地張ってなくて。

「響？」

「何？」

「……」

「……」

何でか知らないけど女の子って僕の考えたことを察するらしい。

オーラってやつをちよつと使えるらしい不思議な生き物。

じとーつと見てくるから表情筋の力を抜いて脱力だ。

「……で、それが取れなければ前の方の席。首は疲れるし痛くはなるし音も大きすぎて画面も見づらいからできれば別のを取ったほうがいいんだけどー、どうしようもなければそっちもアリ。そういう見上げるような不人気な席でない……運が悪いと前がみーんな背の高い人とかで最低でも視界の下半分がジャマされちゃって散々なのだよ」

「なるほどね」

小さき者の宿命か。

大変だな。

なにをするにしても標準しか考慮されていないこの世の中、それから外れるほどに不便さを押しつけられる。

その標準の中のさらに標準だった僕としては、こうして気がつかないところで誰かがちよつとイヤな思いをし続けていたことをこの体になって初めて知ったんだ。

僕自身で体験して実感してみないと分からないことって本当に多いよね。

知識としてはどこかで聞いていて知っていたはずなのに、こうなるまで本当の意味じゃ知らなかったんだ。

「……………」

「もぎゅもぎゅもぎゅもぎゅ」

映画が始まるどころかまだ入場前。

でも手持ち無沙汰のあまりぷちぷち食べている僕たち。

けっこうな量だし多少減っても問題ないだろう。

僕はどうせ食べきれないんだからどうでもいいしなあ。

「まー普段なら空いている時期と時間帯狙うし見やすい席でも苦労しなくても取れるし? ……んむんむ。 ……んでさらに言えば良

い席以外はがらがらなこと多いから、前に背の高い人いても始まってから別のところに移動できるしね。 だから、普段は気にしなくてもいいの。 予告終わっちゃえば入って来る人ほとんどいないし」

自称同志な関澤さんの講義が続く。

この子って語るときはかなり早口になるから聞き取るのが大変。

それでもかがりの方がもつと大変だからこのくらいは余裕なんだ。

「だけど夏休みの昼間、しかも公開したばっかのこのタイミングは ……ねえ。 レディースデー狙ってきたし背の高い男の人の割合は

低いはずだけど ……私たちみたきたまたま今日のこの時間取っちゃうこともあるし。 ……かつ、 ……カップルさんとか家族さんとかいるし? ……ぱりぱり」

やっぱり映画とか普通は誰かと来るもんだよね。

ひとりで来てた僕は誰が誰と来てたかすら興味なくて観察しな

かったな。

「詳しいんだね、ゆりかは」

知識を披露したら褒める。

この子たち相手に学んだ知識だ。

「まーね。 どーよ?」

「頼もしい限りだな」

むふんつとどやってるからさらに褒めておく僕。

「むふふんつ。 だてにいつも友だちの予約とか任されてないよ!

私こういうの好きだし!」

「将来有望だな」

きつと幹事とかもそつなくできるんだろうし、大学生以降の未来が
明るいな。

持ち前のコミュ力というものも備えて完璧だろう。

小さいというのも武器にしてうまく生きていけそうだな。

かがりと違ってまったく心配のない子だ。

あの子はもうちよつと、その……年相応に経験を積みば、たぶん
きつと……大丈夫かな?

「……………」

……………心配だ。

性格は明るくって良いんだけど……やっぱり心配になる。

これが父親の気持ちってやつ……?

僕、彼女とかできる前に子持ちなの……?

「響もネット強いよね? 他の友だちとか知らないの響なら知って
るってこと多いし。 パソコン持ってるのも大きいよね。 やー、ス
マホとかタブレットだけの子ってデイーブな話せないからさー」
「まあね」

そつか、今の子はパソコン持ってないこともあるのか……世代間格
差は激しい。

スマホだけで何でもできる時代だもんな、そりゃそつか。

ネットも軽いゲームも電話もチャットも読書も映画もこれひとつ
で印刷ならコンビニだし……あれ、本当に要らない……?

「でも映画館には来ないんだ、響。映画自体は好きなのに」

「映画やドラマはいつもレンタル……じゃないか、オンラインになるまで待ってテレビとかパソコンとか。迫力を味わいたければホームシアターで観ているからな。気がつけば映画館に来るということ自体を意識することを忘れていたよ」

「ホームシアターとか……ブルジョア!! 敵だ!!!」

「何だブルジョアって……安いやつだよ? たしか全部で10万くらいのじゃなかったかな? スクリーンだって大したものじゃ」

「きんせんかんかくう!! これだからお金持ち出身は……ぶつぶつ」「え、えつと……」

拗ねるフリをしているゆりか。

ブルジョアとか、やっぱりこの子変わってる。

でも良いテレビとかがある家って多いしそこまでじゃないと思うんだけど。

シアターセットだったただのエントリーモデルだし、それで満足しているからぜんぜん投資してないんだけどなあ。

むしろ音響のほうが青天井っていうのは黙っておいたほうがよさそう。

サラウンドとか言ったらなんかまずそうな雰囲気だし。

それにホームシアターとかですらVRゴーグルに取って代わっちゃった感があるしなあ。

完全に寝っ転がれるのが最高なんだ。

お値段は……やっぱり高いから言ったら絶対なんか言われるだろうけど。

「ゆりか、そろそろ入れそうだよ? ほら、並ぼう」

「うぬ……しゃあねえ……!」

テンションまで変な子だ。

よく分からない理由で楽しそうになるのは女の子共通なのか?

僕たちは小学生級だから、いくら夏休みで平均年齢が低いとはいっても背の高い人のほうが多い。

不注意でぶつかられてこぼされたりしないようにって僕もゆりか

のそばで気をつけつつ一気にできていた列へと並ぶ。

「大切な大切なポップコーンを死守せねば。もきゅもきゅ」

「……………」

金銭感覚。

彼女に指摘されてしまったように、これもまた気をつけておくべきだな。

学生にとってはお金とは百円、千円単位だ。

万というのは年に数回の感覚的にはまさにケタ違いのそれだろう。つまりは大金だということで、10万を超えるのはとんでもないもの。

僕は新しいもの好きだから結構な頻度でお高いものを買っちゃう癖がある。

うっかり口走らないように覚えておこうつと。

◇

「いやあー……ラスト30分は怒濤だったねー」

無重力な世界から一気に地上に降り立った感覚。

「ラストシーンなんだけどね？ 私、実はネタバレなしコメだったはずのものでまさかのネタバレ食らってたから知ってたのよ。でも直前までどうやったたらそこまで持っていくのか分かんかったし楽しめてよかったー！」

「うん、いくらかは勢い任せなところもあつた気がするけどきちんと伏線も回収していたし、好印象だったね」

なんだかゆりかの声が大きいように感じる。

映画が終わったあとっていつもこうだよね。

「響は辛口だねー」

「いや、勢いというのも大切だ。演出とはいえテンポを損なってる作品も多いし」

ついそうやって分かった気になって言うて見るけど別にマニアとかじゃないからなんとなく。

僕がおもしろいって思う映画ってあんまりないからこれで良いんだ。

「お、お——……?」

「褒めているんだよ」

「そっか」

どうやら伝わってなかったらしいから捕捉しておく。

「……………」

「んーっ……1時間半でも長く感じる現代っ子よ……」

暗い空間でひと言も話さず、なのに隣に座っているってことがはつきりと感じられて。

序盤まではときどき手が当たったりしつぽポップコーンをがさがさしたりジュースの氷の音が聞こえたり、ふいの静寂でぷちぷち食べている音がお互いに聞こえたり。

10年ぶりだったけどなかなか懐かしい体験だったな。

エンディングが終わって明るくなってからの非日常感もまた良いもの。

普段そのままパソコンの操作とかに戻っちゃうしな、家だと。

あれでも余韻は味わえるんだけど……こうやって時間をかけて戻るって言うのもまた良いかも。

今度から映画終わったらごろごろしてみよつと。

「……………」

「……………」

それにゆりかも、いつもはずーっと話し続けているのに映画が終わったあとちよつとだけ無言のまままで歩いていたのもまた新鮮。

こんな感じならいくらでも一緒にいてもいいんだけどな。

でもこの子もやっぱり女の子、普段はとにかくやかましい。

どこかにほとんど話せずにいられる知人候補は存在しないんだろうか。

ただ傍に居てくれるだけで、できたら男が良いんだけどなあ……いないかなあ……。

「ふいー……それにしてもやっぱこー、あれだよな。映画館から出

たあとしばらくつてき、今みたく夢見心地でふわふわしてるよねー」
「そうだね。あのスクリーンからの光と音しかない環境がいいんだ
ろうな。真つ暗闇の中でただ座っていて……家だと他のことで気
を取られたりして、つい気が散ってしまうし。インターホンとか電
話とか外の音とか……スマホの通知もそうか」

「そだねえ。でもさー？ まー？ ほうむしあたあーつてのがある
ご家庭じゃ気にならないんだろうけどー？ ね——？」
「まだ言うか」

「ごみんごみん。それもまた響のひとつだからさ。あ、もち冗談
だからね？ 怒らないで？」
「分かっている」

気がつけば映画館からファミレス。

もうお昼は過ぎてているんだけど、でもまだ僕はお腹がいっぱいのま
まで、でもゆりかは少し空いているってことで入ったらしい。

ぼんやり何かを考えていたからまーたもうひとりの僕に任せきり
だった。

日常動作と頭の中を切り離せちゃうのも人付き合いではマイナス
だな。

ファミレス。

安いのにそこそこの味でおしゃべりしていても怒られない場所。

最近こういうところとの縁がほんとうに深いけど、ともかくこの
チエーンはイスもテーブルも低めだから僕としては文句はない。

多分ゆりかのことだからわざわざここを検索しておいてくれたん
だろう。

ありがたいな。

中学生らしからぬ心配りだ。

あー、いや、でも人の精神年齢って言うほど育たないもんだから案
外僕と大差ないのかも。

僕も多分……そうだなあ、小学校高学年くらいからほとんど変わら
ない印象だし。

「でもさー響」

ぶんやりと言うゆりか。

「やつぱりさー、見終わったあとこうしてさー。おんなじような感性持つてる友だちとすぐに感想言い合えるのっていいよねー。こうしてダラダラ食べたりしながらさー。響はまだお腹空いてないから付き合わせちゃってごめんだけど」

「……………そうだね」

まだ非日常が抜けない日常感が良いよね。

「こうしていい具合に気が抜けた状態でおもしろかったところやダメだったところを話せるのは……………楽しいね。楽しいとはまた違う楽しさ……………良く分からないけれどそんな感じだ。ライブとかが好きな人たちもこういう気持ちで通い詰めるのかもしれないね」

「だよね……………良いよねー、こーゆーの……………」

クライマックス直前の緊張からのほっとした感じが抜けなくてぼんやりしている。

頭も体もふわふわした感じがまだ残ってるんだ。

……………お酒を飲んだときよりもちよつとだけ頭が冴えていて、でも気持ちいい感じ。

「……………じゃ、じゃーさ、ひびき」

「ん？」

意識を元ぱつつんに戻すと珍しくもどかしげにしている様子。

「……………じゃあ、さ。……………今度からさ、私の家で。じよ、上映会とかしない？ とか言ったりしてー！」

「あははー」といつも通りの演技過剰で体をくねくねさせながら顔も真っ赤にしているゆりか。

この子って演技するからどこまでが本心なのかがいまいち分からないんだよね。

その点かがりみたいだな単純……………裏表が存在しない……………演技する必要がない子よりも難しいんだ。

でも……………確かに。

かがりには強制的に勉強会って名目で引きずって行かれたけど僕から誰かの家に遊びに行くって言うのはほとんどないこと。

かがりのそれでさえ10年ぶりって言う始末だしなあ。

……片方だけにお邪魔するのは不公平かも？

何でか知らないけど自分がしてもらってないってことについてやたらと怒る女の子の性質を考えると……この夏休みで1回はゆりかのところに行っただ方が良いかもな。

21話 関澤ゆりか (1) 4 / 5

「親もない家の中でふたりつきりとかはずかしーっ！」

「……」
「なんでこう女の子ってテンションの上げ下げが極端なんだろう。目の前でくねくねしているゆりかを見ながらそう思う。」

「やーんー！」

「……」
「かがりとはまた別の方向性で元気だよなあこの子。」

「会話の中のふとした何かですぐにこうなるもん。」

「やーんっ……あはは……」

「……」
「で、いつも途中でテンションが元に戻って来始めて自分のそれにならなかつく。」

「いつも絶対最後まで気がつかないかがりとはまたまた違いがあつて興味深い。」

「……」

「……」

「……反応、しようもないよね？」

「僕がこういうのに反応してふたりして騒げる性格じゃないって知ってるだろうし……」

「だから僕はただただ待っているんだ。」

「彼女はしばらくそのままくねくねしていたけど……すぐに疲れたらしくゼーゼーとして「こほんっ」とこれまたわざとらしく、そして顔だけ赤いまま何食わぬ顔で続けるらしい。」

「たくましいね。」

「子供はなんにも考えないでノリとテンションで乗り切れるからすごい。」

「あ、でも、大人だってお酒が入れば大差ないのか。」

「……うち、テレビもたいして大きくないし、響んところほどの環境じゃないだろうけどさ。でも響のところは……そのお、あんまり人を

呼びたくないかもだし？」

「ん、まあね」

呼んだらこの関係も終わるしな。

どうせ終わらせるんだけどそうにしても穏便にしたいところ。

なにが洋館の豪邸か。

どこからどう見ても普通の一軒家だもんな。

じいやとかメイドさんとかなんて空想の存在だ。

かがりが毎回テンポ良く妄想を吐き出すもんだから……。

「響にとつてはともかくさ、私にとつてチケット代とセットので2000円ってのは毎回は厳しい……んだけど、その、さ？ 買ってくれば500円しないじゃん？ うちもオンラインの定額のやつで観られるのあるしさ？ 買ってても数百円なわけで合わせても1000円しないし？ あと響用に適当に振ったりすれば炭酸系もちょうどいい感じに抜けるし？ あとトイレ休憩がほしいし？ ガマンしたあとのあの行列はもーイヤ。 さつきすつごく待たせちゃったしきー」

「ふむ」

なるほど……学生的にはそのほうが良いよね、映画観るなら。

僕としては予定をみんなこうして楽に消化してもよかつただけど、それだとちよつとおこづかいが厳しいのかな。

考えてみればそうだったな。

そりやそうだ。

かがりみたいにダダ甘の親からなんだかんたでもらえるわけじゃないだろうしな。

あと、確かにあの行列は大変そうだったし。

毎度毎度のこととはいえ女性はトイレすら大変なんだしな。

僕は何食わぬ顔で男のほうをさせるから平気だったんだけど。

このときばかりはこの体に感謝だ。

もつともこの手は、かがりに女装させられて……いや、肉体の性別的には正しいんだけど……ともかくスカートとかで髪の毛を出していたら使えないんだけど、ゆりかとのときはパーカーズボンでいいから遠慮なく使えるもんな。

ほんと、トイレが近いのに10分15分立ったままとか大変そう。
女の子って大変だね。

夏休みもまだ2、3回こうして出かけたらしいしそのあとも週に1回くらいは会いたいわって言っているし……それを映画で解決できれば僕がとつても楽な気がするし。

観ているあいだは話す必要もないしで楽だし終わったあとの、この懐かしい感じも良いし？

悪くはないか。

「夏休みはともかく、そのあとは学校もあるだろうし。 たまになら良いかな」

「やたっー」

ぐっと握りつぶしな演技さん。

よっぽど友だちと観る映画が好きらしい。

純粹に喜んでる姿ってほっこりするよね。

前に自分のことを考察班とか言っていたし、観たあとにあれこれ話し合うって言うのが観るのと同じくらいに好きなんだろうな、きつと。

探偵ものとか、犯人とか手口を予想しながら読むタイプらしいしな。

僕はただぼーっと読むだけだからその気持ちはよくわからないけども。

ああ言うのってちゃんと頭が良い人しか推理しながらストーリーに書いて行けないんじゃない？

「でもさ」

「……っ？」

「あ、う、……………」

「……………」

なんか黙っちゃった。

なんだろ。

でも僕はじっと待つ。

話したいことがあるんだけど頭の中でうまく組み立てられなくっ

て、それが目の前の人で焦ってもっと崩れちゃう系の、僕もよく分かるし。

「……………やっぱりさ」
「ん」

くつろいでいるところにぽつりとしんみりとした感じで再開。

「やっぱね。響とだとき。好きなものとか話題とか。好きなこととかおもしろいって感じるツボっていうのかな。そういうの、合うんだよね。私でも知らない作品とか知ってるし。学校とかでもそこまで詳しい人いないしき。同い年で私より詳しいの初めて会ったんだよ？リアルでさ」

そこは年の功ってやつなんだ。

むしろこの子は「なんで僕が子供のころの知ってるの……しかも僕より詳しいし……え、引く……」ってレベルでマニアックに知ってるもんなあ。

「それにさ。……その、響ってクールっていうより無関心って見えるんだけど……実際は違うよね？私が『こんなの見た』『こんなの知ってる？』って聞いたりしたのとか、あとで見といてくれたりするしき。別に頼んでいないのにね。でも、実は知っていてほしかったりするの。それを次会ったときに響から言ってくれるの」

時間だけは余っているしなあ。

いくら勉強するって言ってもほんの1, 2時間程度だし、朝から夕方までの学生だろうと社会人だろうと束縛されているはずの時間をみーんな自由に使えるっていうのは大きい。

しかも魔法さんのせいで……ああいやニートだからどつちにしたってこれからずっとヒマなんだ。

だから娯楽はあればあるほどいい。

でも世の中にはその娯楽はあふれているんだけど「僕の興味」っていうアンテナに引っかからないのにはそもそも気がつくことがない難しさ。

でもでもゆりかみたいな身近な人から勧められると途端に親近感が湧いて「じゃあちよつとだけ見て見ようか……」って気になれるっ

ていうの知ったから。

あんまりおもしろいつて感じなくても「でもそれもまた話題になるか……」ってぼーつと見ているうちに途中からおもしろくなること、結構あったしなあ。

内輪で盛り上がるっていうのはきつとこういうことなんだろう。

それをこの歳で知ったんだ。

だからそのお礼として僕自身も話したいから話してるだけなんだ。

「そういうのつてすごく珍しいし。それに……その……んー。

……私に合わせようつてしてくれているのが分かるから、その。

えーつと……あはは、けつこう嬉しいんだよ。 他の子はそもそも関

心がなくて『ふーん』で終わるかだしさ」

「……そうか」

……僕も今「ふーん」つて返事しそうになって焦った。

「……うわ、こういうのこっぱずかしい……」

ずずーつと音を立てて、ストローの先からかすかに残ったジュースをすすっているゆりか。

そういうところが子供っぽさで僕以下なんだけどなあ。

でも中学2年生つて言ったら青春なんだからそういうのもいいんじゃないかって思う。

青春。

良いよね。

僕も体験したかった。

「私ね、響。 響みたいに価値観とか近くつて、性格も合つて。 んで一緒にいて心地よくつて。 こうやって趣味についてたくさん話せる友だちつて、ずーつと欲しかったんだ」

今日のゆりかはやけにセンチメンタル。

さっきの映画に影響されたんだろうね。

僕もそういうのあるから分かる。

「だから、響とこうして映画にきて嬉しくなっちゃった。 ごめんね、

映画のあとだからなんだか感傷的になっちゃつて」

「良いんじゃないかな」

僕にとっては普通の、海外ドラマとかアニメみたいな大げさな演技しているほうがよっぽど恥ずかしいって感じるしな。

これが感性の違いってやつだ。

指でぱつつんをくるんくるんとしながら立ち上がって「混ぜてくる!!」って宣言してドリンクバーへと小走りで行く関澤さんの後ろ姿をぼんやりと見る。

……たとえ恥ずかしくても、ああして素直に自分の思っていることをちゃんと伝えられるのって少しうらやましいな。

僕だつたらそもそもあんまり気持ち動かないし、珍しく動いたとしたって「別に今言う必要はないか……」なんて思っちゃってけつきよく言わないってこと、ものすごく多いしなあ。

だからSNSとかも見る専だし。

友だちがネットにさえ誰ひとりいないって言うのもあるけどさ。

「……………」

素直で率直。

そういうの、これから目指していこうかな？

どうせ先は長いんだし。

服装に興味なかった僕でも毎日気にする程度にはなれるんだし、スカートやワンピース……ワンピースを身に付けてるときは膝同士をくっつけようって意識できるようになっっているんだ。

たったの半年でこれなんだ。

僕もまだ主観的には若いんだ、なんとかなるだろう。

「……………ふふんっ」

またしてもオリジナルブランドにしたらしい、どす黒い茶色って感じのジュースを持って帰ってきたゆりかの顔はさつきまでの紅くなっていたのからすっかり元通り。

「あ、そーだ響」

「ん？」

ほふんと座って話しかけてきた調子は完全に普通のそれ。

「さつきさ、買うときにはぱつと店員の人に答えちゃったけどさ……そのー、カップル割ってやつ。 あははっ、期間限定だったし珍しいか

らつい頼んじやったよー、響もごっち見てなくてどうしようか聞かなくてごめん！ あれ、イヤだったりした？ やっぱカップルとさー！」

いつも通りの無駄なテンションがまぶしい。

「いや？ 別に、安くなるに越したことはないと思うよ？」

カップル割。

そういうものがあつたらしいね。

でも帰るときになんとなく見てみたけど大したことはなかったけどなあ。

カップル割とは言いつつ単純に2人用のセットのことでしょう？

別に男女じゃなくても家族連れとかでもなんでも2個ずつならどういう組み合わせでも割引しますよっていうだけのやつ。

ただ量を多くして、でも値段はそこまで上げない。

結果的にお客さんはちよつとだけ多めにお金を出して倍以上の量を手に入れて満足して、お店もちよつとのコストでお金が多めに入ってきて満足するっていうだけのものだよな。

なんかプレートとかストローとかがハート型になっていた以外には安くなる利点しかなかったもんな。

反対に持つてみればただの桃の形だし、別に僕はどうだっていい。それにせつかく安くなるんだ、僕はともかく中学生な彼女にとつては貴重な割引。

お店の人がふたり連れと見ればいちいち聞いていて、女性同士はきやつきやつして……男同士は「えっ……」て感じだったのが地味におもしろかった。

店員さんもああいうのは楽しいだろうな。

お仕事も真面目なだけじゃなくてユーモアつてやつもきつと大切だよな。

「……そっか。 ……んう——……」

「……………」

何杯目かになるジュースを飲みながら何かを考えている。

いつもの僕もこんな感じに見えるんだろうか。

見えているんだろう。

別にたいしたこと考えているんじゃないんだけど考えの中に埋まっっていくクセってやつ、小さいころから治らないもんなあ。

いつも待ってもらっているんだから僕も待たないと。

こういうのはお互いさまだ。

「……………」

「……………」

「……………んじや……さ。ね、響。この話の流

れのついでだし……聞いちやっていい？ やだったら聞かないフリ、

してくれてもいいから……さ」

「いよう？」

なんだか妙に歯切れ悪い感じの関澤さん。

トイレかな？

「……………んー、えつとね。あー、えつと、その——……………」

「……………」

もじもじしている。

トイレなら恥ずかしくも何ともないだろうから違うか。

まだおセンチを引きずってる？

なんだか髪の毛を触りだした……少しでも大きい服を着ていると

レモンが確認できなくなる悲しい元レモンさんは「んー」とか

「んあー」とか言うばかり。

1分くらい経っておずおずと見上げてきた彼女は……けどすぐに

僕から目を逸らしながら言った。

「ひ、ひびきって、さ。今、その、ね？ その……付き合ってる人と

か。あ、ええつとつまりなんだね、好きな人とかっているのかねっ

て聞いてみたかったのだよ。……………じゃなく

て、その……いる、の、かな……？」

21話 関澤ゆりか (1) 5 / 5

「うひゃ——ハズい……」

僕に付き合ってる人について聞いておきながら自分が恥ずかしかつているゆりか。

……かがりのときもそうだけど、最近立て続けに変なことばかり聞かれてる気がする。

本当に女の子って好きだよなあ……。

きつと学校での話題もそういうのばかりなんだろう。

学校とかって、仲の良い男女のグループ同士以外はそんなに話さないよね。

きつと話す話題が根本的に違うのをお互いに分かっているんだろう。

でも、聞かなくてもそういうのが好きって分かるかがりならともかく、ゆりかまで言い出すなんてな。

まあ会ってから半年近くして初めてなんだから本当に単純な興味なんだろうけど。

なんだか真剣そうだったから、なんかもっと重要な言いにくいことも……僕の家とか学校とか病気だつて言い張っているものみたいな、ついでに嘘について突っ込んで聞かれるのかって身構えちゃったけど損した。

……嘘つて1回ついちゃうとこうやって何かある度にちくちくするんだなあ……つらい……。

つらいけどゲロるか隠し通すしかないんだからどっちかを選び続けるしかないよな。

でも僕と同じく恋愛というものに興味がない……あ、いやこの子キャラクター同士のとかについてはうるさいんだつたな……そんな感じのゆりかから僕についていうの、なんだか不思議な気持ち。

なんだろうね、これって。

「……あ、ごめん、言いたくないならいいよ？ やな話題だったりしたらスルーしてくれてもぜんぜん大丈夫だから！」

なんだか急に早口になっているゆりか。

「きゅ、急にこんなこと言ったのだってさ！ え、えーつと……そう！ ここ最近の登校日でさ、『夏休み中に告白して付き合うことになったんだー』みたいな子が同級生でけっこー出てきたりとかしたからで！ いやっ！ その！ 私はもちろん違うんだけどさー、でもなんだか気になっちゃっただけだからほんと気にしなくて良いから!!」

この子は普段からマンガとかゲームの話題だとすぐに早口になるから聞き取るのが大変。

下条さんが着せ替え中にとめどなくしゃべっているくらいの早口だけど彼女とは違って基本的に意味のある内容だから聞く気になれる早口。

それでもなかなか大変だ。

かがりの早口の9割は聞き流すけどこの子の早口の5割くらいは聞き流さないくらい？

でも、よくこんなに早く口が動くよなあっていつも口元を見ながら思う。

女の子ってかなりの割合で饒舌だよ。

男ががんばってもこうはならないって思うし。

こんな感じなんだから口げんかをしたって絶対に勝てないって分かる。

まあ僕は男の中でも寡黙な方だからさらに勝率が下がるんだけども。

多分小数点以下くらいしか見込みないんじゃないかな？

にしてもわたわたしながらすっごい早口の小学生に見える中学生。

ぱつつんが左……あ、彼女からすれば右か……そっちの方だけまぶたにかかって結構頻繁に手で払っている。

僕の前髪もそうだからそのめんどくささ分かるよ。

でも僕と違って自分の意思で切れるんだから切ったほうがいいと思うけどなあ。

いやでもおしやれのためだったりしたらしょうがないのか……髪の毛命な女の子だし。

めんどくさいことをするほどにおしゃれになる不思議な生き物だからなあ。

男なんて髪の毛とヒゲを整えるだけで良いのにね。

かがりにいろいろ雑誌を見せられながらお説教される日々だけど……そのお化粧とか髪の毛のお手入れの大半は男視点ではどうでも良いものだから「それって女性同士の見栄の張り合いなんじゃない？」って思う。

でもそう言ったらとんでもない目に遭わされそうだし止めておこう。

「おしゃれすれば分かるわよ！」って服屋と美容院とのループになりそうだし。

間違いない後悔し続ける時間になるだろう。

「えーとそのう……とにかくね！」

「うん」

しゃべってるうちに言いたいことが見つかってくる感じになったらしい。

「さつきまで見てた映画のラストの……その、き、キスとかその先の………む、結ばれた場面……とか……」

中学生ってそういうのにいちばん敏感な年頃だよな。

無菌状態の小学生からいきなり……ああいや、女子って高学年からこうなるんだっけ？

僕はこの歳まで無菌状態で育ってきたから全然分らないけど。

「今のカップル割とかでそーゆーのでなんか浮かんだ疑問だし！

あ、いや私はきょーみなくもないんだけどともかくそんなわけだから、ぜんぜん答えなくっていいから!!」

こんなに手を振り回していて疲れないのかなってくらいの激しいボディランゲージ。

こんなだから幼く見えるんだ。

「僕は別に平気だよ？　ただ君が話し終わるのを待っていたただけだから」

「あう」

なぜかさらに赤くなっていくゆりか。

よく分からないけど、多分思ってもないことまで話しちゃったんだろう。

緊張していると勝手に口がしゃべっちゃうんだよね。

すつごく良く分かる。

「君は普段から恋愛の話題とかしたことがなかったから少し驚いていただけ」

かがりとおなじ女の子って生物のはずなのに半年のあいだ1回も……友だちが多いらしいのにその人たちについてすらもひと言も言ってこなかったからなあ。

だからこそ気楽だったんだけども。

まあ1回2回なら良いけどさ。

「それに」

「それに？」

「……あ、いや。ただ、つい先日も同じようなことを聞かれたばかりだったからデジャヴみたいな感覚になってね」

こういうのは立て続けに起きるものなんだ。

この子たちと出会ったときもそうだったしな。

「……ね。もしかしてそれ、この前の……えっと、大きい子」

どっちの意味で大きいんだろう。

多分どっちの意味でもだよな。

「……かがりって子だったりする？　なんとなくだけど」

「ん、よく分かったね」

妙な化学反応が起きないようにつてばらばらに会っていたのにばったり会っちゃったこの子とかがり。

かがりもそうだけどこの子も結構相手のことを気にしているらしい。

なんでだろ。

同じ学校なのにお互いのこと知らなかったからかな。

学校で話すようになったのかって思ったらそうでもないみたい？

「まあ彼女はほとんど毎回そんなことばかり話しているから取り立て

てってわけじゃないけどね。 普段からあいさつ代わりに聞いてくるくらいだしな」

「そっか。 なんとなくそんな感じがしたよ。
.....」

「これまた珍しくぼんやりとしているゆりか。

僕もぼんやりしながら見つめ返す。

なーんかこの子と一緒にいると、ふとしたタイミングでこういうの多いんだよな。

こういう感じ、昔の母さんと少し似ているかも？

目が合う確率が高いというか目が合っているだけでも嫌な感じにならないというか、そんな感じが。」

.....こんなにちっちゃい子なのにね。

性格が似てたんだらうか。

「.....んで、どうよ？ 聞いたことないけどいるの？ 相手。 付き合うまではいかなくても好きな人とか。 あ、2次元とかでもいいよ？ なんならアイドルとかでも2・5次元とかでも可！ むしろ良き!!」

「そんな相手、僕には居ないよ。 どの次元でも」

そう言えばこの子も「このキャラクターが好き」とか「このキャラクター同士早くくつつかないかなあ」とか良く言うけど.....好きな男性キャラクターとかも聞いたことない気がするなあ。

「.....ほんと？」

「うん。 好きな人も付き合っている人も。 そういうの興味ないしね」

「今までも？ ずっと？あ、そっか入院生活かあ。 でもさでもさ、先生とか看護師さんとか他の病室の人とか、きれいな人とかいないの？ 響からも相手からとかかないのかねキミい！」

なんか結構食い下がってくるな。

そんなに気になるの？

「特になかったな」

「うそおん……」

「ほんとうだ」

だって小学校から大学卒業っていう学生生活とその後の、通算で20年近く恋人なしだもん。

………自覚すると凹む。

でも言うほどには凹まない。

だってこの歳で居ないって言うことは僕自身が真剣に欲しいって思ってるんじゃない証拠だもん。

本当に欲しければ僕から動かなきゃ見つけれないんだし、真剣にがんばれば見つかるんだろう。

多分。

む、けどニートが足かせになるか？

でもなあ……誰とも付き合った経験もその先の経験もないままに男として終わるなんて誰にも想像できないでしょ……？

30まではセーフって誰かが行ってたからそのうちそのうちって思ってたらこれだ。

まさかのまさかで引っこ抜けるだなんて誰にも想像できやしない。のんびりしてたのがいけなかった。

男として生まれたんだから1回でも……いやいや、まだ希望は捨てていない。

突然に女の子になったんだから突然に男に戻ることであってあるはずだもん。

僕はそう信じてる。

「……そういうゆりかはどうなんだ？」

「え……わ、私い!？」

彼女いない歴について考察していたらなんか心臓が痛くなってきた気がするからゆりかに投げ返してみる。

「君には居ないのか？ 肝心なときにも冗談を言って失敗しそうな性格をしているけれど」

「……響つてときどき辛辣だよねえ……」

ふたたびぱつつんの下の目と合う。

「でもそうねえ……私もね?」

真つ黒な目のふちに光る窓の外の光。

黒と白と緑の混じった明るさのコントラスト。

ふだんはおどけていることが多くって口の端が上がっていることが多いんだけど、今はどちらかというときゆつと力が入っている感じ。

めったに見ない、ちよつとだけ大人びた感じのゆりか。

こういうのを見ると「この子もやっぱり女の子なんだなあ」って気持ちになる。

これが父性か。

「恋人とか、付き合った人とか。 ……私も。 今までいたこともないし、考えたこともなかったよ」

「なんだ、一緒か」

大丈夫、中学生ならまだまだ大丈夫だから。

それに君なら望めばすぐにお相手は見つかるだろうし。

「だけどね、響」

まぶたが少しだけ下がってぱっちりしていた目が、切れ長になっている。

僕としてはこういう目つきのほうが普段の元気すぎる感じのよりも似合ってる気がする。

「気になってる……かも? そんな人。 最近いるかなーって感じ……かな?」

ちよつとうつむいてちらちら見上げてくる、不思議なことをしてるゆりか。

「……………」

なんか言いたそうだけど言つてこないなあ。

下条さんとは違ってこちらには意中のお相手が居る……いや、最近できたんだな、きつと……らしい。

初手で人と仲良くなれるはずのこの子が今ごろってことは学校の外で会った男子なんだろうか。

それとも夏休みに教室で会ったら雰囲気変わって見えて……って感じなんだろうか。

青いなあ。

これが若さ。

僕には欠けているもの。

つまり僕は中学生の頃からずっと枯れているってことになる。

悲しいけど仕方がない。

それが僕なんだ。

悲しいけどしばらく考えても正直どうでもいいかなって思っちゃうんだもん、やっぱり僕には関係ないことなんだろう。

「青春しているな」

「……………あり？ 予想外の反応」

どんな反応を期待してたんだろう。

「あ、いや……………あ……………まあ響だもんね。そーだよねえ、

こっちの方が自然だよねえ……………」

どう言う意味なんだろう……………いや、そのまんまか。

「そっかそっか。あんまり興味ない感じだよねー、恋愛とか」

「そうだな、僕はそんなにはな」

「だよねだよねー、今期の推しのヒロインとか反応薄いもんねー」

「君の方がそういうのに詳しいくらいだからね」

「さすがに有名どこの名前くらいは覚えた方が良いつて思うけどねー」

「人の名前と顔を一致させるのは大変なんだ」

「キャラでも？」

「キャラでもだ」

そうして「うあー」とか言いながら普段の僕のように急にぐだつとした関澤さん。

この子も僕と同じくうつ伏せになってもなんら支障はなさそうで何より。

……………この体のままでいるのなら将来的にこの子よりも少しだけ大きい感じが理想だな。

つまりこの子はまだその域に達していないんだ。

失礼だし絶対に言わないけど。

「その話、今度会うとき彼女……かがりにしてあげると、きっと喜ぶと思うよ？ この前会ったときはなんだか君にしては珍しくぎこちない感じだったけど、その話題ならすぐに打ち解けるんじゃないかな」

「……………」
がばつと頭を上げてなんかすつごく見てきたゆりか。

なんかすつごく変な顔してる。

……………なんで……………？

あ、そうか。

かがりから怒濤の恋バナというものの講義をされたことがないのかな？

「彼女は恋愛アドバイスのプロらしいし、君が当事者になったらきつと相談に乗ってくれるよ。もちろん恋バナも好きだ。根掘り葉掘り聞かれたのをみんな言いふらされるからほどほどにだけでも」

「……………あ……………うん。　そゆこと。　そゆことだよねえ、響だもんねえ……………」

「？」

「いや、なんでもない。別にいいのよ」

ずずーと溶けた氷だったものをすするゆりか。

なんか微妙に不機嫌？

なんで？

「……………あの子。　多分私の……………その相手のこと知ってるよ」

「そうか、なら話は」

「だから響が言ったとおりにゼーンぶ話し尽くさないと解放されなさそうだし遠慮しとく。　学校で噂になったらハズいし」

「そうか」

「なんか強烈だもんねえかがりさんって。　あーいう子クラスにもいるからなんとなく想像ついちゃうんだ」

分かる。

すつごく分かる。

あの子の相手は本当に疲れるんだ。

「僕から言っておいてなんだけど、うん、止めておくのが無難だな……」

「そゆこと」

かがりが知ってるってことは、そのお相手は同級生なんだろう。

それなら間違いなく満足するまで質問の嵐だろうな。

ものすごく簡単かつリアルにその光景が想像できる。

話さなかったらこの前みたいなのしかかかってきて「話すまでどかないわ!」とかしそう。

恋愛の意味ではともかく物理的な意味で自分の体を武器にすることを覚えているらしいから手強いんだ。

つまりは野生な野性。

本能で生きている生物だもんな。

だからあれだけのびのびと育っているんだ。

体格の大きいほうが生存競争では有利。

ちっちゃいもんだから飛びかかられたら逃げられない同志なゆりかには深く深く同情する。

「じゃあ話戻してさ、あの映画のモチーフだけどさ? さつき響が言ってみたみたい」

「ああ、うん。 やっぱりギリシャ神話だね。 分かりやすすぎる嫌いはあるけれど」

元ぱつつんゆりかはコイバナに飽きたのか、そんな感じの話題に戻ってくれたから楽になった。

……ファミレスとかでただ適当に話す時間。

こういうのもなんだか良いなって思うようになってきた今日のごろだ。

青春にはまだ肉体年齢が届いてないけど精神年齢と合わせて割ったらちようど良いんだろう。

22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 1 / 4

今朝の太陽は少し弱いみたい。

僕の快適な寝起きは結構お天気には掛かっている。

カーテンを開けてみるとうつつすらと曇っている空。

僕は今朝、珍しく目覚ましに負けたんだ。

なんかこういう日ってだるいよね。

「んー……………」

忌々しい目覚ましを枕元に投げて「ぽふっ」って音をさせて満足。

もやっとした気持ちだけを解消するのに手っ取り早い方法だ。

こういう誰も傷つかないストレス解消法って大切だよね。

僕は滅多にしないけど、枕をサンドバッグにするのってとっても良いって思う。

僕は自然に起きるのが好き。

眠っているのを無理やりに起こされるのが嫌いなんだ。

自然な形で目が覚めて起きないところも体が重くって心臓がばくばくするもんだから……気持ちいい夢を見ていたはずなのになんてさくれ立つんだ。

結構寛容な気がする僕が唯一嫌いな感覚。

ああいや、うるさい音とか振動とか声とか近すぎる距離感とか花粉とか虫とかホラーとか嫌いだし結構あるか。

……光で起こす目覚ましとやら、お高いみたいだけど買ってみようかな。

お天気でも日の低い冬って寝起きが良いわけじゃないし。

なんなら結構寝坊するし。

「くああ……………」

急に起こされたから体がまだ起きていなくってあくびが何回も出る。

顎を開けるだけ開いて目から涙が漏れてくる。

なんでも、自然に目が覚めるときには血圧とか意識レベルとかそういうのがみんなきれいにちょうどいい感じに上がってきて体に良い

らしくって、逆に目覚ましに頼ると自然のバイオリズムが途中でずぱつと切られて覚醒するから、あまり良いことではないんだとか。でも現代社会は忙しいからみんなスマホとかで強制的に起こされる悲しみ。

このどきどき感……成長期って言う全盛期を終えていた成年な状態から若返った幼児でさえも走った後みたいな感覚は、確かに心臓に負担が掛かっている気にさせるもの。

別に特段の病気もしたこと無いしまだ30代にもなっていない、いや、なかったのについて思うけど、僕は怖いのが苦手だから健康についての本とかで心臓への負担とか言うのを読む度に不安になるんだ。

ああ言うのって読むと不安で不健康になる気がするよね。

でも本屋に行く时必须買っちゃうんだ。

昔っから朝型だったっていうのもあるかもしれないこの動悸。

というか肉体が変わってもおんなじな辺り朝型とか夜型とか言うのは脳みそなのかな。

僕が2人に分裂したわけじゃないから比較とかはできないけども。

僕が2人なら……それでもたいていして変わらない生活なんだろうけど。

もつともこういう生活……目覚ましに絶対に頼らない生活なんて学生以前の幼子とかニートとか隠居後の人以外は難しいんだろうな。

でも僕は大学の頃には無駄に健康にはまってこうやってたし、意識高い系ならしてるかもね。

ちようど僕とは真逆な感じの人種なら。

「ふああ……………」

あくびが止まらない。

とつてもすごく眠い。

もうちよつと寝たい。

けどダメだ。

二度寝はすつごく気持ちいいお酒の次の娯楽なんだ。

でも今朝はできない事情がある。

だって今日は燃えるゴミの日。

他のゴミはともかく今日は駄目なんだ。

いくらクラーラーさんにかんばってもらい続けているとは言っても、量はそれほどじゃないにしても夏場は生ゴミと相性がとっても悪い。出さないと大変なことになるんだ。

めんどくさがって置いてくと大変なんだ。

二度寝しちやって朝の普通の時間……今みたいに5時になったばかりとかじゃない時間帯になると、ご近所はともかくお隣さんとはち合わせの可能性が上がっちゃう。

お隣のふんわりした奥さんもといお母さんがゴミ捨てに出るのと学生の娘さんの通学とお父さんの通勤のタイミング、みんなばらばらで読めないしなあ……。

ここまでカーテン閉めっぱなしにしてエアコンと外出を最低限にするって言う、まるで敵から身を隠すみたいなの生活をかんばって続けてきたのが二度寝で台無しとか悲しすぎるでしょって思うと今さら失敗したくはない。

そんなんで「あら、あなただあれ？」とかお隣さんに見とがめられたら泣くに泣けない。

それはあんまりすぎる。

一生懸命作ったプラモデルをうっかり落として台無しにするくらいには悲しい。

僕はすぐパーツ無くすから作れないけど。

でもちよつとくらい無くなっても案外平気なんだよね。

パソコンとか組み立てるときネジ半分くらい残っても使えてるし、世の中ってそういうもの。

「うあ——……」

精神力を限界までふりしぼってみみずみたいにシーツを張って流体の猫みたいにしてベッドから落ちるようになって落ちて冷たい床の感覚がほっぺたに。

「……………」

ちよつと寝落ちしそうになったけど冷たさと硬さで目が覚めてようやくもそつと起き上がった。

「……………」

昨日は少し飲み過ぎたかもなあ。
まだ少しアルコールのぐるんとした感覚が体に残っている気がする。

呼気に基準値の何倍ものアルコールが含まれてる気がする。
って言うか吐く息から香ってきてる。

今の僕の周りはお酒臭いんだ。

それもこれもゆりかおすすめのおもしろいコメディーを通して見ながらがぶ飲みしてしまったせい。

僕にしては珍しいことに最後のほうの記憶が薄い程度には呑んだらしい。

お酒って怖いよね。

それも呑める僕みたいな体質だと余計に。

ぼわぼわしながら楽しく呑んでるうちに歯止めが利かなくなっ
て気がつけば一本開けてるんだもん。

こんな生活続けたら30代には肝臓悪くしそう。

今はひとけた代に戻ってるけど……って言うか戻ってるから余計に危ない。

「僕の本体は20超えてるから！」って思い込んでいるからかお酒が全然平気なんだけど、それでも良くないのは知ってる。

体に悪いつて理解して呑んでるからこそ自制心が大切なんだ。

よたよたといつもに増して不安定な体を引きずるようにして冷たい廊下をひんやりと感じつつ、一途悲鳴を上げている膀胱を解放してあげるべく急ぐ。

……慣れてるから漏らしはしないだろうけど万が一はある。

僕って考えごととしてなんにもないのによく勝手知ったる家の中でぶつかるし転ぶしだから、そうしてトイレに着く前に衝撃を受けて……ってなったら悲惨だもんね。

急いでいてもそもそもがやわい体でその上二日酔い未満のだからだるる具合。

ぼてぼてぼてぼてとしか進めない小さい体な僕だ。

◇

「はあああ………」

語尾にハートマークがつくってこういうことなんだろうなあって
感じの声が出た。

ものすごい勢いの洪水が過ぎ去る。

ぜんぶ出てものすつごくすつきりした。

排泄の快感ってアブノーマルだけど自然のことだからしょうがな
い。

ちなみに家の中じゃおしっこにはもはや恥ずかしきなんて覚えな
い。

それよりふとももに飛び散るのに対するやだなって気持ちの方が
大きいくらい。

このちっちゃな体のちっちゃな膀胱にどんだけ溜まっていたのか
不思議になるくらいの量の液体。

それが膝をくつつけてもできるふとももの根元だけ空いたすき間
から放出された結果が個室に響く。

……よく漏らさなかつたな、これ。

漏らしたら相当に凹むけどすごい量だ。

お酒のあとだからな、まあしょうがない。
いつものことだし。

おかげで寝起きだというのにアンモニア臭よりアルコール臭のほ
うが漂うくらい。

そもそもふとももでガードしているし臭いはほとんど感じずに済
むんだけど……それにしても良い匂いだな。

そんなどうでもいいことを考えながら出し切った僕は恍惚とした
まま脚をぶらぶらしていた。

あ、ぼーっとしてたらまた出てきた。

緩いもんねえ……。



台所でお水がぶ飲みして胃が重くなつた感じを抱えながらよたよたと洗面所へと戻って、身繕いを半ば無意識に習慣として始めていた。

こういうのって習慣になるとなんにも考えなくてもできるから楽で好き。

「よいつ、しょ……」

踏み台に乗って。

顔を、……寝てたくらいじゃ油も汚れも分泌されないからお水だけ。

カチューシャみたいなので前髪ともみあげを濡らさないようにしてじゃぶつと洗う。

こうして言っただけがすごい声上げてただけけど大丈夫かなあの子。

ゆりかは笑ってたし別に良いんじゃない？

「気持ちいいからってごしごしするのだけはやめて!!」ってかがりが言っただけだからそれだけは守って、タオルでぼんぼんと抑えて水分を吸わせるけど。

かがりにしつこく布教されたもんだからちよつとだけめんどくさいのをしている。

でもしないともしつこいからしょうがない。

化粧水と乳液のセットをしとすと肌に染みこませるようにぺちぺちしてリップクリームも塗る。

どうしても少しばかりは濡れる髪の毛も挟むようにして水気を吸わせて、前髪から左右、横から後ろ、下へと梳かして行ったらおしまいい。

最初は毎回「ちゃんとしたかしら……？」って聞かれるからしようがなくでしてただけど、いや、今もめんどくさいんだけど、体が勝手に動くようになったから続いているみたい。

胸まで下りている横からの髪の毛の先やおしりに乗つかる毛先ま

で体をひねりながら丁寧に、動物みたいに毛づくろいしてる僕自身が鏡に映ってるしな。

「……………」

習慣ってすごいよね。

多分1回でもやめたらもうしなくなるけど。

もっさりしている僕の髪の毛。

量が多いのもあるけど真面目にお手入れしてるからなんかふんわりしている。

なんにも考えないで無心に癒やされながらしているからなあ。

髪の毛を指で梳いていると、なんだか本に集中しているときのような指先までがじんじんと温かくなる感じになるのが不思議。

そんなことをとりとめもなく浮かばせながら鏡で枝毛の確認。

「よっ」と

踏み台のおかげでがんばると腰まで映るようになっていた洗面所。

前の体サイズの、着古しているけど安心する白いシャツでふとももまでしっかりと包まれていて、だけど中はぱんついつちよのだぶつとした僕が真っ正面から見ってくる。

感覚的にはボクサーパンツよりもブリーフで色もブリーフな女の子用ぱんつ。

「……………」

うん。

小動物のなかわいさだ。

やましいこと抜きでかわいいって思える。

今日も今日とて眠そうな薄い色の瞳が半分だけをまぶたで塞がれているように見える、ジト目に見えなくもない僕の、近視でも乱視でもない大きな両目。

去年あたりから出てきた飛蚊症……加齢でみんななるらしいね、怖い……まで消えて嬉しい両目の上の二重のまぶたからは、銀色の細くて長くなって毎日不意にちくつと目の中に飛び込んでくるまつげがわんさかと。

毎日何本か目に入って痛いのは勘弁してほしい。

銀色で細くって見えづらいのも致命傷だ。

いきなりだからびっくりと痛いので悶えるハメになるし。

まつげが長いのも良いことばかりじゃないらしい。

眉毛は、……たしかおとといに、かがりに遊ばれもとい整えられたから短め。

その上には1センチ以上切るとハサミさんが怒るさらさらつとした前髪があつて。

前髪の両脇の横の髪の毛が必要以上にぶにぶにとしたほつぺたと耳を包んでいて胸に掛かっている。

これこそ切りたいんだけど無理なのは魔法さんの意志なんだろうか。

そうして最後に後ろの髪の毛が白いシャツの保護色みたいに周りを囲んでいる。

後ろの髪の毛って1回内側に寄ってから外に広がるんだなーってこの体になって初めて知った。

というか現実にごここまで長い髪の毛の人ってそうそういないしな。身をもって体験しているようにとにかくお手入れで時間掛かるしめんどくさいし。

日によって形の変わる、ものすごくもさもさして内側にくるんとしている後ろの髪の毛。

それに包まれて銀髪幼女っていう生きものな僕。

属性を付け加えてみるのなら、北国カラーで無乳でなで肩で貧弱で全体的にぶにとしているけどやっぱり無乳で悲しい感じ。

そんな、少女未満の幼女。

でもときどき中学生くらいに見えるときがあつて不思議な見た目。

髪の毛さえ短ければ服装次第で、いや、裸でも下半身を隠せば男でも通じるって実証されている謎の体。

髪の毛を短かくできたら生えている方の性別って思ってもらえないくもない、中性的とも言える……男の子とも女の子ともつかない、そんな不思議な顔。

そんな顔が起き抜けで二日酔い気味で眠くて……な僕に張り付い

ている。

「……………」

そろそろまた髪の毛、切らないと。

鏡を見ながら髪の毛を何本かつまむと二股になったり折れていた
りする毛先が見えるもん。

……なんで枝毛つてやつ、こう無限に生えてくるんだろう？

男のときにはなかったのにね。

まああつたかもしれないけど短髪じゃ見えないか。

トリートメントとかしたことなかったし雑に拭いてたもん、数は絶
対多かつたはず。

その辺を無作為に抽出したら「その他」に分類されるような「ザ・
普通」な男だったから枝毛だらけでも誰も気にしなかったんだろう。

その方が気楽だったんだけどなあ……まだ戻らないのかなあ……。
枝毛。

髪の毛のうるおい成分とか言う謎の物体が足りなくなった先っぱ
が裂けてできるらしいそれ。

毎朝とかお風呂上がりとかに1本1本……はどう考えてもムリだ
からねじつて束にして確かめているんだけど、それでもどうしたって
枝っているやつは存在する。

ちよつとだけなら大丈夫だけど多くなつてくると途端にくるんさ
んの索敵に入るもんだから、すぐに小さいハサミとクシと拡大鏡を
持ってきて30分くらいは拘束されるハメになる。

そのあいだずーつと話を聞かされるしぐいぐい押されるしメロン
を押し付けられて重いしだから毎回メロンさんと会う前の日は忙し
い。

まるで恋人と会う前の日の女の子みたいだけど僕は男だしあの子
はそういう対象未満だし……うざったいのと切られすぎて魔法さん
がおこにならないかってひやひやするからしようがない。

かがりは僕のお人形さんみたいな長さがお気に入りらしいから
いっつも揃えるくらいしかない。

今までいちども発動しなかったけどあの子のことだ、いきなりばつ

さり切ってきてもおかしくないから気が気じゃないんだ。

そんな信頼がある。

負の信頼ってやつだ。

だつてくるんさんだもん。

……でもなんだって男の僕が髪の毛の手入れに苦労しなきゃならないんだろう……。

こうなる前はあんまり話しかけてこない人がいるとつても良い美容院で「いつもので」って言ってあとは黙りこくってたら「これで良いですか?」「良いです」って感じで無難な感じに短く揃えてもらっていたのにな。

多くて5回くらいしか会話しないからとつても楽だったのになあ……。

と、そんなことを考えながら櫛をすみっこに置いたらこつんと手に当たるものが。

「いたい……なにやつ」

イラツとしたらつい声が出た。

僕は不意打ちで危害を加えてくるのが嫌いなんだ。

ひりひりするところをさすりつつ元凶に焦点を合わせると、それは黒くて大きくて。

成人男性の手のひらにちょうどいい大きさと重さを備えた……ひげそりだった。

ひげそり。

シェーバー。

「……………」

持ってみたらずっしりと重い。

持っていたら手首とかヒジを痛めるかもしれない重さだ。だつて貧弱だし。

にしてもひげそりかあ……もう長いこと使っていないな。

あの朝が3月だから……もうすぐ半年。

ずいぶんだな。

きつと電池も切れているだろう。

使わないからどうでもいいけど。

それだけ触っていなかったからかそれなりにホコリも被っている様子。

「……………」

当分は、いや、下手したら魔法さんの機嫌次第ではずっと使えないかもしれないからしまっておこう。

ずっしりとした黒いそれを手に取ってしばらく眺めてちよつとだけ懐かしくなって、それから引き出しの奥の方へとぐいっと押し込む。

ひげそり。

名前の通りに毎日生えてくるひげを剃るもの。

「…………む」

すりすり両手でアゴとか鼻の下とか口の周りを撫でてみてもつるつるとした感触しか返ってこなくて、鏡にも当然につるつるでぶにつとした肌しか映ってはいない。

いくら待っても生えてこないひげ。

いや幼女のまんまそこだけ元通りになったら困るけど……。

でも朝起きたあとの手順に髪の毛の手入れが加わってからずいぶん経つけどその代わり、毎朝生えてきていたひげを剃ること自体を今こつんつてなるまでほとんど……いや、完璧に忘れていたんだ。

毎朝毎晩ここで視界に入っていたはずなのにな。
人って不思議。

人の認知って曖昧なものらしいね。

「……………」

眠いながらも自然としていたはずのひげの処理。

10年以上続けていたのに忘れるのはすぐ、か。

記憶も習慣も……過去も、きつととももろいもの。

こんなにもかんたんに薄れて上書きされているんだもんな。

どれだけ体に染みついてきた長い習慣だって、必要がなくなったらあつという間で気づくこともなく記憶から消えていってしまうんだ。

記憶なんて本当に当てにならないんだな。

忘れる、つて言うか思い出さなくなれば……それは次に思い出せる
までは無かったのとおんなじ。

次がなければ本当に無かったことになるんだよな。

めんどくさがって何日か放置したあとにときどき楽しんでいた無
精ひげのじよりじより感が、もはや懐かしい。

当分……いや、下手したら。

もうこれから先、ずっと……死ぬまで経験できなくなるんだな。

「……………」

そう思った僕はなんだかメランコリックになる。

男が女になる。

そんな非科学的な現象がまたひとつ、僕を別の存在にしたんだなっ

て……そう実感する。

銀髪の幼児。

女。

親も戸籍も親戚もなんにもない、ただの人間。

僕は……どうなっちゃうんだろうな。



22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 2 / 4

「んあああああ——……………夏休みも、今日でとうとうおしまいかあー」

ただでさえ小さいゆりかが溶けたような声を上げる。

「私たちの天下は早いものでしたなあ……………これが俗に言う三日天下か」

「ちがうと思うわよ？」

「細かいこた良いのよりさりーん……………明日休んでもいいかな？
なんかだるいの」

半分溶けている関澤さんの気持ち、よく分かる。

でも僕は学校がないからすごく嬉しい。

ニートしてると平日とかに特別な優越感あるんだ。

「けど、長いようで短いのよねえ。明日から学校って思うと憂鬱ね、
本当に」

「部活だけとは違って部活に加えて勉強だもの」と忙しそうな運動部のりさりりんさん。

「それに最後の1週間ってほとんど宿題に追われてたし、余計にね……………」

「それはりさりんがやってなかったからよ？ なんだかんだ終えて偉いけど」

「それについてはありがと。でもゆりか？ ほんとうにダメよ？
明日さぼったりしちや」

りさりりんさんもとい杉若さんが同じく溶けそうになりながらたしなめている。

まるで姉と妹だな。

精神的にも体格的にも。

「もちろん言ってみただけよ。あたりまえじゃん？」

「去年ずる休みして連休増やしてたのどこの誰だっけ？」

「さあ？ 私は過去を振り返らない女なのよ」

「こいつは……………」

さぼったのか……中学生にしてだらしがない大学生のような自主休
校具合。

さぼりつて癖になるから良くないって思うよ……？

ほら、僕みたいになるからね……？

「あああ重い！ 重いよりさりん!!」

「さあ？ 私も過去を振り返らないから分からないわ？」

「このおっぱいめ……中身ぎっしり詰めおって」

完全に崩壊したぱつつんさんの上にしさりんさんが覆い被さる。

夏休みでかなり伸びてぱつつんじゃなくなってるぱつつんの上

にしさりんさんのあごと大きなお胸が乗っている。

経験があるから分かるんだけど、人って重いんだよなあ。

お胸も見た目どおりに重いんだ。

それにしても仲いいなあこの子たち。

女の子特有の肌が吸い付く面積が広いつていう近すぎる距離感。

服越しでも弾力と温かさ匂いとが感じられる、くっつき合うゼロ

距離。

「うあ——……」

「来週から授業かあ……」

脱力しているからそのままふたりでさらにテーブルに吸い付く感

じでお団子になっている。

ふたりが元気だとうるさいし、ぜひともそのまま静かにしてい
ただきたいところ。

「ほんとうね……もう夏休みが……」

左に向けていた視線を今度は右へ向けてみる。

「何回も登校したし、部活もあったし。 ……もちろん普段よりは
ずっと短いけれど、でも朝早くに起きて電車で通って……。 なによ

り私、宿題だけすればよかつたはずなのになぜか苦手分野の勉強まで
去年のぶんまでまとめてさせられたから遊んだ気がしなかつたわっ
！」

話している内にぶんすかと怒り出す性質を露わにするかがり。

「やっぱり響ちゃんはスパルタよねっ」

めんどくさいから反応しない。

「むーっ」

「ふいっ」

……のぞき込んできて目が合いそうになったから適当にそのへんを眺めることにする。

いじけてる子供の相手は疲れるんだ。

どうやら下条さんにはそうとうに根に持っている様子。

いつか感謝する日が、……来るのかな？

来ると良いなあ。

来ると良いね、本当。

この子についてはすごいことに宿題が予定通りに終わっただけど、でもまだ僕が読みたいのが残っていたしもうしばらくで楽になるって思ったら、なんだかその気になって……つい、その……つい家庭教師のノリでこれまでの総復習もやらせちゃったから。

いや、その……タダで家庭教師してあげたんだから良いじゃん……？

ねえ……？

「この夏で一年半分勉強し直そ？」って聞いてちよつとぼかんってした後のかがりは、そりゃあすごいだだのこねようだった。

けどお菓子でしぶしぶな感じでちよろくなっていたし、これで勉強で困り切るなんてことは多分なくなるだろうこと間違いない気がするでもないって思う。

次の定期試験になるころにはその成果を実感できるだろうから、それまでは流しておこう。

きつと泣いて感謝……はしないな、その頃にはすっかり忘れているだろうし。

それどころか僕と1日中部屋でぐだつとしていたって記憶にすり替えられて、それを盾に揺すられるかもしれないからしつかりとメモしておこう。

証拠は大切だ。

口じゃ負けるから写真や文字という物証で勝負するしかないし。

でもこの子についての心配がちよつとなくなつてほつとしてる僕がいる。

だつてもものすごく心配だつたんだもん……いろいろと、いろいろと。

「……………そうですね。私も、そう………思います」

ぽつりと珍しい声。

僕よりも少ない口数で僕より静かなのが好きな、僕のお仲間の眼鏡っ子仲間な友達さん。

僕も含めてこのメンバーはすっかり慣れているからか彼女がなにかを言おうとしているときは静かになる。

さりげなくがポイントで優しさだよね。

僕もきつと普段は同じようにされてるんだろう。

「……………計画とか、立てていても。自分を、律して、自分の意思で………勉強をするというのは………その、とても、難しい………から……………」

結構賑やかな空間が今だけ静かになっている。

「……………あと下条さん………は。……………最初のころ、遊びすぎていた、

せい………私、心配、していました」

「……………え、私!? ひどいわさよちゃん!」

そこへ投げかけられる強烈な一撃。

ああ………この子つて会つたときからかがりの友だちだったから遠慮ないんだね。

仲が良いんだろうな。

なんでくるんさんと眼鏡さんが仲良いのかさっぱりだけど。

「……………だつて。私、何度も………連絡、しましたよね? ……ちゃんど、宿題してるかつて。何度も、何度も」

「え、ええつと………」

「響さんが、……………助ける、その前に、です。何回も………試験の時だつて何回もです………よ?」

「……………あ、あれはその、忙しくてつい……………」

「……………」

かがりが絶対に敵わない雰囲気を出している友達さん。
普段はかがりがぐいぐい押ししているようにしか見えないんだけど、
実は力関係逆なのかな？

左には鏡餅みたいになっているりさりんとレモンさんなりサレモンペア。

右にはメロンさんに詰め寄っている感じのメガネさんなメロンメ
ガネペア。

解放感と絶望感とでいつもよりも覇気がなくて静かだ。
とても嬉しい限りだな。

みんなが勝手にぼそぼそと話す感じのだるだるな空間だから、僕も
またぼーっとしていても平気なのも良い。

とっても良いんだ。
いつもこうだったらなあ。

そう思うけど……そう思うくらいに僕は打ち解けたんだろう、きつ
と。

「……………」

午前のファミレスっていう僕たち以外には店員さんも含めて数人
しかない、BGMしか流れていないとても静かな世界。

そのすみっこのほうのテーブルで、窓際で。

こうして外をぼんやりと眺められて居心地のいい場所。

……………ああ、……………とても幸せだな。

あるひとつを除けばとてもとても。

「あ、響ちゃんが嬉しそうっ」

「ごまかさないで……ください」

「でもどーせ聞いてないでしょ」

「響さんらしいじゃない」

まあでも僕としては、ようやく終わったって感じ。

懐かしい感じの、休みの前日のような体がむずむずするような感覚
までしているんだ。

だって、もう夏休みが終わる。

終わるんだ。

だから今夜はたっぷり呑もう。

学生たちのお守りっていうプロジェクトの完遂記念だ。

なんかぼったり会っちゃったばかりにゆりかとかがりに加えてりさりんさんと友達さんって言うJCさんたち4人に囲まれる日々。相手がたつた1人でも僕にとつては大変なのに4倍っていう修羅場を何度も経験して。

最後のほう……この1週間なんかはほぼ毎日外に出ていて話をしないといけなくて。

それも朝からお昼を食べての夕方までなハードワークをこなしてようやくだ。

心底ほつとするな。

……それもこれもひとまわり下の子供たちのお願いを断れないせいなんだけども。

ゆりかはまとわりついてきてせがむし、かがりはのしかかってきてせがむし……眼鏡さんと運動部さんもついできて顔して来るし。

「……………」

でも何で僕はいつもこうして……みんなに挟まれたお誕生日席に座らされるんだろう。

すつごく居心地悪いんだけど？

席順なんてジュースを取りに行ったりしているうちにばらばらになるものなのに、僕だけ無言の圧力で、ど真ん中にいさせられるのはなんでなの……？

しかもそれが当たり前前って顔されるし……眼鏡さんでさえそういう顔してるし……。

「……………」

「いつになく真剣そう」

「普段何を考えているのかしらねえ」

きっと女の子……いや、女子たちのあいだでなにかしらの同意があったんだろう。

僕にはさっぱりだけど。

女性のあいだには不文律が多いつて言うし、きっとそれと何か関係

があるんだろう。

慣れたらそこまでイヤなものでもないし、むやみに女の子の暗黙知をつつくマネをすることもない。

細かいニュアンスとかいまだにわかんないことのほうが多いしなあ……かといってわざわざ聞いても変な顔されるからやっぱりいや。

「そうやって……聞かなかったことにして………下条、さんは……いつも……」

「ご、ごめんなさいね？ さよちゃん」

そうやってぼんやりしているうちに友達さんがちよつとだけ涙声になっていたらしい。

それをかがりがあやして……それが収まったと思っただけゆりかがはやし立てている。

それをりさりんさんがたしなめるいつものパターン。

すつごくだるいからぼんやり過ごしてた夏休みでなんとなく目にしてきた光景だ。

この子たちって元気だなあ……ずつとしゃべってるもん。

文学少女さんでさえ話すときは話すんだしな。

やっぱり若さって貴重な時間だね。

「響ちゃん」

「ん？」

友達さんからのじーとした視線に耐えられなくなったのか、僕に注意をそらそうと企んでいるらしいかがり。

「お勉強。 今日改めて言わないとって思っていたの。 ほんとうに助かったわ。 ありがとう」

ぺこりと頭を下げてくるくるんさん。

さつきまでのふざけあっていた雰囲気から一転、まじめな感じになっっている。

「……あのままだと去年みたいに、たぶん。 昨日と今日で終わらせないといけなくなって、今ごろ宿題の範囲とかを聞いたりして……寝る間も惜しんで泣きそうになりながら模範解答を赤ペンで写す作業

に追われているところだったわ。……………それでも間に合わないから学期明けに先生に怒られて、つて。去年みたいになるところだったわ」

自覚はしているらしい。

この子は残念なだけだもんな。

「……僕が役に立てたみたいだね」

「ええ、とつてもよっ」

「それはよかった。それなら冬休みも覚悟しておくように」

「ええ。……………えっ？」

「おおう鬼畜う」

「さりげなさすぎたわね……」

「なる……ほど……こうすれば……」

「良いよ」つて言つたよね？

みんな聞いてたからこれで大丈夫。

この子のことだから……今日くらいはセンチメンタルになつてこんな殊勝なこと言つてるけど絶対すぐに忘れるのは間違いないんだ。だからきつと冬休みにもおんなじことしでかすんだからどうせまた頼んでくるだろうつて思つて先に言つておいたんだ。

どうせ頼まれるんだつたら先に主導権を握つておきたいんだ。

「けど、新鮮な気持ちつて言うの、私も分かるかも。その、今年もそうなりそうだったし……宿題残すのとか……」

りさりんさんも宿題は後回しにするタイプらしいね。

「こうして最後の日になにもしなくてよくつて、もうぜんぶカバンの中で揃えておくことができて明日寝坊さえしなければ良くなるだなんて。こんなの夢にも思つていなかったもの」

「あら、りさちゃんも？ 準備できているつて気持ちいいものなのね！ もうなにも怖くないこの気持ちつて、いいわね！」

なんだか似てる雰囲気醸し出す2人。

お胸のサイズも近いもんね。

「なんかいつにも増してやたらテンション高くない？ りさりん」
「気のせい気のせい！ 普段のアンタに比べたら全然よ！」

「……ま、その気持ちも分かるし……いつか」

「そうよー、いーのよー……」

完全にダメなかがりと、できるはずなのに観たい番組とかの誘惑にころつといつちやう系なりさりんさんがふたたび溶けている。

「……………あゝあゝ!!」

唐突に叫ぶゆりか。

いつものだけどいつもびくってするんだけど。

と言うかどつから出してるんだろう、その声。

僕が発音できないタイプの声だ。

おんなじ女の子の肉体のはずなのに。

「去年のりさりんは『小学生のときみたいに宿題が終わらないから、ゆりかサマ助けてくださいませ……』って私を頼ってきたの唐突に思い出した!!」

「ねっ造すんなってのー!」

『おバカな私にはぜんっぜんわからないからお願いしますうー!』つてすがりついてきていたのに! ……りさりんを、私のりさりんを響に……たったの1週間ぼっちで取られたあ——!!」

「そんなことしてないし言っただけなら! 少し教えてほしいって言っただけじゃない!!」

「……………ゆりか。他の人に迷惑だよ?」

ついでに僕にもすっごく迷惑。

「えー? こんなにガラガラなんだし、いーじゃないひびきーん。

本気の大声じゃないしき。響もはっちゃけちゃってもいいのよ?

……夏休みの終わり……ふいなーれよ? 一生に1回の中学2年の夏休みが終わるのよ?」

ごめん、僕にとっては2回目なんだ。

「……………店員の人も見てないけど……いい加減にきなさい、ゆりか。

あと記憶を勝手に改ざんして触れ回るのもう止めてね? 私の名前みたいに着しちゃうから。しちゃうから……」

「あるえー? 間違ったかなあ?」

店員さんたち。

学生のこういうのに慣れているのかそれともやる気がないのか、僕たちには鋭い視線も向けて来やしない。

こんなに騒いでるのにな。

こんなにいるさいのに注意してくれない。

「……………」

そう思っただけで黙ってたらやっと思っただけで目が合った。

これで注意してくれるはず。

「……………」

「……………」

……………ふりふりって手を振られた……………大学生くらいのバイトさんに……………。

やっぱり女の人ってこういうのに寛容なの……………？

企みが潰えた僕はしよげて会釈だけしてテーブルに視線を落とす。

僕は失敗したんだ。

「あの……………響、さん」

今度は眼鏡さんが話しかけてきた。

普段は必要なことしかしやべらないのに今日は元気だね。

「……………私も、えっと、……………ありがとうございます」

「君は、ほとんどできていたじゃないか」

かがりのついであって言うよりは監視目的っぽい感じできるときき来ていた友近さん。

僕並みに空気に溶け込むからとっても気楽だった。

「でも、その。わからなかったところ、とっても、えっと……………わかりやすく、教えてくれて……………」

恥ずかしがり屋なメガネさんはいつも通りに視線を微妙にずらして話しかけてくる。

その気持ちはとってもよく分かる。

まるで学生のころの僕だもんな。

目を合わせるのってけっこう体力と気力要るよね。

「そうよねえ。 響ちゃんの教え方ってわかりやすいわよねっ」

何でか知らないけどやたらと嬉しそうなくなるんさんが割って入っ

てくる。

「解けないからと言って急かしたりしないし、教わったこと忘れちゃっても怒ったりしないし！」

「……………安心、できますよね。……………去年退職されてしまった、算数、じゃなくって、……………数学の先生みたいな感じで……………」

「それよ！ あの人みたいでがんばろうって気になるのよ!!」

「かがり、声を落としたほうがいい。うるさいよ」

耳の穴がびりびりするんだ。

僕の鼓膜は敏感なんだ。

「あ、響ちゃんっ！ 照れてるの？」

「照れていない」

違うんだ、君の声が単純にでかいんだ。

その胸に比例する感じででかくて困るんだ。

「………………………………………」

……………けど。

騒がしいみんなとは対照的に、僕の胸の奥は少しだけちくちくしている。

中学生たちに……………それこそカンニングみたいなことをして、したり顔で教えていたツケが今来ているんだ。

いちど勉強したことだっていうカンニング……………チートを隠してきも「最近勉強したんだ」って顔してたのが。

照明のせいかメガネがきらきらしている友近さん。

一身上の都合上どうしても見下ろされる形になるかがりと杉若さん。

目線がちよつとだけしか上じやないから安心できるゆりか。

みんなの視線がむず痒いし、……………痛いんだ。

いくら飲み込みが悪かろうとなんだらうと、他人に怒らずに教えるというのはただのスキルだ。

別に僕が特別なわけじゃない。

数少ない、僕が社会に出た経験が少しは役に立ったのは嬉しい……………けど。

でもしよせんは責任なんてないただのバイトだからそこまでだし。
「……………」

僕って嬉しいときに限ってやなこと考えてわざと気持ち落ち込ませちゃう節がある。

でも今日くらいは抑えたいな。

「？」

とりあえずなぜかずつと僕を見ている文学さんに言っておく。

「僕は君には、友達さんはほとんど何もしていないよ。応用問題くらいだったじゃないか？ それも、ほんの少しですぐに自力で気がついていたし。 ……僕はたいしたことしていない。 気にしないで良いんだ」

「そんなこと……ない。 ……と思いますけど」

そんなことあると思う。

「……ま、いちばん大変だったのはかがり。 君だったな」

「響ちゃん!？」

こういう微妙な気分なときには気軽に文句を言える相手が良い。

普段迷惑をかけられているからこそ遠慮なく投げつけられるんだ。

「まさか問題集を探すところから始まるなんてな。 ……初めて部屋を訪れた知人に、まず宿題そのものを一緒に探して……なんて初めて聞いたよ?」

「ちよつと響ちゃん、みんなの前で言わないでっ! 恥ずかしいじゃないっ!」

「……やっぱり………だから学期末に声をかけたのに……」

「さよちゃんも響ちゃんと一緒にならないで!？」

「おー、珍しく静かな2人がノリノリ」

「2人も嬉しいのね」

ちよつとちがうけど………こういう悪ノリも悪くないって思う。

本当は中学生じゃなくて大人だし明日からも夏休みがずっと続き……女じゃない僕だけだ。

今日くらいは………こうしていても、良いよね。

22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 3 / 4

「もう、響ちゃんってばひどいわ……」

秘密を暴露されてわたわたしているかがり。

腕と一緒に胸までわたわたしているのはさすがだな。

ほら、レモンさんの目がすごいことになってる。

「いや？」

確かに君の前で言ったのは今だけど。

「ここでみんなの分の宿題を……この1週間で見ていただろう？ 休憩のときとかに聞かれたから話したし、みんなとつくに知っているよ？」

「……え？ 嘘……みんな知っているの？ ……嫌——!？」

本当のことは言っておかないとね。

そもそも言わないでっていわれてもいないし……多分みんな知ってたし。

ついでに着せ替え人形にした報いを受けるがいい。

こんなのはそれに比べたら些細な問題だよ？

「意外だよー。知らない人が私たちをぱつと見たとしてさ、いちばん頭よさそうでまじめそうなさよちゃんはそのまんまでー、りさりんもサボりがちだけどまーフツーにできてー。なのにしっかりしてそうなかがりんが実は……って。黙ってればモデルさんみただから余計にね」

メガネ友近さん、りさりん杉若さんから相当離れてかがりだもんな。

学年すら下に見られるゆりかとか僕の方が勉強できるって言うのもびつくりされそう。

「ゆりかちゃん？」

「あは、ごめんごめん」

「もうっ」

この子たちには随分振り回されたけど、でもこういうのを見ているのはなんていうか和むよね。

仲の良い人たちって言うのは見ているのだけで癒やされる。

そこに僕が入る必要はないんだ。

お互いが「友だち」だって思える距離がはじめから近くってすぐに仲良くなれる学生って言う歳ごろの子たち。

女の子だつていうことを差し引かなくても、よく考えたら「席が近い」っていう理由だけでなにも考えずに仲良くなっていたもんなあ、学生の頃って。

そういうのって良いよね。

まあ僕の歳でも普通の人なら近くに居れば自然に世間話から仲良くなるんだろうけど……ほら、僕はプロのニートやってるし。

「……………でも、響さんって。ほんとうにすごい……………です
ね」

ドリンクバーとかトイレとかで何度めかの席替えが起きて……角を挟んで隣に来ていたららしい友達さんが僕の手を取る。

「？」
視線が眼鏡さんの眼鏡と長い髪の毛とお手とを2回くらい往復する。

いつもびっくりする……だつてみんな距離近いんだもん。

僕の種類だつて思ってたこの子でもこうして隣に座ったら手を握ったりするんだ。

でもなんでまた急に？

あと手、冷たいなあ。

冷えてる？

そんなに寒いかな、冷房。

自然な感じで体温に合わせてひんやりしがちな僕の手よりもさらに温度が低い彼女の手。

まあこの子の性格からすると自分から人に接触するのって、緊張するだろうしなあ。

特になにも思っていないよっていう態度をしておいたほうがいいだろうか。

あいかわらずレンズの向こうの視線は、……………ああなんだ、僕の

顔じゃなくって髪の毛見ていたのか。

……枝毛、まだ残ってるのかな……それがずっと気になってたのかな……？

「あ、ずるいわ！ さよさん！ 私も……むぎゆ」

「はいはい静かにしましょうねーあなたの親友が勇気出してるのよー？」

「りさりんって気配り屋さん☆」

「むー」

かがりの「ずるい」は防がれたらしい。

なんでも「ずるい」って言うもんね、君。

「響さん、みなさんの宿題を……解答がなかったりするときでも、ほとんど……ノーヒント、で。分からないところを……ていねいに教えてくれて。……そうでなかったとしても、その、答えの……当たり……でしたっけ。それを、つけてくれて……」

「そうなのよ！ 響ちゃんつてば……うひゃっ!? あなたたち手冷たいわっ!? ……あ、でもひんやりして気持ちいいわねっ」

くるんさん……だからくるんさんなんだよ……。

でもそういう気楽さって羨ましい。

「……………」

呆れているらしい2人にお口チャックされたらしいかがりさん。

そんなくるんさんを見てたら……冷たい手に握られたままだった僕の左手が、今度は上のほうからいきなり温かい感触でサンドイッチされてまたちよつとびくってした。

「なにやつ？」って思ったらその手の持ち主はりさりんさん。

どうしたんだろう、この子は意外と距離置いていてくれてありがたい系なのに。

ゆりかがフリーハンドになってるよ？

良いの？

それにしても体がでかい。

なんて言うか肉付きがいいって言うの？

かがりが柔らかい系だとしたらりさりんさんは弾力がある系だ。でもきつとこの子くらいが普通のJCさんな体してるんだろう。

テーブルの向かいまで身を乗り出せば届くリーチがあるって良いなあ。

あとやっぱり、りさりんさんからは他の子とは違う匂いがする。

あ、体育会系だしスプレーとかかな。

他の子はしてないみたいだし、きつとそう。

僕はインドアだったし汗も前から少なかったから縁がなかったけど、女の子用のそういうスプレーならこういう匂いがするのかもしれない。

なんか良い匂いだね。

今度買って試してみよう。

「本当、響さんってすごいわよね。ヒマなときとか高校の教科書

……じゃなくって参考書とか問題集よね、あれ。眺めるように勉強しているのすごいって思っていたの。ちよつと見ただけで公式とか理解して単語とか覚えるのって信じられないんだけど、実際にそのあとすぐすらすら解けているものね」

「……………ああ、いや」

まずい、この子も僕を褒めようとしている。

「いや、それは」

「ほんと小さな……響、なにか言った？」

「いや、良いよ」

声が被ったら相手に任せるのが僕だ。

話題変えてくれないかな。

「あ、良い？ そ？ ……響ってちっちゃな先生みたいだよねーって。マンガとかでたまにいるレアキャラの『先生だよー！』ってムキになってかわいい感じの。私から見てもちっちゃいんだしって思ってたさ」

「……………」

悪化していた。

「ゆりか、全校集会で毎回1年生だつてまちがわれるもんねー?」
「言うでない。……………りさりん、もぐよ? そのたわわを」

「え? なんだか怖いんだけど……………ちよつと、いつもの冗談じゃない」
「……………小さくても、その、かわいい、ですよ? ふたりとも……………」

「フオローになってないよ? さよちん。あとそれは私と響に効く」

「……………効く、んですか? え? ……?」

「……………あー、ごめん、忘れて。なんでもないの」

ネットスラング……………でもないのかな、この世代だと。

でも知らない子は知らないから止めた方が良いでしょう?

この中でそういうのが分かつてるの、たぶん僕くらいだから。

僕も詳しくはないけどさすがに年季が入ってるからちよつとは分かるんだ。

「でもさー、響つてここのテーブルの高さだと微妙に背丈が足りないのよねー」

ゆりかが背中を丸めて僕の真似をしているらしい。

「このへんでいちばん私たちサイズのテーブルとイスあるお店のなにそれでも足んないの、座高。んで、勉強教えてくれるときはひざ立ちになったりとかテーブルに恐る恐るって感じで乗り出したりして教えてくれるのよ! それがちよつと背德的つていかなんていかなのよねー」

「……………わかりますっ」

「さよちんも分かるかね」

「ええっ」

眼鏡がきらりと輝いている。

今のどこにきらりポイントがあったのかいまいち分からない。

「んでこういう話するとちよつといじけるのよねえ響ったら」

「いじけてなんかいないよ」

「なるほど、これがギャップ萌えというやつで! マンガでは定番だ

けど、こーリアルだと破壊力がちがうねえ……!」

「だからそんなのじゃない」

明日から学校だからか妙なテンションのゆりか。

「またまたー」

「こら、人が気にしていること言わないの!」

そこへ割り込んでくれる常識人なりさりんさんは良い人。

「あんだだって自由研究まとめるの途中からつきつきりで手伝ってもらってたじゃない、恩を仇で返さない! すぐに調子乗るんだから」

「あ、それについてはほんとにほんとに感謝してます響せんせえ。」

でもちっちゃい同志は譲れないねえ」

「何の話よそれ……?」

本当元氣だなあこの子。

かがりとは別の方向性でのめんどくささもああるけど。

現役のJCって言うこの世界でいちばん元氣な存在は僕にはまぶしすぎる。

「まあ僕はこの通り、体も弱くて発育不良でそのうえ家の事情で満足に自由ができない身だ。これくらいできないといけなかったからな。環境の違いだよ」

この子たちと僕との違いを並べてみると結構な差があるな。

不自由って言う一点でしか合ってない……はずんだけど妙にしっくり来る僕の詐称。

「ひゅう、かつこえーのう。自然に真顔で言つてのけるのよ」

「……………今のセリフ! 忘れない内につ……………!」

「ハンデをもつてもしないで……………すごいです。見習わない、と……………」

「フツの中2の発想じゃないわよねー。大人びてるって言うか」

うそつぱちの僕を褒める流れを変えようとしたら不発だったみたい。

かがりはなんか急いで手帳……………学生手帳って懐かしいなあ……………を
広げて今の言葉を書き留めているらしい。

なんかこの子、独特の感性してるよね。

「……………」

ふと世界が遠くなる感覚。

本当にふとした瞬間って言うのでこうなるの、ときどきある気がする。

しらけたともまた違うような、なんて言うのか良く分からないけどそんな感じ。

僕自身はちゃんとここにいるのにちよつと上からそんな僕を見下ろしているような不思議な感覚。

そんな僕を囲むようにしている女の子たち。

中学2年生の、10歳下の子たち。

近い順に目を向けると、会話が始まってから少し経って場が温まってきたころからぼつぼつと混ざれるようになる、引っ込み思案で度の強いメガネ仲間……元、だけど……そんな友近さよさん。

身長がこの中でいちばん高くても二の腕とかが健康的に引き締まっているからよくよかさでは負けている、ツツコミ体質なりさりんもとい杉若りささん。

ひたすらに書き貯めたらしいセリフを音読し始めてみんなにドン引きされつつあるメロンさんこと下条かがり。

というかそういうところだけマメなんだね……それを普段から発揮したら良いんじゃない……？

そしていちいち小さい体を動かしてアピールしている「小さいもの同志」がポイントらしい関澤ゆりか。

ちよつと元気すぎる感じだけどバランスが取れているようなこの子たちのお世話はけつこう大変だったんだ。

それはもう夏休みに過ぎた記憶が結構抜けているくらいには疲れただもんな。

きつと僕の脳みそがストレスだからってシャツトアウトしてクラウドにでもアーカイブ化したんだろう。

「……………」

「響って考えてるとききよろきよろするからすぐ分かるよね」

「あ、そうよね！」

「私、分かる気がします……」

「没頭するタイプなんでしょ。あんまりじろじろ見ちゃダメよ?」
それでも結局毎回集まるたんびに褒められていろいろな罪悪感で胃がしくしくするの……変わらなかつたなあ。

僕は人から褒められ慣れていないんだ。

でもなあ……やっぱりなあ。

もうどうしようもないことではあるんだけど、でもやっぱりどうせだつたらちゃんとした出会いをしてちゃんと自己紹介して……嘘じゃない僕自身の、本当の僕自身のこと褒められたいって思うんだ。

女の子にならなければこの子たち相手にこういう気持ちにはならなかつたんだろうけど、でもやっぱりそう思う。

仲が良くなつちやつたから余計に。

そんな考えがぐるぐるって回るのがこの夏休みって言う期間のことだ。

でももうすぐ終わるからちよつと楽になるのかな?

「小さいと言えば」

「ああん? りさりん私にケンカ売ってんの……?」

「なんでいきなり怒ってるのよ」

「いや、なんとなく? とりあえずりさりん相手には怒つちやう乙女心」

「そんな乙女心なんて捨ててしまいなさいゆりか。あんたのことじゃなくって響さん」

ん?

また僕の話に戻った?

「響さん、ごめんね? なんかこんな雰囲気だから言つちやうけど、響さんってこの中でいちばん……精神年齢みたいなの? 学力もだけどそういうのhighって感じるの。でも見た目のせいでどうしても、話したことのない他の人たちからは私たちのなかでいちばん小さくって……その、幼く見られちやうって大変だなあって。店員の人とかの対応見るとなんだか不思議な感覚になつちやうのよ」
りさりんさんの口が良く回っている。

精神年齢が高いと言われてちよつと嬉しくはなった。
りさりんさんはいいい人だ。

過剰に吸い付いたりしてこないしそこまでうるさくないしいい匂いだし。

「この店員の人……場所がいいからって、いつもここで、集まりましたけど……その、おかげで覚えてもらえましたけど。」

最初の何回かは……えつと、お子様ランチ、セットみたいなものとか……サービスでジュース、とか勧められていました、よね」

「仕方ないさ。人は見た目だから」

小さいって言うのはそういうこと。

この体になつてよくよく思い知ったんだ。

何度も来たおかげでここでならこの子たちの同級生、中学生なんだけって認識してもらえるようになったけど……他のところに行けば毎回リセットだ。

……そもそも会って話す約束をさせられて何度も来させられなければこんな思いをすることはなかったんだし、夏休みなもんだからこの飲食店も高校生とかのバイトの人が多くって必要以上に子ども扱いをする人が多かったんだし。

仕方ないとは言つてもやっぱりうざつたい。

どうにかならないかなあ。

「僕だって同じような光景を見たら同じような感想を持つだろう。仕方ないんだ」

僕が店員さんだったとしたらそういう対応するだろうしな。

しようがなくなつたつていらつとする感じ。

これがコンプレックスというもの。

僕が20年以上縁のなかつたものだからしようがないんだ、うん。

でもこの4人の後に続いて歩いてると……ほぼ確実に誰かの兄弟つて思われるんだよなあ。

判定すれすれのゆりかはともかく、あとかがりはたぶん高校生だつて思われるだろうから中高生のグループに小学生が連れてこられているんだつて、そう思うんだろう。

かがりとゆりかが居るおかげで集団の見かけ上の年齢幅が広がる
せいで僕が下に見られるんだ。

移動中は手を引かれることが多いのも原因だろう。

大半はかがりで、ときどきゆりかにまで引つ張られるもんな。

お店でもみんなに任せて注文とか言ってもらうからなおさらなの
かもしれない。

けど注文する前に「何にするか決めた？」って聞かれて答えたの、僕
が口にする前に言われちゃうからなあ……楽だけど。

もう少し発話を早くできるような練習、気が向いてでいいからして
おいたほうが良いかも。

今まではどうでもいいやって思ってたけど、こう毎日のように子供
扱いされるとさすがに危機感を覚える。

人は本気で危険って思わないと真剣になれないもの。

危機だって感じている今がチャンスだ。

「響って割り切ってるねえ。それはもしやおとぎ話な社交界とかで
会得した心の強さなん？」

「そんなものに出た覚えはないよ？」

「ちい……そう簡単に口割ってくれないなあ」

「だから違うって」

ゆりかもゆりかで僕に属性を加えようとしてくるし……やっぱり
話す練習、しよつと。

1日1分くらいがんばれば良いよね。

22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 4 / 4

会話しているときにふと訪れる「間」ってあるよね。

ひとりきりなら当たり前な時間なのに、なんでか他人と居るとそれが気まぜくなるものらしい。

「らしい」って言うのはかがりとかが言ってたことってことで、僕にとってはおもしろ嬉しいもの。

だって静かって良いものだもん。

なんなら1ヶ月でもじめつとしていたい。

目的がない会話ほど詰まらないものはないんだ。

「せっかく夏休みになってからみんなが知り合って友だちになれたんだからよ?」

そんな時間が苦手らしいりさりんが無理やりに思いついた感じで言い出す。

「来年はみんなでどこか……あ、もちろん夏休みのことね……遊びに行きたいわね。いえ、冬休みとかでも楽しいって思うけど」

そう言えば1人旅って女性はあるんだろうけど、それ以上にらしいね。

もちろん治安の関係もあるんだろうけど、それ以上にひとりですつといるのが耐えられないらしい。

僕には全く理解できない感覚ではあるけどこの子たちを見てきて「そういう生き物だよな」って納得はできる。

ひとりでお昼食へに行くとかゆりかくらいじゃない?

そんなことできるの。

だってトイレだってみんなで行く種族だし。

「おう、りさりんいいこと言うねえ。たまには」

「ゆりか?」

「急に猫まで声怖いからやめて!! ……あ、でも考えてみたらさ、ついこないだまでみんなばらばらだったわけだもんね。同じクラスのりさりんと私でしょ、かがりんとさよちんでしょ、あとは学外の響ってことで」

その僕もこの春までは存在しなかったわけだもんね。

物理的に。

だって成人男性と幼女って完全なる別の存在だし。

「ともかくさ、響がいなかったらこうしてみんなが友だちになれて、こーやってぐだぐだしてたり勉強会したりして集まって話すなんてできなかったんだよね？ 多分」

「そうねー、私も友近さんは移動教室で知ってたけどそれくらいだったし」

「わ……私も、杉若さんのことは顔くらいしか……あ、ごめんなさい……」

「良いのよ、私だってたまたま覚えてただけだし、友近さんの名字」

別のクラスで特に仲が良いわけでもない相手の名字を覚えてるだけですごいんだけどなあ。

僕なんか同じクラスでもほとんど覚えられなかったし。

卒業して大分経つ今となっては誰が誰だったかすら思い出せないし。

「そそ、そんなわけでき、私たちは顔くらいしか知らなくてしかも響は別の学校で。違うかー、違う出自ってのだし！ なんだかうまい表現が思いつかないけど、とにかくなんか感慨深いなーって」

魔法さんに生み出されたのを出自だって言えばそうなるね。

「……いいわねゆりかちゃん!! 青春よ!!」

「おう元気だねえかがりん」

くるんさんのくるんがより一層にくるんくるんしている。

……この子、まだ遊び足りなかったのか。

「明日から新学期も始まってしまいうからすぐには難しいけど……みんなまで遠出したりお泊まり……そう、パジャマパーティーを!! 私、パジャマパーティーしてみたいわ!!」

「お………おおう。 かがりんは大胆だねえ………」

唐突に話を飛躍させるかがり。

……うん、まあ、君はそういう子だよね……。

良くも悪くも人との距離感がゼロっての。

良くも悪くもな。

「お泊まり、ですか……………」

「え、ええつと……し、下条さん、それはちよつと……」

お泊まり発言に引いている友近眼鏡さんとりさりんさん。

友近さんならともかくりさりんさんの反応を見るに、女の子って言つても意外とすぐにお泊まりし合う関係になるわけじゃないのか？

あー、かがりをスタンダードって思っちゃいけないのか。

どっちかって言うのと小学生男子に近い感性のゆりかとかこの子とかより、ちゃんとした感じのりさりんさんを基準にした方が良さそう
な気がしてきた。

「あら?? みんなでパジャマパーティーとか憧れるじゃない?」

その反応にはてなしか浮かばないらしいくるんさん。

「おしゃべりしたり映画とか観たり、怪談とか恋のおはなしで盛り上がったりしないのかしら?」

「まじですかい。……かがりん、いや、かがりさんマジパねえ……」

ゆりかが真顔になるほどらしい。

なるほど、本物のJCでも知り合つて1ヶ月程度じゃお泊まりはしない。

僕はひとつ学習した。

「? ゆりかちゃんどうかしたの?」

「見よ、りさりん……あれがマジもんの天然ぞ?」

「すごいわねえ……………」

ぼそつとささやきあうゆりかとりさりんに向けておにぎりみたいなお口をしているかがり。

なかなか珍しい光景だ。

でも、おにぎり口が久しぶりに見れたけど僕、かがりは天然じゃないと思う。

きつと、ちよつとだけ……………いつも夢見心地なだけなんじゃないかって思うんだ。

だって本物のそういう人として多分僕話が完全に合わないって思うから。

いや、かがり相手もなかなかに厳しいんだけど……。

「わ……………私もっ」

眼鏡さんが急に大きめの声。

うん、緊張していると声とかびつくりするくらい大きくなって裏返るよね。

でも落ちついて？

何か言いたいことあるんだよね。

ちよつとびつくりしたけどかがりに比べたらなんてことはないから平気。

「……………私も、運動はまだ、控えるように言われていますし、すぐに病院に……………連絡が取れないと、いけないので。あ、あまり離れたところへは、難しいです、けど……………近いところとか、誰かのお家だったりとか。だったら、ぜひ、ご一緒したい、です」

ひと思いに吐き出してほっとしている様子がほほえましい。

……………でもこの子は僕とは違ってほんとうに体が悪いらしいからいろいろと大変そうだな。

顔真っ赤にしてるけど心拍とか血圧とか大丈夫なんだろうか。

僕はニセモノだからいざってなってもどうすればいいのか分からないし、とりあえずはすぐに救急車呼べるようにはしておこうかな。

学生時代の僕を彷彿とさせるシンパシーを一方的に感じさせる子だし普段は静かだし、何よりむやみに頭とか手を触ってこない良い子だからとても心配なんだ。

かがりに対するそれとはまた別の方向性の父性を感じる。

「海はもうシーズン過ぎちやうけどさ、山はこれから見頃だしね？」

紅葉とか。電車で近くまで行けて、そこからバスとかロープウェイで直接行けるとこならみんなで行けるんじゃない？」

「山ねえ……………良いわね」

「でしょでしょー。私、小学校の行事以外で行ったことないしき、頂上とかでほんとに『やつほー』って返ってくるのか知りたいんだー」
「そうね！せつかくですもの、遠出……………疲れてしまうから遠すぎない範囲ね？ 気楽に行ける範囲でみんなが楽しめるところがいいわ

ねっ！ 響ちゃんときよちゃんが平気なところなら！」

「でしよー！」

メロンとレモンの相乗効果が生まれ始めている。

「……………でも、下条さん……………私たち、これから運動会と学園祭が……………あとは中間試験も」

「さよちゃん。その先は駄目よ。そんなことを考えてはいけけないの」

「え？……………あ、はい」

でもくるんさんはやっぱりくるんさんか。

「あーそっか、それもあつたわね……………冬休みまでの2回の定期試験。夏休み明けだから 容赦ないのよねー先生たち」

「りさちゃん！ 今から嫌なことを考えてはいけないのよ！」

いや学生さんなんだから勉強はしなきゃでしょ……………？

夏休みが終わる日から遊ぶこと考えちゃ駄目でしょ……………？

「下条さん、諦めなさい？ というか勉強、響さんに教わって今までの範囲大丈夫なんでしょ？ 軽ーくやれば良いのよ勉強なんて、軽ーくやれば」

「りさりんりさりん。それりさりんが言うのかい」

「へ、平均点目指せば良いんでしょ？」

「うう……………でも、勉強はやっぱりイヤあ……………」

「下条さん、……………が、がんばりましょう……………」

なんだかんだでりさりんも大変そう。

ゆりかと友……………さよさんは平気そうだけど。

「でも、そうねえ……………試験もあるし学校の行事もあるしでなかなか難しいのねえ。これからの時期は台風とか多いし、予定立てづらいわね」

「だねー、りさりんとかは部活の大会とかあるし」

話の流れは遊びから学生生活の忙しさへ。

よかった、泊まりがけて僕も加えられての外出は避けられそうだ。

決まりそうになったらどう言い訳しようか焦っていたけど大丈夫そう。

いやだって、こうして昼間に出かけるだけなのとお泊まりなんてのはさすがにぜんぜん違うし、いくらなんでも僕がいちやいけないうしよ。

僕は成人している男、それも親御さんが知ってる人間でもなんでもないんだから事案でしよ。

いや、今は幼女ではあるんだけどさ……社会的には存在しない人間なわけで。

あとそもそもとして僕の体力的に厳しいところがありそうだしな。そうなりそうな雰囲気になったら病弱仲間な友近さんと協力して……なんとか近場で、それもお泊まり無しの日帰りで被害を抑えたいところだ。

熱い視線を眼鏡さんに向けてみる。

「……………? ………………」

なんか逸らされた。

恥ずかしがり屋さんだもんね。

「試験もあるし2学期は忙しそうね。 ならやっぱり私はお泊まり会を推すわ!!」

なんで?

「うちならいつでも歓迎よ! なんならこのまま今晚でも良いくらい!?!」

「いやいやまずいでしよ……なんでこの子はくるんくるんしてるの……。」

「かがり」

「響ちゃん!」

「明日は学校で早いんだらう。 僕はともかく君たち4人そろって寝坊したらどうするんだ」

「うぐつ……で、でもお」

「だいたい泊まりだと親御さんの負担がある。 それを気にした方が良いし、泊まる側の親御さんも事前の挨拶とか準備が必要だろう?」

お泊まり会とかするときに最低でも親同士が知り合いじゃないとめんどくさいらしいよ?」

「……響ちゃん、ひどいわあ。せっかく思いついたのに」

「事実じゃないか。始業式に遅刻したらどうしようもないよ?」
実際どうしようもないよね。

この歳でサボり癖がついたら高校生でプロノートデビューもあり得るんだ。

この僕が実際に大学生あたりからサボり癖ついたからこそ断言できる。

「……うーん、お泊まり会かあ……」

「どうしよ、りさりん。このままじゃ」

そんなくるんさんを置いておいてぼそぼそ話してるゆりかとりさりん。

何かこの体、聞こうってすれば結構聞き取れるんだよね、ひそひそしてるの。

目も良ければ耳も良いの?

身長以外に欠点ないの?

あ、胸がないのは致命的な欠点か。

「お泊まり……大丈夫かなあ……? ねえ、ゆりか」

「悩むねえ」

「私はそこまで心配じゃ……まあそういう感じ全然ないし、私はあつても」

「りさりん?」

「前にも言ったじゃない、凄まないですよ。だから私はそこまで抵抗ないんだけどゆりか、あんたは」

「そだねえ……かがりんってけっこーそういうところ無頓着だからねー」

体育系の部活なら合宿とかで慣れてるって思ったけど……そうでもない感じ?

まあ前からの友だちなゆりかの家に1泊とかなら平気だろうけどそうじゃないもんね。

「あんだだけ参考資料ため込んでんのかなーんで自分は平気なんだからねえ、かがりんってば。だって少女漫画って結構……」

「だから天然さんなんじゃない？ 悪い意味じゃなくって」

「分かってるって、りさりん人の悪口言わないし。……ま、平気じゃない？ 間違ってもかがりんが企むとかないでしょ」

それにしてもりさりんさんとかがりって仲良いよね。

よく分からないけど結構真剣に話し合っている。

「……………」

あ、それ見てる友達さんがうらやましそうな眼鏡の光らせ方してる。

かがりは……トリップしてるからどうでもいいや。

「あらあらー？ ゆりか、まだちよーつとそういうの早いんじゃない？ まだ中2なのよ？」

「うるせいやい」

何が早いんだろう。

お泊まりが？

いや、仲良ければ小学生どころか幼稚園児でも……って言うのはもしや世代の違い……？

「私はともかくさ、かがりんの行動を警戒したほうが良さそうよ？」

だってさ、あのけしからん胸見てよ。あれが夜中にずーつとそばにあつたら方が一が起こりえる可能性が！

「こら、セクハラ禁止。公共の場よ」

「あい」

とりあえず楽しそうで何より。

僕ものけものにされてぼーつとしてられて何より。

なぜか勝手に落ち込んでたくるんさんをなだめている黒縁メガネさんと、反対側でなにやら盛り上がっているらしいぱつつんさんとりさりんさんのあいだでずーつとジュースをすする僕。

やつぱり女の子の感情のツボってやつ分からないなあ。

「……………」

それにしても気が早い。

まだ夏休みが終わるばかりなのに、もう次に遊ぶの考えてるものな。

まあ明日からの学校生活をぎりぎりまで忘れていたいただけなんだろうけど。

でも……どうしよう。

少しずつ距離を置くつもりだったんだけどこの夏休みでむしろ近くなっちゃったまであるし……ここまですると、そうすぐに別れようとは思えなくなって来ちゃったしなあ。

……このままずるずる付き合っているうちに魔法さんが僕を元に戻してくれるか、このまんま少女の姿のまままでいさせられてぜんぜん成長しなかったりして不審に思われはじめるまで2、3年と言ったところかな。

なにしろなった経緯が経緯だから分からないんだよなあ……ほんと、每晚お願いはしてるのになあ……いつ戻っても良いように家の中じゃシャツ1枚って言う準備万端っぷりなのになあ……。

僕からしてもそこそこの期間だし、たまになら……ごくたまになら気晴らしとかでこの子たちとどこかへ行くのも悪くないって思ってたあたり情が湧いちやっただなあって思う。

もちろん泊まりがけは断固として拒否するけど。

肉体的には問題ないけど……でもやっぱりダメでしょ……大人の男としてここだけは譲れないもん。

もし万が一、億が一でもお風呂上がりでだるつとした格好のこの子たちを見て砂粒でもやましい気持ちになっちゃったりでもしたら罪悪感で死にかねないもん。

その辺は一応で成熟した大人の男なんだから。

さすがに肉体年齢が半分近い子供に欲情つてのをしたら、男としても大人としても……人としておしまいだろうから絶対にあつてはいけないんだ。

まあ、ないとは思うけど。

「……………」

でも充実していた夏だった。

とつても忙しかったしとつても疲れたけど、それでも何年かぶりに……僕がこの子たちくらいの歳以来に楽しかったのかもしれない。

手元を見る。

いつものようにブレンドされたジュース（微炭酸）と、みんなから一口ずつ分けられた安っぽい、雑な味だけど懐かしい学生るときによく食べた料理。

視線をテーブルのほうに向けるときやいきやい騒いでいるかしましい女の子たち。

そのせいなんだろうな。

会うたびに疲れるし大変ではあるんだけど、それでもこの子たちと一緒にいる時間。

それがとても楽しいものですがすぐには手放したくないって思っている僕自身が……いる、らしい。

……いけないな、最近はどうもメラニコリックだ。

季節の変わり目が近いからかな。

「でもさ？　旅行とかはおいておいてさ」

視線を上げるとみんなに見られていたのに気がついた。

「とりあえずみんなでこうしてテキストにだべったり食べたり。あとはゲーセンとかで遊んだりしたいね。それくらいなら大丈夫でしょ？　響もさよちんも」

「……そうだね」

「今度はみんなで映画館行ったり、お泊まりじゃなくっても誰かの家で遊んだりしてさ。　　どんだけ忙しくなったりしても……ね！　響！」

学校が始まっちゃったら怒られるから切らなきやって言ってる、ぱつつんに戻るらしいゆりか。

「そうねっ。　　お話しするくらいなら、響ちゃんさえ都合が合うのなら学校の帰りとかお休みの日だつていくらでも集まれるわよね！

響ちゃんも前よりはずいぶん打ち解けてくれて……夏までは何回かに1回しか会ってくれなかったけど今は2回に1回はお誘いに乗ってくれるようになったもの。　　私、それがとっても嬉しいのっ」

断ったらその分服を用意されたり髪型を変えられたりするからってのが大きいんだよ？

「ね、響ちゃん？　また、秋もたくさんお話して遊びましようね？」
くるんはくせつ毛で天然もの、パーマでもなんでもなくって……あと夏休みで体重に合わせてカップもひとつ上になったと知らされてしまったメロンさんことかがり。

「……たまになら」

何日おきとかは僕の精神力だとかやっぱりつらいから月に1回くらいなら。

「いいよ。　たまになら、こうしてみんなで集まるのも。　……悪くはない………つて思うし」

今までを思い出しながら口にした途端に「かしゃっ」っていううるさい音。

びつくりして見上げたらゆりかのスマホのレンズがこつちを見ていた。

「あ——！　響のレアな表情!!　これ絶対実はものすごく照れてるやつ!!　はい、いただきました——！」

「あ、ゆりかちゃん私にも送って送って!!」

………え？

「もっちゃん！　この人類の秘宝はプレシヤス!!　グループのに乗っけるよー」

「止めてくれ」

「どうしてよ、いいじゃない!!　かわいいわよ!!!」

「やめて」

隠し撮りとか良くないって思う、僕。

「顔赤ーい！　ふだんは真っ白なのに!!」

「くすっ、響ちゃん、かわいいっ」

「消して」

誰も僕の抗議を聞き入れてくれない。

こういふときに女の子って酷いよね。

「ゆりか、なんでどアップなのよ……？　いや、すごくお肌も綺麗だけど」

「………でも、その。　……美しい………です」

「だから……」

……女の子の子する格好をさせられたのを撮られて共有されるよりかはずっとマシかって思ってた諦めるか……。

かがりのスマホには僕の女装って言う名前の痴態がこれでもかって詰め込まれているから、いずれどうにかしないとだけど。

後ろを向いて両手をほっぺに当ててみる。

……確かに熱くなってる……かも。

「……………」

いや、誰だつて至近距離で見られたくない表情隠し撮りされたら恥ずかしくてこうなるはず。

うん。

「ぴろんっ」

「……………」

手で鳴ったスマホにはたった今僕がしていたらしい、……うん、見事な照れ顔というやつ。

どアツプで。

前髪が軽く掛かっていてまつげと合わせて光ってるのが余計に恥ずかしい。

……もう、この体も顔も僕自身のものって感じるんだから止めてほしかったなあ。

四角い画面には……いつも鏡で見るような眠そうな顔じゃなくって、目を見開きながらもちよつとだけそらしてうつむき加減。

でも口がすつごく緩んでいる、年相応に見える笑顔が映っていた。

23話 山／山 1／4

ぷしゅーっと音がしながらちよつとだけ傾く感覚。

「ありがとうございますー」

「……………」

ひとり、またひとりと若い人から順にバスから降りていくのを眺める僕。

乗り始めた駅前からしばらくは毎回のように止まっていたけどその間隔も次第に遅くなって行つて、フロントガラスの上のお値段も加速をつけて上がっていくのにひやひやする。

乗り換え案内で先に調べてないといくらになるのかって不安になるよね……バスつて。

電車はそこまで気にならないのにどうしてバスだけこんなに気になるんだろうね。

普通のバスなら電車と同じで、乗ってる時間イコール時給のお値段つて思っておけば間違いないのにな。

そうして市街地を抜けてどう見ても田舎つて感じの町並みに……背の高い建物が数えるほどになって車の数が減つて信号の方が多くなつてきて、歩道の両脇が緑で染まるのがあたりまえになって。

「なんか止まらなくなったなー」って思ったときには大きくて古いバスの中に運転手さんの他には僕しかいなくなっていたらしい。

気まずい。

誰か乗つて来て？

車窓からぼーっと眺めるのが好きだからつていつものクセで無意識に選んだ、バスのいちばん前のよじ登らないと座れない特等席に座っている僕は気まずいんだ。

だつてカーブのときとか信号待ちのときとかに運転手さんからの無言の視線がちらちら飛んでくるんだもん。

きつと「この子大丈夫かな」って思われてるんだろう。

だつて田舎の誰も乗ってないような区間にひとりだけ乗ったまな子供だよ？

「下りる場所ちゃんと分かっているかな」って心配になるでしょ。

僕がこの人ならそう思う。

中身が分からないんだからしようがないよね。

これでも大学を卒業したニートだって言うのにな。

「……………」

「次は市役所前―市役所前―」

テープの音だけが結構頻繁に聞こえる車内。

僕はそれに気がつかないフリをしながら車窓を楽しむ。

後ろの席だったら気兼ね無しに外を見たり本読んだりできてたのになあ……でも景色は悪いし人に囲まれるからやなんだよなあ……。

妙な緊張感をちりちりと感じていると、バスは刈られて土色になっている田んぼを抜けてぼこぼこした道を走るようになって、バス停の名前に川とか山とかが含まれるようになって来て。

坂道を登り始めたって感じるころにはしよっちゅうぐねぐねし出して酔いそうになってくる。

前の体だと全然酔わなかったけどいかんせんに幼女だ、気は抜けない。

というか体重が軽すぎてカーブの度にお尻が浮きそうになるから結構怖い。

必死に鉄のバーにしがみついていると安心するけど運転手さんが心配になるジレンマ。

いざというときのための酔い止めを意識しながら、両側に広がる背の高い木々の柱とその向こうの真っ暗で真っ黒な空間で囲まれている道を……ガードレールがないのに2車線なおそろしい道をエンジンを吹かしながら器用に上がっていく運転手さんを心の中で応援する。

運転手さんはこの道何十年なんだから大丈夫なんだとは知っていても僕にとっては初めてなんだし、怖いものは怖い。

そうならないって知っていても怖いものは怖いんだ。

映画とかでも落っこちるシーンでひゅんってなる体質だし。

ペーパードライバーを舐めるな。

「……登山口入り口」

「む」

見るべきものが植物しかなくなつてうとうとしかけてたらしいけど不思議な第六感によつてちゃんと起きた僕は偉い。

よじ登つた席からよじ降りて金額を見て子供用財布からお金を……田舎つて現金しか使えないよね、バスでも……寝起きの頭でがんばつて出してたらなんかすつごくここにこされたのが悔しい。

「子供料金だからこつちだよ」つて優しく言われるのが切ない。

中身は大人なのにこうして子供扱いされるのにはどうも慣れない。いや、どう見てももたついている子供なんだからしょうがないつて頭では理解してるんだけどさ……。

すつごくにここにこしてる運転手さんから投げかけられる、予想していたとおりの会話をひととおりしてからバスを降りて、目の前の看板の消えかかっている案内図をスマホに収める。

こうして子供だとしてもしつかりしてる子供だつて認識させておけば迷子つて通報されないだろう。

多分。

通報されないといいな。

けどどこまで来たらもう戻れない。

「……………ぐへえ」

けど口が疲れた。

見た目相応の、でもしつかりした感じの女の子の演技をしたせいだ。

喉の筋肉をしつかり使つて舌もしつかり意識して、でもやっぱり幼女な声を作つたせい。

やっぱり一見さんに対して……特に大人に対してこの見た目で中学生は「ん？」つてなるらしい。

だから小学校高学年つて設定で乗り切ることにしてそれっぽい話し方になっているんだ。

高学年ならたまーに大人びてかしこい感じの子っているからそのイメージ。

幼すぎず、でも頼り無さ過ぎずな塩梅が難しい。

ちよくちよく買い物するときとかにしていた練習が役に立ったなら嬉しいね。

でもそのおかげで多分疑われずに来たんじゃないかな。

とりあえずで変な顔もされなかつたし「お母さんは？」攻撃にも多分ちやんと耐えられた気がする。

さりげなく会話の途中にスマホとか取り出して画面を見る振りをするのがポイントだ。

あと僕、ここへ来るまでのお金を普段の半分しか使わずに済んだ。つまりは往復しても片道分しか払わずに済む。

だって子供料金だもん。

運転手さんから言われたんだから問題無いはずだもん。

ということは……日帰り限定ではあっても、旅行に行きたい放題だということになるんじゃない？

だって半額だよ？

「……………ほへえ」

子ども料金って最高だなあ……。

やっぱ出かけるときは小学生って設定にしておこう。

嘘じゃないしな。

子供扱いを我慢すれば良いだけなんだから。

遠くから高くから聞こえてくる鳥の声と葉っぱの音しかしない、うっそうと暗いけど登山道だけは明るいバス停。

僕はしばらく小学生って侮られる代償の大きさにほくほくしていた。

◇◇

今朝は起きた時間こそいつも通り。

でも通勤時間より前っていう、日が昇るのが遅くなり始めてきたからちよつとだけ暗いままで涼しい風が吹いてる時間に家を出たんだ。

それは僕にとっては相当に珍しいこと。

夏休みっていう地獄が終わってからしばらくして静かになった喜びを堪能したから泊まりがけの旅行で温泉とか……はムリだからとりあえずは日帰りってことで静かそうな場所を探した先の、とある山に登るためなんだ。

子供値段の切符も使って電車とかバスに乗って、僕の見た目がどうなのかっていう実験の追試だ。

別にお得な思いをしたかったからじゃない。

その気持ちも無いって言えば嘘だからやっぱあるって言うけど、でもそれよりも今の僕がどう見えているかを改めて知りたかったんだ。

だって未だに鏡をじーつと見てるとふと思うんだ。

この子、誰？

だってだって僕がこの子になってるみたいなのは間違いないみたいだけこの子ってば年齢不詳だもん。

顔つきは中学生で「うーん……」って感じに納得してもらえるんだけど身長も体つきも小学校の真ん中よりちよい下って言うてもいいもの。

でも裸になってみると胸がある気がするんだ。

いつまで子供の胸を気にしてるんだって僕でも思うんだけど1日に1回は見るんだからしょうがない。

今まであったものが無くなった代わりとして生えたものなんだ、気にならない方がおかしいもん。

そんなアンバランスな体な僕。

……この体の出自的に、かなり早熟で……二次性徴ですごくいいことになるはず。

なのにそこまではなくなってなくて、でも身長はすつごく低いときた。

なんか変だよ、この状況って。

まあ「魔法さんだから……」で済むって言えば済むんだけど。

そんなもやもやが溜まっていたからって言うのもあって試してみた結果は……言うまでもない。

中学生って見えるんなら「学生証は？」って聞かれるはずだけどそんなことはなくって、むしろ途中におばさんとかおばあさんとかおじいさんとか駅員さんとか運転手さんとかに「1人で本当に大丈夫？」って念を押されたくらいだからやっぱりがんばっても小学生なんだろう。

「年長さん？ しつかりしてるわねー」って言われたときには怒りと悲しみとやるせなさどむなしさが一緒くたになって湧いてきた。

園児はないでしょ園児は……。

……さすがに無いよね？

発育遅いだけだね？

ゆりかみみたいな特殊体型なだけだよね……？

とりあえず何話しても園児扱いのままだったおじいさんは許さないんだ。

何がお遊戯会だ。

「……………」

悲しいけどやっぱり今の僕は紛れもない少女……幼女の様子。

少なくとも親のどちらかがそばにいるはずだって思い込まれるくらい年齢の。

なんでこんなにちっちゃくなっちゃってるんだろうね、ほんと。

どうせならがっちりしたイケメンにしてくれたって良かったじゃない。

それなら肉体改造と整形しましたって言い張れるのにね。

これじゃ海外で大規模に工事してきましたって言っても信じてもらえやしない。

アスファルトかと思えば砂利道、丸太かと思えばこんどは石畳で舗装されていたりしなかったりする山道をただただぎくぎくと登っていく。

久しぶりの全身運動。

耳に入ってくるのは僕の幼い息づかい、リュックの中のがさがさ、靴が地面を踏みしめたり石を転がしたりする音だけ。

それが反響するでもなく、ただただ真上までそびえている木々のす

き間に吸い込まれていく。

僕こういうの大好き。

誰も居ないところで……居ないって言っても人の手が及んでる程度の僻地でこうしているのが。

今回は様子見ってことで山ついで山ついででもそこまで険しいわけじゃないところにしてるし、いざとなればバス停に引き返せば1時間しないうちに次のが来る。

ゆるふわな絵柄で運氣アップとかパワースポットとかかがりが好きそうな旅行雑誌にも「お手軽に」とかあったんだし、初心者向けの場所なら大丈夫なはずだし。

バス停が山の中腹まであって、そこからほんの30分くらい……僕の足なら1時間かな、がんばれば……頂上に着けるってだけの、たぶん近くの小学校とかの遠足でも人気のありそうな山。

辛うじて丘じゃないって感じの、けどしっかりと山々のひとつって感じ。

展望台からは山と町を一望できるらしいってそんなところ。

僕の家を出てから電車とバスで2時間くらいでそこまで標高がなくてところどころとってっぺんが観光地化されていてっていう割と近場だったらしい。

意外と近いところって行く気しないよね。

運転手さんに話し込まれたから知ったけど、ちよっと前まではさっきのバスとかは連日立ち乗りになっていたんだとか。

まあ僕がわざわざ来ようって思うくらいには難易度が低い上に夏休みは頂上まで直接ルートがあったらしいし。

だからプロのニートは閑散期に旅行に行くんだ。

「……………うわっ」

僕はぼーっとするからよく石とかを踏んづけて足首を痛めそうになる。

前に比べると視点がだいぶ下で重心が下がっていて安定しやすくてしかも地面からの距離が近いこともあっていくらかはマシだけど、それでもぐきつとしそうになる。

子供のときってよく足くじくよね。
そういうのを思い出す。

足をなんどもくじきそうにはなるけど、今までに家の中でさんざん痛い思いをしたせいかな無意識でその瞬間にぴたっと止まれるように訓練されている。

今日はすでに何回目かになるひやつとだけど、まだ無事みたい。けど、ちよつと気をつけないとな。

こんな山の中で足首痛めてうんうん言っているところを親切すぎる誰かに見とがめられちゃったら、すつごくめんどくさそうだし。

この歳の子供って、何かあつたら「お母さんの連絡先は？」だもんな。

「お母さんはいません……」って事実を言つたらどんな顔するんだろううって思う。

悪いからしないけど。

……夏休みも終わっていて、平日で、しかも午前。

がらがらだつて言つてもやつぱり交通の便がいいからか、数分にひとりは僕と同じような格好をしたり町を歩くような軽装で歩く人を見かける。

それくらいには登山に至らない感じの場所の様子。

ちよつと前までのごみごみしていたらしいのがウソのよう。

たまに後ろから登ってきたと思つたら追い抜かされたり降りてきた人とすれ違うくらいだしな。

団体さんと遭遇する可能性が低いのは安心だね。

でも何十分も誰の姿も見えないでただ植物の世界を歩くのは怖いからなあ……。

田舎つて「ちよつと山道だけど」の「ちよつと」が草木を掻き分けつてつてことあるし。

僕、虫とか大きな葉っぱとか苦手だからなあ。

男の体ならやなところは全力で走り抜けられるんだけど幼女だから埋もれそうだし。

「……んぐ、んぐ………」

さびてぼろいベンチに座りながら軽く水分補給と体力回復をした僕はふたたび登り坂に挑戦しはじめる。

なんだか精神力が回復する気がして楽しい。

孤独っていいよね。

僕は最近人と会えずに話さずきたから疲弊していたんだ。

それも現役JCたちとか言ういちばんうるさい年代の、しかも女の子たち。

後半なんて毎日のように何時間もへとへとになって「もういや」ってなるくらいだったんだ。

いや、「だるいから今日はいいや」って言いさえすれば良かったんだけどさ。

「んおっ」

変な声が出た。

考えていて気がつかなかったけどきれいな石畳だった道が急にじやりじやりしてきたらしい。

ひゅんってなって危なかった。

用心しておこう。

「……………」

あの子たちと頻繁に会うまではこうして日帰りでもいいから旅行へ行こうって思ってたはずなのにすっかり忘れてたのって、忙しかったことはもちろんあるんだけど、たぶんそれ以上に。

退屈を紛らわせるためのなにかをせずに良くなって、ただめんどくさがりながらも子供……中学生の相手って言うかお世話を楽しんですらいたからなのかもな。

めんどくさいから続かなかったけど、立ちっぱもやだし不特定多数の人を相手にするのもやだったからってバイト先を学習塾とかにしてはいたけど……そもそも僕って子供の面倒見るのが好きだったのかもな。

もちろんにやらしい感情なんて芽生えないから純粋に。

人じゃなくても動物の世話でも良いのかもね。

今の体じゃむしろ僕がお世話される側って思ってたけど、一応一回

やったっていうアドバンテージで宿題とか教えられたしな。

そうだよなあ、今の僕はお世話される側なんだよなあ……。

下を向くとふりふりしてる僕の横髪。

背中を丸めると体の前の方にふりつて来る後ろ髪。

……子供だよなあ。

この体じや、保護者同伴でもなければ泊まりがけの旅行なんてどういったってムリだろうな。

だから日帰りで人が少なそうで、でも少女の体力でもどうにか行けそうなここを適当なガイドブック頼りに来ているわけだ。

子供が1人で来ていてもおかしくはない場所。

この時期だから「自由研究の写真が足りなくて……」で乗り切れそうな範囲。

電車とかバス、今日は使わないけど僕の大好きなロープウエーとか登山鉄道とか飛行機とか。

いちいち払うからいつの間にかすぐにつっこうなお値段になる観光施設とかの入場料とかまでほとんどゼーンぶ半額近くになる体。

50%オフ。

なんて魅力的な数字なんだろう。

窮屈な生活の代償がこれっぽっちじゃ悲しいけどしょうがないものはない。

安いって言うので我慢しておこう、うん。

安さも半端じゃ無いもんな。

このくらいの距離だったら乗り放題の切符とか買うのがばからしくなるくらいだし。

どうにかして宿泊できるようにさえなればいくらでも好きなところに行けそうな気までしてくる。

……そんな方法あるのかな。

この見た目で誰にも気にされずに……なんて。

ただでさえ声かけられやすい女の子っていう生き物になってるのにな。

「ふう」

お水の冷たい感覚がお腹の真ん中まですとんと落ちる。

思っていたよりもずっと疲れていない僕。

金銭的なことで嬉しかったからか、それとも散歩とか思い出しただけだったのか、特に最近あつちこつち連れ回されて体力がつかないからかは分からない。

でも緩いとはいってもそこそこの山道なのに、息がちよつと上がるくらいの運動をしてもそこまで疲れを感じない。

ちよつとは鍛えられてるんだったら嬉しいな。

そういえば「夏休みもおしまいだから！」ってかがりに1日かけて連れ回されかけた日があったんだけど、そのときも夕方に帰ってすぐ眠くなったりしなかったもんな。

これからはだんだんと涼しくなるだろうし、こうやって外に出て体を動かして背が伸びるように祈ろう。

半年もずっと狭い家の中でうじうじしてたんだ。

こんなときくらい頂上の展望台からのすばらしい景色というやつを……◇◇◆◆◇◇。

ん？

なんか変な感じ。

なんだろ。

おしっこ？

「……………」

……地窓でしっかりトイレの場所覚えておこう……。

こんなところで漏らして大人の世話になったらどうなるかわからないもん。

僕は偉い。

僕は痛みに耐えているから偉い。

上を向きすぎて首が痛い。

無理やりに作った笑顔のせいで顔が痛い。

微妙に体全体を反らさないといけないから背中まで痛い。

偉いって言い聞かせても痛いものは痛いんだ。

もういやだ。

帰りたい。

けど帰るのもいやだ。

「まー！ ひとりで写真を撮りに？ えらいわねー」

「慣れてますから」

髪の毛の色で驚かれるのにも慣れてる。

「親御さん……お父さんかお母さんは一緒じゃないの？ そう？」

「慣れてますから」

必ず近くにいるはずの親とかを探されるのも慣れてる。

「いつもなの？ でも気をつけたほうがいいんじゃない？ 近頃物騒

よ。」

「慣れてますから」

最近物騒って僕が生まれる前からみんな言ってるらしいよ？

「時間あるし着いて行ってあげようかな。 私たちは時間あるし」

「慣れてますから」

せっかく早く来たのになあ……お年寄りの方が行動早いもんなあ。

何がお年寄りを労れた、幼児を労れ。

「大丈夫じゃない？ これだけしっかりしてるし……わたしまだ若い

ころもそうして遠くまでひとりで行ったものよ。 あらやだ」

「慣れてますから」

「あ、疲れたら甘いものよ？ 低血糖は登山の敵なの。 あとで食べ

てね」

「慣れてま……あ、ありがとうございます」

おんなじ顔をしておんなじ対応を数え切れないほど繰り返す。
僕の両手に乗せた帽子の中にはごっそりとアメやら何やらがこんもりと。

足りない分はリュックにぎゅつと押し込められて積載重量オーバー気味。

でももちろん拒否権はない。

善意という名のただの余りものの投棄なんだ。

人って良かれと思って行動するとかかなり強引だよな。

だからいつもネットの世界は荒れてるんだろうね。

ため息出るけど実際この見た目の子供に対する対応としては正解だからしょうがない。

僕以外の幼女は本物の幼女だからな。

「まあ、きちんと敬語を使ってお上手ね！　うちの子も4年生になったのに……あなたを見習ってほしいくらい」

「慣れてますから」

「しかし本当に綺麗じゃのー。　外人さんのハーフかい？」

「慣れて……そういうことになるかもしれないがポイントだ」

どういうことかは明言していないのがポイントだ。

「何かあったらすぐにブザーとか笛とかで音を出すのよ？　緊急の電話も登録しとくのよ？　もちろんすぐに使えるようにして」

「慣れてますから」

都合6組目くらいのおじさん&おばさん&おばあさん&おじいさんの集団とのやりとり。

今回の人たちはたったの4人連れだったからそこまで話が長くならなくてよかった。

でも個人と集団は全然難易度が違うんだ。

「はあ——……」

中学生たちとも違う距離感。

あの子たちの相手で慣れていたはずなのにたったの数分の会話でげっそりだ。

……大人の女性は僕の天敵だ。

これならまだ子供の相手のほうがまだずっと楽だったなあ。

「はあ——……………」

ため息と一緒に疲労を吐き出す気持ち。

おぼちやんたちとの視線が切れたのを確認してから、限界までがんばって作っていた笑顔を解いてぐにぐにとマツサージする。

特に目元と唇の端の筋肉が致命的に疲れている。

なんか痙攣してるし。

……もう小学生っぽい感じにしなくてもいいんじゃないかな……？

いやいや、こんなところで不審に思われたり心配だって思われちゃったりしたら困るしなあ。

人がぱつと僕を見て判断する年頃が小学生なんだからそれっぽい応対をしないと不審に思われるから厳しい。

いつもの眠そうななに考えているんだかわからないような顔でぼそぼそしているのところ笑顔を作って活発なの、どっちが受けがよくって信じてもらいやすいかつていつたら言うまでもないしな。

人は見た目、話し方なんだ。

ついてこられるだけならまだしも、家出とかなんとかでおまわりさんとか呼ばれちゃうかもだし。

まさかひとりで出かけるのがここまで大変だとはなあ……。

「うにうに」

って顔のスジというスジをほぐしきって、僕は視線を落として首の後ろの緊張をほぐしはじめるといって今日の服装を眺める。

都会だったら痒い思いをするだけで済む虫という奴らは、こういう自然のほうが多い空間になると途端に数を増やす。

数の暴力で、テリトリーから抜け出すまではずーっとつきまとわれて不快な思いをする。

だから山とか川に行くときにはかならず長袖長ズボンで靴下は長いのでできれば首もしっかり覆う感じの格好でツバのある帽子というのが鉄則だ。

植物たちも地味にちくちくぎくぎく来るしな。

この低身長ならさらに……だ。

旅行に行き始めの初心者ころにはこうした夏に、ズボンこそ長いものの靴下とかシャツとかが短いっていう装備で来ちやっつてひどい目に遭ったんだ。

山を、自然を舐めてはならないんだ。

都会っ子だった僕にはそれを肌で実感して苦い思いをするしかなかったんだ。

まあ慣れさえすれば平気なんだけど。

事前の準備というやつがすべてだ。

準備だけちゃんとしていたらなんとかなるもの。

あとはこれでもかかってくらのスプレーも吹きかけておけば完璧だね。

ともかくそういうわけで僕の格好は山でよく見る感じのたぼつとしたものだけど、それでも銀髪幼女な僕の姿は……とりわけ緑と茶色と黒がメインの山の中ではそれはまあ目立つ目立つ。

ひとこと目に必ず「外人さん？」だもんな。

うん、確かに外人の人がこの国に来るとうんざりするのも分かる。

さらに言葉まで分かっちゃうんだったら大変だろうなあ。

こんな見た目の僕でさえ外人って思うんだもんなあ。

まあしようがないものはしょうがない。

見慣れないんだからな。

「ふう……」

そこそこ以上の運動量。

いくら多少涼しいからといってもそれなりに汗はかくもの。

登りはじめのまではいつものパーカーさんにお世話になっていたけどさつきからはリュックの底に詰めていて、だから帽子しか僕を隠すものがなくなつて。

そんなもんだから帽子の下からは僕の顔がはつきりと見えちゃうし髪の毛はふあつきりしている。

隠しようが無いんだ。

うなじのところって蒸れてけっこう汗かくしなあ。

おかげで歩きたびに髪の毛がもぞもぞとしている。
でも前みたいに髪の毛をシャツの中へ入れたらびしょ濡れになる
だろうから止めておいた。

目立たなくなるけど、たぶん不快感で結局汗だくになってから髪の毛
毛出しちゃうだろうし。

それでもはじめは髪の毛を下のほうでくくっていたんだけど、それ
だとなおさら歩くのに合わせて髪の毛の房がびったんびったん体を
回るから今は好きなようにさせている。

まるで生き物のようだったな。

…：切られるのを大変イヤがることからあながちまちがいではな
いのかも。

生きてる髪の毛とか怖すぎるけどな。

そんな僕だから、遠くで視界に入った瞬間からロックオンされて、
近くまで来たら声をかけられてひととおりの質問とかをされて、大丈
夫だっけどうにかわかってもらえたら甘いものとか飲み物とかそう
いうものを貢ぎ物みたいに渡されるのがパターン化している。

僕に構ってくる時間が長いのは女の人。

男の人はそこまで熱心じゃ無いから良い奴らだ。

あんまり心配しないのが心地いい。

男同士の距離感ってやつ。

今は女だけだ。

おばちゃんって感じの人たちに絡まれる事故に遭うと最長でひと
組20分くらい…：立ち話という疲れる姿勢のまま拘束される。

「親とか付き添いとかとはぐれたんじゃないの？」って心配される。

そうじゃないってわかると「ひとりで大丈夫なの？」って何度も確
認される。

高く見積もって小学生女子なんだからしょうがないんだけども。

まあもつと上に見られたって、女の子がひとりでこうして人気のな
いところにいたら普通の人の普通の神経なら心配もするだろうけど
僕にとってはうざったいだけなんだ。

「一緒に行こう」とか「目印になるところまで」とか「今登ってきたば

かりだから案内してあげる」とか……下心がないぶん断るのがものすごくめんどくさい。

でもみんな現金だよなあ。

僕が特徴の無い男だったときにこういう風に構われたことなんて1回も無いのにな。

やっぱり人ってそういうものだ。

「……………」

肩が凝ってる気がする。

こきこき言ってる。

……幼女の肩も凝るんだなあ……。

上を向きながら話していると疲れるっていうのを学習した僕は、敵……じゃなくて人と遭遇しそうなところで座れる場所を確保するようになっている。

だから今もいい感じの、僕の脚の長さにフィットしている岩にお世話になっていた。

それでも首ががちがちだ。

大変なストレスを感じている様子。

がいがいやいやいしながらおばさんたちが離れていく。

元気だよなあ、特におばさんって生き物たちは。

話しがてら数分休んで軽くなった感じの体を起こして立ち上がり、すみっこのほうに置いておいた一眼レフをずっしりと持ち上げる。

「おもい」

僕の……もう10年ものになるカメラ。

「なんにも趣味がないのもアレだし……」って感じで昔に買ったこのカメラは今の僕にとってはいささか重量オーバー。

片手で持とうとすると手首を痛めるから必ず両手で持つ必要があるし、首にかけるだけだと首がまた痛くなるからたすき掛けにするような感じでかけている。

ところどころ落としたりしてハゲたり欠けたりしているカメラ。

使用感はばっちりだ。

これだけぼろぼろになると逆に愛着が湧くものだよね。

持って来たばっかりの時は不相応な荷物にはなっていて重いから後悔しかしていなかったんだけど、今となってはいい判断だったと思える。

ぜんぜん思いついても見なかった「写真クラブとかに入っていて今日も山からの風景を撮るために来ている」んだっていうもつともらしい言い訳が素直に通るんだもんな。

やっぱり形から入るのが良いらしい。

特に今はがんばってミラーレスで普通はスマホで済むもんなあ。

時代って残酷。

写真を撮るために親からの許可をもらってもう何回もひとりで行っているんだってという信憑性のある言い訳が成立するのはありがたい。

使い込まれているから「家族の愛用のをもらったの……」とかそれらしく言えるし、さらに言えばレンズをふたつ持って歩くのもいちいち変えるのも大変だからって遠近両用のごついレンズにもしているから、カメラ愛好家さんがいけばすんなり話を通って楽だった。

なんだか細かい話をされはじめたら「お下がりですってただだからそこまでわかりません」で引き下がってくれるしな。

芸は身を助くって言うけど今日のところはほんとうに助かっている。

重いけど。

もう肩が凝っているけど。

でもカメラの話になるまで明らかに怪しまれてた感じの雰囲気も何回かあったしな。

でもでも重いんだ。

写真を撮るっていう用途以外にもぞんぶんに活躍しているカメラさんをゆつくりと体にかけて、ヒモの下敷きになっていた髪の毛をきちんと出して、それからまたゆるゆると丸太の階段を登っていく。たすき掛けにしてヒモが胸に食い込んでもさして支障ないのが悲しい。

女の子はこうすると恥ずかしいって聞いてただけどなあ。

10分に1回は立ち止まったり座ったりしているから疲れはほとんど出ていなくて良い感じ。

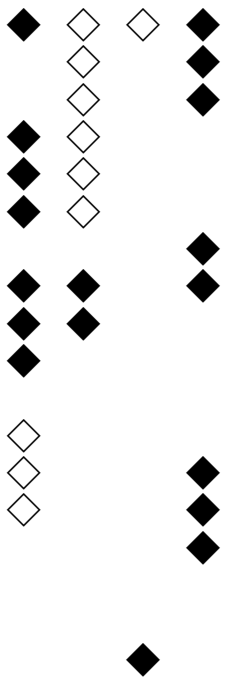
見た目を変えることはできない以上かなりの確率で絡まれもとい声をかけられちゃうのは避けられないとして、らしくて納得しやすい言い訳。

服装とアイテムと演技とで完璧にカムフラージュできている。

擬態できているんだ。

こういうのも本当に慣れだな。

とにかく場数をこなして自然と出るようになるまでがんばれば後が楽だ。



◇合目の展望台とやらに着いたらしい。

背の高い木でできた回廊が途切れたと思っただら途端に出現した景色。

まだ頂上じゃないはずなのに遠くの方の山々が見渡せて端っこには麓の町も見える。

「ぼしゃ」

シャッターが降りた音。

画面で確認してみれば、遠くの方の景色は目で見ているよりもずっと水色掛かっている。

……このレンズ、安物だからなあ。

10万に届かない万単位の金額が初心者用っていうずぶずぶと浸かりそうな世界。

あんまり興味がなくなつて良かった。

数万でもいいやつの中額くらいだったっていうのが恐ろしい。

便利だからつけっぱなしなんだけど、どうしても隅っこのはうはぼ

◇ 「ん——……」

ちよつと疲れ出てるのかもなあ……なんかぼーとするし。思えばこの体になってここまで遠出したことなかったんだから気づかれもしてるのかも。

でも中途半端などだし登り切っちゃってから休もう。

良いところに立っていた案内標識と駅でもらった地図を見比べる。

もうここまで登ったんだよなって再確認。

地図を見ながらだしGPSで迷わないようにしてるけど念のため。

ほら、道つて何気なく二股とかになってることあるし？

話しかけられるせいもあって休み休み来たせいかなり遅いペー

スだけど、気がつけばもう◇◆……8合目。

「？」

……8合目だよな？

うん。

お昼前には山頂に着いちやうからお昼のタイミングが微妙かな。

ん？

予定より遅く移動してるのに予定より早く着いちやう？

なんでだ？

「??」

……やばい、本格的に疲れてるっぽい。

あー、精神的な疲労ってちよつと経ってから出てくるもんなあ。

忘れた頃に風邪引いたりしてそれが分かるって言う。

けどどのくらいお腹減ってるかな、今の僕。

おもむろにお腹を触ってみる。

凹んでいる。

あばらがつつごつしている。

「……………」

あんまり空いてないっぽい。

持ってきた水とか手渡された和菓子とかちよくちよく口に入れていたし……計算ミスだ。

僕のお腹は幼女仕様だけどそれを処理する能力は男仕様なわけで、つまり甘いものだってあんまり食べられないんだ。

なんか人のお腹って本当に別腹あるらしいね。

あるって言うより「デザートだ！」って思うと胃がめこつと拡張するらしい。

人体ってすごいね。

男が幼女になるくらいだもんな。

しかも脳みそも小さくなって記憶と人格はそのままって言うご都合主義。

いや、これで人格変わって記憶がなくなったりしてたらもはや別人だけでも……。

おーこわ。

なんにもないところだからって考えすぎるのも困るもの。

しょうがない、もっかいガイドブック読み込もう。

お腹を空かせるためにうろうろしているとガイドブックに乗ってないようなちよつとした見所とか見つかることって割とあるしな。

なんだかい感じの写真スポットとかおみやげ屋とか。

時間を潰すために細かいコラムに載ってるような微妙な場所へ遠回りして時間を稼ぐ作戦。

まあ写真映えはするから楽しいしな。

見せる相手は居ないからデータに収めて満足するだけなんだけども。

そうでなくても適当にぼーっと座っているだけで景色を堪能しているだけで時間つぶすの得意だし。

◇

◆◆

◇

◆◆

「……………着いたあー」

あつちこつちに寄り道をして結構疲れたけどおかげでちょうど良

い時間と疲れ具合。

ぐーっと伸びびをして気持ちがいい。

カメラの過重量で凝るのを通り越して痛い肩とか首とかをスジを痛めないように気をつけながら伸ばす。

この歳で首回りがつつたりはしないだろうけど念のため。

そうして上を見上げると一面を遮るものがない水色に近い青空。

真上をずっと見ていると空に落ちそうなくらい。

ひゅんつとする。

ひゅんつとしてじわつとなつたから慌てて体を起こす。

……危ない危ない、うっかりで漏らしちゃうところだった。

女の体の膀胱の緩さを甘く見てはいけない。

いかにも整備されたばつかりの観光地って感じのきれいな地面とか、なのに古くさい感じのお店とか……そういうものが所狭しと、けど柵の先が空中で開放感のある高台。

さつきまでときどき見えていたような、確かにすごいけど微妙に木とかがじやまだったり視野が狭かったりするような、そういう限定された感じの景色とは違う感じのいわゆる展望台。

もう半年以上ぶり……いや、冬休みは温泉しか行かなかつたから実質1年ぶりになるのか、こういうところに来るのって。

「ぱしゃぱしゃ」

とりあえず写真を何枚か撮ってつと。

こうすることで周りで「あの子どうしたのかしら……声かけてあげた方が良くかしら？」とか「親がいないみたいだけど……もしかして家出……？」っていう不安を払拭できるんだ。

こういう「らしさ」って大切。

こんな見た目でもちゃんとした登山的なカッコしてでかいカメラ構えてたら「そういうもんか」って思ってもらえるんだ。

人ってちよろいよね。

でも……うん、やっぱり高いところからの眺めって良いな。

見ていてすつきりするし、もやもやがぜんぶ吹き飛ばし。

どんな人だっってこうしてぐるーっと広い景色を眺めていたら悩み

なんて……少なくともそのあいだだけはなくなるはず。

そう思うくらいに広い景色って言うのはなんだか好き。

今日はすっきりと雲がちよつとだけ浮かんでいて逆にいい感じの青空だし、けど空気は澄んでいてみたいで遠くまでがはつきりと……平野のところは地平線じゃないけど、視力の限界まで見えているし。カメラのレンズに頼ればそれこそちっこい家まで1軒1軒とがはつきりくつきり見えるし。

昔からある観光地ってコイン式の望遠鏡あるけどそれを使うまでもない。

この身長じゃのぞき込めないけど。

それにしても……遠いところまで見えすぎて気持ち悪い……なんだか見えすぎじゃない……？

近眼とかまで完璧に治っているデメリットなのかもしれない。

目そのものが新しくなったって言えるくらいだもんな。

何をどうやったらこうなるのかは魔法さんしか知らない。

その代わりというのはおかしいけど、暗いのが見やすくなった代わりに明るいのはちよつとだけ苦手になっている。

調べてみたら目の色素の関係だとかなんだとか。

だから洋画とか、暗い画面が多かったりみんなサングラスしてたりだとからしいね。

まー、色素ほんつと薄いからなあ。

目と髪の毛とまつげとお肌。

……いつもかがりに言い含められるし、紫外線対策……がんばらないといけないのかも。

◇

柵のあいだから写真を数歩ごとに撮ったりして満足した。

やっぱひとりひとりって良いよね。

結構広いからそのへんをうろうろしてみたりして満足した頃には日の光でじりじりと疲れがにじみはじめ。

僕はそこからさらに高台へと急な階段を2、3分かけて昇って、とうとう本物のてっぺんへ。

木とか以外には鉄塔くらいしか高いもののない正真正銘の山の頂上だ。

こういうのって来ようと思わないと来ることがないからいつでも新鮮。

「天気が悪いと残念だけど。」

旅行先で雨雲に入っちゃったときは目の前すら見えなかったっけ。それにしてもよかった。

僕にとつてはすごく幸運なことに、ガイドブックの一面に載っていた山のてっぺんの見晴らしがよくってほぼ360℃パノラマなこの展望台にはたまたま誰もいない様子だ。

真ん中にはちゃんとテーブルとイスがいくつかあって、風の音とその風に乗って飛んでくるはるか遠くの車の音とか電車の音とか以外にはなんにもない、がらんどうの空間。

柵にもたれて下まで見てもいいしベンチに座って遠くまで見てもよくって、テーブルにもたれて遠くの山とか空をぼーっと見ているもいいっていう特等席。

その特等席にたつたひとりだけでいられるっていう幸福だ。

家の中とはまた違った静けさが心地良い。

まあ1年ぶりだし幸先がいいといえはそういうことになるのかな？

この秋はあの子たちの面倒以外でも出かけようかな。

こうして体を動かして遠くにいるときの僕はアクティブだ。

だからまとめて旅行とかするんだろうな。

ニートって別にじめじめしたのが好きなんじゃない。

ただめんどくさいからニートしてるだけで、動かざるを得ない場所に来れば来たでそれなりに楽しめるんだ。

あ、さすがに引きこもってるときは違うけども。

あれは心の休息が必要な時間だからじめじめしてるだけなんなんな。

経験者な僕、現ニートは語る。

「よつと」

テールブルにがきつとビニール袋とリュックを置いてぼすつとイスに腰を下ろしたため息をひとつ。

「.....」

なにも考えないで目だけを開いたままにして体の感覚のぜんぶを
研ぎ澄ませてみた。

とつてもよかった。

やっぱり人間は自然の中じゃないとおかしくなるのかも。

こういうところに来るとそういう感傷に浸るよね。

家から離れて知らない人とたくさん話して、まったく知らないところをときどき考えることも忘れながら懸命に体を動かして終点までたどり着いて……たつたのこれだけで僕の中のかなにかが少しだけ楽になった気がするんだ。

もつと早く来れば……いや、中学生たちの世話があったか。

その前は家から出ることそのものが慣れていなかったぶん今よりずーっと大変だったししようがない。

魔法さんにご近所の目が恐ろしかったな。

あのときのあれこれも、今になるともはや懐かしい感じだ。

だけど思ってみれば外で完全にひとりになってこれだけ……たつたの4、5時間だけど……これだけの時間を過ごしているのは下手するもつていうかたぶん、この体……幼女になってから初めてかも？

前はよく時間とお金に任せてふらふらとしていたのになあ。

放浪癖つてやつ？

まあ前はともかく春からはご近所の目、とりわけお隣さんの目を避けるためにほぼほぼ家についてきのかみたいになつてるし、駅前への買い物とか運動を兼ねてしていた散歩とかだつてせいぜいが1、2時間だし。

そもそもそれ以上外にしていると体がだるくなつて眠くなつてくるつていうどうしようもない体力のなさつてもあつたしなあ。

本当に幼女でさえ無ければつて思う。

らしいし。

特にどこも……加齢とニートっていう不健康な生活にのせいで常識的な体の不調以外にはこれといって悪いところもなかったんだけど、それでも温泉に入るとしばらく体の調子、よかった気がするし……子供にや分かんない娯楽つてやつだ。

ともかく露天風呂に入りたい気持ちになってきた。

あの解放感とか涼しきとか、たまに吹いてくる風とかがいいんだ。屋内はいろいろと籠もるからダメ。

入って体じゅうから熱いを感じてのぼせてきたら上がるっていうのをしたい。

「いいなあ……」

でもなあ……。

視線を落として今の肉体を見る。

両手をにぎにぎする。

ぜんぜん節がなくなつて肉のほうが多くつて指自体が短くつて血管とかが浮いていない両手。

幼女の手のひらとちっこい体。

宙ぶらりんの足の裏のせいでぶらぶらとできてしまう脚がはつきりと見えてしまう。

もちろん脚のあいだはすつきりとしていて肉体的には女で。

「……………」

常識と勇気。

常識がジャマをするからためらつて勇気がないから赤系統ののれんをくぐれなくつて、女湯には入れない。

かといって男湯だとそれはそれで……たぶん髪の毛だけでじろじろと見られるだろうし、いくら元同性だつていっても男湯にも抵抗がある。

そもそも男のときでも温泉とか他人の存在が嫌だったもんな。

だって人に裸見られるんだよ……？

ありえないでしょ……？

温泉によっては7才から10才くらいまで男女どつちでもOK

だったりするから、あとは僕の性別を僕が選ぶだけなんだけどまだ選べない。

あいかわらず煮え切らない。

常識と羞恥心が抵抗するんだ。

やっぱり男湯でも女湯でも温泉、だめかなあ。

僕は決められないっていうただのいくじなしなんだ。

もうちよつと頭の出来が残念だったり本能に忠実だったりすれば女湯に意気揚々と入れたんだろうけど、こういうのが僕だもん。

とつくに諦めてるし、なんならこれが好きまであるもん。

常識的な範囲で自分のことが好きって強いよね。

僕はそう思う。

そうじゃなかったら何年も「お仕事？ 特にありません」なんて言えないよね。



「♪」

僕は感情の起伏に乏しい方だけど、僕だって嬉しいときくらいある。

たくさん寝たときとか美味しいもの食べたときとか美味しいお酒呑んだときとか。

だから今もなんとなく嬉しいんだ。

いつものとおりにどんなイスに座っても足がつかないしテーブルだって高すぎる環境でも気分は上々。

だから僕はこうして膝の上にお弁当を広げて食べているわけだ。

飲み物だっていちいち腕を上げるのがめんどうだからふとももの横に置いてるし。

これが僕にとつてのベストポジション。

つまりは地べたに座ってもたいして変わらないということになるんだけど体がちっちゃいからしょうがない。

世の中の子供はどうやってるんだろうなー。

もつとちっこいのから大きくなってくるから気にしないんだろうなー。

僕みたいに大人から子供になるなんてレア中のレアだもんなー。

そんなことを考えながらもぐもぐもぐと口を動かす。

この漬物おいしいなあ。

総合的になかなかおいしい味付けの小さいお弁当。

やっぱり旅行の醍醐味はお弁当だな。

お店で名物を食べるのとはまた違った良さがある。

どうして外で食べるとこんなにおいしく感じられるんだろうね？

不思議。

まあ遠足のときのご飯とか美味しかった覚えがあるしそんなもんなんだろうね。

「はず」

ペットボトルからお茶をすすって、ふたたびふとももの上のお弁当箱を持ち上げる。

このお弁当が包まれていた紙袋には、この山をバックによくわからないゆるキヤラとやらが描かれている。

それを見るときもなしに見ながら食べるだけの時間。

麓の駅で、荷物にはなるんだけど方が一で頂上でやってるはずのレストランが閉まっていたりしたら困るから……って念のために買ってきたお弁当。

山菜がメインで量が少なくて僕好きな感じだ。

お酒を呑む都合上胃に優しいモノを選ぶ習性が幼女になっても継続している感じ。

いちばん小さいやつなのにあいかわらずの胃袋のせいで食べ切れなさそうなのは残念。

まあレストランはやっているだろうって思っていたから帰って家で食べるつもりだったし、食べきれずに余ったのは予定通りにお持ち帰りすればいい。

そう思って念のため買ったんだけど……まさかほんとうにレストランが軒並みに休みだとは思わなかった。

張り紙を見る限り今朝に何かがあったらしく臨時休業だとのこと。

他のお店も足並みを揃えたのか平日だっというのにほとんど閉まっていたし。

観光地ってそういうときあるよね。

まあかき入れ時じゃなくなっただけな、休みたくもなるか。

その気持ちは僕だからこそよくわかる。

ガイドブックでもネットでも「今日はやっている」っていうからバスで何十分かけて行ったら「今日はお休み」な看板なんて数え切れなほどだったから慣れている。

適当に書いたってわかる張り紙がドアとかシャッターとかに貼ってあるときのがっかりといったらもうねえ……あのころは若かった。

今もつと幼いけど精神的には成熟した感じ。

「……………」
じつと下を向いていたらしい顔を上げると見渡す限りの田園と山の風景。

「もむもむ」

こうして遠くに広がる景色を眺めながら食べるのは「知らないところへ旅行へ来ているんだ」って実感できるから好き。

でもなあ。

これで軽く1杯……1杯だけで良いからお酒とかあつたら最高なんでしょうな——……………」

前だったらそのへんのお土産屋とかで適当な地酒つてのを買えたのに、今は休みじゃなかったとしても買えないっていうのが頭からすっぽり抜け落ちてた。

持ってくるのを忘れたから家に帰るまで手に入らないっていうのも思いついちゃってかなりのショック。

「……………ああ……………」

僕は絶望した。

なんてことだ。

悲しすぎる。

がっかりだ。

こんなことがあつて良いのか。

なんで僕はそんなことを今……取り返しのつかない失態をわざわざ思いついちゃつたんだろう。

「おさけ…………おさけ」

両手が震える。

お弁当箱を落とさないようにって意識するので精いっぱいだ。

「ああ」

お酒。

アルコール。

「……………すんっ」

まあでもどうせダメだからいいや。

僕は諦めが良いっていう長所を備えているんだ。

大体のことなら諦められるんだ。

目の前でバスが行っちゃっても次が2時間後くらいなら許せちゃうんだ。

旅先で次の便が6時間後とか次の日とかを何回か経験したら、人って大体のことは許せるようになる。

それにお酒を1杯くらい飲んだって……どういいう原理か少女になっても肝臓さんのスペックはおんなじらしく顔色とか変わったりはしないんだけど、でも万が一にでも誰かに見られて見とがめられたらまずいしな。

水筒とか小さいペットボトルに入れて持って来ていたとしたって、近くに寄られて話しかけられたら口を開いた瞬間にまき散らされるアルコール臭でばれるだろうしな。

にじみ出るアルコール臭は酒飲みの宿命。

子どもが、幼児が外でアルコールをとか……どう好意的に考えてもアウトだな、うん。

この体の出身だろう地域だってさすがにアウトのはずだしな、うん。

元の僕だって、そんな光景を目にしたら「虐待とかじゃ……？」って通報する気にもなるだろうし。

「そっか……」

かたかた震えてた割り箸が収まる。

つまりこの見た目だと……外で、旅行先でぼーっとしながら飲むっていうの、できないのかあ……。

悲しいなあ……。

子どもがお酒を手に行っているどころか呑んでいるなんて言いつくろえる気がしないしなあ。

叶わない夢は忘れよう。

諦めるんだ。

魔法さんの機嫌がよければ明日の朝、そこそこなら数年後には、……悪ければずっと外はムリか、でもまあ家の中でなら飲めるんだ

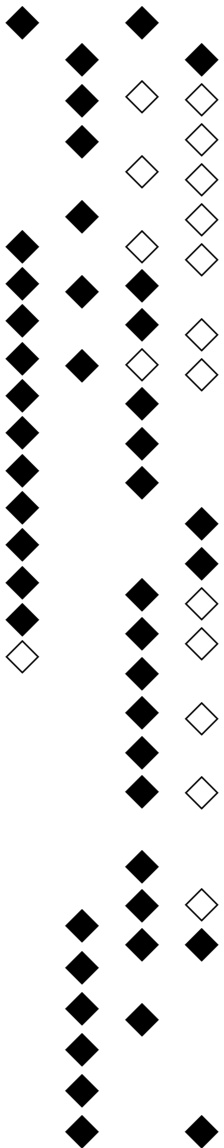
し。

通販様々だ。

ああ、でもなあ。

この漬物と辛めの日本酒、合うだろうなあ。

「ああ……すんっ」



「！」

ぴん、と頭が認識するより先に体が反応する。

お酒への悲哀を感じながらやけ食いしようとして胃袋が悲鳴を上げたあたりで、遠くからコツコツって音。

この高台へここまで上がってくるための石の階段を杖かなにかを使いながら上がってくる音がする。

こつこつって音と石の階段を登るかすかな足音と話し声がゆっくり登ってくるのが、たまたまこつちに向かって吹いてきていた風のおかげで先に知ることができた感じらしい。

せっかくひとりぼっちで……温泉とかお酒っていう楽しみがないけどひとりぼっちというだけで至福だったのに、他人が入り込んでくる。とつても残念。

ああ残念。

ここはてっぺんで頂上で行き止まりだったのに。

どれだけ急いで荷物まとめても見つかるだろうし、そのまま全力で逃げたつてこの場から去るためにはあの人たちの来る方向に行くしかない。

だけどしようがないよね。

ここは公共の場だもんね。

今がたまたま貸し切りだっただけのこと。

ほら、バスだつて1時間に2本くらい往復してるみたいだし。

せめて僕を気にかけないようなタイプの、前の僕みたいな男の人だつたりしたらいいんだけどなあ。

こつちが幼女だつて見るとかなりの人が……7割くらいの人が「とりあえず話しかけなきゃ！」つて感じで迫ってくるからなあ。

せめて他人に興味のない若い男の人でありますように。

祈ろう。

魔法さんにも祈つておく。

「ぬーん……………」

祈りは通じなかつたらしく、男の人と女の人のペアらしい。

声の感じから歳は前の僕基準でも相当上みたいだし、夫婦とかかな。

とすれば話しかけられて話し込まれる確率がぐんと上がっちゃうな。

構ってくるタイプの人じゃないつて願いたいけど、お願いなんて今叶わなかつたばかりだし。

魔法さんでもムリかな？

ムリか。

「もむむむ」

まだ食べきっていないからすぐには離れられないけど……めんどくさくなつたり不審に思われたりしたらさすがにまとめられるようにはしておいたほうがいいかも。

いくらお節介な人でも「構わないでください、迷惑です」つて言いながら脱兎する相手を追いかけたりはしないだろうし……多分。

ワンアクションで席を立てるようになってリュックも脇に置いて、お弁当とお茶以外はみんなぐいぐいと詰め込んで……あ、いざつてときは必要だからパーカーは出しておいてつと。

ゴミは……今つて昔みたいにごみ箱、あちこちがないよなあ。

まあ袋とかだけだしたいしてかさばつたりもしないか。

がさがさぱりぱりぎゅうぎゅうとリュックが膨らんでいつて、あと

はお弁当とを詰めればよいようにしておいて。

「よっ」

あ、幼女がうろついているっていう通報からの警備員さんとか職員さんとか恐ろしい公権力さんとかが来る可能性、考えておくべきだったかも。

それこそこういう場面で通報されてたら逃げ場ないし。

もう遅いけど。

たえここから逃げようとしたって柵さえ越えられないからどうしようもないじゃないか。

今さらだけど……まあ大丈夫だろう、きっと。

何の根拠も無いんだけど、今までのところ変な顔してた人いなかったしな、たぶん。

そんなことを思っているうちに手とか足の汗がすごいことになりつつある。

気持ち悪いからゴミに手汗を吸わせていたら誰かの頭がひとつ、ふたつ覗いてきた。

………おじさんとおばさん？

いや、おじいさんとおばあさん？

うーん、外国の人の年齢ってわかりづらいからなあ。

僕みたいな幼さかって思ったらあつというまに青年を通り越して成人しているし、すぐにおじいさんおばさんに見えるようになるし。

海外とか行くと……あ、アジア圏以外でね……ほんとみんなすごく老けて見えるんだよね。

それ以前に外国人とか、よっぽど特徴のある顔とか髪型とかかしてない限り区別もあんまりつかないものだしな。

そのせいで映画とか登場人物がごっちゃになってわけわかんなくなることもあるくらいだし。

とりあえず杖をついているおじいさんと元気そうなおばあさんはお年寄りの区分でいいんだろうか……まあこの年ごろの子供から年上に見られても怒りはしないでしょ。

言葉が通じない以上話し込まれないのが確実になったから緊張が

抜けて一気にだるってなる。

ほへーつとぼーつとしていたら先に登ってきたおばあさんと目が合うけど要警戒対象じゃなくなったから安心して見ていられる。

あ、顔はまだおばあさん止まりだ。

ということは夫婦みたいな距離感だしおじさんの方もただ脚が悪
いだけなのかな？

あ、いや、じっくり見たら……今の目がいいから近視じゃないから
よく見えるおかげで……なんというかいろいろとすんごいから
やっぱりお年寄りなのかな？

うーん。

まあいいか、僕に害がない種類の人たちなんだし。

「もぎゅもぎゅ」

安心してお昼を食べ始める。

「……………」

「……………」

おばあさんもといおばあさんが僕をじつと見ていたと思ったたら、よう
やく登ってきたおじさんに話しかけている。

メガネだったら顔が見えないくらいの距離なんだし、そもそも外国
語なんだろうから近くにいたってきつとなに言ってるのかわかん
ないだろうけど、風向きのせいか声とイントネーションだけは漂って
くる。

身振り大きいしな。

「……………」

……ああいう年代の人たちって指とか指すよなあ……別にいいけ
どさあ……。

きつと僕が珍しいんだろうし。

あれ、もしかして外国繋がりで話しかけられる？

いや、僕が聞き取れないってすればそうそうに諦めてくれるだろ
う、きつと。

こつちで育つた子なら母国語を話せないっていうのけっこういるらしいし。

「……………」？

階段を上つたところで話し込みはじめた様子。

ん、山椒が辛い。

でも杖使つていてもやっぱ外国の人は違うよなあ。

しゃきつとしてるっていうか筋肉の量というか、そもそも骨格からして強そうだし。

凄まれたら僕なんかひとたまりもないだろう……あ、いや、僕だつて見た目だけなら何十年か後にこの人たちと同じような感じになるのかな？

成長できたら。

成長して老いてきたら。

まあでもこの人たちアスリートとかだったのかもしれないし。

だって肩周りとかふとももとか明らかに筋肉つて感じの盛り上がりだしな。

あつちの人たちって体のラインが出るぴちつとした服、好きだよなあ。

この人たちは映画にでも出てきそうな体つきだけど、ぷよぷよしていても平気そうな人たちたまに見かけるし。

これが価値観というか文化の違いってやつなのかな？

いつつもだぼつとした服で身を隠している僕が言えたことじゃないんだけどさ。

とまあ、どうでもいいようなことを考えながらちらちらと見ていたけど、特に話しかけてくるっていうかこつちに来る気配がないし。体力があるから登ってきて景色見て満足してすぐに降りちゃうのかな？

僕でも登れたんだし、脚が悪かったりお年寄りだったとしたってそこまで大変な山じゃないんだしな。

いつものクセでまんべんなく均等に食べたお弁当の中身を見下ろす。

む、このおいしい漬物……あ、惣菜としても売っていたし帰りに買っただろうかな。

漬物と違ってあるだけでしばらくご飯だけ炊けばご飯になるから楽だよ。

あの子たち相手でも外食にも飽きたし、当分は家でご飯プラスなにかって感じにしたかったからちよつと良い感じ。

「♪」

口の中にいい感じのピリ辛が伝わってきてご機嫌。

僕はグルメなんだ。

なまじ自炊生活が長いのと、あつちこつちに旅行して地元の料理を食べたおかげで意外と舌が……。

「……………宜しいですか、そちらのお嬢さん？」

「ほへ？」

想像もしていなかった感じに声をかけられてつい釣られて顔を上げると、ご年配たちが僕のまん前に……いや、上に、ふたり揃ってそばえていた。

あれえ……今のすぐく低い声もしかしてこのおじいさん？

下から見上げるとすごい迫力。

怖い。

さつきは気がつかなかったけどなんだかごつい眼帯もしているし

……退役した軍人さんとかかな？

すごい。

格好いい。

映画とかじゃない現実で初めて見た……じゃなくって。

あれ？

こつちの言葉、話してる？

なんで？

「はて。親御さんや……引率の方はどうされましたかな？ 儂たちは今登ってきたところなのだがそれらしき方たちは……目の届く範

「困でお見かけしなかったのだが？」

吹き替え映画みたいな話し方と声……バリトンボイスっていうんだっけ？

「どなたかとはぐれたのなら下のレストランとか……ああ、休みみたかったがロビー……：休息室というんだったか？　そこには入れるみたいだしな。　一緒に行つてあげようかい？　こんなところでたったひとりで食べていたら不安だろう？　そんな小さいのに」

そしておばさんあ、この人もなんだか顔に傷とかあつていよいよ軍人さんっぽい……：つていうかなんだかマフィアとかみたい……：いやさすがに失礼か、考えるだけでも。

ともかくおじいさん？もおばあさん？もしやしきしやしきとしていて華麗に普通に言い逃れができないくらいに言葉が通じてしまつているらしい。

……まあイントネーションはちよつと違うけど、たまりにあるくらいだし。

見た目はともかく……：圧力あるし、まあ見た目は置いておいてこの人たち。

ここに来るまでに話しかけられたような、ごく一般的に子どもがひとりであるのを心配しているいい人たち……：人のいい人たちなんだろう。

「……………」

……：話が長引きそうだったらスキを見て退散しよう。

無駄に圧力感じるし。

ああ、楽しかった時間……。

24話 疑念と助言と発覚 1 / 3

海外だと結構あっちこっちで軍人さんを見る。

一目で見ても分かる全身の装備に一目で見ても分かる体格と威圧感。でも銃を構えてるって言ってもなんにも悪いこととしてなければ案外怖くないんだよね。

そんな僕だから分かる軍人さん疑惑。

口には出さないけどなんとなくそうなんじゃないかなーって思いながら見上げる。

ごついなー。

僕なんかひとひねりだろうなー。

こんな幼女なんてどうにでもできるだろうなあ。

まあそれ言ったらこの世界でこの肉体的な同世代以上の誰からでも好き勝手されちゃうんだけども。

世界で最弱まである疑惑。

だって幼女だもん。

真正面から勝負見込みがあるのは……小学校低学年で気が弱い子だけなんだ。

「ほう………ずいぶんとまた使い込まれておるな」

「はあ」

リュックにはしまえないし、なにより偽装のためのアイテムだし……ってテーブルに置いたままだった僕のカメラを目ざとく見つけたおじいさんまたはおじいさん。

来るときにもいろんな人に散々触られたし「どうぞ」って言ったらずに取ってまじまじと見ている。

うーん……おじいさんとおじいさんのあいだくらいの年齢かなあ。

つまりは近くで見ても判別がつかないともいう。

どっちかはわからないけど僕的にはおじいさんのほうが近いし、そういうことにはしておこう。

もし違つたとしても……この見た目が効いて、人によってはそう呼んだとたんにでれでれした顔になってお子ちゃま言葉で話しかけて

くるから大丈夫。

なんでかは知らないけどすつごくちよろくなるから便利だ。

侮られるにもここまで極端だとむしろ清々しいな。

年齢のことはさておき、僕のぐっついはずのカメラを取っている手のさらにごっつい拳を見るともなく見る。

正確には見上げている。

首が疲れる。

どこもぶつとくて頑丈そう。

僕なんかあつというまにちぎられそうな印象のお手々。

僕を見下ろしてにぎにぎしてみる。

ぶにぶにとしている。

力込めすぎたら壊れそう。

「写真か。君みたいな小さな子が写真を……珍しいものだ。スマホやデジカメではなく、あえての一眼レフ。さすがにフィルムは」「デジタルですね。撮り直しができませんし、フィルムは高いですし」

そもそもフィルムなんてまだ売ってるんだろうか？

僕の世代でももう使ったことないなあ。

「……そうか、あれはもう時代遅れか……しかしこれを持ち歩いて、自分で被写体を求めてはるばると山へ。ううむ、渋い。その歳で実にいい趣味をしている」

ことりと元の場所に置かれるカメラ。

「それにしてもその歳で写真撮影のためにたったのひとりで遠出とは……行動力があるというのかな？ ずいぶん慣れているみたいで堂々としている。良い子だ」

「ええ、まあ」

どんな返事したらいいんだろう。

分かんないときはあいまいにしておくのが秘訣。

「良い子だ」とか映画とかドラマでしか聞いたことないセリフ言ってきたのはおばあさんの方。

やっぱりちよつと外国語っぽいしゃべり方だっただって感じる。

お仕事柄なのかちよつと硬い感じの言い回しだし、話し方も硬い感じ。

なんていうか……やっぱり外国語って感じ？

声も大きいわけじゃないのに大きく感じるし、体が大きいからか威圧感まで感じる。

端的に言つて怖い。

見た目も雰囲気もこの人たちそのものが怖い。

僕、昔っからこういう人たち苦手。

なんていうか萎縮しちゃうんだよな。

この人たちほどじゃなくつても筋肉質でがしつとした体格で声が大きくて押しが強い人つて苦手なんだ。

もちろん相手の人は僕をどうこうつて思つていないんだろうけど、僕からすると肉食獣のすぐそばにいるような気持ちに本能としてなるんだからしょうがない。

これが根っからの草食系だ。

きつと前世はシマウマなんかだろう。

誰にも見つからずに仲間と静かに草を食べて生きるんだ。

あるいはダンゴムシみたいにじめつとしたところで一生を過ごす。

そういう人生つて良いよね。

「反対側の席。　いいかね？　私たち年寄り話し相手がいないと退屈でね」

「……………はい」

「済まないね。　嫌だつたらいつでも言つてくれ」

イヤだけど、こういうのがイヤつていう人種は至近距離でイヤつて言えないんだよなあ。

そういうのつて分からないんだろうなあ。

どうせ理解はされまい。

草食系だけの「分かるー」だ。

同族だけがわかつてくれたら満足だ。

でも話したいからつて言つても杖をつきながら座ろうとして中腰で言うのは卑怯だと思つう。

おじいさんは別になにも考えていないんだろうけど、これじゃ断れないに決まってるじゃん。

僕が本物の幼女だったら気負わずに「やです」って言えるんだけど中身は大人だしなあ。

テーブルはいくつも他にあるし誰ひとりとしていなくってがらがらなんだから、そっちに行ってくれたらよかったのに。

そのためにわざわざ、わざわざ階段から見ていちばんすみっこのテーブルを選んだのに。

これだからこの見た目は困るんだ。

ムダに興味とか庇護欲とかを刺激するらしいこの幼女の体は。

あー、ちやほやされて喜べる性格だったら良かったのになー。

なんか損な性格で生まれちゃったんだからしょうがないか。

◇

「けぶ」

会話を少しでも遅らせるためにつて頬張っていたお弁当は、結局食べきれなかった。

小数点以下をちみちみと食べているけどどう考えてもこの先は今
はムリ。

なんなら既に眠いまである。

子供の体はこういうものだ。

食べ残しは3割ほどといったところ。

残りは家でお酒と一緒に食べられそうだからそれだけを楽しみにしておこう。

その代わりに今の苦境を耐えないとな。

いや別に苦境ってほどじゃないけど……あの子たちに比べたら。

苦境、または地獄とは……着せ替え人形になっている状況を指すんだ。

好き勝手に「かわいくされる」状況を言うんだから。

テーブルを挟んだ向こう側でこつちを向きながら座っているおじ

いさんとおばあさんはムダに圧がある。

まるで面接だ。

僕はバイト以外で面接を受けたことないけど。

面接が嫌だから働かなかったまであるかも。

けど自然な感じで話し始めたならそこまでのことはなくって、むしろ話し好きなお年寄りってだけだったから今は怖くない。

見た目にさえ慣れれば案外いけるもんだな。

世話好きなおばさんとかに話しかけられるいつもどおりに、僕のことを聞くのもそこそこに勝手に自分の身の上話をはじめられたからふんふん聞いてれば良くて楽。

これまもた例のごとくおばあさんが一方的に話しておじいさんのほうは相づちをうつ程度なのは、世界のどこでも共通らしい。

聞かされてしまったところによると、この人たちは長いこと……ニュアンス的に少なくとも僕が生まれる前からずっとこっちに住んでいたらしい。

だから外国の人なのにほとんど違和感のない言葉づかいとかなんだろう……まあ語彙は硬いけど、そういう人もいなくはないしな。

むしろ強い方言に比べたら聞き取りやすいまであるし。

もつともこのごつつい見た目のせいで台なしになっているけど。

さてさて見た目は置いておいて、なんでも最近引退……なにをだろ……したばかりで時間が余って仕方がないんだとか。

いくら長く住んでいようと見た目が明らかに違うからどこへ行ってもヨソ者の腫れものの外国人扱いで困るんだとか愚痴られた。

そう……。

そんな感想しか浮かばない。

でも「見た目が明らかに違うんだから仕方がないけどねえ」って言うっていたのには心から同意する。

僕もこの体になってからうんざりするほどだもんな。

そんな感じで他愛もない、ちよつとだけ外国要素は混じるものの人からもよく聞くような話が続いていて拍子抜けしたからかいつの間にかにオートでの会話が成り立っている。

人って話していると気持ちよくなる生き物。

だから僕はさつきからペースを極端に落としていつものごとくに聞き手に回って、一口を少なめにして咀嚼回数を増やして時間を稼ぐ方向に進んだんだ。

おかげでお腹いっぱい過ぎるんだけど。

もう10分以上は話し続けているんだし、普通の人ならそろそろと話すのに満足しはじめる感じだしさっさと席を立ててほしいって願っている。

まだかなあ。

なんとなくて脚をぷらぷら。

「そのカメラも随分と使い込まれているが、君のものかね？」

「……………んぐ。いえ、これは兄のものを譲り受けたんです」

「ほう、お兄さんがいるのかね」

僕自身のことだけだね。

でもこう毎回架空の僕を語っていたらまるで僕がもうひとり居る感覚になってくるよね。

「だがそのお兄さんは君のお出かけには着いてきてくれないのかな？」

いくらここが平和な国だとはいえ、ご家族は君がたったひとりで丸1日……………心配されないのかね？」

「はい、僕がひとりが好きなのを知っているのです」

このへんはもう今日だけで10回くらいした会話だ。

さすがに考えなくってもすらすらと出てくる。

定型句って大事。

定型句さえあれば口下手でもなんとか乗り切れるんだ。

「それにけっこう頻繁に出かけるので、僕も家族もこういうのに慣れていきますし。いざとなったら周りを頼ります。いちおうは人の

あまり通らないようなところには行きませんし」

「そうかね。その歳で遠出とは、農らから見ると心配でしかたないのだから……………」

お兄さんⅡ僕なんだし、あまり突っ込まれないようあくまでもカメラをもらっただけで感じて興味を逸らしておくのも今日で何回目。

「まず」

お箸を置いてお茶をすするとご老人たちもひと息。

……まだまだ話したりないらしい。

普通なら「じゃあそろそろ……」ってしてくれるのになあ。

この人たちは手強い。

さつきまでみたいに立ち話じゃないから、相手もまた行き先があるっていうのを利用した方法が使えないし、そもそもここは終点だ。

それに来てからいちどもスマホとかも触らず、近くにある時計とかもぜんぜん見る気配がないのから時間には追われていないのがわかる。

しかも何かを食べる気配もない。

つまりはヒマを持って余したご老人。

手強いに決まっている。

……さらに言えば今の僕は彼らの孫くらいの見た目……文字通り年齢も容姿もだから興味を強く引くのはムリもないのか。

さあ困った。

さつきまでは口を動かすぶんお腹がいっぱいになっていたのに、時間が経ちすぎて逆にお腹に余裕が出てきちゃって、お腹がいっぱいはずなのにもう少し食べられそうで、だから動けない。

どつちにしろすぐには席を立ついいきつけかけが見当たaranさそう
だ。

「……君は箸を器用に使うんだね。 私たちも慣れてはいるんだが、
米粒なんて狙って拾うのはどうも苦手だ」

「そうですか」

いちいち食べるたびにすみっこのほうにご飯をまとめるっていう
クセが気になったのか、またどうでもいいことを言い出すおばあさん。

こういう悪意のない相手って無下にし辛いしなあ。

単純に話がしたくって、お年寄りで……いや、外国人だから僕たち
にとっては老けて見えるんだっけ……どつちにカテゴライズしたら
いいのかは微妙なんだけど。

いずれにしても隠居したご年配って印象だからどうにも苦手だ。子どもと年寄りだけは邪険にしようとしてもできないのが人つてもの。

これならまだ適当に相手をしていてもぜんぜん気にしない子どもとかのほうがマシなくらい……いやあのエネルギーに当てられるととっても疲れるから、それもなあ……？

とにもかくにもこの小さい口と胃袋、そのせいでちびつつつじやないと食欲が負けるほどに弱い体が悪い。

なのに食べようと思えば食べられそうっていうもはやわけわかんない状態になってきた。

きつとストレスだろう。

そうじゃなければこの人たちが登ってきたタイミングでぱつとまとめてさよならできたのに。

その敏捷性も足りないのか。

鍛えてこれだもんなあ……。

いろいろ課題のできた遠征だったな。

まだ終わってないけど。

「ふむ……」

どうでもいいことを話題にするために「撮った写真とかカメラの画面も見てもいいですよ」って言ったからカメラの中身を手持ち無沙汰にばらばらと見ていたおじいさんが顔を上げる。

「たしかに……からの景色はいいね。 儂らが来たときには見る余裕もなかったが、下の木々のあいだからの眺めよりはずっといい様だな。 いや、いいものを見せてもらった。 これなら儂の携帯でも良い画が撮れそうだ。 帰りにでも試してみよう」

おじいさんは羽織っていたベスト……釣りをする人とかがよく着けていたりするあれみたいなのからスマホを取り出す。

スマホ。

お年寄りって二極化するよなあ。

それを携帯って言うあたり本当に何十年も住んでいた感じがする。

「時にお嬢さん。 ひとつ聞いていいかね？」

「なんででしょうか」

スマホをおばあさんに……さつきから静かになってくれて助かっている彼女に手渡したおじいさんが、片目と眼帯とで僕をじっと見つめてきた。

「君は……お嬢さん……女の子で良いのだよね？」

「へ？」

なんかもものすごく当たり前すぎることを聞かれてフリーズする僕。

……。

……僕、ごく自然に僕自身のこと女でしょとか思っちゃってた。

それに気がついてさらに思考が止まる。

……アイデンティティの危機が迫っている。

外人さんって遠慮ないよね。

ただの文化の違いだし、実際現地だとその方がお互いに楽って知ってるから別に良いけど。

そんなわけで「君は女の子だよね？」って聞かれたわけだ。

結構聞きにくいこともずばずば言ってくる感じはまさに外国人。

……ただの年のせいかもだけど。

そういうのを今までほとんど聞かれたことなかったのって、髪の毛と服装とで女の子だって一目瞭然だからだろう。

もちろん違和感を無くすため意図的に男っぽくとか女の子っぽい服装にしてるんだけどね。

で、今はやっぱり女の子って見えるらしい。

帽子してるって言ってもいつもみたいのパーカーで隠してないし、そもそも今は取ってて髪の毛全部下ろしてるしだから顔も隠れていないし。

ズボンとシャツだけど登山なら普通だしな。

そうなるといくら「僕」って一人称を使って普通に話していても男だって思ってもらえなくなるってことで、つまりは男らしさが失われているってことだからしょうがないんだ。

でもそれは男だった僕にとってはとても悲しいこと。

楽だから良いしもういい加減に慣れてはいるけど……せめてスカートじゃないときは男って見て欲しいもんなあ。

でもそれを魔法さんが許さないんだ。

ほんと、どうしてか。

そう考えてみると今初めて男か女か聞かれたっていうのは僕のアイデンティティ的にはものすごくいいことかもね。

だって僕の中から幼女と化した僕の中から男が染み出ているってことになるんだし。

ほら「女の子っぽいけど男っぽくもあるし……どっち？」って聞か

れたわけだからさ。

「男の子なら……坊や」

なんか坊やって言う人レアだよな。

「……とは今は言わないのか……坊ちゃんかのう？」

うーん、どうかなあ。

「ぼく」とかかな？

うん、僕の主観から見て年下の大学生くらいの女の子に「ぼく？」って子供に対する感じで話しかけられるのってなんかぞくぞくするし。

男じや別になんとも思わないのに……なんなんだろうね、あれ。

「いやそれも……ううむ、言葉というのは難しい。とにかくだ、君は男性であって先ほどから呼んでいたように『お嬢さん』……レディー、つまりは女性なのではないのかと思ってな。いやなに、さつきからずっとそのように呼んでしまっていたけれども間違えていたら申し訳ないと思ってね」

「いえ、合っているので構いません」

肉体的にはなにひとつな。

もう特段のこだわりもないし。

そんなのは着せ替え人形で記憶を飛ばしてるあいだにどっか行っただから。

あの子は本当になあ……。

「ふむ、よかった。いや失礼した、話しているとどうもそう感じたのでね。儂らの故郷でも、その自分の流行りだったのだろうが髪が長い男子は多かったのだな」

あー、外国ってそういうイメージあるかも。

まあ何十カ国の寄せ集めのイメージなんだけどね。

「いわゆる海外」ってやつだ。

「この国でも近年は一見してどちらか判別できないような子供もよく見かけるようになってる。もはや見た目ではわからんし名前を聞いても分からんことが多い」

「お気になさらず」

うん、確かにな。

「ははっ、おいおいお前、そのお嬢さんに気を遣われてしまっているぞ？ 何十も下の子に」

「おっと、これは済まなかった」

「お気になさらず」

スマホで何やらしていたおばあさんが会話に戻ってきてしまうらしい。

「まず」

お茶をすすりつつ思う。

そういえば最近本当に、ごく自然に男とか女とかそこまで気にしなくなっていたなって。

初めのころはあれだけモヤモヤしていたのに、今では特になにも思わないことのほうが多い……かも？

着ている服装次第でどっちに見えるのかコントロールできているのが大きいのかな？

普段は男として地味な感じのシャツとズボンで、かがりがだだをこねるときや気分が乗ったときは女としてスカートにしたり髪の毛を少し出したりしてるもんな。

女装……いや、女の子としての格好。

スカートを履いて外に出ているもそこまで恥ずかしくないもんな。知り合いさえいなければ別になんということはないって感じ。

周囲にはそこそこ溶け込んでいるみたいだし。

まあ、もう半年だ。

これだけ時間が経ったら……慣れるよな、そりゃ。

女の子扱いにも女の子として見られることにも、抵抗感なんてもはや皆無だ。

……慣れきっているのが怖いって言えば怖いんだけど、もう今さらだし。

どうせ成長したとしたらどんな格好をしようと女の子扱いなんだろうし。

比較にはならないけどこのおばさんの胸も体格に見合ったものだしな。

せめて冬くらいは隠せるくらいの体型止まりならいいな。

メロンさんみたいなのやりきりんさんみたいになるとたぶんムリだろうからもうちよいちつつちやい感じで。

大きいのは見た目としてはすごくいいんだけど、僕的には大歓迎なんだけど……肩凝るらしいし。

あとはうつ伏せでごろごろしくくなるしな。

やっぱレモンさんくらい止まりでいいや。

「ああお嬢さん。コレが君を男に見えるだなんて失礼なことを言ってます。申し訳ないね」

「慣れていきますから」

夫のことを「コレ」呼ばわりの男よりも漢らしいおばあさん。

かかあ天下はどこでも変わらないらしい。

「だとしても、だ。『お前は男か』などレディーにするような話ではないだろう馬鹿。なあ？」

「ぐぬ……」

「許してくれ、男というものは無遠慮で鈍感な生き物なんだよ。お嬢さんもその内に嫌という程分かる」

けちよんけちよんおじいさん。

女性特有の言葉での攻撃で何にも言えなくなってる。

かがりとかも拗ねたりするとよくやるんだけど、いちいちちくちく来るんだよな！。

女性って怖い。

男の方がずっと穏やかって感じる。

「話を変えようか。こういうときは全く違うものがあるかな？」

いえ、そろそろお暇したいですけど？

「そうだな、それなら……これもまたぶしつけになって悪いが、君から見て私たちはどう見えるかね？」

「……………えっど？」

感性の違いからか投げってくるボールが物理法則を無視してる感じ。

「お前こそいきなり過ぎやしないか？ ほれ、お嬢さんも困っている。

物事はもつとシンプルにじゃぞ？」

「お前に言われたくないな」

「で、だ……お嬢さん。別に難しいことではないんだ、ただ普通の……小学生かね？ そうかね……である君の目から見て、明らかに外国人である儂らがどう映るのか気になっていてね」

「……………」

小学生って言われるのはもう諦めた。

園児よりかはずっとマシだもん。

「儂らがその辺を歩いているとな？ 儂らのどちらも君くらいの子どもからはどうも遠巻きにされることが多くてな。子どもが好きな儂らにとつては悲しいことこの上ないのだよ」

顔が怖いからです。

なんなら体から威圧感がほとぼしってるからです。

なーんて初対面の人相手にどこまで言ってもいいのやら。

「……………」

「……………」

でも子供の話し相手がいないのかとつても聞きたさそう。

じゃ、じゃあ遠慮なく……。

「……おふたりは背も高いですし、体格もとてもいい、ので、その。

………特にあなたのほうはプロレスラーでもおかしくないように見えますし、威圧感……ありますね？」

「むう」

できる限りニュアンスを柔らかくつて意識して言ってみてあげる。

「それは、私も……だな？」

「えっと、はい」

むしろお胸の威圧感でおばあさんの方がぶっちゃけ怖いです。

「分かっているとも、泣いて逃げられたことがあるんだ。……君よりも大きな子に」

しよげている初老夫婦。

「……僕たちが想像するような、女の人……とは、その、イメージというか受ける印象が、その」

「いや、わかった。それ以上はいいよ。ありがとう……」

特におばあさんがしよぼんとしている。

しよぼんとしても肩周りのごつさとか大きすぎて圧力しか感じないお胸とか腰周りとか、ついでに言うか怖い元凶な顔の……派手な傷跡とか。

傷跡。

グロクはないけどやっぱ怖いよね、そういうのって。

切った張ったの世界の人みたいじゃない？

多分怪我とかなんだろうけど。

そういう身体的特徴って面と向かって言いにくいものだし。

多分それは外国の方が言いにくいんじゃないかなって思う。

そんなもんだからナチュラルな迫力がある。

必ず侮られる僕としてはちよっぴりうらやましいかも。

「まあ、これは仕方がないことなんだがな？ 改めてそう言われてしまおうな。

いや、はつきりと言ってもらえるととても助かるんだが。

……これでも現役のころに比べてだいぶ薄くなったし、減量も

ずいぶんしているんだけどな。いくら体重を落とそうと、肩周り

脚はなかなか細くならなくてな……」

顔はともかくその体格は大の大人でも威圧されるもん。

骨格から違うしなあ。

僕もこの体になったばかりのころは、眉毛のあいだから鼻までの飛

び出した感じとか細すぎる脚とか違和感しかなかったし。

脚って骨格とか筋肉量とかがはつきり出ちやうよなあ。

「な？ 儂が言ったとおりだっただろう？」

なんか元気になってたらしいおじいさん。

あ、奥さんが凹んでると元気になるのも全国共通なんだ……。

「知己に聞いたっていつものように勝手に遠慮されてごまかされているだけだ。善意のウソは見抜く以前に気がつかないものだからなあ」

「通りで子どもと向き合って笑顔なぞしても逆効果だったわけだ

……」

あ、うん……多分それは。

「端から見ると筋肉からすぐまれたとしか映っていないなかつただろうな、ははっ！」

そうじゃないんだけどそういうことにおいてあげよう。

「無論それは儂もなのだしな。そうだろう、お嬢さん？」

「えーつと……………」

僕の反応で分かったのか、苦笑しながら笑うおじいさん。

「あなたたちは子供でなくても怖いんです」って誰か言っただけで……？

みんなも怖いんでしょ…………？

「…………ありがとう、お嬢さん。もう少し…………まずは服装からだな、試してみることにするよ。さすがに近づいただけで泣かれるのはこりごりなんだ。君くらいだよ、逃げたり泣いたりしなかつたのは。君は肝が据わっているね」

「そうですか」

だって僕大人だからね。

こういうときに自尊心が養われるんだ。

人は歳を取るほどにおんなじような話をするようになり、それが女の子の人だとさらに倍増する。

公園とかで話しかけてくるお年寄りとかだいたい前に聞いた話のアレンジしかないし、かがりやゆりかたちと会っているときも似たような話題…………まあさすがに「なんかこの前も話したよねー」とは言うけど、それでも話題はループする。

かがりの恋バナとかな。

む、恋バナ。

そういえば、あるときからぴたつと恋について聞いてこなくなつたのは…………飽きたんだろうな。

くるんさんだもんな。

ゆりかのは多分ただの興味だったんだろうし…………聞かれないからどうでもいつか。

「で、だ。お嬢さん、しつこくて済まないが頼みたい。——他にも

『何か』無いかね？」

「何か、ですか？」

しつこいけど凄みがあるから「しつこいのでうざったいです帰ってください」って言えない僕。

「うむ、ついでだしな。他にも何か、子どもに怖がられそうな要素があつたら遠慮なく言ってほしい。家族や仲間からは『特に気にしないでいい』の一点張りで教えてくれないのだよ。こちらは答えを問うている立場だから、何でもいい。まだ気がつくことがあれば是非言ってくれないか？ この話し方なども、これでも随分気をつけてはおるのだがまだ硬い印象だろうしの。ああ、もちろん怒ったりはしないさ。もし良ければ頼みたいのだよ」

この食い下がりよう……普段よっほど気兼ねなく言い合える対等な相手が居ないと見た。

まあふたりの話しっぷりから会社とかのトップだった感じだもんね。

それで子供とか居なければ……話をする相手も限られるか。

でも良いや、これで怒るんだつたら帰るし、そうじゃなくつてもそろそろお尻が疲れてきたし。

……そう言えば結構経つけどなんで誰も来ないんだろ？

登ってくるときは結構な頻度で人を見かけたからちよくちよくここにも来るはずなのにね。

やっぱりレストランとか閉まつてるからみんな引き返しちゃうのかな？

「遠慮がいらないのなら、もうひとつお伝えしたほうがよさそうなところが」

時間をかけて、リュックの中にぐしゃつと詰めていた紙を広げて元のようにお弁当を詰め始める。

帰ってからの楽しみ。

あ、帰りに漬物買ってくの忘れないようにしないとね。

「その、大人でもだと思えますけど……子供にとっておふたりの目つきは少し、きつすぎます。いえ、正確には目つきと顔つきの両方ですけど」

彫りが深いっていうのは別に　なんだか目つきが……ふつうの人がチワワだとするとハスキーくらいには鋭いつてジャブを入れてみる。

「……………」

「……………」

特段怒る気配はないけど……なんか観察されてる？

なんだろ。

まあいつか。

「さらに言ってしまうすと、そもそも笑い方も表情も声もその全てが怖いです。　たぶん、力が入りすぎなんだと思います」

緊張すると顔ってこわばるよね。

この人たちが緊張でそうなってるって思えないから多分会社とかで厳しい命令してたときの表情がくつついたままなんだ。

手で毎日うにうにって解せばそれなりに動くようになるって思うよ？

それで僕もびつくりするくらいかわいい笑顔でできるようになっただし。

うにうにって、うにうにって。

「……………ふははははー！」

悪役みたいな笑い方するおじいさん。

「そうだな、僕たちはいささか故郷……吹雪の吹きすさぶ寒い故郷の表情が染みついてしますぎていようだなー　ふははははっ」

言い回しが古い。

まるで俳優さんだ。

「太陽のせいもあるか……？　私たちにとってはこの国の日の光は少し強すぎるからな。　しかしこの国の人たちはサングラスをしているともっと避けてしまうしな……ううむ」

あー、サングラスって外国は普通だけどここじゃ普通じゃないよね。

花粉症とかのマスクは平気なのに不思議だね。

これが異文化ってやつ。

「いや、こういうのは本当に……一切の遠慮が無い、知り合いでない他人にこそ聞いてみるものだな！ 数年来の懸念があつという間だ！」
がははと笑っているおじいさん。

その笑い方も怖いんです。

声量が違うもんね。

「特に、家のものたちは皆無駄な遠慮をしてばかりいて困る」

だからぼそつと怖いこと言うのもまた怖いんだって。

いそいそとリュックに詰めてしまったものをぜんぶ出して、お弁当を下敷きにぎゅうぎゅうと詰めていく作業中。

「親しい者に、君のような幼……失礼、若者が、大人でないのがないから助かるよ。 他にもないかのう？ 話し方や仕草などささいなことからなんでもだ！ もう……20年はこちらの人たちと暮らししておるし、だから合わせ慣れているつもりではあるのだが。 君から見て何か……アドバイスはないだろうか。 これも縁というやつだ、是非聞かせてもらいたい」

なんか仲良くなつたって勝手に思っけ言っけ言ってくる人つて多いよね……僕そういうの苦手。

でもそういう人たちって割とひどいこと言われても平気な気がするし……なんかイラッて来たから言っっちゃえ。

「ええと、強いて言えば、その」

「はつきり言ってもらって構わないよ。 どうせ知人に当たっても君ほど気軽に教えてはくれないだろうからね。 なにを言われても怒ったりしない。 約束するよ」

なんだかおばあさんのほうも乗り気だし。

でも「怒らないから言っけごらん？」って怒る前フリじゃない？

そうじゃないよね？

信じるよ？

「………身体的特徴なので言いにくかったのですけど。 それは仕方ないとは言っても、子供と触れ合いたいのなら……その。 『そちらがつけている真つ黒でござつした眼帯』は遠くからでもはつきりと目立ちますし、近くだと威圧感があります」

「ほう? 『眼帯』とな」

怒ってないよね?

あ、背中に汗垂れてきた。

「……それでそちらは、目からほっぺたにかけての大きな傷跡。

……せめて髪の毛とかお化粧とかマスクとかで隠したほうが……いいと、思います」

「そんなに大きいかね?」

「え? あ、はい。ぱつと見て分かる程度には」

でも言いかけたことだから言っちゃう。

言えって言われたんだから言っても良いよね?

「……………」

「……………」

どうして?

怒らないって言ったのに。

怒らないって言ったじゃん?

怒らないって言ったじゃん!

ああいや、この人たちときどき変なタイミングで黙りこくる癖があるみたいだからもしかしたら怒っていいのかもしれないけど……なんというか、あれだ。

怖いものは怖い。

ただでさえ生物的な本能で体格差に圧迫されている僕になんてことするんだこの人たち。

……お年寄りだからって思わないで「僕、バスの時間あるんで……」ってさっさと下りちやえば良かったなあ。

「ぶすず」

しようがないから限りなくゼロに近づいて来たお茶をちびつとすすする。

……あ、怖いからって漏らさないようにしっかりと締めておかないと。

何か男のときより難しいけど、こごう……きゅってね、きゅって。

「……………」
「……………」
最近の若者は打たれ弱いとか言われてるけどしようがないじゃん。小さいころから理不尽には怒られないんだからさ。そんなことを思う。

こ、こんなにか弱い幼女に向かって手上げたりしないよね……？
その、たぶん見えなくなってるお目々と顔の傷のこと言ったってさ。

「……………」
「……………」

何かしゃべって？

そう思うけど続く沈黙。

やっぱり言わないほうがよかったのかな……事故かなんかのなんだろうし。

いやでも「なんでも言え」って言ってたし、なんだか勢いでするつと言っちゃったし……。

他人と接した経験が少なすぎるからどこからがダメなラインなのかが分からないんだ。

でもさ、言えって言ったじゃん……？

「……………」
「……………」

緊張感が漂う。

漂っているオーラ。

でも言っちゃったものはしょうがない。

言わなかったことになってできないんだから。

それにこの人たちが子供どころか大人からも避けられるのってどう考えても……映画で出てくる悪役そのものな顔つきと特徴のせいなんだしさ？

悪の親玉的なポジションの。

なんだかここだけ悪の組織が出てくる洋画チックなアトモスフィアだ。

あ、すごい。

おじいさんの筋肉がなんだかもりもりつと盛り上がっている。

……いきなり叩いたりはしないよね？

え？

怖いんだけど。

「……………なるほど。」

それには思い至らなんだ……」

「は？」

……聞き間違いかと思って思った途端に一気に力を抜いてしぼみ、背もたれに寄りかかって目の前のイスがぎぎいつと悲鳴を上げている声が聞こえた気がする。

筋肉と骨格とで体重、きつと前の僕よりもあるんだろうし。

「部下……召使……使用人、いや、友人」

友達って言うまでにもものすごく遠回りしてない？

「皆、長い付き合いなのだが気にするそぶりがなかったし話題にもそうそう上らない。そうか、このせいかな。……………盲点だったかな……」

「そうか、言われてみればたしかに。もう何年もカムフラージュの化粧もするのを忘れていたな。なるほどなるほど。知り合いということとは私の『これ』にも慣れているということだ、そりゃあ反応なぞ……あるわけがないか……」

露骨に落ち込むふたり。

無くしてたつて思ってた鍵とかを30分くらい必死に探して、ふと目の前にあったときの脱力感的な感じ。

「……………」

でも……なーんだ、怖がって損した。

おばあさんもイスに体重を乗せて……そろそろイスが壊れそうだけど大丈夫かな……脱力してふたりしてぶつぶつ言い合っているのを見るに、僕に対しては怒ってなかったらしい。

……この人たち、いやこの人たちの知り合いもみんな本気で気がついていかなかったの……？

それとも言えなかったのか。
たぶん言えなかったんだろうな。

ちらちらつと出てくる言葉から推測するにこの人たちは相当偉い立場の人みたいだしな。

面と向かってこういう怒られるかもしれないこと言えないのはわかるけど。

でも誰も居なかったんだ。

僕みたいに友達が居ないわけじゃないだろうから多分怒られそうで怖かったに違いない。

きつとそうだ。

「~~ず~~ず」

どうしよう。

怖いから逃げようとしていた相手がものすごく落ち込んでいるよ
うな、そんなレアなシチュエーションになってるんだけど。

「……おふたりとも、その」

きつと威圧感とかも気のせいだったんだろう。

たかが子供のひとことでここまで落ち込んでるんだもん。

よく見たら怖くなってきた。

「体格とか腕は仕方が無いので、服装は……町で普通の人が着ている
ようなカジジュアル……ラフなものにして。その、お化粧はもちろん
ですけど眼帯のほうは」

つぶらな瞳で見上げてくるおじいさんおばあさん。

あ、やっぱり怖いかも。

「子供に懐かれないのなら……」

でもなんかかわいそうになったから、普段のかがりとかに習って
言ってみてあげる。

「人ってギャップで笑ったりしますから……いっそのことウケ狙いで
赤とかピンクとか……そうで無くてもかわいいキャラクターものと
か……あるのかは知りませんが……そのときだけでもつけてみる

とか。普段使いでも、髪の毛の色に合わせてもう少し明るい色にした方が良かったって……」

僕の言葉を聞いてごぼつと起き上がるふたり。

イスさんからはさらなる悲鳴が上がっている。

なんていうか素のリアクションがぜんぜん違うからやつぱり外人さんだって感じる。

「やはり化粧か……そうしてみよう。厚化粧は嫌いだが若いころのようにせめてだな……」

「受け狙いという発想はなかった……！なるほど、花柄などでデコるというやつでいけそうだな……！」

まあ喜んでみるみたいだし、いっか。

多分僕に合わせて大げさに喜んでくれてるんだろうけど悪い気しないし。



「……では、私たちはこれで」

ひとしきりどんなのが良いかなって話したらようやく腰を上げてくれてほつとする。

「お先に失礼するよ。貴重でありがたい君からのアドバイス。

………ほんとうに貴重な、私たちを近くで見ても逃げ出したりしない子供の……ああいや失礼レディーから忌憚のない視点。早速と試してみんとな」

レディーって言われてもぴんと来ないのは男だからなんだろうか。

脳味噌まで女の子になってたら嬉しいはずだもんね。

懐いてくれない親戚の子供とかに「じいじ」とか「ばあば」とかそんな風に呼んでもらいたいって聞かれて、またそこそこに適当な思いつきをいくつか話したらなんだかずいぶんとありがたがられた。

でも僕としてもいろいろと得るところがあったから良かったんだ。

とりあえずこういうデッドエンド、逃げ場のなくって他の人がいない状況で絡まれちゃうと身動きできないっていう……強すぎる善意

だったり悪意を持った人を相手にするときにはまずいつて身にしみ
て理解できたし。

ほらもう、気がついたら30分も経ってるし。

「それでは」

「はい」

ふたりとも帽子とリュック……あとおじいさんは杖つていう来た
ときの出で立ちに戻っていた。

「お嬢さん」

「……はい？」

そのまま行ってくれるのかと思ったらおばあさんからなにかをか
さつと差し出され、貢ぎものをもらっていたさつきまでのクセでつい
受けとつちやつてから「これなんだろう」って考える。

……折りたたんだ、紙？

なんかやけに古風なものが僕の手に。

ここまで映画っぽいと現実感ないよね。

「これは相談に乗ってくれたお礼だ。……もし。もし何かあつた
らここに連絡するといい。ささいなことから重大なものまで何で
もだ」

「いえ、僕はそこまでのことは」

重いからやめて……？

「いいから受け取ってくれないか。君にとっての『そこまでのこと』
は、僕たちにとっては天啓にも等しいものだったのだからな」

こつん、と杖で主張するおじいさん。

いや、天啓つて。

だから言い回し……。

「そういうことだ。……私たちは君が『どんな状況』にあつても手を
貸す。約束しよう」

「……あ、はい。そういうことなら……」

なんか有無を言わさない感じ。

まあ受け取つちやつたし、僕が紙を広げて番号……外国の人つて数
字の書き方独特だよなあ……を見ているあいだにふたりはもう階段

までさしかかっていた。

「それではな、お嬢さん！　またいつか、だ！

………とりあえずは、これが似合うといつも
言っておったバカどもを肅正せんとな」

「大目に見てやれ。　だが、そうだな。　これを機に服飾などもいつ
もの者に任せるのではなく、もう少し若い世代の………」

「うむ」

風が運んできたなにやら物騒な言葉がちらりと。

「……………」

ほへーってしながら手元の紙をがさがき弄ぶこと少し。

………なんだったんだ、あの人たち。

話の内容と面白いあの肉食獣にがっしりとつかまれたみたいな雰囲気
気と言い、普通の人じゃないことだけはたしかなんだけど。

それこそこの前観たマフィアが出て来る映画に居たみたいな人た
ちだったじゃないか。

◇

「♪」

夕暮れ。

最近は一気に日が傾いて色づいてくるのが早くなってきた。
季節ってこういう時に感じるよね。

セミの声とオレンジ色の光を浴びながら、暑いんだけどもうそこま
でじゃない空気を引きずりつつ家へ向かっている。

もうすぐ……あの角を曲がれば家でぐったりできる。

あともう少しの辛抱だ。

そんなことを何十回繰り返してがんばって来たけどとうとう最後
の角だ。

肩と背中、両手、そしてそれを支えている脚で感じる、帰りに買っ
てきた荷物のずっしり感がつらい。

こつちに着いたのがまだ2時とちよつとかだったから「時間も

余ったし、なんだか体力にちよつと余裕があるな」って思ったから
ついついと買い物をしてきちゃったんだ。

昔からごくまれにある、苦手なはずの買い物とかを丸1日でもでき
ちやうつていうそういうエネルギーがある日だった様子。

普段は省エネなのにたまーにそういう日があるんだ。

こういうときは体と気分の動くままに任せたほうがいいって知っ
ているから、持てる限度までひたすらにお店を回っていた。

だから僕にしては珍しく、……3時間くらいずっと休まずにシヨツ
ピング。

まるでかがりみたいだな。

いや、あの子はお昼から夕方まで休みなしで動けるんだった……格
が違うんだ。

追いつける気がしないんだ。

ビニール袋が3方向からがさがさがさとうるさい。

重いし。

けどそのおかげで秋ものも揃えられたし、満足はしている。

今年の流行だろうストールとかも見つけられたし。

流行りのアイテムというやつをひととおり揃えて着回せばかがり
も満足するだろう。

僕にとつてはどうでもいいものでも、女の子と女性にとつては価値
のあるものらしいし。

概念は理解しているからあとはそれを肌でわかるようになるまで
続けるだけだ。

「……………うげ」

それにしても気分が悪い。

さっきの反動じゃなくて単純にお昼を食べ過ぎただけだ。

あと調子に乗ってはしやぎすぎたから疲れて気持ち悪い。

心なしか枝毛が増えてる気がする。

繊細で脆弱な僕の胃が悲鳴を上げっぱなしだ。

しょうがない……もう夜はとも食べられないだろうし、家に着い
たらまず赤ワインで消化しよう。

そう考えていたからか、普段は何かを考えなきゃいけないかったのを思い出せない。

重たい胃と荷物を抱えながらふらふらになってせえせえ言いながらようやく家にたどり着く。

どさつと荷物を下ろしてカギを取り出す。

荷物の重さでとうとう指までが疲れ切っていてうまく動かなくつてもたもたする。

でも頭がぼーつとしてるから特に急いだりしない。

急がなきゃいけない理由があつたはずなのに、普段よりずっと遅い僕の脳味噌は動いてくれない。

かちやかちやと、鍵穴がカギを受け入れない音が響き渡る。

かちやかちやかちや。

……よく考えたら今日つてわりと忙しかったよなあ。

そんなのんきな考えがぶわぶわ浮かぶ。

かちやかちやかちや。

遠出して子供料金に喜んで、お弁当を食べて……ごついお年寄りたち絡まれて。

あ、あのインパクトで忘れていたけどあの人たちを含めて人との会話でも相当に疲れているに違いない。

買い物でも動きっぱなしだったし……明日からの怠さとか筋肉痛とかが今から怖い。

怖いものばかりだな、僕って。

かちやかちやかちや。

まあいいや。

良くないはずなのに僕は気がつけない。

とりあえずお酒飲んでお風呂入ってゆっくりしよう。

手がかじかんだみたいになつていいるから、さつきからなかなか入らなかつたカギがようやくドアに差し込むことができ「かちやり」つてカギが空いて。

ほつとしてカギを抜いてポケットに入れて、荷物を持つとうと横を向く。

その全ての動作が普段よりもずつとろろしてて、頭ものろろしてて。

——だから、僕が気がついたときには遅かったんだ。

……後ろのほうに、人の気配。

手のひらと靴の中の足から、どつとイヤな汗が出る。

「……………あら」

頭の上から降ってくる、声。

僕よりもずつと大きい影法師が、僕からわずかのところに真っ黒にそびえている。

心臓がばくばくうるさい。

頭がががんとする。

……………昔から聞き慣れた、女の人。

たしか中学生だったはずの娘さんのいる……お母さんの、声。

——僕はこの人を、知っている。

「響、くん？」

汗はとめどなく出て、あたまのなかは真っ白になって……心臓がばくばくして止まらなくて、僕は、動けない。

……脚から力が抜けるっていうの、ほんとうなんだな。

そんなどうでもいいことが、飲み過ぎたときみたいに頭がイヤな感じに冷たくなって、周りが暗くなったように感じる中、ぐるぐると、くらくらと。

……………とうとう、やらかした。

今の僕は、半年前からの少女の外見で。

だぶつとしたズボンとシャツこそ着ているものの、暑いからって疲れているからって、お店で帽子を取ったまんまの……銀色の髪の毛と幼い女の子の顔を、出した状態で。

疲れて、でも嬉しくて、楽しくて、浮かれていて。

珍しくうじうじと「過去」じゃなくって「未来」のことばかりを考えていたせいだ。

慣れないことはするもんじゃない。

そういうのは嫌ってほど味わってきたのに。

「……………」

「……響、くん……よね？」

……僕が置かれている状況。

性別が変わって幼くなってなにもかもが変わってしまったっていう、超常で非現実的な、魔法みたいなものがかかった僕。

その銀髪幼女になった僕が、どう見ても面白い物をしてきたって格好でカギを開けてドアを開けようとしている姿を……この瞬間を、よりよっていちばん見られてはいけない人に……見られた。

「……………」

……言い訳も言い逃れも……もはやできない。
い。

最後はやっぱり、結局……僕自身がやらかしておしまいなんだな。

僕は「はい」とも「いいえ」とも言えなくって、振り向くこともドアを開けることもできなくって……ただただ血の気が引ききってイヤな汗かいて寒く感じるのに任せていた。

見られてる。

じいつと見られてる。

「……………っ！」

「……………っ！」

やばい。

やばいやばいやばいやばい。

汗が、イヤな汗が……体じゅうから吹き出しているのが分かる。

さっきまで……下りてきてまだまだ残暑の厳しい夕暮れを歩いて帰ってきたときに出ていたのとはぜんぜん違う、どろどろとした汗がにじみ出ている。

暑いとかのせいじゃなくってストレス性の汗。

とっても気持ちが悪い。

だけどそんなことを不快に思うことすらできないこの状況。

頭の中がぐるぐるしてわけがわからなくなっていて、最低でもちよっとひと息入れてからそれこそお酒でも飲んでゆつくりしてから解決策を見出したいけどできるわけない、この……今の僕をお隣さんに見られたっていうシチュエーション。

今この場でこの僕のことをどうにかして何かを言っただけさせられないとアウトだ。

……この体になつてからずっと、これを避けるためにあれだけ苦労してきたのに。

スカートとかはともかく肌も出さないようにして、じりじりと蒸されつつも帽子とパーカーで深く顔まで隠して、暑さに耐えるようにして夏休みのずっと……ほとんど2ヶ月くらいがんばって来たのに。

家の出入りだっただけ通りに誰もいないタイミグまで待つてからって言うのをもう何ヶ月も意識して努力して来たのに。

閉めきつてから久しいカーテンのスキマからじつと見つめ続けるか、あるいは狭い道をうねうねとしながら伺い続けるっていうのを徹底していたのに。

家の前の通りがムダにまっすぐなせいで目の届く範囲に人がいないっていう状況がなかなか見つからなくて、ヘトヘトになるまで「ただの通りがかった男の子ですよ」っていう演技をし続けて。

……その苦勞がたったの1回の、ほんのちよつとの油断のせいでぜんぶペアだ。

僕はもうおしまいだ。

……はじめのころにしていたような、いざバレたときのシミュレーションなんてとつくにやらなくなっている。

ましてや今はびっくりしていて恐慌していてそんなのとてもひねり出せるようなメンタルでもなくなっているし。

「……………」

視線が怖い。

だけど早く……「この家のお兄さんに呼ばれてるの?」「何か変なことされてない?」とか詰め寄られる前に……どうにかしてなんとかして、僕がここにいるのがおかしなことじゃなくて、もういなくなっている元の僕にいたずらとかされているんじゃない……つまりは、その、通報しないでほしいって上手に言わないと。

この場で、今のこの瞬間で作り出さないと、僕はパトカーに乗せられて保護されてしまう。

正直に言えば虚言癖な子か頭のおかしい子、はたまたは元の僕をかばっている子、かわいそうな女の子として。

ごまかしてもやっぱり家出とかになるし……虫歯とかがひとつもなくなっていてどう見ても歯医者さんに行つたことのない口の中になつていて、学校とかそのほかのすべてが記録がない……「この年になるまでどこにもお世話になつたことがなかった幼女」という虐待とか不法滞在とかさういった厄介ごとを抱え込んだ子として。

そうして前の僕はメディアに、どつちのいいわけをしても幼女拉致監禁……いや、自由に出入りしているから拉致だけで済むかな……していた男として取り上げられて。

20代のひとり暮らし、ひきこもっていた時期のあつた現ニート、両親がいないこと、近所を徘徊していた証言、ぬぼつとしたメガネで

もやしな男。

格好の餌食になるだろう要素しかない。

ゆりかに合わせるために買ったたりしたマンガとかゲームを見て「やっぱり……」ってなるんだ。

でもそれ以外に家の中には恥ずかしいものなんてなにもないからそれだけが幸い……いやいやスク水をはじめとして今の僕の服がたんまりとあるんだ、ついやつちやった自撮りとかだつてあるしつまりは前の僕も今の僕ももうだめだ。

客観的には幼女監禁どころかわいせつの証拠までが揃っているんだもん。

どうしよう。

こうならないために僕はがんばつて来たのに、崩れるのは一瞬で――

響くん、お久しぶりね！」

「……………、は？」

その言葉を僕の頭が処理するまでにたつぷり10秒はかかったつて思う。

小さいころから聞き慣れているお隣さんの声が……普通のトーンで降ってくる。

多分は小さいころの位置関係に戻っている、その人からの声か。

「前は毎日のように顔を合わせていたのにここどころ……そうねえ春からかしら……しばらく見かけなくなっていたから、近所のみなさんも私も心配していたのよ？」

ネガティブに振り切れたせいとか、すごいスピードで考えていたらしい僕の意識が斜め上方からの声で現実に戻される。

お隣さん。

そのお母さん。

お父さんとお母さんと娘さんの家の中で遭遇頻度の最も高い人。

「……………」

鍵を開けていたときのまんま、半分かがんで半分横を向いて顔を少しだけ回しているっていうものすごく中途はんぱな体勢なのを

思い出しつつ、とりあえずあいまいな顔で会釈らしきものだけをして
少しだけまともな姿勢になりながら考える僕。

そうか、やつぱり数年来の徘徊……じゃなくって散歩とか運動とか
買い物とかそういう日常生活でしょっちゆう声をかけられていたん
だ、さすがにウワサにもなるか。

理由が分からないけど毎朝家の前に立っていて通りがけると挨拶
してくるお年寄りとか、小学校とかの交通整理のおじさんおばさんや
先生とか、よく徘徊している人とかには無視もできなくって挨拶だけ
しかえしてたんだもんな。

……だからこそ初めのころにはそういうのいっぱい考えていたし、
対策も……一応は考えていたはずんだけど、そんなの今はとつくに
忘れてる。

とにもかくにも部屋に戻って日記を探せばどれかは見つけられる
んだと思うけど、脅威は今この瞬間に僕の脳味噌で処理しなきゃ行
けないもの。

でもどうやって？

小学生女子な見た目の僕が、この家の鍵を持って開けたんだ。

買い物を終えてきた格好で鍵を開けた以上「友だちの家と間違えて
来ちゃったんですう」っていうのはダメ。

「前の僕とは一切関係がない別人なんですう、すぐ近くの家に住んで
いる子どものところ遊びに来ただけなんですう、まちがえちやいま
したあ」っていうのはムリだ。

こういうときの僕はすごい速さで考えている。

そうだ、親戚っていうのなら……父さんたちのお葬式とかいろいろ
を済ませてからの僕は、人づきあい自体がそもそも好きじゃない僕は
……ご近所づきあいというものを最低限しかしてこなかった。

特に謎の対人恐怖症な時期には目を合わせないでの「ど、どうも
……」で精いっぱい立ち話とかにもろくにつきあってこなかった。
だから今日のお天気のこととかくらいしか話してこなかったはず。

その期間、実に10年。

ご近所でもお隣のこの人でも僕の、この家に関する情報は10年前

で止まっているはず。

噂なんてそもそも家から出ないんだから僕自身からは生まれようがないし、僕と唯一の関係がある親戚の人たちだってほとんど来てもない。

10年つていうのは大きい。

それは僕が幼女になってからさんざんと経験してきたように、世代がひとつ変わっているほどに。

中学生なら新人を通り越したいっぱしの社会人に。

大学生なら深甚な社会人……うまく行っていれば会社の出世ロードなるものを進み初めてそろそろ結婚を考える時期で、子どもまでできていてもおかしくはない。

そんな時間……時の流れというもの。

時間はどんな人にだって平等だ。

あの子たちを見ればわかる。

僕が中学生のときに赤ん坊だった子たちが今や中学生だ。

……つまり僕がひとりになったあのとき、父さんと母さんが死んだあのときにはまだいなかったけど……そのへんのタイミングで生まれた10歳に満たないこの見た目通りの小学生な親戚。

遠縁の親戚……外国で結婚した誰かでもいい。

今の僕はその子供。

そういうことにすれば、あるいは。

というかそれしかないな、うん。

だってひとり暮らしの成年男性の家に女兒がいるだなんて……これが未成年誘拐じゃないシチュエーションなんてそれくらいしか思い浮かばないしな。

このご時世、成人している男の元に未成年の少女が来ている時点で怪しまれないはずがないんだ。

よし、今は親戚つてことで乗り切ろう。

ウソが増えるのは困るけど精神的なつながりっていうのなら親戚っていうのも間違いじゃないし、なによりも本人だし。

「親戚」の範囲には家族も本人も含まれるはずなんだ。

ひとり暮らしの男の家に親戚ついてもミニママでも、いやミニママだからこそ女の子がひとりできて来ているっていうのは今見られている以上避けようがない事実にはなっちゃうけどまだマシのはず。

あ、でも、「じゃあちよつと『前の僕』を呼んできて」なんて言われたら？

……前の僕は寝込んでいるってことにしておこう。

で、今の僕がそれをお見舞いに来ているっていうことで。

移しちゃ困るからっていうことにすればお見舞いっていうありがたい迷惑もお断りできるし。

うん、それならどっちもウソじゃないしな。

そこまでおかしいシチュエーションでもない。

この僕はいくつか先の駅に住んでいて、今は学校帰りとかなんとか適当に作り上げよう。

女兒を連れ込んでいる理由としては……不審に思われにくい言い訳の中じゃたぶんマシな方だと思うし。

そうそう、前の僕が頼んだんじゃなくって親戚が無理やりに……それこそ今の僕が、少女な僕が「心配でしかたがなくて来ました」みたいに押しかけなるとかみたいなさういいう演技でもすれば、説得力は増す……かもしれない。

……大丈夫だ、落ち着こう。

と言うよりもそれ以外にこの場をやり過ごす手立てはないんだ。

怪しまれて「ちよつとごめんね？」って家に入られたらアウト。

怪しまれて「ちよつと家に来てくれないかしら？」って手を引かれてもアウト。

ここの対応で全てが決まるんだ。

「……………ふうっ」

息を吐いて幼女モードに切り替え。

今まで、買い物のおまけにおまけしてもらったためとか演技の練習のためとかで、少女とか幼児とかのフリというものをそこそ練習してきた。

やったら恥ずかしくなるからその日は寝るまで悶えることになっ

ていたけど、やらないよりはマシだろう。

今社会的に死ぬのと、今を乗り切って夜に悶え死にそうになるとどっちがいいかなんて、悶え死にそうになれるという状況を得られるか否かなんて考えるまでもない。

今夜安心してお酒を呑めるかどうかの瀬戸際なんだ、がんばるしかない。

「ふ——……」

さらに息をおなかの底まで吐き出してぱつと吸い込むと同時に、表情筋を覚えている形に整えて喉の中の形も意識して顔は活発系少女に、声も女性受けしやすい高いものでリアクションをゆりかみたいに活発に、大げさなくらいにする。

「あ………あのー」

よし、声は大丈夫。

「僕……あ、いや、私、は………」

よく考えたら銀髪僕っ娘洋ロリなんて属性過多すぎる。

まずは「私」で普通の女の子らしく。

脚のバネを使うのがカギだ。

軽く飛び跳ねるようにすると今の僕を形作っている髪の毛がぴよんと動いて、余計に子供っぽさを演出する。

これはゆりかを観察して得られた仕草。

驚いた感じの顔をしているお隣さんの奥さん……娘さんのお姉さんとよくまちがわれている、まだまだ若い同世代の人の顔を見あげる。

……あ。

ひよつとして「髪の毛は長いけど男です」でよかったんじゃない……？

親か自分の趣味ですつて。

あるいは故郷……祖父母とかからの慣習ですとかなんとか。

今日会ったお年寄りたちもどっちでもおかしくないみたいない言い振りだったし。

シャツにズボンで女の子らしさのかけらもない格好を選んでいる

い奥さんを見返しつつ……僕の背中を、冷たい汗がつつーつと下る。

——なんでこの人は、僕を。

銀髪幼女になっていて前の面影のかけらもなくなって……まだ僕が僕だって言っていないのに、今の僕に向かって、「響」っていう前の僕の名前として……「僕」として認識しているんだ？

25話 発覚と発覚 2 / 4

「響くん？」

聞き慣れたはずの声が聞き慣れた感じの世間話をしてきている。

「この春はぜんぜん見なくてみんな心配していたんだけどね。でも夏休み前からかしら？ ああ、もう学生さん……じゃないから梅雨が明けたくらいって言ったほうがいいのかな？ 暑くなってきたころからお出かけが多くなっていたものねっ」

「ええと……」

「あ、そうそう、みんなで話していたのよ。響くん、昔から冬はよく見かけるけど夏はめったに見なかったのに今年は逆なんだ、珍しいねーって。——さんとか——さんなんかは響くんとご挨拶できなくて寂しいって言うていたわよ？ 今どき珍しくあいさつをちゃんとしてきて硬派でまじめな好青年だから、なおさらに心配だって」

「……………、あの」

女性特有のお話するスイッチがかちんと入りかけていたから強引に割り込む。

普段は遮ったりせずに話したいだけ話させて適当な相づちを打つフリをして満足するまでしゃべらせておくんだけど、今は……事情がちがう。

僕には……知りたくって知りたくなくって、でも……知らなきやならないことがあるんだ。

「あらっ」

「その。「僕」が……………。「響」だと——分かるんですか…………？」

さつきとはまた違う感じの汗がとつくに冷たくなってきた背筋をまたつつーっと流れ、ぱんつに吸い込まれる。

さつきは、今の僕が前の僕に、成人男性の家に幼女がひとりで来ていることをとがめられるかもってことしか頭になかったんだけど……彼女は、お隣さんは、奥さんは、僕のこと。

こんなに姿が変わっているのに僕のことを、……そういえば、はじめっから。

腰まで広がって狭まってそれからぶわっと広がって見えていたはずの、色の長い髪の毛を見てからずーっと「僕」のことを——「響くん」って、呼んできた。

身長も体重もぐっと小さくなっていてとつても苦労している、別人の顔になっているこのミニママを。

「いやあね、ボケにはまだ早いわよ！　うちのおばあちゃんじゃないんだから！」

「あ、はい。飛川さんは娘さんがいるようには見えなくらいにはお若いですけど」

久しぶりにお隣さんの名字を口にした気がする。

多分僕が今の僕になってからは初めてだもんな。

「あらやだ響くんだったら!!　いっつも上手なんだから！」

「いえ、本当ですから」

まだ40にもなっていないはずだしな、たしか。

僕のいなくなってしまうた母さんの代わりをしなきゃって変な義務感があるらしく、事あるごとにお母さん風を吹かせてくるし母親のように接してくるけど……いや、僕としては近所のお姉さんって意識しか未だに持てない。

よそ行きの格好をすれば普通の大学生にしか見えないし。

お化粧控えめでこれだもんなあ。

「……響くん？　私、夫も娘もいるんだからそういうこと言ったりしたらダメよー？　言っておくけど私と同じような他のお母さま方もっ。みんな言っていたのよ、響くんってば気を抜くとすぐそういうこと言うマダムキラーだって……あらやだ、内緒にしておこうって思っただのに」

女の人の会話では基本的に内緒なんてない。

あの子たちに揉まれて知った事実だ。

「……………ごめんね、忘れてちようだい？」

「はあ……………えっと、それで。僕を「響」だと分かったのは」

「ああ！ そうだったわね」

お隣の飛川さんもまた買い物帰りだったらしく、ビニール袋をかきりと足元に置き直してから。

ジャガイモと牛乳が重そうだ。

……カレーかシチューか。

「そうそう、だって今年こそ私のほうも娘のPTAとかで忙しくって響くんと顔を合わせる機会がなかったけど、だって響くんがちっちゃいころからよく……そうね、中高生のときなんかは夫の見送りのときとかに毎朝のように会っていたじゃない？ 夫と同じくらいの電車だったんだから。 見間違えたりなんてしないわ、たったの何ヶ月くらい会わなかっただけで。 『ちよつと変わっただけじゃない』」

「……………そう、ですか」

……こつそりと手をにぎにぎしてみる。

うん。

爪は薄いしちっこい、節くれがなくなっていてぷにぷにしているまんまるい幼女チックな今の僕の手だ。

はじめのころに考えていたような「僕の認識だけがおかしくなっていて周りは至って正常」だっていう仮定は成り立たないだろう。

だって体の感覚……五感のすべてがこの具合で、事実として時間あたりの移動可能距離とか体力とか食欲とか視線の低さとかその他もろもろ今の姿でしか有り得ない状態なんだ。

さんざんに苦勞してきた幼女のデメリットを惜しげもなく体験してきたはずだ。

あと食費が半分とか「おつかい偉いねえ」っておまけしてくれることがあるとか子ども料金とかの数少ないメリットも。

そのうえ半年近く付き合ってきたあの子たち……内のふたりはひと月だけだけど、でもそれだけずっと顔をつきあわせていたあの子たちの反応も、大人の男に対するものじゃなかった。

どう見たって小学生でしかない、否定したかった幼い子どもの見た目の……女の子を相手にするものだった。

じやなきや家に上げたりなんてしないだろう。

いくらくくるんさんだつてさすがにそこまでは
……ないよね？

だからこそあの子たちをはじめとして出会った人たちのみんながみんな「幼女だつて思い込んでいるおかしな男」を哀れんでいるからそういう対応をしているんだつていう可能性、お店の人ひとりひとりまでがそうしているんだつていう可能性と、僕がほんとうに魔法さんのせいでも女の子になっているつていう可能性。

週に何回もおんなじファミレスとか中学生の女の子の家とかに……若く見られたりしたつて大学生の男が加わっているなんて絶対にひと悶着起きるはずだ。

まあ間違いないとおまわりさん、そうでなくても店員さんとかがひと言二言三言言ってくるはずだ。

だから僕の頭と体、どっちがおかしくなっているのかつて言ったら……そりゃあ僕がマジックでトランスフォームしているつて考えたほうがなにもかもの説明がつく。

だから……だから。

「？」

——この人は、何で不思議そうな顔をしてるんだ。

僕が本当に幼女になつてゐるつて思ったからこそ僕は僕の認識と意識と五感と……「僕自身」を信用することができて、魔法さんの機嫌を損ねないようにすることでなんとか平穩に過ごしていたのに。

見上げると口元の緩みきつた飛川さんの顔。

……なんだ、これは。

お隣さんは……姿が変わつた今の僕を、前の……これまでの僕だつて認識している？

性別が変わつて人種が変わつて色素が変わつて年齢も顔も変わつているのにな？

どこにでもいるぬぼつとした純国産な成人の男が一気に幼女になつて洋物になつて、なのに不審にも思わなくつて「かわいらしくなつた」つていうたつたのひと言で、片づけている……？

おかしい。

おかしすぎる。

「……この夏はお洗濯をするのも早くにしていねえ。だってみんな汗をかくからたくさん干さないとならないしすぐに暑くなるじゃない？ だからだと思っただけど響くんが朝早くからお出かけするのをよくベランダから見かけたのよ。けど静かな時間帯に大声出すのはしたくないしって声はかけなかったんだけど」

そうか、上から見られていたのか……朝早くたってそもそも日の出の早い夏だ、みんなだつて早く行動しているよな。

思いつけなかった。

いや、上方への警戒が足りなかった。

視点の低さがはつきり出ていた。

「今年は……見るたびに毎回暑そうな格好よね？ 運動とか外でする趣味とか新しくはじめたりしたのかしら？ 私たちみたいに体重が気になるから汗を余分にかこうとして……っていうわけじゃないわよね？」

「……まあ、そんな感じ、です」

観察されていた。

たぶん飛川さんだけじゃなくって、もつとたくさんのご近所さんに、通勤通学の人たちに。

「まあ！ よかったわっ！」

ぽんと両手を合わせる奥さん。

「響くんって、いつも……もう何年も朝晩のジョギングとかサイクリングとかしていたし、よくお出かけとかもしていたじゃない？ それなのにこの春からいきなり姿が見えなくなつて」

指をくるくるとしている奥さん。

「いつものようにご旅行とか思案の旅みたいなものとかに行っているのかとも思つたけど、お家にはいるようだし……だつて電気とかゴミとかいつも通りなんですもの。昔っから判を押ししたみたいに時間に正確なんだから。だからいつも響くんを見かける人たちのみなどで『病気とかしているんじゃないか』って心配していたのよ？ ひとり暮らしだしスパーでも見かけなくなつたから、きちんと食べて

いるのかって。でも通販は前よりたくさん来るようになって……
あ、そうそう、宅配のこの箱便利そうよねえ。場所取るしなにより
そこまで私の家では通販で食材とか買わないけど。……でも元気
そうでなによりだわっ」

知りたい情報をまとめて聞けるのはありがたい。

……それにしてもそこまで大ごとになっていたとは、そしてそこ
まで話が広がっていたなんてびっくりだ。

田舎じゃないんだし、みんなそこまで他人に興味はないんだって
ずっと思っていたんだけどなあ。

奥さんを見上げる。

いつものようなほやんとした顔が、やっぱり女性らしい体つきのせ
いでお胸のすぐ上に乗っかっている。

この人、僕より頭いつこ以上背が低かったのになあ。

もうそろそろ娘さんに追い抜かされているんだろうか？

でもそこまで話が伝わっているんだ、もしかしたら今の僕のことも
誰かに見られていて知られていたかも……いやいや、現に飛川さんは
ほんとうに今の僕を見て「以前の僕」だって認識しているんだ。

……それなら、だ。

「……………」

……ものすごく恥ずかしいし間違ってたら人生の汚点になるけど
今はそんなこと言ってる場合じゃない。

実験のため、さっきのおねだりポーズングをふたたび。

こびっこびな、だけどガワのおかけであざとさがかけらも感じられ
ない、幼女チックなスマイルで、声も「女の子A」とかになれそうな
くらいの調節して。

「すみません飛川さん。実は僕、見ての通りにこの春から……、そ
の。イメチェン、してみたくです。こんな風にガラツと変えて。

……似合っていますか？」

いちいち語尾を上げてみる。

喉が痛い。

ほっぺたの筋肉がひくひくする。

光を写さなくなった瞳は、
がらんどろになっていた。

人の目。

視線っていうものは怖いもの。

人に限らず動物でも「目を合わせる」ってのはよっぽどの仲じゃなければガンつけてるってことになるって言う。

だから僕みたいに人と距離感が遠いタイプの人間は普通の人の普通の距離から見られると怖く感じるんだ。

それは昔っから……きつと幼いころからでも普通の小学生をやっていたときも、こじらせつつあったときから引きこもっていたときがピークだったとしても、今でも実はそう変わってはいない。

ただ、慣れてきただけ。

ほんのちよつと大人になって、嫌なことになちよつとだけ耐えられるようになっただけなんだ。

目があつて頭の中をのぞき込まれている感覚に対する耐性と、実は目が合つてる瞬間って普通の人は特になにも考えていないんだっていうのを経験と知識で知ったからだ。

ほとんどの人は目を見ただけで人の頭の中までわかつたりしやしないって、ようやくわかつてきただけ。

サトリサトラレなんてのはよっぽどの仲とか魔法さんの影響下で無ければ起きようがないんだ。

つまりはただちよつと繊細すぎただけで臆病すぎただけで、考えすぎただけ。

僕みたいな人って案外に多いんだって知ってから気が楽になったのもある気がする。

じゃなきや今だつて誰かと話すだけで疲れたりはしないだろうし。最近のでいくらかは良くなつてきてはいるけど、でも生まれつきの性格っていうのは多分治らない。

というよりは、これが僕みたいな性格の人にとっての「普通」なんだって思っている。

「……………」

そんないろいろが頭に浮かぶ程度に僕の脳みそはパニックになっていたらしい。

当然だ、だって。

——ぶつぶつと息のような声のような、そういうものをかすかに動かしている唇と恐らく舌とで唱えながら……ただただなにも見えないみたいなのに、しつかりと見てしまうとさっきまではあんなに輝いていた目を濁らせて僕を見透かすようで僕が見透かしてしまいうな、そんな目が光を反射しないで向いているんだから。

表情がない。

焦点も合っていない。

そもそもとして僕を見ていない。

僕と話しているというのを……意識していない。

これはまるで、俗に言う「取り憑かれてる」ってやつみたいで——

「……………あらあらだつて響くんは男の子でちつちやいころはあんなにかわいくても立派に大きくなってお隣でよく家に来てもらつて勉強をそういえばうちが越してくる前からだったからよくお世話になっていてもやっぱり人気なのよねイケメンで美少女でお年寄りの方たちからは受けがよくつてまるでお人形さんみたいで娘も小さいときにはよく大きくなったらあらでも女の子同士になつちやうのねいえでも……っ、けほっけほっ」
最後の方になるとあまりにも苦しそうに息を最後まで吐き出すようにしてぶつぶつとだんだんと大きな声になってきて、聞いているだけですらいようなつぶやきから会話になってきて。

呼吸を整えてからもう一度……やっぱり変わらない瞳で僕を見下ろしてくる。

「でもたしかけつこう前に成人のお祝いで写真をあらあのときはどうしてお父さんとお母さんがあらごめんなさいあのときからいなくなつてしまったのよねだからそうして親戚のかたとうち家族で一緒にお祝いしてあげてなんだか肩身が狭そうだったけれどでも記念だからきつちり撮っておかないとつてほんと響くんって繊細なんだか

らでもそれがまた」

人って意外と息継ぎつてのをしてる。

そういうのは普段は全然意識しないんだけど、ふとした瞬間にそれに意識が向いた途端に……10秒に1回以上の頻度でされるそれがやけに大きく耳に届くもの。

それが、今のこの人からは一切ない。

「あの」

心配になってきたから恐ろしい速さで回っている口を止めようと試みる。

目をのぞき込むとなんだか僕までおかしくなっちゃいそう。

そんな気がするから、視線はそらして。

けど、止まらない。

「そういえばあと少しで中学生あらもうとつくになったんだったわねなら高校生いえ大学生よねだつて成人式だしあらあってもそれはうちの子がまだ小学生だったころのことだからだつてあの子つたら昔はお兄ちゃんお兄ちゃんつて懐いていたのになんだか恥ずかしがつていたんだものこれが年ごろつてやつなのねつてお父さんが落ち込んでいたのをよく覚えてあらそういえばもう卒業したんでしたつてそれなら卒業式はどうしたんだつたかしら」

いつものようにほつぺたに片手を当てて考えている……いつものクセ。

だけど今はずーっとひとりで話し続けていて、たぶん自制が効かなくなつていて、だからせえせえと言いなながら呼吸を整える間もなく続けている。

ぼたぼた垂れている汗は、きつと暑さのせいだけじゃなくつて。

「お母さんの代わりにきつとどなたかがあたしか親戚のお名前を忘れてしまったわねでもきつと響くんにあとで聞けばあら女の子なんだから響くんはおかしいわよねそういえばなら響ちゃんかしらいえでもやつぱり響くんよねみんなもそう呼んでいるんだしだつて響くんだものね響くん響ちゃんんどつちだつたつけねえひびきくんかなそれともひびきちゃんかな？」

と、半分上を向いている格好だった飛川さんはいきなりこっちの方を向いてきて僕と視線が合いそうになってきて、危ないところでさすがに成功した。

「いえでも当然いまはおひとりでもお父さんとお母さんは響くんにべつたりであらでもやっぱり今はいないしあららいるはずよねだってひとりでなんてとても暮らしていけないものだった響くんはまだ中学生なんだもの親御さんなしではでもそれならどうして響ちゃんは今までおうちでもう何年も」



延々と続く彼女の苦しそうなはずなのに平気そうな声に、思わず大きめの声が出た。

「飛川さん、すみません。聞いてください」

声をかけるとぴたっと話すのを止めて僕に意識を向けているのがわかる。

当然視線は合わせないから予想でしかないけど。

でも止めないとなんだか危なさそうだし。

あと声がとつてもつらそうで。

「……………ふう……………」

ようやくにまともな息継ぎができてるけど……………多分また話し始めちゃうとおんなじだ。

話している内容は支離滅裂……………いや、今と昔の記憶がごっちゃになっっている？

だって僕の呼び方とか母さんたちのこととかわけわからないことになってきているしな。

でも大きめの声で話しかけた僕の呼びかけには反応する、と。

注意を向けている様子ではある。

だったら。

「飛川さん。……………僕、このとおり遠出をしてきたところで」

「……………」

くるっと回ってみる。

あいかかわらず目を合わせてはいないけどどうやら僕のことを見てはいるらしい。

だってわざと傾けた髪の毛とかに注目しているし、手に取ってみれば手のひらを見ているみたいだし。

女の人ってアクセサリー、アクセだっけ……それ1個にも敏感に反応する生き物だからかな。

完全におかしくなったわけじゃないみたい……なら。

「今日はもう、とつても疲れているんです。また……今度でも良いでしょうか。ほら、買ってきた食材、冷蔵庫。入れないと大変ですし」

「……………」

僕の髪の毛のふわっとした先を眺める形で口も目も空いたまままで静止することしばし。

……緊張感がすごい。

なんというか全身に力が入りっぱなしって感じだ。

僕も、目の前でおかしなことになっている奥さんも。

と、体の力が抜けたようになってしまったと思ったら急にしやきつとして、いつのまにか悪くなっていったらしい顔色も一気に明るくなってきて……顔に笑顔が戻ってくる。

最後に焦点が僕と、僕の目とぴつたりと合つてやつと普段通りになる彼女。

そんな彼女のひたいにはびっしりとした汗。

それを今になって気がついたように拭っている。

たぶん目とかにも入っていたはずだし本当に気がついていなかったんだろう。

ごしごしと……くしくしって感じの仕草もやっぱりお姉さんってしか見えないな。

経産婦なお姉さん……おつとお隣さんな奥さんが目をこすりつつ苦笑している。

「あらいやだ。響くん、ごめんなさい？　こんなに話し込んでやつてみたいで」

「……………いえ、お気になさらず」

きよろきよろと門の外のほうを見回す、いつもどおりに戻ったように見えるお隣さん。

セミの声が少なくなつて夜の、秋の虫の声が混じつていて……夕日が沈んだあとの黄昏になつていて。

もう影法師も薄くなつてきているのに僕も気がついた。

……そんなに時間、経っていたのか。

なのにこの人が……最後のほうはそこそこに大きな声でひたすらに話していて、途中で盛大に苦しい感じのセキとかもしていたつていうのに、通りがかったいたはずの誰ひとり声すらかけてこないなんて。

「私つたらおしゃべりに夢中になつて気がつかなかつて。響くんは長話嫌いなのに、それにそんなに重そうな荷物ですものね、疲れているのに引き留めちゃつてごめんなさい」

「い、いえ」

……普通の、慣れているこの人の話し方に戻っている。

「でも私、響くんの元気な顔、久しぶりに見ることができてほんとうに安心したわ！ 響くんが元気だつて、心配されているご近所の方たちとか娘や夫にも伝えておくわね？」

「え、ええ……ありがとうございます」

とつきにあいまいな返事を口にしてから「なに伝えるんだろ」って思った。

「そういえばお夕飯とかもらい物の余りとか最近なんだかやけに多かったのつて『響くんにお裾分けするの忘れていたから』だったのねえ……なんでかしら？ もう何年もそうしてきたのにね？」

「……いえ僕は、もうそういうのは」

「いいのいいの！」

いや、僕はおすそ分けに乗じて話し込まれたり家に上がられたりお隣さん家に連行されるのが嫌だからなんだけど。

「娘は部活、夫は会社の人との急な夕食とかでせっかく作った食事、よく余るんだから。最近お野菜あまり食べていないんでしょう？」

なら栄養も心配よねえ」

「いえ、僕は要らな」

「とにかく『響くんがかわいくなっている』の、ぼつちり伝えておくわね？ それじゃまたねっ」

「え、あの」

普段通りのせわしなさでさっさかと行っちゃった。

やっぱり女の人って人の話、聞かないよな。

かがりで慣れていた気がしたけど……これがご近所さんの井戸端会議とかママ友とのランチとかPTAとかで鍛えられた真の姿。

ぶるっと身震いしてぐっしよりと汗をかいていたのを思い出した僕。

ずっと立っていたのと緊張の走る場面をくぐり抜けたのと今日の疲れのみんなが……どつと押し寄せてくる。

「……………」

いつものように腕を上げてドアノブをひねってやつとのものでドアを開けて、買ってきたものやらリュックやらをずりずりと家の中へ引き込む。

もう体力も気力も残っていないからこうするだけで精いっぱいだ。ぱたんと閉めてがちゃりと……念のためにチェーンまでかけて。

「……………はあ……………」

……腕、背伸びしてぎりぎりだな……さすが低身長。なんて思ってる場合じゃ……ないんだよなあ……。

完全に安全で万全なことを確認してから僕は、ぺたんと崩れ落ちた。

「……………」

脚を見る。

がくがく震えている。

よく見れば手の指先までが真っ赤になって震えている。

——あれが、怖いっていう感情なんだ。

僕、そういうものとは無縁だったからこんなの知らなかった。

知識としては……腰抜かすとか情けないって思ってたけど、いざ僕

自身のことになるかと体には逆らえないって理解する。

僕は身の危険って言うのを感じたことがない。

海外にふらつと行ってたときもそうだったんだ。

特に目立たない男の身だったってのと単純に運が良かったからなんだろう。

……でも今は。

ちよつとしてからタイルの冷たさがおまたや内ももに伝わってきて冷たいのを感じて「ああそういういえばもう女の子座りのほうが楽になっっているんだな」なんて思ったりもした。

「ズボン越しても石の冷たさってちゃんと伝わるんだな」「これがスカートだったらくっついただけでひゃつとするんだろうな、だって直接肌にももんない」なんてどうでもいいけど男のときじゃ浮かばなかったことばかりが。

「……………」

このままここでうつ伏せでぺたつと寝たいくらいなんだけど……まぢがいなく風邪引くしぜつたい後悔する。

まずもって冷たいし硬いしほこりっぽいし砂っぽいしな。

あとは、たつた今まで感じていた恐怖がまだ抜けないのか……わずかな明るさしかない廊下から「何か」が来そう、そんな錯覚が来るくらいにはまだ僕は怖がっているらしい。

だから内ももの力で踏ん張ってどうにかぼーつと体を起こしているのを維持する。

10分もすればきつと、今のびつくりにもほどがある衝撃も少しは過ぎてくれるだろうって思いつつ。

……それにしても。

今のもきつと、魔法さん……の仕業なんだろうなあ。

髪の毛だとかハサミだとかそんな僕だけに起きるようなことじゃなくってとうとう……とうとう周りの人へも……僕の思い込みとかそういうのじゃなくって目に見える形で、現実に影響を及ぼすものになっちやってるんだ。

一体いつからなんだろうな。

……多分気がつかなかっただけで、たまたま運良くこうならなかっただけで。

きつと、あの朝からずっとなんだろうな。

だって見知らぬ女の子になっちゃってるんだもん。

「うあ——……」

こういうときくらいは肉体年齢と性別相応の声くらい出しても……良いよね。

25話 発覚と発覚 4 / 4

「ふい——……」

脱力して思わずで出た僕の声とぴちゃん天井から水面にしたたり落ちる音が反響する。

「……………」

ぼーっと上を向いていると視界に入ってきたのは浴室の物干し竿。

……ほとんど使ったことないし洗濯物は雨の日だって居間に干すし、いつつもこうして水滴がぼたぼたと地味にうるさいしたまに水滴がひやっと冷たいし……外した方が良いのかなあ。

まあ今の体じゃ届かないけど。

湯船のふたの上……たぶん乗っても平気だろうけど、たぶんそれでも届かないし。

そもそもとして外して動かせるだけの腕力がないだろうから無理かなあ。

本当に幼女の身の上は厳しい。

そう思いながら見上げているとうなじからお湯が髪の毛に染みこんでいって首すじがじわっと温かくなる。

この感覚が好き。

男のときじゃ絶対に……じゃないか、ロン毛にすればできるだろうけどしないだろうし……な感覚。

「……………」

そんなどうでもいいことばかりがぐるぐるしてて、とつくに汗がにじんできくるくらいには温まってきた。

頭を元に戻すと目に入るお湯越しの僕の体は、心なしか小さい。

光の屈折とサイズの問題だ。

……きつと、僕って言う幼女の心細さのせいもあるんだろう。

出るところなんてなくってお股がすつきりし過ぎていて細くつてくびれなんてなくってあばらが出てて揉めない胸な体。

「……………ふう」

見るともなく、何十回も視線が吸い寄せられてきた欠けているタイ

ルに今日もまた焦点が合う。

——魔法さんのせいでハサミが、金属の尖ったものが石を砕いたあ
のときの名残。

雑にべたべたとマスキングテープをとりあえずで貼って「あとでな
んとかしよ」って思っていたら結局そのまんまなやつ。

こういうの、よくあるよね。

だからはじめが肝心なんだ。

……それくらい何も起きなくて平和だったのに、な。

ぴちゃん。

ぞわぞわ。

ここに来て……この体になってそう時間が経っていないときにハ
サミが飛んで、魔法さんの……魔法の存在を認識して、それからずつ
となんにもなかったのに。

でも、だからこそ気が抜けていたんだろう。

お隣さんに見られて豹変してっていう、今の僕のことを知られた衝
撃をもともしない強烈なボディブローを浴びることになった。

あんなことの前には「前の僕のこと雑にイケメンって褒めてくれて
たな」とか「今の僕のことかわいって言われて凹んだな」とって
こととかはどうでもいいことになった。

もはやどうでもいいくらいのインパクトだった。

今でもあの剣幕を思い出すだけで怖いんだ。

おふろに入っているのを忘れるくらいにひやっとする。

……僕のこと、これまで通りの僕だって認識していた。

それなら社会的な死は免れそうだし、その点じゃ良かったのかもし
れない。

そう考えるとひよっとして僕、魔法さんに助けられた？

「……いやいや」

そもそもだ、そもそもとして魔法さんが僕をこんな姿にしなければ
……ま、まあ見た目は良いし、視力も良いからごろんとしたの読書が
とつても楽なんだけど……でも幼女になりさえしなければこれまで
の苦労なんて一切なくって、いつもどおりの生活が出来ていたはずな

んだ。

最初に考えてた、この家に住んでいる幼女な身バレっていう社会的な死よりもある意味ではマシではあるんだけど、ある意味ではもーつとひどい事態になっているってことで。

だって僕だけならともかく、他人にまで迷惑をかけつつあるんだから。

……飛川さん、喉大丈夫かなあ。

次会ったら聞いておかないとな。

だって、あんなに苦しそうになってたんだから。

もうお隣さんから隠れる必要、なくなっただし。

びちょん。

しずくでちよつとの間だけ僕の姿があいまいになって、波が収まってきたら……残念ながらちっこいままの僕の姿がはつきりと写ってしまう。

「……………」

顔も体も、両方とも見知らぬ幼女。

僕に残されているのは、僕だったっていう心……あるいは魂、あるいは意識だけ。

自意識以外は、世界のほとんど100%は僕のことを欧風幼女として見てくれない。

……今まで偶然発動しなかっただけで、元々この体、この姿。

この長いままで固定されている銀色の髪の毛とこのちっこい体からして魔法っていう地雷、抱え込んでるもんなあ。

特定の事象を起こさなければ爆発しないから安全ロックが掛かりはするけど……爆発物か何かだと思えない。

もう何ヶ月も……半年くらいか、それだけなかったもんだからすっかり油断していたのもしょうがないと思う。

僕は僕。

過大評価をするつもりはないからしょうがないものはしょうがないって結論づける。

うっかりって、気をつけていてもそのうちに起きるもんだしな。

だからうつかりなんだ。

どんなことをしたってゼロにはなれない。

なれるんだったら世の中からはヒューマンエラーなんてなくなるはずだしな。

……幸いにもというか残念にも大事に至らなかつたわけだし、これ以上くよくよしてもしょうがない。

理屈で分かっていたのが長風呂でだんだんと体と頭に染みてきた。こういうときはぼうつとするのが良いんだ。

最近さらさらめんどくさくなって、とうとうそのまま湯船の縁に横に伸ばすようにして伸ばしている髪の毛をたぐり寄せながら踏み台をぎゅむつと踏みしめてじゃぶつと上がる。

ぼうつとしてるし、20分くらいかけて髪の毛の水分をタオルに吸わせてのドライヤーっていう作業をしながら考えよう。

◇

「ふう」

ほかほかだ。

おふろとお酒のおかげで少しは氣力が戻ってきた。

やっぱりお酒は命の水だな。

「きりかえ、かんりょうつ」

ちよつとぼうつとしてるときは舌つ足らずになつちやう。

かがりに聞かれたら大変だろうな。

ぐつと力を込めた手はきょうもちつちやい。

ひとまずはこの魔法さんが起こしている事態を整理し直した。

さつきまでばらばらと確認し直していた日記帳を、今日の日付でぎゅつと開いてクセをつける。

腕を垂直にして全体重をかけないと紙の硬さに負ける腕力。

そう言えば小学生のときと違って教科書が硬くて重いつて思ってたな―って思い出す。

ペンが心持ち大きくなつた感覚にもすつかり慣れたし、学生しなく

なって全く書かないもんだから下手になっていた字も少しはマシになっっている。

そうしてちまちま書いていく。

またいつ何が起きるか分からないから。

「……さて」

まずはひとつめ。

この体について。

会ったこともない少女または幼女……いややっぱり少女の体になつたことが発端だけど、これについては夏休みとかにアルバムとか古い写真とか手紙とかを総当たりしてみただけど、親戚の誰にも、そこに写っていた知り合いの誰にも似ていないことが確認できている。

ネットで行方不明事件の記事とかもちろちらと覗いたりはして見ていたけど今の僕の幼女な顔はどこにもなかった。

……この体の幼女との入れ替わりだったっていう可能性は今のところは除外しておく。

考えはするけど無駄だしな……世界中のローカルニュースまで回る体力ないもん。

どうしてよりにもよってこの姿とこの顔とこの髪の毛になったのかは今でも不明なまま。

不明だけど、ほぼ100%僕に縁のある人じゃないってわかったという収穫もある。

……春までの僕の体とこの子が入れ替わつてるとかいう可能性は、僕ひとりじゃ調べることもできない以上考えてもしょうがない。

やっぱり魔法さんに魔法をかけられたって考えておく方が今は良いはずだ。

どうしようもないことについてうじうじ考えても無駄だもんね。ふたつめ。

見た目を変えられないことについて。

これは髪の毛を切ったときだけに起きるっはつきりしてる。

10回以上いろいろ試したからな、これだけは確実だ。

髪の毛を切って良いのは、前と横は3センチ、後ろは5センチまで。

たしか人って1ヶ月で1センチ髪の毛伸びるって言うし、普通の散髪の範囲なら魔法さんも良いよって言ってるんだろう。

夏休み、かがりのお守りもとい勉強会でお邪魔してたときに襲われてリボンとかゴムとかで髪の毛を結わえられたり編まれたりしたし、カチューシャとかその他にもろもろをつけられたこともあった。

あの子って本当にかわいいに夢中だよなあ……。

とにかくそういうので見た目を変えられたりしてもなんにもなかったから、その程度じゃ魔法さんの逆鱗に触れたりはしない様子。

……なんで猫耳・ウサギ耳・犬耳カチューシャとか揃えていたのかっていうのは今でも謎。

そういう趣味……コスプレ趣味があるんだろうか。

そういうのは自分で楽しんで欲しいって言うのはわがままなのかな。

おかげで僕の男としての自尊心が踏み潰された気がする。

「あ」

思い出した。

そのときに撮られた十数枚の写真。

僕がコスプレをさせられている現場。

消させようと思っただけじゃないままだ。

……諦めよう……くるんさんには何を言っても無駄なんだから。

「はあ……」

と、とにかくハサミのあとは今日まで1回も物がすっ飛んだりしたことはないから、髪の毛を切って見た目を変えようとするときだけに、明らかに不自然で強くて強引な魔法の力っていうものを目で見て確認することができる。

みつつめ。

さっきのだ。

目が真っ暗で真っ黒で、何も見ていないようで何でも見通すようになってまくしたてられた。

あれは……あの魔法は、あの魔法さんが起こした何かは、僕を見た人の認識を操っている……そういうものだって推測できる。

だってお隣さん、飛川さんは言っていた。

この姿の僕を外から見かけたときから僕なんだって……思い込んでいるって。

そんなの、このちっこい女の子を見て僕だって思うはずがないのに。

寡黙な美容師さんに適当にお任せしてもう何年ただの男のどこにでもいる短髪の男が、この長い髪の毛になっただけでも僕って分かっていた。

……この銀色のまつげと薄い色の瞳な顔を見ても「僕」を「僕」だつて、理解していた。

お隣さんは前の僕と明らかに違う今の僕を疑いもせず同一人物だつて認識して……そのまま前の僕と話すように今の僕と話していたんだ。

あれが魔法さんのせいであつて以外に何があるんだ。

あの人がボケたつて言うのか。
ないない。

……あるとすれば、前の僕が今の僕をいたずらするために誘拐しているとか思われて、事情を探るためにとりあえずで話を合わせていたつていうのも……考えられなくはない。

ちよつと考えすぎかもしれないけど少女誘拐とかはニュースでさんざんと取り上げられている。

飛川さんが幼女な僕を見て、娘を持つ母親として、一般的で常識的な大人としてまずそう考えるのはおかしくはない。

まあほんとうにいい人だし、まったく疑いもしていなくつただけ幼い女の子が僕の家に来ているって思っただけつても……ゼロじゃないけど、だったらこそ今の僕を見て前の僕だつて思うはずがない。

「……たしか」

僕が、前の僕のこと……大人の男の僕のこと……いや、そこまでも言っていないかった。

たったの一言、今の僕とは違う、髪の毛を出した状態で普通の人にとっての僕とは明らかに違う要素な——「男」だつていうワンフレー

ズを口にただけで……魔法さんがお隣さんに、牙を剥いた。
たったのひとことで。

まるで呪文のように……それこそまさしくの魔法だな。

あのときの彼女はまるで操られているって言うか夢遊病みたいになつてたつて言うか半分寝ている感じっていうかお酒で頭がマヒしているっていうか、そのひどい状態になつて……目は明らかにおかしくって表情もなくなつて立っているのがやつとつて感じになつていて……思考は乱されて混乱していた。

まるで真逆のことを一気に左右から同時に言われたような……思考自体は正常なまま情報を処理できない感じ？

そういう矛盾した考えがとめどなく頭の中で広がって口から吐き出されていたようなわけ分かんない感じになつてた気がする。

しかもあそこまで大変なことになつていたのに通行人の誰ひとりとして奥さんの様子に気がつかなかつた。

最後の方はきつと道にまで声届いていたはずなのに。

話を切り上げようつてして話題を変えたとたんに、急に……何ごともなかつたかのように元どおり。

あの「ふと話しすぎたのに気がついた」って感じを見るに、意識がおかしくなつていたことについて自身でおかしいのに気がついているつていう自覚はなさそうだった。

……さっきの魔法さんの仕業。

他の人に気がつかせないようにするつていう働きもある
……つていうこと？

「……………」

とつくに何日分のスペースに書き殴るようにして書いている今の情報はきつと、支離滅裂なんだろう。

でも。

「……飛川さんみたいに、忘れちゃうかもだし」

魔法さんは同時にいくつもの魔法を扱うらしい。

ひとつは今の僕と前の僕をおなじ存在だつて認識させる力。

もうひとつは前の僕を思い出そうとするときに前の僕の、のっぺり

していた僕の姿を思い出させないようにする力。

あとはおかしな状況だって……たぶん僕以外に気がつかせないって言う力。

さっきの魔法が働いているのはハサミさんほどじゃなくてもすぐにわかりそう。

だって表情も目も明らかに変わるし話すのも止まらなくなるしな。だけどこれは……もしかすると。

「……………」

……ある考えが浮かんだけど、今は浮かんだままにしておこう。今日はもう疲れたんだ。

肉体的にも山登りで、精神的も散々の幼女扱いの後に成人男性扱いで。

今日1日で家からの距離も高低差も気分も乱高下しすぎたんだ。

ぱたんと日記帳を閉じて小指のところが痛くなっていた手をもみもみしつつ空になってたお酒をもう1杯を注ぎに行く。

とんとん、と階段を降りる。

僕の脚にしては高すぎる段差……けど、もう慣れきった落差を。

ぺたぺたぺたと裸足と木の床のくつついては外れる音。

踏み台にぽすっに乗ってぽんとコルクを外してとくとくとくと真っ赤な液体を注いでいく。

心持ち多めにぎりぎりまで注いでこくんと一口。

のどの奥にまで染みわたるおいしいアルコール。

「ふぁ……」

この瞬間だけは至福だ。

シャツ1枚の女の子がお酒で恍惚としてるって言うとしてもなく危ない絵面だけど。

チエイサーも汲んで今度は両手にコップを持ちつつ、ちよつとだけ軽くなった体を引きずりつつ口に苦いのが広がるのを感じながら部屋へとまた昇っていく。

……明日、外に出て確かめよう。

最初はこわごわ、だんだん慣れてきて忘れかけていたところにこれ

だもん。

この魔法つてのはたぶん、きつかけがないと気づくことすらできないもの。

だったら今、もしかしたらっていうのも確かめておかないと危ないんだ。

これがもし……もし、あの子たちと一緒に気がつかないで起きちゃったら……僕はどうしたらいいのか、もうわからないもん。

「くくくくくく……」

……お酒。

今夜はちよっぴり苦い気がする。

「夢じゃない……」

どれだけイヤだったとしたって朝は来る。
たとえ眠れなかったとしてもやっぱり朝は来るんだ。
まあちゃんと寝たけど。

睡眠は大切だもんな。

ムダにアルコール耐性があるからどれだけ飲んだっていつもどおりの時間に目が覚める僕。

こういうときに規則正しい生活にいらつとする。

お酒呑んで頭ぱーになって気がついたら寝ていて……起きる。
完全じゃないけど再起動的なりセットだ。

「……よしっ」

一晩寝て覚悟は決まった。

いつもどおりに朝を過ごして、けどなにも手に着かないから夏からの日課になっていた勉強もなにもしないでただただ時間を待つばかりの朝を過ごして。

……そして今。

僕は、いつもどおりじゃない格好で。

なんとなくかがりに連絡して今日のラッキーカラーというやつをコーデイネートしてもらって。

よさげな服装を思いつかなかったから男のプライドとかちっぽけななにもかもを投げ捨てて、おすすめだっっていう服をそのまま着て。
データに残るのを承知の上で鏡の前で自撮りをして送ったところ、それはもう大絶賛だった格好になっていて。

夏休みに買わされた、あのふりつふりの真夏仕様の白いワンピースを着ていて。

下着はもちろん色を合わせて目立たないようにして、けどやっぱりいくらかは恥ずかしいから下はスパッツで気持ちだけガードして、併せて買わされた真っ赤でつるんとしたサンダルを履いていて。

あえて胸にもしっかりと女の子の装備を着けることで偽乳を作り

上げ、どう見ても女の子……まちがっても女装した男の子には見えな
い見た目にしていて。

……こうして胸があるように見えるだけで一気に年齢が3つ4つ
上がったように見える気がする。

はじめからこうしていれば少なくとも低学年扱いはされないん
じゃ……いやさすがにブラジャーをいつも人前でいつもつけている
のはさすがにその……まだ、ちよつとな。

今さらながらに知ったどうでもいいことをぶつぶつと考えつつ、そ
の上にかぶせるように、銀色の長い髪の毛をただただふあさあつと乗
せて麦わら帽子を被って。

だから僕は、どう見ても現実世界……いや、ここにはふさわしくな
い、明らかに異質で遠く離れたどこかの世界にでもいそうな、そんな
姿になっているんだ。

◇

通勤時間になってきたから、ぐじぐじしないためにお酒の
力を借りて家を出て近所を徘徊していたら、運良くすぐに見つかった
顔見知りの奥さん……僕のことだから当然お隣さん以外の人の名前
なんて覚えていないけど、たしか猫を飼っている家だ……とご挨拶。

「……おはようございます」

「あらあらおはよう、お久しぶりねえ。聞いていたとおりに雰囲気
変わったのね？ でも、とつても似合っているわよ！ まるで『お姫
さま』みたいで！」

「……………、どうも」

まずはひとり。

僕が女の子の格好をしていることについてもこの低身長にも、なに
も疑問に思われない人がいることを確認した。

あと、やっぱりウワサっていうのはあつという間に広がっているん
だなって再度確認しつつ。

やっぱり早いなあ飛川さん……あの後買い忘れた食材でもあったの
かな。

そうしてたったのひと晩……まだ丸1日も経たないうちにこれだ。どこまで広がっているのか。

女の人たちのネットワークは想像以上に根が深く広く広がっているらしい。

「おやおはよう。最近見なかったけど元気かい？」

「ええ、……おじいさんもお元気そうで」

前は見下ろしていた関係のおじいさんが、今ではおんなじところに視線がある関係になっていて。

「うちの子もいつもこのへんで君に撫でてもらっていたから、なんだから不思議そうな顔をしていてねえ」

「ちよつと忙しかったもので」

「わふつわふつ」

「お手」

「わふん」

町内一周な散歩を朝晩にしているおじいさんは特に見た目には言及しなかったけど、それでも僕を「僕」だつて認識していることがわかつて。

おじいさんの犬……そこそこに大きい人なつっこい子……も、姿はもとより匂いすら変わっているはずの僕を認めて近づいてきていつものように撫でられるままで。

まあこの子の場合には誰にだつてこうするから犬にまで魔法が効いているのかはわからずじまいで。

けど幸いにしてこの人にはウワサ……たぶんまだつてただけけど伝わっていないで。

でも僕がこんな格好をしていても気にしないで、いや、気がつかないで、数ヶ月前とおんなじように接してきて。

そうして1回でも話したことのある人ならお構いなしに何人か、駅まで歩きながら捕まえて尋ねて。

よく知っている人なら僕の印象を尋ねて、そうでなければあいさつだけをして。

けど誰でもやつぱり僕を僕だと理解していて、それなのに変な顔す

らしなくって。

僕が前の僕だつて見えているとしたら、きつとぴちぴちどころかいろいろとまずい状態になっているはずのふりっふりのワンピース姿でおえつとなるはずなのに。

僕が今の僕だつて見えているとしたら、見知らぬ洋物幼女が親しげに話しかけてきたつてなるはずなのに。

そうして歩いてきて疲れてベンチで足の裏と腰を休めがてら会社や学校へ急ぐ人たちを眺めている。

僕とは違つて行く場所もすることもしつかりと決まつている人たちを。

万年ニートな僕とは違つて。

「……………」

いつものクセで下に着かない……いや、このベンチはいいベンチだから着くんだけど、でも深めに座るともちろん着かない足の先を真っ赤なサンダルごとぶらぶらしていると、ただでさえ目立つ格好の上に帽子を取つて日の光を浴びて光っているだろう銀髪がきらきらしている僕は、それはそれは注目を集めている様子。

体感的に7、8割……というよりはスマホとかで下を向いたりいつもの僕みたいにぼーっとしながら歩いているらしき人以外からは、珍しい色彩でまず1回、それでもつて髪の毛と顔と服と振つている脚とで2回目、そして人によつてはじーっと3回目と、それはそれはじつくりと見られる。

……やっぱ目立つよね。

黒髪の中の銀色と、夏休みも終わっているのにおしゃれをしているこの格好。

今までパーカーさんと帽子さんのセットのおかげでどれだけ人目を避けられていたのかがよくわかる。

それでも誰も、僕を……特段おかしいことをしているようには考えないみたいで、珍しいものを見たつて顔はするものの立ち止まったり話しかけてきたりなんかせず、そのまま駅へと吸い込まれていく。

そんな十数分を、人の流れが薄くなつてくるまでただぶらぶらと脚

を振って過ごした。

「……やっぱり」

彼らは僕を見た目通りの女の子だと認識している。

それが結論だ。

けど僕を知っている人だったとして……元は男だった僕とも同時に認識しつつ、けどそれをおかしいと思っていない。

僕が深く突っ込まなければ今の僕の見た目にも格好にも違和感を持つたりはせず「ちよつと雰囲気変わった？」程度止まりで、前の僕と今の僕とを半ば同一視しているみたいで。

女装とか以前に、たとえば髪の毛を少し伸ばしたとか丸刈りにしたとかひげをちよつと蓄えているとかコンタクトにしたとか……その程度の認識のよう。

僕がわざわざ前の僕について言及しなければ、少なくとも今朝話をした数人の知り合い未満の顔見知りの人たちは、魔法さんでおかしなことにさせられたりはしなくって。

……まあ、顔とかがかわいいとか小さいとか、そういう成人男性に対してはどう考えてもケンカ売っているとしか思えない褒め言葉が浴びせられるけども。

今までにどこかで聞いたような感想は必ずとっていいほど添えられていたんだけど。

耐性ができていなかったら危ないところだったけれど、今の僕はかがりやゆりかに鍛えられている。

問題はまったくなかった。

……慣れてしまっているのが悲しいっていう感情は、もはや失せている。

さらに僕があえて「僕、かわいいですか？」って聞いたり、逆に「僕、かっこいいですか？」って聞いたりしても大体似たような答えが返ってきたあたり、どうやら男と女の区別もずいぶんとまたあいまいになっているみたい。

こんなふりっふりなのはどうして格好いいってことになるんだ……。

あちこちからぴらぴらしてうつとうしいからみんな縛っちゃったリボンチックな装飾が逆にアクセントになっちゃっている、今のロリータな格好なのね。

都会の繁華街でも無し、ここまでのロリータもなかなかお目にかかれないだろう。

……かがりに買わされるとき、夏だからって黒を選ばれなくてよかった。

これで黒だったら銀髪の黒の赤っていう完璧なゴスロリが完成しちゃうところだった。

なにより暑かっただろうしな。

ともかく町中の人だって僕には注目……カラーリングと格好のせいでだろうけど……するけど、だからってどうこう思うわけでもなく「ただ幼い女の子が近くにいます」って程度の認識のようだった。

山に登ったときみたいいろいろと聞かれたりもせず、ただただあたりまえに、ただここに女の子がひとりいるだけだった。

それだけだった。

あのときのように困ることもなくって、ただただ見られる。

ただ、それだけ。

僕がこんな格好をして、こんな時間にこんなところでたったひとりぼっちでぼけーつとしていても、変だとすら思ってもらえない。



「次の方どうぞー」

お昼が近くなってきたスーパーは、ちょっとした戦場だ。

カートで爆走するお子さまたちがいないぶんマシだけど、その代わりにお年寄りの比率が上がって奥さんおばさんたちも多くって、けど夕方みたい時間に追われていないからぴりぴりとはしていない。

そんな駅前のスーパーに寄ってぶらっとそのまま中ほどこまで行って1本の缶を、350mlの重さですらやられちゃいそうなほどに細い手首のせいで両手で持ってそのままレジへ行って、気持ちを落ち着

けるために、わざとこれでもかって買い込んでいるおばあさんの後ろで待つて。

1円単位までがんばって買い物をしていたおばあさんが嬉しそうにしているのを横目に、僕の顎くらいの高さのカウンターに缶ビールを置いて。

「お願いします」

「……………えーつと」

うんまあ、困るよね、これは。

でもあえて当たり前だつて顔をしながら顔を上げて。

「お願いします」

「……………ごめんね——、お父さんのかな？ おつかいだよね？ わかっているんだけど、そのね？ こういうの、お酒って子どもには売っちゃいけないんだー」

じつと見上げた先のお兄さんが困った顔をしている。

たぶんこんな銀髪幼女がビールだけを買いに来たっていうので魔法さんとか関係なく混乱しているんだろう。

ごめんね、大学生くらいのアルバイトさん。

ただの実験だから。

多分ひどいことにはならないって思うからちよつとだけ付き合つてね。

「最近は厳しいから大人の人でないとお酒はねえ……料理用でも売つたらダメって言われてるしなあ。悪いけどお父さんかお母さんにご自身で買いに来るようになって。ああ、日本語通じてるのかな……えーつと……」

「……………」

突き返すわけにも行かなくなつてただただ僕が持つてきた缶を片手に、僕の後ろに並んでいる人の顔もちらちらと見ながら困っているお兄さん。

いや、前の僕よりいくつか年下のはずだから……青年？

まあいいや。

（そごそと首に掛けていたちっちゃな袋から「それ」を取り出す。

確認しました。袋のほうは——」

そして僕もまた反射的に「袋、要らないです」って言っちゃって。
——実験の結果、僕は、シールを貼られた缶ビールっていう見慣れないモノを手に入れてしまった。

白昼堂々ふりふりの白いワンピースと赤いサンダルの銀髪幼女にしか見えない姿でも、免許で男だって伝えたら——魔法さんの効果が立証されちゃったんだ。

「買った……」

スーパーの中は……こんな格好だからワンピースの内側まですーっと寒かったけど、自動ドアのちよつと外に出たとたんに熱気が顔にぶわつとかかってくる。

ちよつとだけの時間差で布1枚の内側の涼しさが失われていく。

こんな格好もちよつとだけ役に立つらしい。

ズボンだったらこうは行かないもんな。

でもそんな僕が持っているのは缶ビール。

重いもんだからもちろん両手でしつかりと。

「……………」

人のジャマにならないすみっこに移動してほんのりと冷たい缶ビールを眺める。

シールが貼られていて、お財布にはレシートも入っていて、つい1、2分前に間違いなく僕がお店の人の許可を得て対価を払って手に入れた、これ。

……幼女のはずの僕が出した免許証を見て、ほんの数秒だけおかしくなって……でもごく普通に、年齢確認の必要な商品を僕が買えた。

買えちゃったんだ。

それを改めて自覚するにつれてへにやりと力が抜ける感覚がする。

スーパーから出入りする人たちがちらちらさつきみたい僕自身に注目して、さらに角度的に僕の持っているおかしなものが見えた人はそこで初めて変な顔をして……けれども僕に話しかけることもなくみんな素通りしていく。

都会だから話しかけられないのか、それともこんなところにまで魔法が掛かっているのか。

……いつそのこと誰かに話しかけられたらよかったのにな。

「子供がそんなもの持ってちゃ行けません」って。

でもそこで「大人なんですけど」って言ったらおんなじようになるんだろな。

「……………」

——昨日お酒が入ってきてぼーっと空になった瓶を見ていて思いついたのはこれだった。

「男だ」って僕が言うだけで認識が変わって魔法さんが腰を上げるのなら、僕のことを知らない人に対しても元の僕じゃないとNGなこともできるんじゃないかって。

具体的にはお酒っていう今の僕じゃ絶対に対面では手に入れられないであろうモノ。

そういうモノを今の僕が面と向かって手に入れられるかっていう実験だ。

でもよく考えたらなんで僕ビールなんか買っちゃったんだろう……炭酸ダメなのに。

どうせならカップ酒とかにしておけばもっと持ちやすかつたはずだし、それにここで飲めたのに。

僕はこういうときに限って変なことしちゃうんだよなあ。

「しようがない」

適当なところにビールさんを置いて歩き出すことにした。

どうせ持っていても飲めないしな。

ちよつともつたいたいじゃないよな。

運がよければ誰かに飲んでもらえるだろう。

そう願う。

立派な不法投棄だけど新品だからきつと大丈夫っていう根拠の無い理屈を付けておく僕。

手のひらだけ冷たくなっていた僕は人混みに紛れようとしたけど、普段とは違って派手な格好になってる僕は少しだけ遠巻きにされる形になる。

人からは見られるけど今までみたいにみんなからぶつかられる心配は無いのか。

こうしてみないと分からないこともあるんだな。

……さっきのお酒をかうって言うのは、もし魔法さんが掛からなかったらアウトな行動。

でも、「それじゃ良いです」って言ってエア父さん宛てのエア電話でもしなから離れれば大丈夫だろうっていう目算で動いたんだ。

当てが外れて「ちよつと奥まで来てくれるかな？」とか言われたとき用に、今こそって感じでコネな萩村さんのところをセットしておいたけど無駄になって良かった。

身元引受人無しでお巡りさんのところに行くよりかはあの人たちにお世話になる方が良いって判断。

今確かめないと行けない気がしてたから、ちよつとだけ無茶なことをしてた気がする。

でも多分大丈夫だろうなって気持ちの方が大きかったからの賭けだった。

だから拍子抜けっていうよりは思った通りだったって感じ。

やっぱ僕には、見えないナニカ——魔法が掛かっているんだ。

さつき僕が成人してるって見せた途端、店員の人の目がやっぱ暗くなるっていかどす黒くなって、どこ見てるのかわからない感じになって……ちよつとだけ硬直して、けど今回はおかしなことを話し出したりはしなくてすぐに僕を今の僕を前の僕だって——大人だとして認識していた。

写真や生年月日から何までどう見ても今の僕と合わないのよね。

そういえば……後ろに並んでいた人とか周りにいたはずの人たち、あのときは気に留める余裕がなかったけどなんにも言われたりしなかったあたり、やっぱりおんなじようになっっていたんだろうか。それとも僕たちの会話とか僕が買おうと奮闘していたモノとかが気にならないっていう認識だったんだろうか。

ちよつと時間が経ってくるといういろいろと浮かんできると、これはまあたいしたことじゃないし後回しでいいだろうし。

……ということだ。本題だ。



「……ではもう一度ご確認いただけますか？」

「はい」

何度か来たことのある大きめの銀行の応接室のひとつ。

今の僕にとつてはおしりをぎりぎりまで浅くしてもまだ不安定な居心地の悪いソファから身を乗り出して、もらった書類を見つづかう。

なんでお役所とかこういうところってやたらといっぱい書類があつていちいち日付とか名前とか判子押すんだろうね。

実印とか銀行印とか分かんないからまとめて持って来た判子が手元に転がってる。

社会に出てないからそういうのが分かんないんだ。

「今回は……定期預金のうちの一部のご解約でよろしいでしょうか？」

前回と前々回にお引き出しがなかったので手数料などは……」

「はい。 少し入り用なので。 残りはそのまま継続で結構です」

こうして引き出すのが大学の学費とか以来だからちよつと聞かれただけ「生活費に使うから」ってだけでオツケーだったみたい。

まあ大人って認識されたらそうなるよね。

そこまでの金額でも無いしな。

「そうですね。 もう成人されているわけですし、当初のスケジュールよりも引き出す金額がだいぶ低いのでこれ以上の手続きは必要ありません。 ただ、以前にもお話しさせていただいた通りに残額に關しましてオンラインや郵送だけでは……」

「ここに来て今みたいな手続きをすればいいんですよ。 大丈夫です」

僕の定期預金に關してはいずれにしたってここに来なきゃならぬらしい。

なんでもちよつと特殊な状況で得たお金が混じっているからだとかなんとか。

そんなわけでめんどくさい法律に従ってこれまでに1、2回聞いたことのある文言をぼーつと聞きながらしばらく。

「承知しました。 それではただいま書類のほうを」

「あの。 このとおりカバンなどを持ってきていないので家に届けて
いただいても?」

試しに両腕で袖のリボンをひらひらさせてみる。

「……もちろんです」

その反応は……生暖かい……ほほえましい感じで見られただけ
だった。

目の前に座っていたレンズが分厚くって色がかすかについている
……この部屋に入ってからしばらくの雑談で老眼がきついつて言っ
ていたつけ、そんなメガネをしている初老の銀行員のおじいさんに近
いおじさん。

相続とかのときからの付き合いだからかれこれ10年以上の顔見
知りの人。

顔を合わせたのは数回くらいでしかないけどいろいろと衝撃的
だったからなんとなく覚えてる感じのおじさん。

僕がちやんと覚えてる数少ない人のうちのひとりだ。

……父さんが生きていたら……そろそろとこういう雰囲気になっ
てくる年ごろだったんだろうか。

「……………あの」

「はい? なにか疑問点など」

「いえ、ずいぶんご無沙汰していましたので。 20になるまでは叔
父と来て毎年のように顔を合わせていましたから。 ……以前

は、父と母のときからお世話になって」

「とんでもございません! 響様のお父様やお母様からも、……あの
とき以前からずっと、私どもこそお家のことなどでお世話になってお
りました」

……この人も前の僕を知っているひとりだ。

「……僕。 前……10年前のときと比べて、どう……ですか?」

「はい」

受け付けの、背伸びをしないと差し出せなかったからいらつとした
カウンターで用件を伝えて免許や通帳を見せたときも、待合室で別の

人に案内されたときにまた見せたときも、このおじさんに会ったときに僕の名前と父さんたちの件とそしてもう1回通帳とかを見せたときも、店員さんとおんなじ反応。

「あのときも好青年だと……突然のことに見舞われた中学生の方にしてはとても落ちついた話し方をされてご立派だと思っておりましたが。今も変わらずに……いえ、ずいぶんと『かわいらしく成長されていて』！ ええ、きつと亡くなられたお父様がたも喜んでいらつしやると思えますよ」

「……………そう、ですか」

男がかわいらしく成長。

立派じゃなくて、かわいらしく。

それを、両親が喜ぶ。

どう見ても小学生に遡っていて性別が変わっていて、脱色していてふりふりなワンピースをきた僕に対してごく自然な感じで言っていて、それがおかしいって思わないらしい。

ひとつの会話で矛盾したことを言っているのはやっぱり昨日と同じだ。

いちいちねちねち指摘したらきつと昨日のお隣さんみたいになるんだろう。

前と今について立ち入った質問を投げかけなければ、こういった矛盾しつつも違和感を持たずに接してくれるっていうのがもうわかっているから、あえて今そうする必要もない。

◇◇

セミの声がうるさい。

じーじーとうるさい。

ふてくされた僕の耳にはそういったどうでもいいことばかりが響いてくる。

閉まったばかりの自動ドアを振り返ると、微妙に眉間にしわの寄っているロリータが映っていた。

なるほど……これくらいいらつとしていてもこのくらいしか表情が変わっていないのか。

どおりで着せ替え人形のときのアピールが伝わらなかったわけだ。よく見て見ないとわからないほどのわずかな変化しか現れていない。

「……………」

ドアを見ながら眉間をもみもみしていたら通りがかった大人に笑われてしよげる。

男がお店のガラスとかで髪の毛直していても見られるだけだけど、見た目の通りの子供だと途端に好意的すぎる反応。

人って見た目だよなあ……………」

その他大勢って言うのとつても楽なポジションで生きてきた僕にとつてはめんどくさいことこの上ないけど、その見返りにいろいろお得があるって思うと満更でもない気がしてくる。

でも着替えるたんびに店員の人と話し込んでいたかがりを思い出しているうちに「あのときに比べればいくらかはマシかな……………」なんて思い直して機嫌も戻ってきた。

あの子たちと過ごした、どうでもいいけどほのかに楽しかった夏休みを振り返りながらとぼとぼと残暑の中を歩く。

持って来た通帳……………そこにはしつかりと、贅沢しなければ次の次の期限まで何もしなくても生きていけるだけのお金が数字でばっちり記録されていた。

それは、当初どうしようかって悩んでいたお金の問題が解決しちゃったってことで。

……………ここまでのお金がちゃんと動いたんだ、どう考えてみたって否定できる要素がなくなつた。

魔法さんの効力は確かで、僕が幻聴とかそういうわけじゃないんだ。

僕の姿だけを初めて見た場合、見た目通りの……………もうロリでいいや、今はそういう格好だし……………だつて認識する。

で、こうなる前からの僕を知っている場合には「雰囲気が変わつた」

程度の認識止まり。

見た目の齟齬についてはなにひとつおかしいって思わないんだ。

……帰り道にもいくつか実験を試してみた。

別のスーパ―とか服屋とか、本屋とか駅員さんとか、そういうばらばらな人たち相手に試してみた……けど、知らない人でも結果は変わらなかったんだ。

反応が人によってばらばらだったのは要検証かも。

性別と年齢のどっちかだけが今の僕のままって人のほうが多かった感じだったし。

男だっという認識をしつつ、けど女だとも思っているみたいだっという、整理しようとする僕のほうがこんがりそうなることになるくらい相手によるとしか言えない様子だったし。

「なんだかなあ……」

この半年間の苦労は何だったんだろう。

なんか気が抜けた感じの僕は気だるげな銀髪の少女っていう形になって、ガラスの向こう側から見つめ返してきていた。

今の僕はふりふりで目立つ格好をしている。

帽子で顔を隠していないしフードで髪の毛も収納していない。

だから注目されて人が勝手に離れてくれるから歩くのがとっても楽。

ドン引きじゃないことを祈りたいけどその心配はなさそうだ。

ちらほらとかがりみたいな表情をする女性がいるんだしな。

……なるほど、ああいう顔する人は危険なのか。

経験が役に立つな。

今までの苦勞はいつたい何だったんだろうって思うくらいにすいすいと駅前を歩き来できてちよつと感動。

「……ふう」

昨日の夕方からさっきまでのことが歩いていてちよつと消化できてきたからかため息が出る。

この、いかにも女の子の子している姿で外に出ても……今までの生活に支障はまったくなくなってくつて、もちろんお巡りさんたちの世話にもならなさそう。

たぶんお役所関係も……そういえば税金のこととか今でもみんな叔父さんに丸投げだな……とにかくふうにできてしまっていて。

ここまで徹底しているんだから、きつと病院とかだつて平気だろう。

たいした病気とかしたことないし。

多分これからもよつほどのことがなければお世話には……いや。

今の僕は女の子。

ということとは……たぶん、その

やっぱり、いずれは血が出てくる感じになっているんだらうか。

もはや洗うときたまに意識する程度のそこからのとかで。

「……やだなあ……」

今は機能していないはずのそれが、男女の決定的な違いがあるんだらう。

本格的に成長できたとしたら何年でそういうのも気にしないといけなくなるのかも。

逆に言うと、肉体が幼女から少女へと成長するまでは何の問題もないわけ。

個人差がすごいからにはたしてどのタイミングで起きるのかはわからないけど、とりあえず今じゃないけど。

女の子っていう女「性」なら避けては通れないもの。

男ってそういう意味でもほんとと楽な存在だね。

女の子になったからこそ思う。

まあそのときが来たらでいいや。

魔法さんのせいで来ない可能性もあるんだし。

とぼとぼと一路家へと、人通りが少なくなってきた住宅街を進む。

お天気は真夏の死ぬほどの暑さを脱しつつあるようで、そこそこに暑い程度がよく晴れた青空。

つまりは日陰をぬえば快適に近い感じの、吹いている風のおかげでときどき涼しいくらいで。

……さっきの並んだ数字を思い出す。

「大人ですって言えば大丈夫だよな」ってことでATMからお金を下ろす試みも何も起きずに成功した僕はようやくまともな現金を手にした。

……幼女がATMを背伸びして使ってお金とかを首から提げた袋に押し込んでいても誰にも咎められなかったんだ。

魔法さんのせいなのか今の社会的に声をかけなかっただけなのかは分からない。

でも、お金はいつでも自由に下ろせるようになった。

貯金はまるごと使えるようになった。

だからお金の問題は、贅沢しなれば……僕の性格的に豪遊しなればあと何十年かは大丈夫。

大きな病気とか散財さえしなければ、人生の下り坂になるまではそこそこに楽しんでいけるはず。

まあ食費がだいぶ減っているっていつでも10年くらい巻き戻つ

ているわけで光熱費とか税金とかは地味にのしかかってくるから男
だったときより10歳若いくらいでお金が尽きるわけだけでも。

つまりいずれは食いぶちを稼がなきゃならないわけなんだ。

……でも、今日分かったとおりに身分証とか書類とかちゃんと用意
したら……その気になつたら就職だってできるんだ。

だって少なくとも怪しくない身分が記録として存在して、魔法さん
で僕の見た目を誤解してもらえないから。

もつとも特になにもしてこなかったニートな前の僕を採用するよ
うな珍しい会社に巡りあったとしたらだけど……いくら僕だって明
日の寝床とか食べものに困るくらいになつたらやる気は出せるはず
だからどうにかありつけるだろう。

きつと、たぶん。

どんだけお給料が低くたって最低限の生活費がもらえるお仕事を
探し出せば僕としては不満がないんだし、探せばひとつくらいはあ
るだろう。

「あら、こんにちは響くん」

声を掛けられてはじめて下を向いていたって気がついたけど、向こ
うからやってくるのは昨日振りのお隣さん。

今の彼女は普段通りに戻っているらしい。

「こんにちは。お買い物ですか」

「夕食の準備でねー」

ぱたぱたと手を振っているしゃれっ気のない奥さんは今日もまた
ラフな格好で、それがまた大学生っぽい雰囲気醸し出している。

ぼんわりした感じの表情もあるかもしれないな。

つまりはケバくない大学生……JDに見えるんだ。

だから飛川さんはご近所のおじさんたちに大人気。

おじいさんたちにとってはちよつと幼すぎるらしい……そういう
情報は立ち話とかでさりりと知っている。

でも本人はきつとそこまで意識していないだろうなあって思える
辺りは天然というやつなんだろう。

かがりと組み合わせるとシナジー起きそうだもんな。

ちよつと想像したらぞくつとして身震い。

「涼しくなってきたわねえ……もうすぐ夏も終わりかしら」

「そうですね」

ぶるつとしたのをなんか勘違いされたけどいつものことだから適当に合わせておく。

……いつもどおりだ。

姿が変わろうが変わるまいが何年も続けてきたような、僕の、だらしない生活という日常。

「また今度、娘の勉強見てあげてくれるかしら？ もちろんきちんと家庭教師ってことで。最近成績落ちちゃったみたいなのよ……中学生って大変だから。ほら、親が言うより知り合いの響くんからの方が……ね？」

「……………考えておきます」

バイトをしてしまう時期にはフリーター、それ以外はニートとしてただただ好きなように生きてきた生活が続いていくんだ。

「それにしても今日はいちだんとおしゃれさんね！ お出かけしてきたのかしら？」

「いえ……いえ、そうですね。少しだけ」

少しだけ、ほんの少しだけは変わっているんだけど、結局「僕」って言う存在は変わっていないらしい。

魔法さんもさぞ驚いているだろう。

幼女になったのに僕がこれまでと全く変わらないんだから。

まあ意志があるかどうかは分からないけども。

そうして雑談をこれまでの普段通りに交わして別れて、またひとりぼっちになって。

ずーっと母さんたちと住んできて少し前からはひとりぼっちで広すぎて、けどきつとこれからもずーっとひとりぼっちで生きることになるだろう家の前に着いて。

ふと見上げて「そろそろ外壁の塗り替えの時期だなー」とか「この夏は伸び放題になっちゃった草を刈ってくれるようシルバーさんにまた電話しなきゃ」とか「いい加減にお風呂、なんとかしないとなあ」

とかどうでもいいことが浮かぶ。

……もう大丈夫だってわかってちゃったから洗濯ものも普通に干している。

子供用のシャツとかぱんつとかが風にあおられて、髪の毛のせいでたくさん使うようになったタオルが、ぱたぱたぱたぱたとはたためいていて。

かちやりと背伸びをして開けたドアの中に入る。

結局は……この体になったばかりのときに考えていた、僕の認識だけがおかしくなっていて僕が僕自身を銀髪少女だって……小さな女の子になっていて思っ込んでいるっていう状況と、ほとんど変わらなかったわけだ。

つまりはどっちも合ってたんだ。

僕が本物の少女になっちゃったのも、認識がおかしくなってるのも。

もつとも認識については他人のだけでも。

多少の不便さはあるけど、男のままだったらあと何年かで老化を意識し始める年齢になるわけだし、1日中座ったままで腰とかがやられはじめるんだって考えてみたらこれは幸せなこと。

10も若返って、その上に容姿までよくなるっていうおまけ付きな僕の状況はきつと、とつても嬉しいものなんだろう。

「でもなあ」

僕は普通に目立たない男のままでも良かったのに。

分相応ってそう言うことだろうって思ってたのにな。

……玄関はすつきりしちやつている。

もう使わないだろうって思えてきたから前履いていた靴は高いのを残して全部捨てたから。

代わりに靴箱の中にはこのちっこい足にぴったりな靴が占めるようになって久しい。

……ムダにあれこれ必死になって考えて行動して、失敗して……いろいろとがんばってきたのがぜーんぶ、みんながみんな空回り。

なんにも起きなかった……それだけはありがたいけど、ただそれだ

け。

僕は勝手にひとりで慌てふためいていただけなんだ。

◇

「ふあ——……」

そんなやな気持ちはお酒で吹っ飛ばすに限る。

だからテレビの音も光もぼーつとしている。

体の感覚も頭の中もみんなぼーつとしている。

テーブルの上にはわざと並べたお酒の瓶たちの群れ。

ワインから日本酒から、家にあるのを手当たり次第に並べてこれまた手当たり次第に飲み始めたお酒たち。

よく考えたらわざわざこんな風になにかに対する当てつけみたいにして並べる必要はなかったんだけど、たぶんこうでもしないと収まらないくらいにはさつきまでの僕の心はちくちくしていたんだと思う。

いくら温厚なニートを自称する僕だってささくれ立つことくらいはある。

でもちゃんとそれを解消する手立ても知っているんだ。

こう見えても大人だからな。

「ふう——……」

普段からローテンションな僕もお酒を呑んだときだけはちよつとハイになれる。

飲んだくれになるのはさすがにイヤだって思っていたから控えていた、まっ昼間っからのお酒。

うじうじ考えるのがいやだからってとうとう手を出したのはもう数時間も前のこと。

「む——……」

さすがに長時間呑み続けているからか思考力とかが遅くなってきたのが分かる。

でも、大人にはこういう時間が必要なんだって誰かが言ってたから

いいや。

普段はお酒の味と香りを楽しむだけの僕だから、ここまで飲んだのは初めてだ。

普通は大学生で浴びるほどつてのを経験するらしいんだけど……ほら、ぼっちだったし。

でもまだ呑めそうつてのは分かる。

限界を知らないから「やばそう」って思ったら止めれば良いんだ。体はこんなちっちゃいのにごこまでお酒が呑めるってことは、やっぱりこの体にも魔法が掛かり続けているんだろうなって思う。

「けほっ」

ふと、ちよつとだけストレートで流してみた40%くらいの液体はとつても辛くつてむせる。

……なるほど喉への刺激がダメなのか。

◇

そんな感じでぐだぐだしてトイレに行った回数が10を超えてわからなくなつたくらいで、テレビはいつの間にかまた知らない番組になっていて、見ているようで見ていなくつて聞いているようで聞いているいままま夜になつてたらしい。

スマホで読むともなく読んでいたら面白い適当な記事とかもまったく頭に入っていない。

けど感覚としてはまあそれなりに、そこそこに興味を持って読んでいた……らしい。

お酒が入つてくるとこうなるよね。

僕は誰かと話しながら飲むつてことがないからこうやって時間を潰すんだ。

……僕が酔い潰れたことがないので、こうしてひとりで飲むからなのかもな。

「まわるー」

ちよつとぐるぐる回る感じになつてきたからもうほとんど飲んで

ないけどアルコールは何時間も続く。

空の瓶を見ながら、何度もタツプし損ねたりしつつ通販サイトで気になるお酒をカートに入れていく。

ぷにつとしていくくせにふだんは乾きすぎている指のせいでなかなか反応してくれないから苦手になったタツチパネルも、今は前の体のときみたいやすいと反応してくれるようになってる。

ふと思っで見ると指先が真っ赤だ。

「じんじんする」

珍しいこともあるもんだ。

そこそこの運動をしたりお風呂に入らないとここまでならないのに。

んー、まあそこそこ汗かいてるしなー。

じゃないな、お酒だお酒。

知っている銘柄をスクロールしていく。

これだけ平気なんだから多少飲む量が増えたって、問題なんてないはずだ。

そんなことを思いながらぽいぽいと入れたカートの金額はそれなりだけど、今日の僕は懐が温かいから問題ないはずだ。

「……むー」

何回か目をごしごしするけど数字が認識し辛くなっているって気づいた僕はなんだかめんどくさくなって、スマホぽいつと投げ出してただただぼーっとする。

……テレビがうるさい。

けど消しちやうととたんに不安になるから、身の回りに音と光がないとなにかに襲われそうな気がするから結局はチャンネルを回して……あ、この表現今のは伝わらないことあるんだっけ……ともかくぱつぱつと変えて静かめな感じの画面に落ち着けるだけで、また天井を眺める。

まだ寝るには早すぎる時間。

次は……赤にしようか。

ロゼでもいいかな。

そんな風に僕は、未成年どころか幼児飲酒という真つ黒な行為を繰り返していく。

今まではこの体での将来のこととかを小難しく考えていたからほどほどにしていたけど、もうどうでもいいいな。

どうせ魔法さんが何とかしてくれるんだから。

「……………ひっく」

お金のこととか体のこととか、ご近所のこととか未来のこととか。今まで気にしていた分をみんな流すために……飲み潰れたい。

酔い潰れるっていう感覚を、体験を、してみたいんだ。

こういうのこそ大学生って言うワルやっても笑って許される年齢と場所でやっておくべきだったんだろうな。

だからこそハメの外し方を知らないんだ。

でも、良いんだ。

家の中でひとり静かに呑んでくれるだけ。

誰に迷惑かかるとはじやなし。

どうせ誰も見てないんだ。

「……………ん。　なんで、脱いだんだっけ」

……………ついでに僕はどうやら酔うと脱ぐらしい。

「……………どうでもいっか」

遠くのソファにワンピースが掛かっついて、つまりぱんついっちよになつてたらしい僕自身を再確認した。

体にまとわりつく髪の毛がこしょばゆいんだけど汗で毛先が張り付くからそうでも無いっていう不思議な状態な僕自身をぼーっとした頭で観察していた。

僕は昔から、なんだか調子が悪かったりどつかを痛めたりヤなこと
があつたりすると必ずといっていいほど夢を見る。

普段夢なんか見ないのにね。

見たとしても普段なら朝ごはん食べる前に忘れるのにね。

夢つてのはストレスのせいで見るものらしい。

少なくとも僕のは。

夢。

悪夢。

10年も前の、その日のこと。

思い出さないようになって普段からがんばり続けてようやくほとん
ど思い出さなくなっていたのに、思い出すとしても「かつてそういう
ことがあつた」っていう程度の興味しか引かない程度なのに。

そのくらいは忘れきることができていたあの日のこと。

つまりは僕にとっての悪夢である、その日から始まった「それ」。

僕が僕になった日のことだ。

——僕はいつのまにか中学生になっていた。

今の幼女つて意味じゃなくて、本当に元の体で精神年齢はそれより
ももうちょっと低めっていうどこにでもいるような内気で静かなの
が好きな、かつての僕。

もう顔も思い出さなくなって短い髪の毛に大きめの制服を着込ん
でいたってだけ思い出す。

当時から眼鏡かけてたからイメージ通りのインドア派で根暗でじ
めじめした男子中学生。

その僕が、その日のその場面にいる。

そしていつもどおりにその場面をスキップすることも目をそらす
ことも閉じることも耳をふさぐことだつてさせてくれないんだ。

ただただ見せつけられるだけ。

僕の中のなにかが完璧に壊れた、その瞬間を。

『2年——組の——響くん。 至急荷物をまとめて教員室に——』

それでもその日その電話を学校で聞いた前後の2年くらいのは、ほんの一部しか……それも断片的にしか覚えていない。

つまりは中学に入る頃から高校に入っただけでしばらくするくらいまでのそれなりの期間がどっかに行っちゃっているんだ。

覚えていないのか、それとも記憶に留まらなかったのか。

たぶん両方だとは思いますが、とにかく薄い記憶しかない。

こうして夢の中でさえすべてがモノクロになって、すり切れはじめたビデオテープを古いブラウン管で再生しているみたいなの、そしてそれを映画館のスクリーンで上映しているようなそんな具合だ。

……ビデオとかブラウン管とか、小さい頃家にあっただのを見たくらいなのにな。

多分あの子たちにとっては映画やドラマや漫画みたいな創作物でしか見るものがないものだ。

もちろん観客はいつも僕ひとりだけ。

きつと上映しているのも僕ひとりだけ。

その日のその瞬間からしばらくしてから……そのときの先生や叔父さんに心配されて無理やりに連れて行かれて、彼らが満足するまでのそこそこの期間をかけて何十回と受けたカウンセリングとやらによる……僕はいわゆるPTSDとかいうやつだったらしい。

僕は「違う」って思っていたんだけど、行くのがめんどくさかったしで何度もそう主張したんだけど「そうなのよ」って言う人はみんなそう言うんだよ」なんてらしい言葉で言いくるめられてそういう病歴を抱えることになったわけだ。

まあ中学生が大人たちに「そうだ」って言われて「そうじゃないんですけど」って言い張れるほど度胸も知識も経験もないもんな。

僕自身は特段にふさぎ込んだりしなかったんだし、むしろ僕自身のあまりの普通さにびっくりしながらもそこそこにはまともに生活できていたんだから平気だったのにな。

本当に大変な目に遭った、心に傷を負った他の人たちと比べちゃいけないって思っているんだけど……ともかく公式な見立てではそう

いうものだったことになっていた。

こういう風に周りが、僕が受けるはずだった衝撃を大げさに、さも彼ら自身が苦しんでいるかのごとくに受け取ってごろごろしている様を見ていたから僕は余計にそれほど苦しむことはなかったわけだし。

その日のその瞬間——教員室から校長室に連れて行かれた先で聞いた、その電話。

「父さんと母さんが死んじゃった」っていう連絡。

ああいうのってどんだけオブラートに包んだ言い回しとかしたって結局はショックは受けるものなんだからさっさと言ってもらったほうがいいのにな。

僕ならそう思う。

当時からずっとそう思っているのは変わらない。

僕みたいなのは薄情なんだろうか。

普通の人は違うんだろうか。

もつと情緒豊かなんだろうか。

パニックになったり泣きわめいたりするんだろうか。

気を失ったり吐いたりしちゃうんだろうか。

僕はそういうのがまっただくなかったから分らない。

少なくとも僕みたいな思考回路している人ならきつとこう思うはずなんだけどなあって思うだけ。

——その日もいつものようにだらだらと受けていた授業の合間に「ちよつと……」って呼び出されて、そのまま先生の車とか呼んでもらったタクシー……とかじゃなくって、荷物をまとめたらすぐに来たらしいパトカーに乗せられて。

かみ切れないあんちくしょうを歯のあいだに残したままみたいな言い回しでまくし立てられ、なんだか悪いことをした気持ちを抱えつつ結構離れたところのばかでかい病院へと連行された。

車内では乗っていた人がいろいろと気を遣ってくれたのは覚えてるけど、それが却ってうざったかったことのほうが印象に残っている。

「早く帰りたいなあ」って、そればかりがぐるぐるしてて。

そうして病院に着いて物々しい雰囲気、おんなじように連れて来られた人たちがたくさんいて、泣いたり怒ったりしながらそれはもうすさまじいことになっていった。

「阿鼻叫喚ってこういうことを言うんだなあ」って、「まるで映画みたいだなあ」って思っていた気がする。

僕が入った両隣の病室では大騒ぎになっていたこともあって、僕と僕を連れてきてくれた警察の人と病室にいたお医者さんと空のベッドしかない部屋は、とさらに静かな感じだった。

「ご両親のことは残念でした。手は尽くしたのですが、ここにいらしたときにはすでに、その……」

僕と目を合わせない……きつと合わせられなかったんだらうお医者さんらしき人が告げる。

「いえ、仕方なかったんですよ。事故ですから」

そういう事実があったんだって認識はできていた僕。

ニュースっていう画面とか紙越しでしか知らなかった人の「死」ってのはこうもいきなりくるんだなーって思ってた。

そんな風なことが他人ごとのようにループしていた。

心の準備なんかできるはずなんかないものな。

……いろんな映画とか本とかマンガとかで知ってはいた。

けどいざこうして見ると、本当にいろんな気持ちがあぐちやぐちやになるんだってそのときに知った。

僕はそんな感じで妙に頭が冴えていて冷静で、朝まで顔を合わせていた父さんと母さんにはもう会えなくなっただけの事実として認識しただけだった。

比喻表現である、胸がぽっかり空いたようになっていう感覚。

本当に胸が冷たくなってお腹の奥も冷たくなって、なんでか奥歯とか腰が痛かった気がする。

ものすごく、ことさらにやんわりと。

僕の目の前でお医者さんがもごもごと言っていたのから多分、まだ中学生だった僕にそれを見せるのは酷なことだってくらいにはひど

い事故だったんだろう。

ドラマとかで遺族の人とかにする「酷だとは思いますが本人確認を……」っていうの、無かったし。

あのときは気づかなかったけど、多分そういうのは全部後見人の叔父さんがしてくれたんだろうな。

だからだったのかはわからないけどそれからずっと、僕が聞いてもどうしようもない事故の細かい経緯とか現状とか、これからの僕のこととか学校のこととかお金のこととか……そういう、僕にとつては本題でもないようなどうでもいいことばかりを何時間もかけて、いろんな人が入れ替わり立ち替わり口を開きっぱなしでとにかく忙しかったことだけを覚えてる始末だ。

まるでお葬式してるみたいに忙しかったんだ。

でも、そのときの僕が思ったのは……駆けつけてくれた叔父さんをはじめとした親戚の人たちがほとんどやってくれたはずの父さんたちをお墓にしまうという作業に比べて、名前を書いたりハンコを押したりしなきゃならない書類のほうがつつと大変で、肉体よりも情報のほうが大切なんだなって、そういう感想だった。

人ってのはしよせんはただの情報。

死んだら写真と戒名と書類だけになるんだ。

実際今はそうなっているもんな。



その事故のことは、僕が忙しかった……といってもほとんど人任せで、僕は父さんたちの相続人っていう法律上の立場からどうしてもしなきゃならないことしかしなかったんだけど、ともかく僕基準で忙しかったひと月くらいのあいだずっとそれはもう大変な話題だったらしい。

今思えば周りの大人たちに……叔父さんとかお隣さんとかにテレビとか新聞とか見ないように仕向けられていた。

多分適当な理由でスマホさえ取り上げられていたんだろう。

それで特にニュースに興味を持ったりもしないただの中学生男子だったから、気がついたら事故の報道とかはとつくに終わってたんだ。

だからそのあとの学校で気を遣われながら、でも好奇心に負けているって感じでそろそろと父さんたちのことを聞かれたときも、むしろ僕がぜんぜん知らないからみんなびつくりしていたくらい。

まあまだ高校生になる前だったのもあって学校の外の人が押し寄せるとかはなかったあたり僕は恵まれてたんだろうな。

ともかく、父さんと母さんは死んだ。

生物は死んだら死んだままで生き返ることは無い。

エントロピーは失われたら失われたままなんだ。

それが魂って言うものかどうかはさておいて、もう会えないところへ行つてしまったんだ。

ということはそれ以上のことを考える必要はなかったわけで、だから僕にとってその経緯とかはそれこそどうでもいい情報だった。

おかげで今でも単なる偶然で起きた事故で、しいて言えば玉突き事故みたいになんかいじめに起因したわけじゃなくて、誰かの故意とか過失とかそういう悪意とかがあったものじゃなくて本当に偶然で、ただの不運としかいいようのないもので……何回振つても1しか出ないような、そんなサイコロみたいなもので……

誰にも何にも責任はなくて、無駄にそこにいるお巡りさんとか自衛隊の人とかに食ってかかる理由も無ければ泣きわめいて同情を買う必要も無くて……ただ「僕の両親だったもの」を含めて20に近い人がこの世をほぼ同時刻に去ったっていうだけの不幸に襲われた、ただそれだけで。

……そりゃあ今にして思えば、まだ中学生って言う子供だった僕……いや、今はもういつか子どもになっちゃっているけど……心までが子どもだった僕にとって父さんと母さんがいなくなっただけっていうのは相当なストレスだったって、今ならわかっている。

多分みんなで相談して母さんたちだったものを僕に見せないままホネにしてくれたおかげなんだろう。

それが子供に対する大人の優しさなんだって今なら理解できる。

ともかくそのストレスのせいでその後どころかその前のことでさえ……少なくとも中学に入ってから高校を卒業するまで周りの一切気にならなかつたんだろうな。

だから一応でなんとなくやっていたはずの部活もあれ以降はやった覚えがないし、学校だつてだんだんに行かなくなつていった。

家のこととかひっくるめてぜんぶを世話してくれた、後見人を買つて出てくれた叔父さんがいなかったら中退までありえたかもな。

だつて僕だしな。

適当にぶらぶら……いや今でもニートしてるけどそれ以上に、その日暮らして放浪するとかそういう人生にエントリーしていたかもしれない。

ひよつとしたら半年前にホームレス少女が爆誕していた可能性だつてあるんだ。

でも外からせつつかれてようやく動く僕だから、そうしてお世話を焼かれないとダメだったのかもしれないと思う。

だからそうして、これまで……今までも残っている記憶といえればぼんやりとしていてふわふわしていつかみどころがなくなつて、とぎれとぎれで力が入らない感じの「僕が僕ではなかったような」そんな思ひ出未満の何かだけだ。

……ないものはない。

よつていくら踏ん張つてみても出ないものは出ないんだ。

そういうわけで僕自身のこととはよく思い出せないしそのころの僕の周りのことを思い出してみることにしよう。

というより経験上、この悪夢はひととおり思い出して見させられてストレス抱え込まれないと目、覚まさせてくれないしなあ。

悲しい経験知だ。

悪夢なんてなんで見るんだろうな。

しかもまいっかいおなじように。

「……………」

どうにかして入つたんだろう高校ではたいしたことはしていない。

本気でのろのろやってた勉強ぐらいしかないんだ。
それはもう悲しいくらいに。

休みの日なんかは本当にぼけーっとして気がついたら寝る準備してたとか言うレベルで。

……人の噂って、どうやってか広まるもの。

だから気がつけば同級生……っていうよりはたぶん先生たち主導だろうな、みんなそろって僕の親のことを知っていて、けど口にはしない程度に優しい子が多かったんだろう、それでイヤな思いついていうのはほとんどしないままだった。

僕は本当に周りの人たちに恵まれていたんだらう。

僕は神様とか信じないけどそういうのには感謝してる。

でも当時の僕は、もともと人よりも精神年齢が低いっていう自覚があつた高校生になりたての僕にとっては、そういう、初対面のはずなのに「両親を失った気の毒でかわいそうな子」って感じにものすごく遠慮がちに接してこられるのがたまらなくって、ほとんどの時間は図書館とかに逃げていた気がする。

なるべく話しかけられないようにって。

まあそれでも話しかけてくる子はそれなりにいたけど。

あのときよりもずっと小さくなっちゃったけど、あのときよりは大人になつた今だからわかるけど、あれはすべてに恵まれていないと実現しない環境だったんだ。

けどそのときの同級生たちや先生たちなりの優しさっていうものは、そのときの僕にとってはただただうつつとういしいものでしかなくつた様子。

なんでこんなことぐりぐりとねじ込まれるんだか。

それも自分自身に。

正確には僕の無意識に。

心が痛い気がする。

夢だからあたりまえか。

「……………んう？」

と、ここで。

普段の僕なら夢の中でこんなにしつくりと思い出すことも考えることもないつていうのをやつと自覚できた。

「……………こつわ」

頭の中でつぶやく声は聞き慣れた幼女のもの。

こういう精神異常系つて怖いよな。

だつて「おかしいのをおかしいつて自覚できない」んだもん。

ようやく意識を……自我を取り戻した僕の目の前に、ちらちらと通っていた校舎とか近くの席の子とか先生とかそういうのがぱらぱらと回っていく。

昔のことが断片的に駆け抜けるように流れていくこれつて……ま

さか、走馬灯？

「いや……ない。 ないない」

ないないつて声が耳から聞こえてる感じがある限り僕は生きてるらしい。

まあ死んだ覚えもないもんな。

ただの夢だ、気楽に行こう。

起きたらトイレに直行しないと危ない膀胱と栓になっちゃつてるんだから。

27話 回想・又は過去・ 2 / 4

「けど、今日のは長いなあ」

半ば強制的って感じに昔の記憶をたどらされている今の状況。

走馬灯って言葉がいつもみたくぼろっと出てきちゃったけど気にしないことにしたい。

……そんなわけない。

そんなわけないよね？

まさか本当に死にかけてるとかないよね？

まあ考えても目が覚めるか覚めないかの2択だからどうしようもないんだけども。

……こういう起きる寸前の夢の中でのあいまいな意識でもってさらに考え込むのってどう表現するんだろ。

よくわからないけど、ともかく目の前は大学時代へと切り替わっていたらしい。

高校よりもずっとひどかった大学生活へ。

………思い出すのもこっぴげずかしい。

思い出させれるのはもつとこっぴげずかしい。

このあとにはのたうち回りたくなる記憶が待っているはずなんだ。止まってくれない……？

「……………止まれっ」

……いろんな授業……講義とか大学特有の独特の懐かしい表現だよね……それを受けていた記憶がやって来ている。

なんかダメそう。

諦めるしかない。

黒歴史って言っても僕がしでかしたこと。

なあに、他人との関わりがほとんどなかったから他の人よりは恥ぢずかしいことなんてないはず。

そんな悲しい気の紛らわせ方してみる。

……とうとうまともな生活っていうものを放棄しだしたところのことだから、大学へは行ったり行かなかったりして単位もぼろぼろと落

として、留年っていう子どもころにはダメな大人の代名詞だったのにいざしてみたら拍子抜けだった烙印をいくつか手にしたりしていた。

理由は単純この上なくって、ただがんばるっていう気持ち……気力とかMP的なものがなくなつて、家を出ることすら……もつといえは起きてから目を開けるまでも時間がかかるくらいにおっくうになるっていう、めんどくささの頂点に来ていた頃なんだ。

一時期はどうにか呼吸すらなくてすむ方法がないかとかわりと真剣に考えていたくらいだしな。

座禅とか瞑想とか本当にはまったよなあ……今から思い出してみても相当にやばい気がするし

、変な方向にねじ切れなくって良かった。

食べるのもめんどくさい時期まであったし、病気になったりしくってほんとうによかったな。

ほんとうに。

だってヒトに限らず生き物の根幹のなにかをしようとする力、なにかをするっていう意思そのものがなくなっていたからんだから。

まあこういうのって神妙に相談したら精神科に連れて行かれるんだろうけどな。

人ってこういう時期あるじゃん？

大二病って言葉もあるらしいし誰だってきつと1回は通り過ぎる道なんだ。

だから人生を台無しにしないで無事に終えられたことを誇るべきなんだ。

でもまあ普通の人はちよこつとで終わるんだろうけど。

大学って、出るのとは簡単なもんだからそんな感じだったのに卒業できちゃって、とうとう最後の砦を自分で破壊しちゃったわけで。

慣れないスーツで卒業証書を持って帰ってきた僕に残っていたすべきことは、もうなくなっていた。

だからひきこもった。

別に理由なんてない。

ただただひきこもったんだ。

何ヶ月か卒業証書をテーブルに置きっぱなしで埃が被る程度には自堕落になっていた。

お金とか財産の権利とかも勝手に持って行かれたりなんかはしなくってみんなきちんとされていたし、巻き上げられたりすることもなくちゃんと僕のものになっていた。

父さんも母さんも会社員の働き盛りだったからだろうし事故の影響が大きかったからなんだろう、ちゃんと働きながらなら万が一でも大丈夫な金額が手元にあっただ。

いろいろといっぱいいたくさんの紙に名前書かされたりしたりしたり、そもそも叔父さんが有能な善人だったっていうのもあるかもだけど。

あらためていい人過ぎる叔父さん。

元の体に戻ったら会いに行こうって思う。

「……戻れるのかなあ」

夢の中でも幼児になってる辺り状況は深刻で、いつ戻れるかは分からないけどね。

そんな感じに中途半端に足りないものが無い状態だった僕は、僕自身ががんばらないとやばいっていう動機がないし、誰かのために……親のために立派になるって気持ちも無くなってたから、がんばろうっていう意欲も生まれようがないわけ。

住み慣れた家があってお金もあって男ひとりで生きていくのに何一つ困らなくて、唯一の悩みどころの叔父さんとかの親戚とかご近所とかお隣さんも、ときどきどこかで働くフリをしてがんばっている感じを醸し出しさえすれば、そこまでとやかくは言っておかない。

「体が優れないので……」とか「同僚と合わなかったの……」とか言えば求職期間ってことで「またのインタビューを……」って感じのループ。

「響くんは響くんだから自分のペースで良いんだよ」って言われるたびに心がちくちくしてたっけ。

多分そういうの親から直接言われた方が効くんだろうなあ。

体はモヤシだけど健康で特に病気をする兆しもない20代。

家の敷地からゴミ捨て場までの往復以外じゃ、やろうってすればス
マホひとつで食べものから娯楽までほとんどすべてのものが手に入
る。

改めて便利すぎる弊害がここに出た感じ。

めんどくさがりには素敵すぎて墮落する時代なんだ。

だから僕はたいした理由もなく、特別のトラウマとか不幸があつて
……ってわけでもなく、ごく一般的な、誰にでも起こりえる範囲の
ちつちやなきつかけのせいで、ただ、すべてを投げ出したんだ。

ただただめんどくさかったんだ。

——そうして1回投げ出して気がついたらもうあつという間に数
年。

きつかけから換算すると実に10年。

10年っていう生まれればかりの赤ん坊が今の僕と同じくらいに
まで成長するっていう、途方もない貴重な時間を僕は無駄に過ごして
きた。

ちようどあの子たちが産まれた頃から今までの時間。

生まれたての命が人らしく育つ時間に僕がしてたのは、ただ学校を
それらしく過ごしてお酒を覚えてだけ。

「……………もしかして、だから僕はこの姿に……………」

ちよつとシリアスになってみたけど無い無い。

そんな偶然なんてありえっこないもん。

すべては魔法さんのごきげんだしな。

きつと魔法さんは銀髪幼女趣味なんだ。

だいたいその10年っていうのが原因だったら中学生くらい
の姿にはなるわけで、間違つてもこんな幼女チックな幼女にはならない
はずだしな。

魔法さんが意志を持つてるのかなんて相変わらずに分かんないし、
誰かの呪いとかだったとしてなんで僕って感じだし……………どうせ分
かることもないんだろうしな。

……………そんなことを考えていたら場面が一気に変わつた。

ダメダメな僕でも「これじゃダメだよ」って思ってたよと動くってのは何度かあって、「あ、これは本当にやばい」ってなったのは引きこもって少ししてから。

その原因は単純に自律神経失調症ってやつで、しかも自分のせいって自覚があったから。

……人間って毎日規則正しく体を動かして外に出ないとだんだんとおかしくなってくるらしい。

僕は起きたいときに起きて眠くなってきたら寝るっていう子供のころに夢にまで見ていた生活を始めて、昼夜逆転さえまったく気にしないような生活を続けていた。

ものすごく快適そうに過ごしている僕。

だって本能に従って生きるだけだもんね。

でもそんな生きながらの天国に近い生活長続きしないんだ。

実際こうして見てみると不健康そうにしか見えないし幸せそうじゃない。

「なんとなく体調が変……？」っていうのから始まって、動悸とか頭痛とか階段を上るだけで息が切れるとかが出て来てびっくりしてる。

さらには眠いののに寝付けなくなってお酒とか薬とかに頼ってもまともに眠れない不眠とかになつて、音とか光にはもともと敏感だったけどちよつとした音とか肌触りでもダメになったり、感情が僕のものじゃないみたいに四六時中ずーっと勝手気ままに動いて手がつけられなくなつて……ひと言で言うのと神経がささくれ立った感じになつてどうしようもなくなつてる。

気がついたらもうどうしようもなくなつていて、ただ生きるだけっていうの自体が難しくなる始末僕が安心してらる。

あー、大変だったよねえ。

多分僕の人生で一番辛い時期だったんだらう。

中学生のときよりもだからよっぽどだもん。

人は健康こそが幸せってのがよく分かったんだ。

このおかげで、人っていうのは適度なストレスっていうのがないとただ楽しくて楽なことばかりしていたらダメってことが分かった

んだよねえ。

けど原因がわかれば話は早いもので、早寝早起きに毎日最低30分は外に出て散歩とか軽い運動するだけでちよつとずつ良くなった。

目の前で幼女なのに成人男性なりピートさせられてる僕の姿もとても大変そうだけど実際大変だった。

体力ってほんと毎日の積み重ねだよね……この体になってもう1回身に染みて理解してるけど。

あの辛さを知っているからこそ、どんだけめんどくさくなくなったりしても「あれほどの生活に戻ろう」って気にはならなくて、つまりはちよつとだらしない程度の生活を維持できるようになったのは、きつと良い薬ってやつになっただろう。

人って痛い目見ないとわかんないもんだからなあ。

後でわかるから後悔っていうんだし。

ひーひー言いながら朝早く起きて動いて……ってしてる少し前の僕を眺めてたら改めてそう思う。

その後は「完全なニートも良くないかも」って思って、やる気のある期間だけ適当に楽そうなバイトをして社会人もどきを試してみても通の人にちよつとだけ近づいてみたりしてたらしい。

ひきこもり明けで体力が戻りきっていなかったのもあって、力仕事でもなく拘束時間も短めで僕が持っている唯一って感じの勉強……まあつい最近まで失うことになっていたんだけど、それを使つての学習塾とかでのバイトが1番続いてたっぽい。

勉強とかいっても、熱心じゃ無くてただぼーっとしてただけなのになんか特定の子に懐かれやすいからか、ほとんどがそういう子の子守みたいな感じでいることが多かった様子。

その内に子守にも飽きたから適当な理由をつけて止めて、もういつかいニートに戻つてからは生活リズムだけ守って、でも好きなことを適当にするっていうそこそこに充実した生活を送って、ひとりぼっちにしてはこれまたずいぶん満ち足りた時間っていうものを過ごして。

———そうしてあの朝になって「なんじゃこりゃあ!？」って

なってる場面まで追いついてる。

脳みそってすごいね。

どう考えても僕自身は体の中に居たはずなのに、こうして記憶の中では僕を外から眺めているようにできるんだもん。

しかも前の僕も今の僕テイストで。

まあ男見てるよりは目に優しいしいくらか悲壮感が紛れてる気がするからいいや。

やっぱり人って見た目だよね。

元の体に戻ったら見た目にはちゃんと気を配ろうっと。

「うーん……」

目の前で僕らしき幼女が女の子になって慌てふためいて、それをすぐ近くで見ている僕自身は突っ立ってるだけ。

やっぱこれ……走馬灯じゃ？

走馬灯かも。

走馬灯な気がしてきた。

走馬灯じゃないって否定したいんだけどできる要素がひとつもないしな。

ていうことは控えめにいってもやばいわけで。

なんか死ぬようなことあったのかなあ……心当たり無いんだけど……？

なんだか過去のことばかり、それも考えないようにしようとしたって次々と浮かんでくるっていうか目の前に見える感じで、強いていうなら僕の隠し撮りをうまく編集してあるのを無理やりに観させられているような感じで。

それもいつもの悪夢とは違ってやけに長めだし、やけにやけに意識もはつきりしている。

「うーん？」

しかも初めっから終わりまで僕のイメージが今の僕になっているおかげでなんだかところどころおかしなことになっているし。

おかげでバイトのときの場面なんて幼女が年上の学生をあやしているっていう実に背徳的ななにかになっているしな。

見ているだけで違和感のかたまりでしかない。

まあこれが僕の想像力の限界なんだろうけど……それにしてもなんなんだろうこれ。

命の危機……お酒の飲み過ぎで？

いやいや、いくら飲んだからっていつでも無意識でセーブしてたし、急性なにかになる分量じゃなかったはず。

あ、今の僕幼女だった。

普段通りに呑めちゃうから気にしてなかったけど、さすがに許容量は少ないはず。

「……………やばいっ！」

もしかして。

もしかしくても。

そもそも呑んじやいけないんだもんな、本当は。

でもアルコールに慣れた大人だから止められなかったんだ。

今の虚弱な胃腸とおんなじくらいに……いやもうちよつとは頑丈なはずか、そんな肝臓さんが悲鳴上げているのが今だとしたら、どうにかしてすぐに起きてがんばって吐き出してお水をがぶ飲みしなきゃいけないんじゃないんじや……？

「ふんっ」

お腹に力を入れてみたり息を止めてみようとしたけど目の前で2日目を迎えている新鮮な僕が鏡を見ているだけで何の意味もなかった。

駄目だ、起きる気配がない。

体の感覚がないんだしな、夢っていう意識しかなくって。

力を入れようにも体がどこにあるのかする分からないのが分かっただけだし。

「しようがないか」

僕は諦めが早い。

どうせどうしようもないんだし、目の前の記憶でも観ていることにする。

することないしな。

どうやったって起きられないんだったらこうやって待つしかない。

これも含めての悪夢なのかもだしな。

どうしようもないのならただぼーつと流されているほうが楽だ。ムリに逆らったってあがいたって、どうしようもないんだから。目の前はどんどん切り替わる。

幼女と化して現実逃避しようとして試行錯誤の悪戦苦闘をして……その過程でかがり目をつけられて、今井さんと萩村さんって

うムチとアメのペアに発見されて、ゆりかからは妙な親近感を持たれて。

そうかと思えば一気に時間が飛んで父さんたちのお葬式のとときか、最低限のものを残すっていう遺品整理とかに終われている場面が挟まれたり。

死にかけ？

やっぱり僕死ぬの？

幼女で？

幼女になつて？

もしそうだったら、ひよつとしたら夢の終わりって父さんたちとの再会なんだろうか。

こんな終わりはイヤだなあって思うけどこれが定めならしようがない。

今週末にもみんなとの予定、あるんだけどなあ……。

それにいきなり消えるのはなんだか後味が悪いし。

だからどうにかして起きたいとは思うんだけど夢の中でどうやって目を覚ませばいいんだか。

普段夢とか見ないしどうしたらいいのかがぜんぜん分からない。

「どうしよう」

どうしようもないなあ。

どうしようもないなら身を任せよう。

ただ単に眠りが浅いだけで、金縛りよりもちよつとだけ夢の世界に近いつていう夢の中だけど意識が起きちやうつていう明晰夢つてやつを見てるだけなのかもしれないし？

体に異変があつてネットで調べると大抵「あなたはもうすぐ死にます」つて記事しか出てこなくつて慌てて病院行くけど何ともないつて言うあれかもしれないし？

そうだ、仮に明晰夢だとしたら……よく夢の中で好き放題、欲望のままにやりたい放題つて聞くんだけど本当なんだろうか。

「うーん」

ただ過去に目にしたことを細切れにしてランダム再生しているみ

.....◆◆.....? そうなの? それ
は、えーと。 その、困ったことになったわねえ.....女の子にねえ
.....」

「信じてくれるんですか」

.....ん?

家の前での立ち話してたらしい場面から、ときどきお世話になった
から知っているお隣さんの家のリビングにお邪魔している場面
なっていて。

「なるほどー、朝起きたら.....目が覚めたら女の子にねえ。 それも、
そーんなにちっちゃくなっちゃったの。 それは驚き.....なのよ
ねえー」

「なんか驚いてないみたいですね」

「これでも驚いているのよ?」

「知ってます」

.....んん?

「.....ええつと、申し訳ないんだけどすごく大事なことから.....ね、
響くん?きちんとおトイレ、できたかしら?」

「ええ.....なんとか?」

「.....よかった。 そう、なら朝ごはんとかも大丈夫?さ
すがに背丈が届かないのねえ。 ならうちの子が起きたら一緒に食
べましょう? それで、そのあとは病院とお役所とー、あとは◆◆◆

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「いや、今日は疲れたのでまた別のが良いです」

自然に会話しているらしいお隣さんと——僕。

まるで——「僕がああ朝そのまま家を出てお隣さんに助けを求めた
かのような」そんなあり得ないシチュエーションでの捏造された記憶
が再生されはじめる。

——ありえない。

そうだ、ありえない。

だって僕はあるとき選んだんだ。

誰にも見つからないようにじっとしていようって。

「響くんのお父さんにもお母さんにもうちの子が小さいころによくお世話になったし、恩返ししなきゃね！ まかせて！ その体に慣れるまでは……いえ、響くんさえよければそのあともっ。……さんとも相談したし、家で面倒ばつちり見るわよ!!」

「いえ、適度で良いです」

かがりのような目線を浴びせてきている飛川さんと引き気味な僕の声。

……僕は、こうはしなかったんだ。

見つからないようにって、ただ隠れていたはずなのに。

そもそも初日の午後に起きたときは「何だ夢か」って寝て過ごしたはずなのに――。

「それにうちのさつきも響くんがたくさん遊んでもらって勉強まで見てもらっていたじゃない？ だからそんな迷惑なんかじゃないわっ、困ったときはお互いさま。まずは今までにお母さんたちからもらった分くらいは響くんに戻させて？ ……ね？」

「……………はい」

ああ……この人が魔法に掛からない状態で今の僕と会って話を聞いたらこうなるのかも。

その程度には違和感のない光景……だけでも。

なのにどうしてこんなにも……昔の、本当の記憶なんかよりもずっと……かがりやゆりかと会っていたのと同じくらいにクリアで「まるで初日にお隣さんに助けを求めたのが事実だ」って感じで。

「っ……」

――体の感覚が無いはずなのに頭がくらくらしてくる。

これはなんだろう。

まるで「矛盾する正反対のものを同時に認識させられているような――」

「あ、起きてきたわ！ ……さつき、ちょうどよかった！ この子はお隣の響くん。今朝女の子になっちゃってたんだったって」

そうして何でもないように言ってるのけるお隣さん。

「……………お母さん何を変なこと言ってるの。お客さん？ まだ私

パジャマだから」

「いいからちよつと来てみてっつて！ ほらほら!!」

「ちよつとお母さん、やだ、まだこんな格好で……え？」

懐かしい感じのやりとりのあとにミニ飛川さんって感じの女の子が引きずられて来る。

飛川さんよりも背はちよつとだけ低くって雰囲気はそのまんまで、でも年相応の精神年齢と顔つきって感じの子。

飛川さつきちゃん。

いやもう中学生なんだから、さつきさん？

お隣だからってこの子がちっちゃいころによく面倒を……母さんが勝手に連れてくるからよく見させられていた女の子は、立派な中学生くらいになっていた。

確か最後に近くで会ったときはまだ小学生だったからまだまだちっちゃいって思っていたんだけど、今観ている彼女はすっかり今の僕を軽々と……いろいろと越えていて。

さすがに奥さんみたいにぼやんな感じはそこまでじゃないけど、ときどきそんな気配はしているけど小さい頃からしつかりした子だった。

現実でもちちゃんと成長していたらこんな感じになっているんだろうか。

ゆりかとかかがりたちと一緒にいてもおかしくはない女子中学生になっつていて。

「……え、ええつと……お母さん？ この小さな女の子……髪の毛とつてもきれい……じゃなくて、この子が響……さんの親戚の子とかってこと？」

うん、この子の反応が普通だよね。

「違うわよ、この子が響くんなの！」

「………響さんは、もっと背の高い男の人ですよ？」

ばつさりなさつきさん。

「お母さん変な冗談は……!! まさかまた寝ぼけてご近所の子を……!!」

「冗談でも寝ぼけてもないからね!? 響くんの前なんだからそういうの今は言わないの!」

「また」 って……まあ飛川さんだから……かがりに通ずるものがあるこの人だから……。

「あの……本当に響さん?」

「一応は。 僕の認識が狂っていないければね」

「あ、響さんですねこの感じ」

「ん? 分かってくれるなら有り難い」

なんだかちよつとした会話で僕って分かったらしい。

——そこからは早送りみたいにいるんな場面が来ては過ぎていく。

どうあがいても逃れられない運命だともいうのか、母娘にもみくちやにされて着替えさせられていて。

見覚えのあるさつきさんの服とか……ふたりの言動からすると奥さんの昔の服とか、あるいはデパートへ引っ張られていってムダに高そうな服とか着させられて。

これが運命?

「あ」

初日から……昨日着ていたみたいなワンピース着せられてる。

「……………」

「ご愁傷さまだな、「そつちの僕」も。」

そりやあもう相当にだるつとした顔をしている。

さいっこうにイヤそうな顔をしていても、やっぱり眠そうってしかわからなくて。

サイズのにもかかりがふたりに分裂してまとめて襲いかかってきたようなものだし、むしろこうして眺めてる僕の方がいろいろとマシだったのかも……いや似たり寄ったりか。

「だけど——ただ見た感じでは。」

嘘をつき続けて悩んでいる様子がないのだけはうらやましいな。

最初から何にも隠さないで全部さらけ出してたら眉間に皺寄らないんだ。



そうしてお隣さんに家ぐるみでお世話になって。

背が届かないからって居候みたいになって夏を迎えて。

……なんらかの理由をつけられてさつきさんの部屋に寝泊まりさせられて。

いや、なんでかはよくわからないけど、なんでか。

——そうしているうちに何かをきっかけにしてゆりかが、続けてかがりが、りさりんとさよが。

レモンとメロンとりさりんとメガネロングっていうあの4人と知り合ったらしい。

あの、夏休み最終日に「もう友だちなんだからみんな呼び捨てにし」って言われて下の名前までひとりひとり呼ばされた……なんでだ……そのみんなが、さつきさんを加えておんなじ場面で会話をしている。

「……………」

夢って無意識の世界だし、だからつじつまなんて合わなくてもいいわけ。

だからこれは——僕の願望。

「誰にも嘘をつかないでよかった」っていう未来、いや過去か、それを妄想した夢なのかもしれない。

魔法さん関係のストレスでぎくぎくしていた僕の心を、こうやって都合が良くなって見えていて気持ちのいい夢を見て癒やしているうちにたまたま意識が起きちゃったみたいなの、そういう感じなのかも。

……見ていてうらやましいって思うくらいだな。

無意識にでもこうしてきつと楽だったはずの光景を見てるだけで。

嘘を嘘で塗り固めていつて誰にも本当のことを、何一つ偽らないで。

過去も年齢も性別も………僕っていうものを、何一つ偽らないで。

偽らないで、最初っからぜーんぶ本当のことしか言わなかったら、

こうしてもつとずっと楽に自然体で人に交われるんだとしたら。
「……羨ましい」
そんな夢にいつまでも浸っていたいくらいに幸せな光景なんだ。

「は——……」

他人の幸せを見るとため息が出るって言うのは女の人の特徴かって思ってたけど違ったらしい。

いやまあ今の僕も肉体は女なんだし否定はできないけど他分別の理由。

心から望んでいるのが目の前で見えていると……こう、ため息しか出ないんだ。

「いいなー」ってうらやましさと「ずるいなー」っていう妬ましがブレンドされた感じ。

でも完全に現実とは違う展開をしているのを見せつけられるから「お隣さんたちにお世話されているあっちの僕」と「そうじゃなかったこっちの僕」とを別人として見るようにもなってきた。

まあ夢だし。

夢って都合良いものだし。

それでもって夢ってのはおかしいのにおかしくないもんだし……って思ったんだけど。

「……えっ」

今までの……ちよつと思うところはあつたりはするものの、けどただの仮想的な展開だって考えていつも見ている映画とかみたいになつてきていられたんだけど……なんだか様子がおかしなことになつてきている。

夢の内容がおかしな方向へと転がり始めてきているっていう感触。

だって今までは「今までのこっちの僕」が経験したようなできごとを「あっちの僕だったとしたら？」って感じにIFな空想として再現していた感じしかなかったのに、なんだか……そう。

なんだか、この夏休みを終えたような時点から夢の中の展開がひとり立ちしちゃっているかのようで。

だって僕の目の前のスクリーンにはすでに紅葉を迎えた山からの

景色が広がっていて。

ということとは季節は今を……残暑を通り越して秋になっているはずで。

それもそこそこに標高の高い山の風景だからつまりは11月くらいにはなっているはずで。

だからだから今の僕からしてみたら「2か月は先を進んでいるかのようなありえない未来」へと突き進んでいることになる。

まあ夢だし、明晰夢でもこうして意識ははつきりとあつたとしてもつじつまが合わないっていうのもありえるんだろうけど……だけでも今までが今までだったし、なんだかこう、もしかもしゃする。

たてるなら楽しもうとしていた作品のネタバレを不意打ちで食らっちゃったときみたいなき？

それともちよつとだけわくわくしながら引いていたクジが紙の感触とかで「あ、3等くらいの微妙なやつが当たっちゃってるみたいだな……」って分かつちやつたときみたいな、そんな感じ。

そうして……この感じは温泉かなにか。

あるいは火山の麓とかよりも上の観光地。

そういうところによくある日帰り温泉っぽいところの更衣室。

僕がひん剥かれている光景。

もちろん当然ながら全裸だ。

思わず目を背けたくなるような幼い女の子な体の上に銀色の髪の毛が腰を通り越した辺りまでさらさらと囲んでいて、周りの女の人たち……ほとんどおばちゃんとかだけ……がガン見してる。

そんな光景を「誰かの目から見ているような」そんな違和感。

その僕は珍しく羞恥心を感じているらしく……当たり前か、周りは肌をさらした女性ばかりだもんな……脚のあいだだけを隠して、指摘されてもう片手で胸も隠すっていうのを教わるようにしている場面だ。

どうしようかって戸惑っているらしい僕が貝の上にいるような格好をしてから少ししてようやく……文学少女さんがタオルを手渡ししてくれている。

あ、お風呂でもメガネするんだ。

まあ僕もそうだったし見えないもんな……じゃなくて、その……彼女たちも、いるんだ。

既に下着姿になっちゃってるからどうしても視界に入っちゃって居心地悪い。

僕、こんな妄想するほどの男じゃなかったんだけどなあ……罪悪感が。

あ、りさりんの大きい。

あ、眼鏡さんのも中々。

あ、メロンさんがぶるんってなってる。

あ、レモンさんのは……揺れない安心感。

「……………」

頭を全力で打ち付けたい衝動に駆られたけど体が動かないから起きたら自戒しておこう。

……なんで僕はこんなに見てるんだろう。

髪の毛がすごいって裸なのにもみくちやにされていて、どうしようもないあつちの僕。

さらに傍にいたさつきさんまでが下着姿で、手がそれに掛かってゆっくりとああああ目がそらせない。

あの子たちならまだしも……それでも充分に悪いけど、いくらなんでも小さな頃を知ってる知人の娘さんの裸を例え妄想だとしても見るなんて後味が悪すぎる。

つい最近に知り合った子たちの裸を見てしまうのといやそれもそれで困ったことなんだけど、それと小さい頃から知っている子の裸を見ってしまうのではやっぱり違うでしょ。

まずいでしょ……いろいろと。

でも僕はこんなことを考えるはずがないのに。

◆

◆

だって僕は、◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆なんだから。

◆

◆

◆ ◆ ◆
……それに、視界がかなり違う。

さつきまでとは違つてはつきりとしている。

しかもこの目で「今」見ているみたいにフルカラーで、やけに鮮明で。

さつきとは違つて声はぼんやりとしか聞こえていないけど、でもさつきよりも解像度的なものが上がっているようで。

「あ」

……見えちやつた。

その……3人とも、ちらちらと、そしてはつきりと。

だつてタオル……してないんだもん。

いや、タオルを体に当てては居るけど横から見えちやうみみたいな感じ。

いくら女の子同士だからつてもうちよつと隠したら……あ、男でもぜんぜん隠さない人多いからもしかして普通なのかな。

いつの間にか僕自身の視点になつてるけど、僕の視点だからこそ上も下も至近距離で、動くものだから……目がぱつと、本能的に、その……見ちやうことになるわけで。

——僕とは違つてきちんと女の子らしくなっている彼女たちを。

ひとりひとり違う体つきの……かがりとゆりかなんかはぜんぜん違うんだけど。

けどこれは目の劇薬だ。

えぐり取つてしまいたいほどの罪悪感だ。

目が覚めたら全力で忘れて、忘れられなかつたら日帰りで一般人に座禅させてくれるお寺行つてあの木の棒で叩いてもらおう。

幼女だろうと煩惱があれば打ち付けてくれるだろう。

控えめに言つて死にたい。

このまま突然死したくなつてきた。

死んだ後のことなんてもうどうでもいいし。

もう思考をしたくない。

だつてこの子たちと次に会うときが苦痛この上ないんだから。

ひとまわりも年下の子たちの裸を……夢とはいえ意図的じゃないにしても妄想しちやつたなんて……それも細かく隅々まで。

いくら幼女な僕の肉体とか興味本位で眺めてみたそういうのから妄想したとは言っても、女の子の見ちゃ行けないところを至近距離でじっくり見させられるつてのは行けないんだ。

冒涇だ。

……もし忘れられなかったら、せめてもの気持ちとして彼女たちの言うことを何でも聞こう。

ゆりかには頼まれていた24時間耐久の映画とかアニメの鑑賞で、かがりには好きなだけの着せ替え人形、りさりんさんはグチに付き合うのと、さよは一緒に読書。

さつきさんは……こっちの僕は現実ではまだこの体で会っていないけど、きつとその内に。

「……………」

いや、でも……少し変だな。

だって僕は僕以外の……幼女だとは言ってもぎりぎり女の子な僕自身の体以外に女の子の裸なんて直接目にしたことがないのに、どうしてここまではつきり……？

「っ!？」

唐突に視界がぶれて目の前が砂嵐みたいになる。

白黒になったり虹色になったりひとつの色しか見えなくなったりモザイクになったりして、まるでこ◆う◆い◆う◆も◆の◆ばっかりになって。

そしうてかろうじて見えていたみんなの裸体が完全に消えてほつとしたと思ったら、今度は空の中のなにかに吸い込まれるようにふわふわと引つ張られるような感覚で包まれて。

なにか白い／黒い球体？

それとも放射線状のなにか？

あるいははずまき。

……………。

そういうものが無数にどこを見ても上も下も前も後ろも泡だらけ

な炭酸の中にいるような感じになっていって、ぱちぱちとしていて、そういうのがいきなりふわっと襲いかかってくるような感じがしたから動かない体を動かそうとしていきなり動けて、それでぎゅっと体を丸めて目をつぶってしやがみこんで。

ぷつぷつぷちぷちという音が——唐突に消えた。



「……………」

光と音と五感がまとめて刺激されているような不快なような心地良いようなわけのわからない感覚が僕の中を通過することしばらく、まだ何かあるのかもって思って少しばかりじーっとしていたけど、どうやらその気配はない。

というよりは何もない……みたい？

まぶたの裏から見ると限りには明るさも常識的で、耳から手を少しだけ離してもそれなりに静かみたいで。

だから僕は、開いたとたんにもまぶしいのがまた光ってきたりしないかってゆーつくりと目を開いていって。



———そうして、次に目に映ったのは。

……くるくると飛んでいる白い鳥たちとその奥のもくもくとした雲と、そのはるか先の水色に近い青空。

それがみんな水平線に乗っかっていて。

その1本の線の下のはみまではみんな、透き通って緑がかかった……エメラルドグリーンっていうんだっけ、そんな海の水で埋め尽くされていて。

空からは鳥たちの声とたまに吹く風の音、遠くからの波の鈍い音や
なんだか分からないけど大きいなにかの音、近くからは規則的に波が
砂を薄く覆ってから少しだけ引つ張りながら引いていく音。

つまりはどこかの海の砂浜の光景の中に僕はひとりでしゃがんで
うずくまっていた、……らしい。

「……………」

振り向いてみれば見たこともない、けどひと目で南国だってわかる
ような植物がわんさかと生えていて。

そのもつと奥のほうには低いながらもいくつかの山がそびえてい
て。

ということとはここは少なくとも南の島……かどうかわからないけ
どそんな雰囲気のところだ。

「ぴっ!」

不意打ちで足に冷たい感覚が来て口から漏れた僕の声が空まで響
く。

どうやら波打ち際よりも少しだけ海の方にいたらしい。

あわてて何歩か下がる。

たしたし、と砂を踏みしめる音。

……………あれ、はだしだ。

けっこうに熱い砂の感触が、濡れちやつたからか指のあいだに張り
付いている砂の感触が、さっきの冷たい海の感触が、指の股に残って
いる。

「……………」

さっきまでと違って今度は体の感覚があつて動かせて、視点も感覚
もは完全に僕自身。

さつきみたいに近いところにあるスクリーンから僕とそのまわり
を見ていたようなのは別物だ。

それにびっくりすると今みたいな情けない声が出るのっついていつも
の僕だしな。

「……………??」

ぼーっとしていてもなにも起こらないみたいだからちよつとだけ

さくさくと砂を歩いて、さつきまで立って……うづくまっていたところへ戻ってちよつとだけ水を触ってみる。

……冷たい。

「……しよっぱっ」

あまりのしよっぱさで何度かぺっぺつと吐き出してなんとかツバで中和された感じの口の中は、まるで夢じゃないみたいに関実感がある。

ちよつとじやりじやりするし。

砂が入っちゃつたらしい。

やだなあ……。

もういつかいしよっぱくなりながら口の中をすすいで立ち上がると、脚からおしり、背中、髪の毛へと重力を感じる。

一緒に視界も砂浜すれから地上1メートルへと上がり。

「……」

……明晰夢って、こんなにはつきりするものなんだろうか。

さつきまでのでも充分以上にクリアだったっていうか現実とさほど変わらない感じだったのに、これじゃまるで完全に現実じゃないか。

……なるほど、そりやあ明晰夢に躍起になる人がいるわけだ。

これだけ五感があつて好きに動けるってことは、その……訓練次第でお望みのシチュエーションを作り出せばいくらでも好き放題できるし。

もしどんな場面でも作り出せるってなれば、普通の人ならいろんな欲望があるわけだから。

さく、さく。

もやもやとしているまま突っ立っていたらしい僕の後ろの方から、なにか……いや、人の足音が近づいてきて。

でもそれを前もって分かってたらしい僕は別に怖かったりしなくって。

「……ありや？　あなた、もしかして」

振り向いた先には……腰までの長い髪の毛を僕と同じようにだら

んと流すようにしていて、不思議な感じの幾何学模様の入った服を着
ていて、背が高くつて、でも……服のせいもあるんだらうけど……で
も、胸と腰回りからスレンダーって感じで。

……まるで「今の僕を色違いにしてからをそのまま成長させたよう
な女の子」が、けど今の僕とは違つてくりくりつとした感じの濃い色
の目を向けている、……中学生くらいの女の子がいて。

遠い南の島の砂浜に僕みたいにぽつんとふたりきりになっていて。

「もしかして……『響』……なの……?」

「……さあ?」

そんな彼女も僕も、おんなじようにかしげた頭からさらさらと髪の毛が風に吹かれるのに任せて立っていた。

「ちゃんどついて来てね？」

「……………」

「返事は？」

「はい」

夢の中なのに、いつものごとく年下なのに背が高い女の子に年下として手を引かれてうねうねうねうねとした道をずーっと歩き続ける。

夢の中なのに。

夢の中くらい好きにしたいんだけど身長差はトラウマになっているらしい。

でもお姉さん精神みたいなのを發揮している女の子を振りほどくのは不可能だっていうのも知っているから、ちよつとだけでもやつとしながら引つ張られるのに任せて……前の僕ならまだしも今の僕じゃあ現実では絶対にムリな距離を、かなりの速さでさくさくさくさくとひたすらに歩く。

この辺の記憶はどこのをくつつけてるんだろうなーとか思いながら歩く歩く。

そのうちに握られた手を真横に持っていていかれてときどき僕の肩がその子の腕に当たるポジションに。

僕の肩が黒髪の子の二の腕くらいだからやっぱり背丈の差は圧倒的。

僕はいつになったら対等な相手と巡り会えるんだろう。

「ねえ、聞いている？」

「うん、聞いている」

「ほんとー？」

「本当だよ」

ちよつとも思いに沈もうとすると敏感に察知されるけどいつもの会話術で乗り切る。

だってこの子どうでもいいことしか話してないっばいし、夢の中の存在だし。

もつと怒る。

めんどくさい系のJCさんらしい。

女の子って躁鬱激しいよね。

見た目はゆりか以上かがり未満なのに、中身は足して3か4で割ったような年齢くらいなのかもな。

まるで今の僕とは正反対だ。

またまた怒り出さないようってなるべく顔をうかがいながら受け答えをしながら、さらにそれから脚が疲れないのをいいことに延々と歩かされ、ガイドされる。

人の少ない観光地とかで説明して回ってくれるボランティアの人に絡まれちゃったときとかこういう感じだったなあ……その記憶を使っているのかな、これ。

これだけのペースで歩き続けても息さえ弾んでいないのを見ると、僕と同じようにこの子も疲れないらしい。

まあ夢だしリアリティなんてどうでもいいもんね。

おかげで口も舌もくるくると回っていて止まる気配はない。

「ねえ」

「聞いているよ」

「なら良いわっ、それでね……」

人工物といえ木と藁で作られたものしかなかった砂浜を過ぎ、軽い丘のあたりからはじめてだんだんと石へ、そしてなめらかな感じの不思議な材質でできた道へと合流し。

丘を越え。

山を越え。

……山？

……山だ。

歩いて山越えしちやつたんだ。

たいして高くなかったし視界が開けていたから忘れていたけど何にも意識しないで峠を越えていて、もう下りだ。

だからか植生も道の両側にいろんな種類の見たことがない木々と花とかが、等間隔に植えられている人工的なものになっているし。

そのまま下るかと思っただらまた登っているうちにごっごっして山とかも次第に小さくなつて行つて視界をさえぎるものがなくなつてきた……と思つたら今度はいろんな建物。

みんなわりと新しいみたいだけど、でも道とおんなじでやっぱりコンクリートと木とアスファルトと金属を混ぜ合わせたみたい不思議な感じの材質でできているのを、見たことのない感じの建築様式を興味深く見続けて。

でもやっぱり大半の家は色も塗っていないのが多い木造。

ひとことで表してみるとファンタジーっぽいけどリアルっぽい景色？

なんだかよくわからない。

けど、こういうの大好き。

だからこんな夢見ているんだろうけど。

「……着いたわ！　ここの中！　さあ入って入って！」

「だから転びそうになるからいきなり」

「あ、ちよつとそこに立って？　……クリア。　大丈夫ね、まああたりまえよねっ」

「……………」

……………まあ女の子っぽくなるほどに人の話聞かないのはもう諦めるしかないというか女性ってそういう生物だつてこの半年で諦め尽くしたから……。

なんかひとときメタリックで平面だけのばかりでかい建物に入ったと思つたら、あちこちの扉のそばで……たぶんこれSF映画の要素も入ってきてるんだろうな、指を適当に動かしたりしているお姉さんつ子を片目に、さつきよりもちよつとだけわくわくしながらぼーっと突っ立つ。

さつきよりはずっと楽しい。

僕だつて景勝地とかをぐるって回る遊歩道も好きだけど、それはそれとしてやっぱり大きな遺跡とかの方がその場に居て楽しいんだ。

それにしても随分遠かった気がする。

夢なんだからそう感じているだけで実際にはほとんど時間経って

いないんだろうけどな。

夢って実はそんなに長く見ていなくてレム睡眠っていう規則的に来る短い時間帯限定で、しかも夢の中の時間は現実とは違って物理に縛られないから相当な早送りで見ているらしいし？

だからあつという間に……今までの経験から体感で10キロ以上20キロ未満くらいの、普通に歩いたとしたら休み休みでも何時間かかかるくらいの距離をお日さまがたいして移動しないうちにたどりついているわけだし。

いつもだつたらこうは行かない。

元の体だつたらまだしも……戻らないかなあ。

いや、こんな夢わざわざ見ているんだからひよつとしたらあり得るかも？

だとしたらいつもみたいにだぶだぶな元のシャツとぱんつだけっていう寝るときの定番の格好にしておけばよかった。

昨日に限ってはいろいろあつて白い少女用のワンピースだし。

……ホワイトローリータを着た成人男性。

それも、特に女装とかしているわけじゃないのが寝ている場面。

「うげえ」

「？」

想像しただけで吐き気もするし、なにより目覚めがきつとぱつぱつでびりびりと服をはじけさせながら痛みで迎えることになるっていう想像で激しくげんなりした。

もう半年もひげさえ剃っていないし剃れなかったものだから、それはもうひどいことになっていないこと間違いない。

でもやつぱり元の……これまで慣れ親しんできて、子ども扱いも女の子扱いもされない女の子じゃないごく普通の男が嬉しいんだけどな。

「……………終わったわ、それじゃ『響』こつちよ」

「はいはい」

「ちよつと、『はい』は一回なのよっ…」

「はい……………」

危うく口答えをしようとしてしまった。

ぐつと抑えられた僕はえらい。

慣れているともいう。

もう少し慣れと自制心が足りなかったらちよつとだけ言い返して、それで怒りだしたこの子をなだめるのにまた何分も費やす必要があつただろう。

その心配は今の僕には無い。

男は何も言わないでいる自制心。

これあるのみだ。

他には何もない。

女性相手に男は無力なんだ。

そんなことをぼんやりしていると離されて楽になつていたはずの
手が握られる。

機械的なものを操作しているときだけは置いてきぼりにしてくれて嬉しかったんだけど、それ以外はやっぱり指を組まれて有無を言わずにどんどんと中の方へと案内されていく。

指、絡める必要まではないんじゃない……？

でも女の子だからこういうもんなのかも。

進む家に歩く音も金属的なものに変わっていて、映画とかでよく見るような感じになんかこう、なにかしらの基地の中とかでかい船の中とかそんな感じの作りになってきていて退屈しない。

けどときどきやたら古い感じの作りとか材質とかあるし、なによりも書かれているプレートとかの字がひとつも読めない。

海外をうろついてたときに見て回った石造りの古い遺跡とかと未来を舞台にした映画の中の世界がほどよくミックスされている様子。

楽しいからいいけど。

こういう未知の空間ってロマンがあつてわくわくするし。

どうせなら初めからこんな感じの夢なら良かったのに。

ついでに言えばこういうところをひとり延々とただ黙って静かに冒険できるんだつたらもつともつと良かったのにな。

それなら何時間でも潜つていられる気がするし。

ホラー展開にさえならなければ。

でも夢だから文句言ってもしょうがない。

しよせんは夢なんだ。

狭い通路を進んだと思ったら倉庫的な空間が広がる。

工場みたいな、けど機械はそんなに多くないっていう機能性しか考えられていない空間。

もちろん電気は蛍光灯とかじゃなくって壁全体が光っているような映画とかでよくあるやつ。

僕こういうの好き。

隅まではつきりと見えてちらほらと機械とか箱とかアームとかがあるけど、別に怖い感じは受けないし。

なんとなくだけでも映画で闇の取引されてる感じ。

自然物しか無い浜辺から延々と歩いて不思議な町見たと思ったら人工物しか無い工場。

一貫性も論理性も脈絡もあつたものじゃない。

夢だつて分かつてないとおかしくなりそう……。

扉開けたらお次は海の中とか空とか宇宙とかファンタジックな生きものが出てくるとかそういう唐突さが無いんだったら、まあそれなりに楽しめるってやつだ。

ロジックは大事。

女の子の会話みたいな支離滅裂なのはどうも苦手だ。

耐性は着いたって言っても苦手なものは苦手なんだ。

その辺は女の子たちには分かかっていて欲しいところ。

「ちよつと待ってて？ ごめんね？ 何回も」

「いや別に」

「たぶんこのへんに………あ!!!」

……イヤな予感がしたと思ったら耳もとででっかい声でキーンとなる。

………この子のモデルは絶対にくるんさんだ。

歩いていて「いいもの」を見つけたときのくるんさんとおんなじだもん。

ほら、夢の中で秘められた自分と合体って定番だし……って、さすがにゆりかに影響受けすぎだな。

「ちゃんどついて来てね？」

「……………」

「返事は？」

「はい」

夢の中なのに、いつものごとく年下なのに背が高い女の子に年下として手を引かれてうねうねうねうねとした道をずーっと歩き続ける。

夢の中なのに。

夢の中くらい好きにしたいんだけど身長差はトラウマになっているらしい。

でもお姉さん精神みたいなのを發揮している女の子を振りほどくのは不可能だっていうのも知っているから、ちよつとだけでもやつとしながら引つ張られるのに任せて……前の僕ならまだしも今の僕じゃあ現実では絶対にムリな距離を、かなりの速さでさくさくさくさくとひたすらに歩く。

この辺の記憶はどこのをくつつけてるんだろうなーとか思いながら歩く歩く。

そのうちに握られた手を真横に持っていていかれてときどき僕の肩がその子の腕に当たるポジションに。

僕の肩が黒髪の子の二の腕くらいだからやっぱり背丈の差は圧倒的。

僕はいっつになつたら対等な相手と巡り会えるんだろう。

「ねえ、聞いている？」

「うん、聞いている」

「ほんとー？」

「本当だよ」

ちよつとも思いに沈もうとすると敏感に察知されるけどいつもの会話術で乗り切る。

だってこの子どうでもいいことしか話してないっばいし、夢の中の存在だし。

でも僕は相当な子供扱いをされている模様。

まあいつもの通りにちっちゃいもんなあ……少なくともぱつと見
で最低でも中学生って見ることができるとこの子よりはずっとな。
もう慣れたけど。

夢の中だし、もう僕のこととは肉体年齢相応の小学生でいいや。

夢の中くらいは正直になろうって思うし。

僕が自覚して知覚して実感してもいるこの肉体年齢を僕の作り出
した夢の中でごまかすことなんて不可能だろうし。

……だけどせめて夢の中でくらいは元の体か……せめてこの子く
らいに育っている、僕が成長できた姿を自慢したいところだった。

夢だったら念じたりしたら変わるかも？

「むーん」

「どうしたのよ『響』……くすつ。 そういうとこ、ホント響そっくり」

念じたけどムリそうだった。

そもそもイメージ力が不足しているらしい。

あとはそうなりたいてっていう強い意思も。

今の僕はこういううちっこいものだって思い込んじゃってるから
なあ……。

「それでね、あのとんがってるのが島いちばんのお山で、そのふもと
……あ、わかる？ ふもとって。 そ？ そのお山の手前に広がって

いるのが島で2番目に大きい町で——……ねえ聞いている？」

「うん」

「んでね、資材が追いついてないからこのへんはまだかんたんな木造
の家がほとんどでね？ ……聞いてて理解できてる？ 学校の先生
とかの話と違って」

「わかっているよ。 さつきから言っているけど僕は大人で」

「ならいいの！ 『響』は私よりも年下でしょ？ ムリしなくつてもい
いの」

「……………」
何回言っても僕が年下って決めつけられるらしい。

話を聞かないと怒る、聞いても怒る、でも答えが意に介さないと

もつと怒る。

めんどくさい系のJCさんらしい。

女の子って躁鬱激しいよね。

見た目はゆりか以上かがり未満なのに、中身は足して3か4で割ったような年齢くらいなのかもな。

まるで今の僕とは正反対だ。

またまた怒り出さないようってなるべく顔をうかがいながら受け答えをしながら、さらにそれから脚が疲れないのをいいことに延々と歩かされ、ガイドされる。

人の少ない観光地とかで説明して回ってくれるボランティアの人に絡まれちゃったときとかこういう感じだったなあ……その記憶を使っているのかな、これ。

これだけのペースで歩き続けても息さえ弾んでいないのを見ると、僕と同じようにこの子も疲れないらしい。

まあ夢だしリアリティなんてどうでもいいもんね。

おかげで口も舌もくるくると回っていて止まる気配はない。

「ねえ」

「聞いているよ」

「なら良いわっ、それでね……」

人工物といえ木と藁で作られたものしかなかった砂浜を過ぎ、軽い丘のあたりからはじめてだんだんと石へ、そしてなめらかな感じの不思議な材質でできた道へと合流し。

丘を越え。

山を越え。

……山？

……山だ。

歩いて山越えしちやつたんだ。

たいして高くなかったし視界が開けていたから忘れていたけど何にも意識しないで峠を越えていて、もう下りだ。

だからか植生も道の両側にいろんな種類の見たことのない木々と花とかが、等間隔に植えられている人工的なものになっているし。

そのまま下るかと思っただらまた登っているうちにごっごっして山とかも次第に小さくなつて行つて視界をさえぎるものがなくなつてきた……と思つたら今度はいろんな建物。

みんなわりと新しいみたいだけど、でも道とおんなじでやっぱりコンクリートと木とアスファルトと金属を混ぜ合わせたみたい不思議な感じの材質でできているのを、見たことのない感じの建築様式を興味深く見続けて。

でもやっぱり大半の家は色も塗っていないのが多い木造。

ひとことで表してみるとファンタジーっぽいけどリアルっぽい景色？

なんだかよくわからない。

けど、こういうの大好き。

だからこんな夢見ているんだろうけど。

「……着いたわ！　ここの中！　さあ入って入って！」

「だから転びそうになるからいきなり」

「あ、ちよつとそこに立つて？　……クリア。　大丈夫ね、まああたりまえよねっ」

「……………」

……………まあ女の子っぽくなるほどに人の話聞かないのはもう諦めるしかないというか女性ってそういう生物だつてこの半年で諦め尽くしたから……。

なんかひとときメタリックで平面だけのばかりでかい建物に入ったと思つたら、あちこちの扉のそばで……たぶんこれSF映画の要素も入ってきてるんだろうな、指を適当に動かしたりしているお姉さんつ子を片目に、さつきよりもちよつとだけわくわくしながらぼーっと突っ立つ。

さつきよりはずっと楽しい。

僕だつて景勝地とかをぐるぐるって回る遊歩道も好きだけど、それはそれとしてやっぱり大きな遺跡とかの方がその場に居て楽しいんだ。

それにしても随分遠かつた気がする。

夢なんだからそう感じているだけで実際にはほとんど時間経つて

いないんだろうけどな。

夢って実はそんなに長く見ていなくてレム睡眠っていう規則的に来る短い時間帯限定で、しかも夢の中の時間は現実とは違って物理に縛られないから相当な早送りで見ているらしいし？

だからあつという間に……今までの経験から体感で10キロ以上20キロ未満くらいの、普通に歩いたとしたら休み休みでも何時間かかかるくらいの距離をお日さまがたいして移動しないうちにたどりついているわけだし。

いつもだつたらこうは行かない。

元の体だつたらまだしも……戻らないかなあ。

いや、こんな夢わざわざ見ているんだからひよつとしたらあり得るかも？

だとしたらいつもみたいになぶだぶな元のシャツとぱんつだけっていう寝るときの定番の格好にしておけばよかった。

昨日に限ってはいろいろあつて白い少女用のワンピースだし。

……ホワイトローリータを着た成人男性。

それも、特に女装とかしているわけじゃないのが寝ている場面。

「うげえ」

「？」

想像しただけで吐き気もするし、なにより目覚めがきつとぱつぱつでびりびりと服をはじけさせながら痛みで迎えることになるっていう想像で激しくげんなりした。

もう半年もひげさえ剃っていないし剃れなかったものだから、それはもうひどいことになっていないこと間違いない。

でもやつぱり元の……これまで慣れ親しんできて、子ども扱いも女の子扱いもされない女の子じゃないごく普通の男が嬉しいんだけどな。

「……………終わったわ、それじゃ『響』こつちよ」

「はいはい」

「ちよつと、『はい』は一回なのよっ…」

「はい……………」

危うく口答えをしようとしてしまった。

ぐつと抑えられた僕はえらい。

慣れているともいう。

もう少し慣れと自制心が足りなかったらちよつとだけ言い返して、それで怒りだしたこの子をなだめるのにまた何分も費やす必要があつただろう。

その心配は今の僕には無い。

男は何も言わないでいる自制心。

これあるのみだ。

他には何もない。

女性相手に男は無力なんだ。

そんなことをぼんやりしていると離されて楽になつていたはずの
手が握られる。

機械的なものを操作しているときだけは置いてきぼりにしてくれて嬉しかったんだけど、それ以外はやっぱり指を組まれて有無を言わずにどんどんと中の方へと案内されていく。

指、絡める必要まではないんじゃない……？

でも女の子だからこういうもんなのかも。

進む家に歩く音も金属的なものに変わっていて、映画とかでよく見るような感じになんかこう、なにかしらの基地の中とかでかい船の中とかそんな感じの作りになってきていて退屈しない。

けどときどきやたら古い感じの作りとか材質とかあるし、なによりも書かれているプレートとかの字がひとつも読めない。

海外をうろついてたときに見て回った石造りの古い遺跡とかと未来を舞台にした映画の中の世界がほどよくミックスされている様子。

楽しいからいいけど。

こういう未知の空間ってロマンがあつてわくわくするし。

どうせなら初めからこんな感じの夢なら良かったのに。

ついでに言えばこういうところをひとり延々とただ黙って静かに冒険できるんだつたらもつともつと良かったのにな。

それなら何時間でも潜つていられる気がするし。

ホラー展開にさえならなければ。

でも夢だから文句言ってもしょうがない。

しよせんは夢なんだ。

狭い通路を進んだと思ったら倉庫的な空間が広がる。

工場みたいな、けど機械はそんなに多くないっていう機能性しか考えられていない空間。

もちろん電気は蛍光灯とかじゃなくって壁全体が光っているような映画とかでよくあるやつ。

僕こういうの好き。

隅まではつきりと見えてちらほらと機械とか箱とかアームとかがあるけど、別に怖い感じは受けないし。

なんとなくだけでも映画で闇の取引されてる感じ。

自然物しか無い浜辺から延々と歩いて不思議な町見たと思ったら人工物しか無い工場。

一貫性も論理性も脈絡もあつたものじゃない。

夢だつて分かつてないとおかしくなりそう……。

扉開けたらお次は海の中とか空とか宇宙とかファンタジックな生きものが出てくるとかそういう唐突さが無いんだったら、まあそれなりに楽しめるってやつだ。

ロジックは大事。

女の子の会話みたいな支離滅裂なのはどうも苦手だ。

耐性は着いたって言っても苦手なものは苦手なんだ。

その辺は女の子たちには分かかっていて欲しいところ。

「ちよつと待ってて？ ごめんね？ 何回も」

「いや別に」

「たぶんこのへんに………あ!!!」

……イヤな予感がしたと思ったら耳もとででっかい声でキーンとなる。

………この子のモデルは絶対にくるんさんだ。

歩いていて「いいもの」を見つけたときのくるんさんとおんなじだもん。

ほら、夢の中で秘められた自分と合体って定番だし……って、さすがにゆりかに影響受けすぎだな。

金髪と赤髪が黒髪に合流してひそひそひそひそと話し合っている。

そして夢の中でもひとりぼっちにされる銀髪な僕。

……いや、こーやってほどよい距離感が保たれているっていうのが好きなんだからいいんだけど。

むしろ集合時間以外はぼんやりさせておいてほしいんだ。

「いえ、でもそれは—」

「でもでもっ、だって現にこーして『こっち』にいるし。 ゆーれーとか思念体とかじゃなかったよ？ 触れたしあつたかかかつたし良い匂いだったし」

「ゆーれーとか怖いこと言わないでよアメリカちゃん……」

女の子の相談してるところって何十回も見てきたけど似てるよなあ。

こうして見てみるとみんなほとんどおんなじような……ちよつと硬めな素材でできたコートみたいな、だけど涼しそうな証拠として生地は薄いらしくって光が少し透けている感じの春コートみたいなものを着ているらしい。

これはきつと、かがりに連れ回されているときにマネキンが来ていた服かなんかを僕の無意識がファンタジックな模様とかつけてアレンジしただけなんだろうなあ。

その証拠に3人とも髪の毛の色こそ3色カラフルだし、でも僕と同じような感じにだらんと伸ばしたままで僕と同じようにちよつとだけ短い毛がはねているところがあるっていうのも変わらない。

体つきも顔も僕の成長後の理想をほぼ再現した感じだから文字通りの色違いって感じだしなあ。

理想とはいっても今の理想だけど。

さすがに大人になるのならこれじゃまだまだ足りないし。

一応はかがりみたいに世話焼き……お姉さんぶりたがる黒と、その

黒と仲がよさそうな赤、それと引つ込み思案なのかちよつと腰が引き気味な金、と性格は違うみただけけど誤差の範囲でしかない。

まるでゲームの色違い程度の違いしか無いもんな。

ぱつと見てわかりやすいのはいいんだけど……もうちよつとこう、違いとか作れなかつたんだろうか僕の脳みそ。

みんなでいつもの僕みたいにぼけーつと立っていたら色以外では見分けつかなさそうだし。

これが僕の想像力の限界なんだろう。

「それじゃあ、あなたはもしかして……？」

話が終わったのか黒よりも動きが大きい赤がにじり寄ってくる。

ちよつとつり目っぽいつて思ったけど違って、ただ目もつときらきらしてる感じつてだけか。

「え、う………うそ………じゃないの、ほんとうに………う。」

もはやへっぴり腰つて感じの金色が赤に隠れて僕を見てくる。

僕よりもまぶたが重そうな感じでけど眠そうじゃないのはきつと、ちよつとは成長してほつぺたがしゅつとしているからそう見えるだけ。

「そっなの!!」

「!？」

どんつと衝撃を受けてびくつてしたら……けつこう離れていたはずの僕に体当たりをかましていて後ろから抱きつかれていた様子。いつの間にか後ろに回り込まれていたらしい。

そしておもむろに僕の肩へ彼女の両手の、僕の背中へ彼女の……お腹から胸の、僕の頭の上には彼女のあごの重量が乗ってくる。

ああうん、これはかがりやりさりんの感覚を再現してるだけだな。

女の子つて本当にべたべたしたがるよね……男同士じゃありえないくらいに。

「重いよ……」

「ふふふんっ！ 私たちは『響』よりもずーつとお姉さんだからねっ」

重いつて言っても怒らない。

……この子本当に女の子？

あごが頭のとっぺんをぎりぎり痛くない感じに押し込んできて、ちよつとだけある感じの胸がうなじを包んでくる。

香ってくるのは今まで……あの4人とお隣さんくらいだけど……今井さんとかもあるか……とにかく僕の限られた経験の中でもまだ嗅いだことのない海の香りって感じの香り。

海外の人の香水とか日焼け止めって独特の匂いしてるけどちよつどこんな感じ。

僕この匂い好きかも。

あとでシャンプーの銘柄をいやいやこれ夢だから僕の妄想だから危ない危ない、ついいつもの思考回路になりそうだった。

「そうなのよ！ この子がソニア……じゃなくって『響』！ おんなじ『響』みたいなのよ!! たぶん」

ソニアって誰？

うしろからほつぺたをびよんとされてるけど僕は大人だし、そもそも夢ってことはこの子たちも僕の一部だし、怒らない怒らない。

「なんでか分からないんだけどね、だけど私がさっき通知があったから行って見たらなんと！ このぼーっとしたちっちゃい感じの『響』を北の海辺で見つけたのよ!! すごくない!!」

「え、でも、それって……」

拾得物とか保護した小動物みたいな扱いをされているのはきつと、この子のモデルになったかがりのせい。

起きたらもう一緒に服を買いに行ったりはしないって……もちろんムリだっただけわかってるけど彼女にこそうメッセージを飛ばして憂さ晴らしをしないと。

それくらいはしても良いだろう。

いつも世話を焼いてあげてるんだからさ。

それにこういうもやもやって全部1個1個の積み重ねなわけで、つまりはみんなかがりのせいだろうし。

とにもかくにもあの中身が詰まっていなないメロンが悪い。

脂肪だけは詰まっていて単体でも重いけど。

とにかくあの子が悪いと思ったら悪いんだ。

僕は悪くない。

「でも、やっぱりおかしいよ……いくらなんでもそんなのあるはずが」「そうよねー、あとこんだけちっちゃくなってるのも変だし。それじゃあまるで『響』がこっちに来たとき………あ、ダメだったっけ言っちゃ?。」

「止めといたほうが……」

主語と目的語を省略する仲の良い女の子たち同士の会話が続いていくけどもう慣れてる。

僕は興味ないからどうでもいいけど。

話し振りからして僕は犬とか猫扱いらしく、頭上でなにやらを相談しつつ代わる代わる3人におんなじようになで回された。

ちなみに体のバリエーションもないらしく、みんなおなじくらいの身長で胸もおなじくらいの大きさだった。

抱きつかれ慣れていると背中とかうなじの感覚でだいたいの大きさがわかるしなあ……悲しいことに抱きつかれる経験だけは豊富だから。

……胸はともかく身長、せめてこの子たちくらいあればなあ……。

僕の頭はどうも中学生にとってちょうど置きやすい位置にあるらしいし。

みんなによく手とか置かれるしな。

縮んだりほしないってわかってはいても気になるものは気になる。

『響』を連れてくる途中に考えたんだけど……」

「それしかないかなあ……?。」

「うーん……難しいねえ……」

と思っただらもういつかい順番に後ろから抱きしめられるツアーらしい。

やわらかいし温かいしみんな似た感じの匂いするからいいけど。

この子たちが現実にいる年下の女の子たちじゃないって分かっているから罪悪感とか無しにされるがまだ。

おんなじように髪の毛の手入れで苦労しているはずの、背が高いぶんだけ髪の毛もさらに長いはずのこの子たちは撫でるときにくしや

くしゃにきてきたりしないのだけが救い。

代わりに手で梳かれるから地肌をくすぐられる感じになっているけど。

頭のとっぺんの毛って短いのかあるしくせつ毛たちは跳ねやすいもんだから、いちど梳かしたらなるべく触りたくないし……これ夢だったから関係ないのか。

ということはこれもまた僕がふだん抱えているストレスの一端つてことで。

……そろそろ言いたいことはちやんと言おう。

そう決心する。

だいたい僕のほうが……少なくとも中身は年上なんだし、触らせてあげているだけだし。

親しき仲になりつつあるとはいえいつつも僕が我慢している関係っていうのは子ども相手とはいえよくないだろう。

どうせ口はすぐに動かないからもぞもぞ抜け出たりしないといつまでも……だし。

撫でるのが下手だったりそこじゃないところを撫でてくる人の手からさつと身をかわす猫みたいに、スキを見て抜け出ないとならない。

「……これは一時的なものだとは思うのよ。だってここまでっていうのは予想されていなかったし。けどこれ以上のなにかとかかわらないじゃない？ だから念のため、ふたりのどっちかでもいいから直接報告して連れてきてくれる？ タチアでもノーラでもどつちでもいいから」

なにやら黒髪の子のトーンが下がっている。

あれ、なにか僕怒られるようなことしかしたっけ？

ああいや、これは怒っているほうのトーンじゃなくて大切に内緒な話をするときの感じか。

「……………」

「なんか不機嫌そう……？」

『響』もおんなじなのねえ」

途中から耳を澄ませた感じだと、どういう話の流れだったのかは聞いていなかったからはっきりとわからないけど……どうやら僕の身柄をどうこうするって方向らしい。

僕がいつ目を覚ますのかってことかな？

早く起こして欲しいっていうのがついに夢の進行に反映し出したか。

いい傾向だ。

醒めない夢とか悪夢でしかないもんな。

「なんだつたらあなたたちに預けて私が行ってきてもいいんだけど……」

「でも私、『響』はアメリカ、あなたと一緒にだったんだからあなたはそばにいたほうがいいと思うよ？」

「そう……だね、誰かが話しかけていたほうがきつと気が楽だし……私じゃうまくお話しできないからなあ」

でもなんで僕はいつもお世話される側なんだ。

たまにはお世話する側でも良いつて思うんだけど？

「なら別にタチアでもいいんじゃないの？」

「え、いいの？」

「ダメだよ、タチアちゃんだとぐいぐい行き過ぎちゃうでしょ？」

「あ……」

「やっぱりアメリカちゃんがいいよ。この中でいちばんのお姉さんだし」

「ぐぬぬ……」

アメリカ、タチア、ノーラ。

なんでここへ来て洋風な名前なんだろう。

まったく聞き覚ええない感じの響きだから覚えづらいんだけど。

とりあえずひとりだけ覚えよう、黒はアメ……黒飴……アメリカとよし。

お姉ちゃんぶるのが黒アメさん。

今はそれだけ充分だ。

人の顔と名前を覚えるのが苦手な僕は人がたくさんいるときはと

りあえずで話しやすそうな誰か1人だけ覚えるようにしてる。

そうするとちよつとだけ気が楽になるし、話しかけなきや行けな
いときにもあわあわしなくなるんだ。

「ないとは思うんだけど、もしこのままになっちゃったら……だし」
「そうね、今日はようやくのおやすみなのにまたひとりでどつか行っ
ちやって。 どうせまた連絡つかないだろうし。 なら私とノーラ
で手分けして来たほうが早いんじゃないかな？」

「うん………そうかも。 お話しできるアメリカちゃんとタチアちゃ
ん、どつちかはここで一緒にいてあげてほしいし」

赤がタチアちゃん………じゃなくってタチアで金色がノーラか。

……夢の中なんだからもつと覚えやすい単純な名前にしてほし
かったなあ。

僕の無意識が自動生成した名前だからか案外素直に頭に入ってき
ているしそんなに問題はないんだけど。

あー、やったらに長い名前とか似た名前とかじゃなくってよかつ
た。

ほら、文学とかだとやたら長い名前の人って多いし。

「あれはもともとが奇跡みたいなことだったし………予測できないこう
いう事態も充分にありえそうだよ。 できるだけ早く伝えないと、
かなあ」

頭の上であごの動きと一緒につぶやくのが聞こえたと思ったらよ
うやく金色の………ノーラって子からのハグから解放された。

ようやくできたこのスキに2歩3歩と後ずさって、もとい前にず
さつとしてこれ以上猫の扱いを受けないようにと試みる。

普段からの学習だ。

「そう？ ならタチアは………船のほうに。 ノーラは島を回ってくれ
る？」

「ええ」

「いいよ」

金色がノーラ、赤がタチア。

黒はなんだつけ？

「私はこのへんで『響』と待っておくわね。……けっこー歩いてきたし、これ以上どつか連れ回しても困っちゃうし？ だからといってひとりにするのは私たちも不安だし。ひととおり見て回ってもいなかっただらまたここへ来てちょうだい？」

「いや僕は1人の方が」

「了解よっ！」

「はいっ！ アメリちゃんも『響』ちゃんのお世話、お願いしますっ」
「……………」

僕とタチアとノーラの声がぴったり重なって誰にも聞かれなかった。

夢の中でも僕はこうなのか……まあ現実の再現だしな。

落ち込みそうになったところでしよせんは夢だと立ち直る。

起きて覚えていたら発声練習とかも毎朝しようって思う。

せめて「あれ、今なんか言った？」って聞き取ってもらえるくらいには成長したい。

声って普段から使っていないとどんどん小さくなるもんだし。

でも夢の中だからしようがないんだけどな。

夢の中くらいは理想の僕で居たいところだけどそれが難しいんだらうなあ。

「は……」

他人の幸せを見るとため息が出るって言うのは女の人の特徴かって思ってたけど違ったらしい。

いやまあ今の僕も肉体は女なんだし否定はできないけど他分別の理由。

心から望んでいるのが目の前で見えていると……こう、ため息しか出ないんだ。

「いいなー」ってうらやましさと「ずるいなー」っていう妬ましがブレンドされた感じ。

でも完全に現実とは違う展開をしているのを見せつけられるから「お隣さんたちにお世話されているあっちの僕」と「そうじゃなかったこっちの僕」とを別人として見るようにもなってきた。

まあ夢だし。

夢って都合良いものだし。

それでもって夢ってのはおかしいのにおかしくないもんだし……って思ったんだけど。

「……えっ」

今までののは……ちよつと思うところはあつたりはするものの、けどただの仮想的な展開だって考えていつも見ている映画とかみたいになつてと見ていられたんだけど……なんだか様子がおかしなことになつてきている。

夢の内容がおかしな方向へと転がり始めてきているっていう感触。

だって今までは「今までのこっちの僕」が経験したようなできごとを「あっちの僕だったとしたら？」って感じにIFな空想として再現していた感じしかなかったのに、なんだか……そう。

なんだか、この夏休みを終えたような時点から夢の中の展開がひとり立ちしちゃっているかのようで。

だって僕の目の前のスクリーンにはすでに紅葉を迎えた山からの

景色が広がっていて。

ということとは季節は今を……残暑を通り越して秋になっているはずで。

それもそこそこに標高の高い山の風景だからつまりは11月くらいにはなっているはずで。

だからだから今の僕からしてみたら「2か月は先を進んでいるかのようなありえない未来」へと突き進んでいることになる。

まあ夢だし、明晰夢でもこうして意識ははつきりとあったとしてもつじつまが合わないっていうのもありえるんだろうけど……だけでも今までが今までだったし、なんだかこう、もしかもしゃする。

たてるなら楽しもうとしていた作品のネタバレを不意打ちで食らっちゃったときみたいなき？

それともちよつとだけわくわくしながら引いていたクジが紙の感触とかで「あ、3等くらいの微妙なやつが当たっちゃってるみたいだな……」って分かつちやつたときみたいな、そんな感じ。

そうして……この感じは温泉かなにか。

あるいは火山の麓とかよりも上の観光地。

そういうところによくある日帰り温泉っぽいところの更衣室。

僕がひん剥かれている光景。

もちろん当然ながら全裸だ。

思わず目を背けたくなるような幼い女の子な体の上に銀色の髪の毛が腰を通り越した辺りまでさらさらと囲んでいて、周りの女の人たち……ほとんどおばちゃんとかだけ……がガン見してる。

そんな光景を「誰かの目から見ているような」そんな違和感。

その僕は珍しく羞恥心を感じているらしく……当たり前か、周りは肌をさらした女性ばかりだもんな……脚のあいだだけを隠して、指摘されてもう片手で胸も隠すっていうのを教わるようにしている場面だ。

どうしようかって戸惑っているらしい僕が貝の上にいるような格好をしてから少ししてようやく……文学少女さんがタオルを手渡ししてくれている。

◆ ◆ ◆
……それに、視界がかなり違う。

さつきまでとは違つてはつきりとしている。

しかもこの目で「今」見ているみたいにフルカラーで、やけに鮮明で。

さつきとは違つて声はぼんやりとしか聞こえていないけど、でもさつきよりも解像度的なものが上がっているようで。

「あ」

……見えちやつた。

その……3人とも、ちらちらと、そしてはつきりと。

だつてタオル……してないんだもん。

いや、タオルを体に当てては居るけど横から見えちやうみみたいな感じ。

いくら女の子同士だからつてもうちよつと隠したら……あ、男でもぜんぜん隠さない人多いからもしかして普通なのかな。

いつの間にか僕自身の視点になつてるけど、僕の視点だからこそ上も下も至近距離で、動くものだから……目がぱつと、本能的に、その……見ちやうことになるわけで。

——僕とは違つてきちんと女の子らしくなっている彼女たちを。

ひとりひとり違う体つきの……かがりとゆりかなんかはぜんぜん違うんだけど。

けどこれは目の劇薬だ。

えぐり取つてしまいたいほどの罪悪感だ。

目が覚めたら全力で忘れて、忘れられなかつたら日帰りで一般人に座禅させてくれるお寺行つてあの木の棒で叩いてもらおう。

幼女だろうと煩惱があれば打ち付けてくれるだろう。

控えめに言つて死にたい。

このまま突然死したくなつてきた。

死んだ後のことなんてもうどうでもいいし。

もう思考をしたくない。

だつてこの子たちと次に会うときが苦痛この上ないんだから。

ひとまわりも年下の子たちの裸を……夢とはいえ意図的じゃないにしても妄想しちやつたなんて……それも細かく隅々まで。

いくら幼女な僕の肉体とか興味本位で眺めてみたそういうのから妄想したとは言っても、女の子の見ちゃ行けないところを至近距離でじっくり見させられるつてのは行けないんだ。

冒涇だ。

……もし忘れられなかったら、せめてもの気持ちとして彼女たちの言うことを何でも聞こう。

ゆりかには頼まれていた24時間耐久の映画とかアニメの鑑賞で、かがりには好きなだけの着せ替え人形、りさりんさんはグチに付き合うのと、さよは一緒に読書。

さつきさんは……こっちの僕は現実ではまだこの体で会っていないけど、きつとその内に。

「……………」

いや、でも……少し変だな。

だって僕は僕以外の……幼女だとは言ってもぎりぎり女の子な僕自身の体以外に女の子の裸なんて直接目にしたことがないのに、どうしてここまではつきり……？

「っ!？」

唐突に視界がぶれて目の前が砂嵐みたいになる。

白黒になったり虹色になったりひとつの色しか見えなくなったりモザイクになったりして、まるでこ◆う◆い◆う◆も◆の◆ばっかりになって。

そしうてかろうじて見えていたみんなの裸体が完全に消えてほつとしたと思ったら、今度は空の中のなにかに吸い込まれるようにふわと引つ張られるような感覚で包まれて。

なにか白い／黒い球体？

それとも放射線状のなにか？

あるいはうずまき。

……………。

そういうものが無数にどこを見ても上も下も前も後ろも泡だらけ

な炭酸の中にいるような感じになっていって、ぱちぱちとしていて、そういうのがいきなりふわっと襲いかかってくるような感じがしたから動かない体を動かそうとしていきなり動けて、それでぎゅっと体を丸めて目をつぶってしやがみこんで。

ぷつぷつぷちぷちという音が——唐突に消えた。



「……………」

光と音と五感がまとめて刺激されているような不快なような心地良いようなわけのわからない感覚が僕の中を通過することしばらく、まだ何かあるのかもって思って少しばかりじーっとしていたけど、どうやらその気配はない。

というよりは何もない……みたい？

まぶたの裏から見ると限りには明るさも常識的で、耳から手を少しだけ離してもそれなりに静かみたいで。

だから僕は、開いたとたんにもまぶしいのがまた光ってきたりしないかってゆーつくりと目を開いていって。



———そうして、次に目に映ったのは。

……くるくると飛んでいる白い鳥たちとその奥のもくもくとした雲と、そのはるか先の水色に近い青空。

それがみんなな水平線に乗っかっていて。

その1本の線の下のはみまではみんな、透き通って緑がかかった……エメラルドグリーンっていうんだっけ、そんな海の水で埋め尽くされていて。

空からは鳥たちの声とたまに吹く風の音、遠くからの波の鈍い音や
なんだか分からないけど大きいなにかの音、近くからは規則的に波が
砂を薄く覆ってから少しだけ引つ張りながら引いていく音。

つまりはどこかの海の砂浜の光景の中に僕はひとりでしゃがんで
うずくまっていた、……らしい。

「……………」

振り向いてみれば見たこともない、けどひと目で南国だってわかる
ような植物がわんさかと生えていて。

そのもつと奥のほうには低いながらもいくつかの山がそびえてい
て。

ということとはここは少なくとも南の島……かどうかわからないけ
どそんな雰囲気のところだ。

「ぴっ!」

不意打ちで足に冷たい感覚が来て口から漏れた僕の声が空まで響
く。

どうやら波打ち際よりも少しだけ海の方にいたらしい。

あわてて何歩か下がる。

たしたし、と砂を踏みしめる音。

……………あれ、はだしだ。

けっこうに熱い砂の感触が、濡れちやつたからか指のあいだに張り
付いている砂の感触が、さっきの冷たい海の感触が、指の股に残って
いる。

「……………」

さつきまでと違って今度は体の感覚があつて動かせて、視点も感覚
もは完全に僕自身。

さつきみたいに近いところにあるスクリーンから僕とそのまわり
を見ていたようなのは別物だ。

それにびっくりすると今みたいな情けない声が出るのっついていつも
の僕だしな。

「……………??」

ぼーっとしてもなにも起こらないみたいだからちよつとだけ

さくさくと砂を歩いて、さつきまで立って……うずくまっていたところへ戻ってちよつとだけ水を触ってみる。

……冷たい。

「……しよっぱっ」

あまりのしよっぱさで何度かぺっぺつと吐き出してなんとかツバで中和された感じの口の中は、まるで夢じゃないみたいに関実感がある。

ちよつとじやりじやりするし。

砂が入っちゃつたらしい。

やだなあ……。

もういつかいしよっぱくなりながら口の中をすすいで立ち上がると、脚からおしり、背中、髪の毛へと重力を感じる。

一緒に視界も砂浜すれから地上1メートルへと上がり。

「……」

……明晰夢って、こんなにはつきりするものなんだろうか。

さつきまでのでも充分以上にクリアだったっていうか現実とさほど変わらない感じだったのに、これじゃまるで完全に現実じゃないか。

……なるほど、そりやあ明晰夢に躍起になる人がいるわけだ。

これだけ五感があつて好きに動けるってことは、その……訓練次第でお望みのシチュエーションを作り出せばいくらでも好き放題できるし。

もしどんな場面でも作り出せるってなれば、普通の人ならいろんな欲望があるわけだから。

さく、さく。

もやもやとしているまま突っ立っていたらしい僕の後ろの方から、なにか……いや、人の足音が近づいてきて。

でもそれを前もって分かってたらしい僕は別に怖かったりしなくって。

「……ありや？　あなた、もしかして」

振り向いた先には……腰までの長い髪の毛を僕と同じようにだら

んと流すようにしていて、不思議な感じの幾何学模様の入った服を着ていて、背が高くつて、でも……服のせいもあるんだらうけど……でも、胸と腰回りからスレンダーって感じで。

……まるで「今の僕を色違いにしてからをそのまま成長させたような女の子」が、けど今の僕とは違つてくりくりつとした感じの濃い色の目を向けている、……中学生くらいの女の子がいて。

遠い南の島の砂浜に僕みたいにぽつんとふたりきりになっていて。

「もしかして……『響』……なの……?」

「……さあ?」

そんな彼女も僕も、おんなじようにかしげた頭からさらさらと髪の毛が風に吹かれるのに任せて立っていた。

この体になってから食欲はかなり減った。
かなりつて言うのはぎっくりと半分くらい。

食欲自体は前くらいあるんだけど、いざ口にしてみるとすぐにお腹
がいつぱいになっちゃうっていう胃の容量の問題なんだろうね……
身長150にも届かないしね……。

だって胃の容積つてその人のこぶし大っていうし。

それならコンビニのおにぎりいつでもお腹がいつぱいになっ
ちやうのは当然。

だけどこれには抜け道があつて水分だけなら問題ないらしい。

つまりは夕方からはお酒で占められているわけだけど、その前まで
の時間っていうのはコーヒーとか紅茶とかジュースとかの飲み物で
かつての食欲に対する今のか細い食を補うような形で、ヒマさえあれ
ば適当ななにかを喉へ流し込んでいるわけで。

そういう意味では今ここで夢の中でもまたごくごくと冷たいもの
を喉で味わっているっていうのもまた……僕が現実で満たし切れて
いない本能を満足できる形で再現しているんだろう。

だって、前の僕と今の僕とで変わった行動はこのくらいだしなあ。
代償行為っていうやつ。

煙草とかお酒を止めようとするのと別の何かでストレス発散したく
なるあれだ。

とつても悲しいことだけどこれはそういうものなんだろう。

まあおいしいんだからどうでもいいか。

今回は夢の中なわけでカロリーも何もかもゼロだしな。
うん、やっぱりお酒吞めて良かった。

この体でのお酒なんて人に見つかるわけに行かないもんね。

「ふう……………」

息を止めて一気にごくごく、時間をかけてごくごく、舌とほつ
ぺたの内側と舌のつけ根と喉で……もちろんこれもまた妄想なんだ

けど、黒飴さんからもらったジュースを味わっていた僕は満足のため息をひとつ。

中身はミックスジュースっぽいなにかだ。

繊維がつぶつぶしているから外国でよくある目の前で絞ってくれるアレみたいな感じで、これもまたきつと過去の僕のすっかり忘れちゃっていた記憶を使っているんだろう。

触覚までしっかりあるんだから、そりゃあ味覚も僕を満足させるくらいはあるよなあ。

できればここにもお酒がほしいところだった。

念じれば出て来ないかなあって今でもこれにアルコール分を込めている。

今のところ、この試みは無力だけでも。

「ふいああ………」

僕に合わせて無理やりがんばっていたらしい黒アメさんことアメリさん。

このくらいの年ごろの子って呼び方に困るよなあ……の口からもまた気の抜けた音が響く。

「たっくさん歩いたもんだからおいしいわよね！　これが働いたあとの一杯ってやつよね！」

「うん、多分」

労働の後だったらお酒が欲しかったな、僕は。

「あそこはなーんにもないところだったからどっちにしろムリだったんだけど、でもあそこ……あ、『響』がいた砂浜ね？　あそこだったらきつと……じつとしてたら暑くなるけどときどき日陰とかに入ったりして気持ちいい日差しを浴びて！　そんなもって海を見ながらーって感じできつときつともーとおいしかったかも！　こんどやりましょ!!　……あ、でもー、あっちには冷蔵庫とかないし……こうして体をさざんざん動かしたあとにぐーつといっぱい飲むのもまたいいものよね『響』？」

「うん、そうだね」

夢の中だったら炭酸のしゅわつと感も味わえないかなあ。

「やっぱり？　そうよね、やっぱりあなたも『響』だものね！　そりやあそういうのもおんなじよね！」

「うん、だろうね」

飲み食いしているときなら女の子っていう生きものと一緒にいてもわりと楽。

だって意識の大半が味覚に行っているもんだから、いつもよりも雑な返事しかしなくなつて気がつかれることがないし。

だからいつもかがりにはコンビとかデパートでちよくちよく見つけては一粒ずつ食べられるようなお菓子を与えているし、りさりんさんもおんなじだし。

ゆりかには効果は薄目だけど、でもお菓子なら一緒に食べておけば若干は静かになる。

……さよは僕とおんなじタイプだからその必要はないし、こういう餌付けもとい貢ぎものをあげたことがないからわからないけど。

ほとんど会話らしい会話しなくつてもいいときまであるし、楽なのはいいことだ。

夢の中だし遠慮はいらないしって手渡されたおかわりをごきゅごきゅと一気飲みする。

「……ね、ねえ『響』？」

「なに？」

『響』はさ、そのー。……最近元気してる？」

「……………」

ろくにコミュニケーションが取れない父親か君は。

見た目が僕の成長版で色違いだしなんだか……………哀愁を感じてしまう。

ある意味僕自身を正しく正確にちやあんと反映しているとも言えるけど。

その気持ちはものすごくわかる。

久しぶりに会うと話題見つけづらいよね。

まあ僕たちは初対面なわけだけど。

「……………あ。……………つていうのもなんか変よねえ……………どう言えばいいの

かしら？　ねえ『響』？」

「どうなんだろうね」

なにが変なのかも分からないから適当に返す。

「初めまして？　それとも久しぶりなのかなあ？　かといって肝心の『響』にはそのへんのくわしいことあんまり言っちゃいけないだろうし。　うーん、これはどっちになるのかなあ」

「どうなんだろうね」

よく分からないから首をかしげておく。

「聞いている？　『響』」

「もちろん」

「あ、よかった。　それでね、えっとその、ね。　……困ってること、なんかない？　私でも……少しくらいはなにか助けになれるかもしれないし。　何かあるんなら……あるんだと思うんだけど、相談乗るわよ？」

「相談……ね」

「そうっ！　なにかある？」

「……………ん——……………」

なんだか食い気味のアメリカさん。

ずっと2人で居たから話すことがなくなってきたのか、あるいは景色っていうちよくちよく変わるものだったから話し下手だけどガイドとかして時間を稼いでいただけなのか、いろいろ飛ばしての話題は僕の悩みらしい。

なんだか自分相手のセルフヒーリングのような気もするんだけど……そもそもそれを僕の意識自身が自覚しちやっっているから意味がないし、なにより話題の変え方が下手で唐突すぎて逆に安心してきた。

でも困ったことねえ。

「……まあまずは、とりあえずはだけど」

「なにになに!?　なんでも聞いてー!」

「このよくわからない状況……それにいちばん困っているかな」

「あう……それは、ええっと……」

なんでもとかあんまり言わない方が良いと思うよ？

でも子供って「なんでも」とか「一生に一回の」とか好きだよね。

……さすがに意地悪だったかな、子供に対して。

「まあ無理ならしょうがないよ。でもここに連れてこられた理由は知りたいな。だって僕は別にあのままあのときの砂浜にいてもよかったんだし。帰る方法う知りたいかな」

僕は知っている。

夢の中で水に関係するのってイコールトイレに行きたいんだって。

物心ついてから粗相をしたことがない身としては今日も安全に過ぎたいんだ。

もし漏らしてたら？

しよげる。

だからこそ早く起きたいんだけど一向に醒める気配のない夢なんだ。

きつと漏らさないって思っておこう。

「え……えーつと……ご、ごめんね……？ それはそうなんだろうけど、けどねえ、私じゃムリなのよ。もちろん聞いてあげることではできるんだけど解決できるかどうかはちよつと……」

なんかダメらしい。

まだ起きちゃダメってこと？

気まずそうな雰囲気醸し出しはじめたアメリカさん。

「いってもしどうできるわけでもなく「でもでも」とか言いながらもじもじしつつ、僕の肩に腕を乗せながらうんうんうなっている。

「解決できるとしたら、えつと……さっきの。あ、あの子たちは私の妹なんだけどね？ あの子たちの名前は覚えてくれた？」

「な、名前……そういうのっていきなり言われると覚えていたような気がするのに吹っ飛んじやって、とっさに出てこなくなるんだ。

「あははっ、その顔！ほんつと、おんなじなんだから！いいい？元気なのがタチアでおとなしいのがノーラ！あと私はアメリカ！ちやんと覚えてね？」

「ああ……うん」

僕としては初めて聞いた名前をすぐに覚えるっていうのがムチャぶりなんだと思うんだけど、女の子つてみんなこうだからなあ……。いや、女の子つて言うより人と仲良くなるのが好きな人かな。でも、いくらがんばっても覚えられないものは覚えられない。

それに今回の場合はさらに見た目がみんなほとんど同じでまとめて会ったんだし無理でしょ。

「で、なんだっけ？」

「……………ここから出るには？」

「ああそうそう、そうだったわね！ 難しいけどとりあえずあの子たちが帰ってきてからで良い？ で、それ以外に！ それ以外で！ それ以外ですよ？」

つまり僕が聞きたいことは全部NGと。

なんでも聞いてつてわりにはとことんダメなんだね。

「それ以外で最近悩んでいることとか困っていることとか無い？ なんでもいいから言ってみて？ たとえばねー、その、えーつと。

『響』の周りで起きていることとかが面白いんじゃないかな？ お姉ちゃんのおすすめよ、おすすめっ！」

この押しの強さはこの前の山で会った人たちの再現かな？

まったくよくできていること。

これが夢だつていうんだからすごい。

でもまあ、他に何か……………か。

「……………」

「わくわく……………わくわくっ」

……………どうせここはもうじき覚めるはずの夢の中でこの子も実在しないどころか僕の意識の一部なんだし、なんだかどうも僕の無意識はストレスを抱えているらしくってある程度は吐き出さないとこの会話劇場が終わらなさそうなんだ。

ならさっさと話しちゃうか……………ただの自己対話みたいなものだけどしないよりマシなんだろうし、きっと僕の脳みそはこのことについて悩んでこんな夢見てるんだろうし。

「なら」

「!! なんでも言ってちょうだい!!」

僕の髪の毛を黒くして少しだけ大人びた……他の子もそうだけどもお肌は静脈が透けるくらいなのは変わらないみたい……まだまだ子ども、そんな彼女の顔が息がかかりそうなくらいに近くなっていたからちよつとだけ顔をそらしつつ口にする。

別にジューズと海の匂いしかしないから臭いとかじゃなくって、僕はもともと近距離は苦手だから顔を背けるんだ。

あ、隅のほうのクレーンがいくつか一斉に動いてる。
なにをしているんだろう……じゃなくって。

「……………このところ、少しだけど」

「うんうんっ!」

「自己嫌悪で参りそうになっていることがあるんだ。 アメリ、よかったですらそれについて聞いてもらえないだろうか」

「……………じ、じこけんお……………?」

「…………………………」

「と、とにかく私がなんとかしてあげる! まかせなしやいつ!

……………あっ」

「…………………………」

口を押さえて真っ赤な顔になった黒髪な僕ことアメリカさん。

「い、今のは……………そのお……………」

……………クレーンのことを考えるんだクレーンのことを。

いくらなんでもここで笑っちゃうのはかわいそう。

僕だつてそれくらい配慮はできるはず。

この子はこの子なりに真剣に僕の悩みを聞いてくれようとしてくれるんだからがんばって耐えるんだ。

それに噛み噛みなこの子を笑うってことはひいては僕自身を笑うことになるんだ。

こうしてお腹の奥に力をぐつと込めればポーカーフフェイスは保てるはず。

あ、でも噛み噛みとかかがりとの初対面を思い出すな……………やっぱり

この子の原料はあの子か。

29話 「お姉ちゃん／姉さん」 2／3

「……こほんっ！ とにかく何かイヤなことあったのね？ 会ったときからなんとなくそう思っていたの！ いいわ、しょーがないから私が相談に乗ってあげるんだから！」

噛み噛みだったのは不幸な事故としてお互いの記憶から消してそのいつこ前の会話に戻ったアメリカさん。

「うん。 まあ、……嫌なことというか何と言えば良いのか……その」
ずいっと顔を近づけてきた彼女から距離を置きながらどう話せば良いのかなって考える。

だって今の僕の状況ってとつてもややこしいことになってきくつと説明できなさそうだし。

細かくいちいち説明するのはめんどくさいし……だいたいこの子って僕が作り出した対話をするためだけの幻みたいなものだし別に「やっぱいいや」って言えば良いんだけど。

でもいつか来るかもしれないときのためにシミュレートはしておいたほうがいいかもしれない。

こういう頭を使う会話って普段から口に出して……今は脳内だけど……何回も練習しないと上手に話せないって知ってるし。

——僕がこの体になったこと。

魔法さんが確かに存在すること。

人の認識まで変えられること。

日記帳を見せながら時間をかけて話せば納得はできなくても理解はしてもらえるように説明できるだろうって思っていたんだけど、お隣さんにばったりしちやっったときのあの慌てようを考えるに動揺していたりしたらムリっぽいし。

僕は突発的なことに弱いからまた同じようなハプニングがあったとして、はたして次はちゃんと口を動かせるのかどうか非常に不安になってきたし。

「ふむ……」

「あ、おんなじクセね！ 難しいの考えてるのね！」

けど今は相手がエミュレートされたこの子だからどうせ「事情を知らない人物」っていう設定だけど全部知っているんだろうし、だったら簡単にぎっくりと……ちよつともやもやして寝落ちしたくなつた気持ちを伝えるだけでいいかな。

ちやんと説明するときのこととかはまた後でだ。

大丈夫、ただの練習。

今は真つ黒な目になつたりしないから大丈夫……。

「……僕がついてしまった嘘についてなんだけど」

「ふんふんっ」

「ずっと前からついている嘘を……止められなくて今でもつき続けているっていうのが、ここのところ辛くなってきたんだ。でも今さら嘘だつて言えないし言つたらどうなるか分からなくて……それでどうしたものか、迷っているんだ」

口を動かしながらついて出てきたような……けど、昨日の僕がああなつたのは突き詰めればそういうことだつたんだつて、すんと来るようなものだつた。

……やっぱり夢の中だからちやんと口が動くんだろうか。

「ウソ……ウソ、ねえ？」

なんだか軽いニュアンスしか込められていない「ウソ」つてのを何回も繰り返すアメリカさん。

いや、僕が言ったのは悪い「嘘」の方なんだけどなあ。

「くわしいこと聞かないとよく分かんないけど、そのウソつて『ごめん！ あれウソだつたの！』つて言えない感じのものかしらね？」

「……………」

「……『響』がそんな顔するくらいなんだから、お菓子をこつそりひとくちのつもりでぜんぶ食べちゃつたとかみたいな昨日私がした……おつとと」

うん、ほほえましいウソで羨ましい限り。

「……じゃなくて、そういう軽いものじゃなさそうねえ」

「君は昨日盗み食いを？」

「そ。昨日ね、私、ソニアが隠してたどびきりのを……………つて！」

わっ、私のことじゃなくて今は『響』のことなんだからどうでもいいでしょっ」

どうやら黒髪な僕は、夢の中ではそういう人格と過去を持っているらしい。

……この体があんまり食べられないの、もしかしてこれもまたストレスになってたり？

なんとかして解決策を見つけないとな。

ストレスって自覚ないの多いみたいだし。

そういう意味でも新鮮な自己対話だ。

「……いや、言おうと思えば言うことはできるんだ。できるんだけど……なんというか」

「なんていうか？」

近いところにあつておなじようなところの毛がぴよんと跳ねている黒髪を見ているうちに、さつきみたいにもた言葉が出てくる。

「……そうだ、これはで僕は多分……」

——顔が浮かんでくる。

ゆりか、かがり、さよ、りさ。

本来なら僕との接点がなかったはずの子たちの、顔。

「……本当のことを言って。言ったとして」

その子たちの……怒ったり泣いたりしている顔。

「僕が嘘つきで、今までのことが……なにもかもが嘘だったっていうのを知ったときの……知り合いの顔や、言われるだろう非難の声を聞くこと。それが、恐ろしくて怖い。……そうなんだと思う」

「……わかるわっ！ 私もわかるっ、その気持ちっ!!」

「近い」

両手で、僕よりちよつとだけ大きいけど僕とおなじくらいぶにぶにしているほっぺたを押しつけようとする。

僕がせっかく思っていたのを言葉にできたのにこの子はもう……。

「辛いわよねっ、苦しいわよねっ！ 分かるのよー！」

「だから近い」

柔らかいほっぺたじゃ彼女の体重を支えきれず、もう少しでおでこ

か鼻か口がごつつんしそうでひやひやする。

どうして女の子っていうのはこう、興奮するとすぐに顔をセンチ単位まで近づけてこようとするのか……男である僕にはついぞ理解が届かない感覚だ。

「少し離れてくれ」

「ひよっほひひひ」

しばらくむにむにしてやったりしてにらみ合いが続いていたけど、ふと目と目が合って彼女がフリーズする。

そうしてさすがに気がついたのか一気に顔が赤くなってきて、それからそろそろと手でガードしないで済むけどまだまだ充分に至近距離なところへ下がってくれた。

「な、なんだか暑いわねえこ」

「そうだね」

僕は空気が読めるからそう頷いておく。

落ちついたからさつき口について出たことばを反芻してみたんだかするつと自己分析がうまくいって「ああ僕はそれで昨日はなんだか情緒不安定だったんだ……」って感慨深くなっていたら、もう少しでおでこがごつんしそうな距離までまたぐいつて来てたアメリカさんのまつげまでが黒くなっていて目も明るく……あれ、こんな色◆◆だったっけこの子？

ともかくびっくりさせられたしジュースの匂いがあいかわらず鼻と口から漏れているから、あと髪の毛がひたいにかかってくすぐったいからさつきと離れてほしいところ。

「落ちついたか？ なら離れて」

「私も分かるのよ『響』っ！」

聞いていない。

僕の相談じゃなかったの？

あ、多分目的忘れてるやつだこれ。

そしてすつと息を吸うアメリをみて「あ、これうるさいやつだ」つて身構える。

「私もよくウソついて怒られるんだけどね？ でもね、ばれて叱られ

ているときよりも叱られるのってすっごくイヤなんだけど、でもでも逆に！ 逆になのよね！ 逆にばれていないときのほうがずーっとどきどきして不安なのよね！ だけど本当のこと言ってもまた怒られるだけだし、でも言わないでいるのももやもやしてイヤだしって感じでほんと、どっちにしても辛くて苦しいのよねっ!!」

「う、うん、まあ……っ」

ヒートアップするしてる人を見ると落ち着いちゃうあれ。

「やっぱりそうよね！ 『響』なら分かってくれて信じてたわ！

そうよ、あのときもあのときもいつつも……」

ウソをしようっちゅうついているらしい。

そしてだいたいすぐにはれてるらしい。

それくらいのウソならきつとみんなも分かっているから軽いんだろ
うな。

だってこの子、アメリカさんはウソをつくって言ったって……つまみ
食いを隠すとかいたずらを黙っているとか忘れ物とかをごまかすと
か……そういう感じで人を傷つけないウソしかつかなさそうだし。

つけなさそうっていうのは、かがり成分が多分に含まれているから
だろう、たぶん。

あんまり深く考えることがなさそうなのも。

僕とは対極的な存在だ。

「……………でもね？ 『響』」

うつうつしているときの僕とおんなじ表情をしていたアメリカはい
つのまにか元気を取り戻していて、ふたたび目の前にどアップになっ
ていた。

両手を突き出すしぐさで今度はちよつとだけ引いてくれたけど相
対位置は変わらないままで。

「そんなときはね、なるべく早く謝っちゃえばいいのよ！ いさぎよ
く！ 思い切って！」

「うん、でもそれができたら」

『ずっと』っていうのがどのくらいなのかわかんないけど、でも今の
私たちにとっては今がいちばん早いよ！ ソニアがそう言ったた

わ!! 『過去は変えられないけど未来は選べるんだ』って! それにいくらうまく隠せたり、たまたま気がつかれていなかっただけだったって、どうせいつかはバレて怒られるんだもの! それにそれに怒られればすつきりするし! 怒られたくないけど」

しよげている黒髪。

「怒られるあいだはとつても怖いし泣いちゃうし、後で何度かちくちく言われるけど……だからね! 私、問い詰められたりする前に白状しちゃったほうがいいの! 自分からごめんなさいするのって思いついたの! どう? これが私が編み出した鉄則よ!」

どやっとしているアメリカさん。

そもそもそういうウソをつかないようにすればいいんじゃない?

というかそういう怒られるようなことしなければ怒られる原因がないんじゃない。

そう思うけど、横道をちゃんと修正してあげるとこれは僕の嘘についての会話なんだ。

だからウソを……嘘をついたらできるだけ早くにばらしちゃうのがいいってこの子のいう鉄則っていうのは、きつと僕が気持ちの上でも頭の中でも分かっていたことのはず。

半年。

最初の出会いからっていうのは……ちよつと長すぎたから迷っていたんだ。

さすがに初めっからぜんぶまるごと嘘っていうのは、白状するにはいささか勇気が要りすぎる。

けど——今がいちばん早い……か。

「……!!!」

「?」

「……『響』がちやあんと聞いてくれるから感動してるの! 嬉しいわっ!」

なんかぶるぶるしてるって思ってたら感動してたらしい。

……もう少し人の話も聞くようにしよう……。

「ソニアだったらそんなに素直に聞いてくれないもの。あ、忘れる

ところだったわ、この鉄則なんだけどごめんなさいするのはコツがあるのよっ」

「コツ？」

さつきからちらちらと「ソニア」とかいう人の名前が出て来て気になるけどどうせ覚えられないし気にしないでおこう。

「そうー。怒る予定の人がとても嬉しそうにしていたりぼーつとのおんびりしているときだったり？ おいしいものとかお酒とか飲んでるときとかもいいわね！ そんな感じのときを狙ってうまーくごめんなさいするとね？ ……………泣きたくなるくらいまでには怒られないで済むのよ!!」

さつきよりもさらにどやってるアメリカさん。

ということはどつちにしろ怒られるというわけか。

まあ非は僕らにあるし避けられないことではあるんだけど。

あとこの子なら怒られて毎回泣いているような気がするな。

なんとなくだけど。

「…………『響』ならきつと軽いウソをつくような子じゃないだろうし、だからごめんなさいするっていうの、慣れていない…………よね？ ……」

そ。それならせめて、怒っているときとか悩んでいそうな顔をしているときに言いさえしなければいいのよ。とにかくタイミングよ

！ タイミングが大切なの！ 命なのよ！」

どんどんと自説もとい僕の本心を語ってくれる自称お姉さん。

この子を見ているとなんだか…………そう、よく小さい子の面倒を押しつけられていたときのいたずらっ子とかをお世話していたときを何年ぶりに思い出すな。

そのときはまだ、父さんと母さんがいたときで。

……………懐かしいな。

「…………ふふっ…………」

なんだか目の前でがい言っているアメリカの話聞き流しつつ昔のことを思い出していたら、なんだか、僕にしては珍しいことに自然と笑いっというものがこみ上げてきた。

「……………あっ!! 『響』、ようやく笑ってくれたっ！」

「……………ああ、ありがとう……………」 『姉さん』

◆
なんだか意識がぼんやりしてきたしそろそろようやくいい加減に夢が覚めるらしい。

だから僕はいつもよりも口が軽くなっていたのか、口がぽつりとなにかを漏らしてから「？」ってなる。

姉さん？

いや、僕はひとりっ子だしそんな関係の年上の子とかも居なかったはずなのに？

……………まあ夢だし、変なこと考えることもあるか。

29話 「お姉ちゃん／姉さん」 3 / 3

初対面の女の子のこと「姉さん」とか言っちゃって恥ずかしい。

この歳にもなつて……いや幼くなってるけど。

でも年下の子をお姉さん呼ばわりしちゃうとかいう小学校とかで先生を「お母さん」呼びしちゃうのに近い……いや歳が上な分、より深刻な過ちだ。

ここが夢で良かった。

夢じゃなかったらのたうち回るくらいじゃ済まない恥ずかしさだ。

この子自身がお姉さん風を吹かしていたし別に問題はないだろうって思っただけでいい。

むしろ喜んでくれるんじゃないかな。

そうだ、きつと。

僕よりもずっと年下……今の僕よりは年上なのはもちろんだけど、まあ僕を成長させた姿だし？

頼れる人が父さんたちがいなくなったあの日からずーつといなかったんだから、こうして妄想の世界でくらいは精神的に頼れる存在がいてもいいんじゃないかな。

そう思い込んでおく。

思い込むのは得意なんだ。

「え、『響』？ 今なんて……じゃないわ!!」

頭にこつんと痛い感覚。

ばかりとされたらしい。

感覚的にげんこつじゃないけど軽いおこだ。

でも夢の中の被創造物から反逆された僕は、抗議の意味を込めてわざと頭をさすりつつアメリカの顔を見てやる。

ぶんすかつて感じのふくれっぷりがそこにあつた。

……なるほど、今の僕がこうしてみせると一応は怒っているってニュアンスを表せるって感じか。

でもなあ……とつても、見た目以上に子どもっぽく見えてるからちよつとなあ……。

とがあるんだけど現役JCたちには通じなかったのを思い出す。

ゆりかときよって言うちよつと前のこともなんとなく知っている子たちは反応こそしていたけど、現物を自分で使った記憶がないしそこまでじゃなかったしなあ。

まあ僕だって少し年上からしたら「そんな世代なんだね」って感じなんだろうけども。

時間っていうのは残酷だ。

まあムダにした僕にそれを言う権利はないけど。

「◆◆？ ◆◆◆◆」

だんだんと薄れていく明晰夢の向こうの子。

話している声は聞こえているんだけどそれを認識できていないな
い感じ。

なんだか変な感じ。

「◆◆◆◆!?!」

? ……!!

声っていう信号がぶつぶつ切れかかっている。

意識はぼんやりしてこないのに五感がぼんやりしてくるっていう
またまた新しい感覚を味わっていると、とうとう声自体も聞こえなく
なってきた体の感覚も薄れてきているらしい。

寝不足気味だったり疲れていたりして、でもまだ寝たくはないけど
だるいからって横になって意識が途切れる瞬間の感覚に似てるかも。

そんなのを意識している今に至っては、もう僕が夢の中で体を持つ
ているっていう……目が覚める前の体の感覚なんだろうか……そう
いうのがなくなってもいるし。

とつても必死な感じになっているアメリをみているとなんだか申
し訳ない気になってくるんだけど、夢っていうのはもともとコント
ロールできるもんじやないんだからしようがない。

あつちから僕はどう見えているんだろうね。

もう関係なくなることだけだ。

……でも、いつか。

いつかこの明晰夢を自力で見られるようになったら、また会えるん

だろうか。

黒のアメリと金のノーラと赤のタチアに。

あとソニアって名前も聞いたかもしれないけど結局会わなかったな。

……いや、これがストレスの結果とか酔い潰れた結果だったりしたら、もう見ないほうが僕にとってはいいいのかもしれない。

ただのセルフセラピーな空間なのかもだもんな。

「!!」

ぼーっとしていたら視界がゆさゆさとしている。

黒アメさんがなにかを話していてすぐそばにいて。

……たぶん肩をつかまれてさっきみたいに揺すぶられているんだろう。

そのせいで視界が上下して余計に周りが見えづらいうし見えなくなってくる。

………

………あ。

遠くのほうでクレーンの………先から赤髪の子と金髪の子。

タチアとノーラ。

もうじきに忘れるはずだった子たちが隅のほうから走ってきていてぎりぎりで間に合わなくて。

………?

もうひとり、誰かがいる？

誰かが走ってくる？

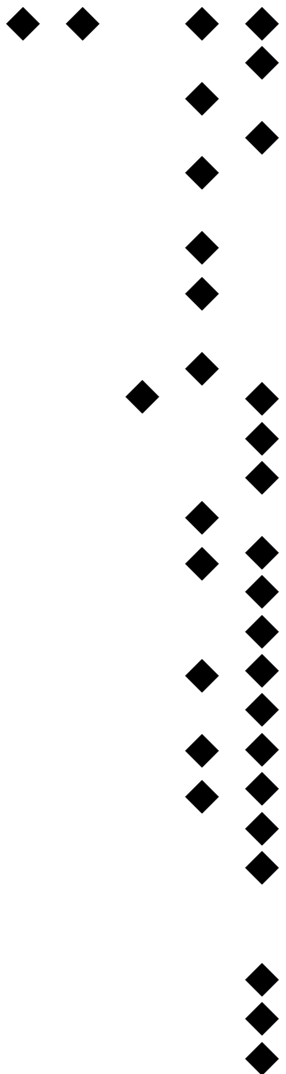
ざらざらになった視界の中でがんばって目を凝らす。

——その後ろからおなじように走ってくるのは彼女たちと同じ年くらいで。

——銀色の髪の毛をぱさつと振りまいていて、最近お手入れを怠っているのかわりとぼさぼさとしている感じで、だけどなんだかムダにきらきらと輝いていて、体力がないのかそれとも不摂生なのかはわからないんだけどともかくインドアっぽいノーラよりも疲れた様子で。

それでも年相応に中学生くらい年齢相応の走り方をしている、みんなとおんなじように硬そうだけど軽そうな服を……ちよつとばかり装飾が派手だけど……を着ていて。

きつとかちやかちや鳴っているんだらう装飾と、服のせいか女らしさはうかがえない……女の子の域を出ない見た目で、でもよく見れば顔からは幼さが抜けていなくて、目を見開いていても眠そうで、つまりあの姿は



ん」

薄い日の光が差し込んでいる僕の部屋の天井にぶら下がっているライト。

「……………んう」

横を向いてみれば、枕の横に置いている机の上の時計とかスマホとか読みかけの本とか。

「……………んー」

反対側を見てみれば、今日着るために用意していたらしい……酔っけていてもちやんとできたらしいな……今日に着るはずの服が、上下、鏡の上に掛けられていて。

——今の僕になってからの目が覚めて最初に見る光景が広がっている。

「…………………………」

僕の呼吸の音しか聞こえない静かな空間。

僕の部屋。

僕の匂い。

前の僕と今の僕のが混ざって、でもほとんど今の僕の……小さい女

の子の匂いになつていゝる部屋の香りに包まれていて。

がばつと起き上がつてみれば、たしかな僕の体の感觸。

サイズは……変わつていない。

どうやら夢の中で危惧した事態は起きていない様子。

そのまま着ていた白のワンピースのふつりふりも一切変わつていなくつて、だから今この瞬間は僕が寝た次の時間つて確定したわけ。

だけど、ちよつと………ほこりっぽい？

気のせいかな。

「……けほっ」

喉が、いがいがする。

壁に片方をくつつつけていゝるベッドも……お気に入りだつたけど今の僕にとつては大ききつて、けどいつのまにか慣れていた枕と、ベッドの反対側に……地震が来てもぎりぎりベッドと机のそばなら無事つて感じにアレンジしてある本棚と、机の上の日記帳とパソコンとその上のカーテンと窓と。

「……ぼくのへや」

ちよつともぞもぞしていたらなんだか肩周りとかがきつい気がする。

「……もしや」

よく見てみると、なんと！

……裾はワンピースなのにその上からパジャマを来ている形になつていゝる。

なんでふりふりの上にパジャマを着ていゝるんだろ。

おんなじ色だからぱつと見てわからなかつた。

それほどまでに酔つていたんだらうか。

覚えていないけど、たぶんそうなんだらうけど、寝る前に着替えるつて言う本能は作動したらしい。

でもおかげで……あ、ズボンはあいかわらず履いていないのか。

……でも、ズボン？

「………!!!」

あわてておまたに手をやる。

「……………ほっ」

冷たくも温かくもなっていない。

人肌のぬくもりの股ぐらだ。

よかった……本当に良かった。

粗相はしていない様子だ。

さすがにこの年でしちゃったら立ち直れない気がするし、本当によかった……。

肉体年齢と性別とで、あと昨夜の大量飲酒とで栓が緩そうだから心配だったんだけど助かった。

ついでに生えていなかったのには喜ぶべきなんだろうか、それともがっかりしないといけないんだろうか。

……いや、まあ明晰夢を見た程度で魔法さんが諦めてくれるとも思えないしな……知ってた。

「はあ……………」

現状確認って言う喫緊の課題をクリアした途端にさつきまでの余韻が戻って来る。

僕にしてはすつごく珍しくまるまる覚えている夢の内容。

……夢とは言っても、昔のことを思い出したり動いたりしているときに僕の子供のころの体じゃなくて、この幼女な僕の今の僕の体だったことを考えるとあらためて自意識が汚染されてる気がするなあ……。

もうすつかり今の僕を受け入れちゃっているんだなっていうのを痛感する。

だって違和感を感じこそしたけどその程度だったんだし……。

……おまけに精神年齢的には年下のはずの子に悩みを打ち明けちゃうとかさあ……やっぱり少しメラニコリックになつて弱つていたんだろうか。

きつとそうだ。

……あれを思い出すとすぐに恥ずかしさがこみ上げてきて顔がちよつと熱くなつてくる気がする。

きっと人から見たら普段通りの顔なんだろうけど恥ずかしいものは恥ずかしい。

でも……ついに深層心理まで本物の幼じ、女の子になりつつあるのか。

否定していたかったんだけどこうもはっきりとした夢見ちやうと改めてやばいなあ。

やっぱり山に行くべきか。

あ、山にはもう行ったんだった。

それにしても変な夢だったな。

普段夢を見ないからわからないけど、でもきつと普通じゃない夢だったはずだ。

はつきりと、まるで昨日のことのようにくつきりと覚えている夢なんてそうそう無いもの。

朝ごはんを食べたら日記帳に書き留めておこう。

その前に忘れるんならその程度なんだ。

夢の中では大冒険をした気になってもすぐに忘れるのが夢なんだから。

——黒髪のアメリ、赤髪のタチアと、金髪のノーラ。

そんな今の僕をアレンジしたような姿の子たちと、目が覚めるまでのほんのひとときを過ごしただけの時間。

あともうひとり、銀髪の◆◆も居たけどあの子は遠目で見ただけだし……でも、気晴らしにはなったかなって思う。

「夢ってすごい」

もそもそと布団にうずくまり直す。

それに合わせて髪の毛が上に引っ張られていく、いつもの慣れ親しんだ感覚。

「でも寒い……」

寒いから出たくない……寝起きだからかな。

「……………」

夢のことを、覚えている範囲で思い出してみよう。

昨日おとといと割と、僕基準ではかなり大変な目に遭っていたから

癒やされた。

自分で見た夢ではあるんだけど、もちろん偶然のおかげだけど、でもちよつとだけ癒やされたし、心もぐーっと楽になっている気がする。

……けど。

「うーん？」

髪の毛がわさわさする感覚を頭皮で感じつつ、顔だけ布団から抜け出して……見慣れたはずんだけどちよつとだけ違う印象の僕の部屋を見回してみる。

……なんで僕の部屋なのに、なんだかほんのちよつとだけ違う感じがするんだろ？

夢の中にずいぶん長いこといた気がするから、かなあ？

「……くあ」

ま、いつか。

その内眠気が取れたらうじうじしたのもなくなるだろうし。

——そうしてベッドの上で毛布をもふもふしていた僕の周りは、家は、町は。

厚く積もった雪の中にあった。

その年、珍しく雪が積もりに積もった12月のある日。

9月のある日に眠ったはずの僕は目を覚ましたんだ。

30話 跳躍、あるいは冬眠 1/2

「う……………」
へんてこな夢から無事に生還できた喜びをベッドでいつもみたいにごろごろしながら味わうことしばし。

ちよつと寒いけど布団の中はまだ充分にぬくいからなおさらに出る気がしない。

なんかだるい。

そんな朝もあるよね。

「……………あ……………」
よく分からない声を本能のままに出してみる。

この体になつてから良くするようになった謎の発声練習。

眠い。

怠い。

そりやあもうこんな変な声だつて出しっぱなしにもなるもんだ。

髪の毛は絡まつてるしくすぐったいし……ナイトキャップつて言うのを買つてみたこともあったけど、寝ているあいだに自分で取っちゃうから結局毎朝酷い絡まりようなんだ。

まつたく、なんでこんなに長い髪の毛が必要なんだ……。

だからすつごく二度寝したい。

できれば今度は普通の夢を見たい。

普段夢なんて見ていたとしてもまつたく覚えていないけど、だからこそ睡眠つて言うのはなんにも見ないで脳みそと体を休めるものだつて思う。

……こういう起きるのも寝るのもめんどくさいときつて、ちよつと手を伸ばしただけで取れるスマホで適当なニュースとか見たり読みかけの本を読んだりできるはずなんだけど、そもそもとして目を開ける気にもならない。

つまり僕は起きるか寝るかの判断もできないくらいにだるいんだ。

朝に強い僕としては本当に珍しいことに。

だるいんだからしようがない。

けど、なんでだるいんだろ。

体感……いや、意識の上でとつても長い夢を見ていた気がするから
か体がとつても重いし。

けど疲れは取れているし驚くことに二日酔いもないみたいだし、そ
れにすつごくよく寝た感覚があるのに。

なのに、なんでだろうね？

なにかこう……何かの力を消耗しているみたいな、そんな感じ。

なんだろこれ。

忙しい日が続いたりして……僕にとつてはせいぜいが旅行先で動
き回りすぎるのが続くくらいしか経験したことないけど、過労と睡眠
不足とで明らかに体が疲弊しているって状態。

これはそれに近いような感覚かも。

そんな「疲れていないはずなのにものすごく疲れている」っていう
未知の感覚にごろごろとしつつ、不思議とたくさん呑んだ翌朝の部屋
の中の独特の臭いがしないのにもまた疑問を覚える。

アルコールが肝臓さんに処理されて息とか汗とかでえもいわれぬ
あの臭いが部屋に充満しているくらいは覚悟していたのに、すんすん
と鼻を動かしてみてもいつももの僕のベッドの髪の毛と肌から漂って
くる……ちよつと甘いような匂いしか感じられないし。

まあこの体になってアルコールの……解毒臭もほとんどないんだ
けどな。

にしても。

「うーん？」

お酒。

なかなか消費した感のあるお酒。

現実逃避にはやつぱりお酒がいちばんだった。

今までこんなことしたことはなかったけど……みんながするやけ
酒っていうものだもんな、それだけの効能はあるんだろう。

健康的なストレス発散じゃないけどこの体じゃ走り回る体力もな
いしなあ。

まあ昨日の場合は本気でお酒に逃げるっていうほどじゃなかったし、それよりも「悩んだ気持ちを抱えたまま考え続けているとドツボにはまって気が滅入るから眠くなるまで飲んじゃおう……」っていうのだったけど。

ほどよくいい気分になんてさせてくれて楽観的にぼんやり考えられる状態にさせてくれるお酒っていうのはやっぱりいいものだ。

1日中呑むわけじゃないのもまたメリハリが付く感じがするし。

まあ飲み過ぎると辛いだけだけど飲み慣れているんだし、なんだからできちんとセーブできていたんだろう。

伊達に毎日飲んでないんだ。

でも無意識ってすごいね。

あんな夢見させるくらいだもんな。

……それにしても、天井がぐるぐる回る感じとか胃腸がずんとする感じとかそういう二日酔いの手前くらいの症状でさえないのが不思議なところ。

思ったよりもアルコールが残っていないらしい。

あれだけ飲んだのにね。

不思議なこともあるもんだ。

かなり早くから飲んでいたこともあってちよつとずつ解毒できていたから実はそこまで飲んでいなかっただか？

お水もトイレがめんどくさくなるくらいにがぶりと飲んでいたしな。

昨日は結局……寝た時間を覚えていないからわからないけど、たぶん6時間くらいかけてぼんやりしていたんだし、そういうことなのかも。

ちゃんぼんしていたしな。

そういうこともあるのかも。

おとといと昨日っていう短期間で、僕の体を変えた魔法さんが髪の毛を切ったときだけじゃなくってずっと……前の僕から今の僕になったあの日からずっと僕にかかり続けていて、しかも僕の性別とか前の姿っていう引き金でも発動するものが見つかっちゃったりと、少

なくとも3つ以上の効果を持っていて、かなり衝撃的だったのは確かだし。

あの夢でもあったように、あの朝、前の僕が今の僕になったあの朝になんにも考えないで迷いに迷って血迷ってお隣さんに助けを求めていたとしたって……きつと今の僕かつ前の僕として何も問題なく生きて行けたんだって確信しちゃったからなあ。

だって魔法さんっていうご都合主義そのものみたいな力がかかっているんだから。

「ただ僕の体を変えただけ」っていう思い込みがあつたのもあるのかもしれないけど。

でもよく考えてみると、あの夢の内容もかなりがばがばだった気がしないでもない。

けれども嘘をついたりしないで過ごせて、その流れで銀行のこととか戸籍のこととかにたどり着けていた可能性が高いんだ。

少なくとも昨日確認した限りでは問題がひとつもなかったんだから、きつとそう。

なにより深く考えない性格のお隣さんの奥さんなら、あとすつごくいい人なお父さんとか、ちよつと内気だけどいい子なさつきちゃんだったら……あの内容もあながち妄想でもなさそうだし。

まあもう手遅れなんだけどな。

どうしようもなく。

本当に今さらなんだ。

嘘まみれになっちゃってどうしようもなくなってる、今の僕。

「……………」

もし家族……僕の場合は親戚の人か、とかすぐに連絡できる友人とかを作ってさえいれば割と早い段階で……たぶんほんの2、3日くらい、早ければあの日のうちにわかったことなんだろう。

だってひとりじゃなければ服もすぐに用意できて、ひとりじゃなければ外に出る勇気もたいして要らなくて、ひとりじゃなければもつといろんな考えを見つけられていただろうから。

たぶん……ありえないことだけど万が一に僕が働いていたとし

たつて、ちよつとした混乱はあつたとしても、しようと思えばそのままおんなじ生活を続けられていたんだらうつて。

せいぜいが服関係とかかな？

困るのつて。

あああとイスとかそういうつたものもあるのか。

踏み台とか何個か設置してもらわないとなんにもできない低身長だしな。

……ニートでなかったとしても今まで以上に……ムダに考えてムダに警戒してムダに嘘をついてムダに時間を浪費していなかつたら、きつとかんたんだつたはず。

「……………うあ……………」

毛布を体に巻き付けつつ、髪の毛も顔に巻き付けつつ、ごろごろと。

ご近所とか親戚とか友人とか知り合いつつていう僕が持っていた数少ない相談相手になるかもしれない人たちと縁を切るつていうか疎遠になつて、その大半とはスマホの引き継ぎの際にめんどくさいからつて連絡先消しちやつたのは紛れもなく僕のせい。

僕がこんな怠惰な生活……いや、生き方を選んでしまったから。

つまりは僕の落ち度つてことになる。

めんどくさがつて全部投げ捨てちやつた、僕のせい。

あのとときの僕に言うことはできないし、言つたとしたつてきつとおんなじ人生を送るはずだから無意味もないだらう。

けど、もう少し人との繋がりがつていうか、縁つてやつ。

そういつたものをもうちよつとでも大切にしてさえいたら、こんな無駄足踏まなくてもよかつたかもだし悩むのも相当に少なかつただらうな。

おかげでたくさんの人に嘘をつき続けるつていう僕にとつても相手にとつてもよくないこと……とつてもよくないことをもう半年も続けてるんだ。

……嘘をごめんなさいと謝る鉄則……か。

今さらどの面下げてつて感じで顔、合わせづらいつけど……嘘をついているの、早くどうにかしないとつけないな。

だってこのまま嘘を続けていたら僕のほうがもたないだろうし。
あんな夢見るくらいだもんな。

嘘っていうのは、ほんの一握りの人以外にとって苦しい以外のなにものでもないんだ。

そして1度ついたらバラして謝って怒られ切るまで心の重しになるんだ。

「……………うあ——……………くちっ」

……………ごろごろしていたらなにかの拍子に絶妙な具合で髪の毛の先が鼻の中をくすぐってきて、油断していたからそこそこ大きくくしゃみが。

……………いけないいけない。

こうやってもんもんと考えちゃうから昨日はお酒に頼ったのに。
ひと晩寝てすつきりしたしいい加減に気持ちを切り替えないと。

もう子どもじゃないんだ。

少なくとも、僕の意識は。

……………それにしてもなんにしても変な夢だったな。

そもそも明晰夢なんていうものすごく珍しい現象だし、普段の夢なんてほとんど覚えていないからわからないけど、それにしても変なものだったはずだ。

僕の想像力も妄想力も圧倒的に凌駕したような、なんだかすごい夢。

一貫性があるようでいて肝心なところでないって感じの、摩訶不思議って表現がぴったりの舞台。

「明晰夢かも」って気がついたときにはちよつとわくわくしたけど意識があるだけ。

後半はなんだか動けたりしたけど、でも流れに介入したりできるわけじゃなくって。

黒あめのアメリ……………金髪がノーラで赤髪がタチアだっけ？

ほら、僕なのに初対面の相手の名前と特徴がまだ一致しているしよっぽどのインパクトだったんだ。

まあでも適当なドラマを見たくらいの印象だったからしばらくし

たら忘れるか。

どうせならもつと……いつそのことぶつ飛んで、空を飛んだり宇宙遊泳とか絶対に現実じゃありえないような体験してみたかったなあ……。

まあ1回見たからにはそのうちまた見るだろう。

そのときに楽しめるように無意識に教え込まないと。

どうやるのか知らないけど。

まあ多分男の体が北国の幼女になる方がよっぽどのありえないことだけだね。

「……………くちゅんっ」

寒い。

暖かい服が必要そうだ。

お酒であったかくなつてぼんやりして……つまりは普段よりもうちよつと暑く感じながら寝たのか、パジャマの下のワンピースのせいでお腹までべろんとめくれ上がったし、そのくせなぜかシャツは着てないし。

だからおへそを丸出しで、さらに下はズボンを履いていないからぱんついつちよに近い格好で毛布だけくるめて寝ていたようなもんだしなあ。

端から見たらものすごい格好だっただろうな。

まさに幼児……………幼女じゃないか。

うん、今回ばかりは幼女だって思う。

「……………いがいが」

……それになんだか喉も冷たくなっている感じもする。

気温……空気がとても冷えているのか？

……………早くも秋が近づいて来たのやもしれない。

まだまだ残暑が当分続くっていったけど天気予報は外れるものだしな。

そうして年齢相応のぐずり方をする僕自身をなだめるようにして

……多分30分くらいはのんびり過ごしていた寝起き。

……もしかしたら薄々何かがおかしいって分かっていて、だから知

るのを先延ばしにしてたのかもね。

30話 跳躍、あるいは冬眠 2/2

僕は震えている。
ふるふる震えている。

「やむい……」

寒い寒い……寒い寒い寒い。
廊下を歩く1歩1歩が地獄だ。

とつても冷たいこと氷のような床。

幼女な僕の足を刺すような刺激。

家の主をなんだと思っっているんだ。

……でも、そろそろ初秋か。

家の中でも靴下を履く季節になってきたなあ。

まだまだ残暑が厳しいって言っていたのに天気予報というやつはいつも当たらない。

それに加えて寝方が悪かったから体が冷え切っていて芯から冷たい感じもするし。

「まるで体温が今までなくって」「さっきごろごろしていたときから少しずつ温まってきたみたい」な感じ。

そんなわけないけどな。

でも寒いものは寒い。

「やむい」

歯ががちがち言っただけの震えが止まらないくらいには……って体、冷えすぎじゃない？

空気とか廊下とかドアノブとかいろいろ、冷たすぎじゃない？

ベッドから出たばかりのときはそこまでじゃないって感じていたから軽く羽織ってきただけだしなあ。

ひたひたとできるだけ接地面積を減らそうというムダな努力をしつつ大外れの天気予報を想う。

今年の秋、早かったじゃないか。

そしてすつごく寒いじゃないか。

どうしてくれる。

というか昨日まで朝晩は多少涼しい感じでも昼間は汗ばむ残暑つてやつだったのにいきなり過ぎない……？

これじゃ「まるで冬だ」。

……っていうのは多分体を冷やしすぎたんだろうな、きつと。

しばらくは寒さに用心しておかないと……この体で病気にでもなったら病院に……行けはするけど……とてもめんどくさそうだし。お医者さんの目まであんなったらどうしたらいいのかわからないしな。

◇

「ぴいいいいいいいいっ」

僕の声じゃない。

ヤカンの音だ。

コーヒー用のはフタがかたかたなるだけだけどお湯用のはちやんと叫んでくれるから分かりやすい。

でもちよつとぼーつとしていたらこれだ、ぬるま湯でよかったのにこれじゃ熱湯に……まあいいか、薄めれば良いんだして。

「くくくくくくくく」

光の加減かやけにホコリが目につく台所を移動しつつほどほどのあたたさのお白湯をいただく。

あ——、アルコールで脱水して冷たくなりきっている体に染みわたるこの感じが好き。

朝ごはんはんにインスタントのしじみなお味噌汁飲もうつと。

……でも思ったよりは普通な感覚。

喉がからからのときに飲むから気持ちいいのに今朝はそこまでじゃない気がする。

変なの。

「くくく……けぷ」

コップが3杯目にさしかかるところにはちよつと温かくなってきたようにやく安心できる感じになってきた感覚。

お腹がたぶたぶだけど、どうせすぐに飲めるようになるんだろうからって4杯目を注いでからリビングへ。

ぼてぼて歩いているとポケットに入れていたスマホがふとももにこつこつって当たる。

……そうだった、忘れるところだった。

かがりたちに「次の休みは？」って誘われていたんだって。

でも今はまだ気持ちの整理がつかないからちよつとお断りさせてもらおう。

それよりも嘘を告白するほうが先だろうし、スジだろうし。

それを寝起きのわずかな時間で見ただろう夢の中で決めただんだけか。

それで嫌われて会えなくなるのなら悲しいんだけどしようがないこと。

問題はいつ勇気を出して「実は嘘でした」って言うかなんだ。

「……………ん？」

まだ体に残っている寒さのあまりに頭も手ものろのろとしながら、ちよつと見るつていうことさえ忘れていたスマホを取り出して操作しようとして……………できなくて。

電源ボタンを押してもういちどおんなじ動作をしていたけど一向に明かりがついていないことに気がつく。

……………あれ、電池が切れてる？

そんなに少なかったっけ？

まあ電池切れるの良くあることだし、後で充電しておけばいいか。

ついでお断りの文言を考える時間稼ぎにもなるしな。

勇気を振り絞るための時間にも。

「…………………………」

寝起きの頭、しかも冷え切った体を抱えていたら誤解のない文章なんて書けやしないだろうし、ちよつと時間が必要なんだ。

というわけでお白湯4杯目をこくこくと飲んでいくと指先のほうまでにあつたかいつていうエネルギーが流れていく感覚がして、いよいよ寒い季節が近づいてきたんだなって実感する。

「ふう」

ほけーつと喉の奥からあつたかい空気を感じながら「幼女なのにジジ臭いなー」って思う。

気が抜けたところでお腹がぐーつと鳴り始めた。

胃はたぼたぼのはずなのにお腹は空いているらしい。

そりやそうか。

昨日は夕方から飲んでいたのでご飯食べるの忘れていたしな。

別に食べなくてって翌朝にこうして猛烈にお腹が空くだけだから昔からしよつちゆう抜かすことあつて慣れてはいるけど、お腹が空いたものは空いたんだ。

ぐぎゆるーつとなるお腹を抱えているとちよつと気持ち悪くなるから早急な栄養補給が必要。

今食べようかそれとも後にしようかって悩んでいたら、お腹が空いた危機感からか頭もようやくすつきりしてきて眠気がどっかに行つたし、やつぱり今食べることにしよう。

ぺたぺた歩いて台所へ引き返す僕。

「あ」

炊いてあるお米がない。

しゃもじを持った僕は悲しくなった。

食べようって思って準備万端でいたのになんにもなかったことほど悲しいことってそうそう無いよね。

フタが開いたままだった炊飯器は悲しい冷たさ。

どうやら炊くの前まで忘れてたらしい。

昨日の僕は本当にいろいろとダメだったらしい。

まあ昨日の酒盛りで立ち直れたんだからコスパというやつはいいんだらうけど。

普段からよく炊き忘れるんだし……しょうがない、冷凍のでもいいや。

ごはんごはん。

「ふうん、ふうん」

なんとなくて音程がどっか行ってる声を出しながらレトルトのご

飯のパックを開けて真ん中にしゃもじを突っ込んで半分に分けて、片方だけをお椀に入れてレンジへGO。

食欲ないから半人前で充分なんだよね。

おかげで食費がとつても浮いているのがありがたい。

そうしてできた温めすぎたせいであつたご飯片手にテレビの前まで引き返す。

朝は貴重な情報収集の時間だ。

時間さえ合わせれば食べるついでに十分な情報を仕入れられるのが良いよね。

リモコンをぴつとしてニュースやってそうな局へ。

えつと、今の時間は。

「……まもなく7時です」

時計を見るまでもなく絶妙なタイミングで起きて食事にありつけるらしい。

でも今日は少し寝坊だなあ……まあ30分ごろいじいじしてたわけだけど、それでも普段5時くらいに起きる僕にとっては充分に遅い。

僕にとつての7時なんて、ゴミ出しと……あ、もうそこまで早起しなくつても問題なくなつたのか……ごはんと洗濯と掃除とその他もろもろが終わっている時間なのにな。

夢見は悪……くなかつたけど、ともかくも幸先のよさそうな朝だ。

これからいろいろ考えてしなくちゃならないだろうし、ここは気合を入れれないとな。

今日はたしか金曜だつて……前よりは曜日と日付の感覚に敏感になつているけどパソコンは別の部屋だし電源も付けてないスマホもおやすみ。

こうしてぱつと見るだけで把握つていうのができないのかもどかしい。

カレンダーなんて貼らなくなつてから何年経つたことやら……ちよつと電化製品に頼り切りの気がしないでもない。

「くあ——……………」

ごはんをひとくち口の中に入れて、……20時間ぶりくらいの固形物の感触をかみしめていると、見慣れたアナウンサーさんたちが現れる。

「ごはんがぱさぱさだ。

ちよつと古いやつだったかな？

それとも暑かったからかなあ。

『おはようございます』

そう言ったアナウンサーさんたちの後ろの画面には、一面の雪景色。

雪景色？

雪？

……ああ、北の方はもう初雪なのか……まだ秋だっていうのに寒そうだなあ。

まだまだ秋はこれから。

紅葉とか栗とかいろいろ楽しい季節なんだ。

そう思った僕の耳に飛び込んできたのは——信じられない言葉だった。

『12月23日金曜日。朝のニュースの時間は大雪の情報からです』

「……………」

かちやかちやつと箸が落ちて散らばる音。

こういうときって本当にものを取り落とすんだなあってどこかで考えてる僕がいる。

口からは声にならない声。

でも頭は冷静にいろいろ考えている。

——朝7時、見慣れた朝のニュースキャスターさん。

「ライブ」つてあるから……ドラマとかバラエティじゃなければ……この景色は今現在、この瞬間のもの。

そしてテレビの中継で見慣れた駅前……ということは、この画面に映っているのは外国とか北の方じゃなくて僕の住んでいるところと変わらないところで。

雪を見ない年も多いくらいなのに積もっている。

現実には、多分僕の住んでる町もこうなっていておかしくない。

——雪となれば秋が深くなるか冬にしか降らないもの。

異常気象とかだったら別だけど、それだったら「今年も寒いですねー」じゃなくて「異常気象で大雪!!」っていうテロップが出るはず。

なのにそんなことはなくて——12月、23日。

クリスマスイブの、前の日。

そう、上の隅の方にテロップではつきりと書いてある。

「……ありえない」

そうだ、ありえない。

こんなことはあり得るはずがないんだ。

「……………」

……そうしていたら口の中のごはんを咀嚼するのも忘れていたことに気がついてちよつとずつかみしめるけど……さっきまで感じていたごはんの味が全然分からなくなっているのに気がつく。

ただの、ぱさぱさしているなにかだ。

だって唾液も出なくて。

「……あ。おはし……」

のろのろイスから降りてお箸を拾い集めて台所へ行ったりして……それすらものろのろしてみても時間を稼ぐ。

でも僕の頭は冷静に考えちゃうんだ。

冬。

雪。

大雪。

積雪。

12月23日。

……それは、ありえない。

だって昨日はまだ9月で、残暑で秋で、まだ夏のほうが強くって。みんなと最後に会ってから、まだ1週間と経っていなくて。

そのはずだったのに。

「……………」

『先日から降り続けている雪のおかげで、今日もまた一段とこの都心でさえも……ご覧ください！ 25センチの積雪を観測しています！』

わざとらしく長靴を履いたりポーターさんがずぼっと雪の中に足をつっこみ、同じように突き刺した定規の目盛りをアップで映している。

——なんで。

なんで9月が12月なんだ？

12月って9月だったっけ？

………落ち着け、ちがうちがう。

今ははっきりと目を覚ましていて僕は正常で、テレビの向こうの人たちも正常に見える。

と言うことは僕の主観だけがズレていて……今日は9月のはずだったのに12月になっているんだ。

本当に、3ヶ月も経っているんだ。

『予報のとおりですとこの天気はまだしばらく続くようです。ということは明日のクリスマスイブ、そして明後日のクリスマスは数年ぶりのホワイトクリスマスというものになりそうですねー』

『そうですねえ、今年のクリスマスは素敵なものに……』

カメラがあちこちに切り替わって、たくさんの人が道を歩いている場面で止まる。

コートを着た大人の人は歩きにくそうにしながら会社へと向かい。

止まっている路線があるらしくってタクシーにも行列ができていて。

『イブから土日となる、これまた天気と合わさって絶妙なホワイトクリスマスとあって、みなさん大変盛り上がっているようです』

『子供から大人まで楽しい2日間になりそうですね。しかし交通への影響で……』

小学生くらいの子たちが走り回って、雪を丸めたりして遊んでいて。

その子たちが身につけているのももここのダウンとか手袋とか

マフラーとか毛糸の帽子とか、およそ夏らしくない格好で。

つまりは明らかに夏でも秋でもなくって。

『……はい、それではまず気になる明日と明後日の降雪量ですが……』
ぴつとチャンネルを変えてみる。

『この大雪で転倒したという通報が昨晚だけで……』

おなじ。

もういつかい、もう2回。

『まあ例の事件のおかげで外出を控える人も多いようですので一概に悪いとは……』

……おなじ。

どの局もこぞっておなじようなことを言っていて、映している。

——これは、現実。

それは分かった。

理解はできて納得はできないけど無理やりに納得するしかない。

けど……なんだ、これ。

だってクリスマスなんて……3ヶ月も先のはずでしょ？

予定はまだ決まっていけないけど「クリスマスパーティーとかしよう」ってみんなが言っていた、あの遠い未来のことじゃないか。

なのにどうして今は3ヶ月後なんだ。

「……まず」

落ち着かなかった僕はいつの間にかに料理用のお酒を出して呑んでいたらしい。

しばらくしてからそれに気がつくくらいには……僕にしては珍しく動揺ってのをしていた。

31話 秋は何処に 1/2

「うーん……」

立ち尽くしていた僕は静かに再起動した。

これ……受け入れるしかないかなあって。

明日がクリスマス前の日なイブ、明後日がクリスマスになっちゃってるってこと。

今の状況で否定できるものがなにひとつ無い以上には受け入れなきゃならない。

……魔法さんが散々いろいろしてきたおかげで結構耐性がついてきた気がする。

「テレビがうそっぱちを言っているんじゃないの？」っていう、か細い希望を持ちながら……まだ閉まったままだったカーテンを開けた僕は、テレビの向こうとおんなじ光景を目にすることになった。

窓の外は——白で包まれた世界だった。
まっしろ。

光自体は暗めなはずなのにまぶしい白。

1階の窓からだ和本気で雪しか見えない様子。

やわらかそうな雪がふんわりとこんもりと、狭い庭の地面や塀の上やすっきり枯れている木の枝に積もっている。

それも積もりすぎているから2階に上ってみてようやく白以外の色はつきり見えるっていう具合だ。

……見た感じ50センチくらい行っっていそう……こんな雪初めて見た。

さすがに道は除雪されているらしく歩くこと自体は……あ、うちの前も少しだけやってもらっているのはお隣さんかも。

お礼に行かないとなあ……もう会って話しても平気だし。

でもこの体だと雪かきなんてできそうにもないけども。

やり始めたとしたって10分と経たずにへばりそうだし。

この姿でへばへばしながら雪かきとかしていたら通りすがりのお年寄りとかおばさんたちに声かけられそうだしなあ……夜か明け方

にやるしかないか。

はたしてこの体の筋力でどこまでできるかは疑問だけどやらなきゃならないものはやらなきゃならない。

それが町内会の掟。

独り身だからこそ愛想だけはちゃんとしなきゃいけないんだ。

目を見て挨拶をきちんとして決まりごとを守っていればなんともなるんだ。

「……しろい」

手のあとがついちやった窓……ちっちゃいもみじがたに曇っていたガラスがくつきりしているし、せつかくあつたかくなっていた手のひらがまた冷たくなっている……から離れると、低い空からふわふわと舞い降りる雪が見えてちよつと幻想的。

「きれい」

真夏に南半球とかに旅行している気分。

だけど今は景色、楽しんでいる余裕なんてないよなあ……残念だ。

普通に秋を過ごして普通に冬になったんだったら楽しめただろうに。

充電ケーブルを繋いだばかりでまだびくりとも動かないスマホさんは戦力外として、パソコンさんのほうは普通に使えた。

かちかちとしばらくネットの記事とかを見ても……やっぱり今日が12月に属しているっていうのは本当のことらしい。

だからこれほどまでに体が冷え切っていたわけで、床も空気も冷たいわけだ。

そりゃあ真夏の格好をしたまま一切暖房とかない家の中で、寝ていれば……ねえ？

さつきエアコンも入れたけどまだまだ寒い。

というかまだ風が温かくなってない。

……うん、ヒーターとか出したほうがよさそうだな、すぐには温まらないだろうし。

季節としては……雪が積もるほどの真冬。

それも今日まで3ヶ月間一切の空調をしてこなかったことになる

わけで。

「うう……さむい」

僕は何着ももこもこと着込んだ上で毛布にくるまっている。

そうして何かがあれば、それを引きずっての大移動だ。

だってこうじゃないと寒くてしようがないもん。

……今までよく風邪とか引かなかったなあ……というかよく死ななかつたなあ。

これもまた魔法さんのせいなんだから、そもそも3ヶ月動かずに寝たまんまで生きていたこと自体が魔法つてやつなんだろうけども。

◇◇

「あつたかくなつたのに、またさむい……」

せつかく少しして家の中がなんとなく……もこもこと着ぶくれなくても震えないくらいに温かさになってきたというのに、今の僕はもう一度もこもこしている。

僕がもこもこしなきゃならなくなった原因。

窓を開けっ放しにして換気をせざるを得なくなった憎い原因は……冷蔵庫だ。

正確には冷蔵庫の中身……野菜はともかくとして作り置き料理とか野菜とかのなれの果て。

あとはお肉のなれの果て。

なれの果てって言うのはとってもマイルドな表現。

3ヶ月つていう時間は僕を置き去りにして、しっかりと過ぎていたっていう証拠としてキッチンが……さらには冷蔵庫の中が、それはそれはひどい臭いになっていた。

それでも冷蔵庫を開けたばかりのころは「うん？」って違和感がある程度だったんだけど、中身を調べているうちにナニカが溶け出してきたと思ったら「うひえ」とか「ふぐう」って感じの変な声が出るくらいには恐ろしい悪臭が立ちこめたんだ。

開けるんじやなかった。

本気で後悔している。
もういやだって思った。

だって夏場でも……あ、9月はまだ夏場で10月もそんなに寒くはないのか……野菜を放っておけば緑とか黒っぽい液体になって、お肉は白くなったり黒くなったりして異様な姿へと変貌するし。

それを3ヶ月。

とんでもないことになっていったんだ。

でも全部ビニールとかで区切られてるし何でここまでになっちゃったんだろうって思ったんだけど……よく調べてみたら上に置いておいた作り置き料理から流れ出したナニカが下へ下へと浸食しながら広がって……さらには乳製品とかまでを直撃した様子。

キノコとかコケとかが生えていなかったのが幸いなところだけに見たものと嗅いだものが強烈すぎてしばらく忘れられなさそう。

勝手にトラウマを生み出されて非常に迷惑この上ない。

とりあえず魔法さんのことは掃除しながら徹底的に罵っておいた。
……これ、冷蔵庫の中身……瓶とか以外はみんな新しくしないとだなあ……臭いが染みついちゃっていてもうどうしようもないだろうし……。

内側のプラスチックにまで染みていたらヘタすれば冷蔵庫ごと買い替えてことになりそうだけど、そうならないといいなあ……冷蔵庫って高いし……。

というか冷蔵庫が無事だったとしても、その下はどうにかして動かして掃除しないとならないかも。

だってナニカの臭い液体が、扉から床にまでばたばたと染み出てきちゃってたから。

まさにホラーだ。

臭いし汚いし最悪。

おかげで日付が飛んだショックももういつかい飛ぶことになったくらいだ。

五感は何にも勝る。

「……………」

臭いのを片づけるために使ったぞうきんとか着なくなっただけそのまま取っておいた服とか、臭いナニカを染みこませたものが詰まったビニール袋をぎゅつと二重に閉じる。

でもくさい。

もういやだ。

誰か助けて。

でも僕がやんなきゃなんないんだ。

それがひとり暮らしてこと。

だからがんばって綺麗にして、さらに念には念を入れてとりあえずで庭先へ避難させてきたらちよつとはマシになった気がする。

臭いもだいぶ抜けてきたみたいだし。

そろそろ良いかなってところで窓を閉めて、もこもこしながらコーヒーを飲み直すことにした。

「……………」

冷蔵庫はまだ良いとして……こんなに外寒いしベランダに置いておけば腐らなさそうだし……こうして着ぶくれなきやならないほど薄い服しか持っていないのが問題だ。

暖かい服が足りないことのほうをなんとかしないとなあ。

まだ「冬には戻るかも」って思ってたおいた男物だとぶかぶかすぎて間に合わないし、ズボン系は全滅だし。

こうして着ぶくれたあとに毛布被っていてもいいんだけど重いし外には出られないしなあ。

……あと、鏡を見るとどこかのお遊戯会にいそうなまん丸になっていたから、さつさとまともな格好になりたいっていうのが本音。

……こんなときにまでいちいち男のプライドが顔をもたげてくる辺り、僕って案外凶太いのかも。

◇

鼻の奥まで染みついた、あの「モノではないナニカ」の臭いがコーヒーのおかげでようやく消えてくれてなによりで、それだけで機嫌

がよくなってくる。

単純だけど本能だからしょうがない。

これでまともに見えることもできるってわけだ。

臭かったら考えるものもむずかしいもんな。

で、体を動かしていたらまとまってきた思考を働かせよう。

まずは時間のこと。

まさか僕自身が……タイムスリップとかでいいんだろうか……するとは思ってみなかったけど、とりあえずは事実として受け止める。

僕視点で一昨日、山からの帰りにテンションが上がったおかげで秋ものを買って置いてまだぎりぎり外に出られる格好が残っているのが幸い。

ああいやそのせいで飛川さんにもバレるハメになったんだし……まああの日の前からこの姿を何回も見られてたってわかっているから、いずれああなるっていうのは変わらなかつたんだろうけど。

でもそのおかげでこうして、寒いんだけど着ぶくれて毛布を引きずっていれば温かさと重さを両立させられる格好ができるし……うん、過ぎたことはしょうがない。

それにバレたおかげで魔法さんについてよりはつきりとわかることになったから、むしろ早めにバレてよかったんだろう。

じやなきや今でもよくわからないまま、なんにもバレていないって思ったままで今までどおりに何も知らないで過ごしていただろうし。それはそれで怖いよね。

知らないって怖い。

……なんだかイマイチ魔法さんが僕に求める方向性のはつきりしてこないから、これが呪いなのかSF的な何かなのか、ファンタジックでオーソドックスな魔法ってやつなのか超能力なのか。

そのへんはあいも変わらずにわからずじまいだけど、それは生きていくだけなら必要のない情報だし今はまだ保留だ。

昨日……これまた僕にとってだけ……実験のおかげで、金も人目もまったく気にしなくていいってことがわかったのも大きい。

あんな変な夢見るくらいには飲んだくれるハメになったけどたま

にはああいうのも……っていやいやこれはアル中の思考じゃないか、やめやめ。

「……ゆめ」

明晰夢的な——あのなにか。

僕の過去を無理やり見せられるっていう毎度おなじみの悪夢に続いている。「もし嘘をつかずにお隣さんに即バレしていたら？」っていう妄想とみんなと会っていた記憶がごっちゃになっていた場面。

成長したさつきさんっていう……妄想でしかない存在も出てきて。

そのへんからだんだんとクリアな視界と音が出てきたと思ったら、今度はまぶしくなってからのもつとリアルな、限りなく現実に近いような展開。

そして黒あめさんと赤タチアさんと金ノーラさん。

そんな不可思議な夢を見ていたせいで現実感のない目覚めになった。

まあそんなのは寒さと日付と冷蔵庫のせいできき吹っ飛んたけど……。

で。

3ヶ月。

僕は……どうなってたんだろう。

普通に寝たまんまだつたらこうはならないはずだ。

魔法さんが僕の体にも何かをして……タイムスリップとかコールドスリープみたいなものとか冬眠みたいな現象が起きたんだって思っておく。

多分あの不思議な明晰夢も魔法さんの仕業。

でも……今度は何が原因でこうなったのか、皆目見当がつかない。

特別に何をしたわけでもなく、今までのように誰かと接触したり物理的に僕の見た目を変えようとしたわけでもないし……。

「うーん」

心当たりは思いつ切りある。

けど心当たりのある原因がまとめて同時にいくつも起きたもんだから判断に難しいっていう感じなんだ。

でも、時間が過ぎたのは確か。

だって僕、お風呂ついでに鏡でじっくりと見てきたけど……激やせしてたから。

それはもうぱつと見て「ぴっ」て声が出るくらいにはがりつがりになっていたんだ。

顔もこけてるっていうか眉のところのホネまではつきり見えるくらいになつていたし、いつにも増して顔色も悪くって体も全体的にホネホネしていたし。

せつかく「ちよーつとはふくよかになれてきたかな？」って思っていたのに、ぜんぶりセットどころかマイナスに食い込んでいるし。

おまけに力も入りにくいし体もだるい。

ただ立って歩くだけですーんと重力を感じる始末だ。

なんか全部巻き戻されちゃった感。

そう言えば最初にこの体になったときもこんな感覚だったなあって思い出す。

せつかく半年掛けてちよつとは肉付き良くなってきたのになあ……また食べ直した。

「おつとと……」

ちよつとふらふらするし体力も落ちているんだろう。

だって3ヶ月だもんね。

何ヶ月も寝たまんまで雪の日に目を覚ますとかものすごくレアな体験してるなって思っておこうつと。

31話 秋は何処に 2 / 2

ぼたぼたと髪の毛からお湯がしたり落ちているお風呂上がりで素っ裸の僕はぱっと見てやばい。

あらゆる意味でやばいのは確かだけど、今はその痩せっぷりがやばい。

本当に痩せすぎていて今すぐお腹いっぱい食べさせたくなくなるくらいやばい。

お風呂に入ったから髪の毛がさらにもつさりとしていたのも確認して僕の裸体がさらに色気を失っていたのが分かったわけだけど、女の子に近づくとどこか逆に幼女にますます近づいていたのが非常に残念だけど、特に悪くなっていそうなどころはなかったのだけは安心だ。

こんな状態で病院とか行くわけにいかないもんね。

魔法さんの力でいろいろ何とかなるのは確かだろうけど怖いし、それでまた何日も入院とかなったらお金も時間も大変だし怖いし……。

いろいろと観察した結果、この3ヶ月のあいだ僕の体はベッドの上で……床ずれとかはないから多分身じろぎとか寝返りくらいはちゃんとしていたんだろうけど……とにかく眠っていて、時間が飛んだわけじゃなくてきちんと時間は経過していて、僕の意識だけがなかった……っていうことになりそう。

でもそこは魔法さん、ただ寝ていたわけじゃないのはまちがいない。

だって常識的に現実的に考えたとしたら、僕は死んでいる。

それもそのはず、3ヶ月間飲まず食わずだったわけだし。

さらに言えば排泄さえもしていなかったわけで、たとえ栄養が足りていたとしても毒素が溜まりきって死んでいたはずだ。

3日じゃなくって3ヶ月だもんね。

まず魔法さんがなにかしらしていたのは確定で疑う意味もない。

昏睡ってやつで、これだけ痩せて体力と筋力がなくなっているって言うってそれだけで済んでいるんだ。

起きたら金縛りみたいに動けないとかホラーなことにはなつてなかつたんだし。

ただだるいだけで普通にこうやって動いているのがなによりの証拠。

だけどこんなのは病院で点滴で水分と栄養を補給され続けて、床ずれしないように体をしよつちゆう1日に何回も動かしてもらつて、さらには体を拭いたり髪の毛を洗ったりトイレの始末もしてもらつてという介護がなければ実現しないものなんだ。

つまりは僕は魔法さんに生かしてもらつていいことに……いやいや魔法さんがこれをしてかしたんだから感謝するいわれはない。

危ないところだった。

思考誘導とか……しないよね？

魔法さん。

……されていたら、もはや僕ができることはなにもないんだけども。

まあ逆説的に僕が今こうやって疑えているんだから、たとえばそうだったとしても「よく考えれば気がつけるかも」っていうくらいではあるんだろう。

つまりは思考が強く操られているわけでもない……はず。

そう信じておこう。

「ふむん」

クリスマス特集しかしていないテレビを見ながらだらんとソファアの上で寝そべって、ただただ時間を想う。

3ヶ月。

3ヶ月だ。

1年の4分の1、ワンクール……秋という季節のまるごと。

これを文字どおりに寝て過ごしたことになる。

普段みたいにならぬ無為に過ごしたわけじゃなくって、言葉通りになんにもしなかった……できなかったんだ。

完全に寝過ごしたんだからこのインパクトはすさまじい。

引きこもりとかニートだつてここまでのほそうそう無いんだから。

9月はまだ暑いからエアコンをつけっぱなしだったからいいとして10月はちよつと暑いのと涼しいのと寒いのが混じるくらいだから……まあぱんついっちょにワンピースとその上のパジャマと毛布っていう格好で良いとしたって、そのあとは厳しかったはず。

ここまで家が冷え切っているんだから12月に入ってからこの、ここ1週間続いていたらしい雪のあいだはもちろん11月だって相当に冷え込んだにちがいない。

さっきの室温的に最近では10℃もなかっただろうこの室内であるな薄着……しかもおへそからふとももからまるだしな格好で寝ていたら低体温とかで死んじやうはず。

そうならなかったってことは僕が起きなかったのとおんなじで魔法さんのせいってこと。

夢に飛んでいた僕の意識はともかくとして体の方はここで冬眠していたっていうコールドスリープ的なものが正しい理解なのかもね。

SFとかで見るような機械とかはないし、やっぱり冬眠のほうを感じるにも合っているのかな。

クマとかみたいに？

秋にぶくぶくと太ってから体温と代謝をぎりぎりまで下げてカロリーを節約してひとつの季節を待つクマみたいに。

あんなに大きい奴らとちっちゃい僕とじゃあなんだかイメージがそぐわない気がしないでもないけど……まあ魔法さんだし変でもしようがない。

さしずめ小グマってところかな？

それも生まれたての。

髪の毛とお肌の色的にホツキョクグマかもね。

でも僕はどうして目が覚めなかったのか。

3ヶ月も意識が戻らなかったのか。

いくらアルコールをたくさん飲んじやったからって言っても丸1日以上寝っぱなしっていうのはありえない。

いくら死んだりしなかったとしても1年の4分の1も意識がなかったっていうのは……正直に言って恐ろしい。

……本能的な恐怖って感じの、痛いのと気持ち悪いのと得体の知れないナニカが一緒くたになって襲ってくる感じがこみ上げてくるし。「寝ているあいだは死んでいるようなもの」っていうのは誰かが言ったことらしいけど、3ヶ月も意識がなかったっていうのを自覚しちゃった今となつては、この3ヶ月っていう時間限定で「僕が死んでいた」って考えるほうがしつくりとくるっていうか、すんと落ちる。「……死んでいた、かあ……」

口にしても現実感の無い言葉。
死。

そう言えばあの夢でもそう思ったっけ……どこだったかは忘れてけど。

でも、もし仮にこの期間だけ僕の魂的なものが「あの世」とやらに行っていたら？

それならきつと天国寄りなんだろう。

あんな綺麗な風景が地獄なはずないもんね。

僕はこういうのをぜんっぜん信じてなかったんだけど実際に魔法さんにお目にかかっているし否定できなくなっているんだ。

あの夢の後半。

きれいな空と海と、そこそこに満足できる大きさの島。

あたたかくって気持ちよくって、穏やかで。

僕のことをぜんぶ知っていて受け入れてくれる人がいる、あの世界。

都合良すぎるってあのときも思ってたけど……あれが「あの世」っていうんなら納得できるかも。

あの世があんな感じなら死ぬのもあんまり怖く……いやあもちろん怖いけど「悪くはないかな」って思ってしまうのもムリはない。

あそここのどこかに母さんと父さんがいるんだとしたらなおさらだ。

まあ今死ぬっていうのはさすがに勘弁だけだな。

なにもせずにこのまま死ぬのはちよつと……もったいないし。

死んでた可能性があるけど生き返ったっばいからにはまた死にた

くはない。

せつかく女の子の体に慣れて女の子同士の話し方とかにも慣れてきて、話題とかも僕から振れるようになったのに……そんなのもったいないじゃない。

「んー」

でもやっぱりいくら考えても魔法さんの今回の冬眠魔法的なものがかった理由はさっぱりだ。

ついでになぜか激やせしていたのも分からないし、トイレしてないのも分からないし体もきちやなくなったりしてなかったのもまた分からない。

トイレにも行っていないのに起きてしばらく平気だったもんなあ……お酒の残ってる感覚も無いし。

「うーん」

昨日の夕方から夜にかけてっていう直前の行動じゃなくもつと前のことを考えてみたとしたって、外に出て魔法さんを働かせる実験を試してみたからといって、それだけで3ヶ月も寝ることになるなんて到底思えないし理屈も通らないだろうし。

だって魔法さんのすることって言えば僕をこの幼女にして髪の毛切らせないで、あと前の僕とごっちゃにしてこの情報社会な現代社会でも無難に生きて行けるって言う都合良すぎるようにする程度だし？

あるいはもつと前のできごと……いろいろと確かめていたときのかなにかに反応した？

それともお隣さんとかの……前の僕を知っている人に会ったこと？

遠出をしたこと？

家から離れたこと？

それとも山に登ったこと？

それとも——たくさんの人たち。

中でもあの子たち。

中学生のあの子たちと外で一緒にいる時間が増えすぎたせい——

なんて思いたくはないけど、僕が当時意識しなかっただけで……不特定多数の人たちとすれ違ったり近くでしばらく隣同士になったりしていた内の誰かの何かに反応して？

いろいろ連れ回されたりして訪れた、今まで僕が知ってはいたけど行ったことはなかったような、そういう場所に反応して？

……考えれば考えるほどに何もかもが怪しくなってきたけど、もがもつともらしくなるんだけど、同時にどれも説得力に欠ける気もしてくる。

つまりは堂々巡りだ。

だいたいこの夢と冬眠……このふたつは、今までの魔法さんの仕業とはなんだか質が違う気がするから。

だって今まで起きたのはどれも……この姿になったのはともかく、髪の毛を切ろうとする、前の僕の姿とかについて口にする、今の僕を前の僕と認識させる、っていうときにすぐにその仕業が確認できた。

つまりは原因と結果がきちんとながっていてわりとすぐに反応するっていう、なんでそれが起きたのか、ちよつと考えればわかる印象だったんだけどなあ。

よく言えば素直で、悪く言えば単純で。

それが僕の知る魔法さんだったはず。

……でも目にも見えなくて音も無いし気配って言うのも無いただの現象なんだ。

今まで運良くこういうのが起きなかっただけで、起きる可能性だけはおんなじくらいあったのかもしれない。

「……つかれた」

さつきから思ったことをひたすらに書き続けて真っ黒になった紙をぺらぺらと何枚かを眺めつつ、疲れて痛くなってきた手をさすさすしながら力を弱めにして、それでも書き続ける。

時間をかけて考えて書きながら整理してみても、魔法さんが怒る因果関係がはつきりしているのは、今のところ髪の毛を切るのと、前の僕関連のふたつだけだし、まだ断言はできない……か。

そもそもなんでこんな姿、銀髪幼女にさせられたのかっていう根本

的な課題も残っているしな。

さつき外を出歩きすぎたっていうのを挙げてみたけど、そうやって僕が気がつかなかっただけで他にトリガーになるなにかが起きていたとかあるいは起こしちゃっていたとか、そういう可能性だってあるしなあ。

そこまでいくともうキリがない。

堂々巡りの空しさはこの姿になったばっかりの頃にたくさん味わったからこのくらいでいいや。

書きもののあいだずっとコーヒーとか紅茶を飲んでいたんだけど……それでも寒い。

暖房が効いているって言っても寒いものは寒い。

特に足元。

僕の体感はまだ夏だもんなあ……

「……さむい」

もう1枚もこつと羽織った僕。

真夏から真冬でこの体になったのは春だから冬物は持っていない。だから家用のものはもちろん外行きのものも手に入れておかないとだ。

残念ながら……コートとかの冬物は高いのに男のときに持っていた冬服は使えない。

だって羽織るものでもぶかぶかなんだから下は当然合わないわけで、つまりは下半身が冷えるのには変わらない。

だから今の僕に合った服を手に入れる必要がある。

だけど今はクリスマスの前っていうこれまた絶妙なタイミング。

もう何日か早く起きてさえいればっていうのは贅沢じゃないだろう。

クリスマス前だから、通販だと注文したのが届くのは何日か後だろうし……。

「さむい」

昼……というか朝だけど、それでこれだ、夜はもつと冷えるはず。それまでに風邪でも引いたら困るしきつさと買ってこないとかな。

……きつと大丈夫。

半年……のうちの2ヶ月くらい毎日のように出かけて何かを踏んじやっただから、たかが駅前にはぼつと服を買いに行くくらい何ともないはず。

水分でたぶたぶになったお腹を抱えつつ出かける用意を……おつと、その前に洗面所だ。

なにしろ冬眠後の僕はとんでもなく痩せこけている。

いくら髪の毛や帽子で隠したって目元までこけているんだから、店員の人とかに「虐待!?!」って驚かれて通報されでもしたらめんどうだし困る。

だから、かがりに習ったついでに買ったたり譲ってもらったりしたのを使つて、かんたんなお化粧をしないと。

せめて、ぱつと見て何ともないように見えるくらいには血色とかいのように見せないよ。

髪の毛も軽く毛先とか整えておいたほうがいいかな。

女の人ってそういうのに敏感だからそれで目を付けられてもめんどくさい。

それならお化粧のポーチとかもまとめて持つて行って。

「……あ」

ぴたつと足が止まる。

……ひよつとして僕……今ナチュラルにいろんなことをいつぺんに考えていたけど。

知らないあいだに女の子として鍛えられた意識とか振る舞いとかが完全に定着……しちやつているんじゃないか……?

「……………」

……不自然に見えない程度の軽いお化粧だけにしておこう……これは緊急事態のための医療行為なんだ、おかしいことじゃないんだ……。

32話 クリスマスと騒動と 1 / 3

「ひいひい……」

寒すぎるのって声出ちゃうよね……暑すぎるときもだけど。

前、あつたかい季節に旅行へ行つたときにロープウエーで山の上とかに一気に行つたらこうなつた覚えがある。

肺まで冷たいって感じるレベルになると抑えきれないらしい。

そのくらいに外がすつごく寒い。

それはもう、家の中とは比べられないくらいには。

だって、雪、そこそこに積もっているっていうのにまだまだ降っているしなあ……。

僕の記憶にある限りこんな気温は生きてきた中で何日かなくらいだし。

寒さのあまりに思わずで雪道をのろのろ通り過ぎようとしていたタクシーを捕まえちやつたのは……不可抗力だ、うん。

家を出てからたつた10分そこらつていうのは……まあ薄着しか持っていないっていう事情が事情だし……？

あと体力も筋力もその他もろのすべてが落ちていているんだろうし大事を取つたんだ、うん。

……お風呂でそれなりにあつたまつてから出ただけど、本物の寒さには勝てなかつたらしい。

一応今の僕に合う服を重ね着したりカイロ持ったりもしてみただけど……10分もたないとはなあ。

普通寒い日なら相応の格好をするのに今の僕のベースが秋物……それもまだ寒くない秋物でその上にぶかぶかの男物を羽織る形だからそこまであつたかくないんだ。

……無理にでも買いに行くしかなかつたみたい。

ずつと寝ていた影響なのか、体、ちよつと歩いただけでもものすごくだるーくなつたし今日じゃなくてもとは思ふ。

体がまるごと重くなつたこの感じは風邪とかで寝込んだときに近いものだし、きつと痩せているのとおんなじ原因で体力も削られてい

るんだろう。

だって冬眠だもんなあ……家の中をうろろするくらいじゃたいして気にも留めなかったんだけど、こうやって少し歩くと体力つてはつきり分かるよね。

時間が飛んでいてびっくりしたり生ゴミ未満のナニカを片づけたりって忙しかったし、そういうのに気がつくヒマがなかったというか余裕がなかったというか……だからタクシーに乗るっていうぜいたくをしちゃったのかもしれないんだ、きつと。

こうしてタクシーに乗るのもまた相当ぶりの気がするし、たまにはいいだろう。

けどタクシーなんていつ以来だろ。

……たぶんお葬式のときとかかな。

つまりは、これまた10年ぶりってことで昔のこと。

10年に1度なら贅沢とも言えないな。

それにこれはしようがないことなんだからしようがない。

よし、自己肯定完了。

で。

タクシーの中……シートベルトが顔にかかりそうで手で押さえなきゃならなくてそればかり考えていたけど、乗った印象としては……なんだかこぎれいになったというか高級感があるっていうか、そんな感じ？

なんで目の前のモニターで延々と広告を聞かされなきゃならないのかは分からなかったけどまだ寒くて震えてたから気にならなかったけども、タクシーだなんて……前の僕るときにはそもそもモヤシだとしても男だったわけで、その男としての体力と脚力があつたもんだから使うだなんていう発想もなかったものだ。

旅行先とかでタクシー以外じゃ30分くらい歩かなきゃならないところとかだつて、ぼーっとして歩いていればすぐ着いちやうもんだから気にしないで歩いていたしなあ。

今思えばそれつてもものすごく良いものだったんだ。

ただ若いっただけで素晴らしいんだ。

若いを通り越して幼くなつた僕は良く分かる。

そう言えばこんな子供が乗ってきたらやっぱり何か言われるからまた魔法さんのお世話になろうかなって思いながら乗ってみたならんにも言われなくて……特段の反応もされなかったから拍子抜けだな。

ミラーでときどき見られてはいるけど、これくらいは普通の範囲……なのかな？

たぶんきつとそうだろう。

だってなんにも言つてこないしな、運転手さん。

信号待ちでもどこかと連絡とかしていないみたいだし……通報とかされないなら良いや。

まあ楽なぶんには文句はない。

今の時代なら子供でも乗るんだろう、きつと。

そうして結局駅前までたつたの千円くらいで……歩いたらタダだったんだけど貧乏性が抜けないし……いつもの駅前に到着して、さつと適当に服を手に入れて着替えてきて、もこもこしながらロビーでくつろいでいる次第。

もちろんすみっこのほうで。

「ふ——……」

缶コーヒーであつたまつてきて人心地が付いたのか、もの思いから戻つて来たらしい。

……考え込むクセは治らなさそうだなあ。

駅前もどこもかしこも人だらけだ。

しかもみんな長靴と傘で動くもんだから大変なことになっている。

……タクシー使つて良かった。

クリスマスっていうイベントの前っていうのもあつて平日なのにごみごみしていてうざつたいけど今日ばかりはしょうがない。

「……………あれ」

デジャヴ。

既視感。

知らないはずなのに知っていたりする……ような脳みその錯覚が

起きているらしい。

まるでおんなじようなことが前にもあった感じがして……つて思ったら、ああそうか。

ここはちようど、僕が「アイドルやらない？」って絡まれた場所です。

「……まさか」

イヤな予感がした僕は必死になって、髪の毛がほつぺたをばしばしと叩いてうぎったいくらいに頭をぐるぐると目に見えるひとりひとりに見てみたけど……ただの杞憂だったらしく萩村さんも悪魔さんの姿も見当たらない。

デジャヴじゃなかった。

ただ警戒しすぎただけだったらしい。

まあ、さすがにそうだよね……あんなことはそうそう無いよね。

今はちゃんと髪の毛も顔も隠してるから大丈夫みたいだ。

◇

少し休んだら楽にはなったし、服も最低限のものを揃えたしで安心した僕。

こうしてセーターとか着てみるとさっきの服装がどれだけ無謀な冒険だったのかがわかるけど、ああいった非常時はしょうがないしなあ。

……荷物増えちゃったから帰りもまたタクシーかな……無駄遣いはしたくないけど体力的に心許ないし、雪道で倒れたら大変だから今日ばかりは贅沢をしておこう。

なあに、3ヶ月分の生活費がかなり浮いたって思えば安い。

クセでぶらぶらしちゃっていた脚を落ち着けたら、さつきまで着ていた服が入った紙袋にがさつと当たった。

雪が冷たかったから靴まで買ったけど……しばらくは雪かきもしなきゃだし長靴も必要だしな。

長靴とかほとんど履いたことないけど……雨の日とかに履けるか

ら使えるし？

おかげで今の僕は下着以外みんながみんな新品に包まれている。でも身長的に子供っぽいデザインのほか合わなかったから……余計に子どもらしくなっちゃった気がするけど何回か着ているうちに馴染んでくるだろう、きつと。

……長靴にふかふかの子供用コート……ボンボンの付いた帽子も被ってる僕はどこから見ても子供でしかない。

やっぱりアイデンティティーにすぎずき来るけどしようがないことなんだからしょうがないんだ。

店員の人のあしらい方とかも身についた僕は無敵だ。

あの人たちって子供と見るやにじり寄ってくるもんだから、先にアクション考えておかないとずるずる引きずられることになるんだ。

『どうしたの？』

『おかあさんは？』

こういうセリフが発せられる前にわかるようになったくらいだしな。

「おかあさん？ もう居ません……」とか言ったら悪いしなあ……事実なんだけど。

母さんはあの天国みたいところで待っているだけだろう。

なぜかみんな聞いてあげない父さんも一緒に、きつと。

ちなみに輪廻転生を考えるととくにナニカに生まれ変わっている。

天国で待つとか次の人生に生まれ変わるとか……大人になるまでは散々考えてたけど今は割とどうでもいい。

特に今は幼女から逃れられないことだけだしな。

ちなみに服装も子供用のだけどカラーリングは男に見えるのにしておいた。

というか単純に無難なのってだけ……ほら、女兒用乗ってピンクだから。

髪の毛を隠せば男でもおかしくない色合いで、帽子とパーカーで必死に隠していた夏までよりも楽ですらあるのが新鮮だ。

周りの女性……に限らず小さな子、それこそ今の僕くらいの子でもスカートとスパッツとかタイツとかスカートの代わりに短いズボン、ホットパンツっていうらしいんだけど……そういうとんでもない格好とかも勧められたけど、僕にはそこまで張り切る根性もないしズボンで済むのならそれに越したことはないし。

肉体こそ女の子だけどスカートとか脚をふとももまで出すって格好にはやっぱり抵抗あるもんなあ。

それを思うと女の子ってすごいよね……真冬でふともも出すんだから。

でも服の種類もサイズも一回目の試着でばっちりだったし、色合い……コーデイナートも無難だけど怒られるほどじゃない感じになったし、今年の流行とかも意識したし。

これで立派な女の子として、……。

……僕、また意識が……女の子として見られることに傾いていない？

気のせいじゃなくて？

「……………」

……知ってはいたけど習慣っておつそろしい。

みんなと会ったときにダメ出しされたり、そのまま買い物に行かされるハメになったりするっていう恐怖もあるんだけど、それにしても自然に考えてるのはまずい。

帰ったら男用のファッション雑誌も読んで自尊心を取り戻そう。

髪の毛を触りつつ顔を上げて目の前にそびえているクリスマスツリーでも見てみる。

吹き抜けのロビーを3階くらいまで突き抜けているツリー。

イルミネーションがまぶしいほどに、これでもかかってくらいに張り巡らされている。

もちろんてっぺんには巨大なお星さまだ。

そして下のほうでは自撮りしている人多数。

周りを見てみればどこもかしこもクリスマス一色。

うん、心動かされない。

男だもん。

こんなことどうでもいいからそれより家でごろごろしていたいて心底思う。

うむ、完璧なる男の心だ。

「よしっ」

心の安寧を取り戻したところで、改めて時差ボケのような変な感覚を思い出す。

——寒くて暗くて静かで雪が降って積もった白と、クリスマスの赤と緑。

それに対するは僕の主観で昨日まで感じていたはずの、残暑の熱い日差しやセミの声と湯だったアスファルトときついぐらいの緑と、高い空の水色とオレンジ色。

……半年飛んだっていう感覚が染みってくる。

未だに「これもまた夢なんじゃない？」って思いもするけど……次に目が醒めるまではここが現実ってことで。

あの夢の中でも今みたいに好き勝手に動けたんだし五感もおんなじくらいあったから、ここがまだ夢の中だとしても否定できる要素はないけども。

せいぜいが知っている世界だってことくらいかな？

なんだか時間軸はちよつと……いや、相当にずれてはいるけども。

◇

人混みは苦手だ。

というわけでまだ体力が戻りきっていない僕は、いつだか来た覚えのある喫茶店の奥のほうの席を確保してなんとなく選んだハーブティーを飲んでいる。

かがりがどこかで飲んでいた香りだけど……あつたかい。

ほっとするけどまだお昼前でこの混みようだし、ちよつと休んだらさっさと帰ったほうがよさそうだ。

だってほとんどクリスマスだもんな。

夏にかけていろいろと連れ出されたせいで耐性ができているからもう少しなら大丈夫そうだけど……今は冬眠後っていう状況がなあ。寝過ぎたせいで体もだるいしあんな夢とこんな現実とで精神も不安定だし、なるべく家でぐだつとしていたい。

とうか本当に冬眠していたんだとしたら栄養とかもすつからかんだろうし、事実痩せているわけです。高カロリーなチョコとかで補給してしばらくは安静にして肥え太らないと本気で病気にかかっちゃいそう。

この体で病気になったらとつてもめんどくさいから気をつけないと。

いや、魔法さんのあれでどうとでもなりはするんだらうけどさ……。

「……む」

家を出るときにはまだ起動すらできなかったスマホを思い出す僕。

3ヶ月のせいでバッテリー、空になってたから結構掛かったなあ……。

電源ボタンを押してしばらく。

……起動が長い。

あの子たちのことをふと思い出したけど……あれ、もしかしてやばい？

だってみんなからしてみれば夏休みが明けたばかりのあのタイミングで僕との連絡がいきなりつかなくなって……「気が向いたときだけ」って言うてあるにしても1日に何回か返していたメッセージとかも返って来なくなつて既読すらつかなくなつたってことになつていて？

「よっほどのことがなければかけて来ないで？」って言うておいてある、教えただけの電話番号にかけてみてもスマホの電源がないもんだから留守電にすらならない。

ケチつて留守電つけてないんだ……ほら、今つて1個1個でプラス料金になつて、僕が通話する時間なんて年に何分だから……。

どれだけチャットしても見られなくて、電話しても「電源が入つ

「ていません」っていうあのメッセージが流れるわけで……つまりはいきなり音信不通になっちゃった……ということになるわけで。

……どういいわけしよう。

「ごめん、ちよつと3ヶ月くらい寝てた」なんてまず信じてもらえないだろうし……。

前から病弱ってことにしてたし、なにかあったってことくらいは察してくれるだろうけど、それだけに今から説明するってなると気が重いなあ。

……けど、僕は決めたんだ。

みんなに嘘を——どうしても言えない部分以外はちゃんと言うって。

32話 クリスマスと騒動と 2 / 3

びっくりすると「うへっ!?!」とか「んに!?!」とか変な声出るよね。普段話さないからとっさの声に変なことになるんだ。

男のときは「あつ」とかしか出なかつたけど、ちよつとだけ語彙が広がるのは女の子だからかも。

その証拠に女の子たちってちゃんと「きゃあ!」って叫ぶもん。

「ぴっ!?!」

……だから僕が出しちやつた変な声はしようがないんだ。

しようがないんだけど派手な声だから周りの人が振り向いてくる。

視線が集まってくるのを感じる。

僕の髪の毛へ、続けて顔へ注がれてくるのが分かる。

……さすがに暖房の効いてる喫茶店でもこもこの帽子を被り続けるのは厳しいからって脱いじゃってるから……全力で影を薄くして気づかれないようにしていた僕の見た目に視線が集まる。

視線ってただの目の動きなはずなのに第六感か何かで頭皮や顔のお肌にちくちくちくちくと分かっちゃうんだ。

「うう……」

……恥ずかしい。

暑いけどもこもこを深く被り直して何も気にしないフリをしながらスマホをしばらくいじっていたら……ようやく視線が逸れてきたのが分かる。

だってしようがないじゃん……未読が500で着信履歴が800とかになっていれば誰だってびっくりもするもん。

「もしかしたら100とか行っちゃってるのかな?」って予想は甘すぎたらしい。

こんな数字初めて見た……迷惑メールだって年単位で集めないところはないのにな。

背筋が凍るとはこのこと。

指先までしつかりと冷たくなつたし。

せつかくあつたまつていた指先までまた冷たくなつちやつたから

注ぎ足したハーブティーを飲んで温まることにする。

「……………」

ちらちら周りの人が見てくるけど無視無視。

通報されないんだったら良いんだ。

こくこく飲み続けてほーっとしているうちに落ちついてきたから……恐る恐るでぎつと斜め読みしてみる。

まとめて見たからびっくりしたものの、ひとつひとつはそうでもないことに気がついてきた。

連絡の間隔も連続でつてわけでもない。

最初を除けば……僕が眠っちゃって3日くらいは頻繁だけ、どそれ以降はそこまでじゃない。

夏休みが終わって次の学期が始まったばかりだっていうのに、その週末からもうどこかに出かけたりするっていう約束していたし、日程こそ決まっていなかったけどなんとなく「良いよ」って感じの約束っていっぱいあったしなあ……断れなかったとも言っうけど。

だからだからこのときみんなにとつて……その前日まではほとんどいつでも連絡が取れていた僕がいきなり返事を返してこなくなって、どうしても心配になってしてみた電話にも出なくなつて……つてことになる。

しかも都合の悪いことに僕には病弱設定があると来た。

それもこの春までずーっと入院していたつていう重症のが。

言わなきゃよかった？

いや、言わなかったらもつとたくさん連れ出されていただろうし、だるい日は「今日は病院だから……」つてもものすごく便利言い訳もできたからあれでよかったんだらうけど……こんなの誰だつて予想できないうしなあ。

そんなわけで当然に心配で仕方なかったんだらう。

住所とかどうにか教えないで済んでいたんだけど、そのせいでみんなからしてみれば……僕がいきなり消えちゃつて連絡が完全に取れなくなつたつてことになるわけ。

逆だつたら、こんな僕だつて……薄情な僕だつて多分気にはなるし

なあ。

ちよつと仲のよくなつた知人つて感じに思つてる僕ならともかく、友だちになるための垣根が低いあの子たちにとつての僕もまた友人で、友人つてことはとつても不安になるだろう。

「……どうしよう」

謝るハードルがもつともつと高くなつちやつた。

◇

まあしようがないことなんだからしようがないつて気持ち切り替えた僕はお店を出た。

歩いて上り下りできる段差じゃなくなったエスカレーターがごとごと言うのに身を任せての移動だ。

……よく考えたらあつたかい上下と上着……ひざ丈のコートだけど、それから靴まで揃えておいたついでに下着も買っておきたくなつたんだ。

だつて寒いし。

座つていられるだけでお尻からじんわり寒さが来るんだ。

夏は暑かつたからシャツとぱんつつていう快適で楽で見ても楽しめる居心地のいい格好で過ごすことも多かつたけど今は冬、とても今着ているような薄つぺらいものじゃ耐えられないだろう。

ちゃんと厚手であつたかいものを買つておかないと……だつて寒いし。

もともとこの体は体温も低いし冬は苦手なのかもしれないつて思う。

女性の体は冷えやすいつて言うし、この体の体質のせいじゃないかもね。

幼女だつて「ついてない」つていうことは女性のひとつだしそういうことなのかも。

シャツはともかくぱんつはいつものぱんつ……ブリーフ程度の防御力しかないこれじゃなくなつてちゃんとおしりから腰まであつたかくなるシヨーツつてやつがよかつたはず。

いや、そもそもぱんつじゃなくて全部ひっくるめてショーツって言うんだっけ……どっちでも良いけど。

腰骨からおへその下にかけてと太もものつけ根がはつきり見えてなんとなく嬉しいからっていう理由で、あとは憧れだったっていうしょうもない理由で「いわゆるぱんつ」を楽しんでいたんだけど寒さには勝てない。

……さすがに毛糸のとかまではしなくてもいいだろう。

そこまでいくと本気でお子さまみたいだし、ちよつともこもこしすぎでちくちくしそうだし。

あとタイツとかもあつたほうがあつたかいかも。

厚手のものを穿いておけばじんわりあつたかくなるかも。

そう思うと男の体って基礎体温が高くて良かったんだなって実感する。

ああ、手袋も忘れていたな……やっぱり急いでいると僕はダメだ。

「……………」

……みんなにどうやって返事するかはまだ決めていない。

だってまだ落ち着かないし、まだ目が覚めたばかりでなにがなんだかって感じだし。

もう少し慣れてから……スーパーへの買い出しとかも大変だろうし掃除とかもちゃんとないとホコリまみれだろうし、ちよつとでもいから雪かきもしておかないとご近所が大変だから。

冷蔵庫も様子見しなきゃいけないし、がさつと無理やり詰め込まれた感じに溜まっていた郵便受けの中身とか不在票とかその他もろもろのお世話もあるんだし。

だから何日か忙しくしながら考えて、それから連絡しよう。

……がんばって1週間以内には、きつと。

そもそも僕自身がまだこの状況を完全には把握できてはいないんだし……またなにか新しい魔法さんの魔法が降りかかるって可能性も無いでもないし？

さっきの未読の量を見たらそんな言い訳で延期するほどになった僕。

せつかく夢の中で……つい数時間前までは僕のことちゃんと話そうって決心していたのになあ。

……タイミングが命。

黒あめさん……お姉さんとやらの鉄則はもうしばらくおあずけだ。

「よつと」

エスカレーターのスピードもつと速くなればいいのにつて前は思ってたけど、幼女になってみると遅い方が安心できるって知ったそれから下りる僕。

ちゃんと足元を見て勢いよく下りないとちよつと危ないから毎回ひやひやする。

さてさて、さつき行つた店に行くつていうのも気が引けるけどめんどくさいからいつか。

靴下も下着もサイズは分かっているんだからたいして時間はかからないだろうし。

「……………ん」

なんか声があちこちに反響している……走つてる音とかも？

なんだろう、学生がはしゃいでるのかな？

そう思うけど何人かの大人——男性だな——大声を出しているのがここまで聞こえてきて胸がぎゅつてなる。

物々しい……というよりは騒々しい感じだけど、なにかあつたのかな？

こんなところで、クリスマス前の浮かれているこのときに……つてことは色恋沙汰とかな。

……いやいや、かがりの恋愛回路しか備わっていない思考に汚染されすぎている。

ゆりかで中和して……あ、だめだ、いっつも微妙に古いセンスで「ここはギャルゲー的には……」って言い出したりするから、ここは常識人なさよとか案外まともなりさりんを思い出して中和中和つと。

「!!」

「!?!」

「、」

「……………!」
それぞれの声が男の人のなのか女の人のなのか、どのくらいの歳なのか分かるくらいにはつきりとしてきた。

……エスカレーターで移動してる？

そう察した僕は急いで目的のお店に行つて隠れるようにワゴンの傍に。

なんとなくで手に取っていた桃色の毛糸ぱんつを手に取りつつ耳を澄ませてみる。

毛糸つて柔らかいよなあ。

両手でもみもみしながらじつとエスカレーターと階段のある方向を見る。

騒動に巻き込まれるのは勘弁だし怖いし……収まるまでここにいればよさそうだ。

僕には野次馬根性とかもないし、それに今どきならSNSで何があつたのかなんてすぐに分かるんだし。

ヘタに巻き込まれたら……警備員さん相手でもとつても困る幼女つて言う身分だから警戒すること少し。

エスカレーターをだだだどと駆け上がる音に続いて女の子がふたり飛び出すようにして上がってきたのが見える。

エスカレーターの下のほうを見やりつつふたりで何か相談をしているらしい。

「……………!」

ふたりともその辺にいそうな普通の格好の女の子だ。

こんなに暖房効いたところでコートを着たまま走っていたらしいから暑そう。

だけどあの髪の毛と顔、どつかで見た覚えがなくもない感じ。

「うーん」

毛糸の感触を楽しみながらこっそり眺めていた僕は思い出す。

……あ、あのときの子たちだ。

えっと、萩村さんに送ってもらったときにいい匂いの香水とかしてた子たち。

直接会ったことはないけど車の中の匂い越しに一方的に知っているんだ。

あと、この前テレビとかで少し見た覚えがある気がする。

名前は……いつものように覚えていないけど、たしか萩村さんのところの芸能界の人だよな？

アイドルとか言っていた気もするなあ。

そんなふたりはどっちに行こうか言い合って、指さして行きかけて、やっぱって感じでたたらを踏んでいる様子。

……焦っているからかもたついていて、見ているだけでだんだんはらはらしてきた。

うーん……僕が普通の男だったときなら「どうかしましたか？」って言えるんだけどなあ。

なんか危なさそうだったらお店の人に言っておけよう。

背の高い方は明るい緑色で小さめのメガネをしていて、りさりん程度のちようどいい……きつとお手入れとか考えたらちようどいい長さの量の髪の毛をそのまま下ろしている感じ。

あとおしゃれな帽子もかぶっている。

それで背の低い子はというところは大変そうな長さの髪の毛……まあ僕ほどじゃないけど……をよく知らない感じに結っていたりして、後ろはポニーテールっぽい感じで明るい茶色に染めている様子。

ちよつと前……女性用、いや、女の子用のファッション雑誌とかを読み始める前は知らなかったんだけど、髪の毛をくくる場所によって細かく呼び方が変わったりするらしいね。

まあここでいちいち調べるのもめんどくさいから分かりやすくポニーテールでいいか。

視力が良くなった今の目で観察するに、ふたりとも髪の毛の結い方とか留め方とか服装とかのそこそこにおしゃれが光っている。

かがりとかゆりかとかが目を輝かせそうな感じ。

いや、多分女の子なら憧れる存在。

だってアイドルだもん。

緑メガネさんと茶色ポニーさんは息を整えながらまだわたわたと
している。

そうこうしているうちに騒がしい声が少しづつ上がってくるのも
聞こえてきて……あ、僕も手汗がじつとりしてきた。

こういうのってどきどきするからあんまり好きじゃないんだけど
……早く逃げてくれないかなあ……。

……あの子たちは芸能人。

って言うことはきつとマスコミとかに追いかけているんだろ
うし、大変そうなのは同情するけどそういうお仕事だからしょうがな
いよね。

それにしても芸能人ってああやって追いかけられるのが宿命なの
か。

本当に断れてよかった。

じゃないと今みたいのにのんびりぶらぶらすることもできやしない
もん。

でもあの子たち。

僕みたいにさ……人目を気にするんだったらさ、もつと変装とかし
て。

せめて髪型を変えるとかいつもの僕みたいに帽子とかで隠しちや
うとかは最低限だつて思うんだけどなあ……ほら、1回見たことがあ
るだけの僕でも「あ、あの子たちだ」つて分かるレベルだし。

でも誰か大人の……それこそ萩村さんとかのマネージャーさん
とか警備員さんとか誰かが傍にいたりするものだつて思っていたけ
ど違うんだらうか。

そうしてわたわたしているふたりをしつとりしてきたぱんつをも
しやもしやしつっつ考えていた僕。

「……………」

「……………」

……緑メガネさんがぴつと立ち止まったかと思ったたら、なんだか僕
を見ている。

視線がぱちつと合った感覚。

そうしてじつと見られて縊るような目つきで見られている。

……なんで？

僕、こんなに離れたところの女性服売りのワゴンにもたれかかってぱんつもふもふしてるだけなのに？

こんな背の低い子供じゃなくて鍛えてそうな男の人探した方が良
いって思うよ？

ほら、このとおりに毛糸のぱんつをもふもふもこもこするしかでき
てないし？

「……………」

「……………」

気まずいときつて時間が何倍にもなって感じる。

だから逃げている2人のうちの1人とじ——つと動かずに見つめ合う。

そういう気がしているだけって分かっているもなんだかもにつてする。

緑メガネ越しの緑メガネさんと目が合った感覚で体の中に軽い電流が流れたような……そういう不思議な感覚を感じながら「なんでだろ」って考えること数秒くらい。

けっこう離れているから確かじゃないけど……目が良くなつたつて遠いところのものが細かく見えるようになったからといって、メガネって光っているしなあ。

だから目が直接はつきり見えているわけじゃない。

けど……ガン見されている気がする。

だって僕の方向いて硬直しているし。

こつちには服しか売ってないんだ、僕以外を見てるわけはなさそうだし。

そうして緑さんが目をそらしてくれると思ったら今度は僕を指してふたりでひそひそひそひそとしてる様子。

……まさかね？

止めてね？

僕を巻き込むの……って。

「……………っ！」

2人はうなずき合うと僕の方に走り出す。

なんで？

思わず身構えたけど……コートが重いのか疲れているのかよたよたとこちらへ走ってくる2人を見て気が抜ける僕。

背の高い緑メガネさんはわりと余裕そうだけど服が重そうなのが

僕でも分かるし……でもなんで……？

止めて、巻き込まないで。

そういうのも含めてアイドルなんでしょ？

大体守るはずの人はどうしたの？

その人がなんとかすればいいのに。

そうは思うんだけど足がすくんで動けない僕。

とっさのことに弱いつていう僕の弱点がまた僕を苦しめるんだ。

もうだめだ……おしまいだ。

僕は目立ちたくなくつて目立つちゃいけないのに。

魔法さんがあるからいざとなったらなんとでもなりそうだけど、でもやっぱりめんどくさいのに。

なんで僕はいつもこうなんだ。

そう頭の中でぐるぐるしてたけど、ふと手のひらの毛糸のぱんつで緊張がほぐれたらしくつて急に体が動くようになる。

……あの子たちは僕の方へ一直線、たぶん10秒もしないで来ちゃう。

そうしたら追いかけてきた人たちもじきに来てめんどくさくなる。

でも……昨日まで見ていた夢の中の突拍子のなさに比べたらどうつてことはない気がする。

そんな不思議な感覚。

修羅場を経験するとそれ以下はなんてことないようになるよね。

あの夢が修羅場だったのかは置いておくとしてもやっぱり慣れつて大事。

「……よしっ」

ぐつと両手を握ったつて思ったらまだ毛糸のぱんつがあったからそつと戻す。

そうして冷静に見回すこと少し。

……ここはエスカレーターの出口の真つ正面のお店で、その中でもまん中くらい……だけどワゴン以外に遮るものがない見通しのいい感じの通路で、僕はその通路においてあったワゴンの中のぱんつを物色していたのであつて。

いや、買おうとしたわけじゃないけどなんとなく気になったから
だ。

決して買いたいとは思わないんだ。

それはいいとして、つまりここは女性用の下着売り場……ランジェ
リーだっけ、と子供服売り場の境目くらい。

そしてお店にいたはずのお客さんとかは外からは見えないところ
のすみっこのほうのレジに……店員さんと一緒に集まって呑気にも
結構な大声で笑い合ったりしていて、まだ騒動に気がついてすらいな
い様子。

僕が今大声を出しても多分僕の声がかき消されちゃって意味がな
い。

女性同士の世間話に対して中身男な幼女の声帯は非力すぎるんだ。

だから、……。

「あ」

ふと横を見上げた僕はそのカーテンに気がつく。

そうか、試着室……それなら。

することが決まってようやく動いた足と荷物を引きずって試着室
に荷物を押し込んでみてもどかしく靴も脱ぐ。

ちらりと外を見てみるともうすぐそばまで来ているふたり。

……騒動に巻き込まれないためには今ここでそれを起こさせなけ
ればいいんだ。

だからこの子たちがこっちに来ちゃったのはもうしようがないと
して、残りの……追いかけている人たちが邪魔じゃなければいいん
だ。

それこそ……この子たちが別の階とかに行っちゃったって思っ
てもらえばいいんだ。

それなら少なくともここで、僕のすぐそばで大勢の人が集まってや
やこしいことになるのは避けられるはず。

だから見つけられる前に隠しちゃおう。

いや、別に放っておいてもいいんだけど……そこは僕が男だっ
て言うアイデンティティーで逃げてる女の子たちを見過ごせないってだ

けだ。

ささいだけどこういうのひとつひとつが大事。

だから僕はカーテンから頭だけを出して、そのふたりへくいくいと手招きをしてカーテンをつかんだ試着室を指さす。

これで伝わらないんならそれまでのこと。

「……………っ！」

だけどその子たちはどっちも僕の無言のジェスチャー……………だつてとつさに言葉出ないし……………に反応して走ってくる。

「……………ありがとうございますにやつ」

「ありがとっ」

今「にや?」って言わなかった君?

……………ああ、テレビでもそんな語尾してたような?

プロの根性つてのはこんなときにもすごいらしい……………良く見たら猫耳と尻尾のアクセサリー付けてるし。

「……………くつも」

言葉足らずな僕が指差した、多分普段の癖で脱いじやつたそれを取り込むようにまたまたジェスチャーで慌てて引つ込めるふたり。

うん、こういうときこそ普段のが出ちやうよね。

……………でもまだ油断はできない。

こんなところで女の子を追いかけ回す輩はきつとしつこいんだろうしな。

めんどくさいのは勘弁だからなんとか追い払いたい。

だからなんか思いついたこれやってみようつと。

「この階だなー!」

野太い声が「だん!」って言う……………多分エスカレーター駆け上がったきたんだろうな……………大人の男だからすぐく響くし……………音と一緒にここまでのはつきり聞こえてくる。

「っ！」

「にや……………」

カーテンって言う布一枚な心細い仕切りしかないって気がついちゃった彼女たちが……………せつかくほつとしてたみたいなのにまた縮

こまっちゃつてる。

うん、怖いよね……僕も男の頃から男の大声とか苦手だったし。女の身になってみると余計に怖いんだ……手を上げられそうな気がして。

いざつてときに絶対に敵わないって自覚しちゃうと怖いよね。

僕も分かるようになった。

そんなやつはきつと元から僕が苦手なタイプの人間。

丁寧に相手する必要はない。

その声の主に連れられたたくさんの人たちが走ってくる音が聞こえる。

どたどたばたばたと服飾フロアにはふさわしくないような騒がしい音。

こういうのって営業妨害とかで警備員さんがなんとかできないのかな……いや、駆け上がってきたんだったら間に合わないか。

「こっちの方へ来たはずだ!」

「本当だな!」

「歩いていた人から証言が!」

……この勢いで何人にも囲まれて問い詰められたら言わずにはいられないよね、通りがかりでも。

「……………」

「ね、やっぱ迷惑かけちゃうし」

「にや……でも今出ても」

……僕はマナーを守らない人は嫌いだ。

上品である必要はないだろうけど、それでも人としての最低限のそれはあるだろうって思うから。

じつとカーテンのひらひらを見つめる。

……次第に聞こえてくる声から察するに少なくとも5、6人。

普段は他人になんとも思わない僕が「くたばってくれないかな」ってすら思うほどだからよっぼどだな。

「すみませーん、ちよーつと入りますねー!」

「こ、困りますお客さま! 報道関係者の方なら先にアポのほうを」

「今はそんな余裕ないんだよ！」

「大声は止めてください！ け、警備員を呼びますよ！」

「おい、面倒だから落ち着け」

さすがに気がついたらしい店員さんが止めようとしてるらしいけど……女の人1人2人で血相変えてるだろう野太い声の男たちを抑えるのは無理だよね。

けどマスクコミの人ってこんなにガラ悪いのかな……ああいや、今なら個人でも配信とかでできるしな。

「か、買い物をされている一般のお客さまもいらっしやるんです！」

「そ、そうです！ そんなに大勢で詰めかけて……しかもこっちは女性用のランジェリー売り場ですから……遠慮」

「男が下着売り場に入っちゃいけないのか？ あ？」

「い、いえ、決してそのようなことは……」

うん、怖い。

お腹の底がじくっとする。

……でもきつと、今話してる店員の人とかこの子たちみたいに生まれてからずっと女の子だった人たちが怖いはずなんだ。

「あ。……ちよつと、店にいる客とかに撮られてネットにアップされたら不味いっすよ」

「しかしこのチャンスを見逃すわけには！」

「じゃあ女の私たちが行ってきますから。 外に逃げだそうとしてきたらお願いします」

「分かった」

あ、女の人も居るんだ。

「というわけでー、私たち女だけなら問題ありませんよねー？ 私たち、ちよつと見たいのがあってー？」

「いえ、ですからカメラのほうは」

「チツ……はい……ほーら、カメラは外で待ってもらうんで。今は私たちはただのお客ですよ？ なら問題ないですよね？」

「い、いえ、でも」

「じゃー私たち、ちよつと服を覗きに來ただけなので入りますねー？」

買う意志あるんで客扱いですよねー？　ねーねー、どれにしよつかー！」

「……………せめて他の方のご迷惑にはならないよう。　ご試着されている方もいらっしやいますから邪魔は」

「……………！　試着室!!　行つてきますっ」

「あ、あのっ！」

店員さんの……………多分僕を見てたんだろう、気配りがアダとなった様子。

まあ今のはしょうがないって思う。

ヘンな人には理屈通じないもん。

と言うかふと思ったんだけど、僕、今この人たちの会話すぐ傍で聞いているんだけど……………女性用の下着売り場の試着室でカーテン1枚つてどうなんだろう？

女性つて案外、不意に開けられる恐怖つていうのをそこまで感じないんだろうか。

……………あー、試着室は奥にもあつたし普通なら下着はそっちで試したりするのかな。

そっちならドアがあつてカギがかかるようになっていたし？

ここは普通に試着したり……………ぎりぎり子供服売り場からも男用の服売り場からも近いし、あふれた人用なのかもね。

なら鍵掛かる方だったら……………いや、ドアの上から覗かれたらおんなじかあ……………。

普通なら、普通ならこんなこと起きないもんね……………僕のせいでもあるんだけど全部あの人たちが悪いってことで。

でも、手で開けるカーテンしかないんだ。

あの様子だと「あ、まちがえましたー☆」とか言つてわざと開けるっていうのも充分に想定できる。

ていうかしてくるだろう。

このまま隠れてやり過ぎせそうかなとも思つていたんだけど、やっぱり思いつく限りでの最悪の状況つていうのを想定すべきだ。

だからこういうときはインパクト重視で有無を言わさないのが必

要。

「……………」

「え？ あの」

「ごご。 コート脱いで頭から被ってなるべく小さく小さくなつて」

「にや？ でも、それくらいじゃ」

「早く。 すぐ来そうだから」

アイドルさんたちにもまた有無を言わせない感じで、普段のかがりにするみたいに簡潔な指示を出しながら僕ももぞもぞ脱ぎ出す。

カーテンをちよつと開けただけだと死角になる入り口。

明るいところからだとよく見えないスペース。

……そこにふたりを隠すんだ。

でもあの人たちなら「そこちよつと見せて？」とかやりかねないから……丸まってくれた2人の上から僕の着て来た服を被せていく。

僕が来ていたコートとかカーテンから手を伸ばしたらつかめた適当な服とか僕のセーターとかシャツとかズボンとかをばさばさと被せていく。

「えっ……………」

「そ、そこまで……………にや？」

うずくまりながら服たちの下敷きになってスキマから目だけがこちらを向いているおふたりさんがなにかを言いたげな顔つきだけど、唇に指を当てて静かにしておいてもらおう。

「しー」

「ひゃいっ」

「にやっ」

ズボンを脱ぐとさすがに寒い。

けど暖房が効いてるからしばらくは大丈夫なはず。

「む」

鏡に映っている僕はシャツ1枚。

……こういう外でこういう格好になるって……なんかどきどきするな。

「…………奥も含めて人がいるのはここだけみたいです」

「じゃあ私が。……んっ、すみませーん緊急なんですーちよつといいですかー？」

やっぱり無理やりに来るらしい。

……女の子って同性だと結構強引だよね……かがりとかがりとか。

あの子のおかげで相当な体勢が着いたって思う。

「ちよつとお客さま、他の方にまで！」

「えつとですねー。……あーめんどー……あ、そうだー、はぐれちやった人がいるんですけどー、その人たちなんですけどねー、大切な用事ですぐに行かないと困っちゃうんですよー！ 土壇場でやだよだつて逃げちやったんで顔見知りなんですけどー！」

……雑だなあ……僕でももつと良い言い訳思いつくよ？

まあ無理やりにカーテンさーつとしないだけの理性がある人たちつていうのだけでまだ話は通じそう。

それだけが救いだ。

にしても強引だし、多分返事しなかったら勝手に開けるだろう。

じゃあ靴下も脱いで……いや、ここは片方だけ半分脱いだ感じにして、と。

よし。

「——えつと、なんですか？」

あえてカーテンを半分くらい……控えめつて感じに開きつつ、上目づかいで見上げる僕。

上目づかいには慣れてる。

こうすると、特に女性にはきゅんと来るらしいつて言うのも。

多分庇護欲煽るんだろうね……だつて幼女だし。

さらに普段の演技の実戦だつて気持ちで表情筋をがんばつて動かして、不安そうな顔とおどおどした感じの声を出しつつ言ってみる。

「ぼ………、わ、わたし……今、着替えてるんですけど……」

ことさらにあざとく、儂い幼女を意識して。

こういうときには下ろしている腰までの薄い色の髪の毛が強烈だ。

見下ろしてくる女の人たち……思ったより普通な印象の人たちだ

……は、僕の顔を見て気の抜けたような表情をして。

それから僕の髪の毛へ、そして体を見てからようやく「しまった」って感じになっている。

うんうん、予想どおり。

効果は上々だ。

どんな悪い人でも子供には甘いもの。

さらに今の僕は胸元だけボタンを外してはだけさせていて、その間からは……少しでも温かくなりたいから買っちゃったあつたくてかわいい感じのブラジャーが覗いている。

僕の見た目のインパクトで本当に着替えている途中だっけに見えるだろう。

ぱんつはシャツの裾で隠れるから恥ずかしくないし、ズボンだといんパクトないしって脱いじやってふとももの際どいところから片方の靴下まではつきりと見えているはずの僕の白い脚。

同性でもぼけーってなるのはかがりて証明済みだ。

……あ、「わたし」って言ったのもしかして初めてかも？

まあ特にこだわりはないから良いけども。

「……………」

「……………」

「……………??」

「……………」

「そんなのどうでもいいからそれ見せて」って言われないから成功なんだろうけど……じつと黙ってどうしたんだろこの人。

なんだか無言の間が続いているから適当にもじもじつとしてみたり、髪の毛を弄ってみたりして早く出てけアピールをすることしやし。

「……………あ、ご、ごめんねー？ 人違いだったみたい！」

無事に成功した証として女性が子供に話しかけるとき特有のトーンと話し方になっている様子。

「お、お邪魔しましたーっ」

しゃつとカーテンを閉めてくれたけど……顔、真っ赤になっていた

のなんでもだろ。

女性が……普通の人だったよなあ……こんな幼女の半裸を見たからってどうこうなるわけもないしな。

うーん？

……あ、下で見上げてきてるふたりも顔真っ赤。

いや、女の子なら学校とかの着替えでお互いの見えるから慣れてるでしょ……？

「……ふうつ。……こっちには居ませんでした！」

「ちっ！ じゃあさっきの見間違いかよ！」

「それならやつぱそのまま上に逃げたんじゃない？」

「いや、俺たちがここぼっかり見ているあいだに……エスカレーターでもエレベーターでも、とつくに降りているかもしれねえ！ 下の連絡を！」

「はいっ」

まーたどたどたとせわしい音……すぐにエスカレーターを駆け上がる音と一緒に消えてひと安心。

「……お客さま、大変失礼しました」

ほっとしていたらカーテン越しにさっきの店員さんの声。

「ごめんなさいね？ 怖かったでしょう……すごい剣幕で……えつと、みんながわーつと来たもんだから私、止められなくて」

「いえ、平気です」

この店員の人もこっちが子どもと見るや口調が変わる人だった様子。

別にいいんだけど……慣れてるし。

ちよつとした演技をしなきゃならなくてとっても疲れたけど、つまりは非常に不本意ではあったけど……でも、これで何ごともなく穏やかになってくればばんざいだしコスパってやつもいい。

「うむ」

僕は男だし、別にふとももさらしたって全然平気だしな。

ガワも幼女だし見られて減るものなんてなにひとつとして無いんだ。

僕のぱんつを見せて何かが解決するなら喜んで見せるよ？

……ん、そう言えばふたりともずつと丸まって疲れないのかな。
顔赤いままだし……酸欠？

「……もう大丈夫みたいですよ？」

「……あ。ほ、本当ね……」

「たっ……助かったにやあ……」

どさどさと服の山が崩れて下敷きになってもらっていた緑メガネさんと茶色ポニーさんがもぞつと出てきた。

……まちがえて乗せちゃった毛糸ぱんつが頭に乘ってる。

「？」

それを手に取ってみて調べている。

「……!？」

少ししてそれが自分の頭に乗っていたのに気がついたらしい。

「……た、助けてもらったんだから……」

心なしかしよげている。

……まあ新品だし、文句はない……よね？

助けたんだし？

全部僕のためなんだけどもこの子たちのためにもなったんだし？

けど……ふむ。

これが女の武器っていうやつかな？

初めて使ってみたけど、同性に対しても……少なくともひるませるくらいの効果はあるというのが確認できた。

猫だましの効果しかなさそうだけど、またなにかに使えるかもしれないし覚えておこうつと。

……いや、違う？

男の人は遠巻きに……少なくとも僕が見えないところにいたみたいだし、見たのはみんな女の人だったし。

肝心の武器っていうても真っ白なふとももくらいで、限りなく平べったいブラジャーの中身でさえニセモノだしな。

ただの幼女だ、武器なんて幼さしか残されていないはず。

……つまり今のは女の武器じゃなくて、幼児もとい子供アピー

ルってことになるのかな。
うーん、難しい……。

33話 猫と17歳 1/4

「……私たち、ほんとうに助かったのね……」

「ようやく実感してきましたにやあ——……」

あの後こそそそ店員さんたちの助けを借りてエスカレーター伝いに移動して、試着室からさつきのお茶店の隣のレストランにまでたどり着いて「さすがにここなら来ないでしょ」ってなつてひと息つく。

まさにとんぼ返りつてやつ。

目的の下着も買ったから僕としては悪くない。

なぜかあのときの毛糸ぱんつもカゴに入れちゃっていたのに気がついたのはレジで「あ……それちがうんです……」って言う前にしまわれちゃったから言い出すこともできなくて僕用の毛糸ぱんつが手に入ることになった。

まさかカゴに入れられていたとは……どっか行っちゃったって思ってたのにいつの間にか？

「いやー、ほんつと助かりましたあ」

「いえ」

とりあえずで頼んだ今日何杯目かになるコーヒーを静かにすすっていたら、テーブルの反対側でふたりして面接のように……僕は就活してないから知ってるだけだけど……座つてこつちをずっと見ていたふたりのうちのひとり、茶色ポニーさんのほうから声をかけられた。

そのまま静かにしてくれていたらよかったのに。

僕は何時間でも「……」が続いて平気な人種だからね？

「あのまま私たちだけだったら、きつとすぐにあの人たちに見つかっちゃつてまたカメラの前に引きずり出されて質問攻めに遭うところでした。あー、こわかった！」

「ほんとうでしたにやあ……ほへえ」

にやあ？

なんだかさつきからにやんにやんと耳に残る語尾で改めてもうひと里を見る。

猫系の芸能人、アイドルをやってるらしい緑メガネさんもとい緑メガネ猫尻尾さん。

だってこんなときなのに猫耳と猫しっぽのアクセサリー外してないし……筋金入りだな。

根性がすごい。

やっぱりプロは違うんだ。

「実は私たちですね、ちよつとしたインタビューを……それもここじゃなくて別のところで受けていたんです」

あ、別に事情とかは良いです……って普通の人はならないから言わなきゃいけないよねって当然のようにしてしゃべりだすポニーさん。見た目的にも身長的にもこっちの方が年上っぽい。

そう言えば芸能界って上限関係厳しいらしいなあ。

「けどですね、そこへ突然って感じで……警備員の人とかを押しつけてあの人たちが無理やり入ってきて強盗みたいに押し入るっていう感じだったんですよ、ほら、今って配信されてるとすぐ大変なことになるのでこっちから手を出せなくってー」

さらさらと話しているポニーさん。

さすがアイドルなんだなって感じで話し方がアナウンサーみたいに綺麗で聞き取りやすい感じ。

歌とかトークとかもいつもしているんだろうし、そりや普通の人とはちがうか。

きつとドラマとかにも出ているんだろうしラジオとかもやっているのかもしれないし。

トレーニングとかで毎日忙しいって言っていたしなあ、萩村さんが。

あのととき井さんはひとつことも言わなかったけど。

ただただ楽しいってことしか強調せず。

やはり信用できない悪魔さん。

メリットだけしか伝えなくてデメリット、こっちから聞かない限りはひとつことも言わないっていうの。

やっぱりあの人は要警戒だ。

「それからですね、そばにいた人たちの助けがあつてなんとか逃げ出すことはできたんですけどにや？」

一緒に説明してくれようとしているのはメガネ猫さん。

けども……その、なんかギャップがすごい。

真剣に話しているのに猫耳とか尻尾つて。

「相当な人数だったみたいで裏口まで抑えられていたみたいで。そこから全力で走って……10分20分くらいですかにや？」

「そのくらいねえ……いや、もつとかな……とにかく疲れたわ」

鍛えているとは言え追いかけられた状態で全力疾走を10分単位。そりゃあ疲れる。

でも僕もう帰りたいんだけど？

助けたからお礼とか要らないしさっさと帰りたいし……さっきの毛糸ぱんつ気になるし。

「私はまだまだ行けたんですけどにやー？ せんば、相方さんがへばってしまつてですにや」

ボロが出そうになつて猫さん。

キャラ付けって大変だね……僕が外部の人だからがんばってるのかな。

「もー走れないって感じで押ししたりしながら走ってたから私もちよつと疲れてきたところで、もーどうしようかって思つてましたにや。」

どんだんに追われて袋のネズミでしたし」

猫が鼠。

……ただの比喻表現だったらしく、普通にため息をついていた。

良かった、「はは……」とか愛想笑いしなくつて。

僕は会話の経験が少ないからどう反応したらいいか分かんなくつて笑つちやいけない場面で愛想笑いかいやいやこういうのもうやめよう心が痛い。

「いやいや、いつくらダンスとかで鍛えているとは言つても人海戦術されたら敵わないわよ……走って追いかけてくるのはもちろん車とか何台も使つて追ってくるなんて言うどこぞの映画みたいなことしてくるやつらからずーつと逃げるのなんて限度があるでしょ。相

手みんな男の人で怖いし」

「情けないですよにゃあー」

どうやら緑猫さんはフィジカルもメンタルも強いキャラで通すらしい。

もはや尊敬する僕は猫耳キャラな子って扱ってあげようって決めた。

「……………」

それにしてもだ。

騒動の本体に巻き込まれるのはかろうじて回避できて助かったけど、今度はレストランっていう望んでもいない場所へ「お礼だから！」っていうのと「良ければちよつとだけ聞いてほしいことがあるから……」って言うって半ば強制的に連行された僕。

まあいつものだな、うん……この体になつてからの「いつも」。

もちろん抗議の声はちっちゃくかすれたぼそつとしたものだったから当然にして聞こえなかったみたいだし……もうやだこの小さい体。

なんとかならない？

ならないよなあ……。

でもなんで2人が正面に座つてこつち見てくるんだ……やめて、僕こういうの苦手だから。

隅っこでひとりじとじとしている方が気楽だから。

どうして僕はいつもこんな目に遭っているんだろう。

やっぱり呪い。

つまりは魔法さん。

というのはさすがに言いがかりかも。

少なくとも今回ばかりは魔法さんにはなんら関係のないことだろうし。

……関係ないよね？

そうだよね？

面倒ごと引きつけるとかやめてよ……

「そもそも私、置いて行っても良いよって言ったじゃない」

「いやいや無理ですよ！ だから抱っこしようかって」
「お姫様抱っことか恥ずかし過ぎるからイヤだったのよ」
「普通におんぶのつもりでしたにや!? そんなこと考えてたんですかにやあ!」

「あ、そうだったの？ 私てつきり」

なんだかぎやーぎやー言い合っているふたりを眺めながら、なんだか落ち着かない理由の周囲を見回し直してみる。

名前は知らなかったけど何度か前を通って知ってはいた、いかにも高級レストラン。

その中の……わざわざこのふたりの名前を出してーの、これまたいかにもーって感じのフスマの奥の個室だ。

内装もなんだか凝っているしそここの装飾は黒に金箔だし、おまけに壺と掛け軸なんかが備わっている。

僕は全然詳しくはないけどひと目で見て「あ、これ壊したりしたらとんでもない金額だ」ってことくらいは分かる感じの高級感と希少感を放っている。

……僕には縁のない世界のものだなあ。

「にやっ」

僕はじつとその尻尾を見る。

必ず語尾に……いや、聞いていたら必ずしもじゃないみただけど、でも「な行」がみんな「にや行」になるわけでもなく、ただただ語尾に「にや」を着けるっていう完全にキャラクター作りをしている様子の猫耳しっぽ語尾緑メガネさん。

語尾はともかくカチューシャで着けているんだろう猫耳も腰のあたりに固定しているんだろうしっぽも、声とか体の動きに合わせて動いているように見えるのは……気のせいじゃなさそうだ。

まあ昔ならともかく、今ならその筋の技術を持ってすれば体の動きと抑揚に合わせて動くこういうのなんてお高くとも手に入るのかもしれない。

だってアイドルっていうのだし。

それにこういうのって前にどっかの記事で見た覚えがあるしなあ

……あ、科学の勉強ついでだった気がする。
脳波を読み取るんだっけ？
すごいね。

なにがすごいってそんな技術をこんなことに使うっていう需要の方に。

こんな非常事態のときまで目立つっていうのに着けっぱなしで、しかもこういう個室の中っていうオフに近い環境でも語尾は残しておくっていう徹底ぶりだ。

もちろん移動中も耳と尻尾は出しっぱなしだったし。

いちおうさっきのお店で買った僕の服のうち今は着ないのを「貸してほしいにゃ？」って頼まれて渡したシャツとかを腰に巻いたり帽子をかぶったりして隠してはいたけどばれればれ。

なんでもコートを着るには暑いらしい。

ふたりとも汗、結構かいてたしな。

近くでって言うかいつもみたいに手を引かれて歩いたからそれを嗅ぐことになったんだけど……あの匂い、やっぱり嗅ぎ覚えがあると思ったら萩村さんの車の中の成分のひとつだった。

制汗剤とかでちゃんと管理している汗と違って不思議と臭くないよなあ。

どっちかかっていうと甘い感じ？

よく僕がお風呂上がりとか寝起きとかに「ん？」って感じで不意に僕自身から漂ってくるあの匂いに似ている感じ。

ミルク系な感じ？

女の子の匂いってこういう系統だよな。

男とは絶対に違う何かだ。

「……あー、えっと。それでなんですけどね……？」

ゆらゆら揺れていた尻尾の先を見ていたら茶色ポニーさんが会話を再開し出す様子。

……ふさふさ感を触って確かめさせてもらいたいかも……。

「助けておいてもらってさらに……なのも悪いですけど。その、ほとぼりが冷めるまで？ このレストランに駆け込むまでは運良く

見つかりませんでしたけど、きつとまだ何人かあの手の人たちがそのへんにいると思いますので、そのお……もうすこしだけ私たちと一緒にいてもらっても良いでしょうか……？」

すつごく言いにくそうなポニーさん。

さすがに僕のイヤそうな表情とか態度、伝わってはいたらしい。

「そうしてもらえらるととっても助かるんですにやあ……だってこういうときに『女性ふたり組』っていうキーワードで聞き込みされちゃったりすると割とかんたんに居場所、探られちゃいますからにや………。足とSNSで情報を集められちゃうとどうしようもないんですにやあ。このお店の人たちなら大丈夫だって思いますけど、歩いてきたのを見ていた人たちなら無理ですし、にや？」

なるほど……あ、耳の先っぽがぴくつと動いた。

あ、もう1回ぴくぴくつて。

「ここでのお昼は好きなものをいくらでも食べてもらってもいいですし、帰った後で相応のお礼もしますし……おねがいですよー！」

「そうそう、好きなグループとか人とかの握手とかサインとかライブのひとつやふたつとか……予約でいっぱいのもいくらでもねじ込めますからー！」

「別に僕も急いでいませんし食べるくらいは構いませんけど、そういうのは良いです」

朝は寝坊して冷蔵庫で忙しくて来るのも大変で、ようやくまともな服を手に入れたらと思ったたら今度はこの騒動でちよつと休みたいのも事実だし。

「それなら誰がいいですかにや？ あ、後でも良いですけど……もちろん私たちでも大歓迎」

「ですから僕そういうのに興味がないので要りません」

あ、この子たちのもーつてセリフに重ねちゃった……ちよつと悪かったかも。

でもそれを特に気にするでもなく、なんか驚いてるふたり。

「なんと……こんな人も居るんですか……あ、ごめんなさい」

「珍しいですよにや？ 前ならともかく今となつてはサインとか要らな

いってばっさり言われたの、たぶん初めてなんですにや」

うん……むしろ食い気味になっちゃったよね……タイミングが悪かっただけなんだ……決して嫌いって訳じゃなくて単純に興味がないだけなんだ……。

「ちよつとがっかりですけど、まあご興味ないんじや仕方ないですよ。あとで気になってきてもらえたらいつでも喜んでしますからにや？ お礼の方も別の形で」

「……………」

さすがに何にも要らないって……さつき言っただけどもう1回は言いくくって黙るしかない僕。

それにしてもサインとかってもらうの嬉しいものなんだろうか。

これがかがりとかりさりんなら喜び勇んで色紙とか用意しに行くんだろうけど、僕は興味ないし。

……あ、でも好きな作家さんのサインを本にもらうっていう見方に変えてみればたしかに嬉しいものかも？

そんなことを考えつつも「やっぱ早く帰りたいなー」って言う帰宅部の本能が疼く僕だった。

33話 猫と17歳 2 / 4

「まー実際ほんつとに助けられましたからにや、サインとかいうお手軽な手段じゃダメなら」

「こちら」

「冗談ですよ。そーゆーのが要らないみたいなので後でなにか別の方法を考えてお返ししますにや。 事務所の方から」

「そうねえ……さっきまでかなりピンチだったし。 ……今回は反対派の人たちだったから大変だったのよ。 ああ言う人たちって何言っても反対って決めてるから……あ、ごめんなさい」

「いえ別に」

あれだけの事が起きて僕が居なかったら……多分今ごろ質問攻めになって大変だったのは簡単に想像できる。

だからこそ意地でもそのおかしをしたいらしい。

まあ要らないって言ったから無難にカタログギフトとかなんだろ
う。

でもなあ。

僕がどうでもいいってことでも……あの山でのご夫婦もおんなじようなこと言っていたし、少なくとも感謝っていうのは……あちらが感じているのなら相応のそれは受け取っておいたほうがいいのかもしれない気がしてきた。

こういうとき社会にろくに出た経験がないとその加減がわからないのが悩みどころ。

本当ならこういうのは親に聞けば常識ってのが分かるんだけど僕にはそういうのもう居ないし。

「まあ飲みものだけっていうのも寂しいですし私たちもお腹空いてきましたし? だってあんだけ走り回ったですよ!! とりあえずご飯食べましょうごはん! もーおいしい匂いが我慢できないんですよ! このお店はおいしいって知ってるから余計なんですにや!!!」

さつきからぐうぐうお腹なってるもんね……猫さん。

アイドルって体力が資本だからご飯の量も多いんだろう。
ちやうど僕の反対だな。

「あ、支払いはもちろん私たちもとい事務所持ちにするので遠慮しないで好きなもの好きなだけ食べてくださいにや！」

メニューをみて「うげっ」って顔したのを見逃さなかった僕。

そりやあひと皿2千円とかしたら……ねえ。

いや、僕は大人だしこの子たちは芸能人だから払えない金額じゃないはず。

実際観光地とかじゃもつとするのも平気だし。

でも、それを家の近くでつてなると……なんだか気が引ける根っからの貧乏性。

ひとり暮らしのニートなんだ、そうじゃなければとつくに使い切つて就職してる。

……いや、世間一般的に見ればそっちの方が良いんだろうけど働きたくないし今はそれどころじゃないし……。

「あ……冷たいお茶もおいしいですねえー」

「言動がいちいちおばさんくさいですよ？」

「そこ、うるさい」

「……ふは。あ、この子が言うとおり本当にお金のことには気にしないで好きなもの頼んじやってね？ スマホは持って来れなかったんだけどお財布はありますから。心配ご無用です！」

「はあ」

さすがにこれだけ話してるとこんなに年下相手なんだ、くだけてきたポニーさん。

いや僕は別に気にはしないけど……やっぱ子供になるとこういうのつて多いから。

それにしてもお腹が空いた感覚が結構強めなのに新鮮さを感じるけど、よく考えてみたら朝はニュース見ながらごはんを食べていて……今日の日付のことに気がついて動揺しちゃったから食べるの途中で止めちゃって。

いろいろと漁っていたら冷蔵庫の悲惨さを目の当たりにして臭いとの格闘で忙しくつて、汚れたし寒かったからお風呂に入ってそのまま来たんだった。

そりやあいくら幼女の胃でもお腹は空くよね……お茶だけで「そろそろ帰ります」つて言うつもりだったから飲みものだけ頼んでいただけせつかくだしつてことで。

どうせ断れないだろうし、断ったとしたつてかがりとかみたいに余計なひと皿を頼んで「食べきれないから食べて？」つていう姑息な手を使ってくるんだらうし。

女の子……お節介焼きな人はそう言う手を使ってくるんだ。

そういうわけで適当なのを選ぶけど、ふと気になる。

そういえば食事も3ヶ月ぶりになるなあつて。

主観では連続してるけど客観的には3ヶ月寝たままだつたわけだし……お腹とかどうなってるんだろ。

朝はちよつとだけだったし脂っこきなものにもないものだったから大丈夫だったけど、こうして外で食べるものつて味付けも油も多いよなあ。

食べなかつた後つておかゆとかから始めるつて聞いたけど……大丈夫なんだろうか。

そのへんも魔法さんがなんとかしてくれるんだらうか。

こういうときだけは神頼みならぬ魔法頼みもしたくなる。

いやだつて、食べた直後からトイレに籠もるのは勘弁だし？

◇

「そういえば」

「あ、ちよつと待つて、飲み込んじやいますにゃ」

「いいよー」

「……………んく」

あちらはお皿を半分ほど食べてひと息。

こちらはお皿を……4分の1ほど食べて顔を上げる。

どう考えても食べきれないけど、いくらなんでも初対面のこの子たちに食べてもらうわけにはいかないよなあ……かがりやゆりかじやあるまいし。

あれは歳が近いっていう偶然とはらぺこっていう中学生女子の特性とが揃って初めて起きる奇跡だったんだ、きつと。

だって試しにつて、りさりんとかきよと一緒に「余ったけど食べる？」って聞いてみたら一瞬だけど目が泳いでいたし……まあそれでも食べられたんだけど。

女子中学生の食欲、男子中学生にも負けない。

いや、そのあとに甘ったるいデザートを食すあたりそれ以上かもね。

そりやあ体重とかいっつも気にしているわけだな。

僕とは逆で。

「……………ん、いいですよ」

「そう？ ……そういえばなんだけどね？ あ、悪い意味じゃないの？ で気を悪くしないでくださいね？」

「はあ」

「悪い意味じゃないので」って言うときって大抵悪いことだよな。

「初めて見たときには男の子っぽい印象だったんですけど女の子だったんですねって。勝手にヘンに思い込んでいたので……なんとなく謝らなきゃって思ってますね？ あの売り場に立っていたのを見てちよつと『あれ？』って思ったり、試着室に匿ってくれたと思ったから女性ものの服を放りこんできて……それで入ってきてさらに脱ぎ出したときにはびっくりしてたんです。 さっきまでは男の子かもって思っていたので、それで……」

うん、僕だって初対面の男でも密室でいきなり脱ぎ始めたらびっくりするって思う。

「ああ、あれにはびっくりしましたにや……追われていてのどきどきにさらにまじまじでしたにや。 この相方なんて男の子がズボン脱ぎだしたと思っただけからに、ズボン脱いだところをガン見してほんつとシヨタあいたたたた!!」

……うん、年下の異性だつて思えばそりゃあね……男とか女とか関係ないよね。

大丈夫、僕はそういうのに理解あるから。

「女の子だったんだからいいでしょ！ ……あ、すいません……それに背ももつと高いつて感じたんですけど気のせいでしたね。なんかそんな感じがして」

「あー、たしかに近くに来てみるとなんだか幼く………ごめんなさいですにゃ」

「気にしていませんから」

小さいのは事実だからね。

……この席、イスがテーブルに対して低すぎてヒジもつくことができないから。

お店の人が気を利かせてくれて持つてきてくれたクッション2枚重ねじゃなかったら、まともに食べられたかどうか。

多分お高い、ムダにいいクッションだからバランスを崩すとそのまま落ちちやいそう。

足でも踏ん張れないんだし気をつけないとな。

「ほんつとーにしっかりした子ですにゃ」

僕は大人だからいちいちの子供扱いにはなんにも感じない。

なんにも感じないんだ。

「さっきの話に戻しますけど……そろそろ囲まれそうだったところできとりあえず隠れようつて思つて、あちこち走り回つていたらあそこでたまたまランジェリーの……あ、下着のことです……売り場が見えて『店員さんに、お店のバックヤードとかに匿つてもらおう』つて考えて。そしたら誰かが助けてくれそうだったから相方に言いながら近づいてみたら男の子が手招きしているように見えたので、びっくりでしたにゃあ。 ……あ、なんでも男の子だつて言つてごめんなさいですにゃ？ ただ女性用の下着のエリアつて男性が近寄らないので、その」

「よく間違われますから。 もう気にされなくてもいいです」

……何回か謝られては「気にしてないよ？」つていう、どっかです

たようなやりとりが始まったもんだから会話から興味が薄れた僕は、気がついたら適当な返事をしながらごはんに集中していた。

注文する前は高すぎるって思っていたんだけど、いざ食べてみるとたしかに値段相応なのかもって味に負けたんだ。

細やかな味付けで人工調味料の味もしくって……使っている材料だつてみんな良いものみたいなのが分かる。

……こんな料理を頻繁に食べられるならアイドルつてやつも……いやいやダメだこれは悪魔の誘いだ今井さんの顔を思い浮かべてなんとかしよう。

あれ、でもそう言えば珍しく男か女かって聞かれた気がする。

そういうのつてみんな聞いてこないもんね……時代的にもセンチティブな感じだし。

少なくとも僕なら「ん？」って思ってもどつちでも良いような受け答えしかしないもんな。

普段はともかく今日の僕は……もう女装の必要がなくなつちやつたこともあつて、ズボンこそ履いているけどコートの周りには髪の毛を振りまいているし顔も出している。

髪の毛つてひと目で見てわかるようなシンボリックなもので、だからこそあれだけ遠くから僕を見たのなら、幼いかどうかはともかく男だとは思わないはずだ。

だってこんなに長い髪の毛だもんなあ……背は低いのに。

タクシーに乗って行き先を伝えたあとのちよつとした会話も、そのあとの服を選んだり喫茶店に入ったときも……さらに言えばさつき毛糸ぱんつを買つちやつたときもこのレストランに来たときも、明らかに女の子扱って言う非常に不本意だけどすっかり慣れきつてしまっている対応をされたのに気がつく。

……なのにこの子たち、僕を男だつて思っていたらしい？

なんでだろ……そんなに格好良かったのかな、僕……冗談だけでも。でもこんなに髪の毛伸ばしている男なんてそうは……あ、そういう子

ばおじいさんだかおばあさんだかが「最近はぱつと見てわからない子

もいる」って言っていたし、ひよつとしたら僕が気がついていないだけで、外にろくに出なかつたから知らなかつただけで……世の中では長髪ファッションの小学生男子とかも居ないではないって感じの風潮になりつつあるのかも？

うん、僕は周回遅れな人生送ってるわけだし充分にあり得る。

さらにこの子たちは時代の最先端なテレビ業界人なわけだしそういうのの最先端だよ。

……男って思われて嬉しかった。

うん。

僕はまだ大丈夫だ。

今の言葉だけでしょげてた心が元気になってきた。

「……しかし、しかしですよ？」

「え？」

「その年でその美貌……！ 褒める分には良いですよ、あ、これお世辞とかじゃないですからね！ 雰囲気も普通じゃない感じで話し方も知的クール系ですし、帽子とか格好次第じゃ子役も、いえ、それ以上行ける！」

「ちよ、ひかりさん止めましょうにやあ」

……あれ？

この流れ、半年前にも……。

「男性はもちろん、きつと女性ファンもたつくさん期待できますよ！」

中性的で私だっただきどきしちやいますもん！ 顔も髪の毛もその目も素敵で話し方も格好良くって。 どうですか？ 私たちとアイドル、いっしょにやってみませんか？ 私たちなら事務所に話せばどっかにすぐに!!」

この体、僕のじゃないから褒められても嬉しくないんだ……あ、でも話し方のところだけは嬉しいかも。

「ひかりさあーん……『あの人』みたいな唐突な勧誘は止めましょうにやあ……ほら、ナントカ詐欺の勧誘みたいで結構みんな引きますし……『あんな状態』になっちゃったあの子のカンってやつが移っちゃったんですかにや……？ 引きますにや……？」

まさか？

とは思うけど……同じ業界でこんなに近いところなんだって言うか確か事務所この駅だったよね……。

……世の中は意外と狭いんだって。

「……えっ……ウソ、私今のあんな感じに……？」

「そうですねや？ あと、助けてもらったばかりでそんなことすると……さっきのがゼーンぶこのための演技だなんて思われたって仕方ないですよ？ ドラマでもよく見る展開ですよ？」

「……うそ——お……あんな風にはならないって決めてたのに——」

ひどい言われようだけどしょうがない。

茶色のポニーテールがしなびてきた。

髪の毛って意外と動く……いや、逆立ったりしなびたりするよなあ。

猫みたいに。

いや、こうやって髪の毛がもさもさになったからこそ知ったんだけど、感情が……僕自身は滅多にないけどあの中学生たちとかを見ていると彼女たちの表情とか声とかに合わせて……たぶん毛根がどうにかなるんだろうな、動いて……髪の毛もほんのちよつとただけだけ形が変わることがある。

すっごく嬉しいときとすっごく怒ってるときに。

僕も、なんとなくそういう感じすることあるしな……なんていうかちりちりするって感じで。

「……むむ……言われてみたらそうでした。 そういう番組とかありますし警戒されても仕方ないですよね……」

「ですにやっ？」

「ということやらせとかじゃないんです……本当なのでどうか」

「分かっていますから気にしないでください。 それに」

「あの人」の「あんな風に」って言うので大変に落ち込んでいるらしいポニーさんと心底申し訳なさそうな猫さんに向かって言っただけ。

「もし、仮にです。あれが全部演技で貴女達が危険な目に遭っていなかったら安心したって思いますから」

……大人の、いや、大人に限らず人の本気の大声と走りですつと追いかけられるとか怖いってものじゃない。

それはこの体になってついさつき傍で聞いただけでそう感じたんだ。

だからもし全部が今井さんの仕業だったとしても……とりあえずはほっとするだろう。

もちろん断るけども。

「……………ほあ……………」

「にや……………にやあ……………」

一瞬の間があつて「僕が疑つてませんよ」って言うのに安心したのか顔を赤くして静かになった2人。

「？」

女の子って……全然話す機会を持つたことがなかったんだけど、やたらと恥ずかしがるよね。

同性なはずの僕に対しても。

やっぱり喜怒哀楽が……良い意味でも悪い意味でも激しいんだろ
うね、女の子って。

その傾向がまだ無いから僕自身に安心できるんだ。

だって男に戻ったときに女の子みたいなメンタルになってたら困るし……………。

ちに。 ああなる前に」

「反省します……あれはイヤだもん」

この感じ。

萩村さんとのつながり、芸能界つながり……どう考えても今井さんのことだろうな。

なんなら以前どっかのポスターであのビルに生息しているアイドルさんたちがコマースシャルやっているのを見たしな。

でもまあ反省してくれているみたいだし、僕としてはこれでも悪魔さんよりもずっと理性的だし、別に文句はない。

でも……そっか、僕はそう見えるのか。

今さらながらに僕の住所年齢性別不詳疑惑。

だって実際年齢も性別も何もかも違うんだしな。

普段は学生って言う……2年前までは小学生だったあの子たちとしか話さないし、同じ年設定で通しているから「ちよっと大人びてるね」とか「いつも静かだよね」くらいにしか言われないけど……さすがに大人相手じゃ「ん？」って思われるよね……。

見た目で目立つついでに褒められるのはしょうがないから諦める。

どこにでもいるおとなしくて影の薄い系の……いわゆる草食系ってやつの中でもさらに影が薄かった前の僕と、黒系統の髪の毛がほとんどのこの国でたったひとり薄い色の髪の毛をばさつとしている僕はまるで違うもんね。

僕だってこんな子が歩いてたらなんとなくで見ちやうくらいだし。分かっていてるけど改めて目立つって自覚し直した感じ。

……普段のフードと帽子作戦はよっぽど効果的だったらしいのも。最初はいろいろダメダメだったけど僕なりにがんばってたのは完全な無駄じゃないってわかってちよっとほつとする。

でもしよせんは借り物の体。

ニセモノでウソつきでかりそめの姿。

元が男って事もあってかわいいとかなんとか言われてもなにも感じないのが空しい。

「それで、そのー。 えっと、一緒に」

「お誘い自体は嬉しいんですけども」

なんか「あの人」に似てるって言われて凹んでるポニーさんがそれでもめげずにぐいぐい来る。

「じゃあっ」

「ですけど僕は人に見られるのが好きではないのでお断りします」

こういうのはきっぱり言ってあげるのがその人のため。

「以前にもそういう話ありましたが、そのときにも同じようにお断りしたんです」

「そ……そう………」

ポニーテールがさらにしょぼくれる。

「その感じ、もしかしてこういうの多い……ってそりやそつか、そのお顔と髪の毛だもんね。 ごめんなさい……」

「いえ、気になさらず」

でも今ってそんなに人手不足なのかな……そういう業界って行きたい人ばかりだっと思ってたけど違うんだらうか。

芸能人って必ずしも見た目だけじゃないんだからそういうやる気のある人たちから選んだ方が良いつて思うんだけど違うんだらうか。

「にやっ………にやっ」

ばつさりした僕とばつさりされたポニーさんを交互に見ていた猫さんが気まずい雰囲気つてのに押されてようやく話題変えてくれるらしい。

「ところでっ！ ところでなんですけどにや？ もひとつお願いしたいことがあるの思い出したんですにや！」

「なんでしよう。 働くの以外なら」

「あ、ホントに違うので安心してくださいにや」

尻尾をくいくいつて動かしながら全力で「違う違う」しているのが気になる。

「で、そのですにや？ お恥ずかしい限りですがにやー、私たち逃げてくる前はお堅いところでインタビュー受けていたのでスマホ……連絡手段をまるごと預けっぱなしなんですにや。 ……だからこま

で来たなら迷惑ついでに……えっと、そちらのスマホとかちよつと電話かけるくらいでいいので使わせてもらえないかにやあ、なんて」

「あ、もちろん私たちも女の子ですからスマホの中身見られるのが嫌だって分かってるので電話だけですにや！もしおイヤだったらどこかで……このお店で貸してもらえるか交渉したり、ダメだったらどこかでパソコンと電話、使えるところ探そうって思っているの！」

「あー、確かに今ってスマホ無いと何にもできないよね。」

「せめてネットでうちの事務所を検索してもらって電話番号さえ調べてもらえたらとつてもとつても助かるんですにや。よく考えたらマネージャーさんとかのなんて覚えてませんし」

「あ、あ——……それもあつたわねえ！」

「ようやく頭切り替えられたらしく話に乗ってくるポニーさん。」

「たしかに今のままだと連絡の取りようがないからねー。電話番号だって昔みたく覚えたりしていないし、そもそも電話だって今はアプリでだし。前の事務所の受け付けのなら暗記してるんだけど今もう意味ないし。公衆電話だって……このへんであるのかなあ……一応あるはずなんだけどそれすらスマホで探すくらいだし……ちよーつと前までは探さなくてもあつちこちにあつたんだけどな。今って不便よねえ」

「ちよつと前って……大昔ですにや？　公衆電話とか使ったことないですにや」

「え、マジ？　あ、でも何年か前にそういうニュース見たかも！」

「うん、僕の世代でもテレカとか知識でしか知らないもんね。」

「でもポニーさん何歳なんだろ……話の内容的に僕より年上っぽいんだけど女の人ってお化粧で全然変わるしなあ。」

「あ、でもそーいや連絡先つてやつ知ってた僕。」

「あの、おふたりとも」

「そう言えばなんか話しくいって思ってたからお互いに名前も言っていなかったんだ……ほら、僕って基本的に一期一会の精神だからって聞くのもめんどくさかったから。」

「はいですよ？」

「使わせてもらえるの？」

取り出した僕のスマホを眺めるふたりとも。

「……あのケース……何にもない黒……」

「き、機能性重視ってことでいいですよ！」

かわいくないって暗に言われて傷ついた。

……僕は別にスマホを着飾らせるのには興味ないし今は忘れよう。かがりが勧めてきたようなピンクピンクラメラメラキラキラしたのとかが、ゆりかが「余ったから要る？」って聞いてきたアニメキャラのとか僕の趣味じゃないなあ。

「いえ、そうじゃなく……そうなんですけど。おふたりとも萩村って言う方と今井って言う方とお知り合いですよね？」

今井さんの方はふたりの会話で出てきてたし萩村さんの方はテレビでこの子たちと一緒にの場所を見てたから僕が知ってる。

「えっ？」

「にや？」

名前を出してすぐに表情が変わったのを見るに予想どおりらしい。

「え……、あ、あれ？ 私たち萩村さんたちのこと」

「話したかにや？ あ、今井さんは話したかも？」

どっちでもないけどね。

「以前の話というのがその方たちからのお誘いだったので。もちろん興味はないのでさっきと同じようにお断りしましたが連絡先は知っているんです」

今井さんがすごい勢いで食いついてきて困っていたところを萩村さんが押さえられない情けなさだったところをゆりかが颯爽と助けくれたあのときが懐かしいなあって思いつつ、すっすつと操作をして1年に何回しか使わない電話モードにする。

今の僕の耳と口の距離的にはちよつと大きすぎるスマホをほっぺたに当てつつ……そういえば今の僕ならいくらこうしても画面が汚れたりしないんだろうな……。「ぶるるる」という懐かしい音を聞くこと数回。

「はい、萩村です」

低めでちよつと頼りなげな声が聞こえてくる。

懐かしい。

けど、ちよつと息が切れている感じ？

「萩村さん、ご無沙汰しています、響です。以前お会いした……お誘いをいただいた。えつと、覚えていらつしやるかはわかりませんがど背が低くて薄い色の長髪の」

もう半年連絡取ってないからな、「誰？」って言われてもしょうがない。

あの人たちって多分手当たり次第にいろんな人に声かけてるんだろうしな。

「え……ええつ、もちろん覚えてつ、いますがつ」

声がちよつと聞き取りにくい……何か急いでる感じ。

本当に覚えていたのかは分からないけど覚えてることにする。

それが社会人だって聞いたことがある。

「何度かご連絡をいただいていたみたいですが、ちよつと事情があつてお返しができなくて申し訳ありませんでした」

「い、いえつ……お気になさらずつ、こちらこそ以前は大変つ……」

電話してるあいだもずつと走ってる……つてなると、多分この子たち絡みだよなあ。

……もうちよつと早く連絡してあげたら良かったかも。

考えてみたら自分のところのアイドルさんたちが男たちに追いかけられてるんだもん、そりゃあ必死だよね……多分警察も動いてるんだろうし。

「……すみません、今回はせつかく響さんつ、のほうからご連絡つ、いただいているのですがつ」

ときどきすぐそばから誰かの声も聞こえるしクラクションとかも遠くから聞こえる。

「たぶんその件なんですけど……ちよつと待ってください。あの、おふたりのお名前は？」

「へ？ あ、岩本ひかりです……？」

「島子みさきですにや！」

「岩本……さんと島子さんと、今一緒にいるところなんです。おふたりが萩村さんたちに連絡を取りたいって聞いて連絡していて」

「……えっ？ ……えっ？」

「目の前に居るんですけど……代わりますっ。」

予想外だったのか、僕の耳に萩村さんの……ちよつと笑つちやいそ
うな声が聞こえてきた。

うん、本当の予想外ってそういう変な反応になつちやうよね。

僕もいつもびつくりしたとき変な声出るし。

33話 猫と17歳 4 / 4

『ひ……響さん……ごほっ……そ、それは本当で……』

「とりあえず走るの止めて落ち着いてください萩村さん。ふたりとも無事なので」

息も絶え絶えになりながら「どういうことなの!？」って聞いてきた萩村さんを落ち着かせることしばし。

『……そ、そういうことでしたか……しかし偶然響さんに助けてもらえるなんて』

「ええ、しばらく留守にしていたので本当に偶然ですね」

3ヶ月冬眠してからの今日だもんな、偶然以外に何とも言えないもん。

そうしてとりあえず安全って言うのと場所を伝えてすぐに来ることになったらしい。

逆に言うと萩村さんが来るまでは帰れないってのもまた決まっちゃったけどこれはしょうがない。

「……はい……はい、わかりました。萩村さんが来るまでここで待機しています。到着の直前に連絡を……はい、それでは」

「……ふう……」

「……………にや」

「……………にや」

あー、疲れた。

電話つてすつごく緊張して疲れるよね。

目の前で話すのならまだマシなんだけどなんでなんだろう。

流れで愛想笑いか会釈とかしちゃうし。

「……あ、というわけでもう大丈夫です」

「ひゃいっ」

「にゅっ」

にゅ？

キアラ付けて大変そうだね……今ちよつとブレかけたし。

けど驚いた拍子に耳も尻尾もぴつと立ち上がっているのには興味

をそそられる。

あとでさりげなく「お礼として触ってもいいですか？」って聞いてみようかな。

どのくらい猫のしつぽを再現しているんだろうか、あのデバイス。動きはとも猫っぽいけど、はたして触り心地とかはいかほど。

そもそも猫になんてほとんど触ったことないけど興味はあるんだ。だって家の近くって野良とかいないし地域猫とかさえもないし。

かと言って猫カフェとか男が言っても変な目で見られそうだって思ってたし……そうか、今なら猫カフェに行っても変な目で見られないのか。

猫なんて最後に触ったのは旅行先で野良のをだし……触りかたがへタだったらしくってごろごろ言ってくれていたのに急にこつちを向いたかって思ったら触っていた手に向けて猫パンチされて逃げられたし。

あれは悲しかったなあ。

やっぱりかわいいものは外から眺めるに限る。

関係が薄い方がきつと楽なんだ。

猫パンチされたときのごとく。

……と、いけないいけない、なんか変な顔してるふたりちに教えておかないと。

「あと30分ほどで、ここの地下の駐車場に……えっと、『この前使った車』というので来るそうです、萩村さんと今井さんが。『見れば分かる』そうなのでおふたりなら大丈夫でしょう。……できればここへ直接に来たかったみたいですけど萩村さんたちも顔が知られているので面倒だそうで」

電話で話されたのを説明するけど……悪いやつから女の子を匿うとか悪いやつに見つからないように送るとかまるで映画みたいだな。

その主人公が男だったら画になるんだけどあいにく僕は幼女なわけでもしろ守られる側だ。

「タイミングを見計らってエレベーターへで地下へ行つて……スマホのある僕しか連絡できませんから、おふたりを車に乗せるまでお送り

することになったので」

ぽかんと口を開けているふたりに言っただけ。

……どうやら僕の流暢さに驚いているな？

さつきまでは押されて全然話さなかつたもんね。

こうして横やりを入れられなければこんな僕だつてまとまつて話せるんだから。

まあ、いつもこうだつたらいいんだけど……少なくとも女性とか女の子相手だと当分は難しそうなのが厳しいところ。

だつて発音が追いつかないし……せめて声量くらいは鍛えたいんだけど難しいかな、僕だし。

「……萩村くんを知っていて、連絡先まで。しかも連絡もしてくれて全部お膳立てしてくれちゃつた……さつきまでの私たちの逃げ回つて逃げ回つての苦労つて一体……」

それはまあ偶然つて言うことで。

偶然に見えないけど実際そうなんだしな。

「さつきに続けてまたも重ね重ねですにや、申し訳ないですにや」「いえ、乗りかかつた船ですし」

こんなセリフ初めてだ……こんなシチュエーションも初めてだし大半の人はそうだろうけども。

でもこのままほつぱり出すのも気がかりだつてさつきと連絡したまでだし、これで後はたったの30分待ちさえすればいいんだから、残りはちびちび遅滞戦術をとりながら食べていけばいいだろう。

口にもものを入れている間は「食べるのに忙しいんだな」つて思つてくれるから、相づちだつて適当な会釈でしているふりをすればいいんだし。

こういうのつて大学に入ったときになんとなくで参加したサークルの歓迎会とかで身に付けた技術だ。

ちなみに僕はすみつこの方でちびちびしていただけでそれつきり何にもしなかつたけども。

……良いんだ、僕は人と話すのが苦手なんだから。

僕みたいに静かな人もそれなりにいたし、気負うはずはないはず。

うん。

「いやあ……うん。まあ、楽に済んだって考えとこつか……なんか
すこすぎて逆に落ち着いちゃったもん」

「ですにや。もう1回ありがとうございますにや」

さりげなくさつき聞いた2人の名前……よく考えたら女の子から
名乗られなかったのって多分初めてな気がする……えっと、島子さん
と岩本さんだっけ？

もうどっちがどっちだかはわからなくなっているけどどうせペア
だからどっちか呼べば反応してくれるだろうしどうでもいいや。

30分って言う僕にとっては長すぎる時間を耐えたらようやくよくに
帰るんだ。

……3ヶ月ぶりに動いたのにこのハードさはきついけど、あと
ちよつとあとちよつと……。

「いずれのお返しっていうお礼が増えただけのことって思えば気が軽
くなりますにや？　これからどうやって帰ろうっていう心配もきれ
いになりましたし、あとはただ待っていれば助けが来るってこと
ですからほつとしましたにや！」

注意して聞いているとちよくちよく「にや」じゃない話し方してる
のは猫耳キヤラとして許容範囲なんだろうか？

「でも下まで降りないといけないのよねー」

「下りる前にお店の人通じてこの上の人に協力してもらえばいいん
じやにやいですか？」

「やだ！　頭良いわね！」

それなら僕もう帰って良いんじゃないの？

「安心してたらお腹空いてきましたにや！　とにかくみんなでもう一
品二品分け合って食べておいしそうなデザートも食べますにや。」

ぜーたくなランチ食べますにや、クリスマスなのにお仕事で寂しいで
すし………ですし………」

「おいしいもの食べて忘れましょ!!!」

あー、そう言えばクリスマス……正確にはイヴだけこの国の風習
的には何故かイヴが恋人の日になってるもんね。

アイドルと言えども年頃の女の子だからやっぱりそう言うのが良いんだ。

……それ、一般人の僕の前で言っても良いの？

そう思うけど多分巻き込んだから良いよねってちよつと気が抜けてるんだらうな。

聞かなかったことにしてあげよう。

別に誰かにばらす楽しみは持ち合わせていないし。

「小皿なら3つ4つ行けちゃう？」

「あ、これ！ これさつき食べたって思ったんですにや!!」

ふたりでメニューを開いてあれもいいこれもいいって相談し合っているのを眺める僕。

僕は要らないんだけどなあ……頭数に入ってるんだらうな、一応お礼ってことになってるし。

……僕のお腹、家に着くまで無事だらうか。

3ヶ月ぶりの食事がこんなに豪華だとお腹壊してもおかしくないもん。

「あ、そうですにや」

しゃべらないためにちみちみ食べていた僕は「食べてるからあんまりお話しできません」って顔で見上げてみると、メニューに指を指したままの緑メガネさんと目が合った。

あ、派手なマニキュア。

さすがはアイドルだ。

あと黒い髪の毛に緑色のメガネって合うなあ……髪の毛も深い緑が混じってる感じだし。

黒に黒で暗い雰囲気やさよにもフレームだけでも変えるよう提案してみようかな。

なんなら赤系統とか似合いそうだしな、さよさんの落ちついた雰囲気に。

人の印象なんて小物で結構変わるんだから。

かがりに無理やり着けさせられたストラップとかバッヂを見せびらかさせられながら歩いているとすごく見られるし、かなりの頻度で

声かけられるしなあ……「かわいい妹さんですね！」って。

「これとこれとこれとこれをみんな分けて……そういえばここに来るまでは急いでいましたし、ここに来たら来たで食べるのに夢中で『なんだか変だにや?』って思ったままで忘れちゃっていたんですけど、自己紹介、お互いの……まだでしたにや? 多分」

「あ、ほんと。名前教えてもいかなかったし聞いてもいかなかったもんねえ。 私たちのはともかく」

「どーりでなんだか声をかけにくいつて思っていましたにや」

「えー、まっず。暴漢から襲われていた私たちを助けてくれた恩人なのにそれも忘れていたなんて……トップアイドルとして失格になるところだったわー!」

「いつそのこと名前知られない方が楽だった……ああいや萩村さんと今井さん経由で知られちゃうかあ……」

「まー、フツーだった前と比べると今はブーストかけられてますけどにやー。 トクベツな立場ですもんにやー?」

「いいのよ、偶然とはいえ私たちのものだもの。使わない手はないでしょ?」

女の子同士の会話って自分たちの世界に入るよね。

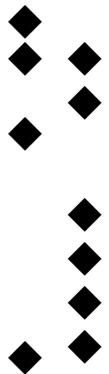
「少なくとも男同士より平気で知らない話混ぜてくるって学習したもん。」

「そーですけどー、知らない人たちに『ずるい』って言われるのは毎度のことながらイヤなんですにや……ネットで書かれるのはともかく、特に先輩方にすれ違いざまとか会話の途中にさりげなくぼそつて言われるの……ああ、思い出しただけでも向けられるヘイトで胃が……胃がですにや……」

「諦めなさい? 有名ってだけでなにしたってなにか言われるんだから。むしろ守られている分そのくらいしか手出しされないんだからガマンよガマン」

「さすがは大先輩、肝の据わりようがすごいですにや」

「やつかみなんて浴びすぎるとかえって気持ちいいのよねー。 あ、実害出るのは事前に対処するのよ? 何かありそうだって思ったら



「……………」

「……………」

2人の声が聞こえているはずなのに聞こえない。

五感が薄い。

薄っぺらい。

偽物みたい。

あの夢の中で味わったばかりの、このイヤな感覚。

それが僕を包んで離さなくつてもはや目の前のふたりの会話は耳に入らない。

夢の世界、あつちから離れるときもそうだった。

しゃべっていること自体は分かるのに何をどんな声で話しているのかが分からないっていう状況。

ふたりの顔も目の前の料理も部屋のお金がかかっているらしい内装とかも、そのぜんぶがどこかぼやけていて、ずつとつてわけじやないけどアナログ的なモノクロの縦線とか横線とかが入っていて、つまりはすり切れてぼやけたビデオテープみたいになっていて。

……ここは夢の中じやないはずなのに。

現実の家の外で他人と会っている……はず、なのに。

いや、もしかしてここもまだ夢の続きなのかもしれない。

そうも思ってみるけど夢じやなかった方がやばいから今は現実だっと思っておこう。

夢落ちなら安心できるけどそうじやなかったらやばい。

「ふぐ……」

学生時代に机に向かってうとうととしてきたけど寝ちやいけないときみたい歯を食いしばって手とかお腹に力をぎゅつと入れて息と止めてみたりして1秒でも長く起きていようってがんばる。

こんなところで寝ちやったら大変だ。

力が抜け過ぎて……意識がないもんだから勢いよく顔からテーブルに突っ伏したりイスから落ちちやったりしたらとんでもないことになる。

学生なら「そこまで寝るやつがあるか」って笑うだけだけど今は幼女な僕の体だし意識失って受け身取れないとケガするかもしれないし。

そんなことになって「大丈夫!？」って起こされても目を覚まさないかったりしたら匿うどころの話じゃなくなつて救急車とかの大騒動になるのは確実。

それだけは避けたい。

せつかく機転が利いて助けたのにそれじゃあかえつて申し訳ないことになって、だったら初めつから気がつかないフリをして隅っこで知らんぷりをしてた方がお互いに幸せだったってことになつちやう。

せつかくこうして疲れてまで僕がしたことが無意味になる。

それは嫌。

わざわざ脱いだのに脱ぎ損じやないか。

「……………」

……いやいや僕は男なんだから別に見られるのは心底どうでもいいことのはずなんだけど、せつかく珍しく人のためにがんばつてみようつてした僕の気持ち全部ムダになつちやうのは嫌なんだ。

がんばつて踏ん張るおかげでなんとか意識だけは残つてるらしい。

……僕が反応していないはずなのにふたりとも気がついていないのを見るに、魔法さんの仕業つて証拠が積み上がっていく。

でももしこのまま気を失つちやったら……病院に運ばれて検査とかされて体に異常がないつてわかつたら。

そのあとはただ入院させられて目が覚めるのを待つだけになるんだろう。

「使うかも……」って思っていたから免許も財布の中にあるから身元がすぐに分かつちやうわけで……僕が意識を失っている以上、ここでまさかの誘拐疑惑で全部がおじゃんなんだ。

だって魔法さんの力、今の僕を前の僕だって誤解させる力は僕が意図的に使わないと……意識があつて僕から働きかけない限りは前から知っている人以外には効果がないっぽいし。

だから点滴とかして僕が起きるのを待っているあいだ、ヘタをすれば家の中にまで……カギもポケットに入っているし……入られて調べられてっていう大ごとになるかもしれないし。

絶対になる。

だって幼女……に限らず未成年だもん。

あ、いや、大人だろうと意識不明ならそうなるか。

まあ冬眠のときみたいに魔法さんが都合よくやり過ごしてくれてるっていう可能性もそれなりにはあるんだけど確実じゃない。

それにこの子たちにも……えっと、猫さんが島っぽい名前な島子さんでポニーさんが岩本さん……危機感から初対面で名前を覚えちゃったらしい僕をほめたいけど今はそれどころじゃないし、とにかくこの子たちにもとんでもない迷惑をかけてしまうのには変わりない。

彼女たちにしてみれば初めて会った僕が……よく考えたらようやくの自己紹介中だったからまだ名前も教えていないし……住所とか連絡先も知らない相手がいきなり昏倒とかしたら、そりゃあびびる。びびるどころじゃないか。

それに……スマホの中味からゆりかたちに連絡とかが行っちゃったら、3ヶ月音信不通だった僕がなぜカレストランで倒れていて「身内がわからぬ」と呼ばれて、見てみたらびっくりするくらい痩せていて心配させて。

けど僕の、いるはずの親とかの連絡先は誰ひとり知らなくってみんなが「？」ってなる。

だって家は男な僕の名義だし、お隣さんは魔法さんのせいでこんな幼女を成人男性って言い張る謎のお母さんになっちゃう。

いくらなんでも悲惨すぎる。

しかも今度は病院で介護されるもんだから……必要はないのに点滴とか心電図とかのケーブルとか管まみれにさせられて無理やり栄

養補給と排泄とかさせられて体を拭かれて、つまりは寝たきりのケアってやつをさせられて。

意識が戻ったらあっちこっち穴ぼこだらけになった上に今度は質問攻めだろう。

それはもう厄介っていうレベルじゃないくらいに取り調べる感じがなくなるはず。

……ああ、考えれば考えるほどに事態が転げ落ちていく。

もっと悪い想像しちゃうとその騒ぎでまだこの辺をうろろしているはずの追っ手の人たちがこの子たちを見つけちゃう可能性さえあるんだ。

どう考えてもおしまいだ。

どうしよう。

◆◆◆

どうしようもないよね……だって制御不可能な力だもん。

そう思って諦めが入って来た僕はふと気がつく。

ここから先のやつ、意識が遠のいたりよくわからない光の狭いところを抜ける感覚とか、これ以上砂嵐がひどくなるっていうあのときの感覚が無いなって。

あれえ……？

「……………」

両手でにぎにぎぺたぺたさわさわしてみる。

……手のひらと指の感覚から触ったところまで、ちゃんと確かにある。

感じられる。

試しに目の前のお茶をすすってみる。

「……………」

一口食べてみる。

「もむ」

……食器を触った感覚がある、味覚も、嗅覚もある。

ごくんと飲み込めばお腹の中に送られる感覚も……たぶん、ある。

……なんかよく知らない内に収まってきてる……？

いや、でもおかしな感じは続いてるし……うーん？

あ、冷や汗かいてる。

こめかみとか背中をつつと流れているイヤな感覚。

感覚がここまであるんならきつとまだ大丈夫だって思いたい。

あの夢だったらこうした不快感までは一切なかったから違うんだって。

汗とか疲れとか、今感じているように頭から血の気が引ききつっているイヤな感覚とか。

そんなことを思いつつもいくら待ってもなにも起こる気配がなく……人って変化がないと落ち着いてくるらしくってだんだん冷静になってきたから目の前のふたり、ポニーさんな岩本さんと猫メガネさんな島子さんを見てみる。

よく観察してみると、そのふたりが会話している相手のはずの僕が相づちどころか返事どころか反応さえなんにもしていないのにそれをおかしいとは思っていないみたいで。

それどころか僕が返事したり話しているのを聞いているかのようになそぶりさえ見せていて。

……雰囲気から察するに、さっきの自己紹介のあとの会話ってやつ……っていか説明っぽい感じだけどそれを続けているらしい。

僕が話していないのに、目の前の人たちにとつての僕は普通に話している。

まるで「僕じゃない誰かと話している」感じ。

それは……すつごく怖いもの。

僕の体が知らない僕に乗っ取られている……あるいは「この体の持ち主」な女の子かもしれないって思う。

「……………」

……でも、今日がんばったのは僕なんだ。

起きたら3ヶ月経っていて冷蔵庫が悲惨なことになっていてがんばって掃除してお風呂入って、寒い思いしてタクシー乗って服を揃えて……この子たちを助けたのは、この僕なんだ。

それを全部取られるなんて嫌だ。

だから……返して貰おう。

34話 魔法と抵抗と「NEKO」 2 / 4

魔法さんが何かしら悪さをしてのこの状況。

あの夢の中でもおんなじ感じだったけど……あのとき僕は何もできなかつた。

けどここは現実、何もできないじゃ無くてなんとかしなきゃいけない。

「……………」

目の前の2人は普通の会話をしているみたいな感じだけど、まだ僕からはぼんやりしてる。

なんだかときどきボケとツツコミを……たぶんふたりで組むときにはこうしてやってっているんだろっていう感じで年季の入っている印象を受ける掛け合いをしている様子。

声がまったく聞こえないわけではないんだけど理解ができない感じ。

まったく知らない国の人たちが近くの席でしゃべっているのを聞いている、そんな感じ。

雰囲気的に……多分だけどきどきの自己紹介が続いているっぽい？

まだ僕の名前も言ってないのにどうやって進むんだろっていうけどなんとかなっているんだろう。

普通のテンポで普通の会話をしているらしいことからふたりとも僕のことをおかしいうって思っていないのは確かだ。

けど、自己紹介。

……もしかしたらこれが魔法さんの逆鱗に触れちゃった可能性があるあるかもな。

だって「僕は男」って言っただけでみんな変になるんだ、それ以外にも何かあるかもしれない。

今までたまたま……会話の内容的に大丈夫だっただけで。

「僕が男」って言うのはこの姿とすごく矛盾すること。

だから魔法さんが変なことするんだって考えてみると彼女たちの自己紹介の中で出てきた何か引つかかったって考えることもできる。

でもこれまでももまた違うものらしい。

だってふたりともおかしな目になってないし、話しすぎて汗だくになったりしてないもんな。

3ヶ月の冬眠で変な夢に入るときと出るときあの感じに近い気もするけどどうかは分からないし……ってことはあの夢すらも別の魔法ってことになるのか……ややこしい。

あれ、でも僕が黙りこくってるのに全然気にしている風がない？

そうなることやっぱり男って言ったときのと近いのかな。

あれなら僕がどんな状態でもおかしいとは思わないだろうし。

……：こんがらがってきちゃったから、とりあえずで今の魔法は僕がどんな姿でどんなことをしていようと気にならないって言う「他人の僕に対する認識を歪めるような作用」をしているものだって思っただけ。

相変わらず因果関係が不明だし流れ的には今までの逆だけど、とりあえずで。

じーっとふたりの顔を交互に見つめていたらなんかピントが合ってきた感じで普通に見えるようになったけど状況は変わらず。

「じー……」

1分くらい必死に見つめてみたけども不審がる様子もないから多分変な顔していても気がつかれないだろう……あ、目が乾いて潤んできた。

そうして目がしばしばしてきた僕のことなんか気がつかないで、島子さんと岩本さんは楽しくお話ししているらしい。

そう言えば途中でできたらしい追加の料理も僕に向けて「食べるでしょ？」って感じの会話になったらしいジェスチャーとイントネーションがあつて、でも多分「要らないです」って言ったってことになつたみたいで「しょうがないなあ」って感じで喜んで平らげている。

女の子って想像以上に食べるよね……あ、いや、この子たちは運動

の後だし？

僕だったらこれだけで3日分くらいの食事にできそうな量まである。

消費エネルギー、ほんと少ないからな。

コスパ、燃費のいい体だし、幼女だし。

アスリートの人とかは筋肉がエネルギーを使いすぎるからたくさん食べないと体が持たないらしいって言うけど、きつと鍛えているだろうこの子たちもそういうものなのかもね。

まだ10代でまだまだ成長期だろうし。

その状況でさらに頼んだらしいケーキとプリンみたいなデザートをひとつずつ食べているのは驚きを通り越したなにかを感じるしかないけども。

気がつけば僕の前にも頼んでもいないのに置かれているし……あれ？

なんで？

ああ……きつと魔法さんが悪さをしているあいだに頼んだことになっていたんだろう。

空いてるお皿を下げに来た店員さんの動きを見ていると……魔法さんは少なくともこの部屋全体には効果を及ぼすらしいのが分かる。

「……ありがとうございます」

「……」

試しにってお水を注いでくれた店員さんに話しかけてみる。

水の中で出したような感じに聞こえたような僕の声と会釈に店員さんもまた笑顔を返してくれてなにかを答えてくれたみたい。

……この魔法がかかっている話せば通じる……っほい……？

これ以上へんなことになったら困るからへ々なことは言えないけど何とかできる可能性はあるのか。

あと、僕の前に置かれているビターチョコでお酒入りなケーキ。

これは甘いものが苦手な僕にとってはまだマシなほうのデザートのひとつだ。

でもそれが、僕が頼んだかのように用意されている。

……僕が話したってことになってる……？

猫な島子さんやポニーっぽい岩本さんの手元を見てみると実に甘ったるそうなデザートとプリンがでんと置かれていてもう半分くらい食べられている。

ふたりのを見る限りには僕の分は適当に選んだってわけじゃないって、きちんと話の流れの中で僕が食べたいものを頼んだっていうことになっているみたい。

だって甘い物好きなのが多い女の子だからわざわざこういう苦いのを食べようって思う子、少なくとも今までは出会ったことないし……まあ数が少なすぎるのはしょうがないとしても女の子って大体甘いのが好きだから。

だから僕の好みは魔法さん経由でどうにかしてふたりと店員さんに伝わって、きつと「甘いもの苦手だなんて珍しいねー」なんて会話が あったんだろう。

時計を見てみると15分以上は経っているらしいのが確認できる。

ということはあと同じくらいしたらお店を出て地下に……つてことになる。

「……………！」

「……………？」

ちよつと観察してみたけど……だめだ、おひげこそ生えていないもののアクセサリーと語尾のインパクトでどう見ても猫っぽい顔にしか見えない島子さんのなんだかこれもまた猫っぽい感じの口元を見ていても、ちよつと口紅がキラキラしている岩本さんの唇を見ていてもせいぜいが母音がわかる程度で話の内容まではわからない。

くるくる変わるふたりの表情とイントネーションとジェスチャーでなんらかの説明とかコントとか質問とかされているらしくって、変な顔しないから僕もちやんと返事したことになってる様子。

でもどしたら……うん？

なにか忘れてる気がする。

なんだろう？

なにか。

「……………」

「…はいえば確か。」

——飛川さんに対して僕が「前の僕が男でしたよね？」って言ったとき。

——スーパーとかで僕が「成人してます」って免許見せながら言ったとき。

どっちでも僕が話したから前の状況が変わった……上書きされた？

……それなら。

「……あの、すみません」

「……………」

「……………」

相変わらずに理解できないふたりの話す声。

だけど注意が僕にはつきりと向けられていて耳を澄ませているのだけはわかる。

……これもお隣さんのときとおんなじだ。

なら。

「あの……話の途中で流れを切ってしまっって申し訳ないんですけど、どうしてもひとつだけ伝えておかないとって思いました」

「……………」

「……………」

「……………」

「何？」「何だろ？」そんな反応。

岩本さんのポニーテールが傾き、島子さんのしっぽがくるんとはてなになる。

……やっぱり僕が言ったことは通じている……なら大丈夫。

これ以上に悪いことになるなんて多分きつと無い……はずだといいな。

手のひらの汗を膝にしいた布……高い店だとナプキンまですべすべだよなあ……に吸い込ませて「ほっ」と息をついて。

心臓がばくばくしているのを、これだけははつきりとしているのを

感じながら演技してみる。

僕が普通なら言わないようなこと。

もう慣れきってるから僕的にはどうでもいいこと。

でもきつと他の人が聞いたら「そりゃあ据えかねて話の途中で怒るよね」って思うようなこと。

——魔法さんが動くはずの認識。

「さっきから女の子の子供って……これまで言わなかった僕も悪いんですけど、僕は——「男」、なんです。　こう見えても、男なんです」

そう言った途端にさあつと波が退くような感覚。

そうして僕は——中途半端な夢の中みたいな状況から戻って来られたって感覚で理解した。

34話 魔法と抵抗と「NEKO」 3/4

貧血のあとにだんだんというろ戻って来る感じのあの感覚を味わいつつ、ふと思う。

あれ……ひよつとして僕が男つてのを知り合いに言ったのつて、前の僕を知っていた飛川奥さん以外で初めてかも？

この子たちも……名乗り合ったからには知り合いで良いよね、うん。

この春までの僕なら顔見知りつて言つてただろうけど、あの子たちに揉まれた僕は少しだけ知り合いのハードルが下がっているんだ。

で、冬物とは言つても女児用の服だからやっぱリズボン……じゃないパンツでも女の子に見えるはずだけど、だからこそ唐突に言つてもおかしくない話つて思つたんだ。

肉体上は紛れもなく生えてもいない……毛もモノも生えてない幼女なわけで、そこには知らない穴があるわけで、だから常識的には女の子。

でも中身は男だつてはつきりと口に出したのは今まではなかったわけで。

あの子たちへの告白の予行演習を兼ねて、どうにかして魔法さんから逃れようとして……お隣さんのときみたいに魔法さんが激怒しそうなことを口にしてみる博打。

……でも、何か変化を起こすにはこれしかなかつたんだ。

実際に起きているし、「男」つて言うのはやっぱりひとつのキーワードなんだろうな。

男から女になった訳だし……あくまでキーワードのひとつなんだろうけども。

そうしてさーつという音が引いたあとには……不意の静寂。

耳が痛いほどの静けさが僕を襲う。

「なんでこんなに静かなんだろ」つて思つて探つてみたら、どうやらさつきまでのざあざあちりちりしていた感覚も、ちみちみとかざーつていうあれも、理解不能な言葉で会話していたらしい僕たちの声のど

れもが止まっついて、静止していて。

……今度は何が起きる。

そう身構えていても何かが起きる気配は無い……みたい？

それどころか——魔法さんが引いて行った、そんな気配。

確証なんか全然無いのに元に戻ったって言う謎の理解が僕を包む。

そうして恐る恐るで目の前の2人に視線をやってみる。

——猫耳としっぽを千切れんばかりに真上に突き出して……あ、ちゃんと毛まで逆立つんだ、技術の進歩はすごいなあ……口をあんぐりと開けている島子さんと、こつちに指を突き出して口をぱくぱくとして声にならない声を上げて……いないけど声なき声を上げている岩本さん。

「……………!!」

「……………?!?!」

2人とも固まって驚いている様子。

指先とねこみみの先としっぽの先がゆらゆらしている。

人がここまで驚くつてのはそうそうないこと。

だから多分2人にさっきの告白が聞こえたって解釈できる。

僕が、体はともかく心は男っていうこの真実。

このご時世……じゃなくてもびっくりする内容だもんね。

「……………え、ウソ……冗談です、にや?」

「本当です。冗談ではなく、僕は男なんです」

ちゃんと——言葉が聞こえるようになってる。

やっぱり魔法さんの謎のあれは無くなっている?

……良かった……また3ヶ月とかっていう確証は無いけど寝ちやわないうって言う確証も無かったから……本当に良かった。

「本当……あれ? でもですよ……?」

「……あ、あつはは——! 響さんは冗談上手ですねー?」

急に声を上げるポニーさん。

「私たち、瞬リアクションに困っちゃいましたよー、いきなりですもん! あ、いえ、もしかしてあえての不思議系ってことでそういうトクとか……ちよつと心変わりしたとか……オーディションのつもり

だったりしますー？ もちろんいつでもOKだと思いますよー？
あ、あは、あははは……」

「……先輩？ 昔じゃあるまいしその反応はないって思いますにやあ……」

「……………ごめんなさい。 その、どう言っただけか分からなくなっ
てね……」

……魔法さんって制御、できるんだ……って、ん？

あれ、今岩本さんが僕のこと名前で呼んできた？

まだ僕の自己紹介……ああ、さっきの会話は本当に続いていたの
か。

そうだよね、ふたりが変な顔しなかったってことはあの後本来あつ
たはずの自己紹介の流れで当然僕の名前とか、最近慣れてきたワケあ
りの中学生な事情とかもひととお話ししたことになるんだろうし。

2人がおかしいって思わないってことはそういう会話の流れに
なっているはずだ。

ということは僕の口が自然と、あのとときの飛川さんみたいに……で
も多分違和感を与えない感じの態度のまま魔法さんが話させてい
たんだろうか。

あるいは乗っ取って？

……………怖っ。

「……………ええと、唐突に済みませんでした。 驚かせてしまって」

「え、ええ、まあ……………ね？」

「にやあ……」

びつくりするよね……そのために言ったんだし。

初対面の相手、どう見ても顔も髪の毛も服装も女の子な子供がが
「実は男なんですけどー」とか会話をぶった切って不満そうに言い出
したらなあ。

別にこの場でわざわざこの2人に言うことじゃなかったんだけど
必要だったし……でも悪いなって思う。

「これで助けたのと帳消しで充分ですよ」って言ってみようか……い
やいや、最近はこういうのに敏感だからそういう訳にもいかないか。

「……………普段は、その」

唐突に「男なんですけどどうしてくれるんです？」的な印象になっちゃってるっぽいからそれっぽい理由も言ってみる。

芸能界の人だからこういうのってほっとくとやばいんだろうしな。人ってそれっぽい理由があれば結構納得してくれるものだから。

僕のニート生活も「本当にしたい仕事を探しているんです……」で何年も切り抜けてきたんだし。

「僕は女の子扱いされていても……こんな見た目でこんな格好ですし、慣れているんです。普段はそこまで気にしないんです。なので平気なんですけど、最近ちよつとこのことで……いろいろあって。おふたりのせいじゃなくてただただ僕の気が立っていたので。

先ほど追いかけて来たあの人たちのことにも腹が立っていたので……済みませんでした。もう平気です」

よし、それっぽい感じのをうまく言えた。

子供なら癩癩くらい起こすものだから多分納得するだろう。

多分僕はちよつと精神年齢高めな子供って見られてるから多分大丈夫。

僕が逆の立場なら「すぐに謝れて偉いなあ」って思うだろうし。

「……………うん。 よーし、分かった!」

ぱんつと両手を叩いて急に声の調子を元に戻したポニーさん。

……こういうところは本当に芸能人なんだ。

「びっくりはしたけどさ、よくよく思い返してみるとさ？ 私たち、何度も響さんが女の子だって思っているいろんなと言ったけど、響さん自身はひとつこともそうだって言っていないなかったもんねえ。 私たちこそごめんね？ 気がつけなくて……無神経なこと言ったら本当にごめん!」

「私もごめんなさいですよにやっ」

大人だなあ……やっぱり人生経験値が違うんだろうなあ。

僕はニートで学生のまま止まって、2人は小学校か中学校から社会の荒波に揉まれて。

本当、今の見た目そのまんまな関係だもんな。

「いえ、僕はそう言われるのに慣れてはいるんです。　なにより事実ですし……今のはその、僕が……」

「男の子を女の子扱いしてたら当然ですよ、謝る必要ありませんにや?」

「そうよねー。　……さつきからときどきあきれたような、ちよつと怒ったような。　そんな感じの視線を感じたのってこれだったのかあ……そりゃあ言いにくいよねえ」

……僕が魔法さんになにかされていたときの印象はそんな感じだったらしい。

「むしろ言ってくれてありがと。　そうよね、時代が違うものね。

気をつけていても決めつけちゃうって結構あるって知ってたつもりなのになあ」

「私たちこそが気がつかなきやいけませんでしたにやあ」

すっかり砕けている……わざとだって思うけど、そんな感じで明るく話してくれているふたり。

……ああ、大人と話すのは気が楽。

普段は僕が子供たち……って言ってもこの子たちといくつも変わらない中学生なんだけど……の面倒見てるからなあ……。

「あれ?　でもですよにや?」

くるんつと尻尾がハテナっぽい形になる。

「さつき私たちがかばってくれたとき……あ、見えちゃったのでごめんなさいですけど、ブラとかつけてましたし見えちゃったのもショーツでしたにや?　あと毛糸のあったかそうな……ごめんなさいですよ」

「え、えつと」

……そっか、男って言ったたらそうなるか。

さつきはなんにも考えずにやったからなあ……色仕掛け。

色気なんて皆無な体だけでも。

「シャツの裾から下ガン見してた先輩、どうだったんですにや?」

「そこまでは見てないよ!」

「ほんとーですかにや?　怪しい……」

「本当だって！ それどころじゃなかったし、それに私だって女の子って思っていたから！」

「せんぱーい。響さんがちゃんと話してくれたんですじゃ？ 不公平ですよ……？」

「……ちよつと、こういう男の子ってどんなの穿いてるんだろって思っで見ちゃいました……」

「シヨ、シヨタコン……うわあ……」

わざと……なんだろう会話をしているふたり。

「先輩」って言うからには後輩な猫さんにとっては私情も含まれていそうだけど。

「尊敬する先輩、毎年クリスマスは欠かさずファンの前に居た理由がそれって……法律的にも倫理的にも道德的にもアウトな相手が良いからって……うわあ……」

「引かないで、お願いだから。 うん、ほんと。 違うのよ」

「お相手は中学生ですよ？」

「あのときはそうとは知らなかったし！ いえ、むしろその方がまだ年が近い分！ それに男の子は真剣な交際なら15からセーフって……あ……」

「ドン引きですよ」

「誤解なのっ」

「そーゆーの今どきアウトですよ」

「だから違うの!? ひ、響さんも違うからねー??」

何やら本気でドン引いて引かれているふたりを見てみると安心してきた。

シヨタコンってロリコンよりずっとマシなもの……って言うのは僕の感性で、ひよつとしたら最近の若い子……いや、今の僕もそうなんだけど……たち、それも女子の中では違うのかもね。

猫島子さんが岩本さんからがたがたってイスごと距離を取っている。

……ここまで演技ならって言うか多分そうなんだろうけど、確かに気が楽になる辺り本物は違うなってしまう。

でも……男って言いながら女物の下着。

これはどう言い訳したらいいんだろうね。

……この歳にして女装趣味とかややこしい誤解されるより本当のことを分かりやすく言った方が良いか。

女の子の体に男の心。

そういうのは……本当にそのせいで苦しんでいる人たちには悪いけど、今の僕も似た状況な以上こう言うしかない。

「……僕は、その……いわゆる心と体の性別が、意識が違うというもので」

「ああ、性同一性障害、トランスジェンダー……そこまで詳しくないの
でびったりじゃないかもですけどそういうものですかにや？　つまりは男の子ってことなんですかにや？」

「……そうです」

「それなら私の友だちとか知り合いとかにもいますしそれ以上言わなくても大丈夫ですよ。　業界的にも多分普通の人たちよりも多い比率ですし、カミングアウトとか珍しくありませんし」

あっさりと納得している様子。

……時代が違うって本当なんだな。

少なくとも僕の子供のころにはここまでじゃなかったって思うし。でも、そうか。

女の子の体で男の心で、「どっちの性別が良い？」って聞かれたら「どっちでも良いけど強いて言えば男」っていうこの状態のこと。

今なら……こんなにも簡単に。

拍子抜けな気もするけど……でもそうだよ、こんなデリケートな問題深入りしないもんね。

でもどうして魔法さんがこんなので反応するんだか……助かったけど。

34話 魔法と抵抗と「NEKO」 4 / 4

性同一性障害とかトランスジェンダー。

本当の人には悪いけど、僕だって今はそんな状況。

だから人に分かりやすい例えとして使わせてもらう。

よく考えたら初めからこの言葉を調べておけば良かったんだって気がついた。

特にかがりとかに對して言っておけば着せ替え人形にならなくて良かったんだろうって。

この言葉も概念も知識として知ってはいたんだし、思い出せていれば今までの苦労の大半はさらっと片付いていたはずなのにつけてしよげる。

見た目通りの女の子らしくなる研究とかしなくても……いや、あれはあれで……いやいややっぱり良くない気がする。

「でも本当にごめんね？ そんな他人……初対面の私たちにも話しくいこと言わせちゃって。 後でこの子の耳でもしつぽでも好きに弄っているから許してね？」

動いている猫耳と尻尾？

もちろん許すけど？

「人を売らないでくださいにや！ というか同罪ですよ？」

「だって私にはそんなもふもふ生えていないしー？ 年上とはいえ女の子のねこみみとしつぽよ？ 男の子なら余計に、ね？」

この人……僕が男だって言ってから余計におねえさん振ろうってしてない……？

一応僕の方が年上なんだけど……？

なんでみんな僕に向かってそうするの……？

……小さいからだよね、知ってた……。

「なら触らせてあげたら良いんですにや、その髪の毛とかそのいっつもわざと見せびらかしているムダな脂肪とか」

「なに言ってるのまさきちゃん!? 男の子の前なんだって！」

む、いけない。

女の子同士の軽くセンチティブな話題に入りかけている。

僕はそういうのが苦手なんだ、ここは無理やり話を戻そう。

「僕の体は、肉体は女なんです。でも心は男なのでそういうのも苦手です」

「んもー、マジメさんですよ。でも中学生男子ならそんなもんですかにや？ あ、だったらこそせんぱいのお胸とか」

「み・さ・き・き・ちゃん？」

「にゃー！」

「戻せなかった……あ、いや、「こほん」ってしてるし戻してくれそう？」

「みさきちゃんが暴走しかけちゃったけど……でもなるほど、それで納得が行きました。だから最初にぱつと見た感じが男の子だったんですね」

「あー、確かにですよにゃ？」

「髪の毛がそんなに長くてもなんだかそう見えたんですよー、あの目が合ったとき」

「……そんなに目が良いんですか？」

「あ、合ってたなかった？」

「いえ、僕は合ってたって思いましたけど」

「私も『そう感じた』から……ほら、人の視線って肌で分かるものだし？」

僕は小学生からメガネ……今は無くなってんだけど……だったから目が良い人の感覚が分からないけど、どうやら見えていたらしい。

……小さいころから近視とか乱視とか無い人ってぜんぜん違う感覚なんだろうなあ。

今の僕だって目が良くなってるけど「見えちゃ行けないんじゃないか」って脳みそが錯覚起こすことあるし。

「遠すぎてそこまで気が回らなかったのかもしれないけどねー、でも私の勘違いで押しかけなくて良かったかな。……にしても良かった！」

「何がですか？」

「うん……あ、これはさつきみたいなの勧誘じゃないからね？ 念のためめにね？」

「はあ」

「どうせだから言っちゃうんだけど……『もし君が女の子だったとしたら』、どう考えても将来的に私がアイドルしているのが恥ずかしく……ううん、女として嫉妬しちやいな成長するんだろうなあって思っちゃってね？ 異性だって思えばため息出るくらいだけど、同性だと……ねえ？ 妬いちゃう感情ってしつこいから」

「……勧誘ではないんですね？」

「褒めちぎりからの勧誘じゃない！ 純粹に褒めてるのっ」

「そうですねー、男の子だから言いますが私もため息出ますからにやー？ モテモテですねー？」

……整ってる顔。

僕は美醜の区別があんまり付かないから分からないけど……この人たちの反応を見る限りそうなんだろうな。

僕から見たらすごく整ってる……多分世間一般的には「かわいい」アイドルの人たちなんだろうけども、でもやっぱりその感覚がよく分からないんだ。

「ま、ここまで違うと嫉妬もできなさそうだけど。 だってねえ？ 今の君が成長して……えっと、体が女の子でも男の子っぽくするんですよ？ だったらきつと中性的で、こう……すんごいことになりそうじゃない？」

「顔のお肌は子供、あ、ごめんなさいですよ、思春期でお肌が荒れ始める前ならともかく、その絹みたいなの……シルクみたいな髪の毛ってどーやって維持してるんですよ……知りたいですよ……」

「？ 知り合……友人の、女子の友達に聞いたとおりのケアくらいですけど」

「………素材ね」

「………素材ですよあ」

「………私たちも苦労しているのよ………」

「………大丈夫ですよ、分かりますよ………」

ふたりとも、僕の顔と髪の毛を眺めながら自分の顔とか髪の毛を弄りだしている。

……女の子にとって、女性にとって外見はとてもとても大切なもの。

それを理解している僕は黙ってすごそうとするけど……何か違和感がある。

なんだろう。

えっと、ちゃんとこの人たちには男って扱ってもらってるよね？

それで良いはずなんだけど。

「……………あ」

つぶやいた声は髪の毛の枝毛見つけて熱心な2人に届いていなかったみたい。

だけど……そうだ。

この子たちは今までの人たちみたいに僕のこと「男子だとは認識してはいても男性とは認識していない」んだ。

話してる内容からも僕のことを見た目通りに……さばを読んでの中学生としても、子供って表現してる。

でも、それはおかしいんだ。

だって僕は「大人の男」——前の僕に見えるはずなんだ。

お隣さんだってそうだったしご近所さんたちだってそうで……僕を知らない人たちだって、最初の何回かは免許とかわざわざ見せていたけど最後の方はめんどくさくなって、ただ口で「男なんです」って言っただけでもお酒を買えたりしたんだ。

なのに今はそうじゃないみたい？

でも大人の女性に向かって「大きくなったら……」とか言わないはずだからやっぱり少年として見られているんだ。

……ほんと、どうなってるんだろ……あの日に確かめて回ったときは確かに大人の男だって見られてたはずなのに……うーん。

考えれば考えるほどドツボにはまっていきそうだし、ひよつとしたら魔法さんが今はそういう気分なのかもしれない……だからとりあえずは放置しておこう。

そんなはずはないけど実際にそうなんだからしょうがない、今はそう思っておこう。

「あの、僕のことよりさっきのおはなしの続き、聞きたいんですけど。」

「……あ、いえ」

さっきの。

自己紹介の後のなにかについて。

その話題のときにさっきみたいにな状態になったんだった。

……だからまた魔法さんが出しゃばってくるかもしれないけどひよつとしたら今は疲れて休んでいるかもしれないし、もうどうにでもなれって諦めてくれてもいいかもしれないし。

怖いけど、またあなつても戻って来られる。

それは実証済みだから怖いけどがんばろう。

そうしないと……ああなつちやう原因が分からないと、また何ヶ月も寝たままになつちやうから。

どんどんみんなから置いて行かれちやうから。

「……僕、それについては初耳だったのであんまり理解が追いつかなかったんです」

「え？ でもそんなことって」

「あり得るんですかにゃ？」

……そこまで大切な話じゃなかった……？

いやでも魔法さんが発動したしな、せめてどんな話題だったかは知りたい。

「用語とかも知らないものばかりで……あ、僕は家庭の方針でテレビとかネットをあまりしないのでみんなが知っていることでも詳しくないんです。だから、実は聞いていてもさっぱりで……つい分からないまままで合わせてしまったんです。 済みません、僕の悪い癖がまた」

相手が話しているのにうわの空で適当に合わせちやう。

本当に悪い癖があるから事実なんだ。

「なので申し訳ないんですが、もういちど。 今度はちゃんと聞きますので、分からないところは訊ねますので。 ……初めて聞く、中学

生の僕にも分かりやすく教えていただけませんか？」

うん、なんか良い感じに言えた気がする。

「済みません、聞いていませんでした」つて言ったら普通の人なら怒るだろうけど……この子たちなら多分大丈夫。

あげた恩をここで使い切れれば良いんだ。

「……ああ、そうでしたにや、これは失礼しましたにや」

先に僕の言ったことを飲み込めたらしい島子さんが尻尾をぴんと伸ばして……触りたいな……僕を見る。

「秋からずっと『これ』についてインタビューとか取材とかワイドショーとかで解説する役割ばかりしていたので、初めの頃にしていったようなゼロからの、基礎からの説明っていうものがすっぽりと抜けていましたにや。 お家の方針でニュース見ないんならしようがないですよ。 あ、でも聞いても大丈夫なんですよ？ 今私たちが勝手に教えてお母さんとかお父さんに怒られませんかによ？」

「あ。 ……大丈夫だと思います」

「……いざつてときは連絡くださいにや、私たちが謝りに行きますにや」

「いえ、きつと大丈夫です」

この会話で僕の架空の両親がとんでもなく厳格な家庭つてことになつてる気がするけどもう居ないし良いや。

「僕も知らないままって言うのはやっぱり嫌なんです。 だからわからないままに適当な相づちを打っている途中から……せつかく話してくださいっているからにはきちんと聞きたいと思ひまして。 おふたりとも、お詳しいようですし。 ですから」

「——、え」
響さん。 君、ほんとうに中学生？」

どきつと——嘘をついているのを見抜かれたような感覚で、一瞬で頭から血が引く感覚。

「あ、いやね？ すつごく話し方が……ま、いっか。 長くなっちゃうと途中で迎えが来ちゃうし手短にだよ。 ……こほん！ それなら私の出番ね！」

「そういうことなら先輩にお任せですよ」

「任せました。 でね？ つい最近子ども向けの番組で子どもさんとお年寄り向けに……ちよつとだけですけどこれについて解説したので、きつとわかりやすく説明できると思います！」

教育番組のお姉さん、みたいなイントネーションで話し始める岩本さん。

……すごいなあ、話し方までガラって変わるなんて。

「じゃあ簡単に説明するから、途中でも良いから分からないところ……今後の番組とかでも助かるからどんどん質問してね？」

「はい」

「よしっ。 ……んんっ」

——これでようやく、僕の。

魔法さんの、幼女の、「これ」に関係のあるなにかについて普通の人
が知っているらしい知識——あるいは関係のあるそれを知ることができる。

「……？」

姿勢を正した教育番組のお姉さんの横には……猫さんが猫っぽい
ポーズを取っている。

え？

なんで？

「にゃんっ」

岩本さんに寄りかかるように横を向いて両手を「にゃん」ってしながらもたれかかって、背中のはけ反っていて、耳はぴくぴくと……すつごく早くいろんな方向に動かして、しっぽもくるくると丸めたり伸ばしたりして、それを片手に巻き付けていて。

……あの、僕、そういうマスコットが居なきや集中できないくらいの子供じやないんだけど……教育番組ならしょうがないのか……。

「それじゃあ説明しますね？ みさきちゃんと私が『かかった』、見た目が変わったり何かが生えちゃったりしちゃう、けどぜったいに人に移ったりはしなくて、遺伝とかでもないもの。 普通の人じゃなくなっちゃったからって言っても絶対にいじめたりしちゃういけない『病

「気じゃないナニカ」のこれについてです」

——見た目が変わったたり。

「いちばん分かりやすいのが『ねこみみ病』」

——ねこみみ病、……………つて、え？

「『病』つて言うけど病気じゃないのよ？　ただ最初にそう呼ばれていたから今も使ってるだけのただの名称なんです。　突然変異……まあ指が1本多い子みたいな感じかな？　とつても珍しいけど居なくはない感じ。　他には『ねこみみが生えちゃう症候群』とかもよく言われるんだ。　そのほかにもいろいろあるけど今は『ねこみみ病』つて呼びますね？」

ねこみみ？

生えちゃう？

……………??

「……………ごめんなさい、いつもみたいだとちよつとバカにしている感じになつちやいますかね」

「あ……………いえ」

「響さんは中学生ということでもう少し細かく説明しますと、英語圏では『NEKO』とか『NEKO—MIMI』とかもよく言われていますね……………まあ聞こえ方はほとんど同じですけど。　本来の意味なら猫つて言う単語の『Cat』とかになるはずなんですけど、こちらの呼び方がそのまま定着しているみたいで……………正式名称の代わりに『ねこみみ病』つて言ってるのと同じね。　まあコミカルになつているので私たちとしては助かる限りなんですけど」

「……………」

頭が着いて行っているのに追いつかないって言う珍しい感覚。

「おかげであちらさんの検索とかがどれくらいことになっていたりとかないとか。　あ、詳細な学術名とかは私たちもよく知らないつていうか発音しづらいから覚えていないの。　どうせ司会者さんがボード出してくれますし。　とにかくねこみみ、ねこみみなんですよ！」

「つまりは私に生えているこの耳！　がシンボルマークでトレードマークなんですにや」

「だからみさきちゃんは便利なのよねー」

「人を便利な猫って言うなですよ！」

「って言うのがいつもの流れなの」

「体が反応するレベルで染みつきましたにや」

島子さんのねこみみがすごい勢いでぴこぴこことあつちこつちへ向いている。

ついでにしっぽがそのねこみみを、頭の上のほうについているはずのそれをくると伸びて……指している。

ゆらゆら、ふさふさしている。

……どう見ても機械の動きじゃない。

自分の意思で、自分の体の一部として動かしている？

つまり岩本さんの今の説明は、嘘っぱちとか子ども相手のホラって
いうわけでもなくて、つまりは本当で——。

「……………え？」

どういうこと？

ねこみみ？

しっぽ？

ぐるぐるしてくる頭の中。

「おお——……ほんつとうに初耳だったんですね……」

「最初の頃はよくみんなそういう顔してましたにや！」

「そりやさっきの会話について行けないわけです。響さんは悪くないです、みんなが知ってるって思い込んでいた私たちが悪かったんです」

「人には事情がある……そうですね、知らない人もまだまだ居るんですよ？」

多分僕だけだっと思うけど……駄目だ、インパクトのせいで頭が。

「いろいろすつ飛ばして会話してましたしねえ……って言うかただのグチでしたもんねえ、これについての……怒られて当然です」

「……………いえ」

しっぽをペしりと岩本さんに振り下ろしている島子さん。

そしてそれをぐいっとなかまれて「にやー」とか言っている。

かわいいけど……それよりも。

一体どんなものかって思っただけで身構えていたのに……なんだそれ。子どもにも分かりやすいようにって、通称とか愛称とかそういうものだったとしても……あんまりな名前じゃないか。

身構えたのに力が抜けていく。

だってねこみみだよ？

魔法さんが僕を乗っ取るほどの何かなんだからきつと大層なものだっと思っただけ……ねこみみ。

目の前でぴこぴこ動いてる、島子さんのねこみみ。

……僕、ねこみみなんて生えてないよね？

尻尾も生えてないよね？

心配になっただけでこっさり触ってみただけで、僕の尾てい骨からは何も生えていなかった。

35話 「ねこみみ病」 1 / 7

「んっ……にゃ、にゃっ」

「……………ぐくっ」

「……………ほう……」

猫の耳——ねこみみとしっぽは確かに神経と繋がっていて体の一部になっているらしい。

だからこうして耳の……人のじゃない、猫の耳の先っぽやその先に生えている毛をくすぐるようにさわさわするだけで、髪の毛みたいにくすぐったいと感じるらしい。

「やあっ……………ふにゃ」

毛がやわつこい。

耳自体も柔らかい。

いや、耳なら人のだって柔らかいはずだけどこんなにはあつたかかないだろうし。

なによりも毛がまんべんなく生えているし。

総合的な触り心地は段違いだ。

僕はとても満足している。

「ふ、ふたりともー？　ちよーつと」

「……………ふむ」

「はにゃあっ!？」

その耳……ねこみみは1本1本が髪の毛とは違う質感を備えていて、地毛が黒な島子さんの髪の毛よりも薄い色をしている。

暗い緑色が混じってる感じだから……多分明るいところで見るとエメラルドグリーンな毛。

髪の毛に比べたら短いつていうのと、ちよつとかき分けたら地肌……猫の耳の地肌がこうなっているつていうのは初めて見たんだけど、とにかく地肌が見えるくらいには細かく生えていないから薄く見えるだけなのかもしれない。

あと地肌つて薄い色なんだな……お肌の色よりも白っぽいし。
非常に興味深い。

存分に触って良いって言われたから触ろう。

この歳になるまで猫とか飼わなかつたもんだから新鮮すぎるんだ。

「あ、あぁっ……………ひ、ひびきしゃぁん……………」

「すづ……………みさきちゃんが……………」

「くすぐったいなら止めますよっ」

「……………つづけて、え」

「良いんですね？」

「……………」

こくつと頷く猫さんを見て僕は手をまた動かし始める。

僕も子供のおときはくすぐったがりだった記憶がある。

だからそうだったら悪いから止めようかって思ったけど続けても良いって言われたし続けよう。

猫のヒゲはセンサーだとは知っていたけどどうやら耳だけでも敏感で、つまりはこうして僕が触っているだけでもくすぐったいらしい……………けど、不快じゃなくなって嫌じゃなくなって我慢できる程度……………ってことなんだよね、きつと。

ときどきもぞもぞしてるから声かけると「気にしないで良いんですよー！」って何回も言われたし、止めなくて良いらしいなら遠慮なく。

女の子にとって髪の毛は命。

それはあの子たちから毎回ののように髪の毛いじられてたからよく知ってる。

それで、この子のねこみみは髪の毛と一体化しているもの。

つまりは髪の毛。

だから本当に弱い力、どこかで聞いたフェザータッチで優しくしてあげている。

触らせてもらえるんだからこれくらいは配慮しないとね。

「んっ……………あ、あぁっ……………」

「あー、これはそのですねー、そのー！……………ねこみみ病だとグルーミングが！はい！必要なですよあつははははーっ」

おや、店員さんがお茶のおかわり持って来てくれてたらしい。

けどなんで個室の入り口で立ったまま僕たち見てるんだろ。

……ああ、きつとねこみみ病自体は知ってても知り合いにいないのかなのかな？

実際のどのくらいいるのか聞いてなかったけど……まあ多すぎるってことはないだろう。

「あ、真面目にこれケンゼンなやつなのでお願いですから書き込みとかしないでくださいね？ はい、いちおう政府からのご依頼なんで……はい、ほんつとすみません」

「んやあ……」

「ほんつとすみませんほんつとすみません、未成年に対してとかじやないんですほんとに!! 通報とかしないでくださいね、とつてもとつてもややこしいことになるので!! はい!!」

それにしても手触りが良い。

触るたびにぴくぴく生き物みたい……取れちゃわないか不安になるくらいにはぐるぐる回る。

僕の手から逃げようとしたり、けど逆に近づいてきてみたりしたり。

これは島子さんの意思そのものなんだろうか？

それともさつき聞いたような猫としての本能とかいう触られたがる習性が備わってしまったからなんだろうか。

興味深くてももしろい。

ずっと触っていたい。

「……ほどほどにね——……」

「？」

「……邪念がないから余計にかあ……なむなむ」

よく分からないけど店員さんはいなくなっていてポニーさんが両手を合わせている。

だからなんとなくで片手で触っていたのを両手にしてみて、両方のねこみみを軽くもみもみしてみる。

「ひゅあっ!?! ……ふーっ、ふーっ」

ちよつとくすぐったかったかな……けど目の前から離れないし、良いんだよね？

まあこの子も女の子だけど高校生だし腕力では圧倒的なんだから嫌だったらはねのけてどいてくれるだろうってとにかくモフる。

「んゆ……んゆっ……」

刺激に慣れてくるまでは毎回びくってなるけど、顔を見てみてもごくごくとうなずいてくれていているし問題なさそう。

なんとも言えない弾力が指に返ってくる。

柔らかくて温かくて気持ちいい感じの。

それにしても確かに動物の毛って触っていると気分が落ちついてきてなんだか穏やかな気持ちになってくるなあ。

アニマルセラピー？

そういう感じの。

昨日から今日までの3ヶ月でのストレスとここに来るまでの凍えそうなストレス、そしてさっきの魔法さんで3重のストレスを抱えた僕にとってはありがたいことこの上ないもの。

触っているだけで胸がぽかぽかしてくるっていうか本気で癒やされるし。

……ふたつの耳だけでこうなんだから、しっぽだとうなっっちゃうんだろう？

耳を堪能したらしっぽにも手出ししたいところだ。

「……………」

なんとなくでねこみみの内側へもほんのちよっぴり指を差し込んでみる。

……指を包んでくる、なんともいえない毛の集団の感覚。

「……………っ!!?」

「あ、ごめんなさい、痛かったですか？」

お耳に指突っ込んだ瞬間すごく毛がぶわってなったから心配になっただけ平気らしい。

ほんの少しだから大丈夫だって思ったんだけど……そんなにこそばゆかったのかな。

「……………響くーん？ ちょーっとストップ。 もーだめ」

「はい？」

「そのままだとみさきちゃん……………えっと、そう！ くすぐったくて!! 実はこの子いじっぱりでくすぐったいのくすぐったくないって言い張ってたから私も話し合わせてあげてただけだ!! でもやっぱりそろそろ危険そう……………そう、笑っちゃってお化粧崩れちゃったら困るから!! ね？」

「あ、はい。 そうですね、女の人はお化粧崩れたら大変ですものね」

「んうっ……………にゃあ」

名残惜しくお耳の穴から指を出して。

「……………すんすん」

「ふにゃあっ!？」

なんとなくで嗅いでみたけど……………なんて言うかクツキーみたいな匂い。

「……………ふにゃあ……………」

「……………あのさ？ ひとつ聞いて良い？ 響くん」

「はい、何でしょう」

「響くんって、その……………そういうの……………知ってるお年頃……………？ 中2って……………いえ、でも個人差があるって言うし……………」

「そういうの？ って？」

「ああいやどう見てもわかってなさそうだしいいや。 分かってこれやる悪い男の子でもないはずだし……………じゃあ説明の続きの打ち合わせ！ するからちよつとだけ待っててね？」

「はあ」

まだまだ触り足りなかった。

説明終わったらまた触らせてもらえるよね？

触って良いよって言うから触り始めたのに、でもやっぱり途中で駄目ってなつてがっかりした僕はしぶしぶ立ち上がる。

うずくまって……………身長差的に僕が島子さんのねこみみを触るためには、イスじゃなくって床でしゃがんでもらわないと駄目だったんだ……………そうしていた島子さんは確かに、くすぐったさを相当にガマンし

ていたのかかなり激しくなっていた息を整えつつ、真っ赤な顔をしながら僕を見上げてくる。

目じりに涙がにじんでいる。

そんな顔をした島子さんが、じーつと僕を見上げてくる。

「……にゃ、にゃあ……」

そんなにくすぐったかったんだったらさつきと止めてって言えばいいのに……本当にいじっぱり？

いや、1回「良いよ」って言ったけど意外とくすぐったさすぎて止めてって言えなかったのかも。

そう思うとちよつと悪い気がする。

なんだか顔にも汗かいているから後でお化粧って本当みたいだし。

「……大丈夫？ 立てる？」

「……な、なんとかあ……」

たったの2、3分モフっていたただけだったのに足が疲れたのか……いつもの僕みたいによじ登るようになってへろへろとイスに腰掛ける。

「……ふはあ……」

「済みません、もつと加減ができなくて」

「い、良いんですにゃ……ふう。それで響さん？ 今触ってもらって分かったって思いますけど、この耳もしっぽも本物ですにゃ？」

「はい」

ということはやつぱりしっぽも触らせてもらえるんだ。そんな希望が湧く。

彼女の、スカートに被さるようにしてぴこぴこしているそのしっぽ。

耳とはまたちがうだろう質感のそれ。

ぜひ堪能したいところだ。

早く終わらないかな、ねこみ病の説明。

いや、しつかり聞かなきゃいけないんだけど。

関係なさそうだけど魔法さんと関係あるんだろうそれを。

「この猫の耳も猫のしっぽも、どちらも造りは本物の猫がベースなん

ですにや。人間の細胞に猫のDNAを入れた感じできています……らしいですにや………んにゃあ!？」

「ちよ、ちよいちよい響くん!？」

「……………駄目ですか?」

思わずで手を出しちやった尻尾。

その尻尾もまたくすぐったいものだろうからって優しく両手でしゅるしゅるってしただけなのに……。

なんだかしつぽの先が僕の方に向いていたから「説明だけだと飽きるだろうし触ってもいいよ?」っていう合図だったのかと思ったのに残念だ。

「……………今は駄目ですにや」

「みさきちゃん?」

「……………今は駄目なんですにや」

「今だけじゃなくって尻尾はダメ」

えー。

「くすぐったいのが我慢できないって今日知ったのでごめんなさいですにや、響さん」

とつても残念だけど本人が言うんだつたらしようがないか……。

「……………えつとですにや? 触られた感覚………敏感なので毛先を撫でられるだけで寝ていても起きちゃうくらいだったりますし、このみつつめとよつつめの耳……あ、もちろんこの通り人としての耳もありますにや? まあ猫の方は中からも毛がびっしりと生えていて奥まで見えませんけどにゃー。だからお掃除するときには綿棒よりも太いのが頭の中までするすると入っちゃってちよつと怖かったですにや」

「そうなんですか」

……………耳が4つもあつたら聞こえすぎて大変じゃない?」

そうは思うけど普通にしているし大丈夫なんだろう。

「しかもしつぽは運動性能が上がるんですにや。まあこの太さと長さですからにや、そこそこの重量ですしお医者さんによると骨もあるそうですし、これのおかげでバランスを取ったりできるのでしつぽが

生えて以来転んだことないほどなんですにや。 まあ大人になれば転ぶなんてそうそうないですけどにや……とつきにどこかをしつぽだけでつかんで支えたりもできますし、慣れれば便利なんですにや」

「……尻尾で体重を……痛くないんですか？」

「自分でするぶんには。 そうですねえ、腕でなにか重いものを持ち上げたり鉄棒とかにぶら下がったりするときみたいに心の準備もできていますし？ それに結構筋肉もあるみたいで、ふつーに『腰に生えている腕』みたいな感覚ですにや」

「そうなんですか。 ところでそろそろしつぽも触っても？」

「おーい、響くん？」

「……あんまり優しすぎてもくすぐったくなっちゃうので、もっと、ちよつとだけ強めでお願いますにや」

「……みさきちゃん？ さつき私に言つてたの返そつか……？」

「これは説明！ 説明のためなんですから大切なんですにや！」

「本当にー？」

「良いんですね？」

「………はい」

「わかりました、では」

「………んあつ………にやつ……」

差し出してきたくれた尻尾をもう1回、今度はもうちよつとだけ力を込めて。

……確かに太いな。

人の腕よりは全然細いけどしつかりした太さと重さとあつたかさがある。

あとはふわふわ。

もふもふ。

………露天とかでよく売っている、猫のしつぽのおもちや。

あんなものが猫だましましたと思うくらいには触り心地とつかみ心地がいい。

ああ……うれしい。

今度猫カフェに行かなきゃ……ああでも普通の猫は触らせてくれないよなあ、ここまでは……。

「……………あ、あ……………っ、ふうっ、……………」
さつきとはちがつてイスに座ってもらっているんだし、そこまでお互いにムリな姿勢でもない。

だからとても触りやすく、もうちよつとそばに寄ってしっぽを軽く目の前までつかみ上げてしゅるしゅると堪能することができる。
すばらしい限り。

「……………んうう、ひ……………ひびき、しゃん……………し、しよこを、もつと……………そう、にやあーっ……………」

「はいはいストップストップ!!! 今度こそダメ!」

しっぽをほっぺたでしゅつとしてみたりしていたら岩本さんに取り上げられた。

「……………」

普段は温厚な僕でもイラッとしたからジトツとした目で見上げてみる。

「あ、いや……………その、ね? えーつと、みさきちゃんはね? 典型的な『ケモノ化』って呼ばれてる、ねこみみ病の愛称が生まれるきっかけになったいろんな症候群の中でも典型的で、わかりやすいものなのよ」

「そうですか」

尻尾の魅力に比べたらねこみみ病なんてどうでもいい……………いや、良くないんだった。

よく分からない謎の魅力のせいで暴走しかけた気がするけど大丈夫、もう落ち着いた。

けど、ねこみみ病……………のケモノ化か。

誰か知り合いに出ないかな。

そうしたら毎日でも話しに行ってもいいのにな。

35話 「ねこみみ病」 2 / 7

「お礼をするって言いましたよね」

「いや、まあ、私たちができることならって」

「なら尻尾で」

「いやあ……それはちよーつと……」

「……………にや」

「ほら、島子さんは良いって」

普段になくちよつと強気で言ってみた僕。

だって尻尾触りたいんだもん。

なんでこんなにかかわるのか分からないけどとにかく触りたい。

これが女の子の本能？

女の子ってちっちゃい頃から人形とか好きだしぬいぐるみとかい
い歳して持っけていてもおかしくないって共通観念があるくらいだし、
あとやたら他人と体くっつけるし。

多分そうなんだ、きつと。

そうに違いない。

だから今の女の子になつて僕がこだわっても良いはず。

元に戻ればきつと失うだろうこの感覚を大切にしたいんだ。

それがしつぽ。

人の体には存在していない尻尾、それも猫のつて言う長細いそれ。

腕よりは細いけど手首くらいの太さがあつて、今の僕の腰までより
もずつと長い……人間の身長、島子さんの身長に合わせて生えたよう
な、僕が前から触りたいと思つていた猫たちのそれ。

それが今は僕の手元にある。

「……………みさきちゃん、お願いだからニュースになるようなことだけは
……………」

「ニュース？ ですか？」

「……………うん、響くんはただの興味本位……いざとなつたら一応同性つ
て言い張つてもらえば……うん、だから大丈夫……」

ポニーさんな悩んでるんだろ……まあいいや、それよりしつぽだ

しっぽ。

猫のそれよりもずっと手のひらのサイズのサイズに合った大きさになっていて温かくて「どうぞ」って差し出されている。

こんな幸運あるのだろうか？

ここに来るまでがひどかった反動なんだろうか。

けど僕はこの程度じゃ、ほだされない。

説明も何も一切ない魔法さんの魔法には迷惑をかけられっぱなしなんだ。

だけどここの感覚、僕にとってはねこみよりもずっと興味深くって触り心地も独特でふさふさしていていっそのこと飼いた

———
落ち着こう。

「……………ふあああ……………んっ……………」

島子さんの毛はいつも触りはじめにぶわっとなる。

くすぐったがりだからなんだろうけど、そうしてしばらくぶわっとしていてだんだんと毛が寝ていって収まっていくのもまたおもしろい。

しっぽ自体をゆっくりしゆるっとしてみたり早くしゆるっとしてみたり、あるいは緩急をつけてみたり丸めてみたり。

触っていても飽きる気配がぜんぜんない。

「……………んん……………んんんんっ……………」

このくらいの力ならくすぐったすぎないみたい？

さつきまでより静かになってきたし、僕も手慣れて……む。

ずっと同じように触っているのもいいけど思いついたことが。

「ちよっといいですか？」

「……………ふにゃあ？」

良いらしい。

つてことで島子さんに許可は取ったから、しっぽの真ん中へんの毛をかき分けて地肌の奥の骨があるっていうその感触を確かめてみようとする。

もちろん痛くない範囲で。

「……………んひゃあうっ!？」

むう……残念ながら10個以上あるっていう人にない部分の骨は確認できなかった。

代わりにほどよい筋肉と脂肪の配分のぷにぷにとした弾力という気持ちいい感覚だけが指に伝わってきた。

中の骨を確認しようとして力をなるべく加減してぐつと押し込んでみたら、しっぽの先としっぽ全体の毛と耳……猫のほうのまでがぶわってなったから痛かったんじゃないかって不安だったんだけど、大丈夫みたい。

なるほど。

でもやっぱり飼いたいなあ、犬か猫。

長生きな種類ならあるいは……ひとり暮らしだしなあ。

「……………んにやあああつ！」

「……えつとねとこで響くん聞いているかなというか聞いて!?!」

「聞いています」

もう1回興味深い感触を楽しんでたらもう1回しっぽを取り上げられて「さすがにもう駄目! もうおしまい! っていうか私の説明聞いてなかったでしょ!」って言われた。

うん、手元の触覚に夢中で聞いていなかった……なんだっけ?

……そういえばねこみみ病の説明の続きしてもらってたんだっけ、すっかり忘れてた……。

しっぽのあまりの良さに聞き流していたけど、そこは女の子たちにごんごん振り回されてきた経験からとっさに「そうだけど?」って感じの声を出すことに成功した。

「そう? よかった……だけどね、そのねこみみ病の典型的なケモノ化っていうの、今触ってもらってわかったように」

「……………」

あ、尻尾が伸びてきてる。

両手でおんなじように強めに、きゅつと。

「……………んにやあつ

!

「す……じゃなくて止めなさいってみさきちゃん……」

「だつてしゅっく」

「やばい顔してるし声もやばいからお願い。　ね？」
手をわきわきさせてみる。

猫さんの目は僕の手には吸い寄せられている……撫でられると気持ちいいのかな。

犬とか猫とかつて触られるの好きだつて言うし。

「と・に・か・く！　聞いてね！」

「はい」

「ホントにね？　……普通の人の体に、いえ、普通のヒトだった人の体に人の大きさに合わせたサイズの耳とかしっぽ、それもいろんな種類の動物のが生えてね？　みさきちゃんの場合みたいに本物の猫さんほどじゃないけどそのオリジナルになった動物の要素が芽生えたりするの。　たとえばみさきちゃんだったら猫だから、その………：さう、触覚とか!!　触った感覚とかね!!　……もちろん音とか動きとかにとつても鋭くなるんだけど生活に支障のある範囲じゃないの」

「そうですか」

「……テンションダダ下がりね……猫とか好きなの？」

「それなりに？」

「そう……あ、そう言えば。　響さん？　いえ、響くん？　さつきまでなんとなくで呼んでいたけど君はどっちの呼び方がいいんでしょ」

「あ、いえ、どちらでもいいです。　どちらでも呼ばれますし」

女の子扱い歴が半年になってきた僕にとつては本当にどうでも良いんだ。

社会人ならさん付けなんだつて聞くし……社会人になったことないけども。

「……………」

そう言えば尻尾の匂いつてどんな感じなんだろ。

「……すんすん」

「……………!？」

「あー、響くん？　いちおうは男の子なんだよね？　なら余計にその……みさきちゃんのニオイ、あんま嗅がないでくれてあげる？　そう

いうのって女の子は恥ずかしいものだからさ？」

「別に臭いとかではないですよ？ どちらかというといい香りでもっと嗅いでいたい感じです。ほら、動物の動画とかで飼い主の人がペットの毛に顔をうずめる感じ、ああしたい程度には」

「?!?!」

「はい響くんストップ。あと、みさきちゃんも反応しない。相手

は中学生だけど見た目は小学生な子でしょ？」

「……………ふあい、ですにやあ……………にやあ……………ふみや」

僕のこと幼いって言われたけど、今の僕はしつぽをモフるってやつで大変満足している。

そうか……………これが。

これがかがりとかが僕を好き勝手しているときのあの感覚。

この高揚感、楽しさ。

うん……………こういうことならもうちよつとさせてあげてもいいかな

……………僕が嫌じゃない範囲で。

そう思える程度には素敵な体験だった。

一方でイスの背にへばりつくような格好をしている島子さんは僕をしばらく眠そうな目で見てただけ……………なんでだろ……………僕が離れてもう触らないって分かったからか、ほつとしてる感じ。

僕としては残念極まりないけど、でも嫌がられたら困るからこの辺で潮時。

そう言えばもうちよつとで下に降りる時間だし、確かに聞きたい話があるのにもふつておしまいだともつたいないよね。

「……………」

……………萩村さんたちの勧誘に乗るとこの子と同じ空間に居られるわけ、そうするとまた触らせてもらえる機会がいっぱい増える。

……………絶対したくないお仕事からどうしても嫌だけどこ褒美があれば、つて程度になって来た気がする。

ちよろい？

いや、あの感覚を知らなかったからしょうがないんだ。

「……みさきちゃん？ その、個室とはいっても一応は公共の場で、それも初対面の小さい男の子……女の子でもあるけど、でも男の子に触られて……誤解されるような声を上げるのって。 ちよつと……いやごめん、今度は私の方がかなーり引くよ？ ……というかぶつちやけやバいつて思うのよ……うん」

僕をイスに座らせて「半分くらい残っているケーキ食べたら？」って言い残して、ふたりしてイスを少しテーブルから僕から離してこそこそ話を始めている。

なんか聞かれたくないらしいからちまちま食べてあげるけど……耳、今の僕のは前の僕よりもなんだか聞き取りやすいから聞こうとすれば聞こえるんだけどなあ……悪口って訳じゃないらしいから良いけども。

でも、なにがまずいんだろうか。

くすぐったいのはしょうがないだろうに。

我慢しすぎたことかな？

まあいいや。

内緒話を聞くのってというのはなんだか悪いしな。

それに僕としてはもふるというやつをできて大変満足だし。

いつのまにか中から染み出していたお酒のビターな部分もつたいないし、ちよつとだけ胃が空いたみたいだからもうちよつとだけ食べとおこう。

うん、苦い。

こういうのが好きだ。

香りも上品だし。

そうそう、こうやって美味しいのをちよつとだけなのが……って、なんだか年寄りっぽくてやだな。

こんなに幼くなってるのに中味は元のまんまだからかな。

学生るときから「大人びて見えるね」って言われてたのってそれか

も？

「……ごめんなさいですよ……ホント、その、前にも言いましたけどこの生えている状態だと……ふう……どうしても猫としての本能が理性を私を思いつきり上回ってせいぎよ……ん、できなくなってる」

「うん、知ってる。けど押さえる練習しようね？ 生放送だったらおしまいよ？ お堅い番組でそんな色気出したら即打ち切りね」

「止めてもらって助かったですよにやあ……あのままだと、もつとその、猫として、猫としてですけどにや！ もつと気持ちいいところをつていう本能でもつと奥を求めていたかもなんですよにや」

「奥とか言わないでお願いだから」

「だってつけ根と……のあいだが、いちばん、その、なので」

「分かったから止めて。さっきの変な気分になっちゃったのみさきちゃんだけじゃないの」

変な気分ってなんだろう。

くすぐったいのこらえる気分？

「ですので、あくまで本能なんですけどもつと痴態を晒すことになっていたのは確実で、つまりは救われたのですにやあ……それにしても実にいい具合の撫でっぷり過ぎたので……油断してしまいましたにや。

でも、あれは正に猫が求める手つき……」

「うん、それも知ってた。……知ってたけど正直さっきのアレとか今の声の感じとか、あと、顔。どう考えてもアウトだからね？ 声だけでもやばいし絵面ももつとやばい。来週のちっちゃい子との触れあい体験とか生放送とかで気をつけなきゃいけないこと、増えそうねえ……万が一響くんみたいなことしてくる子がいたらっと思うと。お耳とか尻尾に触るのは女の子限定で、しかもちよつとだけってしないと……」

「でも、ああいうのはもつと小さい子で」

「小学生みたいな背丈の中学生の男の子に触られてああなったみさきちゃんがそれ言えるの？」

「にや」

僕がちっちゃいのは知ってるから怒らない。

今は満足してるから怒らない。

「ああいう感じで、クール系でマジメ系でおとなしい系の子にさつきみたいにしつくりとつぶらな瞳で見つめられつつ触られちゃったら？」

「……んっ」

「……………」

「すみませんにや。 ドン引くの止めてくださいにや……」

「……事前に人目のないところで……店員さんに見られちゃったけど。 ドアも閉まっていたしさつきみたいな大声じゃなかったから外の人にも気がつかれていなかったようだけど……店員さんに見られちゃったけど。 でも今でほんつとよかったわねえ……あの人がけ口止めすれば済むから」

「……………面目ないですにやあ」

「いや、冗談じゃなく政府からの依頼とか以前にアイドル終わってたかもよ?」

「でも私は響さん相手なら何年待っても……」

「その発言もおさえましょーね?? あとさりげなくズルいわよ?」

僕に関係のないひそひそ話しかしていないし、残っているうちにもういつかい手のひらの匂いを嗅いでみる。

「すんすん……」

……シャンプーとみさきさんの匂いと、あと……毛の匂い。

とつても良い匂い。

「……こほんっ、じゃあ気を取り直して!」

「島子さん、くすぐったかったのはもう大丈夫ですか?」

「……響さん、お互いに忘れた方がいいこともありますにや」

「?」

「はーい!! 気を取り直しましてえ!!!」

なんだかみみとかしっぽがしおれている猫さんと元気すぎるポニーさん。
なんでだろ。

「で。 ……響くん? 聞いている?」

「あ、はい岩本さん」

さつきまでの騒動がウソのように真剣な感じになったおふたりが僕を見ていた。

いや、何分の1かは僕のせいだったかもしれないけど。

いやいやでも許可を出したふたりのせいだろう、きつと。

「話を戻すとね？　今みさきちゃんを触ってもらってわかったように、みさきちゃんみたいに猫……他にも犬、ウサギ、鳥、そのほかいろんな生きもののものがあるんだけど。　とにかくね？　ある日突然に『本物の動物の一部が人の体に直接生えてくる』のよ、『ねこみみ病のケモノ化』って」

「といつてもヒトに存在しない部位、こういう耳とかしっぽとか羽とかなことがほとんどですにゃ」

くるんと丸くなるしっぽ。

さつき僕はあれをじっくり堪能して……。

「それでね？　『小さいころからずっと生えていたかのように』違和感なく自然と自由自在に使えるようになるのが、まさしく体の一部になるのがねこみみ病のケモノ化です。　……急に説明しちやっただけ理解、あ、いえ、信じてもらえましたか？」

「はい、あんなに細かい動きとか、あたたかさとか力の強さとか。　機械では無理でしょうしね」

「……………んうっ……………」

「はいはい思い出すの止めてねみさきちゃん」

くすぐったがりなの、べつに恥ずかしがらないでもいいと思うんだけどなあ。

どうせテレビでも触られたりして慣れているんだろうし。

「……………」

ねこみみ病なる不思議な病気……じゃないんだっけ、生えるやつ。僕が知らなかっただけで、どうやら世間一般的には認知されているものらしい。

でも……自己紹介で魔法さんが起きた。

自己紹介と言うからにはこの話題も出たんだろうし、僕に掛かって

いる魔法さんが何らかの形でねこみみ病に関係している可能性もある。

っていうか自分がない部分が生えるとかは体が完全に生まれ変わったみたいになっちゃってる今の僕の状態と関係がありそう。

……どうせだから聞いてみよう。

大丈夫、キャンセルして戻って来る方法は、もう分かったから。

「えっと、その……それって、マンガとかアニメで昔からよくある……『魔法とかで変身する』っていうもの」

……ひと呼吸のあいだにつばをぐくりと飲み込む。

「……それで、その状態が続くようになるっていうもの……っていう理解でいいんでしょうか？」

かなりどきどきしながら口にしてみた……けど、今度は何も起きてない……つばい？

「そんな感じでOKですよ」

さらっとすぐに答えが返って来る。

……どうやら大丈夫だったみたい。

じゃあこれは関係なかったのかな……。

「若い世代……って言ってもゲームとかマンガに馴染みのある人だから大半の人なんですにや？　そうやってお手軽に理解してもらえるのが手っ取り早いのですにや」

「こう言う表現で嫌になったりしませんか？」

「にや？　別に抵抗はないですよ」

「……それじゃあ……それはいきなり生えるものだったりしますか？　たとえば」

大丈夫なはず。

「『ある朝いきなり生えている』とか」

「あれ？　響くん、知ってたの？」

「……いえ、マンガとかだとそうなので」

「あ、確かにそうねえ。　何でか知らないけど寝ていた内って言うのが多いわよね、マンガだと……現実もそうなのは偶然なのかな？」

……これも、僕が女の子になったときとおなじ。

「あ——……恥ずかしいからあんまりじろじろ見ないでくださいにや？ 私のおときはですね、さつき言ったとおりにある日突然……もう2年くらい前になりますけどにや、その日の朝に起きて『なんだかちよーつとなにかが変だな』くらいは思っていましたにや。でも『気がつけなかったんです』にや。コレが生えていたのを鏡でも見たはずですし着替えのときも違和感こそあったものの、あ、着替えにいちいち邪魔でやっぱりなんだか変な感じはあったんですけど、それ自体を……ぜんぜんなんとも、不思議だとも思いませんでしたにや」
ねこみみがぴこぴこしている。

「髪を梳かしたり、着替えたときもだよな？」

「はいですにや。 髪の毛を梳かすときに、最初に耳……猫の方の……に引つかかってちよつと痛くつて不思議だとは思いましたけど、それがついていること自体にはなんにも思いませんでしたし。 パンツ……あ、いえ、男の子にはズボンって言ったほうがいいんだったような」

「そうね、一応は。 テレビとおんなじ感じをお願い」

「はいですにや。 ……その日はズボンだったんですけどにや？ ズボンも、腰のところでしたしつぽに引つかかっていつものところまで、腰まで上げられなくて。 それでも『なんだかおかしいな』くらいでしたにや」

「だから今日も。 いえ、それからずっとスカートなんですか？」

と、さつきしつぽのつけ根近くを触ったときのことを思い出して島子さんのしつぽの先を試してみる。

確かシャツの下、スカートの上から生えていたような。

「いえ、ちよつとだけ下ならズボンでも問題ないですにや。 腰の位置が低いデザインのものならそもそも問題ありませんし。 ベルトをきつく締めすぎたり硬すぎる素材のものだったりしなければいいのはなんとか履けますし。 ……まあちよつとだけかさばりますしズボン自体も下げないといけないものの方が多いので、今では私のしつぽの位置にあったメーカーとかデザインのだけしか履きませんけどにや。 あとケモノ化の宣伝とかで私たち専用の服とかも作

れられているので、そのモニターを兼ねていっぱいもらったりして
ますにゃ」

「そうなんですか」

「ということは、あのしつぽは島子さんのおしりというよりは腰から
生えているということになるのかな？」

「まあくわしい場所は……相手は女の子だし、さすがに聞くと失礼だ
な。」

「もう僕が男って言ってあるし……帰ったらネットで調べてみよう。」

「それに、ねこみみ病でしつぽ生えるのは男性でもいますし。男性
がズボン履けなくなったら大変ですにゃ？」

「そうですね」

「男がズボン履けない……危機的状況だ。」

「スカート穿くか露出するかの極限の二択。」

「僕なら嫌だ。」

「だからだいたいの場合には違和感はあるけども普通の服のままでもなん
とか過ごせるんですにゃ。しつぽの太さにも種族差とか個人差も
大きいですし。……慣れてくると体型的にどうしても身につ
けられないっていう服が増えちゃった、そのくらいですにゃ」

「なるほど」

「というわけでとにかく私にこういう……耳は手のひらサイズの大き
いので、しつぽに至ってはだらんとしたら立ったままでも毛先が地面
についちやいそうなくらいの長さのこれがいきなり生えていても『そ
れが私の体の一部だ』という感覚で、違和感なんてゼロだった』ん
ですにゃ」

「……………不思議ですね」

「不思議ですにゃあ。これも個人差なんですにゃあ」

「でね？ 響くん。ケモノ化するとね、運動神経とか筋肉量とかが
生える……いえ、くつついたところだけじゃなくてそれ以外の全身に
至るまで、その元となった動物にかなり近いところまで発達している
ことが多いんですよ。例えばみさきちゃんなら猫……というより
はネコ科のヒョウとかをイメージしてもらおうといいんですけど、その

サイズになった動物とでもいうように」

「筋肉も前よりもずっと増えましたにや。 おかげで体重もびっくりするぐらいには増えてるんですけど、でも引き締まったおかげで前よりはむしろスタイルよくなったんですにや。 ケモノ化で体重爆増したので別にバレてもこのせいだからって平気なくらいにですにや」

「よく折れないわねっていうくらいには体柔らかくなったしね？」

「関節の可動域もなんとかってことらしいので体じゅうが造り変わってるのですにや」

「……………」

つまり猫島さんは、やろうと思えば岩本さんを担いで、それこそ映画みたいに建物の上とかを飛び越えて逃げたりもできたんじゃないか。 ……いやそれだと余計に目立つどころじゃないか。

なにより危ないしな、電線とかアンテナとか。

そうでなくても目立つんだ、なんとか手を引いて走るくらいしかできなかつたんだろう。

ドラマのロケにしては派手すぎるし映画だったら町中でそんなアクションシーン撮らないだろうしなあ。

……そうか、別に、ヒトより優れた……超人的な身体能力を手に入れたってそれをいつも全力で使えるわけじゃないのか、こんな時代じゃ。

なんだか世知辛いなあ。

そんなすごいことが起きてるのに肝心のその人たちは見た目が変わる以外ほとんど普通に過ごさなきゃいけないもんね。

ちようど、僕みたいに。

35話 「ねこみみ病」 4 / 7

朝起きたら姿が変わっている。

ものすごく不便になるかと思っただらそこまでじゃない。

でも僕は起きてすぐに気がついたし、なにより魔法さんみたいなことをこの子はひと言も……。

「体が柔らかくなっておかげでダンスとかはものすごく楽になりましたけどにやー、普段のストレッチとか筋トレとかが楽になったので忙しくなってきた身としてはありがたいかぎりですにやあ」

「ほんつとうらやましいわよね——……まあ私も……『前』に比べたらずっと……」

「？」

そういえば岩本さん、結構「前のこと」って言うみたい。

なにかあったんだろうか。

そして何回も言うからには聞いてほしくって話したいんだろうか。

少なくともあの子たちならそうなんだけども。

「来年あたりからは学校とかスポーツとかでも普通のヒトとねこみみ病の中でもケモノ化した人を別の種目としてカウントしたり、あるいはハンデ……えつとですね、つまりはケモノ化して増えたスコアぶんだけマイナスして点数をつける、そういう動きもあるそうですにや」
「……それってどうやって測るんですか。学校ならまだしもああ言う世界ってすごくシビアって」

「さすがは響さんですにやあ。その通りで、そのスコアってやつ個人差がものすごいことになっているので相当揉めているみたいですにやあ」

やっぱり世の中は世知辛いらしい。

けど……そうだよな、変わっちゃったものはしょうがないけどそれで生きている人にとっては死活問題だよなあ。

アスリートの人が僕みたいに男から幼女にでもなったら……まあ、ここまで変われば諦めもつくか。

「……なるほど。あの、猫とかの動画でもよく、ものすごく速く走っ

たり高いところから飛び降りても無事に着地とかできるものってありますけど」

ふと、さつきこの子の話を聞いて「映画とかみたいに屋根伝いとかで逃げたら」って考えたのを思い出す。

「あー。スタントマンさんみたいなことはできませんし怖いですけど……安全な場所で3階くらいまでならケガせずに痛くもなく着地できますにや」

——それはもう人間じゃないんじや。

そう思ったけど僕の口が重くって助かった。

「私みたいなネコ科になった人の中にはもつと高いところもいけるそうなんですけど、私はそのへんで怖くなっちゃうのですにや。それに3階くらいからだどけっこー風に吹かれて着地点がズレるから……多分猫ちゃんたちでも場所がずれたら酷い目遭いますにや?」

「確かに」

「あと、下りた後って……痛めたりこそしませんけど、でも足の裏から脚までしばらくびりびり痛いんですにや。うまく手と足と体のバネを使って着地できれば大したことないんですけどにやあ」

「……痛いので済むんですか」

「こー、両手を思いつきりばちつと合わせた程度ですにや。ま、痛みといえば痛みですにや? しばらくじんじんしますにや?」

「……………すこいですね」

ねこみみと尻尾が生える、しかも身体能力はマンガやアニメみたいなことができる……子供なら喜びそうだな。

子供って言っても高校生くらいまでは案外喜べそう。

大学になると就職のこと考えて頭抱えそう。

人間なんてそんなものだ。

僕は良く知ってる。

「で、響くん?」

「岩本さん?」

「あ、私のことはひかりちゃんでも」

「せんぱい?」

「この子のこともみさきちゃんの良いのよ?」

「……ええと、年上の方なので止めておきます」

「マジメねえ」

「そんなところも……」

あの子たちもそうだったけどこの子たちも呼び方にこだわるのか。

出会ってまだ1時間なのにな。

ちらつとスマホ見るけど……まだ萩村さんたちは着いていないらしい。

「それでね? —— 実は私も同じようにねこみみ病にかかっているんだけど」

「え」

「どんなタイプか想像できます?」

「……岩本さんまで。 ……」

……岩本さんまでそうだっていうのは初耳なんだけど……でも、それで前のことって。

まあ、ねこみみ病になっている島子さんとコンビを組んでいるんだと考えてみれば当然か。

ただ仲が良いとかじゃなくて、この子もまた別のねこみみ病で……政府広報とかで出てるのかな。

でも……んー。

「……………」

「……真正面からってなんかこしよばゆい」

「そういうものですよ」

やっぱりテレビに出る人でもこうして近くでじっと見られるのは恥ずかしいのか。

でも彼女の耳は……人のしかないし、前髪に隠れてちらつとしか見えなけれど上にはそれらしきものはない。

しっぽも……服から出ていない、少なくともここに来るまでと今座っている範囲では見えていない。

つまりはぱつと見て分かるものじゃない?

でも「私を見て分かるかな?」って雰囲気なんだよね……なんだろう

う。

「……からかっているわけじゃないですよね？」

「本当よー？ テレビとかで説明するとき、みさきちゃんのを今みたいにしているあとに私っていう毎回しているお約束です。 どうか、こうでもして茶化さないと割とシヤレにならないというか。 特に女性の方たちからの……ね？」

うーん。

シヤレにならない。

女性同士で。

なんだろう。

……胸が大きくなるとか？

視線は合わせてないからバレないはず……だけど、彼女のはそこま
でじゃない。

多分は偽乳を使っていなければC……なにを考えているんだ僕は。
たしかに岩本さんのほうが島子さんのよりもこころもち大きいか
もいやそうでもないかいやいや忘れよう思考がおかしい盛る系の
だったらそうじゃないってば。

胸は大きさはじゃない、トップとアンダーの差だとかなんとかたたき
込まれたからなあ……。

僕がこういうことを自然と考えるようになった元凶のメロンさん
の罪は計り知れない。

「……はい、そろそろ良いですね。 でしょ？ 見ても全然分からな
いでしょ？ そうなんです。 私の場合はなにかが生えたりはしな
いんです。 つまりはケモノ化でもない別のねこみみ病なんです」

あ、そっか。

ねこみみ病でわざわざ「ケモノ化」って言うくらいなんだから別の
もあるのか。

でも、別の？

ねこみみ病と似たような病気……じゃないんだっけ、現象で姿が変
わる——

「分かりやすく言ってしまうとです。 響くんみたいな若い子にはま

だピンとこないかもしれませんが」

女性同士で困ったことになる。

見た目がそこまで変わらない……ように見える。

けどはつきり区別されるくらいに変わる。

それはまるで、僕のように――

「私のねこみみ病の症状は『若返り』なんです」

「え」

◇

若返り。

岩本さんがかかっているって言う、ねこみみ病のもうひとつ。

若返る。

つまりは幼くなる。

それはまるで僕に起きたような。

「……あははっ、わかりやすいねこみみとはちがつてやっぱり『若くなる』っていうのはおさな……んっ、若い響くんにはいまいちピンときませんでしたか？」

「……………いえ」

体じゅうから汗がぶわつとして、この魔法さんがねこみみ病の症状のひとつだったのかもって思ったらなんだか落ち着かなくなって。

……………こういうときでも無表情な僕はまたまた誤解されたい。いい。

今回ばかりはそれでよかったんだけど。

でも。

「そうですねー、これもいつもしているやりとりだから気にせずにご答えてほしいんだけどね？ あ、怒らないから大丈夫だよ？ テレビでも配信でもいつもやってわざとおかしなこと言う子に『めっ』って言ったりする程度なの。――私、響くんから見たいいくつくらいに見えます？」

高校生くらい……じゃないのかな……少なくとも見た目とか態度

とか、話し方は。

幼さがまだ残っていて、よっぽど若く見えていたとしても多分成人はしていない……か、少なくとも前の僕よりは年下な印象。

でも若くなっただって言っていた……ってことは前の僕より年上？でもでも島子さんと仲良いし高くて20代……あ、女の人ってお母さんと娘でも友達みたいになれるんだっけ……余計分かんないや。

「……………えっと」

なんだか目をきらきらさせている岩本さん。

……あ、よく見たら眉毛、剃っていないくて地毛でまつげも目の色も茶色掛かっているみたい。

茶髪、染めているんじゃないかって本物だったんだ。

ついでになんだか茶髪というのと染めているっていうニュアンスが含まれちゃうし、これからは栗色ポニーあざとい若作り岩本さんと呼んであげよう。

「……済みません、分かりません。お化粧もすごく薄いですし、それでもお肌も、いえ、全体的な印象からいってもどう見ても高校生……か、僕の上の学年の中学生にしか見えないです」

分からない以上思いつ切り低く見積もってあげた。
僕なりのリップサービスってやつ。

だって女の子は女の人になっても1歳でも若く見られたいんだって知ってるから。

実際にそう見えなくてもないしな……高校生でも不思議じゃなくて、お化粧とか服装次第で女の子っていくらでも変わるから。

おとなりの島子さんと比べると背も低いし胸……は関係ないけど童顔系だし。

ださい格好にさせて、あるいは中学校の制服を着させて、あの子たちの前に立たせて「同級生なんだ」って紹介したら「上級生みたい」って言われそうだけど納得もしてくれそうな雰囲気。

胸はそこそこあるけど現役JCなかがりとりさりんっていう前例があるし、女性の年齢は胸ではわからないというのは知っているし。

「いやー！ いやいやー！ 中学生！ ねえみさきちゃん私中学生

だつて！」

「さつさとお答えするですよ」

「そう見えちゃいますかー！　中学生！　でも中学生な響くんからそう見えるんなら」

「さつさとお答えするにや」

「JKって言われて嬉しくなるのに」

「さつさと言うですよ」

「……もうっ！　分かってるってみさきちゃん！」

「……………」

「それですね？　私、中学生！　って見ていただけるのは本当に初めてだからとっても今私は嬉しいんですけど、ともかく私はこうして実際の肉体年齢が著しく若返ってですね？」

「せんぱい」

「ああもう最初のころは同じスタジオとかインタビュアーの女性の方からの視線が気持ちいいくらいに刺さってきましてね？　ああ私の年ですね、ああでもその前に具体的な年齢を」

「27ですよ」

「あ」

「……27？」

「岩本さんが？」

「……ねえ、いきなり」

「にじゅうななさいですよ。　にじゅうななさい」

天井のシャンデリアっぽい明かりが気になるのか、上を眺めつつぽそりとつぶやく島子さん。

「みさきちゃ」

「私プラス10歳ですよ。　じゅっさいですよ」

「でも……ぼくと同世代。」

「20代って予想は合ってたけど……でも、見えないなあ。」

「み、みさきちゃーん……？　なに先にバラして……普段はもっと」

「ひかりさんは、元27歳、現17歳っぽい感じですよ。　……………」

「元、27歳。　27さい、にじゅうななさい。　アラサーですよ」

「連呼しないで!？」

「だって事実ですにゃ」

「うぐ」

あ、これ怒ってる。

急にトーンが下がったし……どつかで尻尾踏んづけちゃった？

「さつきからまたああやって若く見られてからにコーフンしないでくださいにゃお相手の響くんもドン引きですにゃ」

僕は静かに待つ。

「ついでに言うなら響くんのひとつふたつ上の世代に人気だったくらいにはアイドル歴も私たちの中でトップクラスに長くってですにゃ。

私が小さいときから人気だった、目標だった人ですにゃ」

「みさきちゃんひどい」

「さらにさらにメディアへの露出も減り始めてご本人もそんな感じで『そろそろ引退考えてるかも』ってささやかれていたくらいの年増ですにゃ」

年増。

それは僕にも刺さる。

だって前の僕……今の僕に入っている前の僕の意識。

それは岩本さんと……地元がこの町なら。

下手をすれば学校同士のイベントとかで遠くからでも顔を合わせたこと……はないだろうな、アイドルって学生するときからするものだから。

……………。

けど、そうだよね。

……まあ成人していない猫さんからすれば20後半なんて年増……つまりはおじさんお婆さんになるよなあ。

自分が歳を取ると別にそうは思わないし感じもしないんだけど……でも僕が高校生くらいまでの感覚じゃあ25を過ぎたら親の世代ってことで……つまりはおじさんお婆さん。

なんか凹んだ。

しよげた。

……歳を取るって嫌だなあ……今は若返ってるけど。
うん、さっきのはしやぎっぷり。

僕だけは素直に褒めてあげよう……僕も知らない人に「学生さん？」って聞かれるのは嬉しいって分かるから……おじさんは嫌だから……。

35話 「ねこみみ病」 5 / 7

高校生ってことは17歳くらいって考えるとそれより3歳くらい下のあの子たちにとって僕の世代はさらに上になるということ。

先輩に向かって……って言うか17歳にとっての27歳って力関係とかその他もろもろ圧倒的なんだろうによくおばさんなんて言えたね……それほど仲が良かったらうって思っておく。

そうして僕がおじさんおばさん問題にもんもんとしているあいだにもコントは続いていたらしい。

「……………み・さ・き・ちゃん？ さつきからナニ失礼なことばっか言ってるのかなー？」

「いだだだ暴力は反対ですよ！ だいたいいつもおんなじこと隣で聞かされ続けてきた私の身にもなってくださいにや！ 尊敬していい『た』はずの先輩が！」

「ああん!？」

さつきまでとはまるでちがう声がおんなじ岩本さんのはずの人の口から出ている。

……やっぱり女の子も女の人も怖い。

「譲りませんにや！ だから暴力反対！ あ、ちよ、痛っ！ ……いい加減耳タコなんですにやこのやりとり！ しかも中学生の子に同じ年くらいに見られたからって言って年甲斐もなくはしゃいで！ 今は私と同じくらいの肉体年齢で同じ年ってことにしてもらっているんですから年増って言うてもいいじゃないですかにや！ どーせネットじゃとつくにそういう扱いですし！ 持ちネタなんだから良いですよ！ センパイならセンパイらしく大人な対応を！」

「たしかにその通りね。 けど、それとこれとは別」

「にゃ———っ!？」

こめかみを器用にぐりぐりと……あれ痛そう……したりしながら、いつもやっているらしいコントを続けているふたり。

ねこみみとしっぽが荒ぶっている。

けど本当に慣れているんだなあ、ふたりでこうして説明するって

うの。

だってボケとツツコミが違和感なく、まるで今「本気で怒って怒られている」ってしか感じないくらいだし。

すごいなあ。

さつきの怒った声も多分演技で、本当に怒るとこんなもんじゃないんだろうなあ。

……それにしても、「若返り」。

それがはたして島子さんみたいなねこみみ病なのかはともかく……いや、本人たちがそういうニュアンスで言っている以上そうなんだろうけど……でも、話を聞く限り……10歳。

「くらい」っていうのはきつと正確にはわからないからなんだろう。

だって肉体年齢ってちよつとした生活習慣でだいぶ変わるもんだし。

実際、僕が引きこもっていたときに買った体重計とかでの肉体年齢は30を超えていたのに、それが運動とかを始めて健康になってきたときにふと測ってみたら10代にまでなっていて当てにならないなあって思ったし。

つまりは機械での肉体年齢っていうのはあんまり当てにならないくって、それよりもお肌の調子とか生活とか運動習慣とかストレスとか。

あとはこれも個人差だけど、成長期の終わりのタイミングな20代中盤とか……本人の意識とで判別するしかないわけで。

いや、病院とかで厳密に調べたらある程度はわかるのかな。

でも同じ年ってことにしてるってことはやっぱり曖昧なんだろう。

「……………その」

でも聞いておかないと。

僕にも関係あるはずだもんな、若返りって。

「だーかーらーいい加減子どもっぽい怒り方は、あ、ひかりさんひかりさんっ！ 響さん！ 響さんがお話ししていますにゃっ」

「……………しようがない、今はこれで許す。 ごめんねー響くん、いつもの調子で、っい」

やっぱりいつもしていたらしい。

染みついちゃっているんだろうな、きつと。

「いえ。それより、その、若返ったというのはどうして……いえ、どうやって分かったんでしようか。あと、その若返るといいうのは先ほどのケモノ化……耳やしっぽが生えるのとはずいぶんとちがいますし、それでもねこみ病なんですか？」

「あら響くん、急に興味津々。……若返りの逆とかで大きくなりたかったりするのかな？」

「いえ別に」

子供が大人になる……確かに子供は大人に憧れるけどそのパターンがあるとしたら地獄。

いや、でも……若返るならその逆って。

「あ、先に言いますとそれはないですよ。少なくともまだ確認されてないですね」

「そうですね」

「ですねえ。で、若返りですけど……こほん。響くんにはまだまだ先の話ですけど、背が伸びたり、あとは響くんの体は女子だし……だよな？ ……うん、で、そろそろ胸が大きくなってきたりもするんだろうけど、その時期、成長期って遅くても大学生のうち……20くらいですね、そのくらいで終わるんです」

……胸。

僕にそのおっぱいとやらがきちんと育ってくるのか、それ以前に成長できるのかはともかく。

ついでに言えば僕はもう少しあとまで背とか伸びていた気がするから、成長期ってのは個人差がありそう。

「もちろん個人差はありますよ？ 身長とか中学生くらいで止まっちゃう子もいれば30くらいまで伸びていた人とかもいましたねえ」
「同世代の方でしたにや？」

「いちいち言わないの、もうっ。とにかくそうして成長期が終わって成長しきって、成長が止まって……つまりは老化が始まって。」

しばらく……数年はなにも起きないもんですから『私の体はこのまま

ずっと若いんだ』って思っちゃうの」
わかる。

すっごくわかる。

だって僕も、前の僕だったころ。

……その、老化というやつを実感し始めていたんだし。

だからこそ前の僕から今の僕になったあの朝に、見た目のことはもちろんだけどそれ以上に体の不快感がなくなっていたことに……気がついてびっくりしたわけで。

まあそれ以上にベッドから下ろした脚で、ズボンで、男物のパンツで分かったんだけど。

「……ごめんなさいですにやあ……だからそろそろ許してえ……」

「けど、だいたい25くらいだったかなあ」

「やっぱりオバサンじゃないですかにや」とかまた余計なことを言つて折檻された様子。

……こめかみのぐりぐりってそんなに痛かったっけ？

けど、ねこみみもしっぽもしおれているんだから相当なダメージはあつたみたい。

「……うう、痛かったですにや……」

頭を抱えて涙ぐんでいる島子さんと、それとは対照的にどこか黄昏れた感じになっている岩本さん。

「私のときは25くらいかな。そのくらいからだんだん体がだるいって感じる 때가 増えてきたり、あとはお肌もちよつと寝不足なんかするとすぐに荒れてきたりして……」あ、私もとうとう老化する歳になつちやつたんだ……』って自覚……してしまつたんですよ」

なんだかわかる気がする。

ある時期を境に寝起きのだるさっていうのを感じるようになったような。

あとはお酒を思いつ切り呑めなくなつたりとか。

「わかりやすいたとえで言うなら、そうですね。……お昼寝、学校の机とかでしたことある？ そう、ならそうしてちよつとうとうとして起きるとき、お肌に腕とか服とか、あるいはノートとかの形に跡が残

るでしょう？　けど、その跡……ほっぺたとかについたそれ、響くんの歳なら気がつかないうちにすっと消えるけど、そうならなくなつてなかなか消えなくなったりするようになるのよ」

「そうだっけ？」

「そうなんですか？」

「そうなの。寝起きの顔のむくみなんかもなかなか取れなくなるの。だから朝は寝坊なんかできなくて、早く起きておいてからお化粧しないといけないのよ……おとなの女性って」

僕はそういうの特には気にならなかったけどなあ。

……まあ滅多に外出もしない、誰とも会わない、家の中にいたって鏡を見るのは朝とお風呂くらいだったし、なにより顔なんかぜんぜん気にしていなかったっていうせいで、ただそうなっていたのに気がつかなかっただけかもしれないけど。

あと、顔にそこまで気を遣わなくてもいい男だった……からっていうのもあったか。

「……あとはね、徹夜明けがとてつらくなって……いえ、そもそも徹夜そのものが、どんなに楽しいことをしていても体の限界って感じて厳しくなってきたり。ほかにもあっちこっちの痛みとか、どこも悪くないはずなのに出てきたりしてねえ……そうなる前までは……たったの、1年前の24のときとかにはこれっぽっちもなかった感覚が、体の衰えというものが現れて来ちゃうのがそのくらいなのよ」

「老化ってイヤですよなあ」

「みさきちゃんも、どんだけ始まるのが遅くたって10年後にはそうなっているわよ？　イヤでも、どれだけ抵抗しても。だって人間なんだもの」

「いやですよなあ……」

「健康診断とかも、ひととおりの、それも毎年。30超えたらまちがいに受けておかないとって言うしね？」

「もう止めましようにやあ、年、取るのこわくなってきましたにやあ……」

「みさきちゃんならまだまだ先のことじゃない。お酒飲めるように

なつて慣れてきてから焦ればいいの」

「どう考えてもそれじゃ遅いですにゃ」

「むむ」

今まで大丈夫だったお酒の飲み方とか飲む量とか、そういうのがある時期……覚えていないけど、でもここ1、2年で急につらくなって、意地になって飲むとダウンしやすくなったり。

二日酔いっていうの、今まではしたことすらなかったのに初めて経験したり。

……なるほど、これが老化だったのか。

てつきり引きこもりのときに体が弱ったせいだつて思っていたけど、もしかしたら老化、僕にはもつと早く来ていたのかも。

考えたくはないけどそう考えてみると引きこもりで自律神経がおかしくなつていたつていうのじゃないかもつていう体の不調も、いくつか思い当たるし。

たとえば一時的に汗とかがひどいことになって、けど収まっても前みたいなには戻らなくなつて。

たとえば飲んだ翌日の胃もたれとか、おなかの痛みとか。

老化なんて30過ぎてからの話だろうつて思つていたんだけど……もしかして意外と早い？

もしそうなら今の僕にそういう感覚が皆無つていうのとか説明がついちゃうし。

幼女だからつてわけじゃなくて、ただ単純に成長期だからつてことで？

……知りたくなかつたかも。

なんだか前の僕に戻りたくない気持ちがあほんのちよつぴり芽生えてきちやつたし。

いや、戻らないわけにはいかないんだけども。

「……あとは、そうですね。女の子的には、いえ、油断した男の人もあつというまにそうなるので、これはみさきちゃんも覚えて置いたほうがいいと思うけど。食べる量です」

「ごやっっ」

「ご飯の量。特に夜。それまで以上に気をつけておかないと、ほんとうに1ヶ月とかそのくらいでおなか周りのお肉が、ウエストが、ズボンを履いたら自分でもわかるし、他の人からでもなんとなくわかっちゃうようになること。あとは地味にふとももとかね？」

「おつそろしいですよ……」

「太りやすいっていうのは……なかった、かな？」

「というよりは僕は元から少食だったし。」

「甘い物好きで、しかも外食がどうしても多くなっちゃうお仕事柄のせいっていうの、あとは女性っていうのが大きい気がするんだけど。」

「でっ、でもっ！ 私はこうして猫の体になっているわけだし、きつと大丈夫」

「ほんとうに？ ネット探せばデブ猫なんていくらでもいるわよ？」

「デブ猫はいやですよにや用心しますにや、サボってたトレーニングもひかりさんにおつきあいますにや」

「それがいいわよ？ もつとも、これはむしろそのくらいになってきたからが大切な習慣なんだけどね、筋肉の維持って。……あ、ごめんね響くん、嫌なことばっかりで」

「いえ」

「……で、こうしてひとつひとつ挙げてみたら、もういちど、いずれは来るだろう10年後くらい……いえ、おんなじようにふ、ふ、……老ける、のなら、あと7年くらいがリミットかな？ とにかく思い出すだけで私もつらくなってきたからもう止めるけど、とにかく私の元の肉体年齢っていうのはそういうものなんです」

「言われてみれば、ぜんっぜんそうは思っていませんでしたけどにや、ひかりさんの顔とかもシワがいだだだだ!!」

「こんどはねこみみがやられている。」

「……わかりました？ 響くん。 たしかに今の私は概算で……おおざっぱに言えばみさきちゃんと同じ年くらいだけど、でも、元は君よりもずっと年上だったっていうこと」

「はっ」

よくわかった。

岩本さんは、少なくとも前の僕と同世代だっということ。

……けど、なるほど。

敏感なんだから、ねこみみ、つまみ上げるだけで痛いんだ。

かわいそうになあ。

じゃなくて……そうか。

若返り。

目の前に座っているこの人もなったんだ。

僕みたいに10歳くらいを……いや、僕は15歳くらいかな……下手すると20歳くらいなんだけど、とにかく若返った。

お医者さんが「そういう現象がある」って認めてる。

……だったら僕のこれも、性別が変わるってことさえクリアすれば……。

35話 「ねこみみ病」 6 / 7

ねこみみ病と僕の今。

ケモノ化と若返り……化とは言わなさそうだな……と、幼女になった僕の関係。

すぐそばに、手を伸ばせば……1回口を開けばその答えは返ってきてそう。

でもそのときに魔法さんがどんなことをするのかって思うと……まだ怖い。

そうしている僕の前で、ねこみみと人の耳をセットでつまみ上げられて「たしたしっ」とタツプしてようやく解放された猫さんたちは戯れている。

「……しかあし！　しかしですな響くん、ねこみみ病を私が発症したって自覚したのはその経験あってこそだったんです！」

「……というど？」

ちよつとももの思いに沈むと直前の文脈が分からなくなるのが僕の悪いクセだ。

むふん、と胸を張りつつあざとい岩本さんが僕を見てくる。

何か良いことあったんだろうか。

「ある日を境に……って言っても私の場合もみさきちゃんみたいに正確には覚えていませんけどね。　私はたいして見た目変わりませんでしたし」

「ほんとですにやー？　だってにじゅうななからじゅう……あ、なんでもないですにやほんとですにや」

「……こほん。　とにかくある時期を境にね？　ねこみみ病になったと思しき時期をまたいだからは体が重いかどこかが痛いとかお肌がーとか、そういったイヤーな老化での感覚がみんななくなっていたのよ！　多少夜更かししても体は軽いままだしお肌のダメージもたいたことなくて、お化粧のノリがいい……いえ、それ以前にお化粧をしなくても出歩けちゃったりするほどにはコンディションがよいんです！　すっぴんで外に出られるって最高って知ったのよ……

！」

「私、学校はすっぴんですにや?」

「現役女子高生は黙ってなさい」

「にやー」

僕は男で良かった……お化粧って言うめんどくさいのがないってだけでヒゲ剃りの手間を遙かに上回っているもん。

それに加えて髪のお手入れとかいろいろあるし……本当女の子ってめんどうだよな。

「髪のお手入れも……痛みにくくなつたのですっごく楽になりましたし。 それになにより高校生ファッションしても『うわキツ』とか言われないので本当に人生が明るくって……!」

うん、気持ちちは分かる。

僕だってただ高校生くらいに若返っただけならきつと喜ぶだけだっただろうし。

幼女にさえならなければ。

いや、せめて高校生くらいの年齢だったら女の子でも……それだといろいろまずいからやっぱいいや。

「私にはまだよくわかりませんが、とにかく私のついでに調べてみたらお肌とかだけじゃなくて内臓とか骨とか……科学的に調べてもらったなら体のすべてが明らかに高校生くらいのもだった、でしたにや?」

「そうなのよ。 もともと私みたいに若返っただけという報告も前から少しずつ上がっていたみたいだからスムーズに調べて貰えたし!」

——若返っただけという報告。

つまり……これもまた一般的なものになっていて。

「それに私の場合は……ほら、デビューが中学生だったからその頃の映像とかがばっちり残っているわけで、つまりは骨格とかまでかなり細かく記録されていたってこともあってね?」

「お得でしたにや?」

「まあね……実際若返った直後から『別人じゃない?』とか『替え玉だ』とか。 『妹だ』とかはまだ良くって、ひどいところじゃ『私の子供だ』

！』とかネットで言われはじめていたしで必要だったっていうのもあるの。噂だけで大変なことになる業界だしねえ……私が若作りしすぎだっていうのはまだよかったんだけど、いや、よくはなかったんだけど!!」

「まーお子さんは言い過ぎですよー、だって忙しすぎるのとネームバリューすぎてお相手すみませんお口チャックしますよー」

——ねこみみ病。

生えたりするだけじゃなくって若返ることもあるよく分からない病気……でもないらしい何か。

そういう人が、少なくともテレビで賑やかになるほどには増えていて。

「それまではいろんな学説で別れていて、こういうのはみんな別の名前がつけられるところだったんだけど……:というか実際にそうでしたしね、初期の初期は。でも、あんまりにも同時期にこうも『人の姿形が変わる』っていう症例が全世界でまとめて出てきちゃったものですから、学者さんたちもついに降参したらいいんです」

「あこのころの論戦はなぜか私たちまで同席させられたのでよく覚えていきますけど、ほんとうにわけわかんないものでしたにや。科学者とか政治家さんたちの派閥が大変みたいでしたにや」

「まー、お偉いさんたちにも譲れない部分っていうのがあるんですよ、きつと。で、ひととおりケンカした後で『もしかしたらねこみみ病は元の体に追加でなにかが生えたりくっついたりするだけじゃなくって、若返ったり、あるいは体のどこかのパーツだったり全身だったたり。そういうように体になんらかの影響や変化を及ぼす現代の科学では説明がつかないモノ、その一部なんじゃないか』っていう大雑把な区切りになったみたいね」

「……………」

「1年くらい前でしたかにやあ、ひかりさんの若返りの件が宙ぶらりんになったままですったもんだした末にようやく『もうめんどくさいしキリがないから、とりあえずでこういう変化が起きたりしたらもうねこみみ病でいいよね』って言う方向になったって聞かされました

にや。それ以前にもう世間で有名になり過ぎちやつて今さら変えてもたぶん定着しないだろうっていうことで」

「つまりは現時点ではまだあやふやなものですね。きつとお偉いさんたちの意見も変わらさずにはばらばらでしようし普通の人が持っているイメージもまた、きつとばらばらなはずです」

「説明がしやすい。ぱつとわかる。とつても大切なことですよ。まーあと何年かすればみんな落ち着いてきてはつきりしますにや。ほら、新種の病気とかでも2、3年経てば……」

——ねこみみ病は、カラダが変わるもの。
その総称。

——成人男性から幼女は？

魔法さんのあれは？

「目の形とか色、まぶたとかまつげとかそういうちよつとしたところが変わっていたり、女の子だったらバストサイズがちよびつと増えたり減っていたり、『気のせいかな』っていうレベルの小さな変化から、私たちがみたいに明らかに変わっちゃうもの。そういう本人では気がつかない……もつとも私の場合も初めはなんでか気がつかなくかつたんですけどにや、目立たない変化でさえもねこみみ病なケースである可能性もあるらしいのですにや」

ほんのちよつとした変化から、自分どころか他人から見てもはつきりとわかる変化まで。

……島子さんみたいに自分では気がつかないくらいから、その時期に感覚でなんとなくわかっていた岩本さんみたいなパターンまである。

そんな幅の広すぎる、けれど普通ではありえない……ありえなかつた、魔法さんがなにかをしたんじゃない限りは起き得ないそんな変化までが世間では許容されている。

僕が情報に疎かっただけで、世間はずっとそれを受け入れていて。

まるでウラシマだ。

3ヶ月だもんな。

——「魔法」、超常現象、未知の病気、ありえないもの、あるいは運命のいたずら。

魔法さん。

ねこみみ病。

もし。

もしそうだとしたら僕は。

やっぱりこの子たちに「僕もそうかも」って言えば——すぐに楽になれる。

でもそうじゃなくて——洋画の怖いシーンみたいに酷い目に遭うかもしれない。

「あ、そう言えば私のこの耳としっぽだっけと生えているわけじゃないんですか？」

「……………そうなんですか？」

意識が一気に引き戻されて島子さんのねこみみとしっぽにぜんぶの意識が飛んでいく。

……あの柔らかくていい匂いのあれが消えることがある……つていうこと？

信じたくない、いや、信じられない。

そんなのは人類の損失じゃないか。

「ややっこしいことにそうなんですにやー。ずっと生えていたかと思ったら寝ているあいだに消えてそれから何日かいなくなっていて、次に目が覚めたら『あ、また生えてる』っていうこともあるくらいで。

まあそう滅多にはないんですけど……私だけじゃなくて『たまーに戻る人も居るらしい』ですにや。お医者さまも学者さまも頭抱えてましたっけ？ そうなるタイミングも完全にランダムですし、なにかがあったからとかそういうわけでもないですしにやあ……『身体能力まで変わるとただ消えただけではないはず……』とかぶつぶつ言っていましたにや」

「あー、みさきちゃんのもまたレアケースらしいしねー。フツーはいちど生えたらそれつきりらしいよっ。」

ふつーは生えっぱなし。

それなら良いんだ。

「知ってますにや。だからこそこうして担ぎ上げられているわけで……ひかりさんだつて同じですよ？ 10年なんてものすつごく珍しいらしいですよ？ おかげで最初のころは満足に外も出歩けませんでしたにやー」

「まあねー、6年ものさんとか8年ものさんがポツポツ出てきてくれたおかげで、やっとそこまでじゃなくなってきたかんじかな——」

「10年モノ……まるでお酒みたいな。やはり、おば……いえなんでもにやああ!？」

「いちいち余計よー？ みさきちゃん？」

「にやー!!」

「……………」

10年モノのワインとかワインセラーにあつたっけなあ。

そろそろ飲んでもいいかも。

ああいやでも、ここまでのため込んだんだからいつそのこともつと熟成させたい気もするな。

……そんなことを考えて決断を先送りにしようつてしている僕自身をはつきり自覚している。

うん、分かつているんだ。

ただ勇気が無いだけ。

「というわけでー、だいたい分かったかな？ ねこみみ病つていうのはまだまだよくわかつていない、病気がどうかすらもわかつていない『なにか』。でもたくさんの人が、それはもうバリエーション豊富なもんだから現実に存在する未知だけど既知になりつつあるなにかなの。……つて感じていつも教えているんだけど……どう？」

「よく分かりました」

「あ、ちなみに生えていないときはこんな感じですよ？」つて言つてしつぽを僕から見えないところに隠して、耳も自分でぺたりと髪の毛の上のつけて両手で隠すようにしている島子さん。

……たしかに以前ちらつとだけどちよつと昔の島子さんの写真を載せているページとかで見たこの子の姿になっている。

トレードマークが黒髪に緑メガネだけっていう、わりとおとなしめな見た目の子に。

「……なるほど」

「ごめんねー、これくらい知っててようやくさっきの話について行ける感じだったもんね。気がつかなくてごめんなさい！ 本当ならもう1回話したいけど……そろそろよねえ」

「いえ、先ほど言わなかった僕が悪いのでお気になさらないください」

ねこみみ病。

見た目が変化。

——だから魔法さんは僕をさつきみたいに変な感じにして「隔離」して。

けど今はなぜか隔離されていなくて。

あいかわらずにさっぱりな魔法さん——だけど。

「……つまりその、ねこみみ病は」

やっぱり踏み出した。

例えその先が……でも。

「形態、あるいは種類を問わずになんらかの変化が……肉体上のなんらかの変化。それが目に見えるか気がつけるかは別としてある日突然に現れるもの……」

「……響くんって難しい本とか読んでるよね？ 言い回しとか」

「私よりずっと読んでそうですよ」

確認するために……ついでになんとなく髪の毛が偏っている感じがしたから顔を反対側に傾けつつ「あ、これ、わからないときのジェスチャーじゃないかな？」って思いながら言ってみる。

あ、髪の毛がいい具合に戻った。

なんだかしつくりくる。

よし。

「やだ、響くん自然にかわいい」

「男の子にかわいいはNGにや？」

やっぱり量が多いと風とか動作とかちよつとした加減で髪の毛、偏

るよなあ。

重いし前髪が目隠してくるからすぐにわかるんだけど、とにかくいちいちめんどくさい。

……前にかがりとりきりんさんにつけられちゃったときみたいにヘアピンとかしてみようかな……そのくらいなら魔法さんも怒りはしないだろうし。

いくらなんでもさすがにヘアピンひとつでぶち切れて吹っ飛ばして壊したりなんかしたら逆に笑っちゃおうし。

そんなどうでも良いこと考えてひと呼吸。

……大丈夫だ、きつと。

「……でもちよつと、この子ホントに中学生？ 今どきの中学生ってこんなに知的なの？ ナントカ世代って言うんだよね？ なんだか私、もっと上な気がしてきたんだけど」

「だーからこそそ話すのは悪いクセですよ。私みたいなケモノ化している人には筒抜けなんですにや？ それに聴覚が敏感な人だって。響さんもドアの外の音とかちらちら気になっていたみたいですし、耳、とてもいいほうなんじゃないですか？ ねえ？」

ひそひそ話始めたポニーさんに……そう言えば耳が4つならそりやあ聞こえるだろうなあって思いつつ「今の僕の聴力とか視力もおんなじ理由なのかな」って。

「え……ウソ」

「……あ、はい、聞こえはしますけど気にしていません」

僕は嘘はつきたくない。

少なくともこんなことくらいじゃ。

「あ——……ごめんね……っ」

「平気です。 年齢はいつも間違えられますから」

相手のためのウソなら許容範囲。

嘘じゃない範囲のウソなら僕自身が耐えられる。

「学校……せんぱいでも小学校なら通ってましたし、クラスとかにも昔からいましたにや？ 他の子よりも大人びていて本とかたくさん読んでいて頭も良くって、まるで学年がいくつか上みたいなお

嬢様……じゃないんですにやよね、ならお坊ちやまみたいですし、きつと英才教育と元からの響さんの素質なんですにや」

「そっか」

……魔法さんがわざわざ僕に知らせまいとしてきた、ねこみみ病。起きたら見た目が変わっている……つまりは寝ているあいだに変わっている、ねこみみ病。

——寝ているあいだといえば、あの夢、あの3ヶ月……にもなんらかの関係があるようにも感じられる、ねこみみ病。

もう9ヶ月も前になった、この、銀髪幼女への変身……魔法さん。

——このタイミングを逃したら聞けるのは最後かもしれない。

言おう。

それでどうなるかは分からないけど……この子たちが無事なんだ、きつと僕だつて……。

35話 「ねこみみ病」 7 / 7

ねこみみ病。

なんだかバリエーション豊かみたいだし、人によつてばらばらみたいだしなよく分からないもの。

当事者……つて言うか政府から依頼受けて広報してる人たちがそううんだからそうなんだろう。

だけど——外見が、姿形が、見た目が、ある日突然に——変わる。起きてみたら別の何かになっている。

それだけは共通しているらしいもの。

やっぱりそれなら——成人男性から少女、幼女へと変わった、僕を襲ったこの変化。

ねこみみ病と、魔法さん。

寝たら戻つて、何日かしたらまた幼女になる……みたいにはならないけど、岩本さんみたいに……断言はしていないけどあんなに喜んでいたあたり、きっと永続的に変わり続けるだろう変化。

若くなる、見た目が変わる。

それがセットで起きて、性別まで変わった例があればクリアなんだ。

性別が変われば顔だつて相当変わるだろう。

………性別。

男から女へ。

そうだ、性別だ。

これさえ合っていれば、僕もこのふたりに仲間なんだつて言える。

ひとりぼっちじゃ、もう、なくなる。

ひとりで悩まないで済む。

みんなに説明しやすい概念のそれつてことになれば大手を振つて説明できる。

——だから、今まで嘘ついでごまかしていたんだつて言いやすくなる。

嘘は謝らなきゃならないけど、でもこういう事情があったんだよって。

「……………すみません」

「はい？」

「なんですにや？ あ、そろそろですか？」

「いえ、連絡はまだで——ひとつだけ聞きたいことがあって」
心臓がばくばくとうるさい。

手のひらから、背中から、じつとりと汗が出ている。

けど、今こそがタイミングの良い「鉄則」のときなんだ。

「…………興味本位。 そう、なんとなく思いついたんですけど、それって、その」

ちやんと予防線は張っておく。

「…………最近読んだマンガであつたんですけど」

僕がそうだつて分かつてまじいときのために。

魔法さんにも「たとえだから」って牽制しておいて。

「——性別が変わったりする変化。 男の人から女の人へ。 あるいは、女の人から男の人へ。 それとか、顔が親戚の誰にも似ていなくなったり……………そういたりするの、ねこみみ病の症状のうちにあつたり……………するんでしょうか」

僕はとうとうそれを口にした。

……………けど、すぐに返つて来たのは明るい笑い声。

「あははっ、響くーん、そこまではありませんよー」

「笑つちやダメですにや。 響さんマジメですにや」

「うん、ごめんごめん。 でも、てつきり……………だつて」

目じりを拭う彼女が「本当にごめんね」って言う。

「響くんがそんなに真剣な感じで聞いてくるから、てつきり身内とかのお知り合いにもいるのかつて思ったの。 ほら、お家の方針でテレビとかネット見ないんでしょ？ ならご家族の方も知らないのかなあつて」

「あー、確かに。 今でも知らない人いますもんじゃあ」

「でも響くんがマジメな顔で……………ううん、バカにしているんじゃないやなく

て、そういう可能性も確かにあるよねって思ったの。ふふ、ごめん
なさい？ でもまあ昔からそういうのいっぱいありますからねえ。

呪いとか『魔法』とか」

ぎゅつとお腹に力を込める————けど、魔法さんは無反応。

……これもセーフ？

それとも今はここに居ないだけ？

「あー、この前やったソシヤゲのキャラにもいましたにや？　なんで
したっけ、ていーえす、でしたかにや？　なんか定期的に人気なキヤ
ラとか出てきますにや。　漫画とかで昔から根強い人気だつて聞き
ますにやー？」

性別が変わることについて直接ではないにせよ間接に聞いてみて
も、口に出しても……それに対してなんにもアクションが無い。

「で、ですね？　この病気……っていうよりは症候群とか変化とか変
異とか呼び方も学者さんそれぞれなのでどう表現してもいいんで
しょうけど、とにかくこのねこみみ病には『それはありません』
ねえ」

「……ありえないんですか？」

「ええ、ぜったいに」

ばつさり切り捨てられた。

だつて見た目が変わるっていうことは……性別が変わったとして
もおかしくはないはずなのに。

なんでそんなにはつきりと断言できるんだろう？

「見た目が変わるとは言いましたけど、それは家族とか親しい人が見
ても見た目はすこーし変わってはいるけど、でも昨日までの本人だつ
てわかるレベルの話です」

「そうですね。　なので、みみとかしっぽが生えたりした私みたい
な場合には、それ以外の変化は起きません。　それにパーツが変わる
といつてもせいぜいが雰囲気が変わったとか色素……お肌とかお
目々とか髪の毛の色がほんの少し変わる程度ですにや。　最近増え
てきたような顔認証とかそういうもので引つかかるようになるレベ
ルの変化は、つまりは骨格までが変わるっていうことはほんつとうに

レアケースなんですにや」

「……確かに少し変わる程度だって、さつきも言っていた。」

「つまりは周りの人が……その人のなにかが変わったって気がついたとしても、絶対に元の見た目から連想できるとか、その人だってはつきりとわかる。その程度ですな」

「まー見た目が別人になっちゃったら……子供ならまだしも大人になっちゃって。顔とか性別が変わったら別人になりますにや？」

「そしたら大問題ですにや。今の程度じゃ済みませんにや」

「若返りだって私みたいな極端なのはすごく珍しい部類だしねえ」

確かにそうだ。

僕だっpegこうなったからすぐ困っているだけで、もしちよつと変わった程度なら「まあいつか」で済ませちゃっただろう。

「でも、それなら……とても珍しいという範疇なら……今まで例はないんですか？」

「おろ、なんだか熱心ですにや？」

「……気になっているので」

ちよつと「ん？」って感じになってるけど気がつかないフリをする。

「まー確かに。けど、あとひとつ性別が変わると大問題があって、このせいでたぶん無いだろうって考えられていますにや。それはなんだかわかりますかにや？」

「……………」

分からない……けど、見た目が変わるのなら、僕みたいに性別が変わる人だって。

「あー、みさきちゃんみさきちゃん。いくら頭良くても中学生だとまだやってないかも……いや、どうなんだろ。昔とずいぶん違うだろうし……ほら、生物学の授業。内容自体は知ってるかもしれないけど、もう時間もないしさっさと教えてあげて？」

「あ、意地悪じゃなかったんですにや、ごめんなさいですにや響さん。」

それはと言いますとにや、男の子と女の子は……肉体の、あくまで一般的な話ですにや？ 響さんみたいな場合を含めても肉体の性別の話ですにや？ ……中学生くらいまでには、顔の感じも体の感じも

だいぶ変わってきますにや。 第二性徴っていうもので、男の子と女の子は骨格から変化してくるんですにや。 これは心の性別に関係なく……響さんにとっては辛いかもですけど、生物としてなってしまうにや」

「……………」

「……その変化は男の子と女の子をわけけるもので、つまりはDNAっていうものが違っていているんですにや。 正確には染色体というものなんですけど今はいいですにや、多分ちよつと調べたら響さんならすぐ分かりますにや。 とにかくそれで……私たちみたいにねこみみ病で見た目がどんなに変わっても、DNA、体の設計図、これは元の体とおんなじなのですにや。 ですので性別が変わるなんて極端なのはありえないのですにや」

有り得ない。

染色体。

……そうだよな、僕って人種すら……。

「そんな耳とかが生えていても同じっていうのは不思議よねー」

「不思議ですけどそうなっているらしいんですにや。 だからこそこんなものが生えたりするのにDNA、遺伝子がまったたく変わっていないのにもお医者さまたちがオテアゲなのですにや。 ……私たちがみたいになってもDNAが変わらないっていうことは染色体も……男の子と女の子を完全に違う見た目にする、このミクロレベルのものまでもが『変わっていない』んですにや。 じゃあにやんで私たちはこうなってるのかとかはぜんぜん分からないそうですにえー」

「性別が変わったら細胞の元になる設計図に書かれているっていう男の子の成分と女の子の成分。 その情報までが変わるっていうことで、つまりは『別人になる』っていうこと。 だからそれはありえない、だったつけ。 ま、私だっておんなじ遺伝子でDNAだけでも……実はお化粧する前の顔つきとか全然変わっててびっくりしたけど、でも変わったものねえ。 この程度は誤差……ってことなのかしらね？」

「……………」そう、なんですか」

せつかく見つけたって思ったのにな。

仲間に入れる、そう思ったのにな。

「……あ、響さんのスマホ。 ひかりさんひかりさんお会計頼んでもいいですか？」

「はいはい。 済みませーん」

岩本さんが席を立つ。

「長い説明になっちゃってごめんなさいですよ？」

「……いえ。 僕の方こそ変な思いつきで」

「良いんですよ、むしろいろんな質問に応えらると後で楽なんですにゃー！」

……前の僕が今の僕になったのも魔法さんのおかしなあれやこれやも、もしかしたらねこみみ病とかいう一般的に周知されているっていう……僕ひとりだけじゃなくって、もつとたくさんの人がなっているっていうその現象。

そのひとつかもしれないって思った矢先に「それだけはない」って断言された。

そのことがよほど響いたのか……多分ようやく仲間ができて相談もできて、それでもうひとつの嘘もきちんと言えられるようになるんだって思いたかったんだろうな。

若返りについては岩本さんも喜ぶはずだったんだ。

自分よりももっと長い時間を巻き戻ったっていう僕っていう例が出てきて、注目が少しは逸れて。

代わりに僕が……それはもう注目されはするだろうけど、でも今みたいになんにも分からないままですらただ自分で考えて、ときどき魔法さんに怒られるくらいしかできない今とは全然違うんだし。

でも、そうじゃなかった。

振り出しには戻らなかったけど……それどころか今日だけでどんなでもない情報が手に入ったけど。

でも、ぬか喜び。

……そうだよな、ただ期待しただけなんだから。

そうしてぼーっとしている僕に気づくこともなく岩本さんはドア

を開けて出て行ってしまい、空いたドアからは外の喧噪とか空気とか匂いが入ってきて一気に現実……僕たちは駅ビルの上の階で話していたんだっていうことを嫌というほどに知らされて。

鳴っていたスマホからは駐車場に着くって言う電話。

それを、いつもみたいにおートに任せる。

そうしてちようど窓の外、真下には、僕がこれから……歩けないだろうからまたタクシーで帰るだろう、真っ白になった、僕の家があるはずの方向の町並みが広がっていて。

そしてふわふわと、しんしんと降り続けている雪。

「……んーっ、結構話しましたにやー。つまり響さん、ねこみみ病っていうのはあくまで自分は自分のままで、中身はほとんど変わらななくて。でも私たちがみたいに見た目だけがちよこつと変わったりするだけなんですにや」

「……はっ」

「でも響さんのその考えもマジメに議論されてる話ですから荒唐無稽でもないんですよ。こんだけいろんな種類があるんだったら性別だって変わるんじゃないかって言っている学者さんもいるそうですけど……今のところはあり得ないでしよって域を出ていないわけですよ」

「……そうですか」

「でも、今のところはですからにや？ この先でそういう人が出てきたんだったら話は変わるかもしれないけど……でも大変なことになるしうだから公表されるかどうか、にや」

……そうだよな。

男が幼女になる事件が多発して、魔法さんみたいなハサミとか冬眠とか認識がおかしくなるとかになったら……世の中大騒ぎなっているはずだもんなあ。

「あ、検索してみるとやったらとねこみみの女の子の画像が……ウイキとかお役所さんとか病院のホームページとかにまで載っていますけどにや？ あれはねこみみ病の擬人化っていうもので、つまりはいつものマンガカルチャーで生まれた子なんですにや。 たぶんSN

Sとか……やってますかにや？ あ、いえ、なんとなく、お家が厳し
そーなので特に深い意味はないのですにや。それで話題を追って
いけばおんなじような子がいっぱい出てくるはずですよ」

そう言いながら島子さんも、席を……さりげなかったけど、たしか
にしつぽも使って席を立ち。

しつぽを意のままに、新しい腕のように扱っているのをしつかりと
見定めて。

先つぽの方だけちよつとぐんにやりしながらも力強くイスのクツ
ションを押し、立ち上がったら少しだけ後ろに押すつていうとつても
便利そうなことをしていて。

「といつてもこの子のおかげでかわいいとかぱつと見てわかりやすい
とかつていう要素が揃ったマスコットキャラクターが自然に定着し
たおかげで、宗教的にねこみ病が厳しい国でも比較的かんたんに受
け入れられたつていうことらしいんですよ。 やつぱりかわいい
は正義かもですよにや？」

36話 準備 1/6

「……………」

……戻ってこられたんだ、僕。
あんなにいろんなことあったのに、こうして無事で。

そう……あったかいお湯に浸かってしばらくして身に染みてきた
感覚。

天井一面に冷えた湯気が水滴となって張り付いてきてぴちやんぴ
ちやんと落ちる音が続くようになった。

どれだけ温かい格好をして暖房をしても、僕の意識も……たぶ
ん体も、まだ夏のままの気分。

いくら冬だつて実感したとしたつてそう簡単に切り替えられるも
のじゃないんだろうな。

体は家の中にずっとあった……はずだけど、でもそれは「冬眠」つ
ていう魔法さんの不可思議な力の支配下にあったわけで、つまりは自
然じゃなかったわけで。

だから寒いには慣れきつていなくつて、寒さを感じていないつも
りでもこうしてお風呂で……夏よりも温度を2度くらい上げて入っ
ているのに、ぼーつとしてくるくらいには入り続けているのに汗すら
かいていない。

……よっぽど冷えていたんだな。

まあ季節が一気に逆転したんだ、むしろ起きてからたったの1日も
経たないうちに慣れる方がおかしいのか。

時差ぼけだつて何日もかかるし、季節が変わるたび風邪を引くくら
いには体つてそういう変化に弱いからなあ。

あと、大切な皮下脂肪さんたちが軒並みすり減っているのが効いて
いそうだ。

腕とかふとももとかの……特につけ根あたりの細さがまずいこと
になっているし。

今の僕になつたばつかりのころによく感じていた、折れそうに細
いっていうのがもう1回だ。

今見ると……最近は特に意識することがなくなっていたのにはつと見てそう感じるようになっていて、きつと今までは努力の結果として脂肪も筋肉も増えていて、けれどもそれが……まとめて使われちゃったっていうことの証で。

冬眠つてがりがりに痩せるものらしいからしようがないけども。

3ヶ月寝てこの程度ならきつと安いもんなんだろうし。

「ふう……」

それにしても。

ねこみみ病。

ケモノ化。

そして、若返り。

体が変化するっていう、実際にしかとこの手で確認した、あれ。

とうとう……前の僕から今の僕になって、幼女になってから9ヶ月……いや、意識がなかったぶんを除いたらまだ半年なのかな……それだけ経つてようやく手に手がかりだ。

そう、思っただけだな。

一応は若返る例があるって分かっただけでもすごい収穫ではある。けど……性別なんて変わりっこないって言われちゃったしなあ……。

脱力してお湯の中でぷかぷかしていた手を水面から出して、あのと
きのもふもふ感を思い出してにぎにぎしてみる。

柔らかかった。

あつたかかった。

そして、いい匂いだつた。

あれは現実だった、はず。

猫もそうだけど……どう見ても、高く見ようとしてもせいぜいが高
校生とか大学生な「元」27歳。

僕には人の年齢、さらに女性のそれはそこまで細かくわからないけど、でも子供と学生と大人のどれかって聞かれたらまず学生だろうって思う見た目。

でも、元の僕と同世代だった子。

ん？

女性って言ってあげた方が……いや、女性は若く見られるほどに良いらしいし、今どきは50代とかでも女子って言うんだし、女の子って呼んでおいてあげよう。

「……………」

ちやぷんと両手を沈める。

けどちっちゃな今の僕の手は、腕は、浮力に負けてあつという間にぷかりとお湯から覗いてくる。

入ってからなんにもせずなんにも考えず、ただぼーつと見続けている水面には今の僕の……小さい足の指から細くて白くてつるつるな脚、2重の意味で何も生えていないすつきりしすぎてしまっているおまたが映る。

肉がなくなりすぎて、たぶんいつもトイレのときなんとなく見つめているデルタゾーンも広がっちゃっているだろう、そのすき間。

男なら……多分こんな幼女であってもふと目の前にあつたら1回は見ちやうだろう場所。

それが僕の体の一部になっている。

日常生活で見飽きるほどに見ていて、触っていて……トイレとお風呂で身近になりすぎたもの。

毎回のトイレが不便にはなつたけど、無いなら無いですつきりして楽とも感じる。

人って順応性が高いんだなあって思う。

二十何年間もぶら下げてたものが無くなつてもすぐに平気になるんだもん。

ズボンがずり落ちかかることがよくあるくらいには細い腰、むしろスカートの方がそういうのがないぶんまだマシな腰、けどなかなか腹筋がつかないせいかわぼちやりしているおなか。

調べてみたらこういうのはイカ腹……なんでイカなんだろう……って言うらしい。

つまりは幼児体型で筋肉がなさ過ぎるせいであつているんだとか。

腹筋、がんばってしてたから少しずつ付いていたのになあ……。ここままでまとめてだとなんだかやる気まで取られちゃった感じがする。

その上に乗っかっている、いや、へっこんでいる小さいおへそ、何もないというよりはあばらで色気もなにもない胸未満の胸と、その上にぷかぷか浮かんでいるたらいの上のわっさりとした銀色の髪の毛の束。

前の僕に生えているはずのものがみんななくなってすつきりしすぎちゃって、けど代わりに短くすることもできない、僕を嫌でも女だと……いや、幼女だと印象づける長くて多い髪の毛。

「……………ふう」

ひとしきりねこみみと尻尾を堪能するついでに……じゃなくてねこみみ病についていろいろ知ったあのあと。

レストランから出たあと、まずは事情を聞いたビルの警備員さんや僕が少し先を歩いて、そのあとから2人について来てもらおうっていう慎重さでエレベーターを使って地下へ。

もうとつくに諦められていたのか、結局誰ひとりとして追っ手さんたちとは遭遇しなかったんだけど……そうして久しぶりに萩村さんに会って、車に猫さんと栗色ポニーさんを押し込めてさよなら。

ちなみに車はあのときの、黒塗りで威圧感があつたあれ。

「良ければ送るよ？」って言われたけど家は知られたくないから「いいです」って言うておいた。

……そしてさよならしてからタクシー乗り場まで行ったら行列で、寒い中立って待つあいだ「やっぱどうせなら近くまででもいいから僕も送ってもらえばよかったかな……」って思いながら帰って来て。

で、ひとりになったことだしってお風呂を温め直しながらねこみみ病について調べてみた。

ねこみみ病。

病ってつきはするけど、聞いていたとおり病気ではないってどこでも書いてある。

まあ治療とかしようもないし、する必要も……少なくとも普通の人

はないから。

それに医学的な根拠……誰がいつなるのかとかどんな風になるのかも全然分からなくて、眠っているあいだにいきなり変わるってことだけしか分かってない。

そういうものらしいからその原因も、変化しているあいだのメタモルフオーゼの瞬間もさっぱり。

そういうものらしい。

あの子たちが言っていたみたいに、どこも細かく「私たちは何々と呼んではいるけど、理解してもらいやすくするためにしようがなく『ねこみみ病』って書いてます」っていう感じなのがほほえましい。

で、ねこみみ病。

今のところは国内で千人ほど、その他はその倍くらいが確認されているらしい。

だけどこれは国内で特段多いっていうわけじゃなくて、偏見が薄いからわりと気軽に「ねこみみ病かもしれないので調べてくださいな」って言い出しやすい環境だからとのこと。

若返りはともかく特にケモノ化って宗教的にアウトっていう地域が相当あるようで隠されるのがまだまだあるらしいからこそ突出しているんだとか？

一昔前ならここでだって狐憑きとかで怖がられそうでもんな……だって耳と尻尾だもん。

国内だと満遍なくいるけど、国外の地域によっては……ケモノ化したらすぐに手術で切り取っちゃったりして「僕は今までと変わリませんよ」ってしないといけないらしくって、統計が0人とか言うところもあるらしい。

それに若返りなんかは気がつかない人もいるだろうしなあ……だって多分3年くらいなら気づけないだろうし、それ以上でも大人なら大して変わらないし。

「けどなあ……」

わきわきと手のひらを動かす。

みみ。

しっぽ。

……どうせなら幼女になるよりアレが生えた方が……いやいや、落ち着こう。

どこにでもいるようなメガネ男子だった僕に動物の耳と尻尾、あるいは羽とかだぞ？

そんなの誰も得しない……いや、SNSで流れている少女漫画っぽいテイストのイラストとかだと「ひよろい男にそういうのが生えちやっつてどうしよう……」ってなってるのを女の子の人が甘やかすみたいなのが人気らしい。

ってことはやっぱりその方が僕の人生、楽になってた？

ニートでも彼女できたりしてた？

なにひとつ良いところがなくってもかわいければ良しってなつた？

……いや、無いか。

いくらかわいくとも職歴無しのにートなメガネとは誰も付き合いたくないよね。

僕は元の顔にどれだけ良い感じの耳と尻尾を生やしてみる妄想してみたけど……やっぱダメっぽいつて分かった。

今の顔が整ってるから余計にいろいろと壊滅的なんだ。

1回生活水準が上がると戻すのは大変って言うのと同じだ。

……ちよつとちがうか。

お風呂の鏡で見るのに抵抗がなくなった僕自身を眺めていると、ふと気になったことがある。

前髪、ちよつと伸びた……？

いや、全体的に伸びているんだ。

寝ていたとしても時間は経ってるんだもんな。

朝は慌てていたしまだ夢の中かもって思っていたしでそこまでくわしくは見ていなかったけど、とりあえずぎつくりと1、2センチくらいは伸びているのがわかる。

だって、前髪の束のひとつが眉毛にかかるくらいだったのがつまむと目の下まで引つ張れるくらいだし。

「ながい」

まあ意識のない寝たきりの人だって髪の毛は伸びるっていうしな。

僕もそういう感じだったんだろう、きつと。

けど爪とかは……大丈夫みたいだな。

なんでかは分からないけども。

で、ねこみみ病のことに戻ってみると。

エレベーターで下りているときにも聞いたんだけど、ねこみみ病って容姿がほんの少しだけ変わるっていうケース……肌とか髪の毛とか目の色とか形とかがちよつとだけ変わったり、ちよつとだけ若返ったりするケースの方がずつと多いらしい。

しかもねこみみ病って、なつてからしばらく自分でも気がつかないっていう島子さんみたいなケースも珍しくないらしく、さらにほんのちよつとの変化だとすれば……とつくにねこみみ病で姿形が変わっているのにまだ誰も気がついていないっていうケースも多いはずで。

別にその程度なら生活に支障はないし……とも思うけど、一応は数を把握しないといけないってことらしい。

だからこそあやつて広報の役を……半ば強制的にらしいけど、とにかく買って出た様子。

ねこみみ病のメジャーかつわかりやすいねこみみしつぽと、けつこ
う……いや、かなりらしい……僕は知らなかったけど……人気で有名
でデビュー当初に近い年まで若返った女の子のペアとして。

……ほ、ほら、僕が芸能人とかに詳しくなったのって今年になって
からだから……。

あの子たちの反応を見るに大半の人が知っていたらしいアイド
ルって存在を全く知らなかった僕自身の無関心さはともかくとして。

——でも、違っただ。

あのとときに「もしかして僕の、このちつこい体の原因がわかったか
も……！」って思って最後の確認で聞いてみたあれ。

結果的に「僕もそうなんです」って先に言わなくて正解だった……
男から女になるというもの。

僕がなっているこれ。

これは、ありえないことらしい。

これまでで……ちようど僕が冬眠し始めた辺りからテレビやネッ
トや新聞や雑誌で話題にならない日は少ないっていうほどには話題
になっていたらしいねこみみ病だけど、性別が変わったとか見た目が
別人のようになったっという報告は——ゼロ。

「ちよつとしかないない」じゃなくって本当に「誰もいない」そう。

……だからもし僕がねこみみ病で若返ったんだとしても、そもそも
10歳……いや、幼女だっつてこうしてお風呂でじつくりと今の僕の体
を観察してしまうともう認めるしかないんだけど……15年くらい
は若返っているはずで。

でも、今までのねこみみ病患者……って呼んでいいらしい、その患
者さんの中でも最長が岩本さんの10年程度。

まあ若返りについては成長期の子供以外には実害はまったくない
し、むしろ利益しかないんだから放っておいてもいいんだらうけど
……とにかく僕がねこみみ病で若返ったんだとすると、残りの5年程
度の時間。

……これをなんとか無理やり個人差の範囲で、いや、ねこみみ病の
症状の差ってという範囲で大目に見るとしたって、やっぱりちがうもの

なんだ。

見た目が人種ごとで性別ごと完全に別人の……銀髪少女という生きものになっちゃったことには説明がつかないことになるもん。

DNAとか面影とかまるっと無視しているこの感じは、やっぱりねこみみ病じゃないんだろう。

だから、あの場で早とちりして「僕も」って言わなかったのは正しかった。

ぐつとこらえられた僕は偉かった。

そうは思ってもショックは大きいもの。

「……ふう」

頭からじんわりと汗がにじみ出てきた感覚。

僕の体はようやくよくに温まってきたらしい。

こうやって芯からあつたまるのって大事だし、もうちよつとお湯でぬくぬくしていよう。

だから僕はねこみみ病っぽかったけど違う謎の状態って分かり直した形だからってさつきまでがっくりときていたけど、よく考えたらそもそもとして……朝、目が覚めたら体が変わっていたって言ってもねこみみ病なら変化はひとつだけだから、僕はそれに該当するはずがない。

仮に今後僕みたいに複数……えっと、年齢と髪の毛の色と肌の色と顔の形と体の形、人種とが1度に変わる、っていうものすごくレアなケースが出てきたとしたって。

遠い親戚……僕にこんな北国出身的な親戚がいるのかどうかはさっぱりだし多分居ないだろうけど、とにかく仮に親戚にいたとして、そのくらい離れた親戚くらいまではDNAが変わったりする人が出てきたとしたって。

そういう好都合すぎる展開が起きたとして……魔法さんのことは？

あんな非科学的な物理をどう説明できるんだっていうことになる。だって特定の動作で物が勝手に動いたり、特定のキーワードで人の認識を……下手をすれば広範囲で僕からのキーワードが聞こえてい

た人たちまでを巻き込んで認識を変えて改ざんして隠蔽するっていう、どう考えても物理現象としても心理現象としてもありえない、それこそ超常的な魔法みたいなことが起きるっていうの。

これもまた「ゲームとかアニメみたいに」って予防線を張って聞いてみた限りでも、やっぱり笑われただけだし。

帰り際に粘ってみたけど、それでもダメだった。

『仮にそうだったとしたら、それはもう、みんなまとめて魔法にかかったみたいなものじゃない』って。

……そうだよなあ。

だからこそ最初の頃にありえないんだって思ってた引きこもったんだもんなあ。

ぽちやぽちやという天井からの水滴の音とぴちやぴちやという僕の髪の毛とかあご伝いの汗の音で、お風呂場がうるさくなってきた。

汗がしたたり落ちるくらいになってきたからじゃぶっとお湯から出て、シャワーを髪の毛に馴染ませながらシャンプーを手にとって。

「……………」

なんで起きたのかも、どうしてあれだけの期間だったのかも……なんで痩せる程度で済んでいたのかわからない冬眠。

魔法さんの仕業。

魔法さん——魔法。

あんなものが起きるんだったらもつと前から大騒ぎになっていたはずだ。

だっていきなりの意識不明が月単位だもんな。

たとえ何ヶ月か経ってけろりと目が覚めるって分かっていたって……誰だっぴつくりする。

警戒する。

恐れる。

そんな人があちこちで全世界で起きたとしたら……寝ちやっただしたら、きつと未知の病気とかいう扱いになって、ねこみみ病だっこんなに簡単に好意的……なのは国内を始め一部の国でだけけど受け入れられるはずがない。

頭皮と髪の毛の毛先にまで無意識に優しくシャンプーを染みこませるようにして洗い終えて時間をかけて流し、続けてリンスを塗りたくる。

これも染みこませるようにした方がいらしいんだってかがりから教え込まれて、それをマジメにやってきたんだけど……冬眠のあいだまったく痛んでいなかったんだ。

多分シャンプーで洗って雑に拭いて雑に梳かして雑に乾かすだけでもせいぜいが枝毛ができるだけなんだろう。

けど習慣化しているんだし無理に止める必要もないかなあ。

もうめんどくさいとも感じなくなっているんだし。

めんどくさくないんだったらどうでもいいもんな。

3カ月間意識不明だった冬眠のあいだの僕……あの夢は夢だからどうでもいいとして、ああやって普通に寝たらそのまま月単位で寝ちやうつていうのはどう考えてもまずい。

とてもお泊まり……ああ約束破ったこと謝らなきゃなあ……とかできる状態じゃないし、なによりこれがもし昼間にうとうとしたときだったり、起きている状態でもいきなりなるっていう最悪の事態を想定してみたら……今日の昼間みたいになりそうだったら危なっかしくて家から出られない。

ナルコレプシーっていう突然寝ちやう病気の酷いものに近いナニカになっちゃったら。

「前の僕の家」に「今の僕」がいるっていう事案になっちゃうからなるべく見られないようにしたかったのと注目されなくなかったのと、なによりもめんどくさかったからっていうのもあったんだけど……今はそういう僕のがままとかじゃなくって意図しない冬眠を防ぐためっていう切実な問題のために。

あまり外にいる時間……長くしないほうがいいだろうな。

遠出は避けるべきなんだ。

少なくともすぐく眠くなってもどうにかして戻って来られる距離止まり。

今までだったたまたまそうならなかっただけかもしれないし、ある

いは魔法さんが冬眠させたのはなんらかのなにかを蓄積した結果かも知れないんだし——路上で昏睡とかしたら大騒ぎだもん。

原因が完全に突き止められていないのが怖い。

仕組みが分からないのが怖い。

僕が幽霊とかが怖いのが怖い。見た目なのはもちろん、因果関係や理屈がないから怖いんだ。

「……………」

いつのまにかトリートメントまで行っていて、馴染ませているあいだに体を両手で塗りたいくるように……………だつて……………しするとすぐに荒れるから……………洗っていたら自然と、全くの無意識で。

僕の指が軽く、僕の中を——おまたに空いてしまった穴のすごく浅いところとその周りにたまるらしい汚れを洗っていて。

男のときだったら生えていたそれを洗っていた程度の軽い気持ちで、特に何も感慨もなく脚を広げて洗っていて。

必要ないだろうって思つてずっと触らないようにしていたけど、かりから借り……………いや、押しつけられたファッション雑誌とかのちよつとアダルティーンなコーナーに書かれていた「体のケア」とかいふところで目にした衝撃の事実のせいで、いやいやながら……………恥ずかしく感じながらもなるべく意識しないようにして洗うようにし始めた、ここ。

「……………」

顔を上げて、鏡越しに僕の中に僕の指を突っ込んでいる僕自身を見ても……………なんとも思わない。

僕の指がほんのちよつとだけ入っているそこを目にしたり、中に入っている感覚が僕自身にあつたりしたり、温かい穴の中に差し込んである感覚があつても、なにも感じない。

男のときに見たこともなかったそれを平然と見てするようになっていて。

でも恥ずかしさもいやらしさも、違和感すらなにひとつなくって。

まるで僕が、はじめから今の僕だったみたいに。

年相応の幼女として育つてきたかのように。

20年以上も男として生きてきたのに、たったの数ヶ月でもうこんなにも慣れ切っている。

記憶が、それこそ魔法さんに書き換えられているだけで……前の僕として生きてきたっていう記憶だけがすり込まれているだけの、ただの子供のように。

幼女のように。

……洗い終えて、石けんを洗い流すためにシャワーを軽くそこに当たて、いつものようにきれいにする。

もちろん特に感じるものは無い。

おしりまで肛門までしっかり洗うっていうのとおんなじ程度なんだ。

でもなあ……幼い女の子の恥ずかしいはずのところを躊躇なく洗えちやうつていうの、それはそれで、こう……来るよなあ……。

多分慣れるっていうのはこういうところ、根本的なところなんだろうって思うから。

だからこそ僕が女の子になっている事実がはつきりしている。

まあ幼女だし……女の子らしい女の子でもないっていう理由が大きそうだけでも。

普通の男でも普通は中学生未満の女の子じゃあ裸でもどきどきなんてしないはずだしな。

……そっか。

毎日のこれと、いつかは来るかもしれない月のもの。

そういうものを考えると、まだ女性としての機能が本格的に働いていない女の子未満の幼女になったっていうことは僕にとって……せめてもの救いだっただけののかも。

だって女の子らしい女の子になっちゃっていて普通に暮らせちやつていたら……僕の中の男の感覚なんて、あつという間に塗りつぶされていただろうから。

36話 準備 3/6

最近はなんだかブルジョアしていた。
うん、ただの冗談だ。

なんだかゆりかがときどき「これだからお金持ちはー」とか言ってくるもんだから気がついたら自然と出てくるようになってしまったのだ。

ブルジョア、それともブルジョワ？

どっちでもいいらしいけど言葉遣いってすぐに影響されるものだよね……だからこそ僕に対する違和感がすごいんだろうけども。

とにかくお金遣いの荒い日だった。

だって昨日3ヶ月越しの朝を迎えたあとと言えば……いや、その期間光熱費とかサブスクくらいしか掛かってないわけだけでも……タクシー使って冬服一式大人買いしてまたタクシー使って、で、冷蔵庫が空っぽになっちゃったって気がついたからとりあえずで保存の利くものをそこそこ買いだめしたりし、あとたくさん飲んじゃっていたお酒も補充したし。

それもこれも魔法さんが悪いんだ。

まさかの3ヶ月っていうのをやらかした魔法さんのせい。

僕はこれっぽっちも悪くない。

僕は悪くないっていうよりは本当にお酒以外は必要だったから買ったままでだしな。

お酒だつていきなり止めたりしたらきつと悪影響があるはずだ。
だから本当に悪くないはず。

ほら、急にそうするのはすごいストレスだからってお酒を止める本とかで書いてあるし？

だから僕は悪くない。

タクシーだつて体力の落ちている今無理をしちゃって風邪とか引いたら困るっていうちゃんとした理由もあるくらいだし、わりと本気で悪いことはしていない気がする。

けど1日に使った金額としてはブルジョアってやつだった。

でも現代でブルジョアっていったいどういう場面で使うんだろう。そうして現実逃避している先にはスマホに映るメッセージたちが。かがり、ゆりか、さよ、りさの4人との。

いろいろもんもんと考え続けてぜんぜん眠くならなかったから……たぶんあれだけぐっすり寝過ぎちゃったせいだとは思うけど今の僕としては破格に夜中までだらだら起きていた昨日の夜に思い切った連絡で。

……夜中って感覚があつたけど、よく考えたら日付が変わるくらいの時間って普通の人にしてみたら……前の僕基準でもそこまで夜中じゃない気がするけれども、がんばってしたんだ。

だから僕は目が覚めて翌日の今日、クリスマススイヴって言う……しかも外はホワイトクリスマスな今日にいつものファミレスに来てい

る。雪のせいで雰囲気はがらつと変わっちゃっているけど、でも、見慣れたファミレス。

もごもごって感じの雪を踏みしめる音が足元から続いているって止まる。

「……………」

あの4人がようやくくにできた僕からの連絡に「今すぐにでも会いたい」って言うってきたから断れずに今日。

僕が目の中の自動ドア。

僕の体重が軽いせいなのかそれとも存在感が薄いからかはよく分からないけど、でもドアの前まで来ただけじゃ空いてくれない嫌いなドア。

わざわざ腕を高く上げて「自動ドア」って書いてあるのを押さないと開かないドアだから、ついこのまま帰りたくなっちゃうけども……僕はあの子たちよりもずっと年上でいい年した大人なんだ。

いい加減勇気を……勇気を、出そう。

小さい体でも心は立派な男なんだから。



「あー ひびきー、おひさーってうわあっ!？」

この子にとつて3ヶ月ぶり僕にとつては何日かぶりの再会の第一声。

……うん。

すつごくげっそりしてるよね。

鏡で見るとよく分かるんだ。

「……あ、ごめん」

「いいさ、僕自身だって久しぶりに鏡を見てぎよつとしたから」

こういうのって後まで思い出しちゃうから先に「良いよ」って言うっておく。

気休めでも言わないよりはずっとマシだ。

「こういうのも2度目だし、君のその気持ちはよくわかる」

「うわーお慣れてるーう。動じてもないなあーい……そっか響って」

入ってから適当にうろろうろしていたらまたまドリンクバーで……いつものようになにかを調べていたゆりかとぼったり会い、なんだかさつきまで入り口でどきどきもたもたしていたのが炭酸のあわあわみたいに抜けてきた。

僕よりも少し背が高くって、でも服装次第では、あと普段の態度的にもぎりぎり小学生に見える前髪ぱつっんで元気な子。

普段なら楽しそうな顔つきが今はすごく歪んでいる。

「……ほんと、だいじよぶ？ 入院してたっていうのは、もー顔見ただけで1発なんだけど」

「もう平気だ。 退院もしたしね。 この通りにひとりで出歩けている」

ゆりか自身の分の……自分の分はしないのがミソだな……配合してない普通のジュースと、被害担当の誰かのジュースを持ちながら歩くゆりか。

……ちよつと大きくなった？

いやそんなはずはない……って言うのは失礼か、さすがに。

成長期だしな、背くらい伸びるだろう。

ひよつとしたら長年のコンプレックスもついに解消されるときが来たのかもしれない。

そうだといいね。

心の中で応援しておく。

……あるいはただ僕が縮んだのかもしれないとも思うけども。

なにしろあの魔法さんだ。

冬眠をしていたけど、たかが僕のひ弱でちんまい体に蓄えられていた脂肪とかだけじゃどう考えても生きていけるはずがないって考えていたけど、そのエネルギーを例えばそう——時間から持ってきたりしていたら。

さらに幼くなりつつあるっていう可能性だっけ出てくるんだ。

そうして幼くなって行くのを続けて僕は……なんてのはホラーでしかないか。

そんなわけはないって思っておこう。

ゆりかの……また肩より下に伸び始めているらしい髪の毛を眺めていたら、みんなのいるテーブルに着いていた。

僕が縮んだ疑惑を考えていたら会話をまたオートで済ませちゃっていたらしい。

「あら響ちやつ……!?」

勢いよく立ち上がろうとして……普段と違って帽子を被っていないから見えちゃう僕の顔で固まっちゃうかがり。

うん、まあやつれてるよねえ相当。

お酒呑んでただ寝てただけなんだけどねえ……3ヶ月ほど。

「……大変、だったみたいね……たくさん連絡してごめんなさい」
「事前にひとことの連絡もしなかった僕の方が悪かったんだ。 気にしないでくれ」

今日の会話は何回もシミュレーションしてきたからちゃんと受け答えできている。

今日は大切な日だから。

大切って言えば今日はイヴかあ……なんか悪い気がする。

せつかくのイヴ……クリスマスを僕なんかの心配しちやつてね。

「そんなことないわよ！　だって持病のことですものつ、誰が悪いとかではなくて響ちやんが無事でよかったことだけでいいの！」

いつになく強い調子で……真面目な顔。

普段からそうしていたらもつと話しやすいのに。

「だって寝たきりで面会謝絶で……それを3ヶ月もでしょう？　また顔を見られただけで嬉しいわ」

「連絡できなくて済まなかった」

かがりはいつものかがりでメロンさんで見た目は特に変わっていない。

けどいちばん連絡が多かったのもメッセージが毎回長かったのも、いちばん心配していたのも、たぶんこの子。

後ろめたいことこの上ないけどさすがにいきなり「僕は魔法さんのせいで冬眠していたんだ……」なんて僕がただ満足したいがためだけに、それもまた魔法さんがなにかするかもしれないっていうか絶対にしてくるだろうことを口にすることは避けないとならない。

だからまた嘘の上塗りをしちゃうわけだけど、でも今のこれは不可抗力だからウソ扱いでもいいのかもしれない。

実際の状況を考えてみるとあながち嘘でもないし。

ただちよつと……心配していたはずの家族とか僕を診てくれていたはずのお医者さんとか僕を管理してくれていたはずの病院の設備とかを、ちよつとだけ盛っただけ。

このこともいつかは話せるかもしれないけど、今ややこしくしたつてしようがないんだ。

「……退院したのは昨日の朝なんだ」

グループのチャットで1回説明したのを改めて言う。

「けど僕の家に戻って来られたのは夕方で、みんなの連絡に気がついたのも夜に連絡をしたタイミングだったんだ。　まさか電池が切れているなんてね……ずっと使わなかったから。　……みんなに心配をさせて本当に済まな……」

頭を下げようとしたら顔にセンサーが押しつけられる感覚。

「そういうのは良いのよ」

見てみればそれはいつものまにかとなり立っていたりさりんの腕の生地で……促されるままにいつものように、なぜか僕がお誕生日席へ。

そしてりさりんさんは、あいかわらずに健康そうな雰囲気醸し出していて。

こうやって運動に力入れている人って、なんとなく安定感あるよなあ。

いい意味で。

それはセーター越しの体からも感じられた。

あ、今日はヘアピンつけていないんだ。

冬だからかな。

……いや、たまたまか。

けどいつも思うけどほんと、なんで僕だけお誕生日席なの……？

途中でさらっと帰ったりできないから、あとはなんだかみんなの視線が集中しやすいからここはゆりかにでも譲って隅っこに座っていたいんだけどなあ。

まあ、今日はしようがない。

いろいろ心配と迷惑をかけていたんだ。

今日くらいはおとなしく言いなりになっておこう。

……いつもそうだった気もするけど。

慣れた動作でおしりをぺたんぺたんとしながらシートを移動していき、着てきたコートとかをおしりの下に敷くと……すでにみんなの目が僕に集まっかけていて。

そして、なんだか見覚えのある店員さんとかも……あ、手を振られた。

「……………」

会釈くらいはしておくか。

「実はそこまで心配はしてなかったんだよ？ だって病弱だってことも、ていうか春までずっと入院してたっていうこともみんな知ってたし、なんとなくくそんな感じだっと思ってたよね？ あとはさよちんっていうお仲間がいるし。 ね？」

「……………はい。私もそういう経験……………いきなり悪くなって動けなくなって。1週間とか2週間とか……………あつて、その。……………そういう説明、してましたから」
前よりはちよつと声の大きさも話すスピードも、おどおどした感じも……………減っている？

けど前に垂らしているおさげと前髪はけつこう伸びていて、総合した雰囲気はさほど変わっていない様子の病弱な彼女。

「とまあ響と似た経歴のさよちゃんからも入院したらどうなるかとかいっぱい聞いてたしさ。それにそんな激やせしてるのも見れば文句なんて言うはずないじゃん？ 友達でしょ？」

「……………そう、か」

「もちろん！」

「そよねえ」

右隣にいたかがりがいつものように視界外からいつものように唐突に、僕のほつぺたを両手で包んでくる。

「……………」

「……………」

やっぱりこうされると眼前の圧がすさまじい。

これ、下手したら前よりも大きいやいや失礼だって。

ただ少し太っただけだろう。

「……………」

「……………」

僕のほつぺたをむにむにとしているのに合わせてゆらゆらしているそのふたつのメロンを見るともなく眺めていたら、満足したのかようやく圧迫から解放された。

……………なぜかゆりかとりさりんが、かがりをじーつと見つめている。

急に無言になって。

なぜだろう。

女の子ってこういう不思議な沈黙を持つてる気がする。

どうでもいいか。

位置関係は僕の左斜め前にゆりか、その奥にりさりん。

さつき僕がおしりを引きずってきた、というか足が着かないからいつもそうせざるを得ないんだけど、そのルートを逃すまいとしてふさいでいる。

反対側に今離れたばかりのかがりとその横のさよっていつものポジション。

本当なんで僕がお誕生日席なんだろう……。

「……………はあ、残念。あのかわいかったほつぺたのぷにぷにもちもちしていた柔らかさとか眠そうでかわいかった目の感じまで、すっかり変わってしまったって」

やっと元のくるんさんに戻って来た感じ。

「それだけ大変だったのね、響ちゃん。…………そんな状態で今日ここへ来て大丈夫なの…………？」

「うん。ここへ来るくらいはなんとかなる。それに、行きも帰りも車を使うし」

タクシーという名の車をだけでも。

冬眠から覚めたその日に無理やりであんなお出かけをしちやつたせいで体が重いんだ。

僕は予想以上に体力を消耗していたらしい。

ひと晩経つてもまだ全然良くなっていなくて5分立っているだけでめまいがしてくるしなあ…………完全にエネルギー不足なんだろう。重めの風邪を引いたときとかこうなるし、人に移さない風邪だって思えばそんなに大変じゃない。

…………あんなことがあって…………起きてすぐのときにはまだ半信半疑だったしなによりも服がなかったんだからしようがなかったんだけど、でもやつぱり冬眠から覚めたばかり、僕視点でいえば冬眠した翌日に外出なんて無謀としかいいようがなかったんだろうか。

でもそのおかげで偶然とはいえあの2人を助けられて話す機会があったんだ。

…………みんなと顔を合わせてとりあえず僕はまだ生きているって見てもらって…………それで勇気が出たら、話題をうまく持っていければ「あの鉄則」のとおりにはちゃんと謝りたかった。

だから今日じゃないとダメだったんだ。

それに……いつまたああなつて何ヶ月飛ぶのかもわからないんだ。

それこそ今夜寝て今度は春とかあり得るもんな。

だから今日。

天気もいい……雪だけど、それでいて体調も悪くない……だるいけど、でも嘘やウソを告白する勇気が残っていて、それでいてみんなと会えるっていう絶妙なコンディションだったから。

話の流れ次第だろうけど、でもできたら言っておきたい。

僕についている嘘とウソのこと。

全部じゃなくても良い。

ただただ、僕の自己満足だけにならない範囲で——できるだけ本当のことを告白しておきたいんだ。

「……………」

みんなが心配そうな目で見てくる。
心配しすぎる感情が響いてくる。
常々思っていたことだけど……女の子は感受性っていうか感情が少し強すぎる。

古今東西そういうものらしいけど人生経験の少ない僕にとってはまだまだ新鮮な感覚。

僕が大丈夫だって言っているんだから大丈夫だって思ってたほしいのね。

……さすがに3ヶ月入院したって聞いたんだ、ここにいるのが男だったってたいして変わらないか。

「具合、悪くなったらすぐに言ってちょうだい？ 私たちとおはなしするために来てもらったのに、それでまた入院とかになっちゃったら申し訳ないし、なにより……いたたまれないもの、ね？」

「だねー、だから来る前になんども聞いたけど、響、大丈夫っていう返事しか送ってこなかったからねえ」

無理もないか。

どのくらい大変かなんて本人しかわからないもんな。

「心配しなくてもいいとは言っておくよ。今日は体調もいいしな。もちろん悪くなったらすぐに言うさ」

決して良くはないけど悪くもない。

ちよつと熱が出て寝込んだあとみたいな感覚だけがしつこく残っているんだ。

「……響ってさ、ほんつとうにマジメっていうかそれよりもジブンに厳しいっていうか」

「ストイック……ですか？」

「さよちん、そうそれ！ほんとストイックだよねえ……びつくりするくらい痩せてるし顔色も悪いのに平気だって。けど、私たちはそれでも響に会えてうれしいよ」

「……………ありがとう」

全部僕がやらなきゃ行けないから気が張っているのか、それとも少しでも嘘とウソをばらさなきゃいけないって気持ちだからか、大変ではあるけどここに来る元気があった僕。

……………そう言えば中学の途中くらいまでは熱が出てようとは何だろうと学校は行くものだって思ってた普通にがんばって行けていたもんな。いつから「今日はなんかだるいからいいや」ってなったんだろうね。「そーやって素っ気ないのもあいかわらずだねえ…………でもみんな、大丈夫だろうって思っていたけどそれでも心配だったのよ。ね、りさりん?」

「そうよ、心配だったんだから。…………まあゆりかの落ち込みように比べたら私たちはまだ平気」

「わわっ!!? なに言ってるのさ、りさりん!!? 内緒にしてって」

「いいじゃない、心配してたってわかってもらいやすいでしょ?」

「だけどお……………うう……………」

ゆりかが珍しくりさにやり込められている。

…………人を心配する気持ちって、そんなに強いものなんだね。

僕はこれまで、ほとんど経験してこなかったから分からないんだ。

「別にストイックじゃないよ。ただ自分の体調は自分で把握できているだけだ」

「私なんて熱とか出るだけでもみんなに甘えるのに」

「ゆりかでも風邪は引くのよねえ」

「どーゆー意味りさりん!!」

「…………それで僕は行けなかったし、そもそも連絡すらできなくて申し訳なかったんだけど。秋とかは忙しかったんじゃないか? 学校も行事も、あのときみんなが決めていたお出かけとかも」

この子たちに任せているといつまでも話が続きそうだからある程度は僕が進めないといけない。

いつ魔法さんがやらかすのかも分からないもんな。

「いやー、まー去年もやったことだったしそこまでじゃなかったよねえ? 学校のは。出かける予定とかは結局やったけど…………でも

このみんなではやらなかったし」

「……いろいろ行こうって言っていたじゃないか」

「いやいや、響が行方不明……じょーだんよ？ そうなのにして思うと……ねえ？ なんとなくばらばらになっちゃって。りさりんと私でしょ？ んでかがりんとさよちんって感じで」

まあ元々この子たちそういう友達同士だったもんな。

「そうねえ。 お出かけだって響ちゃんがないんだもの、行こうって思っていたところへは結局半分も行っていないわ。 それにお泊まり会も響ちゃん抜きでやったら申し訳ないって思ったからまだしていないのよ」

「いや、泊まりは別にどうでもいいんだけど」

「え!？」

「だからお泊まり会くらいは君たちですれば良かったじゃないか」

「それはダメよ!」

何がダメなんだろう……。

「……………お泊まり……………」

「したいわよね、さよちゃん!」

「……憧れは、ありますけど……でも……」

かがりは積極的すぎるくらい賛成でさよは控えめな賛成。

「ほら、さよちゃんもパジャマパーティーしたいって! ね!」

「……………はい、したい、です……………」

「む。 かがり、意見の押しつけはよくないよ?」

「押しつけなんかじゃないわ!?!」

いやいや、これはどうみても押しつけにしか見えないよ?

「……見たかいいりさりんや、あれがかがりという難敵なのだ」

「難敵ねえ。 天然って強いわあ……………」

うん、強いよね。

あらゆる意味で。

「……………」

僕は目の前のお茶……今日は甘いものは飲みたくないって言ったら取ってきてくれた、なんの変哲もないお茶で喉を潤わせる。

……よし。

きつと、大丈夫。

僕はすうつと息を吸って、思い切って言う。

またああなるかもしれないけど、でもまずはこれから。

「……話は変わるけども。この期間で世間では、たしかねこみみ病

◆◆◆」

——やっぱり来た。

魔法さん。

……やっぱりこれがキーワード。

ねこみみ病の何かがダメなんだ。

ちりちりちみちみじりじりしてきた僕。

けど、◆◆◆いい加減にこの感覚にも慣れてきたし、なんとなく

予想もできていた。

なんというか、魔法さんの気配？

そういうもの、ちよつとはわかるようになってきたかも。

でも、これが強引に突破できる類いのものって知っている僕は続ける。

「………つ、それでかなり騒がしかったみたいだし。それに……

◆◆◆つつつ！」

ちよつといやな感じにこめかみがざりつてした。

この感覚は……初めて。

けど止めることはしない。

みんなもねこみみ病については知っているはず。

話題になつてすぐ……たしか夏の終わりとか言っていたっけ、すぐの政府による正式発表と栗色黒耳ペアの活躍が始まったのが、たしか僕が冬眠したほんの少し……僕の主観では1週間とか2週間前のことで、つまりは3ヶ月のことで。

でも僕はそのときこの子たちから解放されたさすががしさと夢中になつていた小説があつて、何巻もあつてだからネットもテレビもほとんどせずに◆◆◆◆◆

あれ？

◆ 僕は、ほんとうに、それを

◆◆◆
知らなかつ

「……………」
周りがなんにもわからなくなって、少しだけ真っ暗でしんとした感じになって、それから視界がざらざらとしてきて目の前が切り替わる。

4人がいたはずなのに僕の目の前には5人ぶんのコップとメニューが置いてある、僕にとっては少し高いところにあるテーブルがあつて視界の左右にはみんながいて、そのさらに先には廊下とほかのテーブル、いや、ブースがあつて、ちらちらと店員さんと目が合ったりしていたはずなのに。

今の僕の目の前には底上げのクッションでちょうどいい高さになつたりリビングのテーブルに手元に飲みかけのコーヒーと画面がつきっぱなしのスマホが左右にあつて、その先から音と光を届けてくるテレビ、そして僕の家のリビングの光景。

さつきまでの暖房とは真逆の感覚でエアコンの風を涼しいって感じていて……あのときはまだ隠れられていたって信じていたから夏だつていうのに閉じっぱなしだったカーテンから漏れてくる外の明かりも今よりもずっと明るくて、温かくて暑くつて。

ついでに耳を澄ませばときどきセミの声が響いてくるくらいの季節で。

そういう感覚が、五感が入ってくると同時に目の前のテレビからも音と光が漏れてくる。

大きくなってくる。

……夢。

冬眠の直前か、あるいはすでに寝落ちしちやつたあとの明晰夢？

だとしたら僕は、もう？

「……………」
魔法さんが怒るつていうことは、やっぱりねこみみ病は魔法さんと

深く関係が◆◆

『……………ただいまご紹介にあずかりました◆◆◆◆と』

画面にはどアップからの引きで、昨日会ったばかりのあざとい栗色さん17歳が。

声の感じとか体の動きとかがちよつとだけあざとい感じになっている。

……………お堅い会見なのにコレなのか。

ということはふだんテレビとかに出るときはもつとあざといんだろうか……………これでも抑えてるんだろうし。

若作り……………年増。

……………実年齢を知っているとたしかに……………いやいや失礼だし、それは声とか表情の練習とか服装とかでいろいろと僕に返ってくるから止めておこう。

そもそもアイドルとはキャラクター性で覚えてもらうものだしその辺はしょうがないんだろうな。

ふだんはきやぴきやぴしている子が急に素に戻っていたりしたらファンもびつくりするだろうし。

別に不祥事起こしたわけでもないしって許可も下りたんだろう、きつと。

『……………◆◆◆◆です』

一方の黒猫さんはなんだか声が詰まっていた。

風邪でも引いていたのかな？

それに語尾が「にゃ」とかじやないし。

……………さすがに島子さんの方は場の空気を読んだか。

それにしても——「見ていたはずなのにこうして再現されるまで完全に忘れていた」あの会見。

萩村さんが映っているっていうのまではしつかりと見ていたんだし、ということはやっぱり僕はちゃんと見ていたわけで。

「………………………………………」

……………ということは。

僕がこの子たちの話をきちんと認識……………できていなかったってい

るにゆると上げてきて。

そしてみんなをまとめて……あえて見せつけているんだろうけど
いろんな感じに動かして……マイクをしっぽで持ってみたりねこみ
み同士でがんばって帽子を挟んでみたり、くるくると回してみたり。
そうしてざわざわががやがやになって、それが落ちついたところ
で。

『まずはケモノ化。 獣化とも書くらいですけど、とにかくこうし
て私の場合には猫さんのみみとしっぽが生えちゃったんです……
にゃ!』

僕が堪能したねこみみと尻尾がテレビの中でぶわっとなっていた。

明晰夢、いや、白昼夢。

認識していなかった過去の時間。

いつぞやに見ていたはずの、けど、僕が見ていなかった『ことになって
いた』場面。

栗色岩本さんと黒猫島子さんの記者会見……それも政府の、いつも
政治家の人たちが話しているような場所でのそれ。

初めは「またあの明晰夢みたいなものか」って思ったけど、どうや
ら違うみたい。

だってあのときは違つて僕は意思のままに動くこともできなくて、
ときどきコーヒーをすすっている動きでさえ当時の……そのときの
まま、ただ体が勝手に動くのに任せてテレビをぼんやり見ている。

そんな僕の中に入った僕が僕として存在する感覚。

今の僕はおとといの夢みたいに自由じゃなくて、ただ過去の忘れて
いた……いや、忘れさせられていた場面をただただ再現している中
に入っているような、そんな感じなんだろう。

でもコーヒーの苦さや香りはそのときの僕の動きを通じてしつか
りと今この瞬間の僕でも感じられている。

さつきまで飲んでいたドリンクバーのおいしくないお茶とは違つ、
家で挽いた豆の香りと味。

あの子たちの声も顔も知覚できない。

ふんぬつとお腹に力を入れるけど……たぶんまだ起きてる。

根拠は無いけどそんな感じがするんだ。

一方で画面の向こう、急に駆け寄ってきたスーツの人に耳打ち……
ねこみみと人の耳のどっちか迷ったのが笑えるけど……された彼女
はぴんと尻尾と耳を立てている。

『すみませんですよごめんなさいですよ！ にやとか言っちゃつ
て……え、このまま続けていいですよ……？ にやつて言つても
おつけーですよにや？ ……あ、はいですよにや。 ……マジですか

にや、天下の……ととと、これは失礼しましたにや』

なんかいろいろ漏れちゃってるけど、多分「にや」とかNGって思ってたのがOKなんだろうね。

ねこみみ病になると「にや」禁止って言うのも差別とかになるんだろうか。

『ちよつとみさきちゃん、早く原稿原稿!!』

『あ、はい! ……こほん、すみませんでしたにや。 けどこれもうガマンしきれないので言いますけどにや? この「にや」って言いたくなるのはケモノ化が強い時期に出る本能っぽいもののせいなので、今のはキャラ付けとはふだんの私のキャラクターとはなんの関係もないんです。 ふざけていたりキャラ守ったり、いえ、守らないといけないんですけどもとかくですにや? ……あー、ほら、こんな感じですよ』

島子さんのねこみみとしっぽはこの前会ったときみたいに、いや、あのととき以上にくるくると忙しくしていて顔も真っ赤。

島子さん、どうやらくすぐったいとき以外でも焦ったりするとああなる様子。

『まじめな場なのでできるだけ、できるだけ抑えようとはしているんですけど難しいのですにや……』

……そうして恥ずかしがっている姿はカメラさんたちにとって格好の餌食となったらしい。

「ぱしゅぱしゅぱしゅぱしゅ」ってシャッターの音とフラッシュの光がいつせいに瞬きはじめた。

まあ現役アイドルだもんね……それを新聞の1面とかに載せても良い場面だもんね……。

『……………あああ写真は! 写真はそんなに撮ったらダメですよああ! ……今は、今はダメですよにやああん!!! 生えている今は恥ずかしいですよにやんっ!!!』

あー、そんなこと言うから余計にフラッシュが……。

ねこみみとしっぽを片手ずつで隠そうとして、でもこの場がそれを見せる場面だっと思いついたらしく、あいかわらずの真っ赤な顔のま

まじぶしぶと下を向いてガマンしている様子。

やっぱり恥ずかしがりなんだな、アイドルやってるのに。

……あ、ふたりの横で立っていたスーツの人たちがすすつと姿を消したかと思うと、だんだんとその音も光も収まってきた。

まあ物が物だしね。

それに生放送みたいだし、そもそも政府主催らしいし。

『相方が騒がしくなってごめんなさいねー?』

一方で……多分わざと止めなかっただろう貫祿の岩本さん。

これこそが年の功ってやつだね。

僕よりちよつと年上なだけなのに。

『さて、それでは会見の続きを。カメラさん、こちらよろしいですか? ありがとうございますっ』

カメラさんとかが集中してきてわたわたしている島子さんをかばうように、すつとマイクを自分の前へ持ってきて何ごともなかったかのように落ちついて話し始める岩本さん。

年はさほど変わらない見た目ならうとも中身の貫祿を匂わせている。

……アイドル、中学からだって言っていたもんな。

10年近くキャリアがちがうんだ、そりゃ根性、肝も据わるというもの。

『もちろん今までの彼女の……ふだんのキャラ付けがたまたま猫だったのでよかったんですけど、とにかくそれで語尾をつけるクセもついちやっっているっていうのもあるんですけども。急にこんな大舞台は私たちも予想外でしたので、どうか細かいところは大目に見ていたけるとありがたいです。この子の話し方はケモノ化のせいでもありますし』

すつと話を切り、完全に静まってからまた話し始めるポニーさん。

『それにみさきちゃん……島子さんはまだ高校生ですから。……さて、見ていただいたとおり、ねこみみ病のうちのケモノ化の特徴として人にはない部位の出現……それも、ペットをお飼いになっている方ならおわかりでしょうがきちんと血の通った、神経も筋肉も意思も

通った部位。　この子ならお耳と尻尾ですね、それが表れます』

声色を使い分けて声のトーンもテンポも落としていき、一気にアイドルからアナウンサーへと早変わりした岩本さん。

『……そのとおりです。　私の若返りと同じように、すでにご存じのように一部の地域では偏見や迫害に繋がる危険でしたっけ？　……はい、これまで公表が伸ばされていた理由だそうです。　もっとも今日ここに居る私も実は先ほど知らされたばかりなんですけどね。　いえ、そういう暗いところをです』

器用に記者の人たちの質問を振り分けているのがすごい、ポニーあざといさん。

今は若返る前のときの肝っ玉を發揮しているようだ。

『ちなみになんですけど、私の若返りは対象の幅が広いということ、ほんの数ヶ月……あるいは1、2年である場合には著しい見た目の変化がなくて、成長期のお子さんや赤ちゃん……あ、今のところこれで命の危険にさらされた方はいないそうなのでご安心を……はともかく大人であれば身体検査を受けないと当の本人ですら気がつかないこともとても多いということだそうですのでそこまで気にしなくても良いのかもしれない。　だって大人が数ヶ月若返ったとして……ですから』

『にやつ、にやああああん！　ひかりさんっ助けてですにやつ！』

しっぽー！　しっぽを接写されていますにやあああ!!!』

『みさきちゃん』

『せんぱい！』

『がんばって』

『せんぱい!』

『で、ですねー』

『見捨てられましたにやああー!』

『まー今の説明はカンペ……こほん、この会見の直前で渡された紙……急いでいたみたいで走り書きみたいな感じなので、そんな感じで書いてあるままなんです。　なのでこれ以上のことはどこまで話して良いのかってのはこれから少しずつ』

『にゃん!』

『……あはは、この子はまだ慣れていなくて。……といふかなー
んでテレビでしかお目にかかったことがないこんな場所でいきなり
全国中継なんですよ——……』

「あはは」って笑い声が上がっている。

……意外とカジュアルな雰囲気だな。

『それではご質問もどうぞ! 枠は充分にあるので、っていうか多分
そのうちに各局スタジオの方に……あ、そのカメラさん?』

彼女が指差した先にカメラが向く。

……何かあったんだろうか。

ちよつと会場の横の方から構えているけど……あ。

『尻尾はオツケー出てますけどー、それ以上アイドルのおしりを近
くで盗り続けていたらー、あとで怒られちゃいますよ? 今は一応公
式の場なのでー。……はい! ご協力感謝します♡ あとみさき
ちゃん? おしり』

『にゃ!』

『私たちもさつきここに連れて来られているいろいろ知らされて諦めたば
かりなので詳しいことはそっちの政府の方に……まあネットに出
回っている情報の半分くらいは間違っただけじゃないっていう感じで
しょうか。 残りの半分はデタラメとか誇張とか……私たちが気持ち
ちよく思っていないそういう方たちに書かれたものって言うので』

『あんまりひどいことは言わないでほしいのですにや……』

『……あ、やーっぱり聞かれますよねえ、これえ……ふりふりの衣装。
……あはは、恥ずかしいですけどしようがないんですよ。 このハ

デなのはちよつど今の時間帯にするはずだったライブのリハーサル
のためのものなんです。 けど急にお仕事ってこと着替える時間も
余裕もなかったの……あのときはなにか恐ろしい勢力について目
をつけられたのかと。 もー終わりかと思いましたがよーあはは』

『あ、これですかにや? これは相当集中していないと難しいのです
にや。 ……やっぱりですにや? どーしても「にや」って言いたく
なって。 むう——……やっぱりどうしても、なんでかは知らないで

どうしてか分からないけども。
ちらっと周りも見てみる。

りさときよも、ひぎ立ちになって覗いてきていて……店員さんまで
何人か来ている。

……うん、魔法さんの影響は今は消えているみたい。
もう少しでなにかが見えそうな気配もしたんだけど……あれ。
すごい汗かいてる。

体じゆうが生暖かくじめつとしていて。

「ひびき！ よかった、気がついたんだよね？ さっきまでぐったり
してて聞こえてなくて、目、開かなくなって息も荒くってっ。」

……そうだ病院！ 病院は行かなくていいの!？」

……そっか、今の僕はあのお隣さんみたいになってたのか。
「本当に良かったわ……だってさっきの響ちゃん、いきなり下を向い
て。 つらいんだったらそろそろおしまいにしましょうって聞こう
とも思ったらお返事がなくて。 だんだんと顔も赤くなってくるし
息も苦しそうになってきてすごい汗で」

「……気がついたみたいなので、大丈夫です。 はい、救急車は……ご
家族と連絡取れますから」

「ご心配おかけしました！ もう大丈夫そうなので！ ありがとうございます
ございます！」
少し離れたところでさよとりさが店員さんに謝ってくれてる声が
する。

……後で2人へも店員さんへも、僕が謝らないとな。

「……とりあえずはもう大丈夫だと思う。 心配かけてすまない」
でも、今まで……それこそ昨日はそんなこと起きていなかったのに
な。

こんなにびちゃびちゃになるほどの汗だなんて。
おかげですっかり体がだるいし……気持ち悪い。

「本当に大丈夫なのね？」

「うん、安心……できないだろうけども」

「響さん、いつもの調子みたいね……はー、よかったわー。 私たち響

さんのお家も知らないし困っていたのよ」

「……私と同じで、恐らくスマホに……担当のお医者さんへの番号……あるだろうから、響さんには悪いけど……と」

「ええ。勝手に使って連絡するか、もう救急車呼ぶかしかないって話していたところだったのよね。あー、よかったわー、肝が冷えたわー」

そうか……でも。

ねこみみ病。

それが、キーワード。

そうして今度はどうしてか僕自身が変わった感じになって……あの2人と会っていたときにはこうはなっていないなかったのに。

同じもの……じゃあない。

けど、これもきつと手がかりのひとつで。

「……………ふーっ」

……走った後みたい荒い息。

落ちつけるまでにはちよつとだけかかりそうだ。

荒い息

髪の毛がひたいやこめかみ、あごに張り付いている。

シャツが体にべたつとしている。

ぱんつもぐっしより。

……いや、漏らしたわけじゃないんだけど、こう、全体的に……ほら、炎天下で歩き続けたときみたいにさ。

たぶん背中とかおなかでかいた汗が垂れてきているだけだと思うけど。

その証拠におまたのところは無事。

多分。

まあ臭くなってるから大丈夫だと思う。

汗なんて今の僕になってからはあんまりかかなかったけど、こうしてかいてみると気持ち悪い。

今が冬で室内には暖房が入っているから急に冷やされないのだけありがたいものの、だからこそいつまでもじめつとしているんだ。

でも前の僕とはちがって汗をかいてもぜんぜん汗臭くならないどころか逆にちよつといい匂いがしてくるのはなぜだろう。

夏のときも、ふと香ってくるこの香りが……変態みたいだからやめとこ。

幼女の汗の匂いにじゃなくて臭いに喜ぶなんて変態だもんな。

僕はまだ常識的で一般的な男としてのプライドを捨てたつもりはないんだ。

でも……甘いものは好きじゃないけど香り自体は嫌いじゃなくて、つまりはこのココナッツとかミルクとか桃とかそんな感じの汗の体の匂いっていやいや今はそんな場合じゃない。

僕自身の匂いを嗅いでいる場合じゃない。

落ち着こう。

たぶんまだ動揺しているんだ。

「響さん。……発作のときのお薬とか、注射器……とか。　　そうい

うのは……持ち歩いて」

「……僕のはそういった類いのものじゃないよ………安心してくれ。でもありがとう、さよ」

僕が幼女の香りについて考えているときにさよは真面目に呼吸困難とかそういう系の心配をしてくれていたらしい。

ありがと……あとごめん、すつごくごめん。

僕は男っていうどうしようもない生きものだからついついこういう思考に襲われるんだ。

「てことはそれ、命に関わる何かっていうわけじゃないってこと？ 私たち、響さんが死んじゃうかって思ってたすつごく怖かったんだけど」

「心配を掛けたね……りさ。でもこれはただの軽い発作だ。……大げさなくらいの反応は起きるけど、それでどうこうなるわけじゃないんだよ」

僕自身がアレな状態になってたらしいからどのくらいだったのかは分からないけど、みんなの反応の限りには相当アレだったらしい。

「……………」

「ああ、そうなんだ。心配をかけた」

「……………」

「えーっと私も心配だけど……響さんってそういう嘘はつかないし、本当に大丈夫なんじゃない？」

りさとの会話に深刻そうなさよが入って来て、僕の言うことを信じてくれたりさがフォローしてくれる。

それでも心配そうなさよの顔。

本物の病人だもんな、これが嘘かもって思うんだろう。

その通りで大丈夫かなんて誰にも分からなくて、僕は嘘まみれなんだ。

君たちとの会話の何割かはウソと嘘で塗り固められていて、もうどうしようもないって……つい最近までそう思っていたくらいなんだ。

けど——嘘はもう、つかない。

どうしようもない嘘……誰かを守るための嘘やウソ以外には。

そう決めたんだ。

だから今日は嘘とウソについて言おうって思っていたんだけど……タイミング悪く魔法さんのせいで僕はもうへとへとになっていて頭も回らない。

……仕方ない。

みんなを不安にさせたままにしないためのウソで……なるべく嘘をつかない範囲で、方便の範囲で、どうにかごまかして乗り切ろう。謝るのがまたひとつ増えるけど、ここで下手に必要なことまでごめんないしてもこの子たちが困るだけなんだ。

自己満足な告白は自爆って言うんだ。

僕は……脳みそと心は大人なんだから、これくらいはできないとな。

「……どー見てもそーは見えなかったんだけど……なんか口からひゅーひゅー言ってたし。私、こんなに怖いって思ったの、生まれて初めて……」

そう言いながら僕の喉元とか胸、肺のあたりをまさぐってくるゆりか。

びつくりしたけど同性だから遠慮がないんだなあって思い直す。

すっごい速い心臓の音と振動で心配されないかってひやひやする。

……僕の服、触って汗がべとべと手について気持ち悪いだろうに

……平気なんだろうか。

僕だったら他人の汗なんて絶対触れない……って思うのも、多分今まで親しい人がいなかったからなんだろうって理解はしている。

まだ気持ちが追いついていないだけなんだ。

「……………」

それにしても「今日はただみんなに会うだけだし、かがりもうるさくないだろう……多分」って思つて、なるべくいつもの楽な……男っぽい格好で来ておいて良かった。

顔と髪の毛を隠す必要はもうなくなったんだけど、けどやっぱり寒いからなんとなくてパーカーこそ着て被ってはいるけども。

つまりは僕がいちばん好きな、女装していないときの僕の格好の冬

バージョんっていうわけで。

下はただの厚めのシャツだけで。

だから逆に胸を触られた感触もブラジャーがないぶんダイレクトだったんだけど……悲しい、いや残念なことに僕のこれはまだ完全に子どものだから触られたって前の僕だったときに触られたのときとそんなには変わらなくて、つまりは平気だったし。

ただ、ちよつとだけ男だったときよりも敏感な気がするから、あまり触られたくないくらいかな。

その、先端がぴりりしてるんだ。

そこだけは一応女の子らしい。

こんながちっちゃいのよね。

本当に年齢不詳な体だ。

それにブラジャーに触られるのって……こう、なんていうか女装しているのを改めて実感させられるというか、なんとなく未だに抵抗あるしな。

……「かがりがいるからやつぱりつけておこう」なんて出かけるぎりぎりまで悩んだけど、つけてこないで……本当によかった。

直前に脱ぎ捨ててそのへんにほっぽり出してきて、本当によかった。

いや、別に平気なんだろうけども……ほら、なんとなくイヤってやつ。

「で？ それ、どんな感じのなの。詳しくなくても良いから知りた
いよ」

じーつと見つめて来ているゆりかが言う。

「ああ……今のは、その」

嘘にならないウソ。

「……吸入器のいらぬ程度のぜんそくの発作みたいなもので、時間さえ経てば勝手に収まるものだ。酸欠になるからぼうつとはするけれど、ただそれだけ。だからみんな、もう心配しないでくれ」

「……響が、響自身がそういうのなら信じるけど……ムリはダメよっ」
「うん」

しぶしぶといった感じで離れてくれた彼女。

久しぶりに嗅いだ感じがするな、彼女の匂い……じゃなくって。ついでに言えばあいかわらずにみんなものぞき込むように見ているな……っていうのも後回し。

ん——……ここまで頭回らないのはやっぱ魔法さんのせいかも。

風邪で寝込んだときみたいなくらくらさが残ってるし。

「……なら、近況報告とかおしゃべりとかはまた今度の機会に回した方がいいわよね」

自然な形で珍しく真面目な……当然か、かがりが口を開く。

「急いで話さなければならないわけでもないのだし、話したければ帰ってからグループで話せば……チャットなら響ちゃんの具合が良いときに見てもらえるものね。それに、ひとまずは響ちゃんが……無事ではなさそうだけど、こうして介助なしに出歩ける許可をもらえる程度には回復しているって分かったのだし」

誰……？

失礼って分かっているけど、でも聞かずにはいられない気がする。

でもがんばって抑える僕。

「……………そうですね……発作、が出るというのも、恐らくは……その……………体力がまだ、回復しきっていない、そういうのも……軽いぶり返しも、よくありますし。そうです、よね？」
くるんさんときよが荷物をまとめ始めている。

「今日は私たちも響ちゃんの顔を見てお話しできて、少しは安心できたから。早くお家へ帰ってもらってしっかりおやすみしてもらわないと」

「そだねえ。見るからに激やせしてるし、まずは肥えることからだよひびきん！あのぷに感を取り戻すのだ!!それに痩せすぎは、いやそれでもなんだかミステリアスな雰囲気マシマシだけど、でもやっぱり健康第一！」

「じゃあ私お会計してくるわね」

「ん、細かいのは後でにしよう」

りさりんとゆりかも席を立っている。

それじゃあ……………いや。

なんだか大丈夫そう……？

根拠はどこにも無いんだけど、なんだか急に体が楽になってきたからあと何分かで朝くらいの調子には戻れそう。

不思議だけど……多分合ってる。

そんな感覚。

……だったらいっただけ話しておきたい。

魔法さんの理屈の分からない力はたった今にも昨日にも、おととい……3ヶ月前にも降り注いできた。

時間が経つほどにおかしくなっていく気がするんだ。

だから次に会ったときに倒れたりなんかしちゃったら困るんだ。

——昨日おかしくなった後には魔法さんはおとなしかった。

ねこみみ病について話していても邪魔をしてこなかった。

……つまり今ならまたおかしくなることはないわけで。

でもみんなはおかしくなった僕を見ていたからすごく心配しているわけで。

……どうしても言っちゃつと話すくらいが限度っぽいな。

「……待ってくれないか」

「ひびき？」

「お会計なら良いわよ？」

「そうね、私たちが無理やり連れ出したみたいなものだし」

「……みんな、そのうちに響さんと会えて……おでかけに、って。

……だから、おごづかいは貯めてあつて……」

……そんなに楽しみに待っていてくれたんだ。

「最近の子供は」とか「今の世代は」とか言うけど、多分それは時代が少し変わっただけで子供つてのはそんなに変わらない。

だってこの子たちはこんなにも良い子たちだから……僕には過ぎるくらいに。

「……ありがとうみんな。でも、ひとつだけ。……ひとつだけ話

したいことがあるんだ。すぐに済むよ」

「んー、それってチャットじゃヤ？」

「……せっかくだからね」

「心配だけれど……いいのかしら」

今日はみんなの意識が僕に向いているからか1回で聞き取ってもらえて。

顔を見合わせつつ、もう席を立っていたさよとりさりんも素直に座ってくれた。

「けれど、また苦しそうにしたらすぐに帰ってもらおうよ？　良いわね？」

「かがりんの言う通りよ？　とりあえずでタクシー呼んじやうぞ？　んで押し込んだじやうぞ、ひびきん？」

「……事情のわかっている親御さんや、お医者様のほうが、いい……と、思います。　なので、さつき……のように」

「さつきさよさんが言ってくれたみたいに、スマホ。　勝手に指に当てるかロック番号言ってもらってそれらしい連絡先。　分かった？　もしまた苦しそうになっても我慢したらそうするらかね？　響さん」

ん

……本物の病人経験のあるさよが本気で、面倒見の良いさよもまた……いや、みんなが本気。

「……分かった。　それで、落ちついて聞いてほしいんだけど。　僕はね、みんな」

今は何も分からない。

魔法さん。

冬眠。

ねこみみ病。

若返り。

少しずつ分かりかけて事態が好転してきているようにも感じるけど、悪くなっているのかもしれない。

どちらにしても一気に動いているのは確実なんだ。

だから——タイムリミットを決めておくんだ。

僕がひとりで悩む限界の。

ひとりで考えていたってなんにも変わらなかったのは、この半年——

―9ヶ月で明らかなんだから。

もう、悩む段階は終わりにしないとだから。

「……春の退院。そして今回の退院。両方とも一時的なものなんだ」

だから、僕は決めた。

「また悪くなるようなら、今度は長期間。月単位、季節単位……年単位で、前のように外に出られないことになる……かもしれないんだ」

それを過ぎたら、僕はこの子たちにもう会えなくなるかもしれない。

だから。

「響ちゃん……」

「だから、君たちには先に……もしもの場合のためにお別れを言っておこう。そう思ったから、今日は来たんだよ。……本当はこんな話をいきなりしたくはなかったんだけども、この体たらくだから」

「……響、さん。ほんとうに、命に関わる手術とか、そういうものは……」

「そうじゃない。それだけは本当だから安心してほしいんだ、さよ」
これもまた根拠のない感覚でしかないけど、多分僕に取り憑いている魔法さんは僕を呪い殺すとかそういうことはしない。

ただただ幼女にしておきたいだけ……なんとも不思議な性質。
まるで「大切すぎるから過保護に守ろうとしている」って思えるくらいに。

だからこれはウソでも嘘でもない。
けど、みんなに会えないし連絡が取れなくなるって伝えてはおきたくないんだ。

「ただ、こうやって外に出て……人に、君たちに迷惑をかけるような状態なのは、まだ退院が早かった。ただそれだけなんだ。そう……ただ春から夏にかけて少しだけマシになっていただけ。僕はまだまだ不安定すぎる、ただそれだけなんだ。だからまた急に連絡ができなくなっても不安にならないでほしい。そう言いたかったんだ」

僕の嘘／ウソで、みんなを悲しませた。

女の子って感受性は男よりもずっと繊細で敏感な生きもの。

大丈夫だって言っているのにかがりとさよなんかは涙ぐんでいるし。

……僕の嘘でみんなにこうして負担をかけさせるんだったら、そもそも。

そもそも初めから僕は——みんなに会わないほうが良かったのかもしれない。

本当に……本当に、ただ初めのころ。

僕が幼女になって、僕がどう見えるかっていうテストをするためだけに出かけた先での相手がかがりとゆりか、ただそれだけだったんだ。

僕が「幼女でしかないけど成人男性が幼女扱いはイヤだから、せめて中学生くらいの扱いはしてほしい」とっていう変なプライドをくすぐられたばかりに言い出した年齢の設定——最初の嘘。

いいわけ。

いろんな設定。

ウソ。

嘘。

……言わないっていう選択もできるけど、できたら言っすっきりして——例え嫌われてもいい。

でもそれはただ僕が楽になりたいから癩癩みたいに投げつけるだけの意味のない告白。

それが分かる思考能力とヤケにならない理性があるからつらい。でも、それが僕なんだ。

この子たちに——こんな良い子たちに迷惑を掛けて申し訳はないんだけど、それでもこれが僕なんだ。

だから、万が一どうなっても良いようにっていう保険。

それを直に伝えられたんだから……今日は充分。

それに……少しだけ大人びた印象のみんなの顔も近くで見られた。だから今日は満足なんだ。

37話 別れはもう少しあとで 1 / 2

「……そう。 そんなにひどいのね、響ちゃんの病気……」

「うん……といっても命に関わるものではないけどね。 本当だよ」

そう言いつつ髪の毛をなでりなでりしてくるかがり。

ぶわつと僕の汗の匂い……甘い感じのそれが立ちこめる。

……いい匂いだけでもやっぱり汗の匂いっていうわけですつまりはかがりにも嗅がれることになるから止めてほしいんだけど、さつきから止めてくれない。

……やっぱりこの子、僕のこと年下の着せ替え人形って見てるよね？

「……すんすん」

「やめてくれ」

全力で引き剥がす……けど剥がれない。

元々腕力じゃ敵わないもんなあ。

でもこういうの、さすがの僕でも恥ずかしいからね……？

というかがりだけじゃなくなつて、なんでみんな僕の頭によく顔をうずめるんだろ。

やはり小さいからか。

みんなからするとちようどいいところに僕の頭が……きつとつむじとかが見えるもんだから、きつとついやつちやうんだらう。

ほら、ペットの犬とか猫みたいに。

ほら、僕の髪の毛つてモフリ甲斐ありそうだし。

「でも入院でしょー？ 大変そ——……」

「そうね……私たちにとっては重病ってイメージしかないわよね」

「……こうして出歩けることもあるんだ、たいしたものじゃない。

まあ駄目なときは動けないけども」

入院って聞くと大変って思うよね……僕だつて聞いたたらそうなる。

だから死にはしないって強く言っておかないと心配しちゃうだらう。

「みんなと会っていたころ……夏までは安定していて、秋は駄目で。

今は小康状態だけど、いつまた倒れて治療が必要になるか分からない、そう言われてね……もちろん命には関わらないんだけども」

「本当に……その、無理は。 私たちに会う……ために、無理とか」
じいつとメガネの中からのぞき込んでくるさよ。

……本当の病人さんな経験のある黒髪ロングさんから言われると
なんだか深刻に受け取られちゃいそうだな。

「だから無理はしていないよ。 許可……も得ているし」

こうでも言わないと……特にこの子はいつまでも不安なんだろう。
ごめんね、ウソついて。

「それに、これは本当のお別れじゃない。 もう会えなくなるという
わけでもなくて、また急にしばらく……次の日に約束をしていたつ
て急に月単位で突然連絡できないことも場合によってはあるから、そ
のためなんだ。 この前みたいな心配はさせたくないからね。 本
当にそれだけだよ、さよ。 チャットでも良かったんだけど……こう
して話せるなら直接の方がって思ってる」

「そう、………ですか」

思うところがあつたのかようやく引いてくれた黒めがねさん。

ただいつまでも言っていないかもしれないって思ってくれただけ
かもしれないけど。

……この子、心臓かなにかが悪いって言っていたいな。

手術も経験しているみたいだし。

だからこそ人に心配されすぎて困るっていう感情……理解してく
れたんだろう。

「直接会えなくても……許可が出さえすればスマホ越しにでも連絡は
取り合えるしね。 ただ、どうなるかは分からない。 急に僕が返事
をしなくなっても心配は無いんだ。 ただ、それだけ」

魔法さんのせいで今の僕……幼女のままで一切成長できないって
いう可能性とか、もっと先のなにかが起きる可能性。

そういうものを考えるとこのまま長期間顔を合わさないうちに自
然消滅するというのがお互いに楽なんだろう。

……でも。

年は離れているとはいえ、みんな女の子ではあるとは言っても……少なくとも時間をいっしょに過ごしたせいで、愛着……湧いちやっているからなあ。

「情が湧くと別れが辛い」って言うのは映画とかで良くあるセリフだけど、多分僕の人生で初めてくらいに経験している感情。

だから僕はこうしてこの子たちに今後連絡を取れるって言いたくなって、言ってしまったわけで。

でもどうせ人っていうのは顔を合わさなくなると次第に興味が薄れていくものなんだ。

学校を卒業して別々のところに通うようになったり、転校したり就職したりして、初めこそ前みたいな頻度でやりとりするけどそのうちにだんだんと忘れる。

そういうものなんだ。

僕は幼稚園とか小学校で転校したことがあるから分かる。

多分幼いながらに泣いたりしたし、しばらくは手紙とか電話とかしてたけど……すぐに忘れる。

人なんてそんなもの。

僕でさえそうなんだ。

だから僕が前以上に人前に出なくなっただけ、つまりはこの子たちとも距離を取ってだんだんと会わなくなっただけ……来年の今ごろにはもうお互いに過去の人になっていくだろう。

たまに思い出して「懐かしいなー」って言うだけの関係。

それは寂しいことだけど、もともとが嘘の関係なんだ。

だから、これできっと良いんだろう。

そのうち別れるって言うっておけば、直接会わなければ……連絡できずとも、そのうちに。

「そういう意味でのお別れだったのね？　響ちゃん」

「ああ」

ようやく頭に乗っていた重みとくすぐったさから解放された。

「でも響ちゃん、ひどいわー！」

「……なにが？」

いきなり耳元で大きくなるかがりの声。
不意打ちだったから耳が痛い、頭が痛い。
くらくらする。

……？
けど……なにかかがりのスイッチ入るようなこと言っちゃった

あれ？

こここのところはうまく回避して制御できていたって思っていたの
になあ……。

「いきなりだもの！ もうお別れだなんて言うからてつきりもう2度
と会えないのかと思つてしまったじゃない！」

「いや、きちんとそのあとに」

話を聞かないくるんさん。

「びつくりしたんだから！ 今みたいにきちんと順を追つておはなし
してくれていたらさつきみたいに驚いたりはしなかったのに！
ねえ？ そう思うでしょう!？」

女の子つて「みんなもそう思うよね？」つて口癖だよねえ……この
中でもかがりくらいだけでも。

「あー……まー、たしかにねえ……しよーがないって思うけどさ。

響も……あとさよちんもか、ときどき考えたこと省略して……こー、
ずばつと言うことあるからねー」

ほら、ちゃんとゆりかとかは聞いてくれるのにこの子は……。

「私もびつくりしたわねー。 なにせ久しぶりに……退院でいいの
かな、した直後にいきなりあー言われちゃあね。 マンガとかドラマ潰
けどとどーしても悪い方に考えちゃうわよねー」

ヒマさえあればドラマを観ているらしいりさりんが言う。

「……え……？ 私も……ずばつと？ ……え？」

……多分自覚が無かつたんだろうさよが僕の顔と彼女の手のひら
をあわあわしながら見比べている。

「……癖なんだ、済まない」

「まー響とかがりんの相性、会話的なのは壊滅だからねえ……普段は
響が合わせてるけどこういふときは大変そう」

ゆりかがとつても良いことを言っている。

「？」

でもかがりはそれに全然心当たりがないらしい。
だろうね。

僕ががんばってることだからね。

「……響ってさ」

ゆりがぼそつと言う。

「こう……男らしいっていうか……あ、さよちんもそういう傾向あるけどね？　なんていうのかね……あ、もちろん良い意味よ？　頭が良い感じの……すぐに結論まで考えられちゃう人になりがちな傾向っていうかさ？　わりと結論重視派っていうか……その、さっきみたいだったりさ。　テキストなこと話している最中にぼそつと大切なこと言ったりするからね——……いや、良いところでもあるんだよ？　私は好………きよ？　もち、ふたりのそーゆーところ」
なんか最後急につつかえてたけど大丈夫？

「最近はかなり減ってたけどねー。　なんて言うの？　話し上手になつた感じだったし。　ほら、初めのころとかよくかがりんのこと怒らせてたじゃん」

「……そうだったかな……？」

「そういえばそうだったかしら？　良く覚えていないわ？」

珍しくくるんさんと一緒に「くるん？」ってなる感じ。

「もー忘れてる……ま、当事者っていうのはそういうもんかねえ……でもさ、響も合わせてくれるけど私たちは平気な訳よ。　私とかさよちんならそういうのに耐性あるし、たぶんりさりんも部活とかである程度慣れているんだらうけどさ……かがりんは……その……うん………純粋な乙女だから」

「??　ゆりかちゃん、それってどういう意味なの？」

「や、わからないならいいんじゃない？」

脳みそお花畑ってことだよ？

……って言ったらさすがにかわいそう。

でも今のはお馬鹿さんってことじゃなくて、なんか周囲に花が生

えてそんな雰囲気ってこと。

ほら、夏休みお勉強とか思い出せばそんな感じでしょ？

地頭は良い方なのに、悲しいほどまでに夢想家って感じの。

「……突き詰めて言うとか感性の違いとか考え方の違いとか？ 脳の仕組みが男に近いかと女に近いかの違いっていうやつなのだよ多分。

ほら、最近授業でやったでしょ？ あんな感じ。 文系と理系とか

までは行かないかなあ……うーん難しい。 普段こういうのってグ

ループで分かれてるからなあ……まあけど簡単に言うとか個性ってい

うことで良いんじゃない？」

「はあ……」

「あ、ダメだ、全然分かってないや肝心のかがりんさんは……でも残念

かなー。 それじゃ響、今日のクリスマスパーティー来られそうにな

いねえ」

急に話が飛ぶ。

「……ん、今日はイヴだからつまり国内的には今日がクリスマス本番

か。

「そんなものが……？」

「うん。 だって『2度目の退院おめ！』な響へのさぶらいずの予定

だったんだもん。 だから響が食べられそうないケーキとか

……もちろんちっちゃいやつ買っておいたんだし。 けどそんなに

体悪いんだったら」

「そうよね、よくよく考えたらそんなにびっくりさせてしまうような

こと……退院したばかりの人にしてはダメだったわね。 もうっ、誰

が考えたのかしらね！」

「僕も夏みたいに元気だったら……何も知らなかったら楽しめただ

ろうけど。

「ありがたいけど、今は残念ながらそういう場合じゃなくなっちゃっ

たんだ。

「……ごめんね。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……あら？」

「……なんか寒くない？」

「暖房消した？」

「気のせい？」

「……サプライズにしようって主張してたの、かがりんじゃないっけ。忘れたの？」

「私はなんども……止めたんです、けど……さすがに危ないんじゃないか……って」

「あらあら？」

「あー、かがりなら言いそう。」

「素敵なパーティーをすれば響ちゃんも元気になるわ！」とか。

「……だ、だって！ 私たち、響ちゃんとまた会えるって思ったら舞い上がっちゃって思わずで！」

「かがりんが、したかったのよね？ まー止めなかったのも私たちがけどさ」

「うう……………はい……………」

「またいつものかがりの暴走だったらしいサプライズ。」

「そんなの普通にクリスマスパーティーだよって言えば良いだけなのに……本当女の子ってサプライズが好きだよねえ……」

「着せ替え人形にし始めたときから一向に変わる気配がない。」

「やはりくるんくるんメロンか。」

「……………ほんっ！ とにかく本当はね？ さよさんのお家のいちばん広いお部屋です予定だったのよ。もちろんご両親の許可もいただいたわ？」

「はい、私と同じような……………友だち、……………が、いるって言ったら。むしろ……………両親の方、から。……………まだそんなに悪いのなら仕方ありません……………けど、残念です……………」

「しゅんとなるさよ。」

「メガネが曇っている感じがする。」

「クリスマスパーティー、響の退院祝いでしょうってことになってみ

んなで準備してたんだよねー。 さぶらはず仕様は昨日急にかがりんが言い出したんだけど」

「飾りつけ、終わらなかつたわね……あと少しだったのに」

「それもこれもムダに派手にしたがるかがりんと凝り性なさよちゃんが悪い」

「だって！」

「……私、凝り性……え……？」

あ——……学校の文化祭とかみたいなのりだったのかな。

みんな学生だもんね、きつとそういうのは男女関係なく好きな子は好きなもの。

さよも乗り気だったみたいだし、きつと楽しみにしていたんだろ
う。

……気持ちだけは受け取っておこう。

「……………」

……そっか。

これが、サプライズが嬉しいって気持ちなんだ。

37話 別れはもう少しあとで 2 / 2

クリスマスパーティーなんてのはもはや想像上の存在になって十何年。

最後にそういうのに参加したのって……多分小学校低学年とかかもね。

僕も小学生のときはそこそ友達がいた気がするし、そういう子たちと誕生日会とか……したんじゃないかな？

よく覚えてないけど。

だってだんだん今みたいな性格になってそういうにぎやかなのは距離置くようになって行っただし。

この前読んだ記事によると、小さいころ活発で社交的な子供は大人になると静かに育つらしい。

真偽は不明だけど僕にとっては当てはまってる気がする。

子供のころってまるで別人だよ。

そういう意味でも今の幼女な僕は完全な別人なんだ。

でもクリスマスって子供にとっては特別なもんだから、父さんと母さんがいたときはイヴの夜とクリスマス当日、家で3人チキンとかケーキとか食べてプレゼントをもらっていた気がする。

いや、もらっていたんだ。

でもなんだかそういうのが恥ずかしくなってくる年頃にちやうどふたりとも居なくなつたから、それからは家で静かにテレビとか観ながら黙って普通にご飯を食べるだけになった。

まあプレゼントなんて中学生にもなればもらわないものだろうから良いとしても「世間はやたら騒ぐけど僕は別に……適当な映画でも観て過ごせば良いし……」っていうイベントになつたんだ。

だから家に置いてあつたちっちゃいツリーさえ出さなくなつてケーキなんて甘いものも食べなくなつて長い。

せいぜいその時期に買い物をして出かけて町のイルミネーションをなんとなく眺める、そんな程度だったもんな。

あとはクリスマス特集とかを適当に楽しんだりして。たった、それだけだった。

……あれ？

もともと興味なかったけど、それにしたってちよつと寂しすぎた？ 青春時代、青年時代としてはあまりにもさみしすぎない……？

ほら、普通の男女はカップルで過ごすって言うし？

……興味もなかったから嫉妬すらしなかったけど……考えてみたらものすごくもつたいたい時間だった気がする。

だって学校って言う場所で強制的に異性と知り合う場所で、せつかくのチャンスを僕から見なかったことにしていたんだから。

そうしてひとりぼっちで10年。

「……ん」

ふとみんなの視線が集まっているのに気がつく。

……ああ、さよの家で派手に飾りつけしていたって話だったっけ。

「響、戻って来た？」

「うん……でもそうだったのか」

口が勝手に動いたけどなにかそうだったんだっけ？

ああ、みんなでパーティーの準備してたって話か。

「そーだったの。けど今年はおあずけだねー」

「……君たちですればいいじゃないか。別に止める理由はないよ？」

「ケーキとかもつたいたいなし、さよちゃんのお母さんたちも居るからもちろんするよー？ けどなんだかさ……メインゲストが抜けちゃうとねー」

「……？ メインゲスト？」

「響さんのことよ、響さん」

りさりんが軽い突っ込みを入れてくる。

……そっか、そうだよな、確かに文脈的に僕のことか……。

あいかわらずの察しの悪さが悲しい。

これでも成人男性だったのにね。

やっぱり引きこもりとかニート経験すると経験値が貯まらないど

ころかマイナスになるんだらうか。

「さよちゃんのお母さんとかお父さんも楽しみにしていらっしゃったものね」

「……はい。私と、同じような境遇……だと、はりきっていました、ので」

くるんさんがさよにその重いものを2個とも載せている。

「あー、そうよねー。病気がちなひとり娘のさよさんの家にいきなり私たちが押しかける……いえ、大歓迎されたんだけど。その原因……いえ、この場合はきつかけかしらね、そんな響さんが来られなくなるもの。そりゃあがっかりするわねえ」

「ノリノリだったもんね、さよちゃんのご両親。『4人もお友だちが来るなんて!!』って。特にお母さんが。……さよもおどおどが抜けたら、将来あんな感じになるん？」

「え、えつと……それは……その」

「こら、困らせないっ」

「りさりんも浮かれてたくせにー」

姦しい談笑。

……クリスマス。

今日はイヴ。

別に恋人じゃなくなたって、家族とか友人……親しい人と過ごす日だっけ。

なぜにイヴに祝うのかっていうところで未だに僕の中では違和感があるんだけど、まあそういうものだしな。

「……残念ながら僕自身はそのパーティー、行くことはできなさそうだけど」

「ていうか私たちが止めるんだしね。ぶっ倒れちゃったらかわいそうだし」

「危ないからでしょ」

りさりんのツツコミが冴えている。

「や、だって響ってそういうの響自身はぜんっぜん気にしていないみたいだし。てことは外に出てあーなってもだいじょーぶっていう

お墨付きがあるからこそ来てくれたんでしょ？ 響ならそーいうの
律儀に守る方だし」

「……まあね」

「どっちかかっていうと倒れちゃったりしてそのまま病院に連れて行か
れたりしたらさ。 お見舞いにいざ行ったら『ああ、祝えなくて残念
だったな』ってこの調子で言いそうだし。 そうじゃない？」

「確かに響ちゃんならそうかももしれないわー」

「……そういうのに慣れている身としては……そう、言いたくなりま
す……よっ」

僕が結構分析されている中でさよは僕と感性が似ているらしい。

でも、今日はこの子たちと顔を合わせられた。

心配は掛けちゃったけど……でも、生きてるって見せられたから安
心もしただろう。

「……そのことも、サプライズパーティーをしようとしてくれたこと
も」

長居できないから告白のほとんどはおあずけだけど……足りない
くらいでちょうど良いんだ、きつと。

「僕をそれに招こうとしたくれたこと自体にも、とても感謝している
よ。 みんな、ありがとう」

「うひょー、かつこえー」

「こら、茶化さない」

「きちんとと言えるのは響ちゃんの良いところよねー」

「わ、私も見習わないと……」

ちよつと気恥ずかしいけども、この子たちに3ヶ月も心配させ続け
たんだ……ちよつとは我慢。

「……あ。 そういやさ、お別れだって言うけど」

いつも話題を切り替えるのはゆりかだ。

「入院しているあいだとか……病室がダメなら中庭とか外とかでもス
マホとか使えないの？ もし使えないんだとしても私たちが病室と
か知ってたらさ、お見舞いとかにも行けるし。 良いんなら教えてほ
しいんだけどなー」

「そうよね！ 響ちゃんとは連絡が取れなかったこの秋なんてずっと！ 響ちゃんにお家の電話番号とか住所とか、そういうのも聞いておけばよかったってずーっと後悔していたもの！ それにお見舞い！ 楽しそうよ！ ぜひ行きたいわー！」

ゆりかはともかくかがりは本当にもう……。

「……入院。 していると……退屈で、心細い、ですから。 自分だけ、世界から……取り残された感じがして」

「さよさん実感ごもってるわね——……。 ま、ほんのちよつと、誰かがときどきにでも顔出せば響さんも元気が出るんじゃないかなって思ってたね、みんなでいつか行きたいねって行っていたのよ。 どうかな？」

む……なるほど。

確かに入院と来たらお見舞いまでがセットだ。

でも実際には前の僕でも今の僕でも病院になんか縁はないんだし、それに多分またなるとしたって家の中だろうからお見舞いはできないんだ。

「……え、えつと。 とても言いにくいこと、なんだけど」

どうしようか……面会謝絶とか言ったらすつごく心配しちゃうしな。

「響が言いにくそうになるってことはもしかして『お家の事情』とやら、ここで出てくるん？ ほら、いつものやつよ」

「あ、ああ……そう、だけど」

……そう言えばそんなのもあったな。

僕的には3ヶ月すつ飛ばしてるんだけどすつかり忘れてた。

だから嘘つてのはよっぽど頭が良くなければ難しいんだよね。

「なんでかって、そりやすぐわかるよ。 響がそうやって困った顔になるのってさ、病気とか病院の関係の話とかお家のこと……家族のことだけじゃん。 普段私たちが聞きたいこと、さつきみたい……唐突なこともあるけど、でも先回りして結論から教えてくれたりするのに、そのことについて急になると急に申し分けなさそーな表情になるしっけ」

「嘘をつきたくないけど、でも本当のことは言えないしって感じよねー」

「それがミステリアスよねーってりさりんとよく話してるのよ」

「あらそうなの？ 響ちゃん、ミステリアス？」

「……………そうらしい、です」

なんか僕のことを僕以上に分かっているみたいなのゆりかとりさ、その少し後にさよ……………知り合った順番で言えば確かいちばんのはずなかがり。

……………うん、まあこの子はこれが良いところでもあるから……………。

「……………えっと。でも、あまり長話すると響ちゃんの体に障るし、ひととりの話も聞いたわ？ だからそろそろお開きにしないといけないわよね？」

「……………うん、そうしてもらえると助かるかな」

ほら、急に真面目になる。

やればできる子なんだ。

やらないのが大問題なだけで。

「……………だけど。もし具合がまたこの前みたいに悪くならなければ。

……………またこうして会っておはなしとか……………できるのよ……………ね？」

こうしてちやんと不安にもなる、ごく普通の女の子。

ただ少しばかりお胸に栄養が行き過ぎてるだけの子。

「そうだね、これくらいなら」

「……………そうっー！」

「前からこのくらい……………30分とか1時間くらいの外出なら平気だしな。体調さえよければもつとでも。夏もそうだっただろう？」

また魔法さんで冬眠しなければ、これから新しいなにかが起きなければ、だけど。

「……………だったらさー！」

はいはいっとりさりんが腕を上げる。

「今は退院したばかりだっていうのがあるからダメだけど、もう少しだけお家で休んでもらっててね？ 年越しとかお正月とかそういうのならどうかしら！ これから1週間あるしー！」

「お、りさりん、いいアイデアじゃーん？ そうだよね、せっかくイベントがぎゆうぎゆう詰めになってるこの時期なんだから、別に今日ダメだからってそこまで落ち込むこたーないんだよね！」

それに釣られる……きつとそうしたかっただろうみんな。

「そうね！ 少しだけなら。ほんの少し来週に会って少しでもお祝いできたら嬉しいわねっ」

「……念のため、人ごみを避けて……あとは、響さんに直接、その……車とかタクシーで、来てもらえば、そこまでの負担、では……ないと……思います。あるいは、その……どなたかのお家とか、でも」

「広さと歓迎っぷりからして、またさよちんのところになっちやうんじゃない？ でも毎回は悪いよねえ」

「でも他の家だとそこまで……5人だと狭いし。いえ、別に平気だけど」

「さよちんの家、すっごいからねえ」

「あ、でもりさりんとも」

「うちは年末年始忙しいから……」



「また連絡するから」「もし来られそうだったら来てね」とか。

「だけどもりはしちやダメ」だとか。

矛盾していそうदैいて、でもそれがきつと本心なみんなの言葉を聞きつつ外に出て、頼んでいた車に乗り込んで帰ってきてから……ベツドの上で、クッションの下で、だらんとしている。

……タクシーって今はアプリなんだな。

そんな変な感想しか浮かばなかった帰り道。

まあ10分くらいだし。

でも、僕……変わったんだな。

だって中学の頃から友達の家遊びに行ったり……そもそもその友達とやらでさえも作る気もなくて、10年近くひとり静かに暮らしてきたのに。

それなのに、それと比べるとたったの少しだけだったのに……ここまで、「今の僕」としての生活を手放すのが惜しくなっているんだ。

魔法さんが荒ぶるっていうアクシデントのせいもあって嘘とウソについて告白できなかったけど……でもまた会う約束はしたんだ。

それで今日は充分。

元々無理をしていたんだから。

嘘について言うのはもっと条件がそろったときまで待てばいい。

もう……伝えるっていうのは決めているし、そのための勇気も今日でしつかりとできた気がするし。

「……………」

ごろんと寝返り。

——僕と小さいもの同志とやらで、なんだかやけに古いものと新しいものが好きで、いつもおちやらけていて、でも人のことはよく観察している……距離を取ってくれているようで気がつく顔が近いっていうことが多い、ぱつっんぱつちりお目々なゆりか。

——そのゆりかにいつも振り回されているっていつつもぼやいていて、でもそれはゆりかに誇張しすぎだって言われたりしている、いつもちがうヘアピンとか髪型とかなおしやれさんで会うたびに抱きしめ……ハグされるとときにはみんなの中でいちばん、なんていうか包まれているっていう感じがする、りさ。

——みんなと話すのにだいぶ慣れてきているのか、さつき会った感じではつつかえたり言うのをためらったりはあいかわらずにしているけど、でも僕みたいに話しても聞き取ってもらえないっていうのがなくなっていた……いつもだぼとした服を着ていて、それがメガネと、さらに伸びた前髪とで雰囲気が出てきた、さよ。

——着せ替え人形にしてくるのとときどきのしかかってくるの外はだんだんとマシになってきたけど、いつも小さい女の子扱いしてくるっていう困った性格をしている……僕が女の子だっていう生きもの、それも中学生の……への立ち回りを実践させられる元凶となった、けど今ではちよつと感謝している……けどやっぱりもうちよつと距離を置いてほしい、かがり。

「そっか」

あの子たちは、とつくに友達なんだ。

あの子たちからだけじゃなくって、僕からも。

歳も性別もなにもかも違うけれど、でも——こういう関係が、友達。きつと、そういうものなんだろうな。

38話 「魔法」 1 / 5

「んくんく」

帰ってきたときにちょうど……スーパーに寄ろうか考えていたけどやっぱり止めて正解だったタクシーから下りた、まさにそのときに宅配の人が運んでくれていた重い箱。

こんな雪の日によく持つて来てくれるよね……「やっぱ今日は雪なのでダメです」って言われるってばかり。

もう隠れる必要もないからって玄関まで入れてもらって「こんなに楽なんだ」って知った。

冷蔵庫が空になったからいろんな物を買ったけど、その中で特に大切なもの。

おさけ。

お酒。

アルコール。

まとめて玄関に入れてもらったはいいけど、そこからひとつずつ開けてひとつずつ出しては台所へっていう難事業をこなして、その達成感で……つい。

やっちゃいけないってわかってるのに、けどまたやっちゃった。

夕方からのお酒。

なんか僕の中で無意識に「アル中にはなりたくない」って一線を引いていたやつ。

……3ヶ月前のおとといのでクセになっちゃったのかなあ……いや、1回限りだしそこまでじゃないはず。

そう思いたい。

けど始めちやったものはしょうがない。

もともとお酒呑んでもそこまで酔わない体質だもん。

たまーに朝とかお昼に飲みたくなるときってあったし……大丈夫大丈夫。

1回2回ならきつと……うん。

気がつけば片手で瓶を引きずり、それを目の前まで引き寄せてきた

ら両手で持ち上げてぐつとひと息、口の中へ。
いわゆるラツパ飲みというやつ。

幼女の身でやるには腕の力が足りないけど……めんどくさいし。

「……ぶはあっ」

とん。

少しだけ軽くなった瓶が音を立てる。

持ち上げたままどころか片手で持ち上げてることすらできない腕力だ。

たかが小瓶なのにね。

こうして両手で持っているときこそ何ともないわけだけど、片手にした途端に手首がぐきってなったりその拍子に落としたりしちやったりしちやいそう。

そんなのもつたいないし痛いかもしれない。

今の僕はそのくらいにはか弱い存在なんだ。

ふつうの人の何分の1か、それ以下の。

だって幼女だし。

◇

魔法さん。

僕にかかっている魔法のような呪いのような……よくわからないもの。

その良くわからなさ加減はまさにねこみみ病とやら。

でも世間で流行ってるそれとは決定的に違うんだ。

不可思議なのは確かなんだけど……ただの現象的なものなのか意思を持ったそれなのか、それもあいかわらずに分からないもの。

とにかくねこみみ病でもなくて他の誰にも……説明すら難しいこれ。

でも、もしかしたらこれ、時間が経つほどに、あるいは魔法さんが怒る……意志みたいなのがあらただけでも……そのたびに強化されるものなのかもしれない。

そう思うようになって来た。

だって初めは僕をこの僕にするだけで、せいぜいがハサミを飛ばしてくる程度だったしな。

不安だったからこそ何も起きないようにしてしてきたから分からないのもある。

「くくくくくくくく」

……いろいろと。

本当にいろいろと、ありとあらゆる僕がしてきたことっていうのがことごとく裏目に出ちゃったんだよなあ……。

どっちが良かったかだなんて分からないけども。

でも多分、底なし沼みたいな感じになってる。

いざってときに僕が男だって言えばそれでなんか解決しちゃう認識阻害的なものがオプシオンでついてるんだけど、だからこそ緊急性も無くなっちゃって。

……しようがない。

しようがないんだ。

だってこれまでこんな不思議体験するだなんて……僕とはほど遠い世界の話だけだって思っていたから。

誰だってそうでしょ？

子供のころに漫画とかに影響されるごく一部の時期を除けば、きつとほとんどの人はそうなんだ。

ぐびつとやって、とんつと置いて、ふうつとひと息。

……見知らぬ幼女な身の上は、多少の体重の増減以外には変わらない。

この姿でいること自体、魔法さんの魔法のひとつがかかりっぱなしっていうことでいいんだろう。

もう半年……いや9ヶ月か、それだけ変化なく続いているんだからこれについてはほつとくしかない。

特に不都合も……不便ではあるけどその程度だし、なによりどうにでもなっちゃうしな。

問題は……他の人の認識を無理やりねじ曲げたり僕の意識や体ま

でいじったりいきなり発作みたいになったり、果てには3ヶ月も冬眠しちやったりつていうやつ。

こういうのはいくら探しても……少なくともネットのどこにも存在しなかったんだ。

見た目が変わることについてならねこみみ病つてことでどこにでもいくらでも転がっているつていうのに、なにひとつない。

……でも不思議なことがひとつ。

僕が男だったりねこみみ病だったりを口にしたら何かしら起きるのに、こうして調べる限りにはなんにも起きないんだ。

言葉じゃなければ干渉してこない？

それとも他にまだなにか条件が？

……分からない。

でも、ネット上に一切情報が無いつて言うのは当然だつて思う。

仮に僕のようになった人がいたとして、明らかに超常的な現象に見舞われたとした人がいたとしたら……常識的な思考ができて、さらに家族とかの身内がいる人なら。

ネットに書き込む前にまずは身近な人と相談してそのあとにどうするかつて決めるはず。

他人とか病院とかを頼るのは、そのずっと後。

だつてとんでもないことだもん。

そんなオカルチックなことが起きたりしたら……そもそも他人には分からないかもだし。

僕だつたら隠す。

生きるのに問題がないんだから面倒が嫌で隠し通す。

本当に大変なことは表には出てこないし、出せないんだから。

世の中はそういうものだつて聞いたことあるし、多分僕ならそうするし。

でも……これだけいろいろ起きて調べて考えてもいまだに原因も目的も……どうすれば収まるのかも不明。

なんで僕なのかも、僕だけなのかすらもわかっていなくて。

いつまで続いてどこまで影響が広がっていくのかも、なにもかも。

「ひっく」

持ちあげるようなしやつくりがひとつ。

……一気に飲みすぎたかな。

けど、今の僕は魔法さんっていう未知の力……意思や指向性があるのかどうかもわからないナニカにこの瞬間、たった今も銀髪幼女になり続けているっていう襲われ方をしているわけで。

それで止めるような何かがないんならかえって安心するんだ。

「ぶへえ」

調べ続けて2、3時間、お酒も飲んで体も頭も心も疲れてきた。

「……わぶ」

ぼふつとベッドにダイブ。

あんまり勢いをつけすぎると枕の先の壁にごつつんしちゃうからちゃんと横向きのモーメントは抑えて、上から落ちる感じではふんと。

そしてぼふんとしてふわんとしてぼふつと、柔らかい布団の上に落ちる。

……3ヶ月で一気に夏物から冬物へ、雪空だから干すヒマもなくつてただただ押し入れから引っ張り出してきただけだからちよつとほこり臭い掛け布団の上に。

けど今はしょうがない。

夏に使っていた毛布だけだといくら暖房が効いていたって寒いんだしな。

「ふわあ……」

今の僕は体が小さくて軽いから今まで使っていたベッドだって相対的に大きくなっているわけで、つまりは多少ぼふんとするところがズレたとしたってなんにも問題はないわけで。

そして体がふわんと気持ちいい程度に浮かんで気持ちよく落ちるもんだから、こうするのがすつかりクセになっちゃって。

こういうの、いつごろからしなくなるんだらうね。

多分体が重くなってくるとしなくなるんだらう。

——足の裏がいつも着かないからってぶらぶらしたり、なんとなく

気持ちいいというか落ちつくから両手をおまたとふともものあいだに挟んで体重を掛けた姿勢をしていたり、前の僕じゃぜったいにできなかった、男の体じゃムリだった女の子座りってやつもベッドとかクッションの上ではよくするようになっていて。

ごろごろするときもなにかをしているときも、いちいち髪の毛を気にして。

スカートとかで外に出させられれば、急に吹く風とか階段とか座るときとかそういうときに自然と気をつけるようになっていて、手が勝手におまたかおしりを抑えるようになっていて。

知らない人とか店員さんから声を掛けられたり話しかけたりするときは自然と高めの声を出すようになっていて。

……女の子なのか幼女なのか、わからないくらいになっていて。

「うあ——……」

あたまがぐるぐるする。

……そうか、一気に飲むところなるんだっけ。

こういう呑み方しなくなってたから忘れてたよ。

「……………」

でも、多分これって逃避行動って奴なんだろう。

そう頭では理解してるんだ。

魔法さんが荒ぶっている今となっては明日を無事に迎えられるかどうかさえ……なんだ。

だってこのまま寝て、次にきちんと……10時間も経たないうちに目が覚めるかどうかというのに、保証がなくなったから。

当たり前だったものが無くなっているから。

小さいころとか「このまま目が覚めなかったらどうしよう」って寝る前に無性に怖くなったりした覚えがあるけど、あれが現実になったんだ。

……まあ死んだりすることはない……って思うけど。

この歳になると死ぬなら死ぬで「ま、いつか」って諦めもつくしな。

それにこれまで起きた、降りかかってきた魔法さんの仕業のどれも僕に直接危害を加えるものじゃない。

幼女の姿だってそれだけで直ちに困ることはないって……周りの人の認識を歪めるっていう形で保証されちゃっているんだし。

ただいろいろとめんどくさいだけで死ぬわけじゃない。別に痛い思いとかもしないし特段に嫌なこともない。

初めのころはそれを知らなかったからこそ苦労したわけだけど。ハサミだって……しよせんはただのハサミだし、しかも何度か試したけど結局僕が痛い目に遭ったことなんてなかったんだ。

ただ僕が髪の毛がある程度以上切るのを止めていただけだった。害意があつたら多分あの辺でケガとかしてたはずなんだ。

「……んむ——……ふは」

ずっと布団に顔をうずめていたら苦しくなつて来て、仰向けになつてみる。

「ぐるぐる——……」

天井がぐるぐるぐるぐるしている。

なんだかぽーつとするけど……残念なことに僕は、前の僕だったときから、かなり酔つたとしてもそこまで思考が止まったりすることがない。

だから酔いつぶれるっていうのが難しいんだ。

……どうせなら、アルコールに弱ければ僕の前までのいろいろなもつと楽だったかもしれないのにな。

そういう意味じゃお酒に弱い人って良いよね。

たくさん呑めないけど何もかも忘れられるんだから。

……いや、お酒飲めないのはちよつと寂しすぎる。

ちよつとどころじゃない、人生そのものを損している気がする。

だつてお酒だよ？

こんなに美味しいんだよ？

あの子たちにしてみればスイーツだよ？

やっぱりこれでいいや。

こうやつてもんもんと考えるのには慣れているんだから。

「んくんく」

あー、おいし。

38話 「魔法」 2 / 5

「ふ——……」

ばたばたとシャツの胸元をゆらゆら。

そうして昇ってくる僕の匂い……甘い体臭。

ミルクみたいな匂い。

ぐいっとお酒を飲んで少しぽーっとしてベッドでぐったりしていると暑いつて感じるんだ。

一気に顔までが火照ってくるような感じがして、せっかくあったかくした部屋が真夏のようになってきたみたいに感じる。

お酒のせいで一時的にそうなっているだけなのは普段の晩酌で知ってる。

だからもぞもぞとだるくなってきた体を動かしながら靴下を脱ぐ。

「……………すんすん」

ちよっとお酒で出てきた汗で重くなっている靴下。

今日買ったばかりのだし臭いはまったくにない。

というか普段も……夏のときも汗臭くなったことないしな。

本気で汗をかいてないからかも知れないけども。

脱ぎ捨てた靴下はそのへんにぺいっつて放っておいてぐるぐるしている天井を眺めながら、今日の昼間に起きそうになった冬眠について考え直してみる。

ひよっとしたら違うかもしれないけど……でも外で起きたら困るもんな。

でも……まずもってなんで3ヶ月とかいう長い時間だったんだろう。

もし魔法さんがねこみみ病について聞かせたなくなっただけ僕の意識を失わせるためだけだったらあんなに長期間にする必要がない。

魔法さんが仮に……どうしても僕をここ、家の中、あるいは僕がみんなと秋に約束していた出かける予定のどこかとか……範囲が広すぎてわからないけど、ともかく現実のどこかにいさせたくなかつたんだとしても「3ヶ月寝ててね？」っていうのはちよっつと強引すぎる。

まあ理由は考えてもしようがないし心当たりがあるようでもなさ過ぎて……しかも直前での心当たりといえればせいぜいがお酒なわけで、だから余計にわけがわからないんだけど。

まあさすがにお酒のせいで冬眠とかはないでしょ。

ないよね？

あつたらいくらなんでもしようもなさすぎるし……。

でも、3ヶ月僕は寝ていた。

眠ったまま起きなかった。

意識は夢の中だった。

9月の初めからクリスマス前日だから厳密に言えば3ヶ月半に近いけど、やっぱりこれだけの時間意識がないままなら脱水症状だけで3日持たないし、長くても1週間。

エアコンが入っていたとはいえ夏だったしな、もっと短いかも。

それにずーっと動かないんだ、寝たきりの人みたいに体がおかしくなるはずだし……足りないエネルギーを補おうとして体のシステムが勝手にせっかく蓄えた脂肪とか筋肉まで使っちゃうから、たとえばずーっと健康なまま寝ていられたとしたって……起きようとしても起きられないくらいには弱っているはずだったんだ。

つまりは昨日の朝を無事に迎えられて目が覚めたとしたって、まったく動けずに助けも呼べないっていう恐ろしい状況になっていたはず。

怖いけど、それが現実。

かろうじて手だけを動かして助けを呼べるはずの手元のスマホはとつくに電池切れで電話は下の階にあるわけで、つまりはどうしても距離があるっていうことになって、もしぎりぎり生きていたけど動けなくなっていたのならそこまでたどり着けないわけで。

まあ現実には3ヶ月飲まず食わず動かさず生きていられたんだからどう考えても普通じゃない。

異常だ。

成人男性が幼女になるくらいに……いや、どっちの方が上かな……異常なんだ。

だから僕は熊さんみたいに冬眠していて、体温をすごく落として新陳代謝そのものをすごくゆっくりにしてちよつとずつ足りないエネルギーをわずかな脂肪から持つていく状態だったわけで。

それなら意識がないのも……冬眠中の熊さんはずっと寝ていて夢の中にいるっていう状況的には合う気がするし、目が覚めたら……多量はだるかったりしようともきちんと体が機能して朝もお昼も夜も……朝は意識していかなかったんだからしようがないんだけど、お昼までしつかりとした固形物をいきなり摂ったのに胃とかおなかがやられることもないんだから。

多少体が重かったりふらついたりする程度、「なんだか具合悪いな」って程度で買い物にまで途中までは歩いて行けたりもしたしな。だから。

こんなに「あんまりにも都合が良い冬眠」を人間がしたってことで分かるのは——魔法さんは僕をどうにかしようってはしてないってこと。

意志がないものだとしても、呪いとかそういうものじゃないってことだ。

それどころか僕が困らないように他人の認識をねじ曲げてまで男女年齢を曖昧にしてまで生きて行けるようにしているんだ、きつと長期間寝たままでもなんとかなるようになっていたんだろう。

……年齢。

そう、年齢。

普段から幼女って意識してるほどに幼い体。

肉体年齢は統計的に、平均的に……認めざるを得ないけどぎりぎり小学生になるかならないかで、個人差っていうことでもりもりに盛って3、4年生、僕的にはそれでも認めたくなかったから5、6年生っていうのも……ムリじゃない範囲だとは思う。

でも、そんな僕が中学2年生っていうとんでもないサバ読みをしている。嘘をついてし出したんだ。

そんな嘘を……個人差ってレベルじゃないのに、今まで会った人た

ちみんなが信じてくれて普通の中学生みたいに接してくれる。

まあどの人も初めは疑惑の目で見てきて話しているあいだに……つていうのがほとんどだから、やっぱり見た目は幼女そのものなんでしょうな。

帽子とパーカーでいろいろ隠して男子みたいに扱ってくれるだけだしな。

少年も声変わりし出すまで、遅くて中3までは高い声でもおかしくないから……やっぱり子供って見られてるんじゃないか。

男か女か以前に、子供って。

「……子供じゃないもん」

もそもぞつて胸とお腹と太ももと足の裏でベッドのシーツの柔らかさを味わいながら机まで、腕を伸ばして結構無理な体勢でコップからお酒をこくり。

「……ふう」

子供扱いもしようがないよね、うん。

僕は寛容なんだ。

お酒を呑むと気分が良くなるから好きなんだ。

「ふむ……」

こうして手を上げてみると前の手が懐かしい。

浮き出た静脈とか関節の筋張りとか微妙に生えていた産毛とか……特徴はなかったけどぱつと見て男のだって分かる手。

でも今僕の目の前にあって腕の先にくっついているのは、そういったものが一切ないぷにっとしてすべすべしているちっこい手。

ちよつとだけ汗ばんでるちっちゃい手。

「……」

今まではぜんぜん疑問にも思うことがなかったけど、実はとっても不確かな状態なんだ。

明日をきちんと無事に何ごともなく迎えられるっていうのが本当に幸運だったんだなっていうのが、改めて身に染みてわかった。

そもそもが魔法さんっていう得体の知れないナニカに囚われているんだからな。

だから、これまでは単純に魔法さんの地雷をたまたま踏まなかった。

魔法さんが怒るなにかを、生活をそこまで変えなかったおかげで一気に溜めることがなくて少しずつしか溜めていなかったからこそ、半年くらいは無事に過ごせた。

「ふあう……………」

なんだかたまらなくなって枕に顔を突っ込んで抱きしめっぱなしにしてみたら枕そのものが熱くなってきちゃったから、ごろんと離れて天井を見る。

……やっぱり回っているように感じる。

ぐるぐるぐるぐる。

僕は酔っている。

普段とは違う酔い方。

そういうのもたまには良いよね。

だって今日はイヴだもん。

彼女とかはこれまでも居たことがなかったから大してさみしいとかは無いけど、どうせ多くの大人はこの時間帯はお酒を呑んだりしているんだから。

「う……………」

ぼんやりしていると、さつきまでしていたみんなとの会話が…………意識したくなくても思い出される。

……そうか、こういうものだったけ、日常のモヤモヤって。

昔は、子供のときは、学生ときは…………誰かしらと話したり楽しんだり失敗したりしていたときの僕は、こうしてよくその日の会話を思い出して楽しんだり落ち込んだりしていたんだっけ。

こんなに長いあいだろくに話してこなかったから、こんなのはもう忘れていた気がする。

なにもかもを放りだして、ただその日その日を楽しむ生活しかしてこなかったから。

……きつと平和にニートできていたのも幸せだったんだろうな。

「ふう」

さらにぼーつと見るともなく部屋を眺めていたらちよつとだけ落ちついてきたらしい。

ぐるぐるしなくなってきた。

だんだんと眠気がやって来る。

だって幼女の夜は早いから。

その気になっても深夜を越えることはできない体なんだ。

「……………すび」

……つと危ない危ない、寝落ちするところだった。

なんだか鼻から変な音が出ているのに気がついて時計をしてみる
と15分くらい経っている様子。

僕自身は寝た覚えはないんだけど眠気が取れているような気がするし、ぼーつともしなくなっているし。

……これだけ呑んだんだ、そりやあ出してから寝たくなるよね。

いや、このままでいいかな？

漏らそうとしてもどうせ魔法さんがなんとかしてくるだろうし
……いやいや油断は禁物だ。

漏らす程度はひとりさみしくぱんつとシーツを洗うだけだからつ
てどうにもならず盛大に漏らすかもしれない。

「といれ、といれ……」

みのむしみたいにずりずりと体を動かしながらベッドの上を移動
していく。

体が小さくなったおかげでベッドが広く使えるようになって嬉し
いんだけど、ベッドから降りるときとかにはあいかかわらずに不便。

世界が相対的に大きく広く高くなっているんだ、しょうがないんだ
けども。

おととい……3ヶ月前は今日以上に呑んで寝たはずなんだけど、で
もそれは魔法さんに襲われて冬眠したからっていう特殊な場合だか
ら当てにしない方がいいはず。

……男と女の最大の特徴として、日ごろから実感するようになって
久しいこれ……尿意。

耐えがたい、我慢しようとしても無理な、これ。

感じるのもすぐだしガマンできる時間が短くて「今いいところだからもうちよつと……」っていうのが失敗の元に繋がりそうな、膀胱とガマンするための筋肉の問題。

あとついでに歯も磨いていないし口の中がもやもやするしな。

「……………」

ふと思い、ぴたつと止まっておなかの中を意識する。

……そういえば僕は今女の子なわけで、つまりは体の仕組みも……病院とかで調べてこそいないものの、でも外から察するに——「中」まで女の子なわけで。

だから、たとえばこんなちつぽけな幼女だとしたって——膀胱は男のときの半分くらいしかなくて、その上には「子宮」っていう男としては想像もしたくないものが、僕のお腹のおへそのあたりにあるはずで。

まだ機能していないだけで、そのうちに機能し出せば内臓ってはっきりと分かるはずのそれ。

だからトイレが近くなつて、こんなに苦労しているんだ。

そしてもし仮に成長して、それが、子宮が……女の子としての機能を持ち始めてしまったら。

僕は——どっちとして生きてらいいのか分からなくなっちゃいそうだ。

人の心って言うのは脳みそが作り出したもので、その脳みそは体が動かしているもの。

だから子宮つてのが動き出して、おっぱいが膨らみだして女の子になつていったら……心まで少しずつ女の子になつちやうかもしれない。

でも男の子っぽい女の子も、男らしい女の人も居るわけだし必ずしもそうじゃない。

……僕はどっちになるんだろうね。

「……………」

さわさわ、さわさわ。

おへそのちよつと下を撫でてみる。

その内側にあるだろう、男とは絶対的に違う見えないそれを意識しながら。

僕は廊下で悶えていた。

「ふぐ……うっ……」

なんで僕ばかりこんな目に遭うんだ。

「うっ……ふ、ぐっ……」

本当に痛いときって声が出ない。

それが僕だ。

かがりとかゆりかとかだどちよつと痛くても叫ぶんだけどあれつてどうやってるんだろう。

「うっ……うっ……」

それにしてもひどい。

僕が何をしたって言うんだ。

そうやって廊下でうずくまることしばし。

ひとしきり適当なものを心の中だけで罵った僕は少しだけ落ち着いてきたけど、まだ丸まっている。

だって小指ぶつけたんだもん。

痛いんだもん。

「ぐす……」

涙ぐんでいるのに気がつく。

本当に痛いんだからしょうがない。

僕は痛いのが苦手なんだ。

なのにこの仕打ちはなんだ。

魔法さんもひどいじゃないか。

そうやって手当たり次第に文句を言う。

小指。

普段は意識しないくせにいざとなるとこんなに痛いもの。

前の僕だったらそれなりにぶついたりしていたけど、今の僕になつてからは……その、体のサイズ的にも視点の低さ的にも壁のコーナーのところとか家具とかそういうものが大きく見えるわけで、だからこういう問題は起きなかったのに……やっぱリアルコールって注意力

が落ちるんだなあ。

さつき寝落ちしかけたし。

それにしても痛い。

もういやだ。

僕が何をしたって……幼女のくせに飲酒したか、そう言えば。

「……………良かった」

爪は割れてないし赤くもなっていない。

本当にちよつとだけこつんってやっただけらしい。

そうして小指を確かめるためにしゃがんでいたら、ぽつつとしずくが床に落ちた。

「……………まさか……………」

出所を探る。

「……………ちがった……………」

……………目からだった。

急に痛みが走ってびっくりして、それでどうとうやらかしたのかと思っただけぞうというわけじゃなかった様子。

よく考えたらおしっこをがまんしている状態でしゃがむってというのは漏らそうとしているとしか思えない状況だ。

だってふとももをおなかに押しつけて、つまりは押し出そうとしているわけで。

危ない危ない。

この歳で……………幼児になってるけど漏らさないように気をつけないと。

脚や腕とは別に、ぎゅつと出口のあたりに力を入れつつ起き上がって廊下をそろそろと歩く。

ベッドからずると降りてそれから部屋を出るときに、もういちど迷ったんだ。

もうこのまま寝てもいいんじゃないかって。

でもやっぱりダメだ。

あれだけ呑んだんだ、水分が豊富に蓄えられていてそれが一気に下に来たとしても……………その勢いを抑える筋力も容積も長さも足りない

この体じゃ、こぼしてしまう危険がある。

漏らしてしまう危険性がある。

それはとてもまずい。

というか確実に明日の朝にひどいことになっている。

いくらなんでも肉体こそ少女になったとしたって精神は大人のままだ。

この年で漏らしたらさすがの僕でも……魔法さんとか嘘のこととかじゃなくても相当に凹むだろう。

だから僕はトイレに行っておかないとならないんだ。

そうは思いつつも歩きはどうしてもゆっくりというよりもよろよろとぼとぼという感じになる。

だつて酔っているせいで体の感覚鈍っているし……そのせいでぶつけたし。

あとのくらいで漏れそうなのかもいまいちわからないっていうのもあるしなあ。

漏らさないために踏ん張っているはずの僕のおまたの筋肉も本当はどれだけ耐えているのか、そもそもどのくらいピンチなのがわからないから。

とつきの痛みを感じてぎゅーっとしやがんでいる程度じゃ漏れないくらいだつていうのはさっきのでよーくわかったけど……やつぱり1回くらい漏らしてみないと限界って分からないよなあ……でも漏らしたくないしなあつて言うループ。

でも1回でも漏らすと幼女への階段を登っちゃいそうだから嫌なんだよなあ。

……今は急ごう。

なめくじみたいにすり足で壁伝いで歩いて確実に。

ああそうだ、トイレで出しておいたらお水も飲んでおかないとな。



「……………はあああ……………」

自然と漏れる声。

遠慮がいらぬ分いつもより大きいかもしれない。

しゃあああつていう水しぶきの音もいつも以上。

あいかわらずにすごい音。

男だったときにはよっぽどのがあつても聞くことのなかつた
シャワーのようになっていてこれ……ほんとすごい。

シャワーのノズルをひねると周りにしゃあああつて広がるモード
とまっすぐにびゅーつて出るモードがあるけど、ちようどあんな感
じ。

女の子はみんなこうなんだろうか。

気になるけど知りたくない気もする……もう彼女どころか結婚し
ていてもおかしくない年齢なのにどれだけ子供っぽいんだろうなあ
……。

いつものだけどそれの何倍か増しになっている、下の大洪水。

さつきまではぜんぜんまだまだ余裕だつて思っていたけど、座つた
とたんにこれだ。

やっぱり短いつていうか外に長さが無いぶん緩めるとすぐに出
ちやうしくみなんだろうか。

横着してあのまま寝なくてよかつた……じゃないとこの量だつた
ら……。

あるとき廊下でも無意識でふんばつていられて本当によかつた
……。

ベッドがびしょ濡れになるよりかはずっとマシだけど、でも逆に廊
下つていう毎日歩いているはずの場所でおもらしとか通るたびに思
いだしてトラウマになりそうだし。

しゃあああ。

それにしても止まらない。

いったい何十秒続いているんだろうか？

頭が回らないせいで、アルコールと寝そうになつていたので余計
にぼんやりしている今の僕にはわからない。

ひよつとしたら一分くらいかかったのかもしれないけどアルコー

ル臭が混じったおしっこを出し終えてほーっと気持ちよくなった。

ガマンしていたっていう膀胱が張り詰めそうでおまたの筋肉が踏ん張っていた感覚と、それをせき止めていたそれを、しゃーっと出していた感覚とが一気になくなってぽたぽたと落ちる程度になってきたら、今度は別の……生理的にイヤな感覚が襲ってきた。

「……………うわぁ」

……勢いがすぎすぎて太ももの裏までびっしりになっていた。

それも膝の裏の近くからおしりまで、もうまんべんなく。

まだほのかに温かいけどすぐに冷たくなるだろうこの感覚。

普段なら少し飛び散る程度で済むのにこんなになって……やだなあ。

けど、こういうときはビデっていう機能……母さんが使っていたとしても、それから最低でも10年は使われていなかった、この機能。

もちろん勢いは弱くして軽くおまたを濡らすだけにはなるけど……そのおかげで清潔な水を染みこませたトイレトペーパーを使うっていうのができるから、おしっこを拭いただけでいちどトイレから出てお風呂に入り直すっていう手間が省ける。

柔らかくて温かいお湯がおまたにかかり始めたらトイレトペーパーを重ねて取って濡らしてふとももの内側と裏側をきれいにする作業に入る。

もちろん1回じゃムリだけど何回か拭いたのを見ても黄色くなっていないし、どうやらきれいにできた様子。

……本来の機能じゃないけど、これはこれでお役立ちだな。

普段からしているからどのくらい濡らせばいいのかもだいたい分かるしな。

そうして水気を感じながら綺麗にしてもういつかから拭きして、ふと思う。

……女性は男よりもトイレトペーパーを使うって聞いていたけど、もしかしてこういうこと……？

いや、そりゃあ生理が……少なくとも今の僕はないけど、それなのに前に比べれば……とくにおしっこでたくさん使っているし。

たぶん毛とか生えてきたらもつと濡れる……のかどうかはわから

ないけど、とにかく成長してきたらもつと使うようになるはず。

……慣れて来てはいるんだけど、でも。

こういうときばかりはこんなことには絶対にならない前の僕の、男だった体が恋しくてしようがない。

男の体つてのは本当に便利だったんだ。

いろいろと、あらゆる面で。

女の子なんてちっちゃくてめんどくさいだけじゃないか。

「すつきり……ふう」

トイレから出た僕はおかげで酔いも一気に覚めた感じ。

緊張からの脱力で眠くなるかって思っていたんだけど、どうやら違うらしい。

それならあとはお水を飲んで、あとあと忘れていた寝る前の歯磨きももう1回。

ならさっさと下に降りて……あ、ついでに食器も洗っておいて、あとは部屋に置きっぱなしのコップとかを。

「……………え？」

視界がおかしい。

傾きがおかしい。

階段を降りようと思ってたのに、なぜか段が斜めになっていて壁みたいになっている？

なんで？

「……………あ」

いや、ちがう。

僕が斜めになっていて前のめりになっていて——ふわっと浮いた感じがあつて。

1度に情報が、回らない頭に意識に遅れて入ってくる。

そうしてさっきぶつけた小指に加えて中指くらいまでじーんとした痛みがあつて。

……まさか階段の手前かどつかでつまづいて……落ちそうになつてる？

「……………っ！」

もう、傾きの止められない。

できることと言えばとつきに腕を突き出すだけ。

それ以外にできることなんてなんにもないんだ。

ぼーっとしていたからいつもみたいに慎重に手すりを両手でつかむっていう、今の僕にとって必須な動作を忘れていたのかもしれない。

「わたっ、たっ」

まずい。

まずいまずいまずい。

転びかけているのに気がつけたはいいものの、もう間に合わない。

このまま下へ一直線だ。

いや、きつと顔とかおなかとか膝とかを階段の角張ったところに何か思いつきりぶつけて、バウンドしてくるくる回って——そして階段の下の踊り場の先の壁に激突して。

……頭とか背中から落ちれば、大ケガ。

体が軽いぶん打ち所がよっぽど悪くなければそれで済むはずだけど……でも無傷ということはないはずで。

それに軽すぎて変な方向へ飛んじやったらそれこそ危ないんだし。けど、こんなことを考えてる余裕はあるのに、体もそれを動かそうとするための反射神経も言うことを聞いてくれない。

アルコールが入っていてさっきまで寝そうになっていたから。

我慢していたおしっこをまとめて出して気が緩んでいたから。

そうして目が覚めた気になって、下を見ずにぼーとしていたから。

——足元がふらついてるってさつき分かったばっかりなのに。

小指を痛めてうずくまってたばっかりなのに。

どうしてすぐに忘れちゃったんだ。

いつもみたいに手すりにつかまって片足を下の段に下ろしたらもう片方も同じ段に下ろしてっていう子供みたいな降り方、この半年のあいだ今の僕になってからずっとしていた降り方をしていなかったせい——もう、止まらない。

受け身なんて取れやしない。

僕は運動とは無縁だったんだ。

ましてや今は幼女だし。

そんなことをできる瞬発力も訓練もしていない。

そうして僕は、僕の意識は正しく状況を理解していて……けど体のコントロールは利かなくて、でも汗はぶわつと出ていて。

なのに目の前はものすごくゆっくりと動いていて。

全てがスローモーション。

「死」を意識したときになるっていう、頭の中、意識だけが高速で動いていて周りがゆっくりになっていくみたいに見えるっていうあれ。

つまり僕は、僕の意識は……「死」を生まれて初めて意識、知覚して危機感を持っているわけで。

「……………」

どうにかしようって思ってたあがこうってしたけど、ふと「それ」に気がついちゃって力が抜ける。

——このままなら、楽に。

めんどくさいこともどうでもいいことももう経験しなくていいんだ。

ちよつと痛いって思ったらもう僕は居なくなっているんだ。

……僕には家族なんていないっていうひとりぼっちな中で、残りの数十年っていう長すぎる時間を……これもまたひとりぼっちで過ごすことになるのなら。

幼女のままでもいずれば不審がられて付き合いはなくなるし、幼女から女の子に成長しちやってもやっぱり身の振り方を考える必要があつて、男に戻れても……残りの人生をその辺に居る男って悲しい生き方をするだけ。

……………今夜はたくさん呑んだよな。

今日はみんなに会った。

昨日もあの人たちに会った。

3ヶ月前には昔の知り合いたちに、お隣さんにも会った。

——なんか、それだけで充分な気がしてきた。

「……………も、いつか」

こんなときでも口は動くんだ。
女の子だからかな。
そんな呑気な感想が頭をよぎった。

いつも見ている階段が斜めになっていて、僕の方に……まるで壁みたいにせり上がってきているっていう光景。

いつも見ているはずだけどいつもとはまるでちがう光景。

僕が落ちかけているから世界が変わって見えているんだ。

階段から落ちるっていう特に理由もなく……いや、理由といえばあるにはあるんだけど、でもはてしなく悲しい理由で落ちているから。

でも階段から落ちるっていう大変だって分かっているけども10年に1回くらいはこの家でも起きる事故はすぐそばだ。

ずーつと気をつけていた、身の丈に合わないサイズの階段を1段1段気をつけて降りるっていうめんどくさいけどもう慣れきっていたはずの作業を怠ったから。

忘れていたから。

アルコールと尿意と眠気のせいだ。

これから何ごともなく過ごせちゃうって思ったっていうのとおしっこを出し切れた安心感のせいだ。

少しずつ近づいてくる階段を、その先の床を、ぼーつとなすすべもなく眺める。

時間が細切れになっているような、そんな感覚。

スローモーション。

一時停止。

怪我。

死。

ふと思ひ浮かんだ言葉、概念、現象。

打ちどころが悪ければそうなるかもしれないもの。

幼女っていうことで体が20キロもないちっこい体で、だからこそケガをするにしたらってきつと軽傷で……運がよければ打ち身程度で済むんだって思っていて、その可能性の方がずっと高いんだってわかっていても。

どうしても最悪の状況っていうものを……いつものクセで考える。無駄にいろいろ頭を回して疲れさせるための習慣。

——死。

ある意味で救いで、僕の、唯一の肉親のいるそこへ行ける、それ。肉体から……この訳の分からない状況から解放される、現状で唯一の方法。

——死。

あの世。

空は水平線でぐるりと海と一緒になっつくついでにおんなじような青い色で、でも空の方は薄い水色が高いところまで果てしなく続いていて、海はもう少し濃い色とエメラルドグリーンとが混じっていて、ひとことと言えばとつてもきれいで美しくて。

潮の香りも波の音も海から吹いてくる風もみんななみならずもすがすがしくて、熱くもなく寒くもなくちょうどいい感じで。

島だつてどんな人だつて夢見ているような自然豊かで、でもきちんとなんの手が入っている程度のこんもりとはしていない感じの自然な楽園で。

きれいなビーチが広がっていて砂の粒はさらさらしていてゴミはひとつも落ちていなくて、海はしょっぱくって。

ああ、砂浜だけは気をつけないといけなかったんだ……けど靴だつてすぐに履いていることになっていたからあれはほんの一瞬だけのことで、だからなにひとつ心配する必要はなくて。

ヤシの木みたいなのがいっぱい生えていて落ちてきたら痛そうで、ぽつぽつと木とわらとでできた木陰で休んだりするためだろう建物があつて、風情があつて。

そこからはいくつかの丘や山、けどそんなにきつくもないもの、そこに道がきちんと敷いてあつてそこからの見晴らしもきれいで。

山のとつぺんからはビーチと町との両方が同時に見られて、とてもいいところで。

町だつてちらつとしか見ていないしなによりも誰もいなかったんだけど、でも独特の……木がメインだけど不思議な感じの金属が混

じっていたり斜めにくつつけられていたりして、興味深くて。

あの倉庫みたいなどころだつて、探検してみたらなかなか楽しそうで。

五感があつたぶん、まるでほんとうに理想の世界で。

厳密には誰もいないわけじゃなくつて。

黒あめさん、髪の毛が真っ黒で、けど日焼けして少し茶色がかったいた感じもする、話し好きで「お姉ちゃん」つて言つてほしがるアメリ。

元気な子、燃えるように透明な感じの赤髪の毛のタチア。

おどおどしていても安心できる輝く金色の髪の毛のノーラ。

そういう子たちが……僕の色違いつていう、想像力がないからかみんな顔も体つきも同じ感じで、けど僕とそっくりなのに少しだけ大きい子たちがいて。

ひとりじゃなくて、僕が僕であることに……嘘をついたりしてそれを誰にも言えなくてこうして悩んだりしてきても良いつていう……そんな、夢みたいな世界。

探せば……ひよつとしたらまだそのへんをうろろして意外とあの世を満喫しているかもしれない父さんと母さんだつて……僕を待っているのかもしれない。

つまりは冬眠つていうのは、僕がそこへ行くための。

死つていうのは、そのための。

………うん、知ってる。

死後の世界なんてないつて。

少なくともいろんな本を読んだ僕はそう結論づけている。

臨死体験とかもみんな脳みそが危機を覚えて作りだしたもので、死んだらそこまで。

パソコンとかスマホの電源が入っていない状態になつて、そのまま処分される感じで。

でもあの夢を見て思うんだ。

感じるんだ。

もし死後の世界つていうものが、あの世つていうのがあんな感じ

だったとしたら。

こうしてぐだぐだとひとりで悩み続けてこの先何十年もひとりぼっちでただただ生きていくよりも、いつそのこと死ぬのも悪くはないかもって。

『響ちゃん、次はこのお洋服着てみましょう！ これも似合うと思うの！』

『ひびきー、助けてえー。 どーあがいても伸びるどころか縮んだー！！』

『響さんって不思議よね。 あのゆりかにごここまで懐かれてるなんて』

『……病気があっても……自分の思うように生きたいです。 響さんのように』

——いや、まだだ。

まだあの子たちに、ほんとうの意味でのおわかれを告げていない。

結局あのままにお開きになって「それでもまだ会ったりはできるよね」で終わっちゃった、あの子たちに。

友人として意識して、まだ1度も。

たったのついさつきに会ったときに意識したばかりだけでも。

それに「まだ大丈夫だったら」っていう条件付きではあるけど。

年越しで会うことを約束しているんだ。

新しい未来の約束、予定……しなきゃいけないこと、したいことが何年ぶりにあるんだ。

1回……いや、ただでさえ秋に予定していたたくさんの約束を破っちゃったんだ。

これでまた破ったり死んじやったりしたら、本当の意味で約束を反故にすることになるなんていうのは。

とても、



◆◆◆◆◆ちりちりちりうるさいけど、今はそれどころじゃない。

あの子たちにこのままもう2度と会えなくなるなんて。

せつかく僕のことを……10年くらいぶりに、ずいぶんと年下の女の子たちではあるけど、でも友人として見てくれたあの子たちにきちんとしたおわかれもせず「約束」も果たさないまま、このまま終わるなんて。

◆

◆

◆

◆◆◆◆◆……うるさい。

僕は今、考えているんだ。

こういうときくらいは静かにしてくれ。

「……………」

ナニカがずっと離れて行く感覚がするけど、そんなのはどうでもいい。

このままは嫌だ。

嫌なんだ。

ただひとり孤独に死んで……誰も僕の家を知らないから当分は気がつかれない。

冬場だし廊下には暖房も効いていないし雪の時期だから相当気がつかれない。

お隣さんも僕が嫌がるからってここ何年も家に様子見に来たりはしないし、電気も点きっぱなしで無事に過ごしているって思うはず。

それに僕は思いつきでふらつと、何年も前からひと月ふた月は旅行とかで平気でいなくなるし、しかも冬眠のせいで最近に3ヶ月もいなかったことになっていったんだ、しばらく姿を見せなかったとしてもきつと不審に思いやしない。

だから何ヶ月かって叔父さんが……メールでの連絡に返事がないからって初めて気がついて家を訪ねてきたときに初めて——前の僕でもなくって今の僕っていう「正体不明の誰か」が廊下の下でホネになっっているのを発見する。

いや、ひよつとしたら死んだら魔法さんも離れて行って前の僕の亡骸だけが残って——「僕」が死んだってというのがわかるのかもしれない。

けど、それはどうでもいい。

それよりも、誰にも僕がこの世からいなくなっていることにすら気がつかれないままで、このまま終わる。

終わってしまう。

僕は、そんなのは嫌だ。

だってなにもかも中途半端過ぎるじゃないか。

なにより僕はあるの子たち……友だちにまだ、嘘のことをひとつも話していない。

怒られてさえない。

謝ってもいない。

許されるかどうかはわからないけど、でも事実を伝え切れていない。

僕が「中身は男だ」って。

それも「君たちの倍くらいの歳」なんだって。

でも……友だちとして見てくれてとても嬉しかったんだって。

騙してごめんね、そんなつもりじゃなかったんだ、でもありがとう。

死ぬのならそれくらいは言っておきたい。

なにも見えない。

体の感覚もなくなっている。

きつと思いきり打ち付けた痛みを遮断しようとした僕の脳みそが今だけはぜんぶをシャットアウトしているんだろう。

そういうのを事故に遭った瞬間の回想の話とかで耳にしたことがある。

だからきつと今の僕はあちこち痛いはずで、あとはうまく頭と顔を守れるかどうかなんだ。

なるべく頭を抱えるようにして体を丸めて少しでも守らないと。

目の前がざあつと切り替わる。

アメリカが僕をぶんぶん振っていて、その遠くでタチアとノーラが走ってきていて、さらにそのあとから具合の悪そうな顔つきをしながら——今の僕を何歳か成長させたような顔つきと体つきをしていて、けどまだまだ中学生を出ない範囲の幼さで、体も少しだけ女の子っぽいのが脚つきからわかるけど、でもだぼつとした硬めの生地 of 服装のせいで、それがわからなくて——けど顔ははつきりとわかって。

……髪の毛は光に照らされてきらきらと銀色に輝いていて透き通っていて。

重そうなまぶたを限界まで見開いて、その奥の薄い瞳が僕とぴたと合つて。

つまりその子は僕をただ何年か過ぎさせたような成長させたような姿そのまま。

聞こえるように聞こえない、けど声は僕よりもいくらか大人びている感じで。

その子／ソニア／「響」／僕／「僕」からなにか銀色の光が、僕の方へ向かってきて。



僕は、銀色の◆／星に、包まれた。



「？ ……さつきちゃん、何か音したかしら？」

「……………ううん。 なにも聞こえなかったよ、お母さん」

「そうかしら……雪でも落ちたのかしらね。 響くんの家、雪かき必要かなあ」

「……………きつと近いうちにするつもりなんだよ。 響お兄ちゃ……………響さ
んだから」

「……………けほっ……………」

なくなっていた音が……………なんにも聞こえなかった耳が、次第に戻って来たらしい。

「けほ」

僕の荒い息づかいも心臓がぼくぼくしている音も、それはもううるさいくらいにちゃんと聞こえる。

体も温かくなってきてぬくもりがあって指の先や耳までぼかぼかしている。

そうしてぶわつとあふれてくる汗。

何が起こったのかが分かって、止まっていた思考が動き出したからなんだろう。

「…………………………」

ちりちりっという魔法さんの……………いや、あの夢の中で感じた感覚はもう居なくなっている。

銀色の◆／星みたいだったあれも、もう……………すうつとどこかに行っちゃっている。

なにもかもがきれいさっぱり消えている。

五感に戻っているけど、どこにも変なところはない……………らしい。

「ふ……………ふ……………」

耳を澄ませているとだんだん僕が息をしている音だけが聞こえるようになってきた。

手や足に気を配ってみると思っていたとおりの……………しなきやっと思っていた卵みたいに丸まっている姿勢な様子。

とっさの受け身なんて無理って思ったけど……………体が軽くなって邪魔するものが無かったからかちやんと丸くなれたらしい。

そしてときたまぱらぱらと何かがはじけるような落ちるような音。

……………なんともない……………痛くも何も……………？

そろそろと目を開けてみる。

入って来るのは僕の腕。

感覚のとおりに頭を守ろうとしてぎゅつとしていたらしい……筋力が足りていないからかぶるぶると震えている僕の細い腕が見えた。ゆっくと、折れたりしていかないか確かめるためにことさらにゆっくと腕を下げてみる。

……大丈夫、なんにもなっていない。

その腕を動かして頭を触ってみるけど痛いところもないし血だつて出ていないし、たんこぶですらない様子。

今のところは。

事故とかに遭うとその日はぜんぜん平気なのになってことが良くあるらしいから油断はできないけど。

髪の毛が目の前に散乱しているけど……ちよつとびつくりしたけどそりやそうか、だつて2回から飛んできて1回に着地、したんだもんな。

髪の毛だつて釣られて動いて僕の前のほうでばさあつともなる。

……こういうどうでもいいことを考えられるくらいには思考は正常で、少なくとも今のところ……アドレナリンがどばどば出ているからかもしれないけど、でも体も動かせて、少なくとも折れてはいない。

……最後にちらつと見えたけど、たしか僕は頭から下に突っ込んだんじゃ……？

なのはどうしてこんなにきれいな姿勢で。

「…………ふむ」

もうちよつと体をぐねぐねしてみる。

ぱらぱらぱちぱちと、やつぱり……なにか小さいものが落ちるような、そんな音がする。

……でも、首も肩も、背中もおなかも、腰もおしりも脚も……あ、ぶつけた小指だけ痛いけど、でもそれ以外にはどこも痛くもない。

そろそろと体を起こしてみる。

……打ちどころがとてもよかった……？

そう思つて一瞬油断した僕はびくつとなる。

「…………ひうあつ!」

やだ、変な声……こつと頭になにかが落ちてきて死ぬほどびつくりした。

これまた反射的に頭を抱え込んで、気がついたときとおんなじような姿勢を取っていた。

2度目だからかそれは見事な卵になって。

……こういうのって小学校のころの避難訓練とかが身に染みているんだろうか。

けど別に痛くもないしじーつとしていてもなにも起きないみたいだから、今度こそゆつくりと体を起き上がらせてみる。

「……あ、あー。……問題なし」

声も出せる。

それが聞こえる。

おしりは下についたまま首と腰をひねって後ろを見てみると僕がうずくまっていたのは踊り場、ちょうど落ちるとしたらって思ってた場所で、さつき転げ落ちたはずの階段もしつかりと見えて。

僕はなんともなかった？

実際にどこも痛くもないし血もなにも出ていない。

けど、今こつんと落ちてきたのは？

なんだか体じゆう……髪の毛とかにいろいろと乗っかっているなって思っていたうちのひとつをつまみ上げてみると、それは薄っぺらい素材のなにかだったり、あるいは木の破片だったり。

「……壁の、もくざい？」

剥がれ落ちたもの？

そう思っ僕がぶつかったと思しき踊り場の壁を見あげてみると「まるでなにか大きなものを横向きに落としかのよう」——ちょうどこの前に測ったときの体重の20キロっていう重さ……よりもずーっと重くて硬いようななにか、そんな感じのものがぶつかっただうな、そんな亀裂が入っていてへっこんでいて。

ぱらぱら……ってときどき欠片が落ちてきて中の建材がむき出しになっている。

「……こわ」

なんだか怖いから脚に力を込めて少しずつ起き上がって、ぱらぱらと僕の体から破片みたいなものが落ちる音を聞きながら立って様子を見る。

それをもうちよつと遠くに離れて……だって危ないし……見ようとしたら足元がごつごつしている。

「？」

なんで？

そう思っただけで足元を見た。

見てしまった。

「びいっ!？」

いつぞやに聞いた覚えのある変な声。

汗がぶわつと指先までじわつと出てきて「危ないかも」ってわかっていても反射でぱつと後ずさる僕。

……木の床だったところ……踊り場ってやつ、階段の下の床だったところ。

毎日何回も踏みしめていて、目をつぶったって1階と2階を往復できるくらいには慣れ親しんでいた、階段を上り下りするための最初の段。

——それがクレーター状に壁よりも大きくへっこんでいるんだから。

めりこんでいるんだから。

ちようど僕くらいの大きさに丸く、卵のように。

何か見えない楕円な球体に押し潰されたみたいに。

木だつてもちろんひしゃげるところか……あちこち裂けて折れているし、その下からはなんだかよくわからない白っぽい素材のなにかが顔を覗かせているし。

「びいっ……」

……たとえこれが僕が落ちた衝撃で、家が古いせい——いや、それでも壁と同じようにおかしい。

だって、たかが20キロだ。

子供の体重で子供の体の柔らかさだぞ……？

そもそも一回壁にぶつかっての落下だろうし、落ちた衝撃で……落下モーメントっていうやつでこうなったとしてもそれにしてもそれにしても派手にすぎた。

裂けていない木なんかはぐんにやりと曲がっているし。

むしろ僕の方がずっと柔らかいはずなのに。

なによりこれだけの被害をもたらしたはずのやわやわな僕の体は、このとおり……とっさに動けて声が出るくらいには、痛いのがさっきの小指から中指くらいしかないくらいにはなんともなくって。

……明日どこかが痛くなったら病院行こう。

大丈夫、不審に思われる前に魔法さんで認識変えられるから。

今は分からないけど……でもなんとなく、根拠のない「僕は傷ついてなんかいない」っていう絶対的な自信があつて。

ということとは——これもまた魔法さんのしわざ。

あるいはおかげ。

それしか考えられない。

僕が運良くバウンドしてケガをしなかったとしても家がこんなにぼろぼろになるはずがないし、木材が経年劣化で……築20年経っていないのに……って思うけど……そうだったとしてもこんなにぼろぼろになってる時点で僕の体も同じくらいぼろぼろになってなきやおかしいんだ。

今度こそ裂けた木のとげとげとかでケガをしないようにそろそろとそこを離れ、無事な廊下についた僕は……そのまま脚の力が抜けて、ぺたりと。

普段からよくしているように、クセになっちゃったいわゆる女の子座りに両手を真下に下ろす感じにして……なんだか安心するからつてふとももの内側で両手を抱え込んでぎゅつとして、あつたかくなつて。

……腰が抜けた感じなのかな、これ。

よく分からないけど……どこも痛くない。

落ちてから数分は経っているはずだけど、だから落ちたばかりのときの興奮はとっくに収まっているはずなんだけど、でもそれでも痛

くもなんともない。

明日にならないと分からないんだけど、たぶん僕は……あんなにも憧れて、けどやっぱり心残りがあるからって戻って来たけど、でも――「死ぬ」ことすらできないのか。

魔法さんのせいだ。

魔法さんのおかげで。

今までさんざん僕をもてあそんで振り回して苦労させられた、その存在。

「……ぼくを、どうしたいんだ」

呟いても当然に答えは返ってこない。

……僕にはもう、本当にもうなにひとつ分からない。

魔法さん。

それは僕をここに……この得体の知れない体に閉じ込めるものなのか、それとも僕を助けるものなのか。

それともなにか別の。

「……………もう、いいや」

どうしようなんて考えるのもばからしい。

体の力を抜いて床へ寝そべり、こつんと頭を床にくっつけてひんやりする。

もう、どうでもいい。

いちいち魔法さんについて考えるのも落ち込むのも……もう、疲れた。

緊張が解けたからか一気に眠気が襲ってきて、今度はお酒のせいじゃない自然な感じの眠気が舞い降りてきた。

……もう、このままここで寝ちやお。

落ちていたときの緊張とさっきのとで火照っていた体が、ほっぺたが、ちょうどいい冷たさの床にへばりついて気持ちがいいし。

だんだんと心臓が落ち着いてきて息も収まってきて、ほんの数分で僕は元に戻る。

何ごともなかったかのよう。

家をこんな破壊したとは思えないほどに。

「……でも、夢じゃない
ここは現実。」

僕は—— やつぱり、永遠に幼女なんだろうか。

なあ。

「うーん……」

でもとりあえずこの人混みからあの子たちを探す作業が始まる。

みんなに誘われて来た年越しと初詣のための神社で。

今夜はできたら朝まで起きていたいって言っていたただの飲み会……じゃないよな、中学生だし……年越しを遊ぼうっていうだけかもしれない。

学生にとっては夜更かししても怒られない唯一って言っているらしいの機会だもんな、はしやぎたくなるのも無理はないよね。

年越しそばとか以外にもお菓子とか用意しておいて、お酒……が無いは残念だけどトランプとかゲームをしたりテレビを観たりして……お酒がないのはものすごく残念だけでも。

今日は大みそか。

夜には交通機関は止まっている。

そもそもまだまだ雪が残ってるからバスとか動くかも怪しいしタクシーも捕まるかどうか分からない……そうだからってある伝手で回してもらったさっきの車だ。

あの人たちに送ってもらったから体力は大丈夫。

だけど人が多すぎてみんなを探せない。

そもそもが夜で暗くって、神社の境内って言う普通の場所よりもさらに暗い場所なわけで……空だってなんだか曇っているしかなり暗い。

時間はだいたい合っているはずだからみんな引っ込んでいっているっていうのはないんだろうけど……僕の身長的にかなり大変な作業になりそう。

……見つからなかったら諦めて帰りたくなりそう……ほら、僕って一時期対人恐怖症も群衆恐怖症もあったから振り返したら困るし……。

ほとんどの人が僕よりも背が高くて……それだけならまだ普段出かけるときと同じだからいいとして、問題はお行儀よく年越し前の参拝で5、6列くらいに並んでいることだ。

だから人がぎゅうぎゅうになっていて壁みたいになっちゃって、反対側を見るためにはこの長い列をひたすら戻って境内の入り口との往復。

わざわざそのどこかを「通ります……」っていいながら通してもらうなんていうのは僕にはできない。

できたら苦労はしないよね……そもそも声が届くのかどうかさえ怪しいんだし。

気が弱い人間の宿命だ。

あとそうなるかどうかしても見上げなきゃならなくなるわけで、つまりは顔が見られて目立つっちゃうわけで、この姿だどうしても……どうしても、これはもうしょうがないことなんだけど、でも必ず一瞬「え？」って反応されるからあんまり好きじゃないんだよなあ。

つくづく普通の男だった前の姿が恋しい。

目立たないって素敵。

だからなるべくなら他人と顔を合わせたくない。

それの上を見上げたらコートのフードを被って顔を隠している意味がなくなるんだし。

いくら魔法さんのおかげで不審に思われなくなっているっていつでも、でもやっぱり注目されるのは僕の性格的にイヤなんだ。

いやなものはいや。

生理的に無理。

無理なものはどうがけないよね。

そういうわけであるべくなら顔を隠しておいて「なんか小さい子がいる」程度の認識で気に留めないでほしいところ。

「……でんわでんわ」

電話は苦手だけどうがけない。

この歳になってもどうあっても電話が苦手な人間なんだもん。

みんなが待っているっていう建物がこの並んでいる列のどっち側にあるのかって聞くのを忘れた僕のミスだしな。

「あ、響ちゃん！」

おや？

「今日、無事に来られたのね！ よかったわー！」

「かがり。……さつき連絡したじゃないか、今日は行けるって」

「でも、心配だったから。ね？」

「……うん。この前は心配かけた」

いつものくるんが服に合わせてすごい感じにくるんくるんしているくるんさんもといかがりと目が合ったからそのまま近づいていく。

あいかわらずでかい。

身長も含めていろいろと。

くるんくるんくるんの中にはいくつかの髪留めも着けていて、なんというか盛っているって感じになっていてとにかくド派手。

そしてくるんくるんくるんの下には着物を身につけている。

もちろんコートは羽織っているけど……着物つとつても重そうだなあ。

メロンさんのメロンさんたちがすごいことになっている。

「やつほびびぎー」

「ゆりか」

「……おー、聞いてたとおりちよつと顔色よくなった？」

「まあね、ずっと寝ていたし体力の温存にも尽くした。ただ、まだ瘦せたのまでは戻っていないかな」

何しろ3ヶ月の冬眠だからね。

ほとんど熊さんと一緒なんだ。

気が立ってないだけありがたいって思ってたほしい。

「まー、たった1週間でももんね……体力はともかくさ。焦らなくてもきちんと食べていたらきつとよくなるよ。でもまあ足取りもしっかりしているみたいだし、いやあーよかったよかった！ 今日来てもらえて。久しぶりに5人揃うんだもん」

くるんさんの影もとい身長に阻まれて見えなかったゆりかもまた着物姿。

ぱつつんもなんだかいつも見ないような感じにセットされているし、後ろの髪の毛も短いなりに……たしかこの前は肩に掛かっていた

から決して短くはないんだけど、でも他の子と比べると短い後ろの髪の毛も頭の後ろで結っていてまるで半ポニーテールな感じ。

半ポニゆりか？

「……心配かけたね、ふたりとも」

「そりやもー、心配はしてたけど」

「私も大丈夫……だって思ってたけど、でもやっぱ不安だったわ。また響ちゃんが……その、倒れたりしちゃって来られないのではないかって。それかお母さんたちから止められるのではって」

いけない、くるんさんの情緒が不安定になってきている。

くるんさんはなるべく可能な限りに精神状態を安定させておかないとなにを言いだしてしでかすか分かったもんじやないっていう恐ろしさがあるからな……きちんと言っておかなければ。

「……あれから一回もあのような発作も起きていないんだ。それにきちんと食事もできているしずっと横になっていた。だからかもしれないけど、おとといあたりからはすごく安定しているんだ。だからこそ今日こんな人ごみに、それも夜に来るのにも許可……もらえたんだし。帰りが深夜でも朝でも問題ないそうだ」

特別な伝手で召喚したさっきのスーツの人たち、タクシー代わりな人たちが朝まで居てくれる約束になっている。

イヴのあの日から準備してた、この日のための移動手段。

万が一に魔法さんがやらかしてもなんとかなるようにするための、あの人たちに頼んであるあれ。

「ふーん、よかったねえ」

「でも響ちゃん、普段は早く寝てしまうのに今夜は大丈夫なの？」

「あー、そっちの心配もあったかあ。響、見た目どおりに寝るの早いもんねえ……夜型の私としては夜こそにオンの人の多い時間帯にオングーのバトルとかダベリながらマンガとかしたいのにな。ま、ちっこいんじゃないかな。こんなんだから背が全然……」

夜に眠くなれないのか。こんなんだから背が全然……

おや、ゆりかもちよつと怪しくなっている。

背が低いコンプレックスは根が深いらしい。

でも……小さく見られれば園児な僕と、同じように見られたとしたって小学生高学年なゆりか。

差は歴然としている。

「……ふっかつ！ 今日はおめでたい日だもんね！ 私たちもお昼寝したしばつちりばつちり！」

「ええ。だって今日は夜ですもの、オールナイトですもの！ いちばん遅くまで起きていて、できたら夜明けも見たいの！」

今日は曇っていて初日の出は見えないって言うけどね……まあ無粋なことは言わないでおこう。

「私ならしょっちゅう夜更かししてるし別に徹夜くらいよゆうだけど……この中で心配なのは響とさよちんだろーね。ムリはダメなのよ？」

「りさちゃんの二両親からの差し入れで眠気覚ましの飲みもの、いっぱいもらっているの」

「うん。けど、たぶん明け方までは大丈夫かなって」

あれ以来……冬眠から覚めて猫島子さんとあざとい岩本さんのときのあれと、この子たちと会ったときのあれ。

あとは未だに階段の下がすさまじいことになってるあれ。

それ以来ぴたつと静かになったから実に平和な一週間だったんだ。階段のたびにおしりがひゅんつてする以外には。

それはまあともかくとして……このまま続けばいいなって思うくらいには平和。

もうなんにも起きないんじゃないかって思っちゃうくらいには。

「……響？ クリスマスの時は……その、なんていうのかな。生気がないってゆーか、存在感……存在感薄いつてゆーかそんな感じで印象だったからねえ。今日だって来てもらったってしてもまだあんな顔色してたら、みんなであいさつだけしてちよつとだけしやべつてちよつとだけおそばでも食べたら年越しの前に帰ってもらおうかって相談してたの。みんなで。だけどよかった、杞憂でさ。ね、かがりん？」

「ええ。響ちゃんっていつもそうなんだもの。私との買い物とか

かなり辛そうになるまで疲れたとか休みたいつて言ってくれないものね。私、響ちゃんの体のこと知らないときに響ちゃんの具合に気がつかないで振り回してしまったものだから今でも後悔しているのよ……」

「あのときはまだ体も良かったし、気にしなくてもいいよ」

こんな楽しいときに僕なんかのことで鬱々とさせるのは悪い。

「……けども。うん、たしかに訊ねもせずにごいぐいと強引で自分が楽しくって疲れ知らずで次はあつちが良いと振り回して話してばかりで人の話を聞こうとしなかったね、君は」

「おお、ぼつさりだよかがりん。まー、そーゆー傾向あるけど……これはよっぽどガマンしてたと見えるう」

「反省していますっつてば……だからこそ今日はこういうのにいちばん鋭いゆりかちゃんにお願いしていたのよ。響ちゃんの体調、このまま私たちと夜を共にしても大丈夫かどうかって」

「ちよ、ちよいちよい待ちなさいかがりさんや。……その表現は誤解を招きかねないから、ひじょーに危険だから使わないほうがいいのよ……?」

「え? どのことかしら?」

「……夜を、なんちやらってやつ」

「そう?」

「そうなんです、ご遠慮くださいね? かがりさま」

「なんだか変ねえ、今日のゆりかちゃん。なに? 私のマネかしら?」

中学生だもんな、茶化してはいるけどいろいろと多感なお年ごろなんだろう。

僕はそういう時期を通り過ぎた大人だから気がつかなかったフリをしておいてあげよう。

気がつかなかったフリのために適当に周りを見ておくフリは得意なんだ。

39話 去る年と、来る年 2／6

「かがりんって漫画とかだけじゃなくて普通に本とか読んでるのにと
うして分からないのか……コレガワカラナイ」

「??？」

夜を共にする……そんな単語ひとつでこの騒ぎ。

ナイーヴでセンシティブな中学生というお年ごろな子たちだから
だろうか。

まあたしかにこのくらいの年ごろの子たちはいちいち反応するよ
なあ。

初々しいあのころが懐かしい限り。

僕にだつてそういう時期はあつた。

ただ何もしないで通り過ぎただけ。

でもやっぱりこういう話題になると男と女で反応が結構違うんだ
な……いやまあ僕のそのころの知り合いの誰もこういう話は好き
じゃない感じだったから僕自身は体験したことはないんだけども
……僕が知っている男同士のそういう話のほとんどが映画とかマン
ガとかの創作からっていうのが悲しい。

作り話でも現実を参考にして以上ある程度の信憑性はあるん
だろうけども……男だったのにそういうのどのへんまでがあるあ
るなのかが分からない悲しさ。

いいもん、今は女の子だもん。

………：………：………：良くない良くない何考えてるんだ僕は。

なんか最近思考がおかしい気がする。

あ、でもこういう話、今後僕も振られる可能性があるのか……この
子たちに。

「むう」

……この歳になつても、いや、男としてこの歳まで生きてきたから
こそ抵抗感がある話題。

できるだけ分からないフリをするか気乗りしないフリをするか
かない気がする。

だって僕だし。

人の生態なんてそう簡単に変わらないんだもんな。

それに僕はそもそも、男女のそういうものについては――

「ねー、響だってこれくらい分かるでしょ？　中2だし、響は本たくさん読んでるし」

……そう思っていたら振られた。

どうしよう。

「……うん」

ちよつとなんかもやもやってなるけどゆりかもかがりも……かがりは置いておこう……特に変な調子にはなつてない。

つてことはたぶんこれは普通の男女の会話で良いんだろう。

なら変に反応しないで普通に言えば良いのかな……僕の人生経験の無さだ。

「どう言う意味なの？　夜を共にするっていうの、そんなにおかしいものなの？」

「いやー、ちよつと文脈的にねえ？　なんというかその……えつとお」

「??　よくわからないわ？」

僕がそつけなかつたからかがりの注目はゆりかに集まっている。

それで珍しくゆりかが顔を赤くしながらあわあわしているのを見ているとなんだか不思議な気分になってくる。

普段は平然としている彼女でもやつぱり年相応の、青少年相応の反応するんだな。

うん、中学生つてのはこういうもんだよね。

男女のちよつとしたこととか表現でいちいち過剰反応する辺り、健全でなにより。

けどびっくりしたのはさつきのかがりの発言。

僕の体力がないことに気がついていて、しかも振り回したことさえ自覚していて――あの強引さは何言っても手を振り払おうとしてもどうあがいたってなすすべもなく着替えさせられるあの強引さを――
――自覚している。

それに気がついてそれがいけないことだということに気がついて
いる。

衝撃だ。

……やっぱりこの3ヶ月っていう時間は長かったらしい。

あんなかがりだってこうして人並みの気遣いができるようになる
くらいには成長しているんだから……いや本当に感慨深いっていう
ものじゃない、これは奇跡的ななにかだ。

できたらもっと早くに気がついてほしかったけどなあ……具体的
には夏休み前までには。

そうすれば皆さんに試着させられて「どれがいいかしら……よく
分からなくなってきたからもう1回全部着てみてくれるかしら？」な
んで聞かれて「もうどうでもいいからこれにする……」っていうお決
まりのパターンもなくなっていただろうし。

まあ、もうすぐ中学3年になるんだもん……この子たちみんな。
いくらかがりだって、あのがりだって、さすがに精神年齢も肉体
年齢に追いついてきているんだろう。

……早く体の成長に心が追いつくといいね、かがり。

まあ追い越すのは無理だろうけど心の底から祈っておこう。

ああそうだ、初詣にはそれを願ってあげよう。

この子はきつと別のことをお願いするだろうしな。

おいしいものとかきれいな服とか少女マンガとか、そっちの方に。
だから僕がお願いしておいてあげればフェードアウトするまでに
もきつと何回か連れて行かれるだろう買い物でも少しは遠慮してく
れる……ようになるかもしれないし。

「えっと、ふたりとも」

ぶるつと寒さが昇ってきた僕は反射的に楽しそうな問答をしてい
るふたりを見上げる。

「どうしてそこで男女の、その……とにかくそれが出てくるのかしら
？ どうしてゆりかちゃん？」

「いやいやかがりん、それはさすがに友達でも言いにく……つとごめ
ん響、なーに？」

「りさとさよの2人はどこにいるんだ？ まだ来ていないのか？ あと寒いよ、ここは」

「あ、そだったそだった。今呼んでくるから、かがりんと先に上がって待ってて？ いくら大丈夫そうでもいつまた発作、起きるかわかんないんでしょ？ だったらさ、こんな寒空で立ちっぱもなんだしあつたかいところで座ったり横になれるだろうし。そのほうがいいはずだよ、かがりん？」

「ええ、わかったわ。それでは響ちゃん、こっちについて来て？」

「……どこへ？ ここは神社の……管理している人たちが住んでいる」

「いいの、許可は取ってあるから。それよりもちよつと人が多いから、手、繋ぎましようね？」

「いつてらー」

振り袖をふりふりさせているゆりかを後にそう言いながら僕の返事を待たずにさっさと手を取ってしまうかがり。

……やっぱり変わっていない。

やはりくるんさんだった。

ほんのちよつとだけしか変わっていなかったな。

「……あ。えつと、これはね？ 響ちゃんが苦手な子供扱いをしているのではなくってね？ は、はぐれたら困るからよ？」

「それを子供扱いと言うんだけども」

だから、手を……く、離せない。

「だってこの人出だもの、響ちゃんも背が低いから1度見失ってしまったらお互いに見つけられないでしょう？ だからこれはしかたないことなのよ」

「ちよつと、かがり……スマホで連絡を取れば」

ぐいぐいと手をしっかりと握られてしまいつつ連れて行かれる。

……買い物のときみたいに。

やっぱり変わっていないじゃないか……いや、あれよりは足元が悪くってかがり自身も下駄を履いているから多少はゆつくりとではあるけど、でもやっぱりこの子の行動原理はなにひとつ。

「さ、こつちよ？　ここからは足元に気をつけて？　砂利と石畳で歩
きにくいから転んだら痛いわよ？」

「その感じ、もしかして転んだのか？」

「……………」

転んだらしい……厚底と着付けで歩きにくいのに、いつもの調子
だったんだろう。

☆☆☆☆

参拝するためにできている行列。

その長い人ごみにずっと根気強く並び続け、自身の番が近くなって
きたと思ったらさも用事があるかのようなフリをして列から離れ、そ
のまま……並ぶと30、40分にもなる列の最後尾へ回るという奇妙
なことをしているスーツ姿。

同じようなことをしているのが4、5人……男性だけではなく女性
も、その他にも境内のそここで話し込んでいるフリをしているのが
年齢格好を問わず、散っている。

「もう隠す必要がなくなったから」と、最近は——この冬になってか
ら、具体的にはクリスマスイヴの前日からそのまま出して歩いてい
る、けれども今日はしつかりとフードにしまつてある、その長い銀色
の髪の毛を持っている幼い少女を——その子だけを見るために。

監視するために。

その少女……幼女と、その幼女の手を引いている少女が一緒に入っ
ていった建物を……これも写真を撮るフリをして、特殊なカメラを備
えたタブレットのそれやカメラとで引き戸が閉まるのまでを確認し、
そつと連絡を取り合う。

彼らのしぐさはあまりにも自然で、服装も、あるいは話し込む組み
合わせも、そこに並んでいる誰にも不審になど思われない、ごく普通
の、自分たちと同じような参拝客だとしか見えないもの。

若者の連れ合いだったり夫婦だったりあるいは1人だったり、な
んの共通点もないように見えるようにしているスーツ姿たち。

ぱつと見れば「きつと地元の会社の人たちなんだろう……こんな日まで働いているかわいそうな」と思われる程度の彼らの半分ほどは外国の風貌だ。

けれど彼らの視線は一般人には注がれず、ちらちらとではあるがしつかりとその幼女と友人が入っていった建物に注がれており……そして常に境内の内外へも同時に気を配っている。

何かがあればいつでも上着の内側と腰に用意してある鈍器……あるいは刃物、さらには銃器を使えるようにしておきながら。

「……」

そして銀髪幼女たちが建物に入ってもその中を……熱・音波探知を使った装置でどこへ移動しているのかをお互いがたびたびに受けている、知り合いからの電話を装った会話で……異国の言語で。

皆が持っているタブレット端末上で、それは逐一共有されていた。

……内部に事前に設置してある音源まで、しつかりと。

それはその幼女の服に付けられていて――。

☆☆☆☆

「さあ、こちらよう？ 響ちゃん、座って座って？」

有無を言わずに僕が上がりされたのは昔懐かしい感じの和室だった。

こんなのはもはや旅行先とかで観光用になっている昔の家屋くらいしか見ない気がする。

それも、ただ「お邪魔します」とだけ口にしたかがりに引きずられつつ、なすすべもなくただ導かれて到着しただけで何が起きてるのか僕には分かっていない。

かがりも「良いから良いから」ってだけだし……何が良いんだろう。こういうのって神社の神主っていうんだっけ？

そういう人たちが管理していたり住んでいたりするわけだからきちんとその人たちに報告しないといけないんじゃない……いくらなんでも不法侵入はちよつと。

みんなの感じを見る限りそれは取っている……もしかしたら具合が悪くなった人のために解放されてるのかも……とは思うけど、でも不安だ。

レモンさんはともかくメロンさんはメロンさんだし。

どうして今ここにいるのがこの子なんだろう。

レモンさんだったなら少なくとも安心感があったはずなのに。

僕と一緒に居るのはよりにもよってくるんくるんメロンさんだからなあ……。

「……かがり?」

「どうしたの響ちゃん? ああ、みんなは多分すぐに!」

「そうではなくて」

ダメだ。

この子は好きにさせちゃ行けないタイプの子なんだって知っているじゃないか。

「本当に家主に断りもなく勝手に上がっていいのか? だってここは神社の本殿と繋がっているようだし、つまりは事務所とかこのご家族が住んだりしているところだろう? 入り口にも特に何も書いていなかったし、だから」

「いいのっ。 もうちょっとでそのワケがわかるからっ」

「……………」

……かがりがこう言うときは大抵何かを隠している。

にやにやしているのが顔に出ているし頻繁にくるんくるんくるんしているし。

なんかむかつくから見ないでおこう。

けどなんだろう。

さっき言っていた「許可はもらってあるっていう」あれのこと? けどどこまで誰にも会わなかったし、かと言って。

「……………」

……まあ、今日はもこもこしたって寒いんだ。

クリスマスの時みたいに雪こそ降ってはいないけど、代わりに切りつけるような風が恐ろしく寒くて痛いんだ。

だからこうして温かいところで……屋内で目の前にはストーブがあつてこたつまであつてつていう、なんだか生活臭あふれるこの空間で座っていられるっていうのはたしかに楽でもあるし、今はここでもいいや。

「ほら、響ちゃんも早くー!」

目の前のくるんさんはくるんくるんして、こたつを囲むようにしている座椅子のひとつに座って適当なことを言いながらくるんつとしている。

とても不安だ。

この子が安心しきっているのがまた、余計に僕を心配にさせる。

心配だからこうして……怒られたらすぐに出られるようになってコートも着たままで立ちっぱなしで悩んでいるわけなのにこの子はどうしてこうなんだ……。

「……」

ま、でもさすがに無断つてのは無いだろう。

もう上がっちゃった以上は座つてくつろぐくらいしても変わらな
い気がしてきた。

でも……無いよね?

無いよね?

この歳になつて「人の家に勝手に入つちやメツでしょ!」つて大人
から叱られたくないんだけど……。

「よい……っしょ……着物って動きにくいのよねえ。ふう、あとふたつねっ」

勝手も知らない、家主も知らない、そのうえ押し入れから座布団や座椅子を引つ張り出しているくるんくるんさんをぼんやりと見る。

いいの……？

勝手にそんなことをして。

他人の家の冷蔵庫を勝手に開ける並みの暴挙じゃない？

あとでうんと怒られない？

いやまあゆりかが行けって言ってたから多分大丈夫なんだろうけど……ほら、だってかがりだし。

「ところで響ちゃんも甘酒、飲めるのかしら？」

「呑める」

「あら、甘いって言うけど大丈夫なのね？」

ううん、甘いのは苦手。

ただお酒ってのに反射しちゃっただけなんだ。

でもそんなこと言えないから黙っておく。

「みんなが集まったら……ちよつと遅い食事は体に悪いけど軽く食べて、お菓子とかジュースをつまんでおそばと甘酒で年を越してみようっておはなししているの。だってなんかこう……大人っぽいじゃない？ お酒って」

甘酒が大人？

アルコールが入っていないのはお酒じゃ無いんだよ？

まあ法律に引つかからないぎりぎりに入っているらしいけどね……僕ならお腹がはち切れるまで飲んでも絶対に酔えない量だろうけども。

甘酒とかチョコレートに入っているラム酒とかできやつきやしてのってむしろ子供だとは思うんだけど、それを口にしたが最後、またしばらくおさまらなくなるだろうから静かにしておく。

……ああそうだ、普段なら夜の9時頃から……今日は昼寝したからもう少し遅くからかな……でもやっぱり眠くなってきたやうだろうし、そのへんの自販機でも教えてもらってブラックコーヒーを何本か手に入れてこようかな。

いや、ここは大きいからきつと敷地内のどこかにはあるかな。

「あら、来たみたいね！」

かがりの声が出たと思ったら廊下から誰かの足音……家主の人？

無断で住居侵入をしてしまったことだし……いや、許可は取ってはあるんだろうけど、でも一応は大人と初対面というわけで姿勢くらいは正しておかないと。

「おまたせっ」

「……りき？」

「あれ？　なんで響さん立ったままなの？」

「響ちゃん遠慮しちゃっているみたいなの」

「あー」

……そこには巫女さんがいた。

白と赤の、巫女さんらしからぬ体型をした巫女さんが……おっとセクハラだ。

「良いのに……それよりどう？　この服！　見違えたでしょ——！」

りさりんが巫女服を着ている。

……普段より胸が強調されるんだな、袴って。

「……ちよつと恥ずかしいかな……あはは。　まーこの格好、小学生のころからやってるし慣れてはいるから気にしないで！　けど響さん、クリスマスするときよりも顔色もいいしよかったわー！　……でもコートまで着て立ったままって疲れるし、なにより暑くない？　リラックスして良いのよ？」

「……えつと」

巫女りさりん？

巫女りん。

語呂がいいな、巫女りんさん。

「……あ。　響、さん」

「……さよものか」

巫女りんの後ろにへばりつくようにして出てきたのは、これまたおんなじような格好をしたさよ。

……ああ、僕もこの子みたいに人の後ろに隠れて黙っているから存在感なくて居てもなかなか気がつかれないんだな……ちよつと反省しよう。

「……恥ずかしいので、あまり、その………見ないで、もらえる」と

「あ、うん」

巫女りんの巫女姿なんだかこなれているようなしっくり感がある……あ、巫女衣装がけっこう使い込んでいるせいか……さよは対照的にまだ折り目のついている新品の巫女姿で、こつちこそコスプレって感じ。

けど前髪まで……髪の毛全体がストレートに長くておどおどした感じの雰囲気やさよはなんだかとっても「まさに巫女」っていう感じがしないでもない。

ふたつの意味でどっしりしている巫女りんとは、ちょうど正反対。

……しようがないんだ、僕の目線の真つ正面にこの子たちの胸元があるんだから。

男のころだったら上からの視線だから顔だけで済んだんだけど今はちっちゃいから難しい。

「ほらほら、まずは座って座って響さん！ この前みたいになつたりして倒れて……ほら、頭でもぶつけたら大ごとだし。 ね？」

「……ですね。 私みたいに貧血……になつたら、受け身も取れなくて……そうなります」

「ほらね？」

む、病人なさよを引き合いに出すのは……いや、この子たちにとつては僕の方が病人か。

「ほら響ちゃん！ さよちゃんもりさちゃんもこう言っているんだからいい加減に座って！」

振り向くと自分の隣に何枚か敷いた座布団。

……なんで僕が横になる前提？

というかそれ、乗ってて崩れない……？

しやらん。

振り向き直すと……ご祈祷のときとかに鳴らされる、先の方に鈴とか紙が飾られている棒をひとふりする巫女りんさん。

どっから出したのそれ……ちよつと格好いいんだけど。

「私のお父さん、ここの神主やってるのよ。だからここは私の家の客室ってわけで、つまりは私の友だちの、響さんを含めたみんなはお客様さまってわけ」

……あー。

なんか話の合間に聞いた記憶が……無いでもない感じかも。

「だから、くつろいでもらっても大丈夫なの。……きつとこのこと心配してたんでしょ？ もーマジメすぎるんだから……響さんらしいけどね。ってなわけで響さん、まずは座って座って」

「あら？ りさちゃん、この小さめの座椅子は？」

「あ、それお子さん用の……なんだけど、たぶん……ごめんなさい、けど響さんのサイズに合っていて座りやすいと思うわ。よかつたらそれ使ってもらえる？ ほ、ほら！ 普段からファミレスでも座ってるだけで不便そうだから！ せ、成長期だからこれからよ！」

なんかすつごく気を遣われて悲しい……なんで僕が小さいってことでこんなに悲しくなるんだ。

「……わかった」

今夜はお邪魔する時点で迷惑は掛けるんだし、いつまでもこうしていても意味もない。

女の子に口で勝とうだなんて僕には無理なことなんだ、諦めよう。もそもそとコートを脱いでマフラーも外してわきに置いて、ぺたりと座る。

あ、この座椅子僕にぴったりフィットしてる。

悲しいけどお子様シートな僕だ。

「ふう」

ぱさつと出てくる髪の毛で籠もっていた熱気がふわあつと抜ける。

「良いわね——……」

「はあ——……」

「いつ見ても……」

3人が話している声が聞こえるけど今度は何が良いんだろ。

それよりふわってした髪の毛からだだよってくる僕のお気に入り
の匂い。

甘いのは苦手なはずなのに好きな、この甘い匂い。

シャンプーとコンディショナーと幼女な僕の体臭と汗が混じった
匂い。

「？」

見上げたらみんなと視線が合う……あ、さよが逸らした……なんで
みんないつも僕がこうやって動いたりしてしているとじーつと見てくる
んだらう。

女の子って勘が良いとか言うけどこういうひとつひとつでの観察
力って言うか興味が違うのかもね。

僕は幼女になってるけど脳みそは男のままだからやつぱり分から
ない。

「そ、そういえば響さんって髪の毛、すごく長いんだったわね！ いつ
もパーカーとか被っているから新鮮ねっ」

「……かがりさんが響さんの髪の毛がきれい』とか……『こういう髪型
にしてみた』っていうの、いつも言っているから……1回ちゃんと見
てみたかったです……」

……まさか。

「……………」

ぱつと、くるんメロンを見上げる。

……くるんつと首をかしげられた。

「だって可愛かったじゃない？ 響ちゃんのいろんな髪型」

——それは夏休みに襲われたとき、ファッション雑誌片手に髪型を
いじくり回されたあのとときの。

誰にも言わないって約束させたのに。

「あ、もちろん写真は見せていないわよ？ 『人に見せたらもう会わな

い』って言うくらいだったからそういうの、嫌いだと思って」
約束が改変されてるんだけど？

どうしてくれよう………ほんつとかがりときたらもう……。
けど最後の一線を越えていなかったのだけは評価しよう。

あのときの写真の数々をグループで共有されていたら僕は立ち直る自信がない。

体は幼女でも心は男なんだ。

かがりによつてかわいくされた姿なんて絶対に勘弁だ。

「それは助かる。そのまま誰にも見せないでくれ」

「……もつたいないわ」

「もつたいなくはない。できれば消し」

「それはダメ！ それだけは譲れないわ！」

この子的には3ヶ月も経ってるしそろそろ良いんじゃないかって
思うんだけどダメらしい。

ケチ。

「ま、まあまあふたりとも！ 響さんもその写真……私もとっても見たいけど、でも見せないって言っているんだしさ！ かがりさんはそういうウソはつけ、つかないから安心して？」

巫女りんがそう言うなら……あとかがりが良い意味で純真すぎるってこと、みんな知ってるんだね……当然か。

「で、かがりさんも人の嫌がることは……なるべくししないでね？」

「はーいっ」

……いつかどうにかして言いくるめて消させないと死ぬに死にきれない。

「響ちゃんってこんなにかわいい子だったのにー」とかみんなに見せられたら化けて出てやる。

「で、話戻してもいいかな？ そういうわけで私の家は昔からこの神社を管理していてね、だからここも渡り廊下伝いでそのまま家なの。……えっと、みんながお賽銭投げたりするところの先のところまで歩いて行けるのよ、靴とか履かないでも足袋のまままで。まあ別にこういう時期以外に私も行かないけど……ね？」

「はっ、はい……私たちもゆりかさんから……聞いて、他の方たちに、お仕事……代わっていただいて、歩いて来ました」

「ということは巫女りんはほんとうに巫女りん……でも、さよはなんて呼ぼう。」

ん？

今、お仕事って言うていたような。

「毎年ね、この時期とお祭りの時期はたくさんの方が来ていつも働いている人たちだけじゃ人手が足りなくなるのよ……んで私も娘だからって手伝いになり出されるわけ。で、今夜みんな空いてる家で年越しやるんだして誘ってみたらやってみるって言うから、こうして巫女やってるってわけ。どうかな？ 似合ってる？」

くるんつとひとまわりして、巫女りんの巫女衣装の……髪の毛と袖と袴とがふあさつとなる。

元に戻ったときにさりげなく片足を前に出して「とん」ってして、同時に「しゃらん」ってしているあたり慣れているのがよくわかる。

「……ほらさよさんも！ さつき教えたでしょ！」

「……え……あつ、はいっ」

次の番だと言わんばかりにさよがつつかれて、さよもまたくるんつと……しようとして転びそうになって、あわててりさに抱きかかえられている。

でもさよも髪の毛が長いから、勢いをつけてくるんつしたらきつと映えただろうなあ……まさに巫女っていう感じで。

「……ああ、うん。 そうだね、似合っているよふたりとも」

ちらちら見て来ているさよとすっごい笑顔の巫女りんデピンと来た僕は慌てて褒める。

女の子は、女の子同士でもまず最初に相手のファッションを褒めるところから。

特に新しいものときは絶対に褒めちぎる。

僕が苦労して学んだ実学だ。

「着慣れていて熟練の巫女という感じのりさも、新しい衣装と着慣れていない感じがあるけど雰囲気がとても巫女らしいさよもね」

「えへへ、こしよばゆーい。その感じ、反応が遅れた感じ見惚れちゃったー?」

「いや? どう感想を言えばいいのか考えていただけだ」

「もうっ、響ちゃんったらちちゃんと褒めないとりさちゃんが可愛そう!」

かがりが割り込んでくるけど……しようがないじゃん。だっってほんとのことだし。

でもそうだよ、りさりんはちよつとギャルっぽい……もう死語かな……ところがあるから軽いノリで良いんだろう。

肝心の僕がそういうのに抵抗あるってのが致命的だけでも。

いやだっって、仲が良い女子とか彼女とか居たことなかったし……。

「あはー、かがりさんの言う通りにそこは乗ってほしかったかなーっ
て」

「……………えっと、私とか響さんは、そういうのは、その……」

「…………ふう。わかってるって。言ってみただけよ。響ちゃんだもの」

この場で僕の唯一の味方なさは良い子。

またなにか困ったことがあったらこの子を頼ろう。

巫女りさりんと巫女さよ。

たぶん既製品、つまりはおなじものなんだろうけど……年季の差ってやつですこしだけくたびれた感があつて柔らかい感じで、つまりは体のラインがわりとはつきりと見えちゃってるりさ。

そのりさとは対照的に新品の、折り目がはつきりについてぱりつとしていてごわごわしていそうな……けどこれもこれでまたありなんだろうなっていう感じのさよ。

その白い着物は胸元で合わせるところで……巫女りんはちよつと大げさなくらいに、一方でさよはほどほどに膨らんでいて、その下で袴が腰をぎゅつと締めている細さとのギャップが激しいことになっている。

……あれだけ腰を締めて息苦しくはないんだろうか……普段とぜんぜん違うし……。

しかも巫女りんの場合は年季が……汚れてはいないものの新品じゃないもんだからほどほどにくたびれて布が柔らかくなっているわけで、つまりは女性らしい凹凸が余計にはつきりと出ていてなんか大変そう。

まあ普段から頻繁に抱きしめられたりして運動部らしいスキンスリップの多さで慣れているからそこまで気にならないけどな、あくまでも印象というだけのことだ。

そうして熟練で色気がほんのりある感じのりさに対し、巫女さよのほうは……まさに臨時のバイトの巫女さんって感じ。

きつと参拝客からは大好評だろう。

「……というわけで」

女の子たちでよってたかって僕をなじる展開……ただのじゃれあい程度のが終わったらしいから意識を引き戻す僕。

「今年も私は三が日……いえ、そのあともしばらくだから5日くらいまでかしらね？ そのくらいまで忙しいのよ。年末年始っていう

普通の家ならのんびりする時期なのにね」

「そういう仕事だからな……仕方ないんだろう」

お家で仕事してるところというとき大変そうだよね。
がんばって。

「響さんの言うとおり、もー小さいころから慣れっこなのよ……おかげでお年玉も普通の子よりは多いし文句はないわ。でも、今年はさよさんが応援に来てくれて話し相手ができて楽しいのよ。普段は大学生の人たちとかもつと年上の人たちばかりだからさー。それもさよさんからなんて。ねっ?」

「……はい」

みんなからの視線が急に集まったもんだからあわてて巫女りんの後ろに隠れようとした巫女さよ……けど両手で逆に巫女りんの前に出されてしまい、また少しわたつとしたけどすぐに落ちついて、ふうつと息をつき。

「……私も、少しは体力も、あと……度胸も少しだけついて……人と話すのも慣れて、きましたし……そろそろこの人見知りとか……克服して、いきたいって。もちろん、これだけではすぐには……ムリでしょうけど……だから、今日……人が足りなさそうって言っているの、聞いたので。……思いきってりささん、に。頼んでみて、それで」

つつかえつつかえだっただけど、でもいつもみたいに黙ったりしないで最後まで言いたいことを言い通せている。

……この3ヶ月っていう時間。

この子、さよがこれだけ成長するほどに長いものだったんだな。

……いつまでも同じじゃない、な。

なぜならこの子たちは成長期真っ最中の中学生。

これからいろいろな経験を積んでだんだんと大人に、ひとりの人になっていくんだろう。

——いつまでも同じで変わらない僕とは違って。

成長するのを諦めて停滞してさらには縮んじやった僕とは。

それは前の僕だったとしても今の僕だったとしても……同じかも

しれないんだ。

どうせ家の中にこもってただ静かにしているだけの僕は世界中のみんなから、どんどんと追い抜かされていくんだ。

だって、ひとりぼっちだから。

「ねえ」

「ん？」

巫女さよの意思表明が終わって場の雰囲気が変わって、巫女さよも巫女りんも腰を下ろしたと思ったなら今度は横からくいと引っ張られている。

……ああ、かがりのことを忘れてたなそういえば。

普段になく、珍しいことに静かなもんだったから存在を忘れちゃった。

「……ちよつと響ちゃん？」

「どうしたんだ？かがり」

上を見上げるも、なんだか珍しく真剣なまなざしで見下ろされ続ける。

「……………」

「……………」

なんか怒られることした？

え？

「…………ん！」

「…………ん？」

……なにかを言うんじゃないかなかったんだろうか。

なんだろう、「んっ！」って。

「…………んもうっ！ ……ゆりかちゃんと私。 私たち、私たちも振り

袖着ているのよ！ りさちゃんたちよりも先にお披露目したのにまだ全然感想を聞いてないのだけど!？」

「…………そうだったかな」

「ぜんっぜん！ ねえ!？」

「あはは…………かがりさんは普段通りね」

「は、はい…………」

静かすぎたのは静かに怒っていたらしい。

いや、言つてよそういうの……男は言われないと分からない生きものなんだからさ……何が「察して」なの、察する材料さえなければどんな探偵さんだって迷宮入りまちがいなしなんだよ……？

でも女の子っていうものはみんな平等に、けれどもひとりひとりちがう魅力を見つけて褒めて回つてあげないと、褒められ足りないって感じた子が不機嫌になるっていう生態を知ってるからここで怒つてもしょうがない。

「ああ、ごめんね」

「……………」

返事がない。

怒っているようだ。

「ゆりかはまだ来ていないからあとにしてかがり、君は」

そう言えば大分経つてるのにゆりか来ないなあ……どこ行っちゃったんだろ。

「普段君が好んで着ているような私服と同じイメージのその振り袖、振り袖の柄に劣らず豪華になっているその髪型とかんざし。君にとっても似合っているよ」

「……ようやく聞けた。ふふっ、ありがとうっ」

「響さんの褒め方つてすごいわよねえ……大胆で。マジメに言われると逆に冷静に受け取れちゃいそう」

「は、はわ……」

女の子、女性を相手にするときは言葉を尽くさないといけない。

できるだけくみ取つて先回りしてあげないといけない……それがたとえ女の子同士であっても。

「分かる」つて言うのはとっても大事なんだ。

それが僕みたいな男とか男みたいなメンタルしてる女の子にとつてはきつとめんどくさいんだけど、逆にそれさえしておけばちよつとやさつとではそこまで機嫌悪く……なることもあるけど、まあほどほどにごきげんな割合が増えるんだ。

とりあえず話を聞いて褒めて褒めて「分かるー！」しておけばそう

そう爆発はしない。

あとは甘いもの。

これさえあればなんとかなる。

そういう生きものなんだ、僕たち男とは違って。

男は……どうだろ、そこまで不機嫌になるっていうの、思春期の一時期を除いたらそんなにないんじゃないかな……いや、個人差はあるけどそれも女の子とかとおんなじだし、別にひとりで居ても不機嫌になることなんてないし。

なんなら男ならお酒さえもらえたら多少のイライラでもたちどころに回復する。

ほら、荒くれ者でもお酒出せばとりあえず席には座るって定番だし？

僕だってお酒、おちよこ一杯……じゃ足りないからせめてコップ半分くらいには……もらえたらなんでも言うことを聞く自信があるくらいだし。

「それじゃかがりさんの機嫌もよくなったところで」

「……私そんなに怒っていなかったわよ、りさちゃん」

「響さんの後ろでずーっとほっぺた膨らませてたかがりさんが言っても説得力ないわよ。 ねえ？」

「えつと、……ま、まあ……」

女の子ってごきげんにさせておくのがほんと大変……いつもなら携帯しているお菓子で簡単にごきげんにさせられるのに、今日は忘れて来ちゃったしなあ……こたつに置いてあるラインナップだとなんだかありがたみが薄いし……。

「さてー、響さん、これからなんだけど……しばらくは大丈夫そう？

ここにいて」

「うん、大丈夫だと思うよ。 ありがとう、りさ」

ありがとうは大事。

りさりんはそう簡単に怒る子じゃないけど普段から言っておいて損はない。

「ならいいわつ。 それじゃ、新年までもう……30分くらいだし、

ちよつと早いけどお蕎麦、用意してくるわね? ……お湯湧かすの忘れてたけど、みんなが食べ終わったところに新年迎えられそうだしジャストタイムングかな?」

「そういえばそうね? 響ちゃん、ちゃんとお昼寝してきた?」

子供扱いされたけどめげない僕。

「してきたよ……だからこの時間でも平気だ。 さつきも言っただろう」

「あら? そうだったかしら?」

「……………」

子供扱いされて忘れられたけど僕は大人だから起こらないんだ。

「じゃあ私は台所へ……って、あ、そうそう。 響さんはお蕎麦、あとは卵とかとろろとかお揚げとかいわゆる適当なトツピングしたおそばっていうのの中にアレルギーとかあったりする? 聞いておくの忘れてたわ」

「平気だよ……けど量はみんなの半分、3分の1くらいで頼みたいかな」

「もともと少なめにするつもりだったけど……了解しましたっ」

「響ちゃん響ちゃん! 食べきれなかったら私が食べてあげるから量の心配はないわ!」

「ああ。 信頼しているよ」

その食欲の、ただの1点だけは信頼できる。

だっていくらでも食べられる子だもんな、くるんさん。

「……あ、りさ、さん。 私も、手伝います」

「ありがとー、助かるわ」

人様の家にながらせてもらって、家主……は巫女りんだからいいのか、けども挨拶も遅くなつて食事までごちそうになるなんて。

これが子供のときだったらなんとも思わないんだろうけども僕は当然ながら大人、このまま座っているだなんてのはできない。

せめて僕もなにかしらの……この低身長じゃろくにできることはないかもしれないけど、でも手伝いをしておかないとそわそわする。

配膳くらいはできるし、踏み台……こういうところならきつとある

だろうから、それを使えばお蕎麦くらい手伝えるんだし。

こういうときはさっさと……今のさよみたいに意思表示をしないと機を逃してしまうから僕も立ち上がって、……………。

「？」

脚に力を入れて、……………。

「??」

こたつのテーブルに手を置いて。

「??？」

立てない。

というかなんだか肩が重いような？

「——響ちゃん？」

「はい」

かがりの低い声……これはちよつと怒りかけているときの感情だ。

それが僕の頭上から後ろから降ってくる。

さっきのいじけている程度じゃないやつ。

分からないけどとりあえず経験から静かにしておこう。

「病みあがりなんでしょう？ まだほつぺたが元に戻っていないじゃない？ つまりはまだまだなんでしょう？ ……そういうのは響

ちゃんの素敵なところだけれど今はここで私と待つ。

……………いいわね？」

「はい」

「本当に分かっているのかしら？」

「わかっている。だからこの手を」

「だめ。まずは力を抜いて」

「はい……………」

「脚の力もよ？」

「はい」

怖い。

もはや抵抗は無意味だ。

力を抜いてしばらくして……やっとな肩の温かい重さが引いていっ

た。

「かがりさーん、その調子で響さんがムリしないように見張ってねー？ あ、体調とかも見ていてね！」

「もちろん！」

「……………」

「……………響さん」

「さよ」

「ふたりとも……………私も心配……………なので、待っていてください……………ね？」

「……………分かったよ」

まさに四面楚歌っていう状況。

……………ならせめて食べ終わったあとの片付けくらいは、そのあとの配膳とかその程度ならきつと、子供でもできるような手伝いならなんとか許可を狙おう。

自然な流れでやればきつとできるはずだ。

「あんなことがあったばかりなのに、やっぱり響さんは響さんなのねー」

「わ、私も気持ちは分かる……………んですけど……………」

「響ちゃんってすぐ無理しちゃうから私が見ていなければダメなのよ」

けちよんけちよんに言われても僕は男だからめげない。

女の子ってひとしきりいろいろ言わないと気が済まない生きものなんだから……………帰ったらお酒でストレス忘れよう。

木造の古い造りにふすまとタタミ。

いわゆる日本家屋っていうのはとにかく寒いもの。

なんでも昔は寒さは良いから暑さと湿気対策を優先したんだとか。大半のものが木と紙と草でできていて、だから外の寒さが……こうして文明の利器をフルに使っていたとしたって筒抜け。

最近じゃ……観光地とかでも珍しいくらいに完全木造ってやつだもん。

まあ神社だしね、そういうもんなんだろう。

ストーブのじんわりとしたあたたかさとかこうしてぬくぬくと入っているこたつとか。

じーつとしていると、そうしたもののおかげでようやくよくにあったかくなる。

「暖かいわねえ」

「うん」

「ちよつと良い匂いがしてきたわねえ」

「うん」

「響ちゃんって興味ないといつもそうよねえ」

「うん」

くるんさんとふたり静かにこたつでぬくぬくすること10分くらい。

遠くからは……って言うより外から、敷地内が境内でたくさん人もいるし鈴もじやらじやらなってるしでそれなりの音が聞こえてくる。

そうして置かれているテレビ……さすがにこの辺は今風らしくでっかい画面のやつで適当な番組を観ることになった僕たち。

でも、じーつと……人様の家で何もせずに座り続ける。

こういうのってやっぱり落ち着かないよなあ……今からでも。

「ダメよ響ちゃん」

「!？」

「りさちゃんたちのお手伝いはダメ。みんな心配しているのよ、響ちゃんのここと」

「……分かってるよ」

「本当?」

「本当だよ」

「ならここで待ってしましょ! あ、見て見て、響ちゃんがいなかったときの……」

テレビと会話とに集中しているはずだったのに僕の動きには敏感なくなるんさん……着物のせいで動きづらはずなのにそういうのは目ざといんだから。

女の人ってなんでもマルチタスクなんだとか。

だから何かに集中しているはずなのに全然別のことにもすぐに気がつけるらしい。

僕みたいにシングルタスクしか駄目なタイプとは相容れないし油断ができない存在なんだ。

……その注意力をもっと勉強とか普段から使っていれば苦労しないのよね。

☆☆☆

長細い木でできた廊下、しかも足は靴下ではなくて足袋、そのうえに慣れない着物ということ歩きづらそうに小股でそろそろぺたぺたと歩いている少女。

しかし彼女にとってこの家は親友の住む勝手知ったる家。

つまり意識せずともこの細長い造りの家を自由に動けるわけで、そういうわけで気兼ねなく歩きスマホをしていた。

今日は大みそか……それもいちばん忙しい時間帯に入りつつあるということではほとんどが参拝客たちの相手に追われているため住居側のこちら側はがらんとしている。

この家の住人の居住スペースが空になっていて、さつき入って来た中学生たちも客間と台所にしか居ないのだから当然だ。

それに人が来れば……大抵は小走りだから、なによりも木の床の音ですぐにわかる。

だからこそ彼女は熱心に、その画面に注目していた。

「……ふうむ、なるほどねえ……」

横向きにした画面を見つつ……奮発してもらった、レンタルではあるもののしっかりした素材のその着物は、下に着込んでいる服のぶんも着ぶくれていてだから洋服よりも体が隠れるせいで……余計に幼く見えている。

しかしその前髪が横にきれいに揃えられていて着物によく似合っている彼女……ゆりか。

何かしら良いことがあったらしく、軽くほほえむ。

「よしっ」

「——なーにが良しなのよゆりか」

「うっひゃあああああうっ!？」

「なんちゅー声出してるのよ……」

……スマホに夢中だったから気がつけなかった、静かに目の前で立っていたらしい巫女衣装を楽そうに着ている親友と、その隣で新品のそれを窮屈そうに着ているメガネをかけた友人に気がついていなかった様子で、本気で驚くゆりか。

驚いた拍子に手からぽんとはじけ飛んだスマホを。

「わたっ、わたたっ! ……ふい——……」

……器用につかみ取った。

「……本気で気がついていなかったのねえ私たちに……でも良かった、落とさなくて。画面とか割れたら高いものねえ」

「へ? あ、あー! そーだよねー!!」

少し裏返った声で過剰なくらいの演技。

でもそれがゆりかという少女の普段だからか特段に不審に思われる様子はない。

「……あの、ゆりか、さん……ここで何を……」

「いやー、つい読みふけてたのよー!」

驚いて落としかけたスマホを握りしめた自称同志の少女は、上目遣

いで声の主の親友と友人を見上げる。

「おりよ？ りさりん、そういやなんでこんなところに？」

「あんたがいつまでも来なかったからでしょ……もう響さんもとつくに待ってるわよ」

「ありや、そりやおまたせしちやったね——……あはは」

「それにしても遅かったわね、なにやってたのよ？ 私たちを呼びに来てからずいぶん経ってるのにこんなところで……ねえ？」

「え、えつと……」

「ありや、そんなに経ってたかなあ……あ、ほんとだいつのまにやら時間が進んでおる」

「んで、なにしてたのよ？」

スマホの画面を見つめ、それからしばらく上を見て考えたゆりかは、いつものおちやらけた口調で答える。

「ちよいとな、知り合いと話し込んでね。そう、大事なイベについての情報とか！」

「ただのゲームでしょうが……こんなときにしなくつても」

「ふふん、期間限定は大切なのだよ。りさりんの好きなパズルゲームとかでも」

「そうね、忙しいのね？ んじやあんたはお揚げと卵抜きね？」

「りさりんひどいっ!? 鬼、悪魔……えーとえーと……あ、そうだ、さよちんもなにか言ってるよ！」

「え……え？」

「流されちゃダメよ、さよさん。こいつ調子よくって放っておくとすーぐこうしてサボるんだから。どーせまたなにかの作品についてとかで盛り上がってたんでしょ」

「ひどいなーりさりん。少しくらいは信用してくれたって」

「あ、あの……」

「信用がないし、あるわけない」

「いやん！ ……あ、さよちんごめんねー、私たちついこうやってコントしちやうの」

「誰のせいかな」

「りさり」

「つゆだくで良いわねー」

「それただの汁！ 汁を飲めと!?」

「だし汁っておいしいわよ?」

「そういう問題じゃないやい!!!」

「……な、仲が良い……んですけど……」

「そんなに長く一緒なわけじゃないのにどうしてかね。この煽るの

だけは得意なちっこいののせいで」

「ちっちゃい言うな!」

「……くすつ……」

……傍目には、普段通りの彼女たちの日常が流れていた。

☆☆☆

「うぐ」

狭い。

ぎゅうぎゅうだ。

いくらこたつだからと言ったって、親戚の……田舎の親戚のところにあるそれよりもずっと小さいものなんだ。

……なんでも、今日は手伝いに来ている人が多いからお客さん用の部屋……昔の家って客間ってのがあって……広い部屋から順に埋まってしまっているんだとかで、布団を敷いて寝るだけのところは満室らしい。

だから僕たちはこうして狭いけどテレビとこたつがあるって言うところに案内されているわけで……そんな中運ばれてきたお蕎麦を食べるためにつて5人が足を突っ込んだらこうなるよね。

ちよつとでも足を動かすとみんなの足がお互いに絡まるほどに狭いわけで。

……あ、これ、りさかさよだ。

だって袴みたいな感じだから。

こう、ぎざぎざした感じの裾が足先に触れている。

指先でもぞもぞしてみる。

……逃げた。

おもしろい。

「……さすがに5人はムリだったんじゃない？」

いつもと比べてなんとなく弾まなかった会話もそこそこに早速に巫女りんが代弁してくれる。

なんかこつち見て笑ってるし、多分今のりさの足だったんだな。

「大丈夫だと思っただけだなー。りさりんのとこ今年はこんなに大盛況だなんて」

「だから言ったのに。もつと広いところとか早い段階ならまだ空いていたんだから」

察するにこの夜更かし会は結構急に決まった。

……多分僕がイヴに会ったタイムミングだよね……なんか悪い。

「いいのいいの、この場所がいいのよう。わかる？ こうして狭いところの方が落ちつくんだし？ しかもすみつこの部屋っていうのがまたいいのよねえ」

分かる。

「……広いよりは確かに……。けど、やっぱりこれは……」

「さよちゃんのお家は凄かったものねえ。でもさすがにクリスマスと大みそかにお邪魔したら悪いわ」

「だねー、かがりんのとこと私のところはふつーの家だから狭いしでこー一択なのよ。それに一体感って大事だよりさりん。それにさ、ほら、私たちがちっこいもの同志はちっこいから。響、ちよつと横に詰めて？」

突然にゆりかからジュエスチャーで寄るようにと催促された。

なんで？

「いいから」

あ、理由言ってくれない。

そうして立ち上がったゆりかは……何があったのか僕の真横に来て「ちよつと失礼」って足をこたつに入れていく。

……今までは巫女りとゆりかペア以外はひとりずつ四方に座つ

ていた形になっていったのに、僕の横にゆりかが来てしまったもんだから今度はここが狭くなつたじゃないか。

というかこたつの1面に対して2つの座椅子では大きすぎてもはや寄りかかれない……と思っていたら、なんとゆりかは僕が座つていた座椅子まで半分横取りして来る始末。

体全体で……おしりで押してくるデリカシーの無さ。

まあ学生だし……でもこうやってもおしりがはみ出ないあたり。

むしろ2人で1人分のスペースしか取っていないあたり、僕たちは大人の半分で。

「ほら、私たちちっちゃいからこうしていてもそんなに狭くないよ？

ねえ？ 正直りさりんの横は狭かつたのよ」

「悪かつたわね……」

冬の、みんながダウンとかを着ているときの電車の席みたいな感じ。

真横にくっついて座られてからふんわりゆりかの匂いが漂ってきたりお尻から肩にかけて人肌のぬくもりが来たりするけど、さすがの僕も女の子して半年だからそんなに気にならない感じ。

嘘、そこそこ気になるけどどきどきはしない感じ。

それも嘘、そこそこどきどきはするけど困りはしない感じ。

これですよ。

「これで実質4人だから問題なしだね！ 足は……みんなであうんの呼吸っていうやつでちよつとずつずらせば大丈夫でしょ」

そう言いつつ、こたつの中で足をばたばたさせているゆりか。

「ちよつと痛いわよー！」

「あら、こりやすみません」

「……かがり、さん。 その、足、……もう少しだけ、えっと、かがりさんから見て右……いえ、左にずらして、もらえると……」

「あ、ごめんなさい、さよちゃん。 誰の足か分からなくてつついてしまつて」

みんなでもごもごと動いているとだんだんという感じのスペースができてきた感じ。

「……でもずるいわゆりかちゃん！ 響ちゃんとそんなにくつついて真横で過ぐすなんて！ 私もしたいのに！」

「かがりんはほんと響がお気に入りだねー。 だけどかがりん？」

「……響は今日は私のもんだ、渡さんよ」

「僕は君のものじゃないんだけど……」

一応で文句を言った僕のことをじつと見てきたゆりかは、今気がついたかのように僕の髪の毛をじーっと見つめつつひと房持ち上げてしげしげと見つめている。

「？」

「いーじゃん響、今日くらいさー。 うわほんとーに長つ、んで蛍光灯に透けるってどんな髪質なん!？」

「……綺麗な髪です……」

「ため息でちやうわよね——……」

「良いわね——……私も銀髪とか良かったわー」

「響、アルビノとかじゃないのよね？」

「え？ うん……日光に当たるとどうなるわけじゃないからね。 少しみんなよりは弱いけど」

確かに色素の薄い髪の毛と肌、赤い目っていうのはアルビノの特徴。

うさぎさんとかそうだよね。

「……あ、これ、りささんのお母さまから……きつと遅くなるとまた、おなか为空くだろうから、って、来る途中に渡されました」

「あー、ありがと。 ……っていつてもこれあまりもんのミカンなんだけどね……まあいつか、どうせおそばとお菓子だけじゃ足りないだろうし」

「なるほど。 やはりりさりと響の差的に食欲と体のサイズは比例して」

「なにか言った？ 今からでもつゆだけに」

「いーえなんにも!! それよりほらさっさと食べよおそば!! 伸びてしまいますぞ!!」

「ゆりかちゃんはいつも元気ねえ」

……夏までのこの子たちが戻って来た感じがする。
どうでもいいことしか話してないのになんだか楽しくて、僕も基本聞いているだけだから楽で。

なんでかお誕生日席だけど今日はそうじゃないし。
そういうものが戻って来た感じがしてちよつと嬉しくて。

◇

ずるずるずると、ただもくもくと麺をすすする音だけが聞こえる
ようになって静かになって、しばらく。

普段なら食べている途中でもひとくち食べ終わるたびに話し始めているこの子たちも、さすがに放っておくとあつという間にだらんとぶよんとしてしまう麺類には勝てない様子。

あと年越しっていう絶妙なタイミングの期限もあるわけだしな。

……お蕎麦もおいしいって言いながら食べてるし、それなら普段会ってご飯食べようっていうときにラーメンとか……いや、ないな。
なんでも女の子と食べるときは基本的にラーメンとかはNGらしい。

代わりにパスタがお勧めだとか……なんでだろうね。

でも確にかがりは大反対だろうし、りさりんも「え？」っていう反応だろう。

さよは反応がわからなくて、ゆりかだけは賛成だろうなあ。

あくまでも僕のイメージだけど、普段の私服の選び方とか制服に合ったシミとかの具合を見る限りそうそうまちがってもいないはず。
ちよつとだらしない男子にも負けず劣らずのそれがよく着いているもんな。

だから子供っぽいんだ、この真横でずずつとしてるこの子は。

「? お揚げいる?」

「ううん」

なんか誤解された……。

でも僕が外食するっていったらやっぱりパスタとかベーカリーと

かああいうところじゃなくて、こうしておそばとかラーメンとか定食とかそつちのほうがいいけどなあ……この辺が男女の差か。

でもお蕎麦ってお腹にたまらないからいいよなあ。

だって僕だってこうして……夕飯は抜いてきたけど、量は減らしてもらっているけど、でも食べきれそうだもんなあ。

ずずずと吸っていて、ふと思う。

……きつねそば。

いろいろとトッピングされてはいるけど……ああ、そういえばここ神社だもんな。

きつね、おいなりさま、お揚げ。

もしここに本当に神様ってのがいるんだったら……ぜひ魔法さんのこと退治してほしい。

帰りにしつかりお願いしておこつと。

ちよつと前までの僕ならそんな非科学的な存在は信じなかったけど……なにしろ幼女だもん。

今は僕自身がむしろ不思議な存在になつてゐるわけだしなあ。

39話 去る年と、来る年 6/6

☆☆☆

もう少しで年越しとあつて、先ほどまでよりも増えつつある参拝客の姿。

そんな境内を見下ろす高台の小山。

神社が管理している——つまりは私有地のはずのその一角、特に制限なく誰にでも開放されていて日中でも軽い運動を求める人でそこそこの賑わいを見せる山の上の、見晴らしのいい展望台である憩いの場。

舗装されていない遊歩道と舗装されている車道の両方で来られるものの……深夜とあつて街頭の周り意外には灯りなどなにひとつなく、不気味な静けさと吸い込まれそうな深さに包まれている。

当然として登つてくる一般の人間は誰もいない。

そもそも入ろうとしたとして木々に埋もれるような街灯がぽつんとしか見えない完全な漆黒で、さらに「年末年始はご遠慮ください」という看板まであるため常識的な人間なら絶対に入ろうと思うことさえない場所。

しかも今夜は特に晴れてもおおらず満月などでもなく、もうまもなく年が明けるこの時間帯にこんなところへ来る人など誰もいない。

……少なくとも去年まではずっとそうだったその場所。

そこを徘徊しているのは全身を防護服、いや、防弾服……傍目に見たとしても戦闘用のもので覆い、ひとつひとつの動作が俊敏でヘルメットから見え隠れする彼らの髪の毛の色は「目標としている少女」のそれととてもよく似ていたり、あるいは金色だったり白だったり黒だったりする男たちと女たち。

平均的な身長も、眼下の境内で寒い中並んで待っている人々のその平均を遙かに上回っていて筋肉質でいて、使っている言語も違うもの。

口元に備え付けられた通信機器でやりとりを頻繁にしていた彼ら

だったが1台の車が展望台に……その手前にあるはずの駐車場を無視して車が乗り上げられるぎりぎりの場所まで来て止まると、その前には既に観測班を除いた全員が音もなく整列していた。

車体もなにもかも黒塗りのせいでライト以外には存在しないかのようなその車が完全に止まると、ひとりの男、先ほどの男たちの中でも特に兵装の上等な彼——つまりは武装した兵士たちの指揮役の男が丁寧にその扉を開けた。

「……」

異国の言語で礼を言いつつ出てきたのはひとりの女性。

彼女の体格は引退して久しいはずなのに先の兵士たちにも劣らず立派で、眼光是鋭く——顔の片側には最近になってから再び若い時分のように化粧をして隠しているが、この場にいる誰もがそこに頬を覆う跡があるのを知っている。

「……」

車を降りても少しのあいだ続けていた電話を終え、彼女は改めて整列している彼らに向かい何ごとかを告げる。

「……」

彼女が話し終わると指揮役の男がひとりひとりの兵士に……一般人が居ないのをいいことに、夜にしては大きい声で指示を告げていく。

「……」

兵士たちはそれぞれ銃身の長い銃を構えつつ、四方に走りながら散っていく。

「……」

車から出てきた運転手に外套をかけられつつ、彼女はじつと下を……神社の離れの建物を、見つめていた。

☆☆☆

この瞬間だけは、もう20回以上経験しているはずだけど、でも、ちよつとだけわくわくする。

だからこそ……好き勝手して生活リズムが狂っていた時期を除いて、いつも早く布団に潜っていた前の僕だって、昼寝をしないとこまで起きていられない今の僕だって毎年がんばって起きているんだ。そして。

『……………5、4、3、2、1……新年おめでとうございます！』

テレビの前の人たちとみんなが無意識につぶやいていたカウントダウンが終わり、ゼロのタイミングで鐘が鳴る。

たったのそれだけで年が明けた。

ただの暦の上でのシステム上のことなんだけど、でもなんだか特別な気がするこの一瞬が好き。

「……………ふう」

去年から今年も無事に……あれから魔法さんが発動せず、冬眠も3ヶ月半で終わってくれたおかげでぎりぎり……かなりぎりぎりでの瞬間を迎えることができた。

この子たちと。

もう1週間ばかり寝過ごしてたらクリスマスどころかお正月さえ楽しめなかっただろう。

「あけましておめでとう！ 今年も楽しい1年になるといいわねっ」

むしやむしやとお菓子をほおぼっていたかがりが、ごくんと飲み込んで1番に言う。

今日……昨日の夕飯も食べてきたって言うていたし、そのうえに着物の帯でおながが締めつけられているはずなのに……お蕎麦のつゆもゼーンぶ飲んで、そのうえにジュースとかも飽きることなく飲み続けているのにけろりとしてくるんメロンさん。

彼女の消化器はいつたいどんな仕組みになっっているんだろ……あれだけ飲み食いしてトイレさえ行かないなんて。

ほんとどこ行っているんだろ？

ラクダみたいな体質なんだろうか。

ちようどコブがふたつあるんだし。

とてもおんなじ女の子とは思えないけど残念ながら最も女の子らしいのがこの子だしなあ。

やっぱり体格に比例するんだろうか……それか別腹みたいなのがあるとか？

「……おめでとうございます。そうですね、いい年に……今年こそ調子がよくなつて……ときどきでいいので、その。私、体育とか……出てみたい、です。みなさんと一緒に、軽くでもいいので走ってみたりしたい……です」

「お、抱負ってやつ？ さよちん良いねえ」

ペこりとお辞儀をして前髪がみんなふあさつとこたつの上に乗るのを眺める。

……髪の毛が伸びてきたからこそわかるんだけど、きつとあれだけ長いと相当めんどくさいはず。

物が見えにくいしいちいちかき上げないとだしで。

切ればいいのについて思うけど、あれだけ目が隠れるくらいになつていと視線を遮れるから恥ずかしがりにとってはめんどくささよりも樂さが勝っているのかもしれない。

僕もその気持ち、よくわかる。

でも髪の毛をかき上げるしぐさが……必要もないときでさえ無意識にするくらいにクセになつているあたり、やっぱり切つた方がいいと思うんだけどなあ。

僕と違つて切れるんだろうし……まあいきなりは無理か。

「……響さんも」

「ん？」

ぱつちりと彼女のすだれみたいな髪の毛越しに視線が合う。

「早く……元氣になれるといい、ですね。……お互いに、がんばりましょう」

「……そうだね」

僕の場合は治るもなにもないんだけど……とつさに答えちゃつた。けど原因不明のなにかを抱えていることには変わらないから嘘でもウソでもないし。

「おつめでー」

……そして巫女りんが甘酒でちよつと……いやこれ酔つてない？

大丈夫？

こういうのって学生はやばいんじゃない？

まあここには僕たちしかいないわけだし外に出なければ大丈夫だとは思うけど。

「そうよねえー、けつきよくー、夏休みの終わりに立ててた計画うー、ほっとんどできなかつたしいー？ ねえー？」

……顔は赤くていつもの元気がとろんとなっていて、着慣れているせいか座椅子を倒してだらしない格好をしている巫女りん。

……普段はゆりかを見張るって感じでもつとしやきつとしているもんだから……なんだかすごく新鮮だけど、だらしなさの割には着崩れていない巫女りんがいつもよりも高い声で話している。

というより、これ、甘え声ってやつだったりする？

同世代の男子が聞いたらやばそう……僕でさえどきつてするし。

「私たち4人だけだったりー、クラスで話したら聞きつけられて一緒に来たりしたー、他の人とかもいたけどさあ——……」

「ひつく」とかしてるし……いつの間にか？

甘酒？

甘酒ごときで酔っ払っちゃったの？

「……響さんがよくなつてえー、また長時間出かけられるようになったらきつとお、今度こそよー？ せつかく仲良くなつたんだしい悲しいじゃない——……」

いつも以上にとりとめのない感じの話し方になっているけど……まあ中学生にとっては、アルコールが入っていないことになっているはずだけど微量は入っているっていう甘酒をがぶがぶ飲んだらこうなるのかもね。

あるいはお酒に弱い体質だったりするのかもだし。

僕たちが来てからもとときどき呼び出されて抜けて神事とかに付き合っていたみたいだし、ひよつとしたらお神酒とか飲まされたのかもしれないし。

いいなあ、お神酒。

こんな甘酒じゃあな。

やっぱり甘酒は甘酒でしかなかったんだし。

「そだねーつてりさりん……だいじよぶ？」

「だいじよーぶよお——……慣れてるしいーあははっ」

「こりやアカン。学校にバレたらアカンやつや」

「なあんで関西弁になるのよあつははは！」

「痛い痛い！ 背中ばしばしやらないで！ 縮む！」

「縮む身長なんてあんたにはないじゃないのあははははは！」

「よーし、普段からどう思ってるのかよーく分かったよりさりん……
覚えてなさいな……」

そう言いつつもぞと抜け出したゆりかは笑いこけているりさ
りんの後ろへ。

「ほれ、お水飲みな」

なんだかんだでやっぱり仲が良いらしく解放しだした彼女。

これって飲み会とかで見る場面なんじゃ……まあ僕はそんなの出
たことはないんだけども。

「とりあえず大丈夫っぽいから大丈夫。 ん？ 私もちよつと酔っ
ちやつてるかな？」

またもぞと僕の肩につかまりながら入り直してくるゆりか。

ちらつと見てみるけど、裾を抑えて大変そう。

「やんっ」

「……」

やっぱり着物だとそういう動作、難しそうだな。

というか高そうな生地なんだけど、こうやってこたつとかに潜って
平気なんだろうか。

ゆりかまで巫女服だし……あ、そういえば褒めるの忘れてた。

さつきゆりかだけが居なかったから……なんかのタイミングで褒
めとこ。

「……ま、りさりんの言うとおりでさっ？」

こつちを向く気配に仕方なく僕も合わせると、すっごく近いところ
にぱつつんさんがいる。

「夏祭りとか9月の終わりとかでもけっこーな近場でやってたりする

どこあったし？ そーいうところで浴衣とか着て遊びたかったもんねえ、5人そろって。 ……響にFPSで勝てないこのうっぷんを屋台で晴らしてやりたかったし」

「……そんなに負けていたかな、君は」

「別チームでやったときの戦績、帰ったら見てみてよ。 私、わりとボロ負けだから。 響と一緒にチームだとキャリーしてもらえてただけっぽいよ……響、勝っても負けてもそんなに動じないもんねー、気にもしてなかったでしょ。 ……ね。 そんな感じだったのに連絡がつかなくなっちゃったもんだから気が気じゃなかったからさ」

「……そう、か」

「うん」

話していてもこうしてしよつちゆう、ちくりとくる。

何気ない、悪気のないはずの会話の中にこう……僕だけがちくりと感じている。

「あ、もーぜんっぜん気にしてないよ？ だって病気だもん、しょうがなかったんだからさ。 今のもほんとにただ『こういうことがあったの』って言っただけ。 気にしないで」

「……ありがとう」

さっきのさよのに釣られてか、口々に今年の抱負……そのほとんどがみんなで出かけたところとか遊びたいことしかないのが気になるけど、そういうものの話に移っていく。

……この子たちはこうして毎年、少しずつ成長して。

仮説どおりに僕がこのままだったとしたら、もう何年か経ってしまえばきつと——少なくとも見た目は大人と子供の関係になる。

精神年齢的には近くなるけどな………相対的に………けれども肉体年齢の差は開いていく一方。

いつかはお別れの日が来る。

けどどうせこの子たちだったとしても高校に入るタイミング、大学、就職で何回も迎えるんだ、普通のことなんだろう。

僕がそういう友達って居なかったもんだから、今になって急に惜しくなっているだけなんだ。

「……みんな」

そう思ったら口が勝手に動いていた。

「あら響ちゃん？」

「およ？」

「なあーにー？」

「……どうか、しましたか？」

……今日はなんだか楽しさの中にしんみりが入っているからか、ぽそつとした1回で僕の言葉がみんなに届いた様子。

うん。

1年の始まりとしてはいいスタートかも。

こんなことで喜ぶのもどうかって思うけど、でもちっちゃい声でも聞いてもらえるのは嬉しい。

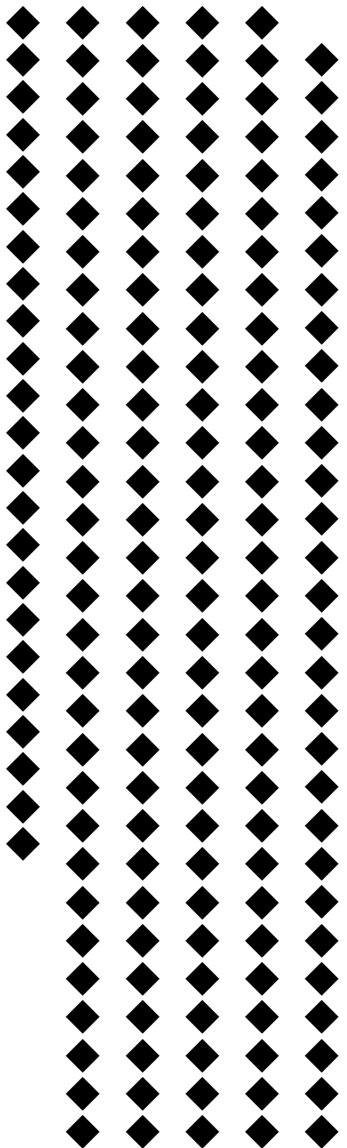
「……みんなは将来の夢とか——◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆」

☆☆☆

その幼い彼女／彼の姿は複数の……スコープで覗られている。

そのうちのひとつがようやくよくに見つけた、わずかな木造の家屋にできた極小の隙間から……熱での透過なしにダイレクトに十字の中心が、銀髪の幼子の……顔から頭、そして背中に焦点を合わせる。

☆☆☆



「……?」

一瞬……なんだかよくわからないけど、なにか細長いものが僕めがけて飛んでくるような感じがしたんだけど……でも、なにもないよね……僕もちよつと酔ってるのかな。

……甘酒で？

無い無い。

「っ……」

一瞬だけ視界がぶれる……というよりはなんだか体に軽くぶつかってきたような揺れたような叩かれたような、そんな感覚。

……変なの。

不整脈かな？

ほら、今日は珍しくお酒呑んでないから……この時間に。

あるいは夜更かししてるからかもね。

「ん？ どしたの響」

「いや、なんでもないよ、気のせいだったみたいだ」

なんか言い損ねたけどせっかくみんなが注目して聞いてくれてるんだし、聞いてみよう。

「それでみんなには『将来の夢』っていうものが――」

「していた」というのはいつも着けていたから。

ある幼女からのアドバイスを元に、最近は何受けが比較的良好になったそれを今は外しているから。

だがその奥の目は……光っていた。

月明かりはない。

ただその目が、目そのものが星のように光っていた。

その輝きは眼帯をつけなおしてしばらくして発光するのを止めたらしい。

手元には杖ではなく刃物が……つい今し方まで小枝や草を断ち切るために使い、その前には「障害物」に対して使用していたまっすぐで鋭利な刃物があった。

利き手には長細いその刃物を持ちもう片手にはその鞘を持っていて、つまりは仕込み杖というもので。

彼は体についた枝や葉を払いつつ、きん、とただの杖に戻し、彼女の元へと近づいて行き……隣に立ち、とん、と先を下ろして体重を預け下を見下ろした。

「……………」

いつものようにほつりとつぶやくような、しかし低く深い声のせいでそれで十分な語り方で。

「……………つはは。」

くだらない冗談とでもいうように笑い未満の笑いをする彼女。

それまでずっと手元か眼下から目を離さなかった彼女が、そのとき初めて大きなため息と共に眉間を押さえる。

手渡されたタブレットを受け取った彼もまた画面に集中し、耳に入れている機器から聞こえてくるふたつの会話を聞き始めた。

「……………」

今までは表情を変えることもしなかった彼女がそのとき初めて顔をしかめ、その口からは落ち込んだような声が……切るような冬の息吹に吸い込まれていった。

☆☆☆

なんかさつき変だったんだよなあ……やっぱ不整脈？

25越えるとだんだんそういうの出て来るって言うし……あ、でも今の僕は子供なんだよなあ。

うーん。

これ以上みんなに注目されたくもないから動かずに体の感覚を探るけど……なにもないよなあ。

なんだか変な感覚……なにかが僕に衝突したような感覚があったんだけど気のせいなんだろうか。

「にしても将来の夢かー。大きく出たねえ響」

おっと、そういえばみんなの視線が僕に集まっていたんだ……さすがに考えごとしちや悪いな。

「そうかな。新年の話題としてはそこまで変わったものでもないと思うけど」

「いや——……ま、こういうときだからちよいハズくてもノリで言えるかあ」

甘酒のせいっていうよりは深夜のテンションなんだろう、みんなと同じようにほほに赤みが出ているゆりかが反応してきた。

もちろん片手にはゲーム機。

……:会話をしながらゲームをしながらテレビを聞きながらっていう器用な子だ。

「でも響が話題を提供だなんて珍しー。……ね、甘酒ってホントにアルコール入ってないんだよね……？ りさりんはお神酒とか呑んじやっただらろーけど響は……」

「ほんの微量は入っているとのことだけど……それはそうとして、ゆりか、それはどういう意味なのか」

「いんやあ特に意味はないよ？ たぶん」

今は呑んでないし僕だって呑みたいよ。

でも呑めないんだ……持って来てないから。

「んじゃせつかくだし最初に反応した私から言ってみよつか！」

「ゆりかからでいいのか？」

「だってえー、せつかくだから響のはラストに聞いてみたいし。ねえ？」

「え、ええ……」

みんなが頷いている……女の子同士の独特の感性で僕のは後回しにされるらしい。

「私はねえ……ほれ、悲しいことにたぶん何年経ってもたいしておつきくなれないでしょうこの見た目。 だってお母さんもだからねえ……このロリロリしい見た目を活かして今流行りの実況者とか、あるいはプロのゲーマー！ なぁに、世の中の男の半分はロリコンなのだ、だからこそこの私の出番なのだよ!!」

「あつはは、ゆりかが男に！ そんなちんちくりんじゃ誰も寄ってこないわよ、ブラだって」

「あ、ちよいりさりんや」

「むむー!!」

お口チャックされたりさりんのことは……気がつかなかったことにしよう。

「……っていうのは無理そうなので、おとなしくサブカル関係のお仕事したいなっていうふわっふわな感じよ」

ぐいっと甘酒をひとおりして……酔いはできないのに、けどそうしてゲーム機をかたんと置いておちやらけた感じがすつと引く。

「……マジメな話ね？ ちよつとは考えたし調べたしやる気だったのよ？ けどさ、あーいう人気商売って個人の人気っていうかビジネスとキャラクターってやつ以外にも資本とか人員っていうバツクアップが不可欠なの。 世知辛い話だけど結局はコネと組織力ってことで私は言われたとおりにやるだけな会社員とおんなじことになるらしいのよ。 知ってる？ あー言うのって始めて1年以内にほとんど止めちゃうの。 病んだりストーキングされたり囲われたりして」

……この子、本当に中学生？

「なにより一部のトップ層以外は短命な宿命だしなんか変なのがつい

てきたら精神病みそーだし……飽きられたらそこまでなのだ。

ブームってヤツは読めないもんだからねえ……あと顔出ししたら間違いない面倒だし」

「ぶはっ……そうねえ、いくら脳天気なあんたでもたしかに大変そうかもー」

「りさりんの評価がいきなり辛辣う！」

「こくこく……ふう。今のはそこまで考えてたのねって褒めたのよ？」

顔は真っ赤なまんまだけどちよつと落ち着いたらしいりさりんのろれつが戻って来た。

「いやりさりん今私のこと、のーてんきって」

「そーだったっけ？ でもゆりかかってふたりいるから問題ないわよね……あはははは、ゆりかがふたりって！ あっはははは!!! のーてんきがふたつよふたつ!! あー苦し」

「そこで唐突に普通のテンションに戻らないでよ……でもだーめだこりや。おつかしいなあ、お水ならたつくさんこれでもかって飲ませたのに。……りさりんや、ちなみに響は何人いるのかね？」

笑い初めてまた顔が……さつきよりも真っ赤になっている巫女りん。

……これ、ほんとうに大丈夫？

りさりん笑い上戸ってやつじゃないの？

「うーん……重なってるう……とりあえず5人くらい！ もっと増えてもいいわね!!」

「5人とな！ みんな聞いたかね！ オリジナルの響自身をここにひとり残しておいて、他4人をひとりずつ配布すればまるっと収まるじゃない!!! みんな、ひびきんズを好きにできるよ!!!」

「ゆりかも落ち着こうか」

「やん、私は素面よ？」

ゆりかは甘酒しか飲んでいないはず……だよな？

いや、ときどき席を外しているし、ひよつとしたら巫女りんのお家の人からこっそり？

これが外に漏れたらまずいかも……未成年飲酒がふたりだし。
いや、こつそりな僕を含めたら3人か？

来る前に景気づけにつてほんの軽〜くだったから「は〜って吐いてみてー？」つてやられたらバレちゃう。

「じよーだんよじよーだん。でも私には響はやつぱひとりしか見えないなあ。……ねね、響つて分裂したりしない？」

「僕を何だと思っっているんだ君は」

「そうよ、修行不足よゆりか！ ちゃんと5人いるもの、もつと鍛えなさいー！」

「了解でありますっ！ そしていつかマイ響を手に入れるのだ！」

「……さつきからよく話の流れがわからないの……分かる？ さよちゃん」

「えつと、その……かがりさん。それはですね……」

どうも静かだったかがりは途中から着いて来られなくなっていたらしく、今までの流れをわかりやすいように説明し出すさよと顔をつきあわせている。

ハテナしか浮かんでいないかがりに対して懇切丁寧に、はじめから説明をしているさよ。

がんばれ。

がんばつて。

かがりへの説明はかなり根気が要るから……主導権を握れないとすーぐに話題が逸れていくつていう意味合いで。

理解力自体はあるんだけどなあ……なにせくるんくるんメロンなんだ、何かを思いついたら手遅れなんだ。

「……やつぱ、ほんとにぼわぼわしてきてる。……神社のだから手作りなの？ この甘酒。アルコール抜けきつてないんじゃないや……でももう一杯！」

なるほど。

あ、いや、お酒のことじゃなくてさつきのゆりかの話のこと。

好きなことを仕事にするつていうのはとつても大変だつていうけど、そうやつてきちんと考えていろいろと調べて現実を見ながらだつ

たならいいのかもって。

そんな感じで探していくのなら、きっとなにかが見つかるとう。

……そして僕も巫女りんとおんなじ感想だったのは黙っておこう。だって、その……普段のお調子っぷり、いや、子供っぷりが……。

「響？　なんか変なこと考えてない?！」

「いや、なにも?！」

変なことは考えていないからセーフ。

「そー？　あやしいなあ」

「……………」

ゆりかがやけに人の機微に敏感なのはいつもどおりだな。

「…………ま、話を戻すとしまして。……今はまだふわつとしてるけどさ、私、ゲームでもアニメでも小説でも映画でもドラマでも……っていっぱい好きなものあるからさ、その中のどれかで活躍じゃなくても貢献とかできそうならどれでもいいのよ。あえてかたくるしく言ってみるなら出版とか制作とか？　作り手つていうのでも才能さえあればいいかなーって。まーだぜん分らないけど」

「そうか。なれるといいね。ゆりかの好きなことだもんな、応援している」

「うへへえー」

僕みたいに手遅れになる前に。

できたら学生のうちからしたいことを見つけておくといいねって。

僕も多分やりたいことがないから就活とかしなかつたんだろうし……きつと僕みたいな人もそれなりにいるんだろうから。

「んあ、じゃかがりんにバトンタッチい！」

「…………え？　私?！」

少しだけ赤みが増したほっぺたを隠すようにしつつ、照れ隠しからか唐突にかがりのご指名。

さよから説明を受けていて、でも思っていたとおりに全然わかっていなさそうなくなるんさんへ話題を投げた。

「えつと、なんの話でしたっけ?！」

「……将来の夢だよ、かがりさんや」

「? どうしてさん付けになったの? ゆりかちゃん」

「も少しメモリ増設したほうが、あ、いやなんでもない、ささっ、どうぞどうぞ」

違うんだゆりか……メモリ、短期記憶能力はちゃんとあるんだ。

でもそれがさつき観た番組の何かだったり雑誌とかマンガの目に着いたのをずっと反芻していて駄目なだけなんだ。

「めもり? ……えっと、そうねえ……ちゃんと考えたことはなかったけど、私ならきれいなお洋服とかが好きだから、そうなると思えばいいよ。さつきは……」

うん、そうだろうね。

君は着飾るのも好きだけど着せ替えるのも好きだもんね……店員さんと盛り上がったもんね……その傍で人形してた僕は良しく知ってるよ。

「ひとことに服飾と言ってもデザイナーさんだったり実際に作る方だったり、さらに進んでみるのなら特定のデザインの専門学校に通ったり……好きなデザインを作る人が見つければ、その方に弟子入りしたりすることも考えられそうね」

「……かがり? ……そこにおわしますはかがりさんですか?」

「やあねえゆりかちゃん、私は私よ!」

「んなバカな」

ゆりかが目と口を開けっ放しにしている。

その場のみんな……僕を含めた、かがりを除いたみんながそうしている。

だっってくるんさんがくるんさんらしからぬことを、深く考えもせず、にさらっと言いのけたんだ。

さつきまでのゆりかの話聞いてただけのこの子が。

……いやいや、この子も一応は中学2年なんだ、一応は……それくらい知識と思考は持ち合わせているんだ。

ただそれをいつもはゼーンぶ、目の前の好きなことだけに振り分けちゃっているだけで。

まじめにやればできるっていうのは夏休みでよくわかったしな
……となるとこの子には誰か面倒見のいいスパルタなお目付役が必
須ということになるわけだけど。

……そうか、弟子入り。

ああ言う世界は厳しいって言うからきつと師匠とかがいれば……

！

きつとそのうちに見つかるはず……それもまた明日の朝に祈って
あげよう。

お賽銭を奮発しておけば願いは届くかもしれないんだしな。

40話 「男の子」／「女の子」 2／7

つけっぱなしのテレビの向こうでは、知らない芸人の人たちがお酒を片手にわいわいとやっている。

いいなあ……僕の手には甘酒しかないというのに世の中は理不尽だ。

でもこんな時間にお酒飲んだら寝ちやいそうだししょうがないか。たまには飲まない日っていうのも大事なんだ。

まあ来る前にちよつとだけ呑んだけどあの程度は呑んだうちに入らないからいいんだ。

景気づけの1杯だったんだもん、なんの問題もないよね。僕の本当の年齢はお酒オツケーなんだ、何も問題はない。

そのお酒も、肝臓がどうこう以前になんとなくの習慣で無意識で飲むようになってちやうとなんだかお酒のおいしさと楽しさが減るからこういう日も必要なんだ。

たまに忙しかったり気が向かなかつたりして飲まない日が続いたあとの1杯はまた格別なもの。

だから今夜は素直に諦めよう。どうせ飲めないんだし。

いや、帰ったら……いやいや今日くらいは、年が明けた今日くらいは止めておこう。

厳密にはもう昨日だから帰ってからならいいかもしれないけどつて屁理屈が思い浮かぶけど……さすがにここまでこだわるのはアル中っぽいって感じるからやっぱやめとこ。

ともかく今、ここではお酒は飲まないし飲めない。だから口が寂しいんだけど食べものは喉を通らない。

かといってばかばかお茶とかコーヒー飲んでいるとさつきみたいに動悸みたいなのがしてきちやうみたいだし。

たしかアルコールだけじゃなくってカフェインでもあんな状態になる人がいるって聞いたことがあるけど……まさかそのせい？

それでさつきのあれが？

……いやいや今までそんなのいちどもなかったじゃないか。
だったらさっきの体が揺れたみたいな衝撃、あれはいつたいなん
だったんだろ。

なんかああ言うのって怖いけど……多分ネットとかで調べると「末期です」とか出て縮こまるけど実際には大したことないあれだって
思っておく。

あの後しばらく身構えていたんだけども何ともなかったんだ。

それよりも今はせっかくの新年のお祝い中なんだ。

かがりの話はやっぱり思ったとおりにあつちこつち行っていたけど
どうやく戻って来たみたいだし聞いておいてあげないと……そも
そも僕からの話題だしな、珍しく。

みんながそれをまじめに聞いてくれるっていう奇跡まで起きてい
るんだし。

「……それでね?」

ずいぶんあつちに行つてこつちに行つてつてした感じの話がよ
うやく戻つて来たのを感じ取つた僕の耳が彼女の言葉を認識し出す。

「その人に合うお洋服を選んだり、あるいは作つたりもいいわねえ
……お化粧品とかを手伝うお仕事だったりエステとかでお肌から綺麗
にしてあげたり! それからそれから!」

「……あの。かがりさんは、その……かがりさん自身が綺麗になる
のは」

さつきから軌道修正をがんばっていたさよの顔には疲労が浮かん
でいる。

「それももちろん好きなんだけれどね? ……そうね、響ちゃんの
きにはつきり分かったのよ」

「……ん? 僕?」

なんで?」

「ええ」

ええじゃないけど。

……おもむろに僕のそばににじり寄つて来た彼女は……何を思っ
たか僕の顔をのぞき込みながら、ぱさつと髪の毛をひとふさ持ち上げ

てくるんくるんとされてふわつとされた。

ぱさりとほっぺに当たる僕の髪の毛。

「もちろんまだまだ決まっただけじゃないのよ。けど、去年ね？ ……初めての、こっそりのアルバイトで、そのはじめのはじめで響ちゃんを着飾ってコーデイネートしてあげたときにね？ 思ったの」

あげた？

ほんとうに？

「させた」のまちがいじゃ？

「響ちゃんのおときみたいだね、その人の魅力をその人ができる限界以上を引き出してあげて引き出してみせる……そんなお仕事したいわって」

「……そうか」

じゃあなんで今僕の髪の毛ふあさってしたの？

まあ多分意味はないんだだろうけども……それはそれとしてコーデイネートとかは合っただけじゃないかな？

服を売るところなんだ、来る人の大半は望んでいるわけだからなんの問題もないはずなんだ……僕が例外だったというわけで。

この子だって普通の男相手なら無難に流行りのを進めたんだろうし。

「みんな夢があつていいわねーひっく」

「りさりんだいじよぶ？ 酔った席ってヘンなこと言いやすいから気いつけて？」

真つ赤な顔の巫女りんが……あ、これ完全に場の空気っていうやつにも酔ってるな……お酒で理性が飛びかけたところにみんなで年を越しているっていうイベントでハイになってる。

眠気を無理やりにコーヒーとかお茶とかおしゃべりでぐり抜けているって感じなんだし、場の空気にごこまで酔ったとしてもしょうがないだろうけども。

みんな多かれ少なかれそうになっているみたいだし。

「なんだか暑いねー」って言いながらぐまかしあっているのがほほえましい。

それにしても巫女りん。

僕を着せ替えし続けたかがりとか、連勝し続けてハイになっているときのゆりかによく似ている。

お酒なんか飲んでいないのにそんな感じになっているあれに。

さよは僕と同じでお酒を飲まないとそうはなれないかもな。

彼女だけは……あ、ほっぺた赤くなってる。

まあストーブもついてるし、気がつかなかったことにしよう。

「私は、ほおら。知ってのとおりこの神主の長女でしょお？ 順当に行けばー、なんにもしたいことが見つからなければー、多分お父さんを継ぐことになると思うのよお。女だからそのへんは大変らしいけどお、少子化だしで今はその辺緩くなってきたって言うしい」
「たまたま目が合ったって思ったら「どう思う？」って聞かれた僕は、ちよつと考えてみて答える。

「……その年なら、まだしたいことが見つかっていないっていうのが普通だよ、りさ」

ここに25になつてもしたいことが見つからないニートも居るんだし。

「そういうものが、方向性だけでもはっきり見つかっているふたりのほうが珍しいんだ。気にしなくてもいいと思う。君ならきつと何かを見つけられるよ」

「ありがとー響さーん……うへへえ、響さんに慰められちゃったー、ねーゆりかー？」

「適当なこと言っただけ酔っ払いだからそれで満足らしく、ゆりかにまとわりつき始めた。」

「嬉しいー♡」

「響、コイツはもうだめだ、酔っ払っている」

「そんなことないわよー、ちよつとお父さんたちから『りさももう2年なんだしちよつとくらい』って」

「危ない発言禁止ー」

「ちよーつとだけ飲んでわぶっ」

「遅かったか……ぬう」

びたつと両手で口チャックされた巫女りんの発言は表には出せないもの。

今どきはスマホで簡単に録音も録画もできちゃうから危ない危ない。

この子たちは大丈夫な感じだけど万が一はあるんだ。

「むうー、ゆりかのけち。 けち」

「落ちつくまでこうしておかねば……にしても酒グセ悪いのね、りさりん」

本当に飲んでたんだね……お酒。

いいなあ。

家にもよるだろうけど親が飲ませるところだってあるって聞くし中学生な巫女りんだし、こういうときくらいはいいんだろう。

家柄が家柄だからバレても「神事のためです」で乗り切れるだろうし、りさりん自身もお酒に溺れる質の子じゃないしな、大丈夫だろうきつと。

「……も、大丈夫？ やう、あいこと口走ったりしない？」

「あ——……ちよつと醒めてきた気がするかも」

「後悔しないようにね。 や、マジで」

少しだけ座っていた目が元に戻った巫女りんが解放された。

「ふう。 んでさっきの続きだけどね、私もここに愛着があるわけよ……だってちっちゃいころからこの服装楽しんだし。 一応ね、このへん一帯が昔は家の敷地だったらしいから食べていくのには困らないって言ってたし、お父さんが」

「このブルジョワめ」

「聖職者階級ってそのへんどうなのよゆりか」

「あ、いやテキストに突っ込んだだけだからわかんないやい」

うん、ゆりかって結構適当なワード使って楽しんでるよね。

「ま、とりあえず大学までみんなと行ってみたいいろいろ勉強してみたい経験してみたい、なにか見ればそっち行って、そうじゃなければって感じかしらね？ ……そっか、進路調査とかそのうちあるのよねえ……どうしよ」

話し終わるやいなや、電池が切れたようにぱたりと横になる巫女さん。

そんな風は無造作にしても着崩れないというのが普段の経験を表している。

「？」

ふと視線が刺さっている感じに反応してみると、さよの目が……片目が前髪に隠れている眼鏡越しのそれが僕に向いていた。

「……」

「多分言いたいこと考えてるんだろうなあ」って同じ属性のよしみで分かったからじつと受けて立つことしばし。

「私……ですね」

「僕でもいいって思うし、決まっていらないなら別にいいんじゃないかな」

仲良くなったって言ってもこれだけの人数の前だから大変だろうし。

「さよちゃん、思い浮かんだことを口にするのでいいのよ？ そんなに深く考えなくても」

そこへメロンさんがいいことを言う。

「そうそう、簡単なのでいいと思うよ？」

なんかゆりかがすっごくマジメだったからそういう空気なだけだけど、僕は元々「なんかある？」って感じで聞いてみただけなんだから。

「………えっと、私も、まだ、決まっていはいないん、です………今まで病院で、本とか………読むくらいしかできなかつた、ので。 けど」

「すう、はあ………と、落ちつくためのひと息。」

「………私も。 私も、たくさん勉強、して。 なにがいちばん、私に向いて………いるのか。 たくさん、たくさん………試してみたら、決めたいです。 まだ中学生、ですから」

「そうか。 えらいな」

「……そんな。本当に何も、分からないので」

「中学生だからそれで良いと思うよ。君たちの学校は中高一貫だつて言うし」

特に君は体が弱いんだし焦る必要もないって思う。

「……それで響さんは、どうなんですか?」

「そーだよ、ひびきん。トリはもちろん主役じゃない?」

「そうねえ、そういうえば響ちゃんってさよちゃんみたいに病気がちだけど、たくさん本とか読んでいるみたいだしおんなじような感じかしら? あ、でもいろんなことを知っているわけだし夢とかあつたり」

「かがりんストーツプ。……かがりんさんや、人のネタを潰して差し上げるでない」

「え? ……あらごめんなさい、つい」

「そーよ、響さんならもつとなにか、こー……すうこーな目的があるはずにゃの!」

「あー、いそがし……りさりんや、お水たくさん飲みなさいな。ほれ、もつともつと」

かがりはゆりかの指摘にわたわたしていて、さよは巫女りんのあまりの変わりつぷりに……思考停止中で、巫女りんはゆりかに介抱され直して。

まるで飲み会だ。

りさりん以外は場の雰囲気と甘酒で酔っていて顔真っ赤だし、話も飛び飛び。

ここにお酒の瓶でも置けば飲み会だと思えない雰囲気。

まあ飲み会なんて出たこともないんだけども。

出たとしたってきつと、僕からは話しかけられずに……そう、ただお酒を飲みながらぼーっとみんなの話を聞くともなく聞いているだけな気がするし。

うん、間違いない。

それで「響君は誰とも話さないの?」とか絡んでくる人が居なければ家でひとりつきりで呑んでいるときと変わらないんだろう。

悲しいけど僕のこと僕がいちばんよく知っているんだ。

「で、どーなのよ響?」

りさりんの介抱が済んだゆりかが……あ、ちよつと着崩れてきてる。

「えつと……うん。僕も特にまだなにも……したいこととかやりた
いこととかは。とりあえずでこのまま療養しながら……」

口が勝手に普段のような言い訳をしている。

……今までなんにも、本当になんにもしてこなかった僕。

こんな状況になつてもまだ家にひとりで籠もるだけのつもりで、時
間を消費するコンテンツだけは豊富な環境に感謝しながら魔法さん
が解けるのを待ちつつ、ただただ生きるだけ。

長くても数年でこの子たちともフェードアウトして、そのあとは。

……また、きつとこれまで通りのニートな生活で歳だけを取ってい
くような――

「……ダメですっ!!」

さよが唐突に、裏返るような声を上げていた。

「っ!?!」

「さよちゃん!?! びっくりしたあ急に」

「あ、ごめん、なさい……」

それも僕の近くまで……顔同士が、お互いの髪の毛が1本1本見え
るくらいまで来ていて。

もさつとしている前髪のすき間から、レンズが、目が、まつげが、瞳
の奥が、はつきりと見えるくらいに近づいて……巫女衣装が少し
崩れていて、その状態でよつんばいになりながら僕に迫ってきてい
て。

「……………」

そんな自分に今気がついたのか、普段に無く目を見開いて……

あ、だんだん赤くなってきている……固まっちゃったさよ。

「あらあら」

「あらあらじゃないようかがりん」

「さよさんが響さんに迫ってるう、あははっ」

……なんかこの子の地雷でも踏んじやつたかな。

「……はわ、はわわわ……」

唇がぷるぷるしたさよが普段のかがりのように押さえ付けているから僕は動けない。

……なんで君たちっていつも僕の上に乗っかってこようつてするの……？

うん、僕がちっちゃくて肉体的には同性だからだよね……でもちよつとは遠慮してほしいって思う。

ほら、着崩れてるから君の胸元も下が見えちやつてるし。

もちろん僕はそういうのに興味がないから一瞬で逸らしたけど。

40話 「男の子」／「女の子」 3／7

「……私、これまでに何回か……成功率が低い手術、受けたことがあるんです」

さよが聞いたこともない声の大ききでいきなり僕にNOをつきつけて、僕も含めて5人もいる空間なのにしーんとしてちよつとして……なんかいきなり重い話をし始めた。

つけっぱなしのテレビから音はするし、外からも……囃しつていうのかな、あるいは神事とかかな……くわしくないからよくわからないけれども「とにかく神社といたらあれ」っていう音が響いてくる。

「うん。……話す前にとりあえず、少し離れた方が良いんじゃないかな。僕は平気だけど、君にとつては」

「えっ？……あ、あの、ごめんなさいっ」

顔と顔、目と目がすぐ近くつて鼻がくつつきそうだったのに気がついたらしい彼女はあわてて離れる。

目線が下の僕をのぞき込む感じだったから前髪がすだれみたいになつてたもんね。

普段の彼女のにもこんな近くで人と視線を合わせるのは大変だろうし……僕もちよつと恥ずかしかったから。

「……ふう」

ゆりかか誰かのため息も聞こえる……そうだよ、さよがバランス崩して転ぶんじゃないかって心配だったよね。

ちよつと気まづくなつて視線を外した先にいた巫女りんは今のさよの声で飛び起きたらしく、目をぱちくりして……きつとびっくりしたせいで真っ赤だった顔が色づく程度に戻ちやつている。

きよろきよろとみんなを順に見回してさつきまでの巫女りんみたいな色に染まつている巫女さよさん。

赤くなるのも代わりばんこか。

仲がいいな。

でもなんだかすつごく大変そうな話になってきている気がする……というか本当に唐突だな。

きつといろいろと話す前に考えて、でも口が動き始めると焦っちゃってせつかく順序立てていた話をすつ飛ばしちゃって、いちばん言いたかったことだけを先に言っちゃうんだろう。

わかる。

僕もそういう性格だから。

性格って言うより生まれつきのなにかなんだ。

「……それで？」

だからまずは話させてあげよう。

こういうのだけは得意なんだ。

「あ、はい……それでですね、その手術のたびにですね？ 大抵は、手術の前の夜と……白い部屋に運ばれたあとに、必ず言われるんです。

自分たち……先生方は全力は尽くすけど、手術自体は必ず成功させるけど、そのあとにいちばん大事なのは、本人、私の体力と、そして……生きようという、意思だって。体が治ろうとする力って、そういうものだって」

慣れないことをしたからか、いつのまにか後ろに来ていた巫女りに勧められてきちんと座らされる黒めがねさん。

なんかわたわたして転びそうだったもんね……着慣れない巫女服だし、普段の何倍もしゃべってるからそうなるよね。

「せつかく話しているのに当の本人が倒れちゃったりしたら困るからね。落ちついて、ね？」

「はい。……それですね、響さん」

「うん」

「だから、手術の前にはたくさん、したいことを考えたり、リストアップ、したり……私の場合、その、読みたい本を、たくさん積んでおくことなんですけど……でも、そうして、そのあとにしたいことをたくさん考えておいて。……手術が終わったあとに、取っておくように、……と。そう、言われるんです」

「……そうか」

ほーっ、と息をつくさよ。

多分言いたいことのうち、まとまってる部分だけは言えたんだろ

う。

大丈夫だ、伝えたいことは僕に届いたから。

……きつと勇気が要ったんだろう、今さらになってさらにあわあわしだす彼女を見ていると胸が締めつけられる気がする。

僕は健康そのものの生活をずーっと続けてきて……むしろひきこもって好き放題して体調を崩せるくらいには体がなんともなくって平気な人生してきて、さらに魔法さんが……たぶんひどい病気とはこの先にもご縁がなさそう、だから病気とかとは無縁かもしれないなくて。

ただの想像だけど、でもこの体になってから1回もカゼを引いていないんだ。

普段なら年に何回かは軽くても引くはずのを、この1年……半年で1回も。

だからきつと僕はさらに健康体になって。

小指をぶつけてもだえるくらいはするけど、階段から落ちるくらいの危ないのからは守られちゃって。

だから、めんどくさいからって、誘いを断るのにちょうどいいからってついちゃった、この病弱っていう入院っていう嘘がずっしりと響いてくるんだ。

でも。

でも、タイミングが揃ったら、いずれは言わなきゃいけないんだ。

だからこの苦しい気持ちも、そのときにぜんぶごめんなさいするために取っておく。

「……あの、急に大声。ほんとうに、ごめんなさい」

「いや、僕の方こそ」

「でも……いえ、だから」

前髪をかき上げて両目が珍しくはつきりと出た状態のさよが、僕を見てくる。

「……だから、そうして手術を乗り越えてこられたからこそ、今、こうして。みなさんと……友だちなんて、入退院ばかりで、ろくにできなかつた私が、こんなに、仲のいい、友だちと、みなさんと。……」

おはなし……できるようになっている、んだと、思うんです」

ふう、と息をつき、ぱらつと落ちてきた前髪をかき上げながら続けるさよ。

「……それで……これは響さんのおかげ、だから」

「僕の？ ……いや、僕はなにも」

さよの大変な人生から急に僕の呑気な人生に話が変わってハテナが浮かぶ僕。

「いいえ。夏のあのときに、響さんが、お友だちを……私と、仲良くしてくれるお友だちを、ゆりかさんとりささんと、そして、響さん自身を、繋げてくれたから。 ……だから、だから、その響さんもって、思ったら……つい、出てしまったんです」

あれは「たまたま」本屋に向いて、その日が「たまたま」夏休みの中の登校日というやつの下校時刻に重なっていて、「たまたま」ゆりかたちに絡まれて。

そこから「たまたま」どうやって逃げ出したもんかと出口の方を見ていたら、「たまたま」さよと目が合って、それで僕の名前でもかがりと呼ばれて。

そうして連行された先で「どういう関係？」ってやったらねちっこく聞かれた、ただの偶然っていうやつが重なっただけだったのに。

だからそれは過大評価っていうもんじゃないんだけど……この子がこんなに一生懸命に話していて、こんなにはつきりと目を輝かせて話しているんだ、無粋な真似は止めておこう。

僕だって空気くらいは読める。

学生らしい青春もこんな夜くらい良いだろう。

「……そうだったんだね。 言ってくれてありがとう、さよ」

「い、いえっ」

これだけのことを真剣に……僕のことを想って言ってくれるんだ。きつと重度の……心臓とか脳とかの内臓の重い病気なんだろう。

それでも学校に去年から通えているくらいにはよくなっている……重い病気を乗り越えて学校へ自分から通っているだなんてどのくらいの精神力……心の強さが必要なんだろうか。

僕だったら無理だろうし、多分行かなくても卒業できるんなら行かない。

少なくとも僕がそのときならそうしたはず。

でもこの子は違うんだ。

そんなこの子が僕に言う。

生きる意思。

……この前階段から落ちそうだったときにもこの子たちのことがふと浮かんだんだ。

未練。

しなきゃいけないこと。

したいこと。

「……そうねえ」

「あう、りささん……」

もういつかい真っ赤になってるさよの髪の毛をぼむぼむとしながら、もうすっかり元に戻った巫女りんが言う。

「……その……ね？ 私がここで、この格好で言うのもなんなんだけど……きつといいわよね、友だち同士なんだし。他に誰も聞いている人なんていないんだし、神様だってお参りに来る人たちの願いを聞くのでいっぱいだろうし。だから内緒よ？ ……で、そのね？ 私は、私自身は……だけどね？ 神さまの力なんてほんの少しだって思ってる」

「……いいのか、そんなことを言ってしまったって」

巫女さんだって言うのになんちゅーことをこの子は。

「いいのよ、だってそんなに神さまがすごいんだったら誰でも好きなだけ願いが叶うはずでしょ？」

うん……まあ確かにそうだよね。

いるかいなかったのは深くは突っ込まないけど、とりあえずで僕自身が会ったり話したりできない存在のことは信じられないかな、僕は。

「でしょ？ たとえばゆりかが響の」

「ち、ちよーっ!?! りさりん!?!」

「あ。……じよ、冗談よ冗談！ この先は言わないから安心して？」
「うう……りさりんのくせにい……」

「？」

「な、何でもないからね響！ほんとーなの!!」

今度はゆりかがさつきまでの巫女ペアのように真つ赤になるのを
ぼーっと見る。

「だけどね？ほんの少しのはずだけど、でも違うときがあるの。

それはね、ご家族の病気だとか大切な試験とか、そういうのを真剣に
……1回でもだけど、何度も来る人って……これも言っちゃ悪いんだ
けど、今日みたいになんとなくで来ている人たちとは全然違うのよ。
なにもかも」

「あーあ……りさりんが言っちゃいけないこと言ってるー」

「茶化さないの、もう。それに全員っていうわけじゃないんだから
……今までたくさん見てきたからその人を見ていればなんとなくわ
かるのよ、そういうの。これでも10年以上お父さんの手伝いとか
してるんだから。でね？そういう真剣な人たちって……神通
力っていうの？そんな才能なんて一切無いか、少なくとも感じられ
ない私でさえね、そういう人たちの迫力っていうのかな……こう、ぶ
わってしてるのが分かるのよ。オーラとか迫力とか気とか、うまく
説明できないなにかを」

オーラ。

勘。

あの人もそういうのが好きだっけ。

「……たぶんね？『前に進もう、試練を乗り越えよう』……そういう
意思がとっても強いんだなって思うの。……なんだか変な顔して
るかがりさんにもわかりやすく言ってみると……そうね、マンガとか
でよくあるでしょ？オーラとかそういうの。そういう感じ。
だからさよさんが言ったみたいないな気持ちが大切なんじゃないかって
私も思うの」

良い話なんだけど、ありがたいんだけど……かがりはやっぱりつい
て行けてないのか。

ちゃんと聞けば分かるはずなのにあの子は……。

「よく分からないけれど……そうなの?」

「そうなの。……かがりさんがこの前貸してくれたマンガでもおキツネさまがーっていうシーンあったでしょ?」

「……そうだったわね?」

ちらっと見たら「くるん?」ってしてる。

「……ちよつと! なんで『このマンガおすすめだからぜひ!』って貸した側が忘れちゃってるのよかがりさん」

「お、覚えているわよ? ……そのページを見ればすぐに」

「あ、かがりんそれ知ってる! 暗記帳に書いておいたのにーって、あのかがりんが中間で嘆いてたやつ! つまりは」

「今それはいいでしょう!?!」

今度はかがりが真っ赤になってくるんくるんしていてみんなで騒いで……着物の肩のところを整えたかがりが、まだ顔は赤いけど、でも落ちついた感じになって僕を見てくる。

「……それなら私も。響ちゃん?」

「かがり」

さすがにお花畑は引っ込めたらしいかがりが言う。

「……私には、みんなみたいに詳しいことはわからないわ。……でも、どんなおはなしでも、どれだけ苦しい目に遭っていてもね? 最後まで、最後の最後まで自分の気持ちっていうものを失わない人が必ず目標にたどり着けるの」

……でもそれは、ただの作られた話というものだし、そういうのって主人公たちとか以外のモブとかハッピーエンドじゃなかったりしたら。

「もちろん私だって、おはなしと現実の違いは違って都合のいい話だっていうのはわかってるわ? だけど、それでもね響ちゃん。……心の熱さ、意思。そういうものを持続している方が未来へ向かって……響ちゃんもさよちゃんみたいに、その、体のこと、がんばれるって思うわっ」

くるんつとしながら、……でも普段と違ってもつとはつきりと、僕

を氣遣っているっていう意思を込めながら言ってくる。

——完全な嘘じゃない。

重い病氣になっっているのと、原因不明で突然に見知らぬ姿、それも年齢も性別も人種も異なる姿になったのと人知を超える何かに付きまどわれているのとじゃ真剣さ具合は全然違うし、きつと僕なんかよりさよの方が大変な人生なんだろうけど……でも。

こんな状況になって誰にも相談できなくて……しなくて過ごしてきた僕。

お隣さんにさえ結局まだ言っていない、これのことを——多分初めて。

初めて心配されて応援されているって……こんな僕でも分かる。

「そんな資格もなにもないんだ」って思う僕と「はげまされるのってこんなに嬉しいんだ」って思っている僕がいる。

ひとまわりも下の子たちにはげまされて……最近凹んでいた気持ちだが、ちよつとあつたかくなつた感じ。

……そっか。

友達が居るって、こういうことなんだ。

人生経験が無いと顔つきが幼いって言うけど僕は心まで幼かったらしい。

だって良い大人が中学生に励まされちゃったんだから……それも、あのかかりにまで。

まだまだ子供だと思っていて……実際にそうなんだけど、でもあのかがりだって「気持ちが大切だ」って心を込めて言ってくれている。……こういうのって子供の方が分かるのかもね。

ムダに長い時間をすごしてきたからこそ知識としていろんなことを知りすぎていて中途半端な経験ばかりが貯まっちゃって、逆にそれが単純なのにすつごくめんどくさい思考回路にしていたのかも。

確かに今言われたような言葉は青臭いし子供っぽいし「現実とは違うんだ」とは思う。

そんなの君たちがまだ子供だから言えるんだって。

でもその一方でやっぱり……生きるっていうことは、何かをするってのは情熱とか熱意とかそういうものだっていうのもいろんな本で知っているからこそ納得もできる。

……そうだよね。

僕はきつと頭でつかちな子供なんだ。

だから中途半端な知識と経験でめんどくさく考えちゃってダメにしちゃう。

うん、分かってことなんだ。

でもまあ、最近いろいろと……魔法さんがあまりに激しかったものだから辛くて疲れていたところもあったってのがはつきり自覚できる。

……僕の体感的には世界が極端に変わって1週間だもんな、そりやあまだ心の整理がついていないのも当然だし体も弱ったままなんだから気持ちも弱くなってたんだろう。

ちよつと具合悪いときとかに見る夢とかはやなものだったりするし……起きてすぐ忘れるけど。

それにしても……階段の件で知ったことではあるけど、改めて僕にとつてこの子たちの存在は大きいものらしい。

歳はずいぶん離れているし性別も違うけど、でも友達ってこういうものなんだなってちよつと嬉しくなったりもする。

——そんなことを、どや顔っていうのをしながら返事待ちの、やっぱり体は育っていても中身はまだまだなかがりとみんなに向けて応える。

「……僕から言い出した話だったのね。　なんだか励まされているな……みんな、ありがとう。　その気持ちが嬉しいよ」

前の僕だったら恥ずかしくて言わなかっただろう言葉もがんばって言うておく。

次がいつになるか分からないし、次がないかもしれないんだから。「はわあっ!?!」

せつかく気持ちに浸っていた僕の意識がゆりかのすつとんきような声で引き戻された。

……この子もまたくるんさんみたいに変なところあるからなあ……なんというか予測できないっていう意味で。

そのへん常識人の範疇の巫女りんと巫女りさとはちがう気がする。つまりはまともな巫女ペアと変な着物ペアなんだ。

「ごめんひびき!　私、みんなが……なんか恥ずかしいけどでもすつごくいいこと言つてたのに、私だけとっさに思い浮かばなくつてっつ」

「ああ……いや別に、気にはしていないよ」

そう言えばゆりかが話す前に僕が答えちやつた形になるのか……あとでご機嫌とらないと。

にじり寄つて来るゆりか……あ、そういう姿勢を取ると後ろの髪の毛も肩まで乗つかるんだ、夏から比べるとだいぶ伸びているけど学校は……って違う違う、今はぱつつんの下を見ていないとまた意識が変な方に行つちやうじゃないか。

「あ——……私も大したことは、ね。　さよさんに釣られる感じになつたけど、元々は『やりたいことがなければここを継ぐの』って言う

ただけなんだから」

「……わ、私は、その……同じ、闘病の、病人として、つい……」

2人とも「なんか恥ずかしいけど」ってのに反応しちゃうって……まあそうだよな、漫画とかで出てくるこっぴどくばずかしい場面だもんね、今のって……」

「ゆりかちゃん、ムリして言わなくてもいいのよ？ 言いたいときに言いたいことが浮かんだときに言えば」

そして反応しないで平然とみかんを剥き始めているくるんさん。

「……なんかかがりんがマトモなこと言ってる……」

「ゆりかちゃん？ それどう言う意味かしら？」

「そんなことよりなるほどお!!」

かがりを遮るように、小さい全身を使ってゆりかが跳ね上がる。

……やっぱりここまでしないとくるんさんを遮れないのか。

でも僕の体力と筋力じゃできなさそう。

「なるほどなるほど、これが青春か！ ならやっぱ私も考えねば響！ 待ってて、今なんか掘り起こすから！ ノートに書きちゃったいるんのか!!」

今の子たちでも黒歴史とかノートに書くんだらうか。

「だからゆりかちゃん、今のそれはどういう」

「ちよい待ちかがりん。 私は今、大切ななにかを探しているのだ」

「そうなの？ 大切なら仕方ないわね？」

「ん——……掘り起こせぬう。 そのうちいい感じの出るだろーから思いついたらでいいよね。 私だけなんにもなくてごめんね響？」

「いやだから別にムリをしてもらう必要は……」

「でも、それにしてもさーひびきんや？」

ひとりひとりの顔を見回して……最後に僕の顔をじつと見るゆりか。

「……」

「？」

……ぱつつんの下の眉がいやーな形になっている。

なんだか非常に不快な笑顔をしている。

なんというか……にまにま？
によよ？

口元もなんだか小憎たらしい感じになっているし……この子の好きないたずらっぽい顔つき。

さつきまでの雰囲気があったのそれだけで吹き飛んでるからいいんだけど、でもなんだかいらつとする感じの……あー、これを毎日やられたらりさりんみたいに怒りっぽくもなるか。

でもなんだろう、また変なことを思いついたのか？

「実はさ？ 私たちってば……自慢じゃないけど自慢になっちゃうけどね？ 学年でも学校でもわりと人気なのだよ？」

それって自分から言うもの？

しかも今ここで……場の空気に酔ったままだったりする？

「ねえ響？ この美少女軍団を見てなんとも思わないのかね？」

普段こういう話題をしてこなかっただけになんか新鮮……だけどそうか、褒めてほしいのか。

そういえばゆりかだけまだだったしな。

かといって、この流れ、みんなまとめてってことでいいんだろう。それなら適当に褒めてあげよう。

普段からかがりに言ってるみたいなのを言えば良いんだよね。

「確かにみんなかわいくて綺麗だね」

「ひゃっ!？」

え？

こんなのでいいの？

ゆりかって案外ちよろくない？

「今でも美しいのにまだ中学生なんだ、将来有望と言うものだと思うよ」

「ちよ、ちよつと響さんつ、待つ」

りさりんもまた顔が赤くなってきてる。

「みんな髪の毛や肌にも気を配っているみたいだし、服装だって……ほとんど私服しか見たことがないからかもしかかもしれないけど、でもいつも

似合った服装をしているって感じるし」

「女の子だからよー」

かがりは変わらない。

むしろ変わったら困る。

「今日の服装……言い忘れていたけれど、ゆりかのその着物も君の雰
囲気にぴったりだ」

「う、うう……」

なによりも僕に合わない感じのうるさい系とかだらしない系の子
たちじゃないっていうのが大きいからね。

「……きれい………はう」

「ちよつとさよちゃん大丈夫!？」

さよは……うん、きつと慣れてないよね、こういうの……ごめんね
?

「響ちゃんってば、私たちのことについては今みたいに聞かないと
言ってくれないのよ? 会うたびに聞いた方が良いわ、ゆりかちゃ
ん」

む、要らないアドバイスが。

「うえへへ………って、ちよいちよい君たち。 今は私と響の会話なの、
しやらつぷ!」

すぐに戻ってきたゆりかがまたいたずらな口調に………こういうと
きは変なこと言い出すから苦手なんだけどなあ………

「………で、あ………ま、響だもんね、そーやってさらって言えるって
知ってる知ってる。 うん、知ってた。 そもそも響自身の基準がア
レだからしよーがないことなんだけど………だつてそのフェイスだも
んねえ。 あとその髪の毛どーなってるんのほんとに。 ワカメか?

ワカメなのか?? 透けるワカメなのかあ?」

なんかまくしたたているゆりかの様子が何か変?

「ともかくわれわれ人気のびしよーじよ4人を集めて囲まれてさ?

こんなすぐそばで侍らせてさ? ほら私とは密着してて他のみんな
とも足でくつついてるっていうもはやすごいことになってる響
じゃん?」

「ゆりか、君に関しては君自身がくっついてきてきているんだけど？」
「こまけーこたーいーのよ」

「じゃあどうしろと……これが女の子のめんどくさい感じってやつ？」

でもゆりかってそういうのとは無縁だって気がしてたんだけどなあ。

「んでさ？ おおみそかに年越しでなんかうれし恥ずかし青春してさ？ ……オールナイトになりそうで、つまりは『夜を共に』してるのよ……あ、深い意味じゃなくってさ？」

振り袖をふりふりしながらあいかわらずわけのわからないことを言い続ける。

「んで病気が……前みたく収まったり良くなったりしたらさ？ お泊まりなんて計画しても誰からも嫌がられるどころか楽しみにされてるなんてさ？ ——いやーホント、これがうっかり学校の誰かに知られでもしたらクラスどころか学校全体の男子みんなのテキだよねえ。

ねえ？ だつてさ」

「びしっ！」とわざわざ口に出して、どつかで見たようなポーズをしながらひと呼吸溜めて、すうつと息を吸うゆりか。

「——はたから見たらこれ、響っていうシヨタ系将来有望超中性的銀髪……えつとまだまだあるけど、ともかくそんな属性モリモリ系美『男子』響『くん』が」

——え。

「ちよっぴしちっこいけどそれはまあ今後に期待するとしてさ。で、そんな響がびしよーじよを4人もはべらしてるとか困つてるとか、そーとしか言いようがない状況じゃん？ ねえ？ いやー、現実にはアニメを超えるねえ……あ、いや創作でもそんなにはないよ、こんなシチュ……いやあるか。でもま、現実味のあるシチュって意味ではやっぱなかなかないと思うよ？ ね？ そー思わん？ 響？」

ぶわつと体じゅうの毛穴が開く感覚と同時になるべく周囲に変化が無いかって、普段は全然機能していない僕の五感を総動員。

——ゆりかが僕のことを……男って言った。

魔法さんが何かをしでかす可能性に。

ゆりかは僕のこと、男って認識している。

認識できている。

なんで？

どうして？

だってこれまでの人たちは誰ひとり僕のことを男だとは思わず女の子だって、幼女だって思っていて……僕から何かしなければこんな危険なことにはならなかったのに。

そんな僕をよそに、ゆりかは続ける。

「いやー、ひびきんはたしてこの中で誰を選ぶのかにやー、私とっても気になりますにやー？ それともまとめで行っちゃおう……ってのは現実っていう制約上なかなか難しいと思いますが。まー、内縁のなんちやらっていうのもあるんだしみんなの同意があればあるいは、ねえ？ ……そのへんどーよ？ まずはりさりん、コメントをどうぞ」

「待って……僕が選ぶ？」

え？

どうしてそんな話になるの？

だって僕が男だってだけで……あ、そっか。

僕が男だって思っているのなら……この子たちは女の子で僕は男。

中学生で男と女が仲良くしていれば当然にはやし立てられる状況なんだ。

「ゆりか……あんたこそ甘酒で酔っ払ってるんじゃないの？」

「まだまだ顔が真っ赤なりさりんには言われたくないにやー？」

「あんただって今は真っ赤よ？」

「またまたー言いたくないからって」

「ねえ、さよさん？」

「えつと、……はい……」

「……えマジ？ 本気で？ うわホントほっぺた熱い」

「あんた自覚してなかったの？」

「やだあ、恥ずかしっ！ 深夜のテンションってこわいつ。……ほっぺコップで冷やしてるから、そのあいだにりさりん、コメントよ

ろ」

……ゆりかが照れているって言うことは本当に僕のことを。僕のことを……おかしくなったりしない状態で男だって認識できている、それは他のみんなも。

「ま、いいけどね。 恥ずかしいといいでだし……で、まー私も気にはなっていたのよね。 響さんが誰を選ぶのかな、それとも選ばないのかなって。 いやまあその、私だって年頃だし？ ……あ、響さんが誰かさんみたい恋愛脳とはかけ離れてるっていうのは知ってるから今ここで言えっていうのは酷かもだけど……いい機会だし知りたかったって言えば知りたいかも。 まー、きつとすぐに『そんな気は誰にも持っていかないよ』って言うんでしようけど、ただの興味本位で、ね。 そう、仮定の話で、もし恋愛するとしたら誰とが良いのかってっていう話よねー」

「なんだかんだりさりりんも興味津々なお年頃♡」

「女子だから当然でしょ？」

……警戒してはいるけど、ふたりともおかしくなる様子はない。僕自身に何かが起きる気配も、ない。

「ね？ 響さんにとってはこの中で誰がいちばん魅力的なのかしらね？ 女の子だらけのこの空間でたったひとりの男の子の響さん？ いえ……呼び方ずつと迷ってたんだけどさ、響さん的には『響くん』って呼んだ方がいいのかな？」

赤い顔をした2人の少女が僕の目を見つめてくる。

でも僕にはそれを受け止める余裕はないんだ。

……どうして？

なんでこの子たちが僕のことを男だって認識できている？

だってそうさせないための魔法さんのいつものなんじやないの？

考えても考えても答えは出なくて、場の空気ってやつは女の子の味方をしていく。

——この場で男だっってはつきり言われて意識されるようになった僕だけを残して。

40話 「男の子」／「女の子」 5／7

男。

僕の元の性別。

幼女ではなく男。

男性ということ。

肉体的な女、女性ではなく男性……あるいは少年。

でもそれは今まで誰にも知られる前に魔法さんが処理しちゃってたかもしれないこと。

それなのに、こんな幼女だって分かってるはずの僕を男だって。

ゆりかが言った。

この長い髪の毛とか中性的だけど女の子な肉体の僕のことを男だって。

しんと静まってテレビの中からの声がやけにうるさい中、僕はさらに真っ白になっていた。

だって……ゆりかと、続けてりさが僕のこと男だって……認識していた。

男だって認識している。

いつから？

どうやって？

……いや、考えるのはあとにしよう。

みんなが僕のことにくぎ付けになっているんだ。

普段みたいに見逃してくれる状況じゃないんだ。

「……あ、で、でもムリに答えなくってもいいわよ？」

僕の様子から「あ、これ聞いちやダメなやつだった！」って顔したりさりんが急いで口を開く。

「だって今のはただの興味なんだし、つまりは応えるギリはないってわけで！ ……ちよつとゆりか、『響さんに全部言うの恥ずかしいから』って残りを私にお願いって」

「やっぱりさりんも響のこと気になるでしょ！ やっぱなるよね！ ささ、このお祭り騒ぎなこの空間だし言っちゃいなよ!!」

「……コイツ……普段は空気読むくせにこういうときは強引なんだから……」

……ゆりかの策略？

ってことは、少なくとも今より前の段階で彼女たちのあいだで作戦会議があつたはずで。

だからそのときに何回も僕の名前と「男」ってワードが出ていたはず。

……なのに魔法さんはなにもしていない。

なんで？

そんな僕に気がつかないでゆりかとりさりんは普段通りに元気。

少なくとも魔法さんの気配は、ない。

「響のタイプの女の子よねー。 やっぱいちばんは……てか中2でアレって未恐ろしいってやつよねえ……そこらの女性顔負けのぼでーを持ってて、学校でだってなんとなく気品みたいなもんがあつて……うん、しゃべらないとそうなのよね……」

あ、うん。

くるんさんはおとなしくしていれば、ね……。

「普段からその着物にも負けず劣らずな感じの華やかーなファツションしててさ？ おんなじ制服のはずなのにみよーにふいっとして、ぼいんで……ぼいんで！ 先生に怒られない程度のアクセとかつけててさー、ガツコでも高嶺の花になつてるかがりんかね？」

「高嶺の花？ 私が？ ??? それより響ちゃんは」

高嶺の花なんだ……理由は分からないけどお淑やかに振る舞つてる？

いや、この子がそんな器用なことできるはずがないからきつと別の理由。

「まー今は置いといてよかがりん、先に言わせとくれい。 人の話は最後までだよん？ ……てゆーかよく手とか繋いでるよねー。 私、見てるんだから……スキンシップも多いの。 実はときどきさ、ふたりつきりになったときにかがりんから寄りかかったりして甘えられてんの見たことあるし！ あるし!! ずっつい!!」

あれは甘えられているというよりは大型犬がじやれつく感じなんだよ？

誰にでもフレンドリーなタイプでちよっとお馬鹿さんなわんこが。「んで、お次は……さよちんかな？ 響からの視線が2番目に多いって感じだし」

「え、……え？」

「おんなじ病弱仲間、あ、いや悪い意味じゃなくって共通点って意味だよ？ ほら、レンアイにはきっかけが必要だって定番でしょ？ んでさらさらーな髪の毛とおさげっていうフェチ心をくすぐる感じだし、しかもメガネにその雰囲気じゃん？ さよちはあんま話さないしいつもかがりんと一緒だから分かんないかもだけどさ、男子からの人気むっちゃあるのよ？ まさに男心をくすぐってもてあそぶ魔性の女って感じ」

「え……そ、そんなこと……？」

さよは普段通りにおどおどしているのが止まらない。

うん……君は対人関係が僕と似て苦手だもんね。

あんまり嬉しそうな表情してないし、単純に困ってるっぽい。

……普段のゆりかならこういう突っ込んだことは絶対言わないのに。

人がイヤがるかもしれないのに敏感なはずなのに。

「事実だよさよちん。 てかできるだけかがりんとかの仲の良い子と一緒にいたほうがいいと思います、少なくとも学校の中では、はい。」

だってねえ、押しにすっごく弱そうだから運動部の男子に言い寄られたら言いくるめられちゃいそうだし……。 ともかくそんな感じでお互いに体のことを励まして励まされてを続けているうちに……。 なんてのはもはや古典的な青春だよね！ 茶化すわけじゃないけど数少ない響の興味引く属性なのよ」

いきなりの情報量で頭が追いついていなさそうな巫女さよを片目に、さらに加速するゆりか。

「そしてお次は我が親友！」

「やだあんた、ちよっと私まで」

「のけものにはせんよりさりん!! むしろ逃さぬえ! スポーティでコミュ力MAXでクラスの中心的なちくしようなりさりん! もらったラブレターと告白の回数は何倍しても追いつけないやつばこんちくしようなこんちくしようで正直女として嫉妬しないわけには行かないです、はい」

「おい」

りさは……まあモテるだろうな。

むしろ彼氏とかいないのが不思議なくらいだもんね。

男受けは多分この中で1番良いって思うし。

「いーじゃん、事実なんだし! たまにはグチも言わせてよ、りさりんを呼び出してほしいっての何十回経験したことか。ねえあれすつごくめんどくさいんだけどーにかなんない? そもそも私自身へのっていう期待がゼロってあたりがさらに来るのよ、ねえ? ……で、こーんな感じで気安い毒舌とか吐くけど」

「誰のせいだと思ってるのよ……」

「そう! それがまたいいっていうヤカラがわんさかいるんだよねー。うん、気持ちは分かる。適度ななじりは快か——とと、下

ネタやめとこ。あとみんなとの距離が物理的に近いというのも多いし……さよちんと別の方向性の魔性? いや、ただの魅力かねえ。

出るところ出てるし羨ましますぎてとりあえず後で揉ませて♡」

「響さんの前で言う時点で充分にセクハラでしょうが……。あとね、好きじゃない人からいきなり……それも知らない人から告白されても嬉しくもなんともないもんなのよ? 断るのいちいち心に来るし、断り方間違えると逆恨みされるから気をつけなさいって先輩から言われてるし」

「うらやましい悩みじゃのー。ちったあ分けてほしいのう」

ひたすらに話し続けるゆりか。

ほっぺたに当てていたコップも途中で置いて、いつもどおりの激しいボディランゲージをし出したから振り袖がぶんぶんして、それがなにかに当たっちゃわなかつてひやひやしてきた。

「んで、トリは私い! え、私? ……これでも一応は乙女だわ!」

……ゆりか、酔ってるんだろぅなあ……場の空気が甘酒で。
じやなきやここまではならないって思うし……普段の彼女を
知ってるから余計に。

「もち大穴だけどね、ほらこの通り女の子らしさ皆無だし？ 響にそ
のシユミがなけりや女としてもカウントされないんだし!! りさり
んのばか!!! あとかがりんもさよちんもついでだあ!」

「あんたね……」

ひと言ずつに僕の方に近づいてきてじりじりと詰め寄られるも
……腕でなんとか押しとどめるけど、それでも続けたいらしい。

「でもさー、隣歩いて顔が近い、じやなくって目線とかが近いのって
この中じゃ私だけでしょお？ ちっこいの同志だし。いろんな趣
味も合うしさー？ ……響って『めんどくさい』って言いつつちゃん
と返事返してくれるしさ、実は気があたりして! あったりして!!!
なーんちゃって!!!」

とうとう僕のすぐそばににじり寄ってきて、肩を両手で押さえられ
て顔も鼻がくつつきそうなくらいに近くって甘酒の匂いがして、熱気
が押し寄せてくる。

感情が止まらなくなったのか力が強くなってきて僕の腕力が負け
始める。

「……ちよつとゆりか、そろそろ」

「んでんで響、ひびきんや響さん？ 君はいったい誰を選ぶ——あ
いたあ!？」

「止めなさいってば、もう」

もう少しで後ろに押し倒されそうだったところで、すつと体重が引
いていく。

上を見てみると、巫女りんがゆりかの首根っこを……着物が崩れな
いようにつて両手で引つ張っている。

「ゆりか、あんたはまたそーやって強引に! 響さんの後ろ、今危な
かったわよ!？」

「えー? あ、ほんと。それだけはごめんね響? ……けどさ、りさ
りんも気になるーって言ってたじゃん! 響の口が軽くなりそうな

今を逃したら多分いつもみたいな感じでふんわりって感じで逃げられちゃってさ、聞き出せないよ?? いいの?」

「たしかにそれはそうなんだけど……それはそれ! 人の嫌がることはしないの!」

「……みなさん、もうちょっと落ちついて……はう」

巫女りんとゆりかのいつもの感じは変わらないけど、それに酔いつていう理性を吹き飛ばすものに包まれた結果大変なことになりつつあるこの部屋。

うーん。

飲み会とかってこういうもんなんだろうね……行ったことないから分からないけど雰囲気的に。

というか、これだけ騒いでなんで怒られたりしないんだろ。

あ、まだ忙しいのかな、みんな。

通りで大声を出してもひとりも来ないんだ。

……けど、そんなことは今はどうでもよくって。

いろいろな方向に考えを逸らそうってしている僕自身の意識を無理やり戻す。

ゆりかもりさも……勢いにびっくりしたのかそれともついていけないのか、かがりとさよは特になにも言っていないから分からないけど、でもなんで。

最低でも2人は僕のことを男だって認識、できているんだ。

それも、何回も言っているでも魔法さんのちりちりすら起きない。

なんで。

どうして。

そればかりがぐるぐると回る。

——飛川奥さんのように、前の僕を知っている人は今の僕を男だつてうまく認識できない。

いや、認識はできるんだけど魔法さんによって歪められるんだ。

僕やその人がいくら前の僕について言っても、その言葉、「元の僕について」が発せられた瞬間……「大人」の「男」だつて言った瞬間に魔法さんが怒るから。

そうしてまるで操られているみたいなき感じになるから。

だから彼女たちにとって……えっと、飛川さんとなじみの銀行の人、あととはご近所の名前は知らないけど顔は知っているっていう人たち……たったそれだけだからまだまだ確実じゃないけど、でも「彼女たちにとつての僕」っていうのは、魔法さんのせいできつと矛盾した存在になっている。

「僕が前の僕でありながら今の僕である」っていうどう考えてもおかしい認識になる。

どこにでもいるモヤシな男だったはずの僕と、気をつけないとすぐに顔をのぞき込まれるくらいな銀髪幼女な僕がセットになっている。

同時に認識されている。

成人男性なのにかわいらしくなっていて。

それが、とても似合っていて。

それで成長しているっていう評価になるほどに。

そういう評価、認識、意識に……魔法さんが無理やりに行っているんだ。

一方で前の僕を知らない人……猫島子さんやあざとい栗色岩本さんを始めとした他の人。

この人たちなら、僕から「男なんです」って言えば男だって認識してくれる。

お酒を買ったときみたいに大人だって認識してくれる。

……これについてはなぜか魔法さんが怒らない。

どろんとしたりしなかつたりはするし、ねこみみ病関係でまたなにか別のことがあったりするみたいだけどそれは今置いておいて……でも、怒らない。

僕を男だって認識できはするんだけど、それはあくまで自己申告でしかない。

僕から言い出さない限り、まずはそう思わない。

だってこの見た目だもん。

長い髪の毛に細い首、掘りは深くてもやっぱり女の子な顔つきなんだから。

声だつて普段通りに男の口調で話してはいるけど、やっぱり女の子の声なんだから。

……けど1回でもそう言えば、男だつて認識で話を進められるのも確認できている。

これについて知ったのが僕の主観的な時間でたったの1週間とちよつと前なんだし、調べた人数も少ないわけで……10人くらいだよな、確か……つていうことで、たまたまつていう可能性もあるからこれもまた不確定ではあるけど。

だからこそ。

だからこそ、今のこの場で僕が……望んでいたはずの男扱い、それをされていてもなんにも起きていないつていうのがとっても不安で。望んでいたはずなのになにも起きないつていうのが逆に怖い。

……でも、ひとつだけ楽になった。

僕が男なんだつて何かでバレてたんだつたらひとつ嘘が減つていて謝る回数も減つたんだつて思えば、つて。

でも本当……なんでなんだろう。

男みたいな服装してたのに女の子だつてバレてたのはちよつとシヨックだけど。

……がんばつて男らしくしてたのにかわいいとか思われてたのかな……結構シヨックだ。

「あ——、ひびきんやひびきん？ おーい」

「……うん」

いつの間にかかなり深いところまで意識が潜っていたらしい。

また飛びかかってくるきたりしないようになって巫女りに首根っこつかまれたままで、だからこそさらに幼く見える、さつき気がついたようにずいぶんと髪の毛が伸びている……っというよりはなんだかみんな全体的に髪の毛伸ばしてる……？

ともかくそんなわけで少しは安心できる状態になっていて、だからか僕はぺたりといつの間にか座りこんでいたらしい。

……女の子座りで。

いそいそと直すけど……やっぱり無意識だよなあ……。

「とりあえず、体の方だいじよぶ？」

「あ、うん。少し考えていただけたから問題ないよ」

ふうつとため息が広がる。

うん……この前を見ちゃったもんね……ごめんね、心配かけて。

「そつか……よかった。さよちんもそうだけど、重い病気とかがつてメンタルの影響もすごいって言うじゃん？ だから少し心配だったんだけど……響が大丈夫っていうんなら大丈夫だね。……これで遠慮なく続けられそうだね♡ 響」

「そこまで強引にしなくて……ゆりか、今日のアんた少し変よう。」

あ、なるほど、少し具合がって言えば……だめだだめだ、それは嘘になる。

僕は、今すごく悩んでいるっていう頭の中の状態以外には何も悪いところはないんだ。

ちよつとだけ控え気味にはなったけど、でもあいかわらずの熱気を放つゆりが振り袖を……あ、それもさりんに抑えられてる。

危なかつしかつたからひと安心。

でも僕の顔を見ているうちに落ちついてきたのか、今度は心配そう

……それとも気まずい……っていう表情になってきた様子。
くるくると表情が変わるゆりか。

くるくるといえばくるんくるんかがりだけど、ちらっと見てみた限りなんだかがりの様子も別の方向におかしい。

いや、おかしいって言っちゃ失礼なんだけど普段の彼女からは想像できないくらいに静かなんだ。

……さつきゆりかに「人の話は最後までさせて」って言われたのを
まじめに守っているんだろうか？

かがりが？

あのくるんさんが？

ないない。

……ああいや、あるのかもしれない……だとすると相当成長したんだなあ。

首根つこに続いて袖までをがっちりされちゃっているゆりかが、それでも諦めまいともぞもぞしながら言ってくる。

「むー、動きづらい……んで、この話ってさー。将来の夢ってゆー新年になったばかりだからこそよさそーな話題からの響たちの病氣のことについての話になったからさ？ その、なんだか重くなっちゃったワケじゃん。だからこそ軽ーい気持ちでりさりんと話し出してみただけど……もしかして地雷だった？ だったらごめん、今の忘れて？ ちよっとしたおふぎけなの。こういうときなら響も口が軽くなるのかなーって思ったからさ」

「だーから言ったでしょーが……ごめんね響さん、変なこと言い出しちゃって。乗っちゃった私も悪かったわ」

「いや、僕は」

「そーだぞ、りさりんも同罪だい」

「うるさいゆりか。……ご病氣のこともあるし、それにお家でもなんだかあるみたいだもんね、響さん。ゆりかからその辺さんぎん聞
いてたのに、軽率だったわ」

巫女りんが頭を下げてくる。……ゆりかの頭を押しながら。

「いや？ それは構わないし気にしていないよ」

「許されたよりさりん！」

「いや、地雷っていうの踏んじやったことには変わらなさそうだからね？」

「やっぱごめんね？ 響」

「……しかし、ゆりか」

さつきからどうして僕のこと、男って。

「なに？ おわびに、なんでも言うこと聞くよ？ そー♡ なん・で・も♡」

「……あんたってどうして『何でも』って言葉にいつも過剰反応するのよ？」

「いーのいーの。 あ、さりんにもごめんね、一応」

「一応ってあなたね……」

「あ、おふたりとも甘酒お注ぎしましょうか？ いや、響ならブラックコーヒー……お高めのホットをちよいと自販機から買ってくるべきか。 あるいは私たちのヒミツ教えちゃおーか？ たとえばまずは気になるりさりんのスリーサイズとか体重とか」

「ちよっ!？」

「ウソ、ウソだつてりさりん！ だから重いつてえ!!」

いつものようにふたりで遊びだしたから場の空気がふんわりしてきた……けど、僕は聞かなかやいけない。

魔法さんのヒントになるかもしれないんだから。

「ゆりか」

「はい響ー、なんでも言ってくさいな。 響が望めばなーんだつて……あ、ついでに家来のりさりんも好きにしていいいし」

「はあ？ 誰が家来だつて？」

「君は、君たちは……それをどうやって」

仲が良いのは良いことだしゆりかのが収まったから良いんだけど、とにかく聞きたい。

「……ちよっと!!!」

「!？」

そう思ったらやたらとでかい声で耳がびりびりした。

……今度はかがりか……。

「え、かがりん？ なになに、なんで急におこおこな」

「ほら、だからあんた言い過ぎだつて」

「……かがりさん……？」

鼓膜が痛い。

ついでにすつごくびつくりしたから心臓がばくばく言っている。

……もう少しかがりの声への反応が遅れていたら、いつもみたいなの前を出るとか「みっ」とかどうしても出ちゃう、あの情けない声がみんなの前で出るところだった。

だって今までの僕の意識はみんな、僕のこととゆりかとりさが話していることにばかり向いていたから。

くるんさんもまた油断できないんだつていうのを……忙しかったばかりに忘れていた。

いけないいけない、むしろこの子の方が予測できない発言と行動をするんじゃないか。

改めて心に留めておかないと。

で、なんでくるんさんは怒っているんだろ？

今の会話で怒る要素……あ、お口チャックさせられてたこと？

メロンさん、ちよつとでも会話に加われないとすぐに拗ねるからなあ。

とりあえずさっさとなだめて聞いておかないといけないんだけども。

「ねえ、ふたりとも。 ゆりかちゃんもりさちゃんも」

「なんででしょうかり様」

「ごめん、私たち……いえ、ゆりかが何かかがりさんにまで失礼なこと」

「あのね？」

「はあー、とすつごくわざとらしいため息……あー、女の人がかかなり怒ってるときのあれだ。」

注目されなかったのがそこまでイヤだったの……？

「ええ、失礼よ！ だって響ちゃん——かわいい女の子なのだも

の！ 男の子だなんて!!」

「ほえ？」

「……………へ？ あの、かがりさん、なにを」

……………あ、あー。

なんかもうこんがらがってきたけど冷静になろう。

うん、りさとゆりかが僕のこと男って思っているのはひとまず置いてくとしてだ。

かがりなら僕のこと、はつきりと女の子だって知ってるんだもんね。

いつも着せ替え人形にしてきてるし……………だんだんと遠慮がなくなってきたからは目の前で着替えさせられたりしたこともあったくらいなんだ、幼いけど性別そのものことは女だって知っているわけ。

最初の買い物からして下着を見つくりてもらってたくらいだもんね。

そりやあ知ってる。

偽乳のひと幕もあつたわけだしってことでブラジャーについても指南されたしな。

かわいいのを熱心に勧められたしな。

断ったけども。

すうっ……………と、その大きい胸に溜めるように息を吸って……………あ、これ、うるさくて長いやつだ。

「……………確かに、確かによ？ 響ちゃんはとつても男の子っぽいつていとか男の子らしい性格とか話し方とか、あとはあとは……………雰囲気とか！ ええ、いろいろと無頓着なところも男の子みたいなどころがあるけれど！ でも！ そういう子だけど、それでも立派な女の子よ？」

響ちゃんは平気そうだけど、でも我慢できないわ！」

早口すぎて追いつかないけども。

「ええ、服装も男の子らしいのが好きだし話し方もこうでクール系だから会ったばかりとか……………いろんな人からそう見られてしまうのは

仕方なさそうだけど、でも！　これだけ一緒に過ごしてきたのだから分かってはいるはずでしょう？　りさちゃんも、ゆりかちゃんも、こういう冗談はとつてもよくないわ！　ひどいのよ！　ねえ、さよちゃん！」

すごい剣幕だ。

こわい。

中学生の迫力とは思えないくらいだ。

そしておんなじようにびびってる仲間がひとり。

この状況で話させられるとかかわいそう。

「ひいっ……」

ほら、ひいって怯えてるじゃない……かわいいそうに。

「あ、ええ……はい。　その……女子校に行ったり、いえ、うちの学校とかに来たとしても初めは見た目でお姫様でしょうけど……でもすぐに王子様とか……そういう扱いにはなると……はい。　クラスの雰囲気的に……だって、普段みたいに髪の毛、あんまり見えないようにしていたら……でも。　響さんは、普通の。　……私たちと同じ、女の子、です」

「えっ」

「……え」

なんか変な表現がかなり混じってた気がするけど……話してれば男って見てくれるってことでいいの？

「……その、響さん、ごめんなさい。　……いろいろ聞かされて……聞いてしまって、いて。　でも、響さんはかがりさんと一緒に、よくお出かけして……お洋服とか、買ったりして。　選んだり、してもらっていて。　だから、その。　……下着とかのサイズについても、かわいいものとかを、その、穿くか穿かないかって言うのがあったり……いつもこんなことがあったって、聞いていて……、えっと、その……」

……うん。

諦めてた。

くるんさんだもんね、あのお着替えの写真以外はみんな筒抜けだっ

た様子。

あの写真まで流出していたらもうこの子たちと顔を合わせられないけども。

でもかがり……なんで君はいつつも、人のことを平気で言いふらすんだ……聞かされるさよもたまったものじゃないよ、きつと……。

あ、けど、それならなんでさっきのふたりには僕のこと細かく言っていないかったんだろ？

だって僕を下着に剥いて着替えさせたときのこととか話してれば男だって思わないはずだもん。

………あー、時期の問題か。

確かこの4人がまとまったのは夏休みもまん中くらいのころ。

つまりその前までに僕のお着替えをあらかた楽しんだメロンさんにとつては、それまでに……前から仲が良かったさよに延々と楽しんでることについて口走っていたんだらう。

だからその後知り合った、いや、僕を知っている仲間になったりさりんとゆりかには、言う前に満足していたからお人形さん遊びについては言い損ねた。

たぶんだけどこんな感じ。

なんとなくて想像できる。

だってこの子、言うだけ言ったら満足するところあるから。

「そうなのよー、それに普段は恥ずかしがって、あと、ご家庭のこととかもあって男の子っぽい服しか着てくれないのだけど、でも、しっかりとお願いをすればかわいい服だって！」

それ、お願いという名の強制じゃなかった？

もう忘れたの？

いつもみたいに摂取した情報を都合の良いように改竄しているの？

……まあ、いつもすごい勢いで押されて流されている僕も僕だけど。

精神年齢で言えば倍くらい違うのになんで逆らえないんだらうか……。

……僕の性格以前に、この小さすぎる体がぜんぶ悪い。
そういうことにしておこう。

「さよちゃんや私と会ったりするときにはちゃんど！ ちゃんとよ？ 私がちゃんと選んであげて、響ちゃんにぴったりなりボンをつけて、スカートとか履いてもらって！ それも、響ちゃん自身のセンスで組み合わせてかわいらしい女の子にもなれるんだから！ それを……響ちゃん自身はあんまり気にはしていなさそうだけど、でもふたりして男の子扱いはかわいそうよ！」

僕がかわいい服を着させられている。

そんなことまで暴露された。

もう帰りたい。

彼女と出かけるときには女装……精神的には……させられるけど、それ以外は必ず男っぽく見える服装でしのいできたのに。

それを、みんな。

もういやだ。

布団に潜りたい。

何もかも忘れてさっさと眠りたい。

なんで僕はこんな目に……あ、そっか。

これがきつと罰なんだ。

僕が嘘をついた代償の。

……みんなにかわいい服とかスカートとかバレて……ここにお酒があれば何も問題は無くなるのにな。

なんとかならない？

魔法さん。

そんなことを念じてみたけど当然ながらなにも答えてはくれなかった。

40話 「男の子」／「女の子」 7／7

実は。

僕にはあまりに恥ずかしかったから封印していた記憶がある。

夏のある日、いつものようにかがりに呼び出されて出かけたら、そこにいてしまった……きつとくるんさんの策略なんだ……きよに、よりによってあのふりふりのワンピース……じゃないワンピースを着ていたのを見られたんだ。

もちろん僕は帰ってからもものすごく落ち込んだ。

そんなことがあの夏休みにあったのに……それを目撃しなかった2人にも自然な感じで伝えられてしまった。

スカートのことと下着のことも。

もういやだ。

この場にいたくない。

どっか隠れるところないかな。

こたつの中なら……暑そうだからやだな。

そもそも隠れたって意味はないし引っぱり出されるだけなんだ。なんてことだ。

針のむしろって、こういうこと。

あるいは修羅場？

……いずれにしても僕はこういうの初めて経験するから、どうやって切り抜けるべきかまったく分からない。

どうしよう。

「え、あれ？…でもやっ…」

恥ずかしくて顔は見られないけど、でも声の感じから不思議そうにしている感じのゆりかが言う。

「響、私と出かけたときさー、トイレ。男の方に入ってたよ？ ねえ？」

「？」

「えっ」

「あらっ？」

……あー、そんなことも……あつたっけ……って言うかよく見てる

ね、そうだよね、女の子だもんね……。

普段はなるべく高い階の奥まったところ、あるのなら誰でも使えるタイプの広いトイレを使ってるんだけど、みんなと一緒のときは必然的に近いところになるわけで、でも今まではどうにかして入るタイミングをずらしたりして見られないようにはしてきたつもりだったのに。

でも言われてみれば、どちらか空いていれば……最近なら音姫さんがある方を選んでるんだけど、その前だったりたくさん並んできたり、明らかに女の人がいっぱいそうな雰囲気ときには男の方に入っているからどっかで見られたんだろう。

いつかは分かんないけども、きつとどこかでトイレの入り口が遠くから見えちゃうような造りのどこかで……見られていたんだろう。

あー。

それで僕のこと男って……前のこと過ぎて、そのとき魔法さんがどうにかしなかったのか分かんないな、これ。

「それに、町歩いててもさ、男の人よりは女の人に目が行っているし？」

え？

『響ってクールだけどそれでもやっぱり男の子だなー』って思ってたんだけど、あれつてもしやファツション気にしてたん？ 女子として？

響、普段の服装も流行とか気い使ってるし、なによりいつも高い服着てるよね？ ブランド……じゃないことも多いけど、検索したら出てくるそこそこ良いものをさ。それで中性的なファツションしてただけなん？」

「えっと」

それはかがりのせいなんだ……いや、スタイリングをしてくれているおかげではあるんだけども。

「なによりさ、私と話す好きなキャラクターとかみんな女の子よね？

まー、こればかりはかわいい大正義を貫いてる私が言えたギリじゃないんだけどさ。 女子がかわよい女の子なキャラ好きでも良いじゃん！ ……でも響ってば男キャラにはあんまり反応しないの

よ、だから感性的には私とおんなじで男寄りってことって思ってたのよ。」

こっちからもまたいろいろと暴露される僕。

僕はもう丸裸なんだ。

僕の秘密……全員には知られていなかったようないろいろをひとつずつ開示されている。

もういや。

なんでこんな話題になったんだ。

そもそもさ、女性を見ているとかいえないとか女の子だらけのこの場で言う？

あ、今は普通の場面じゃなかった。

「あとかがりんや。私、響からときどきグチられてたんだよ？ あ、もちろんかがりんたちとご対面するまでのことだから告げ口とかじゃないよ？ ……で、それってゆーのは、ん——…たとえばさ、『女子の考え方がいまいち理解できないんだー』とか『肌の露出は目の毒だからちゃんと着て欲しいのにー』とか。あといつも見てて思うけどさ、響はかがりの対応にとっても困ってるときあるし……ほら、ハグしてるるときとか固まっちゃやうじゃん。だから男の子じゃん？ って思ってたんだけど。ねえりさりん？」

やめて。

もうやめて。

いっこいっこが恥ずかしいから。

「あー、うん。でも響さん……いえ、どうせだから言っちゃやうか、悪いことじゃないんだし。んで響さんって、男の子にしては女性の胸とか腰とかスカート裾……ふとももとかをじーって見たりしないのよね。どっちかっていうと小物とかそういうの見てるし」

今夜はやけ酒に決定だ。

なんでこんなことに。

「だからとつても……うちのクラスのスケベな男子とか、彼女ほしっていつも言ってる部活の先輩とか、やらしい先生とか……通学のときの大人の男の人とか、そういう人たちと比べると……紳士的って

いうのかな？ まあそんなに興味ないだけかもしれないし、なんか安心できるから……だから私たち、響さんっていう男子が混じるお泊まりでも大丈夫かなーって話していたのよ。 かがりさんがやたらとしたがってたお泊まりを」

うん、がんばって見ないようにはしてる……だって年下の子供たちだもん、君たち。

かがりみたいにいきなり真正面にでんと来たりくつついてこれらると無理だけでも。

「そーだよねそーだよね!! なんてか、男子ではあるんだけど、でも、なんてかその……怖いって感じたりするところないタイプだよね!!」
「まーね。 だからこそ温泉とか……まあさすがに一緒に入ったりはしないけど、でも湯上がりがちよつと恥ずかしいかなーって思ってたけど、最後にはOKって言うていたんだし。 そのくらいには紳士的……理性的なんだけど、ふとしたときの視線ってやっぱり女性に向いているわよねって思っていたのよ。 だからきつと、すつごく女性慣れしててそういうエチケツトとかが身についてるのかなーって思ったりしたりだったのよ。 ……あ、女性慣れって家族とか親戚のお姉さんとかそういう意味だからー」

うん……彼女ができたことすら無いのに遊び人扱いされていなくて良かった。

でも恥ずかしい。
引きこもりたい。

「響さんがなんとなく見ている人も年上が多いかしらね？ なんとなくか、ほら……うちの保健の先生とか体育の女性の方の先生だとか、あんな感じの……ひとまわり上くらいな女の人に向いているわよね。 ひよつとして響さんの周りの女性ってそのくらい年の人が多くって、同年代よりは年上の方に興味あるのかなーって話してたり、ね」

「あー」
もう帰ろうかな。

そうだ、具合が悪くなったことにして……いや、嘘はいけないんだ。

じゃあどうしたら。

どうしよう。

「……あ、響さん」

「ここまで散々に僕をおとしめて、さらにまたなにか？

……だめだ、恥ずかしさが腹立たしさを上回っている。

「今の、別に怒ってるとかそういうのじゃないからね？ 先に言っておくけど。むしろ、だから響さんって男の子……だと思っているんだけど、でもこうして一緒にいてもいいなって思っているのよ？ じゃなきゃ、途中で寝ちやうかもしれないこういうところに男の子を招いたりはしないわよ、いくらなんでも。さすがに響さんが……えっと、とにかく、その」

小さいから例え襲ってきてても脅威じゃないって言いたいんだよね？

「その……手とか出したりはしてこないだろうっていう信頼はあるけど、でもやっぱりその、お母さんとか保健の授業とかで……ほら、女子としての一応の警戒って言うか……あと、恥ずかしいじゃない？」
僕はまな板の上のしらす干しなんだ。

「……その反応だから安心できるのよね。……あ、さっきのだけど、かがりさんやさよさんなら分かるって思うけど、中学に入るころから……ほら、胸とか出て来るから同学年でも年上でも関係なく男性からの視線が気になるでしょ？ それがほとんどないってだけで」

「りさりんやりさりん、私は？」

「さっき言ったみたいなお場所を……人によつてはじろじろと見てくるのって肌でわかつちやうのよ。……人によつてはやらしいのが」

「だからりさりん、私。ねえ私は」

「まあみんなじゃないんだけどねー」

「りさりん」

「けど、やらしいものでもそうでないものでも女の子らしい部分っていうのは否応なしに見られるものなの。視線がちくちくって来るのよ。まー女の子同士でもそうではあるし、これはもうしょうがないことなんだけど」

「私い……」

「……あんたさつきまで自分はロリで出るとこ皆無って認めてたじゃない」

「それとこれとは別だいつ！ あと皆無だなんて！ 少しは」

「だからもし、クラスの半分くらいの男子たちみたいはまだ女の子にそういう興味がないんだとしてもよ？ ……そういう、女子と同じくらいに安心してくつろげるっていうのがあったから。 でももし……その、きちんと見ないようにしてくれる男の人とか、あとは結婚している先生とか娘さんがいる男の人とかみたいな感じ、それだから安心できるっていうのが響さんの魅力」

「え？」

「え？ ……あ、いや待って、今のなし、忘れて響さん！」

「ほほう……りさりんもついに」

「うるさいだまれちびロリ寸胴小学生低学年ゆりか」

「ひどいっ!？」

なんだか話が行ったり来たりしていたけど、とにもかくにも僕を辱める以外の何物でもない会話が終わったってひと息つこうとしたらゆりかが続けてしまう。

「……で、話まとめると……いや、まとめらんないけど？ 響は男の子

だけど女の子で、中身男子っぽいけどでも女子で？ いやでもでも

も、かわいい系の顔つきではあるけどさ、どこからどー見たって男の子でしょ！ ほら、顔つきでもー！」

ほんと？

男に見える？

「……ええと……ゆりかちゃんたち？ あの」

ちよつと嬉しくなつて「さんざん落とされた後にこれで嬉しくなるって僕ちよろすぎるなー」つて思ったらまたかがりに戻つて来た。

「ええと……2人も……むしろ響ちゃんのことを男の子だと思つていたのに、私が提案したパジャマパーティーとか……そういうええなんだから複雑そうな顔して話し込んでいたけれどでも、いいって言つていたの？」

あ、なんかかがりが初めてまともな反応してる気がする。

「かがりんや、今はそれわき道だから戻して戻して」

「? ……とにかく、響ちゃんとは絶対に女の子よ! ……だって、お化粧とか教えてって言ってきたこともあったし、お胸が小さいことを心配していたし!」

だからくるんさんそれやめて。

無作為に個人情報をばらまかないで。

「うえ? マジ? ……ね、なんかすつごく複雑すぎて大変なことになつちやって正直ごめんだけどさ……そのー、無理は言わないんだけどここまで来ちやったからさ……もし良かったら教えてもらえない? 響」

ゆりかとその横に来ていた巫女りんが、僕が「男」だと知っていて。

「もちろん女の子よね! ……そうよね、響ちゃん?」

かがりとその後ろで僕を見ているんだろうさよが「女」だとも知っていて。

けど魔法さんはまだ、様子見をされていて。

……どっちにしろここまでバレちゃってる。

両方とも僕が男っていう証拠と女っていう証拠を持ち合わせていて、でもどっちも正しいように聞こえるからどっちがどっちなのか分からなくなっていて……で、「あ、これデリケート過ぎる話かも」って今さら気がついたもんだからかがり以外は多分困ってる。

「……………」

男としても女としても見られていた。

多分どっちだっけ言っても「そうなんだ」で済ませてくれる。

と言うか多分本気でそうなんだって思っておしまい。

——でも、僕は元々言いたかったんじゃないか。

嘘をついてたこと、ひとつでも多く……みんなを傷つけたり困らせたりしない範囲で謝ってからにしたいって。

……今を除けば、多分もう言える機会は無い。

だったら……。

僕はつい最近に知った。

人間って、僕みたいな怠惰な人間でも火事場の馬鹿力ってやつで一瞬が何秒にも何分にもなるんだって。

階段に頭から落ちてる状態ほどじゃないんだけど……僕にとっては一大事らしく妙に冴え渡った思考が回っている。

顔見知り——いや、友達になった子たちの2人は僕を男だっって言っているって状態に。

どうということなんだ。

どういふ状況なんだ。

何度かの経験でそれとなくわかってきた感覚を澄ませてみても、少なくとも今は魔法さんの気配はないみたい。

みんながどろんとしたりしていく感じもないし、僕自身についてもざーっとした感じがない以上、たぶんなんともなっていない。

だから魔法さんへの対処については後回しにできるとして、だ。

この子たちの僕への性別への認識がばらばらだったのに……なんで今、この話題をゆりかがし始めるまでのそれなりに長い期間……何ヶ月も何も起きなかつたんだ？

少なくとも……えっと、最低でも10回くらいはこうしてみんなで集まって宿題とか見てあげたり、ずつといろんな話題を話すっていう時間だっただくさんあったんだ、そのなかで……意識してはいなかったけど、それはもう女の子という生きものの性質上あつちこつちに話題が飛ぶわけで。

そもそもかがりはいっつも僕に対して……肉体的にはしようがないことだけど、でもくるんだからっていう理由で僕のことを年下の女の子だっただくさんあつちこつちが多い節がある。

まあ肉体年齢はほんとうに年下なんだけど、前の僕と合わせて割ればこの子たちくらいの子にはなるわけで、つまりは最低でも同学年のはずだ、うん。

不本意ながらも年下の女の子扱いされた僕は、ことファッションの

話題になつているときはそれはもう諭されるように世話を焼かれる。それは……ゆりかたちと集まつているときでもおんなじだったはず。

「みんなに見られてるからやめてほしいなー」って思つてた記憶があるし。

僕のことを「ちゃん」付けなのは……いや、かがりの性格だったら、もしかしたらクラスとかでもかわいい系っていう男子とか他の男子とかに対しても「ちゃん」って呼んでいてもおかしくはない。

接した時間が彼女の同級生たちの誰よりも少ないはずの僕でさえそう思えるんだから、仮に……学校ではきれい系の花なかがりが誰に対してもそう言うのなら、受け入れられている……のかもしれない。

男でも女でも構わずにちゃん付けするっていうキャラクターが確立しているんだったら、そのへんは気にされなくなる可能性もあるからな。

まあ「ちゃん」付けは良くないけど今はいいとしてだ、とにかくかわいいを連発するこの子のこと、普段からみんなに対して……僕に対してもかわいいつていう形容詞をあたりまえのように使っている。

かわいいつて同級生の男子に毎回言つていたら……これもかがりなら言いそうだし許容されそう……考えても無駄っぽいからほっこ。

個性で済まされる問題だからこれは置いておいていい。

「ああ下条さんだからね」で済むのなら。

けど——けれども問題はゆりかたちの方。

ゆりかと、りさりんだ。

普段は男としてのアイデンティティを保ちたいのと、なによりも注目されなくなかったのとで……当時はまだ女の子の見た目でほつき回つていても問題ないつて知らなかったから、ほとんどは帽子とパーカーのフードとズボンっていう格好をしていたわけだ。

でも今みたいに人目のない屋内だったりゆりかの家とかに半ば強引に連れて行かれたりするときには、帽子もフードも外しているだ。

いくら体温が低くて暑くてもなかなか汗もかかない僕の体だつてそれでもやっぱり夏だったから蒸し暑かったわけで、あと視界も狭かったからリラックスしてるときは外していたんだ。

そうでないときは……いちいち動いたびにふあきつとついてきてぴたんつてなる髪の毛がうぎつたいのもあるし、気をつけていないと手とか足で引つ張つちやつて痛い思いをするから、家にいるときはともかく外に出ているときはパーカーの中に髪の毛を収めていたし、わざと大きめのパーカーを選んで腰まで届くようにして髪の毛をしっかり収納していたんだ。

けど、いくら隠したいっていうのと邪魔だからっていうので髪の毛を、首から下はパーカーの中に収納しているからといつてもフードを取れば幼女、女の子としか見えないはず。

だつて前髪が長い……のはともかく横の髪の毛も長いんだし、それが服の中まで続いているだろうつてのは見ればわかるはずだもんな。それに顔だつて……幼女にしては男っぽい感じがなきにしもあらずつて信じたい感じなんだけど、やっぱり男だつて主張しなければ誰だつて女の子だつて思うし感じるもののはず。

少なくとも僕が僕の前に立って話していたら、そう思うだろうか。

で、いつもみたいになりかかの家とかで、ふたりでマンガを読んだりゲームしたりしてるときみたいにするそばにいるとき、至近距離ならまず男の子だとはまちがえないはずなんだ。

つまりはこの時点でゆりかが僕を男だと認識しているのがおかしいんだつてわかるんだけど、そのときに魔法さんが暴れなかったのもまた不思議だし認識できているのがおかしいんだ。

だつてゆりかだつてしよつちゆう、みんなが集まっているときとかに事あるごとに。

今思えばなんだけど、でもなにかと「男の感性だー」とか「かがりみたいな夢見る乙女にはわからない話だー」とか、やたらと僕を男扱いしていた気がする。

なんでゆりかにだけは魔法さんが働かない？

それともこれは働いた後なの？

前の僕を知らない人が僕が男って聞いたら前の僕って錯覚して成人男性って扱いはするの……男扱いはともかく大人扱いはされていないんだからおかしいんだ。

理屈が合わない。

……まだ僕が気がついていない魔法さんの仕組みが……ありそうだなあ、だってこの認識の改竄について分かってきたのって最近……僕主観で……だもんなあ。

ちよつと焦点を僕の目の前の子たちに戻す。

ゆりか、かがり、りさ、さよ。

4人の目は僕の視線とぴったり合っている。

……今考えたおかしいいろいろって、今こうして思い出してみてもうして考えてみてそれでようやくわかるっていうことは……もしかしたらあのときの、ねこみみとポニーテールをテレビで観たはずのあの場面みたいに「僕の方に」魔法さんがなにかやらかしてたとも考えられるわけで。

それを普段通りの認識の改竄と一緒にして見ると……今分かった性別の食い違い、僕に対する認識の食い違い、それにみんなが違和感を抱かなかつたっていうの自体が、魔法さんのせい。

——最近、ほんとうに最近になって……この1週間、いや、10日ほどでようやく慣れてきた魔法さんの気配っていうの、気がつかなかった……気がつけなかっただけで、これまでにきつと数え切れないほどに襲われていたんだろう。

ここにいるみんなも、外に出かけていたときにも……いつなにをしようが構わずに、誰も気がつかない形でいろんな会話を「違和感のないように修正していた」。

魔法さんにとって都合の悪いことが起きそうになると必ず。

ずーっと僕を監視し続けて、なにかがあればすぐに。

僕自身の認識や思考にも影響、していたんだな。

日常の中のすべてで。

ゆりか、それに話を聞いていたらしいりさが僕を男って認識してい

た理由は分からないままだけど、それでもこれまで「ん？」ってならなかったのは魔法さんのせいだと断定できる。

……僕自身の知覚すら改竄されていたらもう自覚すらできない。それはこの体になったばかりのときにさんざん考えたこと。

みんなから幼女って見えるらしいから安心していただけ……1周回って戻って来ちゃった、僕が僕自身を信じられなくなるっていう可能性のうちのひとつなんだ。

いろいろうじうじ考えるよりもぱっと思いついた直感が正しいっていうのを前にどこかの本で読んだ覚えがあるけど、本当にそうだったのかもしれない。

——でも、今はこうして考えられているっていう時点でその認識は通常のものに戻っているはず。

っていうことは魔法さんが何かしらの原因で……弱まっている？

あるいはずっと隠そうとするんだけど1回でも知られちゃったらそのことに関してはもう魔法をかけないっていうこと？

僕の認識をねじ曲げないっていうこと？

ねじ曲げていた分までまとめて認識できるようになるってこと？

「あの一。響さん？ だいじょぶ？」

「……うん」

「や、その、私ね、えつとね、まさかねっ」

初めて見る感じに動揺しているゆりかがいる。

「あのね、私、ほんと、そこまで深刻になるだなんて思ってたなくて

……そのっ、ごめん！」

「いや僕は」

「だいじょーぶ、私は、いや、ここにいるみんな、響がどっちだったとしたりって『響』は『響』なんだって思ってるから！ ねえ？ だから、

その……今までと何にも変わらないから！」

……すっごく心配されて気を遣われている。

遣わなきゃいけないのは僕の方だって言うのに。

騙してたのは僕の方なのに。

「うん、今のはお酒の席のことってことで！ だってほら甘酒あるし

……未成年がいけないことしない範囲だけど私たち子供だからびみよーなアルコールで酔っちゃったことで！　ね、大人ってお酒の席でやらかしたとか忘れちゃうって言うじゃない？　だからこの話題忘れよ？　ほら、みんなも忘れるからさっ！　ねっ、ねえっ！？」

「……ま、お酒の席だと問題だから寝不足でハイになってたっことで良いかしらね。　私もゆりかに釣られているいろいろ言っちゃったし」「ちよつとりさりーん、ホントに酔っ払ってたのがそれ言うー？」

「……そうね。　響ちゃん、困っちゃったものね。　分かったわ、おしまいにしましょう」

「……誰にだって言いたくないことは、あります」

僕よりもよっぽど……肉体的にもだっただけど、精神的にもどうやら大人な彼女たちは急に声の調子を普段通りに戻して軽く伸びを試してみたり、忘れられていたテレビの番組について急に話してみたりし始める。

……困って黙りこくっていた僕とは全然違って。

うん。

この子たちは僕が思っているよりもずっと大人なんだな。

そうだよな、中学生って言えば思考能力なら下手な大人よりも上だもんな。

こんな、アルコールで毎晩止まっているような僕みたいなものより、ずっと。

僕は「男なんだからもっと強くなりなさい」みたいな言い回しも決めつけも嫌いだ。

男だから何なんだ。

男だって戦うどころかボールが飛んでくるのが怖かったりしても良いじゃないか。

男だって明るく元気に運動しなくても良いじゃないか。

男だってうじうじとじとじていたって良いじゃないか。

女だから何なんだ。

女だってお淑やかじゃなくて元気で男を引っ張っても良いじゃないか。

女だってかわいいものじゃなくて格好いいものが好きでも良いじゃないか。

女だって格好いい系の格好をしても良いじゃないか。

そう思う僕でも女の子は、いや、女性との会話はやっぱり苦手。

理屈と感情は別物なんだ。

だってこつちが話そうとしても、話したいことがあってもずるずると別のことしか話させてくれないし聞かせてくれないから。

それは今の、この状況でもおんなじ。

しかも相手は4人。

まあそれは諦め切ってるんだけど、とにかく今は魔法さんは手出ししてこないらしいのが分かっている。

もう年が明けて1時間が経っていてこの追及にも20分はかかっているような感じで、やたらと僕が「男の子」あるいは「女の子」だっているというキーワードが飛び交っている、今この瞬間にも僕は、僕たちのいるこの空間はフリーなんだ。

だからここまでなっけていても平気なんだ。

僕のメンタルはともかく、魔法さんのあれやこれやには心配をしなくとも良さそうって判断する。

それなら、一瞬静かになった今話しちゃわないと。

「それなんだけど」

「そうね……」

僕の言葉に被せるように……あ、これ自分の世界に入り込んでいくときのかがりの声。

当然ながら僕の声より大きい彼女の声、あと微妙にワンテンポ遅かった彼女にみんなの視線が集まっている。

……さよは僕に気がついてくれてるけど、この状態のかがりはしゃべらないと止まらない。

終わるまではおあずけだ。

僕はいつもこうなんだ。

「私にとつては響ちゃんやんは響ちゃんだもの。たとえもし男の子でも……でもあのかわいい下着は……いえ、やっぱり気にはしないし、男の子でも女の子でもどちらでも関係ないわ。ね、響ちゃん？」

今さらつと僕が男で、つまりは生えていて、なのに女もののぽんつ……かがりおすすめの上と下の下着を買ったことについて思いを馳せていたかもしれない事実だけには抗議したかった。

「……後ね、多分だけれども。響ちゃんがこのこと、いいえ、お洋服を着てもらおうときにも言っていた、嫌いなお仕着せの服だとか病気のことだとか、お家のことだとか。……そのことと何か関係があった、だからどうしても言えない事情があるのでしょうか？ だって病気のことは、その、なかなか言えないこともあるかもしれないけれども……お家の場所や名字についてすら言えないっていうのもきつと、話せない、話したくない理由が……」

あ、名字。

うん、言っていないだけだね……だって誰も聞いてこないから。

なんか自己紹介とかで名字までって学校くらいだし……僕ニートだし……。

「あ、そっかー。そーいえばすっかり忘れてたけど、響さんのお家って何か面倒……あ、ごめんなさい……けど、複雑そうだったもんね」
くるんさんのせいでありさが反応しちやつて、また深読みが始まる。

「……この地域で、ちよつと大きいだけの私の家でさえ。古い神社

のうちでもね？」

あ、りさも話し始める雰囲気。

「今となつてはちよつと大きいだけな家だけどやっぱり古いから。だからおじいさんの代までは、それはもー、ぜんっぜん自由つてものがなかったらしいのよ。学校どころか勉強するかどうかも……それは結婚相手とかまで全部。 生きること自体が生まれる前からぜーんぶ決められててね、いろんなしきたりがあったつてお母さんが言つてたもん。今はこの通り、そこまでじゃないけどね」

「だからお家が大変つてのは分かるの」つて締めくくるのに合わせてさよが口を開く。

「……私も……病気が治るまでは、その、くわしい病名とか、なかなか言えなくて……そもそも理解してもらいにくくて、それに、少し遠慮というか、避けられたりもしますし。 だからその……中学に入つて仲良くしてくれているかがりさんにまで、なかなか言えませんでした。 お家のことはわかりませんが……私、病気についてなら少しは分かります。 ……仕方が、ないんですよね」

……なんかどどん深刻なつて来ちやつて、さつき言おうとしていたことを言う雰囲気じゃなくなつちやつた。

この雰囲気で言うの？

嘘でしょ？

こんな真剣そうな顔した子たちの前で「全部嘘なんです……」つて言わなきゃなの？

無理無理、いくら僕がやつちやつたことでもこの状況じゃ無理。

「……そんな感じなんだ」

……そうして「ねえ、そうなんですよ？」つていう4人の目つきで思わず口から出ちやつた僕の声。

また嘘を塗り固めたのに気がついた。

きつと、半ば無意識で……だつて、こうしておけばこの先にながあつても……また僕が、今度はもつと長い冬眠をしたとしたつて、そのままお別れしたつて大丈夫なようにしたからしようがないんだつて理屈を後付けして。

それに、怖いんだ。

あの目は嫌いだ。

ぞつとする、どろんとしたあの目。

あんなにぼわぼわしている感じの飛川さんが操り人形みたいになつちやうあれ。

「……………」

ぐつと手に力を込める。

……どうしても話したくない、いや、話せない……そこまで行くと最初から全部説明しなきゃ行けなくって、だから家のことと病気のことをたつた今ついたばかりの嘘で固めたとしたって……男だつていうことはゆりかとりさはもう知っているんだ。

話したとしても……この子たちは、前の僕を知らない。

だから……多分、僕を男だと認識できるはず。

実際にふたりはできているわけだし、できる。

……そうだとは思っている。

猫さんやポニーさんみたいに、ちよつとだけ止まってから理解できるはず。

……きつとそうだとは分かっているんだけど、でも、この子たちの暗くなって濁ってどこを見ているのかわからないような目なんて、見たくはないんだ。

出しかけた勇気がしぼんでいくのが分かる。

……僕はずつとこうやって逃げてきたんだ。

でもそれはしようがないんだ、魔法さんは相も変わらずに不安定でよく分からなくって、なんで怒るのかも……今怒っていないのかも分からないこの存在が、どう出てくるのかまったくわからないんだ。

お隣さんのときもねこみみ病のふたりのときもそうだったけど、魔法さんは怒らせてみないとどうなるのかが分からないんだ。

今度もまたあのときみたいに、まったく想像もできなかったような意図していない方向に……それこそ取り返しつかない魔法が発動したりなんてしちゃったりしたら——こんなに仲良くなってしまうた子たちになにかが起きてしまったら。

この子たちが大切になっちゃったからこそ、言いたいのと言うのが怖い。

「……済まない、みんな。これは僕の、家の事情のせいであまり……」

僕の口はいつもの通りに嘘で終わらせようとする。

父さんと母さんが死んだときも、周りの大人に「僕は大丈夫ですから」って言い続けたみたいに。

誰かが「大丈夫？」って心配して来てくれても「大丈夫です」って、大丈夫じゃないのに言い続けたみたいに。

叔父さんが「そろそろ仕事をがんばってみたら？ まだ取り返しが付く20代のうちに」って何回も言ってくれたのに「働きたい仕事をいろいろ探しているんです」って嘘ばかり言っていたときみたい

「んじゃー、しよーがないよ響。今までだってわかんなくても友達ちでいられたんだしきー」

「そうよねー、実際私だってゆりか以外には神社の家出身だって学校でも言っていないもの。あ、今は4人に増えてるのか。でも別に言わなくなっちゃって友だちではいられるんだし、言う必要だってないんだから。ね？」

「そうよね！ 響ちゃんは、隠したくて隠しているわけではないのだものー！」

「……いつか、話せる日が来れば。そうすれば、私みたいに……ほつと、できますから。……全部でなくても、いずれ、話せるようになるば、いいですね」

そうしてひととおりに慰められたところで、みんなが意識的に話題を変えて適当な話をし始めたところ……不意に蘇ってくる記憶がある。

それはあの夢、冬眠のときの明晰夢なのかただの夢だったのかは分からないのに今でも覚えているフシギな夢の中、「お姉ちゃん」って呼んでほしがってたアメリカって女の子とのあの会話。

——嘘をついていてバレるまではずっと嫌だけど、バレちゃえばし

ばらく辛いけど楽になる。

あの子から教えられた、いや、僕の深層心理とでも言うべきものが僕の情けない心を叱咤するように、けどそれだと僕が萎縮しちゃうからアメリカっていう威圧感ゼロな子を演じて教えてくれたんだ。

——どうせいつかはバレるんだから謝る気になっただらさつさと謝ってしまえばいい、どうせ怒られるのは一緒なんだ……だから自分から白状してしまう。

鉄則ってわかりやすい形で僕が言いやすいようにしてくれた。

他人からそう教えられたからって実践しやすくして。

意識と無意識って本当によくできているんだ。

——ついでに、謝る相手が穏やかなときに謝れば少しはマシなんだとも。

——タイミングを見計らって、あとはがんばれって。

……そのタイミングって、今なんじゃないか。

そう思っていたらいつの間にか嫌なことばかり言われてにじんでいた不快な汗も、すっかりと引いている。

みんなも……努めてかもしれないけど、でも明るく話している。

そして今、いつか話してほしいって言われたんだ。

……だったら、僕は。

「……ね、なんか響、うずくまるようにしてない？」

「……あの……響、さん？」

「……もしや、またあのときみたいな発作が起きてきてるんじゃない？
あのときも『なんだかうつむいてるな』って思ってたらすぐになっ
たんだし!!」

「そうだったら大変！ あのときだって苦しそうだったんだし、たと
え響ちゃんが大丈夫だって……あのときはそうだったとしたって、今
度は違うかもしれないもの！」

「すぐにお家の方に、連絡を……！」

「……かがりん、あつた、あつたよスマホ！ 響のコートの中に！」

……あれ。

さつきから「なんだかあつたかくて柔らかい感触があるな」って
思ってたら後ろをりさりんっぽい柔らかいのに抱きかかえられて、
首すじが柔らかいそのふたつに包まれていたのに気がついた。

あれ？

僕はいつのまにか座椅子の上からりさりんらしきおなかと太もも
の上に座らされていて？

目の前にはさよが僕の不とももに体重を軽く乗せていて、僕の首元
とさよ自身の手首に……脈拍を測ってたりするかも？

そうして彼女の長い前髪が僕の上に乗っかってて？

え？

何があつたの？

——まさかまた魔法さんが僕を。

「わかつたわ！ まずは響ちゃんの指でロックを解除ね！ ……あの
ときのように、きつとうまく返事ができないだろうから……」

僕を止めていた？

……けど、これはねこねこペアのときと似ている。

なら、大きな邪魔をされずに言えるはずだ。

ごめんねって。

「……済まない、大丈夫だよ」

「響い！」

「……少なくともあのときのような発作じゃないんだ……それに、もう大丈夫」

「響ちゃん……それは本当なのね？」

「うん、強がりとかじゃなくて経験からだよ」

まだ1回しか前例はないこれだけど……状況が似ているから、多分。

「……脈拍も呼吸も落ち着いて……たぶん正常、です。この前のように、ぜんそく、あるいはアレルギーでのショック症状もありません。発汗も、なくて……確かにこの前とは、ちがいます、ね。」

あのとときは、響さんの白い肌が、真つ赤になっていました、し」
まるで看護師さんとかお医者さんみたいな感じになってるさよが僕の上から言う。

「……みんな、心配させてごめん。少し……そう。少し考え込み、過ぎていたんだ」

体を起こそうとして……さよとりさの体重が掛かっていたのに気がついててもぞもぞしたら拘束が解かれる僕。

「ゆりかなら知っているよね。僕が、長考してしまうとこうなるっということを」

納得できない感じのため息が降ってくる……けども。

「……んまあ、響は突然黙ることがあるけどさ。……あっはははははは……あー、おなか痛い。さっすがマイペースひびきん、この夕イミングで私たちの声がぜんっぜん入らないくらいなにか考えてたん？」

「僕の悪い癖なんだ」

何かを察してくれたらしいゆりかが「そういうこと」にしてくれる。
……うん、これも嘘じゃない……けど、この子たちにとって嘘だっ
て感じるわざとらしさ。

それでも何回も「本当に大丈夫？」って確かめられてからようやく
に前と後ろからの圧が減って、涼しくなって、ついでに「勝手に開け

ようとしてごめんね」ってスマホを渡されて。

みんながほっとした感じでこたつに潜り直して……またゆりかがくつついてきて、お茶と甘くないお菓子を勧めてきて。

……鉄則のタイミングって言うやつ。

今を逃したらもう来ないだろう。

「……今考え込んでいたのはね」

心臓がばくばくする。

きつとこの瞬間に脈を取られたら「救急車を！」って言われちゃいそうな感覚。

「言うべきかどうか……悩んでいたんだ。でも心配してくれてありがとう、みんな」

「そうだったのね。あーもう、心配したけど良かったわ！」

「だねえ。ね、今度から考えてるときは名探偵風に……」

——かがり。

身長も女性らしさも……童顔っていうのと中身を除けば、あとは言動の全てを除けば、服装と静かにしてられる間は高校生とも大学生とも言い張れるくらい。

髪の毛はくせっ毛……じゃなかったらしくウェーブっていうものかけたこだわりのくるんだっただそうで、それが肩甲骨くらいまでくるんくるんしていて少し垂れ目で少し抜けていて。

手を繋がれたりなんてしたら間違ひなく肩が疲れるくらいに腕が上がって姉妹のように見られたりすることもあるくらいの子。

そのかがりは着られる服がぱんつを含めても足りないからっていうのと、初めての女もの、それも女兒のそれをオンラインで買うのが難しくって、なにより状況を知りたかったからっていう理由で出た先で、たまたま着せ替えさせられた出会い。

そのあとにも運悪く……運良く何回か外で遭遇して、話をしたり連れて行かれたりしてもわざわざ振り切ったりしたりで断るのがめんどくさかっただけの関係な子。

「……もしかして今の、私の早とちりだった？ 響が熟考してるの勝手にこの前みたいって？ いやあごめんねみんなー、響もさー」。

勝手に服とか漁っちゃってさ」

ゆりか。

最近流行りなのかどうかは知らないけどやけに前髪をきれいに揃えることにこだわっていて、目がぱっちりしていて髪の毛は肩まで……今は肩にふんわり乗っかるくらいにまで伸びていて。

話題はとにかくゲームやアニメでどちらかというと小学生男子みたいなセンスで、でもマニアックなものも睡眠時間を削ったり勉強と両立させながら、好きなことを好きにだけしている子。

今井さんの芸能界への手引きから助けられて、その前にはバーガーの残り物も……学生らしい感覚で欲しいのかなって与えてみたって言う繋がりがあったっけ……それからずっとひたすらに話をしたがってきて。

聞いてみればなんていうことはなくって、ただ趣味が合う友だちを探していた、ただそれだけで。

そんな、このふたりとの関係。

押しに負けて……あのときはまだ子供、JCって子たちに対する耐性が弱かったんだ……連絡先を教えちゃったんだけど、それだっけすぐに消したりだとか、そういうことだっけやろうと思えばできたのになくて……知らないあいだに友達って言うものに、僕からもなっけていて。

だからこの姿、幼女になっちゃってからは女性として、あるいは幼女のままで背伸びして中学生として生きるのに不自然じゃないようにするために、不信感をもたれない程度のふるまいとか話し方とかを身につけるために、情報を得るために距離を置かなかつた。

初めのころは、ただそれだけだった。

「そんなこと、ありません。……退院直後というのは……えっと、とりあえず、ひとまずで、数値や過去の症例、それに本人の感覚から大丈夫だろうけれど……響さんや私のような場合には、大丈夫、かもしれない。一時帰宅、という捉え方のほうが、いいんです。私は、響さんも言っていたとおり、ゆりかさんと、かがりさんの、さっきの対応。まちがって、いなかっただけ！ そう、思います」

さよ。

ますます伸びた前髪はどう見ても邪魔つけなくらいになっていてもはやメガネも隠れる始末で、今どき珍しい感じのおさげでおとなしい子。

あの蒸し焼きになりそうな真夏のあの日、この子の好きな本屋つて言う場所で知り合った子。

僕の昔みたいな……いや、今でもたいして変わってはいないんだけど……親近感があつてそばにいと落ち着ける静かな子。

「そうよねー。……ほら、さよさんも、今、気づいてる？ ……ほとんどつかえたりしないで、そうしたいって言っていたとおりにおはなし、できていたわよ」

「……あつ……」

「ちよつとだけでも今日……じゃなくてももう昨日か、たくさんの人と話した成果、出てきたんじゃない？ この調子なら三が日が終わるころにはもつともつと自信を持って話せるわね？」

「りささん……がんばりますっ」

りさ。

運動部らしく、それとも彼女の素の性格で活発でいっつも動いている子。

部活で汗をかくからつて髪の毛は首にかからないくらいにそろえてあるけど、ほんとうは伸ばしたいって言っていたのを覚えている。

かがりに近いけどかがりよりもつと引き締まった感じがあつて力強いって言う感じで、今の僕とは正反対な感じの子。

この子だつてゆりかと一緒にいたところで知り合つて。

ゆりかから聞いていたからつてすぐに……これもこの子の性格なんだろうけどやたらと距離が物理的に近い子。

——初めは僕ひとりだったのに、幼女になつてそんなに経たないうちに気がつけば偶然に2人も増えて、これまた偶然でさらに2人も増えた。

こんな見た目とこんな中身なのに、こんなになにもかも隠して……中学生なんだからそれくらい察していたのに黙つていてくれて、

それなのに僕を1人の人間として、男でも女でも関係なく友達と思っ
てくれている。

こんなの、もう10年くらいなかったんだ。

だったら僕も……応えなきや。

答えなきや。

「……ふ……」

多めに息を吸って、みんなの話が途切れるタイミングを見計らって
僕は言う。

「……みんな。りき、さよ。かがり、ゆりか」

「ん？ どうしたの？」

「具合の方は……」

「……響ちゃん？」

「……響」

「……聞いて、ほしいことがあるんだ。さっきまで言わないことに
しようと思っていたんだ……僕の事情って言うもの。その……今、
全部はムリだけれど。でも。聞いてほしいんだ」

魔法さんもない、邪魔も入らない、みんながそろっている……こ
こに来る前に偶然で見つけた、「もしもの備え」もある。

そんな今だからこそ、僕は言うんだ。

「僕は——『男』なんだ」

口に出すだけで大変なことになる魔法さんのことも関係がないか
もしれないねこみみ病のことも、本当の僕のこととも言えないし言っ
ても困らせるだけ。

でも……性別を、心の性別を偽り続けるって言うのはこの子たちに
対して失礼なんだ。

「——君たちと同じ女子じゃなくて、『男』なんだ」

だから、言った。

魔法さんがどんなことをしてこようとも……これは、僕が言いた
かったことなんだ。

『まー、ヒミツがいっぱいあるってのもさ、響らしいって言えば響らしいよねー。 なんてか、普段の雰囲気とか話し方とかそーいう、響そのものってゆーか。 属性も設定もマシマシなのが明らかだし、だからそ私たちも勝手に好きだけ盛れてさ？ しかもそれをどーしても言えないっての。 まさに世をはばかるヒーロー、あるいは闇抱えてるヒロインって感じじゃん？ しかも割と終盤まで明かされないヤツってパターンの！』

『ゆ、ゆりかさん……あまり茶化さない方が』

『いいのいいの、こーゆーときにはゆーもあが必要なのだよ』

『ユーモアねえ……まあ明るければ何でも良いわね。 えーと、それって最後の戦いの手前くらいで明かされたりするああいー感じのこと？ 私あんまり漫画読まないから合ってるどうか』

『そーだよりさりん、さっすが話が早いねえ！ だてに便利な布教先第1号なだけはある』

『あんたが次はコレ、次はコレって……いつも私がちょうど見終えたりしたタイミングで新しいの持ってくるからでしょ。 それに、今はあんたの話に乗ってあげただけだって』

『知ってるぜい？ りさりん。 それ、ツンデレっていうヤツ！』

『……………』

『おりよ、ぐりぐりがこない』

『いくら私だって控えるわよ……こういうときくらいは、ね』

『……そうよね！ だって響ちゃんだもの、飲み込みがとっても良くて勉強だってすぐに追い越されてしまうくらいのすばらしい頭をもっているのなもの！ あともものすごい集中力かしら？ だって私の何倍もの時間ずーっと勉強したり考えごとをしたり！ ……隠された一族の過去とか因縁とか対決とか先祖から受け継いだ力だとか……………』

『かがりんストップ』

『いえ、それよりも響ちゃん本人にだけに現れた力とかのほうがドラ

マッチクかしらね？ あと、あと……権力から隠れていたり、あるいは逆に権力から守られて頼られていたり！ つまりは響ちゃんってというのは現代に生きる』

『ストップストップかがりん。 設定垂れ流すのはお家にあるノートとかにでもやってちょ。 りさりんが言っていたように今はそーゆー雰囲気じゃないのよ？』

『……あら？ なんでゆりかちゃんがそれを知っているの？ 私、話したことあったかしら？』

『……動じていないどころか黒歴史ノートの存在を自分からセルフ開示だと……かがりんさんってやっぱすげえ……!! ……ねね、ちなみに今は何冊目？』

『あの、あの……みなさん……』

『む、少し遊びすぎたか』

『あのねゆりかちゃん、今はどうとう』

そのような平和な……中学生なりに雰囲気に戻そうと、敢えて彼女たちがしていた会話をぶった切って「彼」が言う。

『……みんな。 りさ、さよ。 かがり、ゆりか』

それを……先ほどから外套を部下に預けたまま、ドレスのような派手な衣装をはためかせている彼女が耳に神経を尖らせつつじつと眼下を見下ろし続け、耳元のデバイスからは中で一番に幼いけれども一番に落ち着いている声で——彼／彼女からの、その告白が流れてきている。

『……え、響ちゃん』

『……言っても良いの？ 響』

『うん、君たちだから。 ……僕はね。 女としての体を持つてはいるんだ。 かがりに着替えさせられたときのように、きちんとした

……小さいけれども女の肉体を。 うん、肉体的には女性なんだ』

「——ほう」

タブレットを……ふたたびその眼帯を外したからか光を帯び始めた目でにらむようにしながら、耳からの声に集中もしている彼もまた首を振りつつ、杖を軽く砂利に打ち付ける。

その隣で片手で耳を覆い、「彼」の告白を聞こうとしつつ、もう片方の手を無意識に頬へと当てる彼女は、それに気がつく様子もない。

『……だけど、意識や心といったもの。つまりは僕というそのものは、男で……そして僕自身もまた、男としていたい、男として生きていきたい……そう思っているんだ。少し前までは、それですら迷っていたんだけどね』

「……ああ、通りであの山で遭遇したときに私たちは……はあ……なるほどな……」

落ち込んだような声を吐き出した彼女は、頬から手を離す。

『……これ以上は、まだ。……うん、まだ。僕の事情と僕自身の覚悟が決まっていないからすぐには言えないんだけど、でも。……これまででは、去年君たちに出会ったほんの少し前までは僕自身の性別に悩むことは無かったんだ。だからなかなか言い出せなくて……こんなに心配をさせて悪かった』

「ふむ……」

杖を数回地面を突いた彼は彼女へ向き直り、ひたいを抑えている彼女へと話しかける。

「……それで、ああなったわけか。合点が行った、なるほど、なるほど。……しかしお前、これは」

「ああ。……野放しにはできないね。私たちが知ってしまったから」

☆☆☆

「……だから」

魔法さんは様子見しているか何かで手を出してきていないけど、でも僕はこうして性別について話しただけでもういっぱい。いっぴい。

魔法さんがどうしておとなしいのか分からない以上、前の僕に関係することは時間を空けた方がよいはず。

すぐくがんばって言って良い部分だけ話し切って——顔を上げたらみんなが魔法さんにおかしくさせられちゃっていて、次会ったとき

ほどに膨らんだ「兵士」たちが動き出す。

「……………」

そして指令を受けたひとり……運良く見つけた、木造の建物に開いていたわずかなすき間から幼女と一筋の射線が通っているそのひとり……と定めていた照準を再度調整した。

——彼らにとって都合のいいことに、先ほどまでの切り裂く風は、ぴたりと止んでいた。

「ふう」

良かった。

思っていたよりも話せなかったけど思っていた以上に言えた気がする。

僕が男だって言うの、実は結構怖かったから……だってお隣さんのあれがトラウマなんだ。

そのせいか今日何度目かに静かになった室内。

またテレビの音だけが響く空間になっている。

まあすつごくデリケートって言えばデリケートな話だったし……反応に困っているんだろう。

でも本当、あれだけ悩んでいたっていうのにいざ吐き出しちゃえば、とつてもすつきりするものなんだね……ずっと気になっていた歯と歯の間に挟まっていたなにかを取り出せたときみたいな、そんな感じ。

僕が大人でニートで穀潰しでダメダメでなんか魔法っぽいのに付きまとわれてる……とかまでは言えなかったけど、まあ最初としては充分なはず。

うん、がんばった。

けどやっぱり魔法さんの気配は感じない。

みんなを観察しているけど、びつくりしているようではあるけどみんなの目は普通で、どろんってしていない。

みんなにもまた、魔法さんは降りかかっている様子。

……この前みたいになんか微妙にかかったら解けるのかな、魔法さん。

ほら、この前はねこみみ病の話でなにも聞こえなくなっって、今回は何か変な感覚あったし。

「……えっと、ひびきやひびき」

「うん」

ゆりかの発音って微妙に変。

変って言うか「響」って言うとき結構な割合で……こう、何か変な聞こえ方になるんだ。

ぱつつんをわざとらしくふあさつと……あ、これけっこう動揺してるときゆりかのクセだっけ……した彼女が声をかけてくる。

「まだみんな……こう、すどんってきてないみたいだから。だからなんとなくわかった私が先に、代わりに聞くけどさ。それって最近……いや、けっこう前からマンガとかではもうとつくにおなじみになって、少し前からはニュースとかでも聞くようになってきたアレのことかいな？ えつと、性……漢字ばかりでわすれちゃった……なんちやらつてやつ」

「うん、そうなんだ。性同一性障害というもの……に近いもの。

僕の場合はもう少し特殊だけど……まあ、その理解で問題ないと思う。なにしろ女の体の中に男の心、精神が入っているんだからな。それもつい最近までは本当に男として生活してきたくらいには完璧な、ね」

「……ほーん？」

いまいちピンときていない様子。

「……君になら分かるだろう例えだけ……そうだな」

念のために魔法さんのことも考えて「例え」って強調して。

「……ある朝目が覚めたら男から女になっていて、その状態がもう戻らなくなった……みたいな感じかな。原因とかはともかくね。そういうマンガとかなら目にしたことがあるんじゃないか？ 本当は少し違うけれど、僕の印象としてはそんな感じなんだ」

魔法さんが怒らないようにちよつと違うアピールも欠かさない。

「あ、すっごくわかりやすい。私、最近そんなの読んだし」

「そうか、なら話は早い。……そう、あの、男から女になってしまった状態がまるで『固定』されてしまったように——けほっ」

肝心なところで咳き込んだ……恥ずかしいなあもう。

けどもなんだか違和感がある。

なんだろう。

……胸のあたり？

緊張して話していたし、つばとかが気管支の変なところに入ったかな？

「……みんな、ちょっとごめん。セキが……こほっ」

よくわからない感じに息苦しくなって、息を吸おうとすると余計になにかが欠けていくようで、それが咳をすることでは収まらなさそうな、そんな感覚がこみ上げて止まらない。

「……………」

——嫌な予感って言うのは大体当たるもの。

それがどんな突飛なものだってなんとなくで分かっちゃうんだ。それは母さんたちの知らせが来た瞬間の学校でもそうだった。

……よりにもよって今、か。

タイミング悪いなあ。

僕は少しでも「それ」を知るのを後回しにしようって、みんなに見えないように後ろを向いて、両手を口元にやる。

「——ひびきう？」

「響ちゃん？」

さあつと頭から血の気が引いていく感覚。

「ああ2人とも死んじゃったんだ」ってあの中学生のあの日に病院で知った感覚。

「……………つ、……………つ、……………」

返事をしようとしても「それ」があふれてくるからできない。

——そっか。

いざつてときに声を出せないってこともあるんだ。

じゃあやつぱり書き残しておくって大切なんだな。

そんなことをぼんやり考えながらほけほけほってしていたら、口元を押さえていた手のひらからなんだか生暖かいイヤな感覚がする。

「……………」

ちよつとだけちらつと見てみると、そこには——真っ赤に光ってべとつて生じていて生理的不快感を放つ液体。

血。

僕の口から、血。

血。

なんで？

「……響、さん？」

「あの、大丈夫？」

「……けほっ……うん、大丈夫。 ちよつと、ね」

さっきのもあるしこの前のもあるからどうしても心配されちゃう。心配させたくないのに。

どうにかして隠し通してここを離れられないかな。

こういうのって事故に遭った直後の人のだよね。

アドレナリンがどぼどぼ出て「平気平気！」って言っちゃうやつ。そんな、使わないと思っていた知識が頭の中をぐるぐる回っている。

なんで血つぽいものが出たのかはわからないけど、ひよつとしたら鼻血かもしれないし。

ずいぶんと温度差があったし、鼻をかんだときにでも切れていたのかもしれないしな。

これは、手のひらからこぼさないようにしておけばいいだろう。

あとでさりげなくティッシュに吸わせてトイレにでも行くついでに洗っておけばいいんだし。

口からは漏れてはいないはず……だから大丈夫。

拭ってみても……うん、汚れていない。

ならそのことよりも、まずはみんなを安心させないと。

そうして隠蔽しようとしつつも「そんな場合じゃない」っていう無意識の警告が大きくなってくる。

「とにかく、大丈夫——」

「大丈夫大丈夫！」って明るく言おうとしてみんなを見上げてみると

——なんだかみんなの目つきがおかしい。

みんな……なんでそんなに僕のこと食い入るように見てるの？

なんでりさとかがりは口に両手当ててるの？

なんでさよは真っ青になってるの？

なんでゆりかは真顔になってるの？

そう思ったとたん抑えきれない勢いで口から漏れてくる生臭くって熱くってどろっとした液体。

「ごぼっ」

それは止めようもなくって、すぐに口からごぼっと出て来はじめて、それに合わせるかのように胸のまん中あたりにもじくじくじんじんとして、焼けるような感覚が昇ってくる。

そして……ああこれが吐くっていうものなんだ、それもお酒とか食中毒とかで吐くんじゃなくって吐血っていう、まるで本物の病人が……ひどい病気を患っている人がしてしまうっていう知識とか映像化でしか知らないような……ひどい、胸の、喉の奥から止まらない、あれ、なんだか世界が傾いて、あれ、って、なんだかつい最近にもこんなことがあったような、ああそうであればこの前の階段の、でも階段のは階段だったからだし、僕の不注意で起きたことだから、今のこれとは、あれ。

そうして僕は倒れたらしい。

人って意外と冷静だし周囲とか自分の状況とか分かってるんだね。

何だか不思議。

あ、けど。

「ひびき!?!」

「嫌っ、響ちゃん!?!」

「え、ちよ、響さん」

「……………」

みんなの声が、さっきまで見たいに上からじゃなくって後ろから聞こえる。

——せっかく嘘をいつこ告白できたって言うのに、また心配させちゃうな。

「ひびきっ、ひびきっ!」

「ど、どうしよ……どうしよお」

咳き込むこと数回、でろでろーって血を吐いちやうこと数回。

ひととおり吐いてちよつとすつきりしたからか分かった。

僕は吐きながら……血を吐きながら前のめりに倒れたんだ。

どおりで打ち付けたらしい鼻が痛いわけだ。

口からの吐血ついでに鼻血も出てそう……どうでも良いレベルの惨事だけでも。

あ、おでことあごも痛い。

下が畳なのに……畳つて意外と硬いんだね。

なんて、こんなことを考える余裕だけはある。

そう言えばこの前の、階段のときもそうだったっけ。

やけに思考がはつきりして速くなるんだ。

体には力が入らない。

倒れて顔からごつつんするくらいだ、受け身も取れないほどに脱力しているんだろう。

なんでだろう？

あと息がとても苦しい。

……胸の奥から止まらないような、とめどない感じのげろげろのせいで……あ、また。

「……げぽっ」

びしゃと派手な音を立てながら、さらなる血が僕の口から吐き出されてしまう。

ああどうしよう……畳が台なしじゃないか。

あとで巫女りんと家族の人になんて謝って……張り替えとかのお金も必要だろうし……。

畳つて1枚いくらなんだろうなあ。

そもそも畳つて1枚つて数えるんだっけ？

それにしても鼻が痛い。

なんでこういうときって本体よりも大したことない場所がはつきり痛むんだろうね。

後ろからみんなの声が降ってくるっていう奇妙な感覚もまた気になる。

不思議。

「……………ねえ。響？ ……ねえ。 ……ね、どうしよみんな、どうしたら」

またテレビの音。

遠くでお賽銭とちやりんちやりん。

じゃらじゃら。

僕が咳き込んで吐く音。

またテレビの音、また――。

「――救急車を呼んでください！」

「え……」

「……りささん！ 119番！ スマホではなく電話の方がボタンを押すだけなので確実です！」

「あ……さよ、さん」

「初めに救急と伝えて、今見た状態と響さん――『彼』が重い持病持ちだということと、こちらの住所を話してください！ ……119！ 急いで！」

「っ!? う、うんっ」

「担当医か親御さんに直接の方が望ましいので、私も響さんのスマホで連絡を取ります！」

「わかったわ！ 待ってて、今すぐに……」

☆☆☆

雲間から月明かりが差し込んでいる。

風も収まり、薄くて柔らかい光だけが降り注いでいるその高台でせり出した広場。

そこには初老とは思えない気迫をみなぎらせる彼女が居り、その前には完全に武装をし、あるいはスーツや白衣などに着替えを済ませた兵士たちが20ほど残っていた。

そこに残っていたのは、まさにこれから銀髪の彼／彼女ところへ出向くための支度を調えた者たち。

「さて、諸君」

彼女が、大きくはないのによく響く声で言う。

「行くうか。 いや……『いざ行かん同志諸君』……などと懐かしい言

い回しも偶にはいいかね？ 奴らの特徴ある言い回しだがこういうときには士気というものも上がるだろう。……ああ、ここにいるほとんども、もうそれも知識としてしか知らないか……まあ、感傷はどうでもいい」

すでに広場の手前には数台の車が待機しており、ドアもみな開けられていて彼女たちが乗り込むのを待っているだけ。

「この度、また1人……■■■■が確実なものとなった。よってこれから我々は」

『……良いのか？』

ザツと彼女の耳に入ってくる声。

『まだ■■からの連絡は来ていないが』

「なに、構うものか。なにせ」

カツンカツンとハイヒールを地面に交互に乗せ始めると手下の彼らも一斉に彼女のあとに続いていく。

「無い……とは思うが、なにせ人が多い。万が一にでもコレが公になつてしまつたら——我々も奴らも、それはもう」

顔をしかめつつ、頬の痣を撫でながら。

「——大層困ったことになるだろう？ 『ねこみみ病なんぞ』とは比較にならぬほどに、な？」

42話 予定されていた／いなかった、予定（不）調
和 1／6

僕は動けない。

だけどみんなの声は聞こえる。

だけれども体の自由が利かない。

不思議。

「早くご両親に連絡しなきゃ！」

「ごめんなさい、まずは響さんの指を綺麗にしないと指紋が拾えなくて……何回も間違えるとロック、掛かってしまいますから……」

体はそうなのに頭はこれ以上ないくらいに冴えていて……呼吸がきちんとできている。

どうして？

さつきまで苦しくて血を吐いていたのに？

分からない。

何もかも分からない。

でも、みんなが叫ぶように僕を助けようって大変なことになっていくのと。

「……げぽっ」

「……大丈夫です、落ち着いてください、響さん」

ときどき息が苦しくない程度に血を吐いているっていうのがこれ以上ないくらいにはつきりと理解できているくらい。

親指と人差し指が冷たくて気持ちいい感覚で拭われて、今度はそれをスマホの画面に合わせられる感覚。

そうしてくれているだろう……さよの、動揺で冷たくなっていて震えている指先もちゃんとわかっている。

でもなんで僕はこうして血なんか吐いているんだろう。

今までどこも悪くもなかったし、そういう兆候だってなかったのにな。

それに魔法さんがらみでも、こんなこと起きるはずがない。

魔法さんだったら僕をこうして傷つけるはずが……いや。

元からこの体が悪かったっていう可能性もなくはない……のかな。それを防ぐための魔法さんでハサミで冬眠だったり？

そういう前提に立って考えてみるとなんだか全部説明できちゃいそうな気が。

よく分からないけども今のこれは初めて経験するもの。

多分魔法さんの仕業。

魔法さん以外の可能性の方が危ないんだし、とりあえずそう思いたいだけ。

でも今回ちりちりとかもしていないし魔法さんの気配も感じない。

今回は何が原因、トリガーになってこうなったのがこれっぽっちも分からない。

僕が男だつて言ったから？

それならねこみみ病のときにも口にしたし、そのときにはマンガとかだつていう言い訳もしなかったけどこんな風にはならなかったんだし、やっぱり違う。

けど何度も、セキをするたびに僕の口から出てくる熱い血のせいであちこちが真っ赤で、体もなんだかぬめぬめしている。

生暖かい感じ。

やっぱりいくら力を入れようとしても動けない。

喉から口にかけてをどうにかするだけで、もういっぱいはいっぱい。

……体が動かなくなるっていうのも想定、しておかなきゃだったんだな。

冬眠とか僕が固まったりするので知っていたはずなのに。

「っ………また指紋が読み取れなくて………」

「……響ちちゃんは話せる状態ではないし、ロックも使えなくなるわ。

落ちついて綺麗にしましょう。十分に水気も吸い取つて、落ちついて。指紋はそれから。さよちゃんも救急車呼んでくれてい

るのだし、どちらにしてもきつと間に合うわ。だから………ね？」

「……………っ、はい」

「げぽっ」

どうにか息を整えているのにそれでもこうしてときどき横隔膜が……セキとかしゃっくりとかみたいに勝手に動いて、そしてまた口の中がどろっとして。

……あ、誰かがタオルを当ててくれた。

口の周りの気持ち悪さがちよつと減つてうれしい。

ついでのべ口を押し当ててちよつとだけでも口の中から血を出しておく。

けど、吐くつて気持ち悪いものなんだな。

なにしろ僕はこれまで本当に健康な体で、お酒だつて失敗したことなかつたせいでこういう経験なかつたから。

……！

ふとももとかおまたあたりが生ぬるいつて感じてもしやつて慌て……目で見たり手で触つたりなんてできないからあくまでも感覚で知るしかないんだけど、胸は元よりおなかとかおへその下とかまでぬるっとしてる。

下半身が濡れているのはどうやら血の様子。

別のものを漏らしたんじゃないやなくてよかった。

……いやいやそれだけの血が出てるつていうのは体にとっては相当まずいことになってはいるはずで、いくら魔法さんで死ねないだろうつていうのがわかつてはいるんだけど、でも良くはないはずで。

でも体が動かないからか普段以上に意識だけがまともなもんだから、みんなの前で漏らしちゃった疑惑に必死になっちゃったんだ。

ほら、倒れた人とかが漏らしていると危険だつて知ってるし。

「……ひびき……やだよ死んじや」

僕の顔の上からゆりかの声。

そっか、口の周りを拭ってくれていた……タオルで血を吸い取つてから冷たくて気持ちいいのもういちど拭いてくれて、最後に乾いてふわふわしたので拭いてくれていたのは君だったんだ。

ありがとう。

でもそれすら言えなくてごめんね。

「やだ、響……なんで、こんなはずじゃ、響。だつて、そんな予定は

なかったのに……ひつく、……私が、私が……早く、帰らせっ、なかったから……ぐすっ」

死んだりなんかしないから大丈夫って言いたいのにな。

でもそうだよね、誰だっけって血だらけで血を吐き続けているのを見たら死んじやうんじやないかって心配になるよね。

本当は病気なんかなんにもなくて、さらに魔法さんとかいうありがた迷惑な何かにまわりつかれているだなんて言っていないし言っても信じられないもんね。

ちよつと顔を見ようって思っただけで目を思いつ切り開けようとしてちよつとだけ開く。

……でもまぶしいだけで焦点が合わないみたい。

あれ、僕、もしかして本当にやばい？

やばめ？

おだぶつ？

幼女の体で？

やっぱりこの体、今の僕、実はなにかすごい病気持ちだったりしていた？

つまりみんなに言っていた病弱ってのは嘘じゃなくって？

「ゆりかちゃん！」

「……ひつく、かがりい」

「使えそうなタオルとか洗面器とかいただいてきたから代わるわ！

私は気道を確保して喉が詰まらないように……血が気管に入りにくいようにするから体を支えてあげて。 ゆっくり、ゆっくりとよ？

横を向いた姿勢にしてあげて！」

「……ひつく」

「……ゆりかちゃん！ このあいだ保健の授業で応急処置、したでしよう？」

「……ぐす……無理だよお」

「……ゆりかちゃんはこっちに来て。 ほら、私の腕の下におんなじように差し込んで。 ……そう、それでいいの、もう片手もお願ひ。

私は体の方もするから」

「……うん……」

体がぐにぐにと動かされて、明け方に目が覚めたときによくなくて
いるような体勢にさせられている。

あ、ちよつと息が楽になった気がする。

回復体位とか言うやつだっけ？

あれって本当に効果あるんだね。

「……だめだったわー！」

ふすまの音とともにりさの声が飛び込んでくる。

何とか見ようとしてしてみるけどやっぱり目は見えていない。

なんていうかぼんやりしている。

まるでメガネをつけないでいるときみたいに。

ああそういえば今の僕になつてからはご無沙汰していたけど、目が
見えない、じゃなくて近眼ってこういう感じだったっけ。

今じゃ起きてすぐにメガネをするとかいう習慣がなくなって久し
いんだっけ。

そういえばメガネ、どこにやつちやつたんだっけ。

ヒゲ剃りと同じくらい触ってなかったから忘れちゃったな。

「っ！……響さん、ひどい血……」

「それで何がダメだったの？ りさちゃん」

「あ、うん！ なんてかはわからないけど、でも今うちの電話、使えな
いみたい！」

「……そんなあ、ぐす」

「私のスマホでも電波、圏外になつてるのよ！ 電波塔がこの近くに
あるから切れたことなんてなかったのに！ ……さよさんはどう？

響さんのスマホ！」

「はい、ようやく指紋が通つて……」

電波。

僕のスマホ。

……もしかしてこれって、僕がここに来る前に頼んでいたあの人た
ちの……。

「……………あつ、通じました！ ……もしもし、響………さんのご家族の

方でしようか！ 私、そのつ、響さんの、友人、で……はい、響さん、さつき吐血、いえ、そのまま受け身を取らずに倒れまして。なんとか反応はしているようなので、かろうじて意識はあるみたい、なんですけれど、でも、その血の量が……」

作ったばかりの「家族」っていう連絡先。

もしものことを考えて開いておいた画面。

先に救急じゃなくてこっちに繋げてもらえたみたいで良かった。

「……わかりました、このままでもいいんですね。 ……はい、すぐに用意します。 はい、では」

「さよちゃん！ 響ちゃんのご家族と連絡取れたのね？ あ、響ちゃんので電波が通じるなら救急車とかも呼ばなくちゃ」

「……要らないそうです」

「え？ でも、こんな」

「……ご家族と病院の方……響さんがこうして外出しているときは、いつもすぐ駆け付けられる状態で待っているんだそうです。 だから準備はできている……って」

「……え。 てことは響さんの病気ってやっぱりそんなに悪いものなのよ、ね」

「それは後で……今、神社前の駐車場から車を回してもらって、こちらに直接乗り付けてもらっています」

「……この玄関先、わかるって？」

「はい、ナビですぐに出たそうです」

「そう、ならよかったわ」

「っ！ お医者さんが来るの？ わかった、すぐに響を運ばなきゃ」

「ゆりかさんだめです！」

「……えっ」

「その吐血量だと、肺などの内臓からの出血の可能性が高い……んです……その体勢にしたのは呼吸を安定させて窒息しないためなので仕方がないんですけど、それ以上動かさないで。 最初に頭も打ちましたし」

「……ごめん、わかった……」

「あ……いえ、ごめんなさい」

「いいのよふたりとも、みんな、怖くって仕方がないのだから」

「そ……それに、ほら！ もうすぐ来るんでしょ響さんの親御さん！
なら、あとちよつとだから！」

体が下から抱きかかえられそうになる感覚と戻される感覚。

体の上でされている、みんなの会話。

……ずっと寝た姿勢になっているからか、ちよつと眠気。

でも眠るわけにはいかない。

そうじゃないと、次に起きたら何ヶ月後になるかもしれないんだから。

「あと必要なものとか、することある？ さよさん」

「……玄関からここまでの道も歩きやすいように。大人2人が広がって、響さんを……ストレッチャーなどで運んでも障害にならないように、片づけてきてもらえますか」

「いいわ、みんなは忙しそうだし、ちよつと寄せればいいから私ひとりで大丈夫。今やってくる！」

「……お願いします」

42話 予定されていた／いなかった、予定（不）調
和 2／6

「響さん……家族の人がついて来ていたのね」

「そうね。 響ちゃんって1度決めたら譲らなそうなもの」

「……くすつ、そうかも」

「ね？ ……ほら、持ち上げるわよ」

片づけついでに僕の「家族」を呼びに行くと言ってぱたぱたと飛び出して行ったらしいりさと、彼女を追いかけて行ったらしいかがりが話す声や、入り口のふすまをがたがたと外す音が聞こえる。

そしてゆりかは……僕の頭を撫でながらぐすぐすつて泣きじやくつていて。

さよは……静かにしているけど、スマホの中……あんまり見ないでほしいなあ。

まあ、そんなことする子じゃないか。

それよりも、さつきまでよりはだいぶ収まって来はしたもののあいかわらずに咳き込んで止められない血が目の前のたらいかなにかにびしゃつと流れる音と鉄臭いにおい。

げほげほつてひととおり吐き終わったら、さつきまでと同じようにゆりかがそつと僕の口を拭う。

そのの繰り返しがどのくらい続いているんだろう。

時間感覚がまったくわからない。

だけどきつとそんなには経っていないはず。

「……あ。 そうだ……ね、響のスマホ、電波繋がってたでしょ？ 救急車は呼ばなくていいの？」

待ってゆりか、それは必要ないんだ。

「こうなるかもしれないからどうにかならないか」ってお願いしたあの人たちが来るんだ。

だからその必要は。

「……悩むところですけど……ご家族がまもなくいらつしやつて、医

師の方も……恐らくは看護の方も、一緒です。幸いにも今は年が明けたばかりで、通行量もそれほどではありません。今いらつしやっている車でも、問題ない……かもしれない。いずれにしても、すぐですから。……響さんの病気を詳しく知っていて……あと、事情のあるというご家族にお任せするのが、いちばんかと。救急を呼ぶとすれば、ご家族や医師の方に任せましょう。……なぜかはわかりませんが、響さんのスマホなら電波が入るみたいですから」

「……うん、わかった」

「そうね、響ちゃんがあれだけ言いたがらなかったんだもの。まずはお家の方よね」

「かがりさん……廊下の方は」

「あとはりさちちゃん1人で大丈夫そうなの」

よかった。

ふたりのおかげでゆりかがしぶしぶって感じで諦めてくれた様子で。

だけど……やっぱりどうしても意思が伝えられない。

話そうとしても息がつかえそうになって血が出てきそうになって、少しずつ息を落ち着けていくのが精いっぱいだ。

「……だいじよぶ、響？　ねえ、死なないで、響。……私が。私が、あんなこと……あんなこと、言ったばかりに……」

話そうとして息苦しくなってそれをむりやりに整えようとしてひゅーひゅーって感じの呼吸になったのが、すぐそばにいたゆりかにはわかってしまったらしい。

「ゆりかちゃんのせいではないわ。ただ……響ちゃんの体が、響ちゃんが思っていたより……まだ、だったのよ」

「そう、です……お医者様やご家族の方から許可、出ていたんです。

……本当に、タイミングとしか……」

じりじりって、とつても古い感じのチャイムが鳴る。

……ああ、入り口はたしかに古……古風な造りだったしなあ。

その音とともになかをどさつと落とす音、そして廊下の木をきしませながら走って行く音。

「……来たようですね、響さんのお迎え。よかった……。で
はかがりさん」

「ええ、ゆりかちゃんに支えてもらっていたあいだに響ちゃんの荷物
……コートと羽織り物だけだけど、まとめてあるわ。……あ、スマ
ホもポケットに入れておいてあげた方がいいわね。渡し忘れたら、
あとで響ちゃんが困るものね。響ちゃんから大丈夫だったって
う連絡、すぐに聞けなくなってしまうから」

「あとで……そう、ですね。明日にでも、きつと」

「ひびきい……」

さよがそう言い終わるくらいから玄関の方が騒がしくなってきた。
今までのように子供たちが立っていたものは違う、大人の足音つ
ていうものが寝かされている僕の耳にはよく入ってくる。

荒っぽいって感じじゃないけど単純に体重とかがちがうって感じ
で、なんとなく。

「……こつち、こつちです！ 響さんのところ！」

「急にこんな大勢で押しかけて驚かせてしまい。おまけにうちの子
が迷惑をかけてしまつて。……本当に、済まないね」

「いえっ、そんなことありません！」

だんだんと聞こえてきたりさと——あの人の声。

「むしろ、勝手に響さんを……こんな夜遅くまで連れ出した私たちが」
「それはあの子が望んだことだから君たちの責任ではないよ。それ
を言うのなら、ひとりで外に出る……まあこうして近くで待っていた
わけだが……その許可を出した私たち『家族』にあるんだ」

「でもっ、連絡が遅れて……なんだか電話が急に使えなくなつて」

「そういうのは後にしようか。今は先に……皆の心配の方が先決
だ」

イントネーションが微妙にずれていたりする、なんだか昔のドラマ
みたいな話し方をする声。

「連絡をしてくれて助かったんだ。『響』と私たちは君たちのおかげ
ですぐに病院へ行けるんだよ。遅くなんてない、非常に感謝してい
る」

「……ありがとうございます」

「——失礼。『うちの子』が……つと」

……つい最近に聞いた、電話越しだったら外国の人だとはとても思えない話し方……でもやっぱりちよつと堅苦しい言い回しが多い、あの人が目の前に来た……らしい。

だってぼんやりとしか見えないし、なによりも首を動かすのも難しくって足元しか見えていないから。

そのシルエツトもりさのと被っているし。

真つ赤な、元までの……ドレスみたいなスカートが。

「……これはまた、かなりのものだねえ。 久々、と言ったところか。

……すぐに取りかかれ」

「はっ」

ぶわつと入ってくる……あのときも少し感じたけど、外国の人がつけているあんまり嗅いだことのない香水の匂いが和室になだれ込んでくる。

「くれぐれもお嬢さんたちを怯えさせないように、ゆつくりと。しかし確実に頼む」

「心得ております……それではみなさん、失礼します」

その人が僕をのぞき込んでから立ち上がったと思ったら、周りに男の人たちが集まってくる気配。

「口元とお体、失礼します、『響様』」

「廊下で載せるまで血が滴らないように、このタオルを下にして……」

「お嬢さん、ここからは私たちが代わります。 ……はい、ありがとうございます

ございます。 安全のために、少し離れていただいてもよろしいでしょうか?」

「あ……はい。 あの、響は」

今までの、ゆりかの……僕と大差ない体格の体に支えられていた感覚から、がっしりとしたおとなの男の人の筋肉の感触に変わって。

「私たちは慣れておりますのでどうかご心配なさらずに。 ……聞こえていらつしやいますか? 申し訳ありませんが髪の方はまた後ほどに整えますので、今はこのままにいたします——『お嬢様』」

そうしてもぞもぞと僕の……たぶん下が真っ赤になっているだろう血をこれ以上床に垂らしたりしてりさの家の人に迷惑をかけないようにって、拭っていく感じにしている。

「準備はいいだろうか」

「問題ないはずです。……担架は4人の方がよさそうだな」

「お前たち……あ、いや、先生方。可能な限り揺らすな。あ、いや、揺らさないで気をつけて……くださいな」

「はっ……いえ、わかりました」

体が下からタオルでくるまれてふわっと浮かぶ感覚とともに、またしても聞き慣れた声が出た気がする。

けど動かされたとたんに乗り物酔いみたいな感じのイヤな感覚がこみ上げてきて、耳を澄ませる余裕も考える余裕もない。

ただただ我慢しながら耐えるしかないだけ。

「……あの、あの！ 響は。……響、すぐに。大丈夫ですよ！
すぐに、よくなりますよね、響の……お母さん？」

「……お母さん、か。少しばかりの事情もあり、私は実の母親でも……なによりもそういう年でもないのだがね。どちらかというと祖母くらいだろうか」

「え？ ……え、えっと、ごめんなさい」

「いや、構わない。それで、心配は要らないよ……こんなことになっているから説得力はないかもしれないが、本当に大丈夫だ」

「……本当ですか？」

「ああ。こういうのは今まで数え切れないくらいに見てきたし経験してきたからね。ここしばらくは落ちついてたのだがね。

……そして、響と仲良くしてくれるなら……これからも友人をしてくれるのなら、もしかすると何度も見るかもしれない。それが嫌なら」

「嫌じゃないです！」

「……ありがとう」

ふわふわして気持ち悪かったのが、平たいところ……担架とかストレッチャーとか言う感じのだろうか、それに載せられてすっかりした

枕に首と頭を支えてもらってふわふわしなくなってからか、一気に楽になった。

……それになんだか急に吐き気が治まってきた気もする。

「ふう……」

……咳も血も吐くのが収まったみたい？

よく分からないけどもほっとする。

まだ体は動かないけども。

「私たちこそ、連絡が遅くなって」

「いや、だから気にすることはないんだ。事情から詳しく言えない以上、人に説明するときはいつもこうなるのが心苦しい限りだが。

とにかくこんな有様だが命に関わることはない。処置が終われば、

すぐにでも会えるようになるはずだ」

「ほんとですかっ」

「ああ……すぐにな」

「よかったわね、ゆりかちゃん」

「うん……ぐす」

「ほっ……良かったです……」

「……ま、外出できるくらいだしね。びっくりはしたけど、親御さん

……ごめんなさい、ご家族の方がそう言っているんだから、ひと安心よね」

僕の呼吸が落ち着いたからか、こうして医者……の人たちなんだよね……が来たからか、なんか微妙に演技が下手で僕のおばあちゃんつてことにしちやつてる「あの人」が目の前にいるからか、ようやくに落ち着き始めたみんなの声。

一方の僕は落ちないようにするためかぐるぐる巻きにされていく。

……息ができるってこんなに楽なんだ。

そんなことを酸欠っぽい頭の中でぼんやり考えながら。

42話 予定されていた／いなかった、予定（不）調
和 3／6

「応急処置及び準備……終わりました」

「ご苦労……さまです。すぐに車に乗せてくれ」

「はっ」

「……響様、今から動きます。少々の揺れはご辛抱を」

「玄関が出る際には細心の注意を払……ってくださいね」

「もちろんです」

僕の胸に聴診器を当てたり脈を測るみたいなことしたりいろいろされてしばし、僕は運ばれるらしい。

……でもどうしよ、なんか元気になつてきちやっただけだ。

元気って言つても「死にそうかも」から「死ななそうかも」ってレベルだけでも。

ちよつと頭を動かして「あの人」がみんなと話しているのを……焦点を合わせて見てもぜんぜん平気なくらいにはなつてるらしい。

「……………」

「響様……少々待ちますか？」

「……………」

「承知致しました」

なんとなくて、さつきから僕の体を調べていたお医者さんの中で一番偉そうな人にじーつと視線を送ってみたらなんか通じたらしい。

まあ体は固定されているから頭を少し向けるくらいだけでも。

大きく動いたとたんにまたげぼつてなつちやうかもしれないし、迂闊なこととはできないな。

「（こちらでよろしいでしょうか）」

「……………」

まだ話せないから「ありがと」って念を送っておく。

届くかは知らない。

「さて、響の友人たち。こんな騒ぎを起こしてしまい、また、心配を

かけてしまつて済まなかつたね」

「い、いえ、当然のことをしたままで」

「そしてすぐに連絡を『彼』の携帯から取つてくれて本当に助かつた。けれど——」

話が尻すぼみになり、さつきまでいた部屋を見回しているらしいあの人の。

あ——……いろいろと大変なことになっているだろうなあ……だつてこうして全身が血にまみれるくらいなんだから、僕がいたところとか介抱してくれたみんなの服とかも真つ赤なんだろう。

畳は張り替へつてやつだろうし、こたつは……上に乗つてる布団を替えるだけで済むならいいけど、なよりの問題はみんなの服。

巫女ペアはともかくかがりたちは振り袖つていうやつだからなあ。いつたいたのくらいになるのか見当がつかない。

ああ言うのつて何十万とかするんじゃないか？

あ、でもレンタルなら……レンタルでもダメにしたら弁償か。

……魔法さんのことが分かつてすぐに銀行行つてみてお金が使えらつて分かつて良かった。

金額が金額だし、早く返さないとみんな困つちゃうだろうし。

「……あ——……部屋も酷いが」

惨状を改めて見ただらうあの人が、ため息とともに。

「そんなにすばらしい一張羅が。大変に申し訳ない」

「いえつ、急病ですから」

「そ、そーですよ、響のためですもん！」

「あ、うちのことならいいです。畳なんてどうせ余ってますし、毛布とかも洗濯機である程度落ちるでしょうし」

「……あの、この服、巫女の服は……」

「バイトの人に支給するものだし、たかが知れているわよ。普通の服程度だし袴は真つ赤だから上だけで済むかもね」

「気遣いは有り難いことだが、こういうものはきちんとしなければな。

……おい」

「は、ハハハ」

「とりあえずは……そうだな。 3、いや、4だ」
「はっ」

「あの人」、でかいおばさんまたはおばあさんにずーっと付き添っていた、さらに年配な人がごそと取り出したのは、紙袋に入った四角い4つの何か。

……え？

いや、ないよね？

いやいや、日常でそんなものがすぐに出てくるなんてあり得ないでしょ？

「これで足りると良いが」

めこつと、鈍い音が畳を凹ませる。

巫女りんは渡されたらしいその紙袋の中身とあの人顔……あ、ちゃんとお化粧して隠している……を交互に見て、僕とおんなじ結論に至ったらしい。

さつきまでの影響で顔が真っ赤になる巫女りん。

「えっ……あ、あの、これって……え？」

「りさりんなにそれなにそれ……え、金？ 延べ棒？ ほえー」

「あ、あのっ、こんなもの！」

「私には相場がわからないのだがね、タタミやキモノといったものは高価なものなのだろう」

「い、いえ……あ、2人の着物はそうかもですけど、でも！」

「それと迷惑をかけた分だ。 みなで分けてもらいたい。 なにせ血だからな、しかも吸い込んでいるとあって完全に戻すのは難しいだろう」

「え、えと」

みんなより頭2つ分くらい背の高いその人は、ポケットからあのとさきのように紙を取り出してあのとさきのように鉛筆でさらさらとなにかを書く。

たぶんあの、ちょっと読みづらい数字だけを。

「これでも足りなければ、ここへ連絡してくれ。 いくらでも払うからね。 『うちの子』のせいだから」

「でも！　こんなの、いえ……こんな大金……お金なんですよねこれ、受け取れませんっ！」

「しかしキモノは」

「これはレンタルですし、そこまでのグレードのものではありません。

ね、ゆりかちゃん？」

「う、うん……」

「家だって古い家ですからこうやって畳とか襖がダメになることくらいよくあります！　だから」

「……それならば部屋については同等のものに買換える分。　そちらのキモノについては君たちが困らない形で弁償もして、それでも余ったら返してもらえば良いよ」

「でも！」

「頼むからそれくらいはさせてくれないか？　……あの子のことをよく知っている君たちなら分かるだろう、これだけの事態を起こしておいてとりあえずでの金すら払わないとしたら、そもそもあの子自身が気に病んでしまう。　何、使い切らない分は後で返してくれたら良いんだ」

あ、今僕のことダシにした？

いや、僕が助けてもらってるんだけども。

「……たしかに響ちゃんなら……」

「そうです……ね……」

「失礼しました、紙幣の方間に合いました」

「む、そうか。　それなら換金する手間が無い分こちらの方が扱いやすいだろう」

めこつと置かれていた紙袋と交換するように……多分札束が入っている袋。

「今後を願ってくれるなら、うの子が気兼ねなく君たちに会えるようにと想ってくれるのなら。　ぜひ、後顧の憂いがないように……だったかな、遠慮せずにそれを使ってほしい」

「……分かりました。　それではこのお金、私たちがお預かりします。

……早く響さんの治療を……」

あ、口に何か被せられてる……いつの間に。

しゅーしゅー言ってるし、酸素マスク的なやつ？

「響さんの容態が回復したら、連絡、待っていると伝えてもらえますか？」

「承知した」

「また無理しそうなので病室でお見舞いしても平気なくらいになつてからで構いません。でも、お願いします」

「……1週間もあればかなり落ちつくとは思うがね。わかった、必ずあの子から直接連絡させよう。……それではこれで失礼させていただく。ああ、ご両親にも使いをやっている……失礼、連絡はしたよ。なにしろジンジャの仕事で忙しそうだったからね、あらましと心配は不要とだけお伝えしてある。……しまったな、金も直接彼らに渡すべきだった」

「……大丈夫です、ちゃんと渡しますから」

「そうか、悪いね」

「ではよろしいですか？」

「うん、連れて行ってくれ」

「では動かしませう、響様」

これもまたいつの間にか調べられていたいろいろが外されて服を整えられていて、ふわっと毛布を掛けられたかと思つたらすぐに玄関を出て、とたんにも外の寒さが伝わってくる。

すつごく寒い。

乾いてない血が余計に冷える。

「ああ、見送りはここまで結構だよ。後片付けや……今は忙しいだろうご家族への、今の事態の詳しいご説明。それに君たちの着替えもあるだろうに……私たちが直接にお手伝いできないのが悔やまれるが、これも事情というもので、どうか勘弁願いたい。……またこれも家の事情というやつで、車もちよつと特殊でね。できるならあまり近くで見てもらいたくないのだよ……なにもかも秘密にせねばならず重ね重ね申し訳ない」

「……いいえ、響ちゃんのことですから慣れていきます」

「そうか、悪いね」

「大丈夫……ですから。 ……響、ちゃんが、無事ならっ……」

「……かがり、さん」

「ねえ、ゆりかあ。 ……響さんが、響さんがあ。 あんなにたくさん
の……っ」

「大丈夫だよりさりん、きっと大丈夫なんだよ……」

「……では失礼するよ。 ……出発してくれ」

そこまで聞こえてはたりとドアが閉まって僕はみんなから隔離され、暖房が効いていて少し不思議な香りのする車の中に取り残された。

42話 予定されていた／いなかった、予定（不）調
和 4／6

リムジンって現実に存在したんだ……もちろんバスじゃない方の。細長い、真っ黒だったり真っ白だったりするあれのこと。

この年になって初めて実際に目にした。

というか今僕自身が乗ってるしな。

映画の中とかの架空の世界のものだと思っていただけで、こうして実際に乗っている以上には信じないわけにはいかない。

こんなに狭い道ばかりの国でよく乗るよね。

大通りじゃなきや曲がれなさそう。

高級感なんだろう、押し返してくる感じのクッション性のある革張りな車内から「世界は広いなあ」とか「お金つてあるところにはあるんだよね」って思う。

大人でも8人くらいは対面で座れそうな感じの広々とした後部座席のような空間。

しかも僕がさっきまで載せられていた脚つきの担架みたいなものがトランクに収まっているあたり、この車が……リムジンっていう存在がどれだけ長細いのがわかる。

その中に、運転手さんと助手席の人を除くと僕以外には1人だけ、夏のあの山で会ったときから変わらない姿のあの人しか乗っていないっていうのはなんだか贅沢な気がする。

まだまだぼーっとしていたけど少しずつ体の力が……あたたかさに戻って来て力が湧いてくるようになってきた。

背もたれとドアにもたれかる感じになっていた僕は、少しずつ体を起こしてみる。

……うん、もう自分で体を起こしても、なんともない。

気持ち悪くもなんとも。

不思議。

「……あの」

「……………うん？　もう大丈夫なのかな？　ずいぶんと早いようだが」

「はい。　まずはお礼をと……………助けていただきありがとうございます。ごさいます」

頭を下げた僕をしばらく見ていたら、その人がぽつりと言う。

「本当に……………本当に大丈夫なんだね？　無理をしているとか」

「？　いえ、別に……………ほら、こうして」

「……………そうか」

腕を適当にぷらぷらして見るけどあんまり見てくれない。

まあ心配するよね……………あれだけ血まみれになってたんだもん。

と言うか服が台無しって言う段階をはるかに過ぎている気がするし。

あ、こんな服で革張りの高級車に乗っちゃって良かったんだろうか。

そう思っただけでお尻の下を見たらタオルが何枚も重ねてあって、さらに言えばそれらに吸い込まれている血の量は、大したことないみたい。

「……………ほっ」

車の革の張り替えとか、どれだけお金かかるか分からないから安心した。

でも不思議なくらいに平気だ……………もうあのときみたいにええいたりこみ上げてくる感じっていうものがもうなくなっている。

こうなつたときみたいにいきなり治つたらいい……………ほんとなんだ。

「私たちはすべて分かっている。　無理はせずとも構わないよ」

すべて？

……………ああ、みんなに心配かけないようにつて言うやつか。

「改めてありがとうございます。　あなたたちのおかげで……………病院のこととか友人への説明とか、それも僕があんなことになって動けない状態で、あの子たちの心配をこれ以上させない形で僕を連れ出してくれて。　あの、話すことすらできない状態で困ることがなくて本当に

助かりました」

「けどここからどうやって帰ろう。」

「まあこの体だと大変だけど歩くしかないよなあ……タクシーとかは血まみれで乗れないし。」

「いや、コートを羽織って隠せばいけるか。」

「服はそこだよ」

「そんなことを思っていたら指を差され、見てみるとさっきまで枕にしていたのは今日着て来たコートやパーカーとかマフラーに靴……さらにはぱつと見ても僕のサイズに合っていそうなの……たぶん新品の服。」

「……え？」

「僕のサイズの服？」

「どうしてこんな用意してあるの？」

「いやまあ助かるけどさ。」

「こうなることがわかっていたかのように」用意が細かすぎる気がするけど……担架とかたくさんタオルとかを積んでいるあたり、家族の人とかに病気の人がいたりするのかもしれないし、なによりなんだかすごく手慣れている感じだったし……深くは聞かないでおこう、今日の僕は助けてもらった立場なんだし。」

「このくらいはなんともないさ。君がしてくれたことに比べたら、な」

「？……ああ、あのときの。いえ、ですから僕は本当に」

「彼女は、ばさつと脚を組み替えて腕を突き出し、僕が言おうとすることを遮ってくる。」

「君があのとときに気づかせてくれたおかげで、長年悩んでいたものが嘘のように解決したんだよ。なにしろ過剰なくらいの化粧をしたおかげで仲良くしたかった子供たちから怖がられるのが……見られただけで泣き出す子までいたのに今では懐いてくれてる。……いやまったたく、いい歳にもなってきたし化粧はいいかと止めていたのが……まあもともと好きでもなかったのだが……最低限にしていたのが何だったのかと言うほどだ」

それは良かったんだけど……顔のケガの跡くらいでそこまで言う？

大げさじゃない？

そうは思うけど、あのときのお礼でここまでしてもらってるんだから甘えておこうつと。

「今はここにいないが奴も……連れ合いの眼帯の爺、奴も同じように喜んでいた。まずは彼のぶんももういちど礼を言っておこう」

「いえ、僕も今日こうして助けていただきましたし」

頭を下げるしぐさをしそうだったから、あわてて遮っておく。

「ふむ。そういうことならこの話は仕舞いにしておこうか。……で、だ」

ふうつと息をついて煙草を取り出したけど僕を見てしまい直した彼女が訊ねてくる。

「その様子で判りはするが……どうかな、体は」

「あ、はい、まだ少しだるいですけど大丈夫です」

「それはよかった。私の見立てでも……詳しいことは後で話すとしても君の体はどこも傷ついたりはしていないようだ」

え？

「先ほど君を運んだ者の中に軽く全身をチエックしてきた医者があっただろう？ あれから聞いた限りでは直ちに問題のある損傷は見受けられないとのことだ」

「はあ」

あー、でも1回は病院で診てもらわないとかなあ……だってあれだけ血を吐いたんだし。

人間ドックとか、そろそろ受け始めようかなって思ってたしちょうど良いかも。

……あ、でも検査项目的に前の僕じゃなくて今の僕として受けた方が良いのかな。

「そして吐血は君自身のものではなく」

リムジンって映画とかでみる感じにテーブルあるんだね。

そう思っていた高そうなテーブルの上に手を突いてぐいつと身を

乗り出してくる。

「君自身は……あれだけの血を失っていたとしたらまず動けないはずだ。しかし家の者が問題ないと判断したし、実際にそうして顔色も戻っているしな。……推測するに、吐瀉物はただの反射で胃から出てきてしまっただけのもの。その嘔吐からまた『君自身のものではない吐血』につながっていた……のだと考えているのだが、どうかね？」

何言ってるんだろうこの人……あんな血、胃から出るわけないじゃん。

いや、胃潰瘍とかならなるのかな。

……ああ違う、この人は大事にしないようにしてくれてるんだ。

だって普通の人ならあのとときの僕を見たら救急車呼ぶし。

呼ばないでって言っても呼ぶに決まってるからやっぱ気を遣ってくれているんだろう。

普通の人ならそういうのはしないだろうけどこの人たちは外国人だ、内々に済ませたいっていうのを汲んでくれた違いない。

まあ元旦だし病院混んでるだろうし……どうせあの血も魔法さんがくしゃみしたとかさういうのだろうし、きつと大丈夫だろう。

念のためにもたまた具合悪くなったら今度こそ病院だけでも、僕には魔法さんっていう元凶が居るだろうって言う確信がある。

「ああそうだ、口の中も気持ちが悪いだろう。これを飲むといい。ちようどいい温度になっているはずだ」

「あ、どうも」

いつの間にかテーブルに置かれていたカップに手を伸ばす。

少し嗅いでから飲んでみたらなにかしらのハーブティー。

飲んだことはあるんだけど銘柄なんて覚えていない。

でも多分かぎりに連れられて行ったどこかで飲んだはず。

……みんな今ごろ片付けとか、りさりんのお家の人への説明とで大変だろうなあ。

だってあそこは血まみれだし……吐いたんだからきつと、さっきまで食べていたものが混じっているっていうひどい有様だろうし。

すつごい迷惑かけちゃったなあ……元気になったらお詫びに行かないきや。

こんなことになるって知ってたら行かなかったのにね。

……いや、話の流れで性別のことについては説明できたんだ。

たったのひとつだけけど、でも僕の嘘について魔法さんの介入なしに言えたっていうのは……いやいややっぱりかけた迷惑がすさまじいだけに……うーん。

「……んく……さっぱりしました」

「よかった。……しつこくて申し訳ないが改めてどうかね、体の方は」

「はい、どこも痛くはないですし気持ち悪くもなくて……さつきみたいになりそうな気配もありません」

「うむ、元に戻ったようだな。いくら体に影響がなかったとしても間違っただけで気管の方に流れていたりでもしたら今ごろはこうしてのんびりと話してなんかいられなかっただろうしな。分かかっていて君の回復を待っていたのもある——しかしこの前は驚いたよ。ずいぶんと時間が経ってしまったから私たちのことを忘れていたと思っていた君から、連絡が届いた先日にはね」

42話 予定されていた／いなかった、予定（不）調
和 5／6

「そのままだと気持ちも悪いだろうから、シャツとズボンだけでも替えたらいい。安心してくれ、この場には私しか居ない」

「あ、はい」

多分「服に染みこんだ血が天然のお高い革についたら弁償だからね？」って言ってる気がして素直に従ってもぞもぞと脱ぎ出す。

「……タオルで隠したほうがいいかい？」

「いえ、別にいいです」

そういえば今のご時世いろいろ大変だしね、こう言うの……特に外国の方ですごいらしいし、知り合いとは言っても会ったのは2回目だし。

そんな相手の幼女な見た目の僕が着替えるって言うから肉体的には同性のほのおばあさん……悪いからおばさんにしとこ……おばさんも予防線を張つたらしい。

まあ同性なわけだし相手はおばさんだしで特に意識することもないしで、さっさと血まみれの服を脱いで、まだ折り目がついている服を着て。

「ふう」

すっごくさっぱりした。

サイズはちよつと大きいけど、でもさっきまでみたいに張り付いてきたりしないし、なによりもちよつと漂っていたイヤな感じの臭いがだいぶ薄れたからすっごく快適。

濡れたあとのなんとも言えない感覚と、なによりも普段から肉々しくて憎々しいお肉とか苦手な僕にとつてはあの生臭さがちよつとつらくなっていたから、本当にありがたいこと。

「……本当に平気なんだね」

「はい、まあ」

ぱんつまで真っ赤になっていたのを見られたけどしょうがない。

しいて言えば夜で人通りはないとは言っても外で1回全部脱ぐ方にどきどきしたくらいだ。

帰ったらすぐにお風呂入る。

……しっかし血まみれになってぎすぎすしてべとべとしてるこの髪の毛、ほんとうどうしたらいいんだろ……お風呂につけていたらふやけて流れるかな？

いやでもお湯が真っ赤になったりするんじゃないかな。

血のお風呂。

まあ今日はしょうがない。

「ところで着ていた服はどうするかね？　よろしければこちらで処分するが」

「はい、特に思い入れもない普通の服……あ、いえ、やっぱり持ち帰ります」

「そうかね」

どうせもうすぐで家まで送ってもらうんだし、そこまで迷惑かけられないし。

「先ほどと比べると幾分楽になった様子だし……話を戻してもいいかい？」

「？　はい」

えっと、何の話だっけ……ああ、この人に連絡を取ったときのことだっけ。

「私たちは、てつきりだな。……もうずいぶんと連絡をもらえなかったものだからすっかり忘れられてしまつて残念だと話し合っていたのだよ。なにしろ念願の子供たちとの戯れが可能になったのだからな、それはもう嬉しくてね。だからこそ君に対する恩義を強く感じていた」

「そうですか」

普段はちよつと怖い感じの声音なこの人も、そういう話になると急に声のトーンが上がって……やっぱり女の人だなあ、がらつと変わるのって。

あいかわらずの口調とかイントネーションはちよつと大変だけど

聞き取りにくいとかはないし。

「ああ済まない、こちらから話をずらしてしまって。で、だな。君から連絡があり、なにが起きたのかと思えば……初めの印象どおりの大人びた挨拶もそこそこに『これから君自身になにかが起きるかもしれない、それも外出先で。だから、もし次に連絡したら騒ぎを大きくしない手伝いをしてほしい』とはね」

冬眠まで起きるし、外でも起きそうになったのはねこみ病ペアとあつたときで分かっていた僕。

でもゆりかたち大みそかの今日……昨日になるのか、に集まろつて言われていて。

行きたかったし嘘を少しでも言いたかったけどもやっぱり魔法さんの機嫌次第じゃどうなるのか分からない不安があつた。

だからたまたまに見つけたあのときの電話番号に連絡したんだ。

あの日に来ていた上着のポケットに入れっぱなしだった、あの番号に。

外国らしく癖の強い数字だけが並んでいたそれに。

「本当に助かりました」

「いや何、私たちもこういうのには慣れてるしな」

慣れてるんだ。

そんな感じしたなあ……やけに手際が良いって言うか。

「事情を抱えている者特有のぼやかしたような話し方にも理解がある。問題ないさ」

事情？

何の？

まあいいや、こっちに都合のいい勘違いしてくれてるなら。

実際に魔法さんっていう事情持ちだから嘘ついたわけじゃないし。

おまけに実際にかんりのことになっちゃったんだし。

「こうなることは分かっていたんだね？」

「あ、いえ、はつきりとは……少しは予測していましたが、ここまで大事になるとは思ってもいなかったの」

いきなり血をげばげば吐くなんて想像できないよね。

けどまさかあんなときの紙切れがこんなに役に立つだなんて本当、人生何があるかわかったもんじやないなあ。

今までも……そしてこれからはさらにもっと。

だって魔法さんで幼女だもんな。

この体になつてまだ1年も経っていないのにこれだもんな、これから先どうなるのかさっぱり。

「今回の我々は君の役に立てたかね？」

「はい、もちろんです」

「あなたたちの顔が怖いから子供が怯えるんですよ、とりあえずお化粧とかしてください」って言っただけだったのにまさかここまでしてくれるなんてなあ……ありがたい限り。

しかもつきり部下の人とかを何人かくらい連れて来てくれるのになつて口ぶりだったのに、実際にはお医者さんとかまで用意してくれてただなんて……いくらかかったんだらう。

……ここから「じゃあ手間賃も含めてびつくりするくらいの値段払つて？」つて言わないよね……？

一応子供に見えるはずだし、そんな危ない人たちみたいなの真似しないよね？

しないよね？

信じるよ？

「しかしまだまだこれだけでは返し切れていないからな、これからも遠慮なく頼ってくれ」

む。

つまりりさりんに渡したお金以外はチャラってことでいいの？

いいんだね？

「君の忠言……ではなく忠告……アドバイスののおかげで我々の生活はこここのところ天国のようなんだ」

「そうですか」

お年寄りや物事を過剰に捕らえるフシがあるってどこかで読んだことがあるけど、この人たちもそうなんだろう。

あと単純に会社の偉い人たちみたいだからたくさんの人を使うの

も「大したことない」って思ってるんだろう。

「関係のない、しかし観察力のある第三者からの意見。しかもその対象と同年代のサンプル……同じ目線からの感想というものは」

今サンプルって言った？

「ときに有用であり、だからこそ価値があるのだよ。君なら知っているとと思うが、世の中にはコンサルタントやアドバイザーという仕事が存在している。なぜ彼らは必要とされているか？ 特殊な知識と外部からの視点というものを備えているからだ。私たちだけでは発想できない不可能を可能にしてくれるからだ。ともかくはそういうことだ、どうか納得してくれないか？」

「それで……分かりました」

助けてもらった身だし特段反対する理由もないからそれで納得したフリをしておく。

あ、でもさっきとお金のことは言っとかないと。

いくら渡したのかは分からないけど……掛かった分は払わなくちやね。

こういうのって後になるほどもやってするものだし。

「……済みません、さっきのお金ですけど」

「なに、それもまた気にすることはない」

「え、いえ、そういうわけには」

「私たちにとっては端金……言い方は悪いが、その程度のもものだからね。ほんの小遣い程度なんだよ」

ええ……あの、金塊っぽいのか最初渡そうってしてなかった？

さすがにお札に替えたのまで見たけど、でもそれだって相応の金額ってことで……それはさすがにおかしいよ。

赤の他人が「ここの支払いは任せて！」とか言うレベルのお金じゃない。

いくらなんでも社長さんとかだって金銭感覚おかしいもん。

「そんなわけにはいきません」

金額次第じゃATMだと引き出せないし、銀行は休み。

三が日が明け次第、すぐにでも返さないとなんだ。

だって……さすがにこれだけの金額、払ってもらっておしまいとかだと……その、怖いもん。

僕をこうして助けてるのに何かあるんじゃないかって思っちゃうでしょ？

「……ふむ、着いたな。この話の続きは降りてからでいいかね？」

「あ、はい」

金額を聞き出してないけどとりあえず着いたんなら……って、あれ。

着いた。

——どこに。

つつつと背中に……急に湧き出た汗がぞくぞくさせてくる。

「……すみません。どこへ送っていただきたいかって」

リムジンに乗り込んだばかりのときはそんな状態じゃなくて、体起こせるようになってからは話したり着替えたりしてたからつい、家の住所とかその近くの適当なところとかっていうのを。

「ああ、聞いていないね」

へ？

どういうこと？

びっくりして顔を見上げてみると、ただ笑っているだけのおばさん。

——車は止まっている。

夜だから暗くてよくわからないけど、でも少なくともふつうの駅前とかじゃなくて……あ、いや、もう電車もバスも動いていないのか。

じゃあ——どこ、どこ？

僕はどこに連れて来られたの？

「着いて来て欲しい場所があるのだがね」

「あの、僕はこのまま家へ」

「いや、そういう訳にはいかないね。 済まないが」

え？

そういうわけにはいかない？

済まない？

なんで？

騙して済まない？

僕の頭はぐるぐるして思考能力を失う。

「頼む……おとなしく来てくれないかね？　なにしろ、ここは」
静かに外から開けられたドアからは、夜の暗がりの中……なにかしらの建物がぼんやりと見える。

そして……1回だけなのに特徴的すぎて忘れられない、おばさんと一緒に居た人の声が聞こえてくる。
降ってくる。

「久しいな。　息災……とは行かなかったようだが」

「あ、どうも」

かつんつてこの前みたい杖を地面に当てながら彼が言う。

「我々の息のかかった施設でね」

「施設」

「ああいや、病院、病院だとも。　もつとも、君がよく知るものとは少しばかり違うかもしれないが」

病院。

僕がよく知るのとは違う病院。

どんな？

「ここではばしのあいだ……そうだな、短くて1週間、長くてひと月くらいだろうか。　君には私たちの世話になって欲しいのだがね」

「いえ、その、僕はただ家に」

「もちろん強制ではないのだがね？　ぜひこの場で承諾して欲しい」

「……え——……」

今さら気づいた。

あ、これなんかやばい。

すつごくやばいかも。

「必要なら保護者の方々への連絡してもらっても構わない。　君の行動を制限することはしないと誓う。　もちろん電話してもらって構わない」

……僕を誘拐とかしようってするならまずスマホ取り上げてくる

ぐる巻きにするよね。

でも実際にはそうされていない。

……怖いけど今すぐに煮たり焼いたりするわけじゃないって思っているのかな。

頭の中がお酒を呑みすぎたときみたいに冷たくなる。

血の気が引いている。

脚が少し震えている。

指先が凍りそうに冷たい。

……海外とかで絶対に人目の着かないところに行かないようにつてあるよね。

今の僕はそれを破って、のこのこと着いて行っちゃった感じなんだ。

「なんなら私が代わりに説明と説得をさせてもらってもいいのだがね……とにかく今から案内するところへ来てもらい、滞在してもらいたいのだよ」

……怒らせちゃまずい。

この人たちが悪い人たちかどうか分からない以上機嫌を損ねることとは避けないと。

「それに、ここは君の家から……先の家からは真逆の方向だな。車で少々と離れているし、帰ろうとするとまた時間もかかる。……それならばこちらでシャワーなども浴びてからの方がいいのではないかね？」

自分の家か病院の救急外来の方が安心できます。

なんて絶対に言えない雰囲気。

「夜も遅い。ひと晩ぐっすり寝てもらってから明日にでも……さっきの金のことなども含めてゆっくりと話し合おうじゃないか？」

なあ？」

あ、お金については……あの、ひと晩で何割とか着かないよね？

いくらなんでもこんなに子供に見える僕に……あ、僕の、いるはずの親とかにせびるならできるのか。

……身代金誘拐。

そんな物騒な言葉が思い浮かぶ。

「ふむ。 そうだな、このまま帰してしまうのも忍びないのう」
いえ、僕はそうしたいんです。

でもあなたたちが今さら怖くなってきたので言えないだけなんです。

誰か助けて。

「できれば君には……君自身から来てもらいたいのだがね」

「NOって言わないでほしいなー、めんどくさいから」ってことだよ
ね。

気配を感じて振り向いてみれば、真顔になっているおばさん。

怖いから止めて……。

でも今の状況はどうしようもなくなっている。

「はい」か「YES」しか答えられないんだ。

……しかも……何でか分からないんだけど、とつても眠くなってき
た。

昼間に昼寝しておいてもさすがに深夜だしな。

……それとも、さつき無警戒で飲んじやったお茶。

脳みその奥から痺れてくるような感覚が襲ってくるのが分かる僕
には……うなずかないっていう選択肢はなかった。

43話 「魔法」と「変異」と、そして 1 / 6

よく考えたらちよつとしたことで「ものすごい恩だからぜひ返させてほしい」って付きまとわれるのって事件に巻き込まれるときの鉄板だよな。

何人もの大人……それも明らかに外人で体格が良すぎる人たちに囲まれるようにしてドナドナされている僕は、そんなことを今さらながらに思いながら絶望していた。

けどもいざ建物に入ったら拍子抜け。

ここ、本当にただの病院じゃん……なんか考えすぎた？

よく考えたら別に強制じゃ無いもんな。

おじいさん……じゃなくておじさんもおばさんも、別に僕の手を掴んだり他の人たちが僕を連行されるエイリアンみたいにはしないでそばを歩いているだけだし。

何かこの人たちが見た目からして怖いし強引だから怖かったけど、その辺は故郷の国では普通なのかもしれない。

そう思いながらリノリウムって言うんだっけ、独特な廊下を歩く僕たち。

そう思わないと怖くつてしようがないつてのもある。

……暗い廊下の先までを眺めるついでにそつと見上げた先の2人を見て、改めて思う。

夏休み明け以来に会ってもやつぱり怖いっていう印象のふたり。

頬のケガがあるおばさんと眼帯のおじいさん。

おばさんも今はお化粧と髪の毛で隠しているみたいだし、おじいさんの眼帯もケガしたみたいなのになつていて威圧感が薄れている。

少し、ほんの少しだけはぱつと見の威容が軽減されている感じ。

けどあいかわらずに大きいよなあふたりとも……2メートルは超えているしなあ。

こつこつこつこつとひたすら歩くばかりなのは怖いから「怒らないよね」って信じつつ沈黙を破つてみる。

「……あの。病院、ですよね？ っつ。 あの、僕は」

「快諾してくれて、そしてこうして着いて来てくれて助かるよ」
いえ、ただただあなたたちがとつても怖いから抵抗しただけなんです。

ほら、人質とかにされたときはおとなしく言うこと聞くっていうあれなんです。

とは言えないひ弱な僕。

「ああ、疲れてきたら言うてくれ。車椅子にでも乗せてあげよう」
いえ、さっさと僕帰りたいんです。

でもあなたたちが怖すぎて言い出せないんです。

「それでだな。ここは何の変哲もない、本当に何もなただの病院というものだよ。君の端末で検索すれば名前も出て来るはずだ。

ほら、その案内板を見てもらえばわかると思うが」

と、ちよつと先の壁に掛かっている周辺地図を杖で指してくれるおじいさん。

……なるほどね。

大雑把にどの辺かっつてのは分かった。

ちよつと安心する僕。

「うむ。故あって遠回りしてきたから距離に比してかなり遠く感じただろうが、実際には先ほどのお宅からはさほど離れてはいないのだよ」

「そうですか」

なんでそんなことしたんですか。

それじゃまるで警察を撒くみたいな感じじゃないですか。

悪いことしてるんですか？

なんて言えない。

「規模も……まあ中の上という程度だな。評判も悪くはなく、そう

……大きな施術もできる程度の、な」

僕、内臓とか取られちゃうんだろうか。

映画とか漫画とかじゃ病院って怖いところだよな。

どうしても怖いイメージがぐるぐるしちゃうよね……。

明かりがほとんどついていなくて、ついていても薄暗い緑だった

り赤だったりして。

どんな音でもいちいち不気味に反響する病院の廊下っていう長細いところ。

こうしていると、なんとなくで押されて来てしまった……あのときもそうだった、僕とは縁がないから慣れていなくって不安で……叫び声が反響していた病室を思い出させる。

父さんと母さんのときを思い出させる、あの空間。

大きな事故の後で傷ついた人とか動かなくなった人の家族で大変なことになっていたあの空間。

「……大丈夫かね？」

「あ、はい」

大丈夫じゃないけど怒らせないように。

「不安なことがあれば何でも言っしてほしい」

……どうしょ。

言う？

言うの？

でも怒らせたら……いや、ここまで来ちゃったらどっちにしろ何かされるならもう手遅れだ。

なら意思表示しておこう。

今のところ怖いだけだもんな、この人たち。

「……ここまで。騒ぎにならないようにしていただけたのには感謝しています」

「なに、たったこれだけのことだ。気にするなど」

「でも」

じつと……見下ろされる感じになっていくけどそれはもうどうしようもない。

上から視線が来るのって怖い。

それは諦めるとして、でも言わないと。

じゃないと普通の僕みたいに流されちゃうだけだから。

「僕があのおときにお願ひしたのは……友人のところから、なにかがあったときになるべく騒ぎにならないように穏便に助け出してもら

うことだけで。あれだけのお金とかたくさんの人たちとかまでは……あと、ここ。病院まで送ってもらうことまでは……その、後で行きますから」

しどろもどろになって来ちゃったけども言いたいことを言ってみた。

「たしかにそうだね。そこまでしか言われておらん」

「うむ、そうらしいな」

でも、2人は「あ、そう……」くらいの反応。

僕はちよつとめげそうになる。

「……そうなんです。病院についてはあの血の量を見たら仕方ないかもしれないけど」

訳アリつてことで救急車に押し込まれなくて安心してるけど、でも。

「……あんな大金は、やっぱりいくらなんでも僕が困ります。三が

日が終わったらすぐにお返ししたいので口座とか」

「ところで響くん」

「あ、はい」

「ちよつとこちらへ来てくれないかね？」

「え？ あ、はい」

なんか遮られて……怒ってる感じじゃないからほっとするけど、僕の中でふとした疑問が浮かぶ。

あれ？

そういえば僕、名前とかこの人たちに名乗ったっけ？

あとあのとき僕女の子だって言った気がするんだけど……最近の記憶と混じったかな。

それから2人はあんまり答えてくれなくなっちゃって、けど、おばさんが先導して僕が後ろに、さらにその後ろにおじさんっていう囲まれた感じがしなくもない状態のまま、おじさんの杖がカツンカツンと廊下の先にまで響き続けるのを聞きながら歩くことしばらく。

遠く廊下の先にまで飛んでいった音が跳ね返ってくるから、なんだか不気味さが増してきた。

帰りたい。

だめ？

だめっばい。

おじさんの後に続いている人たちが減ったけど、それでも何人分の足音がうるさいくらいに増幅されている。

初めは怖かったけど何分か歩いて慣れて来た感じの音を聞きながら「思ったよりも病院って広いんだな」なんてあたりまえなことを思いつつ、だんだんと僕が知っている病院っていう感じの待合室とかが出てきて、でもそこも真っ暗に近くって余計に気味が悪くって。

「あー、僕たち裏口っばいとこからぐるっと正面口っばいとこに来たんだなあ」って思ってた。

そうして案内された先は。

「えつと……ここって、診察室……いえ、検査とかするところでしょうか」

ドラマとかでしか見たことがない大きな機械とかがある、手術室にも似た印象の広い部屋に通された。

「ああ、そうだよ。そういう認識で構わない」

「いえ、ですから僕はこういうのは」

「これは要らぬ世話なのだと、今この瞬間もちろん思っているし君の体に何もないのでろうとは半ば以上に確信しているのだがね」

あのスプラッターぶりを見てそう言い切れるのってすごい。

外国の人って頑丈そうだもんね。

……さすがに何か違うって分かってるけど、ほら、僕逆らえないから。

「あれだけの反動というものを目にしてしまったからには見過ごすわけには行かないんだ」

反動？

なにそれ？

「念のため。あくまで念のために。そして君の安全と私たちの安心のため、ここで一通りの検査というものを受けてもらいたいのだよ。病院で経過の不明な怪我をしている患者にする、ごく普通の検

査……MRIだとかエコーだとかね。そのくらいなら良いのだろう？」

何が良いのかはさっぱり……だけどとりあえずひどいコトされるわけじゃなさそう。

そうだといいな。

そうだって信じてる。

この人たちもなんか訳アリ……外国人だもんね、ただの偏見だけでも……だからこそ訳アリ仲間っぽい僕のことちよつとだけ面倒見ようって思ってくれてるだけだっと思って思いたい。

切り刻まれたりしないでね？

そのへんに注射器とかたくさん置いてあるのも見ないフリ。

「なに、隅から隅までというわけではないさ、せいぜいが人間ドックくらいだよ……ああ、君の歳ではまだまだそういうものとは縁がないか」

「そうですね」

「安心するといい、君」

安心しようって努力してます。

おじさんがしゃがんで来て頭をぽんってしてくれているけれどその手までが大きいもんだから、それに眼帯って前みたいなおつきい黒光りなものじゃなくなっているっていつてもやつぱり怖いっていうのもあって、ぜんぜん安心できないけども。

「今から君を診る人員……スタッフはすべて我々の息がかかったものだけだ。一般の者ではないからたとえ何があってもその情報を漏らしたりはしない。なにしろ我々の——口外できない事情をその身に宿しているか、あるいは知っているか、その身内で固めているのな。大丈夫、情報は外には漏れない。いわば血の結束。だからまず心配は要らないよ」

「どんな翻訳の仕方したらこんなめんどくさい言い回しになるんだろ」って思いつつも、僕が安心しようって思っていた感じに僕を心配してくれているらしいとも感じる。

「まあ、もちろん君のご両親、あ、いや、保護者や関係者……そういうっ

たところに診てもらってもいいし、むしろその方が本来はいいの
だろうが。なあ？」

「うむ、確認させたがやはり無かったな」
「？」

「ああ、いや、君の名前が我々の名簿になかったというのがひとつ。

さらには君……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
が、もうひとつ。そしてなにより君自身が……：～
歳になるまで頼ってきたはずの保護者の方たちではなく、あえて私
たちに『判って』連絡してきた。つまりは、そういうわけだよ」

「どういうわけなんでしょう？」

「なんかすごい勘違いしてる気もするんだけど、今はその方が安
全っぽい。」

「だから事情を知るものによる検査を。君の体に大事がないと確認
する、そのための体制が整っている環境にあるのだとは思えなくて
ね。 どうだろうか？ 受けてはくれまいかね？」

「……………」

「よく分からないけども、とりあえずNOって言ってもダメそうって
のは分かった。」

「それにどうやら本当に普通の病院みたいってのもあるしで、僕は
ちよつとだけ警戒心を……：～
んとなく思いながら従うことにした。」

「りさりんに渡した分のお金、腎臓で返してもらおうよ」とか言われませ
んようについて願いながら。」

43話 「魔法」と「変異」と、そして 2 / 6

結構危険な状態かもしれないんだけども、何故か眠気に襲われ始めた僕。

……今日はすごく夜更かししてるもんな……みんなと集まって……僕だってそれなりにはしゃいでた気がするし、たくさんセキと血を吐いて相当体力を消耗したんだ。

でも変な具合の悪さとかはない純粋な眠気だから多分僕の体が眠いだけ。

まああの血だって魔法さんがうっかり出しちゃったものかもだしね。

あの量を本当に吐いていたらこうして普通に立ったまま歩いたりなんてできるはずがない。

だから僕は大丈夫なんだ。

そう、思っておく。

現実逃避かもしれないけどね。

でも魔法さんが居るから死にはしないんだろうって根拠のない自身で無理やりに「大丈夫です」って言って早く帰って早く寝たい。

「あの、伺いたいことが」

「そこまで遠慮することはない」

「そうだ、私たちは君の仲間なんだ」

「……わかりました。それなら……おふたりのお名前。聞いていなかったと思つて」

コードネームとかだつたりしたら意味ないだろうけども、一応誘拐犯かもしれない相手の情報は聞き出しておこう。

今なにもされてないんだから大丈夫なんだ。

大丈夫だつて信じてても良いんだよね？

「む……そうだったか？」

「ああ、そういえば先日はともかく今日はこれまで話してはいないのう。お前、車の中で言わなかったのか？」

いえ、あのときも聞いたりしてなかったつて思います。

僕がただ忘れてるだけかもしれないけども。

僕は僕自身の記憶力には自身が無いんだ。

「……忘れていた。失態だ」

「まったく。……いやそうか、近頃は子供たちとばかり遊んでいたからのう……あの子たちは何度でも名前を聞いてくるから、それで思い込んでおったか」

言外に「幼女のくせに子供っぽくない」って言われた気がする。

「儂がイワンで、コイツがマリアだ。覚えてくれたまえ」

おじさんがイワン、おばさんがマリア。

……何と言うか普通？

普通すぎて逆に怪しいけど……まあいいや、覚えやすいし。

ほら、外国人の名前って覚えにくいが多いから……例えばあの夢で会った子たちのとか。

えっと……アメリカ、タチア、ノーラだっけ。

あとソニアって名前も聞いた覚えがある……なんで覚えているんだろ。

僕の無意識が作り出した適当な名前だけど「せっかく考えたんだから」って、これまた無意識に覚えちゃったんだろうか。

「あと、さつき気になったんですけど……えっと、さつき言っていた僕が血を吐いたあれみたいなのを」

「ああ、我々は『反動』と呼んでいる」

反動？

何の？

「……それで、そちらでも反動というものについて知っていて……詳しい方がいるんですか？」

僕はまるつきり知らないけどもなんか知ってそうな雰囲気の人たちに聞いてみる。

まあ知ってるはずないよね、だって魔法さんみたいなものって僕にか起きないっぼいし。

「無論だとも」

そうだよね……って、え？

「むしろ我々ほど知り尽くしている勢力はないだろう」

「まああちら側も、我々の……半分程度には知っているとは思うがね」
え、知ってる？

「つてことはホントにこの人たちも僕みたいに魔法さん絡み？」

「適当な嘘じゃなくって？」

「……ねこみみ病のときにNOを突きつけられて凹んでいた僕だから、気持ち的にすぐに飲み込めない。」

「時流というものは我々に対して厳しいからな……おっと済まない響くん。年寄りには、つい話が長くなる」

「いえ」

「そういえば、どうしてあなたたち……イワンさんとマリアさんは僕の名前、知っているんですか。」

「そう聞こうかって思ったけど、多分僕が倒れているときにみんなと話したから知ってるんだろう。」

「それでだな。……これでも我々は……恐らくは、隠れている部分も含めたとしたら今のところ最大の勢力でね」

「隠れている。」

「最大勢力。」

「先のような反動について熟知している者も……この国にもそれなりに連れてきているのだよ。……この国にもともと居た奴らは……いや、今はいいか」

「外国から来た。」

「もちろんこの国にもいる。」

「ねこみみ病がメジャーになる、多分ずっと前から。」

「ねこみみ病に似ている感じだけど決定的に違うこれのこと。」

「それよりも、先の君のあれは少々……いや、かなりの部類に入ると思うのだがね。……深くは訊ねないで置こう、なによりも君自身が大丈夫だと言っていてそうして動いているのだから」

「よくわからないけど、でも、さつきみたいなの……魔法さんでとんでもない量の血をいきなり吐いて、ちよつとしたらこうしてけろりとしているっていう現象について、この人たちは知っている。」

僕よりも、ずっと。

だから僕を助けてくれた——ん、時系列が逆な気がするけども……ダメだ、本格的に眠くって頭が回らなくなってきた。

こんなに大切そうなきに、よりによって。

「あれは儂たちですら滅多に目にしたことがないほどの反動だったから興味はあるのだがね……しかし反動……そちらではどのような呼び方は知らぬが、それとその元となる変異や変質について、ほんの少ししか付き合いない、あるいはまったくなかった我々に話すのは君自身では判断しかねるだろう？」

話し方からすると複数のグループがあつて……で、この人たちは僕がそのひとつに入っているって思っている。

——そっか。

僕、ひとりぼっちじゃなかったんだ。

ただ、気がつかれなかっただけなんだ。

「許可も要るだろう、だから今は聞かないでおくよ。我々が君を助けたのは儂らが君から助けてもらった恩があるのと、君の惨状を目にしたのほんの善意——同志を窮地から救い出すためなのだからのう」
え？

同志？

なんだか聞き覚えがあるからちよつとだけ意識がはつきりしたけど、すぐにゆりかの、いつものなにかに影響された口癖だつて気がついたら一層に眠くなつてきた。

関係あるはずない偶然つてあるもんだから……だめだ、本当に頭が。

「お前、それはもう古い言い回しだぞ」

「ああ済まない、これもまた年を取るとつい、な……それで響くん」

「はい」

眠いんです。

「いつか。いつか君の気が向いて、君の保護者の方たちの同意を得られたときに改めて尋ねることとするよ。無論、話してもらつたとしたら……君にとつての機密事項を教えてもらった以上、儂らのもの

も教えることになる。だから今は……ただ、少しばかりのおせっかいで君の体に、現代医学的には問題がないことだけを確認するだけに留まらせることにするよ」

「はい」

あれ、そういえばどうして僕はここに居るんだっけ。

眠い。

あ、MRIとか言ってたんだ。

でもなんで？

……ああ、僕はさつき血を吐いたんだもんね。

……やばいやばい、かつての学生時代を思い出すような眠気だ。

午後いちばんの授業で眠気と戦いながら新しい知識を詰め込むっていう、あの感覚。

今は眠くなったら寝るっていう生活だからこういうのとは離れていたわけで久しぶりすぎて耐えられない。

もうどうでもいいや、とりあえずその検査とやらを受けさせてもらってさつきと寝よう。

さつきまで警戒していたってのは理解しているのに眠すぎて何もかもどうでも良くなっていく僕が居る。

眠くさえなければなんとかあったかもしれないけど眠いんだからしょうがない。

「では、君の体を調べても？」

「お願いします」

そう言えば「腎臓とられたりしないよね」とか「売り飛ばされないよね」とか思ってたなあって何秒かに1回シャツトダウンしたがる頭が言う。

そんな僕は、気がつけば何人もの……10人を超えるかもしれない白衣の人たちが現れていて、囲まれていたらしい。

でも眠い。

もうどうでもいいや。

良くないはずなのに僕はもう限界。

こういうところで幼女な体が足を引っ張る……眠い。

「やあ、皆久しいね。早速だが今日はこれからよろしく頼むよ」

「僕らの大切な客人だ。くれぐれも丁重に扱え」

「はっ。それでは私たちが担当致します」

「……ふあい……」

気がついたら僕の腕は両脇から取られていて歩かされ始めている。

「眠ってしまったわれでも問題ありませんからね」

「ふああい……」

なんか良い匂いがするって思ったら僕を歩かせているのは女の人たちらしい。

……あ、だめ。

そうだって分かっちゃうと途端に安心しちゃって――。

43話 「魔法」と「変異」と、そして 3 / 6

結果を言えば——僕は無事だった。

あの2人とその仲間たちが実は怖い外国の人たちだったとか、それで恩を売ったところで「じゃあちよつと素敵な場所に行こうか」とか「子供の臓器って人気あるんだよ」とか「可愛い子供は欲しい人がいっぱい居てね?」とかそういう怖いことはなにひとつなくて、僕は平和そのもの。

イワンさんとマリアさん。

名前で呼ぶようになった程度には仲良くなった気がする彼らは結構お茶目。

なんでもあの夜、僕が眠いって気がつかないままに連れ回して話続けてたらしい。

幼女を何だと思っっているんだあの人たち。

だからひと晩経つてもまだ夢の中……あ、文字どおりの意味で魔法さんのせいじゃなくてね……翌日の夕方まで寝てすつごくすつきりした後で「あのときは眠くて死にそうでした」って言ったらマリアさんが悲しんで落ち込んでいて、イワンさんが爆笑していた。

笑うことはないのにねえ。

それでうとうとしてたつて言うか9割方寝てた僕はいろんな検査されたらしい。

たまに起こされる感じだったから寝ながら面倒見てもらっていたようなもんか。

ひとつが終わったら「はい次の部屋」って感じで明け方までいろんなことをされていたのだけをおぼろげに覚えている。

「もう丸投げした以上はがんばらなくてもいいや」って眠気と戦う力も意志もなくなっていたせいだ。

かろうじて覚えているのは「とりあえず検査室って寒いなあ」っていうのと、真っ先に……眠かったからあのときはなんとも思わなかったけど、ぱんつまで丸ごと履き替えさせられて……まあ血まみれだったし……それであちこちに抱っこされながら移動させられて。

僕がすっぴりどころかちんまりと入る機械の中で変な音がしたり、あるいはぶるぶる震えたり。

中にはヘッドホンみたいになにかをつけさせられてすごい音がする機械の中に入れられたりしたっけ。

眠かったから断片的だけでも。

一応は毎回どんな機械かと言われていたのは覚えているんだけど、それがなにかなんていうのは意識の範囲外だった。

検査してる人たちとか寝てる僕を抱っこして連れてくれてた人たちは分かってたみたいだけどね、僕が眠いつて……そりやそうだ。

そういうのを、着替えのときから面倒を見てくれたらしい女の人たち……お医者さんだったらしい……から聞いて、なんとなく覚えてる断片的な記憶とくっつけてみたけど曖昧だ。

僕は別に男の人でもよかったんだけど、運んでくれたり寝かせてくれたり着替えさせてくれたりしたのはみんな女の人だったそうで。

なんでも「淑女の肌だから」とかなんとか言っていたっけ。

「あの人、そういうのにうるさいの……」とかなんとかか。

まあ今の僕は一応女の子ってことになるんだから……いや、ただの幼児なんだからどっちだってよかったって思うけどね。

お医者さんって異性の体とか見慣れてるだろうし、僕男だし。

その結果は、全くの健康体。

「血液とか調べたかったんだけどねー」って苦笑しながら言われたけど、採血とかだけはがばって起きて「絶対やです、断固拒否です」みたいなこと言ったらしい。

僕は眠くてどうしようもなかったから多分魔法さんが乗り移ったかなんかしたんだろう。

憑依とかもはやなんでもありだね魔法さん。

だから結局なんにもなかったんだけど、でもあれだけ吐いたんだし全身をきちんと調べてもらったのは結果的によかったんだろう……僕自身が1番安心したんだし。

調べてもらってよかった。

あのとときに調べてもらえなかったら「今の僕が盛大に血を吐くよう

な病気を抱えていたらどうしよう……」って今でもずっともやもやしていたらうしな。

とりあえずはなんともない、痩せすぎではあるけど健康な……幼女の体だっていうのを伝えられて、嬉しさと残念さを混ぜたような感覚になったつけ。

そしてそれからは予想どおり「もつと食えもつと食え」って感じで事あるごとに食べさせようとしてくるようになってしまったのは仕方のないことだろう。

うん。

あの日から僕、この通り病院に入院させられてる……しかも個室で。

「個室ってお高いんでしょう？」って聞いたけど「子供は気にしなくても良いよ」って言われてちよつといらつて来たから遠慮なく食っちゃ寝な生活を楽しませてもらってる次第。

……「病院食はマズかろう」なんて言っているいろいろ持ち込んできているのははたしていいことなんだろうか……まあ僕は病人じゃないらしいし、念のための様子見つてことらしいからいいんだけども。

「立場があると誰も突っ込んでくれない」って言ってたけど、偉い人に真正面から言えないよねえ……病院食を毎回食べきれない僕に看護師の人が困ってるし。

本当はこれ以上借りなんて作りたくはなかった……結局りさりんへのお金とか検査代とか入院代とかの話しようってすると逸らされるし……けど、今の僕がどんな状態なのか不安だったのは僕もおんなじだったからひと息つけた感じ。

それに……今までできるだけ人に頼らないようにしてきたからこそ、こうしてだらだらと。

冬眠期間を除いても半年以上、入れたならもうすぐで1年になるっていうこの長い時間。

去年の今ごろまでの僕にとってはたいしたことがない、けど今の僕になってからはとつても長い時間、ずっと、ただひとりで悩むだけだったから……どこかでそれを変えないといけないって思っていた

んだ。

その相手がたまたまこの人たちだったってだけ。

変な縁から僕の魔法さんと何かしら近いものを持っているらしい人たちと知り合えたからなんだ。

魔法さんが本格的に暴れ出した夏休み明けからのことを思う。

うだうだぐじぐねぐねもぞぞって考えてないで、さっさと思い切ってお隣さんっていう、よく落ちついて考えてみれば、昔のことを言えばとりあえずは今の僕が前の僕だつて信じてくれるだろう……実際は魔法さんのせいでそうなるんだけど……っていう人が、いや、お父さんとお母さんと娘さんっていう3人もの人たちが、家から出てほんの10秒くらいのところにいたりするんだ。

よくよく話していけば、いずれは……特にあの奥さんだしな、まず信じてくれて「じゃあどうしようかって」いう流れになったんだつて簡単に想像できる。

おんなじことは親戚の叔父さんにも言える。

結局まだ連絡は取っていないけど、でも、家まで来てもらえば、結果的には魔法さんですぐに前の僕だと認識してくれたはず。

そこから僕が幼女になっちゃっているっていうのまでを認識させる方法はわからないけど、でもとりあえずはきちんと大人……いや、僕は社会経験どころか人間関係ゼロだから実質的になんにも知らないわけで、つまりはまだ体だけ大人になりはしたけど中身はまだ高校生程度で、だからこそ社会っていうものをよくわかっている大人の力を借りてどうにかできた……かもしれない。

実際戸籍とかいろいろはどうかなるって今なら分かっているんだし、僕を知ってるあの人たちに助けてもらいながらもっと平和に生きていたかもしれない。

後知恵ならなんともも言えるっていうのは知っているんだけども……こういうのって考えちゃうよね。

今から思い返すと、なんであんなに隠れて秘密にしてじーっとしているのにこだわっていたのかがわからない。

まあ単純に怖かったんだろう。

僕自身が弱虫なのもあつたけども、なにより明らかに非現実的な何かに襲われていたって言うあの状態が。

うん、しょうがない。

記憶を失ってまた同じことになったらきつとまたおんなじようにするだろう。

それが僕って言う人間だ。

……入院中にマリアさんとイワンさんにいろいろ説明されたけどもそれはまたあとで。

それよりも今は2月になっている。

2月。

そうしてあのおおみそかを祝って、お正月をスプラッターで飾って抱っこされたままでの検査っていうのを終えてから、気がつけばもう1ヶ月が過ぎてとうとう2月だ。

2月。

1ヶ月も外に出ないひきこもり生活だったんだ。

寒さがいちばん厳しい2月のはずなんだけど病院にいる限りは生ぬるい感じの空調で、特段の寒さを感じないけど今は2月なんだ。

いろいろとありはしたけど、それでも今までのように家の中にいるだけの時間が長かったのに比べたら……とつても早かった気がする。

形だけの入院っていうのをして、こうしてひと月ちよい。

半月を過ぎたころからはわりと自由にさせてもらって、ちよつと出たりもしたし家にも戻ったりはしたけど、こんなにお世話になっちやっている。

検査と入院と個室と。

何度も言うけども気になるからしょうがないあのときのお金も結局受け取ってくれない、というかそもそも銀行へも行かせてくれない。

それでも「まだ借りがあある」って相手の方から言ってくるんだけど、本当なんだろうか。

……いや、僕はあの人たちを……少なくとも僕の嫌がることをしてくる人たちじゃないって信じることにしたんだ、この考えは閉まっ

おこう。

マリアさんはよく話す人つてのがよく分かったんだけど、それはおしゃべりな女性ならしょうがないものだしイワンさんはそこまで話さないし、話すとしてもゆっくりだから聞き取りやすくて。

あと、年上の人たちとだと今までみたい……みんなと話しているときみたいに気を張らなくてもいいし。

肩肘張らなくてもいいっていうのと同時に今どきの中学生の知識とか常識とか興味に合わせ続けなきゃならないっていうのがまったくないもんだから、それはそれは快適だった。

むしろ、存分に甘えろつて顔をしているから、いつのまにか僕の方が……完全に子供扱いされていて、だからとても楽で。

「……む」

そんなことを考えながら……1ヶ月ぶりくらいにみんなと会う時間までもう少しのはずなんだけども。

今日何回目かに見つめる病室のドアの向こうの音に耳をそばだてる。

……鍵をかけていなくて、ドアを閉めているとは言っても、繁に歩いてくる音がして、いつ人が入ってくるかわからない環境ってというのはやっぱり慣れない環境。

やっぱり僕にとつては、誰もいないあの家の中のあの部屋がいちばん。

機械の音だつてうるさいし、いきなり耳元にナースコール的なので話しかけられるし。

枕元の機械から伸びているコードの先は僕の胸。

今は進んでいて心電図とかの機械つて病室には無いらしく、全部向こうで管理しているんだとか。

だからその機械から伸びているコードの先の吸盤、それが張り付けられていてお風呂のたびに痒くなる胸のあたりをなんとなく見ているら、今度こそこんこんとドアがノックされる音。

そしてノックの後すぐに慣れた声が出てこないっていうことは……みんなだ。

「……………」

って言っても当然ながら僕の声は届かないから、しばらく待っているとスマホの方に連絡。

文字の方でも「どうぞ」って……………送ったとたんにながらりと開けられたドアからは、ゆりかが飛び込んできた。

「ひびき、おひさっ！ ………………ホントに元気になってる！ 良かったあ……………」

小さいのと対比するように、レモンに対するメロンのように、かがりも入ってくる。

「ごきげんよう、響ちゃん。 ……良かった、ほっとしたわあ……………ようやくあれから時間が経ってようやくくこうして会ってもいいって言われて来てみたけれど……………本当に顔色もよさそうで」

ゆりかとかがり。

せっかくの大みそかを盛大に台無しにしちゃった僕は、彼女たちと1ヶ月ぶりに再会した。

43話 「魔法」と「変異」と、そして 4 / 6

「久しぶりだね、ふたりとも。あのときは迷惑を……せっかくの年越しだったのに」

「だーかーらーひびきー、それもう禁止!」

「そうよ、このあいだからのチャットでその話はたくさんしたでしょう?」

ああ、この感覚。

話を最後まで聞いてくれなくて遮ってくるこの感覚。

結構懐かしいと同時に、この子たち特有のものかもしれないって思いついてきたもの。

「……文字でのやりとりと、こうして実際に会って話すのでは違うだろう? だから分かってはいるけど、でも1回は言っておきたかったんだ。もちろん、今はないさよとりさにも別の日にね」

「もー、ほんつと生真面目なんだからー響つて。とにかく迷惑じゃないからね! 以上! この話はおしまい!!」

「急病の方がいたら助けるのって当たり前よ。響ちゃんはこちらから大切なお友達だもの、それに前から病気があると知っていたのだから。大変ではあったけど何とも思っていないわよ。ね?」

「もち。……そうしてさりげなく恥ずかしいセリフ言えるかがりんマジかがりん」

「??」

学生、女の子な感覚としての友人。

……そうだな、こういう距離感なのがそういうものだったな。

遠慮がないのがいいというか、でももうちょっとだけ遠慮はしてもらいたい感じの。

あのときに勇気を出して男だつて言っているっていうのもあるからいくらか気も楽し。

でも、友だちというものがそういうものならそろそろ慣れないといけないんだろうな。

「ありがとう。嬉しいよ」

「そーしてさらつと流せる響もすっげ。で、そーいえば今日の面会ってどのくらい居ていいのかとか聞いてる？　なんかドラマとかじゃお医者さんが入ってきて『そろそろ患者様の御体にお差し支えがありませんるゆえ……』とかいう場面あるけど」

ゆりかがボケ始めた。

少し落ち着いてきたらしい。

「いや、特にはないよ。あれから随分ここにいるし、僕の体もすっかり安定しているし」

「そう、良かったわね。けれど私たちも響ちゃんを疲れさせたくはないし、ほどほどのところで切り上げるつもりよ？」

そう言いながら、僕が指さした先にある折りたたみのイスを引っ張ってくるふたりは制服……冬服らしい格好。

……ああ、学校帰りだよ、夕方に近い昼間だから。

夏服はよく見てたけど冬服は初めてかも。

そして当然ながら彼女たちは「ほんとに同い年？」って誰だっと思うくらいにいろいろと差があるもんだから、悲しいほどにサイズの違う制服で。

「響」

「何も」

「なんかへんなこと考えてない？」

「ゆりかはいつもそういうことを言うね」

「言ってみただけだよ。カマかけに反応しないタイプだからホン

トかどうか……」

ゆりかは比べられることには鋭い、気をつけておこう。

「てゆーか。分かってたけど個室ってすごいねえ」

「そうねえ……ドラマとかだと個室が定番だけれど普通は何人かだつて聞いたわ？　さよちゃんに」

む、そう言えば今の僕は一応入院してるからさよともあるある話ができるのか。

「ねー。しかもここ、なんだか広い気がするし。あ、確かここって角っこだから、つまりは特等室ってわけ？」

「響ちゃん、事情があるのだもの。それに響ちゃんは静かなのが好きなのだし自然じゃない?」

「まーね。もはやなにが起きても驚かねえ」

「そうねっ、あのお正月以上のことなんてそうそう無いもの」

うん……同級生がスプラッターになるとか滅多に、いや、絶対に無いよね。

「そうだわ、誰もいないのだし、イス、もうひとつお借りしてコートとカバンを置いてもいいかしら」

「ベッドの足元に置いてもらって構わないよ。どうせ半分くらい余っているんだ、身長的にね……」

「小さくたって良いじゃない。ねえゆりかちゃん? 可愛いわよね?」

「私を見て言わないでよ……あ、で、響。ほんとは今日、みんなで来ようって思ってたんだけどね? りさりんとさよちゃんも」

「部活なら仕方ないよ。それに、別に今日じゃなくても僕の方はほとんど毎日大丈夫なんだ。事前に面会の連絡さえあれば平気だつて伝えてほしい」

「りよ。でもやっぱ面会オツケーになりたての今日に来られないのが心残りだったみたいでねー、特にさよちゃんのほうがさー」

「さよちゃんは、さよちゃん自身のこともあつてずーっと心配していたものね」

まああれを見れば……ただでさえびっくりするのに持病持ちの子だったらなおさらねえ……。

改めて申し訳なく思う。

あの後が大変だったつてメッセージで聞いたし。

でも僕としてはあのとぎに行つてみて、言つてみて。

それで良かったつて思っているんだ。

そのあとにこうしてこの病院に来ていろいろ知ったことも含めて。

でも……せめて。

せめてもつと穏やかなものだったたらよかつたのになあ……なにしろ血の海からの担架だったんだし。

あんな経験、確かに人生で1度2度って程度だろうね。

「連絡が来たタイミングがね——……私たち学生にとつては先輩とか先生には逆らえないからさ。ほら、ふたりとも部活と委員会の……えっと、なんて言うんだっけ？」

「できるだけ来なさいっていう日だったのよね」

「そだね。ま、明日とか明後日にでも来たいって言ってたし、そんなに焦らなくて……いいんだよね？」

「ああ、もちろん」

2人とも話しながらもきよきよと病室を見回している。

うん、ドラマとかで見るとは結構違うもんね、分かるー。

「今日はただ都合が悪かっただけだし、これからいくらでもこちらに来られるものね！ それこそ毎日でも響ちゃんとお話して！」

「いや、毎日は」

「そだよかがりん、響の方もとかく毎日は私たちも大変でしょ」

「そうかしら？ 来るついでにお菓子とか買ってきたら夏るときみたいな感じになるんじゃないかしら？」

「……………」

どうしよこの子？

そんな目で僕を見てくるゆりか。

……うん、君もこの子のことよく知ってるもんね……1回言い出したら聞かないって性格を。

「……そのへんは主治医に相談しておくよ」

「ええ！」

「……ああそうだ。こつちも改めて言っておかないとな」

「こつちって？」

「うん。あの後始末をりさの家の人たちにも手伝わってしまったんだよね。 ずいぶんとご迷惑をかけたから」

「いやー、だーかーらーあれはしょうがないってひびきい」

「そうね、りさちゃんのご家族もそういうことなら仕方ないって言うていたわ？」

「いや、それはよくない。 ご迷惑をかけてその僕が行かないなんて

いうのは。……退院したらご挨拶に伺わないと……あれだけのことになってしまったんだし、謝るついでに僕がこうして無事だということも伝えておかないと先方も困るだろう」
考えてみる。

娘のところ泊まりがけ……みんなそのつもりだったらしいし、多分僕も何もなければ普通に寝落ちしてただろうし……来ていた学生たちが騒いでいたと思っただらなんかさーツを着た外人が謝ってきて、行ってみたらその部屋がスプラッターになっていてみんな血まみれの格好をしていて。

その渦中の僕とその「両親」がお金だけ置いて居なくなっているって言う状況だったんだ。

僕の家でそういうことがあつたら絶対にもやもやするしどうしても行かないといけない気がする。

「……マジメさんだねえ。あれよ、あの後響の……えっと、家族の人だよ。家族の人たちがもっかい来て挨拶してたって聞いたけど」
「それでも」

「あ、響もそーゆーところあつたねえ……なら退院したらみんな遊びに行くついででいいんじゃない？」

「ええ、そうね。普段は人も居なくてヒマだと言ってたし、そういうときに……お休みの日とかに適当に遊んだりするついで良いと思うわ。あ、もちろんお医者様が言いと言ったらよ？ 今度こそ、体が夏くらいには落ちついてからよ？ 響ちゃん」

「……うん、そうだね」

僕の心は大人だからやらかしたら僕が謝りに行かなきゃって思うんだけど、他の人にとってみれば僕は病弱でいきなり吐血するほどの子供なんだ。

確かに「本人が顔も見せないなんて……」って言うのとはちよつと違うのかもしれない。

「ところどころで、響」

「ん？」

学校帰りでお腹が空いたからって、たぶんかがりの発案でだろうけ

ども軽いお菓子っていうものを用意していたふたり。

もちろん僕は遠慮した、というか入院してるから食事制限あるよねって感じで分かっていたらしく、分かっていたくせに3人ぶんのお菓子を買ってきて僕の分までをむしゃむしゃと食べているかがりのくるんをぼーつと見ていたら、ゆりかが尋ねてきた。

いくらでも口に吸い込まれていく。

すごい。

「ちよいちよい、響や。久しぶりのインパクトで気持ちは分かるけどさ」

「あ、うん」

「病気。今は楽になってるの？ いや、あのときと比べると……クリスマスんときの退院のときと比べてもずっと顔色いいし、なによりほっぺとかが元に戻りつつあるからそう思ってるんだけど」

「そうよね、だいぶ響ちゃんらしくなってきたわよね！」

「ちよつとかがりん、食べ終わってからにしてよう」

「あら、ごめんなさい」

ほっぺが膨らんでいるの、今は僕じゃなくってかがりだもんね。

しかしあいかわらずの食への執念。

それがあるからこそここまで育っているのか、それともそのせいで中身を置いてきぼりにして育ってしまったのか。

実に興味深い。

ゆりかや僕との比較対象としては。

「ひびき」

「うん、もう大丈夫。1ヶ月様子も見たし落ちついてるよ」

「なーんかヤな思考が来てた気がするう……けど、そっか」

……もしかして僕の考えてることってだだ漏れ？

かがり？

かがりみたいに？

「？」

あ、「くるん？」ってされた。

……僕ってこの子みたいに見られてるのかなあ……。

「1ヶ月もずっと横になってこうしてモニターされて、味気のない入院食ずっと食べながら過ごしていたからね。最近では廊下や中庭まで好きに出てよくなっているし、安心してもらってもいいよ」

正確には悪いところはあの晩に引っ込んだんだし、魔法さんのせいだし、もうとつくに外出してぶらぶらしても良いんだとは思う。

でもこう言っておかないと変に思われるからって、あの人たちに言われているし。

まあ実際あれだけの血を吐いたりしたら1ヶ月くらいは絶対安静なんだろうし。

「……ごくくんつ。 本当に良かったわね、響ちゃん」

「かがり」

たったのこれだけでもうぺろりと平らげたらしくるんさん。

本当、あつという間に。

……感心するくらいによく食べるなあ……食べるからこそそのかがりではあるんだけど。

「実はね？ 私も、クリスマスするときからずーつと心配だったの」

「……君がか」

すつごく意外。

「ええ。 だって響ちゃんは『元気だ』って……ふらふらしながら言っていたから説得力、なかったもの」

「あー、だよねえ。 どー見てもヤバイ感じだったし。 大みそか誘うかどうかってすつごく悩んだもん」

確かにあのときは家から歩いて10分の駅前まででさえタクシーを使わないと動けないくらいだったんだし、がんばって平気そうに見せていたのは筒抜けだったらしい。

ま、過ぎたことは仕方がない。

それにあのときは魔法さんのせいで冷静な思考……というよりは感情か、が欠けていたんだから。

つまりは判断能力が鈍った状態だったっていうことで本当にしようがないこと。

だって時間が飛んだんだし、寒かったしガリガリだったし冷蔵庫

だったし。

……あ、結局冷蔵庫は中身を空にしたままにしていたら無事に使えるようになっていた。

もつとも、最近はあるまり使っていないけども。

「でも誘っちゃったから私たちもすっごい罪悪感で……ねえ？」

「ええ……どう見ても顔色も悪くって、顔まで……ずいぶん栄養を取れなかったみたいだって、大変だったんだなって、ひと目でわかるくらいだったもの。なんと言うのかしらね、生気のような、そういうのがないように感じて不安だったの。それがお正月のあのときにひどくなってしまうって……いえ、ぶり返してしまって」

「いやー、クリスマススんときばったり会ったときには一瞬、ゆーれーかとも思いましたぞ。んで大みそかはちよつと顔色良いからすぐに帰らせなくても良いかなって思ったらあれだったしなー」

そんなにひどかった？

そう思っていたら、席を立ったかと思ったら近づいてきてほっぺとか腕とかをぷにぷにと触ってくるくるんさん。

いきなり触ってくるよね、女の子って。

しょっちゅう触るよね、女の子って。

女の子って言うかほとんどかがりなんだけどね。

「ええ、やつぱり！ あのとときには全然違うわ！」

「……そうだね」

こうして断りもなく気の向くままにべたべた触ってくるのはやつぱり大型犬。

初めのころは嫌だったけど、もう、とつくに諦めているから好きにさせている。

位置関係と体のサイズの問題と、その一部の問題で、どうしても顔に迫ってくる圧を感じつつくるんくるんがかかってくるっていうこれはもはや懐かしい感じ。

ほんつとうにかがりは気にしていないんだな、男っていうの。

流石に忘れてはいない……よね？

僕がちやんと男なんだって言ったの。

忘れてないよね？

いくらかがりでも性別って言う決定的なことを……まあ肉体が女だっていうのは下着の上から見られているんだし、さんざん着せ替えとか髪の毛いじりとかされたからその印象を引きずっているのかもしれないし、そもそもこの子だし。

慣れたし僕はどうでもいいんだけど……でも、やっぱりこの圧が迫ってくるのは勘弁してもらいたい。

ほら、ゆりかがすごい目で見てくるし……嫉妬しても胸は育たないって思うよ？

そんなダブルメロンさんが僕の髪の毛を手元にとって眺めつつ言う。

「……響ちゃん、明らかに具合が悪そうで、退院したって言っても一時的なものだって聞いていたのに……それなのに連れ出してあんなことになってしまった。だからみんな、もう響ちゃんと……少なくとも外でこうして会うというのを禁止されてしまうのではないかって、ずっと心配していたのよ。……そうならなくて良かったわ」

僕の髪の毛を触っていたと思っただらさりげなく三つ編みにしながら落ち込むっていう器用なことをしているメロンさんと、座ったままそれをじーっと見つめているレモンさん。

なんだか既視感のある光景。

なんでかがりはどこでも髪の毛をいじりたがるんだろうな。

まあ実害はないからいつか。

「……今度こそ。今度こそ、前のような仮の退院じゃなくて、今度病院を出るときは安定してからだとも言われているし、だからこそこうして段階を踏んでいるわけだ。……もう、気にする必要はないよ」
僕はまた嘘をついた。

けれどもこれは意識しての嘘、意図があつての嘘……この子たちのための嘘。

それくらいは冷静に判断できるようになった僕がいる。

「そうなの？」

「ちよつと安心だねー。……で、かがりん。いつものことだし、響

も気にしていないのがすつごく気になるんだけどさ？ とにかく……ちよつと近すぎない？ いちお、君たち男女なのよ？」
「え？ ……あらごめんさい、今日は髪留め、持って来忘れちゃったわ」

「ちがう、そうじゃないのよ。 お願いだから意識してよ……中2なんだから」

「??」

「あ、ダーメだこりや……響も大変ねえ」

「……もう慣れたよ」

「お劳しい響上……男子にこのダイナマイトはさぞ毒でしょう」

「そういうものを完全に気にならなくなる程度にはもみくちやにされたからね」

「おお……響の男の子が破壊されとる」
「??」

ゆりかには分かってもらえるこの気持ち。

実は歳が離れすぎていて……胸が大きかったりしてもそんなにどきどきしないんだけどね。

「……そうだ、ふたりとも」

「なあに？」

「響ちゃん、この部屋に髪留めは」

「かがり、それは後にできないか？」

「そう？ せっかく上手にできたのに。 あ、髪の毛の手入れ、看護師さんとかがしてくださいのね？ とっても綺麗な状態よ！」

ああ、この、自分に興味があること以外はおろそかになるあたりはととてもとても懐かしい……。

「いやいやかがりん、今はそーじゃなくてさ……てゆーかががりん、響から説明あつたでしょ、あのインパクトで上書きされちゃったけど。」

響、中身は男の子なんだからそーゆーの、そろそろ止めたげたら？」

「でも、かわいくしたいし……」

「だーから響ってば男の子で」

「あら、今は多様性の時代だから男の子でもかわいくしても」

「……ひびきー！　へるぷみー!!　私ひとりじゃむーりー！」

「……かがり、それは今は良いから」

「そうよね、良いのよね！」

「うん。……あ、いや違う、今のは」

「今度来るときにはいいーっばい！　リボンとかヘアピンとか新しい髪型とか試してあげるからー！」

「すげえ、一切動じてないし通じてない……強引に行こ、それでひびき、どしたん？」

「……君たちにも。　後日来てくれるだろうさよとりさにも説明するけど。　実は僕はね」

この子たちのための嘘。

僕が……いっつどうなるか分からないって言う爆弾を抱えてる僕が。魔法さんが次はいつどんな感じに暴れるのか分からない僕が。

この子たちにとって、最も自然で納得しやすく迷惑の掛からない理由って言う嘘をつく。

「——春になったら。　春になったら、海外へ越すんだ」

43話 「魔法」と「変異」と、そして 5 / 6

「か、海外って……響ちゃん、それ、ほんとうなの……?」

「ああ、そうなんだ」

本当じゃない。

本当じゃないけど、でもこれは必要な嘘というもの。

「え……う、うそ……ここでの治療じゃ限度があるから……いや、施設が足りないからって、海外の病院で本格的に治療する……って、そんな急に……」

そういうことにした方がお互いにとって良いんだ。

だから僕はまたひとつ、嘘をついた。

けど今度の嘘は……今からしようとしていることを思えば本当に必要なもの。

「ってことはひびき……私たち、響と当分」

「会えないことにはなるね。少なくとも、発ってから戻ってくるまでのあいだは、ね」

いつもと違ってゆりかの方が動揺してしまって、それで落ちついてもらうまでが大変だった。

それこそ、ぐしぐしはじめたゆりかをなだめるためにかがりがあやすってという光景があつたくらいには。

もちろん僕は何ができるわけもなく、ただ気まずく窓の外を眺めていただけけども。

だってこういうときにどんなことを言えばいいのかわからないし慰め方っていうものも知らないだもん。

だからつい、かがりに任せつきりにしちやっただ。

……年上なのになあ、僕って。

「すごく残念よねえ……せつかく病室を教えてもらったんだから、これからなるべく毎日来ようって」

「かがり。 毎日は遠慮してほしいと言ったよね?」

「だからなるべくなのよ?」

何が「だから」なのかはさっぱり。

「お見舞いしたりして響ちゃんの外でまた会える日が来るのを楽しみにして待つつもりだったのに、ここを退院したらそのまま外国でしよう？ 簡単にはお見舞いできなくなるのね……」

まあ学生じゃなくても気軽に海外にお見舞いなんか行けないよね。

そのための海外に行くって言う設定なんだ。

「そういうわけなんだ。 だからこそさつき言ったように次こそが本当のお別れなんだ」

「……お別れ……ひびきと」

「ゆりかちゃん、大丈夫？」

「……ん。 もう……平気」

少しだけ泣きそうになっていたゆりかも、もう元通りになりつつある。

ぱつつんの下の目も口元も……見た限りではまた泣き出しちやいそうな気配はなさそう。

「……少なくとも、あちらでの検査を待つのに数ヶ月。 下手をするともっとかかるかもしれない。 そういうのはどこかで聞いたことがあると思うけど、とにかくいきなり行ってもすぐに治療を受けられるわけじゃない。 そして、……治療を受けられて回復したとして、状況次第では……学校だって現地のものになるかもしれないし、あつちで暮らすことになるかもしれないんだ。 つまり。 ……もう、ここへは戻ってこない『かもしれない』んだ。 何もかも曖昧な状態で言うのも心苦しいんだけど」

「でも……それが、響のためだから。 なんだよね？」

「……うん」

「……そっか！ ね、響？」

今度は泣きそうにはならなかったゆりかが、ぱつと笑顔になる。

……気持ちの切り替え、いつ見てもすごいな。

女の子って本当に喜怒哀楽が激しくて変わるのも一緒。

……いや、今のゆりかは「僕を不安にさせないように」って、あえてそう振る舞っているだけなんだ。

こんな僕でもそれくらいは分かる。

悪いことをした気持ちだが、罪悪感というものがこみ上げてくる。けど、これは伝えなきゃならないことで。

さんざん言うかどうか迷っていた嘘についても、やっぱり言わないことにはいつまでも片付かないんだ。

だから、言えるのなら言えるうちにさっさと行ってしまわないと後悔する。

それが、僕が……前の僕から今の僕になって、どこにでも居て誰からも気にされないその辺の男Bだった僕がどこにでも居なくて誰からも気にされる幼女Aになって、身に染みて実感したことなんだ。

普通の人ならとくにわかっていないはずのことを、僕はようやく……こんな目に遭い続けて、ようやくにわかって実感したんだ。

ひとまわり以上に遅れてようやくに。

僕はようやくこの子たちくらい……中学生の精神年齢になったんだ、きつと。

「……そっかそっか。ひびき、とうとう病弱から海外治療っていうスーパーレアでワールドワイドな存在になっちゃったかあ。あ、もちろんちゃんと治るんだよね？」

「うん、きつと」

「なら暗いのはやめやめ、だね！ あ、あとありがとかがりんも。だけど勝手にそのでかいのを押しつけてきたのは許さない。脅威な胸囲の格差だ」

「ゆりかちゃんが元気になったのはいいのだけれど……大きいもの？
???」

「あ、ダメだ、この人ほんつと理解してない……自分の体が凶器だつてことをさあ。……響も大変だったねえ……こればかりは同情するよう。オンナでも意識しちゃうよねえ」

「……分かってくれるか」

「分かるよ……知識としては知っていても分からない辺りがマジかがりんなのよ……」

「??」

「んで。響がとうとう世界的なすたーになっちゃうのは、とーつて

も残念だけど」

「あちらだと僕はたいして珍しくもない見た目になるから、そんなことは無いよ」

「いやいやなに言ってるのさ、それ以外のところでも属性もりもりなクセして」

「……そうか？　かがりもそう思うのか？」

「そうねえ……多分？　響ちゃんって言ったたら響ちゃんってくらいだし？」

それってどういう意味なんだろう……くるんさんのくせに。

「……んー」

と、じつと腕組みをして難しい顔をし出すゆりか。

「…………ん——……」

ものすつごく考えてる。

なんだろ。

「……んー、それだったらさっさと言っという方がいいのかなあ……でもなあ……ん——……」

「あら？　ゆりかちゃん、何かすぐに伝えなければならぬこと、あつたかしら？」

「あ、いや、そういうことじゃないんだけど」

「あら、響ちゃんがいなかったときのこと？　たとえば秋にみんなで響ちゃんの代わりに遊びに行つて、あ、もちろん写真とかお土産とか取っておいてあるから安心してね？　うちにたくさんあるから今度持ってくるわね！　みんなが揃ったら見ましょ！　あとは学校での行事のこととか、あ、学園祭のことでもお話したいこといっぱいあって！　あとはね、あとはね？　みんなで響ちゃん大丈夫かしら、今どうしているかしらーって言い合ったりしながら、お泊まり会……2人ずつばらばらにしたりしたこととか？　あと、それともそれとも」

「————かがりん」

「!？」

「ひゅいつ!？」

ゆりかの声が冷える。
そんな感覚。

いつもより低いつて言うかドスが利いてるつて言うか……ゆりかが本気で怒ったときはこういう声になるんだつてのが病室に響く。
決して大声とかじやないのに響く。

だから僕までひやつとした。

かがりのくるんがへによつとなつていているあたり……たまたま僕からは見えないけど、どうやら顔つきもそれに迫っているらしい。

「今から私の話が終わるまで、お口チャック。いい？ ちゃーんと覚えた？ かがりん。1回しか言わないよ？ 破つたらさすの友達でも結構怒るからね？」

「はい……」

かがりが一瞬で黙るつていう奇跡が起きた。

そりやそうだ、怖いもん。

こつちに向き直りつ「はあ……」とため息みたいなものをつくゆりか。

「……べつつかがりんなら聞いててもいいからさ——……お願いだからお口だけは挟まないでね？ 話し終わるまで。ほんつと。

……私が響にきちんと、話したいことをぜーんぶ言い終えるまで。

……いい？ わかつた？ あんだーすたん？」

「……………」

「あ、返事くらいは良いからね？」

「……わかつたわよう……ねえ響ちゃん、ゆりかちゃん、ときどきこうして怖い。なんでかしら……」

それは仕方がないんじゃないかな。

きつと常日頃から何かしらやらかしてるとらうし。

「んじや、ここからはお静かに……んで、えつと。そんでね？ 響。

んー、せつかくだし今言つとかないと、次言えそーな雰囲気と、あと勇気とか？ そーゆーもんが揃うタイミングが来るかわからないから、も、言つちやうね？ 言つちやうよ？」

「う、うん」

「今だけはいつもみたい聞いてる最中に窓の外のちようちよとか眺めてないでね？」

僕、そんな不思議系って思われてた……？

否定できないけども。

ぱつつんの下からきらりと光る汗が見える。

「えっと、先に言っとくけど。……響にとっては迷惑かもだけど、てかたぶんそうなんだろーけど。でも、私にとっては大切なことで、これ言えないまま、伝えないままでお別れになっちゃったりしたら、たぶん、絶対後悔するから……ごめ、なに言ってるかわかんないかもだけど、聞いてくれる……かな？」

「……それはいいけど。少し息を整えた方が」

「……ん。ありがとう」

深呼吸を何回かしながら……走ったあとみたいに、ゆっくりと落ちつくのを待っているらしいゆりか。

そんなに大事なことってなんだろう。

「！」

がんばって口を閉じているらしいかがりと目が合った。

「!!」

なんか目が輝いている。

……がんばったままにできるかな、この子。

「!!」

見える。

見えない尻尾が千切れそうに振り回されてるのか。

……途中で話に突っ込んできそう。

多分来る。

そんな自信がある。

「……ふう。　　もう大丈夫かな。　　あ、いや、まだまだ緊張してるけど、でもこれ以上先延ばしにしたら、やっぱまた今度でつてなっちゃいそうだし……今言っちゃうね？」

「……うん」

そう言うと、ふっと力を抜いて……自然な感じになる彼女。

そうして——夏に、ゆりかの家で一緒に過ごしていたときとかにふとすることがあつたような表情で……口を開いた。

「実はね、響。私ね？ ……私は、関澤ゆりかは。初めて会ったとき……たまたま響、君と会って、一瞬だったけど顔を見て目が合った瞬間から……君のことが、好きだったんだ。たぶんね。……んで、今でも……けっこー、好き。 ……なんだよ？ 気づいてた？」

44話 彼女からの、告白 1 1 / 4

「？」

ゆりかが言った。

僕のが好きだって。

「……………??」

いや、理解はしているんだ。

僕が告白って言うのをされたんだって。

でもあんまりに突然なことで、そもそも僕はそんな資格とかなくって、だいたい本当の年齢が10くらい離れているって言うかそもそも今の僕でも幼い上に女の子なんだしどうして今言うんだとかでぐるぐるしてるんだ。

「……………」

顔がちよっとだけ赤くなっていて目元の感じが柔らかい感じになって、さつき泣いてたから目じりも赤くなって……普段は絶対に見ることがない彼女の様子を見れば、いくら僕でも理解はできる。

でも感情が追いつかない。

……追いついてもどうすればいいんだっていう気持ちもあるし。

僕と大差ない見た目で普段が普段だから無意識に小学生くらいだと思いがちで。

そんな彼女が今はなんだか別人みたいな雰囲気。

僕が初めて目にするような……これまでの人生でも見たことのない感じのそれ。

りさりんとかとじゃれ合っているときみたいに、あるいは冗談を言うときみたいに……体をわざとくねくねさせてほっぺに手を当てるみたいなことはしていなくて、ただただ僕を見つめている。

「……………」

ゆりかは、静かに僕を見つめている。

……僕の反応を待っているんだろうか？

いや、そうなんだろうけど、そうだとわかっているんだけど、でも。

でも、僕のことを……異性としてか同性としてかは置いておいて、中学生らしい恋愛感情って言うのを抱いている……らしい。

けどゆりかは……かがりとおなじように自分じゃなくて周りの子のそれとか物語の中の恋愛っていうのを楽しむ傾向があつて、だからこそゆりか自身のそういうのを口にするっていうのは想像したこともなかった。

……僕だつてずっと、ゆりかのことを、かがりみたいな女の子らしい女の子とは違って、もつと……どっちかっていうと小学生の男の子相手にしているようなそういう感じで接していたわけで、つまりは完全に予想外で。

女の子っぽい感じなんてぜんぜんしなかった……いや。

この顔が、この表情が、この目が。

女の子の……恋心っていうものを込めたものだったのか。

そう言えばそんなこともあつたな、って感じにほんの何回か見たことがあつた。

この、ちよつとばかり普段とは違う雰囲気か「女の子」だったんだ。ときどき……2人で居るときたまーにしている不思議に思っていたこれが、まさかそうだったなんて……しかもそれを向ける相手が僕だったなんて。

分からない。

僕には恋愛のことなんて全く分からないんだ。

だから混乱する。

25にして初恋すら未経験なんだ、今後もしんなことはないだろうって思っていたから。

今は幼女だからそういうのとは絶対に縁がないって無意識で思っていたから。

頭がぐるぐるしてくる。

久しぶりに顔を合わせて安心させて「この後に僕が居なくなってもそんなに心配しないでね」って言うだけのつもりだったのに、いきなりゆりかが変なことを言い出したんだ。

いや変なことって言うのは失礼なんだけど、でもかがりならともか

くゆりかがこういうことを当事者として言い出すなんてなんだか不思議すぎる感覚だから。

「……………」

いや、冷静になろう。

誰かが僕のことを好きになるなんて……人としてならともかく恋愛の意味でなんて、そんなことがあるはずがない。

だって僕にはなんにもないんだ、そうだよ、あり得ないんだ。

今の僕はこの通りにこんなに小さいし心は男で体は女なキメラだし、友達にしても家のことを一切に……肝心なことは誰にも言えないんだし、なにもかも普通じゃなくてすべてが嘘まみれなんだよ？

だからきつと違うはずだ。

だったら……つまりは逆だったり？

「僕のことを実は苦手だったんだ」とか「嫌いだったんだ」とか言っているのを、そんなかなりショックなことを言われた僕の脳がとつさに真逆の認識をしたとか？

だからゆりかには実は僕をそこまで友人とは見ていなくて、こんなめんどくさいことにもなっていてあんな迷惑をかけたんだ、こんな僕とは「いい機会だし……」って距離を置きたいとか？

よし今夜は吞んで忘れよう。

さすがの僕でも面と向かって嫌いですって言われたらしよげるに決まってるから。

「おーい、ひびき。戻ってこーい。多分また全然別なこと考えるよキミ」

「……ゆりか？」

「うむ、私がゆりかだ。そして君が響。まずはOK？」

「……うん」

「あとちなみにコレ、告白シーンね？ 他の何物でもなくってきちんとしたヤツ。他意とか含みとか企みとかからかうとか言い間違いつとか相手間違いとか聞き違いとか、そーゆーベタなのないからね？」

「……ゆりか」

「ひびき」

「君は僕の考えを読めるのか？」

「……ほんつと、普段はどこその名探偵って感じに頭いーのにどーしてこーゆーときはダメなのか」

「どうやら読めたわけじゃないらしい。」

「まあそうだよ、もし読まれてたら僕が幼女になったニートでずぼらな成人男性って分かるもんね。」

「よし、こんせんさすってのは取れたね」

「……そうだね？」

「でもやつぱりおかしい。」

「何かが間違っている。」

「人間的魅力なんて皆無な僕にどうして、まだ未来のある少女の彼女が。」

「……こうして気がついたらゆりかがずいぶんと近くに来ていて目の前で手のひらを振っているんだし、さっきの考えで正解かも。」

「でも、もしそうだったとしたら……10年以上ぶりに友達って感じられる……年下だけど、さらに言えば女の子たちだけど、そんな子たちができたと思ったら相手の方から「距離を置きましょう」って言われたんだとしたら、僕は。」

「ほいっ」

「!？」

目の前でばん、と軽く両手を合わせられて意識が引き戻された。

「……たしかこれって猫だましとかいうものじゃ。」

「今度こそ戻って来た？」 響。いつもみたいに思索にふけるのは話聞いてからにしてちょ。なにげに緊張してるんだからさ、私も。」

「告白って、する方は死ぬほど恥ずかしいのよ？ いい？」

「あ、うん……」

ふう、とため息をつくときとベッドの端にぽふつと腰掛けて、少し頭を傾けながら見下ろしてくるゆりか。

「……やっぱ1回言っただけじゃ通じなかったねえ……さすがは響。」

「ま、知ってたけど？ だって響、別のことを考え出すときとーに返事すること多いし。あと視線がその辺のテキトーなものをふら」

つき始めるからみんな知ってるのよ?」

バレてた?

よくかがり相手には使っているオートでの会話っていうの。
ちらりとかがりを見てみる。

「?」

すつごく楽しそうな顔してるけど、やっぱりくるんってしている。
良かった、彼女にはバレていないらしい。

「で、さ? 改めて……はつきり言うしかないかあ、これむっちゃ恥ずかしいんだけど、でも響だしねえ……いい? 私の言う『好き』は友情のとかじゃなくて、もち恋愛的な意味。だって私は響が男の子だってはじめっから思ってた、んで半分は事実だったんだし問題ないって分かったし。……ま、女の子でも多分……言っただろうね。そんなときはもつと言うの迷っただろーけど……つまりはライクではなくラブよん。本気でガチの」

うん、さすがにここまで言わせたらもう誤解の余地はないよね。

というか最近の子って進んでるんだね……ああいや、僕が子供のころからたまにクラスの子がそういう話してたから多分僕に縁がなかっただけで昔からそうなんだろう。

「……とりま何か返事ちょうだい?」

「……え、えつと。まず君は、あのとときの僕の……年越しのときのあのとときの、僕が。心は男だけど体は女だっっていうことは理解しているんだよね? あと面倒なことをこれでもかど抱えているっついうことも」

「あ、そっち……響らしいかあ。うん、それも込みですよ? もちろん」

なんか脱力してるゆりか。

なんでだろ……最重要な大前提を確認したのに。

「だってさー、あのとときもそうだったけど……てゆーかめつたにフリー外してくれないからわからなかったけど、でも今ならこーして」
ゆりかが被さるようになって……いつものかがりみたいに……手ぐしで僕の髪の毛の先の方をすき始める。

「長い髪の毛だしまつげ長し、綺麗っていうよりはもはや美しいって感じ。んで私よりも幼い系でクール系な女の子なんだよね……体の方は」

「……まあ、な」

なんとなくで僕も、いつも視界にちらちら入ってくる横の髪の毛を指に絡めて目の前に持ってきてみる。

「……それ！ほんつと、どーやったらそんなナチュラルな感じの髪の毛が生えるのか……光に当たってるとなんかプリズムみたいなのが浮き出てるし、ほんとなんなのさ！ ずるい！ 羨ましい！ やっぱり生まれって大切……」

「ゆりかの髪も綺麗だと思うけど？」

「………そういうところ……」

「？」

「……なんでもない！ で！ そんな響けど、私、ついこないだまではそーだつて知らなかったからさ！ はじめっからちっこい男の子だと思つて、いや、思い込んでいたの。私には年下属性あんまなかったはずんだけど……人生つて分からないのよ」

ゆりかも肩の方から髪の毛を引っ張ってきて、それを僕とおんなじように持ち上げて陽の光に照らしている。

黒髪が、陽に当たつてるところだけ少しだけ茶色っぽくなつている。

「だからさ、男の子だつて思つていた以上……年間くまでは小学生だつて思つてたから、よっぽどのがなきや仲良くなれないだろうし、ほら、さすがに小学生相手だと世間体がーとか以前に接点皆無でしょ？ でも同じ年だつて……学校通つたら同じ2年だつて知つたから。——会つたその日からずっと、うすうすこういう気持ちがあつたんだからさ……こうして本気で好きになつちやつたとして、仕方ないじゃん？」

いつもだつたらもう片方の手でおんなじことをして「ヒゲ！」とかしそうなのに、そうする気配もなく、ゆりかは、ただただ真剣に僕を見下ろしながら語ってくる。

「……だって。 だってさう？ 初めて会ったときから……私が響のこ
となんにも知らなかったときからさ？ その。 ……気になってた
んだもん。 まさかのこの私がほんのちよっぴり、それもただの偶然
でこうなっちやったの。 あはは、こういうのってほんと理屈じやな
いんだねーって」

44話 彼女からの、告白 1 2 / 4

ふわりとゆりかが見下ろしてくる。

だけどいつものように身長差で見下ろされてる感じはしない。

ただただ真っ正面から……真剣に僕を見つめている。

「私ね。 私はね?」

そんなゆりかがいる。

「昔っから男っぽい性格だったんだ。 小学校までは髪の毛も短かったんだよ? 今からじゃあんま想像できないだろーけど、相当男の子っぽかったの。 だって髪の毛って……響ならめっちゃわかるだろうけど、めんどくさいじゃん? だから短くしてて男の子だってよく間違われたくらいにさ。 それはもー男の子たちと遊んでいたら女の子が混じっているってぜんっぜん気がつかれないくらい。 まー、声変わりとかもまだな時期だしさ、小学生って」

ぱっつんとは言え髪の毛は肩までである今の彼女からは……うん、確かに想像できない。

「けっこーな割合でさ、 中学になって制服着るまでは私のこと男だっでずーっと勘違いしてたご近所さんがいたくらいにはね。 あれはちつとばかし傷ついたなあ……んで、そんなちつちやいころからずっと、私は他の子……女の子たちとはズレているなっていう自覚もあつたくらいに、 違つたの」

やっぱりこうして自分のことを話すのってなんだか恥ずかしいんだろう、 頻繁に髪の毛をいじいじしつっ。

「だから当然髪の毛になんてきよーみなかったし、 外で走るのに邪魔にならないようにって理由でも短かつたんだし。 冬ならともかく、夏はねえ——……服装だつてシャツとズボン、 普段の響みたいな格好でさ。 『私は私のままでいいから、 せめて見た目だけは女の子らしくして』 ってお母さんとお父さんから言われなかつたら多分今でもだったかも。 『中学生になつたんだから、 せめてカッコだけは女の子らしくして、 お願いだから』 っでさ、 何かあるたびにものすんごく落ち込みながら言われてしゅしゅぶなのよ」

男子に混じっている女子、あるいはその逆の子だって……そういえばいた気がするな、小学生のころ。

そういう子たちとはなんだか波長が合ったからかそこそこに話とかしていた覚えもあるし。

でも僕にとつてゆりかつてそうは見えないんだけどなあ。

いや、もちろん話していると「ああそんな感じもあるよな」ってときはあるんだけども。

特にゲームとかマンガとかの話をするときには。

それもきつと「女子」って記号の男子よりは長い髪に女子の制服、スカートを身につけているからなんだろう。

ちやうど真逆の僕が良い例だ。

「最後まで抵抗あつたのがスカート。外に出る日はほつとんど履かなかつたくらいだからさ……今考えるとありえないって思うけど、とにかくそんな小学生だったの。つまりはついこないだまでつてことで。……だつてさ、休み時間とか放課後とか男子たちと校庭とか公園とかで走り回ったかつたんだし、しようがないじゃん？ ゲームするときだつてあぐらかいてたし。いやー、スカートで走り回つてたりしたら先生とか他の大人とか、なによりもお父さんがうるさかつたなあ……。んで言うこと聞いて素直にホットパンツ……あ、短パンにしてたらそれはそれでイヤだつて。めんどくさいよねえ、男とか女とかつてさ。別に好きなカツコしてても良くない？」

そう言いながら生地が厚くて長めな冬服のスカートをつまんでいる。

冬つてスカートだともものすつごく寒そうだな。

僕には耐えられなさそう。

いくら制服とはいええ、せめて冬くらいズボンにしてあげたらいいと思うんだけど。

いや確か「どれだけ寒くつてもスカートでがんばるっていうのが女の子なのよ！」ってかがりが言っていた気がする。

力説していた気がする。

なにがそこまで「かわいい」へ向かつて女の子を駆り立てるのかは

知らないけど、でもとにかく大変なんだなあ、女の子って。

「んでね、私……中学になってしばらくするまでは、とにかく話し相手とか遊び相手って男の子ばっかだったの。だって私、ゲームだってマンガだってアニメだって……それも少年マンガとかそういう系が好きなんだし。当然少女マンガとかが好きな、かがりみたいな女子たちとは距離が開くワケじゃん？ 話も合わないし。いや、合わせられはするけどね？ 別にそういうのが嫌いってワケでもなかったから……だからいつつもマンガの回し読みしたりゲームで対戦したり外で走り回ったりっていうのを続けていたんだ。ほんとうに……ギリギリでおとしくらいまでは、ね」

ばさ、とスカートから手を離し、はあ、とため息をつく。

「ま、わりと好き嫌いない方だからさ、女子ともふつーに遊んだりはしていたんだけどね。でもねえ、だんだんと……そーだね、小学校の高学年くらいかな？ なんかやたらとオシャレに意識しだしてだんだん態度も大きくなっていつて、仕切るような子たちが出てくるようになって。それからだんだんはつきりとグループっていうのができてきちゃってさ。響ならわかると思うけど、ひとことで言えばギャルっぽい雰囲気ってヤツ。ああいうのが出てきてだんだんと世知辛くなってきたのだよ」

僕には特にそういう経験がない。

それはきつと周りを特に意識していなかったからなんだろう。

だけど人の機微に敏感なゆりかには、そういうのがきつとはつきりとわかっちゃったんだ。

それも同性のだしな。

女の子は男よりも早熟だっけ言うし、だから小学校高学年くらいからすでに多感な時期だ、思うところもあったんだろう。

「で、そーゆー子たちがやったらと男と女ってヤツを意識しだしてさ、それがだんだんとクラス中で学年中で広まっていつて……まー、他のガッコ出身の子に聞いたりしたら別にそーゆーこともなく平和に卒業してきたっていうのもけっこういたしさ、たまたまなんだろうーけど。でも、私のところはそーだったの。だからだんだん話し合わ

ない子が増えてきて、放課後まで付き合う子っていうのが、だんだんと減っていった」

ふう、と息をついているゆりかからちらつとかがりを見てみると。

「！」

……ものすごくそわそわしている。

「!!」

もちろん体を揺らしたりはしていないけど、でも、その……表情が「話したい話したい話したい!!」っていうので満ち満ちている感じだし、なんだか力がみなぎっている感じ。

だけでもそれを懸命に抑えているのは偉い。

ちよつと、いや、かなり感心しているくらいだ。

後でゆりかの話が終わったら褒めてあげよう。

かがりには忍耐の経験が必要だろうからな。

「話したくても話さないでいる」っていう経験が。

今この瞬間、ここまでガマンできているっていうこと自体が奇跡みたいなものだろう。

言いきすぎかな？

いや、正当な評価だろう、きつと。

「んでね、中学に入って顔ぶれががらつと変わってほとんど知らない子ばかりになったわけだけど……最初から男と女に完全に分けられちゃっててさ、今までとぜんぜん違うもんだから。ほら、制服からして別々だし、小学校のころと違ってなんだかみんな『女子は女子、男子は男子と話すもんだ』っていう雰囲気になってたからさ？ あ、いや、ギャル系はいないからそのへんは楽にはなっただけだね」

ぱつつんをひと房持ち上げて、ぱさりと手放して。

「でも、運が悪かったのか……多分大抵の女子がある程度異性として意識してる男子がいるっていう環境になっちゃったからなんだろうけどもさ。前までの調子で男子と話したりしてると急に遮られたり割り込まれたりすることが多くなって。『あ、これ、話しちゃいけないヤツだ』って相手が増えちゃってさ……やー、今思えば危なかったわー、女同士のいろいろが怖いって今なら知ってるから……良い子

で助かったわけ。今でもその男子と絡みさえしなけりやフツに仲良くやれるくらいだし」

これだけまとまった話をしていたから疲れてきたのか、持ってきたジュースをぐーっと飲み込むゆりか。

「!!」

その隙に話し出そうとしていたかがりへ目配せ。

「ちゃんと意図を理解して、くるんがしゅんとしているかがり。

偉い。

後で撫でてあげよう。

かがりもこうやって「ダメなものはダメ」っていうのだけは理解できているんだよな。

ただそれを我慢できなくて、それで「自分も自分も！」って止まらなくなるだけで。

いや、それが問題なんだけども。

あと話し出すと人の話も合図もまるで無視、いや、気がつかなくなるのも問題だ。

ついでに言えばごそごそとカバンの中からお菓子を……まだ持ってきていたのか、を取り出すのも問題だ。

こういう割と、いや、女の子としてはとっても真剣な話をしている最中で……もちろん音は静かにしていはするけども……でも話を遮っていないでお口チャックができて、ただその1点だけは評価できる。

ほんとうに。

……ゆりかとかがり。

足して2で割ったらちようどよくなりそうだ。

心も体も。

「肝心のさ、話が合ってマンガの展開とか推しのヒロインは誰かとかだったりゲームの話とかで盛り上がる……話してもいい系の男子たちでさえ、つまりはその、小学校のころのギャル系たちとおんなじで色づいて来ちゃってさ？ まあ中学になっちゃったらしようがないよね。放課後に教室に残って話したりするとみよーに意識され

ちやつてねえ。だつてその、目つきとか雰囲気とかがちよつと、ほら……変わるじゃん？ そーゆーときつて。もう何回もそーゆー女子見てきたし、察せられちゃうのよ。私の……えつと、ないムネと会話してたりして笑いこらえるの大変だつたりしてさ」

「飲む？」つてペットボトルを出されたけど、丁重にお断りだ。

だつて甘いもん。

「……ちい、せつかくの間接が。ま、甘いからしよーがないかあ。

で、そーゆーところが違うんだよ、響は。ま、そのへんはもーちよつと待つてね、もー少して話、終わるから。せつかくすつごく恥ずかしいことしてるんだから最後まで言わせてね？ そのままお口チャックよー？ かがりん？」

「っ！ っ！」

ごくごくごくくくとすごく反応しているくるんさん。

「うん……さつきから響がお口チャックさせてくれたの知ってたけどね。

あとちよつとがんばつて？」

同い年からもこの扱い。

うん、いろんな意味で安心だな、かがりは。

44話 彼女からの、告白 1 3 / 4

ゆりかからの堂々とした告白。

それが少しだけ途切れた静寂が……少しだけ離れたところ、かがりのお口の中でもぐもぐしている音で少しだけ邪魔されていて、だけど僕にとってはちよつとばかり心強い。

……といふかなんでゆりかはかがりがいるような……静かにしてこそいるけどいつガマンできなくなるかわからないような子がいる状態でこんな大切な話をし出したんだろう。

だって、分かっているはずなのにな。

かがりがこういう……恋愛っていうもの命っていう感じでいつも過ごしていて静かにできなくて、話すことと食べることが大好きな子だっていうのが。

まあ結果的にはこうしてまだぼりぼりって感じのくぐもった音が聞こえてくるし、くるんくるんしてはいるけど……おとなしくはできているからいいのかな？

……あ、そっか。

僕が、初期の僕が女子とのコミュニケーションみたいな本を漁ってたときにあつたあれだ。

女子は告白でさえ……漫画とかで本当にあるみたいに親友とかを連れて来て立ち合わせる。

あれか。

あれだな。

僕にその感覚はぜんっぜん分からないけども、そうだと理解してみると理に適っている。

そういう意味ではゆりかも男っぽいつて自分で言いはするけど女の子、なんだな。

「で、これで最後。 だんだんといろんな理由で減っていった話し相手とか遊び相手……私がいちばん楽しいって思えるシユミが好きっていう相手がね。 いなくなつたんだよ。 トドメが来たの」

「いなくなつた？」

「うん。……今度は男子側の問題でねえ」

「いなくなつた」つて聞いて少しびっくりしたけど物理的にというわけじゃない。

当たり前のことだつて分かつていても、こういうのつていきなり言われるとびっくりする。

「前だったらなんにもなかったはずの、フツーに友達やれてた子たちがさー、おんなじ話題で盛り上がれて休みの日とかには誰かの家とかでゲームとかして遊べたその子たちがさー。もちろんほとんど男の子だったわけだけどさー。……思春期つてやーね、急にみんなよそよしくなつて距離取りにくくなつてとげとげしてくるんだから。あ、今ひびきにこくはくちゅーの私もか。まいっか、それはそれで」

とげとげ？

「んでね、男子たちと……今まで遊んでたよーな子たちと放課後にちよつと遊んだりしてるだけで、たったのそれだけで意識されちゃつてみたいでね？ 私がいちばんどーでもいいつて思つてたような女の子つていう属性で。『なーんかたまに変な感じになるなあ』つての感じるようにはなつていたんだけどさ……私としては同性の？ いや、私が男子寄りだからもち『男の子の友達』つて思つてた子とかがさ、いきなり告つてきたりしてね。それもそんな気配まるでなかつたじゃんつて子たちからも立て続けに……あ、響もごめんね？ たぶん今の響もそのときの私とおんなじような感じだろーけど、せつかくだから最後まで言わせて。お願い、ね？」

「……もちろん」

「ありがとう。そういうところも……好き」

そう言われて反射的に目を逸らした先。

「!!!」

くるんくるんしているかがりをちらつと見て落ちつけた。

でも……目が、彼女の目がものすごくらんらんとしている。

くるんがくるんくるんくるんくるんくるんしている。

体が前のめりになつてつま先立ちになつて、そして口の中と手元が

空っぽになっている。

……そろそろ限界そうだな。

終わるまで持つんだろうかこの子。

「そーゆーのが何回かあるときさ？ 私としては当然その気がなかったわけだし、必然的にその、お互いに距離が開くワケじゃん？ 告白して、してもされても以前の関係には戻りづらいワケなんだし？

……っていうのも覚悟の上の今なんです、はい。ま、それは話し終わった後のひびき次第ってことで。で、そうこうしているうちに私とおんなじような話題で楽しめる子っていうのはほんの一握りの女子だけになっていって、その子たちともあんまり話せなくなっちゃって。だって、次々と色づいて来ちゃったもんだからさ。

なーんで中学になった途端こうなのかねえ、ほんと」

ふう、と息を吐き、すう、と吸って。

「結局ね。 去年の今ごろ……いや、もうちょい後か、まではね。りさりんとかの、ふつーに性格とかが合って少しだけマンガとかゲームとかそーゆー話題にもついてきてくれるような女子しかいなくなってたの。や、ぼっちとかそーゆーのじゃなくなって学校でフツーに話せる子ならいたよ？ いたけど休みの日とかに遊べる子が減ったってこと」

去年の今ごろ。

つまりは1年前くらい。

—— あるいは確かか、かがりとゆりかにはじめて会ったのって。

「……重くなっちゃったけど！ けどね!! あ、あとかがりんはもちつと我慢してね？ これからが大切なところだから!!」

!!!」

ゆりかがぐ、つと指でサインして、かがりがすっごく嬉しそうな顔をしながらおなじのを突き返して。

さすがゆりか。

真横にいて顔を見ていなかったとしてもくるんくるんしていたのを察していたか。

「てな感じでさ。

去年の春休み……あ、もうすぐだよね、今年のも

……は、そーゆーモヤモヤしたのとか、あとはそれまでみたい友達
んちで1日中ゲームとか……まー、りさりんとかもできたけど、で
もやっぱなんかちがうし。あ、これりさりんに言っちゃダメよ？
すっげー怒られそうだから。んで『せっかく時間があるから』って
いつもみたく宿題だけ先に終わらせてから、ワゴンでまとめて手に入
れてきた古ーいゲームとかかしてたの。古い機種とかパソコンの
とか。ちようどたまたま安くなってたギャルゲーっていうの、暇つ
ぶしにね」

ギャルゲー。

この子たちの年齢どころか僕の年齢的にも古いジャンルのそれ。
ゆりかがよく話題に出していたっけ。

僕は全然したことがなかったからあんまりついていけなかったけ
ど、よく「この中ならヒロインはどれがいい？」とか聞かれていたっ
け。

「で、そのギャルゲーなのだよ。当時は結構流行った感じの、今やつ
てもそこそこおもしろくってヒロインが多くって、っていうタイトル
の。ちつと調べれば私だってなんとなーく知ってるって感じのさ。
そのの、あるタイトルの……ある子のルートを進めてて、お腹が空
いたけどお母さんいないしお金はもらってたしでお昼に出て、その先
で——まさかの、つい昨日今日で攻略中にあつたようなシチュまんま
な場面と、ヒロイン……じゃなくて男の子だからヒーローだよな。
そう、会っちゃったんだよ。出会っちゃったんだ」

そうしてゆりかは「ふへっ」ってあいまいな笑顔を浮かべつつ、僕
がなんとなく察したその続きを口にする。

「今思えばさ？ 性別は反対なんだけどそのお相手が君なんだ。つ
まりは君が、私にとつてのヒロインだったのだよびびき。あのとき
のかなり混んでたお店で『知り合いじゃないのに相席にさせられ
ちやう』っていう、これまたゲームであつた場面そのまんまでね。

もつとも響はそれ、忘れてたらしいけど……思い入れもない他人だつ
たんだから、しよーがないよね」

「……!!!」

とうとう両手で口を押さえだしたかがりが視界の隅で震えている。
ステイ。

そういう目を向けたら、こくんと輝く瞳。
精いっぱい我慢しているんだろう。

えらいね。

でもここで邪魔したら間違いなく大変だからね？

僕のせいで2人が友達止めるとか気まずすぎるからね？

「いかにも事情抱えてます的なカツコ。ま、お肌が弱いつてゆーのと、あとは多分この前聞いた性別の件のせいだつていうのは今だから知ってるんだけどね。でもあのときはね……私よりも小さいから小学生かなつて思ってた。そんなくらい小さくて顔もほとんど隠れてて、だけどなんでか知らないけど目立つててそのときお店に居た人たちから見られてた響。実際に、一瞬だけど見ることができた、ものすつごく……なんていうのかな、美しいって感じの顔」

小学生……いやまあしかたないんだけど。

「そんな子から『食べきれないからいる？』つて聞かれて、全然食べてない……ゲームの料理とは違ってポテトだったけどそれをもらって、食べているのをちよつとだけど見つめられてさ。それって、そのついで何十分か前まで進めてたルートの子との出会いの場面そのものだったんだよね。だからなんていうかその、舞い上がっちゃって。まー落ちついてみれば実際にはシチュ、細かいところがいろいろと違ったのよ。響と連絡取れなくなってなんとなくでプレイしてみたら、けつこー思い違いしてて。だけどそのときの私はそれはそれはもう嬉しくなっちゃつてさ。あ、勘違いしてたの寝不足だったつてもあるかも」

ポテト。

ファストフード……ハンバーガーのセットの。

あのときの食べきれなかったあれ。

重い荷物に耐えきれなくなつてたまたま入つたあのお店の。

捨てるのがもつたないからつてなんとなくであげたあれ。

——でもどうして僕はあのとき『見ず知らずの小学生にも見えた子

のゆりかにあげようって思ったんだらう?」

「いやー、あのときはほんつとう舞い上がってましたなー。だから私あのあと『ついに妄想を具現化したぞお!』なーんて同好の士っていう感じの友達に連絡しちゃった。あ、りさりんのことね? だつてりさりん実はギャルゲーとかいける口だし……ま、もちろんお返事は『ちゃんと寝なさい』だったけどさ」

前の僕から今の僕に変わった、あの日のあの朝の次の日。

事実を確認するために家を出たその日に、今の僕になつてすぐに――出会っていたんだな。

「でもさー、やっぱ第一印象ってなかなか消えないよね? あと美化されるし。 てなわけでそれからもずつと……そのゲームをクリアし終えて続編とかまでやって学校生活が始まつちやつて。 んでなんとなくそのゲームのそのキャラ……あ、この子もまた響そっくりなんだよねー、ギャルゲーだから女の子だけ。 その子によく似てて出会いがびっくりするくらいなタイミングだった響ともあのお店に行つても当然に会えなくつて。 だんだん忘れかけてただけ……そこで2回目!」

びし、つと指を突きつけてくる。

「悪い人たち……じゃ、なかつたんだよね? だけど響が困るくらいに……いんな感じですか? 悪い人たち……あ、ゲーム中だと『特殊な事情を抱えてるその子』を連れ去ろうとしていたヤツらなんだけどさ、ともかくそーゆー場面に遭遇しておんなじようにして助け出せて。 ほんつとあのシナリオのあの響似のヒロインとピンポイントでおんなじ場面を体験しちやつたからさ、いやー、そりゃーもーもつかい舞い上がったね、舞い上がりましたね、このときはまえのときいじよーに!」

語っているうちに……まあ内容が内容だしな、顔が赤くなつてきていてうつすらと汗が垂れてきているゆりか。

「ぐーぜんだつて思ってたけど、それも2回も立て続けに起きればそれは必然とか運命じゃん。 そー思っちゃったのだよ。 だつてあのころはまだゲーム消化し終えてなかつたからさ、つまりはギャル

ゲー思考に染まってたわけで。 んであのときにどさくさで手を繋いで引つ張ったりして、響が私の妄想なんかじゃなくってちゃんと存在する人なんだって確かめたりもしちゃったし！ 私よりも小さくて、でも話してみたらまさかの同級生で。 ……これで私は、もう。それから、これまで……変わっちゃったと思っていた、みんなに。心の底では恋愛脳ってバカにしてたみんなに、追いついた。 追いついちゃったんだ。 ……もしかしたら私って、みんなより少し遅れて思春期になったのかもね。 そんな感じ」

44話 彼女からの、告白 1 4 / 4

「やー、あんどきはほんっと、舞い上がっては落ち込んで忙しかったのよー。響が本当の存在だって実感するまでさー」

大みそかの……僕があんな風になる前のときのように顔が真っ赤になっていて、走ってきた後のようにぼつぽつと汗がにじんでいるゆりかがヒートアップしている。

「ここまで来たら言いたいこと全部言わせちゃった方が良いな」って思っただけで黙っておく。

かがりが邪魔し出したらおしまいだね。

「だからさ、響にとっては迷惑っていうかうざかったかもしれないしそうだったんだろうけどさ？ かんっぜん私ったら『響を攻略するんだ！』って沸いちゃってさ……だからああしてがんがんメッセージ送ってとにかく私のこと知ってもらって、ついでに響のことも教えてもらって仲良くなれそうな話題を探ったりしててさー」

それが、みんなの中でも飛び抜けて多かつたメッセージとかの理由。

どうでもいいようなこととかゲームとかアニメとか好きな芸能人とか、とにかくなんでも……今思えば手当たり次第に脈絡もないような会話。

あのかがりでさえまだ一貫性があったくらいだからな。

……そういうことだったのか。

ただ話し好きで、友達みんなと朝から晩までやりとりしていないと気が済まないタイプの子なんだって思っていた。

彼女たちの授業中とかに「だるい」とか「ねむい」とか送ってきていたのもあつたくらいだし、適当に流し見しちゃっていたんだけども……そっか、そういう感情があつて、だからこそ僕を知りたくって、知ってもらいたくって。

「そーゆー状態がしばらく続いてさ、返ってきたメッセージとか眺めてたら……あることに気がついて、んで自己嫌悪。だつてさ、これじゃあさ……小学校からなんとなく雰囲気変わってきてやだなーっ

て思ってた子たちとおんなじ思考回路じゃんって、気がついちゃったから。私、そーゆーのとは違うんだって思ってた、だからこそもやっとしたまま過ごしてたっていうのはさっきまでのとおりなだけで、だからこそこう……ずばっと心に来ちゃったんだよ。なんてゆーか、その……気がついちゃった。私、内心バカにしてたって。そういう子たち。そのバカにしたみんなと私も結局はおんなじで、ただ私が……そーゆーのに目覚めるっての？ す、すっ……好きな相手を見つuckerのが遅かったっていう、ただそれだけなんだってさ」

僕もそういう気持ちは分かる。

みんなよりも気がつくのがだいぶ遅れていて、だからこそみんなからは何年もずれて、遅れて気がついたようなことってたくさんあるから。

「……ふう。ま、それもしばらくはスマホ越しのやりとりで満足してたんだけどね。なんだかんだでときどきは会ってくれてたしき？ だけど問題はかがりんよ……話聞いたらすでに響とおんなじくらい前から知り合ってたって仲良かったってことで、ちよつと焦ってきちゃったのよ」

実際には、ほんの1時間くらいの差で知り合っただけ。

たったのそれだけだったんだ。

前の僕が今の僕になってから30時間も経っていないときに僕はこの子たちと。

「あ、静かにしてくれてありがとねーかがりん。けど、もーちよい我慢できる？ ……ん、ありがと。でき、響のことしか頭になかった私にとって、私以外の……それも同級生の女の子の知り合いがいていろいろでつかくて男の子好きな感じのかがりんで、さらにさらに言えばこれまた私とおんなじように一緒に買い物とかカフェとかでデートしてたりしてたって聞いて嫉妬ってヤツしちゃったんだ」

「？」

我慢できているのはえらいけど、このへんになるとあまりピンときていない様子のくるんさん。

このへんはやっぱりくるんさんだなあ。

なんだか見ていて安心する。

普段から恋愛もの、飽きるほどに飽きずに貪っているのになあ。

「まーね、響にその気が……今でもたぶん、いやほとんど絶対になんていうのはもちろん理解してるけどさ？　でもね、そのときは……響といっつも距離が近くって頻繁に手とか肩とかでくっついてる事が多くって、響もそれを嫌がってなくって。だから私。まーそりやもー焦るよねえ、そんなの見ちゃったらさ。私、遅れてるって。かがりんはまだ『先越されてて響が落とされそう！』って相談したりさ。そんなときに焦っていろいろ恋愛もの読んだりしたら、これってまるで恋する乙女そのものじゃんって気がついて、これまた自己嫌悪して。で、それもさらに恋愛脳そのものだってわかっちゃって2度ダメージ受けちゃってさ」

とうとうハンカチを取り出してこめかみを軽く拭いているゆりか。そして隣ではものすっごく楽しそうな顔をしてわくわくしているかがり。

「ふいー、一気にしゃべると疲れるねえ。けどせつかくだしあとひとこと話させて？　ここで言い終えられなかったら……その、困るし。で、そのあとは私なりに……参考文献、かっこ主にギャルゲーとマンガかつことじだったけど、そーゆーので必死に響に近づこうってがんばった。『かがりんとそれだけ出かけてるんだから私とだって！』とか言っつて連れ出したりしたし……ってか、あるとき本当に外で病気悪くしたりしないでよかったよねえ……。あと、小学生以来に男の子を部屋にまで上げたり。これ、ものすっごく覚悟してたんだけどね。だって、ねえ？　意識してる子連れ込むってヤツじゃん？　まー、響はちっちゃいから思ったよか緊張しなかったし、それに響だし多分心配なんて必要ないってわかってたからできたんだけどね。お母さんだってまさか私が……言っちゃ悪いんだけど、小学生、年下に見える響を意識してるだなんて想像すらしてなかったみたいだし」

くるんが収まらなくなってきた。

荒ぶっている。

「あ、あれは焦ったなー。あ、あれってのはかがりんが。恋敵だつて勝手に思い込んでたかがりんが響を交えてのお泊まりしようとか言い出したりしたときには、めっちゃ、ね。だからこそ、それからほもつともつと距離を詰めて響に意識させてその先に行こう——そんなこと考えながら夏休みを終えたワケなんだけど。そこで響が……入院しちゃった。それも、いきなり」

冬眠。

僕がこの世界に居なかつた3ヶ月。

「なんとなくそうかもとは思ってたけど、でもショックだった。だって急に既読もつかなくなったし、休み明けの最初のおやすみの日に約束してたところにも来なかつたし。……嫌がられるって知ってたから控えてた電話もダメになつてたし。もちろん病気関係だろーってのはわかつてたけどさ、でもそのときの私はね、もしかしたら響に……私視点ではかなり強引に迫ってたせいで嫌われたんじゃないかって思つてもいたりいて」

ふう、と、息を吐き出して。

「でも、ずーっと嫌われたかもって落ち込んでた秋も冬の初めも……クリスマスするときの響からの連絡で一気にどーでもよくなつて。でもいざ会つてみたらものすんごく具合悪そうで、つらそう。でもでも、これからまた会えるようになって、あと私を嫌ってじゃないうつていうのをきちんとわかつて『じゃあこれからまた、少しずつ近づこうかなー』なーんて思つてたら……今度は響が女の子、あ、いや、女の子だけど男の子で、男の子だけど女の子でつてのを聞いて。あ、のとき、みんなと話しながら頭の中はぐるぐるしてたけどさ？ 『響がたとえ女の子のカラダ持ってたとしても、中身が響自身が男の子ならこの気持ち、持ち続けていいのかな』……そう思つてたら急に血を吐いて倒れて。だから、頭の中は完全にぐちゃぐちゃになっちゃつて、あ、のとき私、なんにもできなくなつて。改めて響がどんだけ大変なのかってのを知つて、でも今日無事な姿見られて、でも今度は……きちんと治すために遠くへ行く。そう聞いたから……言っちゃつ

た」

ゆりかが話し終えてしんとする病室。

ゆりかはほつとした顔をしていて……あ、だんだん顔がさらに赤くなってきたいるな、後ついでにそわそわしてきている……かがりはゆりかのその顔を見て……あれはコイバナというものを話しているときの顔つきだから、まりはものすごく興奮していて、今にも爆発しそうな雰囲気だ。

どう答えていいかわからないしどつちかが何かを言い出しそうだから待ちの姿勢でいたら、先に声を上げたのはゆりかだった。

「……はっず！　これマジではっずい！！　なにこれなにこれ、告白ってこんなにくっばずかしいもんなの!?　いや資料ではさんざ知ってたけど！　むしろその場面を見て喜んでたクチってかそれが楽しくてギャルゲーとかハーレムものとかプレイしたり読んだり見たりしてけど!!　いやこれマジびっくりするくらいはずいよ!?　一気に話してるときはまだマシだったけど！　いや途中からはふんばってたんだけど、でもでも息は苦しくなるし汗かくの止まらなくなるし話そうって思ったことよりも勝手に口が動いてなになんだかワカメになってたし!!　ごめんね響！　あと静かにしてくれてありがとうかがりん！　でも私、自分アニメとかマンガとかで主人公に恋してるヒロイン見れないじゃん！　だって今のこれ思い出しちゃうし！　あ——もう！」

「ぬうう」とか「なああ」とかよく分からない悲鳴を上げながら僕の足の元の布団に顔をうずめるゆりか。

それが彼女なりの誤魔化し方なんだって知ってるから黙っておく。

……って言うか、これ、ここからどんな返事とかしたら良いのか分からないし……ほら、僕って経験ないから……どうしよ。

45話 彼女からの、告白 2 1/7

「あー恥ずかし。 もー恥ずかし。 やんなっちゃうくらい恥ずかしいねえ、告白つて。 イヤ、ほんつとマジで。 ……こんなのマンガとかギャルゲーとかのヒロイン特有のカワイイのを見るための演出だつて思つてたけど、いぎこうして体験してみるとわかる！ カオ真つ赤になつてたりもじもじしてたりひやーとか言つてたりしてるの見て悶えてたクチだけでも!! めっちゃわかるコレ、すんごいの! ……あ、コレしばらく、いや、もしかしたらけっこー先までギャルゲーでヒロイン攻略とかヒロインが一途な作品とか厳しいかも。 うあ———……」

ひととおり言い終わるなり僕から顔を背けつつベッドから腰を上げて歩いて行つた先の窓を開け、外を見るようにしながら背を向けているゆりか。

「ふいー」とか「にやー」とか、いつもどおりな感じの奇声を上げている。

あれはゆりかが悶えているという状態なんだろうか。

たまにこつちをちらつと見ては「やんっ!」とか言つてくねくねしているし、一見普段通り。

けどこんなことを考えている僕もまた、知識とかでは知っていたけどそれを直接僕自身に向けて言われるのは初めてなわけで、つまりは僕もまた動揺しているんだ。

そんなことを言つてもらう資格なんて、権利なんて……僕にはないのね。

けども、答えられないのはしかたのないことだけでも、それでも返事はしないと。

ゆりかにとつても僕にとつてもちゆうぶらりんになつちやうから。

「……ゆりか」

「ひゅやいいいっ!? ……あ」

……いきなり声をかけた僕も悪いけど、それにしたつてどんな声

……どっから出たんだろ今の声。

初対面のときにも奇声上げてたけどもこれほどじゃなかった気がするし……聞かなかったことにしよう。

「……うわこんな声出るんだ、私の口から。マジ恥ずかし。今日1日で何年分の恥ずかしさなんだコレ」

そう冗談っぽくは言ってるけどもさつきからの真っ赤な顔は変わっていないし、僕からは触れないであげたほうがいいだろうな。

「えっと、まずは……その、僕のことを」

なんか気まずい感じが薄れたから口を開く。

……これを見越してわざとおどけたのかな。

「性別のこととかをきちんと言っていないなかつた僕のことをそこまで好意的に想っていてくれたのが……とても嬉しい。嬉しいんだけども」

「嬉しいんだけど」……なんて言おう。

なにか言わなきゃやって思ってたどりあえずで話しかけてみたけど、その先が出てこない。

だってこの歳になって……今までが今までだったわけで当然ながらこんな経験なんてないし、つまりはどう断ればいいかなんて……かがりに勧められて読んだりしたマンガや本でもこういう場面に興味がなかったから流し読みだったし、今までだってそもそも興味がなく触れてこなかったからどうすればいいかなんてさっぱりだ。

でも、受け入れるっていうのはあり得ない。

僕はそもそも別の人間の姿になっているわけで、ゆりかはこの体に入っている僕が……好きになつたわけで。

同世代って言い張っている幼い体と……元の僕の体とじゃあ全然違う。

いろいろと受け入れられる理由がない。

僕自身もそういう感情を解していないんだし、断る以外の選択肢はないんだ。

僕を好いてくれている、つまりは人として好きで、さらにそれより先の好きって言うわけで、しかも男として……同学年として好きって

言ってくれるその気持ちは嬉しい。

それくらいは僕だって感じられる。

「うおーい、ひびきや、戻ってこーい」

「……あ、うん」

「いーのいーの、それもまた込みで……えーい、恥ずかしいついだ、今日は遠慮なんてしねえ！ ……それも、響の……み、みりよくつてヤツなんだからさ……あ、やっぱ恥ずかし。 ……こほん。 でさ、響。 今のね、答えなくてもいいからね」

「……え」

「今のは告白。 そ、コクハクつてやつんだけどさ、どっちかかっていうと気持ちの、私の気持ちをきちつとしておきたかただけの告白つてやつだから、あんま気にしないで？」

「……ゆりか、それはどういう」

「えつとさ、だって響、もうしばらくしたら遠いところ行って、あの言い回しなんだか不吉っぽい？ なら物理的に私たちと離れちやつてさ、それも当然……月単位、年単位なんでしょ？ で、恋愛つてさ、現実には遠くで続けたとしても……その、直接触れ合わないと。 あ、やらしい意味じゃなくてね！ あ、ごめ、私なに言ってるんだろ、今のはナシナシ！」

うん……まあ中学生、それも女子ならそういう知識もあるよね……。

少し気まずかったから、両手を突き出して顔と一緒にぶんぶん振り回しているゆりかから目をそらしてみる。

「……」

……ものすごいにやけ顔をして恋愛ものを読んだり語ったりしているときの。

いつもの表情をしているかがりと目が合った。

「……」

ふいつて目を逸らして元通り。

この子の今も見なかったことにしてあげよう。

だつてくるんくるんくるんしていたし。

「で、話戻すけどそういう……いろんな意味で遠いところで想ったままだったり、もしも……ほんつとーに万が一で受け入れてくれたりしてもそれはそれで大変なわけだね？　もちろんお互いに。それに、年単位とか中学生にはつらいよ。下手すりゃ次会うのとか高校生になつちやうかもだし。だからさ、せめて。答えはいらぬからせめて私はずっと感じてて……多分もうしばらくは持ち続けるだろうーこの気持ち。好きだってキモチ。これだけは……響にとつては迷惑かもって思ったけど、でも伝えておきたいって思っちゃったから。身勝手でごめんね？」

そう言いながらいつものように雰囲気を悪くしないための笑顔を始めたゆりか。

……そんな彼女の顔を見た僕の片手が勝手に上がって、僕の口が勝手に開く。

「いや、君の好意なんだ、身勝手っていうことはないよ。それだけは絶対にないんだよ、ゆりか」

「え？　……あ、あう」

「それは人としてとても大切な気持ちなんだ。少なくともそれを言った君と言われた僕が言っているいい言葉じゃない。身勝手なんかじゃない、大切な言葉だよ」

「……そーゆーこと、さらって言うから、もう……」

なんか心にズキってきたから「告白は悪いことじゃないんだよ」ってことを言いたかっただけなんだけど、変な感じになっちゃった。

「……うふ、うふふふふ……」

ゆりかはまた赤くなり直したし、かがりからはとうとう奇声が上がった。り始めた。

もう持たなそう。

「……ありがとね、響。あ、あとねあとね？　響が良くなるの、良くなって走り回れるようになって背も伸びて、大きくなれるまでのあいだ……たぶん何年も覚えてなんていらぬだろうけど、でも、少なくとも本格的に治療っていうのを始めてから2、3年。あ、いや、そりゃあ私だって短いほうがいいって思ってる、願ってるけどさ、長く

なる可能性だってあるわけじゃん？ だからさ……少なくとも、今ここに」

頬に少し赤みか残っているけど……普段のゆりかの、ほんのちよっぴり笑顔が浮かんでる表情になって。

「ここにひとり。私、関澤ゆりかかっていうひとりの女の子がこうして、響のこと……事情があってもなくても、私としては男の子だって思ってる響のことを好きな私、っていう女の子がいるってこと。それを覚えておいてくれたら、あっちに行つてつらい思いしても少しははげましになるんじゃないかなって、そう思つたのもあるの。」

あ、もちろんこれはついでだけど本気だからね」

……多分そのためになんかわざわざ告白なんてしてきたんだろう。

それくらい……僕にだって分かる。

こんなに年下の女の子なのにこんなに年上の僕が思いも付けない形で勇気づけてくれたんだ。

……そっか。

これが、本当に嬉しいって言う感情。

海外での治療っていう嘘の言い訳を聞いて、信じてくれたから。

「あー死にぞ。 もー死にぞ。 恥ずくって……んがー!!」

恥ずかしくて死にそう。

……うん、分かる。

だって僕も……さすがにこれだけの好意をぶつけられたら……顔くらい熱くなる。

はたしてこれは顔に、表に出ているんだろうか。

ゆりかは絶賛悶え中だしかがりはそれを観察するので精いっぱいらしくって、ふたりとも僕の方を見ていないからわからないけども。いつも雰囲気を明るくすることに忙しくって、でもそれを楽しんでる彼女が突然にこうして長々と……一気に僕のこととゆりか自身のことを語ってくれたのには、僕を……重い病気を治療するんだって思っている僕のことを心配してのことで。

実際にそれに近い感じになるのかもしれないだし、確かに不安な気持ちはあつたんだ。

これからについての決心を固めたときから。
けど今ので少しは楽になった気がする。

……これが、友達。

仲が良くて大切な人から言われる言葉。

今まで考えもしなかったこと。

前の僕のままじゃ多分死ぬまでそういう機会がなくて、だからこそわからずじまいで終わっただろうこと。

そして今の僕になってとつても大変だったけど、でも冬眠も入れてもたったの1年足らずで……前の僕のままだったら適当に過ごして終わっていたはずの1年っていう短かった時間で、僕は。

たくさんのことを、手に入れたんだ。

この後どうなるのかわからないけど、でももしも……いや、連絡はそのうちに取れるかもしれないんだから文字越しにでもこの子たちがこれからどうやって成長していくのかを知って……直接会わない以上にはだんだんと疎遠になっていく、それまでは。

もしも……とつても運が良くって再会できたとしたら、その成長っぷりを見て……また、一緒にこうして話せるかもしれない。

そういううって良いなって気持ちだが、あのときすでに僕の心の中にあったから。

「あふ。少し引いてきたかなってかがりん近いよ離れてっ!? なにしてんのてかなにその顔超こわいんだけど!!!」

「あら……ごめんなさい……でもね、でもゆりかちゃん、響ちゃんが。うふ、うふふふ……」

「……ひびきー！へるぷみー!!」

……ゆりかが抱きしめられてはぐばくされて悲鳴を上げている。

感情を抑えられなくなったかがり。

そんな彼女と彼女に抱きつかれたゆりかを見て、ちよつと笑いがこみ上げる。

……彼女もまたきつと、僕にとっては大切な友人なんだろう。

45話 彼女からの、告白 2 2 / 7

「ちよ、だからいい加減離れて……も——……」

かがりをやつとのことので引っぺがしたらしいゆりかが荒い息をしている。

うん……かがりって結構力あるもんね……振りほどけないの僕だけじゃなかったんだね……。

「あーあ、ガマンできててえらいなーって思ってたらこれだよ。でもあんがとね、ここまで口挟まないでくれて」

ゆりかの口がひくひくしている。

目もちらちらと僕へ助けを求めている。

あのすっごい笑顔を至近距離で見たら、そういう反応になるよなあ……。

わかる。

すぐくわかる。

だって着替えさせられたあとすぐっていつもこんな感じだから。

それも着替えるたびにだ。

ああなっているかがりは半分トリップしているようなものだから別に放っておいても害はないんだけど、ひたすら耳元で何ごとかをささやきながらほっぺをすりあわせてくるから怖いんだ。

「……かがりはもう少し離れようか。ゆりかが落ち着かないって言っている」

「んー、しょうがないわねえ」

そう言うおちゃんと離れるかがり。

聞き分けが良いのも僕的には良い子って感じ。

「……それで、ゆりか」

「んう、なんだい響や。おはなしはもうおしまいよ？ なるべく覚えたいほしいなってだけ、だから答えとかは要らないって」

「いや」

「ふい？」

僕の半分くらいしか生きていない彼女が、こんなに小さな女の子が

……今の僕の方がちっちゃいけども……ここまで言ってくれたんだ。
「僕には」

きちんと応えなきゃいけないんだ。

それがたとえ先延ばしのものであっても。

「恋愛的な感情とか、そういうのはよくわからないんだ。だからその気持ちに応えることはできない」

「……………」

初めて見る……ゆりかが泣きそうな顔。

「……そ、そうだよね……わかってるってばさあ、だからさつき予防線も」

「だけどね、ゆりか」

この歳になるまで……学生時代というものを一応は経験してそれなりの人と接して、それからそこそこ生きてきて。

それでも僕にとって誰を好きになるとかいう気持ちは……純粋に人として好きだっていう気持ちなら叔父さんとか飛川さんたち、あるいは近所の話し好きのおじいさんたちみたいに抱いたことはある。

……でも、話に聞くような、恋い焦がれるという気持ちは今までいちどたりとも抱いたことがないし、それに囚われたこともない。

だから多分。

下手したら一生このままなのかもしれないけど、でも、これだけは伝えておきたいんだ。

「ゆりか。僕はその気持ちが、とても嬉しい。きつかけがどんなものであっても見た目がどんなものであっても、僕を好いてくれて……それを僕に向けて言ってくれたのが、嬉しい。そうした気持ちを僕に抱いてくれたこと、それ自体がとても嬉しいんだ。……この先にながあつたって、僕は今の君の気持ちを忘れないよ」

「……あら。あらあらあらー」

「……………」

たとえにながあつても……この先二度と会えなくなったとしても、みんなといて楽しかったっていう気持ちと一緒に、ゆりかのその気持ちを受け取ったっていうのも思い出としてきちんと閉まっておきた

いんだ。

ゆりかのぱつつんの下の目を、改めてじつと見る。

陽の光が差し込んで茶色っぽくなっている、その目を。

「もし未来で。たとえそれが近くても遠くても……僕が、君が僕に持つてくれたような気持ちを理解したら。頭で理解するんじゃないくてきちん和理解したら、たとえそのときに僕や君に別の……好きな人というものができていて、あるいは結ばれていたとしても」

まあ多分そうなるんだろうけども。

だって人は1年でこんなにも変わるんだから。

「たとえば君が僕に対するその気持ちを薄れさせてしまっていたとしても、懐かしい記憶になっても。僕が理解して再会したときには……今こそこんなにとっちつかずの僕だけど、きつと、今の君の気持ちに対しての答えを絶対に届けるよ。『あのときはありがとう』って」

◇

……僕が返事をしてからしばらくのあいだ、部屋はずつと静かだった。

ゆりかもかがりも身じろぎもしないでただただじつと僕の方や手元を見つめていて、さつきまでのが嘘のように静かになっていて。

話に夢中だったから今まで聞こえていなかったような、いつもの……入院してからいつものになっている、廊下の外から聞こえてくるアナウンスの音とか廊下で歩いている音とかそういうものが聞こえるようになって来たくらいには静かになっている。

けども反応がないな……ちよつと変だったかな。

僕だつてとっさのことだったからきちんとした答えにはなっていないなかつたと思う。

だけど、それでもこうして目の前で話しているとそこそこの話の筋が通っていないくたつて意図がちゃんと伝わるんだつて、この子たちと触れ合つて知つたんだし……多分問題はないはず。

目の前で、手と手が触れ合う距離で話しているとなんとなく分かれることがあるつていうのを、この歳になつてようやく知つたんだ。

「……………」
それにしても静かだ。

普段からこうだったら毎日でも来てくれていいのって思うくらい。

そんなゆりかはいつの間にかそっぽを向いていたらしい。

一方でかがりも……なんだかぼーつとしたような表情。

かがりはいつものことか。

なにかしら変なことを考えているんだろう。

どうでもいいか。

「……………」
素晴らしいわっ!!!」

「!？」

「お、おう？　かがりんや、まずは落ち着こ？」

「静かで安心するなー」って緩み切った心にかがりの奇声が刺さる。

毛穴がぶわつと開く感じがする。

本当にびっくりした。

君、ここが病院だって忘れてない？

僕が入院してる設定忘れてない？

「……………」　まさかまさか私が！　現実で！　目の前で！　それ

も、お友だち同士が！」

あ、これ止まらないやつ。

「マンガとかドラマとか映画とかでなく本物の愛の告白！　それも、

それも……情熱的な告白と紳士的なお返事という場面に思ってもみ

なかつたわとつても嬉しいわすごいわ涙が出てきちゃうわだって今

日今この場でふたりに立ち会えただなんて私感激よ!!!」

「すげえ………一気に言いおったよ」

すごいよね、この子。

「……………」　かがりんならそー来るわな。　知ってた」

この子に耐えられる君もすごいって思うよ。

僕は無理。

心臓弱かったらショック死するくらいだもん。

そんなかがりは……思いつきり勢いをつけて立ち上がったせいで

イスが倒れそうになって、慌てて後ろへくるんとして……なんとか大きな音を立てずに済んだ様子。

「あ、よかったねかがりん、立ち上がってイス倒してド派手な音出さずにすんでさ。……ま、かがりんはかがりんだからね、恋愛命なんだしこーなるのは知ってたよ」

「あらそうなの？ ゆりかちゃんさすがね？」

これ、わからないで適当に返事しているやつだな。

詳しいことを説明するといつもなるやつ。

わかっているからきちんと言明しないとくるんくるんしたままになるやつ。

……だから少しでもわからないことが出てきたらすぐに考えるのを止めて、なんとなくて流すクセをどうにかしたほうがいいんだって夏休みのときにあれほど……。

……さすがに高校生くらいには治るよね？

治ってくれないと僕が心配だ。

この子の将来が不安すぎて。

やっぱこのまま残ろうかなって思うくらいには心配。

「そんなにはじてるのに最後まで黙っててくれたかがりんマジ天使。……だから途中でもしやもしやしてたのは見逃したげる」

うん、そうだよね……友人の告白の場面でおかしもしやもしやするって相当の度胸だよね……映画でポップコーン食べてる感覚だったんじゃないかな。

「でも思ってた通り、告つてとつてもはずかっただけど。でももうひとりこの場にいるってだけで、そー意識してただけで……ときどき音が聞こえてたおかげで、ちよつとはマシだったかも。今だからわかるけど、響とふたりつきりだったら私、途中で止めたりチキンしてたかもしれないし」

「チキン？ あら、そういうえば響ちゃんは普段どんなご飯をここで」

「かがり、ゆりかの言うチキンは恐らく食べもの話じゃないよ？」

「ぐう」と鳴るかがりのおなかの音が抗議している印象。

……この子を同席させてよくもまあ無事に終わったものだ。

本当に。

奇跡的に。

何%の奇跡なんだろう。

小数点以下？

「んで、響」

「……何？」

今はどうでもいいかがりのことは置いておいて、ゆりかだ。

ふわっと髪をかき上げて……あ、汗かくとそうしたくなるよね、涼しい風が入ってきて汗が乾く感じになって。

「さつき『けっこー好き』って、なんだかめっちゃくちやにあいまいな感じで言っただけだよ？ あれが今の私の本音なんだよ」

「本音……？」

「……??」

「そ、本音。　ても響と私たちには『時間』ってゆるーものが、タイムリミットがあるわけじゃん？　海外に行っちゃうってゆるーとんでもないの。　だから『今しか言う機会ないな、ならついでに私の気持ちみんな言っちゃえ』ってなったんだけどね。　でもさ、そもそも私さつき言っただけで響に会う、たった1年前までカラダこそ女の子……いちお、かがりんよりは思いつきしひびき寄りのお子さま体型だけだよ……だけだよ！　そののでかいのさんとは比べものにならないけどさ!!」

「落ちつくんだゆりか。　女性の魅力は顔や体じゃない。　心、精神。

価値観、人そのものだよ。　……少なくとも僕にとってはそうだから無闇にそう悩まなくてもいい」

「嘘」

「僕が1回でもかがりに抱きつかれて鼻を伸ばしたことあった？」

「あ、ないね。　むしろ飼い主に頬ずりされて嫌そーな顔してる感じだった」

だろうね。

「……どうして私がそこで出てくるのかしら？」

「………響」

「今度は何？」

ゆりかが脱力している。

「……ひよつとしてこの子のせいで今みたいになつてる？」

「元からだけど否定はできないね」

「……男つて性自認、だっけ？ あるのにないすばでーに抱きつかれてもあの顔だもん……大変ね」

「ゆりか」

「はいよ」

「君は、精神年齢がはるか下の男子から下心無しに抱きつかれて男性的魅力を感じるか？ じゃれつかれてそう思えるか？」

「うん……そうだね。 私が男だったとしても……あんなたわわがあつても無いねえ……」

だよね。

良かった、僕の感覚が正常で。

45話 彼女からの、告白 2 3 / 7

「……こほん。で、話戻すとだよ。去年までの私はかんっぜんに恋愛とかにはキョーミない感じだったし、オンゲーとかじゃ女って分かるめんどくさいから男で通しても違和感ないらしいくらいには男っぽいところ多いの。キャラクターとしての好きとかいう相手はみんな女の子だしねえ、今でも。美少女も美女も良いものなのだ」
さっきの続きが聞けるみたいって悟ったらしいくるんさんがくるんってし始めている。

「でもね? 私に響に……はじめてっからどきどきして、明らかに友情なんてもんじゃない気持ちを持つてるのはわかりきってたんだし、事実夏休みまでは本気でそーゆーモードになっちゃってたんだけどさ? なっちゃってただけど、でも今こうして……いろいろあつて、時間もあつて、少しアタマ冷えて、冷静になって考えてみるとね?

……これが物語とか友だちのノロケとかで聞くような、燃え上がるような恋ってやつ」

「お友だち!! ねえゆりかちゃん、それは誰のこと」

「かがり、人の話は最後まで聞こうか」

「そう言えばそーね!」

告白っていう、かがりにとっては大好物で……きつと、このあと何回も何回も思い出して何回も何回も人にどんどん盛っていきながら話すくらいには楽しかっただろう会話を聞き終わって、その感想を朗々と述べだしていたくるんくるん。

また話し出しそうだって思ったら「ほい」ってゆりかから渡された飴を……ためらいもなく口に放り込んでおとなしくなった。

……ゆりかが持つてきていた飴ちゃんでおとなしくなるあたり、この子本気で……。

「よし。でね、話は戻すけどさ、燃え上がるような恋ってさ? ……

私が最初っから響に持つてるこれって、ホントにそーゆーものなのかな? そー考えてみるんだけど、今でもまだはてななんだよね。

あ、もちろん好きだよ? 好き。まちがいなく好き。確実にらぶ

ではあると思う。けどさ、好きになってその相手のことしか頭になくなっちゃってどうしようもなくなっちゃうっていう。そういうものかって聞かれると違うんだよね。……ま、付き合ったりするっていう関係とかいろいろの想像してみたら響しか思い浮かばないし、そこそこは好きなんだろーけどさ。……あ、ごめんね響、告っておきなながらこんな変な感じで」

「ううん、程度のこととは置いておいて、僕のことを人として……男として好いてくれている。ただそれだけでも嬉しいものだから気にはしないよ」

「……………うにゃ……………」

……そう言えばゆりかって普段からいろんな感情、喜怒哀楽っていうものに。

わざとりさりんとかに向けておちゃらけて怒られたり……っていう意図して場の空気っていうものを変えたりできるくらいには人の機微に敏感な子だって知っていたけど、そんなこの子でも恋愛っていうもの、好きという感情についてはわからないものなんだね。

女の子という生きものなのに。

まあゆりかもまだ中学生だし、僕なんかさらに10年くらい生きてるのに女の子の一種である幼女になって……それでも好きになる感情を理解もしていなければ体験もしていないから言える立場じゃないけど。

「……ゆりかちゃん、そんなの気にしなくてもいいのよ？　響ちゃんが今言っていたように」

と、甘いものを口にしてころころとしているからか、いくらかは落ちついた様子のかかりが……普通に話し始めた。

「ゆりかちゃんのそれって、一目惚れっていう恋愛の基本そのものなのよ？　それに理屈なんてないわ。衝動だもの」

大丈夫？

その飴ちゃんでおかしくなっていない？

「だって好きって気持ちは女の子の、いえ、男の子だって自然と湧き上

がってくるものなのだから。その強さだって感じ方だって、人それぞれなのよ。それに、性別。響ちゃんの。それだって最初から異性として……いえ、たとえ同性だったとしたって、響ちゃんが心まで女の子だったとしてもよ？ そうして意識していたのなら、それを自覚していてもいなくてもそれは恋なのよ！ 最近は同性婚とかも認められてきているし、たとえ女の子同士のもそれでも問題はまったくないはずよ！ いえ、無いの!!」

途中で飴をカリッと噛んじゃったと思ったら急にヒートアップした。

「やっぱ恋愛マスターなかがりんもそう思う?」

恋愛マスター?

「この子、今まで恋愛とかしたことないって言っていたような。」

「それでね? さっきのゆりかちゃんのことだけね。ゆりかちゃんは響ちゃんのこと、出会った日からずっと考えていて『今どうしているんだろう』って考えていて。そして響ちゃんのことを……私は女の子だと思っていたし、お洋服や下着のこととか女の子として意識しなければならぬことを聞かれたりして、だからこそ女の子だと思っていたけれどね?」

多分君は僕が男でも着せ替え人形にしたって思うよ。

「ついこのあいだまでは私……響ちゃんのこと、いつもドレスとかを着せられて女の子らしい扱いをされすぎていて、それで男の子っぽく振る舞っていて……でも、でもやっぱりふつうの女の子に憧れている、ちよつと小さいけれどでも立派なレディーだって……あらごめんなさい、心は男の子なのよね」

「……そうするときどきで良いから配慮してくれるだけで嬉しいよ」

「ひびきー、そーゆーのはもつと強く言った方が良いつて思うのー」

「ともかくそれでね? ゆりかちゃんは、私が響ちゃんのお世話をするために触れていたりにして私を見て、嫌な感情、焦りや不安といったものを覚えていたのでしょうか? あ、お世話していたのはよく見ておかないとすぐに枝毛をほつたらかしにするし服がズレていたりするし、脚を開き気味に座っていたりして心配だったからなのだけ

ど……そうやってお世話をしている姿に嫉妬していたのだから、それはもう好きということなのよ」

……かがりがここまできちんと話しているの、滅多に……ほとんどない気がする。

「おおう、ダテに毎日恋愛もの読み漁ってるだけのことはあるねえ。すげえ、わりと考察がガチ……あ、でもさ、前にかがりんさ、『好きっていう気持ち、そうやってわかってはいるけどかがりん自身はまだ経験していなくてイマイチわからん』って言ってたけど、今はわかるん？ いや、ふと思っただけなんだけどさ」

「……あら。そう、ねえ……」

「ま、いいや。私もこの感情が、響に対するこのキモチが恋だって、好きだってはつきりわかったし。 てことで響、私は響のことフツーに……ってのも変だね、 けっこーじやなくて大分かな。 大分、かなり好きだよ」

「……うん、ありがとう」

大胆に告白し直すゆりか。

女の子ってすごいね。

もし僕が逆の立場だったらこんな風には絶対言えないもん。

「あとありがとね、かがりんも」

「ええ、いいのよ。だって……」

かがりが、さっきまでとはまた違う感じの変な顔をしている。

いや、それはいつものことだけど……かがりが口に出さないうで感情を頭の中でぐるぐるしているときは表情も一緒に動くんだ。

この感じ。

この子の保護者をしていた僕には分かる。

これは何かに思い至って考えて、喜んで落ち込んで、はっと気がついた様子。

「どうしたんだ？ またお気に入りシーンのシーンでも思い出したのかな」

「え、またって……こーゆーのよくあるの？」

「うん。みんなといるときにはなかなか見ないけれど」

「え、ガッコでもみんなと……りさりんやさよちんと集まってるとき

でも、こんなカオしてるの見たことないんだけど」

「そう？　よくしているよ？」

「おお、ここで衝撃の事実」

どうやら一応は無意識で制御しているらしい。

だって意識していたら今みたいにこうしてくるくる表情を変えたりはしないだろうし、学校で高嶺の花なんてものにはなりっこないしな。

いくらおしやれで話し方も意識してお嬢さまっぽくて、がんばってくるんくるんさせていても……肝心の顔がこうまで崩れていたらやっぱり僕と同じような印象になるだろうし。

けど、だったらなんで僕の前だけでこうなるんだろう。

いや、今はゆりかもいるけどさ。

……どうでもいいか、どうせかがりだし。

「……話が逸れちゃったけども、さっき言ってくれたこと、本当にありがとう、ゆりか。……そうだ治療を終えたときに、もしもの話だけでも」

「——わかったわ！」

「!?」

「かがりん、ここ病院、ここ病室、落ち着こ？」

「あのね、あのね？　わかったのよ！」

「分かったって何が……あ、なんかやな予感ちよいタンマ今言われたら」

「私も響ちゃんのこと、好きみたいなんだって分かったのよ！」

「はっ？」

「……ええ——……私が告った直後にそれ言っちゃう——……？」

45話 彼女からの、告白 2 4 / 7

「かがりーん……?」

「? どうしたのゆりかちゃん?」

かがりが変なことを言い出した。

かがりもまた僕のことを好きなんだって。

くるんもいい加減にしないとね?

いやさすがに聞いて即座に否定というのはよくないな。

いくらくるんさんでも何の考えもなしにそんなことを、かがりに

とっては一大事のはずの恋愛というものをそんな思いつきで言うは

ずがないじゃないか。

ないよね?

ないって思う。

ないかもね。

いや、疑わしい。

ただの思いつきかな……だって普段が普段だから。

「……かがり?」

「何かしら? 響ちゃん」

「うっそでしょお……」

ゆりかがものすごく凹んでいる……そりやあそうだ。

「?」

そんなゆりかを不思議そうにくるんってしているし、特に何かを考

えているような顔もしていない。

……まずは確認だ。

本人の意志って言うのが大切なんだ。

……もつともそれは一般的な人間の一般的な精神状態が大前提な
んだけども。

「かがり、落ちつこう……いや、目を覚ますんだ」

この子はよくトリップして錯乱する。

「ここは現実で、僕たちはこうしてここにきちんとして、実在の存在
で。そして今までの会話はすべて現実に起きたことなんだ。君

の白昼夢の中で起きた、少女マンガかなにかの一場面じゃないよ?」

「わかってるわ? 響ちゃん、少し酷いわよ?」

「もちろんただの確認だよ」

わかっているらしい。

ほんとお?

……ほんとしてことにおいてあげよう。

「かがりん」

「ひゃいつ!? ……なんで響ちゃんはともかくゆりかちゃんがそんなに怖い顔をしているの!?!」

え、本気でご存じでない?

君、休みの日は1日中少女漫画とか恋愛ものの小説読みふけってるって言ってた気がするんだけど?

今の君の立場はその恋愛もので言うのと立派な泥棒猫ポジションなだけで?

「今の。私がココロ込めてがんばったの。ねえ、がんばったんだよね? いくらかがりんでもわかるよねえ? 乙女の一大告白ってどんだけ大変なのか、恋愛博士なかがりんには。ねえかがりん? ……いや、下条かがりさん」

ゆりかがおっそろしい声を出し始めた。

やっぱり女の子って怖い……なんでそんなに急に気分を変えられるんだ。

一貫性というものがいいのか。

なかったなあ、そういえば。

だからこそこんなに苦労してきたんじゃないか。

「なんで急に丁寧に呼んで来るの? 呼び方が変わっているわよ? 何でそんなに怒っているの? 怖いわ?」

ゆりかは素が男っぽいからかかなりマシなほうではあるのに、それでもこれだからなあ……まあ今のは完全にかがりのせいだから擁護することすらできないんだけども。

うん、まあ僕が口挟む場面じゃないしなあ。

「もうっ、ふたりして! 私、ふざけたりなんかしていないわ!」

「それなら今のは何ですか下条さん」

「かがりつて呼んでちょうだい？ 今のだって思ったことがつい……
そう、つい口から漏れてしまっただけなのよ」

「ほお………へえ………」

この子のこういうところ、結局は治らなさそうだなあ……一応夏に
そういうことがあるたびに言ってきたつもりだったんだけど結局ダ
メだったかあ。

でも今回ばかりはさすがに見過ごせないしダメ元で言っておかな
いと……この先のゆりかとの関係すら危ういかもしれないし。
というか喧嘩になってもおかしくないもん。

ゆりかが一方的に我慢する関係って言うのもまたあとで拗れそう
だし。

僕のせいで別れた後に友達じゃなくなるのとか勘弁。

ほら、女の子の友情って男の取り合いで……とか言うし？

「その、かがり。今から言うことを落ちついて聞いてほしいんだけ
ど」

「なにかしら響ちゃん？ ね、ねえ、先にゆりかちゃん怒っているの
を一緒に止めてほしいのだけれど」

ゆりかに目配せをして「任せて」って伝えて怒りを鎮めておく。

「かがり。君はずっと前から……出会ったばかりのころからずっと
君は、恋愛ものことについて、あるいは友人のそれについて延々と
語ってきていたけど」

「あ、やっぱそーなんだ」

「うん。それはそれはもう」

「でもそれは……」

くるんがくるんつとなり。

「話が終わるまで我慢してくれかがり。 人の話はおしまいまで聞
く。 そうだろうか？」

「むう………はあい」

くるんがへによんとなった。

「ここまでしおれていれば少しは持つだろう……多分。」

「さて。 ……ゆりかからはたった今、僕へ……出会ったばかりのころから異性として意識してくれていたという話をされた……してくれただけども」

「うえへへへえ……」

あ。

今の照れてる声でちよつとどきつてした。

「……ばかりだけれども、それに横入りしてきたのが君なわけなんだ。それは恋愛って言うものを知識だけでしか知らない僕でさえルール違反だとは知っているよ？ ゆりかがこんなに怒っているのもそのせいだよ」

「響ちゃん、なんだか少し怖いわ？ もっと優しく教えて」

「で、だ」

いや、僕だつて叱るみたいなのはしたくないけどもゆりかの気持ちに収まらないからね？

それは君のせいなんだつて教えないと行けないからね？

「君は『好き』っていう気持ち自体を、ついこのあいだまで……あ、いや、夏休みの終わりくらいに君の家で聞かれたあたりまでは少なくとも知らなかったはずだよ？ だからこそああして僕に聞いてきたわけだろう？ 『好きってなんだろう』って」

かがりは恋愛のこととなるといきなり饒舌になって止まらなくなって、そればかりに意識が向いちやつて……そのせいで他のことがみんなおろそかになって、それでよく提出物とか宿題を忘れたりしたりして。

そういう欠点こそあるけども大事な「恋愛」について人並み以上に知っている、興味があるからこそこんな場面でふざけて茶々入れしたりする子じゃないと思う。

思うんだけどさ。

……あー、そっか。

告白っていう大好物な場面に当てられて「私も私も！」っていう気になつちやつただけなんだろう……だつてくるんさんだし。

……本当に君、中学2年なんだよね……？

発育が異様に良いだけの小学生じゃないよね……？

「そのとおりのよ響ちゃん！ 私、恋愛、恋心、好きっていうものがそれはそれはもう、一晩中でもお話しできるくらいなんだけれど！ あ、よかつたら今度ゆりかちゃんともパジャマパーティーで響ちゃんとのことについて語り明かして」

「下条さん。 また私たちに怒られたい？」

「もう、そうじゃないんだって！」

「……ならなんなんだ……まずは脱線しないように続きを頼むよ……」

「……ひびきい……その。 夏休みに勉強教えたって」

「……ここまでは大変じゃなかったはず……多分」

とりあえずかがりの本場のくるんさんぶりを見たからか、ゆりかの怒りは収まっているみたい。

それどころか僕に対する同情的な視線を感じる。

「確かに、確かによ？ つい先ほどまで、いえ、ゆりかちゃんの告白を聞いてそれが終わって響ちゃんの言うことも聞くまではね？ 私、好きって何かがまだ……響ちゃんからアドバイスをもらったあのときからずっとね、こう、なにかが喉から出かけているみたいな感じだったのよ」

ふむ、一応考えてはいたんだ。

「だけれどもね、その『好き』の少し前の段階。 恋愛もので言うて意識しだした段階。 ゆりかちゃんなら、響ちゃんと初めて出会った後の2回目までの時期になるのかしら？」

「え、そこまで細かく分かんのか？ やべえ、さすが恋愛マスター」

「ゆりかちゃんがそのあたりまできつと感じていただろう感情。 響ちゃんのこと異性、いえ、同性だったとしても……だって昔から女の子同士でも男の子同士でも好きになる人たちはいたんだもので、私、それを持っていたみたいなんだって理解しちゃったのよ。 つい数分前、ゆりかちゃんが告白したのを聞いていたときに」

「え？ マジ？ かがりんが？ 響に？ 冗談じゃなく？ え？ その様子だとガチで？」

「ええ。 私が響ちゃんに『恋愛ってどういうものなんでしょう?』って尋ねたときに言われたのよ。 好きになるっていうのは結果で、探すものじゃなくて。 すぐ傍にあつて、何かの拍子に好きだったって気が付くものなんだって」

「ほえ——……ひびき、そんな詩的なこと言ったのね……ひびきらしい」

受け売りなだけだね。

「でね? 私ね、あのときの言葉がずーっと頭に残っていて、だからどのようなおはなしを読んでも響ちゃんの言っていたことが浮かんできてしまつて。 だんだんと……いえ、初めのころは違和感があるとしか分からなかったの。 今まで大好きだった、普通の男の子と女の子の恋愛ものを……特別に好きだからって何度も読み返したようなものでさえ、あまりどきどきできなくなっていたりしたわ」

かがりの口が滑らかにあってペースが上がってくる。

熱が籠もってきたらしい。

「代わりにね、今まで『そういうものもあるのかしら』って思っていたような、年上の男の人とのロマンスのようなおはなし。 学校の先生とか執事さんとかとの恋愛もの、振り向いてほしい女の子が一生懸命に振り向かない男の子を振り向かせるというおはなし。 そういうものが好きになってきたのよ。 今までこんなことなかったのに気がついたらそうなつてしまつていて、『私、おかしくなつてしまったのかしら』って思っていたのよ」

「だけれどね、あるときに出会つたおはなしで分かつてしまったの。 男の子らしい……格好良くつて女の子に人気なタイプの女の子で、マンガとかでは他の子から『王子さま』とか呼ばれるような子。 そういう子と女の子らしい女の子との恋愛もの。 ゆりかちゃんがたまに話しているような百合というものなのかしらね? そういうものに1番どきどきしてしまうことに気がついたのよ! 私、そんなこと今まで全然なかったから随分と悩んでしまつたわ?」

「かがりんちよいと待って、分かつた、分かつたから。 もう怒んないから……せつかく私がかんばつて告つたのを」

「あのときはとっても悩んだわ！　だって私、これまで男の子たちに数え切れないほど告白されてきたのにもピンとこなかったのって、もしかして、その……女の子が好きだからじゃないかしらって。本当にそうなのか確かめようって、ゆりかちゃんにおすすめしてもらった百合というジャンルの中でさつき言ったような組み合わせのもの」

「おっふ、まさか布教できるって喜んでたあれが」

「そう！　読んでみたら、それはそれはもう！　本当にどきどきして……このときになって初めて、キャラクターたちの恋愛模様を楽しむのではなくて私がその女の子になりきって、格好いい女の子を見ている女の子になりきって、恋をしている気持ちを少しばかり体験したの。『ああ、こういう感情が恋なのかしら』って」

ヒートアップし過ぎたらしくるんさんは物理的に近づいて来ている。

「あれはたぶん……いいえ、今のゆりかちゃんの告白を聞いていて響ちゃんの返事も聞いていて、それではつきりと分かってしまったのよ！　実感してしまったのよ！　私、気がつかないうちに、きつと……お着替えを手伝ってあげたりしていたから女の子としか思っていなかった響ちゃんのうちの男の子というものに、知らないうちに惹かれていて、つまりは好きだということに」

「……やぶへびだったかあ……自分でライバル作り出したおバカな私です……」

「——でもね？　私のこれはゆりかちゃんほどではないと思うの。だからゆりかちゃんから響ちゃんを取ることはならないって思うわ？」

「ほえ？」

「だってね、今こうしてお話していて……つまりは告白になるのよね？　これって。　だって響ちゃんを見ながら響ちゃんのことを好きって言っているわけなのだし。　だけどゆりかちゃんのようにね、さっきのゆりかちゃんみたいにはどきどきしていないの。　もちろん少しはどきどきしているわ？　これが夜だったら眠れなくなる

くらいにはね？ もし今すぐにお付き合いたいお相手を選なければならぬなら響ちゃん以外には……学校のお友だちや先輩たちではなくて響ちゃんしか考えられないくらいには。だからこれはきつと、ゆりかちゃんか響ちゃんのことを『結構好き』なら、私は『少し好き』なんだと思うわ」

「……えつと？」

「つまり恋愛漫画なら私は意識し始めて枕に顔をうずめるヒロインで、ゆりかちゃんはそれから随分進んだステップで……何回かデートしたりしている段階のヒロインと言うことよ」

「あ、うん……詳細な分析ありがと……」

45話 彼女からの、告白 2 7 / 7

「ふふんっ、どうかしらー!」

ふんっと鼻息荒く僕の反応をくるんくるんしながら待っているが、

そして顔を覆ってふさぎ込んでいる感じのゆりか。

控えめに言って大惨事だったのは僕にだって分かる。

かがりが「早く早くー!」って僕の返事を待ってるらしいけど、じーつと見つめられるのは困るからちよつとだけ下のほうを見て……あ、陽の光が移動している。

そこそこ時間、経っていたんだなあ。

……思つてもみなかった。

ゆりかのそれにももちろんかなりびつくりさせられたんだけど、完全にあり得ないって思ってたかがりからまで告白されるだなんてね……どうしょ。

こんなにもちゃんと話せてたんだし……ただの思いつきと違ってあしらっちゃうのはさすがにひどい。

かがりのことは、今までずっと……ゆりかたちみたいにならぬに年相応にしっかりとした子たちとは違ってちよつと危ないところのある子……主に自分で自分をコントロールできないフシが多々見受けられて、なのにどうやら親御さんもそれをたしなめるどころか溺愛しているフシがあるっていう子で。

精神年齢だつて気づかいとかの面で、あと勉強とかを戦略的にこなせるゆりかかっていうちよつと高めの子と足して2で割ったらいい感じになりそうだって。

体つきとか身長とかもそうなんだけど、でもそんな感じの子だつて……今まではずっと、こうして話されるまでは思っていたんだ。

だけどそんな彼女も彼女なりに考えていて、ゆりかのを見て聞いて僕のことを……そう思っているんだつてはつきりと自覚しているのは真実なんだろう。

子供の成長は早いね。

ほんのきつかけですぐに、こうして変わるんだ。

僕みたいに成長期がおしまいになって……たとえば30になったって40になったっておじいさんになったってそんなには変わらないだろう僕とは違って、この子たちは成長期なんだ。

どう返事したものと考えていたら、ゆりかがびくつと起き上がった僕も少しだけびくつとなる。

「ぬーん、やぶへび。へびをつつついちゃったよう、かがりんの心をさ、最後のひと突きをさあ……よりにもよって私が、恋敵つてのを作り上げちゃったよお……どうしよ」

君には本当に同情するよ……僕相手であつてもライバルを自分でなんてね。

「マジかあ……マジなのかあ!! んもー、へんな雰囲気になつて告るの土壇場でできとーに流しちゃったり、そーゆーのがイヤだったつてももあるしチキンった可能性があるからつて……なによりさ、どーせ、どーせさ? 『いつかはかがりんにロックオンされて聞かれて自身の口から今のを再現させられるよりかはマシかな』なんて思ったのがまさかの失敗だったとは……あ、よく考えたら今みたいにかなーり再現度高い感じでみんなにも広められちゃうのかちくせう! なんてこつた!」

気がついたらさつきまでみたいにじーつと見てくるのを止めていて、話し終わって満足したからかぼわわしているかがりに向かって席を立ち、じりじりと近づいていくゆりか。

「ま、どーせ初恋つてのは初恋のまま甘酸っぱく終わるつて相場が決まつてるんだし、しやーないかあ。でも策士であると評判のこの私がしてやられるとはね。裏目だよ裏目」

ゆりかに気がついたのかどうかはわからないけど、かがりがぼわぼわから戻つて来て……表情がなんだか優しい感じになつていて。

「ふう。それで響ちゃん」

え?!

あ、答えだよね……一応告白なんだし。

でもどうしよ、ゆりか以上に答えにくい。

ゆりかに対してはなんだかすらすと答えられたけど、かがりの今の告白に対してはどう答えたらいいかまだ思いついていないんだ。

一応はきちんとした女の子と見ていた……まあ言動は子供っぽいところが多分にあるけど、それでも精神年齢的に女の子だって僕の無意識が感じていたゆりかと。

着替えさせてくるのと言いだれ回されるのと言いだ、僕ががんばらなと集中してくれない勉強や興味ない本の読書と言いだ話し出したら止まらないのと言いだ……手のかかる生徒って感じだつたかがりがいきなりだもん。

本当になんて応えたらいいのか思いつかない。

「これで、ふたり。ね？」

「？」

「ふたりの女の子……ゆりかちゃんに続いて私もね？ ……下条かがりという女の子まで響ちゃんのが大好きで、男の子として見ていて。響ちゃんが無事に元気になってお外を自由に、なんの心配もなく出歩けるようになって。そして『できるならこちらに帰ってきてほしいなあ』……そう思っている女の子がふたり、できてしまったわね？」

え。

……この子、まさかそのために……？

「くすつ、響ちゃん、学校に行けるようになったらそのかわいらしい見た目で『お姫さま』って呼ばれても、しばらくしたらきつとやっぱり『王子さま』って呼ばれてしまいうね。だって、こうして私たちの言葉を受けてもそうやっていつもの通りなんだもの。高嶺の花ね？」

いや、高嶺の花……の男バージョンはなんて言うんだろ。

「だからね、響ちゃん。例えあなたが海の向こうに行ってしまったとしても、遠く離れてしまっても、ここからこうしてあなたが元気になれることを心待ちにしている女の子……いえ、乙女がふたりもいるのだということ覚えておいてくれるかしら？ いえ、乙女ならあとふたりもいるのだから4人の女の子が、ね。響ちゃん、モテモテね

？　これで元気になれたら、さよちゃんに聞いたようなお薬やりハビリなどもきつと乗り越えられるわ！　だって女の子を4人も待たせているのだもの！」

「……かがり」

「ちくせうちくせう！　何さ何さ、せつかく告るついでにいいこと言っつてひびきを勇気づけてポイント稼ぎしたというに！　よりにもよつてかがりに後から全部かつさわれたよ！　トンビだちくせう！」

あ、うん……そうだよね。

君の告白の理由も聞いたけど、きつと無意識でだろうけどもそれを上書きする形で励ましてくれちゃったもんね……。

ずいぶん近くまで迫っていた……いつものように僕の目の前に迫っていた圧力のあるふたつを、むんずと両手でつかんで僕からかがりを引き離すゆりか。

「あら？　どうしたのゆりかちゃん」

「やつぱかがりんをフリーにさせちゃならんかったねえ。　それがこの結果だよ。　怒りのあまり、告るついでにダブルメロンってゆー武器をへーぜんと使ってるかがりんのこれをもぎたくなってきた。

もいでもいい？　もいでもいいよね!?　ねえ!?　もいでもどーせすぐに生えてくるんでしょー！」

「なにを言っているの……ちよつと痛いわ、手を離してちようだい？」

「いや、離さない。　ひびきの目の毒だしなによりもそれ超ほしい。

半分くらいは分けてくんない？　ねえ？」

ゆりかが暴走している……まあゆりかの告白つて言うのをダメにしたのもかがりの暴走なんだけども。

いや、かがりなりに僕のことを想っつて分かってるけど……さすがにゆりかの心情を考えちゃうと、ねえ？

「ちよつとセクハラは止めてちようだいゆりかちゃん！　どうしましよう、ゆりかちゃんの目が怖いわ響ちゃん、助けて！」

きつと、こうしてじゃれ合っているのも僕を元気づけるっていうのと……あとは多分雰囲気に戻すためのもの。

そう思っておこ。

なんかいろいろと台無しだから。

「なーんで動かすだけでこんだけすらいむみたく動くの？ これほんつとーに私とおなじムネってヤツなの？ いやおっぱいか！ おっぱいだなこれ!! ちくせう、私には存在しないものだコレ！ どーあがいても谷間つてもんすらできない私への侮辱に他ならないよかがりん！ いや、メロンとかスイカとかそんな感じのなにかを蓄えているばいんばいんよ！」

「そう言われるの、あまり好きじゃないから止めてつてばゆりかちゃん！ つて、ひゃんつ!? ちょ、ちよつと!？」

「重くて柔らかくて——…いいのう、持つものは。持たざる私にはけつつして持ち得ないものだよ。だから許されぬのだ」

「……もう、せつかく君たちの言葉で感傷に浸っていたのにどうしようもない騒ぎ方してるから覚めちやっただじゃない。」

「ふたりとも」

「なーに、ひびきん」

「なにかしら響ちやん」

ゆりかほかかりの胸を……制服の中に腕を突っ込んでかがりのを掴んでいるらしいゆりかと掴まれているらしいかがりが、それを忘れたような顔をしてこちらに振り向いてくる。

反応早いなあ。

やっぱりただのおふぎけか。

女子のそれって男子よりスキニシップ多いからなあ。

「そろそろ静かにしないと……隣室の人や病院の人たちから怒られるよ? 次からの面会、できなくなるかもしれないんだけども」

「ごめん」

「ごめんなさい……」

すつと手を引き抜いたゆりかと、その弾みで持ち上げられていたからか「とぷん」って音がする幻聴とともにひとはねしたかがりのそれ。

「あと君たち……告白してくれた以上は当然、僕の内面は男だって本気で思ってくれているんだよね? 男だって」

「あ、はい」

「え、ええ」

「つまり僕は男子。男子の前で今のようなことをするのは少しただけじゃないと思うよ。まあ僕は肉体的には女子だからそこまでの抵抗はないんだろうけども」

「……!!」

「あ、かがりん、顔赤くなれるのね」

「もうっ！ ゆりかちゃんひどいじゃない！」

「いや、告つたのに上書きしてきた泥棒猫にや言われたかないけど……」

お互いに怒る理由があるからか、さつきよりは控えめな声で言い合うふたり。

かがりは顔を赤くして胸を押さえながらゆりかを追い回し、ゆりかはぼかぼかと叩かれながらうろちよると逃げ回っている。

……こういうところは年相応。

年相応の女の子というもの。

……けど、多分子供の方がこういうのは素直なんだろう。

僕は……ふたりには気が付かれない程度に熱くなっているほっぺたを冷まそうって、開けてある窓からの景色を見るフリをしていた。

46話 彼の、準備 1 1 / 6

家もまた生きているらしい。

あくまで比喩表現だけど、そういうものをどこかで目にした覚えがある。

なんでも家っていうものは……本当かどうかわからないけど……人がしばらく留守にしているだけで変わるんだ。

木の匂いが強くなったりくぐもったような臭いが漂ったり、ほこりっぽいとかかびっぽい臭いになったり。

そういうものが強くなっていった、僕の家。

元旦って言うおめでたい日に血を吐いてイワンさんとマリアさんに頼った先で入院して、しばらく空けていたから。

……この家には20年以上住んでいる。

そのうちの15年ほどはずっと、1日のうちの半分以上を……まあ旅行とかでそれなりに空けたりはしていたけど……ここが僕のすべでだった。

だからそれだけのあいだ、ずーっと僕が住んでいたわけなんだけど。

「変わっちゃってたな……けほ」

もちろんその理由も、科学的な理由というものもまた知っている。まずは単純に換気してないから。

長期間家を空けるのなら絶対に窓なんて閉めっぱなしなわけで、だから空気が変わらなくて臭いが変わるといのがひとつ。

あとは……文化的にほとんどが石造りの家はどうなるのかは知らないけど木造の場合。

僕たち生きものから出て漂う、肌や息に含まれている油っていうものが壁紙や木の床、そういうものに吸い込まれたりして、つまりは僕たちが自然と吐き出す老廃物を吸い込んで……考え方はなんかヤダけど体臭を吸収して嗅ぎ慣れるような、「自分の家の匂い」になるんだとかいうのある。

らしい。

他にも理由があったと思うんだけどそこまで知りたいわけでもないし、ほんとかどうかわからない今みたいな理由でもそこそこに満足しているからどうでもいいや。

「やむっ」

こうして家の中へ……ほとんど1か月ぶりに入った家の中に入って窓を開けて、2月の空気を感じつつ……寒いけどちよつとだけ家全体の換気をしていながら感じている感想がそれだ。

しかし見事なまでに踏み台だらけだなあ……家の中のどこへ行っても必ず、今の僕になったばかりのときに仕入れた便利で必要不可欠なそれがてんとしてている。

僕が必要だったから用意したものではあるんだけど、最近は見えていなかったからなんだか違和感がある。

まあいいや。

冬眠、3ヶ月も意識がなかったときでもこんな感傷は抱かなかつたのにねって思う。

まああのときはそれどころじゃなくって、立て続けにいろんなことがあったからわからなかつたのかもしれないけど、あのときでさえここまで匂いっていうものが気になるっていうのはなかつた気がするのに。

不思議だ。

あのときは一応、僕の体自体は部屋にあつて最低限の呼吸をしていたからなんだろうって思う。

それに僕自身がずっと家にいたっていう意識もあつたんだろうなあ。

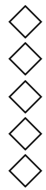
——それよりも時間がもつたいない。

時間はもう限られているんだ。

持って帰ってきた荷物を適当なところに置いて、買ってきたものを用意して。

じゃあ、はじめよう。

邪魔な髪の毛を後ろで縛って服の中にしまい込んで、僕はゴミ袋をばさばさって開け始めた。



画面の中。

ねこみみとポニーテールっていう目の前で座っているふたりがその中で歌って踊って間奏でアピールをして、もう1回おなじことを繰り返して……そういうのをちよつと見てたら数分間のライブっていうもののうちの1曲が終わった。

音が完全に止まないうちから拍手の音に続いて聞いていた人たちの声が反響して聞こえてきて、映像が止まる。

知らない人とかのそれとは違って、知っている人たちの……まあ今は目の前にいるからさらになんだけど……だから迫力があるというか吸い込まれるというか。

うん、応援したくなつて楽しくなる気がする。

これもまた不思議なもの。

「どうかな、響くん。それ、おとといのなの」

「……えへへ、知り合いに観てもらおうときつて、やっぱり恥ずかしいですにゃ」

顔を上げたら栗色のポニーテールさんと目が合つて、その隣を見ようとしたら……ぱつと背けられた。

ねこみみさんは恥ずかしがり屋さんだもんね。

横顔しか見えないから代わりにその上の黒いねこみみを見る。

……今日は触らせてくれるんだろうか。

それが重要だ。

さすがに1番じゃなくて2番目だけど。

でも触りたいし。

「えつと。……あまり僕はこういうの観る機会はないんですけど」

とりあえずライブつてのを録画だけど観たんだから感想だ。

だって本人たち目の前にいるし。

「すごいですねライブつて。おふたりの周りをちらつと映しただけでもこれだけの人が集まつて、光る棒とかを振つていて。もちろん

おふたりも……10曲以上なんですよね、通しで。それだけのあいだずーっと歌って踊って。なんというか、ものすごい体力と人に見られ続ける耐性……度胸？それが要りそうって思いました」
きれいな衣装を着て、上からの光できらきらと光っていて。

その上に……その練習からも含めると考えられないほどの時間を、こうして人に見られていなくつても歌って踊ってを繰り返して続けて。

……たとえ練習だけは人に見られないとしても僕には無理だな。そもそもがもやしを受け継いだ貧弱だし。

やっぱりなにあつても絶対にやりたくないお仕事だ。

そう、ここに深く誓う。

「おやー？ 私たちのかわいさはー？」

「あ、はい、おふたりともとても素敵でした」

「あ、ありが」

「綺麗な衣装と……髪型も凝っていますよね、それですつと歌いながらいろんなポーズを取っていて。おふたりは今でも美しいですけどこの瞬間はもつと輝いているって思います。僕からしてみれば大胆な衣装ですけどそれが」

「ひ、響くんストップ！ もう充分だから！」

「にや、にや……つ」

もう良いの？

案外さらつとでいいんだな……それもそつか、普段から言われ慣れているもんね、きつと。

「……あー。こ、こほんつ」

ん、ちよつとポニーさんが赤い……怒ってないよね？

「あ、ありがと……ま、まー大変といえは大変ですな」

「普通の人の体力では無理なんじゃないですか？」

「そーですねえ。本番も、完全に終わるまではハイになっているのでなんとかなんですけど、それから何日かは私たちがさえだるだるですし。ツアーみたいなイベントのときはぶっ続けで止まれませんし、その前ももちろん何十回も披露しますし……その前にはカタチにするための練習もイヤってほどしますし？ 体力仕事ですねえ」

10年もそれを続けている岩本さんでさえそういう感想があるんだ。

「ですけどね、体力なんかはやっているうちに……ま、いろいろと鍛えさせられるんです。強制的に。いえ、やっているうちに楽しくなってきましたから、それに合わせて体力もしぜーんどついて来ますし？ それに体動かして歌うのって楽しいんですよ。振り付けしながらカラオケしていい感じに歌って踊れて、それを人に見てもらっている感じかな？」

あざといポニーテールさんは首をかしげながら僕を観察している。その隣をちらつと見てみるも、まだねこみみしか見えない。

「！」

……あ、目が合った……って思ったらすぐにまた逸らされちゃって、代わりにしつぽがくるんとしているのが見えた。

ねこみみとしつぽ、いったいどっちを。

いや、ぜひぜひ両方を。

「んくんく……ぷは。ま、それが本気で楽しめるのは若いうちですけどね」

そういうこと言うからおばさんって言われるんだよ？

あ、いや、僕の感想じゃなくてネット上でのお決まりのヤジ的なやつで。

「この前言ったように、若返る直前なんかはだいぶキツくなってきましたね。とりあえずは大学を終えるくらいで変わり始めて……はあー、ほんつと、こうなつてしみじみと感じていきますけど、若いっていうのはとにかくそれだけで素晴らしいのよー」

「……だからそういうのがオバサンっぽく」

「なにか言ったのかなあ、みさきちゃん」

「いーえ、なんにも言っていないですよ？」

「そう？ ならいいけど」

「……にゃ」

ある日に「ちょっと会えますか？」って聞いたたら「いいよ？ 今？」って軽いノリで会ってくれたふたり。

……よくよく考えると今をときめくアイドルさんってやつだし政府の広報とかしてて結構忙しいのに良く会ってくれるなあ。

まあいいけど。

「それでね、私も今でこそ……物理的に若くなったからこそ体が軽く感じるので全力で楽しめるようになって、戻っていきませけどね？」

……あと何年かでもまた来ちゃうだろう学生時代の終わりを感じ始めたら、今度こそ早めについてお願いしてるの。だって私たちってほんなことになっちゃったし、今後は歌だけに絞ってその分をねこみみ病関係のお仕事にするんです。みさきちゃんはともかく私はもうアイドルってのを充分やったかなー、そう感じてるから」

「ー」

よく見ると、お店の空調で島子さんのねこみみが、ねこみに生えている毛が……ふわふわとしている。

ふわふわ。

目が良くなったからこそ、近視と乱視がなくなったからこそ。

背が低くって見上げるのが自然になってるからこそわかった、その事実。

「……!!」

どうにかしてあれを、今日も。

「やーな話聞かさないでくださいにや。ていうかそれ、事あるごとに言ってるじゃないですか、ひかりさん。そんなことばっかり言っていると未だに狙っているあの人……ああ、響さんはご存じでしたにや？　そうですにや、今井さんみたいですにや？」

「うげ」

今井さん。

悪魔さん。

あの人、冬眠の時期でも……なんの返事もしなくても週1以上のペースで延々とメールを送りつけてきていた、正直に言っただけでも怖い感じの。

「良いんですかや？　今井さんですにや？」

「良くない」

「ですよね」

あ、身近な人たちからもそういう評判なんだあの人……強引だもんね。

「でもね、分かるのよ……今ならちよつと。だつてね？ つい。

つい……なんでか知らないけど響くんには言いたくなっちゃうのよ、今みたいなの。なんでかしらねー、聞き上手だからかな」

「ただ聞いているだけですけど」

「それがなんか違うのよねー。みさきちゃんもそう思うでしょ？」

「言われたらそうかもですよ？」

そうなの？

僕、ほとんどの会話は素通りしてるのに。

……こういうのって意外とばれないんだね。

大切な特技として秘密に取っておこう。

46話 彼の、準備 1 2 / 6

「ま、私にはそういうのは無縁ですにや。 多分」

ねこみみさんが声を上げる。

「なにしろ私はケモノ化、それもネコ科の猫ですにや。 むしろ今の、お偉いさんから頼まれるテレビ解説とかが多くなっちゃってなかなか体を動かせる機会がなくなってる困っているくらいなんですにや。

体が鈍るっていう感じで、だからこう……むずむずして。 お休みが少ない時期だと夜とかくらいにしか思いつきり走ったりできませんし、かといってマシンを使うのもなーんか違う感じがして。 なんですすかにや?」

「ネコ科としての本能なのかしらね?」

「かもですにや。 あ、この前の長めのコンサートとかでも……リハーサルではもちろん本番でも最後の方まで息が上がらないあたり、ねこみみ病の恩恵を感じていますにや。 疲れっていうものも徹夜とかしない限り感じないですし。 そういう意味では嬉しいですよ?」

いいなあ。

その体力と筋力、僕もほしい。

分けてくれないかな。

無理?」

……冬眠明けよりは断然にマシだけどそれでもまだまだ力が出ない僕。

すぐに疲れるって感じる人が多いし。

「!!」

それよりも話に乗ってくるとゆらゆらしてくるしっぽが気になる。神経が通っているのは触ったときに充分にわかっただけだ、改めて……こうして先のほうがあっちに行ってこっちに行っているのが視界に入るだけでわかるし……やっぱり触りたいし。

ダメかな?」

「そーんなこと言ったらピンチヒッターとしていろんなところに駆

り出されちゃってですにや、ますますお休みが取れなくなって最近は少し辛いのですにや。身体は疲れなくなっても心が疲れるのですにや——……」

「あちこちでそういうこと言うからねえ」

「お仕事上言わなきゃならないときがあるから仕方ないとは言っても……さすがに番組の企画で12時間をぶっ続けでハードなことやらされたときには、体までへトへトになりましたにや」

「でもすつきりしたって言ってなかった？」

「あ、満足しましたけどにや？」

「……それは大変でしたね。あと、おめでとうございます？」

「ありがとですにや！」

「みさきちゃん嬉しそー」

しつぽまでへによってなっておじぎをした島子さんは、しばらくお茶をすすっていた。

◇

そしてまた始まった岩本さんの、ありがたくって共感できる老化っていうものの愚痴を聞いてしばし。

多分20代同士の飲み会とかだとかこういう話題になるんだろうなって感じだったけども……そろそろ頃合いかな。

「……ところでおふたりに訊きたいことがあるんですけど」

「その感じ、まず間違いなく今井さんが『そういう雰囲気になったらすぐに連絡して！』ってうきうきしてた感じのことじゃないよね」

「ええ、まあ」

「一応頼まれててさー。ま、社交辞令ってことで。あ、社交辞令っ

てのは」

「せんぱーい？」

「……あ、ごめんごめん。さすがに中学生なら知ってるよね」

「子供は大人が思うよりも大人なんですにや」

「本物の高校生なみさきちゃんの言うことだから納得ね！」

「僕が今知っておきたいこと、知らないといけないこと。」

「えつと……ねこみみ病が発病したとき。何となくでもはつきりと

でも自覚したら……こうして知られるようになった今ってどうしているんでしょうか。その、最近発病した人たちがです。いくらなんでも発病、いえ、発症したらすぐに通報とかが入って、国とかから手紙が来たりお役人の人が来たりはしないんだとは思いますが」
調べたけどなんだかそういうところについて詳しく書いてあるとこがなかったんだ。

だからこうして当事者たちの中でもよく知ってるだろうふたりにコンタクトを取っている。

というのも僕の魔法さんとのすりあわせ。

魔法さんっていう姿を変える以外の力がある以上、今の僕のこれは多分ねこみみ病とは似て非なるもの。

でも魔法さんは僕がアクションを起こさないと認識を阻害する魔法をかけないから、つまりはなにかの拍子にそういうところからの連絡があってもおかしくはないのに。

それだけ隠れられていたっていうことかな？

そう思つての質問。

「あ、響くんも気になります？」

「ええ、一応は」

軽い感じ。

多分教えて良い内容なんだろう。

「ならおはなししましょうか。SNSだとかに自撮りとかを投稿したり、他の人に撮られて上げられたりして目に留まったりしなければ……あるいは見た目が変わって大騒ぎになったりしなければですけど」

そう言えばスマホのニュースとかでは週1くらいでそういうのがあるね。

SNSだと「見て見て！ 生えた！ 若返った！」って感じで堂々と自撮りしてるのよく見かけるし。

「ねこみみ病だつて気がついた人となんとなくそうかもしれないかもつていう人たちからの連絡で、お役所も手一杯だそうで。なので基本はねこみみ病になった方かそのご家族、あるいはご友人からとか

の連絡……つまりは自己申告ですね。　と言つても回線混み合つてるので、あと実際にお役所の方が訪問しないとわからないので結構待つことになつちゃうと思うけどね。　あれよ、お問い合わせダイヤルとかつてすつごく待つでしょ？」

「あーいうのつて私たちみたいに時間が無い人には辛いのですにや……」

「ねー」

「そうだね、僕みたいに1年中家に居るようなのとは全然違うもんね。」

「特に若返り。　私みたいに自分とかご家族しかわからないくらいの違いしかなかったら。　成人しちゃえば数年の違いなんてそうわかるもんじゃないし……だから違和感あつても自分じやよく分からなくて。　丸1日とかコールし続けてようやく繋がった担当の人に話したりしてつていう流れでしょうかねー。　ちよつとだけ見た目が変わるだけの人とかは聞いたら満足してそのままつていうのも多いそうです。　病氣とかつて診断が出るとなんかほつとしますもんねえ……もちろん軽いヤツの話ですけど」

む……確かに。

たとえば前の僕が多少若く見えたりしてたつて、それが魔法さんにかかつていなくて「これ、ねこみみ病かも？」つて思つても「ちよつとお得かな」程度で終わりそう。

だつてめんどくさいし、お役所関係の手続きつて。

それに特段困るわけじゃないし。

ケモノ化みたいに生えたり、若返りで高校生が中学生とかなら大変だろうけどね。

「ケモノ化の方は……まあ届け出ない訳には行かないですよにや」

うん、そうだろうね……生えるんだもんね、男にも女にも。

「みみとかしつぽ、羽とか角。　私みたいに生えてからしばらく自覚できなかった……理由は不明なんですにや……としても、いずれは誰かが気づいてつて流れになりますしにや。　もちろん自分たちですぐに気がついて連絡……まあこつちの場合は直接お役所に行けば最

優先で取り扱ってくれるみたいですし、若返りとはちがつて一目瞭然なのでシンプルといえばシンプルですよ」

「ほんと不思議よねー、みさきちゃんとか家族の人とかが初めに気がつかなかったっての」

「ですよ。実際、私みたいに自覚がないまま出歩いたりしているときに町中で指摘されるっていうのも多いみたいですし、よくわからないものなんですにや、ねこみみ病って」

島子さんのしつぽが、はてなっぽい形になっている。

先の方、ちようど僕の腕がすっぽり入りそうになるそこに僕の入れてみたらどんな感触なんだろう。

二の腕あたりを入れてみたらすっごくこそばゆそう。

けど、ぜひ試してみたい。

「まー、ねこみみ病ってひとくくりにするのが乱暴っていう意見、私は納得できるなー。だって、こんなに違うんだからさ、私たち」

「私たちケモノ化だと明らかに感覚までも変わりますからにやあ。ま、見た目のインパクトほどじゃないですけどにや?」

そうしてねこみみをふるふるっとさせる島子さん。

器用っていうか、そういう動きが自然とできる感激。

「けど確かにわかりやすさっていうか納得のしやすさって『良く分かんないけどなんか変わったからねこみみ病なんですよ』っていう単純さは大事よねー」

「あー確かに。いちいち動物ごとに名前変えられたりしてもそれはそれで困りますからにやあ」

しつぽ……じゃなくて、聞きたいことはそうじゃなくて。

「……ねこみみ病になったことで日常生活に支障が出てきたりしたらどうするんですようか。たとえば……学校とか会社とかで、見た目が変わったせいで他の人との関係が難しくなったり。……島子さんの前で言うのも悪いんですけど、受け入れてもらえなかったり。この前聞いたように……迫害に近いことになったりしたら」

姿が変わって今までの暮らしができなくて……なんとかしようとしても今までとあまりに違いすぎるせいで、それすらできなくて。

そう。

前の僕から今の僕になったように。

どこにでもいる普通の背の普通の黒髪の普通の顔の男から、珍しい顔をした銀髪の幼女になるっていう変化があったとして。

……魔法さんがかからなければ、いや、今だっつていつかからなくなるのかわからないしそうだったら前の僕に戻りそうなものだけど、そうじゃなくて。

魔法さんが僕のことを忘れてほっいたらかしにしてこのままの姿にしたままで消えちゃったとしたら、もう……誰も僕を前の僕だっつて扱ってくれなくなって。

身寄りのない、どこから来たのかわからない子。

少し前までは「自分は失踪したはずの男だ」って主張している頭のおかしい子。

そうとしか思われなくなるから。

だからこれまでお巡りさんから逃げ回ってたんだ。

飛川さんとか叔父さんとか……よく話せばわかってくれそうな人はいるけど、でも魔法さんの助けがなければそれは確実じゃない。

それをお巡りさんとかが信じてくれるかも不明……まあねこみみ病がメジャーになつてきた今ならなんとかなるかもだけでも。

魔法さん。

かかり続けるんだとは……半ば諦めていると同時に現状で困ることがない分安心しちやっていた部分もあるんだけど。

僕を前の僕に戻してくれないまま、ある日突然に消え失せちやう可
能性。

それがある以上、公権力のトップ……「その筋の情報」ってやつに近いところにいるふたりからいすいろと聞いておかなくちやならない。

この先の僕の身の振り方を決めるために大切な情報なんだ。

46話 彼の、準備 1 3 / 6

「響くんのことだから興味本位じゃないだろうけど……うーん、どこまで話して良いんだっけ？」

「最近はあるまり話さなくなりましたが忘れませんでしたにやあ」

この2人はねこみみ病については特殊な立場。

表に出ている情報もそうでないのも知っているはず。

そう思つて訊いてみている。

「ま、いつか。 響くんはネットに安易に書き込んだりする子じゃないっていうのはわかってるし……もしそうだったら私たちのこと、あのときのことはすっかり出回っているわけだし？」

「そーいえばそーですよ」

そっか、今はSNSの時代。

友達に話す感覚で全世界に広めちゃう世代だもんね……今の僕の見た目的にも。

「あ、ごめんね？ 一応、一応なんだけどね、スタッフの人が『そういう可能性も否定できないから』って。 だからあの後しばらく響くんのこと疑つて、ネットの……私たち関係の書き込み、熱心に調べちゃつてたから」

「いえ。 アイドルのセキュリティ……安全と、あと機密を考えたら当然だと思います。 別に気にしません」

あんなに乱暴に追いかけてくる人たちもいるくらいだ、この子たちの弱味を知りたいっていう人も多いだろうし。

そういうお仕事だしな。

「よかった。 あ、それで、ねこみみ病で困った場合なんですけど、これは……私たちでも全部は知らせられてないから、私たちが知ってるくらいしか話せないんだけども」

この子たちでも知らないことが。

……つまりこの子たちが「知らせられてない」って知っている程度には……めんどくさいものがあるんだ。

「で、困ったことになった場合には本人か周囲の方からの連絡で係の

人が駆け付けて手助けして。 さらに認められれば特例措置が発動するらしいですね」

「らしいですよ……特にケモノ化の場合だと」

特例措置。

「なんだか物騒な響きだけど、逆に言えばそれで守られる側にとってはとっても頼りになりそう。」

「たとえばですね、最悪お家にいられなくなる……なんてことが。」

「あ、ご家族の問題だけじゃなくて、その、ご近所さんとの問題とかで、ね？ そうなったら本人だけでも一時的に保護してあげたり、ご家族ごといろいろと変えてお引越し、なーんて感じで……まあドラマである『なんとか保護プログラム』みたいな感じだそうです」

「外国だとその辺もつと進んでるって言いますもんじゃー」

「あー、懐かし。 昔、探偵もののドラマに出たなー」

ポニーテールをもしゃもしゃしている岩本さんはすごく懐かしそう。

……僕よりちよつとだけ年上だから子役としてとかヒロイン役とかかな。

「昔って私が何歳のときですかにや？ 10歳超えてましたかにや？」

「……みさきちゃん？」

あ——……そっか、そうだよね……これこそが世代の違いってやっだよな。

この2人は一見同じ高校生同士だけでも片方は僕の世代なんかもんね。

「じー」

「年齢のことはね、……あ」

「……ふにやつ!？」

またコントになるのかなって思ってたじーつと見ていたんだけど……なぜか2人も同時に下を見て黙り込む。

「？」

「……え、えーつと！ 続きですよにやせんぱい！」

「っ！　そ、そうだったわね！」

よく分からないけど……ふたりしてびったり息が合った動きだったあたり、またコントするつもりだった？

「こほん、滅多にないことのはずなんですけどにや、困ったことに……変わった本人がそれを受け入れられなくて、いろいろあって、それで入院……メンタルのケアをするために、することもあるそうですにや？」

「そういうのってケモノ化だと深刻なんだってね——……。まあ、若くなるだけなら基本、嬉しい以外にはなんにも起きないしね。学生だとちよっと困るかもだけど。まあ女性からの『自分だけ若くなつてずるい！』っていう妬みはしつっこいけど。あとババアネタが定着したのもムカつくけどそのくらいだし」

女性の年齢の話にはお口チャックだ。

「んでケモノ化は……この国じゃまだ、少なくとも教えてもらえる限りではないみたいですけど。外国では……そのヤな話でごめんなさいですにや？　生えたのを本人とか家族とか周りの人たちが『取らなきゃいけない！』って無理やりに取りろうとして大ケガをしたり……だって体の一部になっちゃっているんですからそうなっちゃいますにや？　人の耳とかだつて引っ張ったら痛いですにや？　ましてや刃物を使ったりしたら血もどばどばですし……そういうことですよ」

想像したらおしりがひゅんつてなった。

岩本さんも顔をしかめている。

島子さんのしつぽが蚊取り線香のようになってる。

「……はい、痛いをやめやめ!!　私だつて嫌いなんだから……いい感じの方もね！　コスプレなんていう文化が、一般的に好意的に受け入れられ……過ぎてるとは思うけど、ともかくそのせいで『ある日突然コスプレに目覚めたみたいだったから……』っていう理由でぜんぜん発覚しなかったケースもあるんだっけ。SNSとかに挙げても普段の言動のせいでなかなか気がつかれないとかね。特に女の子たちの間じゃそういう冗談が流行ってるらしいし。……のんきだ

けど、このくらいでちょうど良いのかもね」

「幸せの代償ですよ？」

「みさきちゃん、それはなんか意味ちがくない？」

「そうですかによ？ ……響さんはどう思いますよ？」

「……えっと」

ある日から耳とか尻尾を生やして平然としているのがコスプレで済むのかって思うけど、多分その程度にはねこみみ病が浸透して ……よくみんなコスプレとかするんだらうな。

「……少なくとも見た目が変わっても否定的に捉えないっていうのはいいことだと。 たとえ平和ぼけでも、それはいい方面の鈍感さっていうもので……言い換えると『寛容さ』とかいうものになるんだと感じます。 完全には無理でしょうけど、ねこみみ病はただの変化なんだって、見た目が少し変わったただけなんだって、みんなが知るのなら。

……ねこみみ病になった人も周りの人も多少は、幸せになると思います。 そういう意味では確かに恵まれていますね」

誰がいつ何になるのか分からないって言うねこみみ病。

次は自分からしれないんだからそうして怖くない方がいいって思う。

移る病気とかでみんなが疑心暗鬼になるよりはよっぽど。

「やっぱこの子、絶対頭いいって、普通の中2じゃないって！」

「だから聞こえてますよ？」

「いーの、さつきちよつとばかしネガティブなこと言い過ぎちゃったからこのへんで挽回しておかないと」

「……ってことらしいですよ？」

「いえ、別に僕は」

……そうだよね、年齢詐称してるのって大人からなら分かっちゃうよ。

「というわけで、そういうトラブルがない大半のケースでは、普通はお役所を経由して書類……ねこみみ病関係者用ですね、それを書いておしまいですね。 私たちのときは症例が少なかった時期だったのでいろいろと調べられましたけど。 ねえ？」

「あ——……。あのときは、ほんつとたいへんでしたにやあ」

「ま、今なら集まったデータと照合してサクッと当てはめて『はいおしまい、困ったことがあったら直通電話で相談してね!』でおしまい。さつきも言ったような困ったことがあったりしたら、こっさり匿ってお引越したりして、これまでとおんなじような感じに暮らせるように……学校とか就職先とかを提供してくれる。だよな?」

「はいですよ」

「なんかおかわり欲しいわねー」っていいながらメニューを開く2人……うん、女性は甘いものなら無限だよな。

そんなことよりもしつぽが揺れている。

ゆらゆらと。

ゆらゆらゆらゆら。

そうか。

こうしてみみとかしつぽが生えたりすると感情まで分かりやすくなるんだな……そう考えてみるとちよつと大変なのかも。

けど、どうせなら……どうせ幼女になるくらいなら、僕にもそれが生えたりしていたらみんなに感情を……主に困っているときと怒っているときの伝えやすかったかもなあ。

いやいや、もしそうなっていたら家から出るのがもつと遅れて、そのせいでかがりたちに会えなかった可能性があるんだ。

だって「絶対に人に見せられない!」ってなっただろうし。

それとも「これはどうしようもないから素直に誰かに頼ろう」ってなったかな?」

どっちにしても、銀髪ねこみみしつぽ幼女とかにでもなったら……きつと想像するまでもない扱いになったはずだ。

絶対小動物扱いされてはずだ……あの子たちに。

だからこれでいい。

うん。

あ、そうだ。

「……もうひとついいですか?」

「ん? 今日の影響くんは熱心ねえ」

「興味持ってくれて嬉しいですよ」

「……その。岩本さんと島子さんがねこみみ病だつて分かったときと、そのあとのこと。いろいろと大変だつたつて言っていましたけど、それについても……おはなしできる範囲で聞かせていただいても……？」

ねこみみ病の一般的な扱いとか、ちよつと大変な場合とかのことは分かった。

……なら、もし「実際になつたらどうなるのか」。

自分が若返つたり何かが生えたりして姿が変わつちやつたらどんな感じに保護……もとい調べられるのか。

この子たちは、ねこみみ病がメジャーになる前にそれを経験したはずだ。

だから……前例がないかもしれない、数が少ないかもしれない場面だつたらどうなるのか。

そう、例えば「男が銀髪幼女になつちやつたりした場合」——どんな扱いを受けるのかつて。

46話 彼の、準備 1 4 / 6

「私たちのときのことね……まず私たちはほとんどおなじ時期になった……みたいなんです」

「みたい？」

「そ。でも私の方はホントじみーなので、先にみさきちゃんのインパクトあるのを先に聞いた方がおもしろいんじゃないかな？」

「うえー、私の中からですか？　まずはひかりさんの無難な方から行きましようにやあ」

「ほーら、響くんがせっかく興味持ってくれてるんだし、どうせ話すんだからいいでしょ。ほらほらっ」

2人は同時期にねこみみ病に……けど、うん。

確かに若返るのと生えるのとどっちが派手かって言われたら生える方だよな。

「じゃあ私のなんですけどにや、その……大変だったんですよ」

ねこみみとしっぽのへにやり具合から本当に大変だったんだなつて分かる。

触りたい。

「……えつとですよにや。私はもともと、前からこんな感じのコスプレするキャラで……猫のおみみとしっぽをつけて語尾を猫っぽくして……あ、おみみはカチューシャでしっぽは腰周りにつけるっていう、よくあるやつですよにや。それがお似合いだって事務所から言われて……もちろん踊っていても取れないようにつけてきちんと作ってもらったものですよにや。カラーリングも形も大きさも今のこれとおなじだったので、不思議な偶然でおなじの体が生えたからややこしかったんですよ」

……それは、偶然なんだろうか。

たまたま前から付けていたのとおなじに？

そんなのは都合が良すぎるような気がする。

「私、これでもアイドル……当時はまだ駆け出しだったけどそれでも女の子だからって、車で送り迎えしてもらっていたんですよ。」

で、レッスンとか収録の後って疲れてるもんだからそのまま付けて帰って、家でもそのままとかよくあったので……だからねこみみ病になってもしばらくはホンモノがこうして生えていても、だーれも気がついてくれなかったんですよ。『役作りなんだな』って。学校の友達でさえ、学校の先生でさえ……スタツフさんたちでさえ。――お母さんでさえ。そしてなにより……私自身でさえ、にゃ」

……他人ならともかく家族、さらには自分の耳の上からねこみみが生えて、しつぽっていうお尻……尾てい骨辺りなんだろうか……の上から生えているそれがあつたら違和感があるはずなのに？」

「それで……体が本物の猫ちゃんみたいになるって言う、筋力とか瞬発力とか運動神経とかが明らかに変わっているのに気がついたのは……正確な日付がわからないもんですからたぶんなんですけど、ねこみみ病になつてからひと月くらい経つたころですにゃ」

「自分がそうなつてから気が付くまでに1ヶ月かかる」……それはなんでなんだろう。

あ。

しつぽが90°に近い直角になっている。

なかなか珍しい形だ。

「しかもよりにもよつて……よりもよつてそれが番組の収録中だったんですにゃ。いえ、だからこそ分かった日ははつきりしているんですけどにゃ」

「……なるほど。と言うことはカメラが回っていたり？」

「そーなんですにゃあ……あー、恥ずかしいですにゃ。町中で人がたつくさんいて……生放送じゃなかった分まだマシではあつたんですけどにゃ、そうしてみんなの前でやらかしちゃったもんですから『さすがになんかおかしくない？』って気が付いてもらえたんですにゃ……いやー、あのときのことを思い出すだけでなにかを引つかきたくなりますにゃ」

「引つかく？」

「あ、いえ、ただの衝動的なものなので、気にしないでくださいにゃ」

「あれはみさきちゃんもびつくりだし、私たちもつとびつくりだつ

「だからねー」

「……その場面には一緒に？」

「ええ。 私たちどころかギャラリーの人たちも、すごいこと起きてるのにスマホとかで撮るのも忘れてみーんな口あんぐりしてましたから。 ロケ中だったからね……ほら、普通の商店街を食べ歩きするっていうよくある感じの番組の。 お店とアイドルな私たちの宣伝っていうごくごくありふれたものになる……はずだったんだけど……この子ね？ ——通りがかった猫さんとの大げんかっつてのを始めちゃったの」

「……猫と？ 猫って動物の？」

「ええ、 地域猫っていうのだったらしいの」

「ヤツはタフでしたにや。 強敵でしたにや」

猫と喧嘩。

……心まで猫に？

つまりねこみみ病……のケモノ化は、心までが別の動物になるってこと？

「初めのうちは……動物の動画とかで観たことある？ 猫同士のケンカっての。 ……そう、ならわかるだろうけど、あんな感じでにらみ合ったかって思ったら声上げはじめたの。 通りがかった猫さんと目を合わせたって思ったら、お互いに。 猫さんと、みさきちゃんっていう人間の女の子が。 次のお店に向かうアドリブパートだったから『あー、猫系アイドルのアピールかあ……』ってことでちよつとの間ほほえましく思ってたんだけどね。 でもほら猫のケンカってだんだんヒートアップしていくでしょ？ そんな感じにしていくもんだから『ちよつと役に入り込みすぎかなあ』って思いながら適当に合わせて実況みたいにしていったんですけどね？」

島子さん、気がついたらねこみみとしつぽがぺたんとなっていて顔を背けたままになっていた。

……この子、やっぱり恥ずかしがりだよなあ。

それなのにアイドル。

しかもコスプレ系アイドル。

なんでそんなものになろうとしたんだろ。

事務所？

事務所の意向？

逆らえないの？

芸能界って怖いの？

「それが発端で……あ、ケンカには勝ったらしいんだけど」

「勝ったんですじゃ」

「……謎の対抗心はともかくね、勝ったらしいの。 だけどしっぽ巻いて逃げ出したその猫さんを……みさきちゃんやんが追いかけて始めちゃってね。 それもものすんごい速さで。 四つん這いでされたらパンツ……ごめん、下着が見えちゃうところだったわねえ」

「んなのしてたら今ごろは引きこもってますじゃ」

「そ、だから普通に走る……んだけどものすごく速くてね。 あれがケモノ化の瞬発力なんだって後で知ったけど、そのときは追いかけるので精いっぱいだね……商店街のアーケードを猫っぽい声上げながら全速力で突っ切って、それでひびった猫さんが路地のビルを駆け上り始めて。 これで終わると思ったらこの子、ビルの……配管ですかね、ジャンプしてそれに掴まったかかって思ったたらそれを使ってすいすい登っていつちやっただすよ。 あっという間に、手の届かない高いところに」

ビルを、登った？

それも、聞いた感じだとロツククライミングみたいに？

この島子さんが？

それなりの恥ずかしがり屋さんで、なのになんてか人に見られるっていうお仕事についていちゃったこの子が？

「にやああああ……ああああ……」

「あー、最近話すの少なくなっていたから忘れてたけどインパクトあるわねえ、これって。 ……ていうかみさきちゃん、なんでそこまで恥ずかしがってるの？ こんなテレビでも何回もその場面ごとやったじゃない。 あ、パンツは」

「言わないでくださいにや!!」

「でも一時期そればかりネタにされてたわよ？」

「うう……」

……スカートだったとしたらカメラに映っちゃってるんじゃない。

そういうのってテレビじゃモザイクかけられるんだろうけども……なんだかいがわしくなっちゃう気がする。

どう処理したんだろ……帰ったら探してみよう。

「また話す機会とかあるかもだし、慣れたほうがいいわよー。配管を伝ってすいすいと……それも途切れていたりしたらそこからジャンプして別の出っ張り使ったりして登るもんだから肝が冷えたのよ……途中でずり落ちたりしてましたし。ようやく屋上にたどり着いたと思ったら、みさきちゃんに追い詰められた猫さん、壁伝いにささっと降りて行っちゃったんです。降参っていうよりも『人間がここまで追いかけてくるのか』って思ったんでしようねえ、かわいそうに怯えて。さすがにもうおしまいかかって思ったたらこの子——その猫さん目がけて飛び降りたんですよ。ビルの屋上から」

「……え」

「なんのためらいもなくね、『いやあああ！』とか叫びながら……それはもう勢いよく、ね。体、広げるみたいにしてさ……あ、今でも思い出すだけで汗がじんわりする」

ビルって言うからには3階以上の高さなんだろう。

……そこから人が飛び降りて平気。

それが、ねこみ病のケモノ化？

「文字通りに飛び降りです。だから私たち、みんなもう真っ白になって、周りで見ていた人たちも悲鳴を上げてもうダメだっと思って。……いたのにこの子、くるくる回りながら上手ーく着地できちやったんです。両手と両足でしっかりと、こう、しゅたって感じだね。もつとも、あのときはみんな目をつぶっていたから後で映像を見てから分かったんですけどね」

「その節は本当に本当にご迷惑おかけしましたにや……」

「で。ぴんぴんしてるから『大丈夫？』って近づいたら……この子、なんか怯えたみたいになっちゃって。脚ががくがくしてるから大

丈夫かなくて手を取った途端に暴れ出しちゃって。それもわけわかんないことうにやうにや言いながら」

島子さんはさつきからずっとこつちを見てくれない。

あ、ねこみみも聞きたくないからかぺたんとしたままだ。

「そー、まあ暴れるくらいだから元氣だつてわかつてみんなほつとはしたんだけどね……それからまた大変で、暴れるっていうか興奮しててねー。人の話を聞けない感じで抵抗してきて、なんとか足止めるので精いっぱい。錯乱していて何するか分からないからって、緊急事態だからって男の人のスタツフにも手伝ってもらったのに、それでも落ちつくまで何回かすり抜けてどこかへ行こうとしていましたから」

ビルから飛び降りても平気な力の受け流しに、衝撃に耐えられる身体能力。

どう見ても普通のJKさんなのに成人男性の腕力を……あ、火事場のつてやつで錯乱とかしてたらそれは不可能じゃないかもだけでも。「話しかけても通じなくて、手で引つかこうとしてきたり足使つてきたり。目も私たちの目とぜんぜん合いませんでした。いや、合わそうともしていなかったって感じかな。——まるで『みさきちゃんとしての意識がない』っていうか」

意志がない。

意識が通常ではなくなる。

それは飛川さんや町で実験した人たち、さらにはこの子たちと話していたときの僕とも似たような——。

「……今でも思い出せませんのにな。あのときの。あの映像、観せられたときにはなにかのドッキリかって思ったくらいで……『今度はこのネタでやるんですかにな？』って聞いちゃったくらいですにな」

「……今までのみさきちゃんとはちがう誰か……ナニカになっちゃったっていうか、中身がほんものの猫さんになっちゃったのかもって、こういうときってどこに連絡したらって大変だったんです。ほら、キツネ憑きとか聞いたことあるでしょ？」

キツネ憑き。

自分が自分でなくなっちゃう、あれのこと。

「そのとき私もずいぶん引つかかれたんですけどね」

「だからぐめんなきいって何度も何度も謝りましたにや……」

「うん、謝られた。でも、それはそれ。今は事実を話す場だから」

「ひどいですにやあ……」

「でね？　びたって止まったかって思ったたら、おめめばちくりして『あれ、もうロケ終わっちゃったんですか？』って聞いてきたもんだから拍子抜けしちゃったわねえ。怒ってもピンとこないみたいで、聞いてみたらさっぱり覚えていないっていうからカメラさんのを観せて、それでよーやくに……とりあえずなにか変なこととしてかしたってことは納得してくれてね」

「……たくさんの人が、通りがかりの人までもありえない動きを見たからですよ。人をはるかに超えたような、そういうものを」

人知を超えた力。
魔法さん。

もし魔法さんに認識を歪める力がなかったとしたら。

「そういうことです。地上10メートルくらい……いえ、それ以上へ登って自分から落ちて。下はただの道路、それでなんともない。

せいぜいが手のひらが赤くなった、その程度。……それでただの女の子が平気そうにしているのはちよつとどころじゃなくおかしいので、みんなして途方に暮れましたよ。『これ、どうすればいいの？』って。ねこみみ病が知られていない頃でしたから手がかりも何もありませんし……まだ白昼夢とかみたいなのだって思った方が納得できるくらいの出来事でしたから」

46話 彼の、準備 1 6 / 6

「みさきちゃんも我に返ってちよつとして、『これほんとどうしましよつかねー』って言いながら応援とか呼んでいるあいだにも……スマホ向け始めた周りにいた人たちとか集まってきた人たちで困っちゃって。『いざとなったらお巡りさん呼んでひと目の着かないところへ連れて行ってもらわないとね……』って話してたの」

「話し疲れたから食べるね?」って言いながらケーキを、甘ったるそうなそれをおいしそうに食べた岩本さんが続ける。

話しているだけで2個も消費した彼女。

隣の島子さんも甘いもので立ち直っている。

「この紅茶もおいしいですよにゃー」とか言っているし、その紅茶にもミルクと砂糖がどばどばだ。

ねこみみも元どおりな感じ、けど微妙にしっぽの揺れ方が違うあたりまだちよつと恥ずかしいらしい。

そして僕はもちろんコーヒーだけだ。

「ブラックなんてよく飲めるねー」とか言われたけども逆に甘いほうがダメなんだからしょうがないんだ。

こういうところでも男って言うアイデンティティーが強化されている気がする。

まあ女の人でも甘いのが苦手な人もいるだろうけども。

「電話してる間にも増えてくる野次馬さんたちに囲まれてどうしよどうしよって困っていたら、運良くお役所の人ランチで商店街のお店に来ていて、みさきちゃんが全力疾走しているとこ見てて、ねこみみ病関係の人……当時はまだ窓口とかは病院以外なかったらしいの……呼んでくれていて。 んですぐにお巡りさんとかも来てくれたんだけど、そのお役所の人たちが説明とか手配とかしてくれたの。

それで安心したって思ったら今度は仰々しい車が何台も来て私たち全員詰め込まれてね……あ、もちろん普通にね? 物々しい感じじゃなくて。 けっこー走ったかって思ったらみさきちゃんはそのまま

検査。 私たちは細かく聞かれたっけ、みさきちゃんのこと」

なるほど……その時点で。

2年くらい前だつて言っていたな、そのときにはすでにお役所……つまりは国も、いや、世界中でねこみみ病のことを把握していて、そういう部署みたいなのができているくらいには、ねこみみ病の人が出てくるケースがあつたつていうことか。

その関係者の人が偶然にいてくれたから何とかなつたけど、そうじゃなかったらこの子たちも大変な目に遭つたのは予想できる。

窓口つて言うのはそれだけ大切なんだもん。

でも——2年前。

あの朝よりも、さらに1年も前のこと。

僕がなんの不自由もなく普通に生きていたころ。

父さんと母さんが残してくれたいちばんのもの、僕の体つていうものをまだ持つていたころのことだ。

……魔法さん、そろそろ1年になるんだし、返してくれないかなあ僕の体。

今の体は返すからさ。

「あのときはまだまだ事情も飲み込めていなかったのでお役所の人からねこみみ病つていうものを……あ、そのときはまだ違う呼び方で教わりましたけどにや……『これから怖いことになるのかにやあ』つて検査が全部終わるまで心配しっぱなしでしたにや。町から外れてもまだ車が走つて周りが森しかない研究所みたいなどころに連れて行かれて検査ばつかりの日。生きた心地がしませんでしたにや」

今でもそうなのか、それとも当時はまだ「稀少な研究対象」つてことだったのか。

「付き添いで乗つていただけの私も怖かつたなあ……なーんかいろんな説明とか受けて、着いたら着いたでみさきちゃんとは別の部屋に案内させられて守秘義務とかの書類、いっぱいサインさせられたし。

別に怖い人が出てきたり脅されたりはしなかったけど、淡々と『法律ではこうなっていますから』つて言われ続けてねー」

「私の方は完全にぼつちにさせられたので死ぬほど怖かつたですにや。……せんぱいくらいは着いてきてくれたら良かったのに

「いやあ」

「しよがないじゃない！ 『みさきちゃんだけ別の部屋に』って本物の銃持った人たちに言われたんだから。あれって警察とか自衛隊とかじゃなかったみたいだけどなんだったんだろうね？」

銃。

それが建物の中でも民間人の前で装備するほどに秘密だったのかな。

「まー、ちよつとすれば『身の危険がない代わりにいろいろなデータがほしい』っていうだけだつてわかつたので、それでようやく安心できたのですにや。一応は休み時間とかご飯とか、娯楽も本とかのネットに繋げないものなら好きにしてよくつてお部屋もそこそこ広かつたですし、生活環境には文句なかつたですにや。で、そういうところで何週間か大きな機械とかでたつくさん調べられたり、走ったり飛んだり体力テストみたいなのとかいっぱいしましたし。ずっとモニターのための吸盤が張り付いたまま機械で監視されていましたけどにや？ 周りの人はみんな女性の方だったのでイヤじゃなかったしお友だちにもなれたのでいいんですけど……でも、ずっとそばにいられて、つきつきり。つまりは機械にも人にも監視……観察ですかにや、されていたんですにや」

……この顔を見る限り、甘いものを食べた後の女の子特有のほんわかした顔を見る限りだと……酷い目には遭わなかつた様子。

尻尾も怖いものを思い出している感じの曲がり方じゃなくて、ご機嫌な猫の揺れ方してるしな。

もちろん言わないで隠してる可能性もあるけども。

でもそこまで疑つてもしよがないしな。

「まー、検査とか以外は好きにしてよかつたですし、疲れたらその検査だつてストツプしてくれますし？ お昼寝だつてできてご飯もおいしくつて……不満といえばお外に出られないことくらいでしたかにや。あとSNSできないの……は逆に楽しめたけどにや。お母さんたちもよくお見舞い……つていうのも変ですけど来てくれましたし。芸能活動は中断つてことでもいろいろできなかったの

は痛かったんですけど、今はそれを補うどころかそのおかげでついでうとこもありますし」

「その……お仕事は目指していた感じですか？」
「にや？」

「ああいえ、島子さんがしたいアイドル活動っていうのと同じ方向性なお仕事なのかなって思いました……今の活動が」

「……あー、なるほど。ご心配ありがとうございます。まー、広報のお仕事も堅苦しいだけです、それ以外ではこれまで通りで来ますから不満はないですよ？」

「そうですか」

そういう自由はある辺り、そこまで強制はされてないのかな。

……そうだよね、ねこみみ病ってだけでたくさん居るもんね、初期ならともかく。

「あ、そういえばそこでのネットだって絶対ダメなわけじゃなくて、機密保持とかで書き込みだけがダメだったんですよ」

「それはみさきちゃんみたいなケモノ化で、しかも身体能力が抜群に上がってるっていうのが国内ではまだ数件だけだったかららしかつたし……しようがないんじゃないかなって思えるわよね。今じゃああ言うのつてもうないらしいし」

「当時はいつ解放されるのか分からなくてじりじりしてましたにや」

「そうよねー。事務所のみんなも心配してたし」

「せんぱいも？」

「もちろんよ？」

「本当ですかにやー？」

「本当だって。その後私も似た感じになったし」

似た感じ……ああ、そうだよね、この人もねこみみ病だもんね。僕的にはもっと興味がある若返りの。

「私のときは大したことがなかったのであんまり話すことはありませんねえ……若返りとケモノ化を比べるのもアレですけど一応はおんなじねこみみ病の仲間なわけで、みさきちゃんみたいにしつつこく調

べられるかもって思ってたんですけど」

「ずるいですにやあ」

「別物だからしょうがないわよ。私はただの若返り……って言っても実際にはこっちの方がみなさん血まなこになって研究しているみたいですけど。だって永遠のテーマですもんねえ、若返りですから。大体の肉体年齢とかを調べて簡単な検査とか運動とかをしておしまいだったので、みさきちゃんより後に入ってちよつとだけ同室でグチとか言い合って、そんで先に出ましたもん」

「ほら見てください響さん。ひかりさんって、こういう薄情な人なんですにや」

「いや、あれは私にはどうしようもなかったんですけど？」

「仲間なら付き合って欲しいのですにや」

「えー、やだよ。あそこ自由なかったもん」

ねこみみ病で……珍しいケースだと長期間。

そうでなくても調べられる場合には短期間でも……隔離される。

自由を奪われる。

でも代わりに……自分の体に何が起きているのかはちゃんと分かる。

「ただ、私の若返りってば10年っていう長いんじゃないですか。

普通は4、5年って感じらしくって。それも私の年齢……前のですよ？ 前のですからね？ それからみさきちゃんとおんなじくらいまで、JKっていう年齢までっていうのは前例がないらしくって、やたらと外国の方がいらしていたのが少しイヤでしたねえ。休憩時間とかに押しかけてきて『外国でなら生涯を保証するから来て欲しい』だなんていろんなところから言われて参っちゃいました」

若返り。

多くの人が望んでやまないもの。

——岩本さんの10年でそれなら、僕のこれはいったいどうなるんだろうね。

15年くらい、いや、多分それ以上の若返りは。

「まー、私たちはねこみみ病の初期でしたから。けど初期の初期よ

りかはマシだっけ聞いてまだよかったなっけ思っけます」

「どっけも贅沢な暮らしさせてもらいましたからにやあ」

聞いている限りだと……多分この国でなら、そこまで酷いことにはならないのかもしれない。

けど。

じんわりしてきた手のひらの汗を、ズボンに吸い込ませながら。

「……ふと思っただけで、あくまで仮に、なんですけど」

今日も全然魔法さんの気配はないんだけども念には念を入れて。

「今確認されている以外のねこみみ病の症状……みたいなものが新しく出てきたら。そうしたら、どうなるんでしょうか？」

「んー？ 新しいの？ ……あー、まーそのうち出てくるんでしょうかねえ？」

「どうですかにやあ。ねこみみ病のいちばん最初の人……あ、それぞれのですけど、っけどんな感じだったんでしょうかにや？ せんぱいは聞きましたかにや？」

「ううん……ごめんね、そこまで聞いたことがなかったっけいうか思いつきもしなかったわ。すごいね響くん、そこまでぱつと頭回るなんて」

知らないか……できたら知っけおきたかっけたけど、ここでさらに「じゃあ知っけそうなる人に聞いてみてくれますか？」とかまでは厚かましいっけって以前に「なんでそこまで？」っけなるだらうし諦めよう。

「私たちのときにはまだねこみみ病、公表されてなかったんですよね。

『社会の混乱を防ぐために、そのタイミングまで秘密にしておくよに』っけ書類、たっけくさん書かせられましたし」

「私もインタビューとかで『最近1日中この格好をするのが好きになっけちゃったんです』っけいうの何回もさせられましたにや。あ、

一応少しはこれ以上知っけるんですけどにや、一般人な響さんとかには教えちゃいけない情報とかもあるの……その」

「いえ。守秘義務とかあるんですよね」

「そんな感じですよにや。言える範囲ならそうですにやあ……昔。

私たちが生まれる前の時代からちよつとはあつたらしいのですにや、

ねこみみ病……ケモノ化。でも昔なら目立ったら最後、物珍しさとか迫害って感じでお金と交換でどこかに連れて行かれるかさらわれるかだったり……あんまり言いたくない感じの目に遭っていたそうですにや」

「……そうですか」

僕でさえ、ちよつと考えたら想像できちゃうんだ。

きつと、考えたくもない人生になっちゃったんだろうな。

それを思うとこの時代で僕たちみたいになった人は幸運な方なんだろう。

僕のなんか魔法さんがついてるから言わなきやバレないくらいだし。

「そういう人たちはなんとかして長老とかの物知りな人……悪意がなくってなんとかしようとしてくれる人を頼って身を隠すくらいしかできなかったらしくって。おんなじような人が集まった隠れ里とかそんな感じの場所で静かに過ごした、そんな感じらしいですよ。ほら、天狗とか猫娘とかって妖怪とかっていかにもケモノ化、ですにや？」



「……ふう」

家の大掃除をしていた僕はタオルで首すじを軽く拭う。

思ったよりも疲れたし時間もかかった。

というかこんなに寒いのに、換気のために窓を開けっぱなしにしてるのに、夏でも汗をかきにくい体質になっているのに……それでもこんなに汗だくだ。

筋力と体力不足っていうのはこんなにも厳しいもの。

けど時間を掛けただけはあって大体目標はクリアだ。

鏡には、体じゅうを動かし続けていたからか顔が赤くなっていて汗をかいていて、そのせいで髪の毛が顔とかにうざったいかんじに張り付いていて、まだ肩で息をしているっていう銀髪幼女が……ふらふら

していた。

ああ、危ない危ない。

すぐに仕分けのために敷いてあるタオルの上に腰を下ろしてひと呼吸。

これだけ貧弱なんだから気をつけないとな。

この前のことを思い出しながら作業に没頭していたからつい今の僕はひ弱なんだって忘れちゃう。

こんなことで「僕の危機だ！」って魔法さんが思っちゃってまたなにか新しい魔法でも起きたら困るし。

「……ん」

顔を上げる。

そこにはごみ袋が10個くらいぎゅうぎゅう詰めになっている。

それだけ物を捨てることになった。

ほとんどが使っていないけどもったいないものばかりだ。

捨てるのはヤだけど「じゃあ使うの？ 何回も？」って聞かれたら

「そんなことないけど……」って感じの。

家の中はほとんどそんなものばかりだったな。

こんなことは前の僕のとくにやっておけばよかったって思うけど、そもそもつい最近まではどうしても必要なもの以外は捨てるっていう発想すらなかったんだからしょうがない。

こんな感じで家に帰ってくるたびに少しずつやっていけば、あと何回かで終わるはず。

大掃除が。

年末にするはずだった大掃除が……どうしても必要なもの以外をがんばって捨てるのが。

だって、こうして家の中をきれいにしておけば心置きなく僕はこの家を離れられるんだから。

魔法さん。

ねこみみ病。

若返りとかケモノ化。

最初の頃——同じような人が少なければ何ヶ月も拘束されるらし

いって聞いておいたから。

——もし僕のこれが前例の無いもので「隠さなきゃ」ってことになつて……僕が居なかつたものにされちゃつたとしても、叔父さんに迷惑をかけないようにしたいから。

「……………」

怖い。

もちろん怖いよ。

でも……こうしないと、先に進めないのはこの1年で分かつたから。

だから、そろそろ勇気を出すんだ。

さて、僕が1月からずっと「入院」しているのには理由がある。

あ、いや、もちろんあの強引な外国人のおじさんとおばさんが「心配だから」ってなにかと引き留めてきたって言うのもあるんだけども。

それはあの日……元旦の日にみんなに迷惑をかけた後の病院のことからだ。

僕が眠いのには検査を受けさせられてそのまま寝ちゃったときのこと。

「……むう、起きてはくれないか」

「どうやら心から寝ているようだね……世話を頼んだ彼女たちも『全然起きなかつた』と」

眠すぎるのにしょつちゅう移動させられて子供みたいにぐずりたい気持ちをごらえていた記憶が、彼らの声とともに戻って来ていた僕。

「検査も終わったことだし、きちんとした形で眠ったほうがよいと思うのだがのう」

「無理なのではないか？　いくらこの子が大人びていようが、この年では眠気にはな。看護師にでも任せるか……」

怖いかもしれない場所なのに本気で寝ちゃったって慌てて目を開く僕。

「……!？」

僕はもう1回目を閉じた。

……だって見下ろしてきていた2人の目はすごい至近距離で怖かったんだもん。

誰だつて起きて目を開けたらしわしわの顔が2個に片方が眼帯な顔が30センチくらいのところにあつたらびびるでしょ？

こういうのは心の準備つてのが必要なんだ。

「……おはようございます……」

「おお、起きてくれたかね……起こして済まない、ずいぶんどぐつすり

眠っていたから忍びなかったのだがな。そろそろ髪や肌についた血を流したほうがよいと思ってな……時間が経つとこびりついてしまうものだから」

「ん。
そういえば、あちこちが引つ張られる……乾いた血で……感じがするし、ちよつとやな臭いもしている。」

「……首から下の髪の毛も、みんな首に……肌もぱりぱりします」

「そうだろうね。乾かない血も乾いた血も不快なものだからね」

「うむ、人間の本能的な感覚だから仕方ないのだよ」

でもなんでこの人たちはよく知ってるようにうんうん頷いてるんだろ……いや、考えないでおこう。

裏社会とかは僕知らないし考えない。

怖いのは苦手なんだ。

起き上がってみるとベッドに寝かされていたらしいのが判る。

あの検査室じゃないんだなって。

どこかわからないけど保健室を思い出させる感じの部屋。

「軽く拭いて着替えただけなんだ。あのときは軽くの説明と、なに

よりも急いでの検査が必要だったからな。大丈夫だと君が言っ

ていたとしても不安だね」

まあなんか魔法さんに近いフシギなものについて知ってるとして

も、あれだけのスプラッターはそうそうないよね。

「……ありがとうございます。僕自身も心配ではあったので」

話しかけた人の認識をいい具合にしてくれる魔法さんがいたとしても、病院で精密検査とかしたら数値とかは変なことになるだろうし。

もし「成人男性なのにまるで幼女の体重しかありませんけど!?!」とか騒ぎになったら大変だし……そう思うとこの人たちの馴染みのところで調べてもらえたのは有り難いことだって思う。

「血は乾ききってしまったえばまだ良いのだが……今の君みたいに暖かくして寝かせておいたままだと生乾きの部分もあるかも知れん。

……事情があるとはいえ乙女の体だ、気になるところもあるだろう

？」

うん……乙女じゃないけどね。

でも髪の毛から鉄っぽくて生臭い臭いだもんね。

いつもならちよつと動かしたらシャンプーとか僕自身のいい匂いで良い気分になるのに。

だから多分貰った服で隠れてる体も臭ってるはず。

だってぱんつの中まで真っ赤だったんだからな。

犬みたいな臭いを通り越している幼女とか……。

「風呂のほうは？」

「もう予約は入れてある。……ああ、こんな病院でも介護用のもの

がちょうどあつてな、湯船があるからきちんと暖まれるだろう。君

自身でできそうなら君だけで、必要なら介助の用意もある」

お風呂を貸してもらえるってだけでちよつと嬉しい僕。

そう言えば昨夜はあんなことがあったからお風呂に入らないで寝ちやつたし……お風呂に入らない日なんて何年に1回つてくらいだもん、そりゃあ気持ち悪い。

生理的な気持ち悪さだ。

「手伝いは？」って何回か聞かれたけど全部お断り。

だって、そもそも前の僕だったところから……男だった頃から裸なんて、同性の人たちにも見られたくない性分だったんだ。

温泉とかでも見られたくないって本気で思うタイプ。

なんで平気な人って本当に平気なんだろうね……僕絶対ムリ。

男のときでも男のそれを見られないようにがんばってたもん。

「なら入り口まで案内しよう。……これからしばらく着てもらう服や、血で汚れてしまった……君が着ていたものと似ている服装も用意しておいたから安心なさい。どちらを選ぶも君の自由だ」

お家帰るって自由はないんだよね。

「君が検査を受け始めてから……そして寝始めてからおおよそ10……12、いや、15時間ほどと言ったところだ。ずいぶんと気持ちよさそうに寝ていたから起こすのがためらわれたのだがね」

血がついたまままでこんな感じにはささぱりぱりしているま

んまじや痛んじやいそうだし、臭いも染みついちやいそうだし。

せつかく今まで僕が、めんどくさくてもまじめに……調べたり、かりから教え込まれたりしてからはずっといねいに整えてきたんだ。

それがなにが悲しくて……シャンプー以外にコンディショナーっていうのも使って、タオルでぽんぽんって水気を取ってからドライヤーで長い時間をかけてゆっくりと乾かして、さらには枝毛に警戒して……っていうのを半年以上も続けてきたのにひと晩で台無しになるんだって。

あ、なるほど。

これが女の子が髪の毛を大切にする理由。

じゃあもちろん洗う。

それもなるべく早くに。

……魔法さんのおかげでそこまで痛まないはずとは思うけど、念には念を入れて。

しょうがない、丹精込めて育てた盆栽みたいなものなんだ、手塩に掛けるっていうものなんだからやっぱりしょうがないんだ。

「……ではお言葉に甘えて」

「うむ、それがいい。……ここは肉体的には同性のお前の方がいいだろうな。僕は先に用事を済ませてくる」

「わかった。それでは響くん。ゆっくりと起き上がってくれるかい？」

結局この人たち、なんで僕の名前知ってたんだろ。

あと僕が男だって分かってるっぽいし。

けどここで聞いて怒らせちゃうと怖いから黙ったこと。

今の僕はこの人たちのご機嫌を損ねると居なかったことにされても不思議じゃないんだもんな。

◇

廊下に出ると、来たときとは全然違って普通に人がたくさん居てちよつと安心。

明るい廊下、ひっきりなしの放送の声と音、靴とかスリッパや話し

声。

どう見ても普通の病院の廊下で順番を待っている感じの人がいっぱい居て、紙切れ片手に迷子になってる感じの人も居るくらい。

窓の外はちよつと夕方になりかけ……ほんとにずつと寝てたんだな。

看護師さんたちとかお医者さんとかともすれ違うけど、特段僕が見られるわけでもないみたい。

本当に秘密ってことで連れてきてくれたんだなって思うとちよつとだけ警戒心が薄れる。

でも改めて僕は臭い幼女なんだって意識すると、道を曲がったり立ち止まったりすると自分から臭ってくるのが分かって悲しい。

……これが昨日からずっと僕の体から出ていた臭いだって思うと、さつきまで一緒だったあの人たちとか僕を調べてくれた人たちにも嗅がれていたんだって思うだけですごく恥ずかしい感じがしてきちゃって。

男だって汗の臭いとか体臭くらい気にするんだ。

ましてや今の僕は肉体は幼女なんだ。

こんな感情が出てくるのは普通だよな。

うん。

◇

あつたかいお湯で体を、頭のとっぺんからじゃーっと流す。

体は寝起きだからあつたかいし、なによりもお湯をこの臭いで染めたくないからつてさつきからシャワーを髪の毛にかけている。

でもなかなか落ちない。

髪の毛の顔に着いていたのもお肌のも。

特に髪の毛はあつちこつちで束になってこんがらがって固まって
いるせいで、お湯をかけながらゆっくりとほどいていく作業で忙しい。

こんなことなら先にお湯に入ってほぐしておけば……いやいやお湯が汚くなるのは僕が生理的にやだし。

髪の毛をほぐしてから洗って、痛んじやうってわかっていてもやつ

ぱり臭いのはやだから2回3回洗って、効果があるかどうかはわからないけどトリートメントとかコンディショナーとか置いてあるものを何回も塗りたくる。

体も、特にお腹とお股、ふとももについたペンキみたいな血を落とすしていく。

置いてあるスポンジでごしごし……すると痛いから優しく優しく。いちばんの難敵はおへそとお股。

だってシワとかへっこんでいるところに血糊みたいにこびりついてちやつていけるせいでなかなか取れなかつたんだから。

平べったいところなら簡単に取れるのにね。

けど結局お股の汚れは中途半端で終わり。

だって指突っ込むのとか怖いもん。

男だったらいくらかマシだったかな。

いや、男のだってしわしわだし大して変わらないのかな。

そんなことを考えながら僕は、お湯で固まった血をほぐす作業と掻き出す作業を続けつつ……赤って言うよりはピンク色に染まった水が吸い込まれていく排水口をなんとなくで眺め続けた。

あんなに血を吐いたのにこんなにけろりとして体の汚れなんか気にできる余裕があるんだなあって不思議に思いながら。

「ふう」

お風呂は良いよね。

体があつたかくなつて臭いがなくなつて匂いになつてさらさらして。

僕はお風呂が好き。

どれくらいかかって言うときから男のときから夏は朝晩に入ったりするし、温泉じゃあ1日に5回とか6回入るくらい。

けど病院のつて言うから身構えたけど予想以上に良いものだった。浴槽は普通だったけど、僕の体に対しては大きすぎるつていうのは変わらなかつただけでもあちこちに手すりがある。

おかげで踏み台いらずで、お湯は結構抜かないと厳しかったけど……それでもなんとか気持ちよく浸かることができた。

「むふん」

すつごく満足。

今なら大抵のことにはYESつて言っちゃいそうなくらいに。そして服は渡されたのを着ている。

映画とかドラマで入院している人がよく着ているあれだ。

名前は知らない青っぽいやつ。

まあ着る機会なんてそうそうに無いんだしせっかくだし。

こういう特別な服とかつてちよつとわくわくするよね。

着た感覚としては温泉に行ったときとかによく着ている浴衣と大差ないもの。

ただ、前の僕で浴衣を着たときには感じなかったふとももが擦れる感覚つていうのが気になるといえば気になる。

なんでだろ？

あ、腰のところできゅつと締めていないからどっちかっていうとワンピースを着ているときの感覚に近いから？

それにふとももがつるつるだもんね、今の僕つてば。

けども今の僕でもきちんと着られるものが常備してあるつてすご

いね。

丈が合っているから、きっと今の僕の肉体年齢に近い子供用のはず。

まあ病院なら子供も入院とかするだろうし当然かもね。

そうじゃなかったらだぼだぼで身動き取れなくなるもん。

お風呂から上がって髪の毛を乾かしたりしていたら、いつもよりも長く……気が付いたら1時間くらいかかって体をきれいにしして、きちんと髪の毛もできるかぎりのケアっていうものをして。

途中で何回も外から「大丈夫ですかー」って聞かれて「がんこな汚れ落としてるのでー」って言ってたから大丈夫だって思う。

それで出たところで待っていた看護師さんに案内されて、またこうしてベッドに戻されたわけだけど……さっきのベッドが綺麗になつてる。

さすがにそうだよね……残っていた血とかで汚れていたシーツとか枕とかが変えられているのがなんとなくわかる。

こういうところでも迷惑を……つて、もう今さらだね。

ここまでお世話になつてるんだから大した違いじゃない。

まあ臭いのは勘弁だしありがたいんだけど。

……臭かつたんだらうなあ、僕。

やだなあ。

「！」

そんなことを考えながら周りの設備とかに目を向けていたら、赤ちゃんが開いたドアからマリアさんが顔を出してきた。

あ、頭がドアの上の枠すれすれだ。

2メートルあるんだらうか……あるんだらうね。

僕と1メートルくらい身長差だもんね……すごいね、人間つて。

「……ふむ。風呂が好きかな？」

「あ、はい」

「サウナも良いものだが湯に浸かるのも良いものだからね。分かる

よ。血色も良くなっているし安心した」

おばさんはずいずい入って来る。

……身長と体格とですごい威圧感。
でもさつきまでよりは怖いつて感覚は薄い。

この程度で単純だね、僕って。

と、お礼だ、お礼……言い逃しちゃうとなかなか言えないものだから先に言っておかないと。

「はい。ありがとうございます。おかげでとっても……生き返った心地です」

「そうかね。それはよかった」

「それで、僕の体は。……半日も寝ていて申し訳ないですが、聞いてもいいでしょうか。その……『変異』での『反動』……は、大丈夫だったんでしょいか」

ここに連れて来られるときに聞いた単語を使ってみる。

僕は知ったかぶりは得意なんだ。

良くないってことばかりが得意なんだ。

「ああ、心配はないそうだ。まずはそれが聞きたかったのだろうか？」
「はい、ありがとうございます」

多分「変異」ってのは魔法さんっぽい何かで「反動」ってのはげぼげぼ血を吐くことなんだろうね。

問題はどれだけ近いものなのかだ。

「あの検査は簡易のものだったが、逆に言えば十数時間前の君が本当に危ないのかどうかを調べたということ。そして君には健康上の問題は無いと判明したそうだから安心するといい」

「そうですか」

あんなに瀕死になったりはするけど僕は死んだりはしないらしい。

なんか不思議。

まあ魔法さんだし。

「……だが、あくまでそれは応急的なものに過ぎない。明日からは……さすがにこの後すぐということもないか。今夜は休んで貰い、明日からは何日か掛けて負担をかけないよう詳細な検査も受けてもらう予定だよ」

「ぼーん」って音がして……聞き取れないけどなにかのアナウンスが

聞こえて「ああここは本物の病院なんだな」って実感する。

「けど、やっぱりそこまでは」

「頼むよ、響くん」

ベッドに座っている僕に向かってのしかかって……じゃない、屈んできて両肩に手を置いてきてのぞき込んでくるおばさん。

「心配なんだ」

怖いけど表情はどう見ても心配しているもので、声音もまたものすごく真剣。

……こういうのを演技だっと思いたくない僕が居る。

「本当は……本当はね、君の保護者の方々の立ち会い、あるいは君たちが世話になっていている機関……いや、呼び方は違うのかもしれないだけれども、とにかくそちらでしてもらうほうが良い。君の機密を守る、我々に知られないで済むという理由から良いはずなのは理解しているのだよ。……しかし君を連れて来たときにも言っただろう？　なんらかの事情があつて君はそれを、そちらのほうで今現在は受けられない状態にある。そうなんだろう？」

ゆっくりと諭すように語りかけられる。

それは父さんたちが居なくなつてからいつも大人たちに、クラスの委員長みたいな子たちから言われていた感覚。

トラウマを負っている病人の僕を気遣う雰囲気。

僕の直感「今は知ったふりをして通したほうが良いんじゃない？」って言っている気がする。

「……ええ、はい」

何となく気まぎれくつて目を逸らしながら。

嘘はいけない。

それはさんざん理解してきた。

けど、僕の中のよく分からない感覚——それこそ今井さんみたいな「勘」が告げている。

この人たちのことは信用し過ぎちゃいけないって。

じゃあ誰を信用したら良いんだろうね。

けども同時にこの人たちは僕に危害を加える気はないんじゃない

かとも。

「君の髪は本当に綺麗だね……羨ましいよ。映画などに出たいかね？」

「断固として拒否します」

「ははっ……まあ私たちは表舞台に立つてはいけないからね。冗談だよ」

でも僕は知るって決めたんだ。

前の僕から今の僕になってから半年……もうすぐ1年か……だからだとした結果がこれなんだから、もういい加減に警戒が過ぎるのは止めなんだ。

それに、この人たちは……少なくとも今までのところ完全な善意で僕を、ここまで手助けしてくれている。

善意っていう貴重なものを与えられているんだから、少なくともこの人たちが僕のことをうざったいって思うまでのあいだは甘えておく。

今まではそう言うのを全部、気がつかないフリをして差し出された手をペしって振り払っていたから。

「それでは明日から順に君の負担にならない程度で頼んでおく。うむ……とりあえずは風呂に入ったことで疲れも眠気も襲ってくるだろう。少し早い寝たほうがいい」

そういえば、ぼーっとマリアさんを見ているうちになんだか眠くなってきた。

「そうだ、食事は必要かね？」

「いえ、食べなくても平気です。僕はもともと食が細いですし、むしろ今は眠気が勝っていますし」

「ならばゆっくり寝るといい。明日から別の部屋に移動してもらおう予定だからここで我慢してくれ。ドアさえ閉めたら静かなはずだしな……なにかあればそのボタンを押してくれば人を寄こす」

あ、ここで寝るんだ……狭くって保健室っぽい雰囲気な部屋だけだ。

「ああもちろん、君がここに居るのはイワンや私、事情を知っている者

ただだから安心するといい。この部屋の入り口にも目立たぬよう警護を立たせておく。いざというときには大声を上げてくれ」

え？

いざつてときが来る可能性あるの？

なにそれこわい。

「明日からの詳しいことはまた顔を合わせたときにしよう」

そうしてマリアさんが出て行って、ひとりになって。

……「いざつて例えばどんなときですか」って聞き損ねたなあ。

体も頭もベッドに預けてぼーつとしていると眠気と疲れが襲ってくる。

疲れ。

それはもちろん精神的なものが大半。

「ふう……」

もそもそと布団の中に潜る。

部屋の電気はつけっぱなしで、でももう起き上がるのがだるいからつて。

僕の呼吸の音と温かさだけを感じながら、ただただぼーつとする。

漂ってくるいい匂い。

……このシャンプーとかトリートメントの匂い、好きだな。

明日にでも聞いてみよう。

そんなことをぼーつと考える。

自然な眠気っていうものを感じながら。

こういう眠気つてとつても気持ちがいい。

……お酒、飲んでいないしな。

今夜は……いや、昨日から珍しく。

そういえばこうやってお酒を飲みたいっていう気持ちがない日もそれなりにあるんだよね。

やっぱり酒浸りつてただの習慣で、止めようって思うよりもそれ以外のなにか別のことがあるうちには自然と収まるんだろう。

だんだんと思考にノイズが入ってきて途切れ途切れになってきている。

頭の芯から白くなっていく感じ。

だっておおみそかで「嘘を告白するんだ」って緊張して行って、夕イミングを伺い続けて将来についてみんなに励まされて……「僕は男なんだ」ってようやくに言えて。

魔法さんも邪魔してこないし受け入れてくれたみたいだしって安心した……と思ったら息ができなくなって、苦しくなって血を吐いて。

「気持ち悪いなあ」って思っていたらマリアさんたちが来てくれて、とりあえずの説明っていうものをしてくれて、車の中で着替えて病院に連れてこられて。

もう眠いのには歩かされてよくわからない説明をされ続けて「もういいや」って検査も適当に受けて……途中からは完全に人任せにしちやつて。

普段の僕だったら絶対にしないようなことばかりを、ほんの1日でまとめてしたんだ、そりゃあ疲れる◆◆◆◆◆……ん。

また、この感覚。

魔法さんの――。

――そして僕はまた、居なくなつた。

ちりちり。

ちみちみ。

縦線、横線。

トンネル。

光。

闇。

知っている変な感覚が入り乱れた先には真っ黒な……いや、真っ黒じゃない、黒の中にいろんな光が入り乱れているようなそんな不思議な空。

その中に大きな月が浮かんでいる。

まん丸の大きい月が。

なんだかきらきらしている気もする。

青っぽい気もする。

僕の知っている月じゃないみたいだ。

目を横に向けると、下は……一面の血の海だと思う。

赤黒いつていう感じで、つい最近嗅ぎ慣れた血の臭いつていうのがむわってくるんだ。

つい最近に経験したばかりの血だらけつていうもの。

けども今のはそれよりもずっとずっとひどくつて悲惨な感じになつている。

ときどき体が揺さぶられてそれと同時になにかが聞こえてくるけど、それをなかなか聞き取れなくなつて。

けどその音……いや、声の主が近づいてきたらだんだんとはつきりとしてきた。

「……びき……ひびき!!!」

この声……覚えてる。

あの夢で会ったアメリつていう子だ。

たったの半月前に会ったばかりの子。

また、この夢。

でも僕の知覚は元日の深夜にみんなの前で倒れたときみたいに目はかすんで、焦点が合わなくてよく見えない。

でも月のはつきりと見えている違和感。

血の海も……かなり遠くのほうまで広がっているそれとはつきりと見えるんだから、これは近視に近いもの？

……そうだ、確かメガネが必要だった前の僕するときにはお風呂とかではこうして曇った感じになってぼんやりとされていて、なんとなくの形とか色とかで判断するしかなかったんだ。

僕の体感では半年とちよつと、現実世界ではもうすぐ1年前になる懐かしい感覚はこのせいだったんだ。

じゃあ僕は元の体に戻った？

それにしてはなんだか僕自身が小さい気がする。

「……死んじゃやだよ！ 起きてよ響!! 目を……ちゃんと私を見て！」

あいかかわらずに声ははつきりと聞こえる。

月も見える、星も見える、ふわふわ浮かんでいるなにかもぼんやりと見える、血の海も見える。

けど、肝心のアメリカ……黒髪に黒い目で今の僕を少しだけ大きくしたような子が、その子の顔が、目が、はつきりと見えない。

「大丈夫だよ」って言いたくても声も出せない。

「なんか大丈夫そう」って言ってほつとさせてあげたいのに。息をしているので精いっぱいらしい僕。

あのときに倒れたときとは違って……いや、この血の海的にはすでに吐き終わっているからか、今吐きそうな感覚がしてこないのだけは楽って感じ。

「……あなた、あんなにムチャしてっ！ あんなに前に……いくら必要だったからって、犠牲を出したくないからって前に出るから！ 過信しすぎなのよ、もう……ぐす」

ぼたぼたと温かい感触がほつぺたに……あ、気がついたら「僕」は仰向けにされていて、だから月が見えて、でもなんで下も同時に見えるているんだろ。

けどそんなのはどうでもいい。

それよりも「僕」を心配して泣きじやくっているこの子だ。

「今、みんなが来るからね？ ……ほんとにもう、前線で指揮を執らな
きやって言っても限度ってものがあるんだってばっ……あなたって
昔っからいつもそうで……」

この前とは違ってなんだか物騒な展開の夢。

きつと寝る前のマリアさんたちのよくわからない説明とかが倒れ
たときの記憶とごっちゃになっっているんだろうな。

あのとときだってよくわからない感じの夢だったんだ。

……きつと、この夢っていうものは僕がしたいこと、言いたいこと
を抱えているとき、いろんなものが頭を埋め尽くしていてごちゃご
ちやでどうしようもなくなっただけに出てくるんだろう。

だって前だって魔法さんでお隣さんがおかしくなっちゃったり、そ
れで僕が実は隠れられていなかったってわかつちやったり、普通にし
ていけば魔法さんが働くから前の僕じゃなくなっただけ今の僕でも平気
で生きていられるって知って、ヤケになっただけで。

それでみんなに嘘をたくさん重ねたことがずしんとのかかかって
いるっていうのが耐えられなくなってきたタイミングで見たもの
だったんだ。

今だってそう。

みんなに心配を掛けて魔法さんの暴れっぷりを目の当たりにして
いて、きつと心はまだ動揺しているんだろう。

「……ぐす、ぐす」

抱きついて泣いていて温かい液体……涙がぽたぽた落ちてきてい
るこの感じ。

倒れたときに僕の頭を抱えて泣きじやくっていたゆりかるとき
そっくりだ。

けど、あのととき。

……もしもあのとときにこんな感じで言って、少しでも安心させてあ
げられたら。

「……けほっ。

大丈夫だよ、アメリ」

「響!!」

せめてあのおとき、「僕自身は死ぬことはないんだ」って、「魔法さんっていうなにかで守られているんだ」って伝えられていたら。

「急所は外れているし内臓にも異常はないだろう。うん、大丈夫だ、すぐに治療を受ければ……死にはしないさ」

すらすらと……なんだか少し違う感じがするけど、でも今度は声がちゃんと出る。

意志を伝えられている。

あのおときにはできなかつたことだけど、せめて今、夢の中くらいではしてあげたい。

この変な夢もそうすればすぐに醒めるだろう。

醒めると良いな。

「……でも。でもでもっ、響、私を安心させようとしてやせ我慢してたりっ! だっていつもあなたはそうだからっ……何でも1人で抱え込んで。男の子だからって」

血を吐いて倒れて、それが止まらなくって……そんな状態の僕が大丈夫だって言っているけど、あのおときのゆりかもみんなもきつと信じられなかつた。

だからこの子も泣き止まないんだ。

「……ねえ、止まらない。止まらないよう、響の血……。『胸の傷』から出てきてる、その血が……ぐすっ」

胸?

……ああ、確かあのおときも口からは別に、胸のあたりからもじわりと熱いつていう感覚があつた気がする。

それをこの夢の中では、「あのおときにこうしていれば」って思って観ているだろうこの夢では、そういうことになっているらしい。

だからこそ、吐くのが止まらない代わりに胸にできたことになって、血が止まらないことになっているからこそ、こうして話せるんだ。

あのおときもそうだったなら、あそこまで苦しかったりはしなかつただろうに。

まあ夢だし、そのくらいはいい方向に変わっているんだろう。

きつとヤなあの体験を思い出しちゃった脳みそが勝手に作り替えているに違いない。

それにしても、空がとつてもきれい。

星空なんていつのころからか見なくなっていたから、とつても新鮮で。

明かり……いや、そもそも地上のどこにも光を出すものがなくつて、水平線が見えて。

だから明るくて大きい月が浮かんでいても星がいっぱい無数に見える。

他には何も見えないからわからないけど、でもきつとここはあのときのあの砂浜で、つまりはあの島で、だからここは冬眠のときに見ていた夢とおんなじ場所だ。

「……響く… ねえ、しっかりしてよ響!! こつちを見て、寝ちやったらダメなの! こういうときに寝ちやうと……っ」

周りを見ていたらのぞき込まれてきて、アメリカのシルエットと落ちてくる涙と髪の毛の先っぽだけがわかる。

けどアメリカだろうこの子の顔はあいかわらずに焦点が合わなくつて見えないんだ。

そもそもが明かりが月と星だけっていう暗さなんだし、さらに上からのぞき込まれているんだから例え目がちゃんと見えていたって変わらないはず。

……あ。

そんなことを考えていたら、ふと浮かぶ考え。

……あのときは気が回らなかつたけど……まあ僕自身のことと精いっぱいだったから後知恵だし、どうしようもないことだったんだけど……考えてみたら、あのとき。

車に乗せてもらってから着替えたりしてマリアさんとおはなしする余裕はあったんだし、あのときにひと言でもいいから誰かに電話で連絡さえしておけば……きつと今もすぐく心配しているだろうみんなも少しは安心してもらえたかもしれないのにつて。

……泣きじやくって、だんだんと泣き声が大きくなってきたアメリ。

夢の中の存在、つまりは僕の一部だとはわかっていてもこうして泣いているのを放っておくのは気まずいし、きつと起きた後もなんとなく罪悪感みたいなものが残り続けちゃいそうさ。

だったらせめて……うん、手は動く。

あのときとは違って、すつごく重いけど、でも、腕を上げられるみたい。

よく見えないからなんとなく触れたところ……アメリの髪の毛だったんだけど、それに気がついたアメリが……たぶん涙を拭いつつ聞いてくる。

「……響、どうしたの？ なにか言いたいことあるの？ 大丈夫よ、もうちよつとしたらすぐにみんなが来るから、だからきつと！ ……あ！ ほら見て、あつちのほう！ もう救助がつ」

「……アメリ、姉さん」

そういえば「お姉ちゃんって呼べー！」って言っていた気がするけど、でもなんとなくてこんな言いまわしになる。

「姉さん。『僕たち』はもう大丈夫だよ。それに傷も今止めたから、もう心配は要らない。だから安心してくれ」

勝手に口が動いた感じになっただけ「もう大丈夫だよ」ってニュースは伝えられたはず……それにしても変な感じだけでも。

まあ夢だから思い通りに行かないんだよね。

心理学の本とかでそういうのを見た覚えがあるんだ。

……む。

だんだんと周りが、お月様までもがぼんやりしてきて『僕たち』の言葉を聞いたアメリがなにかを言っているみたいだけど、あんまり聞き取れなくなってきた。

さすがに2回目だ、もうわかる。

この夢は覚めるんだ。

だんだんと「僕」が薄れてきた。

本当に、不思議な夢。

あ、そういえばスマホ、別に電波とか気にしないで良いって言われたっけ。

よし、それなら早速。

「……びびびびびびびび!!!」

「!?!」

体を起こそうとして腕を動かしたら何かに引つ張られる感覚とちくつとした痛みが来て、しかも大きな音が近くから……アラームかなにかが聞こえてきたもんだから思わず声が出そうになった。

起きたばつかりなのに心臓がばくばく言っている。

もう、何……また検査？

安眠を妨害された系の不愉快さに目を開けると……あれ？

「……………」

うるさい音に眉がぐつとなりつつ天井をにらんでみる。

……寝る前と、違う天井？

つまりここは別の部屋っていうこと？

けどなんでまた、寝る前と起きたときで部屋が変わるんだ。

……また検査とかで寝ぼけたまま抱っこされていたんだろうか。

けど、それにしてもうるさい。

寝起きの人間に聞かせていい音じゃないだろう。

僕は幼女なんだぞ、過保護くらいがちょうど良いんだぞ。

そのうるさい音は右側のすぐ近いところから繰り返し出ているみたい。

ちらつと見てみるとコードがいっぱいついていて、パネルとかボタンがごつい感じになっている、映画の病院のシーンとかでよく見る機械がある。

……こんな機械も、あの部屋にはなかったはず。

そして慌ただしいぱたぱたって感じの足音と硬い靴の音……この感じはドアの外から近づいてくるもの。

ノックもせずにボタンと開かれたドアからは——マリアさんと看護師さんたち。

ずいぶんと慌てた感じだけど、なにかあったんだろうか。

「！……ふう……良かった。君たちは席を外してくれたまえ」
マリアさんはせっつかく来た看護師さんたちをドアの外に追いやつて、ぱたんと閉める。

なんで？

「……起きたのかい……意識ははっきりしているかね？」

「え……ええ、まあ」

結構良い感じに寝た感覚があるからすっきりしてるんだ。

「……ずいぶんと久しぶりだね、響くん」

久しぶり？

……ああ、「よく寝たね」ってこと？

この人たちの故郷の国での言い回しか何か？

「大事が無くて、本当に良かった。……いつ目が覚めるのか分からなかったものだからね」

どういうこと？

「響くん。君はね——あの晩から5日。5日も目を覚まさなかつたのだよ。」

医学的には一切の問題が無いのに……ね」

え。

……また明晰夢を見て、それで何日も経っていて。

まさかこれって……プチ冬眠？

プチ冬眠とか何バカなこと考えてたんだろ僕。
多分また冬眠したって聞いて動揺したんだろうな。

今度は痛かった方の手を使わないようにして体を起こしてみると、
腕とか脚に何本ものコードが張り付いている。

吸盤……心電図とかの？

コードだらけで今の僕はまるでロボットとか人造人間的な感じになってる。

研究所で生まれたての的な。

なんかとつても動きづらいつて感じるけど、別に拘束とかされてるわけじゃないしでぼけーつて座ってる。

……するつと拘束とか出てくるあたりにマリアさんたちの強面に対する僕の印象がうかがえる……いや、だって信用したいけどなんか怖いし？

人は見た目なんだ。

「……まず、気分は問題ないかね？ 5日間も寝ていたのだがね」

「あ、はい。大丈夫だと思います……普通に」

「……その程度なんだね、君にとつての『反動』は。しかし心臓に悪いな……こういうのは、いつ見ても」

あ、確かに人がいきなり何日も寝ちやったら昏睡って訳で心配もするか。

「いや、君は悪くはない。悪くはないんだが、私たちにとつてはだね、ここまで強いそれは遠い昔……そう、故郷を出て以来だから」

……つて言うことは、この人たちも僕みたいな人を1回は見たことがある。

「響くん、改めて……良いかね？ 君はあの晩から5日……5日だ。

つまり今日は1月の6日となる。世間では正月というものが終わっているという日付なのだよ」

魔法さん。

今度はなんでなの？

冬眠、それもあのかるときは3ヶ月だったのに比べるなら5日っていう短い時間で済んだのだけはよかったんだけど……でも、それがまた起きちゃうなんて。

……薄々感じてはいたけどなあ……あの夢を見始めたときからなんとなく、そうなんじゃないかって。

僕が変な夢を見るのイコールで冬眠。

寝るのがちよつと怖くなる。

「君はあの晩……記憶がはつきりしているのか分からないから簡潔に話そう。君は私たちと一緒にこちらに来て簡易な検査を受けてもらい、その翌夕方に風呂に入ったりしてもらって軽く話した後すぐに寝入ったと報告を受けている。……ここまでは覚えてるかい？」

「はい……それから？」

「うむ。それからひと晩経ち、昼になっても起きてこないと連絡を受けたが疲れからだろうと待っていた。しかし夕方を過ぎ……さすがに寝過ぎだからそろそろこちらから起こそうとしてみたのだけれど、一向に目を覚ます気配がない。……だが君の年齢を考えたなら血を吐くという反動とあの騒動での疲れは大変な負担だったはずだ。だからともうひと晩待ってみた」

……なるほど。

冬眠に入ると、普通に起こそうとしても起きられないんだ。

「そして翌日。3日になるのだね、1月の。その日の昼を過ぎても起きようとしなない。だから声をかけたり体を揺すったりして起こそうと試みたのだが、それでも効かない。これは通常ではないと調べてみたところ、君の脳波も心拍もともに深い眠りにしている人間のそのままだ。それも生命維持機能も限界すれすれのところだ——つまりは尋常ではなかったのだよ。まるで冬眠だ」

そこまですても起きないとなると本当に冬眠って感じなんだな、魔法さんのこれって。

「……判断には非常に迷ったが」

僕の体から吸盤をぺこつぺこつて外していく。

「体温もかなり低くなつてはいるものの、心拍も呼吸も低いところで

安定している。そして君は私たちを頼った際、このことについてなにも言わなかった。だから私たちの判断の下で君のバイタルを監視しつつ、異常があるまではなにも手を加えないと決めたのだ。せめて点滴くらいはしようと言う意見もあったのだがね……」

点滴。

つまりは針。

それが僕の体に入ってくるっていうこと。

それは僕の体が傷つけられるっていうこと。

僕を攻撃しているって認識するのか、それとも見た目を著しく変えるっていうのに当てはまるのかはわからない。

でもそうされた場合、魔法さんが働いて点滴のセットごと吹っ飛ばすなんてことにもなりかねなかったから危ないところだったのかも。

高い機材が置いてありそうな病院の中で針が飛び回ったりしたら大変なことになっていただろうし。

もちろんそうならないかもしれないけども冬眠中は魔法さんが僕の体をコントロールしているわけだから、そういうのを止めることすらできないしなあ。

……この人たちは、詳しく聞かないでくれてはいるけど、どう考えでも魔法さんに近いそのことを知っている感じなんだ。

だからそんなことが起きたとしたって大丈夫なはず……だったのかもかもしれない。

もしそうなっていたらしようがないからって全部話していたかも。

でも、そうはならなかったんだ。

「……その顔色だと、特に具合が悪いとか脱水だとかも無さそうだね。

……悪いが君が気がつく前に先に話してしまうと、一応君には寝たきりの患者用の……はつきり言ってしまうえば、おむつというものをだね」

え？

おむつ？

子供どころか赤ん坊みたいにされてるの？

え？

「ああ、安心してくれ。医療従事者ではあっても女性に頼んだよ」
いや、そっちの心配はしてないけどさ。

「ごわごわとかはしていないけど……え？」

「そのような感じで、君に対してはそれ以外のことを……寝返りの世話だけは数時間おきにさせておいたが、それ以外のことは本当になにもしていない。した方がいいという意見も多かったが、君からそれを頼まれていないということを押し切らせてもらった……なにしろ排泄さえ確認されなかったからね。それは正解だったようだ」

人は水分を摂らないと3日で死ぬ。

それを知らないはずはないのに、それでもあえて僕に何もしなかった。

……魔法さんみたいなので動かない人は死なないって、知ってる……？

「……落ちついているね。ということはそれは、その強さの反動は

——良く、あることなんだね？」

「えつと……はい。このタイミングでまたなるとは」

「……そうかい。幼いのに君は……」

冬眠。

いずれまたなるんじゃないかっていうのはクリスマス前に目が覚めてからなんども考えていたことではある。

けどまさかこんなところで……いや、運がよかったんだよね、きつと。

もしこれが年越しのときとか倒れたときとかだったらあの子たちにもつと心配させたはず。

まあ血を吐くのとどっちがって感じだけでも……いや、さすがに血を吐く方がインパクトでかいよね……。

今回のも何が原因なのか分からない。

ただの偶然なのか何かしらのトリガーがあるのか……規則的に来るのかも分からない。

けど今回はたったの5日っていう、前回から比べるととっても短い……けど、よくよく考えてみたらやっぱり寝て起きたら何日も経つ

ていたってというのは困る。

でもでもあのとときみたいにくヶ月っていう季節まるまる飛ばすなんてことにはならなかったんだ。

……この違いは何なんだろうね。

「反動はね。　そもそもそんなに長引くものじゃないんだよ」

　　マリアさんが言葉を選びながら言う。

「君が他の人……同じような人たちのことをどこまで知っているかわからないから、もし知っていたら済まないけれどね。　しかし、よほどの反動というものを抱えている人でも複数の日を跨いでのもそれというの……私でも見たことがないんだよ。　長年の経験で多くのそれについて知っているからこそ、余計に君が心配になる」

「……そうですか。　」迷惑を」

「いや、迷惑なんてことじゃないんだ。　ただ単純に心配で……そう、誰だって、例えば路上にうずくまって苦しそうにしている人がいたら心配にもなるだろう。　それが知り合いや身内だったとしたのなら、なおさらだろう。　それと同じなんだよ。　ましてや君は、私たちと……」

　　そこで口を閉ざしちやう彼女。

あれ？

　　その先ってあれかな？

「ここまで聞いたら仲間になってももらわないとねえ……けけけ」って感じなの？

「通常であれば反動の後にはひと月も安静にしているなら自然に、完全に治まるものだ。　精神や肉体に過剰な負担をかけてはならないのだよ。　西洋医学的に言うならば絶対安静というものだ」

　　そうなの？

あ、だから……冬眠明けにはビルの中で逃走劇を手伝ったりしたり、その後は雪かきとかしてたりしたから？

「君の場合にはそうもいかないのかもしれないがね、私たちとしては最低でもそのくらいの期間。　つまりは2月の頭くらいまでだね、それまではここにいて私たちの世話を受けてもらいたいと思っている。」

無論、強制ではない。君が数日で出たいと言えば、君の意思を尊重する」

僕の両手をぎゅっと包み込む……冷たくってごっごっしてしわしわのお手々。

……やっぱりこの人たちは魔法さんみたいな何かを知っている。

それはねこみみ病って言うのとはまた違うものってのも分かる。

だって僕が血を吐いたり何日も寝ちやったりするのを「そういうこともあるよね」って感じなんだから。

つまりは普通の人たちじゃない。

僕はこの人たちとおんなじ？

それとも違う？

——それを知るには聞かなきゃいけなくって、そうすると僕はこの人たちの面倒になるって簡単に予想がつく。

けど、魔法さんが何をするか分からない。

これを口にしたらどうなるのかが。

「もし君自身と、君の保護者の方たち……連絡してから判断してほしいところだが、そのどちらが良いというのであれば。どうか、私たちが安心させてもらいたい。できるならここで先の期間は経過観察をさせてほしいのだよ。欲を言うのなら君の『変異』や『変質』についても尋ねたいところだが……こちらは無理には言わない。とにかくここにいてほしい、面倒を見させてほしい。ただ、それだけなのだよ」

マリアさんもイワンさんも、たったの1回しか会っていなかったはずの僕を助けてくれて、ここまで心配してくれている。

心配させている。

でも僕自身も心配なんだ。

「また数日後に何か起きるんじゃない？」って。

「また何日から何ヶ月寝ちやうんじゃない？」って。

「起きたら血まみれで何ヶ月経ってました」って。

……僕は、決めた。

人を頼るって。

「わかり、ました」

「本当かね？」

「はい……でも、申し訳ないですけど、僕のこれのことをお話することはできないと思います。でもここで静養……安静にするくらいなら僕の方からお願いたいくらいです」

もし今度別の何か起きてても、誰かが傍に居てくれる。

迷惑を掛けたくないって気持ちより、そうして安心できる気持ちの方が濃いんだ。

……相手から「いいよ」って言うてくれているなら、甘える。それくらいはしても良いのかもしれないって。

「さうにお世話になりますし、また迷惑を掛けてしまうかも」

「迷惑ではないよ……ともかく良かった。ああ、すぐにあいつも連れてくる。きつと喜ぶだろう……少し待っていてくれないかね？」

そう言い残したマリアさんはものすごい大股で……頭をドアの上の枠にぶつけそうでひやつとしたけど大丈夫だったみたいで、あつという間に部屋から出て行った。

……世話焼きっていうのなんだろうな、あの人たち。

事情があるにしても、見ず知らずの僕をここまでなんだもん。

——裏に何かがあるのかもちらつとは考えるけど無視する。

……そういえば飛川さんも叔父さんもこういう感じだったっけ。

いや、思えば学校の人たちも近所の人たちも……父さんたちの事故を知っている人たちは、そんな感じでよく話しかけてくれていて。

僕はそれに気が付けなかったから何度いろんなこと言われても「結構です」ってはねのけちゃっていたんだ。

けどもそれはあの人たちにとって……悲しいことだったのかもしれない。

それは今までに、前の僕を氣遣ってくれていた人たちみんな、ひよつとしたらそうで。

……だから僕は初めっから間違っていたのかもしれない。

けど今、それを……僕の意志で初めて理解して、受け入れたのかもしれない。

僕を心配する気持ち。

僕はこんなことになってからようやく、気恥ずかしいその気持ちを受け入れられるようになったんだ。

ちよつとだけ、大人になれたんだ。

僕は鬱々としていた。

病院のベッドの上で。

病室って言う無機質な空間……いや、私物と貢ぎ物で結構僕好みに
なってるけども。

でも僕は凹んでいる。

ああ、また来る。

今日も絶対に来る。

来ちゃう。

「はぁ……」

お年寄りも朝が早いからなのかは知らないけど、午前っていうこの
タイミングで……平日だからみんなからのお見舞いもないってわ
かっているからか堂々と来るんだ。

あと「悪いなあ」って思っちゃって断り切れずにずるずる来ている
からとつくに最初に言われていた1ヶ月っていうのは過ぎている今
日このごろ。

だから来ちゃう。

それはもうほとんど確定。

隅っこの病室だからこそあんまり人が通らなくて……だから近づ
く足音が僕に向けてきていているんだってわかっちゃうんだ。

読んでいた本にしおりを挟んでぱたんと閉じて、ドアのほうを向い
ておこう。

ふたりぶんの足音はドアの前に来て止まって、軽いノックだけをし
てがらっと開けられる。

うん、病室って鍵とか無いからね……それだけで僕にはストレスな
んだ。

「やぁおはよう響ー！ 今日もいい天気だな、うむ！ いつもどおりに
知性と美が輝いているな！」

やっぱり外国の人の語彙って特殊だよな。

「……マリアさん、おはようございます。はい、今日も快晴ですね。

外は寒そうですけど」
のそりと入って来るマリアさん。
イワンさんの方はさらに背が高いたらドア枠をくぐるように入ってくる。

「ところで響！ 今日新しい店がオープンしたと聞き、朝一で並んで買ってきたぞ！ 若者に人気だというスイーツを！ 今日も皆で食べようではないか！」

ああうん、今日もお元気ですね……あと結構にミーハーですよね……。

おじいさんとおばあさんだところは行かないだろうし、やっぱりおじいさんとおばあさんな年齢なんだろう。

「ああもちろん、響とこいつのものは甘さ控えめとビターを選んできたぞ！」

「……ありがとうございます」

ものすごい笑顔で近づいてきたマリアさんが枕元の机に紙でできた箱……たぶんケーキ系の柔らかいやつなんだろうな、それを自信満々で置いて僕を見ってくる。

まるでおばあさんと孫だ。

僕はふたりのお孫さんとかじゃないんだけどなあ……。

どう考えてもそんな扱いだよなあ……。

最初っから僕のこと気にかけてたのって、もしかして猫かわいがりする孫が欲しかっただけなのかもなあ……。

ほら、最初会ったときも「怖がらないでくれた」ってのが最大のポイントだったみたいだし。

「……なあ響。嫌なら嫌だと、はっきり言っても構わんだぞ？」

最近のマリアは少々浮かれすぎているからな、びしっと言わねばならぬのだ」

「なにを言うイワン。こんなにかわいい響の世話ができるのだぞ？」

それに響は嫌がっていない。なあ響？」

どっちももうちよつと距離を置いて貰えろと僕とっても嬉しいかなって。

でも何回言っても聞かないから多分通じないんだよね。

おんなじ言語を使っても。

「待つが良いマリア。響は儂と今話し始めたのだ、しばしのあいだ待つてもらおうか？ なにしるお前は話し始めるとなかなか終わらないからな、先に儂に譲るのが筋というものだろうか？」

いつも通りにケンカするほど仲が良くなりそうだ。

僕は目を逸らして枕元の箱を開ける。

あ、美味しそう。

「おいおいイワンお爺さんや？ 先ほど貴様の部下から泣きが入ったぞ？ お前、今朝はなにやらの用事があつたらしいじゃないか。それを丸投げして私たちの会話に無理に合わせなくともいいのだよ？

そのぶん私と響だけで盛り上がるからな。なあ響？」

あー、こういうときはブランデーか赤ワインが欲しいなー。

「はて、なんのことかのう？ そもそもとして儂と響の会話に……それも、貴様のようにただべらべらと話しているのではなく、静かな会話という上品な時間に無粋は要らぬのだがのう」

この人たちってば素で怖いんだよなー。

「そのせいで貴様の代わりに私と私の響との時間がわずかでも取られたのだがね？ それはどうしてくれようか？ なあ響？」

「お主はいつも、いつもそばにいないか、儂の響のところへ。」

女同士ということを利用してからに……でも儂だって！ 儂

だって、たまには響とお前抜きで戯れたいもん！

何がこの人たちをここまで駆り立てるんだらうねー。

「いい年した爺さんが、その話し方。恥ずかしいとは思わんのか？」

でもマリアさん、あなたもイワンさんがいないときたまに「でちゅねー」とか言いますよね？

僕、そこまで幼く見える？

いや、肉体年齢的には……あと外国人的には幼く見えるんだらうけども。

「はて、知らんなあ？ さて響、マリアにもうすぐ来るだらう電話が始まったら昨日の続きを話してやろう。君は頭がいいからすぐに理

解してくれるし、しつかりと覚えてくれるから話し甲斐があつて爺さんは嬉しいよ。 ああもちろん、昨日話した――」

スイーツっていう存在の中で比較的マイルドな味のそれを僕が口に入れているのを30センチ未満の至近距離で眺めてきているおじいさん。

怖いんだけど？

でもいつもだから慣れちゃつてる僕がいる。

「おい、お前」

『ロマンノフの財宝』、あるいは別の呼び名でも良い。 とにかくは失われたはずの莫大な財産だ。 大変にロマンのある話だし、それらしき信憑性もあるかのように聞こえる話なのだがな、それらの内世間に流布しているものは皆嘘っぱちであつてな？」

徳川の埋蔵金とか言うよねえ。

そういうのってどこにでもあるんだね。

でも実際ほんとにあつたりするのもたまにあるらしいから全部が嘘じゃないって思うよ。

「しかし実のところ……これから今日の本題だぞ響。 実際にはそれに類するものを……もちろん一般人が戯けた夢想をしているものではないのだがな？ それを農らがな？」

「この糞爺が」

「……はて、可笑しな言葉が聞こえたのう……それは、お前からかか？」

そうして始まるふたりの威圧感と筋肉の応酬。

僕が「そろそろ止めて？」って言うまでのじやれあいみたいなもの。 仲が良いほどにやつなんだろうね、きつと。

それとも部下の人たちがいる前じゃできないから？

まあどうでもいいけども。

ぎやいぎやいしているふたりを見上げながらもぐもぐする僕。

ちらちら僕を見ながらだし、多分この辺も僕を気に入っている理由なんだろう。

だって身長2メートル超えの筋肉たるまたちが傍でケンカしてる

んだもん、なんか猫かわいがりされてるっていう立場じゃなきやこうして安心してもぐもぐできないもんね。

廊下とかでの言い合いを止めたりすると、お付きの人とか護衛の人たちが僕のことすごい顔で見てるし。

……そんな僕たち。

もう2月も半ばだ。

つい何日か前にお見舞いに来たあの子たちにチョコをもらっちゃったっていうのがあっても、僕はまだ居座っているんだ。

つまりこの入院はもう、1ヶ月半になるといふことだ。

……さすがの僕でも毎日こうして話していればほだされる。

知人から友人に……この人たちの場合は家族みたいに感じるほどに。

15年ぶりくらいにそういう感じがするからか居心地が良くなって、だから引き留められるたびにずるずるとここまで来ちゃっている。

でも、家の方もあらかた片付け終わって準備も整っているし……そろそろお別れしないとって思う。

こういうのっていつするのかってきっぱり決めないと……いつまでもこのままでもいいやって思っちゃう悪いクセがあるってよく知ってるから。

この人たちとも「退院」でお別れ。

あの子たちとも「引越し」でお別れ。

あの家とも——あと1ヶ月で、お別れだ。

……あ、そうだ。

僕があの家から出て行っても魔法さんはあの人に留まるんだろうか？

それとも僕に憑いてくるんだろうか？

多分憑いてくるんだろうね。

誤字じゃなくて。

まあ憑いてこないならそれはそれで良いこと。

それは、1ヶ月後に分かることだ。

48話 彼の、準備 2 1 / 7

家の中が静かになった気がする。

いや、多分これは僕の勘違いとか感傷とかじゃなくって本当にそうなんだろう。

だって物がなくなったんだから。

まずは玄関。

どうせもう使えないのと使えなくなるのと踏ん切りをつけるのと靴箱やクローゼットは空っぽ。

高かったしもったいたいなんて思っていたちよつと高めのコートとか靴は今の僕には要らないもの。

僕自身やかかりが選んだ……8割方がりだけ……今の僕が着られて履けるそれらも外に出るための1揃いだけ。

玄関の外まで掃き掃除もしたし、これで誰かが家を尋ねてきても空き家だと思えるくらいにはなつたはず。

次に廊下。

案外といろんな物を棚とかで置いていたんだなあと感じる。

なんにもないって無意識に思っていたけどそこそこにものがあつた、この長細くてかくつと曲がつてさらには上の階へと続いているこの空間もモデルルームみたい。

もつとも、あの僕が落ちた場所……魔法さんが守ってくれた代わりに床と壁がばりばりになつちやつたあそこはどうにもならなかつたからそのままだけども。

居間や台所もウィークリーマンション程度には物を残したけども、それ以外にはなにもない感じにした。

意外にも数年どころか10年前のお手紙とか書類が残っていたりして、片づけるのに時間がかかつたところ。

あとは、父さんたちの後の片付けで気がつかなかつたような古いものとか。

テレビの裏の配線もお掃除が大変だったし、いらないコードとかかくつたままになつているのを発見したりしたし、適当に置いて

いたり母さんたちが置いていたりした飾り物とかも、どうしてもつて
いうの以外はみーんな家から出しちゃったから本当に生活感つてい
うのがなくなっている。

台所だつて調味料とか以外は処分したし、なにげに汚れとかを落と
すのにいちばん苦勞したただけあつて見違えるようにきれいになつて
いる。

これなら誰かが来てすぐに住んだつて、食材さえ買つてくれば文句
はないだろう。

うん。

これなら大丈夫なはず。

納戸。

父さんたちが死んでから適当に押し込めていた物もみんな引つ張
り出して、ひとつひとつ選んで……結局僕関係以外の物は捨てられな
かったんだけど、そうして整理して、いっぱいだった部屋も4分の1
くらいにまで物を押し込むことができた。

いちばん多かつたのが僕の服とかだったけど、それもみーんな捨て
たからすつきりした。

小さいころの服とか……今の僕になつたばかりのころこそお世話
になつたけど、今はもういらぬもんな。

あとは学生服とか昔着ていた服とかカバンとか、なんとなく捨てら
れずにいたものも……まとめてみんな捨てた。

おかげですつきりしたし後戻りできない感じが漂ってくるし、これ
でよかつたんだろう。

人によつては大学生になるときに家を出るんだ、それを考えた僕
のそれは遅すぎるくらいだもん、踏ん切りつてのが必要なんだ。

階段を上つた先の2階も廊下から綺麗。

僕が使つていない部屋は父さんと母さんのだからさすがに掃除す
るだけだったから、ここも納戸同様に少しの捨てられない物はあるわ
けで。

あとは叔父さんや次の家主に任せよう。

他人任せだけど、家を引き払うつていうのはそういうことなんだろ

う。

持っていける可能性のあるものはリュックひとつぶんしかないんだしな。

そして、今朝使った櫛とかの必要最小限のもの以外はなくなった洗面所に続いて僕の部屋。

本棚は空っぽ、押し入れももちろん捨てられない物以外は空っぽ。本当に必要かって考えたら要らない物ばかりだったところもみんなすっきりしている。

捨てるときにはものすごく爽快だったっけ。

子供のころに使っていたおもちゃとか文房具とかあったけども、全部僕以外に価値は無いものだから捨てた。

服だっかがりに選んでもらった物だけは残したけど、それ以外は何もない。

今日出て行って、そのあとに帰ってこないかもって枕カバーとかシーツまで今朝のゴミで捨てた。

もう後戻りはできなくなっているし、そうしたんだ。

……改めて見回すと、要らない物ばかりに包まれて暮らしてきたんだね、僕って。

この家で、父さんたちがいなくなってから15年ものあいだ、ずーっと……ただ暇を潰すためだけに生きてきただけ。

でも、そんなのも今日でおしまい。

今日の夜にはきつと、ここじゃないどこかにいるんだ。

……掃除したときはすっきりしていたけど、いざこうして慣れきっていた家の中ががらんとしちやっっているのを見ると、よそよそしく感じるようになっていっていると寂しさっていうものを感じる。

けど掃除して捨てているときにはそうは思わなかったんだよなあ。

やっぱり体を動かして……顔には出ないけど気分がハイついているものになっていると判断力が鈍るんだろうか。

◇

「家の中、もう1回確認しとこ」って、多分心残りがあったせいで出かけようって思ってからさらにぐるっと見回しながら歩いてきて、ベッドでしばらく……もうシャツもないからさらさらしていないけど、横になつてぼーっとして。

することもないけど動きたくもないって具合だったから、この1年ですっかりとクセになっちゃった、の毛いじりをしていた。

……陽の光に当たると透けるし、なんだか虹色っぽくなる今の僕の髪の毛。

触り心地がいいもんだから、こうしてくるくると持ち上げて触るのがいつのまにかクセになつていて。

あ、枝毛。

連れて行かれた先で……当分は忙しくなるだろうけど、そのあとに髪の毛、何時間かかけてきれいにしたいなあ。

それくらいの自由はあるだろう、たぶん。

この国の人権意識って言うのを信じよう。

数分で腕が疲れてきたから力を抜いて、腕がどさつと落ちて跳ねてまた落ちて髪の毛もぱさつと……何本かが顔にかかったから、ふつと息を飛ばして横にやる。

いつもの僕の、なんにもやる気がしないときの暇つぶしだ。

だけどまさか身辺整理っていうものをするだけで……いくら体力もないしたくさん寝なきやいけない体だからって、時間がかかるとは言っても、それだけで1ヶ月近くかかるなんてね……おかげでもう3月だ。

だらだらしていたつもりはないんだけどな。

退院してから2週間。

外はすっかり暖かくなってきた。

もう少し遅かったら掃除をするたびに汗をかいて大変だったにちがない。

けども、そのおかげで気持ちの整理をつけることもできた。

ひとつひとつを手にとって考えて、でもやっぱり捨てる物だなんて感じる物が大半だったから、きつと僕にとってはいいいことだったんだ

ろう。

大切な物は捨てられちゃうかもしれないけど、でも誰が見ても「思
い出の品なんだな」って分かるようにはしてあるんだし、捨てる前に
叔父さんのところに持って行ってくれるって信じたところ。

連絡先も残しておいたし、常識的な人なら……機密とかにならない
んだったら、きつと届けてくれはするだろう。

……それ以外には、リュックの中身と今着ているものと、後で履く
もの。

それと、今までの記憶っていう僕自身の中にあるもので充分だ。

思い出。

こうして振り返ってみると「そんなに悪くもなかったな」って思え
る前の僕としての人生と、たったの1年にも満たない期間だったけ
ど、でも、今の僕として生きた新しい人生。

ちよつとばかりおかしなことにはなっていたけど、でもきつと……
こうならなければ決して体験することのできなかつたなにかを手
に入れることができたんだ。

だって、もし僕が前の僕のまま、男のままだったら多分今も……こ
れまでの10年とおんなじ生活だっただろうから。

こんなにも知り合いが増えていろいろ考えることなんてなく、ただ
ただ毎日を消費していただろうから。

ふわっと、開けっぱなしの窓から入ってくる風が暖かくていい匂い
を運んでくる。

そういえばもう丸1年のあいだ、こうしてカーテンを開けて窓を開
けっ放しにするのってなかったんだ。

無駄に考えすぎて隠れようって思い込んじゃって、気持ちよかつた
はずの去年の春も夏も……秋はどうしようもないけどあと冬もほと
んどいかなかったことになるんだし。

明るい光と気持ちいい風。

そういうものを今の僕になってようやくにこうしてぼーっとな
がら感じていられるんだ。

それがとても新鮮で嬉しいものだったっていうのを、改めて感じる。

片付けをし始めてからは暇つぶしにネットとかをする気もなくなっちゃったし、かといって本もほとんど処分しちゃったし。

それになんだかお酒を飲む気分にもなれなくて、だからぼんやりとものを考えて……思い出す時間が増えたんだ。

僕には、それだけでいい。

もう心残りは無いな。

うん。

そろそろ僕もひとり立ちつてのをしなきゃ。

普通の人は誰だつてそうするんだから。

ちよつとだけ遅くなっちゃったけども、まだやり直せるだろうって。

僕はいつものように、そして最後かもしれないベッドからずり落ちるような降り方をして、これだけはつていうものを詰めたリュックを見て、もういちど中身を出して確認する。

いろんな書類……権利書とか口座関連とかハンコとか。

「遺書」だつたり「遺言書」だつたり「保険」だつたりとか。

……うん。

外に出るためのものは、揃っている。

これで大丈夫なんだ、きつと。

家の中を何回行つたり来たりして、無駄に上り下りもしてつて未練がましくしていたけど、先に体力の方が尽きそうになってようやくに諦めがついた。

これ以上動き回っていたらこの先の予定がおじゃんになる。

ここらが潮時だ。

「……………」

わかっているんだ。

現代の社会でこんなことになって、国の保護を受ける。

酷いことはされない。

わかっていたんだ、大丈夫だつていうことは。

むしろその後のほうが大変だろうつていうことくらいは。

少し息が上がっちゃつて、寝心地のよくないベッドの上でゼーゼー

とうるさい息を整えるまでしばらくまた髪のお世話になって。
枝毛の数を20くらい見つけてげんなりしたところで気分転換終了だ。

「……行こう」

日記帳だけを机の上に出しておいて、広げておく。

こうして踏み台を使ってイスに座るのも最後かも。

いや、帰ってきて書くのがあるからあと1回あるのか。

それで同じように……結局手書きとデータと両方でずっと記録してきた、僕の几帳面さを発揮した日記を書くためにパソコンもまだつけたままにしておいて。

ん。

ハードディスクの中身とか履歴とかのこと忘れていた。

けど……ま、いつか。

普通の男ならきつと気になるところか「万が一のことがあるなら絶対消して！」ってなるだろうけども、でも悲しいことに僕は前の僕のと時から恥ずかしいものなんて興味がなかったから見てこなかったんだし、だから他人が隅から隅まで見たとしたって何のおもしろみもない中身だろうから。

見られたくないデータっていうものがそもそもないんだから。

せいぜいがこのパソコンで楽しんだ娯楽くらいかな？

けどそれだって大したことないんだ。

そういった類いのものがひとつもないんだ、調べる人はさぞがっかりするだろうけども、遺品整理をする叔父さんとか調べる誰かに負担をかけないって考えるのなら悪くはないんだしな。

とん、とイスから降りて、とんとん、と階段を歩いて、とんとんとん、と手すりに掴まりながら階段を降りていく。

そうして玄関まで来て靴を履いて。

鏡で髪の毛だけを軽く整えてから、僕は、手を伸ばして鍵を回す。

……それじゃあ、行こう。

みんなにおわかれを言いに。

まずは喫茶店。

収録があるらしくって朝一でしか会えないっていうことだったから、こうしてまだほとんどお客さんがいない中、僕たちは会っている。「……じゃあご病気でご入院っていうことですか？ いや、びっくりしたけどよく考えたらなんかそんな雰囲気ある気はしていたんだよ、響くんって」

「そうですか」

今朝はいつものポニーテールじゃなくて下ろしたままで、僕としてはこっちの方が年相応……中身に似合っているって感じる髪型になった岩本さん。

サングラスと帽子のセットをしているし、服装も地味。

「屋内でもサングラスとか見えづらくないの？」って聞いたけど、それ用のだからほとんど暗くならずに見えるからいいんだとか。

まあここまでの格好をしているなんてのはきつと、これまでとは違って個室とかじゃない普通のチェーンの喫茶店だからだろう。

大変そうだな、有名人って。

好き勝手に出歩くことさえできなくなるんだから。

「ということは、しばらく……じゃないんだよね、当分のあいだ会えなくなるんですね？」

「はい。……まだなんとも言えませんが、そんなにかからないかもしれないし、場合によっては……年単位でかかるかもしれないんです。いろいろと教えていただいたりしましたし、なによりもせっかくお知り合いになったおふたりにもご挨拶をしておこうと思いついて」

片付けをしたとはいえ、僕の性格上すぐにこのあとのことをできるかって考えたなら、尻込みしたりめんどくさがったり昼寝しちゃったりお酒飲んじやったりして「また明日でいいや……」っていうことにな

りかねない。

だったらいつそのこと今日は予定を詰めちゃって、できるだけ外で過ごす。

そうして帰ったらすぐに連絡してってしたほうが確実に僕自身を動かせるって考えたからこそ、まずはこのふたりへ会いに来たんだ。人に迷惑かけるって考えると、僕の習性上絶対に遅れたりできないからな。

嫌ってくらいに僕自身のことをわかっているのが功を奏したって言うやつだ。

僕のことには僕がいちばん知っているんだから、それを使わない手はない。

「ご病気、持病ですかにやあ。体の線が細いなあ、中学生にしてはズいぶんと小さいにやあ、そう思っていたんですけど……そうですか、ご病気でしたかにやあ。病院に通ってる子は私の友だちにもいますけど……まあ響さんほどじゃないでしょうけど、いろいろと大変なんですにや？ 会えなくなるのは残念ですけど、もう会えなくなるっていうことじゃなさそうですし、なによりもご病気、治るのならそれはとつてもいいことですよにや」

今日はとつても残念だ。

なぜなら島子さんが……収録って言っていたし、予定があるからしょうがないんだろうけども……肝心のねこみみとしつぽが隠されてしまっているから。

しよんぼりだ。

僕はしよんぼりしている。

ねこみみは大きめの帽子……ベレー帽っていうのなんだっけ、その下で恥ずかしがっているときみたいにぺたんとしてしているんだろけど、しつぽはどうしているんだろ。

少しダボダボ系なパーカーを羽織っているし、腰とかおなかに巻き付けたりして隠しているんだろか。

本当に万能だね、パーカーって。

その気になればフードの中におみもしませそうだし。

今まで僕もさんざんとお世話になったんだしな。
だから今だつてこうして僕も羽織っているわけだし。

……今の僕になったばかりに出かけた先のかかりに選んでもらったものだつていうのもまた……安心するんだ。

「……あの、それで……」

「あー、ひかりさんですよ。ごめんなさい、ときどきあーなつちやうんですよ」

あいさつを済ませて島子さんと話していたら聞こえてきた、ブツブツ言っている感じの声。

よく聞き取れないけど、なにか良くないことがあつたらしい。
なんだろう。

「……ひかりさん？」

「……」

「言っちゃいますよー、いいんですかによー？」

「……」

返事がない。

何かに相当なショックを受けている様子だ。

「よし、イヤだつて言わなかったらそれは同意ということでもいいですよ？」

それってなんか悪徳セールスっぽいけど良いんだろうか。

「……」

「沈黙が答え。よし、許可取れましたにやっ」

……島子さん、なんか普段とは違う感じで、少しいたずらっぽい目つきになつている。

猫っぽい印象の目に。

一方の岩本さん。

うつむいてなにかを唱えている感じだから控えめに言っても怖いんだけど島子さんも特に気にしてる様子はないし、よくあるのかな、こういうの。

芸能界も大変なんだろう。

そつとしておいてあげない？

「じゃー言っちゃいますにや。 あ、響さんも、私が怒られそうになったら擁護、お助けしてくださいにや?」

「そこまで言うんだったら、人の嫌がることはしないほうがいいと思うんだけど。」

「あのですにや、ひかりさんったら……本気じゃないのは当然ですけどにや、ひかりさんは響さんのこと、けっこーお気に入りにしてにや? お顔もそうですけど、なによりも話し方が好きだとか聞き上手だからとかで。 えっと、なんでしたかにや? ……あ、あれですにや。」

「あんなに年上って言っても平気そうだったのが嬉しかったって言っていましたにや」

「お気に入り?」

「僕が?」

「何で?」

「……ん? ち、ちよつとみさきちゃん!? なに言ってくれちゃってんの!?!」

「あ、戻って来た。」

「ちやーんと確認しましたにや! 『言っていていいですかにやー?』つて。 ねっ、響さん?」

「がばつと起き上がって詰め寄る岩本さんを軽くいなす島子さん。」

「えー、だって私、いい加減うざったいって思っていましたし」
「えっ」

「ヒマさえあれば響さんのこと話してるひかりさん……トシを考えてくださいにや。 前のから考えると何歳差になると思ってるんですかにや、シヨタコンもこじらせたらビョーキですにや。 何度も何度も『響くんがー』って同じ話をされる身にもなってくださいですにや。」

「ねえ響さん?」

「女の子との会話に慣れてきた賢い僕は否定も肯定もしない。」

「僕が悪い」って流れにさせられたこと、何回あったって言うんだって感じだから。」

「え? 私、いいって言ったっけ……それに、そんなに話してなんか」
「いましたってばー、こーいうの、話してるほうはわかりませんけど話

されているほうは耳タコになるんですにや！ あと許可はちやんと取りましたにや。 ウソついてないですにや。 ついてたらこんな強気になれないですにや？ にやあ？」

どや顔っていうのを……島子さんがしているのは初めて見たけど、それを見て本当らしいって分かって気の抜けたような顔をしている岩本さん。

力関係が逆転している。

けど、こういうおふざけをして平気な辺り、この子たちも仲良いんだね。

「まず」

前の僕だったらこういうのも「ギスギスしてる……」って感じて勝手に居心地悪くなってただろうけど、この1年でちよつとだけ経験を積んだからかどんと構えてお茶をすすめる程度にはなったんだ。

日ごろのストレスを吐き出してふしゃーつとなっている猫島子さんと、少し顔が赤い、けど髪の毛を下ろしているせいでやっぱり違う印象を覚える岩本さん。

髪の毛を下ろすだけでここまでおとなっぽく……元の感じになるんだから、僕の好み的には普段からそうしていればいいのについて感じの岩本さん。

いつものようなポニーテールがなくなつて雰囲気さがらりと変わると、僕としてはこつちの方がいいのになつて思うんだけど、そこはそこ、女性という年齢を極度に気にする種族なんだからしょうがないだろう。

けどこうして下ろしていると肩まで完全に隠れるような、長くて少しくせつ毛のある栗色が新鮮だ。

「……ま、まあいいじゃないみさきちゃん！ それよりほら、ね？ あんまりそう大きな声になつちゃうとさつ、人目引いちやうし！ ね？」

「大体ですよ、響さんが……響さん、ごめんなさいですよ？ 体が女の子なのは、まあ、なんにも言いませんですよ。先輩の方たちや知り合いの方たちでも男性同士とか女性同士のカップルだっていますし、響さんの心は男の子なので、そのへんはまったく問題ないんですよ」

「そ、そうでしょ!! だから響くんのこと言つたつて！」

「最近は性別とかのことって見た目よりも中身っていう風潮ですし、私自身もそう思いますからそこは別にいいですよ。たとえひかりさんが響さんみたいな子に懸想してたつて誰にも文句は言えないですよにや……だけど、ですけどですよ！ トシを考えてくださいにや！ いくらねこみみ病で若返つたとはいえ中身は元のままだんですよね？ だからつまり、えつと……15くらい!! 15くらいも年下の、しかも中学生の男の子のことずっと話してるだなん

てやべーですにや。 27と13ですにや！ あ、これ倍を超えていきますにやあ!？」

「ごめん、僕って実は25だから歳の差はたったの2なんだ……」って言ったらどんな反応するんだろ。

「正直ドン引きしてましたにや、だって犯罪ですにやよ？ やべーですにや、やべーんですにや。 すっぱ抜かれたらおしまいですにや！」

ねこみみとしっぽが服の外からでも激しくもぞもぞって……たぶんこれ島子さんも興奮しすぎて今は芸能人だって隠しておかなきゃいけないってこと忘れかけているな。

「え……ええーつとね、響くん?」

髪の毛をばさつと広げながらこつちに振り向いてきた岩本さん、だから汗をかいていて顔も真っ赤だ。

ハンカチで拭くほどに汗が出ている。

……この後のこと、大丈夫なんだろうか。

まあ楽屋とかでお化粧し直すんだろうから平気なのかもしれないけど。

女の人って大変だよな、外に出るときは必ずお化粧って……男の方がやっぱり楽なんだ。

「みさきちゃんはね? そのね? ちよーつと大きさに言ってるだけだからね? ね? それにほら、狙ってるって言われちゃいましたけど、その……あ、あれですよ!」

「あれってなんですかにや」

トーンが下がった。

わりと本気で怒っているらしい島子さん。

あれ、さつき仲が良いって思ったけどもしかしてやっぱり上下関係厳しいの?」

「響くんってクールで知的な雰囲気だし、芸能人、有名人だからっていうので態度を変えたりしなくって……なんていうのかな、色めがねがないっていうの、で、将来有望そうだよねっていう感じのこと話していただいでね! 一般論! 一般論で褒めただけなのよ!」

ごめんなさい、それただ全く興味がないからなんです……恋愛関係と有名人への。

「嘘ばっかですにや。 ひかりさん、実は年下がタイプで、だからアイドルは恋愛禁止以前にそもそも本気になれる人が近くにいなかったの、だからつまりは響さんくらいの子……ひかりさんにとってはですからにや？ だからつまりはシヨタコンなのってお酒の席で自分から言っていましたし？ あとは『中学生の男の子が喜ぶ話題ってなんだろう』とか『響さんって年上の子でも大丈夫なのかなあ……うふふ』と『世代が違っても話合うかなあ……はーと』とか全力で女の子の子してからに！ 誰がどう聞いても15ほども年下の中学生な響さんを狙っているとしたら思えない発言ばかりでしたにや！ 響さん、気をつけるですにや……こういう人が犯罪するんですにや!!」

ひたすらにやあにやあ言ってる島子さん。
うん……女の子ってストレスとか溜めるよね……。

「はあ、まったく情けないですにや。 だって精神年齢27歳のオバあいたたたた!?!」

午前の喫茶店だからこれだけ騒いでいても店員さんが来ないくらいにはお店はがらがらで、だから聞かれている心配もないからいいけど……女性って、女の子って、年齢に全然関係なく本気で恋愛っていうのが好きなんだな。

それはもう本能レベルで。

今の僕になってからは……主にかがりのせいで慣れはしたけど、でもこういうのを見ているとやっぱりどうしても「ああ悲しきは女性の本能な恋愛脳……」ってしか感じない。

……恋愛に耐性のないどころか人間関係すらゼロだった僕にとつて、この1年は疲れるけど有意義なものだったっていうのがよくわかる。

ほっぺを掴んでいる岩本さんと猫ぱんちを出して応戦している島子さんをみて、そう思う。

だってそもそも褒められるのに慣れていないから、しかも相手が女性だったら……褒められたら顔には出なくてもきつと舞い上がっ

ちやうだろーうし浮かれちやう。

それが経験の無い男の悲しい性なんだ。

それがたとえ社交儀礼だったとしても、僕を上手く利用しようとするものだったりしても、そういうのを薄々わかつていたとしても。

女性に好意を向けられるような発言とか……それこそ今みたいなものを聞いた時点できつと僕にはどうしようもなくって、流されるだけになっていたはずだもん。

僕の中身は中学生から成長してないんだから。

まあ肉体が幼女だっていうのがブレーキになっているっていうのが大きいんだろうけど、でもこういう経験、耐性は言われ慣れるしかないんだろう。

「——そのへんでよろしいですかー？ おふたりともー？」

「!？」

「ひえっ!？」

「にやあ!？」

僕も声が出そうになっただけけど、さつきからぼーっとふたりを見ていただけだったから喉で止められてよかった。

お腹の中がぎゅってなる感じの女の人が怒っている系統の声。

その主は悪魔、じゃなくって今井さん。

……苦手意識が抜けないでてもしょうがないよね……うん。

第一印象は大切。

それを痛感する。

いくら僕がこっそり呼んだお相手であっても、苦手なものは苦手なんだ。

「外出時には、それも予定があるときにはどんなときでも連絡が取れるようにって、いっつもあれほと言っていますよねー？ 特にひかりさんはなーにをやっているんですかー？ この前にも大変だったの、もー忘れたんですー??」

「え、ええっとなね？ ちおりちゃん、違うの」

今井さんの下の名前。

……そうだよね、岩本さんの方が年上だもんね……今は若くなつて

るけども。

今井ちおり。

通称悪魔さん。

「おふたりは立場が立場なんですから気をつけてくださいって何度も何度も言ってきたよな〜？ 今は護衛の方も増やしてもらってますしなんとかなるはずではありませんけど〜？」

「そ、そうですよちおりさん！ だから、ちよつとスマホから意識が外れていたくらいで」

「け——れ——ど——も——？ 騒ぎになるだけでもSNSとかマスコミとか政府の方とかに対する対策って、ぜーんぶ私たちに来ってしまうって。 どれだけ大変なのかって、電話の相手だけでも死にそうになるんだって……何十回も、言ってきましたよねー？」

本気で怒った女性は、こわい。

怒りがこつちに向いていなくてもおなか冷たくなるのを感じつつ「やつぱり今井さんは要警戒な人だな」って思いながら……お説教モードに入って静かに怒り始めた今井さんと怒られる体勢になった岩本さんと島子さんを、気配を消しながら見守ることにした。

ないとは思うけどこつちに飛んでこないようにって、ちらちらこつちを見てくるふたりと目を合わさないようにして。

ごめんね。

でも怖いものは怖いよね……ほら、今の僕は幼女だから余計に怖いなんだ。

だから許して？

48話 彼の、準備 2 4 / 7

悪魔さん……じゃない、今井さんの印象って最初と今とじゃ別物だ。

「おふたりの安全も考えてのことなんですから……」

「で、でも、私たちってば24時間の警護が」

「民間人相手だと数でダメって言うのはこの前知ったはずですよね？」

うちでも警備の人を雇ってるんですからちやんと……」

「に、にやあ……」

あの今井さんが怒るのも初めて見た。

諭すように静かに怒るっていう感じの人なんだね。

淡々と事実を挙げて、やつちやいけないことをひとつひとつ論理的に問いただして「どれだけの迷惑がかかるか」とか「この前みたいに運がいいとは限らない」とか、終始こんな感じだからへたに怒るのよりもずっと怖い。

女の人って高い声で怒る人が多いって印象。

だからこそ冷静に怒る人って余計に怖いよね。

たえそれが僕に向けてでなくっても、怖いものは怖い。

僕はその辺の小学生に絡まれるだけでも怖いメンタルなんだ。

しかも今は小学生な肉体になってるからなおさらに腰が引ける悪循環。

だから岩本さんも島子さんもすっかりとしよげている。

……岩本さん……今井さんよりも年上なはずなのにね……元、だけでも。

そのお説教は数分だったのか、それとも10分の大台を超えていたのかはわからない……聞こえないふりしてスマホに熱中するフリしてたから。

けどそれが終わった途端に今井さんが声を一瞬で普段のものに変えて話しかけて来る……やっぱり女の人って怖い。

あんなに低くて静かな声で起こったのに、次の会話ではきやるんってしてるんだもん。

「さて、響さんは通報もとい岩本さんたちがここに居ると教えてくださってありがとうございますございましたあ！」

やめて、告げ口したって言わないで。

「……いえ、連絡が取れないということでしたし……萩村さんも心配していましたから……」

一応正当な理由を主張してみるけどもねこみみ病ペアは放心したような目で見てくる。

やめて、見ないで。

「誰がやったのこれ」って先生が聞いたなら「この子たちです」って言うっちゃったときみたいになってるから。

僕はたださつき、2人と話してるときに今井さんから「そろそろお迎えの時間なんだけど……もしかして島子さんたちそつちにいない？」って聞かれたからそれにお返事したに過ぎないのに。

「……………」

「……………」

ふたりから凝視されている。

「……………」

僕はそつと目を逸らした。

「おふたりともおー、車で待機していても全然来てくれませんしいー、連絡も何回もしたお電話にも気がついていないみたいで困っていたんですよおー。GPSと事前の相談とでおおよその位置はわかっていたんですけどね、けど緊急時以外は政府の護衛の方にも連絡つきませんし……」

話しながらだんだんと僕に迫ってくる今井さん。

少しずつおしりを後ろにズリズリしていくのに、どんどん近づかれる。

うん、これは懐かしい感じの今井さん。

もう怒っていたときのことは忘れよう。

うん、忘れる。

髪の毛を後ろで縛っている彼女はそろそろ僕の顔に前髪がかかってくるさうだつていうところまで近づいて……上から迫ってきて、目を

のぞき込まれる。

かがりみみたいな近づき方。

女の子つて上からが好きだよね……。

「でもー、あいかわらずに響さんつて……いえ、なんだか以前お会いしたときよりもずつとずつと輝いていますね……！　輝かしいオーラを感じますっ」

「そうですね」

「どうですか？　最近心変わりとかされませんでしたか？　ほら、こうして現役アイドルであるこのおふたりともこうして会っていらっしやいますし、ひよつとしたら」

「いえ、それとはこれっぽっちも関係のないお話を聞いただけです」

「そこをなんとかか？」

「なりませんね」

「しかし私の勘によるとですね……可能性、以前よりもだいぶ高まっているのでこれはもう押したらいけそうな……響さん、ちよつとまたライブ映像でも」

「——今井さん？」

「わわっ!?　……はー、萩村さん、脅かさなくてくださいよ——……」

お化粧の塗り具合がはつきりと見える位置まで近づかれてしまっていた今井さんがぐつと離れて立ち上がり、後ろにいた……相変わらぬの大ききさだね……萩村さんへ振り向く。

「今井さん……以前にも話し合いましたよね……？　覚えていますよ

ね、響さんからのアプローチがない限りはどうするのか」

もつと言つてあげて、この人しつこいから。

多分押しに弱い子とかってこういう人に連れたかれちゃうんだろ
うなつてくらいだから。

「わかつていますよう、今のはかんたんなご挨拶だけで」

「今の、どうみても勧誘する気満々だったわよね？　それも事務所に連れて行きそうな雰囲気です。　ねえ？」

「ですにゃ。　病気のこと……響さんがいって言っていましたから後で話しますけど、それを聞いても『じゃあ退院した後ならいい

「んですよね!』っていう感じで強引に話を進めそうな気配がしましたにや」

ねこみみ病さんたちは僕の味方になったらしい。

四面楚歌になってようやくに諦めてくれたらしい今井さんが離れて、代わりに萩村さんがしやがみ込んで話してくる。

この前もそうだったけども……子役さんとかのお世話とかもしているのかな。

子供の相手になれている印象……僕は子供じゃないけどね。

背も高くてガタイもよくなって少し顔もごつごつしてるからこそ圧迫感を減らそうとしているんだろう。

普段から堂々と上から迫ってくるマリアさんたちとは全然違うもん。

今井さんもイワンさんもマリアさんも萩村さんを見習うべきだ。

「クリスマス……の頃以来なので、もう3ヶ月近く前になりますか。

あのときに手を貸していただいたつきりで忙しさでお礼もできず」

「いえ。お礼ならあのときにもごちそうしてもらいましたから」

……二言三言話して、ついでに今来た今井さんと萩村さんにも簡単に、しばらく会えないっていうのを……詳しいことは岩本さんたちから聞いてくださいって伝えて。

それを聞いた今井さんが近づいてきそうになったけど、萩村さんに止めてもらって。

優秀なボディガードだ。

「ではそろそろ行きましょう。ああ、そういえば2時間後に予定していました収録はキャンセルです」

「ほへ?」

「にや?」

「あら? なにかあったんですか?」

「はい、広報の仕事が……また政府の方から直接、今井さんが出た直後に来たので。それもこれから出向いた先ですぐに打ち合わせです」

「えー、またですかあ……スケジュールの調整、忙しそうですねえ」

……」

目に見えてしよげた感じになる今井さんを見て僕は元気になった。

「まーたですか。嫌ですねぇ」

見ていないうちにまとめたのか、いつものようなポニーテールに仕上げている岩本さんが立ち上がる。

「これだから広報のお仕事は好きじゃないんです。もちろん必要なことなんですよけど、こっちの都合を無視していつもこうですもん。いくら契約しているからとは言っても一方的っていうのはどうかと思えますよ?」

「ですにゃあ……けど、やるからにはがんばらないとですにゃ。ね?」

お別れの雰囲気。

僕はゆっくりと体をズラしてイスから滑り降り、ちゃんと着地。

「やだ、今のかわいい……!」

「こら、男の子相手ですにゃ」

足元を見ていた顔を上げると、いかついけどいちばんまともで話しやすい萩村さんとやっぱり近づいてほしくない今井さん、今日はねこみみさえ見せてもらえなかった島子さんとポニーテールがふわふわしている岩本さんが、僕を見下ろしていた。

……ああ、大人と高校生と高校生になった人に囲まれると、ここまですらで圧迫感が。

改めて今の僕の小ささを実感する。

「それじゃあ響くんっ」

いつのまにかお会計の紙をレジに持って行っている今井さんの後ろ姿を見ていたら、岩本さんが上からのぞき込んできいて。

「ご病気、よくなったら連絡くださいねっ! ……聞いた感じだと結構かかる大変なものみたいですけど、きつとよくなるって信じていますっ。何年後でもいいのでまたこうやって元気な顔を見ることができたら、私、とっても嬉しいですっ」

「ですにゃあ。がんばってください……いえ、上手く行くことをお祈りしていますにゃ」

島子さんもまたかgandoできていて服のあいだからちらつとしつぽが見えて、僕はちよつと満足した。

「……あれ？ 待って？ むしろ何年か経った後なら相対的な年齢っていうものが縮まって、つまりは年の差でもそんなに問題なく……」
そんなこと言ってるからシヨタコンって言われるんじゃない？

いいの？

「はいはい行きますよひかりさん。 煩惱をご本人に垂れ流すと嫌われちゃいますにや？ ましてやこの場面で」

「……あつ!？」

変な顔になつていた岩本さんを立ち直らせるついでに、ちよつとだけしつぽをペろつと出して見せてくれた島子さん。

……さすがに触らせてはくれないみたい。

だけどこれで満足だ。

48話 彼の、準備 2 5 / 7

よし、いろいろあったけどねこみみ病&芸能関係の人たちとは良い感じのお別れができた。

「ちよ、ちよちよちよちよと待つてください響さん響さん!？」

良い感じのお別れって思ったのを早速にぶち壊す今井さん。

「響さんがご病気ってどういうことですか！　なんでおふたりは知っているみたいなんですか！　なんでそれを話してくれなかつたんですかあとなんだか今呼び方も変だったような気のせいでしょうか！」
躁鬱激しいね……きつと地だよ、これって。

「ほらほら、急ぐんですよー？　話せる部分だけはお話ししますから行きましよ、今井さん」

息継ぎもせずに話し始めようとした今井さんを遮るように、岩本さんと島子さんが息をそろえて腕を組んで彼女をホールド。

どうやらみんなにとつての今井さんってそういう認識らしい。

うん、これからもがんばってみんなで制御して？

「ち、ちよつとふたりとも!？」

「さー急ぐわよー」

「急ぎますにやー」

「もう！　響さん、それではまたお会いしましょう！　ご連絡は、ご連絡が来るの、いつまでも待っていますからね——!!」

「そうですか」

あ、最後の会話なのにいつもみたいに適当な返事しちゃった……けどまあいいや。

とうとうドアの外まで引きずられて行った今井さんをぼーっと見ていたら萩村さんと目が合う。

「それでは私も失礼します……そして私からも。ご病気がだそうです……ご快復を祈っています」

「みなさんもどうかお元気で。そう伝えてください」

やっぱり男相手は良いね、楽だから。

けどまあ、あの人たちはみんないい人だったな。

ひとりを除けば。

いや、あの人だつて「勘」っていうものに惑わされさえしなければ勧誘がうざったい程度の人っていうのは知っているんだけども。

だけど今見たようにあいかわらずだったし、やっぱり信用できないかな。

萩村さんっていうストッパーが居なきやふたりきりになるのは危険。

そんなことを思っているうちに元の静かな雰囲気に戻って、お店が完全に静かな状態に戻ってからひと息。

……目の前には目を覆いたくなるようなプレートがある。

なにかしらのキャラクターが描かれちゃっていて、いかにも「お子さま用ですよ」っていう感じのそれが。

今の僕がお店に入ると勧められるそういうものが、目の前に。

お子さまランチ。

来たばかりのときに「朝なのにあるんだなー」ってぼーっとしているあいだに岩本さんか島子さん……たぶん岩本さんが勝手に頼んじやつて、しょうがなく少しだけ口をつけただけだったそれ。

……やっぱり子供扱い。

これだから女の人は苦手なんだ。

最後の別れにケチが付いた感じで僕はぶんすかしながら頬張った。

……味付けが……味付けが、完全に子供向け……。

◇◇◇◇◇

「今まで大変お世話になりました。イワンさん、マリアさん」

お子さまランチとの格闘から意識を逸らすため、病室を引き払う

……退院するときのことを思い出す。

半月ほど前のこと。

「もう約束の1ヶ月が経っているし、体もずっと安定しているし、反動……魔法さんのなにかが現れていないでしょ」って説得し続けてようやくに解放された、その日のこと。

持って帰るものなんてその何日か前から少しずつ運んでいたから、その日の僕は本当にスマホくらいしか持たない感じである病院を後にすることになっていた。

「教えていただいたこと。よく考えて、これから結論を出そうと思います……わぶ」

目の前が真っ暗になる。

顔が、体が、包まれる。

押される。

苦しい。

……これまでもよくあった、マリアさんからのハグ。

イワンさんもしてくるけど彼の方はおそろるって感じだし、なによりもマリアさんから今押しつけられているような圧迫感のあるものがないからずっとマシなだけ……とにかくこれは苦しいもの。

胸もでかすぎると大変だよね……かがりの将来が非常に心配だ。

だってブラジャーって意外と硬いもんだからこうして顔に押し付けられると痛いんだもん。

あの子もマリアさんと同じように無意識にするからなあ……。

けど、これも愛情表現なんだろうって我慢している。

僕は偉い。

けども……結局お金も払わせてくれなかったし、こっそり渡そうとしてもダメだったし。

あの後りさに聞いても「響さんのご家族がねー」ってはぐらかされて絶対に教えてもくれなくって、ゆりかとかがりに聞いてもやつぱりダメで、さよをちよつと押し気味にして聞いてみたらもう少して聞けそうだったのにかがりに怒られてダメで。

だから……あのととき血で汚しちゃったお金と検査とかにかかったお金、入院で掛かるはずのお金……これは「お願いだから！」って言われたからまだしも……それをぜんぶ肩代わりされちゃって、どれだけ言っても払わせてくれなかったこのふたりには頭が上がりないっていう状態になっちゃっている。

善意とはわかっていても、好意は受けなきや相手に悪いってわかっていても、やっぱり不安なもの不安。

けどそれを言い始めてもはぐらかされるし、そのうちにいつものような会話に持って行かれちゃうから、もうこのままでもいいんだろう。善意は受け取る。

今まで全部「大丈夫です」で切り抜けて来ちやった僕にとっては大変なことだけど、これも10年分のなんだって割り切ることにした。

まあ利息とか付けられなければ返せる……よね？

大丈夫だよな？

お金を持っている人にとっては端金なんだってのは嘘じゃないよね？

「……んぷ」

そんなことを考えながら「そろそろと息が辛くなってきたなあ」って考えていたらマリアさんからのハグから解放された。

よく見てみると、いつもは結構お堅い感じの服装なのに今日はラフな感じの格好をしているあたり、こうしてぎゅーつとするのを初めから決めて着たんだろうな。

いつもの何割か増しで長かったし。

ちなみにいつもは上着を脱いでからこうされる。

だから余計に人肌っていうものを感じるっていうか、困るんだ。

もう慣れっこだからどうでもいいけど。

まあ銀髪幼女だしね、この見た目がどうしても庇護欲っていうものを引き出すんだろうしなあ。

「うむ、響が元気になってくれてなによりだよ」

そういえばこの期間、お互いに呼び捨ての仲になった……僕からは無理だったから向こうからだけだけでも。

おかげで中庭とかで話しかけて来る他の患者さんとかからは「優しいおじいちゃんとおばあちゃんねー」って言われる。

ごめんなさい、僕の祖父母も両親も天の彼方なんです。

「君の反動も完全に収まったと思って良く、さらにはそのあいだにたくさん話すことができ私たちは満足だ。それに、私たちがしたこ

とを君が気にすることはないさ。我々は結束が固いからな。同じような変異や変質……もつとも、君の場合は特殊だろうがね……それに悩む同志……じゃないな、仲間を見つけたとしたら、どんなことがあるろうとも全力で手助けする。当然のことなのだよ」

相変わらず微妙なアクセントとか語彙の違い、あとはこの人たちの事情ってやつで分からない会話もあつたりする。

けどスルーして良いっばいからそうし続けて3月だ。

話しながら立ち上がるマリアさんとずっと目を合わせ続けているけど、だんだんと首の後ろのほうに負担がかかってくる。

……やっぱりでかいなあ、ふたりとも。

かといって後ろに下がるとなんだか失礼だし。

「響も……いや、外で会うときには響くんと呼んだ方がいいのかね？」

「良いですよ。僕は困りません」

「そうか……ならこれまで通りに」

「うむ、嬉しいね。……もし、もし君が仲間を目にすることがあったら。その彼または彼女が、その発現に明らかに戸惑っているようだったなら……ぜひ私たちに連絡を寄こしてほしい。その後のことは私たちが君にしたように、丁重にもてなすからね」

僕がそういう場面に遭遇するとしても多分、よっぽどのことがなければきつと「ねこみみ病」の方に行くだろうけども。

「響」

今日は少し透けた感じの眼帯をしていて、そんなに違和感のないイワンさんが僕を見下ろしてくる。

「この国も……いや、先進国を始めとした多くの地域で、世界はようやく私たちの知る『これのほんの一部』について『ねこみみ病』などというものとして認めるようになった。ようやく……現代に入っただいぶん経つてからようやくよく認められつつあり、人権も保障されるようになってきたと言えよう」

もうすっかり慣れて、どアップで目覚ましに見せられてもそこまではびつくりしなくなってきたイワンさんの顔を見る。

「しかしだな。君もよく承知だろうが、人類が……これだけ暇さえ

あれば互いを攻撃し、暇がなくなれば人を数としてしか見ない殺し合いもする……そんな人類というものが『彼らとは違う我々』というものを、そう簡単に受け入れられるとは到底思えないのだよ」

そういう話になりそうになるたびに「僕怖いのは苦手なので」で回避はしてきた。

けど、このふたりは「初期のころにねこみみ病としていろんな国で『保護』された人たち」についてのヤな過去を知ってるらしい。

「外見が多少……創作物などで見慣れたもの変わる程度ならあの程度で済むのかも知れぬ。しかし著しく変わったりしたり、あるいは……変質で特異な力というものを獲得してしまったりして、その制御が困難だったりする場合にはどうなるか。……想像は難くないだろう。君なら理解できるはずだ」

うん。

だから僕は怖がって、だから徹底的に隠そうとして隠れたんだもんね。

実際にはだだ漏れだったけどね……主にお隣さんとかね。

「くれぐれも。今一度しつこくとも言わせてもらうが、奴らのところには行かぬように。これは私たちからの、大切な忠告だ。そこまでの反動を起こすのだ、仮にそれが権力のある者たち、それも己の利益にしか興味のない輩に目をつけられたなら格好の実験材料とされ……ただ生きているだけ、そんな運命にもなりかねん。くれぐれも気をつけるようにな」

そう、論すように言われる。

入院中に何回も聞いたようなこと。

国家とか組織って言うものがいかに残酷か。

システムの中では人なんてただの部品でしかないって。

だけど僕は決めたんだ。

……まだなにか言いたそうだからじつと待っていたけど、なんだか動く気配がない。

「……な、なあ響」

「なんででしょうか」

まだ続くらしい。

けど、またこの……孫をあやすような声。

……またあ？

「なあ、そのな？ もちつと儂らのところにおることはできないだらうか？ のう？ だって儂ら、響のことがすつごく気に入っちゃったんだもんっ」

「これでさよならです」

「そこをなんとか、響」

「それで入院もただの検査から伸びましたよね」

「それはだね、君を助けようと」

エンドレスの会話。

でも今日だけは無理やりにも区切って帰るんだ。
家から出るために、家に帰るんだ。

48話 彼の、準備 2 6 / 7

強靱な肉体。

筋肉が、こういう温かくなってきた季節からは服の下から形を主張
していて、背もとっても高くなって、こう……：……すみっというものも
あつて。

イワンさんとマリアさんはご自分たちのお顔がそんなお体に乗っ
ていて、一般的な子供に対してどんな風に映るのか、もういちどしつ
かりと自覚したほうがいいって思う。

「そうだ、思いついた！ 庇護下に入れば良いのだよ！」

イワンさんが叫ぶ。

庇護？

何の？

「うむ、そうだ！ なんなら保護者の方たちやご家族の事情なども、そ
れがどれだけ込み入っていようと、その一切合切を受け入れること
ができるぞい！ そして、そしてだな、適当な親戚同士を番いにして、
あ、いや、今のはナシだ響！ ナシだからな！」

……こうして会話のところどころで平然と他人たちをどうするつ
て出てくる辺りが怖すぎる。

「適当に戸籍などをごまかしてもいい、なにせ本人たちの意思が重要
だからな！ そして儂らが響の本物の爺さんと婆さんに！ どうだ
響！」

そう言いながら鼻息がかかるまでに迫ってきたイワンさんのお顔
が片手で押されたかと思うと、今度はマリアさんのお顔がどアップに
なる。

「そうだ、君はそれほどに大切なのだよ響。 私たちがこうして……
ほら、この痣がはつきりと見えているだろう？」

「ええ、まあ」

昔……：……事故にでも遭ったんだらうか、にできたであろう傷が元
なつた痣。

なんにもケアしていなければ、そりや見える。

なんで今日に限ってお化粧していないのかよくわからないけど。せめて前髪をその部分だけ伸ばして隠せばいいのにーって思うし、さんざんに言ったんだけどな……聞かないんだ、この人。

「だろっ？ そのようにカムフラージュをしなくとも……優しい話し方と声音を選び、少し力を入れると潰れてしまいそうな小動物を触るような意識でなくとも、自然体でいても……ここまで怯えずかわいいかわいい孫のような子など見たことも会ったこともないのだよ!!」

いや、怖いって毎回思っているんだけどね？
言わないし態度に出さないだけだからね？

僕の優しさだからね？

「無理は承知なのだが、どうかいまいちど頼む！ 私のことを婆さんと！ そして、いずれは法的にも……」

「だからお断りします」

この人たちに対するためにはとにかくばっさりとか1番。

「そんなことを言ったらおふたりののお孫さんがかわいそうですし……こんなこと、万が一にでも聞かれたら怒られますよ?」

「あやつらはかわいげがないのだ！ もつと孫らしい響がいいんだもんっ」

「もんっ」じゃないよ、いい歳して……。

◇
「おや」

手元の旗が乗っていたプレートは8割くらい食べ切ったらしい。すごく珍しい。

さつきからメッセージの着信が荒ぶっているスマホ。

そこに表示されている時間は、あの子たちとの待ち合わせの時間。……じゃあ次、行こっか。

◇◇◇◇◇

来るたびにストレスを感じて、今の僕がどれだけちっこいのかって
いうのをいやっていうくらいに自覚させられる、駅の周りっていう繁

華街。

けど「これで最後なんだなー」って思ってた見ていると、新しいお店ができていたり工事中になっていたり、なんだか綺麗になっていたりころがあつたりして意外と飽きない。

それに小さいのにはもう、いい加減に慣れたし。

フードの下に帽子をつけていう格好から、視線が煩わしいときだけフードのみを被るっていうのになつたっていう僕自身の変化も感じる。

そうすると当然に顔は見えちゃうんだけど思ったよりもじろじろ見られないし、あと僕の視界もぐつと開けるし……もう顔を隠す心配はなくなるから。

フードを取って髪の毛を見せびらかすようにすると知らないうちにスマホを向ける人が出てくるから、こういうところでは絶対に被っていないきやならないけど。

大変に失礼な人たちって意外といるんだよなあ……でも多分今どきのそういう人たちは失礼って思いもしないんだろうね。

やっぱり目立つもんね、この髪の毛。

銀色だもんね。

しかも陽の光で虹色っぽくなるし。

なんなんだろこれ。

……こういうのも最後、かもね。

「あ、よかった。　おーい、響さーん！」

「お待たせ……ふう、しまし、たあ……」

顔を上げるとそこには元・巫女ペアのりさとさよ。

今日も動きやすそうなショートパンツっていう短パンの一種を着こなしているりさと、長い髪の毛に合った丈のロングスカートを履いているさよ。

このふたり、見事なまでに服装まで反対向きなんだけど、気がつけば一緒にいることが多い。

友人関係って不思議だよな、似たもの同士と真逆がくつつきやすいから。

ゆりかとかがりもまたメロンとレモン、いやレモンとメロンだし、話も合わないはずなのにそれでも一緒によく話しているのを目にしていたあたり、人は反対の性質も求めるんだろう。

体格とか性格とかそういうものを。

そもそもの組み合わせ……ゆりかとりさりん、かがりとさよつていう組み合わせもまた正反対だしなあ。

そういうのって、なんだかおもしろい。

「よかったわ、急いで来たから間に合った……ふう。 さよさんは大丈夫？ 少し小走りだったけど」

「はっ……はい。 少しずつ体力……つけて、いるので……」

息が荒そうっていうよりは体が運動についていけないときの僕とおなじような感じだし、大丈夫って言ってるから本当に体は大丈夫だって信じる。

けど、今日のお別れ。

みんな予定があるんだし、無理しなくてもいいって言ったのにね。お別れなら病院でとつくにしたんだし。

でも、きつと最後に会えるタイミングで会いたいんだよね。

今ならその気持ち、僕も分かる気がする。

「お迎えはまだなの？」

「うん」

「……よかったです。 このあと空港へ向かわれるんです……よね？ 時間とか……」

「うん、まだ大丈夫。 それにこのあとすぐじゃなくてね、荷物を取りに1回家に戻るんだよ。 だから余裕はあるんだ」

空港とか本当は嘘っぱち。

だけど、嘘ではあるけど場合によっては本当になるかもしれない。

そんなものだからウソにもならないかもしれない。だからそんなに心は痛まない。

お迎えがあるっていうのも本当だし、その時間を時間内に合わせるために決めているっていうのもある。

「走ってきたから暑いわねー」

ふあさつと髪の毛を持ち上げるりさりんと、さりげなくスカートをひらひらとさせているさよ。

髪の毛をばさつてしてうなじがひんやりするのも、スカートをばさばさするとすーすーしてふとももが冷たくなつて気持ちいいのも分かるー。

そうなつちやつた、元・男の僕。

いつ戻るのかは全然分からないけども。

「……そうね、お迎えが来ちゃうときつと慌ただしくなつちやうだろうし、先に言っておくわ」

りさりんが……身長差からちよつとだけ屈むようにしてくれないと会話ができないから屈んでくる。

ごめんね……僕ちつちやいからね……中学生つて言い張つてる小学校低学年なミニマムボデイだからね……。

「響さん、お元気で。で、元気になつて帰つてきてくれると私、嬉しいわ！ 今度はみんなと一緒に、5人そろつての旅行とか！ ……えつと、私たちは良いんだからつまりは問題ないつてことだし？ 響さんさえイヤじゃなければ、こつ……今度こそお泊まりとかもしましょう？ みんな大賛成なんだしっ」

お泊まりつてワードで顔が赤くなる初心なりさりん。

いやまあ中学生女子がこんな見た目だろうと同級生の男子とお泊まりつて考えたらそうなるよね……ほら、かがりの持つてた少女漫画でも結構過激なシーンとかあつたし……。

「私たちみんな、響さん自身が男の子でもイヤじゃないし。まあ何度も言ったからわかつてるとは思うけど、念のためによ？ それに結局さ、夏休みはまだ知り合つてそこまでじゃなかったし、そこからはみんなで出かけるつていうの、できなかつたじゃない？ 仲良くなつたこの5人そろつて電車とかバスで日帰りで遊びに行くのとか、誰かのお家でみんな……あ、それは病室でやつたわね。とにかく、まだしたことないこといっぱいあるから！」

りさりんは意外と恥ずかしがり屋さん。

だからこうしていつものクセがさらにマシマシになつて、早口で

ばーつと伝えて来る。

けど、それは嬉しいこと。

一気に話したから苦しくなって顔がとうとう真っ赤になってさっぼ向いて「今日は暑いわねー」ってつぶやきつつ息を整えているりりん。

そんなりさりんを見ていたらくいくいつて肩のあたりをつままれていて、振り向くとさよが近づいていた。

……風が吹くたびに、前髪が長すぎるせいで隠れがちな目が見える。

うつむき加減な、眼鏡越しの目が。

「……響さん」

「うん」

「また一緒に、本の感想とかお勧めの紹介とか……お話し、しましよ
う」

「うん」

「私、待っています。……もちろん学校のお友だちやゆりかさんやかがりさんと……するのも楽しいんですけど。えっと、なんといいですか、その……響さんとだと、似たような本と照らし合わせたりしての考察とか、そういうもので……えっと、読んだあとも楽しむことができて、楽しかったんです。……また新刊と一緒に読んで、感想とか言い合ったり……しましょう。……ふあ……」

無理にりさりんに合わせる必要もないのに、それでもがんばって気持ちひと息に……出会ったころからすれば相当に聞き取りやすくなっただよの声を聞いた。

息継ぎがこれでも足りなかったのか、それとも緊張しすぎたのか酸欠になってよろめいて、あわててりさりんに抱きかかえられるのを見て……この子からも大切な友人って思ってもらえてるんだな。

そう思って僕はがんばって、顔の表情を変えないようにした。

48話 彼の、準備 2 7 / 7

杉若りさと友池さよ。

どちらも平均的な中学2年生の身長……りさは少し高くてさよは少し低いけどそれでも僕からしてみれば大きくって、いつもどおりに上を向きながら、少し見下ろされながら、春休みのことや新学期のことなんかを聞く。

思いう話は病室でさんざんにした覚えもあるし、なによりもなんだかじめじめしてくるしって気持ちは一緒みたい。

「次会ったらこうしたいね」って未来のことなら、いくらでも明るくできるよね。

……そうして時間が迫ってくると、僕よりもふたりのほうが焦ってきたのが目に見えてわかる。

ゆりかとかがりはまだ来ていないけど……なにか用事があるんだろう。

「絶対見送りに来る」って言ってたし。

でもお別れはもう済ませてる。

だったら良いよね。

じりじりと時計と周りを見ているふたりを見ている僕のほうもまた焦ってきちやいそうだし、お迎えに頼んだ車も待ってるし……そろそろかな。

「……りさ、さよ」

「ま、待って響さん！ もう1回！ もう1回電話してみる！」

「けど、どうしてか取ってくれなくて……」

「……ふたりとも、今日はありがとう。時間はかかるかも知れないけど、それがいつまでかかるかも分からないんだけど、でもまたいつか、必ず会いに来るよ」

スマホを両手に……さつきまで笑ってた顔が焦りでいっぱいになっっているふたりに言う。

「いつそのこと何年も経ってしまったって、みんなが大人になってしまっていたとしても。それならそれでそのときにはお酒の席でも

思い出話とかを聞かせてくれると嬉しいかな」

「13歳……いや、確かみんな14歳になっているんだっけ。」

この子たちはもうすぐ、たったの2週間で中学3年生になっている。

だからあと……たったの6年。

僕にとつては短くつて、みんなにとつてはこれからが大切に長い時間が経っていたら、逆に僕にとつては接しやすくなるよね。

もちろん早いに越したことはないんだけど、こればかりは分からないものだから。

岩本さんも言っていたけど、相対的な精神年齢ならきつと近くなるんだ。

……最悪にはもう2度と会えないんだけど、それは考えなくてもいい。

きつとあたりさわりのない内容の連絡くらいはできるだろうし。

「……もう、さらつとそう言うんだから。やっぱり響さんって男の子なのね」

「はわ……」

僕もちよつと感傷的になってるみたい。

「それにしても……なーにやってるのよ、ゆりかつたら……かがりさんに振り回されてるだけだと思っただけ……。いや、逆もありえる？」

「うーん、どうだろう。ゆりかはこういうときはしつかりしているはずだから」

「……下条さん、気分が乗るとなにも聞こえません、から……」

みんなの共通認識が光る。

『先行つて、すぐに追いつくから！』つて言うから、アイツがそう言ったから私たちだけで急いで来たのに、このままじゃあの子たちの方が響さんにお別れ言えないじゃない！」

かがりが何かに。

こういう肝心なときにでも気分屋だから何かに気を取られちゃつて、ゆりかが止めようとしても聞かないっていう光景が想像しなくて

も見える。

あの子、とうとう最後まで……何回か来てくれたお見舞いでも結局いつつもだーつと話すのが止まらなかつたり、思いつきでそのまま出て行つちやつたりしていたからなあ……。

「……すみません、響さん。少し、連絡……入れてみます。きつと、そう離れたところへは行っていないはずなんです……なので多分、レジが混んでいるとか、人が多すぎて来るのが遅れているだけとか、きつと」

「……それなら、もうちよつと」

「びびびびびびび」

僕のポケットの中からアラームの音が響いてきた。

……お迎えの車の時間。

一応の目安のものではあるけども。

「……響さん、それって」

「済まない、時間だ、ね」

「……そう、ですか……」

もちろん本当はもつとふたりとも、最後になるかもしれないんだし話したい。

かがりたちとも……僕のことを、嘘だらけの僕のことを……肉体が女だって知っていても、こんな異質な銀髪幼女な見た目の中に僕が入っていても、それでも好きだって言ってくれたふたりのことも待っていて話したい。

それが例え年頃の少女特有の……恐らくは僕の中の大人の男つていう部分になんとなく惹かれただけで、成長すればなくなるものだって分かつてはいても。

僕がそれに答えることはないんだとしても。

けども時間は有限なんだ。

無駄にしちやいけないっていうのは、この1年間で嫌っていうほどに知った。

ここまでにたくさん使っちゃったけど、未来なら変えられるって分かったから。

だからこういうときには潔く、時間のままに行かなきゃならないんだ。

その方がきつと、この子たちにとっても良いはずなんだ。

「……大丈夫だよ、ふたりとも。あのふたりにも病室で……帰るときにはいつもお別れを言われていたし、僕からも言っているんだ。」

さよとりさからもしてもらっていたようにね。だから僕は行くよ。

今日は来てくれて、ありがとう」

「……ええっ！ 『またね』、響さんっ」

「……『また』いつか……お会いしましょう、響さん」

「うん。『またね』、ふたりとも」



『別れは済ませたんだし、ここですつきりとさよならしよう』って言うてふたりと別れて5分くらい歩いて着いたのは、駅前のローリーのすみっこのほう。

そこには……最近はいっつも病院と家の往復と、それにここに来るときにもお世話になった黒塗りの車。

萩村さんが使っていたものよりも高そうな……いや、乗り心地からしても確実に高いんだろう、けどリムジンっていうほどじゃない車が見えてきたと思ったら運転席から人が出てきた。

いつも運転してくれている人。

マリアさんたちの部下の人。

なんの部下なんだろうね。

結局怖くて聞けなかった。

『お嬢さま』、準備の方はよろしいのですか？」

「はい。待っていたら、ありがとうございます」

「いえ、これが……今日までの、私の仕事ですから」

そう言いながらドアを開けてくれて、それにすっかり慣れちゃった僕を感じながら乗り込む。

この高級感あふれる車での送迎も、これで最後だ。

初めは申し訳ない気持ちでいっぱいだったけどそのうちに慣れて来ちゃって、いつの間にか当たり前前って感じるようになっていけど……これで、最後。

僕が大きな音が嫌いだって知っているからそつとドアを閉めてくれて、運転手さん自身もまた座席に乗り込む。

もう、何十回と見た光景だ。

「……いつもいつも。最後の今日までこうして送っていただいて、ありがとうございます。とても助かりました」

「いえ、私はただ命令されたままで。それに、お嬢さまをお迎えしていますと普段のような物騒な会話が聞こえてきませんから、私にとっては癒しなのですよ。響さんもまた知的な会話をされますし。私も楽しかったのです」

ああ……僕が知的かどうかはともかく、イワンさんたちを乗せていたらそんな感じになるよね……やっぱり薄々どころか割とはつきりと感じているマリアさんたちのご職業、なにやら恐ろしいものなんだろうな。

だけど僕は、この人たちとは別の道を行くって決めたんだ。

だからこそ僕のことについてもほとんど言わなかったし、イワンさんたちのことについても聞かなかった。

そして僕もまた聞かれなかったんだから……あちらも僕の気持ちが分かっているんだろう。

お互いに似ていて、ひとこと言えば仲間にしてくれる。

でもそうはしない。

それでいいんだ。

「では出発してもよろしいでしょうか？ たしか行き先は——……」

「……どうかしましたか？」

運転手さんがいつもみたいにすぐに出発しない。

「……響さま。ご学友の方々……病院へよく来られていた方たちが走っていらっしやっています。いかがですか？ このまま車の窓からご挨拶されるか、それとも……」

……ぎりぎり。

車が走り始める前。

よく間に合ったね。

「……すみません、あと5分でいいので待っていてもらってもいいでしょうか」

「もちろんです。承知致しました……が、5分でよろしいのですか？」

「はい、あんまり長くてもこの後に響きますから」

そうして車を降りて……そういえばこの車で送り迎えしてもらって多分初めて自分でドアを動かした気がする……ふたりが走って来るのを待つ。

「ゆりか、かがり……そんなに急がなくなつて、君たちとはもう何回もお別れを済ませているじゃないか」

「……せーふっ！　ぎりっぎりせーふだよひびき！　あつぶな、あと1分、いや30秒遅れてたらあうとだったじゃん!!　ぷは——！　ひっさびさに全力出したー!!」

そうひと息で言い切ると……相当に走ってきたんだろうな、息を整えはじめたゆりか。

ぱつつんの乱れを気にしていないことから、その急ぎっぷりがよくわかる。

「だけど……その後ろからよたよたと近づいてくる方の子は。」

「かがり……は、大丈夫？」

「……ごめん、なさい、ひびき、ちゃん……ちよ、ちよつと急に走ったものだから、わき腹が、痛くつて……」

ゆりかに合わせて走っちゃったんだろうかがりはとても苦しそうにしていた。

息も絶え絶えだし、これ、かなり遠くから走ってきていたんじゃない。

「……あと5分あるから大丈夫だよ。　まずは落ちついて。　そんなに息苦しうじゃ別れるものも別れられないよ」

「ごめんなさい……けれど良かったわあ……」

もう息が整ったゆりかと一緒に、二言三言話しつつかがりが治るのを「こういうのもこれで最後なんだな」って思いながら、ゆりかとふ

たりで待っていた。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春

1／10

「かがりん？ もうちよい運動したらー？ 走ったの500メートルもないよー？」

「だ、だって大変なんだもの……髪の毛のセットとお胸が」

「……そこまで私を愚弄するのかがりん」

「違うわよ？ ……ふーっ、ようやく……」

走ってきたゆりかとかがりの息が整ってくる。

なんとなく懐かしい雰囲気になって、それで、なんとなくでみんなと同時にため息をついて、少し笑って。

僕はふた리를見上げる。

……そんなに首が疲れない、僕よりも少し大きいだけのゆりか。

大人と同じようにって言うか多分岩本さんよりも背が高いかがり。

ふたりともおしやれしているんだろう、かがりはともかくゆりかも初めて見る服装になっている。

走ってきて崩れちゃってるけどね。

でも、お別れ。

そうだよね、最後になるかもしれないんだし女の子だったらそういう発想になるよね。

いわゆるおめかしというやつで、だから彼女たちは僕ときよならするのために精いっぱい準備をしてくれてくれたんだ。

そういうの、前の僕だったころには服装なんてどうでもいいものだったけど……今は違う。

今の僕になってこの子たちに会って……とつても大事なものなんだって知ったから。

知らされたとも言うけどね。

もっとも僕の格好はいつもどおりなただけども……男としてはこれでもいいのかもって思う。

「かがりん、もうだいいじよぶ？ ほれ、これで汗を拭くのだ」

「ありがとう、ゆりかちゃん。私、今日に限ってハンカチを」

「いや、しょっちゅう忘れてるじゃん、ときどきお財布とかスマホとかまで」

普段から……いわゆる女子力っていうものが子供っぽいのに、それでも一見して高そうなかがりよりも実は高いゆりかがハンカチを差し出す。

「そうだね、勉強を見てあげるはずなのに手ぶらで来たこともあったな」

「え、それマジ？ ……かがりんのことだ、ただ単に勉強しなくなかっただけとか」

「うん、あのときはさすがに僕も驚いたよ。ただ遊びに来たのかと。

いつものように」

『宿題やったけど持ってきてない』っていうのに通じるなにかがあるね。いつものように」

「おや、かがりはそういうことをしたことがあるのかい？」

「いや、ただの想像だけど……それっぽくない？」

「うん」

「だからそれは違うんだってばっ！」

「違うの？」

「違うのか？」

「もちろんよ！ あれはお家で、お外ではなくお家で勉強するものだとばかり思っていたからだって響ちゃんも、この話聞いたゆりかちゃんも知っているでしょう!? あと、私だってそんなこと……したこと、ない、わよ？ 中学になつてからは……」

「小学校ではしてたんだ……」

「冗談だったんだけどね……」

「もうっ、ふたりしてっ」

そうして、軽く話してから。

「……ふたりとも」

順に見上げて……さつきまでは外にいたせいで被りっぱなしで忘れていたフードを取って……あ、りさとさよ、ふたりと話したときに

も取ったほうがよかったかな、せめて話している間だけでも……髪の毛がふあさつと出て、風に流れるのを感じながら言う。

「最後のお別れ……もちろん、いつかまた戻ってくるつもりではあるけど。ともかくこれを済ませられて良かったよ。なにしろ君たちは僕が『この姿』でいちばん親しくした、いや、してくれた『友人』で、だから……こうして最後に顔を合わせることができて。僕は、とても嬉しいよ」

いちばんに言いたかったことを、いちばん先に言っておく。

この後すぐにも……いつでも運転手さんに声をかけられてもいいように。

何回も予想しない力に襲われてしまったこと、キャンセルされてきたから。

「……響ってさ。普段はテツキトーな話し方って言うか話聞いてないことも多いけどさ？ よくちようちよ追っかけてるし……視線で」

「いや、ゆりか。それは誤解だ」

「そう？ ねえかがりん？」

「響ちやんって純粋なのよ！」

「……それはフォローになっていないよ」

「あはは……なんか猫みたいになんもないところをじーつと見てて私のほうがびびるときあるしさ。だけどこーゆー、なんていうかバシツと決めなきやいけないっていうの？ こーゆーときにはいきなり劇場版って感じになって……かっこよくなるからさ。ギャップすごいよねえ」

「劇場……ええ、まるで映画に出て来そうな雰囲気を出して素敵なことを言うのよね」

「ん、まあそれも当たらずともなんとやらだねえ」

くねくねといつものように体をよじりながら話すゆりかと、わからないことがあると適当に解釈して……けどそこまで外れていない返事をするかがり。

半分の確率で暴投するけども。

……この1年で、何十回も見てきたやりとりだ。

「ねー、響？　そーゆーとこ。　響ならわかってると思うから念のため、念のためだけどさ？　気いつけとかないと、あつちでもそんな感じでタラシーな言動ばっかしてたら、こう……同じ世代の女の子とかお姉さん方にばかりっていただかれちやいそうだから、なるべく控えるよーに。　いや、わりと本気で、マジですよ？　ほら、海外つてそういうの積極的つて言うしさ……そのさ、とりあえずでいただかれちやう的な？」

そんなのは絶対ないつて思う。

あるとしたらむしろ男からの気をつけないつて感じなんだけどね。

「私たち、そーゆーのに耐性ないんだから……帰ってきたら『彼女できてましたー、食べられてましたー』つてのにはさ……お願いだからやめてね？」

「大丈夫だよ、安心してくれ」

「安心できぬ……余計に。　心配つて言えばそれくらいしかないつてくらいには響つてしつかりしてるしさ、だけどそーゆー方面には疎いし実力行使なんてされないよう、ほんつきで気をつけてね!!　ほら、海外つて女同士とかの抵抗とかも薄いつて言うし！　しかも中身は男の子だし！　いやマジで！　……あ、ところでこれ、どぞどぞ。　些細なものなんだけど良かったら持つてつて？」

ゆりかから渡されたものはずっしりと重い。

思わずよろけちゃったけど……ぎりぎり大丈夫な重さだ。

5分も持つていたら腕と指が痛くなるだろう。

「……だいじよぶ？」

「うん、平気……中身は新刊……？」

「そーそー、せっかくだからつてテキストによさそーなの詰めといたよー！」

本つて重い。

袋自体も……紙袋自体も大きいし、20冊くらい、いや、それ以上は入っているだろう。

……これを買つていて遅くなつたんだろうか？

「……そういえば移動中やあちらでの暇つぶしのことをすっかり忘れていたよ。今朝までずっと忙しかったから……ゆりか、ありがとう」

家にあった本は一部を除いてみんな捨てちゃったし、これからも忙しいだろうって思ってた何も用意していなかったんだけど……よく考えたら多分ネットは使えない、私物も制限される。

そんな中「こういう普通の本ならいいよ」って言うってくれるかもしれないし、本当にありがたい。

「友だちからの贈りものなんです」って言えばさすがに捨てられることはないだろうし。

「いいっていいって！ 響が、聞いたことあるけど読んだことないって言うってたのとか、響が入院してから出たのとか、そーゆーの中からはさげなものちよくちよく集めてたんだよねー、いつか渡そうって。ま、私がなんとなくよさそうって思ったものだったなら響もそこそこ楽しめるはずだし？ それに重くってごめんだけどさ、逆に言えば文字数はたんまりあるんだから……そーね、あつちに着いて落ちつくくらいまではいけるんじゃない？ SFとかミステリーものって読むの時間かかるし、響、そういうの2回3回読んだりするじゃない？」

腕時計をちらちら見ながら、ものすごい早口でまくし立ててくるゆりか。

……そうだね、時間ってあっという間に過ぎるから。

「まっ、私のは昨日までに集め終わって渡すだけにしておいたからさ？ ほら、いつもみたくやることはさっさとやっちゃうポリシーだしさ？ あ、いくつか私も読んだのとかあるし？ ……だーけーどー、かがりがたいっへんでさあ」

「あ、ちよつとゆりかちゃん、それは言わないでっつて！」

「やだねー、このせいで危うく渡せなかったんだから。このくるくるさんったら今朝までまーだ決められなくて、ってか昨日ぎりぎりで決めたんだけど、そこでまたやらかしたの。『もう1回お店見て回って決めるわ！』って、そんで選ぶのにまた時間がかかったのよ

……『もーいーじゃん、もう大体決めてるんだから早く選んでよ』って言ってもぜんぜん聞いてくれなくてさー。いやホント、かがりんがもう少し悩んでたらこうして渡す以前に会えなかったわけで。つまりはメロンが悪い」

早い早い。

さつきよりもずっと早口だ。

……だけどそれを聞き取ることが出来るくらいには、僕も慣れたんだ。

「だ、だってっ！　せつかく、せつかくなのよ!?　せつかく響ちゃんにぴったりなものを……少し遠出した先でようやく見つけたって思っ
て安心したら、あ、きちんとプレゼント自体は用意していたのよ私も
！」

「かがりんって映画とかじゃ絶対足引つ張るブロンド女子なポジよね
……」

「そうだね」

「?　ブロンド……?　あ、けれどね、けれども駅に着いたら昨日買ったのを忘れてるって気がついて！　家に帰って取ってくるのどこ
かで探すのとどちらが早いかって言ったら断然にこちらで、だけれども響ちゃんに似合いそうなの、なかなか見つけられなかったのよ！」
真っ赤な顔になって反論するかがり。

くるんくるんがくるんくるんしているのを久しぶりに見た
気がする。

「かがりんやかがりんや?　そこで、お家に引き返すついでにお家の人とかに持ってきてもらうとか、あるいはそもそも時間がないんだから妥協して似合うんだったら一品モノとか高いの比べずにさ、素直に安い、フツーのお店で買って響、喜んだと思うよ?　時間が大事
だって知ってたでしょ?　私、なんつどもそー言ったよう?」

「ダメよダメー!　今日はお母さん出かけているし、バスは渋滞になっ
たらおしまいだ響ちゃんに会えないかもしれないだし、それにせつ
かくだからやっぱり思い出の品にしたいと思うじゃない!?」

「その結果がこれだがね。　イヤ、マジでピンチだったのよ?　私た

ち

「うぐ」

そうしてでも選んでくれていたのは嬉しい。

嬉しいんだけど……かがりの未来が、将来が、非常に不安になる。

やっぱり夏休みに鍛えたくらいじゃ足りなかったか。

けど、こうしてゆりかたちと一緒に成長していけば……いつかは大

丈夫なはず。

……大丈夫な、はずだ。

大丈夫だって信じてる。

大丈夫かな？

ダメかもしれない。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春
2／10

「……あつ！　ちよ、ちよいとちよいとかがりん、時間、時間！　遅れた件はもういいから、挨拶さつきとしかんと！」

「あ、そうよね、お車の人も待たせてしまっているものね。　ごめんなさい、響ちゃん」

「いや、いいよ。　時間には一応余裕は持たせてあるから」

そうして彼女もそつと、手に持っていた紙袋を渡してくるかがり。身構えたけども今度は軽い。

「はい、響ちゃん、私からも。　もう春も進んできて少し暑い日も出てきてしまったから、すぐにシーズンが終わってしまうかもしれないけど。　響ちゃんいつも寒そうにしているから、こういうのがいいと思うて」

僕が寒そう？

あ、いつもの服装か。

今の僕を見られたくないからって、幼女だって知られるとまずいからって。

そう思い込んでいたから冬まではずつと……かがりにスカートを着せられて連れ回された一部を除いてほとんどはパーカー姿でフードも被ってた。

今の僕の体は暑くても平気みたいだからって真夏でも似たような格好で過ごして、みんなには肌が弱いつて言ってた。

冬も冬でもこもこの多いコートを買ったし、外に出るときはブーツだったから。

……肌が弱いつて設定のこと、多分この子忘れてるんだろな。でもいいや。

紙袋の中を覗くと薄い色の布。

「薄手のマフラーか」

「ええ、ようやくに見つけたのよ！ 響ちゃんにぴったりなもの」

「おかげで渡せないところだったけどね？ 反省して、かがりん」

「反省してますってばっ」

簡単な包装の中には、今の僕によく映えるマフラーが入っていた。タグも切つてある、そのまま使えるようにしてあるものだったからひと言断つて、ふわりと羽織る。

「やっぱり！ 似合っているわっ！」

「おー、これはもはや主人公。ヒーローもメインヒロインもいけますな。つまりはダブルでおトク。いいねー、そーゆーの」

喉に感じる、柔らかい感触が心地よい。

うん、春秋とか夏の冷房などころでも使えるストールとは違つてもこもこしている感じ。

「ありがとう、かがり。この体は体温が低いから気がついたら冷えているんだ。よく考えたらこの先も……移動中なども冷えそうだし、とてもありがたい」

これもまた、取り上げられたりはしないだろうもの。

……大切にしないとな。

「よかつたわ、気に入ってもらえて。お家に置いてきてしまったものに比べたら少し残念だけれども……それもまたよく似合っているわ！ 男の子でも女の子でもどちらの格好をしていても合うものだから、よければ使つてちょうだい」

「うん、多めに巻けば冬の初めくらいまでは使えそうだし、緩くすれば夏でも。大切に使用してもらおうよ」

喜んだかがりが思わずという感じでゆりかにハイタッチを仕掛ける。

かがりがそういうことをするなんて初めてだったからか、ゆりかもびつくりして反応が遅れたのもあつて、身長差で上手く行かない。

今度はきちんと「ぱんっ」と手のひらを合わせたふたり。

そんなふたりを見て、両手で持ち直した本の重みと首を包んでいるふわふわを感じながら僕は言う。

「改めて、ありがとう。ゆりか、かがり。最初に出会った君たちか

ら最後にこうして話をできて、贈りものまでもらって。僕は……」
なにかを言おうとして、けれどもそれを思いかなくて。

けど、もうちよつとでいい感じの言葉が出て来そうになったところで、車からふあんつと軽いクラクションの音が鳴る。

……時間なんだね。

多分5分どころじゃなくて10分くらいは待つてくれていたんだろう。

かがりが落ちつくまでに少しかかったし、その後にもけっこう話していたな。

その音を聞いてじやれあいを止めて、とたんに悲しい顔に……けど一瞬でそれを飲み込もうとしてやっぱり無理だった、女の子なふたり。

うん。

そういう年相応なところはこんなにも。

性格も反対で年齢詐欺さも反対で……でも、やっぱり中学生の女の子たち。

「……時間、みたいだね。僕は行かなきゃ……だから、ふたりとも」
運転手さんが出てきて、けど、無言で後ろの座席のドアを開けてくれるのを横目で見ながら、別れを告げる。

「……また、いつか。早いかもしれないし遅いかもしれないけど、でも、きつと」

泣きそうだけど、でも精いっぱい笑顔を作ろうとしてくれる、かがりとゆりか、ふたりの女の子を見上げながら。

「……また、もういちど。今度はきつと……そう。今度こそは『事情』で伝えられなかった、嘘じゃない、本当の『僕』と」
向き合ってほしい。

「……………つー」

駆け寄ってきて……普段みたいに遠慮なしのじゃない、包み込むような抱きしめ方をしてくるかがり。

「……………また、ね」

普段みたいに僕が文句を言うまで離さないのとは違ってすぐに離

れて、今度はゆりか。

ふたりの柔らかささ匂いを感じて「絶対に覚えておこう」って思つて……そのまま振り返らないで車に乗る。

抱きしめられたときに上から温かいものがぽつぽつ来ていたし、そのあともあんまり顔を合わせたがらなかったから、これでよかったんだらう。

そうして静かに動き出した車の振動を感じながらマフラーをもこもこしたままうつむいていた。

「……ロータリーを出ました」

少しして見上げた窓の外は、もう駅前から離れていて、人もまばらになつてきている。

あの子たちは——もう、見えない。

別れは済んだんだ。

みんなと……りさときよ、かがりとゆりかつていうみんなと。

それも、とつても良い形で。

……うん。

ちゃんとした形のお別れができるって、幸せ。

そう思う。



運転手さんに頼んで家へ帰るルートからすこし外してもらつて、懐かしい場所に降ろしてもらつた。

そこは、かつての前の僕がよく散歩やジョギングに来ていてなじみ深くつて。

今の僕になつても、女の子な格好に慣れるために歩いたり体力をつけるためにときどき来ていたりした。

けどいつもへばつちやつて帰りが辛くつて、その上今井さんとぼつたり会つちやつたりした、あの運動公園。

季節は春、1年前のあの日のあの朝と同じくらいの日付。

気温も……今の僕になつてから初夏まではまともにも外にも出な

かったからわからないけど、でも、きつとこうして花の匂いも木々の緑の匂いも、風が吹くたびにひらひらと飛んでくる桜の花びらも、きつと、あのときと同じはず。

僕自身は一回も来たことはないけど、でもちよつと遠くを見ればそうした見慣れた景色が広がる公園の駐車場に……僕の家への道にいちばん近いところに止めてくれた運転手さん。

「僕は別にもつと離れたところでもいいです」って言ったのに「これが仕事ですし、最後ですから」って言ってきて、こうしてドアを開けてくれて、いつもみたいに手を取ってくれた。

「……本当にこちらでよろしいのですか？ お時間が押している、そう伺っていましたか」

「はい、でもここから歩いて帰るくらいの時間はありますから……どうしても見て行きたくって」

「しかし私は、お嬢さま……響さまをぐい自宅までお送りするように」とたしかにマリアさんたちは「僕の安全が大事だから」とかなんとか言って絶対に反対しそうだけど……でも。

「済みません。マリアさんたちに『僕の気分が急に変わって予定を変えたんだ』って伝えておいてください。これから……少なくとも当分は帰ってきて見られないだろう見知った風景を歩いて、目に焼き付けて帰りたいんです」

「……承知しました」

「ここまで送っていただいて本当にありがとうございます。あのおふたりにも、よろしくと伝えておいてください」

ためらいながらも僕の意志を尊重してくれて、本の入った袋を手渡ししてくれて会釈をする彼。

……その姿勢が90°。近いのはいい加減に止めてほしいって何回も言ったけど結局止めてくれなかった運転手さんは車の中に入り、僕が手を振るのを見てから静かに駐車場を後にして行った。

……ぼつんと、風の音しか聞こえない駐車場に僕ひとり。

……これでひとりだな。

こうなる前の僕の、当たり前前の時間。

最後の最後に、車の中からの眺めをぼーっと見ていたらふと思いついた、こうして懐かしい場所を歩きながら帰るっていうもの。

最後かもだもん。

これくらい良いよね。

僕は……歩いているうちにほどげちゃわないようにってマフラーを少しきつめに巻き直して、どうせ今晩からは使うこともないだろうから限界までがんばろうって、本の重さを意識しながら歩き出した。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春

3／10

僕はこの運動公園がお気に入りだった。

どんな格好でも何時に来ても……社会人や学生が来ないような時間帯にぬぼってした男がひとりでも、注目されない場所だったから。

ほら、今のご時世的に怪しい男がそのへんほつき歩いてたら適当な理由で「事案」って言われちゃうし？

で、もう何年も、よっぽど天気が悪いかじゃない限りには……少なくとも入り口の周りくらいまでは歩きに来ていたこの公園。

人が多いからこそ逆に僕っていう存在が薄く感じて、自然の色や匂いっていうものの気持ちよさを実感できるここも、もう2度と来ない……かもしれない。

そう思うだけで、変わっていないはずなのに変わって見える。

この季節は掃除が追いつかないからたくさんの葉っぱや花びらが重なっている上をなんとなくさくさく音を立てて歩いて、そんな感傷に浸ってみる。

……どうせ歩いて数分で出口だし。

そんな気分で、僕はさくさくさくさく歩く。

◇◇

初めは戸惑った。

だって普通の男が、ニートだから普通よりマイナスな男が銀髪幼女だもん。

「この姿になったのって夢じゃないの？」とか「僕の頭がおかしくなっちゃったんじゃないの？」とか「僕の認識だけがおかしいんじゃないか」とか「とうとう僕は来るって自分を幼女だと思い込む末期症状なんじゃ……」とか考えたりもした。

だから恐怖を感じて。

けどそのすぐ後に……いろいろと確かめるために出かけた先で、か

がりとゆりかに出会って。

少なくとも今の僕は今の僕として、誰からも幼女だと見られるものになっちゃったんだってわかって。

で、人はすぐに慣れるもので。

顔からなから性別まで変わっちゃったとしても慣れちゃって。

家の中でさえ生きていくのに苦労しているうちにだんだんと慣れて、そう時間が経たないうちに元の生活に近いものになったんだ。

見た目のことも、女の子になっちゃったもんだからいろいろ困ったりもしたけど、それすらも懐かしい感じで。

……それで慣れたと思ったらハサミが飛んでびっくりして、今井さんに追い詰められて萩村さんが役に立っていなくなつて抑え切れていなくつて、それでゆりかに助けてもらつて。

その萩村さんに偶然声をかけられたから送ってもらつた先でかがり襲われて。

本当に……本当に、大変だった。

親がいなくなつてからひたすら避け続けていた人間関係が、あつちから来たんだから。

それからはさよやりさとも出会って、4人とも仲良くなつて……僕から友達だつて思えるようになって。

「今の僕としての生活も悪くないかも」つて思っていた矢先に冬眠して……その前にマリアさんとイワンさんにも会っていたんだっけ。

そうして岩本さんと島子さんを助けてねこみ病つていうものを知つて、ねこみみとしつぽを堪能して柔らかくつて、それで僕自身が男だつていうのをみんなにも明かせるつて決心がついて。

それで年を越して嘘をひとつ話してほつとしたら……結局謎のままになっちゃつた「反動」で派手に血を吐いたりして。

病院に連れて行かれたと思つたら調べられて、また冬眠して入院して。

そして家を……今の僕でさえ居心地が良すぎるせいで決心がつかなかつた家の中を空つぽに近い状態にまで、きれいさっぱりにして。

今日、みんなとおわかれして。

……確かに大変だった。

けど、大変なことは大変だったんだけど、この大変だった1年は……僕としては9ヶ月くらいの1年なんだけど、とにかくにも密度が濃くって。

前の僕が今の僕になってからの1年は、少なくともここ15年くらい……父さんと母さんがいなくなってからの僕の人生っていうものの中で……多分。

いや、きつと、いちばん充実した時間だったんだろう。今なら。

こうして空っぽになった家に1回だけ戻る、今だからこそそう思えるんだ。

◇◇◇

——学ばず、働かず、ただ生きているだけを生きる。

「ニート」って呼ばれる生き方は、言われているほど悪いものじゃないって僕は思う。

ゴミとかひどいことを言う人もたくさんいるけど、そんなのは気にしないでいいんだ。

だって、僕たちは毎日毎日をただ生きたいように生きているだけなんだからさ。

イメージと評判は底辺に近いけど、その生活は年を取っていれば「充実した老後」とか「晴耕雨読」とか、時代が違えば「隠居」だったり、あるいはもう少し贅沢に過ごすなら「貴族の暮らし」って言うても過言ではないものはずだし。

最近は一リーリータイアとか言っただけ目指す人も出てきたくらい。

時代が追いついて来たんだ。

「高等遊民」……そんな言葉で呼ばれることもあったらしいし。

他人に振り回されない生活っていうのはそんな感じにいいもので、あこがれで、理想。

世間体さえなくて「働きたい人だけ働けばいいよ」っていう世界なら、きつと多くの人が選ぶはずの素敵な生活。

——そんな生活を、僕から捨てる。

無事に成長するかもしれないけども一生幼女のままかもしれないし、もしかしたら前の僕に、元の僕に……ある朝起きたら戻っているかもしれない。

どっちにしてもお金も戸籍も何から何まであって、何十年か後まで生きていくのには困らない、居心地が良すぎる場所。

けど——それを捨てて、別の道を選ぶ。

そう思えるほどには変わったんだ。

前の僕から今の僕に変わったからっていうのもあるんだけど、多分、そうじゃなくって……ようやくに外にちゃんと出て、いろんなことを知ったからなんだ。

母さんたちが居なくなっただけからって閉じこもってのが魔法さんに幼女にされたからって、嫌でも知ることになった。

結局のところ僕にかかっている「魔法さん」。

「ねこみみ病」、「変異」……または、そうじゃない「何か」。

それについて分からずじまいのままなんだ。

似ているようで違って、けどやっぱりどこかでおんなじなにかがあるって感じる、これらの「見た目が変わる」っていう謎の現象。

でも僕は、大変だった分いろいろ知った。

だからある程度どんなものは分かっている。

そしてこれから起きるかもしれないことについてもなんとなくの予想、仮説もいくつか立てられている。

そこまでしか理解できていない……とも、言える。

だけど、改めて考えると。

僕の、今の状況を客観的に整理してみると。

さんざんにノートに書き続けて「ああでもないこうでもない」って、独りでいろいろと考えた末での結論として、だけでも。

僕の言動ひとつで僕自身を「幼女」としても「元の男」としても……「どちらでもあってどちらでもない」状態としても認識させられちゃう現象。

日数に関係なく「健康に問題がない範囲」で「冬眠に近い状態になって」眠りこける現象。

どこも悪くもなくってケガひとつしていないのに、あんなにどばどば血が出てきて一時的にしても体が動かなくなるっていう「反動」って呼ばれていた現象。

認識と冬眠と反動。

あのときはとても大変なことで、魔法さんに振り回されてもうさんざんだって思っていたけど——その程度なんだ。

もちろん大変だよ？

大変なものなんだけど、でも病院をぶらついているときに見ちゃったように……本当に重い病気を持っていて、それですつと病院で、命を守るために戦い続けている人とか。

そういう人たちを遠くから見て僕自身のこれと比べると……生温いにもほどがあるんだ。

誰だって自分のことが1番大切で、自分のことが1番に感じる。良いことも悪いことも。

だから僕みたいに閉じこもっていると他人のことが分からなくなつて、比べられなくなつたんだ。

でも、今は違うんだ。

僕は別に苦しくも辛くもない。

ただ幼女になつているだけ。

ただ、それだけだつてはつきりと自覚できているから。

魔法さんっていう、ふと夜中に怖くなる程度の存在はあるんだけど……それは僕を死なせようとするものじゃなくなつて、むしろ生かそうとしているっていうのはとづくに分かっている。

なんで銀髪幼女っていう生きにくいことこの上ない姿にしたのかはわからないんだけど……でも、ちよつとくらい不便なのって、誰だつて抱えてるんだ。

だからこの体と魔法さんとは「そういうもの」だつて思いながら付き合っていくしかない。

ただそれだけなんだ。

……たったの1年。

それだけで僕、何歳も成長できた気がする。

やっぱりお家の中で好きなことだけしてる生活も……いや、とつても素敵で快適だったけども……それだけじゃ、だめなんだね。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春
4／10

◇ ……今日のはあの日みたいに陽光がぼかぼかと体を温めて、緑の香りがして、気持ちいい風が吹いて、とても気持ちいい——春の穏やかな日。

小さくなったからなのか体質なのか前に比べると冷えやすくなった体も、この天気とあの子にもらったマフラーとでちょうどいい感じに温められている。

ふだんは青白い印象の今の僕の顔も、きつとほのかに色づいているはず。

ぼんやりと、元の体での今までのことと、今の体での今までのこと……そしてこれから先のことを考えて思い出しているうちに、いつの間にか家の前まで来ていた。

……………早いな。

本当に、時間が過ぎるのは、早い。

いざとなると本当に時間が過ぎるのが、早い。

十数分の距離があつという間に感じてしまう。

きつといつも通り、半分以上はまた思考に沈んでいたんだろうけど。

◇ ……そんなのはニートをしていたこの数年でしつかりと味わってきたことだ。

病氣と付き合う。

そういう概念があるって知っていて、そしてあの病院で実感して。だから僕は「気まぐれな魔法さんっていうものに取り付かれちゃった」とでも思っただけで過ごすといくしかないだろう。

そういう病気の人は、いっぱい見た。

たとえば昼間でも何をしても、なんの理由もなしにいきなりに耐えられない眠気が襲ってくる人とか。

体が悪くて、あるいは悪くもないのに息苦しくて大変な人とか。

そのせいで体を激しく……ジョギングとかでさえしちやいけなくて窮屈そうな人とか。

それに比べれば僕のこれだって……魔法さんだって、せいぜいがちつこい、見た目が目立つだけ。

貧弱、いや、冬眠とか血を吐くこととかを考えると病弱って言うてもいいのかもね……けども、その程度だ。

別に死ぬとかだったたりとつても苦しいとかいうものじゃない。

ただちよつと、見た目が変わってたまに変なことも起きる。

その程度なんだ。

冬眠したり血を吐くのだって説明さえしておけば良い。

僕はそういう珍しい病気を抱えてこそいるけど、それで死ぬ訳じゃないんだっていうことさえ周りの人たちが分かっているのならなんとかなる。

魔法さんが怒ったりしてもびっくりする程度で済んで……あのときみたいに悲しませるっていうことは、ない。

イワンさんたちのように。

その範疇に過ぎないんだ。

家の中でずーつとうだうだと考えてはいたけど、結局のところ僕に起きていることはとつても単純なこと——。

「あ」

背伸びをしながらドアの前で鍵をかちやりと回したところで思い出す。

……忘れるところだった……これだから僕は。

いくら忙しかったって、なんとなくこうして感傷に浸っているだけだったとしても……さすがにあの人におわかれを言わないで出て行っちゃうのは失礼だもんね。

僕は鍵を反対に回して閉めて、それからお隣さんの飛川さんのお家

へ。

実に何年ぶりだろう……僕の方から敷地に入って、そして、かつては押し慣れたチャイムを鳴らす。

「……………」

……背伸びしないと押せないそれを。

「……………あら、響くん？ 今日はどうしたの？」

すぐに出てきた飛川さんの奥さんは、やっぱりいつ見ても……格好と髪の毛が明らかによそ行きじゃないのに、ほとんどお化粧もしていないのに、前の僕よりもほんの少ししか上じやないって感じ。

この人のことを知ったらきつと、岩本さんが愕然とするだろうこと間違いなしだな。

なにしろ彼女よりも数個上のはずなのに、これで中学生のお子さん……さつきちゃんがいるんだから。

けど、世の中は不思議に満ちているんだ。

この人だつて、ひよつとしたら……気がつかないうちにねこみみ病で若返っている可能性だつてあるんだ。

僕はそもそも人の顔をじっくりと見るのが苦手……だったからよく見ていなかったせいでわからなくて、だからねこみみ病のあのふたりだったり、あるいは僕があの朝を迎えたあたりで自然と若返っていたりしてもおかしくはないんだ。

それに飛川家のみんなは……なんていうか、ふんわりとした感じの人しかないからな。

気がつかないか、たとえ気がついたとしても喜ぶだけでおしまいだつたのかもしれない。

……うん、この人たちならきつとそうだろう。

けど、今日話すのはそれについてじゃない。

「今日は春らしくていい天気だからお散歩してきたのかしら？ でも響くんからうちに来るのは珍しいわねえ……なにか相談でもあるのかしら？ あら、それともお茶していく？ ……またまたあいにくと、さつきは夕方にならないと帰って来られないけど」

「すみません、飛川さん」

◇

「……ええっ?! 海外に?」

「かもしれない、だけです。 まだ相談中で。 でもとりあえず一旦家を」

「ひよつとしたら海外で住むことになったり、お仕事も?」

「はい。 これも、もしかしたら……ですけど」

帰って来ないかもしれないんだ、多少盛ってそれらしく説明を済ませる。

大丈夫、この人は基本的に疑わない人だから。

……僕がニートしてたときもいろいろすんなりごまかせてたもん。

「あらあら、それにしてもいきなりなのねー? もっと早く教えてくれていたら、おわかれ会とかできたのに。 だって、さつきだって響くんに会いたがっていたんだし」

「ごめんなさい。 いろいろと……いろいろと、急だったのよ」

ごめんなさい……飛川さんのこと、かんっぜん忘れていたんです。

ゴミ捨てるのときにも何回も会っていたし、スーパーの帰りとかにもすれ違って雑談とかもしていたし。

それなのに忘れていた。

肝心のお隣さんっていうのを。

さつき鍵を回すときに「そういえば後ろから声をかけられたのが魔法さんが認識まで変えちゃうんだって知ったものの発端だったんだっけ」って思い出さなかったらご挨拶すらせずに出ていくところだった。

……反対側はずっと空き家だからどうだっていいとしても、昔からの顔なじみでよくお世話もしてくれていたのにね。

僕はいつもこうだ。

「えっと。 それで、ほとんどの片付けはもう終わっているんですけど、大きなものとかはそのままですし、なによりもこの後どうなるのか、まだわからなくて。 早ければ……そうですね、明日明後日でも業者の人やや親戚たちが来たりしたり、荷物の出入りがあるかもしれ

れないんです」

きつと掛かるだろう迷惑について説明しておく。

叔父さんの方にはメールでお願いしておいたけど……何でそこまですておいて忘れてたんだか。

「なので、少しうるさくなるかもしれませんが……えっと、僕のことを聞きに来る人がいるかもしれません」

途中からは準備していないことばだったからしどろもどろになっちゃったけど、飛川さんは特に気にしていない……の、かな？

「それはいいけど……寂しくなるわねえ」

「……はい、飛川さんにはとてもお世話になりました」

特に、父さんたちがいなくなつてからの1年くらいは。

「けど、いいことなのよね、きつと」

彼女がしがんで僕と目線を合わせてくれる。

……子供じゃないのに子供になったからしようがないんだ、うん。

「響くん、あれからずっとお母さんたちのことでふさぎ込んだりしてたから。 私たちじゃなんにも助けてあげられなかったけど、でもだんだん元気になってきて……ここのところはお仕事もときどきだったけど、でもようやくよく見つけられそうだなによりね！」

あ、撫でないで……なんかくすぐったいから。

……あ、撫でられるとなんか変な感覚。

「それにしても、こつこつ外国語をがんばって！ それで引越して住むだなんて……ときどきふらつと旅をしてきたりしてたから知っていたけど、おとなしそうな顔してワイルドなんだからー。 きつとご近所じゃ、当分のあいだは響くんの話でいっぱいよー」

「……噂、ほどほどにしてくださいね……」

魔法さん……病気っていうことは言わなくって「あくまでも長期間いなくなるかもしれない」っていうのと、きつと心配するだろうか。 っていう「お仕事が見つかりそうだから」っていう感じにぼかして説明した。

嘘ではあるんだけどここで心配させるのは悪いから。

これは必要な嘘。

今ならちゃんと割り切れる。

「ねえねえ、もつとくわしく聞かせてくれないかしら！」

「! ……すみません、時間が……」

撫で撫でしていた腕が僕の腕を掴みそうになって、慌ててすり抜ける。

かがり相手に鍛えたすり抜けだけでも……飛川さんってばこういうところあったんだよね……うん、女の人だからね……。

かがりに鍛えられていなかったら連れ込まれていたところだった。はた迷惑も極まりないあの子だったけど、こういうタイプの女性に対する耐性ができたことについてはありがたく思う。

「さんざんに振り回されたけども。」

本当に大変だったけれども。

「あらあらそうなの、今日……って言うか、もうすぐに出ちゃうの?」

「はい、家に戻って支度をしたらすぐに迎えが」

「そう……残念ねえ。さつきも会いたがっていたのに、よりによってねえ。あと1、2時間で帰って来るのに」

「いえ、僕が急すぎるのが悪いんです。本当なら何日か前には来なければならなかった僕が」

「いいのよ、きつと。……帰ってきたりはするのよね? なら、そのときに来てくれればいいわ! きつとあの子、成長した響くんにびつくりするわよー? ……ね、響くん?」

目の前が暗くなったって思ったたらハグされる。

「……………」

……顔に胸を押し付けられる感覚にも慣れてる僕自身がいる。

「がんばってきて。私もさつきもうちの人も、それにご近所の人たちも、みーんな響くんのこと、応援してるから」

「……ありがとう、ごいいます」

そのあともなかなか離してくれなくて、「なにかお菓子でも持つて行く?」とか「小さい頃に撮ってある写真とかいる?」とか、そんな感じの、いつもの……僕が中高生だったころにはしよっちゅう聞いていたような、昔懐かしい会話をして、挨拶をして。

「またね、響くんっ」

「はい、お元気で」

僕は彼女とも別れて、ようやくに家に入った。
最後になるかもしれない帰宅をした。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春

5／10

「ふう」

男だった前とは違って腕を上げなければ開け閉めすらできないドアを開け、ずっと住み続けた僕の家へ、最後の足を踏み入れる。

外の明るさから一転、暗い玄関からの廊下に目が慣れてくると……ほとんど物が何もなくなった寂しい光景が見えてくる。

少し前からどこかよそよそしさを感じさせるようになった、僕が生まれてからずっと住んできた家。

それなのに、今となってはどこかもう、他人の家のような感じさえ受ける。

ドアを閉めて鍵をかちやりと回す。

僕が戸締まりをするのは……少なくとも内側からこうするのはきつと最後だろうってわかっているからか、なんだかこの音すらもいつもよりも大きく感じる。

不思議なものだね、五感って。

僕自身の体調とか意識とか感傷とかで、こんなにも変わるんだから。

今までぜんぜん気にしていなかったけど、こういう……ひとりしかない家に戻ってきて、玄関からしてもなんにもなくなってる。

よそよそしいを通り越してよそのお宅にうっかりお邪魔しちゃった、あるいは時間外の展示場、またはたまたま鍵を持っていた空き家に来ちゃったような……そんな感じがする。

知っているのに知らない、現実なのに非現実。

そんな感じ。

家の中に入って、しばらく佇んで、想う。

……前の僕にとっても少し。

今の僕にとってはものすごく広いこの家が、持て余すほどに広いここが、僕の……ニートとして生きて終わろうって考えていた空間なん

だつて。

紙袋とマフラーを玄関に置いたままにして、僕自身のとたとつて音、あるいは歩いてきて疲れているからかよたよたつて感じの軽い足音を聞きながら廊下を過ぎてお風呂へ向かう。

だつて今日はお風呂に入る暇も……許可も出ないかもしれないんだから。

まあ考えすぎだろうけども気を落ちつけるためにも、ね。

最低限のものだけは残してあるお風呂に入るべく居間へ向かい、パネルの下のボタンを背伸びをしながら押して追いかきの電子音声を聞く。

「……む」

あの子たちからの通知がすごいことになってる……まあ当然か。

今どきの子たちは余韻よりも繋がりがだもんね。

いろんな写真とかが送られてくるのを見つつ、あつたまつたつていう音が鳴るまでのあいだにふと、魔法さんのことも考えてみる。

魔法さん。

またはねこみみ病、それとも変異とか変質とかいいうもの。

魔法さんは結局そのどれに該当するのか、それともまた別なものなのかについていうのはやっぱりわからない。

けど僕の間接感としては「どつちでもあつてどつちでもないもの」、そんな気がする。

あくまで感覚だけど、こういうときの直感っていうのは早々外れていないってどこかで読んだことがある。

魔法さんで今の僕になつちやつてそれなりの時間と苦勞をしてきた、今の僕。

僕にとつてはもはや、今までみたいに大げさに悩んだりこわがったり落ち込んだりするものじゃなくなっている。

それなりに魔法さんについて知って、それで得た結論がこれだ。

それにねこみみ病……見た目がけっこうに変わるっていう魔法さんと似たものだつて、まだ確認されていなかったり秘密にされていたりするケースだつて。

僕のようになった人やその周りの人が秘密にしているだけで、ねこみみ病の一種として歳が……僕の場合には15くらいの若返りをして、別人に、別の人種っていうものを見た目になって、そしてなにより……性別まで変わるっていう、すごくましましにセットで現れるっていうケースだって。

世界中で僕ひとり、他には誰もいない。

なんてことはやっぱり多分無いんだ。

だって僕はそんなに特別な人間じゃないから。

もし仮にいなかったとしても——今後現れないっていう保証はどこにもないんだ。

だってねこみみ病だって、こうして世界で一斉に広められるくらいに増えてきたのだってつい最近だっていう。

それだって原因は一切に不明で、ただねこみみ病になるっていう結果があるだけだ。

今の科学だって何でも分かるってわけじゃない。

理由が分からないけど結果は分かっているってものもいっぱいある。

いや、多分そういうものの方が多はずなんだ。

だから今後いつ現れるか……あるいは僕よりも前から現れているって分かるかなんて分からない。

まあこんなにしつつこい魔法さんに年がら年中まとわりつかれるっていうのはないかもだけでも。

ストーリーカー気質な魔法さんにね。

◇

僕にとって運が悪かったのは、家族がいなくて……「叔父さんのところに来ないか」っていう提案も蹴ったからひとり暮らしで。

学生時代に……少ないながらも話の合う友人っていうものになっていたはずの人たちとも連絡を取らずに自然消滅させちゃって。かといってお隣さんに頼るっていうことも……思い浮かんだのに、めんどくさいしなによりも迷惑をかけるって止めちゃって。

で、無職で。

大学は卒業したのに働きもしていない、いや、厳密にはときどきし

か働いていない、けどなにかのスキルを手に入れるためにそうしているわけでもない、ただただめんどくさいからだらだらしていたという怠惰な理由でニートをしていたっていうことで。

もし誰か一緒に暮らしたり週に何回か会うくらい仲がいい人がいれば、幼女になつてから何日の内に誰かに知られて。

叔父さんや……家族のような人がいれば、絶対になんとかしてくれようとして。

そうでなくとも友だちとかに頼ったり……僕の場合でも連絡先さえ消していなければ、総当たりで「急で悪いけどどうしても相談したい、助けて」って頼めば誰かしらは応えてくれていたはずで。

悲しいことにその全員から「やだ、だるいし」って言われたとしても、お人好しの飛川さんに頼めばなんとかなったはずで。

なによりも魔法さんにかかってすぐに自分を疑ったりして無駄に考えすぎてこんがらがっちゃってこじらせちゃった僕の性格っていうものが悪かったんだ。

その証拠に……マリアさんたちは例外だろうけど、でも頼ればきつと10人に何人かくらいは助けてくれるだろうっていうのは……これまで、今の僕としての生活でよくわかったから。

だから初めの頃こそ「なんで僕ばかりこんな目に」とかいろいろ、本当にもういろいろ考えたりして、それでめんどくさくなつて忘れようとしていたけども。

こうしてみると僕だけが、世界で僕ひとりだけがこんな特別な目に遭っているなんてありえないし、そもそもとして悲劇のヒロイ……じゃない、ヒーローみたいな感傷もあつたんだろう。

だから僕は特別ななんかじゃない、ただの普通の人間。

元男、現幼女っていうただの人間。

……なんだかおふるがやけに遅いなんて思つてパネルを見上げてみたら、とつくにあつたため終わっていた。

「……入ろ」

がらんとしている洗面所で服を脱ぎはじめる。

……この服ともここでお別れ。

フード付きの大きめのパーカー。
その下の無地のシャツ。

特徴のないズボン。

この1年、外に出るときはほとんどでお世話になったこの格好。もちろん着替えは数着用意してはあるけども、でもそれはかがりに選んでもらったものにするわけで、僕が選んだ……ずっと着ていたおかげでそろそろくたびれ色あせてきたこれは、ここに置いていく。せっかく家を出るんだ、どうせなら洗ってあるのを……友達に選んでもらったものを身につけていきたいから。

ちなみにばんつはワゴンで買った安物のお気に入り。

「……………」

そうして服を脱ぎ捨てた僕。

凹凸のない平べったくて細い体。

長い銀色の髪の毛を体の前に、手のひらに収まるくらいの量を抱えて後ろから持ってきて……ぐいっとおまたの前に持って来ちゃえば胸も隠せて男か女か分からなくてきて、けど明らかに北国の生まれの幼い子供っていうのだけはわかる。

裸なのに色気がないどころかちゃんとして食べているのかって本気で不安になっちゃやうな幼子。

もっと成長して女の子らしい体つきになっていたら、お風呂のたびに罪悪感があったり、あるいはずっと不安だった生理っていう元・男としては絶対に関わりになりたくない現象に悩まされることのない、銀髪幼女。

そんな僕が鏡に映っている。

「……………」

首から下にはうぶ毛しかない、そのうぶ毛すらもほとんど透明で見えないつるつるな僕。

男だった要素なんかどっか行っちゃった僕。

これが、僕なんだ。

今の僕の頭から重く垂れている髪の毛。

蛍光灯の下で見ると間違いない銀色に見える……けどお日様の光

の下だと虹色っぽくなる、そんな不思議なもの。

色素がなくなつて細すぎるっていうのがあるんだろうね。

そんな髪の毛が前髪は乾いていれば目にかからない程度、横と後ろに流れる分はおしりに乗るくらいまで伸びている。

当然にこれは手入れをしようとしまいとそこまで伸びもしないし、逆に切ることもできない。

もつとも、気がついたら10センチ近く……冬眠から半年近くだもんなあ……伸びているんだから切れないわけじゃないんだけども、魔法さんが「その長さまでなら良いけど？」って見守つていて、どこらへんから「あ、それより短いのはダメ」って怒りだすのか分からないからなかなか切れないだけなんだけども。

だつて怖いし。

一定以上よりも短く切れないのは初めの頃にハサミが飛んではつきりしたし、明らかに邪魔なくらいまで伸びることも多分ないっていうのは1年間ほつたらかしてもそこまで長くなつてないから分かるんだ。

だつて後ろとか横はともかく、前髪は長くなれば気になるはずだもん。

うる覚えだけど人の髪の毛つて1ヶ月で1センチだから1年だと12センチ。

後ろはまだ良いとして前がそれだけ伸びたら前が見えなくなつちやうはずだし。

よく分からないけど魔法さんなのこだわりなんだろう。

僕にとつてはどうでもいい……あ、いや、さよみたいに両目が隠れるくらいだといちいち顔を傾けたり髪の毛を払ったりしなきゃいけないから大変そう。

ヘアピンつていうのを使えばなんとかなるけど、そんなますます女の子っぽくなるものは避けたいし？

だからつまりは床屋……いや、さすがに今は女の子だし美容院に行つたほうがいいっていうのはわかつているけど……散髪に行く必要は、少なくとも魔法さんが前の僕に戻してくれるまではなくなつ

たつていうことで。

まあ自分で切るのには慣れているから別に人に頼まなくてもいいんだけど……いや、女の子はダメなのかな。

そんなどうでもいいことを考えながら僕はお風呂に入る。

まるで……覚悟をして戦いに行く前にしてたつていう「禊」ってやつみたいに。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春

6／10

髪の毛が伸びない。

つまり僕が——これから歳を重ねても成長できないっていう可能性が高まったっていうことで……だからずっと、この幼女の姿のままっていう未来が見えちゃうんだけども。

それはそれで僕にとっては都合がいい面もある。

まずもって、ある朝起きたら前の僕に戻ってるっていう可能性を捨てられる。

つまりは毎晩「いつ成人男性に戻っても良いように」って選んでたぶかぶかなパジャマとか、シャツとぱんつだけな格好じゃなくても良くなっただってこと。

肌がさらさらするから気持ちよかったんだけども、パジャマだとズボンはずり落ちるしシャツ&ぱんつだと朝寒くて目が覚めるしでなんだか微妙に良くない。

さらにはこんな幼女な体……おまたに二重の意味で生えていないから完全につるつるですつきりしてるし洗いやすいし、胸だつてないから性差を気にしなくてもなんとかいられる状態なら僕の中の男も「まあぎりぎりセーフかな」って言ってるし。

あとは将来。

女性にとつては当たり前な、けど25年間男だった僕にとっては嫌な生理っていうのにならないから。

だって考えてみてよ……こんなところから毎月血がわんさか出てくるなんて想像するだけで嫌だし、あれつておなかが痛くなったり気分が悪くなったり怒りっぽくなったりするらしいし、つまりは少女にならないで幼女のままのほうがいいって決まってるでしょ……？

そういうわけですっかり僕の体として使い慣れたこの体、もう鏡を見ても恥ずかしく感じることもなんてない……いや、あんまりないし、恥ずかしいはずのところを見ても……まあ僕にその趣味がないから

だと思うけど、僕自身の僕が持っている体の一部だとしか考えられなくって、感じられない。

もちろん僕は僕。

意識は大人の男のままなんけども、こうして裸になってお風呂に入るときには僕自身のことを「小さな女の子の体を持つてるな」って思っていること自体は認識しているし、毎回なんとなくそう感じているのはふとしたときに自覚できる。

そういう矛盾した気持ちでもやもやすることも少なからずあるけど。

それでも僕は男だし、つるつるっていうのもあるし。

男の性っていうのは一応あるわけで、だから少しだけ、ほんの少しだけ鏡や湯船で直接見たりするとき嬉しっていう感情が浮かんでくることは浮かんでくる。

けど、それだけだ。

軽く体を流してから踏み台を使って湯船に入って「今日くらいはいいや」って髪の毛ごとお湯に沈むと、銀色のすごい量の髪の毛がわーって広がる。

あ、このタイルのところ。

よく見たら、びっしりとカビが。

……見なかったことにしておこ……叔父さん、ごめんね……。

なんとなくいつもみたいに体を、肌をくすぐるように触って気持ちよくなる。

一応は女の子だから太ることができればそれなりに女の子らしい感じになるんだろうけど、今のところはまだまだ肉をつけている最中。

だけど初めの頃から腰骨が、腰っていうものが男のときよりも横に広い気がするんだけどこれはどうなんだろう。

ただの先入観なのか、それとも女の子っていうのはこの歳でもすでに骨盤っていうのが男よりも広いんだろうか？

なんとなく興味はあったけど結局として調べなかつたくらいだからどうでもいいか。

けど。

将来。

万が一にも……前の僕に戻ることもなく女の子として成長してきたとしたら、出るところが出てくるようになってきたとしたら。

生殖ができる体になって……そして、前の僕にはなかった性欲っていうものが出てきたら、そういうものが変わるんだろうか。

案外男に欲情……。

「うげ」

うん、しないだろう。

すごい嫌悪感だ。

具体的に言うところほろ酔いを過ぎてがぶがぶ呑んで一気に「うげえ」って来ちゃう感じ。

これで安心だね。

◇

髪の毛をシャンプーで丹念に洗う。

そして流す。

流したらトリートメントをつける。

染みこませるっていうのをする。

僕は生まれてからずっと……普通なら中学生くらいで出てくるはずのそういう感情も本能も衝動も、今に至るまでついぞ感じる事がなかった。

だから逆にそれに期待している僕自身っていうのもあるのかもしれない。

だってみんながそれに夢中になっているように見えるのに、僕にはそれがなかったから。

そんな寂しいことはないもんな。

まあそもそも好きになった相手すらいないんだからどうでもいいんだけど。

……そんなことは体が大きくなり始めて、明らかに幼女から少女になつて初めて考えればいいか。

それまではむしろ今のままっていう可能性のほうが高いんだし、考

えるだけ、期待するだけ損だ。

今までとおなじなら、それでいいんだから。

結局として去年から1センチも伸びていない身長のこともあるし、冬眠からなかなか戻らない体重のこともあるんだし。

無意識でコンディショナーを馴染ませ終わってすすいで、体も……ちやんと、体の真下についてる2つの穴まで適度に綺麗にして、これでばっちりだ。

◇

「ふう……」

温かくなつて汗を流して、さっぱりした。

これで今夜はお風呂に入れなくてもなんとかなりそう。

この体は汗、ほとんどかかないけど、それでもこの腰まで伸びている長い髪の毛を洗わないで寝るといふのには抵抗あるし？

「よし」

これからは忙しくなるだろうし、ずいぶんと緊張もするだろう。

最後になるだろうお気に入りのお酒のコーヒードも飲み納めと行こうかな。

……この後が控えているからだめだけど……ほら、一応僕って法律上は……成人になるのか未成年になるのかは分からないけど、多分倫理的にも道德的にもこの見た目でお酒はダメって言われるはず。

だからコーヒードで我慢だ。

「あ」

……洗濯物。

着ていた服はいいとして濡れているこのタオルたち。

「……いやいや」

どうでも良いことばかりが思い浮かぶなあ……。

どうせ帰って来られたのなら僕自身でなんとかするし、帰って来られないんだったら次に来た誰かによって処分されるんだろうからどうでもいいんだ。

「ふむ……よし」

下着だつて……シャツはともかくぱんつは柔らかくて白い、おまたにちちょうど当たる部分……クロツチが汚れやすいのが嫌いだから、普

段からトイレの後にトイレットペーパーを当てているもんだから、半日ほど履いていたこれを間近で見ても汚れは見られないし特段恥ずかしいことはないはず。

今日着ているのはかがりに選んでもらった春らしいコーデというやつで、つまりは去年の今ごろに初めて選んでもらったときのもののひとつ。

「よし」

髪の毛も乾かしてきちんと整えて。

身支度は済ませ終わった。

ふと、なんとなく鏡に近づいて洗面台に身を乗り出し、じつと僕を目をのぞき込む。

「……………」

薄い色の瞳。

その周りのまつげも眉毛もまた銀色で、生えていないようにも見えるくらいの細いそれら。

そういえば人の脳みそって男性と女性でちがうって言うけど、僕の場合はどうなんだろうね。

結局に女の子らしい話題っていうものには意識しないと楽しめないくらいには男だし、普段感じる感覚としては男としての視点は残ったまま。

町に出たときなんとなく見ちゃうのだったって女性だし、なんとなくで近くの女性の胸を下から見上げちゃうし、かなり視線に近いところにあるスカートの下ふとももだって気がついていたら見ている僕がいる。

だから意識は男。

なんだけど、これからはどうなるんだろ？

もし成長したらそういうところが変わっていったりするのかな。

成長しちゃったとしたらどう転ぶかがわからないっていう不安感がつきまとうんだ。

そうなるとしても、できれば女性を……あくまで好きになるとしたらだけど、そういう対象が女性のままでいてくれるとありがたいところだけ。

そこは魔法さんの気分次第なんだろうな、きつと。
だって魔法さんは気分屋だもん。
まるで魔女のお供の猫みたいにさ。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春

7／10

冷凍してあるコーヒー豆と、お気に入りのコーヒーミルとカップ。
……コーヒーカップだけは今のちっちゃい手で持っても指が痛くならない、新しいのに買い換えたんだけども。

まああっても問題ないだろうってことで取っておいたこれで1杯だ。

挽き立ての粉にお湯を少しかけて蒸らしはじめるといつもの香りが漂ってくる。

今日は……今は落ちついていてからか、僕的に1番おいしくなる量のお湯で蒸らすことができている。

うん、最後としてはいい感じ。

……今までの情報から、魔法さんは特殊なものだって分かっている。だってねこみみ病と変異……島子さんたちのそれとマリアさんたちのそれは、おんなじような力によつて起きている。

科学的に説明できない不思議な力が起きてるってことは。

けどマリアさんたちが少しだけ話してくれた……変質とも呼んでいたつけ、それとねこみみ病の生えたり身体能力が高まったり若返ったりするっていうそれらとは、どうも違う気がするんだ。

魔法さんのことは置いておくにしても手上手く表現できなくてはいまいけど、僕の直感的なものを言葉にしてみると。

「……………」

僕が、明らかに致死量って感じの血を吐いたあとすぐにけろつとしてたのを見たマリアさんたちは、これを「反射」って言ってた。

何の反射なのかは知らないけども、マリアさんたちにとっては当たり前だって感じだったそれは、ねこみみ病の方では聞かなかった。

そもそもそんなものがあれば今ほどにはふわふわと受け入れられるっていうのはないだろうし。

「ずずず」

注ぎ終わったコーヒーをゆつくりと飲む。

……魔法さん、ねこみみ病、変異または変質というもの。

僕の直感で、少なくとも魔法さんだけはその根本が違う。

なんでもかは分からない。

そもそも生えちやったり若返ったりするねこみみ病と、長期間寝ちやったり血を吐いちゃったりする変異とは明らかに違うもの——のはずなのに、僕の中の直感はおなじものって言ってる。

そう感じる。

根拠なんてない。

けども僕はそう思うからそうだって思っておく。

「ずずず」

底に残ったコーヒーを飲み込む。

最後の香りだ。

◇

僕はねこみみ病について聞いたときから……詳しく聞いていたときから、そしてマリアさんたちの話を聞いてまぜまぜして考えたときから、ずーっと気になっていたことがあるんだ。

岩本さんや島子さん、そして僕みたいに見た目が変わる現象っていうのもマリアさんたちのも、昔からあったものらしいって雰囲気。

マリアさんたちのはおいておくとして、ねこみみ病っていうのは隠すようなことじゃなくなって、それどころかより広めようとしている。

「だったらなんでこのタイミングなんだろう」って。

島子さんたちがねこみみ病になったのは、島子さんの場合はたしか2年くらい前で、岩本さんも多分そのあたり。

で、その前から居たはずの生えちやった人たちとか……多分国とか地域ぐるみで隠してきたんだろうけど、それが隠すことができなくなるほどに爆発的に増えてきたんじゃないかって予想する。

だって僕だってその1年後になったんだもんね。

仮にそうだとするなら、僕がこうなったのだって……魔法さんが

襲って来ているのだって、その流れのほんの一部。

ならなんでそのくらいのとときに今みたいにしてなかったんだらうって。

まだ隠せるって感じだったのかな。

去年の夏の終わりから急に、それも全世界で一斉に報道され始めて、どこでも岩本さんたちとおんなじように特別にかわいかったりかっこよかったりする人が広告塔として祭り上げられているんだ。

それは、ごくたまに見た目が変わる人がいるっていう昔とは明らかに異質。

本当、何が起きてるんだらうね。

そういうのも「そっち側」に行ったら教えてくれるんだらうか。

そう思うとちよつとだけ気が楽になる。

◇

うん。

今日もいい天気だ。

春らしい、いい天気。

去年の今ごろからしばらく遠のいていて、けど最近また感じられるようになった、春っぽい風が家に入ってくる。

僕の銀色の髪の毛を、ふわりとなびかせる。

風が吹くたびに髪の毛がふわっと浮いて、止むたびにはさつと落ちてくる。

その繰り返し。

……さてさて。

「魔法さん」

そのへんにいるのかな？

「……………」

当然ながらに返事はない。

それとも遠隔で魔法をかけ続けていて、なにかがあるたびに急いで戻ってくるタイプのかな。

かけたらかけつきりな「いわゆる魔法」っていうやつで、やっぱり意志とかはないのかな。

つまりはただの現象なのかな。

僕としては何かにずっと傍にいられるなんてストーカーを通り越したなにかだから、できればただの現象であってほしいし、意思があつたとしても基本はどっかに行ってくれていてくれる方がありがたいんだけど。

「……いたい……」

ひとときわ爽やかな風が吹いてきたって思ったなら目がちくつてした。

なんでこんなときに……まさか魔法さんの仕業？

「ないない……でもいたい……」

涙が出るからくしくしくして目じりを拭っていたら楽になる。

ゴミか何かが涙と一緒に流れたらしい。

すぐに出てくれてよかったけど、これじゃまるで僕が感傷で泣いちやつたみたいじゃない……なんか恥ずかしい。

けど、魔法さんのこれ。

僕が幼女になっちゃった、これ。

これは冷静に考えると大したことじゃない。

いや、大したことではあるんだけどもこういうのって確率だからだ。

そもそもがねこみみ病とかになるのだって何千分の一、何万分の一……それ以下の確率ははず。

多めに見積もってもそうなんだから僕の場合にはもつとなんだ。

ただサイコロを振ってたまたま1とかが連続で出ちゃうっていうすつごく珍しい確率が起きたってだけ。

確率っていうのは大きい目で見れば収束するけど、一部分を切り取ると思いつきりぶれるときがあるっていうのをどこかで読んだし、僕はただ魔法さんに目を付けられた。

ただ、それだけ。

なのに僕は必要以上に怖がって1年もここに居た。

他の人っていうものを信用してこなかったからこそ、家族がいないとはいってもそれ以外の誰にも相談すらしなくって。

「助けて」って、ただそれだけを誰かに言えていれば。

ほとんどの人は「お嬢ちゃん、悪戯はほどほどにね？」だろうけども……ひとりくらいは僕のことを助けてくれていたはずなんだ。

そういう人たち、繋がりのある人たちに頼ったりしないで、ただひとりで家に内に引きこもって頭の中でぐるぐるぐるぐる考え続けている。

ただの僕の中で……情報も少ない、そもそもが独りよがりで悪い方向へと考えるクセがあるって知っているのに僕ひとりの頭の中だけで全てを完結しちゃって……そんな僕が頭の中だけで生み出した、より悲惨な未来っていうのに怯えきって。

今までの15年と同じようにただただひとりで引きこもって、隠れていたんだ。

……まあ、こうして情報も経験もそろっている今だからこそ言えることではあるんだけど、それでもそう思わずにはいられない。

きっと僕がこのことを話すときにはものすごくもどかしく思われるんだろうな。

「なんでもっと早く誰かに言わなかったんだ」って。

「なんで叔父さんとかお隣さんみたいに昔から知ってる人を頼らなかつたんだ」って。

でも、これが僕なんだ。

僕だったんだからしょうがない。

「……よし」

僕は、廊下へ向かう。

見えてくるのは、とうとうに一切の手を加えないままになっちゃった……もちろん手とか掃除機とかで細かい木くずとかは片づけたけど……ひしゃげている壁と、もこもこしているときの僕くらいの大きさのクレーター状に、まん丸に凹んでばらばらになっている床。

ちゃんと気をつけていさえすればそこに足を滑らせて痛い思いをすることもないからって、とうとうに放置しっぱなしのそこを見ながら手すりに掴まって、1段1段、1歩1歩と階段を上る。

こうして毎段ごとに脚を高く上げないといけなくって、危ないからって両腕でしっかりと手すりにも掴まらなきゃいけない、僕の家

……少し急めの階段を上るのも、これで最後。

2階へと上がって廊下を歩いて、僕が僕を、前の僕が今の僕を初めて見た鏡の前を通り過ぎて。

銀色の、体に対しては明らかに長すぎるだろうってしか思えない髪の毛が後ろに少し浮いていて、体は頭に対して小さくって、がりがりで凹凸がなくなつて。

そんな僕を、去年かがりに選んでもらった女の子らしい格好。

「こんな風にして着れば町にいる普通の女の子として見てもらえるわ？」って言われるままにセットで買って、後で「やつぱりこれはかわいい系の服装だったんだな……」っていう、わりとふりふりのシャツに羽織りもの、その下にはひざ上のスカートにタイツっていう、もう慣れきった格好になった僕を見る。

……うん。

今日も幼女な僕は立派に女の子している。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春
10／10（終）

僕の部屋。

居心地が良かった——良すぎた僕の部屋。

物心ついてからこの歳になるまでずっと、世界で1番安心できる場所だった。

そんな僕の部屋は、僕の部屋だった場所へと変わっている。

もう無駄に集めていた本がなくて、本棚は下のほうにほんの少しだけの捨てられないものだけ。

床に落ちているものも踏み台以外にひとつもなくって、あちこちに置いたり壁に掛けていたりしたものもみんななくなっていて。

クローゼットの中もほとんど空っぽ、掃除も隅まで背の届く範囲で終わらせてあって、ベッドだってもうシーツすら敷いていない。

机の上も乗っているモニターとか以外には日記帳とペン、ただそれだけだ。

寂しいと言えば寂しい。

けどいつかは……大半の人はこの歳になったなら働くために、あるいは新しい家族と一緒にいるために出ていくものなんだ。

まあ今って僕みたいにずっとつってのもそれなりにいるらしいけども、基本的に自分の部屋つてのは、自分の家つてのはいつか出ていくもの。

その未来が、ようやくに現在になった。

遅すぎたけど、でも、ようやくに来たんだ。

ただ、それだけなんだ。

「よつと」

机から取り出したのは日記帳。

ついついのサボり癖のせいで昔からちよつと書いては何ヶ月後になるそれを、それなりにがんばって書いた去年からの1年分のいろいろが書いてあるそれ。

日によつては眠かたたりだるかたたりペンの握り加減がイマイチだつたりして安定しない筆跡。

コーヒーとかお酒をこぼしたりしてちよつと汚れてるページとかもある。

こういうのつて、裁判とかじゃ客観的な証拠になるつて聞く。

だから、少なくとも僕が狂言を言っている幼い女の子だつて思われないように……最低でも1年間は今みたいなことが起きていて、起る前は大したことをしていない男だつたつて言う証拠として持つていく。

他に持つていくものはもう、なにひとつない。

この家の中でどうしても必要なものはリュックに収まるだけ……

あ、玄関にあるゆりかたちからのプレゼントもあつたつけ。

とにかく、それだけなんだ。

こんなに広い部屋で、こんなに広い家で本当に必要なのは……僕にとつて本当に必要だつたものは、この腕に抱えているものとそれらだけ。

「……む」

……あの朝、この体になつて最初に見た時計はあのとときと同じ、ちようど3時を指している。

偶然、あるいはデジャヴ。

こういうのつて良くあるよね。

3時。

それも、ちようどぴつたりの。

普段見たとしても「そろそろお昼寝の時間かー」くらいにしか思わないけど今日は眠くなつていないし、なんだか不思議。

こんなことをかがりに言つたりしたら「きつと運命だわ！」なんて言いそうだけど、僕も少しだけ……今は、そう思わなくもない。

いくら寝坊したつてそこまでは眠れないだらうつていうこの時間まで寝ていた僕は、あの日のあの朝／昼下がりに目を覚ました。

目を覚まして、まずは……ああそうだ、メガネをかけなくても壁に掛かっている時計の針がくつきりと見えて、部屋の中が見渡せて、近

視と乱視が治ったってびっくりしたのが、3時ぴったりっていうこの時間だ。

ただの偶然だろうとはわかっている。

わかっているけど……予定にはなかった、途中で車を降りての散歩とか飛川さんとの立ち話とかお風呂の時間……こういったものを終えたあとで部屋に入ってきて日記を書いて、それでなんとなく見上げてみたら3時ちょうど。

……確かに運命だっちはしゃぐ気持ち、今ならちよつとだけ分かる気がする。

そういえば日付だっってあの日からちよつと1年くらいだしな。

……3時1分。

そういえば……前の僕から今の僕になる前は、その直前は変わらずに退屈で無駄な日々を満喫していたもんだからそんなに日付なんか気にしていなくて、ときどきゴミ捨ての曜日を間違えちゃうくらいに曜日感覚まで薄れていた。

気がつけば1日が、1週間が、1月が、1つの季節が……1年が過ぎていてっていう感じだったから。

ニートなんてそんなもんだらうけども。

だからもしかしたらあのとときだっって、あの日あの朝……お昼をとつくに過ぎていたけど僕の感覚的には朝だ……の眠る前っていうのは、ひよつとしたら数時間じゃなくなって1日とか2日とか、あるいはそれ以上の期間……それこそ冬眠みたいに寝ていたのかもしれない。

だっって身長も体重も年齢も半分以下、しかも見た目は全て作り替えられていて、これで記憶まで失っていたらどうしようもないくらいだったんだ。

魔法さんがその時間を使って僕の体を変身させていたのかもしれないんだから。

今となっってはそれを確かめる術はない。

一緒に住む家族も、意味のない会話をする友達も居なかったから。

——そうだとしたら、あの日を迎える前に前の僕は1回死んで。

あの日を迎えて、今の僕へと生き返った／生まれ変わった。
そうなのかもしれない。

そうじゃないかもしれない。

いや……きつとそうなんだろう。

そう思うし感じる。

3時……5分。

感傷に浸っているヒマはないよね。

ぐずぐずしてたら決心が鈍ってまた明日にしちゃう。

スマホを取り出した僕は数分かけて……最後になるかもしれない、みんなから来ているメッセージに「とりあえず今日はこれで最後」って返事をしておいて。

「……ふう」

指の先がじんわりしている。

そうして僕は少しだけためらった後に——「その番号」を押した。

その電話は岩本さんからこっさり聞いておいた——「ねこみみ病」専用の、直通の番号。

直通だけあって、ほんの2、3秒でがちやつと繋がって。

『——はい、こちらは通称「ねこみみ病」または「NEKO」の緊急相談窓口です』

『この番号は、ご家族の方、またはお知り合いの方、あるいはご本人さまがこれらに該当し、かつ緊急性のあると思われる事態である場合に紹介されるものとなっております、それ以外の方は別の番号で対応させて頂いております』

『なおお電話口でのご相談を受け、緊急性が低いと判断された場合にはご紹介の有無にかかわらず、別の窓口を紹介させて頂くこととなっております。どうかご了承ください』

『——このお電話は、緊急、差し迫っている方についてのご相談、あるいは救助要請で間違いはないでしょうか?』

僕はもう、止まったままじゃない。

僕は、前の僕から今の僕に、生き返った／生まれ変わったんだ。

そう思ったら緊張してばくばくしていた心臓も落ちついてきて、体

の火照りも収まってきて……もうひと息ついてから答える。

僕は、元の体での15年という時間を、この体でのたった1年ぼつちの時間で乗り越えたんだから。

きつと、大丈夫。

またいつか、あの子たちにも会える。

「緊急ではないかもしれませんが、多分すぐに診てもらってどうすればいいか聞かないといけないものだと思います」

『……お声からするとお若い方とお見受けしますが……若返りでしよるか。なるほど、10代の方で数年でしたら……それともご自身、あるいは周りの方にとって嫌悪感のある生きものへのケモノ化でしよるか。それとも……』

電話口の女の人の声が厳しいものになっていく。

……そっか、子供だと確かにお急ぎだし、生えちやったものが苦手な動物のだったりしてもなんか拒否反応出そうだよね。

猫アレルギーだねこみみ生えちやったとか？

——だけど僕は違う。

「いえ、そのどれでもありません。僕は——恐らくはねこみみ病ではあると思います。それで多分、いえ、きつとまだ数が少ないか、あるいは未確認のものかもしれないんです」

『未確認……ええと？』

悪戯と思われないように、冷静に。

いつも通りに考えて置いた文章を読み上げる。

「僕は、体の全部が変わりました。黒い髪と黒い瞳から薄い色の髪と肌と目になって、顔も完全に変わりました。完全に別人なんです」

『……えっ？ え、ちよつと待ってください、そんなことが』

「年齢も15くらい……いえ、多分もつと幼くなっています」

『じゅっ……わ、分かりました、それではすぐに』

「もうひとつだけあります。——ねこみみ病ではあり得ないって言われている性別も、変わりました」

「つまりは男から女の子へと——完全な別人に」

『……………ふえ?』

相手の人の声の感じから「多分僕みたいなのは初めなんだろうなあ」って思う。

「僕ひとりでは何もできそうにありません。なので保護をお願いします」

『……………』

……あれ?

返事がない。

もしかして切られた?

え?

嘘?

僕、こんなに本気で電話してるのに?

「あの——……?」

『ひゃっ、あ、はひっ、大丈夫です!』

大丈夫そうじゃない女の人が返事を返してくる……大丈夫かなこの人。

『……じよ、冗談……ではありませんよね、もちろん……ちよ、ちよつと待っててください今詳しい者に訪ねてっつきゃあ!』

なにかが……音的にガラスだからコップかな、それが遠くで割れた音が聞こえてくる。

……意を決して出向いた先で拍子抜けの対応。

これもまた、去年経験済みだ。

僕は静かに待つ。

「大丈夫ですか?」

『はいいい私は大丈夫ですつ、すみませんすぐに繋がりますのでえ!』

「急いではないないので大丈夫です。僕がこうなったのは……ねこみみ病になった日からはもう1年経っているんです」

『いち、ねん……あ、はい、わかりました、ゆつくりとですね、ゆつくりと……はい、繋がたまま急ぎ係の者をご自宅へ向かわせますので、ご事情を詳しく伺えますか? 早ければ30分ほどで着くと思います』

あ、事情聞く前にもう来るんだ……じゃあ今の僕のを一応は信じてもらえて、しかもあつちからしても急ぐ必要があるってことなんだね。

『それが本当なら……失礼しました、もちろん本当ですよ。あなたのごことは最優先で保護しますから安心してくださいね！ 大丈夫ですから！』

……この先は聞かれるのに任せて答えていればよさそう。そう思ったら力が抜けて……緊張が抜けて、ぽふっとシーツのないベッドにおしりを落としました。

この1年で慣れたようにスカートをふとももに張り付かせながら座るっていうことをしなかったから、直の感触でふとももの裏がざらざらするけど別にいいや。

だって電話が終わったらきつと……荷物をまとめたあたりでお迎えが来るんだろうしな。

……お迎えってそういう意味じゃなくって、普通のお迎えだ。

『あ、先に……住所をお願いしますか？』

「はい、住所は——」

そうして僕は……1番嫌がって、いや、恐れていた、国、国家権力というものに僕自身の経緯や住所、そして名前を伝えて、長い長いひとりぼっちのニート生活から、引きこもっていたこの家から、この部屋から——出ることにしたんだ。

だからようやくに——15年も経って、少女にもなってようやく僕は、本当の意味で引きこもりなニートから抜け出したんだ。

銀髪幼女になって1年経って。

……笑っちゃうくらいののろま。

だけど、これが僕なんだ。

きつと何回やり直したとしても多分同じになるだけ。

『大丈夫ですからね！ すぐに慣れてる者たちがそちらに……』
びっくりするほど落ち着いている僕。

遠回りしたからかも。

そう考えると1年ものたのたしていたのも悪くないって思う。

僕は——ようやく、ちよつとだけ大人になったんだろう。

多分、父さんと母さんが居なくなつた中学生から高校生くらいには。

ね。見た目幼女だけど高校生だって言い張る幼女っていう感じには、

50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう 1/2

緊張するとトイレが近くなる。

知識としては知っていたけど、実際に女の子の体になって実感した女の子の、女性の生理現象。

さらに言えば僕は幼女。

膀胱だつてさらに小さいし、我慢するための筋肉だつてさらに貧弱だ。

この1年で……厳密には半年と少しですっかり慣れてはいるけど自然の摂理には逆らえない。

油断は禁物。

まだ失敗してないからこそだ。

そういうわけで電話が終わつてほっとする間もなく、いつものように急な尿意に襲われてトイレに急いで派手な音を立てて……楽になつてほっとして。

それで荷物をまとめようとして、ゆりかの本がかなり多かったからリュックひとつに収まらなくなつて、どうにかそれをリュックと紙袋ひとつにうまく詰め込んでほっとしたところで――。

「ぴんぽーん」

……スマホを見ている。

通話が終わってから、10分と少し。

思っていたよりも早いつていうか……早すぎない？

すぐに来るとは言っていたけど、でも……本当に役所の人？

なんか盗聴とかされて変な勢力から襲われたりしてない？

ほら、若返りで性別が変わつたつて言ったし……。

……ちよつとどころじゃなく不安だけでも……出よう。

ここでもたもたしてもしようがないもん。

廊下に出てドアを見る。

今の僕の背じやドアの上の……なんであんなに高いところ1カ所しか作らないんだろうね……のぞき穴からはドアの向こうが見えない。

インターホンも相手がちよつとでも横にずれると顔が見えなかったりするし、何人か居ても分からない。

なんとなくさらに不安になった僕は小走りで廊下を走り抜けて2回3回と鳴る音に焦らされつつ、もう戻らないと思っていたはずの2階の僕の部屋へと戻って、踏み台とイスを経由して机の上によじ登って……息が荒くなつたけど、それにも構わずに家の前を見下ろす。

……髪の毛を手で踏んだ、痛い。

「……………」

外に止まっているのは、普通の車1台だけ。

立っているのは……スーツを着た男女だけ。

角度的に上半身は見えない。

髪の毛をばさばさと振り回しながら左右も奥も確認したけど、見える範囲にはパトカーとかお巡りさんとか……護送車とか銃を持った人とか、そういう物騒なものは見当たらない。

逆光かつ真上だからだからよく見えないけども玄関のドアの前で立っているらしい、どこでも見かけるようなスーツの人たちがきつと、呼ばれてきた人たちなんだろう。

……うん、大丈夫だって思おう。

早いつて言うのも悪いことじゃないもんね。

きつと近くに居たとかなんとかあるんだろう。

そう思つて心臓のばくばくを抑える。

転ばないようにゆっくりと降りて玄関まで進んで電気をつけると、チャイムの音……5秒に1回くらいにまで早まっていたそれが止まった。

……正直に言つて怖かつたんだけど？

ほら、その音だんだん早くなつてたし。

なんでそんなにびんぽんびんぽんと鳴らすんだろうか。

いやまあ返事をしなかつた僕も悪いけど……きつと「大変なことだ

から！」ってあっちも焦ってるんだらうって思っておく。

でも、このドア一枚隔てた先にいる人たちがどんな人たちなのか——僕は開けないと分からない。

開けたらすぐに銃を構えられたり拘束されたり、何人もでどかどか入ってきたりは……しないしない、いい加減に過剰反応は止めにして。

それで1年も無駄……じゃなかったけど、でも遅れたんだから。

……じゃあ。

「ふう」

息を吐いて決心して、腕とつま先を上げて……これもまた無意識で心配だったんだらうな、チエーンも外して。

鍵を回して、ドアを外に開いた。

「……えっ」

僕はびっくりした。

目の前の人たち……視線は大分上だけでも……すっごくびっくりしてる。

……見間違いとか思い込み……じゃない、よね？

玄関先に——ドアから少し離れたところに立っていた人は男女のペア。

背の高い男の人と、ハイヒールを履いても男の人と比べるとずいぶん小さく見えちゃう女の人。

——男の人は前の僕と同じくらいの年ごろで、顔も体もいかつくつて、でも実は背の低い子供——僕みたいな子相手でもきちんと膝をつけて視線を合わせて話す人だって、優しい人だって。

優しすぎるせいかな暴走した女の人の勢いを止められない人だっていうのを、僕はよく知っていて。

——女の人は前の僕よりも幼く……若くって、男の人と同じように普通のスーツを着ていて、それで後ろの髪の毛を——今日は、僕から見て右側にちよつとだけ垂らしていて。

「勘」ってやつさえなければ普通におはなしできる人なのかもしれないっていうのを知っていて。

……そっか。

そういえばそうだったよね、この人たち。

だって関係者だもんね……「ねこみみ病」の。

しばらく口を開けてぼけーつとしてた僕の前の2人はとうとう……ちようど日陰になって僕が見えづらいらしくって、しかもカバンから書類とか首から提げた顔写真入りの身分証とかを出しているタイミングだったらしくって、僕のほうをちらちらとしか見ていない様子。

慌てた様子なのはきつと、僕が予想以上にちっちゃかったんだろ
う。

電話で教えた僕の情報からは普通の成人男性としか思えないもん
ね。

先に用意し終わった大きな男の人——萩村さんが腰を低くして、僕の目線に合わせるようにしてから初めて僕と目を合わせて話し始めようとして。

「初めまして。私は『通称ねこみみ病』対策本部所属、萩村と申します。この度は大変な思いをされて、……?」

そのままお口が開いたまま、僕と同じように止まった彼。

まじまじと……きつと、傾きはじめて陽の光で明るいのに慣れてい
たんだろう彼の目が僕の目を、姿を、ようやくに認めて。

あ、そういえば今の僕は……みんなと会ったときはズボンの上には
パーカーっていう格好をしていたけど、今はふわふわのシャツにス
カートっていう格好。

それに、いつも隠していた髪の毛を……彼にはたぶん初めてのお披露
目だったはず……そのまま出しているんだもんな。

そりゃあ気がつくのにも遅れるっていうものだろう。

でもこの至近距離で顔を見たら僕って分かったらしい。

ちよつと隣を見てみたら女の人——今井さんの方もまた、ぼけーつ
と固まっているし。

もちろんお口も開いていて……なぜか顔は真っ赤になっているけ
ど。

女の人だし、やっぱり小さいのが好きなんだろうか。

「……あなたは、響、さん。私の知っている……お世話になってます響さん……なのです、か？」

なんとか復帰したらしい彼に向き直って、僕は言う。

「はい。今朝方振りですね、萩村さん」

「……本当に、響さんが……」

「あ、そういえば電話では名字で対応してもらってましたし……電話口の方が『今はそれだけでいい』っておっしゃっていたので。

……表札も名字だけですし、しかもこっちの、女の子としての格好をお見せするのは初めてですね」

袖をふりふりとして、髪の毛を手で掬って見せてみる。

ついでにすーすーする、スカートも。

知らないお役人の人か、あるいは警察の人とかが来るのかって思っていたら知っている人だった喜び。

僕の口も普段より少しだけ軽くなったみたい。

「……え、響さん……響さんが、その」

「あ、ち、ちよつと萩村さんっ」

名札とクリアファイルを両手に固まっている萩村さんを押しのけるようにして……あ、復活したんだ……今井さんが僕をかばうようにしてお尻を向けてくる。

「!」

僕は慌てて1歩、2歩下がる。

……身長差だもんね、しようがないよね。

けどこんな状況で彼女のお尻に押されて転んだりでもしちやつたら、すっごく申し訳ないし？

「お相手はこんなに小さな女の子……になられてしまっているんですから、離れてください、驚かせてしまうじゃないですかっ！ ほらほら、もっと離れて離れて!」

ん？

あれ？

……ああ、僕のことまだ気がついていないのか。

今井さんが僕を萩村さんからかばうっていういつもの真逆の展開に脳がエラーを起こしそうになる。

「え、ええっとです。ね今井さん、その方は」

「聞き取りよると症状は深刻なんです！　ねこみみ病の『たくさん重なる』っていう新しい症状の可能性があるから、冷静でなくって錯乱している可能性もあるからって！　成人の男性の方がこんなに小さく可愛くなってしまうんです！」

あれ、僕冷静に対応したはずなんだけどな……伝わってない？

「だから顔も怖くて体も大きくて怖くてとにかく威圧感のある萩村さんじゃなくって、先に私が話をした方が良いつて！」

ああ、それは萩村さんの知り合いみんなの意見だったんだ……かわいそうに、いい人なのに……多分今井さんよりも。

「だから私が話しますから離れて離れて！　……ごめんなさいね、怖い思いをさせてしまいました」

「いえ」

いつ気が付くのかなあ。

あれ、でもさつき僕を見てフリーズしてたような……あ、顔、見えてなかった？

それとも髪型も服装も変わっちゃってるから僕だつて気づいてない？

……そうっばい。

「もう大丈夫ですからね、安心してください。私たちが、こういうことに慣れている私たちが来ましたから。　それです。ね、えっと……あれ？」

「今井さん、どうも。今朝方振りです」

しゃがんできて肩に手を置いて一気に話し始める彼女をぼんやり見ながら話を聞いているうちに……ようやく気が付いたらしい。

なんかちよつと笑っちゃいそうになりながらもご挨拶。

顔がちよつと赤くなつていてびっくりしてるっていう今井さんのこんな顔初めて見たけど、なんだかお得な気持ち。

「え……あの……響さん、ですか？」

「はい。 去年の今ごろ……いえ、あれはもう少し後でしたね。 勧誘されたりした響です」

ついでに言えば、今日になってもいつも通りの勧誘メールが来ていたけども。

病気で入院するって言ってるのに退院した後のスケジュールとか勝手に提案されていたし……この人は本当に、もう。

「……本当、です……この瞳、この髪の毛、このお肌……響さん!？」

「はい、本人ですね」

ついでにこの突っ走る感じは間違いなく今井さんですね。

「じゃあやつぱりさつき電話を受けて車に乗り込んだときに感じた『勘』ってば、また合ってた……?」

なにそれこわい……何で僕と会う前にそれ反応するの？

やつぱり魔法さんのなもの？

……けど。

だけど、そういうのをよく知っているからこそ僕は。

「萩村さん、今井さん」

いつの間にか髪の毛をさわさわしてきていた今井さんから数歩退いて、2人と目を合わせる。

「……あなたたちで、よかったです」

本当に。

「さつきまでは……ドアを開けるまではどんな人たちが来るのかわつて、どんな扱いを受けるのかわつて、実は心配だったんです。 けど、よく知っているあなたたちの顔を見て……安心したんです」

「響さん……」

2人の後ろにある車は……これだけ早くに来たんだから、きつといつもの事務所関係のお仕事の出先からのもの。

この近くを通りかかったところで電話を受けて来たんだろう。

もともとねこみみ病関係のお仕事だしな、こうしていちばん近い位置にいた2人が呼ばれたっておかしくはない。

車だって目立たないごく普通のものだし前に見かけたときみたいな護衛の人たちもない。

けど、これだって偶然で。

——偶然とは、得てして重なるもの。

それを僕は、この1年でたくさん経験した。

「……今までのこのことを隠していて、申し訳ありませんでした」

「……いえ、事の重大さを考えたら当然です」

「そうですよ、今だって上は大騒ぎでしつちやかめつちやかで」

ああ、やっぱりそうなるんだね……って言うことはやっぱりこれは、よっぽどレア。

——だけでも、「いつか来るって想定はされていた」ものなんだ。

「でも、おふたりが一緒にいてくれるのなら安心できます。ああ、そ

うです。今井さんの勘の通りに……これからもきつと、長いお付き

合いになるんでしょう。だから」

滅多に僕自身の顔を、表情を意識しない僕だってこれだけの期間――

――1年ものあいだ女の子たちに囲まれていれば、自然と簡単な笑顔くらいは作れるようになっていたんだ。

だから、精いっぱい笑顔を作ってみせる。

「――これからどうぞ、よろしく願います。何回も伝えたよ

うに、注目されるのは苦手なのでアイドルとかにはなりませんけど

ね。今井さん、萩村さん」

そう口にしてぺこりとあいさつをすると……前に落ちる髪の毛の感覚と一緒に、ふわつと吹いた風が春の――あつたかくて気持ちよくて、それでいい匂いの風が、僕を……ひと撫でしていった。

50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう 1. 1—1. 8/2

☆☆☆

その存在が確認されてからはずっと、外出時にはパーカーとズボンで姿を隠しつつ歩き回っていた「彼」。

つい1時間ほど前に隣の家の、飛川家の妻との立ち話をしてきたときまではその格好だったが、それを経てからずっと家の中にいた「彼女」——もとい「彼」は、彼女たちが着飾りたいと思っていた通りの服装になっている。

「安全のために用意した車でそのまま帰宅する」という予定を変えたらしく……衝動的な予定の変更は彼らしくもないが、きつとそれはこの先のことを思つての感傷にでも浸っていたのだろうと推測できる……ともかくも彼の体格、少女とも呼べないほどに小さい彼の足では結構な運動量だったはずの数十分を経て戻ってきた彼は、先ほど会っていた少女からの贈りものであるマフラーを大切そうになびかせつつ別の贈りもの……紙袋の中の本だと報告を受けている、それを重そうに振りながら歩いて家へ戻った。

しかし「彼」は、家の中で休んでいただろう彼は——「彼女」としてドアを開け、出てきた。

このときばかりは、普段は顔色ひとつ変えることもなく……いや、保護している子供たちと戯れているときや「彼」の病室を訪れる前後には相当に破顔していたが……「彼女」としての姿をした彼を眺め、「孫にしたい理想の彼」と言う幼くも大切な存在を見てしまった壮年の男と女。

男は愛娘や孫を見るとときよりも、他の誰を相手しているときよりもふやけた顔になり、女に至ってはその姿を目に入れてからはしばらく静かに震えていた。

薄い色のシャツの上にカーディガンを羽織り……羽織りものはともかくとしてシャツはどうみても女性もの、子供向けでありながらも清楚なもので、下にはいつもの細身のズボンではなくスカート。

2人して声を上げてしまうほど驚くくらいには、普段の彼からは想像できない格好をしていたから。

男と女が彼——響を監視し始めてから今まで1回たりともこのような出で立ちをしたことはなかっただけに、その破壊力はすさまじいものだった。

しかもあれだけ外では隠したがっていた髪の毛……その美しい、彼女らの故郷でもそんな色合いのものは見たことがないような髪を出して、特に結ったりすることもなくただストレートに下ろしているだけの、美しい髪を出している。

その髪と服とで、彼と彼女の感情は激しく動いた。

ついでに何人も兵士たちが同時に彼を見たが、やはり誰しもが驚きに思わずという感じでスコープから目を離して顔を上げ、互いに信じられないという顔を確かめ合い、軽口を叩こうとして……理性を保っていた彼からの一喝で慌てて監視に戻った。

そして今、彼女の格好をした彼——響は「彼女たちの物にしたい響という少女」は、憎き組織の手下と対峙している。

が、憎いというのは彼女たちの感傷であって響にとつてはそうではなく、むしろ仲の良い……信頼できる相手であるのは周知されているし、なによりもその表情を見たらはつきりとわかるもの。

それはこれまでの報告で何度となく来ていて……もつとも彼は相対している2人のうちの女性の方には少々以上の苦手意識を持っているようなではあるのだが、それは「女性との縁が少なかった彼の男性としての人生」によるものと解釈された。

だから突発的な事態が起きようとも、響と対峙している2人は負傷させずに捕獲するようにという指示まで出していた。

ともかく彼、響はそのうちの1人——名前は萩村茂紀、「ねこみみ病」対策本部などという実に馬鹿げた部署に、芸能事務所という隠れ蓑を背にした宿敵の犬どもに所属している彼に話しかけている。

聞くところによると、響は彼に、萩村という男に対しては、接触機会こそ少ないものの頻度としては友人に対する物と同等以上で笑顔を見せるという。

元の年齢も近く、なによりも元の性別が同じだからであろうとは既に出ていた結論だが、それでも監視員にとっては警戒すべき相手として映っている。

もちろん響の精神的な健康のためには彼との交流を妨げてはならないのではあるが、それはともかくとして一応は女性の体を持つことになっている響に近づく成人男性だ、それに訓練も受けている人間でもあるし警戒は怠ることができないのだから。

そのうちに萩村を押しつけるようにして響に近づいたのは、もう一人の女性。

萩村とほぼ同じ役割を持つ、今井ちおりだ。

彼女の専門は何でも屋、そしてスカウト——「両方の」だが、彼女の方はたいした脅威とは映っていない。

所詮は新卒で仕事を得られず望んではない形で入り、巻き込まれた形で萩村の手伝いもしているという彼女。

少女の粹を未だに出ていない小娘であり、なによりもごく一般的な女性としか形容のしようがない人間。

たとえ万が一があつたとしても「響」にとっては、元男性の響にとっては悪いことではないだろうし、なによりもそれを望んでいる人員……派閥が存在する。

もつとも彼にとつては、先日にも告白という物を——そのあまりの幼さと稚拙さと甘酸っぱさに悶絶し、狂わんばかりにその音声を繰り返して再生していた者が複数いたらしいが——彼のためにした彼女らがふさわしいと思う者が大半とのアンケート結果だ。

少女たちからの告白を受けた響の、その見た目に反してあまりにも紳士的で理想的な返事だったことがトドメだったようだが。

ギャップというものは、かくも人の心を射止める。

それも男性から少女になった彼だからこそその魅力。

ともかくも肉体年齢的には彼女たち……ややこしいため中学生た

ちと呼ぼう……の方が相応しい一方で、精神年齢的にはどう考えてもあの知性からして同年代の、社会経験を積んだそこらの同世代よりもひとつ以上に飛び抜けている響というアイドル。

今そこで響の美しくて貴重で宝物である髪を雑に触っているため一斉に殺意が注がれることとなっている今井や、あるいは広報としてのマスコットとして活躍させられている岩本ひかり、島子みさきなどの方が相応しいだろうか？

いずれにしても相手を選ぶのは響自身なのであるから、それを連日カップリングというものを議論している者たちには冷たい目が注がれているが、しかしながら響を監視している誰かが……なんとなくでも、相応しい相手を吟味しているのは確か。

これらの一般人の域を出ないただの小娘どもよりもっと相応しい……知性的にも容姿的にも、そして属する世界的にも……相手はごまんといえるのだから、さつさとそちらと引き合わせたいというのが全員の一致を見ているのだが、今のところは彼自身の自由意志を尊重している——らしい。

なぜなら響もまた、彼らの一員——それも、仲間となったのなら間違ひなく上に立つ存在なのだから。

響自身は知らないままに多くの人間が……すでに彼の未来というものを楽しみにしているというのはあまりにも情報が非対称だが、現時点では仕方のないこと。

……響の将来の相手はともかくとして話はまとまったらしく、動きが見えたため馬鹿げた話をしようとしていた監視員たちも一斉にその動向を注視する。

響は「ねこみみ病」などという無意味な——いや、これは彼自身が選んだことなのだから無意味とは失礼か……ならば彼の所属する正当な国家というものにその身を委ねることに、合意したらしい。

病院を辞してからは何週間もかけて熱心にゴミを出していた様子、それと今出てきた彼がリュックサックと紙袋ひとつだけ……直前で渡されたというマフラーも身につけているか、彼らしい……しか持たずに車に乗り込んだところを見ると、本気で身辺整理をし、覚悟をし

て家を出たのだろう。

——彼の両親が■■■■で亡くなってから心的外傷後ストレス障害、PTSDというものに精神と肉体を侵されて以降は長く独りでいたという過去を持つ彼が、意を決して変わったのだ。

それ自体は祝福せねばならない。

永く独りでいて……誰からの支援も得られずにいた彼が。

突然に両親の……あまりの姿を見せられたというPTSDを抱えている以上、誰か……医師、親戚、教師など、彼の身近にいた誰かが半ば強引にでもしなければならなかったはずの支援というものを一切に受けられていなかった彼が……今の姿になり、自力で悟り、そしてそれを振り切って未来を選んだのだから。

彼を一方的に知る全員が、彼の門出自体は祝福している。

彼の意志に対しては祝福、している。

しかし。

「……やれやれ。やはりというか分かっていた結末ではあるのだが……それでも君はそちら側へと行ってしまったのだな」

「今さらかい？ 随分前からこうなるとはわかっていただろうが、爺スコープ越しではなく、眼帯を取ったその目で直接に——百メートル単位で離れている彼らを見てため息をつく男性、イワンと名乗った彼と、彼のぼやきを聞き流す……彼女の方は双眼鏡越しに眺めている、マリアと名乗った彼女。」

彼らは高層ビルの1室から、彼らの部下とは別行動。

数人は手元に置いていて今し方一喝されたところだが……響の旅立ちを見守り、警戒していた。

「それはもちろんだがな。だがな響、君の性格からしてそうなると思っていた。思っていたのはしたのだが、いざこうして目の当たりにすると……そうだな。息子が、いや、孫が……いやいやそれも違うか。『その程度のものなどよりも』大切な存在が間違ったところへ行ってしまった。そう感じてならない。とても残念だよ」

「いい加減にその目越しに話しかけるのを止めろ爺。なにが君だ……耳障りだぞ。鳥肌が立つ」

全員が車に乗り込み終わり、走り始めてからようやくやくに諦めたのか
眼帯を付け直した……爺と呼ばれたイワンがマリアに振り向く。

「良いではないか。 偶にはこういう感傷というものも。 なにせあ
の子のことなのだからな」

「……それもそうだな」

「だろう？」

彼女も双眼鏡と……自らの体を後ろのソファへと投げ出しつつた
め息をつく。

「ま、仕方ないものさ。 人の性分というものは……よほど特別なこ
とがない限りにはそうそう変わるものではないからな。 彼の性質
というものは、この冬でよく知ることできたから、納得はしている
さ」

「ふむ、お前が言うと言説力があるな」

彼もまたその隣に腰を下ろし、透明無色の液体をグラスに入れ、ぐ
いっと煽る。

「今日は彼の門出だ、その軽口も見逃してやろう。 ……それに、だ。
変わらないのなら、変わらせるまでさ。 だろう？」

「ああ、もちろんだな。 既に布石は……当に、打っておるしな」

「人員は？」

「買収済みの者と引き寄せた者。 それに潜らせた者ですすでに充分す
ぎるほどだろう。 やり過ぎても勘づかれるし、の。 彼に危害を加
えぬ内には何もせんようにしておる。 情報だけは抜かせてもらら
うがな」

「そうか」

「ああ。 特に響の私生活については」

「最重要だな」

「だろう」

彼女からふいと差し出された手にそのグラスが手渡され、彼女もま
たそれを煽り、真上を……なにもないはずの天井を、ただの無機質な
電灯しかないはずのそこをじっと見つめつつ、話しかける。

「――変わらないのなら、変えるまでのこと。 ただ、それだけなの

を招き、彼に勉強を教えてもらおうという至福に浸っていたはずの――
飛川さつきと呼ばれる少女は。

そうしていつまでも……ぎらぎらと、ぶつぶつと、唱え続けていた。

50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう 1. 9—2/2

漆黒の宙に広がる無数の構築物。

それらは様々な形をしていて……円形のものや円盤状のものや円錐状のものが多いが色も大きさも一貫性がなく、ただただ仲良く、ぶつかるにはあまりにも離れすぎている距離を置きつつ宙に浮いている。

星々とは違って自らが人工的な光を放っている——そして光で頻繁に通信をしているそれらは、人が造りだした物という1点だけで共通しているもの。

それらは基本的には静止しているが、それらよりもさらに小さいものたちもまた光を放ちつつ高速で行き来しているのが……近くまで寄ればよくわかる。

その小さいものたちも数え切れないほどにあり、行き来も頻繁。よくぶつからないものだと感じるほどの量だが……そこは3次元の宙、しかもそれぞれの静止している構築物たちはそれなりに離れているわけで、だからこそ事故などは起きないのだろうと予想される。

その構築物たちは……現在の拠点としている恒星の周りに点在する星々を——いくつかの都合のいい惑星の周りを周回する軌道に乗っているものが大半であるため、厳密に言えばただ宙に止まったまま浮いているわけではない。

星の動きが緩慢だからこそこうして止まっているように見えるだけで……時間単位で見ると、みな少しずつ規則的に動いている。さて、その中の惑星のひとつ、いちばんに構築物が群れるように張り付いていて大人気のその星。

外からはきらきらと光るちりが輪のようになって見えるように見えるほどにまで特別に密集しているその惑星には、全く手を加えずとも居住可能な穏やかな大気と水と、そしてなによりも少ないながらも陸地があるために……原生生物が、知的生命体がいなかったために。

これまでの長期間……何世代ものあいだずっと無機質な材質の中に再現した自然というものをむさぼるしかなかった人々が、大挙して訪れている。

もつとも人口があまりにも多すぎるため、実際に降りてこられるのはほんの一握りに過ぎないのが不満の種だが、似たような……一部の区域だけを覆って人工的に似たような自然という物を造りだした惑星も複数あるために、そこまでの騒ぎにはなっていない。

そしてこの大人気の惑星は……ここから移動してしまう前に、せめて1回は訪れたい、そして住みたい。

それが無数の構築物たちの中に住んでいる人々の共通の、憧れの夢となっている……らしい。

大気と海があると言うことは青を基調として白い雲に覆われた部分がところどころにあるわけで、さらには点在する陸地のおかげでただの青と白の2色だけではないその惑星の……綺麗で、まるで「地球」のような惑星の、けれどもあきらかに渦を巻く雲と陸地が少ない……そこの、赤道付近にある小島のひとつ。

そこで、幼い少女が声を上げる。

いや、金切り声を。

「まったくも——！　なによなによ、いつつも！　もうっ、あなたって子は！」

「……姉さん」

「なに！」

「うるさいぞ、迷惑になる」

「だーれが迷惑になるのよっ！　どーせ防音が張られているんだから誰にも迷惑はかけないわよ！」

「違うよ、僕が迷惑なんだよ。　僕はうるさいのが苦手なんだって」

「……っっっっ！」

「わかってくれた？　いつも言っているけど僕は姉さんみたいに」

「私の話を聞きなさいったら！　私はあなたのお姉ちゃんなのよお姉ちゃん！」

「……はあ……」

言えば言うほどにエスカレーターしていき、言いたいことを話し終えるまでは何をしてもどう言っても……逃げてでも無駄。

しかも今は……いや、先日から今まで、そして自分には逃れられそうもないため、選択肢はただひとつ。

耐える。

ただそれだけ。

「姉」を持つことになってしまった「弟」の宿命だ。

——見渡すかぎりには海と水平線しか見えない小島でありながら、小島といいつつもそこその面積を誇り、さらにはいろいろと条件がそろっているために「連合艦隊」——呼び方は出身ごとに異なるが、ともかくもその中のエリート層だけが足を踏み入れることができる。この浜辺に構えられた基地の中で、幼い……外見からすると13、4くらいであり、さらには女性らしい膨らみもまだ少ない少女たちが姦しい。

片方はベッドで管に繋がれて寝たきりになっていて、片方はそんな彼女を見下ろすように仁王立ちしたままに……さつきからずっと怒っている。

ずっとずっと怒っている。

怒り狂っている。

女性の怒りとはこういうものだ。

ついでに言えば同じような話が何度も繰り返されているのだが……怒り猛っている姉の方の怒りはまだまだ収まらないらしい。

なお、それを指摘すると手をつけられなくなるため「弟」は……諦めきっている「彼」は、少しばかりの抵抗として同じような返事をし続けるしかない。

「だーかーらー言ったじゃない!」

ばんばんと机の上を叩く彼女。

「あれほどに言ったじゃない!! なんつかいも、口酸っぱくして言ってたじゃないの!」

ばんばんばんばんと机の上を叩く彼女。

「なーんで話聞いてくれなかつたのよ! 聞いていてくれたならそこ

までなることはなかったでしょーにー！」

「だから、うるさいと言っているんだけど」

『だから』は私のセリフよ！　ちよつと黙りなさい！！　『だから』禁止！　姉の命令は絶対なの！！」

「……病室に押しかけてきて繰り返す言葉ががそれなの……」

ぎゃんぎゃんという表現が相応しい騒ぎ方をしているのは、腰まで届く黒い髪をストレートに下ろし、その黒い瞳をベッドに横たわる「弟」——または「妹」に対して……半分以上は心配から、もう半分はいつもの彼女のクセで怒っているうちに怒りが湧いてくるという性質によるもの。

それを理解しているし……そもそもとして「女性とはそういう生きもの」なのだどとつくに諦めているために、黒髪の少女が怒りすぎない程度に愚痴をこぼしているのは……まったく同じ顔とまったく同じ体格を持っている、けれどもその体毛が銀色というだけの少女。あとは体じゆうに管をつながれて横たわり、光を浴びせられているのも違いとしてはあるだろうか？

傍目には痛々しいのだが、本人は……痛みもないことだし情報さえ読んで静かにしていればそれで満足な性格の彼女は、一切と気にしていない。

……その姉は真逆の性質を持っているからこそ、ここまで苦労しているのだが。

「ねえ聞いているのソニア……じゃなかった、えと、『響』！　こっちは見なさいー！」

「聞いているよ……僕がしでかしたことがどういうことかも、よく、ね。さつき説明したように」

「それがわかってないからこそこの状況なんでしょうがー！！」

少女の怒りはまだまだ収まらない。

——まるでくるんとしていた彼女みたいだな、と「彼」は思う。

「だからー　もう！！　ほんとにもー！！　わかってるの！　ねえ！！　連合艦隊の最高司令官のあなたが今ここで倒れちゃったもんだから！　あなたが本調子に戻るまでのあいだにどんだけの被害が出ると

思ってたんのよ！ ついでに私たち、いえ、みんなにすつごく心配させたんだし!!」

「すつごくー!」のところでどうとう音が防壁を破り、廊下や隣の部屋へと漏れたことは……経験上、間違いがない。

「妹」「ソニア」そして「響」と呼ばれる彼女は見ええないようにため息をつきながら、そろそろわかってほしいと説得の方向性の切り替えを試みる。

「頼むからもう少し静かにしてよ姉さん。それに済まないと何度も言ったよ。あのときはこうするしかなかったんだって」

「それもわかってるから怒ってるのよ!! わかっているの!! だけどあなた自身を削ることをして、もう少しで死んじゃうかもしれないなかったっていうのに! あーもう! 私はね、分かる! ソニア、ひびき! ……とにかくも怒ってるの!」

どうとうに勢いが落ちた姉と、それでほんの少しだけ安心した妹。ふい、と、お互いに……少しだけ、顔を背ける。

「響」と呼ばれた彼女は——見た目こそ何年か分だけ成長しているものの、けれども別のところ……遙か遠い遠い場所で、1年ほど前に突如として今ここにいる「響」の幼かったころの外見になってしまった——させてしまった、同じ名前を持つ彼だった彼女とそっくりな彼女。

「いつものことだ」とため息を……まだまだ怒り猛っている姉に気がつかれないように、そつと、もう一度ついた。

——幼い方の「響」という少女と自認する彼だった彼女と、そつくりそのまま、同じように。

姉を持つ妹という身分と、ひとまわりも年下の女子に振り回される男性だった少女という身分は——中身がほとんど同じだからこそ、同じ反応をするしかない。

魂とは、そういうもの。

「もー、こーなったらしよーがないわ! いーかげんに言うこと聞きなさいな! あなたはあの子……あの子も『響』だからややっこしいことこの上ないんだけど! なんとかならなかったの! とにかく

あっちの子に迷惑かけたくない、その一点張りだったけどね！　もう決めたから！」

「……姉さん……まさか。それは止めてほしいと、あれほど」

銀色の少女……「響」と呼ばれた少女の上にのしかかるようにして黒髪の、姉の方の少女が迫り、有無を言わさない雰囲気を出し始め……妹の方は察する。

こうなるともう言うことを聞いてくれないということを知っているから。

……数ヶ月前に全身で攻撃を受けて力尽き、遠くにいる「響」へも届いてしまった申し訳なきでいっばいの、先日の戦闘のことを思い出す。

……あれからしばらく様子がおかしかったし、きつとあれがトドメだったんだらうな。

うっかりと、倒れたあとの会話を覚えていないと言ってしまったのもまずかったらうか。

……ひよつとしたら「また」、あちらの「僕」に助けられてしまったのも知られてしまっているのだろうか。

必要だったとはいえ、だからこそ迂闊だった……と、「ソニア」という名前も持つ妹は、頭を振る。

「全滅したら、それまで。でも逆に言えば、全滅する前にあなたが間に合わなかったらそれまでなんだもん。　もーガマンの限界だわ！

いっつもぎりぎりっぎりに対処してたら私の心臓が持たないんだから！　えっと、それで？　最近合流して……えーつと」

「……数はいいじゃないか。　とにかく大所帯になったんだよね？」

「もー多すぎてよくわかんないけどタチアかノーラなら知ってるからいいわよね！　……って違うわー！」

「いっつも忙しいね姉さん」

「その途方もない数の命とあなたを守るためには代えられないの！　分かるわね！　だから——」

これ以上抵抗しても無駄だと、首の力を抜いてまくらにぽすつと頭を沈ませ、ふわつと銀髪が散らばるのを感じる「響」。

それに合わせてもつと顔を近づけて……息がかかるほどにまで迫り、黒髪が銀髪に混ざるようになった状態で黒髪の少女は、姉として……妹である最高司令官に、命令を下す。

序列を完全に無視しているが、逆らえる者は誰ひとりとしていない。

なぜならば当の……最高司令官、最高指揮官、最高責任者の「響」が同意する意見なのだから。

逆らえば他の大多数から、ただただ見捨てられる。

それまでなのだから。

「あそこの……えっと、なんて名前だったかしら」

——ここで黙っていたら気が逸れるかも、と考える彼。

「……あなたが言わなくても2人に聞けばわかるわよ？」

「……地球、だよ」

——無駄だったらしいな……今日の姉さんは手強い、と考える彼。

そこから顔を背けようとして片手でほっぺを握られ、最後の抵抗も無駄になる。

——少し、痛い。

そういう想いを込めて黒い両目を覗き込むも、効果はなかった様子。

「そう、それよー」

もうひとりの「響」のいる世界の名前を聞き、しばらくのあいだ……1度だけ、いや、姉である彼女が気がついていないだけで厳密には2回も来ていたのだが……いずれにしろこちらへと訪れ、そして彼女と少しばかりだが話をしたあちらの「響」の事を思い出して静かにしていた黒髪の少女……アメリ。

妹が幼い姿になり、さらには……とても素直になって口答えもせず、まるで妹のはずなのにかわいい弟のように感じたあのときのことを思い出し、今までの怒りしか浮かんでいなかった顔から一気にごきげんな顔つきになる彼女。

「やっぱり来てもらいたいものね、だってかわいいんだし。あ、もちろん私たちを助けてほしいんだけどね！」と言いつつ、目の前の妹の

ほっぺを、ほほをわしづかみにしながら宣言する。

「だからチキユウのあなたにもう1回だけでいいから『力』を貸してもらうのよ! ——いいわよね? 『響』。拒否権はあなたにはもうないわ!」

——じゃあなんでいちいち聞くんだ、と思う彼。

「だってそうでもしないと……私たちは……私たちはあ……」

「……分かっているよ……必要だってことは。でも……はあ……」

見つめ下ろしてくる黒い瞳から薄い色の瞳を……顔を固定されているためにわずかしかできないながらも逸らしつつ、銀髪の少女は思う。

——済まない、あちらの「僕」。

君に再び迷惑をかけちやうけども——もう防げないんだ。

1回切りのはずだったのに、もう3回も。

初めに「力」を貸してもらったときには、そう言っていたのにな。

だからこそ同意してもらったというのに……このザマだ。

——本当に済まない、と。



一方で、そこから遠く遠く離れた場所で、ぱんぱんに詰まったリュックと紙袋を片手にマフラーと髪の毛をいじりつつ……彼だった彼女の響は、なじみのあるふたりと再会した喜びを胸に、嘘をつかなくていい相手が増えて自然な笑顔を……控えめな笑顔を覗かせながらそんなことも知らないで、ただただ……車の中で揺られていた。

いずれ、もうひとりの自分と……記憶のある状態で再会することになるなどとは思ってもいない、「魔法さん」程度の存在と1年間かくれんぼを続けていた「響」は、ただただ嬉しさに浸っていた。

46. X話

最初はものすごく強引な「念のためだから！」で運ばれた病院から退院するまで、してから家を出るまでのいろいろのことを思い出す。例えば外というのは魔境だっというもの。

僕は現在幼女って生物になってる。

だからいくら出かける前にしっかりとトイレを済ませたとしても、ただでさえ小さい体の小さい膀胱と筋肉、タイミングが悪ければどうしてもトイレに行きたくなってしまうことはあるわけで。

まあよく考えてみたら誰かと外に2、3時間くらい出かけても「ちよつとトイレ」っていうのはいくらでもあるわけで……ただ単純に僕が誰かと出かける機会が10年くらい無かったからすつかり忘れていただけなんだ。

ん。……ごめん、ふたりとも

「どしたの響？ もー帰らなきゃとか？ 具合だいじよぶ？ 休む？」

ゆかりとかがりと出かけた先。

前を歩いていたゆかりかが振り返ってくる。

肩まで乗つかるようになった髪の毛をふわっとさせながら。

「いや、そうじゃないんだ。ただ、少しトイレに寄らせてもらいたいんだ」

「あら、響ちゃんも？」

「？」

もっ..

……嫌な予感がする。

「ちよつとよかったわ、私も行きたいのよ。一緒に行きましょうー！」
いつものとおりに僕の手を握っていたくるんさんがのぞき込んでくる。

かがりと並んでいるといつもこうだ。

「いや、かがり」

「ゆりかちゃんはどうかしらっ..」

「待って、僕はひとりで
行きたいのに。」

そう、今までだつてなんとかみんなとタイミングをずらして来たんだから、今度だつて。

「んー、そだねえ。 肉体こそ、幼じ……女の子な響でも」

「……ゆりか。 今どんな呼び方を」

「だけど中身は男の子なひびきと、純粋に乙女なかりんを……そんなにもいかがわしい場所にふたりだけ行かせるだなんて許せない！
ので私もご一緒させていただきますのよ」

それはさらにまずい。

なんとしても阻止しなければ。

今までは抑えられていたんだ、説得すればきつと。

けどもふたりとも標識を探してきよろきよろし始めた辺り、僕と
いっしょにトイレへなどというとても困ることをしでかそうとして
いる様子。

なんとか……そうだ。

「えつと、ふたりとも……僕が、中身は……精神的な性別は男だと知っ
ているんだから一緒に行くのは嫌だよな？ だつて男とだよ？」

そうだ。

思春期の、それも勢いと心遣いとはいえ、僕に告白までしてきたふ
たりなんだ。

こうして性別を意識させればきつと、恥ずかしくなるはず。

よし、これでクリアだ。

「べつつにー？ だつてひびきんだし」

え？

「気にならないわ？ だつて響ちゃんだもの」

なんで？

「……僕は気にするんだけど……」

なんでふたりはこうなんだ。

年ごろの女の子なんだ、少しは羞恥心というものを持ってほしいと
ころ。

「まーまーひびき、どーせならいっしょに行つとこーつて。 あつち行つて無事に帰つてきて、んで学校通えるようになったら絶対に休み時間のたんびに連れションに」

「ゆりか。 下品だよ?」

女の子がそんなこと言つちやダメでしょ……しかも男相手に。

幼女だけだ。

「もー、ひびきは潔癖なんだからあ。 女の子同士ならあたりまえのことなんだよ? いっしょにトイレに行くつての。 毎日のように、休み時間のたんびにすることになるんだからさあ……生理現象なんだからしょうがないじゃん」

学校に通う予定は毛頭ないけど、でもそっか、この体で社会復帰するならそういうことに……なんかやだなあ……。

「……私はまだちよつと恥ずかしいけれども」

おや、かがりがゆりかよりまともな感性を抱いている奇跡が。

「でも休み時間とかなら男子女子関係なくそうするのが当たり前になるのだし……今のうちから慣れておいたほうがいいと思うわよ? ほら、響ちゃんつて今までずっとそういう機会無かつたつて言うし」

む、まずい……僕の偽りの経歴がここへ来て。

「それに響ちゃんの場合には学校側も配慮してくれるだろうから、共用トイレとかそういうところを使うのでしょうか? だからそこまで恥ずかしくないわよ!」

「……女子トイレじゃないなら、まあ……」

気がつけばもう片方の手をゆりかに握られていて有無を言わさない感じになつていた。

1対2だと不利だ……やっぱりと出かけるんだつたら、気分がころころ変わるし年下の女の子みたいにかわいがつてくるつていう女性となら1対1じゃないといけないみたい。

たぶんそれでも負けるけど。

とは言え左右から腕を軽く前に引つ張る力が加わっている。

僕は連れて行かれている。

もはや逃れられない。

「それでは行きましよう？ お手洗いはここから——……」
両手を引かれる僕。

どこからどう見ても「年上の女の子たちから心配されている女の子」って様子になっている僕。

……今まで隠していた性別のことを告白した途端にこれだ……いや、しようがないんだけどさあ……。

◇◇

『現在使用できません』

そう書かれた紙が……僕が普段から使っている、男女どちらのでもないトイレの扉に貼ってある。

無慈悲に。

それを見たせいか尿意がさらに増してくる。

やばいかも。

「あらあら故障中かしら？ お掃除中ではなさそうなものね？ ……

響ちゃん、他の階、間に合いそうかしら？」

「……………」

「ちよいマズい感じよねえひびき……うん、女の体ならしようながないよ」

だってもうすぐ出せるって思ってたもん。

だからこそそのんびり歩いて来ちやっただし、出す準備をしていた体もシヨックを受けていて余計に危ないことになってきている。

こういうトイレって、フロアに多くて1か所2か所つてところ。

たまたま今まで運が良すぎただけでこういうことだってあり得るんだ。

今までが良かっただけ。

……漏らさなかったのも、ただ運が良かっただけかもね。

「あちやあ——……じゃー、残念だけどひびき、こーなったら私たちとホントにいつしよに入るしかないねえ」

「いや、でもまだなにか選択肢が」

「いやいや無いでしょ。でもって真横の女子トイレは……ん、いつものとーりにちよーつと並んでるけど、このくらいなら2、3分で入れるだろうし？ スマホ勢がぎよーさんいらっしやらなければ」
スマホ勢？

「女の人はね、個室だからつい見てしまうらしいのよ。だから時間が掛かるの」

……あ、そういうこと。

けどそんなことはどうでもいいくらいに膀胱が張り詰めてきた気がする。

「ま、まあ！ 元気になったらいずれは乗り越えなきゃかもな試練だからさ！ ほら！ 男子トイレと女子トイレしかないっていうところで、今みたいにとーしてもって可能性あるし！」

もう我慢の限界が近い。

「ほら冷や汗かいてるじゃん……だからひびき、早く行こ？ どーしてもならさ、『この子、もーガマンできないみたいなんです！』って言うって順番譲ってもらえばいいし！ 響のフェイスならだいいじよぶだいいじよぶ！ だから響、私たちと、新しい扉を！」

「しようがない」

「うん、んじや並ぼ」

「男子トイレに行ってくるよ」

「うん！ 男子トイレに……えっ？」

「えっ……響ちゃん？」

「こうして髪の毛を収納して」

僕が性別をげろってしてからは外でもできるだけ髪の毛を出してほしいって頼まれるから仕方なく出していたそれを、くるくると丸めてセーターの中へ。

中でふあさつと広げてなじませて違和感が少ないように見せるのがコツだ。

「で、上着を腰に巻けば」

コート……春ものの、かがりが持ってくれていたそれを手に取って腰に巻く。

よし。

「顔が出ていても男に見えないこともないからね。これで問題ない」

窓ガラスに近寄ってみても……うん、ぱつと見なら男の子だと見てもらえる。

というか夏はずつとこれで通してたから大丈夫って知ってるし。

どうせ男のトイレなら誰も気にはしないはずだし。

今日がスカートじゃなくなかって本当に良かった……ほら、くるんさんって妙なこだわりあるから……。

「それじゃ行ってくるよ。終わったら……そのベンチのところで待っているよ。じゃ」

「あ、ちょー」

……腰に巻くときに締めすぎたのか膀胱が厳しいことになっている。

ゆりかが何か言いたげだったが、僕は急いで誰も並んでいない男子トイレへ。

「響ちゃんにしてはいつになく俊敏ね……よっぽど我慢していたのかしら……」

◇◇

男子トイレに音姫さんなる救世主はいない。

だから偶然に発見したんだ。

なるべく前に、だけどこぼさない範囲で座るようにすると、しゃあああって出る音自体は防げないものの下の水に叩きつけられるすごい音は防げる。

だから外でする恥ずかしさもずっと前に比べたら平気だ。

まあ漏れそうだったおまたの解放感からそんなのはどうでもよくなってるけども。

全身の筋肉が弛緩して思わず身震い。

それにしてもやっぱり……肉体的には何ら問題はないんだけども、

女の子たちと女子トイレに入る、いや、女子トイレっていうあの空間を訪れるっていうのには抵抗感が抜けきれない。

精神的に。

ま、そんなときにはこうして男の方へ入れればいいだけなんだし、少なくともふたりには僕の精神は男だつて伝えてあるし。

だから、これからもこうすればいい。

うん、実に簡単なことだったな。

なんであんなに困ったんだろうね。

きつと漏れそうだったからだ。

◇◇

すつきりしてしばらく。

解放感に浸っていた僕は、座っていたベンチの前に立つ2人の影に包まれる。

「ん、2人とも……結構時間がかかったね。 やっぱり女子トイレ、それも列をなしているのは危険だね。 今後僕はこういうときには今みたいに男子トイレに」

「ずるい」

いつになく低い声になっていたゆりかの声にちよつとびくつてなった。

「……私たちのじゅんすいなおとめごころを弄んだだけじゃ飽き足らず！」

「待って、何の話？」

「トイレの！ あの耐えがたい女特有の列をスキップしやがってからにい！ ずる！ ずるっこ！ ずるっこ響だよそれは!! そうだよいたんだよ、結果的には正解だったんだよひびきにとつては！ だけど！ スマホ勢が何人も雰囲気的になんだよ！ 開かずの扉だったの!! だから響にとつてはいいことだったんだけどでもそれはそれとしてやっぱりずるっこだよ！」

こどもつぽく怒ってほっぺを膨らましていて、さらに幼く見えるゆ

りか。

……だつたらなおさら僕の選択が正解だつたんじゃないか……なんて理不尽な怒りなんだ。

「響ちゃん」

かがりの声もちよつと低くなっている。

これは……抜け駆けに対する怒り……？

「私も……珍しく響ちゃんがずるいって、そう感じてしまったわ。

だってそんなに簡単に……私たちがこれまでも、この先もずーつと苦労するこれを男の子や男の人みたいに楽をして！」

「だから僕は男」

「ずるい」

「ずるいわ」

「えつと」

「こーゆーとき心は男って便利で良いよねー」

「良いわねえ……だつて10分以上お得だつたんだもの」

「……えつと……」

「ずる」

「ずるいわ？」

じとつとした2対の視線。

「……ごめん、ふたりとも」

とりあえず謝る。

かがりに対して普段からしている降伏宣言。

「……ま、いつか！ それよりかがりん、ひびきの髪の毛出しちゃらんと」

「あら、そうね！ 響ちゃんったら恥ずかしがり屋さんだからすぐに……」

腰に巻いていたコートを解かれ、髪の毛も出させられているのをされるがままにしながら思い起こして思い至る。

ぼーつと天井を見つめながら。

……なるほど。

今僕がしちゃったのは、肉体的には「女子」っていうカテゴリーな

僕が「女子」としてはずるいことをして楽をしたこと。

それも女子な2人のまん前で。

事情と理由は分かっているけど、どうしても気分的にはそうなるんだ。

しかも結果としてふたりはずっと立ってじりじり待っていたのに対して、僕はさつきと楽になって座って足をぶらぶらしながら待っていられたんだし……まあ気持ちは分かる。

分かるけどもめんどうかい。

……僕が男だって分かってくれていているこの子たちでさえこれだ。

男に戻れなければ、肉体的性別に従って女性に囲まれた中で生きることになる。

そんな女社会で僕は無事に過ごしていけるんだろうか？

ほら、今みたいに女子って世界は同調圧力すごいって言うし。

……やっぱり男の方が楽だったなあ……いろいろと。

けど戻る見込みは今のところない。

もう諦めよう。

トイレは終わったのに来るときと同じように両手を引かれながら歩く僕。

そんな僕を見たお店の人とかにくすくすと笑われたりしながら、僕は考える。

やめて。

僕は可愛いって褒められても嬉しくないんだ。

だからそんな温かい目を注がないで。

……とりあえず、念のためについて見つけておいた限定のお菓子っていうものを置いているお店。

それを紹介してあげてそれで満足してもらって機嫌を直してもらおう……じゃないと事あるごとに今のを引っ張り出されてみんなの前でけなされるんだから。

46. X2話 警戒心

しっぽがゆらゆら、ポニーテールがゆらゆら。

「そういえばさー」

「はい？」

僕はできることなら誰もいない空間でぼーっとしてたい。

その次ってことなら人と会っていても静かな時間が続く方が良い。そういうわけだねこみみ病ペアと会っているあいだに起きた不意の静寂。

せっかくゆらゆらしてるのを見て楽しんでたのに岩本さんが話しかけてきた。

幸せな時間って続かないんだね。

「私たちが響くんとはじめて会ったときっていろいろと衝撃的でしたねえ、ドラマチックでしたよねえって思い出したの。私たちがあっちこっちさまよった挙げ句の……何階でしたっけ？」

「6階ですね」

「あ、そうでしたか。響さんはよく覚えていますにやあ」

……なんで僕、女物の服のフロアのこと、とっさに言えるんだろ……いや、良く行ってるからだ、きつと……。

「ともかくそこまで追い詰められるくらいには協定違反って感じの人たちから執拗に……もーストーリーカー以上にしっつこく追いかけて回されててねえ」

「そうでしたにや。もう逃げ場もなくなってる体力も尽きてきて……にやあ、私だけならどうとでもなったんですけどにや？ 息は切れてきていましたけどまだまだ平気だったので。でも、ひかりさんを見捨てるわけにはいかないからって、ひとりで逃げるなんてできなくて」

「ありがとねー、あのとき見捨てたりデコイにしないでくれて」

なんか物騒な単語。

「にやっ。で、観念するしかないなーって思ってたところに出てきたのが……まさかのまさかですよ！ ちっちゃい子が……あっ」

「……………」

じつと島子さんの黒い瞳を見つめると、その上の耳がへにやっつた。

うん、許す。

「…………ごめんなさいですよ……あのときは初対面でしたし、そう思うしかなかったのでしょうがないんですよ」

「事実ですし、僕は気にしていませんよ」

そう、気にしてなんてない。

だって僕は島子さんよりは年上なんだから。

「で、逃げて逃げて逃げて逃げて……ってして根負けして参っちゃいそうだったあのときに、ぱっと目が合ったと思ったら手招きしてくれて助けてくれようとしてた響さんの存在が。ただただ、それだけで……すつごく心強かったんですよあ、って」

「そうねー、ずっと大変だったからこそ、ようやく匿ってくれそうな子が見えてね——……」

そう言いながら店員さんをおかわりのパフェを頼むふたり。

見ているだけで胃もたれしそう。

「いえ。僕はあのとき、ただ……おふたりにもおはなししたこの体のこともあって、いろいろと……ただ面倒なことを避けたかったんです。ただそれだけでした。僕のためだったんです。たくさんの人から追いかけていられると思われるあなたたちを僕が隠してしまえば大丈夫だろうっていう、僕自身のことだけを考えた行動で」

「それでも私たちが、助かったんだよ？　ねえ？」

「ですよ。むしろそうやって本音ってことでいいですよ、それ言ってくれるのがマジメな男の子っぽくてかっこいいですよあ」

……罪悪感。

あのとき本当「うるさい人たちがどっかに行ってくれればいいや」って、ただそれだけだったのにな。

「だって敵……って言ったたら失礼？　いや、あれだけのことをしてかしてきた人たちですからいいですよねえ……追いかけてくるそういう人たちや、道すがらにスマホとかを向けてくる人たちばっかで心が

折れそうっていう状態だった私たちだもん」

「下手に有名人ですとあんなに必死でも撮影かとか思われちゃうんですじゃあ」

「で、そんな私たちの前にたったひとり。 たったのひとりですよ？ 頼めば助けてくれる人たちもいたんでしようけど、頼む前から……走ってしまいましたし、息も切れていたのでもりだったんだけど、そんな中でひとり、積極的に味方になってくれる子……あ、イヤそんな顔」

一応僕はあなたより2つ下程度なんですけど。

「そう言いたいのを我慢してるのがバレたらしい。 そういう人が、男の子が現れたのよ。 わかる？ あのときのインパクトって普通に初対面で会うときのなのよりもずーっと強烈だったんですから」

まあ確かに……僕からしても衝撃的だったから忘れないもん。

「そんなわけで、いまだに私たちのあいだで響くんって言ったらあのと時の手招きしてくれているあのと時の響くんなんだー。 だからかなあ？ 響くんの中身が……心が男の子だって言われたときも違和感があるどころか……えーと、しつくり来るって感じで。 ね？」

「あ………そうですね、わかりますに “やあ” —— |!?”

ねこみみとしつぽがぴんと上を向くついででの絶叫。

何？

どうしたの？

その辺でネズミでも見つけた？

「そのことでお礼ついでに言おうと思ってすっかり忘れていたことがあるんですじゃああ!!」

今の会話で叫ぶ要素あったっけ？

「響さんは多分気がついてないっていうか、だからこそ心配なので伝えておかなきゃっていうかなんですけどにやー！」

「あ。 もしかして、あのこと？」

「はいですよー！」

「まー、心が男の子だったんだったらしようがない……のかな？」

「？」

「わ、そうやって首かしげるの可愛……じゃなくって。あれは響くんが女の子だけど男の子で、男の子だけど女の子だからこそなんだろうけど……だけどやっぱ、心配だしねえ」

「……えつと。すみません、お話が全く見えないんですけれど」

「あ、ごめんなさいですよ」

「……」

「……」

「……」

沈黙。

「……」

「……ちよつとみさきちゃん！」

「え？ ひかりさんが言うんじやないんですよ？」

「なんか急に恥ずかしくなって来ちゃって……お願いっ！」

「もー、わかりましたにやあ……響さん、おはなしと言うのはそのですよ」

「はい」

なんかあったかなあ……こんな気まずそうな前フリされる話って。

何？

あ、もしかして毛糸ぱんつ被つちやってた件？

「……いくら私たちを守ってくれようとしていたっていうのがあったってしても。いくらそれらしくしようとしてたって言うてもですにや」

しつぽの毛が逆立っているのが興味深い。

「ああやって人前で……男の人が来るかもしれないとこでわざと肌を晒すなんて何考えてるんですか響さん！ にや!!」

「え？」

「え？ じゃないですよ！ いつもあんな感じだとそのうち犯罪に遭っても不思議じゃないっていうかほんつとに危なっかしいですよにや！ 響さんってあれですよにや、普段はすつごく頭良い風ですけど実はいろいろ抜けてる感じですよにや!?!」

犯罪？

肌をさらして？

え、だってただあのときはそうすればびっくりするだろうって。

「……………ああ」

「今のそんなに熟考要るの!？」

「危なっかしいですよあ……………」

「いえ、あのとき僕は少しだけ胸元を出しただけです……………下も脱いでいましたけどシャツの裾で下着はきちんとして隠れていましたし。

そもそもこの僕は子供ですし……………だからそうおかしい服装ではないと思っただけです」

見たらびっくりはするだろうけど……………その程度でしょ？

「……………あのね、響くん」

「はい？」

島子さんたちが……………甘味をほおぼるのを止めてまで身を乗り出してくる。

あ、これ、怒ってるやつだ。

よく、何回も何十回も経験した「おこ」の予兆。

僕はぴんと背を伸ばす。

「私たちが言うのもね？ 響くんに言うのもアレだけどき？ ……人って見た目が全てなのよ？ 特に若いうちは。 だからそんなに

簡単に乙女の柔肌を」

「いえ、僕は」

「たどえ男の子だったとしても見せちゃいけないの！ 肉体は女の子なんでしょ！」

「む」

確かに一理ある気がする。

「む、じゃないわよ……………しかも、どこからどう見てもどこぞのお嬢さまって感じの雰囲気と見た目を持ってて、どんな格好をしていても女の子だっけってきつと」

「……………せんぱいはシヨタコンの上にロリコンまで」

「事実なんだからいいでしょみさきちゃん!? とにかく！ 女の子で

さえ目を惹かれるその容姿なんだから気をつけた方がいいって言うわけ！ 分かった!？」

一理あるけど……そこまで？

「……私たちは教えてもらったからこそ響さんが男の子だって知ってはいますけどにや？ でも一般的に考えて響さんのような子でもですにや？ その……あられもない姿というものをしているのって普通の人はもちろん『その筋の人』っていうのにも見られたりしたら大変ですにや。 ヤバいんですにや」

あー。

なるほど……ロリコンさん。

なるほどなるほど、確かに僕にはそういうのは無かったけどそうじゃない男もいるもんね、世の中には。

「ともかくそういうわけですにや。 私たちの経験則で言うのなら……そうですね、ちよーつと露出の多い衣装でテレビとかに出たりしたあとに湧いて、もとい出ていらっしやるような少しヤバい方向性のファンの方とかみたいなのが出て来ちゃったりするかも、なのですにや。 ご理解はいただけましたにや？」

芸能界って大変だね。

「特に駆け出しのころとかってこちらも素人、お相手も素人っていう場面が……距離感間違えちゃって思い込んだ人とかっていうのは、その。 ……えっと、とにかく怖いので気をつけてくださいにや。 はい」

「分かりました……けど良いですか？」

とりあえずは納得したけども、やっぱり思い浮かび続ける感想を投げかけてみる。

「僕みたいな子供に、少女以上の女性に向けるような感情を抱く男性なんていないんじゃないですか？ だって子供過ぎるでしょう、今の僕の見ただ目って」

実際僕も幼女になったからこそちよつとどきどきする程度で済んだんだもんね。

これがもつと……小学校高学年とか中学に入るくらいの発育だっ

たらこれどころじゃなかったかもだし。

「……………」

「……………」

「……………ねえ」

「にゃ」

「どうするっ？」

「どうするって……………やっぱ言わなきゃダメっぽいですよ」

何がダメなんだろう？

「……………あのね、響くん……………」

「はい」

「男の子な響くんにな女の子な私たちから伝えるのもなんだけどね？」

「にじゅうななさいが女の子って」

「今は良いですよ！……………とにかくですね、すこーしだけ情操教育っていうのをあげますね……………？ ていうかしないとヤバそうだから、本気で。 ご家庭の方針でもさすがに危なさ過ぎるって思うし……………」

「いや、僕は大丈夫ですから」

「私たちを助けると思って聞いてくださいにや！ じゃないと、中身が男の子だからこそその警戒心ゼロっていうその無防備さでどんなヤカラを吸い寄せたもんじゃなかったもんじゃないのですにや！ ほんつとに心配なんですにやあー！」

「うん……………犯罪に遭ってからじゃ遅いもん、お願い響くん……………」

「……………わかりました」

しぶしぶと納得した振りをしておかしなみえない。

だってこうしてヒートアップした女性は、とにかく話を聞いてあげて満足させてあげるしかないんだって知ってるから。

良く分からないけど2人にとってはダメな答え方しちゃったらしいから。

だからしおらしく素直な姿勢が大事なんだ。

「ごほん。 はい響くん、この資料」

岩本さんがクリアファイルを渡してきた。

え？

「えつと……これは？」

「うち……の事務所に限らなくて、知り合いの子たちや先輩方が遭いそうになったり実際に遭った、セクハラから……その、ギリギリのところでも助かった際どいケースまでまとめてきました。たぶん響くんはこうでもしないと分からないかもーって思ったから……実際にそうだったけど」

目の前にはクリアファイルから出てきた、レポート風の……几帳面な資料というものと、その先にある2人の視線。

……諦めよう。

2人は僕を心配してくれているんだ。

それに女としての先輩だもん、僕に足りない何かをここまで言うんだ、きつと大切なことなんだろうし。

「いーい？ 女の子は男の子より……肉体的な意味でね、肉体的で！ 気をつけなきゃいけないの」

「良いですかにや？ 基本的に男はオオカミさんなのですにや。女の子をぱくりと食べちゃいたいって言う……」

☆☆☆

「じい——」

喫茶店の一角。

通りがかった人が聞いたらぎよつとするに違いないような話をしだした3人から、少し離れた席に座る2人。

そのうちのひとり……今日はオンのために髪を結っている彼女、ごく普通の会社員の格好をしている今井ちおりは、わざとらしい声を出す。

「じい——……」

その対面に座る彼、筋肉質で強面な癖に目の前の女性に強く言えない萩村茂紀はため息をつきながら言う。

「……口に出して言っても駄目ですからね、今井さん。響さんに愛

想を尽かされますからね?」

「わかってますって。 だからこうして見ているだけですよ? ねー?」

その目つきは——まるで肉食獣のよう。

こんこんと説教をされはじめた銀髪幼女へ向いていたその目つきは……ちようど「彼」が両手に持つ書類に書かれている「危険人物」たちの特徴に少し似ていた。

46. X3話 偽乳と牛乳 1/2

「まーだまだ寒いよねー」

病院の中はあったかいけど外は寒い。

まだまだ冬のお見舞いに来たゆりかが手をすりあわせている。

「あ、そーだ、今日はまだかがりんしか来てないしさ、聞いときたいのよ、今のうちに」

折りたたみのイスでぎこぎここと鳴らし始めていたゆりかが、がたと前のめりになる。

ぱつつんがふわっと浮かぶ。

「なあに？ ゆりかちゃん」

彼女は基本的に気分屋だ。

ただしその隣に居るくるんさんがはるかな上級者だから霞んでい
るだけ。

「んとさ……もー響もこーいう話題慣れてるだろーし、当事者しかい
ないからぶつちやけるけどさ？」

そんなゆりかがこんな前置きつてことはちよつと恥ずかしい系？

でも前置きしてくれるだけマシだよね。

隣でパン菓子を頬張ってる子なんかは絶対そういうの無いから。

「なぜに、どうして。 なんで！ なんでかがりんはひびきにひつた
すらに服着せたがってたのさ！ ひびきによると、それはそれはもー
果てしのないものだったって言うじゃん？ なんだってそんなこと
してたのかがりん！」

「あら、そんなこと」

そんなこと？

僕がどれだけ男としての自意識を削られたのか知らないんだね？

「だって響ちゃん、かわいいじゃない？」

「え、そりゃあまあそうね？」

「ええー」

「……………」

「……………」

「……………あ？ おしまい？」

「ええー！」

うん……………きつとそうなんだ。

この子にとって「理由」なんてのは「そのときの気分」ってだけだもんね……………。

「いや違うのよかがりん、そうじゃないのよ……………それは答えになつていないのよ……………」

「あら？ そうかしら？」

ぱつつんがくるんに対して困惑している。

うん、突っ込みつて大切だよね。

けどもゆりかはまだかがり歴が浅い。

彼女の言動を理論立てて説明できるのはこの場で僕しかないだろう。

「ゆりか……………いや、それで正解なんだよ」

「え、うそん。 たったそれだけつてのではないでしょ」

「いや、あるんだ」

「え、ええ……………」

なんだか衝撃的な表情をするゆりか。

彼女の視線が向かった先には……………頬張っていたのを飲み込んでとろけているかがりだ。

「それにだよ、それはもうとつくに……………かがりに捕まったときから諦めていることなんだ。 よりにもよつてこのかがりがいる店で、このかがりに向けてコーデイネートつていうものを頼んだのが運の尽きだったんだ。 ただそれだけなんだよ」

「おお……………ひびきが煤けてる……………」

「それに、かがりはかがりだからね。 『自分ももちろんだけれど、他人も見境なく着せ替えしたい、着飾りたい』つていう欲望、それ以外の理由も感情も持ち合わせていなかったんだだろうし持ち合わせていないんだろう。 かがりだからね」

「ありがとう響ちゃん！」

僕はどうしてお礼を言われているのかを理解するのに数秒かかる。

……とりあえず何も考えないで脊髄反射で話すのはやめた方が良
いって思う。

「私たちが初めて会ったときのことよね？ ええもちろんそのとおり
よ！ だってかわいかったんだもの！」

「そ、そう……ホントにそうなのね……」

「……かがりだからね」

「おお、響が死んだ目をしていらっしやる……ま、まあヒガイシヤな
響がそう言うんなら良いんだろうけどさあ」

「うん。 最初から諦めさえしていれば大抵のことは受け入れられる
んだよ」

「これが諦観というやつか」

「そうとも言うね」

僕のため息に心底同情してくれているらしいゆりか。

なんかいたずらしようとしてたらしい彼女が真顔に戻る程度には
深刻な悩みだ。

「でも……はあ——……去年の夏は至福だったわあ」

それに気がつかないかがりがうっとりしたまま抜かし始める。

「響ちゃんのお洋服をいいーっぱい選んであげられたの……響
ちゃんが元気になって帰って来たらまたたくさん選んであげられる
のよね……それも楽しみよお……」

くるんくるんくるんしているかがりと、それを引き気味で見つめて
いるゆりか。

そんなふたりを見ているうちにふと思ひ至る。

……いつになるかは分からなくても、この子たちと……どんな形で
も会うって決めたけど。

もし久しぶりに会ったとしたら……成長できたとしてもできな
かったとしても、そんなことは関係なしに手を引かれて連れ出され
て着替えさせられて、いちいち感想を求められて買わされてっていう
未来が待っているって。

女ものは流行り廃りも早いし、そのときに着ている服を流行遅れ
……「かわいくない」って決めつけられて服屋へ直行させられて着せ

替え人形。

うん、考えなくても分かる未来。

前ならまだしも今なら、僕のことを見た目はともかく中身は男だつて知っているくせにこれなんだ。

そのときにそう主張したってきつとこの子には通じない。

「分かったわ！」って自信満々だけでも……多分本当には実感していないんだろうし。

……どうか、どうか男に戻れますように。

着せ替え人形は……こう、心を侵食してくるんだから。

「ま、お着替えの件はいいとしてさ？ ……ハイライト消えてるけど、てかだいじょびびき」

大丈夫じゃないけど慣れてるよ。

「響自身がそこまで気にしてないって言うんだから良いのかなあ……だけど、だけどさ？」

かがりが自分の世界に閉じこもってぶつぶつ言っていただけの空間に、ゆりかからの意味のある言語が戻ってきた。

「私、ちよいと気になってね？ ……これ、かがりんが席外してるとき

に聞いちゃったんだけどさ……ね？ 響から聞き捨てならないコト、聞いちゃったんだけど。 ……ちよいとねえかがりん。 かがりんってば、そろそろ目覚まして？ ね？」

「あら、ゆりかちゃん」

「うむ、私がゆりかだ」

トリップしていたかがりの意識も戻ってきた様子。

「かがりん？ ……響ってさ、はた目に見たら私未満の小学生で……それも初めの頃みたくだぶだぶなカツコぼつかしてたら……いや、こうして顔を出しても下手すると幼女」

「……………」

じつとゆりかを見つめる。

否定はできないけど抗議はするんだ。

「……じゃなくて低、じゃなくて高学年くらいの小学生。 こーして体に合った服着てて顔と髪の毛だしてたら低学年にも見えちゃうこ

とあるでしょ、ひびきって。 そんなひびきに対して、かがりんってさ？」

いいんだ、ちいさくたって。

それでも生きていけるんだから。

「……かがりんってさあ——……」

……ゆりかの様子が変？

具体的には目がどんよりと……ちよつとびっくりしたけど魔法さんの影響じゃない感じに曇っててハイライトオフってやつで。

そんなゆりかは……そんなにも恐ろしい目をかがりに向けつつ、イースごとじりじりとにじり寄っていく。

「……事もあろうに。 こともあろうに！ 響に、どっからどー見てもよーじよばでない響にブラっていうものをつける提案をされたそうじゃないですかこんちくしょう！ うらやまけしからん！」

女の子の間では胸のサイズは致命的らしく、ゆりかが普段とは違う感じに暴走している。

……ちなみに今のは何に対しての怒りなんだろう。

「それも子供用のやつ……私、今でもほとんどそれしかつけてないけどそれならともかくだよ！ 盛るためのそーゆーモノをオススメされたそうじゃないですかねえかがりさん！ てかよく響の体のサイズのものがありましたねなんでしようかねこんちくしょう！ 設計した人もオツケーした人も売り出した人もヘンタイですねこんちくしょう！」

「え……ええと……」

そんなゆりかにかがりかたじろいでいる。

実に珍しいものを見た気がする。

「ねえなんで？ なんでなんで?? どうして？ 貧乳ってそんなに罪深いモノなの？ 修正しなきゃ行けないものなの？ 罪なの？ ねえ教えてよでかいかがりさん……」

「ちよ、ちよつと待ってゆりかちゃん、なんだか怖い感じになっているわ!!」

「だって怒るよ？ あたりまえじゃん？ そーんなでつかいのふたつ

抱えてるかがりさんにはわからないでしょー？ 深い悲しみを。知らないんでしょー？」

「……大きいの？ 悲しみ？ ………………?？」

……かがりつてすごいよね。

この状況でもそれに思い至らなくて悩む仕草をするもんだから、腕を組んで胸が動いてゆりかの視線が刺さる感じになってる。

……わざとじゃないよね？

そうだよね？

もしそうだったとしたら僕は人間不信になる自信があるんだけども。

「と、とにかく怖いから怒るのやめてちょうだい！ それに下着のことなら響ちゃんから頼まれたもの！」

「む」

捏造されそうになったから反論。

こういうときに否定しておかないと事実つてことにさせられちゃうんだ。

「僕はブラジャーなどというものは要らないんだと言ったと思うけど？ そもそも胸がないんだ、肉体年齢は……2人が見る通りに幼いんだから。だから要らないって言ったはずだよ」

そう、ないんだ。

裸になって思いっきり腕を前か後ろに反らさないと確認できない程度には。

というか今思えばあれはただの常識的な範囲の脂肪。

男でさえうつすら乗ってる感じの脂肪なだけで、あれは胸じゃない。い。

せつかく女の子になつたつていうのにそれすらないんだよ？

じーつとかがりの胸を暗い瞳で見つめているゆりかの袖をくいと引つ張つて意識を戻してやる。

「んあ……？ ひびき……？」

「ゆりか、落ち着いて。それは仕方のない話なんだよ」
不毛な会話なんだ。

「響。巨乳に辱められたんだよ？ いいの？ 復讐しなくて。やらないの？」

どんな字を書くかは分からないけどやらなくていいって思うよ。

「どうしてそこまで気が昂ぶっているのかは知らないけれど、でも落ち着こう。かがりに対しては何を言っても」

「でもさー！ それにしたって!!」

くわつと……今度は僕の方を見つつ、やり場のない怒りのような感情を発し始めたゆりか。

……友達との間で胸のサイズとかな会話があつたと見た。

女の子って大変だね……胸って服の上からでも分かっちゃうからさ。

男なら……ほら、プールとか温泉とかでもなければ基本的に気にならないものだし。

「これー！ 巨乳だからー！」

さすがのかがりでも「これ」呼ばわりはやめてあげよう？

「だから私、そもそも知り合つたときからさ！ 私のような悲しみを背負つた仲間たちと——あ、たくさんいるんだよ？ 私たちみたいにもう諦めかけてるそんな仲間が。そりやあもう、たっくさん」
中2でそこまでは思うけど、思春期にとっては大変なのかもね。

ほら、発育次第だけでも女の子って小学校高学年から胸の大小が明確になってくるし。

「ときどきかがりみたいな『我らの敵』に対して『そのダブルメロンが縮まないかなー』とか『こつちに半分くらい来ないかなー』ってな感じの儀式してたりするんだけどさ？」

「え？ ダブルメロン？ 縮む？」

「おのれ、そうやってとぼけてからに……」

とにかくゆりかはかがりのかがりたるその部分をけなしたいらしい。

なんでかは知らない。

……けどさ、なんでこの子は僕っていう男がいる場でそんなこと言い出すの……？

……?
実はやっぱり君も僕のこと男だって本気では思っていないでしょ

46. X3話 偽乳と牛乳 2/2

「……つまりゆりかは胸がコンプレックスなんだよ。そうやってかがり、君がわざとでなくても腕を組むと強調して煽っていると感じられるように」

「？ ……えっ」

ここまで言っただけで自分の胸の話題だったのに気がついてたらしい彼女。

ゆりかはともかく僕からもじつと見られていてさすがに恥ずかしくなった様子。

胸を隠すように抱いて目を逸らしたメロンさん。

……なんだか初めて女の子らしい反応を見た気がする。

「……まあもういいや、怒りを抱いてもしょうがないってのはよくよく分かってることだし……許せはしないけど。んで、話は変わるけど。いや続きみたいなもんだけどさ」

「……まだ続くの？ 僕は出ていった方が」

「まあまあ、これからが本題なのよびびき」

本題？

でも僕は必要ないでしょ？

なんならこういうのは君たちふたりだけのときにしてくれないかな……なんで女の子ってこう、他人を巻き込むの……？

「そんな仲間たちでもさ……なんての？ 偽乳とか言ったりするソレ、パッド入りブラ。悲しみの余りに思わず自分でつてのはあるけどさ、でもソレを誰かから勧められた子なんていなかったんだだけ？

あ、もち私も含めてね……お母さんにだって言われたことすらないよ。ちなみに自分からつけてた裏切り者は処したけどそれは置いとくとして」

裏切り者？

……いけないいけない、今のゆりかに構うととっても良くなさそうな雰囲気。

空気に徹していよう、空気に。

僕は空気だ。

反応してはいけない。

女の子同士のこういう会話、「僕は聞いてませんよー」って感じにしつつもその場に置物になるって言う高度な技術が必要なんだ。

「かがりんはいつたいたいどこからそんな冒流的な考えをお持ちになったの？　ぱつと見、小学生でブラが要るか要らないかって年齢に見える響に、ホント、どーやったらそうしよって思えたん？　それは犯罪者の思考だよ？　ねえ？　それともそのお店になんかそーゆーいかがわしいマニュアルでもあったの？　ねえ？　ねえ?!」

「だってかがりだから」って思ってたけども、確かに気にはなるよね。

「え？　マニュアル？　そういうものは特になかったわよ？」

「んじやなんでなのさかがりん！　あてつけか！　あてつけなのか!!」

「あてつけでもなんでもないわ？　それに私は早くから必要になったから」

「ぐぬぬぬぬぬう」

「なったものは仕方がないでしょう？　……だから自然と着けていたから、誰かに特別に聞いたわけではないのだけれども。でも、書いてあったもの」

書いてあった？

聞いた、じゃなくって？

……まさか。

いやいや。

けどかがりだからもしや。

「……かがり。　一応聞いておくけれど、どこに？　書いてあったって」

嫌な予感はあるけども聞いてみる。

「それはもちろん私が大好きな少女漫画によ！　一般常識って書いてあったわ！」

「ふあ!?　マンガあ!？」

その大きなメロンを張り出すようにして満足げな顔をするメロン。

「恋愛漫画や小説でお胸の大きさに悩むヒロインの女の子が……そういう場面があったのよ。だからお胸が小さい子ってそういうものなのでしょう？　だってあのときの響ちゃん、お胸のことを気にしているように見えたものだから。だから漫画の女の子たちみたいに不便でない程度に盛ることのできる可愛いブラを」

していないしていない。

いや、あのときはしていたんだっけ？

……ダメだ、思い出せない。

「お勧めしてあげたの！」

お口が開きっぱなしのゆりかと目が合う。

「それに、そういう説明をしても響ちゃん、別に嫌だとかも言ったりしなくって私が選んだかわいいものをいくつか買ってくれたもの！　だから良いお仕事をしたのよ！」

「いやいや……いやいや、いやいやいやいや!？」

……確かにあのときは、女の子の体になってどんな反応すれば良いか分からないもんだからって諦めきって着せ替え人形になっていた。

当時はかがりの言うことが正しいんだって。

服屋の店員さん、しかも高校生に見えたこの子の言うことが、女性の……たとえば小学生に見えたとしても一般的なことなんだと思っていた。

だからこそパッド入りのあれを初めの頃に何回か着て、そうしたらなんだか不思議な高揚感があつて、でも慣れてきたらすぐに飽きてタンスの奥にしまい込んであるあれを勧められるままに買ってしまつたわけだけれども。

どうも、ゆりかの反応を見る限りでは……普通じゃない。

僕は女歴がもうすぐ1年になるのを前に衝撃を受けた。

「いやいやいや、だからねフツーは……って言つても響みみたいな上流階級っぽい、てか確実なところは置いといて……あ、いやたぶんどこでもおんなじだわ。　うん。　一般的にはどんな環境だったってフツーの女子はパッド入りブラなんて……コンプレックス解消のために自分から選ぶ以外にはないからね？　いや、マジで。　そんで人に

は絶対言わないし。 あ、見栄とか見栄えつてのもあるけどそれは裏切り者だ」

「え？ そうなのゆりかちゃん？ ……いい、いえ、でもお友だちの中にもそうした方がいいからってお姉さまやお母さまに言われてしているっていう子が」

「それ家族だからね!? 秘密、言っても平気な距離の人たちだからね!？」

「……え」

それを聞いて固まるかがり。

僕はずいぶんと前から固まっているけれども。

かがりから僕を隠すように、すすすすーと背中を向けながら……両手を広げながら近づいてくる……後ずさってくるゆりか。

「……ま、まあ、響が同級生だって聞いていたって。 どー見てもロリロリしい、あるいはシヨタシヨタしい響に胸、盛るなんて発想したかがりさんが。 うん、私よりも背の低い響に対して……つまりは銀髪ロリ巨乳に仕立て上げようとしてたってゆー……えっと、その。 つまりはやっべーお人だつてわかつて……ね？」

こつんと背中が僕のおでこに当たったと思ったら振り返ってきて……なんだか悲しそうな顔をしながら僕を抱きしめてくるゆりか。

……なるほど、レモンだ。

あるとは分かるけれども……ブラジャーの柔らかい丸み……ああ、パッドじゃなくなって形を守るためのそれでできている丸み、だってレモンさんだから……それを顔に、目元にふたつ感じる。

頭の上から悲しそうな声が降ってくる。

「……私。 正直。 少し。 ちよつとだけ。 ……ううん、いや、やっぱりね、それって……ヒく、か、なあ……? ……ね、ねえ響?

他にはヘンなこと、されてないよね? 響が無知だからって、そんなときは今よりも警戒心なかったからって言って体許したりしてないよね!? 例えば剥かれて下着をかがりの手で穿かされたりとか着けられたりとかしてないよね!？」

なんか本気で心配してるっばいゆりか。

……かがりつて純粹過ぎるからそういう危ない気質は持つてないって思うよ。

けども嘘は良くないこと。

どうせいずればれるんだ、ひと思いに言つてあげよう。

「うん。上だけだけどね。ブラジャーのつけ方というものを教わったときに脱がされた。ああ、下は流石に断つたよ」

「響ちゃん!？」

女の子同士でも体育のときとかプールとかでお互い見たりするんじゃないかなとは思うけども、さすがに初対面とかそれに近い状態でするのは女の子同士でも普通じゃないっばいね。

「ねえ、かがりん？ 響のこと、つい最近までは女の子だって思ってたんだよね？ 幼女だって思ってたんだよね？ なのに知り合いの段階から……一見さんの状態でハダカに剥いていたりしていたの？ 私、ブラ初めて買うときだって何個か持って来てもらったくらいだったよ……?」

くるりと回つて僕を見下ろしてぱつつんな髪の毛が僕の顔にかかってくるくらいまで近づいてきたゆりか。

「ね、響。ほんと。念のため。念のためだよ？ 今後はね？

そ、その……かがりんとふたりつきりになるのだけは避けた方がいいかも。いや、マジで。ホントマジですよ？ ……響が男の子だって知ってる今だからこそ本気で。私からの忠告。うん。なんか危険な香りがするの……」

かがりはかがりだから問題ないと思う。

ゆりかの考えているような「そういう危ないこと」なんて起きるはずがない。

この子の場合はまだ単純に着せ替え人形をしたいだけ。

お人形さん遊びをしたいただけ……つてのを言ったらまた大変なことになりそう。

「……大丈夫だと思うけど」

「その油断！ だって響だから！ その隙の多さが乙女……あ、いや、えと……乙女の反対な表現分かんないけど、とにかくカラダの危機な

んだってば！　つまりは貞操の危機ってやつなの！」

何がどうなってこんな話題になったのかは分からない。

けどかがりは大丈夫だって思う。

……でもかがりの近さは普通じゃなかったみたいだから気をつけ
はしようって思う。

あのゆりかがここまで本気で心配してるもん。

46. X4話 女装？ その1

静かな休日の午後。

病室にはベッドで寝転ぶ僕のほかに、器用に椅子の中で丸まるようにしてページをめくっているゆりか……ああ、体が小さいからできるのか……が、ぱつつんを斜めにさせながら収まっている。

その隣の椅子には、さよが……こちらはびしつと姿勢を正して90°。な格好で……ああいう座り方って重心がうまく行くから思ったよりも疲れないんだよね……髪の毛を背もたれの後ろに流しながら、文字に意識を向けている。

そして僕もまた、せつかくだしつて遠慮せずにベッドに横たわったまんまっといういつもの読書の姿勢で、腕が疲れたら向きを変えるっていう感じでわりと頻繁にころころとしている。

……静かな空間にぺらぺらとめくられる紙の音と、ときどきの衣擦れの音。

ただ、それだけ。

3人も居るのに誰もしゃべらない時間が流れる。

……ああ、嬉しい。

この子たちと、この子たちだけと一緒のときだと本当に嬉しい。だってこんなにも静かにして過ごせるんだから。

10年近く、必要のないとき以外は外にも出ないし口を利かない生活をしていた僕にとっては天国だ。

まるで図書館とか静かな人しかいないときの喫茶店みたい。

ああ、快適。

……いつものようにかがりがいると、それだけで場が「話すもの」になっちゃって、声途切れることなく満足するまでうるさいもん。りさもりさでやっぱりおしやべり好きっていう「いわゆる女の子」だし。

その点、このふたりなら僕とおなじく本が好きっていう性質を持っているから読書の時間ってなると基本、話さなくても平気だもん。

……ゆりかが今日持ってきて積んでいるのはマンガだけど、それで

も静かにしてくれていてなにより。
もう1回ごろんと寝返りを打つ。
ちらつと来る視線が2対。
でもすぐにまた紙に夢中。

もちろんゆりかも相当のおしやべり、最初の何回かのお見舞いではいつもどおりに、かがりとおんなじように話すのが止まらなかった。なにしろ半年分の「話さなければならぬこと」があったもん、しようがないよね。

けれどもそれが一段落してからは、来てしばらくの雑談を終えるとさっさと読書モードに入ってくれるのが嬉しい。

何回か招かれたゆりかの家での過ごし方に似ている気がする。

こういうのって良いよね。

みんな静かに過ごすのって。

かがりが来てしまうときだけが特別なんだ。

話題が尽きることがなくて口が疲れるっていうこともなくて、しよつちゆうお菓子をとり出しては食べるっていうのが止まらない彼女だけが。

「…………ふいー。あ、響？」

椅子の上で体を静かに起こして静かに声を上げるゆりか。

読書中って静かなのに慣れているから、そうして音のトーンを抑えめにしてくれるのがすごくありがたい。

うるさいのが苦手な人相手の接し方っていうものを熟知している。

さよと僕っていう、人よりも本の方が好きな質の人のことを。

隅っこでじゅつとしてるのが好きなタイプを理解してくれているだけで奇跡なんだ。

かがりとか、本を読んでいてもいきなり起き上がっては普段のトーンと早口でにじり寄りながら話し始めて止まらないもんな。

あの子にはもう少し…………いや、かなり、なにかが足りない。

全部かもしれない。

突き詰めるとデリカシーってやつなんだろうけれども。

「コレ読んでてちよい聞きたいこと思い出したんだけどさ、今いい？」

「うん」

しおりを挟んで本を枕元に置いて、もうすつかり慣れた、痛まないようにベッドの中に収納してあった髪の毛を片手で引つ張り上げながらもぞもぞと体を起こす動作。

……ほんと、切れないもんかなあ……この髪の毛。

いつか切つてやる。

いつか、必ず。

魔法さんをごどうにか説得してだ。

「あー、えーと……コレ、響がヤーな話題だったりしたりしたらスルーしてくれてぜんっぜん平気なんだけどさ？ いや、ほんとにね？」

ふむ、ゆりかが予防線を張っている。

となると病気とか性別とか身長的な話かな？

こういうのを普通に話せるようになる、なんか友達つて感じがして良いよね。

「ありがと、んじゃね？ ……響つてさ、中身は……心は男の子なワケでしょ？」

「そうだね」

「てことはさ、響にとつてはスカートとかな女の子な服装つてさ？

それこそ去年かがりのところ行くまで着てたような服装つてさ？

てさ？ それつて『女装』つてことになるのかなーつて」

……。

よし。

なにも問題はない。

ないんだ、うん。

大丈夫、僕は大丈夫。

大丈夫つて思ってるんだから大丈夫に決まって大丈夫なんだ。

「……あの、ゆりか……さん？ それ、今聞くこと……なんですか？

響さん……驚かれています……けど」

「だからヤーならスルーしてつて言ったのよ？ さよちん。響なら

そのへん華麗にスルーしてくれるはずだしさ。それにほら、響つてなんてゆーかけっこーに重い話題とかでも平気なところあるからさ、こ

うしてとりあえずで聞いてみることでできるのよ。これがつか—ってやつ」

「えっと……ええと……」

ゆりかと僕をわたわた髪の毛をぶんぶんと振りながら見てくるきよと「あくまで聞いたただけだけど？」って感じの表情をしているゆりか。

……うん、デリケートって言うかセンチティブな話題ってむしろそうやって聞く方が変な感じになりにくいよね。

ゆりかは見た目に反して、予防線を張るとか人に気を遣うとかそういう面では見た目よりもずっと年上だからなんだろう。

僕とおなじく小学生に見ることもできる、その外見よりは。

「ひびき、怒ってる？」

「………ううん、別にいいよ。性別……性自認というんだけど、それを伝えた時点でいつかそう聞かれるものだと思うってたから。覚悟はしていたから」

「そー？ ホントに大丈夫ひびき。私が言うのもなんだけどやな思いはさせたくないし、あくまでキョーミだから断ってくれてもいいのよ？ 聞かなかったことにしてくれてもぜんっぜんいいよ？ ……ホントにいいの？」

「うん」

「……響さんが、そう言われるのでしたら、私は何も……」

ゆりかがわずかにほっとした表情を見せる横で真っ赤になっていくさよ。

うん。

大丈夫。

本当ならあの大みそか……の告白のときに聞かれるって思ってたし、だから僕は大丈夫。

大丈夫。

完全に……このタイミングで、読書してほんわかしていたところに突然に振られてきたけれど、けれどもまだまだ大丈夫だ、大丈夫。だいじょうぶ。

……だいじよばないかも。

「いやー、だつてき響、今こそ入院してる人の服……なんていうんだっけ」

「病衣とか入院着とか呼ぶらしいね。呼び方はどうでもいいと思うけれども」

「そー。 んでさ、そうじゃないときの……えと、ふつーの、普段の響ってさ。 私たちと会うときはほとんどいつものあのカツコだつたじゃん？ パーカーと帽子とズボンと靴しか見えない、あのカツコ」

「そうだね」

家から出るときに銀髪系少女誘拐拉致監禁極悪非道って思われないたために少年つてなんとか見られようとしてたからね。

「けど、かがりんと出かけるときとかにはさ……私にも見える見える、そーとーにごーいんに……いや、ダダこねてかな？ スカートとかの女の子ーなカツコさせられてたんだよね？ ……だよ？ さよちゃん。 かがりんからのいつも通りに妄想で誇張された部分を省くと大体そんな感じでしょ？」

「え、あの。 ……あう、あの、その」

あ、ぱつつんをいじりながらの、僕の顔色見ながらゆーつくりと話してる感じのこのゆりかの態度。

なるほど、あれからこういうのを全然聞かれなかったって思ってたけど……みんなから遠慮されていただけ、か。

当然か。

かがり以外ならその辺りの配慮は……中学2年生でもできるんだから。

中学生つて、とつくに成人した僕からすると子供だけでも実際には人生経験分以外の精神年齢つてそんなに変わらないし、ましてや女の子は早熟だし。

かがりは……そもそも僕のことを未だに女の子だつて認識している感じが残っているしお花畑に生きている子だから例外つてことで。

「……気にせずに話してくれて構わないよ、さよ。 どうせ君には見

「られているんだし」

「いいなー、見たかったなー私も響のかわいいところ」

「見ても大したことはないよ」

「……いやいや、んなことないでしょ。でしょ？ さよちん」

「え、えつとお……」

……黒めがねさんが否定しない。

「それでそれで？ そんなときの響って、どんなだったん?? ね、ね??」

「あ……えつと、ええ。 すごく——すごく綺麗で美しくて。

まるで雑誌のモデル……いえ、映画やドラマで出てきそうな……そのような感じで、とても素敵……でした」

「へえ——……いいないいなー」

……あれは。

あれは、人生の汚点だ。

やっぱりどんなことがあるうとも人に見られる場所、家の外で女装だなんてすべきじゃなかったんだ。

いくらかがりに唆されて拐かされて強制させられても断固として拒否すべきだったんだ。

嗚呼。

1 回見られたものは、何度も見られたものは、もう、どうしようもないんだ。

他人の記憶は消せないんだ。

ああ。

あの、初めて外に出た日に戻りたい。

僕は割と「過去に戻ったら」って言うのを寝る前とかに考えるタイプだけれども、普段以上に悔いている感じがする。

ああ、戻りたい。

戻ってあの記憶と記録をこの世から抹消できたなら。

僕は努めて表情筋を普段通りに脱力させて、かつ熱くなってくる顔を冷ますように……今読んでいた本の哲学的な部分のことを必死で考えていた。

46. X4話 女装？ その2

女装。

女装。

……女装。

女の子にはなってしまったけれども、でも主観的には女装。

男の意識で女の子の格好をするって言うのは、女装。

僕にその気がなかったと言えば嘘になるのかもしれない。

だっていろんな服を……かがりに無理やりに着せられなくつても、ときどきなんとなく買っては着てみて「似合うなあ」って思っていたし。

つまり僕は心のどこかに女装願望って言う変態的な嗜好を……？

「ねー、確かかがりんとひびきんが初めて会ったのって」

「……君と出会う、ほんの少し前だね」

「あ、そーそー。そんでき、そのとき会うきっかけになったのがかがりんがバイトしてた服屋さんで、んでお家で着せられてたお嬢さま系な……ひらひらのついたかわいーやつか清楚って感じのやつかは知らないけどさ、そーゆーのがキライだからって、せめてふっーの女の子っぽい服がいいから選んでって感じだったって感じだったっけ？」

「……そうだね」

男ものも頼んだはずだったと思うけどなあ……。

そんなばつつんは結構気まずそうに、でも止まらないって感じに続けている。

うん、こういう話って楽しいよね……聞く方は。

「でもでも、かがりんと会うときだって『よっほどじゃないとスカート履いてくくない！』ってグチってたところからすると、ほとんどパンツルック……ズボンだったんだよね？」

「……ある程度なら女性、女子なファッションの語彙も分かるから平気だよ」

「あ、そつか。イントネーション違うけどズボンのこと『パンツ』って言ったりするのも？」

「それは結構普通の男……男性でも知ってるとは思うよ」

「へー、そうなんだ。あ、で、普段は完全に男の子ーって服装ばっかなんだよね。だから……ま、響のその話し方とかクールさとかもあるんだけどさ、普通の響を見ると男の子にしか見えなかったわけよ。髪の毛隠されてたのがいちばんでかいかな……フードとか取ってもさりげなく後ろの毛がうまーく隠れるようにしてたし」

「ん……まあね」

まくし立てるゆりかと、まーだあわあわしているさよ。

けど、こうして僕自身のことを分析されるのって……その。

むずがゆいというか、なんというか。

「そんなだから私たち……りさりんも、響が男の子だって疑いもしなくってさ？ でも『響が女の子なんだけど男の子だ！』って聞かされたときからずーつと気になってたのよ。心は男の子、けど今まではずーつと女の子お嬢さま扱い。だから響、どっちのカッコがいいのかって」

「……もちろん男のものだよ。僕自身の……肉体ではなく心の、魂の感覚は男だから。性自認っていう言葉もあるらしいけれど、とにかくそういうことなんだ」

「……えっと。……そういうことでしたら、響さんにとっては……あの、女性の格好というものは……」

「……うん。前はともかく今は『女装』っていう感覚になるね」

なるべく嘘はつきたくないし、それに事実なんだ。

いろいろとしているうちに薄れてきてはいるし、もう10回以上も外で……スカートに頼りなさに困りながら、人の視線に困らされながら、女の子として歩かされた経験から慣れてきてはいる。

だって初めの頃なんてスカートに脚を通すのだって、ひらひらひらひらするしふとももに擦れるし頼りなさ過ぎてどうしようもなかったし。

子供用でも、無くなっちゃった分敏感らしい前の部分にぴったり張り付く感覚で飛び上がった女の子用のぱんつを穿くっていうのだけでもずいぶんと恥ずかしい思いをしたもんだし。

女ものを着て女の子な姿をして鏡を見るだけでも女装してるって感じられて恥ずかしかつたし。

外に出るのだってものすごく勇気が要った覚えもあるし。

「これは必要なことで大切なことなんだ」って自分に言い聞かせないといけないことだったんだから。

でも、慣れっていうものはすごい。

今じゃこうやって指摘されなければそこまで意識しないもんね。

「けどさー、それでもお家に帰ったらお嬢さまなんですよ？ あいかわらずにひらひらひらひらしててふりふりふりしててお淑やかーな感じの」

「……そうだね、半分くらいはね」

お嬢さま設定。

今さら「爺やかお抱えの運転手とかなんていない普通の一軒家でひとり暮らしなんだ……」なんて言えない感じだし、このままになっちゃいそう。

どうでもいいことだからそのまんまにしておくけれど。

「……つまり響さん……お家の方……いえ、ご家族、ご両親にも男性……だと、思っ、見てもらえるようになったということですか……それは、とても良かったです……」

うん……普通の家なら家族がいるもんね……僕はいいけど。

いや、一応今はマリアさんたちが保護者って感じで通してるけどさ。

「ふーん……あ、でも、そーだっことはさ、女の子のカッコしててもそこまでヤじゃないんだ？ だっかがりんとそーゆるーカッコしてよく出かけてたらしいし」

「頻繁にじゃないよ。 かがりがわがママを言っつて駄々をこねて仕方がないときだけだからね？」

「なるほどなるほどお。 つまりはあれかい？ 響にとつては、前からそーだし慣れてるけど、少なくとも今の響にとつてはスカートとかワンピースとかが女装って感覚になるのは変わらんというワケね？」

「……………うん」

「いいないいなー、いいないいなあ——……私も女の子ーな響、見てみたかったなあ——……。ね、ね？ さよちゃんもそうは思わないか！ 改めて今見てみたいって思わない!? 考えてみたまえよさよとん！ この、ひびきのこの見た目で！ 響のホントの性別知ってるからこそ、こーんな長い髪の毛でも男の子だっけしか見えないでしょ？」

「……え……あ、はい」

「なのになのに、こーんなキレイ系クール系シヨタっ子なひびきが、かがり仕込みのかわいいー服着てるのって……ね……？ 見たく、ならぬい？ ね、ねえ？」

「え……えつと……そう、かも……」

「だよねだよねー、あー見たいいなー、せめてりさりんと私っていうまだ見えない哀れな女子たちの見たいいなー、見たことあるさよちゃんもまた見たさそうな顔してるなー」

「え……ええと……ええつと……」

……ゆりかの目がおかしい。

直接的な表現にすると、かがりの目と同じになっている。

つまりこれは……避けられないと見た。

もちろん僕が本気で拒否すれば済む話なんだけれど、それまでする気がない。

そこまでする理由もない。

なによりもかがり……とさよには見られているんだし。

女子は、いや、女性は——不公平には敏感に反応するという。

……つまりこれは、そういうことだ。

放っておくといつか爆発するあれ。

爆発物をほったらかしにして別れるわけには……いかないよね……。

「……いいよ。今度……持ってきてもらって、お見舞いのにきに」

「え、いいの!? え？ え?? マジ!? マジで!?! 私てつきりお断りかって思ってた！ やったね！ やっぱこういうのって言うてみるもんだね!!」

がたつとイスから立ったかって思ったらすぐそばまで来ていた

ぱつつんさんの下からの鼻息が熱い。

ついでに言えば遠くのはずの黒めがねの中の目も輝いているように見える。

「……そこまで僕の女装が見たいの……？」

あ、女の子だから単純にかわいい服を着ているのを見たいってのもあるのかな。

「……着ること自体には慣れているし、女装感はあるけれども……だけど君たちは僕のことを男扱いしてくれるんだ。そんな格好をしたとしても。それならいいんだ、君たちがそれで満足してくれるのなら……」

流れでOKするしかない圧力でOKしちゃったけども……ま、まあ、大丈夫。

少なくともかがりのように……夏のががりのように、徹底的に「小さい女の子」扱いはされないのなら僕のメンタルはまだまだいじょうぶかもしれない……かなあ？

「……で、ですけど。響さんはそういう格好をするのも……えつと……その」

「男の格好の方がいいのは当たり前だけれども、女ものを着ていても男扱いをしてくれるのなら、そこまでは気にならないかな……だって肉体的には女なわけだし。君たちなら茶化すようなことはしないだろうし」

女歴。

自分で思いついておいてなんだけど変な表現だけでも、冬眠していた期間も含めれば1年近く、そうでなくても半年も経っているんだ。

落ち着いて考えてみれば、もう今さらって感じもする。

「!!.. じゃ、じゃさじゃさ!!.. 着てもらおう服ってリクエスト可能ですかそうだと私とつてもうれしいんだけど!!.. だってだって私にとつては、あ、りさりんもそっか、とにかく響のスカート姿とかってはじめてになるんだし、響さえいいんだったらホントにいいんだたらかがりんイチオシのベストとかリクしたい超したいコスプレとかもしてもらいたいそのくらいは私たちがお金出して買ってくるから良い

でしょ良いでしょひびきねえひびき!!」

「……………いいよ」

「いよっしやあ響がキゲンよさそーな感じだからって言いだしてみてよかったホントによかったあー!!」

ちいさい全身でガッツポーズを取るゆりか。

……僕は、見た。

さよも、後ろを向いているけど……ぐっとしてるのを。

「ならなら、さっそくにかがりんにご相談を……あ、ちよいタンマ、響がかわいーカッコしてるってもっかい想像してみたらわりとヤバめ、タンマタンマ、鼻血出そう」

のそのそとイスに座り直して突っ伏しているゆりかを、いつになく俊敏な動きで心配しているさよ。

「……ごめん、心の準備できるまでもちつと待って。ドキがムネムネでヤバいの」

「……………そこまでなのでしたら……えっと、無理をしない方が……」

「いや、無理じゃないの。いんや、無理をしても見なきや行けないの……それが可愛いものを愛でる私たちの宿命だから……」

……もう遅い。

場の雰囲気と罪悪感が混じって「いいよ」って言っちゃったんだ。もう発言を無かったことにはできないんだ。

ああ。

やっぱり僕って押しに弱いちよろい男なんだ……近い内に女装させられるけど。

46. X5話 女装…… その1

「僕がしているのは女装か否か」っていう切実になっちゃった話。

それはあつという間に広がった。

女の子だもんね……そうだよね……。

病室が狭い。

厳密に言うとな僕の周りだけが狭い。

狭っ苦しい。

僕は囲まれてもう逃げられない。

スマホの中に保存されている写真と、ここにいる僕とを何度も何度も何度も見比べられている。

帰りたい。

「ほほう……ほーほー……ひびきがねえ……」

「すごいわねー、男の子だとしたって……かわいらしくて素敵だと思
うわ？ ねえ？」

「……え、ええ……素敵……です……」

「でしょう!?! そうでしょう、このときの響ちゃんはっ!」

個室で、しかもすみっこの特別な扱いのここだって、さすがに姦し
い5人が揃えば狭くはなる。

しかもみんながベッドの周りに椅子を並べて至近距離で取り囲ん
でベッドから降りられないようにしているもんだから、そりやあもう
ね……。

自信満々のかがりの顔が特に近い。

近い。

うざりたい。

「もう♪ 響ちゃんったら照れちゃって!」

憎らしいくるんくるんに囲まれたほっぺをぐいって押したらなん
か喜んだ。

この子はもう駄目だ。

僕の痴態な黒歴史な写真を僕にいちいち見せてくるために、みんな
よりもずっと近づいてくるもんだからとにかく近い。

押ししてもさらに喜んじやうあたり本当に駄目な子だ。

気を抜くとすぐに、くるんってしているまつげが見えるくらいのゼ口距離にまで迫ってくる。

この子はこう……どうしてここまでべたべたしてくるんだ……。

「……………」

なすすべもない僕はぼーっと見渡す。

さよは席に座ったまま、かがりが見せに来るのだけを待つてくれる良い子。

そこまで騒がないし。

それだけでも救われるっていうものだ。

続いてはりさ。

いつものようにゆりかとかくつついては彼女と一緒に画面を見ている。

彼女もまたじっくりとは見るけどもそこまで騒ぎ立てたりはしないから、まだいい方。

表現もいくらかマイルドに選んでくれるし。

うん、この子たちはいい子たちだ。

問題は——いつものふたりだ。

その片割れのゆりか。

とにかくもまあ、服装が替わるたびに思いつく限りの似ているキャラクターを挙げてそれをネットですぐに探し出して僕に見せてきて「髪の毛も同じようにしたらクオリティ高いコスになるよ！」とか何とか迫ってくる。

もちろん冗談じゃない。

でもゆりか自身は本気みたい。

コスプレとかでいちいち探しているし。

止めて。

構わないで。

……そしてこの写真を見せている元凶。

彼女に撮られさえしなければ、そしてそれを思い出してきたりなんてしなければ……そもそもこんな目には遭っていない、くるんくるん

くるんくるんとしている彼女。

かがり。

やっぱりくるんメロンだ。

「けど響さん……普段の、私たちと会っていたときのいつもの響さんからは想像もできなかったけどね？　こうしてかわいらしい服を着ていると、見た瞬間にびっくりしちゃうくらいにかわいらしいわねー」

「でしようでしょう!?　りさちゃんもそう思うでしょう!?!」

「ええ。　確かにかがりさんが言うだけのことはあるわねえ……」

そう、りさに精査され。

「あ……わ、私、は。　こちらの響さん……え、あ……はい、そちら、です。　……の、響さんが……えつと……いちばんだと……はい」

なんだかんだで見せられたら普段に無く食い気味なさよ。

配慮なのか好みなのかは知らないけども「女装」の中でも比較的マシなのを選ぶ良い子。

「あらあら、さよちゃんはシックな感じのお洋服な響ちゃんが好きなの?」

「ええ……はい。　なんと、なく……ですけれど。　その……儂い感じが……」

「……え?　あのさ、かがりん、マジ?　マジでこれ響なん?　ウソじゃなくて?　加工とかじゃなしに?　うそーん」

騒ぎ立てた片割れのくせに、いざ見てみると何回もかがりに訊ねているゆりか。

「そうよ?　どれも同じ日に……こんなこともあろうかって、先輩方からいただいていたものも含めていろいろ組み合わせさせて着てもらったのよ、響ちゃんに」

なんでこんなことがあろうことになっちゃったんだろうね。

「だってこのときの響ちゃん、ほんつとうに素直に着てくれそうな雰囲気だったから、前からずっと考えていた順番で、上なら上、下なら下、ワンピース系はワンピース系でって感じてね!」

「長い長い長い!　あと近い近い近い!　胸で圧死するようこんちく

しよう！」

かがりに押し潰されそうなゆりかを見てちよつとだけほっこりする僕。

「けど……や、ほんと。　お顔はどれどれ……ううむ、確かに今ここに
おわします響とおんなじだけど、だけど……へえ——……髪の毛
いじって服も選ぶところまでなるのかー、へ——……。　あ、これ
なんか、あのゲームで出てきた感じに似てるかも」

あのゲーム？

……ああ、ゆりかが僕に接触してくるきつかけになったっていう。
そのせいで僕はたいへんな目に遭っているんだ、発売元には責任
をとって欲しい次第。

「それで、ゆりかちゃんはこの響ちゃんがお好みなのかしら？」

「むっちやくちやお好みですかがりさま!!」

ゆりかがますますうるさい感じになりつつある。

かがりは最初からぜんっぜん変わらないうぎったさ。

「それでねそれでね?!　響ちゃんはね、素材がね！　なにもしなく
たっていいものだから、それはそれはもう映えるのよ！　分かる？
顔つきも体つきも、モデルさんとか西洋人形さんとかのそのままなも
のだからイメージ通りに着せ替えできるの！　だからどのような服
だっていちどは着せてみたくなるのだし、実際にしたのよ！」

されたのよ……じゃない、されたんだよね。

「ええ、多少大きくてもそれはそれでそういう着こなすという感じに
なるっていいわよねー、それでそれで、どれでも平然と着こなしてく
れるものだから私も張り切ってますって、手当たり次第にバリエー
ション豊かに組み合わせるみて後で選別しようかって思っていたの
だけれど、実際に見たらどれも消せないくらいに似合っていて！
おかげでその日のお昼を挟んで何時間も楽しい時間が過ごせたの
よっ」

僕にとつては正に地獄の数時間だったけどね？

かがりが突出してひたすらに口開いているけれど……よりにも
よってこの4人が次から次へと僕の黒歴史とも呼ぶべきあれを眺め

て感想を言い合っている。

……本当にどうしよう、これ。

こんなことになるだなんて思ってもいなかったから、諦めて「いいよ」って言っちゃったばかりにこんな事態になっている。

なんで僕ってこんなに年下の女の子に対してはつきりNO言えないんだらうね。

僕も不思議。

……写真。

一昔前の表現だと写メってやつになる。

僕の上の世代なら通じて、その下には通じないときもあるちよつと古い共通言語。

あの夏、かがりに頼まれて……いや、迫られて断れなくって仕方なくいやいやに諦めて被写体にならざるを得なかった写真。

かがりがなぜか自室のベッドの下の引き出しに持っていた、僕の体にぴったりのサイズがほとんどだった服の山。

なぜか。

なぜだ。

それを順繰りに……後半からは、いや、前半の途中からかもしれないけれど、とにかく僕の記憶から抹消されていて気がついていたら家に帰っていてズボンを脱ぎ捨ててクツションに埋もれていたのを僕自身に僕自身で発見したほどのダメージを負ったんだ。

つまりはまた「お人形さん」させられたわけだ。

つらい。

悲しい。

こういうのって「つらみ」とか言うんだってね。

しかもよりにもよって僕を良く知る残りの3人に、今この場で、当人の目の前でご開帳するっていう拷問を受けているんだ。

つらい。

帰りたい。

けど今はここが寢床だからもはや逃れられなくって。

それに……どうせいつものように僕の周りにはみんなに囲まれてい

て逃げられやしないんだ。

いつものように。

……全員が揃う前に、かがりとふたりきりになれたスキに「どうしても!!」って僕なりに精いっぱい凄んで見せたのがよかったのか……いやなんか変な顔していたあたり凄めていなかったんだらうけども、あまりに恥ずかしくすぎるものは別のアルバムに入れておいてもらったから致命傷は避けられている。

それ以外の写真をこうして見られているだけでも充分に致命傷だけれども。

だけど僕は、初めてこの身で理解した。

証拠って言うものは、写真って言うものは……なによりも人を脅して言うことを聞かせるのにこれ以上なく効果的なんだ。

ひとたびそれを誰かに握られたが最後、すべての恥をひけらかす覚悟がないと言いなりになるしかないんだ。

そう、今の僕のように。

初めはベッドの中で、せめて視線は遮ろうって思っていたけれど写真が変わるたびにベッドに乗っかって、僕の上に乗っかって真っ先に見せてくるもんだから……だから今はこうして体育座りをしてぬぼんっしてしているんだ。

もうどうにでもしてくれって感じの鯉みたいな気分です。

それもこれも僕が男だって会話を改めてしちゃったがゆえに、みんなも僕もそれを意識しちやっっているからなんだ。

つらい。

ああ、こんなことになるんだったら家に帰って女物を……かがりに用意されたものよりも僕がぎりぎり大丈夫な女成分抑えめな服を取ってくるんだった。

そうすれば……ああいや、それだと駄目かもって思ったんだ。

かがりが好きそうな感じに上はふわっとしたシャツに厚手の羽織り物、下は上のデザインに合わせたスカートにタイツっていうのか。

だけでもヒートアップしているかがりに一蹴されて「家に取りに

行ってくる」って言われたが最後、どんな格好をさせられるか分からなかったばかりに提案しちやっただ。

——「夏休みにかがりの部屋で、好き勝手に着替えさせられたときの写真が残っているよね？ それでいいよ」って。

消してくれてるって言う淡い期待はすぐに消えちやっただ。

あれは正に、女装って意識が強かったがゆえに……恥ずかしかったから、かがりによるといいはにかみ具合だって太鼓判を押されちやっただときのもだから、今見せられると余計に恥ずかしいんだ。

それなのに家に帰るのがめんどくさいのとダメだしされるのもまた嫌だからって、写真を見せれば話が早いじゃないかって言っちゃったもんだから。

……あのときの僕はおろかだっただ。

愚者だっただ。

そのせいで……ほら、今の僕はこんなにも後悔しているじゃないか。

なにが悲しくて中学生の女子たちに……ひとまわりも年下の子たちに僕の女装姿を見られなきゃならないんだ。

……いや、どっちにしろそうさせられてはいたんだけど……なんていうか、こう、覚悟ができるかどうかって違いがあるんだもん。

あのときの服装。

かがりが指示するのに合わせて体を動かしながら着飾られていたときのだから、それはそれはもうふりふりってした赤とピンクと白がメインで、リボンなんかつけられていた覚えもあって……そんなコーデインポートだったんだから。

それを見せられた僕の身にもなってほしい。

時間は巻き戻らないって知ってはいるけど、でも思わずにはいられない。

願わずにはいられないんだ。

戻りたい。

この惨劇が起きる前に。

具体的には僕が押しに負けて、めんどくささに負けて「写真でいい

じゃない？」って提案しちゃう前に。

ああ。

僕はもういちど膝小僧のあいだに……病院の服だからスカートっぽくて、だからまくれ上がらないように……無意識の仕草をしていたっていうのにまたまたダメージを受けつつ……ぽすっと、顔をうずめた。

46. X5話 女装…… その2

ああ、もう僕はダメだ。

こんな写真を回し見されて正常な精神でいられるほど、僕は強くないんだ。

いや、弱いんだ。

そうなんだ。

中学生のこの子たちなんかよりも、ずっとずっと。

それこそ、この見た目のとおりに。

いや、下手をしたらこの子たちよりずっと幼いんだ。

だって幼女だもん。

それもそうか、だって今の僕はこの子たちよりも幼いんだ、だから。

「……あー、かがりんや、それとみなさん。私もノっておいてアレなんだけど、そろそろ褒めちぎるの止めて差し上げないとひびき死んじやいそうよ？ 恥ずか死ってやつで」

がたつと音がしたから見てみた方向にはすごい目してるさよ。

「や、だからほんとにとって意味じゃないって……こんな気の抜けた良い方で危ないわけないからさよちは安心して？」

いや、ここ病院だし……場所が悪いって思う。

とりあえずゆりかが……ようやくに、遅すぎるけれども助けを出してくれた。

僕は果たしてどのくらいの時間辱められていたのかは分からないけどね。

遅かったけどね。

君にも堪能されたけどね。

ああ。

「あ……え、えええええつと……響さんごめんなさいっ！ ……あの、私もあまり……顔、とか、見られ、たく……ない、という気持ち、分かってる、はず……なのに。なのに、私、は……」

「……いや、いいさ。 気にしないで、さよ。 そう、これは僕が招い

たもの。 うん、良いんだ……」

さよの方が危なっかしいからちよつとだけ辱められた記憶が薄れる。

いきなり顔を赤くするほどに血圧と脈拍が上がっているさよは本当に体悪いんだからよつぽどに心配なくらいだし。

「でも、別に気にすることないんじゃないの？ 響さん」

僕のことを随分と堪能していたりさりんが割り込んでくる。

「だって響さん、去年までは女の子としてやってきたわけでしょ？

もちろん肉体的にも、れっきとした女の子なんだし」

ごめん、これ言っちゃうと1から説明しなきゃだから言っていないんだけど、僕男として生きてきた正真正銘の男だったんだ……証拠は物理的になくなってるけども。

「だから心が男の子だったとしたって、おかしなことはなにもないんじゃない？ あ、私も響さんのそういうのについてちよつと調べたけど、今ので傷ついたりしたらごめんね？ そういうとき、ちゃんと言ってるね？ 私、どこまで響さんのそういうのについて話したらいいかわからないからさ」

「おー、りさりん。 なんだか今日のりさりんは知的だねえ」

「知的じゃないって……茶化さないの、もう。 で……まあ、普通に、女の子としての普通としてスカートの服装とかもしていたはずなんだし、今さら特段そこまで恥ずかしがる必要は……いえ、ちよつと待って」

スカートなんて穿いたのはこの1年になってからです。

その前に穿いてたら女装趣味ってことです。

でも今はスカート穿いてるから立派な女装家です。

……男に戻ったときにクセが残ってたらどうしよう。

「ねー、ゆりかー？」

「あいっ？」

む、急にりさりんの声が高くなった……これ、女性が怒る前のやつだ。

「ちよーつと、こつち来なさい？」

「なんで？　なんかりさりんの顔こわひ」

「いいから。　じゃないと本気で引きずってくわよ？」

「はい、わかりました」

「ほら、抵抗しないでさつきと来る」

「はい」

「ホントに分かっているでしょうね？」

「ハイ」

「……みんなはちよつと待っててねー？」

そう言い残したりさりんと首根っこ捕まえられた感じのゆりかが病室から出行って扉が閉まって、みんなイスに座ってくれて……僕の周りと部屋の密度が下がってほつとした。

　　つて思ったらすごい声。

「なによ女装って!!」

「りさりーん、ここ、病院。　他に人、いる。　中、入って、静かにする」

「なんで急にカタコトになってるのよ……まったくもうっ、だからっ！」

　　静かになっただけで思ってた僕と同じように明らかにほつとしていたさよと……ハテナが頭の上でくるんくるんしているだけのかかりを見ていたら、出て行ったはずなのにすぐに戻ってきたふたり。

　　もつとも入って来たときとおなじように母親に怒られている子供、いや、母猫と子猫みたいな状態になっているりさとゆりか。

　　……冗談じゃなしに、比喻表現じゃなしに……ゆりかが首根っこ、襟を掴まれてぶらんとしている。

「そんな話の流れだったら気にもするでしょ、常識的な人間だったら誰だって！　ましてや響さんなんだし！　あんたあんかよりもずつとずつとずーつと頭よくて常識そのものな響さんなら!!」

　　……あ、そっか……りさりんとさよはさつきまで居なかったから、僕が女装してるっていう話題知らなかったんだ。

　　知られたくなかったけども、今さら後悔してももう遅いよね。

「だからりさりんうるさいよう、耳元で廊下の端っこまで響く声出さ

ないでよう、あとあといい加減に襟引つ張りながら歩かせるの止めてよう、チヨークだよこれチヨーク！」

「そういうデリケートな話題は絶対に避けなさいって、あつれほどきみんさんに言っておいたでしょ!? お正月に響さんから聞いてから、みんなで調べて！ なのにここでそれ蒸し返したってこと!? そりゃあ、あんな顔するわよ！」

「だってえひびきがいいって言ったんだよう、ひびきんがあ！ 平気そんな顔して！ あと今回の写真な主犯はかがりんだしさあ！」

「人のせいにしない！」

「せいじゃないもん！」

僕のことを想ってなのは分かっているから、それ自体は嬉しいんだけれども……その……やっぱ声が大きすぎるんだけど……？

運動部だからなのかなあ……いや、嬉しいけどさあ……。

やたらと熱くなっているりさと、珍しくしゅんとしているゆりか。

そしてあわあわとして言葉にならない言葉を発しているさよ。

……ひとり、こつちからは興味を完全に失いつつ僕の写真と思しきものを見つつ「えへえへ」って何とも奇妙な鳴き声を発して自分の世界に戻っているかがり。

つまりはとつても混沌としているのがこの病室という空間だ。

いや、5人も集まるとこうなりがちだった気もしないでもないけども。

……どうしよう、これ。

僕の話なのに僕の手から離れっぱなしの、この状況。

「その前の話よ、前の！ なによ女装って！ 響さんの性同一性……とかいうものは本当に大変なものなんだって分かったから避けましようって、言っておいたわよね！ あのとき！」

「だってえ、りさりん」

「だって何も無いわ！」

「ふええ……」

「ふええでもないっ」

「ぴい……」

「……ゲンコツいつとく?」

「ひえっ」

うん、やつぱりこの中じやりさときよは常識人だね。

いやまあふざけてないときならゆりかとかがりもまともな方だとは思いますが……ほら、結構いつもふざけてるからさ……。

まあ調子に乗りがちなゆりかと、どうしようもないかがりは今少しの成長が待たれる感じかな。

りさが怒り続けていると、いつ病室のお隣さんが……隅っこだからまだ大丈夫かもしれないけども怖い人が来たりしたら僕が怖い目に遭う。

それは嫌だ。

「……いいんだ、りさ。ありがとう、怒ってくれて」

「響さん? ……いえ、ここは誰が見てもどー見てもこんのバカゆりかが悪いんだから、締めるときはきちつと締めないと!」

りさりんの後輩は大変そう……面倒見は良くても厳しそうだから。「ううん、ゆりかとかがりは悪意があってしていたわけじゃないんだ。あくまで友人として……多少の盛り上がりもあっただらうけれど僕を貶めようとして言っていたわけじゃないんだ。それが分かってるから大丈夫だよ」

「そう……かもしれないけど、でも!」

なんで急に声小さくなったって思ったら丁寧に話してるんだろ……けどりさは本当にいい子。

友達のためにこうして怒ることができる。

とても貴重な存在。

「この先……の学年だったり、高校だったり。 大学……社会。 そういうところ、もつとたくさんの方がいる世界に出たらそういうわけにはいかないんだよ」

僕は僕自身の人生経験がほとんどないから本とか映画とかからの借り物で言う。

「今だって、僕のような人に対する偏見……いや、知らないというものや誤解や歪められた情報しか持たない人たち、知っても理解はできな

い人たちが大半を占めているんだ。だからこそそのうちきつと興味本位や悪意を持って、初対面で嫌なことを言ってくるというのも増えてくるはず。それこそ、あからさまな嫌みとかだったりね」

「僕自身は嫌なことに遭ったことはないけども小説の中じや意地悪な人はこれでもかつて居るんだ。

きつと現実ならそうなんだろう。

「そつ、そんなことないです！ 響さんに対してそんなことする人なんて！」

「そ、そだよびびき、世の中そんなに恐いものなんかじゃ」

「うん、もしかしたら違うかもしれない。だけれどもきつと確実に、僕たちの想像できない思考回路を持った、自身の感情を優先して動いている人というものは存在するんだよ」

……「この子たちは結構純粋な女の子たちで、見た目も良いから悪い男に引つかかるかも」、そう思ったらちよつと大げさに言っておいた方が良かったと思う。

「みんなは小説とかドラマとかアニメ、映画も好きだけでも……その中に、創作だとしたってそういう習性を持つ人がいるっていうのは知っているはずだよ。それが現実にも……そこまでではないにせよ、いるということもね。創作は、現実を越えない。悪意は、悪意から生み出されるものじゃない。そのモデルとなる人物たちは現実に、確実にいるんだよ」

女の子になって分かったけど、女の子はとにかく人から見られる。

まあ僕がこの通りの洋物幼女だからかもしれないけども、それ抜きにしても男だったときの何十倍って感じ。

この子たちもきつとそう。

だから「危ない人に着いてつちやダメ」って感じのこと言ったつもり。

「……あの、えつとね？ 響ちゃん」

そういえばますます静かになっていたなって思ってたらかかりが静かだったのか。

どおりで話の途中で唐突に遮られずに楽だったわけだ。

そうだよね、僕がこれだけ長く話すのなんて滅多にないもん。

「その、ね？ 響ちゃん、ものすごく……何と表現するのかしら、ナーバス？ シリアス？ それとも神経質？ そう考えているみたいだけれど……少なくとも私は響ちゃんのこと、たとえ社会に出たって誰も性別のことでなにかを言ってくる人はいないと思うのだけれど……？」

「？」

くるん？

かがりはそんな暢気な反応を返して来る。

……こういうのがほほえましいんだけど、男って言うのは獣。

警戒して損することはない……けども、さすがに言い過ぎちゃって部屋の空気が冷たくなった。

そんな中をくるんくるんしながら一瞬で吹き飛ばす感じのかがり。

……一瞬「かがりがいて良かった」って言いかけたけどもよくよく考えたらこの状況そのものがかがりのせいじゃん。

君が何とかして？

僕はまたベッドの上で体育座りして待ってるから。

46. X5話 女装…… その3

くるんがくるんくるんしたおかげで僕が作り出しちゃったイヤな空気は薄れたけれども……やっぱりくるんだから何言い出すのか分からない恐ろしさがある。

そんな緊張を感じつつ口を開く。

思わずで言っちゃった、きつと僕が将来……ノートを止めたなら遭遇するだろう社会の理不尽というものについて、念のために。

この子たちが心配なこの気持ちって言うのがきつと、親心とかそういう……。

「しかしかがり、世の中には陰口や因縁や偏見というものが」

「あのっ」

「ここでさよが……かがりの後ろにくつつくようにして、いつの間にかそばに来ている。」

さすがはいつも……読書を邪魔されてでもかがりと一緒な子だ、かがりの暴走を止めようとしてくれてるんだ、きつと。

「そうだ、君も言ってあげて？」

世の中にはヤな人だつて居るんだつて。

「わっ……私も、そう、思いますっ。最近は……えつと、あくまで学校の授業とかニュースとかで聞きかじった……範囲です、けれど。」

でもその、響さんのように、体と心の性別が違う……と、いう方だつて、たくさんいるって。なので……扱いは変わってきている、って」

あれ？

そっち？

あ、いや、そうだよ、元々は僕の女装についてだもんね。

肉体的に見れば正常だけでも精神的に見ればアブノーマルなやつ。

「……さよ。それはあくまで、そういうことをきちんと考えられる人に限るんだよ。世の中にはそうでない人たちだつてたくさん」

「私もふたりの言うとおりでと思うわよ？」

「ちよつとごめんね？」って言いながら僕の頭を撫でてくるりさ……

いや本当なんで？

やっぱりちっこいから？

手頃な低さにあるもふもふだからもふりたいの？

「ネットとかSNSとか、そういうとこだけでもないけどほんつとに性悪な人つてのはどうしたつているんだから、そういう人たちは例外つてことで考えなくていいんだつて思うの」

……部活とかじゃな子いるでしょ？

「だけどそういう人はあくまで例外。大多数の人はなんとなく『性別が違うだなんて、そういうものなんだー』つて思うだけなの。

「ヤなこと言われちゃったりしたら『あー、その例外の人たちかー』つて思つとけばいいのよ。私だつて『レギュラーだから』とか……えつと、む、『胸がでかいから』とか『告白されたからー』とか私のこと話しているのをトイレで聞いちやつたことだつてあるし」

「あー、女性つてトイレでそういう話するんだよね……男みたいに興味ない相手のことは興味ないつて感じじゃないから。」

「あ。やっぱそうなん？　なんかやけに凹んでるときあつたけど」

「ええ……たまにね。それが表面上は仲いい子だつたりするから女は……いえ、きつと男子だつて少ないとしてもあるんでしょ。とにかくあるの。絶対に消えはしない。だけどそれは『普通』じゃないの。」

「それが上級生だとか先生だとかだつたりしたら無難に『あーそーですか』つて流して避けときやいいのよ。キリがないし、どうせ飽きたら別の子に移るんだから」

りさが普段のかがりくらいに近づいてきている。

「いつもの……なんて呼ぶんだらう、「汗拭きなんか」……みたいな香りはしなくつて、髪の毛から漂つてくるシャンプーの香りがふわつと来ている。」

「むぎゅ」

ついでに頭をなでてた手が重くなつて変な声が出た。

「思っているほどには響さんが心配する必要はないわ。私はそう思う。初対面だとか会つてすぐだとかだつたらよそよそしくとかはされるかもですけど、何回か話すうちに『ああ響さんつて子は女の子

の見た目だけで中身は完全に男の子だなー』って思ってもらえると……思いますっ！　ってことでこういうのはこれでおしまいー！」

「あらやだ、かがりん積極的」

「……誰のせいだと」

「ワタシノセイデスユルシテ」

「……調子には乗らないでね」

僕から離れた彼女はばんばんって手を叩いておしまいのお合図。

「あい。……ひびき、さっきのはごめんね。　んで私も同意見。

……これもカチンときたらごめんね？　響は……えと、ものすんごくSSR……レアな見た目なんだから、ちよつかいかけてくるのは嫉妬に駆られた女子とか熱烈にアタックしてくるロリコンな男とか……女子もいるだろうなあ、男子よりずっと……くらいじゃないかなって。　つまりはキレイ過ぎるのが……今のカチンって来た？」

「ううん」

「そ、よかった！」

とりあえず男からは距離を取ろうって思ってたくらいだから安心して？

「けどさーひびき、女装って言ったのは元々はあれよあれ。　りさりんが『ツンデレ運動部』とかかがりんが『どたぶんくるんメロン』だとかさよちんが『魔性のメガネっ娘』とかそんな感じの、仲良くなつたからこそそのじゃれあいつてもりだったのよ」

「……ゆりか、あんたさ、ここに來るとき。　ロビーとかでおじいさんおばあさんに囲まれてさ？　『ちっちゃいねえちっちゃいねえ何年生になったのかな？　もう高学年かな？』とか『お姉ちゃんとかお兄ちゃんのお見舞いかい？　偉いねえ』って撫でくりまわされてたときの気持ち、思い出せるかしらね？」

「あ、おっけー万事了解ですやなものはやですねはい!!」

ぼーっとし始めてちよつとしてから気が付く。

……これが世代の違い……価値観の違いってやつなんだって。

今ならトランスジェンダーとか普通に記事とかで出てくるけども、僕が子供のころはまだそういう言葉すら知らなかったし。

みんなの反応が思っていたものと違ったから不思議だったんだけど……そう考えてみるとなんだかかしくり来る感じがする。

なんかやけにみんなが軽いから何でだろうって思ってたら……そっか、時代なんだ。

僕の価値観が形成されただろう中高生な時代は、この子たちのその10年も前のこと。

当時はまだ体と心の性別が違うなんて笑われるか疎まれる。

それが嫌なら隠すって空気だったって思う。

少なくとも今みたいに週に1回はテレビとかネットで……ちよっど僕がそう説明している、限りなく事実に近い嘘の「性同一性障害」みたいなものが入ってくる程度には今と昔とじゃ概念を知っている人自体の数が違うんだろう。

授業でやつたりもするらしいし。

だから本当に時代が違うんだ。

そうだ。

僕はさんざんに思い知ったじゃないか。

僕がひとりで居たがっていたこの10年、そのあいだに僕は世間に取り残されていたんだって。

浦島太郎。

……女の子のそれはなんて呼べばいいか分からないけども、ある意味で僕はそれなんだ。

玉手箱を開けちゃったら煙がぶわつと来て、それで……この子たちよりもちっちゃくて髪の毛も目も肌の色も性別も変えられちゃったっていう感じ。

そう分かるとちよつとだけほつとした。

友達っていうのは……これだけ歳も性別も違うとしたって必要なんだね。

じゃなかったら僕は今もきつと、今の僕になっちゃったことに怯えてひとりさみしく……いや、そうも感じずに、あの家の中に引きこもっていただろうから。

「じゃあ！ もういちど見直したところで響ちゃんのベストショット

を決めましょう！　ここはトーナメント方式で！」

なんかちよつとじーんつてしてたら全てを帳消しにする爆弾発言。

「……かがりーん、それ、昨日読んだマンガとかに影響されてない？」

あとこの流れで言うコトなんでしょーか。　やっぱすげえ」

「？」

「……え、えつと……で、では、私は、その。　こちらの響さんが、やはり……その」

あ、さよも乗るんだ……いや、良いけどね……きつと子猫の写真見る感覚なんでしょ……？

「かがりんつてばどーせどーせいつもみたいにさ！　最後には自分が選んだ響つてことにするでしょーにー！　ぶーぶー、権力の横暴だー」

「あ、そうよ、響ちゃん自身の意見も聞いておかないといけないわね！」

やっぱりどう考えても、絶対に。

かがりに急所を握られているっていうのはよくないことだ。

普段の心理的にも……こうしていきなりにみんなに見せちゃうあたりも。

あ、いや、一応僕の許可は取っているし、そもそも僕が口にしちやつたのが発端ではあるけど。

そもそもかがりが話題を持ち出さなければこんな目には遭わなかったんだし、うん。

やっぱりかがりが悪い。

ダブルメロンさんが、どう考えても悪いんだ。

……お別れする前に、どうにかしてあの写真を消させなきゃならない。

じゃないとヘタすると「ねえ見て見て！　昔こんな子とお友達だったのよ！」とか言つて次々と友だち知り合い家族その他もろもろにいちいちあれを見せて回られかねない。

そういう未来が想像しなくなつて見えるんだもんな。

だから消させなきゃ。

けどどうやって？

……それが難題だ。

彼女にとって、僕のあの写真以上のものを提供するとなると、目の前で、新しい服をリクエスト通りに着てやる？

……写真のストックが増えるだけで、僕の黒歴史を量産するだけだ。

お出かけに付き合う？

……新しい服を買わされて着させられて、おんなじ結果になるだけだ。

宿題を見る？

……それが彼女にとっては、ほうびになんてならないって知っている。

あれ？

もしかして僕、もう……取り返しのつかないことしちゃったんじゃないか……。

「……響さん、いつもみたいになってるけど怒ってるのか……じゃないわよね？」

「だ、大丈夫かと……」

「だいじょーぶ、響はやなときはつきり言うから。多分かがりんのかがりんさに驚愕してるだけよ」

「よく分からないけれども響ちゃん！　ねえ響ちゃん！　響ちゃんはこの4枚の写真のどれが1番……！」

46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その1

ここはとある中学校の、とある2年生の教室。

その一角で……一応に他の生徒からは聞かれないようにと配慮しながら隅に寄りつつ、けれどもそこそこの声ではしやぎたてる小学生のような……小さい、とても背の低い生徒がいた。

教室をまちがえたのではなく、れつきとしたこのクラスの、この学年の生徒。

彼女はまるで新入生のようにぶかぶかな制服を、けれども服自体はしつかりと1年と少し分の時間相応のくたびれ方をしている制服を……なまじ袖などが余っているものだから自然、彼女の好きなキャラクターたちがしている「萌え袖」というものを何もせずに自然と再現している。

もつともそのせいでノートを書くときには指先以外が隠れてしまうのだが……冬服であろうとなかろうと、長袖を着ている限りには「それもまた萌えなんだってー」などとひとまわり古い表現を友人に言いつつ、やはりいつも書きにくそうにしている。

そんな彼女。

関澤ゆりか。

低身長、「これは制服がだぶだぶなせいなので長く見えるんです、仕方ないんです、ウソじゃないです」などという方便で校則をぎりぎりはみ出した長さまで伸ばしたストレートかつ前髪だけぱつっんというヘアスタイルをし、これもまた幼く見える要因のひとつであるぱっちりとした目つき。

彼女の前髪がこの形に落ち着いたのは、ごく単純。

自分よりも頭ひとつぶん以上背の高い人間と立った状態で話しているとかなりの上目づかいとなり、毎回邪魔になるからだというものの。

ただでさえの低身長、視線は上に向きがちであり、誰彼……知り合
いであろうとなかろうと頭の上から手を置かれて撫でられがちな彼
女だ、小学校のある時点まではふつうに長めだった前髪をこうして落
ち着いたのも必要に駆られてのこと。

そんな短めばつつんな、いつも誰かに話しかけていなければ気が済
まないような性格の彼女は、この休み時間もまた友人を追い立てるよ
うにして教室の隅にイスだけを持っていき、持ってこさせ、話し込ん
でいる。

「……ね？　ねねねえー？　いたでしょいたでしょ、もーそーじや
なかったでしょ現実だったでしょゲームとかマンガとかじやなかつ
たでしょ私せいじよーだったでしょねえねえねえりさりんこの前つ
から言っただのは嘘っぱちとか夢遊病とかじゃ」

「やかましい」
「ふぎやんっ」

手刀が、ただでさえ小さい彼女を更に縮めんと落とされる。

「あいたー、ひどいよりさりーん……んでさー、ほんとだったで
しょほんとだったでしょ!!!　響ってゆー、とーつてもちっっちゃい」

「あんたとどっこいね」

「ひどい……あ、待てよ。　ある意味でそれは好都合かも」

「やっぱりあの子の方が小さいわね、頭ひとつぶん以上は」

「あーん、すぐ手のひら返すと嫌われるぞーりさりーん？　……んで、
そんなちっっちゃい子なのに同学年の子、いたっしょいたっしょー！」

「ちよ、こつち来ないでよ！　はいはい、ほんとうだったわね。　疑っ
たことは悪かったわ。　ならその話はおしまいつていうか暑っ苦し
いわよっ！」

関澤ゆりかが……対面に座っていた彼女がすすすつとイスごと寄
せてきて、座ったまま彼女の片脚を……閉じている脚のあいだに割り
込ませようとしてきたところで必死になって止めようとしている友
人。

杉若りさ。

ふぎけてスカートをめくろうとしてきたところで脳天に向けても

ういちど、今度は力を込めて腕を振り下ろせるくらいには座つていても身長差とリーチの差がある彼女は、関澤ゆりかに友人にされたうちのひとり。

同学年の中でも背が高く、クラスの女子の背の順でも最上位くらいを維持し続けており、体型も……放課後や休日の部活動を熱心に行っているせいで体が鍛えられているゆえに、バストが男子の目を引くというのがここ数ヶ月の悩みである杉若りさ。

なお、彼女の制服は……対面の少女のものとは違ってきちんと体に合っており、理想的な姿となっている。

特に、シャツ姿になると嫌でも強調されてしまう胸部は、年ごろの彼女にとっては嫌なものでしかない。

そして「冬でも髪が長いと蒸れてイヤなのよ、汗かくから」と、髪は短くはないもののミディアムに留まり、かといっておしやれに興味がないわけではないから、こだわりのヘアピンを毎日替えている彼女。

なお、彼女の瞳は……つり目と表現するか、あるいは目力が強いというか、とにかく強い感情が何かと人目を引く。

……特に怒りに関しては「声を低くしていなくても怖い！」とは、セクハラをしようとしてきている目の前の「ちっこい友人」から言われ、そのとおりに叱ってあげた仲だ。

「わっ!? こ、こらっ、だからって立ち上がってひっついてこないでっ
てばっ! ……分かった、分かったよっ。 ゆりかがとうとうアニメ
とかゲームの世界に行っちゃったんじゃないかって、響さんっていう子
がちやんといるんだって! アレは心配してのことだったんだから
! 昨日実際に会ったんだし、信じた以前に確認したわよっ」

「むふっ」

すとん、と、小さな体全体で抱きつこうとしてきていたゆりかは腰を下ろし。

「はいはい。 ……けど、さ。 あの子、ほんつとにあんたの空想上の存在とかじゃなかったのね。 この前それ聞いたとき、実は保健室の先生に相談しちやっただけだ」

「あ？ りさりん？」

「……その流れであんたのお母さんにも連絡行っちゃって、だから私があんたの妄想……響さんについてのこと、逐一報告ってことさせられてただけど……」

「なんですと!!?」

がたん、と、小さな体全体で立ち上がり、両手をわなわなと震わせるゆりか。

「悪かったって！ だけどきちんと……ものすごく美化したわけでもなくって本当にあのとときの表現そのまんまの子っているのね。比喻でもなんでもないって、初めて実感したわ。その……なんていうか、ため息が出るっていうか、ほんと、なんていうか……そう、あり得ないくらいに整っていてね。……褒め言葉でだけど、人っていうよりは『人形みたいに全てがあるべき場所にある』って感じの顔で。フードから漏れていた髪の毛も輝いているみたいだったし。ほんとう、男の子なのに綺麗としか表現できないわ。あの子、響さんのこと、『実は動く人形なの』って言われた方がまだ安心できるくらい」

「あ……あのー？ いんろいんろと初耳なんですけどお——……」
「だって言っちゃダメって言われてたもの」

「や、そうじゃなくてさあ……けど、あー、どーりで最近お母さんもお父さんもものすごく優しくなったわけかー、なーんにも理由ないのにいきなりお小遣い倍以上にしてくれて『お友だちどんどん連れてきていいのよー』、『遊びに行くときには使いそうなお金出してあげるからねー』とか言ってきたりー、友だちの名前とか聞いてきたりー。私がイマジナリーなフレンドを創りだしたって思われてたのかー。あーあー悲しいなー傷ついたなー凹んだなー、親友だって思ってたことんちくしようなりさりんに裏切られてたんだもんなー、これは責任取ってもらわないとなー??? なー???」

よよよ、と、いつものように演技過剰な……全体的に小さいからこそ映える演技というものをして、悲しんだフリをして。

そして「ちらり」と声に出して、りさを見上げるゆりか。

彼女たちは、イスに座つていても身長差は歴然としている。

いや、そもそも使っている机とイスのサイズ自体が違うのだが。

「ゆりか……あんた、よくそこまで口回るわね……そりゃあナイショで人に相談したのは悪かったわよ。けどさ？ ゆりか」

「なあに、今セキニンの内容考えてるところなんだけど。あ、そだ、お詫びになんだけど」

「あのさ？……響さんのことを知らないっていう前提で考えてほしいの」

「ほ？」

「茶化さないで。私の立場になつて……いえ、別にあんたが私にこれから言うことを突然に言われたって考えてもらってもいいわ」

「ふい？」

すう、と軽く息を吸つて放つ彼女の言葉は——正論だった。

「ねえ。……あんたが言っていたように、自分がプレイしたあるゲームに出てくるヒロインみたいな見た目と言動と格好をした男の子とさ、突然に出会つて。で、うろ覚えではあるけどおんなじような反応を試してみたら、2回も……2回もよ、そのゲームでのシナリオとおんなじような展開になつて？ つまりは男女は逆だけど、そのストーリーそのものの流れになつて？ で？ 同い年の男の子なのに、あんたよりもちっちゃくつて？ あのとときも、テーブルが高そうでもっとも大変そうだったわね？ ……それでもつて、友池さんよりも頭が良さそうなんでしょ？」

はあ、とため息。

話し疲れたのか、それとも、そのあまりの「偶然」にどう反応していいのか分からないのか。

途中からイスにすくと座り直して、あー、とでも言いたそうな顔つきになつたゆりかを眺めながら、りさは続ける。

「……正直に言つて、よ？ そんなの……つて言うのは失礼だけど……あんたみたいな女の子とかが理想の異性のこと、なんか妄想癖こじらせて」

「あいわかつた、もういいよりさりん……言いたいこと分かつたから

……」

「りさりん、理解はあるんだけど感性は一般人だからなあ」と思うゆりか。

一方で、やはり他人から聞かされると「何のキャラ？」と聞きたくなるのも理解できて少し落ち込んだ。

「それによ。あの子……も失礼ね、あの人、同い年だとは思えないんだけど」

「そりやちっちゃいし」

「じゃなくて。……話す内容も雰囲気もよ。まるで先輩たちや先生たちとかと話しているみたいな感覚なのよ。頭が良いって言うか精神年齢が高いつて言うか……そりやあもう、クラスの男子たちなんか比べられないくらいに」

彼女たちの会話に聞き耳を立てていた一部の男子たちが悲しい顔をした。

「りさりんひどいねー」

「うっさい。でも……やっぱり納得行かないわ！ なによあの顔つきと髪の毛！ 女の私でも嫉妬すらできないって、もはやいろんな壁越えちゃっているってのー！」

「おおっ」

「お肌は透き通っていて荒れたところすらないし！ 目は薄ーい色でガラスみたいだったし！ ついでに髪の毛も!! なによあれ!!」

「あー、それは分かる。それについてはすっごく分かるよ。気持ちはずっごくね……だから落ち着き？」

どうとう、と……ゆりかに勧められたゲームを遅くまでする生活が数日続いたせいで出来てしまったニキビというものに、乙女としてかなり深刻に受け止めているりさが叫びそうになったところをゆりかが抑える。

「ふう……悪かったわね」

「いいのよ、私たちの仲じゃん。だ・け・ど？ やっぱりさりんも響に会っただけでメロメロだねえー」

「んなっ!?! そんなわけないでしょう、あんたじゃあるまいし!!」

「そーお？ だけどりさりん、ドロツドロした展開にならないよーにクギ刺しとくからね？ 響を見つけたのは、先に会ったのは私よん？

男を取り合って親友が！ とかはやだからねー?？」

「はいはい、お好きにどうぞ。 人の恋路を邪魔するつもりなんてないし、そもそも私はそういうの、興味ないからね。 というか取るとか以前にあんた、まだそこまで親しくもないでしょうが」

「言質は取ったぜい？」

「はいはいお好きにどうぞってばー」

彼女たちの姦しい会話は、一部の凹んだ男子たちを巻き込みつつクラスの喧噪に紛れて窓の外へと流れて行った。

その会話はたった1回きりで……決して繰り返されることのない。

彼女たち以外の人間には知られることもなくこの世界から消えるはずのものだった。

46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その2

少女たちの姦しい、彼についての会話は続く。

「でも、安心したなあ」

「なにがよ？」

ちゅーつと紙パックのジュースを……同時にすすったあとに話し出すふたり。

「だって、しんゆう同士でひとりの男の子取り合うってゆうド定番中のド定番なドロドロな展開にならなくてよかったなーって。

私の苦手な恋愛要素オンリーな少女マンガみたいにならなくてよかったなーってさ。 や、ほんと、あーいうのマジ勘弁ってやつだもん」

「いや普通、一目惚れなんてのはないでしょ、現実じゃ。 少なくとも私はないし、それ以前によく知りもしない相手を見た目だけで好きになる気持ち理解できないからね？ 私。 前にも言ったかもだけさ」

辛うじて耐えていた最後の男子が力尽き、声の届かないところへとぼとぼと歩いて行くのを……友人の真後ろで起きていた悲劇を見ていたゆりかは、そつと目を逸らす。

「わー、りさりん正直過ぎー」

「大体私もあんたに勧められるゲームとかしても……恋愛シミュレーションとかはやらないの。 知ってるでしょ？ つまらなくて投げちゃうのよ」

「それはもー。 だからラブ系のマンガの布教とかも諦めたんだもんね。 もつたないけど、こればかりはなー」

ぽい、と空になった紙パックを狙いを定めてから投げようとしたゆりかの手が、がしつ、と掴まれ……むしり取り、しぶしぶといった様子で自分のそれと一緒に、きちんとごみ箱へ捨てに行くりさ。

「ご苦労。 うむ」

「ご苦労って、何様のつもりよ……つたく。 ……けど、まさかねえ？
そういうのといっちなばんに縁が遠そうだったゆりかが……ねえ？
そうなるとはねえ……」

「まあねー」

ふんす、と、無い胸を張って……恋心、というよりは好奇心で輝く
瞳をりさに向けるゆりか。

「だーってさ、あんの超ミステリアスな存在だよ？ 見た目も1回
目も2回目もゲーム通り……春休みに徹夜だったし、もーけっこう忘
れてるけど『そうだった』ってゆーのはよく覚えてるし。 だから
さ、ゲームってゆー……どつかのチームの人たちが作った創作上の世
界が、どこまで現実に再現されているのかっての、私がなぞってみる
ことで試してみたくって。 あ、もち、響……現実のね？ 自身にも
すんごくキョーミあるけど」

「違うわよ」

「へ？」

「普段はさ、あんまり外に出さないようにしているみたいだけど……
ゲームとかアニメとかマンガとか、そういう世界にだけ興味あるって
感じのあんたが。 それもまさか私よりも先にそこまで気になる男
子を見つけたって言うのによ。 しかもキャラクターとかじゃな
くって……きっかけはそれだったとしても、現実の男の子に興味持
つってというのが、すっつごく新鮮だからよ」

「……………あのー？ りさりん??」

「なあに？」

「……私さー、響のこと、そりゃー気になってはいるよ？ 気になって
は。 だけどりさりんが思ってるのとかじゃなくって、その、えと
……好きとかそういう話じゃ。 さっきのだって冗談だし。 あ、な
んならりさりんも」

「……。 照れ隠しなあんたもまた新鮮ね。 あのさ？ ゆりか、あ
んだ、響さんの話するときの顔……自分で、鏡で見たことある？」
「わっつ？」

ずい、と迫るりさと、すすすと引こうとして……背もたれに阻まれ、

いつもの逆の格好になったふたり。

……なお、その光景にクラスの男子諸君と一部の女子たちが注目していたわけだが、話に夢中な彼女たちは知るよしもない。

「……へーい。その、か・お♥ あんたが『攻略したぞ！』ってスパムみたいに送ってくる写真とか、勧めてくるマンガとかのヒロインたちの顔ってやつ。わーたーしー、ゆーりーかーのー、そーゆー顔と、とーっても似てるなあーって思うんだけどなー？ へー、ほんつとにそーなるんだー、私初めて見たなーいいものねー実にいいわー！ 恋バナ好きな子の気持ち、ちよつとだけ分かるわねー！」

「ぬ、ぐ、ぐ……」

「……………」

「……………」

「……ぷっ。 あっははははっ！ ……あー、いつものしかえししてやってとつても気分がいいわー」

「……はっ!? お、おのれりさりん！ 私を惑わしおって!! くんの！ くんのだ!! 最近調子に乗りおつてからに、くんのだ」

ぽかぽかとりさの胸を軽く叩いているその光景に、さらにクラスの注目が集まっている。

それは揺れていた。

揺らしている方のそれらは揺れる余地もなかった。

「……はー、嬉しかったから今までのチャラにしてあげるわ。だけど、どっちだったってしても私は応援するわよ？ だって、いくらゆりかがちんちくりんだったってしても……告られたりしても当たり前障りない感じに断ってたあんただもん、てつきりそのままだあれとも付き合わないで華の中学生活、いえ、学生生活つてのを華のない画面の向こうとか紙に費やしそうだったんだもの。いえ、もしかしたらこのままずーつと趣味に生きて……」

「りさりんひっどーい……私、傷ついちゃった」

「嘘ばっか」

「およよ」

「感情が籠もっていないわね。 あと、ソレは古いわ」

「ちっ」

「……けど、気をつけなさいよ?」

「なにをさ?」

「もつと仲良くなるんだったら、距離感には、ね? 響さん……私はまだ1回しか会っていないし、ろくに話もしていないけどさ。あの子、会話の節々で……なんていうのかしらね、こう、言いたいけど言えない? みたいな、そんな表情ですっごく慎重に言葉選んでる印象だったもの。もちろん下条さんはまったく気がついていなさそうだったし、友池さんは……気が付いているかもしれないけど、でも、よく見てないと分からないような」

「わーかってるって、そんなぐらいは私にだって」

もういちど、鼻息荒く宣言するゆりか。

「だいじょうぶだいじょうぶ。私、地雷回避しながら、あ、だけどゼツタイに必要なとこだけはうまく聞き出しつつ好感度上げるの、得意だからっ」

「それはゲームの話で……しかも画面の向こうの相手は女の子でしょ? 現実の男の子の好感度の上げ方、知ってるの? 現実でだーれとも付き合ったことないあんたが」

「あ」

「そもそもそうやって威張るなら……なんだっけ? 乙女ゲー?」

そっちで男の子攻略しなきゃ行けないんじゃない?」

「……!!」

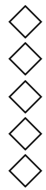
「でしょ?」

「……私、乙女ゲーやる。とりま帰りに本屋で売れてるそれ系のマンガとかも。あ、またワゴンも漁って」

「冗談に決まってるでしょ……素直に恋愛ものとか読みなさいって」

もう1回ゆりかの頭上にりさの……今度はわりと手加減のない手刀が、ごっん、と振り下ろされた。

……なお、後日にこの場面のことを聞かれたゆりかが適当な言い訳をしたせいで、さらに脳天にもういちど落とされて身長が縮みそうになったとか。



「……つてことがあったのよねえ。懐かしいわ。ねえー？」
それが、話のターゲットになつていた僕が夏休み、彼女たち4人と遭遇して少しの時機で起きた会話らしい。

けどもそれは、この病室で再びに繰り返されていた。
しかも女子特有に会話の全てをほぼ完璧に再現してまでのそれが。つまりは拷問だ。

うん、さすがに可愛いそう……。

「もー、これだけいろいろあった今からしてみれば、とおーつても些細で平和でかわいらしい場面だったわねー。あ、そういえば縮んでた？ 背。なーんて冗談よ」

ひととおり……たびたびに止めにかかるゆりかをリーチの差で軽くないはずと話し続け、ようやく話を終えて……しまったりさは、ぐっと伸びをしている。

で、その話をされてしまったゆりかはと言うと席に突っ伏してなにやらうめき声のようなものを発している。

「ぬううううん……ぬぐ」

「ふう、すつきりしたわっ」

そして僕はというと……いきなりこんな話をされて、すごく、ものすごく困っている。

だって、いつもみたいな何でもない会話するんだつてばかり思っていたからさ……なんでこんなことになつてるの？

それになんで僕を巻き込んだんだ、りさりんは。

「おお……お お お お……あがあああ……」

ゆりかは、女の子が出しちやいけない声というものを上げ続けている。

うん、たしかに出さないほうがよさそうなものだな、これは。

そしてりさりんは、優雅に……冷めた紅茶を飲んでる。

優雅じゃなかった。

それで僕は困惑している。

「……りゃ」

「なんですか？」

「そう言えばりさって僕に対してはですますで話すよね……別に良いけど。」

「……どうしてそれを、今、この場で、僕を巻き込んで話す必要があったんだ？」

「僕を巻き込んで」ってところを強調したつもり。

だって変なことに巻き込まれたくはなかったのに。

りさって、秘密なんて文字が脳内に存在しないかがりとは違って、常識的だったはずなのに。

だから言っちゃいけないようなことはしつかりと分かっている子で、だからこそ……こうして他人が悶えるような話は漏らさない、はずなんだって思っていたんだけれども。

「ぬお〃お〃お〃お〃——……りさりんからのふれんどりーふあいあ……」

「……それも、当人の前でするなんて」

僕は疑問を投げかけた。

——けれども返ってきたのは「ん？」って感じの、この上ない笑顔だった。

きっと同級生どころか学年の男子を虜にするようなそれなんだろうけれど……僕にとっては、その。

背筋がぞくぞくってする感じの、とっても恐いものに感じるものだった。

うん。

僕は、聞いていた。

「りさりん、怖いんだ」って。

「煽り加減を間違えちゃうと恐ろしいんだ」って。

当の……未だにうめいているゆりかっていう、被害者から。

46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その3

「ふふ……久しぶりに良い気分♪」

「あゝあゝ……あゝあゝあゝ……」

目の前は地獄だ。

りさり……いや、りさの笑顔がこわい。

笑顔なのに。

それもとびきりの……いや、とびきりだからかもしれない。

ゆりかがテーブルに突っ伏して動けない以上、彼女の視線は僕に向きっぱなし。

大好きなデザートにも目もくれていない。

……気まずい。

「……ええと」

「なーに？ 響さん♪」

「あ、うん……りさは、その。そういうことを、秘密を勝手に話すよ
うな人じゃ無いって、思っていたんだけども」

「ええ、そうです。普通なら……ね？ 私、これでも口が固いから相
談とかよく持ちかけられるのよ？」

りさの話し方が……なんだか不自然だ。

「……なら、どうして」

ちらつとゆりかを見やる。

……まだ復帰できていないらしい。

よりにもよって僕の目の前で、僕に向けて……何回も何回も遮られ
ようとするたびに頭をわしづかみにしたり店員さんと呼んだりして
話し続けていたんだもんな。

ほんと、なんで。

「いいの。だってコイツはね？」

怖い。

かつての僕に付いていたものがひゅんってする感覚。

「学校で私に、すっごく恥ずかしい思いさせたんだもの。当然オカエシはしないとだもんね？ それに今となつてはほほえましいじゃない、ゆりかのこの、いつもはゲームとかしか頭のない帰宅部なこの子の、淡い気持ちっていうの」

目がどろんつて……してはいないけど、でも限りなくそれに近い感じになっているりさ。

……これ、魔法さん関係ないよね？

だって、僕に関係……はあるけど、でも、メインはゆりかの……なんだから。

ないよね？

「……なら、ゆりか」

「……あい——……」

「苦しいところ悪いけれど。君はりさにいったいなにをしたんだ……いや待つて良いんだ話さないで、口を開けないで、それはりさが嫌だっただろう話題だから」

口にかけて慌てて止める。

……危ないところだった。

僕までがりさの地雷つていうのを踏むところだった。

ゆりかたちが僕に対して……その、告白……恋心の、を僕にしてきたのは女子たるゆりか……ゆえに女子たちには、それも、いつも一緒にいる親友つていうものなりさにはとうに知られているはず。

それは分かっていたんだけど、とうかかがり自身がそれを盛り込んで盛って触れ回っていて、彼女たちの学校のかなりの女子たちには既知のことらしいんだけども。

だけど、興味自体はある。

この、表情が……ゆりかほどではないにしてもころころと変わる、クラスの中心にいるような女子の代表みたいなりさりんつていう女の子が、どうしてここまで笑顔で怒るほどのことがあったのかつていうこと自体には。

だけどそれを聞いちゃいけないんだ。

僕は知っている。

女子は、女性は、女の子は。

……あるときまではとっても優しいけど、ある瞬間からいきなり怒り出すっていうその境界を持っていて、それを越えちゃならないんだって。

いくら僕だって、それくらいは知っているし……体験もしている。だから僕はおとなしくしていよう。

「いやあー、ちよつとねー」

と、思ったのに。

ゆりかがむくりと起き上がって、口を……開いちやう。

「いや、だからゆりか、ちよつと待」

「……ゆりか、あんた、ちよつと待」

「ちよーつとさ？ 体育のあとの休み時間でさー。教室で、その、ね？ なんか、みんなわいわい話してたのに一瞬だけ静かになるって瞬間ってあるじゃん？ でしょ？ なんかときに私、言っちゃったのよ。

そんなときまでのうるささに負けない程度に、だけどりさりんだけに聞こえるって声で……けど、静かになってたら教室の隅から隅まで届いちやうよーな声で『りさりんのカップ、またひとつ大きくなったんだ！ 順調に育ってるねえ！』っての。『うらやましいこんちくしょう揉ませろー』って！」

「……………」

黙りこくっているりさりんが、視界の隅を見るのが恐いから……静寂が舞い降りて「およ？」とか言っているゆりかだけに視線を当てながら、それでも僕は言わなきゃならない。

「……ゆりか」

「んい？」

「それを……女子にとってはデリケートこの上ないことを口走ったからこそ怒られて、だからこそつい今し方のように……君の秘密っていうものを僕に晒されてしまった君だけだ」

「あは♥ 恥ずかしいよねえ、けど告ったときに比べたらさ」

「その話を。……その話をもう一度、男子な僕に対して言ってみてもよかったのかなって」

「え？」

「だよね？」

「え？ ……あ」

「……………」

ファミレスっていう、僕たち以外にも人がいる空間。

だから大声で怒ったりはしないだろうっては思うけども……怖い。

いくら大人だろうと男だろうと怖いものは怖いんだ。

だからりさりんを見ようとして断念して下を向く僕。

あ、なんだかトイレが近くなった気がする。

けどこの雰囲気で「ちよっとトイレ」とか言い出しづらいし。

困った。

どうしよう。

「あ、あの一。 りさりんや？ これは、そのですね——…えーと……」

このエリアだけが、まるで急に外から遮られたかのような感覚。

誰も言葉を発しない。

いや、発せない。

見えない緊張が膨張していく。

だけど……かたかたと振動が響いてくる先だろうゆりかからは、震えの混じった感じの音が発せられる。

「その一、ですね？ りさりん……いや、りさ……じゃなくって、りさ様？ これはつい、その一、えと。 そ、うっかり！ うっかりミスってゆー、りささまが試験でやらかすような、どうしようもない、避けようもない事態ですね？ なのでどうか」

「——そ。 うっかり。 ねえ？」

「はい、なのでどうかどうか」

「なるほど。 ……ね？ 響さん？」

「……何、かな」

呼ばれた以上には顔を上げて反応しなければならぬ。

怒れる猛獣を前にしたら、しっかりと視線を合わせて背を向けちゃいけないんだって僕は知っているから。

そんな……今日は朝に運動でもしてきたのか、いつもと違って髪の毛の整え方が少しだけ甘い感じのりさは、さっきまでよりもずつとずつといい笑顔。

「それじゃあー、ゆりかが響さんのこともつともつと意識してきてー、私に相談してきたっていうとおつてもレアなときの話もー、わたしー、うっかりしちゃうわねー？ ええ、だってしようがないものねーうっかりならー。 うっかりだものねー？ もちろん大丈夫なんですよー、ねー？ うっかりさんなゆりかちゃん？」

「あ？……いやあああああ!!」

ああ。

これはもう、戻れないところまで行っているのか。

女の子が不穏な話をしていたのに笑顔しかしないときは絶対に危ないんだ。

「それじゃあー、そうねえー？ まずはー、あ、そうそう！ 初めの頃ね、響さんの連絡先ムリヤリ聞き出して送りはじめたときのメッセーの数々のことからねっ？ ゆりかつたら、そのあとに毎晩みたく『こんな送って嫌がられないかなあ……だって返事あんまりくれないしそつけない感じなんだもん……』とか電話してきていてねー？ それでー」

「やあああああ!! お願いだからりささん止めてええええ!!」

りさのとびつきりの笑顔と、席を立ち上がってりさのところまで行って肩を掴んでぶんぶんしているけれどまったく動じていないから止められないゆりか。

……やはり女性とは、僕たち男とは異なる生きものだ。

それは特に、こういう怒り方っていうのに如実に表れるんだ。

だから同時に僕たち男はそれを熟知して触れないようにしないといけないんだ。

だって怖いもん。

ひとまわりも年下の女の子でさえこの怖さ。

これが同年代だったなら……この体はこの身長、なおさらに怖く感じてしようがないはず。

女性は、女の子は恐ろしいんだ。

僕は改めて覚えておこうって誓う。

1度怒り出すと人の秘密をこうして暴露し合う……投げ合うなんてする、どう考えてもお互いが傷つくしかない泥仕合を、キヤットファイトっていうものをして始めて応酬が止まらない悲劇。

うん。

僕は気をつけよう。

きつと他の同世代の男たちならとうに知っているはずのことだろうけれど、だから僕はずっとみんなからは遅れているんだろうけれど。

でも、今、こうして身に染みている最中なんだ。

これからは肝に銘じないといけない。

人生経験、社会経験……対人関係に特に乏しい僕は、少ない学習からなんとかして応用へと持っていけないとなんだから。

まずは沈黙は金っていうのを改めて座右の銘にしよう。

だからこそこうならないように、相手が知っているって確実に分かっていることにだけしか言及しないように……しっかりと覚えておこう。

「あととはそうねー、あ！　ねえねえ、ゆりかつたらね、響さんと上手く行ったらデートはどこにしようとか」

「やあああああ！　悪かったの、私が悪かったのおおおお！」

うん。

だって……僕はきつとこれから、そういう女性たちのあいだで生きていかなきゃならないんだろうから。

なにしろ女の子になっちゃったんだもん。

だから今からしっかりと将来のことを考えて……間違えてうっかり踏み抜かないようにしないとね。

じゃないとかなり本気で泣いてる、真っ赤でぐずぐずなゆりかみたいになっちゃうから。

46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その

1

「……………」

女の子同士の血で血を洗う戦いは熾烈だ。

中身は男な僕は、ただじっとしているだけ。

ゆりかとりさは、ぜえぜえって肩で息をしている。

ファミレスっていう公共の場で、静かなキャットファイトみたいなものを繰り広げたふたりは、ただただ……なにかをことごとく失ったような表情のまま、荒い息を抑えていつている。

もちろん僕はスキを見てその場から逃走。

僕の心臓のぼくぼくが落ち着くまで隅っこでじっとしてた。

で、機会をうかがって戻って来て……座ってもまだふぎやって感じだったから静かに、ただただ静かにコーヒーをちびちびとすすするフリをしていただけ。

だって、そうでもしないと僕に飛び火しそうだったんだもん。

そんなの怖いじゃん？

——女の人の怒りっていうのは大変に理不尽。

むかむかしているっていうお腹で発生し続ける感情がある限りには、どんなちつぽけなことでもさえも壮大な怒りに変換されちゃうんだから。

しかも僕の苦手な言葉っていう暴力で。

それを僕は学習したんだ。

これまでの観察で。

だから、静かに静かに。

視線を合わせないようにしてできるだけ気配を消して、貝のようにしていたんだ。

まあ普段からこんな感じな気もしないでもないけれども。

普段以上に気を配ってふたりの意識に入らないように、なんか……こう、がんばっていた。

そんな感じの、とっても長く感じられた数十分だった。
疲れた。

もう帰りたい。

しばらくにらみ合っていたふたりだったけど……ようやくに休戦協定が言語外で成ったのか、おもむろにゆりかが顔を上げる。

……疲れ切って、今にも倒れそうな様子になって。

「りさりん」

「……何よ」

「争いはね？ ……分かったでしょ、なんにも生み出さないの。コストだけかかって得るものはほっとんどないの。得たとしても、ほんのちよーっぴり。だからもー止めよ？ 私が悪かったっていうか、私がそもそもの原因なのは反省してるからさ」

「……………」

「ほら、響も」

「!？」

僕を巻き込むつもり!？」

「さつきトイレから戻ってきてから時間経ってるし、私たちのケンカに付き合わせちゃ悪いよ。せっかく来てくれたんだからさ」

あ、そういうこと……僕をダシにケンカおしまいってことね。

まるで「子供が泣いているわよ」って夫婦喧嘩を止めるみたいな……いや、止めておこう。

その場合、僕が子供役になるもん。

せめて大人側で居たい僕としてはNGな発想だ。

「……ふう、分かったわよ。 周りに人がいなくて歯止めがきかなくなっちゃったのと……ええ、分かっているわ。 ちよつと、ここのごストレスが溜まっていたから、つい口が止まらなくて。 私こそごめん」

「ふう……」

ようやくほっとため息をつける。

ふたりの、はたして僕が聞いてもよかったのか分からないような話にまでさかのぼったりしてのケンカを聞いていて、おなかの奥が

きゅーっと冷たくなって嫌だったんだけど、これで落ちつけそう。

「あ、やっぱりそうだったの？　どーりでりさりんにしては珍しく、初めっからドストレートで、がーって怒ってるって思ってた。　んで私も負けじと言い返しちやった」

「あんたはそもそも普段から遠慮なさ過ぎるのよ……だもんだから今言っちゃったみたいく、イラツとさせられるのが積もっていたってのもあるわね」

「それについてはまことにもうしわけなく。　あ、いやマジで」

ふうっ、と息を吐き出したかと思っただらくるってこっちを見てきたりさ。

彼女の顔はいつもの、元気な体育会系でギャル系の子とかとでも平気で話を合わせられそうなものになっている。

「響さんもごめんさい。　途中で気を利かせてくれて、席、外してくれたでしょう？　おかげで……どのくらい聞かれちゃったのか、あ、いえ、私たちが聞かせちゃったんだけど……多分いちばん聞かれちゃ恥ずかしい感じのところを聞かれずに済んで、ほっとしてるの。　ありがとう」

何それちよつと気になる。

「響がいなかったときの最後の方……聞かれなくてホントよかったねえりさりん。　それもこれも、響がなにげなく『トイレに行くから』ってりさりんに勇気出して言ってくれたおかげだよ。　ありがとう」

あれを褒めてもらえるのは少し、いや、大分嬉しい。

すつごく怖い顔と声。

もちろんファミレスって場所でかなり抑えられてはいたけれども。

僕は今まで、この歳にもなって女子、女の人がここまで本気で怒っている場面を目にしたことがなかったから、すつごく体が縮こまっていたんだ。

で、そのせいか尿意がかなりの危険水域に達してきて、さらにはなんか聞いちゃいけないさそうな話題にまで飛んでいたから、もう我慢できないうって気持ちを変えて言えたんだ。

おかげで漏らさずに済んだ。

これで漏らしたら「女子のケンカを前にして漏らした男」っていう、また引きこもりたくなる精神的苦痛を負ってしまうもんな。

そうだったら、たとえ僕でも立ち直れない。

少なくとも年単位でこの子たちに会えないだろう。

やっぱり、逃げる勇気が大切なんだな。

伊達に幼女になってから1年も引きこもってないんだ。

いばることじゃないけども。

「つてーわけで話題変えて雰囲気戻そつ！ せっかく響が会えるって
いう貴重な日なんだしっ」

「そうね。 もう30分も無駄にしちやっただもんね」

「うげ、そんなに」

「通りで喉がカラカラよねえ」

怒っているって言っても、よくもまあ機関銃みたいに言い合えるよね……30分も。

僕だったらがんばって5分だし、終わったら寝込む自信あるけども。

「……2人とも、もう仲直りは」

「一応ね。 これくらいのカンカじゃー、言いたいこと言い合って疲れたら元に戻る仲、だからねー、りさりーん♥」

「こら、顔近づけないでよっ。 ……今日はもう、いえ、これからも調子に乗って煽ってきたりしないですよ？ あと、さつきみたいなのうっかりも！ つたく……」

「ふむ」

こうしてころつと気持ちが切り替わるあたりがすごいなーって、いっつも思う。

なんていうか、嫌なことがあったとして。

僕だったらしばらくもやもやしっぱなしで、たとえばどうにかして怒りを発散したりしてもなかなか元には戻らないんだ。

声に出したり物に当たったり……ほとんどしたことはないけども……しても解消できなくて、おなががいっぱいになったり体を動かし

ても駄目。

結局は寝ちやうか……大人になってからは「お酒」っていう良い手段ができたんだけど、それ以外ではなかなか収まらないもんなあ。なのにこの子たち……いや、記憶にある限りの母さんもそうだったか……いきなり怒って、怒り散らして。

で、すつきりしたらすぐに機嫌がよくなるっていうのは……女性の性質、なのかな。

もちろん個人差はあるだろうけど。

実際にさっきのケンカだって、かなり怒っていたのはりきの方。

ゆりかの方はそれなりのことを暴かれてもそこまで本気じゃなさそうだったし。

例えばさよとかも……ああいや、お正月のときのあれとかを見るに怒るときは怒るか。

それはそうだよな。

人間なんだから。

今のも、あくまで男女でそういう傾向が強いつていうだけなんだから。

……あれ、そういえばかがりは？

「……………」

「ようやくひびきが百面相するようになったのね」

「さっきまで……多分表情ひとつ変えないでじっとしていたものね……悪かったわ」

駄目だ、いくら考えてもあの子が本気で怒る場面が想像できない。

何なら怒るんだ？

おかしを取り上げて目の前で食べてやったりしたらか？

しかし……うーん、あの子はなあ……。

それにしても、こうしてケンカをできるっていう友人関係っていうものには少し憧れてる。

だって僕にはそんな人……あの後にふさぎ込んだ挙げ句の世捨て人的な生活をしていたせいで全然いなかったもんな。

まあ僕の性格上今みたいな言い合いはしないだろうけども。

む？

「そういえば僕……本気で怒ったらどうなるんだろ？」

「チワワみたいになるんだらうか？」

「それで、平和……平和な話題ねえ。　うーん……意識してみるとなかなか思い浮かばないものね。　普段はなんにも考えなくつても勝手に話してるのに」

「僕は無理にそうしなくても……静かにお茶を飲むというのもまた楽しいと思うよ」

「おお……なんかオトナ……」

「会っているからと言ったって、なにもずーつとずーつと話し続けている必要はないんだ。」

「それが、この子たちにはどうも理解できないらしい。」

「ああいや、ゆりかとならお互いにゲームをしているとき、さよとなら同じように本を読んだりしているときには話さないで過ごせるから違うんだけども。」

「一応はりさり人も漫画読んでは静かだし、かがりも恋愛漫画なら夢中になってくれるか？」

「あ。　ひとつあったわ、そう言えば」

「ほう。　りさりん、その心は」

「犯罪か否かってやつ。　覚えてるでしょ？　ゆりか」

「犯罪か否か……？」

「響さんと初対面の頃のあの話の続き」

「……あー、あれ」

「そ、あれ」

「なんで平和が犯罪？」

「犯罪が平和なの？」

「哲学的な話？」

「僕、そういうの興味ある。」

「……僕には、その語彙自体が非常に物騒だっと思うんだけど？」

「あ、これはもちろん比喩……でもないかしらね、でも今は問題なくなつたものなんだし、これ自体はゆりかだっただけで平気だろうから。　そ

うでしょ?」

「まーねー。 もークリティカルなところは聞かれちゃったしい、今さらなんだけど……あ、やっぱ思い出すとうあーってなる」

「でも良いのよね?」

「あいあい。 罪滅ぼし的にどうぞ」

「ならよし! それじゃ話すけど——」

どう見てもよさそうじゃないけどゆりか自身が「いい」って言っている以上僕には止める権利はないし、なにより話す気になっている女子の話の止めることなんて僕にはできない。

僕の気が弱い……いや。

こういうことでさえ「そこまでのことじゃないよね」って思っちゃうこういう性格は、どうしたって。

体が変わったって変わらないんだから。

46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その
2

そこそこ広めの部屋は、壁がほとんど見えない状態。

壁の下半分は本棚やラック、上半分はポスターで埋まっており、部屋の中央付近にはその小さい体に対してはあまりに大きいテレビとその下に据えられているゲーム機の数々、そして部屋の隅には机がふたつで囲まれている。

「それで、ゆりか」

「んい？」

「好感度……上げるってのは、まあいいとしてさ？」

「話が早くて助かるぜいりさりん。 さすが私の」

「それはいいから……あんたたち。 見た目はどうすんのよ」

「ほい？」

片方は普通の学習机で、もう片方は大きなモニターなどが乗ったラックと足元のデスクトップパソコンという、どう見てもごく普通の中学生女子のものだとは思えない内装の部屋。

隅にはうずたかく積まれている映画やアニメ、ゲームのパッケージや漫画本でできたタワーが数本。

なおその大半は彼女が少ない小遣いで娯楽を集めようと、中古で買っ漁ったものばかりだとは彼女の自慢だ。

その部屋、ゆりかの自室には、学校帰りに引き込まれたりさが呆れた顔でベッドに腰掛けている。

「……はあ、それにしてもあんたの部屋は……人を呼ぶなら、もっと綺麗にきなさいよ」

「……りさりんひどいよ！ いくら親友でもあんまりだよ！」

「え、え？ なにがよ？」

「そりゃー分かってるよ、あの響と私とじゃぜんっぜん釣り合わないってのは！ でもはつきり言われるとぐさつと来るんだい！」

「あ、そつち？ ……いえ、そういう意味じゃないの、見た目ってのは」

「いいのいいの、そんな慰めいらなくて。　そーだそーだ、きつと響ならおんなじとこ出身の釣り合い取れたかわいーくてばんきゅつばんな彼女さんを」

「じゃなくてって言うてるでしょ！　　というかあんたもモテる部類なんだからいいじゃない！」

「へー、学年でも人気のりさりんさんがそんなお世辞を言うなんてねー、へー。『も』ってどこから自信っていうか自慢が染み出してる感じがまた」

「いい加減にしなさいよっ。」

「ごめん」

「ったく」

部屋の端と端。

りさは、すっかり慣れたゆりかのベッドの上でスマホ片手に。

ゆりかはその反対側にあるパソコン用机の前で、マウスをときどき動かして。

彼女たちにとってほどよい距離感の中で、昼間の続きの会話をしている。

「……で。　今のは単純な意味での……文字どおりでの見た目ってことよ」

「どゆこと？　単純って」

「……はつきり言うतोよ……まずもってゆりかかってば、高学年に入っところ……4、5年くらい前からほとんど背、伸びないのよね？」

「えーそーよ……。　なーんでだろーねー？　悲しいねー？」

……これでも途中からは気にしてきちんと睡眠だつて取ってるし、運動はもちろん……特に小学校ん頃は休み時間とか放課後にすっごくしてたし牛乳だつて余ったのじゃんけんで勝ったときはいつも余計に飲んでたしー？　ぶら下がりがだつて、ほら。　お父さんに頼んで、ほら！　ほら！　部屋に買ってもらった懸垂用のでぶらーんって毎日してるし」

「はーい、そこまで。　あんた、よくそこまで口回るわね」

「グループじゃない子たちとも平気で話しできるりさりんには言われ

たかないやい。ふ、持つものには持たざるものの気持ちなど分
はしないのよ……」

「で。私から言っただけ、あんたの身長はどうでもいいのよ」
「ひどひ」

「だってせいぜいが知らない人からは小学生に見られるだけでしょ？

特に制服着るときなんか、どこぞの私立小学校の高学年だとか。

ランドセルじゃなくてもそう見られるじゃない、よく」

「おうふ。事実の羅列が私を襲う」

人は、悪意がなくても人を傷つけられる。

りさは、ゆりかの傷口をぐりぐりと抉り続ける。

そしてゆりかはその度に落ち込んだり怒ったりする……フリをす
る。

りさも、それを知っている。

あくまでも冗談で済ませられる範囲で繰り返される応酬。

そんな2人の友人関係。

幼なじみなどでもなく、席が近かったわけでもなく。

クラスでの……学校での「グループ」も言えば趣味も違い、性格も
見た目も、健康的な体つきと未成熟な体つきという違いがある彼女た
ち。

そしていつの間にか仲が良くなって……こうして放課後や休日
にも会い、ばらばらのことをしながら時間を潰す関係。

ゆえにお互いに攻撃し、されてもある程度のところまでは許し、別
の機会に同等の反撃をしてチャラにする。

例えばゆりかが今日こうしてさんざんに「ちいさい」ことを言われ
ているのは、その直前にりさの「大きくなった」ことについて言いふ
らされたりしたものや、後日に体操着に抱きついて感想をまくし立て
たり……もちろん多くの男女が揃っている場面で……したり。

「……ま。私服も子供っぽいシユミだからいつも小学生に見られ
てるけどね。せめて中学生らしい服くらいは選びなさい。こー
んだけいろいろ揃えられるんだからお小遣い、けっこうあるんでしょ
？」

「ぐぬぬ……おじいちゃんおばあちゃんおばちゃんおばちゃんが私の敵だい」

「あらいいじゃないー、モテモテよ？」

「好きでもない相手にモテてもいいことないって、それ、いつつもりさりんが言ってることー」

「ちよつと方向性違うって思うけど……まーね。けどまだ中学なんだから背、伸びるわよ。きつと……ええ、たぶん」

「あ、やっぱ厳しいのね」

「だからまずは、今度私が着いていってあげるから……せめて小学生に見られない服装揃えなさい。ね？」

「あーい……けどりさりん。なんか今日のは辛辣すぎない？ 私なんか悪いこと……したわ、そーいや。したよね」

「そうね、したわね」

「……まだ怒ってる？」

「今のですつきりしたし、もういいわ。んで話戻すと」

がば、とイスから立ち上がり……くるくると回り続けるそれを背に対面のりさの元へと走り寄り……さつと、りさが避けたところにあつた、彼女が腰掛けていた枕に向けてダイブするゆりか。

ダイブし……そのまま動かなくなることしばし。

「パンツ」

「お金取るよ？」

「んな安物で擦り切れて……いつから穿いてるのそれ」

「んー、多分小学校の」

「女子力低っ！」

「どーせちんちくりんですよー」

その衝撃でめくれ上がったスカートを戻してやりつつ、りさは続ける。
る。

「……もう。いつもならこの程度、教室とかで言っても平気でしょうが」

「だってー、りさりんだしー」

「それがどういう意味かは聞かないでおくわ」

「それがええ」

おもむろに座り直すと、抱きまくら……なぜかカバーが掛かっていない……を取り出しては抱きしめ、じいっとりさを見上げるゆりかと、床から引つ張り上げたクッションを背に壁に寄りかかるりさ。

「ゆりかのことじゃなくて……いや、それもあるんだけどさ。問題は響さんよ、響さん。あの子……いえ、あの人……いえやっぱりあの子ね。あの子、あんだよりもずっと背が低いのよ？」

「あ」

「背の低いあんだでさえ、歩いているときはのぞき込まないと顔が見えないんだっけ？ 私も本屋ではぱつとしか見なかったし、なにより立ち上がってからはずっと背の高い下条さんが横にいたから分からないけど……あんだよりも頭ひとつぶん小さいわよね。うちの学年の背の順でほぼ先頭のあんだよりも、さらに、ずっと」

「あ——……たしかに、ねえ」

「ってことは、よっ？」

「なんぞ？ りさりん」

ふう、とため息をつき……少し迷ったものの、結局りさは思っていたことを口にするにしようだ。

「響さんとあんだ。万が一、億が……いい仲になれたとしても」

「億が……しどひ」

「だーってほとんど接点がないじゃない。で、そうしたとしてもよ？ どれだけそれっぽい服装にお互いにして出かけたとしても……手、繋いだりしていても——小学生の姉と弟にしか見られないわねって」

「ごふっ」

「小学生同士の」

「ちよ、りさり」

「世間一般的にはロリなあんだと、世間では……はつきり言っちゃうと低学年な響さん。ロリの反対は……えっと、シヨタって言うんだっけ？ それ。好意的に見てくれる人がいたとして、気がついてくれる人がいたとして、あんだたちがそれを言っただけとして、どう見ても『ほほえましい小学生同士の姉弟のおでかけ』よね……顔

とか髪の毛の色で姉弟じゃなくても知り合いのそれに近い感じの。

誰が見ても『あら仲が良いわねー』って感じの」

「ちよつと待っ」

「そうねー、たとえば響さんが『おねえちゃん大好き！』とか言いながら抱きついて、あんたが『私も響が大好き！』なんて言ったりしても……いえ、余計にね、これ。　どー見ても、間違っても彼氏彼女とかそーい関係じゃないわねえ。　思いっきり好意的に、事情を知ってる人から見たとしても……やっぱり小学生同士の仲良しさんね。

あ、小学生同士の微笑ましい仲には見えるから安心してね？」

「あの、ちよつ」

「けど普通に見てみるとよ？　響さんとあんた、遠い国からの親戚とかものすつごく珍しい繋がりが無い限りには、血が繋がっていないっていうのはひと目で分かるんだし、つまりは赤の他人。　それに……仮にでも手を出したりしたら」

「手を出す？　……あ、あらーりさりん、だいたんなこと」

「――『犯罪』よね、それ。　かなりの年下をたぶらかしたって感じで」

「ぴいっ」

「だって……いえ。　そんな中であんたが中学生だって知られたら、どう見ても小学生、よく話さないとまず同い年だって信じられない響さんを、いろいろして拐かしたって見られても……しようがないわよねえって」

「――」

とうとう声を上げられなくなったゆりかは――抱きまくらに張り付いて微動だにしなくなる。

りさも言い過ぎたと気がついたが……いちど口にしてしまった、それもケンカなどではなく素面で話してしまった、伝えてしまった事実……今からながら慌て。

「……あ。　えつと。　あ、そうよ！　響さん、お家の方でもなにか事情とかいうものがあるんでしょ？　だから大丈夫よ！　何が大丈夫かは分からないけど大丈夫っ!!　あ、そうそう!!　仮に、億が一にで

も両思いになってあんたかあるいは響さんかのどっちかが乗り気になつてそういう関係になりでもしたら、その次の日とかには黒塗りの車何台かから黒服サングラスな人たちがわーつとここに来たりなんかして——」

「りさりん落ち着いてえええ、暴走しないでえええ、んでもって私も考えてたよーなこと言わないでつてば、分かつてるつてばー!!!」

顔が真っ赤になり、どこかうわの空で話し始めたりさに向かい、抱きまくらを放り投げて抱きつき正気に戻そうとするゆりか。

しかし悲しいかな、りさの暴走という名の妄想は広がって行き、さらに悪い方向へと話は進んでいき——最終的には2人とも轟沈した。

中学生女子な彼女たちの、限界までの恥ずかしさをもって。

46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その
3

女の子は1回話し始めると口がくるくると回るから、その声を遮るっていうのはとっても難しい。

いや、遮ること自体は僕だってできる。

できるけれども……それをしたら最後、きつと機嫌は悪くなる。

そんなもんだから……普段から口数の少ない僕なんだ、普段からおしゃべりで生きているような子たちの会話を遮るなんて芸当、できっこない。

もともとそういう性格なんだ、ガワが変わって女の子になったとしてもそれは変えられない。

だから僕は、あんまり聞いちやよくないだろうって分かっている……止められなかった。

だから、最後まで聞いちやったんだ。

ふたりの……いや、ゆりかの、それを。

どこまで本当かは……ゆりかやかがりならともかくりさのことだ、大した誇張もなく話していたんだろう。

だからこそ……その、ゆりかが僕と付き合うとかそういう話への反応に……ものすごく困るんだけれども。

え？

これ僕にどうしろっていうのりさりんさん？

どんな反応ほしくてこんな話し出したの？

もしかしてノリなの？

かがりなの？

くるんなの？

「つてことがあったから、ゆりかには『とにかく絶対に慎重に進めるように！』つて言い含めてねー。まずはスマホ越しに嫌がられない程度に。嫌じゃないかってその都度に確かめつつ。たとえばアクション起こすにも、まずは響さんの事情を少しでも教えてもらえる程

度の仲になってからにきなさいな。 そんな感じでアドバイスしてたのよ」

「」
しゃべり倒して満足した様子のりさりんと、その横で——微動だにせずうつむいているゆりか。

彼女のことは……今はあまり見ないほうがいいだろう。

そんな感じだから再びの静寂が戻って来て、同時にファミレスっていろいろな声や音がずっと響いている空間の喧噪が戻って来た。

けれども……さすがは「女子」っていうもの。

あの時点で……ゆりかが僕と2回目にあいつと、それからメッセージの絨毯爆撃が来始めたあのときにはもうすでに。

この子たち4人がぼったりと会つちやって、説明したりした頃にはそんな会話をしていたのか。

……女の子は小学生のときからませているって言うけれども。

中学生でも……僕、普通の中学生だったころって本に興味があるくらいしかなかった気がするのになあ……。

単純に僕が幼かっただけ？

あるいは時代の違い？

……いや、女性がおしゃべりでこういう話題が大好物なのは古今東西万国共通。

かがりを見れば誰だって分かるものな。

つまりはそういうこと。

どういうことか分かんないけども。

「ね。 ね。 ……りさりん」

「ん？」

「やっぱこれ、ちよーハズいんだけど。 それも、へたに隣から延々と他人の視点で聞かされるつてのが、こ——……」

「我慢しなさいよ。 いいって言ったわよね？ そうよね？ 確認は

したわよ？ 了解も。 そうでしょ？ ゆりか？」

「……あのお。 りさりん、いえ、りささま、やっぱりまだ怒っていらつしやる……？」

「いえ？ でも、言ったわよね？ そうよね？ 私、なにかまちがって
いるかしら？」

「そんなことはないです……あい……」
あと。

僕はこういう駆け引き……未だに怖い。

もちろん顔にも出さないけど、でも怖いものは怖いんだ。
なるべくなら避けたい。

僕も、話が始まりそうな気配を察した時点で降りたかったんだ。
まあいつも通りに無理だったけれども。

……これはひよつとして。

女性に……対人関係に慣れていないっていうのもあるんだろうけ
れども。

これって、僕、小さいころにおいたをして母さんに笑顔で問い詰め
られたりしたことが影響しているのかなって。

声こそ荒らげて怒られたことはないけれど、こういう怒り方をして
いた気がする。

もう10年は前のことなのに。

いや、小さいころの経験だからこそかな？

……とにかく何か反応しなきゃいけないんだったら。

「……ふたりとも。もうひとつだけ、いいかな……」

「なーに？」

「響っ！ どうかこの空気を変える一手を！ なにとぞなにとぞ!!!」

「僕は。……そんなにも幼く見えるんだろうか」

「……えっ」

「え？ あ、もしかしてもものすごく気にして」

「みんなして小さい小さいというけれども、いや、自覚はしているん
だ。 しているんだけど、でもどうしても気になるものはなるん
だよ。 僕は……そこまで小さいんだろうか。 幼いんだろうか。

どれだけ背伸びをしても無駄なんだろうか」

いろんな人に聞いて回っている気がしないでもないけれど、ふたり
へも問う。

よりにもよって僕のこと「シヨタ」とかのたまつてくれたふたりに対して問う。

そんなふたりは固まっている。

ゆりかは助けを求めるようなポーズをしたまま、いい笑顔のまま。

りさは……すつごくあいまいな笑顔のまま。

ふたりとも、口が半開きだ。

「教えてくれる？ ふたりとも……僕の友達なんだよね？」

「……え、えつと」

「……えと。 響、つて、えと、ね。 ……ちつこい私とかでつかいり

さりん、それよりもいろいろとでつかいかがりと比べると……その。

「誰が見ても中学生だって分かるさよちんを中心に、全員身長がけっ

こう離れてるから……その、うん。 余計に、……かな。 うん」

ごまかそうとしてくれたりさ。

はつきり言ってくれるゆりか。

彼女たちなりに真摯に答えてくれたらしい。

そっか。

僕、そんなに……そうだよ。

ごまかしにごまかして高学年だもんね。

こういうときにははつきりと言ってくれるゆりかのような存在が、とてもありがたい。

他人からの……それも背の低さをコンプレックスにしているような、おなじような悲しみを背負っている彼女からなら客観的な意見を聞くことができ、とても参考になるから。

ああ。

そうだ、僕は……今の僕は、小さいんだ。

幼いんだ。

それはもう、子供と普段から接しなくなった年代以上の人たちからは……歳を取れば取るほどに、特に公園でよく話しかけてきたりするおじいさんおばあさんたちになればなるほど僕の容姿がより幼いものに見えるらしく——はては園児だと、本気で親を探そうと気合いを入れられたりしたこともある。

忘れたかったから忘れていたけれども、でも何回もあつたけれども必死に忘れていたような、そういう出来事が……僕の頭の中でフラッシュバックしてくる。

それらはこの子たちに嘘をついた罪悪感で潰れそうだったあのときよりもずっと苦しいもの。

ああ。

そうだ。

そうだった。

僕だって……今の僕を鏡で見た段階でも、お風呂に入つて観察したときでも……紛れもなく幼い体、どう見たつて小学生、下手をすると園児でもおかしくはないって思っていたじゃないか。

ましてや髪の色から骨格からなになにまでみんなが違うんだ。そうだ。

それが普通の視点なんだ。

だから別に特段にあえて今さらに胃が重くなる思いなんてする必要はないんだ。

「——びき。 ねえ、響？」

顔を上げてみたら、いつの間にか傍に……定位置の誕生日席に座らされている僕に手が届く距離にまでふたりが来ていて。

「そんなに気にすること……そうだよ！ 響はずっと入院してたんでしょ！ たしか体動かさないと成長ホルモンが出にくいから背が伸びにくいって聞いたことあるし！ 私は動かしてもそうだったけどね!! だからだからなんていうか、そう！ 元気出してよ響、私たちはちっこい同志じゃないか！ だいじょーぶ、これから運動すればきつと!! あ、今度オススメの牛乳教えたいから！」

「え、ええそうよっ！ それに響さんみたいに落ち着いていて頭がよくなって、そういう魅力で好きになる女性もいるんだし！ むしろ幼……小さいほうがいいって女性だってきつといるんだから！ そうよ！ ええ、そうだよ！ いろいろ相談にも乗ってくれるし、よくものごとを知っているからこそすぐに正解を教えてください！ なのになのに他の男子みたいに自分の自慢ばかりするわけでもなくって

ムネばつか見て来なくって、他にはええと……話を聞いてほしいだけなのに自分の意見を遮るように言ってきたりする人に比べれば見かけの歳なんて!!」

「……ほう……?」

ひゅつと怖い気配がする。

どこから?

……ゆりかからだ。

「……おんやあー? りさりん。 私との約束、まさか反故にしよう
と企んではおるまいな? 私たち、シンユウだよね? ……人の、取
ろうとしたりは……」

なんだかどうでも良さそうな理由だったから放っておいていいか。
でも2人の必死な感じの援護は、なんの励ましにもなっていないかつ
た。

むしろ僕の心はより傷ついた気がする。

……お酒だ。

うん。

帰ったらお酒を呑もう。

うんと呑もう。

お酒を呑んで……悲しいことに前の体でも前後不覚になるついで
うのはできなかつたけれど、今の体だって眠くなる程度には呑むこと
ができるんだ。

それで……適当な映画でも見ながら呑んで、眠くなったらさっさと
布団に入って眠って……みんな忘れちゃおう。

そうだ。

それがいい。

だって……こんなにも年下の子たちに幼いつて断言されちゃった
んだから。

「ちよ、ゆりか!? ひ、響さん! 響さん落ち込んだままだから!」

「その前に泥棒猫さんについて、ちよーつとオハナシ、しないかね……
?」

分かってはいるんだ。

理解はしていても……何度だって思う。

理解と納得は、別物なんだから。

そうだ、僕は小さい……ゆりかにも言われたことがあるんだ。

まるで「銀髪幼女」だって。

だから大丈夫。

何が大丈夫かなんてさっぱり分からないけど、多分何か大丈夫。

僕が男だって言う確固たる自我が残っているうちは大丈夫。

もしそれが無くなったら？

……完全に幼女になってるだろうからもうどうでも良くなってるはずだもん。

46. X8話

響Ⅱロリorシヨタ??

その1

「てな感じでさ？ ひびきって犯罪臭がするかどうかって話題があったんだけどさー、ふたりはどー思うのかいな？ あ、ぜひぜひホンネで!! ね？ ね??」

「ええと……? ……良く分からないわ?」

「あ、……あう」

ゆりかは元から、とことん物事を楽しむ子。

それは趣味然り、そのための勉強や家の掃除などの手伝いをしつかりすること然り、始めから終わりまで全てにおいて。

つまりは常に全力投球というわけで。

当然ながらに彼女にとつて「楽しい話題」があつたのなら、絶対にそれを余すことなく楽しみ尽くすのは道理だろう。

だから僕たち3人の間だけでなんとか収まっていたのが……こうして広がる。

うん、女の子だもんね……うん、諦めてたよ。

「ほら、ほらほらあー。 響にも許可取ってるしさー? ねー? ひびきー?」

「……うん」

何かの会話の表紙で「良いよね?」って聞かれて、で、いつものごとく聞いてなかったけど聞いてたフリするために「うん」って言っただけなんだけどね。

でも今回は僕が悪いつぽい。

それにどうせ同じだからって気にしてない。

気にしてないから大丈夫。

僕が女装してるとかそういう話のときに居なかった、かがりときよ。

彼女たちへ伝わるのも……どうせ時間の問題だっただろうしね、もう良いよ。

下手に知らないときに共有されてかがりに突撃されても、それはそれで困るし。

「やー、しっかしすげえ髪の毛。 あ、蛍光灯だと完全に透けて見える！」

いつも以上におちやらけた感じなゆりかは、僕の隣で僕の髪の毛をばさばさしながら楽しんでいて、とにかく落ち着きがなくて。

今日は珍しくお誕生日席になっていない僕の反対側には、くるんがかがりといつももの眼鏡じゃないさよ。

「ゆりかはロリで僕はシヨタ」みたいな会話になったときの場面を、女子や女性特有のすごい記憶力で見事に再現されてから少し。

僕が忘れかけていたところとかまではぼ一字一句つていう感じに再現してのけたゆりかつてすごいね。

まあ、ゆりかのことだから結構に盛られているところもあったけれども……とかく女性は脳の想像上エピソード記憶っていうやつだったかが優れているらしい。

けれども記憶力がすごいが故に恋人や夫婦の間ではそのせいでいさかいが絶えないと聞く。

なんて恐ろしいことだ。

女性は「どうして自分と居たり話した場面を覚えていないの!？」って怒って、男は「そんなこと言われても覚えていないものは覚えていないんだ！」って感じになるらしい。

うん、分かる。

すつごく。

なにしろ目の前にいるダブルくるんさんはその代表例だもん。

何度もそれで……初めのころは軽い感じでだけでも怒られたっけ。

勉強で教えたこととかはすぐに忘れちゃうのになあ、この子……。

「?」

ぱちりとかがりと目が合って……そして彼女はいつもどおり「くるん?」してきた。

多分何も考えてないんだろうなあ……羨ましいなあ。

……今日のゆりかは……ファミレスに着いてみんなのジュースを「いい感じ」に作り上げたあとに席に座った彼女は、話し始めた。

あのときの……りさとのあれこれがあったときの、あの話題を。

だけれども本当のことは言っていない。

彼女は上手いこと彼女自身が恥ずかしいような場面は話さず、けれども辻褄の合うように、だけれども嘘を言わない範囲でごまかして「ゆりかと僕が並んで歩くと小学生同士みたい」だとか「ゆりかは自称年齢詐欺ロリで、僕は年齢不詳ロリかシヨタ」っていう感じに話したいことだけを話している。

「それでえ?? どーよどーよおふたりとも?」

「そうねえ——……」

「わ、私は…………」

それにしても、このところみんなが良い意味で遠慮がなくなってきたのを感じる。

なんて言うか……壁がないっていうか、話そうとしてぐっと抑える感じとかが消えてきたっていうか。

僕の事情……嘘だらけではあるけれども……を知って、そこそこの時間が経ったからかな。

だからこそゆりかも結構積極的に話を振ってくるようになってい
るんだし。

まあ今日のはやり過ぎだって思うけれど、でも無遠慮ってわけじゃない証拠に新しい1歩を踏み出そうとするときにちらちら僕のことを見てきて、軽く話を振って「いいのかな?」って確認するような感じだから、別に嫌な気分になることはない。

ないんだけど……なんというか、こう……単純に恥ずかしいんだ。

僕のことについて、僕が話題の中心になるっていうのは今までほとんど経験して来たことがなかったから。

けれど今では慣れつつある僕も居て、なんだか少しだけ……この歳になって成長できた感覚がある。

不思議。

「……え、と。つまり……響さんが、い、一般的に見て、客観的に……その、漫画などで出てくるようなロリータ、とか、シヨタ……と、いうようなもの。と、いうこと……ですか……?」

「そーそーそのとーりだよさよちーん。ザッツライツ! だつてさ

だつてさー、気になるじゃん？ 響知らない人が響見て響のこと見たとき、どーんな感じな反応になるのかなーって。 もちろん面と向かつては言わないだろうから心の中でさー」

くるんくるんしているくるんはくるんのままでくるんだから置いておくとして、さよはさつきからずーつと僕たちの顔を順繰りに見続けていて、くるんさん不在のままに会話らしきものは続いている。

……さよには悪いけれど、できればこのままくるんな沈黙が続いてゆりかがさつと場の空気を読んで別の話題に変えてくれたら良かったんだけども。

「ねね、響だつてそーでしょ？ 一般的な印象つての……あ、もちいつもみたく顔とか隠さないで、堂々としてるときの印象つてのをさ？

ま、ここには事情知ってる子しかいないけどね。 しかもみんな女子。 ハーレムじゃよ、ひびきっ。」

「……こちら。 なにやってんの」

「あう っつ!? ……つたー、ひどいよりさりん」

「私が目を離れた隙にまーたその話題とか……もう。 で、さつさと席詰めなさいな。 どうせ私がちよつと外に出てたから響さんをムリヤリ居心地悪いところに引つ張ってきたんでしょ。 ……あ、ごめんなさいね響さん、さ、いつもみたいに奥にどうぞ」

「……うん、ありがとう」

りさがなんか気を利かせてくれたんだけど……いや別に僕、お誕生日席が好きなわけじゃないんだけど……

何でそう思ってるの？

だけど善意からみんなが勧めてくる手前、断ることはできない。 そんなわけで僕はすこすこと定位置に戻されることになる。

初期位置の定位置のいつもの陣形に。

僕がお誕生日席でみんなと店の人とか通り過ぎる人からの視線を浴びて、目の前のテーブルの左右にふたりずつが座っているっていう。

僕が口を開くと4対の瞳が左右から飛んでくるっていう、僕にとつてはこれ以上なく苦手な場所へと。

そうして足が床につかないから手とおしりでずりずりと進んで、奥に着いたら今まで座っていたクッション3枚をゆりかから「これが響のぬくもり……」とかこの子の未来が少し不安になるようなつぶやきとともに受け取って、座高をかき増しにして。

で……結局はいつも通り僕はお誕生日席。

……だからなんでなんだろう。

でもなんだか落ち着くような気もする感じがして来ちゃっている今の僕の定位置。

だけれども僕の場合はちつとも落ち着かない。

だってロリとかシヨタとかいうワードを、こんなに幼い女の子たちが口にしてるのにまだ慣れないんだ。

なんていうかいかかわしいっていうか、こう……上手く表現できないけれども。

親戚の子たちが久しぶりに会ったら……って感じ？

もう「小さい」って言われること自体には慣れっこだし、肉体年齢はこれでも盛りに盛っているから文句は言えやしないんだけども。

……だけれども、嫌なものは嫌だなあ。

それをはつきりと言えない僕自身もまた、いつも通りに嫌なんだ。でも事実だしって思う僕自身も居て、つまりはよく分からない。

強いて言えば、この体のこと。

今の幼女な体のことを僕自身なんだって当たり前に思っているっていう事実を意識するから嫌なのかなって。

「じゃー、ひびきも気にしてないってことで本題に入りましょうっ！

さてさて、響ははたしてロリかシヨタか。 一世代の討論を！」

「んなことせんでいい。 適当でいいじゃないの」

「だめだなー、そんなことだからりさりんは……あごめんなさいりさりんさまですからそのこぶしをそろーりと下げてくださると私私とでもとても」

「……はあ……」

ため息をつきつつも「まあいつものゆりかよね」って顔をしているりさ。

「そういうことならまずはい言いだしっぺからね」

「えー」

「えー、じゃない。 さよさんたちまで呼びつけたんだもの」

「うえー」

「あ……あの、私たちは別に……」

「いいのよ。 人集めといてハイどうぞ、なんてズルいじゃない」

結局話の流れは変わらず。

僕がそのどっちに当てはまるかっていうものになっちゃうれしい。

なんだかんだ言つて、こうしてゆりかを叱っている風なりさだつて
実はずっと顔がにやけているしなあ。

ストッパーが居ない。

この子たち、僕のこと話すときはやけに熱心だからなあ……なんで
だろ。

46. X8話 響Ⅱロリorシヨタ?? その2

「んじや行きましょー、私の推しは、もちろん男の子!」

僕がロリかシヨタかって言う究極過ぎる二択について、ゆりかが言い出す。

「数年後には華麗な通りすがりの美少年になるこたー間違いなしのシヨタっ子だね! や、私たち長いこと響が男の子だーって思ってたからってのもあつて、今でもそんなに印象変わらないってのもあるんだけどさ」

がし、と肩を掴んでくるほどに近づいていたゆりか。

いつの間に。

そして顔が近い。

「ぬふふ……」

しかしあいかわらずのぱっつんスタイル。

流行っているんだっけ?

ちよつと前から?

あ、いや、ちよつと前って何年前だっけ?

……いけない、歳を取るとつい時間感覚が。

まだまだ20代……だったのに、この始末。

けどまあ女の子のこういうヘアスタイルって良く見かけるし、人気ではあるんだろう。

男と女の流行とかかっこいいとかかわいいの感性ってことごとくに違うよね。

男受けとか女受けとかいうやつ。

「リアルでも女子の僕っ子はいるけどさ、響みたく話し方までホントにさー! マンガとかアニメみたく演技みたいな話し方ーってやつじゃなくって、なんて言うのかな……そう! クール系男の子って感じですよ自然だし? なにより食いつきのいい話題って男子と話していて盛り上がる系のものだしねえ。つまりは男好みのってやつ。 思考回路のベクトルがちがうのよん、ふっーの女子とは「ね?」とか首をかしげながら言ってくる。

男だった僕の評価は多分「影が薄くて居るか居ないか分からない眼鏡男子B」。

口数は少ないし人と目をあまり合わせなくつてすれ違うときに初めて声をかけられて気がつくとかザラだからしようがないよね。

だから影が薄いとかなんとか言われてたはずなんだけど不思議なもの。

中身は全くおんなじなのに、見た目が変わると一転「クール系」つて言う評価らしい。

やっぱり人つて、見た目なんだね。

そう思うと男としての僕がどこかで凹む感じがする。

「響がいつもの格好、中性的な服で話しかけてきたらさ？　ちよつと話したら男の子、つまりはシヨタつ子だつて思うんじゃない？　超口ン毛の。　なんかミステリアスなフンイキのつて。　そでしょ？

でしょ？　いや、思え!!　思うのだ皆の衆!!」

「ゆりか？」

「はいっ!？」

「押しつけは止めなさい」

「あい」

「分かった？」

「はい」

「ほんとうに？　なんならまた」

「ヤメテクダサイ」

「よしっ。　あ、とつても悩ましいけど私はゆりかに一票」

なにが「よし」なのかは分からないけども一瞬で会話の流れが戻つたらしい。

女の子の会話つてすごいよね……脈絡が吹っ飛んだり再生したりするもん。

「シヨタ……つていうのは響さんには失礼だと思うけど、ロリとどつちかって聞かれたらそうなるわね。　ま、シヨタつて言うよりも背は低いけど同学年の男の子つて感じかしら。　なんだか大人びているから小さいけど小さいつて印象は……話したらないのよね、不思議

と」

僕のことを小さい、ちっちゃい、ミジンコみたいと罵ってくるもの、僕にひつついていたゆりかをひっぺがしてくれて、おとなしくしてくれたりさは普通に優しい。

やっぱり、りさはいい子だね。

小さいっていわれたけども。

「りさりんりさりん、その心は」

「心？ ……あ、理由ってことね。 んーと……だって仕草とか雰囲気とか……あーもう、なんだか上手く言葉にはできないんだけど、そういうもの。 もちろん見た目だけじゃ女の子にしか見えないけど傍にいれば分かるっていうか？ フードで髪の毛とか隠していれば、んでその状態でちよつと話すなら……まず男の子だって思うだろうし、私も」

少なくとも2人。

ゆりか以外にも、僕のことを男だって思ってくれる人がもう1人は居る。

だから……僕のことを真剣に話されて恥ずかしいけれど、今日ここで言ってもらえてちよつとほつとする。

けど、仕草ってやつ。

僕は「なんか恥ずかしいから……」って、初めのころは「見た目通りの女の子だ」って思ってもらおうとしていたからこそ、いつも脚を閉じているとか、そういうった女らしい動き方とか態度とか……仕草っていうもの、ちよつとは試したものの、ついで熱心に研究とかはしなかったからなあ。

つまりは女の子としては「がさつ」、だけど男としては「まあ……普通？」な感じになっっているんだろうか。

……男として見てもらえるっていうのが嬉しいけども、今後女社会に溶け込めないかもっていう不安も出てきた。

いやだって、女性って同調圧力っていうものが強いらしいから。

僕みたいな、ただでもトングデモな存在はそれに合わせないといけないだろうから。

ああもう、体さえ元のものだったなら。

「……あの？ ええと、響ちゃん？」

おや、静かだったかがりじゃないか。

「ん？ かがり、どうした。何か追加で食べる？ それなら好きに頼めば？」

横からかがりが口を挟んできたから反射的に答える僕。

「いえ、違うの……その」

「あ、僕は今日は小さい皿の物しか頼まないから残り物はないと思うよ。残念だったね」

「いえ、そうでもなくて」

「なぬ!? 響の口をつけた残り物ですと!!! かがりさまかがりさま、ぜひぜひお情けをちょうだいしたく存じますですていうかずるいよかがりんいつつもいつつも響と一緒にそーゆーことふつーにしてて!!!」

「え？ あ、あの、えっと……」

「あの、ゆりか……さん、お、落ち着かれて……」

「はあ……コイツは……」

せつかく僕が感傷に浸っていたのに、まーたいつものように、いつものごとく、当然のように、かがりがくるんつと口を出してきたばかりに、これだ。

なんかいつもと比べると少しだけおとなしい感じだけど、でもやっぱりかがりはただのくるん。

だって、たったのひと言でこうなるんだから。

……あー、さっきまではお腹が空いていたから静かだったのか、なるほど。

………動物や子供みたいだね。

ということはやっぱり普段から餌付けをしていたのは正解だったのか。

だっておかげで少しは僕の言うことに従ってくれるんだから。

ゆりかが反応してぎゃあぎゃあ始めて、さよが周りを気にしておろおろしだして、かがりはくるんつてして……りさはゆつくりと騒

ぐゆりかの後ろに回っているけども。

僕は知らない。

見なかったことにしよう。

うん。

とりあえずはメニューをそつと、さりげなくかがりの元へ滑らせておこう。

食べものに満足してさえいればこの子は満足な子だから。

良いじゃない、そういう子がひとりくらい居たって。

46. X8話 響Ⅱロリorシヨタ?? その3

「響ちゃん……ええとね?」
「?」

なんだかかがりの様子がおかしい。

甘味が足りないの?

早く頼みなよ。

「あの。その……何度も聞いてしまつて悪いけれど、響ちゃん、こういう話をこんなところ……人に聞こえてしまうかもしれない場所です。してしまつてもいいのかしら? ええと、こういう話題でも……」
む。

かがりが至極常識的過ぎることを口に出している。

「なんだ……かがり、僕に甘いものを頼ませて多く残させて自分が食べたという理由でもじもじしていたわけじゃないのか」

「違うわよ! もうっ、響ちゃんは私のことをどのような目で」

「ん。食欲の秋だね」

「ひびきつたら詩的ー。 んじゃ私は無難に食べてよく育つ……よく……ぐぬぬう……」

「自分で言つといてあんたは……でもまあ、そうね。いつも食べているわね、かがりさん。それでよくそのプロポーシオン維持できるなあつて思うわ」

「えつと……その、虫菌になるから……い、言えせんっ」

「みんなひどいわっ!」

かがりのくるんが心しか尖っている。

……やっぱり、この子たち同じ女子中学生基準でも食べ過ぎだったんだね。

僕はてつきりこれが女の子の標準だつて思っていたから困つてたんだ。

だつて、特に最初の方なんかは「女として生きるかもしれない」つて思つていて、その参考を一時期はかがりにしていたもんだから……これだけ甘いものとかを食べなきゃいけないのかつて思っていたか

ら。

あと……やっぱりできているんだね、虫歯。

そりゃあそうだよね、会っているときはほとんどなにかを口にして
いるし。

それで太らないのが本当に不思議なくらいだ。

栄養を妄想で消費しているんだろうか？

あ、でも、身長が高いから基礎代謝的なのは多いのかもね。

そうしてひととおり……被害担当はさよで、それに割って入る感じ
のりさがついて、その場面をスマホで撮っているのがゆりか。

そんな、年相応のはしゃぐっていうものをお店の人に怒られない程
度の声で繰り返すこと数分。

ひたすらにみんなにさっきの発言について問い詰めて、それでとり
あえず満足したっていう感じなかりは、ふう、と髪の毛を触りつつ、
落ち着いた様子。

「……さて、それでは私も言わなければ、ね。響ちゃんのこと。私
としては、響ちゃんは『小さな乙女』という印象よ」

「あ、戻すのね話題。いや、私はいんだけどさ……さすがはかがり
ん。てことはー、つまり『ロリ響ちゃん』ってことだね？ ロリっ
子だね？」

「ロリータ……そう、ゴシックもとても似合いそうで」

「……あの、その、また脱線……し、そうになって……」

「たとえば普通の格好だって……最初に会ったときには、ええと、スト
リート系みたいな格好だったけれど、それからは今みたいに――

――そう。響ちゃんは、完成されすぎているのよ。完全
なロリータなのよ」

「おお……また新しいかがり語録が」

「語録？」

「あ、あの、あの……どうか落ち着かれて……」

かがりが、目を閉じて黙る。

これは、非常によくない。

なにかが起きる前触れだ。

かがりが普段とは違う反応を見せるような、こういうときってというのは。

「そうよっ!!!」

あ。

がた、と席を立とうとして思いっきり太もものあたりをテーブルにぶつけて、上にある食器がみんなガチャンって音立てて、近くの席の人がそんなかがりを見つめ始めて……口を開きかけているかがりを、すすす、と静かにきちんと席を立て、すとん、と座らせるりさりん。さすがに目立っていると気がついたのか、いつになくおとなしい様子。

……もう慣れてきているなあ、この子も。

いや、みんなが……かがりの奇行に。

やはりこの子は基準じゃなかったんだな。

そしてさよがまだあったかい紅茶を差し出して発音しかけていたかがりの口をふさいで、ぐくぐくと飲ませてほうつとひと呼吸するくらいはあつて。

それをスマホで撮り続けているゆりかと、お誕生日席が故にクツシヨンっていう不安定な足場で動けないでいる僕を除いたふたりが協力して……もう1回、かがりを抑えようとした。

……でもダメだった。

余計なスイッチ、押しちゃったみたいで。

よりによって、トドメは僕で。

ああ、僕はまた……。

「みんなよく聞くのよ？ 響ちゃんは響ちゃんなの。 響ちゃんは響ちゃんです。響ちゃんなのだからもちろんわざわざこうして言うまでもないと思うのだけれど、あらもう少し結論だけではなくてその過程も話さないといけないのだったわよね響ちゃんごめんなさいね響ちゃんつい、このあいだ言われたばかりなのにいえずつと前から教えてくれていたのよねでもそれを最近ようやく分かってきたのよ」

「ええと何の話だったかしらあらそうだったわ響ちゃんのことねつまりは響ちゃんは響ちゃんというのはつまりは響ちゃんという存在は

究極的には『美』ということなのよ、美という言葉が意味するところはね、表現が非常に難しいのだけれどもあえて言ってみるわね、響ちゃんの容姿は完成されているのよ。私は残念ながら一緒にお風呂に入ったりする機会もなかったから下着の下は見たことはないのだけれども、でもお着替えをお願いされたときにその上までは見たことがあるから分かっているの、いつも見ているから分かっているのよ理解しているのそれはそれは極めて美しいの」

「あらもう少し説明しないといけないのよね、話は人が聞いて分かりやすいように前提というものを先に話してから本題に入らないといけないと響ちゃんから夏休みのときにも散々に教わったというのに私だったら、ええと響ちゃんの容姿が美であって完成されているというのもまるでそうなるようにって設計して創られたようなお人形さんのようだという意味よ分かるかしら、たとえばみんなだってお家にお気に入りのお人形さんが何人もいるでしょう？ いなかったとしても昔はお部屋にいたはずだしゆりかちちゃんみたいにマンガやアニメに出てきているようなお気に入りの子でも全然に構わないわ」

「だから隠していてもどこかに染み出しているような美しいかわいらしいという印象以外には表現できないのだし見つけ出せないのよ、もちろんおはなししているときには男の子らしきもあるのだし、あ、だけれども響ちゃんってどう表現したらいいのか分からないけれども不思議なのよ、男の子らしいのに女の子らしくもあって女の子らしいのにどこか男の子らしいというものが伝わってきてときどき頭がどちらかしらと考えてしまうの」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

……もう誰も身動きを取れない。

ただただそのことばの暴力に惑わされている。

幸運なことに、途切れることなく話し続けているかがりの声が聞こえる範囲には誰もいなくて、店員さんもこっちは来ていなくて他

の人に迷惑をかける心配はないけども。

スマホで録画しているだろうゆりかもその手はそのままに、笑顔が固まっただけ……たぶん、あつけにとられている。

口が半開きだし。

……誰だつてそのはず。

そうじゃないのは、かがりのこれを何回か浴びせられている僕と……さよくらい？

ほとんど息継ぎなしで蕩々と僕についてを話しているかがりは、こんなことを考えているあいだにもとめどなくするするとぬるめると言葉を紡ぎ出している。

「……それはつまりアンバランスということなのよ響ちゃんはアンバランスゆえに響ちゃんなの、分かるかしらアンバランスというのは響ちゃんの幼い女の子という女性も男性もご年配の方も物心つかない赤ちゃんだつてひと目で見て分かる完成形の器というものに、これもまた完成された男の子の魂が完成された誰かに吹き込まれたようなそのようなイメージを持つてくれたならよく分かると思うわ、ええそうね言うなれば童女、いえ、ゆりかちゃんがこの前言っていたわね幼い女の子つまりは幼女というのかしらそれとも先ほど言っていたようにロリータ、あるいはロリと言うのかしら」

ゆりかを見る。

心持ち顔を背けられた。

あとで問い詰めよう。

「そのような、ええ、ロリと言う完成された小さな女の子の体の中に少年、いえ、これもまた先ほど言っていたようにシヨタというのかしら……ではないわねそれはふさわしくない気がするわ？ ゆりかちゃんには申し訳ないのだけれどもだつて私のどこかがそれは違うと叫んでいるのだから私にはシヨタとは表現できないの、ならどう言えばいいのかしらね、男の子、男性、少年、青年、男の人ああ思いついたわしつくり来る表現がそう青年よ!!! 私たちよりも年上の高校ある

いは大学にいて穏やかで線の細い男性な青年という人よ！ それを無理がないようにいえむしろぴったりとそこに合うように収めたというような感覚ねええそうよ私にとつて響ちゃんは青年さんで青年ちゃんなのよ！」

一瞬とひやりとする。

……かがりは完全なる感覚派な子。

いつもいろいろと足りないって思っているけれども、勉強を教えたりするときには嫌というほどに前を向かせないといけないもんだから、いつもいつも振り回されているもんだからついつい忘れがちだけど……この子だって決して頭は悪い方じゃない、むしろいい方ではあるんだ。

ただ興味がすべて、そういう方向に向いちゃっているっていうだけであつて。

それが全てを台無しにしているんだけれども……それは置いておいて。

だからつまり、かがりは普段から僕のことをよくよく観察しているっていうことで、だから僕の本質の一部を……今言っていたように理解しているんだ。

だから、ひやつとして手に汗がじわつとにじんだわけだけでも。

でも、心配することはないだろう。

だってどうせ、今話し終えたら……いつものかがりのこと。

どうせ完璧に忘れちゃうんだろうから。

ただただ自分が思っていることとか話しているあいだに思いついたようなことをしゃべり倒して、それですっきりして満足するだけなんだろうから。

うん。

僕は詳しいから分かる。

いつもだから。

あの……夏休みにかがりとふたりきりの日っていうものを何日も何日も経験したら、そりやあもう慣れないほうがおかしいんだから。

46. X8話 響Ⅱロリorシヨタ?? その4

「……その様子だと、みんな納得してくれたみたいね！」

絶句という言葉を理論上にしか知らないらしいかがりが言っている。

「あら響ちゃんもかしらそれはとても嬉しいわ、だって響ちゃんったら普段から自己評価というものがとても低いのだもの、この際にきちんとあなたの男の子だろうと女の子だろうと関係ないすばらしさというものを自覚しておかなければね！」

かがりが止まらない。

いつものことだね。

もうとつくに慣れている。

……これが、たかが半年過ぎた程度じゃ治らないものなんだっていうことくらいは知っている。

だから僕は黙っている。

僕にとつて害はないし？

いや、いずれは治さないといろいろと不味そうだけでも、それは彼女……の周りの人たちに任せよう。

とにかく彼女がそんな調子なもんだから、もちろんみんなもあつけにとられたまま立ち直ることができないでいる。

ゆえにかがりの独壇場はまだまだ続くんだろう。

……こつそりイワンさんに連絡取って、電話、かけてもらおうかなあ……。

「だから私はさらに細かく教えておいてあげなければならないのよ響ちゃんさよちゃんゆりかちゃんりさちゃん、アンバランスゆえにパーフェクトな響ちゃんのことを」

「――下条さん」

僕の耳にかすかな声。

その主を探すと……さよ。

いつも通りにそわそわとおつかなびつくりともしていない、さよが居た。

普段なら、声を通らないからって服を引っ張ったりして注意を引いたりしているのに。

その動作、僕にもよく分かるのに。

けれどもくるんさんはそれに気がつかない。

「だけれども、それだからまたいいというのもじつくりとおはなししなければならぬのよ、だって響ちゃんは普通ではないからこそ響ちゃんであって究極の」

「……あ、の……も、もう、そのくらい、で」

「美というものであらさよちゃんにかしら私今とてもおはなしをしたくってだからしなければならぬのよ、悪いけれど後にしてちょうだいね、それでなのだけれども顔つきからするにどうもりさちゃんもゆりかちゃんもあまり分かっていないようだから何度でも言うのよ響ちゃんは」

僕は顔を背けた。

右手の、かがりとさよのいる方向から。

なんとなくの直感。

僕はそれをいつも頼りにしているんだ。

それは偶にはずれるけれどもだいたいは正しい。

どっかの本で読んだ覚えがあるけども、それは無意識っていう僕の頭の中の意識に上ってこないもののため込んであるような知識とか経験とかを一瞬で引っ張り出してくれるもの……らしい。

それにしたがつた僕。

まさかとも思っただけども、ぼつと振り向いてゆりかと目が合ったりしたって思ったら、聞き慣れているようで聞き慣れていない声が斜め後ろから飛んできた。

「——下条さん。止めてくださいと、言いましたよ？」

「……え。さ、さよちゃん？」

怖い。

声が低い。

普段と違って淀みが少ない。

そして怖い。

さよが変貌した。

「……ようやくに止まってくれたんですね下条さん、もつと言わなければならぬかと思っていました、聞いてくださってよかったです」

「あ、あの」

さよがつつかえつつかえで話したり小さい声で話すのは……彼女が普段は遠慮しすぎるから。

だから、それが無くなれば当然に。

「下条さん、先ほどから明らかに響さんのことについて言及しすぎです、理解していますか？」

「え、えっと、さよちや」

「いえ、していなかったからこそずっと話し続けていたんですね、ですけれども響さんのお顔をよく見ていましたか？ 響さんはその話題でも困っていたんですよ？」

おお、ばつさり……けど僕は大人だから平気寄りの困ったただったんだけどね。

「と言いますか下条さんもみなさんも知っていますよね、響さんはそのような話は好きではないというそもその前提を」

メガネのレンズの奥の瞳がいつものように長い髪の毛で半分ずつくらい隠れちゃっているのに、光っているように見える。

その口元はいつもみたいに動かしなくても半分以上は声にできないものなのに、きちんと低く通る、女性特有な、怒っているときの声を発している。

一切言い間違いもつつかえもせず。

静かな怒りがテーブルを支配している。

「ご存じですよね？ 響さん自身が嫌だと言っていましたよね？」

思わずで舞い上がってしまったのと止められなかった私も同罪ですが、あのとき病室で、響さんご自身が嫌だと言っていました。覚えていないんですか？ 響さんが嫌だけれども友人だから仕方ない、とも言いたそうな表情で優しそうに微笑んでいたのを見てはいなかったんですかみなさん」

冷や汗がにじむ。

怖い。

別に大声でもなくって、怒っている顔つきでもないのに……怖い。
うん、やっぱり目は背けておこう。

「あのー、さよちゃん？」

「大体なんですかロリとかシヨタって馬鹿なんですか人に向かって堂々とそのようなことを言うのだなんておかしいじゃないですか？　うは思いませんかそうではないですか関澤さん杉若さんそして下条さん。友人でも限度というものはありますしましてやデリケートな話題なんですよ本当に理解しているんですか？　忘れているのでしたらもういちど思い出してください、響さんがそれをあの年越しのときに打ち明けてくれたというのは裏を返せば私たちと出会ってから半年以上も言えないようなほんとうに重い事柄なんですよ思い出しましたね？」

すごい。

なにがすごいって、さっきのかがりと同じくらいのスピードでよどみなく話しているっていうのが。

ものすっごくメルヘンにすっ飛んで行ってていたかがりのは違って、とんでもなく重くて意味の込められているさよの言葉。

……この子、僕と何か似てるところがあるから何かにかちんって来ちゃったんだらうね。

普段怒らない人が怒ると怖いって言うのはそういうこと。

「えっと、さよさん、私たちは」

「それに私たち調べましたよね、時間をかけてよく。そして確認しましたよね、4人全員で響さんの心と体の性別の不一致について。

響さんのお体は私よりもずっと重い病気を背負っているんです、その上に心までつい去年までは心の性同一性障害というものについてご家族へさえ思うように伝えられなかったと聞きます。これは忘れてはいませんか？　そのようにして響さんはとても心身共に辛いんです、それなのに闘病を頑張られていて手術を受けるために外国に行く決意をされて、心の方も私たちのように会って半年しか経つ

ていない、しかも心の性別として異性の私たちに向かってそれを両方とも打ち明けてくださったんですよ？ それなのにみなさんはいつたい何を考えているんですか響さんこんなにも嫌がっているじゃないですか、人のことを過剰にはやし立てて楽しいんですか」

ふう、と、息継ぎのためかは分からないけども大きめのため息をついた隙を狙って、僕も、ふう、と落ち着くための呼吸をする。

だって怖いもん……ひとまわりもしたの女の子の張り上げたりもしていない声でも。

「……あ、あのね？ 私、ちゃんと聞いたよ？ 響に。平気そうだし、そう呼んだりしたって別にいいんだって。だからだいじょう」

「それは響さんと私たちが友人だから我慢してくれているのであるというのを考えたことはないんですか関澤さん、これは本来ならば軽々しく話していいようなものではありませんし、許されない行為なんですよそれを本当に分かっているんですか、響さん自身がそれを口にしていながらまだしも他人が言うだなんて」

さよ。

すっかり忘れていたけれど、この話し方はあのときの、僕が倒れていたときに耳からかすかに聞こえていたような鋭い感じのもの。

なんだけど、あのときよりもずっとずっと長く速く話している。

「そして杉若さんも調子に乗りやすい関澤さんだというに、それを止めないで一緒にになって、いえやはり響さんが本当に嫌ではないかをきちんと聞きもせずにくまなく立っていた下条さんも同罪なんですよみなさん、響さんを傷つけて楽しいんですか？ 私はそれに気がついてあの写真のときのことを思い出したりもして今とてもものすごい罪悪感に追われていますよ？ 本当に何を考えているんですか少しは頭を使って考えてくださいよ」

「ええと……さよちゃん、ごめんなさい」

怖い。

起こってくれてる内容はもうどうでも良くなって、ただただ怖い

あの、おとなしくて……他にもいろいろあるけれど、でも僕に1番近い性格をしているんだと思っていたさよが、この子が本性を表して

いる、この瞬間が。

……とりあえず、じつとしておこう。

◇

「……あ、響さん?」

「……何?」

ひととおりに言いたかったものを言い終えたのか、静かになったさよが話しかけて来る。

顔を上げるついでに3人をちらつと視界に入れてみるけれど、みんな死屍累々という様子。

とくにかがりのしよげ方が著しい。

くるんがへによんになっている。

「私は響さんのことを。 すごく素敵だ男性だと思っっていますよ?」

……あ、あう、えつと……つまり、知的で、いつも冷静で、達観していて、頼りになって……その……え、えつと、つまり……」

さつきまでの威勢がどつかへ消えちゃったのか、急に話すのがゆっくりになっていって声が小さくなっていって、顔と目がうつむき加減になるさよ。

「……おおつとお? これは思わぬ伏兵みたいだぜい?」

「ゆりか。 茶化さないの」

「あい」

「……さよちゃんが落ち着いてくれて、よかったわあ……」

ずず、とストローに口をつけて吸う。

……ジュースはすっかり生温くなっている。

どれだけのあいだ、僕は動けないでいたんだろうか。

……。

だけでも、分からない。

やっぱり、分からない。

この子、さよでさえ一瞬で豹変するっていう女性、「女」の「性」っていうものが……僕には、あいかわらずに分からない。

少女たちのそれでさえ、未だに分からないんだ。

「……けれど、さよちゃん素敵だったわっ！ お友だちを想ってそこまで叱れるだなんて!! 私は怒られていたけれども、すばらしいことだと思うわっ！」

「……あ、わ、私ったら……ごめんなさい、その、言い過ぎて……」

「見たかいりきりん。 ああして怒られても瞬時で忘れられるかがりんという存在を。 いやマジで、ほんつとに忘れてないかあとで確かめないと、まーたおんなじ展開になっちゃうからりきりん協力して？」

「……私もまだ……お母さんに怒られたときみたいな感じになってるのに、あれはすごいわねえ……あんなに一瞬で立ち直れるものなのね、人って……」

……。

ひとまずは。

とりあえずは。

ここのところは。

僕が、男と女、半々くらいで見られただけでしたと。

そう、思っておこう。

うん。

だって……その、僕の事情っていうものを少しでも知っているこの子たち全員から「ロリ」……女の子だって言われていたら。

僕はどんな気分になっていたのか、分かったもんじやないから。

46. X9話 怒りと女性／女子 その1

さよの怒りが収まって少し。

ついでに僕について何か言いかけたことについて、からかわれて少し。

「ほーい、んじゃ話戻してっ」と

「無理に戻さなくてもいいんじゃないの？ だってさっきのせいで」

こうして休みの日に外で集まる時点で仲の良い子たちだ、「さっきのはあれで申し訳ないね！」って言う感じで普通に戻っている。

うんうん、良いよねこういうの。

かがりの好きな少女漫画とか恋愛もののドラマみたいのに、いつまでもどろどろしなくたってさ。

……しないよね？

信じて良いよね？

「えつとさ、さっきのアレがさよちんの本性ってやつだって思うと、こー、すごいなーって」

「あうう……」

「いや、偉いって思うのよ？ 私もこうだから言われなきや分かんないしさー。でもさっきの……りさりんのなんてメじゃないくらいかも。や、ガチですごかったし。うちのお母さんよりも迫力満点。将来旦那とかを徹底的にこき使うタイプと見た」

「……ちよつと、私は違うでしょ？」

「え、だつてりさりんいつも怒ってるじゃん。怒りんぼじゃん」

「それはっ！ あんたが変なことばっか言ってくるからでっ！」

「えー?? ヘンなコトってどんなコトー？ 具体的にはー??」

「うぐ、コイツ……」

「ううう……は、恥ずかしい、です……」

少女っていう話し好きな生きものに囚われている僕。

どうしてか、ほんとどうしてかお誕生日席な僕。

早くしんとした空間に帰りたくてしようがないんだけど、それを言い出せないんだ……年下の子たちにできえ。

僕は一応最年長なのにどうしてこうなんだろうね。

「でもまあ声を上げるほどのことじゃないし……」って思っている僕がどこかにいるからこそなんだろうけども。

けど、あのさよが……この、目の前でもう元に戻っておどおどした感じになっっているこの子が、なあ。

あれを目の前で聞いていなければ信じられないくらい。

そっか、この子は怒るときにはあんな感じになるのか。

まるで別人みたいだった。

別人、……そう、別人みたいに変貌する感じ。

一瞬魔法さんのこと思い浮かべちゃうけど、これはきつと普通の人
の気持ちの範囲内のこと。

さよっていう一番静かそうな子がこんなに怖いって知った。

そのおかげで、女性相手じゃ必要がない限りにはなるべく、可能な
限りに気をつけて女性を怒らせちゃダメなんだって気持ちを新たに
できたのが収穫。

よっぽどのがない限りは僕が譲歩した方が、いろいろと……本
当にいろいろと楽そうだっていうもの。

だって怖いもん。

それに、うん……この見た目、ひとまず僕から怒らせない限りには
そうなりはしないだろうけれども、元に戻ることができたり、あるい
は痲癩に巻き込まれたりすることだってあるだろうし……気をつけ
ないよね。

その前にまずは社会復帰だけでも。

「あの、響ちゃん」

「ん、どうした……かがり、さすがにそれ以上は止めておいた方が良い
と思うよ？ 君の小遣い的にも、カロリーのにも。飲み食いという
ものは習慣だから、普段から気をつけないと、量は増える一方なんだ
から」

なんかデジャヴなやり取り。

「え？ いえ、まだまだ平気よ？ お腹もお小遣いも。 出かける前
に『お友だちとお昼におやつを楽しくてくるから』ってもらってきた

のだし」

「……あの、そんなに甘いものばかり、は……」

好きだね、スイーツ。

それでよく胸焼けしないね。

僕ならとつくになっっているだろうに。

……あと、やっぱり食べるから育つんだね……前後に。

それなのに横幅はすらっとしていてからすごい気がする。

かがりの体内はどんな仕組みなんだろうか。

特に運動もしていない食つちや寝の生活なのに。

……妄想で消費してでもいるのか？

「そうねえ、次は……あ、ええと違うのよ、響ちゃん。私、聞きたいことがあつて。今の……えつと、さよちゃんに叱られちゃったので思い出したのだけけれど」

あれを「叱られちゃった☆」で済ませて立ち直るのがすごい。

「響ちゃんの叱り方……怒り方つて、今のさよちゃんのそれと似てるわよねつて思つて」

え？

僕？

「うえ!? ちょ、ちよつと待つてかがりさんかがりさん！ 響さんつて怒ることあるんですか?! いつもこれだけ落ち着いていて優しい人なのに!」

「りさちゃん、そんなに驚かなくても」

「だつて!!」

1番に反応が大きいりさと、やっぱりどこかずれているかがり。

「けれども本当よ？ 夏休みに何回も叱られたのなもの」

「ウソ!? 想像できないわ、いったいどんなことをしでかしたの!」

……その横で固まっているさよと、いつもどおりな顔つきのゆりか。

そんなにびつくりすること？

誰だつて怒ることくらいあるでしょ？

ちようどさっきのみたいに。

「あー、それをすつごく得意げに言い出す、しかもさっきのさつきでーなかがりんマジかがりんって感じ」

「??」

「すげえ……んでどーだったのさ？　ま、原因は……そだねえ、かがりんが嫌がる響を気にも留めずに延々と執拗に何十着も着替えさせたとかそんなものだと思うけど」

それくらいなら怒らない……というか怒るっていう気持ちがないけどね。

だって、かがりはこういう子だって知っているからっていうのと、そもそも僕がかがりという子の習性に対していちいち腹を立てるっていう反応をする気が失せているからっていうのがあるし。

だけでも……りさも、何もそこまで驚かなくたっていいと思う。

「……誰だって怒ることはあるよ？　ゆりか」

「や、そーなんだけどさ？　いくら響だっては言っても人間だもんね。

で、でで！　なんでなんで？　響だから、さすがに虫の居所ってのがーとかじゃあなかったはずでしょ？」

「ええ、私が……宿題を、ほんの少しだけ」

む、今この子はさりと捏造をしようとしている気がする。

「ほとんどだったよね？　嘘はいけないよ、かがり」

「え？　響ちゃん？　え、えつと」

片手を挙げて彼女を制しながらさつきと事実を述べる。

こういうのは邪魔されずに言わないとダメなんだ。

そうじゃないと「だって響ちゃんが良いつて言ったからー」ってなるから。

「夏休みの宿題を遅くまで、ほとんど手をつけていなかったからだったじゃないか。それも、何をどれだけいつまでにしたらいいのか、それすら分からない状態だったよね？　そしてなにより、それをなかつたことにして遊び呆けていたから叱ったんじゃないか。思わず、君の将来を想って。忘れたことにして地獄を見るのは夏休み明けの君だったんだよ？」

嘘と捏造はいけないこと。

僕自身がしてるからよく分かる。

……でも、「あら？」とか「くるんっ？」ってしているのを見るところ、どうやら本気で記憶がねじ曲がっていたらしい。

……あのときの僕の苦労は。

「……響ちゃん？ そうだった、かしら……？ あら？ あらあら？」
「そうだよ？ 叱られたっていう記憶だけじゃなく、その理由もきちんとセットで覚えておかないとね。これから先何度となく同じ理由で先生たちに叱られることになると思うよ。怒られるのはイヤだよ？ それにあれば……怒る、叱る以前に感情すら込めていないものなんだよ」

そう言いながらかがりを見上げながら問いたです。

……くるんカールが著しい。

この子の面倒を、誰か見てあげて。

本当に、切実に。

大丈夫、やればできる子なんだ。

ただやる気が明後日の方を見てるだけなんだから。

「でも怖かったわ！」

「……事実を並べただけだよ。叱るってほどでもないし、叱るっていうのはさっきのさよのようなものだと思うよ？」

「えうっ!? あ、あの……響、さん……」

「先ほどみたいに、僕のことを……人を、他人を心から想って本気で怒るような、そういうもの。あのときはそうじゃなかったんだよ？ あくまで『そろそろやる気を出さないと後が大変だよ』って言っただけ。 ああいや、半分は君の未来のことも想ってだからね？ もちろん」

「響ちゃんって厳しいわあ」

「……あう、う……」

なぜかさよが、かがりの肩に抱きつくようにしてうつむいている。前髪で顔が隠れているから分からないけども……とりあえず怒っていないからいいや。

「……え、えっと、響さん？」

「そだねー、響、あんまさよちゃんを褒めて差し上げない方が。 すつごく恥ずかしそーだし」

「うん？」

さよを見てみる。

……確かに顔が少し赤い？

耳たぶは真っ赤。

「……ごめん、さよ。 けど君の……人のために怒る、人を思いやって叱るっていうのは大切なことだと思うよ？ それができない、それをしない、見なかったことにする人間の方がずっと多いんだから。 君の今のものも、僕が倒れたときのものも。 人として真っ当な感情を持っているからこそできるものであって、人間として立派な心を持っているからこそできるものなんだ。 そんなに恥ずかしがることじゃないよ」

「ひ、ひびき、さ……こ、これ以上はっ……あ、う、う……」

ん、ちよつとだけ年上ぶっちゃった……肉体的には年下なのにね。

けどいつも僕が子供扱いされてるんだ、たまには良いよね。

けど、ひとつ思いついた。

なんでか分からない理由でかがりと仲が良くなって、かがりが話をきちんと聞く相手で、つまりこれからは僕に代わってかがりを助けてくれるだろう貴重な存在……それが、さよ。

そんな貴重な友達が中学できてよかったねって。

ゆりかに対するりさりんも然り、この子たちは良いペア同士なのかもね。

僕もこの子たちくらいの頃……そういう友達がほしかったな。

今になってちよつとだけ思う、後悔。

でもこの後悔だつてこの子たちを知ったからこそ生まれたもの。

……大変だったけども幼女になってこの子たちと知り合ってた良かったのかな、つて。

46. X9話 怒りと女性／女子 その2

なんだか僕が、かがりのためのさよについて話していたら妙な空気が。

滅多に僕自身の意見つてのを言わないからかな。

「おお——……」

「ゆりか？」

「はい」

「ほんとうに、分かっているわね？」

「はい」

「こういうときに冗談とかは」

「いやいやさすがにこの空気は読むさ、りさりん。それよか、あのか

がりんを警戒すべきだと思ふ所存で」

「……はうう……」

かがり相手には強く言うつてのがどうしようもなく必要。

だから必要だつて思ったたら好く必要ありそうだけでも……他の子の前でするところまで見られるんだつたら黙つていようかな。

注目されるのとか苦手だし……。

「あらゆりかちゃん、私がどうかしたかしら？」

いつものごとく一瞬でも自分の世界に飛んでいたらしいかがりがここで復活。

「いんや？ なんでもないさ、かがりんや。とゆーかそつちに戻したらいけないぞい」

「？ そつち……？」

「んでんで、響の叱り方つてヤツはこーんな感じのローテンションでおとなしいヤツだったんかい？」

「え？ ええ、そうね、特に声が大きくなったりはしないわ。やたらと声を出して怒る人つて怖いもの。だから響ちゃんの怒り方は……優しいわね？」

「……この子がろくに僕の話を聞いてくれなかったのつて、もしかして声が小さかったから……？」

「そうねえ……さよちゃんの怒り方と似ているけれど」

「怒ってはいなかったよ」

「あら、そうだったかしら」

「ああいうのは注意するって言うものなんだ」

大切なことだから何回でも教え込む。

いくらこの子でも10回くらいで覚えてくれるって信じて。

「で、響ちゃんのそれはもっと落ち着いていて、こう……ゆっくり静かに、諭すようになっていくのかしら？ 私のお父さんみたいに。そう、小さいころにはよくおいたをしてお父さんにも怒られたのだけれど、あのときのような印象だったかしら」

「お、おう……昔の自分をさりげなく言うのがすげえ」

「あのときも確かに、響ちゃんなりに怖い顔をしていてね？」

え、「僕なりに」って？

「少しだけそんな雰囲気もあったのだけれど。でも今響ちゃんの言っていたように、私のことを、宿題を忘れていた私のことを想ったことだつて考えてみると」

「はい、かがりんそこまでよん」

「そうね、今度は響さんが困っちゃうわよー」

「あら？ そうなの？ さよちゃん」

「あの……なんで、私に……」

……あのときどんな顔をしていたのか、今さらながらに気になってきた。

僕のことなのね。

「……とっ、とにかく！ さよさんと響さんは怒るにしても……なんていうか、こう……その！ 感情じゃなくってきちんと意志を伝えるタイプってどこね！ 良いわよね、感情任せじゃないって！」

「りさりん強引ー。 なにもムリヤリ話いい感じにまとめようとしなくたって」

「そこ、うるさいー」

「なるほど。 りさちゃんは怒りんぼ、と。 そういうことよね？ ゆりかちゃん」

「そゆこと」

『そゆこと』じゃないわよ！ あとかがりさんも違うからっ！ これはゆりかだけになんだからね！ 普段は別に私怒ったりなんか」

「ふーん、へー、ほー?? ほんとーかなあー？ だってこの前もクラスで」

「だからゆりかうるさいってば!!」

……りさはゆりかを止められる唯一の子なのに、こうして乗せられて怒りやすいのが……それで誘導されやすいのが課題か。

沸点が低い……いや、ゆりかだけになのかな。

それだけ仲がいいゆえのってやつかなあ。

そういうのってちよつと羨ましいかも。

「……まー？ りさりん自身のそーゆー考え方で言いますと？ りさ

りんはあ、れいせーちんちやくな響たちとは違ってえ？ 正反対でえ

？ すーぐに怒るわ怒鳴ってくるわ、あ、これおんなじだわ、んでもっ

てすーぐに手は出してくるゴリラ系女子だわ、おんなじことを

ずーつと根に持つわ。 まー私は知ってたけどね？ りさりんっ

ていうオンナノコのこと♥」

「……………」

あつ。

またゆりかが調子に乗って。

「まーさーにー典型的なジョシってヤツよねー？ ね——?? やっぱ

間違っでないじゃん、いつも私が言ってるよーに、りさりんはツンデ

——あいたあ!? ぶった!! ほらぶった!!! ほーらぶったよ!!!」

ごん、つて……すぐ近くで痛そうな音がしたと思ったらゆりかの一段と大きい声が響く。

そつと彼女を見てみると……ああ、実に痛そうに頭をさすつている。

そしていまだこぶしを握りしめているりさはというと、顔が真っ赤だ。

……ああ、可愛いそうに。

なにが可愛いそうかって……りさが、この先ずつと同じような形で

ゆりかに煽られては手を出してっていうのをみんなに見せつけさせられて「ああツツコミなんだ……」って理解され続けるだろうことが。ふたりがセットで扱われることとか、困ったら呼ばれることとか、げんこつし過ぎて手が痛くなるだろうこととか、いじられていつも人前で顔を真っ赤にさせられるだろうこととかも。

でも嫌なら距離置くだろうし、それが良いって思ってるのかもね。恥ずかしいから絶対言わないだろうけども。

「ほーれ！ やっぱ一昔前の暴力系ヒロインりさりんじゃん!!! 見てみい、すぐに手え出すでしよりさりんって!!!」

「あんたが！ ヘンなこと!! 言うからでしょ!!!」

「ヘンなコトってなにかにや——……あごめんなさいこれ以上はなんも言いませんユルシテ」

「……もうっ」

「りさちゃん？ 暴力はダメよ？ そう響ちゃんが前にも言っていたわ？」

「……………」

「……………」

「……………」

いつもの2人のじゃれあいにかがりのヘンな止め方が合わさって静かになる僕たち。

「……………」

「……あ、あー、かがりんの無意識で無差別な煽りがりさりんを……ちよい待ち今のはノーカンだって!!! てなわけでさ、響やさよちんみたいな性格ならさたつたのひとことで済ませてくれるだろうって」

「たつたの？ ひとこと？」

「あ、振り上げないで！ そこそこ！ そこそこでゲンコツなんて絶対しないからーって思ったのよほんと！ あー、痛かった、まったくりさりんは」

「……もういつかい、いつとくっ？」

あのふたり、放っておくとあのままループしそう……実際するし。

普段の休み時間なんかあんな感じなんだろうな。

けども……ん。

「……ついでに聞いておきたいことが」

「あ、ちよい待ち待ってくださいますさま、響さまの発言ですぞ！」

「あんた、そういうところ……」

「あら、なにかしら響ちゃん。あ、ゆりかちゃん、たんこぶ」

「できているかもしれないけども……人の話は聞こうね、かがり」

「え？ ええ、響ちゃんのこととはちゃんんと聞いているわ？ だけれどもゆりかちゃんの」

「こつちを見てね、かがり」

僕の声が発せられているときにはこつち見てくれるけど、ワンフリーズが終わるたびにゆりかのたんこぶの有無が気になってあっち見ちゃうかがり。

「……響さんも、大変だったんですね」

「……ありがたいよ、りさ」

ちよつと疲れた系女子のりさがため息。

それに合わせてため息をひとつ。

「む、りさりんがなんだかひびきんと……まさか泥棒……」

こういう、話がちやごちやになる感じっていうのは嫌いじゃない。

最初は困ってたけども、慣れてくればこういうものなんだって分かるし。

さすがは女子中学生、一瞬でも油断するとすぐに脱線してあさつての方向へぐにやぐにやと飛んでいっちゃうんだよね……。

「で、かがり」

「あ、たんこぶがちよつと」

「かがり」

「ええ！」

「……たいしたことではないんだけども、ついでだから。かがり。

君は、怒るときに……怒る……だろうけれど、そういうときにはどうなるのかって思つて。僕の予想としては……りさのように、ついつい熱が入ってしまう形のそれなんだけども」

だって僕のために2回も怒ってくれたさよとか、ゆりかの煽りで反応するりさって続いたんだ。

気になるじゃん？

ゆりかのそれはまだなんとなく想像できるからいいとして、かがりはなあ……。
服のこと？

この子は怒りはしない、ただ修正しようと迫ってくるだけってのは知ってるし。

胸のこと？

……ゆりかに言われたりしても恥ずかし混じりの文句だけだし。

つまりは彼女が怒る、イラツとするだろう原因を想像できないんだ。
だ。

だつてくるんだし。

「私が怒るとき……」

いつになく真剣な表情で考え込む。

真剣も考え込むも似つかわしくない表現。

「……………怒る、とき……………」

……雲行きが怪しくなってきた。

……いつの間にかりさたちも、じゃれ合うのを止めてかがりに注目している。

さよも見上げるようにして横から見ているし、僕だって横顔を見ている。

みんなが……初めて見るくらいには珍しい表情をしたかがりを、見ている。

いつにない静寂。

いつもこうだったら楽なのにとって思っちゃうくらいの、心地いい空間。

ここがファミレスの一角で、私服の女子中学生4人と……見た目小学生な、けどもストールで髪の毛を隠しているものの近くじゃ顔が見えるからって誰かが通りがかるたびにじっと見られる僕がいて。

そんなすみっこだって、つい忘れていたくらいに静かだ。

「……………あの。怒るのって……………ほんとうには……………ええと、ない……………かも、しれない、わ？　そうでしょ？　響ちゃん」
　　どうやら本気で心当たりがないらしく、かがりとは思えなくおろおろした声が返ってきた

　　かがりがそう言うのを聞いてみんなの気が抜ける雰囲気とともに、僕は思い出した。

　　ああ……………この子はこういう子だったなって。

　　良くも悪くも空想の世界に浸る子なんだよね。

　　常識もあるし普通に会話もできてぱつと見は高校生か大学生。

　　……………でも中身は結構不思議系なんだって。

46. X9話 怒りと女性／女子 その3

「怒る……怒る。 怒るわよねえ、みんな」

僕が最初に会って最初に大変な思いをさせられたのは、かがり。
だからこの子のことはよく知っているんだ。

僕とは違う世界の、どこかずれた子だって。

「私が遊びすぎたときにはお母さんからうんと怒られるけれど、私が
そうなることって……ええと、小さいころも『かがりさんはいつもお
友だちとにこにここと楽しそうにしているいですね』という評価ばか
りだったから、たぶんそこまでケンカとかはしたことがなくて……
私自身もそこまでは覚えていない……のかしら」

思考がだだ漏れだ。

学校でこうじゃないってのはかなりの衝撃だよ。

「そうなのかしらね？ 響ちゃん」

「いや、僕に聞かれても……」

場が静まっている。

いや、鎮まっている。

みんながあっけにとられているんだ。

そりやそうだ。

「……あ、あー。 分かる、分かるよそれかがりん」

そこでひとり再起動。

「ゆりかちゃん本当!？」

「お、おう……まー、そんなところかなー」

「よかったわ、私ひとりではなくって!」

とても嬉しくなった反動で手を繋ごうとしたらしく、立ち上がろう
として腰のあたりがテーブルの角にぶつかり、コップをそのおなかで
倒しそうになり。

「危ないですよ」 ってきよに指摘されて一気にしよぼんとしながら腰
を下ろすかがり。

くるんもしよげている。

いつもの光景だ。

そんなかがりの反対側に顔を向けてみると……ゆりかとぱっちり、目が合って。

……なんとなくで、本当は違うけれどかがりのために話を合わせているんだなって印象を受けた。

だってなんだかゆりかの表情、微妙だし。

となりに座っているりさりんが「やれやれ」って感じの優しい顔しているのを見るに、こういうことは割とあるらしい。

あのりさりんが。

ついさつきまでけっこう怒っていた彼女が、いい顔しているからね。

うん。

この子、はしやぎすぎはするけれど空気っていうものには敏感なんだよね。

かがりとは正反対で。

「私もあんまムカつてくることないかなーって。あ、ひとつだけあった、最近のムカつての。フレッシユなの」

「へー、ゆりかにねえ。どんなのよ?」

「あのね? ……私たち同志のこと煽るようにデカメロンとか抜かすヤツがいるとき!!」

「……心配して損した」

デカメロン……うん、学生らしいメロンさんの呼び方だ。

「あー、りさりん優しい!! 愛してる!!! ついでにそのムネちよつと」

「うっさい」

「ひどい!」

抱きつこうとしてぺちつとはたかれたゆりかがさつきまでの元気に戻っている。

「まー、そんなときってさ? 私はさつきのりさりんみたくはなんないけど、軽くくイラってしたらするのって……枕ポカポカするくらいかな、私なら。や、アレすつごくいいんだよ、聞いて試して分かったけど。30秒もしないうちに叩き疲れるし、疲れてすつきりする

し。 んですつきりしたらデカメロンでムカついてた私バカみたいーとかなくておしまいだし。 枕だから壊れるもんなんもないし？ あ、部屋中にホコリ飛ぶのだけが困るかなー、換気しなきゃね、くしゃみ止まなくなるし」

ふむ……確かにそういう発散の仕方は良いかも。

僕もそういうことがあったら……あ、あれ？

僕もイラってする程度以上にはならない……？

「……ゆりかさん。 その、デカメロン……ですか……？」

「あ、いんや。 分からのならそれでいーのさ、純粹でいてくれいさよちゃんよ」

「?? あの……ゆりかさんはなぜ古典で怒っているのでしょうか……？」

ゆりかさん、読まれて中の内容に……とかでしようか……？ ……

すみません、私、概要も知らなくて。 今度読んでみて」

「あー、コイツバカだからいいのよ、 さよさん」

マジメに反応しちゃったさよは、良くも悪くも純粹かつ素直らしい。

僕とは違って本当に病院な生活だったからまだあんまり分かんないのかもね。

「いえ……でも、知的体験をした上で強い感情を抱くには興味が……」

「さ、さよちゃんステイ。 あ、マジで。 私も読んだことないから。

てゆーかなんかごめんよ？ 軽いジョークなのよ」

せっかくボケたのにボケが通じなくて逆に突っ込まれるっていう、なかなか珍しい光景。

ちなみにさつきからかがりはひとりつぶつぶ考えてる。

優しいみんなは聞こえないことにしてあげてる。

「……私、学校でも良く……せっかく話しかけてくれた人にこうしてズレた反応しか出来なくて迷惑を……」

「さよちゃん。 ね、さよちゃん？ ……あ、そんな落ち込まないで、マジ

ごめんホントごめん、今度お詫びにさよちゃんオススメの本とか読んで語り合お？ ね??」

さよがいつになく悲しいっていう感情を全身で表していて、ゆりかが慌ててなだめてて。

りさはそれを見てなんか嬉しそうにしてて……そんなことはまったくに意識に入らず、なんだか上を見上げながらぶつぶつ言っているかがりがその辺に居る。

「あ、そだ、りさりんさんやりさりんさんや？ さつき私のことバカつて言っただけだよ？ けどさあ?? そーんな、バ・カ♥に成績でいっつも負けてるの、どこの誰かにやーん?? ねえー???」

「う、ぐっ……このっ！ 無駄に頭いいんだからっ！」

「ふふん、なんでも言うがよい。 うむうむ、次の試験がんばりましょーねー? 教えたげるよー??」

「あんた、それ以上調子乗るともういつかい」

「あだっ!?! ……ひびきー、りさりんがぶったー!」

「ちよ、軽くじゃない!?!」

「んむ」

ゆりかがいつもみたい抱きついてきて僕の体は彼女の体重で傾く。

「怒る……イラツとする……ムカつく……あの、調べても似たような表現ばかり。 それって、どうしたら生まれるのかしら? ねえさよちゃん、私、不安になってきてしまったわ? どうしましょう……」

「……え、ええと……それは、いいんです。 その方がいいって、きつと……お母さんたちも……なので、私だって別に、滅多には……」

「でも、響ちゃんのこと怒っていたじゃない、さよちゃん。 ねえ、どのような感じで怒りというのが湧いてくるのかしら?」

「……む、難しい、です……こう、おなかや胸から抑えようのない嫌な感情がと言う……?」

ゆりかのぱつつんが顔に当たるのを感じながら珍しく哲学的な話をしているかがりを見る僕。

この子たち……さつきまで静かになっていたのにもう騒がしくなっているし。

けれども、この状態。

騒がしくてまとまりがなくなつて、姦しく周りで話しているのをすぐそばで聞いているっていうこの状態に慣れている僕を、改めて感じる。

つい去年まで、こういうのはいちばんに嫌っていたはずなのに……気がついたら静かすぎてもつまらないって感じるようになった、この空間。

この子たちと、いつかまた付き合おうとしたら。

「……………」

僕はどうしても距離を置いて人を観察して決めつける習性があるけど、もうちよつとだけがんばろう。

そうしたらいつか、男に戻つてもこういう関係の友達とかが……できたらいいなつて。

戻れなかったら相手は女の子になるんだから余計にがんばらないと。

うん。

あ、それに女の子だからっていちいち考えるクセも。

女の子に慣れてきた……む、なんだかいかがわしい……男の僕が男相手じゃなくなつて女の子相手に話すのに慣れてきたから、そろそろ性別でどうこうじゃなくて、その子のことを見ないとな。

この子たちだってこんな僕のことを「僕」だつて見てくれたんだし。

「あーん、ひびきい、いつも通り黙りこくつてるうー」

「ちよ、ゆりか!? 響さんクツションから落ちちやうからあ!」

「あら見てさよちゃん、響ちゃんとゆりかちゃんかちゃんか仲良しよ?」

「え、ええ……あ、響さんが」

傾いた視界。

どうやら僕はゆりかに押し潰されたらしい。

……やっぱり女の子つて、あいかわらずに僕とは随分と違うものを持っている。

だからきつとこれからも戸惑うことはあるし、これからも女性に囲まれるだろう未来には苦勞するんだろうけれども。

完全に溶け込むっていうのは結局に無理なんだろうとは薄々感じ

てはいるけども。

でも、どんな感じになるんだろうね。
ね。

未来の僕。

46. X10話 さよと本と感傷と その1-1

僕が外に出るって言ったたら食材や日用品を買うか気晴らしの散歩。それ以外には、ひとりで外に出るとしたら行き先は本屋くらいしかない。

悲しいけどもこれが僕。

幼女になろうとも変わらなかつた日常だ。

ざわざわがやがやとうるさい駅前。

僕よりもずっと背が高くなった人たちの……いや、僕が小さくなつたからこそみんなが大きく見えて、余計に居心地の悪くなつた繁華街。

けれども僕の家からこの体で歩ける範囲で行けるのはここくらいしかないんだからしょうがない。

……今日の僕は、フードで隠れていない。

ここ最近魔法さんのおかげで、いざとなつたら都合よく切り抜けるって知っているから、もう隠れる必要もないし。

この1年……厳密には半年だけでも……いろいろと耐性がついたおかげか、いつの間にか人の視線がとつても気になるっていう状態じゃなくなつていて。

「前の僕じゃなくて今の僕が僕なんだ」って僕の意識や無意識の中で思うようになって……のかは分からないけれども、もう目立つ髪の毛と顔を隠す必要がないって思うようになっていた。

本当に。

気がつかないうちに。

これが慣れなのか順応なのか、それとも諦めなのかは分からない。だけでも僕はどうやら、「銀髪幼女」としての今にそこそこ満足している。

お酒も呑めるし。

お酒も。

とつても大切なこと。

……あ、スカートと短パンとワンピースだけは未だにダメ。

ふとももや脚のつけ根がすーすー寒いし、いちいちこすれるから。そのせいで性別が変わっているんだって、僕は女の子になつてるんだって……普段は結構忘れられるくらいなものにはつきり自覚させられるから。

それに比べて、20年以上慣れ親しんできたズボンの安心感はこの上ない。

女の子、女性はどうしてあんなお股の防御力が低くて風とか階段とかで危ないのが好きなんだろうね。

◇

「……つかれた」

慣れているとは言っても、この体の体力の無さには困るもの。

たかが徒歩十数分だった距離……たしか1キロくらいだっけ……それを、なるべく疲れないように歩くと30分くらいはかかるようになってるし、駅前へ出るだけでへとへとになるんだから。

そうしてあちらこちらのベンチやソファのお世話になる。

男なとき考えられなかった、座って休むための設備。

旅行先で歩き疲れたときくらいしか縁が無かったそれが、今の僕は無意識にマツピングしているほどにはお世話になっている。

駅との往復だけでも2、3回は休むし。

悲しいことに。

だから雨の日は出歩かない。

出歩けない。

せいぜいが近所の散歩程度だ。

けども、今の僕は絶賛身辺整理中ってことで、もうすることもほとんどないし、1日中家の中で肉体労働という名の片付けの終盤の作業とか暇つぶしするくらいしかないし。

つまりはヒマしてるんだ。

僕がそうなるっての、この数年どころか10年以上でもなかなかない気がする。

……この数日はみんなも忙しいようだから話すのもほとんどない。飛んでくるメッセージの量が減っているあたり、学生としての本分が試される期間に入っているんだろう。

定期試験。

大変だよ、学生って。

何かにつけて何かしら何でも良いから成績を付けたがられるんだもん。

卒業した僕は解放されてるけども、それだって悪夢とかで試験直前に勉強してないとかなるし。

……トラウマになってるんだね、これ。

けどあの子たちだってどうせ、試験の前日あたりからは現実逃避のためにばんばんチャット飛ばしてくるんだろうけども。

だけでも残念、今の僕は早寝なんだ。

だから飛んでくるピークの時間帯には僕はぐっすりなわけで、そこまでの負担じゃない。

ニートな僕は気楽だ。

これだからニートは止められないね……つと。

「ん」

いつものようにいちばん大きいビルのロビーの1階、上へ吹き抜けのその空間にたくさんあるふかふかのソファのうち、お気に入りなすみっこのひとりがけで足をぶらぶらさせつつのんびりしていたら、目に入ってくる見慣れた人の影。

あれは……さよ？

「くっくっ……」

……間違いない、私服だけどもあの前髪の長さっていうものはなかなかお目にかかれないものだし。

けれどもなんであの子がここに？

いや、居ちやいけないってわけじゃないんだけども。

他の子だってあんまり出歩かないだろうこの時期に、試験期間の前っていうぴりぴりした学生特有のあれなはずなのに、どうして？

あの子ならかがりみたいに試験ほっぴり出して買い物とかはしな

いだろうし。

それなら、あのかがりからの「お買い物に行きましょう!!」っていうお誘いすらないこの時期に……本当なんでだろ。

気になる。

何となく気になる。

と。

やっぱりあの子も入り口近くのイスに腰掛けてひと息ついている。体、弱いはずだし……本当に大丈夫？

いや、あの子の成績には心配していないけども、それを得るための準備期間に支障がないかっていう意味で心配。

けど……ふむ。

今日の僕は珍しいことに暇。

そしてここにはさよしかいない。

あの子なら立ち話になっても短い立ち話で終わるから安心できる。

他の子みたいに「ちよつと甘いもの食べながら話さない?」「お話ししましょう響ちゃん!!」ってならない子だし。

あの子が用事を終えるまで待つて、それとなく声をかけて軽く……なんならここで座りながらちよつと話して帰ろ。

うん。

定期的に人恋しくなる季節が来る僕的にも、ちよつど人恋しくなる時期だし。

ちよつと見てたけどさよがまだ動き出さない。

暇な僕は吹き抜けの真上を見上げる。

吹き抜けの高い天井までのそこここにある装飾と広告が目に入る。

……いつから僕、たかが1週間とか程度話さないでいるだけで、こんなにもやってするようになったらうね。

前なんて、いや、その前だつてそんなことはなかったのに。

この数年なんて月単位で誰とも話さないなんてのはザラだったのに。

口をきくのが1年で10分にも届かないなんてのは当たり前だったのに。

……慣れ。

良くも悪くもすごいんだな。

◇◇

ふらふらと吸い込まれていったのは本屋。

まずは本屋に行くらしい。

さよのことだ、きつとそうだとは思っていたけども。

……あ、参考書とか？

それともお気に入りの作者の新刊とか？

電子書籍に慣れてはいるけど紙の本が好きって前に言ってた気がするし。

そんな僕はなんとなくでさよのあとを追っている。

けれど、これが意外と大変だ。

何が大変かって、バレないようにすることじゃない。

いや、彼女の用事が終わるまではそうしているつもりなのは確かなんだけど、それに加えてこんなにも背が低いもんだから、気をつけないとすぐにどこにいったのか分からなくなっちゃうっていうこと。

小さいもんね……：しょうがないよね、幼女だし。

小学生あたりまでの子供が親とはぐれて迷子になるあれがしみじみと分かる。

だってほんの少しでも彼女から目を離すと、もうどっちへ行っただかが分からなくなるんだもん。

本棚が視界の仕切りになっていて物理的に見渡すっていうものがない。

見えなくなるたびに「次はここへ来るんだろうな」っていう当たりをつけていかなかったら見失っていたはず。

世の中はもっと幼女に優しくなるべきだ。

なんとなく隠れながら追いかけるのが楽しくなってきた僕だけでも、さよは違うらしい。

お目当ての本棚の前ではばらばらと本をめくり始めて……動かない。

下を向いているおかげで前髪が顔から少しだけ離れて、彼女の顔が見える。

いつもの、メガネがトレードマークで顔が白い……青ざめてる感じな彼女の顔が。

今の僕と同じように体が強くないってやつ。

りさりんみたいに健康的にほっぺが赤いわけでもなく、ゆりかみたいに子供みたいだから顔か赤いわけでもなく……かがりみたいにしても感情MAXだから赤いわけでもなく、だ。

だから、こういうところでもこの子は僕に似ている。

あとメガネ属性も。

今の僕はメガネ必要ないけどね。

そのメガネもきつと、前髪と同じようになるべく人からの視線を避けたっていう意識してか無意識でかの選択。

中学高校つてば、みんなちよつとでもかっこいい、かわいいって見られたいお年頃。

だからがんばつてコンタクトとかする子が多いって記憶してるし。

僕が中学の頃からは10年くらい経ってるけども、思春期の男女のああいうのはそう変わらないはず。

そんな彼女は……少しだけ笑顔。

うん。

本が好きなんだね。

その気持ち、よく分かる。

インクの匂いのする空間の中。

人の歩く音がまばらにしかなくってほとんど会話が発生することのないこの空間で。

誰にも邪魔されずに、ただただ数え切れない本たちの表紙や背表紙を見て回ってどれにしようかって考える時間。

おもしろそうなものがあつたら開いてみてから閉じて、あとで読むかどうか決めて……それを何十回も繰り返して。

そのうちに持ちきれなくなりそうになったら諦めてレジへ受け取りに行くんだ。

大切なもの、宝物を見つげる楽しさっていうものが、僕にもよく分かる。

「……むう」

だけど、だからこそつまらない。

さよがひとりだけ楽しいことをしているのを見ているっていうのは。

……さよもすぐには終わらないだろうし、僕も何かを探そつと。

せつかく外に出たんだから何かしないと損した気分になるし。

あんまり離れちゃわないように、けれども僕に気がつかれないようにっていう距離感を保ちつつ僕は動き出した。

まだ家を離れるまでは少しだけあるんだ、ここで何冊か買ってもいいよね？

うん。

「……む」

今の僕は背が低いから、平積みされている本しか手に入れられないんだったつてのを今思い出す。

それも買えるのは……腕の力的に多くて4冊。

それ以上は無理だ。

無理だった。

……子供の腕力って悲しいね。

46. X10話 さよと本と感傷と その1—2

さよに続いて本屋に入ってから少し。

こそこそと尾いていくついでに、いろいろと物色していく。

「ふむ」

少し見ない内に品ぞろえがすっかり入れ替わっている。

……そういえば、こうして本屋に来たのも半年ぶりくらい？

だって9月の始めで寝ちやって、起きたら真冬で、そんでもってあの年越しからの入院ってわけで……とつても忙しくって。

だから、こうしてひとりで出かけること自体がほとんどなかったんだし。

思えば相当に僕の主観では忙しい時間を過ごしてきたんだ、そりやあ当然にこうなる。

この数年間の平穩が嘘みたいな幼女生活。

そうしている内に良い感じの本が見つかる。

よし、積んでおいたあんまり目立たないここにさりげなく置いておいて、あとで戻ってこよう。

今の貧弱な僕の腕じゃ持てて3、4冊だもん。

力がなさ過ぎて小脇に抱えるってのすらできないのが悲しい。

腕自体が短いついていうのもあるのかな？

どうなんだろう。

けど、本屋って楽しい……あ。

そもそもさよをストーリーキングもとい観察していたんだった。

あわてて彼女をちらっと見に行くけども、数歩移動してただけだった……危なかった。

けど、さよも相当な本好きなんだね。

ずっと本を見て回っているし、かなりの数をカゴに入れて歩いていく。

女の子の腕力であればそろそろ厳しいんじゃないかって感じ。

僕たちが本屋に入ってから結構経つ。

僕はすぐに疲れる体だから、本屋の正面にあるベンチで休んでは戻つてを繰り返しているけども、あの子はずっと立ちっぱなしで吟味しているんだもん。

これだけ眺めていられるっていうのは、下手すると前の僕よりも体力があるんじゃないかって感じ。

いや、さすがにないか。

ないはず……たぶん。

……いや、年中ごろごろしてるニートとがんばって学校行ってる学生とじゃ、体力的に負けていた可能性すら……。

なんか落ち込んできた。

どうしよう。

落ち込んできたけども「僕もそれなりにいいものを見つけたし」って元気になる。

帰ったら……ん、もうお昼が近い。

朝ぶらっと出て来て、見つけたさよを観察しつつ本を巡って回って。

とっても有意義な時間だったけども、そろそろ頃合い。

目的がいつの間にか変わって本屋の中でうろうろしてただけで満足しちゃったし。

かなり疲れたし、軽く声でもかけて軽く話して帰ろ。

見つけた本を見せ合うくらいなら、さよも楽しんでくれるだろう。そうして気分を紛らわせてから帰って本を読むんだ。

うん。

なら、まずは僕が見つけた本たちを……いい具合のところに積み上げておいた本たちを買っていこう。

……そうだ、手が小さいんだからカゴに入れなきゃね。入り口だつかな。

◇

「？」

僕は目の前の光景が理解できない。

「??」

僕は固まる。

「……………え?」

この棚のすみっこ、ちょうど凸凹しているところに今日の収穫を忍ばせておいたはずなのに。

ない。

ない?

何かがおかしい。

……積んでいた本たちが、僕が目立たないようにって積んでおいた、重くて持ち歩けないからって僕用に置いておいた、ここに、ない。

「あれ……………」

結構雑に平積みされていたこのエリア。

さつき置きに来たときとは変わっちゃっていて、どの本もほとんど均等になっている。

さつきまではもつと凸凹していたのに。

……その凹なところに隠しておいたのに。

それが、ない。

ない。

ない。

なくなっちゃっている。

僕が置いておいた、見つけたはずの何冊もの本が、ない。

……店員さんに片づけられちゃった?

脚の力が抜ける感覚。

体力が少ないからこそ分かる絶望感。

……いや、僕が悪いんだ。

そもそも買うつもりがあるんだったらカゴに入れて歩き回ればよかっただけの話。

なのに横着をしていい感じのところを見つけて置きっぱなしだったんだから。

横着せずに取ってきたカゴに入れておけば「お客さんのなんだ

ね」って、「買うつもりあるんだね」って思ってもらえたはずなんだ。

それに本って、普通の人は買っても1、2冊。

さらに、元々置いてあつた場所から離れておいてある本は……たとえ誰かがまとめて置いたって分かるようなものでも「きつと買わずに帰つたんだ……戻しに行かなきゃ行けないこつちの苦労考えてよ」って判断されるのが常識なんだろうから。

だから、僕が悪いんだ。

しょうがないんだ。

だって、本を置き去りにしたんだから。

子供と本は置き去りにしちや行けないんだ。

さよの様子を窺うのと本を選ぶのとで忙しくして、うろろうして……置きっぱなしのままだったんだから、ここへ来るのを忘れていたんだから。

がつくりときた。

久しぶりの脱力感。

失敗したっていう、やるせなさ。

喪失感。

「はあ……」

僕はもうだめだ。

自然にため息が出る。

「……………」

……冷静に考えてみると大したことじゃないんだけども、なんだかすつごく落ち込むのが僕。

なんでこんなにもやもやするのは分からないけど、もしかしたらこれが女の子の体になったから感情が出やすくなっている証なのかもしれないけど、それはもうどうでもいい感じ。

……集めていた本の大半は、大体どこにあつたか覚えてるし。

うん、そうだ。

悲しんでいる場合じゃない。

早く済ませないと、さよが帰っちゃうかも。

そうだ、最初の目的は彼女と軽く話すっていうことだったんだか

ら。

うん、それならさっさともういちど回って1冊でも多く救出してから買って、それから早くレジへ行つて、それで彼女と軽く話をするって言う普通の人みたいな爽やかさで帰るんだ。

「……あ……あの……」

そうだ、最初の1冊はここにあったからなんとなくここに集め出したんだった。

だったらまずはこれをカゴに。

この調子で他の本も探しに行こう。

「あの、……えつと……ひ、響さん……？」

「ん？」

記念すべき1冊目を手に取ったまま、僕は横からの気配を感じて振り向いて顔を上げる。

僕からするとほどよい距離……1メートルくらい離れたところ。

顔が前髪とメガネで包まれていて、横へ垂らした髪の毛はおさげになつていて、ワンピースにカーディガンつていうこの時期としてはちよつと寒そうな格好をしている少女。

友池さよが両手でカバンのヒモを握りつつ……よく見慣れたように、おどおどとしつつ立っていた。

あれ？

なんでこの子がここに？

……あ。

僕、けっこう長い時間ここでしょげていた？

そんなに？

それで、気がつかないうちに気がつかれちゃっていて？

さっきまでは逆だったのに。

え？

僕ってそこまでぼんこつだったっけ？

「……やっぱり、響さん……でした……」

「あ、うん」

こういうとき、どうやって反応すれば良いか分からないのが僕。

「み、見間違いかって思った……んですけど、でも、響さん……みたいだったので……」

ゆっくりと近づいてきて、50センチくらいのところで止まってくれる。

そう、僕にとってもさよにとつても心地よい距離まで。

だって彼女と僕は、在り方がとっても似ているから。

だからなんか落ち着いてくる。

「おはようございます……あ、ち、違いますね、もう……」

挨拶を間違えて落ち込んでるさよ。

うん、分かる。

僕たちみたいなのは会話の数が少ないもんだから間違えやすくて、で、帰ったらのたうち回るんだよね……。

「……ここで会うだなんて、初めて、ですけど……響さんも本が、読むのが、好き、でした……なら、そう不思議なことでは。いつもこの

駅で……お昼とかお茶とか、していますし、お休みの日に、響さんが……この本屋さんに来るのは、当たり前前、ですよね……」

全然用意してないタイピングで話かけられると頭が動かない。

けどこの子はすっごくゆっくりしてるからだんだん気持ちが落ち着いてくる。

うん、こういう間が大切なんだ。

かがりとかゆりかとかりきとかみたいにいきなりテンションMAXで話しかけてこないありがたみ。

彼女は軽く屈んできて、目線が近づくと前髪が少し開く感じになって、しかもメガネのフレームの上から見つめられる形になって、めっただに見たことがないさよの裸眼が1対、僕のと合う。

なんとなくそれが輝いている感じがする。

不思議な気持ち。

普段は髪の毛とメガネと距離とで隔てられているはずなのに、だけでも普段からよく顔を合わせているのにな。

……でも僕、偶然とはいえこの子を見つけたからこそ観察しようと思っただけでここまで尾けて来たのに。

キリのいいところで「偶然会ったね！」って爽やかな感じでさよに声をかけようとしていたのに。

……いつの間にか僕の方が本に夢中になっちゃっていて、立場が逆転している。

ああ、僕は何をやってるんだろ。

いつもいつも失敗ばかりして。

……それもこれも、このひ弱な体が悪いんだ……きつと。

うん、なんかこの体だと集中力が持たないって言うか周りがあんまり見えないっていうか……うん、背が低いし、しょうがない。

46. X11話 さよと本と感傷と その2―1

「あ……その。 外で声をかけたら迷惑……」

「……ううん、そんなことはないよ」

フリーズしてた僕のことを勘違いしたのか慌て出すさよ。
うん。

この子以外でこういう反応してくれる子って居ないからなんか斬
新。

「あの……その、そちらの本は買ったかったものなので……あ、私
がです……けれど、おこづかいとの兼ね合いで……本棚に戻した
もので」

気をつけないと聞き逃しちゃうくらい小さい声も、ちゃんと離れて
くれているのも安心できて幸せ。

ただ僕とこうして1対1で話すのはあんまりないからか、なんかも
じもししてるのを見るのもまた安心できる。

「とても興味深い内容、でしたけど……その、お値段が。 私には、そ
の、金額が……良いなあ……」

ひっくり返して裏表紙を見る。

お値段、2千数百円。

確かに2千円を超える本っていうのは中高生には厳しいもの。

普通の本でも1500円を超えるとなんか一瞬手が止まるよね。

しかも彼女は鞆にぎっちり入るくらい買ってるから……1冊千円
だとしても1万円は行っているはずだもん。

それだけでも、さよにとってはかなりの奮発っていうものだったん
だろう。

けど電子でもなくわざわざ紙でそのくらい買うって相当に好きな
んだね。

「……あつ、あのっ！……あう」

普段あんまり会話をしない、声を出さないからちよつとでも勢いが
出るとおつきい声になっちゃうの、僕たちみたいな人間あるある。

「……もし……もし響さんがよろしければ……響さんのお買い物が終

わったあとで……その、時間もいいですし、お、お昼、一緒に食べた
りしながら……あの、いえ、でもやっぱり……」

……やっぱりこそこそするのは僕には合わなかったみたい。

僕は嘘をつくのが致命的にダメなんだ。

そもそもいろいろあつて、いや、なくたつて元から嫌いっていうの
と、これまでもこれからもさんざんにイヤな気持ちになつて、なり続
けているっていうのと。

あとはそれを取り繕うとしようとするさらなる嘘で塗り固めな
いといけないっていうのも……この1年で改めて分かったし。

別に今の、こつそりストーキングしてたのは……む、なんか事案な
言い回しだけど今の肉体的性別は同性だからセーフだよな。

つまりこんなことしないで、この子みたいに話しかけてたら楽だつ
たんだらうなつて。

なんかゆりかみたいな悪戯心を覚えちゃったばかりに微妙に大
変だったもん。

◇

結局。

さよに話しかけられるままに、隠してもしようがないしつてこと
で。

僕が積んでおいた本を戻されたことを白状……白自……誘導……
話す流れになつて、それを探して回つて、そのあいだ選んだそれを
持つてもらつちやつていて、それで本を買つて。

あんまりうるさくないところをふたりでうろろと探していて、僕
たちがいても居心地が悪くなさそうなところに入つて……お昼のメ
ニューを広げて見ていた。

その流れがかがりと違って自然で、ゆりかやりさみたいにたくさん
話しかけられるのか……って思わなくて、なんにも考えなかった学生時
代みたいにお店を選んで入っていた。

なんにも考えずにお互いになんとなくで話をしたり黙ったりしな

がら、ゆつくりとろろろとして。

……ちよつと懐かしい。

「……それにしても偶然、ですね。最近はみなさん……試験の勉強で忙しくて、あの、なので……学校でしか、会わないので。響さんとも、何日も顔を合わせて……いないので、お久しぶり、に、なりますね」

「うん、さよも元気そうでなりよりだよ」

「はい、私も特に倒れることなく……大過なく、です。お互いに良い傾向、ですね」

「そうだね、試験で無理しないようにね……けど君たちは今、試験期間中だね？　こうして出歩いていても平気なの？　……あ、体のこともあるけども、勉強のこととかも」

試験期間。

解放されて長いけれど、悪い夢を見るとときには直前なのに勉強していないだとか、点数が悪くて死んだはずの母さんに叱られている場面だとか……そういう何かとイヤな理由で僕の記憶の奥底からたびたび引つ張り出されてくる存在。

それに、この子たちはあと数年は苦しめられることになる。

僕と同じように、学生の……数年分かけることの数回分っていうその存在が。

さらに言えば受験とか。

嫌なことは過ぎれば忘れるってことで普段はこの通りに完璧に忘れてるけど、この子たちにとってはいつものこと。

「……勉強の方は……試験期間に入る前に終えているので……あ、あとは復習だけ、なんです。私、無理をすると体調を崩して試験に出られない……ことが、あったりもしたので、平均点を取れば良いって、お母さんたちも」

「試験期間前に……さすがだね、さよは」

「いつ、いえっー」

すごいね。

僕の現役の頃だつてひーひー言つた気がするのに。

けどクラスでも女子は全体的にそつなくしてた印象だし、やっぱりその辺も男女で変わるのかな。

あ、でもかがりとか居るし関係ないか。

うん、関係ない。

だからきつと学校では……かがりに、相変わらずここまで違って本当にどうして仲がいいのかっていうのが想像もできない、あのくるんくるんかがりに、学校でも放課後でも休日でも「勉強教えて」とか「試験範囲教えて」とか「プリント送って」とか言われてるんだろうね。

友だちなんて理屈でなるもんじゃないっていうのは、この子たちに友だちと思ってもらって思い出したものなんだけど……不思議なものとは思議。

でも、元から仲が良い友達なんだつたら……勉強に対する姿勢だけでいいから、意識だけでいいから……自力で勉強できるようになれだなんて無茶なことは言わないから、せめてこの子を見習って欲しいところ。

本当にそういう意識だけ……1ミリでもいいから。切に願う。

ほら、手のかかる子はかわいいって言うし。

……けども、どうしたって土壇場にならないとやる気が出ないってしか思えない僕が居る。

「……の。あ、あの、響、さん……？」

見上げると、さよが髪の毛のあいだから僕を見つめて来ていた。

「ん……ごめん、少し考えごとを。いつもの悪い癖だね」

「いえ、気にされなく、ても……私もよく、おはなしとかについていけなくて……なので」

さよもきつと、僕みたいに頭の中だけになって、外のことがなんにも入って来なくなるっていうのが多いんだろうな。

もちろん考えごととかで。

かがりのように妄想でもなく、ゆりかのようにテンションに支配されるわけでもなく。

りさは……そういうことがない気がする。

ああいうのを……リア充っていうんだっけ。
ギャル？

いや、今どきは陽キャって言うんだっけ？
こういうちよつとした言葉で世代が分かっちゃうよね。

「……………」

「……………」
会話してるはずなのにお互いに黙ってる時間の方が長い僕たち。
静寂。

こういう時間、女の子と一緒に居て存在するだなんて思わなかったけど、いぎなってみると結構気が楽。

女の子がみんなこうだったら男も自然体で過ごせるのにね。

みんな、どうしていつもあれだけ口がくるくるくる回るんだらうね。

こうして頭の中でぐるぐる考えるのと話すのは、体力の浪費具合が全然違うのにね。

……さよっていう生粋の女子とか僕みたいな偽物だけど肉体的には女の子でも、口が重いってのはやっぱり性格……なんだろうなあ。

46. X11話 さよと本と感傷と その2―2

「悪かったね、さよ。 僕に分まで……取り分けておいた分を食べてくれて。 無理して食べ過ぎたりは」

「い、いえ……平気、です。 私、少食というわけでもないの……」
「でもかがりに強奪されたりはしない？」

「い、いえ……あ、でもお弁当とか学食も、1口欲しいって……」

僕たちがようやく頼んでお昼が来て、いつもかがりやゆりかにしているみたいにお皿を余分にもらって、僕の分を半分くらいを取り分けてから食べ始めて。

いつもみたいに何も考えないで、すすつとさよに渡したらがんばって食べてくれちゃった。

けども苦しそうにしていなくて、実は食べようと思えば食べられるタイプなのかもね。

「あつ、あの……今のは、無理をしてではなくて、その、本当ですつ。 響さんの頼んだお料理も……私の、も……少なめの量でした、し」
現役JCに気を遣われる現役JCを名乗る僕。

いつものだね。

「そうか、ならよかった。 君は体の状態がいい方では無いんだし無理をさせたのかと思っただけでも」

「はい、腹……9分目、くらい、ですの」

「……それはけっこう食べたということじゃないか？」

「あ、は、はい……でも食べ過ぎ……ではない、ですから」

「そうか。 ならいいんだ」

見た感じ苦しそうってわけでもないし……もしかしたら9分目ってのはこの子なりの冗談なのかもしれない。

意外とお茶目なところあったりする？

ほら、僕みたいに圧力皆無な相手なら話しやすくて素が出るとか。

「あの……やっぱり、まだご飯の量……取るのが難しい、ですか……？」

「ううん。僕は、この見た目通りの体だからね。食べる必要がもとも少ないんだよ。元気……だったときからずっと、ね」

男のときだって男にしては少食だったし、普通の量食べると食後眠くなったりするから受け付けなかったし。

そういう意味ではこの体もある程度前の感覚で居られる気がする。まあさすがにお子様ランチでちょうど良いお腹って考えると凹むけど。

「そうですね、背も低くて……あ、ごめんなさいっ」

「いや、別に気にはしてないよ」

「で、でも、私、つい……」

む、この感じちよつとネガってる？

僕が良く「今の答え方で傷つけちゃったんじゃないかな……」ってなるから分かる感じの表情してるし。

「……僕たちは病気と病院に縁のある仲だよね」

「え、ええ……」

「じゃあ僕たち、他の人たちとは違ってあんまり気を遣いすぎても疲れんじゃないかな。だからむしろ、どれだけ悪いのかって自慢するくらいでいいよ。病人同士なんてそんなものだし」

聞きかじったけれども実際にそうらしい話で押し切っておく。

「入院している人同士ってそうなんだ」ってマリアさんも言っていたし。

僕は個室って言う贅沢してたから知らないけども。

あ、でも中庭でぼーっとしてると話しかけて来る人たちとの最初の話題ってお互いの病気についてだったりしたっけ。

「……そう、ですね。私、いつも言われる、のに……こうやってネガティブになるというのは、体にもよくない……って」

そんなことを考えていたら、なんだか暗い話へと転がっていつている気がする。

これはよくない。

ご飯を食べているときには、とにかく楽しくなくちやいけないんだ。

そうじゃないとご飯がまずくなっちゃう。

こういうのって感情で左右されるものだから。

別の話題……楽しい話題、どつかにないかな。

……そう言えば、普段は話すことってみんなから振られる。

かがりは気がつかずに頭の中から浮かんできたあれこれを場の流れや僕たちの意志に関係なく叩きつけてくるし、ゆりかやりさもとめどなく話しかけて来はするけども話題を気まづくならないようにさりげなく動かすのが上手だし。

考えてみたら僕からっていうのはほとんど……無い……？

僕の方が年上なのに？

……相手が女の子って言うのを抜きにしても、僕がいかに対人関係に弱いのが分かる。

うつむいちやっているさよ。

その手前のテーブルにはお皿が下げられちゃって飲みものしかなくって、他にはお互いの荷物くらいしか無いし。

む、荷物……ああそうだ、そもそも僕たちはそのためだったんじゃないか。

「……そういえば君の鞆は重そうだけれども、それは先ほどの本屋で手に入れた本だけで？」

「は……はい、そうなんです。少し買いきり……」

ここに来るまでもときどきふらふらしていたのを見逃してない。

重いと体の制御が難しくなるよね、分かるー。

この体になってさんざんに経験済みだもん。

「し、試験までまだ数日ありますけれど、もう復習以外にすることがないですし。み、みなさんは忙しいみたいで放課後のお誘いとかもなくなつて……時間が余つて、ですので……奮発して、買えるだけ買ってしまいました」

「タイトルとか、教えてもらつてもっ？」

「もちろんですっ」

急に元気な声になつて……心なしか話し方もつつかえるのが減りつつ、引き寄せた鞆をもどかしそうに開けている。

……本当に好きなんだね、本が。
その気持ちはよく分かる。

無意識だろうけども少しだけ口が嬉しそうに曲がっていて、すき間から見える目も輝いている様子。

これでさっきの微妙な空気が飛んでくれて良かった。

僕もやればできるんだね。

「えっと……ちよつと待っていてください、今すぐに……」

「うん。……あ、カバーとは言っても新品の本が汚れるのは嫌だろうし、手に持っていて見せてくれるだけで……」

……うん。

さよの動きが普段になくきびきびとしている。

まるでいつものもの、かがりの後ろで遠慮がちにしているっていう方が別人って思えるくらいに。

やっぱり好きなことって元気になるよね。

「はいっ、ありがとうございますっ……それですね響さん、今日買ったのは文庫と実用書の……ちようど5冊ずつですね」

声も元気になってるし、なんならメガネと前髪越しの目も輝いてるかもしれない。

そして話すスピードが上がり始めている。

「それと雑誌などと、少しジャンル分けの難しいものをいくつかと……それも今日は欲しいだけ買うと決めていたので……少し高かったですけれど、それでも満足したので、帰ってからじっくり読みた
いって……」

この子も。

この子もこの先、あの子たちと一緒に学校で学生生活っていうものを送っていく内に自信もついてきて、普段からこうして話せるようになって。

で、いずれは……体育以外は優等生になるんだろうから委員長とか、そういうものにさえなったりも……他の子の推薦とかでなりそう。

委員長っぽい見た目だし。

「響さんっ」

僕の方に身を乗り出すようにして本を突き出してよく見えるようにしてくれながら、その本のどこに惹かれたのかを教えてくれるさよ。

その髪の毛のあいだからは眉も上がって見開いて光っている瞳と笑顔になっている口元が……楽しいものを話しているときの女の子というものになっているのがうかがえる。

いつもこんな感じになって……恥ずかしがりが薄れて前髪を短くしたら、きつと男女問わずに好かれる子になる。

「……なるほどね。僕も以前それを読んだけどおもしろい内容だったよ」

「やっぱりっ……私、これをいちばんに読みたいなって……」

……僕がその姿を見ることはできないかもしれないっていうのが残念ではあるけども。

でも、いいんだ。

この子たちが……僕の友だちになってくれた子たちが、そうして楽しく過ごしてくれさえすれば。

46. X12話 さよと本と感傷と その3

「んぐ……あ、ところでさよ」

ふたりに黙々と……これもまた他人と、この子たちと食べる中ではものすごく珍しい……っというか多分初めてだろう、静かに味わって食べるというものをして僕は満足した。

だから勢い余って彼女が頼むのに合わせ、僕らしくもなくビター系のデザートを頼んではおぼっていたんだ。

「どうかしましたか……？ ……あ、あの、それは確かデザート」
「うん、それは知っているけれども、聞きたいことがあったのを思い出したんだ」

それをさよにじーつと観察されていたのはこれまでの経験で慣れきっているからいいんだけれど、食べていたら思い出したんだ。

……こうして食べているのを見られているだけで食べ残しを催促されているって感じないので、すっごく貴重な気がする……。

「聞きたい……こと？ ……はい、いいです……なんでもっ。準備はできていますから……っ」

何でこの子こんなに食い気味なの？

なんか本でひととおり盛り上がってからこの子のテンションがおかしい。

と言うか準備とかじゃなくて、ただ聞きたいだけだけどね？

けども何でこの子はここまで僕のことを凝視してくるのか。

軽く顔が赤くなる程度に気合いを入れているらしい。

今でもいまいちこの子の反応が分からないけれど……ま、いいか、いつものことだし。

それよりも僕の口が、甘さ控えめなこれを……数口でもう受け付けなくなってきたのが残念。

コーヒーと合わせても……やっぱり甘さっというものは僕の味覚には合わないらしい。

……いつになく食べちゃったし、これが夕飯になりそうだな。

実にエコな体だ。

夜はお酒だけで充分なんだしな。

「……それじゃ、遠慮なく。 さよ、君は朝からずっと本屋にいた……らしいけども」

尾けていたけども。

見ていたけども。

この目で、ばっちりと。

「聞けば、体がまだまだ本調子ではないから学校では欠席や早退、保健室の多いというけども……試験前の大事な時期に出歩いてもいいの？ それも、ずっと立ちっぱなし……だったって聞いたけど」

さっきの会話でこの子から聞き出したから嘘じゃない。

「……あ。 え、つと……そつちのこと、でした、か……」

「？ そつち？ ……他になにかあったか？」

「い、いいえっ、なんでもないんですっ」

なんだか慌てだしてそつぽを向いてメガネを外してふきふきしているさよ。

動揺しているみたいだけど……心当たりがない。

けど、そういうのは他人と接していればよくあることだもんな。

かがりの反応とかかがりの思いつきとかかがりののしかかりとか。

「それで……その。 実は、こうして……私が、すつ——……すき、なことをする日にはですね。 ……お家を出る前に、多めにお薬、飲んで……ですね。 なので、ふだんよりも楽に……学校よりも、です、それで大丈夫、です」

……それつてば無理してるんじゃないの？

薬つて、そう簡単に増やしていいものじゃないはずだけど？

「君の医師や家族の人は怒ったりはしないのか？」

「はい……その。 多めのお薬は、いつもはダメ、あ、辛いときは良いつて……ですけれど、副作用、とかもあるんですけど。 こうして楽しいこと……私なら、本屋さんを見て回るといふもので……楽しむだけ楽しんで、免疫を活性化、して。 そういう、精神的な満足の方が、大切……だと言われている、ので」

「……なるほど、ね」

確かに病は気からって言うし、医学的に証明されてるらしいね。あれだ、つまりはお医者さんがとりあえずで「ストレスを減らしましょう」って言うあれのこと。

だから僕にとってお酒を呑まないって言うストレスを減らすためにお酒を呑むのはセーフなんだ。

「また……入院することになって。それまでに、たくさんしたいことをして……楽しんでおけば。希望……もつとしたいって、持てます、し。……なによりもお外に出るだけで体力もつくからって……」

「……君は、偉いね」

何も不自由なく生きてきた僕みたいなのとは違って大変なはずなのに。

「え、……そっ、そんなことはありませんっ。それよりも、響さんの方が余程頑張ってる……」

こういうときにも僕の嘘がちくちく刺さってくる。僕が病気だっていう嘘。

けども今さら変えることはできないし、白状したところで僕だけが楽になってみんなを混乱させるだけだ。

だから僕はみんなには、必要なことしか言わないって決めたんじゃないか。

僕が勝手に、僕のやらかしたことのせいで考えて感じて痛みを覚えているだけなんだから。

これが、きつと罰。

懺悔つてのは本人にじゃなくって、全く関係ないどこかにすべきなんだ。

「……本屋での物色を朝からにでもして、お昼も外で食べたりにして。というのが、君が楽しめる、君がひとりで過ごすときの休日ってこと?」

「あ……はい。そう、なります……ね」

なんか僕がぶらって外に出る日と似てるね。

「……でも、まだ体が大丈夫そうなとき……こうしてレストランやカフェに寄って、飲みものを片手に買ってきたばかりの本を読み、ます。……それでも平気なときには、さらに、下条さ……かがりさんの見せてくれた雑誌に載っている服を見たり……します。いつか、それを着て……たくさん出歩けますように、って」
似てなかった。

あ、いや、幼女になってからはたまーにそういう日もあるけども。「……けども……服については、かがりと出かけたらず必ず買わされるんじゃないか？ ほら、君は放課後とか少しだけなら彼女とって聞いたし。……少なくとも僕が彼女に呼び出されるときはそうなんだけども……いつも」

「え。……いえ。そんなことは、ない、です。 おすすめと試着は、させられますけど……」

「……そう……どっちにしても」

「は、はい……嫌では、無いんですけど……」

「……」

「……」

沈黙が答え。

……なまじ本気で嫌じゃなくなつて、ただただあの子がうるさくてめんどくさいつてだけなののが的確。

「……でっ、でもっ。でも、本、だけでなくて、ひとりで服も……見て回る、というのものですっ。かがりさん、とお知り合いになる前には考えもしなかった、ので……新鮮で、楽しいんですっ」

「……そういうものか」

うん……まあね。

あの子に頼まなかったら、多分通販で必要な分しか買わなかっただろうし。

「はいっ。……響さん、は、どう、なんですか……？」

「僕か？……そうだね」

あの子に絡まれたせいで、家の中は幼女な服まみれになった。

けども、それを着て家の中で過ごしているとなんとなく楽しいのも

事実。

「……生活用品以外に興味らしいものはないし、大半のものは……家が用意するんだ。だから僕は、せいぜいが本屋に寄って新刊などを見て回って。僕も君と同じようにかがりの影響か、最近服も見たりすることもあつて。けども君とは違ってこのとおりに食欲がないものだから、食べたりはしないでそのまま帰る方が多いね。カフェだつて……ほら、この通りの見た目で、何かと不都合だからね。うん、親を探されるから」

「あつ……ま、まだまだ成長期のはず、ですから……つ」

服だつてマネキン一式から流行りまでを意識して、お店の人に尋ねたりして……ひとりのときにはワンシーズンまとめてじゃなくて、ちよこちよここと買うようにはなつた。

この見た目に合うようなものを。

……女物を。

もちろんズボンやシャツつていういつものも揃えるけども、でも。

……うん、しょうがないことなんだ。

だつてかがりの前で、彼女基準で「ださい」ものを着ているとずると服のフロアへと連れ込まれるつていう苦い経験を幾度となく味わつたからなんだ。

確かにおしやれな服は楽しいけども、それは男だつて同じはず。

決して女装趣味が華開いたとかじゃない。

よし。

「私と、同じ……あ、いえ、なんでも、ない……です」

「? そうか」

なんだか少し顔を伏せていた彼女は、おもむろに視線を合わせてきて。

「……ところで、あの、響さん。響さんさえよろしければ……私はまだ大丈夫、ですけど、響さんのお体も良いの、でしたら。……買った本、一緒に読みませんか、か……? 少しだけでも……ええと、お家の中でひとりとは……また、違いますから……」

一緒に、か。

そうだね。

お互いに今日はヒマなんだ。

「うん。たまにはそういうものもいいよね。お互いに疲れないし、なによりもお宝を手に入れてきたばかりなんだ。1、2時間程度なら……楽しむう」

「本当ですかっ」

「うん。……君はどれを読むつもり？ 僕は——」

彼女なら読んでいる途中で遮ったりはしてこないだろうし、別の話題を唐突に振ってきたりもしない。

きつと……例えるなら学校の図書室で同じテーブルで向き合って本を読む、そんな感じになる。

……こうして外に出てきたのも、ちよつとだけだけど人恋しかったからなんだし。

うん。

——こういう午後も、悪くはないよね。

46. X13話（終） 苦手と好きと

僕は、気がついたら周りを囲まれていた。

……人波に。

人の大波に。

つまり僕は逃げ遅れたということだ。

せっかく早くに買い物に出てきたっていうのに、ついつい本とか小物を見ちやつていたからだな、きつと。

いや、そもそも少しだけ出るのが遅れたせいか。

どっちか分からないけども……だからお昼の食材を買いに来たスーパーが、こんなにも人の波になっているんだ。

……子供が多い空間は嫌だ。

彼らには、身長的に顔を見られやすいからかじーつと見られることが多いし、話しかけて来る子も多め。

「ねー、何でこの子髪の毛白いのー？」とかわざわざ大声でいろいろと……いろいろと親に尋ねたりする始末だし。

白じゃない、銀なんだ。

あ、いや、別に白髪つてのも綺麗らしいけども。

さらにはお年寄りにも話しかけられやすくて、つまりはとっても嫌な時間帯。

それに加えていつものようにみんなの背丈で視界が限定されちゃうもんだから、先が見通せない。

だから。

僕はレジのある方向を……ダメだ、もう列ができちやつているから見えない。

これだから小さい体は……つて今、そんなこと言ってもしょうがない。

なら賭けになるんだけど……しょうがない。

嫌だけど、運に任せるしかないんだ。

今日の、この時間帯のシフトならある程度覚えているからこそだつ

たのになあ。

……家を出る時間、もつと早めに……アラームでもセットしておいた方がいいかもなあ。

◇

「……まあまあ、今日もおひとりでおつかいなね？ えらいわねー、いつもいつも！ 今日の学校はどうだったの？ 楽しかったのかしら？」

「……ええ、まあ、そこそこに……」

このくらいの歳の子供と見たら、まず学校の話題。知ってる。

「けどお駄賃におかしくらい買ったらしいのにねえ。 えらいわねー、ムダ遣いしなくて！ うちの子なんか、買い物頼むだけでもイヤな顔して……」

僕が買ったものを、買いたいものを手に持ったまま話しかけて来るおばちゃん店員さん。

僕はそれを早く「びっ」てしてほしいだけなのに。

僕は、ハズレの中のハズレの人を引いちやっただ。

列の前のほうに来た時点で知っていたけれど、もういちど長い列を並び直す気力がなかったから諦めちやっただ僕も悪い。

けども……話が。

話が全然に終わらないんだよなあ、こういう人は。

「それにしてもねえ、週の半分以上は買い物に来ているんですって？

食材の！ まあ！ ほんとうにお母さん想いで……」

終わらない。

どうでもいい……っていうか前にもしていたようなことを繰り返してに語りかけてくる。

こういう、子供相手に店員の人がちよつと話しているっていう光景はたいして珍しくもないから、後ろで待っている人もただぼーっとして待っているだけ。

こういうときにこそ「早くしてくれよ」ってオーラで撃退してほしいのに、後ろからは僕の髪の色を見下ろしている第六感だけ。

……魔法さんに頼れば普通の男として扱ってくれるはずではあるけども……あれは、正しい意味で洗脳っていうものだもんな。

必要がないんだつたら使わない方がいいと思う。

少なくとも僕はそういうのはあんまり好きじゃないし。

それにどうせ、世の中の大半の女性は今の僕を見るや否やこうなるんだから。

うん、諦めているから平気。

平気なんだ。

◇◇◇

さして。

時刻はこの前よりも大分早い。

家も早く出たし、寄り道も道草もしなかったからお店の中はガラガラだ。

この前の反省を活かしたな。

よし。

これなら普通に買い物にしても混みはしない。

だからレジの人の顔が分かる。

人の背中で遮られないから、きっと大丈夫。

◇

「……………」

「……………」

カゴの中からひとつひとつをがさがさと取り出して「ぴっ」「てやっ
て、別のカゴへと入れていく作業を眺める。

もちろん見上げて。

首が痛い。

髪の毛の重力が後頭部に集中する。

「……………」

特に値段とかを言うわけでもなく淡々とバーコードで読み取っていくだけ。

見上げる僕もレジの女の人も、お互いに無言。

最初の「お願いします」「はい」だけ。

うん。

快適。

やっぱりいいものだよな、こういう声のしない静寂って。

女性だからとひとくくりにするっていうのは間違いないだって、ここでも改めてこういう性格の人たちが証明してくれているんだ。

子供に見えるからって言ってもくだけた口調で話しかけてきたりなんかしなくって。

歳や学校や今日のことを聞いてきたりもしてこなくって、顔をのぞき込んできて感想をいちいち大げさに言ってきたりもしない。

大人と同じように普通の対応、普通の言葉遣いでごく普通の「人」として扱ってくれるんだ。

ああ、なんてうれしいんだ。

たったのそれだけのことが、こんなにも。

……体感でだけでも男、男性の多く……お年寄りも別だけでも……と女性の2、3割くらいは、こういう人たち。

僕にとって安心できるような人たち。

子供だからと言って明らかに周りとは違う見た目だからと言って、過度に反応してきたりしない人たちだ。

……残りはというと、良くて普通の子供扱い……もちろん小学生の。

顔をのぞき込んできて性別とか出身とかまでを聞いてきたりするからなあ……初対面、それもお店の人なのに。

まあ、さすがにこういうスーパーとかせいぜいカジュアルなお店止まりだろうけども。

うん、そうだ。

やっぱり僕は、どうしたって中身がごく普通で特に注目もされない男のままなんだ。

男っていう意識が抜けないままなんだ。

あの人たちだって、何も悪気があるわけじゃない。

ただただ普通に子供を相手にして盛り上がりつつやうだけなんだ。

だから僕がそれに対応しちやえば、楽に過ごせるはず。

……もし。

僕にとつてありがたいような、今みたいな人が、もし。

……かがりにコーディネートされた格好の僕、しかもこれまたかがりから押し付けられたリボンなんかをつけた状態で来たとしたら、どうなるんだろう。

そう、悪魔のささやきが降ってきた。

「お会計は……」

「……………」

……なるべく男っぽい格好をしておきたいっていう本能と、知的好奇心っていう本能とがせめぎ合う。



僕は負けた。

負けたんだ。

だからいかにもな、かわいい服に興味がある感じの母娘……の内の「娘」が来ていそうな格好で出て来ちゃった。

やっぱりいちばんの人気はワンピースらしく、それは特に女性の方が好きらしくって。

その上に軽く羽織って首に巻いたり帽子をつけたりして、なるべくリボンが多くって白と赤かピンクが多めの服装を作り上げるのが理想らしい。

あとは小物をたくさん。

以上、かがり情報より。

そして、そんな格好の僕。

当然に、いつもみたい髪に毛も顔も隠していないから、歩いていてふとガラスに映った僕自身を見てびっくりしてなるくらいに見た目になっっている。

慣れてもやっぱりびっくりするものはびっくりする。

……やっぱり恥ずかしい。

想像はついていた。

こうなるって分かっていた。

だけでもやめられなかったんだ。

だって気になったから。

それに恥ずかしいって言ったって、人に注目されるからっていう理由だし。

だからこうしてそんなに頻繁には来ないスーパーに出向いてきて……僕に過剰に反応しない店員の人の顔を知っているとこるに来ているんだ。

……ここまで来ちゃった以上には、さっさと確かめて帰ろう。

大丈夫、ここはそこまで来ないんだ。

だから失敗して貴重な「いい人」を失ったとしても、大丈夫なんだ。

「はい、お次の方どう……ぞ……」

いつも手元しか見ないはずのレジの……大学生くらいの女の子。

表情筋の動かなさがお気に入りな彼女は、びっくりした顔で僕を見ている。

……普段の僕のことには覚えていないだろうし、そもそもとしてこんなに派手な格好をした子供なんてスーパーなんかには来ないだろうからびっくりするのは想定済み。

服装も見た目も派手派手だもんね。

……その人はしばらく僕を見たあと、はっとしたように……気がついたら汗もかいていて、慌ててレジの作業を始めた。

「……………」

「……………」

お互いに無言。

これはいつもどおりだ。

よし、まずはいい、と。

じゃあ。

「……よ、410円、です」

「ん、と。 お金。 この中の、どれです……？」

ここで、存分に練習してきた演技をお披露目。

わざと幼い声を出しながら、心持ち舌つ足らずにして他人にお披露目。

微妙にイントネーション変えて外国の子っぽい感じにしてみる。

「……………」

「……………」

「……え、あ、はいっ！ ……し、失礼します……こちらを4枚とこちらを1枚、です……」

何かのキャラクターがプリントされているがま口……今日のために用意した、お値段100円のやつだ……それから小銭を出して両方の手のひらの上に載せて持ち上げるようにして見せる僕。

それを、おそろおそろって感じにすくい上げてくれている。

……手が震えている。

顔が赤くなっている。

その子が。

僕と目が合うと、女性は顔が赤くなるらしい。

よく分からないけども、あのかがりでさえ最初はそうだったんだ、そういうものだって思っておこう。

と、終わりそうだ。

なら、さらに追い打ちを。

「……分かり、ました。 ありがとうございます、ました」

そんな感じの外国人風。

これはマリアさんに聞いておいた感じに。

「……!! ……いい、いいえっ、ありがとうございました……」

◇

なるほど。

あの人の反応を見て、さらにあの後に二言三言交わしたときにさらに幼い感じに、ほんの軽い会話を試してみただけだ。

このリボンは「お姉ちゃん」につけてもらったんだとか。

でも結局は僕が苦手な感じの対応っていうのはしてこなくって、ごく普通の、店員の人とお客さんの世間話っていう程度。

そこから深入りとか子供扱いもしてこなかった。

快適だった。

なんか勝った気がする。

何にだろうね。

でも、女性の過半数が……いくら僕のことを徹底的に外国から来た小さな女の子扱いしてくるからといっても、みんながみんな、あのかがりみたいなものだとはいえちやいけなないんだよな。

うん。

そんなことを思いながらいつも通りにベンチで座って足を休めていたら、通る人のほとんどみんなと視線が合っていたのに気がついて、足元に視線を落とす。

……だけでもこうして女の子な格好で出歩いて、さっきみたいな演技をしたりしても、もはや……最初の頃に比べたら、ほとんど一言一つもいいくらいに恥ずかしくもなんともなくなっているっていう僕自身。

……僕はもう、この。

——「銀髪少女」っていう見た目に、順応しちゃったんだろうか。

いや。

きつと、とつくにだったんだろうな。

だって僕はこれから数日後のお別れの日に電話をして、僕のことをきちんと人に伝えて、「未来」へ向かうんだから——。